

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 120

窪木遺跡 1

岡山県立大学建設に伴う発掘調査
Ⅲ

1997

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 120

窪木遺跡 1

岡山県立大学建設に伴う発掘調査
Ⅲ

1997

岡山県教育委員会



HO・K区航空写真（北東から）

巻頭図版 2



1. 縄文時代小ピット群(PU区, 北から)



3



4



4 龍社

2. 縄文時代晩期の土器(PU区出土, 鉢3・4)



縄文晩期土器(HW 3区出土, 鉢106)

卷頭図版 4



1. 縄文晩期土器(HW 3区出土, 壺105)



105 外面拡大



2. 線刻絵画土器
(HW 3区出土, 器台1152)

1152 拡大



1. 竪穴住居 2 (HO区, 南から)



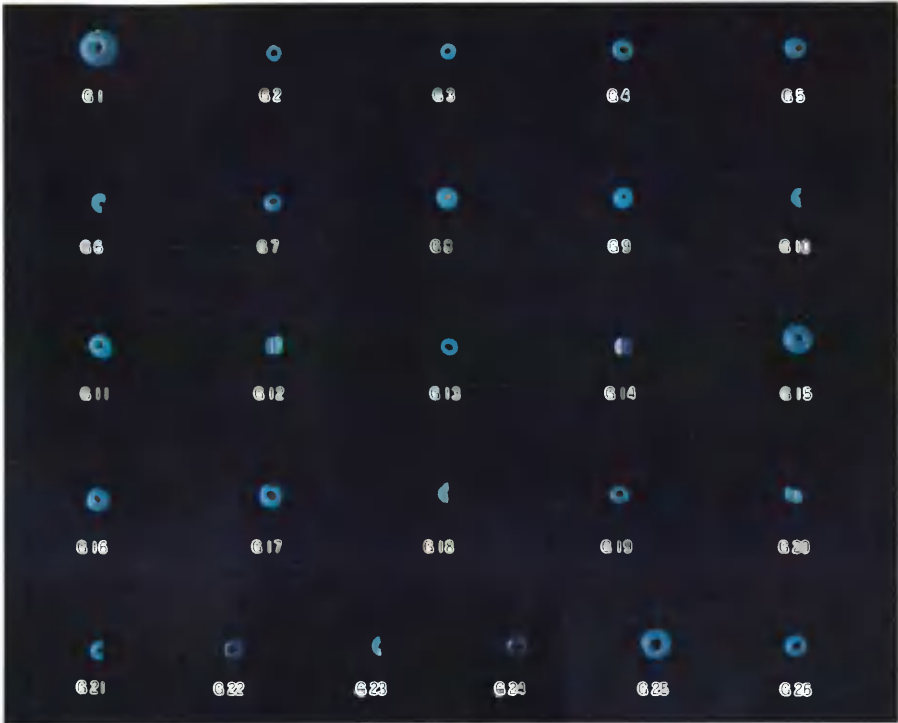
2. 弥生時代後期遺構群 (TA区, 南から)



1. 竪穴住居6(TA区, 火災住居; 南から)



2. 竪穴住居16(BU区, 火災住居; 北から)



竪穴住居18ほか出土ガラス小玉(TA区, BU区)



G 4 拡大



G14断面拡大



G15拡大



G22拡大

卷頭図版 8



1. 古墳時代水田畦畔痕跡(P.U区, 西から)



2. 銅鏃M2(CH5区溝71出土, 実物大)

序

岡山県は近年の著しい情報化・国際化の進展など多様な社会の変化に対応するため、新たに平成5年4月に岡山県立大学を設置いたしました。本年3月で開学4周年を迎え、待望の初めての卒業生を世に送り出すことになりました。

岡山県教育委員会では、この県立大学の建設に当たって、建設予定地内における埋蔵文化財の取り扱いについて、関係当局と繰り返し協議を行ないました。その結果、工事によってやむなく破壊される部分については記録保存のための発掘調査を行なうこととし、平成元年度に確認調査を、引き続いて平成2年度から4年度にわたって主要な建物や付属施設についての全面調査を実施いたしました。

発掘調査報告書については、4分冊にわたって作成することとし、その第1分冊に当たる『南溝手遺跡1』については平成7年3月に刊行いたしました。さらに、第2分冊に当たる『南溝手遺跡2』についても平成8年3月に刊行いたしました。

そして今回報告いたします『窪木遺跡1』は、第3分冊に当たり、縄文時代晩期から中世あるいは、近世にかけての集落遺跡や生産遺跡について、数多くの竪穴住居や掘立柱建物などの遺構のほか、多数の土器・石器・木製品などの遺物を掲載しております。

この報告書が学術研究に寄与できるばかりか、文化財の保護・保存のために活用され、一方で地域の歴史研究を一層深める資料として広く役立つならば幸甚に存じます。

発掘調査および報告書の作成に当たっては、岡山県立大学建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の諸先生方から多くの御教示と御指導を賜りました。また、岡山県総務部県立大学建設準備室、岡山県土地開発公社、総社市教育委員会、ならびに地元の関係各位から暖かい御理解と御協力をいただきました。末筆ながら、記して厚くお礼申し上げる次第です。

平成9年3月

岡山県教育委員会

教育長 森 崎 岩之助

例 言

1. 本報告書は、岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部の建設に伴って岡山県古代吉備文化財センターが岡山県総務部から委託を受けて発掘調査を実施した窪木(くぼき)遺跡の発掘調査報告書である。
2. 岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部の建設に伴う発掘調査報告書は4分冊にわたって刊行する予定であり、本報告書はその第3分冊にあたる。
3. 窪木遺跡は、岡山県総社市窪木(くぼき)に所在する。
4. 発掘調査は、1990(平成2)年3月から1993(平成5)年3月まで実施しており、今回報告する調査区の調査期間は1990年4月から1992年12月までである。
5. 発掘調査および報告書の作成にあたっては「岡山県立大学建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは終始有益な御指導と御助言をいただいた。記して深く感謝の意を表する次第である。

(故) 鎌木義昌(岡山理科大学教授)	新納 泉(岡山大学助教授)
亀田修一(岡山理科大学助教授)	間壁忠彦(倉敷考古館館長)
近藤義郎(岡山大学名誉教授)	水内昌康(岡山県文化財保護審議会委員)
高橋 護(ノートルダム清心女子大学教授)	
山本悦世(岡山大学埋蔵文化財調査研究センター助手)	
中田啓司(元県立矢掛高等学校教諭)	

6. 本報告書の作成は、1995年度に岡山県古代吉備文化財センターにおいて、センター職員岡田 博、光永真一が担当して行なった。
7. 本報告書の編集は、岡田が中心となって行なった。また、各遺構の執筆については、基本的には発掘調査担当者が分担し、文責は文末に明記した。
8. 遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を仰いだ。
9. 本報告書に関わる自然遺物などのうち、一部のものについて鑑定・同定および分析を下記の諸氏・機関に依頼し、有益な教示を得るとともに、そのいくつかについては報文を頂いた。記して厚くお礼申し上げる次第である。

赤色顔料の分析	本田光子(別府大学文学部助教授)
	成瀬正和(宮内庁正倉院事務所保存課保存科学室室長)
石器・石製品の石材鑑定	妹尾 護(倉敷芸術科学大学助教授)
土壙墓出土の歯の鑑定	井上貴央(鳥取大学医学部教授)
木製品樹種同定	畦柳 鎮(岡山商科大学教授)
〃	パリノ・サーヴェイ株式会社
プラント・オパール分析	株式会社古環境研究所
ガラス玉・銅鍍の蛍光X線分析	白石 純(岡山理科大学自然科学研究所事務職員)

10. 出土遺物ならびに図面・写真類はすべて岡山県古代吉備文化財センター(岡山市西花尻1325-3)に保管している。

凡 例

1. 本報告書にもちいた高度は海拔高であり、北方位については第1・4・6図が真北で、それ以外はすべて磁北である。なお遺跡付近の磁北は西偏6度40分を測る。
2. 本報告書の遺構および遺物実測図の縮尺については明記しているが、おもなものについては一部例外はあるものの以下のように統一している。

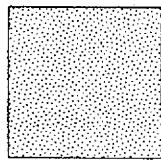
遺構

竪穴住居・建物（1/60） 井戸・袋状土壇・土壇・土壇墓（1/30）

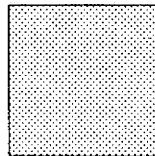
遺物

土器（1/4） 土製品（1/3） 石器・石製品（1/2, 1/3）
木製品（1/4, 1/6） 金属製品（1/3） 玉類（1/1）

3. 本報告書における土層名称については、各発掘調査担当者によって表記方法が異なっており、統一できていない。
4. 本報告書に掲載した火処の遺構図においては、被熱している範囲と、炭・焼土の分布範囲とを下記のスクリーン・トーンで表現している。



……………被熱範囲



……………炭・焼土分布範囲

5. 本報告書に掲載した遺物の番号については、土器、土製品、石器・石製品、金属製品、木器・木製品、ガラス製品にわけて通し番号をつけ、土器以外については、下記を番号の前に付している。

土製品：C

石器・石製品：S

金属製品：M

木器・木製品：W

ガラス製品：G

6. 本報告書に掲載した土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのある図は、口径の不確かなものである。また、小片の土器については、傾きの不明確なものも多い。
7. 本報告書に掲載した地図のうち、第1図は国土地理院発行の1/50,000地形図「岡山北部」を、第6図は国土地理院発行の1/25,000地形図「総社東部」・「倉敷」を縮小複製し、加筆したものである。
8. 本報告書に掲載した土器の拓本のうち、口径の計測が不可能な個体については、断面図の左側に内面、右側に外面の拓本を載せている。
9. 土器観察表における色調は『新版標準土色帖（1988年版）』（農林水産省・農林水産技術会議事務局

監修、財団法人日本色彩研究所票監修) によっている。

10. 本報告書にもちいた遺構・遺物の時期については、弥生時代から古墳時代前期については第1表の編年対比表のように表記し、それ以外の時期については各執筆者の意向に沿っており、統一していない。なお、本報告書における古代・中世については8世紀から16世紀までを指している。
11. 本文中に『南溝手遺跡1』と記しているのは、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100、南溝手遺跡1 岡山県教育委員会 1995年』、『南溝手遺跡2』と記しているのは、『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107、南溝手遺跡2 岡山県教育委員会 1996年』のそれぞれの報告書を指している。

時代	遺跡		百間川(註1)	雄 町(註2)	上東・川入(註3)	南溝手1
弥生時代	前期	津 島	百間川前期I			弥生時代前期前葉
		門 田	百間川前期II	雄 町 1		弥生時代前期中葉
			百間川前期III	雄 町 2 船 山 3		弥生時代前期後葉
	中期	南 方	百間川中期I	高 田		弥生時代中期前葉
				雄 町 3		
		菰 池	百間川中期II	船 山 5		弥生時代中期中葉
	菰 池 雄 町 4					
	後期	前 山 II	百間川中期III	前 山 東		弥生時代中期後葉
				雄 町 5		
		仁 伍		雄 町 6	上東・鬼川市0	
	後期	上 東	百間川後期I	雄 町 7	上東・鬼川市I	弥生時代後期前葉
				雄 町 8		
		酒 津	百間川後期II	雄 町 9	上東・鬼川市II	弥生時代後期中葉
				雄 町 10		
		グランド上層	百間川後期III	+	上東・鬼川市III	弥生時代後期後葉
酒 津	百間川後期IV	雄 町 11	才 の 町 I 才 の 町 II	弥生時代後期末葉		
古墳時代	前 期	王 泊 六 層	百間川古墳時代I	雄 町 12	下 田 所	古墳時代前期前葉
			百間川古墳時代II	雄 町 13		
			百間川古墳時代III	雄 町 14	龜川上層 +	
			雄 町 15	川入・大溝上層	古墳時代前期後葉	

註1 岡山県教育委員会が1977年から実施している「百間川遺跡群」の発掘調査で用いられている編年である。(文献『旭川放水路(百間川)改修工事に伴う発掘調査I~XII』岡山県教育委員会、1980~1996年)

註2 「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告1』 岡山県教育委員会 1972年

註3 「川入・上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』 岡山県教育委員会 1977年

第1表 編年対比表

本文目次

序

例言

凡例

目次

第1章 発掘調査および報告書作成の経緯	1
第1節 発掘調査の契機	1
第2節 発掘調査の体制	3
第3節 発掘調査の経過	5
第4節 報告書の作成	9
第2章 遺跡の位置と環境	14
第3章 発掘調査の概要	18
第1節 調査区の概要	18
第2節 縄文時代晩期の遺構・遺物	19
1. 概要	19
2. 遺構・遺物	19
(1) 土壌	22
(2) 小ピット群	24
(3) 土器溜り	27
(4) 火処	30
(5) 河道	31
(6) その他の遺構・遺物	35
第3節 弥生時代前期～中期前葉の遺構・遺物	39
1. 概要	39
2. 遺構・遺物	39
(1) 竪穴住居	39
(2) 土壌	50
(3) 溝	59
(4) 河道	60
(5) その他の遺構・遺物	61
第4節 弥生時代中期中葉～後期の遺構・遺物	67
1. 概要	67
2. 遺構・遺物	67
(1) 竪穴住居	67
(2) 建物	100

(3) 井戸	122
(4) 土壙墓	131
(5) 袋状土壙	132
(6) 土壙	141
(7) 溝	160
(8) 土器溜り	193
(9) 貝塚	193
(10) 河道	194
(11) 杭列	221
(12) その他の遺構・遺物	227
第5節 古墳時代の遺構・遺物	233
1. 概要	233
2. 遺構・遺物	233
(1) 建物	233
(2) 井戸	236
(3) 土壙	237
(4) 溝	237
(5) 柵列状遺構	248
(6) 水田	257
(7) 河道	265
(8) その他の遺構・遺物	268
第6節 古代・中世・近世の遺構・遺物	270
1. 概要	270
2. 遺構・遺物	270
(1) 建物	270
(2) 柱穴列	286
(3) 井戸	286
(4) 土壙	286
(5) 土壙墓	291
(6) 溝	292
(7) 柵列状遺構	303
(8) 素掘溝群	305
(9) 粘土採掘跡	309
(10) 水田	309
(11) その他の遺構・遺物	310
第4章 まとめ	313
第1節 発掘調査成果の概要	(岡田) 313
第2節 縄文時代晩期の土器について	(平井) 314

第3節 弥生時代前期の土器について	(久保)	325
第4節 線刻絵画土器について	(平井)	335

付載

付載1 窪木遺跡における自然科学分析	(古環境研究所)	339
付載2 窪木遺跡出土の赤色顔料について	(本田・成瀬)	351
付載3 窪木遺跡出土木製品の樹種	(パリノ・サーヴェイ株式会社)	355
付載4 窪木遺跡B U区およびT A区出土のガラス小玉の分析	(白石)	361
付載5 窪木遺跡C H 5区出土の銅鏃の分析	(白石)	363

挿 図 目 次

第1図 岡山県立大学の位置(斜線部分)(1/50,000)	1	第28図 河道1出土遺物(5)(1/4)	35
第2図 全調査区配置図(1)(1/4,000)	7	第29図 包含層出土遺物(縄文時代晩期1)	
第3図 全調査区配置図(2)(1/4,000)	11	(PU1・CH1区;1/4)	35
第4図 『窪木遺跡1』調査区名およびグリッド設定図		第30図 包含層出土遺物(縄文時代晩期2)(1/4)	
(1/1,500)	13		35
第5図 遺跡位置図	14	第31図 KO2区出土遺物(1/4)	36
第6図 周辺主要遺跡分布図(1/40,000)	15	第32図 包含層出土遺物(縄文時代晩期3)	
第7図 縄文時代晩期地形概略図(1/3,000)	19	(HW1~3区;1/4)	37
第8図 縄文時代遺構配置図(1/1,500)	20	第33図 包含層出土遺物(縄文時代晩期4)	
第9図 縄文時代遺構図(PU区;1/300)	21	(HW1~3区;1/2)	38
第10図 土壌1~3(1/30)・出土遺物(1/4)	22	第34図 弥生時代前期~中期前葉地形概略図(1/3,000)	
第11図 土壌4・5(1/30)・出土遺物(1/4)	22		39
第12図 縄文時代遺構全体図(KO1・CH4区;1/300)		第35図 弥生時代前期~中期前葉遺構全体図(1)	
	23	(1/1,500)	40
第13図 土壌6~8(1/30)	24	第36図 弥生時代前期~中期前葉遺構全体図(2)	
第14図 PU1区北壁土層断面図(1/60)	24	(KO1・2・HO・K10・H20・K区;1/600)	41・42
第15図 PU1区西壁土層断面図(1/60)	25	第37図 竪穴住居1(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)	43
第16図 縄文時代晩期遺構面出土遺物(1)		第38図 竪穴住居2(1/60)	44
(PU2・3区;1/4・1/2)	26	第39図 竪穴住居2出土遺物(1)(1/4)	45
第17図 縄文時代晩期遺構面出土遺物(2)		第40図 竪穴住居2出土遺物(2)(1/4)	46
(PU2・3区;1/2)	27	第41図 竪穴住居2出土遺物(3)(1/2)	47
第18図 PU3区土層断面図(1/60)	27	第42図 竪穴住居3(1/60)	47
第19図 土器溜り1(CH1区;1/30)	28	第43図 竪穴住居3出土遺物(1/4)	48
第20図 土器溜り1出土遺物(1/4・1/2)	29	第44図 竪穴住居4(1/60)	48
第21図 火処1(1/30)	30	第45図 竪穴住居4出土遺物(1/4・1/2)	49
第22図 火処2~4(1/30)	30	第46図 土壌9~13(1/30)	50
第23図 河道1(1/200・1/60)	31	第47図 土壌14・15(1/30)・出土遺物(1/4)	51
第24図 河道1出土遺物(1)(1/4)	32	第48図 土壌16・17(1/30)	51
第25図 河道1出土遺物(2)(1/4)	33	第49図 土壌18~20(1/30)	52
第26図 河道1出土遺物(3)(1/4・1/2)	34	第50図 土壌21(1/30)・出土遺物(1/4)	52
第27図 河道1出土遺物(4)(1/4)	35	第51図 土壌22・23(1/30)	53

第52図	土壌24(1/30)・出土遺物(1/4)	53	第88図	竪穴住居18出土遺物(1)(1/4・1/2)	86
第53図	土壌25(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	53	第89図	竪穴住居18最終時の平面図・ガラス小玉出土位置(1/60)	86
第54図	土壌26~28(1/30)・出土遺物(1/4・1/3)	54	第90図	弥生時代後期遺構全体図(CH1区;1/400)	87・88
第55図	土壌29(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	55	第91図	竪穴住居18出土ガラス小玉(1/1)	89
第56図	土壌30・31(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	56	第92図	竪穴住居19(1/60)	89
第57図	土壌32~34(1/30)・出土遺物(1/4)	57	第93図	弥生時代中期中葉~後期遺構全体図(KO1・2区;1/400)	90
第58図	土壌35~37(1/30)	58	第94図	弥生時代中期中葉~後期遺構全体図(HO・K10・H20・K区;1/500)	91・92
第59図	土壌38~40(1/30)	58	第95図	弥生時代中期中葉~後期遺構全体図(CH2~5・HW1~3区;1/400)	93・94
第60図	溝1(1/250・1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	59	第96図	竪穴住居20(1/60)	95
第61図	溝2(1/200・1/30)	60	第97図	竪穴住居21・22(1/60)・出土遺物(1/4)	96
第62図	河道2(1/400・1/60)	60	第98図	竪穴住居23(1/60)	97
第63図	河道2出土遺物(1/4)	61	第99図	竪穴住居24(1/60)	97
第64図	第3低位部(1/400)・出土遺物(1)(1/2)	62	第100図	竪穴住居25(1/60)・出土遺物(1/4)	98
第65図	第3低位部断面図(1/60)	63	第101図	竪穴住居26(1/60)・出土遺物(1/2・1/3)	99
第66図	第3低位部出土遺物(2)(1/4)	64	第102図	竪穴住居27(1/60)・出土遺物(1/4)	99
第67図	第3低位部出土遺物(3)(1/4)	65	第103図	建物1(1/60)	100
第68図	南半調査区出土遺物(弥生時代前期)(1/4)	66	第104図	建物2(1/60)	101
第69図	竪穴住居5(1/60)	67	第105図	建物3(1/60)	101
第70図	竪穴住居6(1/60)	68	第106図	建物4(1/60)	102
第71図	弥生時代中期中葉~後期遺構配置図(PU・TA区;1/400)	69・70	第107図	建物5(1/60)	102
第72図	竪穴住居6出土遺物(1/4・1/3・1/2・1/1)	71	第108図	建物6(1/60)・出土遺物(1/4)	103
第73図	竪穴住居7(1/60)	71	第109図	建物7(1/60)	104
第74図	竪穴住居8(1/60・1/30)	72	第110図	建物8(1/60)	104
第75図	竪穴住居8出土遺物(1/4)	73	第111図	建物9(1/60)	105
第76図	竪穴住居9(1/60・1/30)・出土遺物(1)(1/2)	74	第112図	建物10(1/60)	105
第77図	竪穴住居9出土遺物(2)(1/2)	75	第113図	建物11(1/60)	106
第78図	竪穴住居10(1/60)・出土遺物(1/3)	75	第114図	建物12(1/60)・出土遺物(1/4)	107
第79図	竪穴住居11(1/60)・出土遺物(1/4・1/2・1/1)	77	第115図	建物13(1/60)	108
第80図	竪穴住居12(1/60)・出土遺物(1/4・1/3)	78	第116図	建物14(1/60)	108
第81図	竪穴住居13(1/60)・出土遺物(1/4)	78	第117図	建物15(1/60)・出土遺物(1/4)	109
第82図	弥生時代後期遺構配置図(H18・H19・BU区;1/400)	79・80	第118図	建物16(1/60)	109
第83図	竪穴住居14(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)	81	第119図	建物17(1/60)	110
第84図	竪穴住居15(1/60)・出土遺物(1/4・1/2・1/1)	82	第120図	建物18(1/60)	110
第85図	竪穴住居16(1/60)・出土遺物(1/2)	83	第121図	建物19(1/60)・出土遺物(1/4)	111
第86図	竪穴住居17(1/60)・出土遺物(1/4)	84	第122図	建物20(1/60)	111
第87図	竪穴住居18(1/60)	85	第123図	建物21(1/60)	112
			第124図	建物22(1/60)	112
			第125図	建物23・24(1/60)	113
			第126図	建物25・26(1/60)	114
			第127図	建物27・28(1/60)	115

第128図	建物29・30(1/60)・出土遺物(1/2)	116	第170図	土壌47・48(1/30)	145
第129図	建物31・32(1/60)	117	第171図	土壌49(1/30)・出土遺物(1/4)	145
第130図	建物33(1/60)	117	第172図	土壌50(1/30)・出土遺物(1/4)	146
第131図	建物34・35(1/60)	118	第173図	土壌51(1/30)・出土遺物(1/4)	146
第132図	建物36・37(1/60)	119	第174図	土壌52(1/30)	146
第133図	建物38・39(1/60)	120	第175図	土壌53(1/30)	147
第134図	建物40~42(1/60)	121	第176図	土壌54(1/30)	147
第135図	井戸1(1/30)	122	第177図	土壌55(1/30)・出土遺物(1/4)	147
第136図	井戸2(1/30)	122	第178図	土壌56(1/30)・出土遺物(1/4)	148
第137図	井戸3(1/30)・出土遺物(1/4)	123	第179図	土壌57(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	148
第138図	井戸4(1/30)・出土遺物(1)(1/4)	124	第180図	土壌58(1/30)・出土遺物(1/3・1/4)	149
第139図	井戸4出土遺物(2)(1/4)	125	第181図	土壌59(1/30)・出土遺物(1/4)	149
第140図	井戸5(1/30)	125	第182図	土壌60(1/30)・出土遺物(1)(1/4)	150
第141図	井戸6(1/30)	125	第183図	土壌60出土遺物(2)(1/4)	151
第142図	井戸7(1/30)・出土遺物(1) (上面出土遺物;1/4)	126	第184図	土壌61(1/30)・出土遺物(1/2)	152
第143図	井戸7出土遺物(2)(上層と中層;1/4)	127	第185図	土壌62(1/30)・出土遺物(1/2)	152
第144図	井戸7出土遺物(3)(下層;1/4)	127	第186図	土壌63~65(1/30)	153
第145図	井戸7出土遺物(4)(最下層;1/4)	128	第187図	土壌66~68(1/30)	153
第146図	井戸7出土遺物(5)(木製品1;1/4)	128	第188図	土壌69~76(1/30)	154
第147図	井戸7出土遺物(6)(木製品2;1/4・1/6)	129	第189図	土壌77~83(1/30)	155
第148図	井戸7出土遺物(7)(木製品3;1/4)	130	第190図	土壌84(1/30)・出土遺物(1/4)	156
第149図	土壌墓1(1/30)	131	第191図	土壌85(1/30)	156
第150図	土壌墓2(1/30)	131	第192図	土壌86・87(1/30)	156
第151図	土壌墓3(1/30・1/5)	131	第193図	土壌88・89(1/30)	157
第152図	袋状土壌1~4(1/30)	132	第194図	土壌90・91(1/30)	157
第153図	袋状土壌5(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	133	第195図	土壌92・93(1/30)	158
第154図	袋状土壌6(1/30)	133	第196図	土壌94~96(1/30)	158
第155図	袋状土壌7~9(1/30)	134	第197図	土壌97~99(1/30)・出土遺物(1/4)	159
第156図	袋状土壌10・11(1/30)	134	第198図	土壌100(1/30)・出土遺物(1/4)	159
第157図	袋状土壌12(1/30)・出土遺物(1/4)	135	第199図	溝4断面図(1/60)・出土遺物(1/4)	160
第158図	袋状土壌13・14(1/30)・出土遺物(1/4)	136	第200図	弥生時代後期遺構配置図(TA・H18・H19・B U区;1/500)	161・162
第159図	袋状土壌15~17(1/30)・出土遺物(1/4)	137	第201図	溝5断面図(1/60)	163
第160図	袋状土壌18・19(1/30)・出土遺物(1/4)	138	第202図	溝6断面図(1/30)	163
第161図	袋状土壌20・21(1/30)	138	第203図	溝7断面図(1/30)	163
第162図	袋状土壌22~24(1/30)	139	第204図	溝8断面図(1/30)	163
第163図	袋状土壌25・26(1/30)・出土遺物(1/4)	139	第205図	溝9断面図(TA区;1/30・1/60)	164
第164図	袋状土壌27・28(1/30)・出土遺物(1/3)	140	第206図	溝9断面図(H19区;1/30)	164
第165図	土壌41~43(1/30)	141	第207図	溝10断面図(1/60)・出土遺物(1/4)	164
第166図	土壌44(1/30)・出土遺物(1)(1/4)	142	第208図	溝11断面図(1/60)・出土遺物(1/4)	165
第167図	土壌44出土遺物(2)(1/4)	143	第209図	溝12断面図(1/60)	165
第168図	土壌45(1/30)・出土遺物(1/4)	144	第210図	溝13断面図(1/60)・出土遺物(1/4)	165
第169図	土壌46(1/30)・出土遺物(1/4)	144	第211図	溝14出土遺物(1/4)	165
			第212図	溝15断面図(1/60)・出土遺物(1/4)	166
			第213図	溝16・17上面たわみ出土遺物(1)(1/4)	167

第214図	溝16・17上面たわみ出土遺物(2)(1/4・1/2)	168
第215図	溝16断面図(1/60)・出土遺物(1)(1/4)	169
第216図	溝16出土遺物(2)(1/4)	170
第217図	溝16出土遺物(3)(1/4)	171
第218図	溝16出土遺物(4)(1/4)	172
第219図	溝16出土遺物(5)(1/2)	173
第220図	H19区溝16・17断面図(1/60)・溝16出土遺物(1)(1/4)	173
第221図	H19区溝16出土遺物(2)(1/4)	174
第222図	H19区溝16出土遺物(3)(1/4)	175
第223図	H19区溝16出土遺物(4)(1/4)	176
第224図	溝17出土遺物(1/4)	176
第225図	溝18・19断面図(1/30)	176
第226図	溝20断面図(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	177
第227図	溝21断面図(1/30)	178
第228図	溝22断面図(1/30)	178
第229図	溝23断面図(1/30)	178
第230図	溝24・26断面図(1/60)	178
第231図	溝25・27～29断面図(1/60)	179
第232図	溝30断面図(1/60)	180
第233図	溝31断面図(1/60)	180
第234図	溝32断面図(1/60)	180
第235図	溝33断面図(1/60)	180
第236図	溝34断面図(1/60)	180
第237図	溝35～39(1/300)	181
第238図	溝35断面図(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)	182
第239図	溝36～39断面図(1/30)	182
第240図	溝40～48(1/600)	183
第241図	溝40断面図(1/30)	184
第242図	溝40出土遺物(1/4・1/2)	185
第243図	溝41・42断面図(1/30)・溝41・42・44出土遺物(1/4・1/2)	186
第244図	溝43～45断面図(1/30)	186
第245図	溝46断面図(1/30)・出土遺物(1/2)	186
第246図	溝40・49～56(1/400)	187
第247図	溝47・48断面図(1/30)・出土遺物(1/4)	188
第248図	溝49～51断面図(1/30)	188
第249図	溝52・53断面図(1/30)	188
第250図	溝54断面図(1/30)	189
第251図	溝55・56断面図(1/30)・出土遺物(1/4)	189
第252図	溝57・58(1/300・1/30)	189
第253図	溝59(1/300・1/30)	190

第254図	溝60～64(1/300)	190
第255図	溝60・61断面図(1/30)	190
第256図	溝62～64断面図(1/30)・出土遺物(1/4)	191
第257図	溝65(1/300・1/30)	191
第258図	土器溜り・2出土遺物(1/4)	192
第259図	貝塚1(1/30)・出土遺物(1/4)	193
第260図	河道3断面図(TA区;1/60)	194
第261図	河道3出土遺物(1)(1/4)	195
第262図	河道3出土遺物(2)(1/4)	196
第263図	河道3出土遺物(3)(1/4)	197
第264図	河道3断面図(H18区;1/60)	198
第265図	河道3断面図(BU区;1/60)	199
第266図	河道3出土遺物(4)(1/4・1/2)	199
第267図	河道3出土遺物(5)(木製品;1/4)	200
第268図	河道4(1/300・1/60)	201
第269図	河道4出土遺物(1)(1/4)	202
第270図	河道4出土遺物(2)(1/4)	203
第271図	河道4出土遺物(3)(1/4)	204
第272図	河道4出土遺物(4)(1/4)	205
第273図	河道4出土遺物(5)(1/4・1/2)	206
第274図	河道5(1/300・1/60)	207
第275図	河道5出土遺物(1)(1/4・1/3)	208
第276図	河道5出土遺物(2)(1/4・1/2)	209
第277図	河道5出土遺物(3)(1/4)	210
第278図	河道5出土遺物(4)(1/4)	211
第279図	河道6・杭列1(1/300)	211
第280図	河道6・杭列1断面図(1/60)	212
第281図	河道6出土遺物(1)(1/4)	213
第282図	河道6出土遺物(2)(1/4)	213
第283図	河道6出土遺物(3)(1/4)	214
第284図	河道6出土遺物(4)(1/4)	215
第285図	河道6出土遺物(5)(1/4)	216
第286図	河道6出土遺物(6)(1/4)	217
第287図	河道6出土遺物(7)(1/4)	218
第288図	河道6出土遺物(8)(1/4・1/2・1/3)	219
第289図	河道6出土遺物(9)(1/4)	220
第290図	杭列1(1/60)	221
第291図	杭列1出土遺物(1)(1/4・1/2)	222
第292図	杭列1出土遺物(2)(1/4)	223
第293図	杭列1出土遺物(3)(1/4)	224
第294図	杭列1出土遺物(4)(1/4)	225
第295図	杭列1出土遺物(5)(1/4)	226
第296図	北半調査区出土遺物(1)(1/2・1/3)	227
第297図	北半調査区出土遺物(2)(1/4)	228

第298図	北半調査区出土遺物(3)(1/2)	229			266
第299図	北半調査区出土遺物(4)(1/2)	230	第336図	河道4(1/300)・出土遺物(1/4)	267
第300図	南半調査区出土遺物(1)(1/4)	231	第337図	南半調査区出土遺物(古墳時代)(1/4)	269
第301図	南半調査区出土遺物(2)(1/2・1/3)	232	第338図	建物48(1/60)	270
第302図	建物43(1/60)	233	第339図	古代・中世・近世遺構全体図(1/1,500)	271
第303図	古墳時代遺構配置図(1/1,500)	234	第340図	建物49(1/60)・出土遺物(1/2)	272
第304図	建物44・45(1/60)	235	第341図	建物50(1/60)・出土遺物(1/4)	272
第305図	建物46・47(1/60)	236	第342図	遺構全体図(CH1区;1/400)	273・274
第306図	井戸8(1/30)・出土遺物(1/4)	237	第343図	古代・中世・近世遺構全体図(KO1・2・HO・K10・H20・K区;1/600)	275・276
第307図	土壇101(1/30)・出土遺物(1/4)	237	第344図	古代・中世・近世遺構全体図(CH2~5・HW1~3区;1/600)	277・278
第308図	溝66断面図(1/30)	237	第345図	建物51~53(1/60)	279
第309図	溝66・67(1/300・1/30)・出土遺物(1/4)	238	第346図	建物54・56(1/60)・出土遺物(1/4)	280
第310図	溝68~71(1/300・1/30)	239	第347図	建物55(1/60)	281
第311図	溝71出土遺物(1)(1/4)	240	第348図	建物57(1/60)・出土遺物(1/4)	282
第312図	溝71出土遺物(2)(1/4)	241	第349図	柱穴列1・2(1/60)・出土遺物(1/4)	282
第313図	溝71出土遺物(3)(1/4・1/2)	242	第350図	中世~近世遺構全体図(PU・TA・H18・H19・BU区;1/500)	283・284
第314図	溝72・73(1/400・1/60・1/30)・溝72出土遺物(1)(1/4)	243	第351図	遺構全体図(PU区;1/400)	285
第315図	溝73出土遺物(1)(1/4)	244	第352図	井戸9(1/30)	286
第316図	溝72・73出土遺物(2)(1/4・1/3)	245	第353図	土壇102~104(1/60)	286
第317図	溝74~76(1/400・1/60・1/30)	246	第354図	土壇108・109(1/30)	287
第318図	溝76出土遺物(1/4)	247	第355図	土壇110~113(1/30)	287
第319図	柵列状遺構全体図(1/1,500)	249	第356図	土壇114~117(1/30)	288
第320図	柵列状遺構1~6(1/200・1/80)	250	第357図	土壇118~120(1/30)	289
第321図	柵列状遺構7(1/200)	251	第358図	土壇121(1/30)	289
第322図	柵列状遺構7断面図(1/30)	252	第359図	土壇122(1/30)・出土遺物(1/4)	290
第323図	柵列状遺構8(1/200・1/30)	252	第360図	土壇123(1/30)	291
第324図	柵列状遺構9・10(1/200・1/80)	253	第361図	土壇墓4(1/30)・出土遺物(1/3)	291
第325図	柵列状遺構11~14(1/200・1/160・1/80)	254	第362図	溝77~79断面図(1/60)	292
第326図	水田(PU・TA・BU・H18・H19区;1/500)	255・256	第363図	溝77出土遺物(1/4)	292
第327図	水田畦畔痕跡(PU区;1/400)	257	第364図	溝81断面図(1/60)	293
第328図	水田畦畔痕跡(TA区;1/400)	258	第365図	溝82~85断面図(1/60)	293
第329図	BU区南区西壁土層断面図(1/60)	260	第366図	溝87・89断面図(1/60)	293
第330図	水田・河道(H18・H19・BU区;1/400)	261・262	第367図	溝90断面図(1/60)	293
第331図	水田(KO1・2・CH3・H20・K区;1/600)	263	第368図	溝91断面図(1/60)・出土遺物(1/4)	294
第332図	K区土層断面図(1/80)	264	第369図	溝92・93断面図(1/60)	294
第333図	水田(HW3区;1/600)	265	第370図	溝95・96断面図(1/60)	294
第334図	河道3東西土層断面図(再掲図=BU区;1/60)	266	第371図	溝97断面図(1/60)	294
第335図	河道3上層出土遺物(BU・H18区;1/4)		第372図	溝98~116(1/300・1/30)・出土遺物(1/4)	295
			第373図	溝117~142(1/300)	296
			第374図	溝117・118断面図(1/30)	297
			第375図	溝119断面図(1/30)	297

第376図 溝120～123断面図(1/30)・出土遺物(1/4)	297
第377図 溝125断面図(1/80・1/30)	298
第378図 溝126・127断面図(1/30)	298
第379図 溝128断面図(1/30)	298
第380図 溝129～131断面図(1/30)	299
第381図 溝133～135断面図(1/30)	299
第382図 溝136～139断面図(1/30)	300
第383図 溝141～143・水田(1/500)	300
第384図 溝141～143断面図(1/30)・出土遺物(1/4)	301
第385図 溝144～149(1/400・1/30)・出土遺物(1/4)	302
第386図 溝150・151(1/400・1/30)・出土遺物(1/4)	303
第387図 柵列状遺構15(1/100)	304
第388図 柵列状遺構16(1/100・1/80)	305
第389図 中世遺構全体図(BU区;1/400)	306
第390図 近世遺構全体図(BU区;1/400)	306

第391図 素掘溝群断面図(CH1区;1/100)	307
第392図 素掘溝群(HO・K10・H20・K区;1/600)	308
第393図 粘土採掘跡(KO1・2区;1/500)	309
第394図 その他の遺物(古代・中世・近世1)(1/4)	310
第395図 その他の遺物(古代・中世・近世2)(1/3・1/4)	311
第396図 その他の遺物(古代・中世・近世3)(1/2)	312
第397図 窪木遺跡河道1出土の縄文時代晩期壺・鉢および関連土器(1/8・1/6)	320
第398図 河道6出土絵画土器(1/4)	333
第399図 土器絵画(1/2)	334
第400図 雄町遺跡(岡山市)出土絵画土器(1/2)	336
付 図 窪木遺跡弥生時代中期中葉～後期遺構全体図(裏表紙袋入り;1/600)	

表 目 次

第1表 編年対比表	凡例
第2表 南溝手遺跡・窪木遺跡一覧表	8
第3表 第3分冊掲載対象区一覧表	9
第4表 縄文時代晩期中葉～後葉の土器編年表	317・318
第5表 壺及び甕口縁形態分類表	323
第6表 弥生時代前期編年対比表	326
第7表 突帯を持つ甕の口縁形態と突帯の貼付位置	327
第8表 弥生時代前期土器編年表	331・332
第9表 壺及び甕の文様消長概念表	333

第10表 岡山県における線刻絵画土器一覧表(弥生時代～古墳時代初頭)	338
第11表 竪穴住居一覧表	365
第12表 建物一覧表	365
第13表 井戸一覧表	367
第14表 ガラス玉一覧表	368
第15表 土製品一覧表	368
第16表 石器・石製品一覧表	368
第17表 木器一覧表	371
第18表 土器観察表	372
第19表 新旧遺構名称対照表	394

図 版 目 次

巻頭図版1 HO・K区航空写真(北東から)	
巻頭図版2-1. 縄文時代小ピット群(PU区;北から)	
2. 縄文時代晩期の土器(PU区出土, 鉢3・4)	
巻頭図版3 縄文土器(HW3区出土, 鉢106)	
巻頭図版4-1. 縄文土器(HW3区出土, 壺105)	
2. 線刻絵画土器(HW3区出土, 器台	

1152)	
巻頭図版5-1. 竪穴住居2(HO区;南から)	
2. 弥生時代後期遺構群(TA区;南から)	
巻頭図版6-1. 竪穴住居6(TA区, 火災住居;南から)	
2. 竪穴住居16(BU区, 火災住居;北から)	

- 巻頭図版7 竪穴住居18ほか出土ガラス小玉(BU区)
- 巻頭図版8-1. 古墳時代水田畦畔痕跡(PU区;西から)
- 2. 銅鏃M2(CH5区溝71出土,実物大)
- 図版1 遺跡周辺の地形(航空写真;1985年)
- 図版2-1. 小ピット群と土層断面(PU区;北西から)
- 2. 縄文土器出土状態(PU区;西から)
- 3. 土壌3(PU区;南から)
- 図版3-1. 土器溜り1(CH1区;北から)
- 2. 火処1(CH4区;南西から)
- 3. 河道1(HW3区;東から)
- 図版4-1. 低位部土層断面(KO2区;南から)
- 2. 低位部土層断面(CH5区;北から)
- 3. 竪穴住居1(KO2区;北西から)
- 図版5-1. 竪穴住居2(HO区;南から)
- 2. 竪穴住居3(HO区;南西から)
- 3. 竪穴住居4(K10区;東から)
- 図版6-1. 土壌21(HO区;南西から)
- 2. 土壌25(K10区;東から)
- 3. 土壌29(K10区;南西から)
- 図版7-1. 土壌30(K10区;南から)
- 2. 溝1(KO2区;南東から)
- 3. 溝2(CH4区;西から)
- 図版8-1. 河道2(CH5区;北西から)
- 2. 竪穴住居5(TA区;東から)
- 3. 竪穴住居6(TA区;南から)
- 図版9-1. 竪穴住居7(TA区;西から)
- 2. 竪穴住居8(TA区;南から)
- 3. 竪穴住居9(TA区;西から)
- 図版10-1. 竪穴住居9中央ピット(TA区;北から)
- 2. 竪穴住居10(TA区;東から)
- 3. 竪穴住居11(TA区;南から)
- 図版11-1. 竪穴住居9・11付近(TA区中央部;南から)
- 2. 竪穴住居13(TA区;北から)
- 3. 竪穴住居14(TA区;西から)
- 図版12-1. 竪穴住居15炭化材検出状態(BU区;南から)
- 2. 竪穴住居15(BU区;南から)
- 3. 竪穴住居16(BU区;北から)
- 図版13-1. 竪穴住居17(BU区;北から)
- 2. 竪穴住居18貼床状態(BU区;南東から)
- 3. 竪穴住居18(BU区;北から)
- 図版14-1. 竪穴住居19(CH1区;東から)
- 2. 竪穴住居20(KO1区;北西から)
- 3. 竪穴住居21(CH2区;東から)
- 図版15-1. 竪穴住居22(CH2区;北西から)
- 2. 竪穴住居23(CH3区;西から)
- 3. 竪穴住居24(CH3区;北東から)
- 図版16-1. 竪穴住居25(CH3区;南から)
- 2. 竪穴住居26(CH3区;東から)
- 3. 竪穴住居27(HW3区;南から)
- 図版17-1. 建物1(TA区;東から)
- 2. 建物2(TA区;南東から)
- 3. 建物5(TA区;南東から)
- 図版18-1. 建物6(TA区;東から)
- 2. 建物7(TA区;西から)
- 3. 建物8(TA区;南東から)
- 図版19-1. 建物11(TA区;北から)
- 2. 建物12(TA区;東から)
- 3. 建物14・15(TA区;北東から)
- 図版20-1. 建物17(H18区;南から)
- 2. 建物18(BU区;東から)
- 3. 建物20付近(CH1区;北から)
- 図版21-1. 建物22(CH1区;東から)
- 2. 建物23(KO1区;北から)
- 3. 建物24(HO区;南から)
- 図版22-1. 建物25(HO区;東から)
- 2. 建物26(HO区;北西から)
- 3. 建物28(HO区;南から)
- 図版23-1. 建物29(HO区;西から)
- 2. 建物30(HO区;北から)
- 3. 建物33(CH2区;北から)
- 図版24-1. 建物34(CH2区;南西から)
- 2. 建物37(CH3区;北東から)
- 3. 建物38(CH4区;北から)
- 図版25-1. 建物39(CH4区;北から)
- 2. 建物40(CH5区;南東から)
- 3. 建物41(HW1区;東から)
- 図版26-1. 建物42(HW1区;西から)
- 2. 井戸1(PU2区;西から)
- 3. 井戸7(TA区;北から)
- 図版27-1. 土壌墓1(H20区;南から)
- 2. 土壌墓2(HW3区;北から)
- 3. 土壌墓3(HW3区;東から)
- 図版28-1. 土壌墓3歯出土状態(HW3区;東から)

- ら)
- 2. 袋状土壌1(CH1区;西から)
- 3. 袋状土壌2~5(CH1区;北西から)
- 図版29—1. 袋状土壌3(CH1区;南から)
- 2. 袋状土壌4(CH1区;南から)
- 3. 袋状土壌5(CH1区;南から)
- 図版30—1. 袋状土壌12(CH3区;北西から)
- 2. 袋状土壌13(HW1区;東から)
- 3. 袋状土壌14(HW1区;北西から)
- 図版31—1. 袋状土壌17(HW2区;北から)
- 2. 袋状土壌18(HW2区;北西から)
- 3. 袋状土壌19(HW2区;南から)
- 図版32—1. 袋状土壌20(HW2区;南から)
- 2. 袋状土壌24(HW2区;北から)
- 3. 袋状土壌25(HW2区;西から)
- 図版33—1. 袋状土壌26(HW3区;南西から)
- 2. 土壌41(PU1区;南西から)
- 3. 土壌44(TA区;西から)
- 図版34—1. 土壌56(BU区;西から)
- 2. 土壌59(BU区;西から)
- 3. 土壌60(BU区;南から)
- 図版35—1. 土壌62(CH1区;東から)
- 2. 溝4・5周辺(PU2区;北西から)
- 3. 溝4土層断面(PU2区;東から)
- 図版36—1. 溝4上層弥生土器出土状態(PU2区;北から)
- 2. 溝5(PU2区;北西から)
- 3. 溝11(TA区;南から)
- 図版37—1. 溝11・14付近(TA区;東から)
- 2. 溝16(TA区;南西から)
- 3. 溝16・17(H19区;北東から)
- 図版38—1. 溝16弥生土器出土状態(H19区;東から)
- 2. 溝20(BU区;南西から)
- 3. 溝20土層断面(BU区;西から)
- 図版39—1. 溝20土層断面(H18区;東から)
- 2. 溝25土層断面(CH1区;北西から)
- 3. 溝30(CH1区;南東から)
- 図版40—1. 溝32(CH1区;北から)
- 2. 溝34(CH1区;北から)
- 3. 溝40(HO区;北東から)
- 図版41—1. 溝40(CH3区;東から)
- 2. 溝40土層断面(CH3区;北東から)
- 3. 溝50~53(CH2区;南から)
- 図版42—1. 溝53土層断面(CH3区;南から)
- 2. 溝55(CH3区;南東から)
- 3. 溝62~64(HW3区;北から)
- 図版43—1. 溝65(HW3区;南西から)
- 2. 貝塚1(HW3区;南東から)
- 3. 河道3(TA区;東から)
- 図版44—1. 河道3(H18区;西から)
- 2. 河道3土層断面(BU区;南から)
- 3. 河道3(BU区;南から)
- 図版45—1. 河道4(CH4区;北から)
- 2. 河道4土層断面(CH4区;北から)
- 3. 河道5土層断面(CH5区;北東から)
- 図版46—1. 河道6(HW3区;東から)
- 2. 杭列1(HW3区;東から)
- 3. 建物45・46(CH4区;南から)
- 図版47—1. 建物45(CH4区;西から)
- 2. 建物46(CH4区;北から)
- 3. 建物47(CH4区;南東から)
- 図版48—1. 井戸8(H20区;南から)
- 2. 土壌101(KO1区;東から)
- 3. 溝66(K区;東から)
- 図版49—1. 溝71(CH5区;北東から)
- 2. 溝72(HW3区;東から)
- 3. 溝73(HW3区;南西から)
- 図版50—1. 溝74・75(HW3区;東から)
- 2. 溝76(HW3区;南西から)
- 3. 柵列状遺構1~6(KO1区;北西から)
- 図版51—1. 柵列状遺構1~6(KO1・2区;南東から)
- 2. 柵列状遺構7(CH3区;南東から)
- 3. 柵列状遺構7(CH4区;東から)
- 図版52—1. 柵列状遺構10(CH5区;北東から)
- 2. 柵列状遺構10(CH5区;北東から)
- 3. 柵列状遺構11・12(HW3区;南から)
- 図版53—1. 柵列状遺構13(HW3区;東から)
- 2. 水田(PU1区;西から)
- 3. 水田(BU区;南から)
- 図版54—1. 水田(H18区;南西から)
- 2. 水田(KO1・2区;南東から)
- 3. 河道4上層(CH4区;北から)
- 図版55—1. 建物48・土壌墓4(CH1区;西から)
- 2. 建物49(CH1区;北から)
- 3. 建物51(HO区;北から)
- 図版56—1. 建物55(HW1区;北東から)
- 2. 建物56(HW1区;北西から)

- 3. 土墳墓 4 (CH 1 区; 北東から)
- 図版57—1. 溝91~95付近 (CH 1 区; 北西から)
- 2. 溝110~135 (KO 1・2 区; 北西から)
- 3. 溝110~135 (KO 2 区; 北から)
- 図版58—1. 柵列状遺構15 (H18区; 北東から)
- 2. 柵列状遺構15 (H18区; 北から)
- 3. 粘土採掘跡 (KO 2 区; 東から)
- 図版59 縄文晩期土器 (1)
- 図版60 縄文晩期土器 (2)
- 図版61 縄文晩期土器 (3)
- 図版62 縄文晩期土器 (4)
- 図版63 縄文晩期土器 (5)
- 図版64 縄文晩期土器 (6)
- 図版65 縄文晩期土器 (7)・弥生前期土器 (1)
- 図版66 弥生前期土器 (2)
- 図版67 弥生前期土器 (3)
- 図版68 弥生前期土器 (4)

- 図版69 弥生前期土器 (5)
- 図版70 弥生後期土器 (1)
- 図版71 弥生後期土器 (2)
- 図版72 弥生後期土器 (3)
- 図版73 弥生後期土器 (4)
- 図版74 弥生後期土器 (5)
- 図版75 弥生後期土器 (6)
- 図版76 弥生後期土器 (7)
- 図版77 須恵器
- 図版78 土師器・土製品ほか
- 図版79 石器・石製品 (1)
- 図版80 石器・石製品 (2)
- 図版81 石器・石製品 (3)
- 図版82 石器・石製品 (4)
- 図版83 木製品 (1)
- 図版84 木製品 (2)

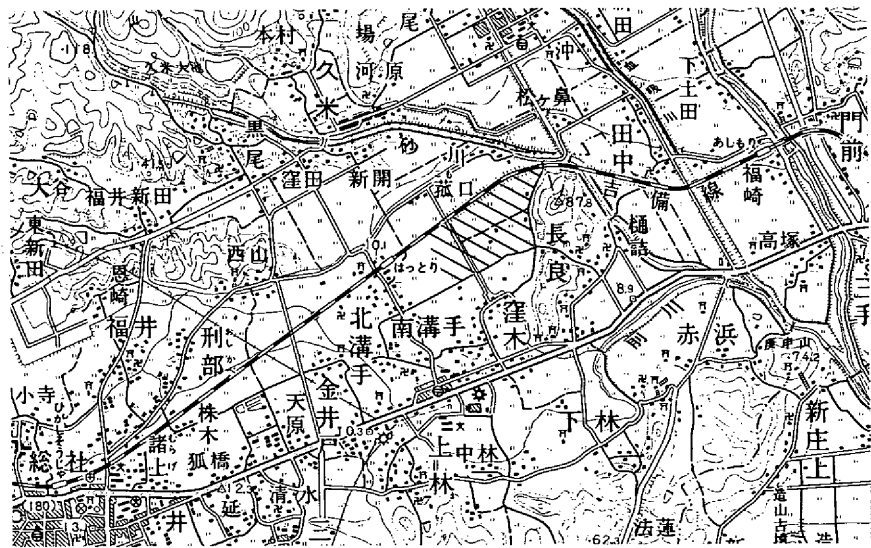
第1章 発掘調査および報告書作成の経緯

第1節 発掘調査の契機

これまで岡山県が大学教育にかかわってきたのは、岡山県立短期大学のみであり、早くから4年制大学の設立を望む県民の声があがっていた。県当局としては、1986(昭和61)年11月10日、『岡山県高等教育検討委員会(会長:小坂淳夫重井医学研究所付属病院院長)』を設置。全体会議3回、専門委員会7回の開催を経て、1987(昭和62)年12月21日、『岡山県高等教育検討委員会』から「岡山県における高等教育機関整備の基本的なあり方」についての答申があった。これをうけて、1988(昭和63)年5月、岡山県総務部に高等教育整備対策室が設置され、ここに初めて行政的窓口が開かれる。同年9月30日、『県立大学構想検討委員会(会長:高橋克明岡山大学学長)』を設置。全体会議6回、分科会14回を重ね、1989(平成元)年8月2日、『県立大学構想検討委員会』から「県立大学の基本構想について」の答申がなされた。

その建設地が総社市窪木・同南溝手にわたる水田地帯、約31haと決定したのは、1989(平成元)年12月であった。予定地は、北辺がほぼJR吉備線で、東辺が長良山、西と南は新設の道路によって、囲まれる。建設前のこの一帯は「備中国服部郷図」が今なお残る広びろとした水田地帯であり、もし備中国府関連の遺構群に当たれば保存処置に腐心せざるを得なくなるだろう、と当初から予測された。したがって1日も早く、遺跡の概要をつかむ必要があったのである。

県事業に起因する発掘調査を担う、調査第一課は、平成元年度の事業として1990(平成2)年3月1日から同月13日まで、柳瀬昭彦課長補佐を責任者とし内藤善史文化財保護主任、椿真治主事などを配して、さっそく第一次の試掘調査にとりかかった。それは、広大な敷地全域にわたって、長さ5m、幅2mの試掘坑を合計49カ所に設定して掘削し、土層関係や出土遺物を検証しながら、古地形の復元、および各時代におたる遺構の粗密関係などをとらえようとするものであった。およそ2週間で所期の目的を果たすことができた試掘調査の結果によれば、遺物の出土は、量的な多寡の違いはあってもいずれの試掘溝からも見られ、全面調査の必要があると判断された。また、幅約40mの旧河道が北西方向から東流しつつ南西方向へと走流すること、



第1図 岡山県立大学の位置(斜線部分)(1/50,000)

および北東部においてかなり広い湿地帯が形成されているらしいなど、古環境についてもある程度の所見を得た。

年度の改まった1990（平成2）年4月、高等教育整備対策室を県立大学建設準備室に改組。この年から本格調査に着手することになり、柳瀬課長補佐に加え桑田俊明、小松原基弘、川崎新太郎、横山定、竹原伸之などの調査員が配属されて、まず計画変更の少ないと思われる管理棟1,585㎡および本部棟1,906㎡と図書館1,853㎡をとりあえず本年度の調査対象地とすることに決した。しかしなおこの段階においては、全体構想についての基本設計が描かれていたとはいえ、細かな実施設計を成し遂げるまでには至っていなかったので建設計画が煮つまるにつれ、管理棟予定地が変更となり、結果的には建物の建設地にならなかった。

1990（平成2）年10月に至ってようやく実施計画が固まった。県立大学建設準備室から年度当初の計画を大幅に上回る事業計画が急にもちこまれた。それは、アトリエ棟、デザイン学部棟、情報工学部棟、学生会館、北学部共通棟、合わせて約9,100㎡もの対象地を平成2年度の第4四半期中に完掘してほしいというものであった。所長をはじめ幹部職員は、それぞれ年間事業を推進しつつある段階において突如として持ち込まれたこの要望に、一様に頭をかかえこんだことはいうまでもない。とはいえ、県立大学の建設は県政の最重点施策であり、なんとしても期待にそうべく努力するほかはない、と全体計画の見直しを図りはじめた。ところが、いずれの調査現場も一人として余分な調査員を配属しているわけがなく、思案のすえ調査員数の多い山陽自動車道関連の遺跡にかかわっていた調査第二課の職員を、配転するほかはないという結論に達し、平成3年1月の年度途中から調査員15名の大部隊を送り込む異例の処置をとらざるを得なかったのである。こうして、この最大の難局をどうにか乗り切ることができたといってよい。

年度の明けた1991（平成3）年4月1日からは、ひき続き調査第一課の重点事業の一つとして位置づけがなされ、常時10名の調査員が現地に張りつき、調査を継続する計画が立てられた。おもな調査地としては、南学部共通棟、保健福祉学部棟、短期大学部に加え、学部棟と一体的な付帯施設としてのエネルギーセンターや浄化槽のほか、やがて各建物をむすぶ共同溝と排水溝の予定地などがあがってきた。なかでも、各学部棟を連結する共同溝は、平均7mもの幅をもって延々と伸び連なるもので、調査対象地の大幅な増加をもたらした。また保健福祉学部棟は6階建てで建設工事がおよそ14～15カ月を要するとのことである。そうであれば1993（平成5）年4月1日開学を実現するには、逆算すると平成3年9月までが調査の許容限度となる。そこで、9月にもまたふたたび大きな山場を迎えたため、この年にも調査第二課からの助力をあおぐとともに総社市や北房町から専門職員の応援を求めるなどして、どうにか新たな難局を切り抜けることができた。

継続事業となった1992（平成4）年度は、別添組織表に記したとおり10名の調査員が担い、常時9名4班体制で取り組むこととなった。すでに昨年において、主要建物の敷地に関してはほぼ全体にわたって調査を完了したばかりでなく、建物間を結ぶ共同溝・排水溝の一部にも着手していたので、この年は共同溝の残部分と正面の堀割、中道川および山陰川の付け替えに伴う場所が主要な調査対象地となったほか、部室棟、プールの建設地、渡り廊下部分についての発掘調査が加わった。これら調査面積の合計は約15,000㎡。ちなみに足掛3年間にわたって実施した、この事業にかかわる発掘調査面積はおよそ60,000㎡におよぶ結果となった。

（葛原）

第2節 発掘調査の体制

岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部の建設に伴う発掘調査は、岡山県教育委員会が岡山県総務部から委託を受け、岡山県古代吉備文化財センターが平成元年度に確認調査を、そして平成2年度から4年度にかけて全面調査を実施した。

今回報告する窪木遺跡の調査については、平成2年度から平成4年度にかけて実施したものである。平成3年度の調査においては、北房町教育委員会の専門職員の応援を得た。

また発掘調査および報告書作成にあたっては、遺跡の保護・保存ならびに発掘調査にあたっての専門的な指導・助言を得るために、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた方々に「岡山県立大学建設に伴う埋蔵文化財保護対策専門委員会」の委員を委嘱した（例言参照）。

発掘調査

1989(平成元)年度

岡山県教育委員会

教育長 竹内康夫

教育次長 竹本博明

文化課

課長 鬼澤佳弘

課長代理 河野 衛

課長補佐(埋蔵文化財係長)

伊藤 晃

主 査 藤川洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 長瀬日出明

次 長 河本 清

(総務課)

課 長 竹原成信

課長補佐(総務係長) 藤本信康

(調査第一課)

(課長事務取扱) 河本 清

第一係

課長補佐(第一係長) 柳瀬昭彦

文化財保護主任 内藤善史

主 事 椿 真治

1990(平成2)年度

岡山県教育委員会

教育長 竹内康夫

教育次長 杉井道夫

文化課

課 長 鬼澤佳弘

課長代理 光吉勝彦

課長補佐(埋蔵文化財係長)

伊藤 晃

主 査 藤川洋二

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 長瀬日出明

次 長 河本 清

(総務課)

課 長 竹原成信

課長補佐(総務係長) 藤本信康

主 任 平松郁男

(調査第一課)

(課長事務取扱) 河本 清

第一係

課長補佐(第一係長) 柳瀬昭彦

文化財保護主任 桑田俊明

文化財保護主事 小松原基弘

文化財保護主事 川崎新太郎

主 事 横山 定

主 事 竹原伸之

(調査第二課)

課 長 葛原克人

第一係

文化財保護主任 光永真一

文化財保護主事 広瀬隆明

文化財保護主事 安井 悟

第二係

文化財保護主査 中野雅美

文化財保護主事 福田計治

主 事 久保恵里子

第1章 発掘調査および報告書作成の経緯

第三係
 第三係長 岡田 博
 文化財保護主査 野上和信
 文化財保護主事 栗尾昭和
 (調査第三課)
 課 長 正岡睦夫
 第一係
 文化財保護主査 江見正己

文化財保護主任 平井泰男
 文化財保護主任 川崎 肇
 文化財保護主事 平松義則
 主 事 横山伸一郎
 第二係
 文化財保護主査 岡本寛久
 文化財保護主任 吉久正見

1991(平成3)年度

岡山県教育委員会
 教育長 竹内康夫
 教育次長 森崎岩之助
 文化課
 課 長
 鬼澤佳弘(1991年12月まで)
 渡邊淳平(1992年1月から)
 課長代理 大橋義則
 課長補佐(埋蔵文化財係長)
 柳瀬昭彦
 主 査 時長 勇
 岡山県古代吉備文化財センター
 所 長 横山常實
 次 長 河本 清
 (総務課)
 課 長 藤本信康

課長補佐(総務係長) 小西親男
 主 査 平松郁男
 (調査第一課)
 課 長 葛原克人
 第一係
 課長補佐(第一係長) 松本和男
 文化財保護主任 桑田俊明
 文化財保護主任 平井泰男
 文化財保護主任 光永真一
 文化財保護主事 川崎新太郎
 文化財保護主事 大橋雅也
 文化財保護主事 柴田英樹
 主 事 久保恵里子
 主 事 守屋佳慶

1992(平成4)年度

岡山県教育委員会
 教育長 竹内康夫
 教育次長 森崎岩之助
 文化課
 課 長 渡邊淳平
 課長代理 松井新一
 課長補佐(埋蔵文化財係長)
 柳瀬昭彦
 主 査 時長 勇
 岡山県古代吉備文化財センター
 所 長 横山常實
 次 長 河本 清
 文化財保護参事 葛原克人
 (総務課)
 課 長 北原 求

課長補佐(総務係長) 小西親男
 主 査 石井 茂
 (調査第一課)
 (課長事務取扱) 葛原克人
 文化財保護主幹 松本和男
 第二係
 課長補佐(第二係長) 岡田 博
 文化財保護主任 平井泰男
 文化財保護主任 光永真一
 文化財保護主任 三上修二
 文化財保護主事 川崎新太郎
 主 事 竹原伸之
 主 事 久保恵里子
 主 事 長門 修

市町村専門職員協力者

総社市教育委員会 高田明人 前角和夫 高橋進一
 北房町教育委員会 島田宮子

発掘調査協力者

難波雅志 浜本雅樹 大谷博志 山田悌二 藤岡耕一 錦戸 正

第3節 発掘調査の経過

1. 確認調査

(1) 一次調査

岡山県立大学建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いについては、県教育委員会と県総務部との間で事前協議を重ねたが、その時点では予定敷地内の埋蔵文化財の存在は、総社市教育委員会による備中国府跡緊急確認調査で部分的に周知されていたに過ぎなかった。県教育委員会は、平成5年4月開校予定のこの事業については一連の工事工程を勘案すれば、早急に用地内の埋蔵文化財の状況を把握する必要があると判断し、協議をすすめた結果、予定用地内全域を対象にしてトレンチによる調査に入ることとなった。

調査は、現在の田面レベルから想定される旧地形を参考にして、約30～100m間隔に2×5mのトレンチを45か所設定し、人力で掘り下げる方法を取り、さらに調査の過程で補足トレンチを4か所追加し（調査面積計465㎡）、調査期間は平成2年3月2日～3月13日を要した。

調査の結果、大局的には微高地・旧河道（低位部を含む）・湿地とに3区分できる土層観察を得た。また、弥生時代前期の竪穴住居や溝などの遺構および縄文時代晩期から中・近世に至る遺物を検出することができた。

(2) 二次調査

一次調査の結果を踏まえ、基本的には校舎等の恒久構造物および工事掘削にかかる部分について調査を実施する必要があるとの結論に達し、平成2年4月から本調査を実施することとなった。調査の過程で、11月になって用地の南西部分にあたる調整池の設置設計が示されたため、掘削を伴う約2万㎡を対象にしての確認調査（二次調査）が必要になった。

この地点は、一次調査では微高地と旧河道の存在が予測されていたが、掘削予定レベルと各地点での遺跡の上面レベルとの関係をより詳細に把握する必要があると判断し、予定地に設定した10mのグリッドを基にして計51か所を調査の対象とした。トレンチは1×1.5m、深さ1m前後の最小規模にとどめ、重機を使用した。調査の期間は、平成2年11月16・17日の2日間を要した。調査の結果、旧河道は予測よりもかなり蛇行して対象地内に存在するようで、微高地はそれに分断される形で2か所に広がっていることが判明した。実施設計の掘削予定レベルは、調整池の西側（以下西区）が海拔8.85m、東側（以下東区）が同8.20mであり、断面図と照合すると、西区の西半分では包含層上面が辛うじて遺存し、同東半部では表土あるいは床土内でどうにか削平がおさまること、東区は微高地のほとんどの部分で包含層あるいは、遺構上面に削平を受けることが看取された。

県教育委員会は、以上の結果を基に最小限の掘削に留めて遺跡に影響が及ばないように、県総務部に設計変更を申し入れた。その後県総務部から、西区は西南部で海拔8.95m、中央部で同8.85m、東端部で同8.75mとして地形に沿って表土を剥ぐ程度の掘削に留め、東区は全体に30cm上げて海拔8.50m、一部南西端は同8.60mにし、調整池の容量の不足分は、東区の東側を約10m拡張することと同区南東

隅に約45×20mの集水枿（底で海拔7.20m）を設置することで解消できるという設計変更案が県教育委員会に提示された。

検討協議の結果、当初計画では約2万㎡のうち6割以上について調査の必要があったが、計画変更により東区の南西隅と集水枿設置地点が発掘調査対象とならざるを得ないものの、全体の9割近くが保存されること、これ以上の設計変更は調整池の容量基準等からしてむずかしいことなどから、この設計変更案に添って発掘調査を実施することになった。

なお、トレンチの位置図や断面図など確認調査結果の詳細については、「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100』（岡山県教育委員会 1995年刊）において報告している。（柳瀬）

2. 全面調査

全面調査は平成2（1990）年4月から平成5（1993）年3月まで実施した。調査対象地となったのは工事によって掘削される範囲で、おもに学部棟、図書館・講堂・体育館などの建物や用水路、共同溝、調整池などであった。このため調査区は、不定形なものや小面積のものも多かったし、また調査員の班編成との関係で同じ調査区を区分して調査を実施した地区もある。さらに発掘調査は建設工程とのからみで急ぐところから着手していったため、隣り合う調査区であるにもかかわらず年度を越えて調査せざるを得ない場合もあった。

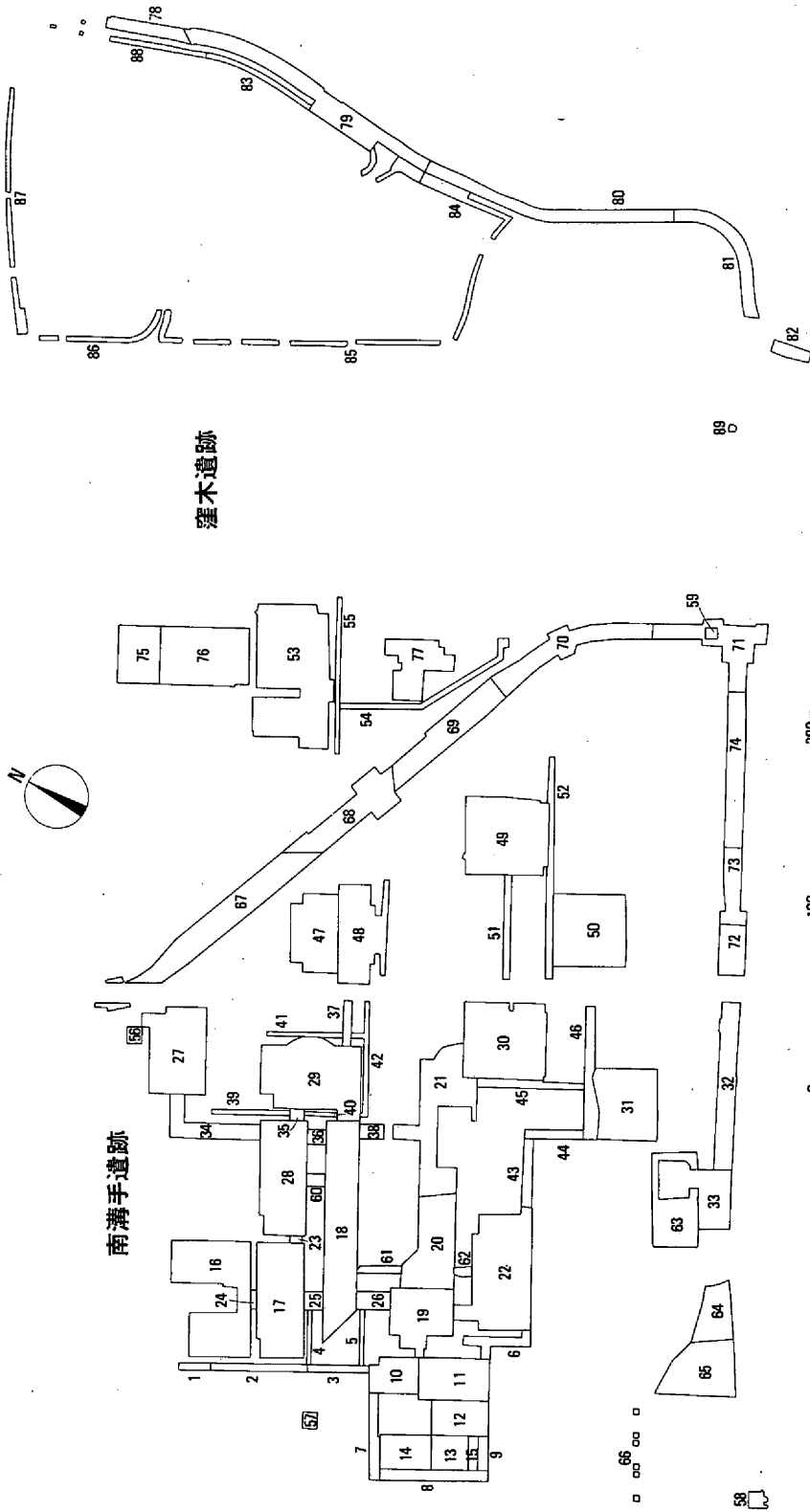
調査区の名称についてはそれぞれの工事原因名の頭文字をアルファベットで表記することにし、全体の調査区の位置および調査区名については、第2・3図に示した。また、各調査区の調査期間および面積については第2表に示した。なお、各調査区に対応する遺跡名については、現在の用地内における行政区名称に従い、南溝手遺跡と窪木遺跡の二つの名称となっている（第2図）。

発掘調査は国土座標に沿った形で基準杭を設定して行なったが、全体のグリッド割りは調査時点では実施しなかった。

また、現耕作土および近世水田層までは重機によって除去したほか、その後も深い河道の調査においては重機を使用して対応した。

発掘調査を開始した平成2年度の段階では、実施設計がなお十分に煮詰まっていなかったが、まず調査員5名の1班編成で着手した。最初に調査に入ったのは管理棟予定地（K区）であった。この調査区は調査終了間近に設計変更となり、調査はその時点で終え保存措置を行なった。その後本部棟（HO区）、図書館（TO区）の調査を進めた。ところが、平成2年10月になって、実施設計がほぼ固まるとともに開学が平成5年4月に決定されたのに伴い、建設工事期間を差し引いた発掘調査期間が決定され、アトリエ棟（AT区）やデザイン学部棟（DE区）、情報工学部棟（JY区）など主要な学部棟を含む緊急を要する調査区（約9,100㎡）が設定された。そのため急遽平成3年1月から3月までは調査員を増員し、21名による7班体制で調査終了を目指して懸命の努力を払った。DE区で弥生時代前期の住居跡から管玉の未製品や玉砥石が出土したのはこの時期である。

平成3年4月からは新しい調査員10名と北房町教育委員会の専門職員1名（6月まで）の4班体制で、各建物を結ぶ共同溝や排水路などの調査区が発掘調査を開始した。しかしその後、6階建てが計画された保健福祉学部棟（HF区）や短期大学部棟（TD区）など工事を急がざるを得ない調査区が設定されたため、これまた総社市教育委員会の専門職員3名の応援を受けるなどして、7月から9月まで6班体制でエネルギーセンター（EN区）、講堂（KO区）、あるいは浄化槽（JO区）などの調



- | | | | | | |
|-----------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|---------------------|
| 1~5. H1~5 (排水路) | 19~21. KY1~3 (共通棟南) | 31. JO (浄化槽) | 49. HO (本部棟) | 59. ZC1 (暫定沈砂池) | 72~74. HW1~3 (掘割) |
| 6. H10 (排水路) | 22. HF (保健福祉学部棟) | 32~33. YO1・2 (余水吐) | 50. K (管理棟予定地) | 60. WR・E (渡り廊下) | 75. PU1 (プール) |
| 7~9. H11~13 (排水路) | 23~26. K6~9 (共通溝) | 34~38. K1~5 (共同溝) | 51. K10 (共同溝) | 61. WR・A (渡り廊下) | 76. PU2・3 (プール) |
| 10~15. TD1~6 (短期大学部棟) | 27. EN (エネルギーセンター) | 39~42. H6~9 (排水路) | 52. H20 (排水路) | 62. WR・C (渡り廊下) | 77. BU (部室棟) |
| 16. AT (アトリエ棟) | 28. JY (情報工学部棟) | 43. H14 (排水路) | 53. TA (体育館) | 63~65. NC1~3 (西調整池) | 78~82. YA1~5 (山陰川) |
| 17. DE (デザイン学部棟) | 29. FU (学生会館) | 44~46. H15~17 (排水路) | 54~55. H18・19 (排水路) | 66. TE (テニスコート) | 83~88. HC1~6 (東調整池) |
| 18. IN (共通棟北) | 30. TO (図書館) | 47~48. KO1・2 (講堂) | 56~58. BO1~3 (防火水槽) | 67~71. CH1~5 (中道川) | 89. YK (野球場) |

1~46, 56~58, 60~66は南溝手遺跡 47~55, 59, 67~89は窪木遺跡

第2図 全調査区配置図(1) (1/4,000)

第1章 発掘調査および報告書作成の経緯

査を実施していった。H15区から縄文時代後期後葉の靱痕土器が出土したのはこの時期である。

平成4年に入ると、西調整池（NC区）の調査に入ることとなった。この部分は遺跡内で最も遺構密度の高い地区であったが、他調査区からの応援を得て、平成4年3月にはほぼ完了することができた。この時期の調査においてNC3区では縄文時代後期中葉の土器がまとまって出土し、のちの土器胎土分析によってイネのプラント・オパールが検出された。なおNC3区のトレンチ調査で検出した縄文時代後期の集石遺構などについては、工事の影響がなくなったため図面作成、写真撮影等を実施したのち、砂によって被覆し現状凍結を図った。3月22日にはそれまでに出土したおもな遺物や、調査中であったNC区とJO区を中心とした現地説明会を開催し、約100名の人々が見学に訪れた。

平成4年4月からは、常時9名の4班を編成して発掘調査を開始した。おもな調査対象地となったのは用地内のほぼ中央を流れていた中道川の改修工事（CH区）や堀割水路（HW区）、部室棟（BU区）などに伴う調査区であった。HW区では縄文時代晩期後葉の丹塗り磨研の壺や鉢、弥生時代後期の家屋線刻絵画土器が出土し注目された。平成4年の後半は、発掘調査も大詰めに近づき、おもに用地の東に位置する山陰川の改修工事（YA区）や東調整池（HC区）とプール（PU区）の調査を行なった。この地区では、それまで少なかった奈良・平安時代の遺構や遺物が多く検出された。

こうして、平成4年12月をもってほとんどの調査区の発掘調査を終了させることができた。その後平成5年3月にはテニスコート部分の調査を2週間実施し、すべての発掘調査が完了した。

発掘調査に関わる埋蔵文化財保護対策委員会は平成2年度に3回、平成3年度に4回、平成4年度に3回開催し、その都度貴重なご助言を賜った。 (平井)

調査区	調査期間	面積(m ²)	調査区	調査期間	面積(m ²)
K (管理棟予定地)	900416~900713	1,600	H20 (排水路)	911025~911209	480
HO (本部棟)	900716~901127	1,906	NC 3 (西調整池)	920105~920331	1,063
TO (図書館)	901001~910116	1,902	TD 4・5 (短期大学部棟)	910812~911025	912
TA (体育館)	910107~910331	2,977	H11~13 (排水路)	910701~910911	751
AT (アトリエ棟)	910107~910703	2,576	TD 6 (短期大学部棟)	910906~910918	97
DE (デザイン学部棟)	910107~910331	1,647	CH 1 (中道川)	920401~920706	1,681
FU (学生会館)	910107~910331	1,983	BU (部室棟)	920606~921009	814
JY (情報工学部棟)	910107~910331	1,683	HC 3 (東調整池)	920916~921211	596
IN (共通棟北)	910107~910331	2,077	HC 4 (東調整池)	920916~921211	212
YO 2 (余水吐)	910404~911015	972	HC 5 (東調整池)	920916~921211	430
HF (保健福祉学部棟)	910606~910920	2,106	NC 2 (西調整池)	920401~920408	300
BO 1 (防火水槽)	911011~911025	79	HW 2 (堀割)	920409~920618	434
H14 (排水路)	911015~911022	200	HW 3 (堀割)	920506~920618	870
H18・19 (排水路)	911018~911216	559	YA 1 (山陰川)	921001~921211	333
CH 3 (中道川)	911210~920311	1,024	YA 2 A (山陰川)	920715~921211	747
YO 1 (余水吐)	910404~910704	925	YA 2 B (山陰川)	920618~920714	716
BO 3 (防火水槽)	910512~910627	78	HC 1 A (東調整池)	920928~921211	189
ZC 1 (暫定沈砂池)	910706~910711	43	HC 1 B (東調整池)	920715~920805	46
KY 2・3 (共通棟南)	910702~911022	2,802	HC 2 A (東調整池)	920715~920828	148
H15~17 (排水路)	911023~911213	863	HC 6 (東調整池)	921001~921211	172
NC 1 (西調整池)	911215~920331	898	CH 2 (中道川)	920401~920527	976
K 6~9 (共同溝)	910404~910513	349	CH 4 (中道川)	920513~920704	985
H 1~5 (排水路)	910510~910624	593	CH 5 (中道川)	920706~920930	945
BO 2 (防火水槽)	910512~910612	79	PU 2・3 (プール)	921001~921211	1,530
KY 1 (共通棟南)	910621~910904	1,020	HW 1 (堀割)	920401~920507	420
EN (エネルギーセンター)	910905~911116	1,490	YA 3 (山陰川)	920609~921021	1,060
KO 2 (講堂)	911115~920312	1,274	YA 4 (山陰川)	920910~921013	530
KO 1 (講堂)	911204~920331	774	YA 5 (山陰川)	921007~921021	146
K 1~5 (共同溝)	910404~910612	956	HC 2 B (東調整池)	920728~920904	265
H 6~9 (排水路)	910516~910619	493	YK (野球場)	921126~921210	15
TD 1~3 (短期大学部棟)	910604~911011	2,017	PU 1 (プール)	921013~921209	770
JO (浄化槽)	911009~920313	1,284	TE 1~6 (テニスコート)	921203~921210	54
NC 2 (西調整池)	920124~920331	509	WR-A (渡り廊下)	920508~920515	103
H10 (排水路)	910701~910812	249	WR-C (渡り廊下)	920508~920515	58
K10 (共同溝)	911025~911210	180	WR-E (渡り廊下)	920508~920515	72

第2表 全調査区一覧表 (南溝手遺跡・窪木遺跡)

第4節 報告書の作成

報告書の作成は、全調査区を4年次にわけて行なうこととし、すでに平成6（1994）年度に第1分冊である『南溝手遺跡1』を刊行した。ついで平成7（1995）年度に第2分冊として『南溝手遺跡2』を刊行し、県立大学キャンパスの西半分の南溝手遺跡の発掘調査報告が完結した。

今回報告する第3分冊は、県立大学キャンパスの東半分の『窪木遺跡1』である。整理作業については、岡田 博、光永真一の2名で、平成7（1995）年度に実施した。総面積は19,881㎡で、発掘調査時の遺構総数約576、出土遺物は約425箱であった。

出土遺物の水洗・注記は発掘調査時にすでに終了しており、平成6年4月からはただちに土器の復元作業を行い、実測土器の選定抽出を行なった。復元作業と平行して石器・土製品などの抽出も行い台帳の作成や実測の必要なものの選定を行なった。このようにして選定した遺物については、土器が1,800点、石器210点、土製品・金属器・木器約80点などの実測を行なうことができた。出来上がった実測図については、担当者が入念な検討を加え、編集段階で一部割愛したため報告書に掲載できた土器は1,559点、石器・石製品は174点、土製品11点、金属器（鉄器・銅器）は10点、木器51点である。

遺構については、担当者2名が調査区を分担して図面整理を行い、トレースについては担当者および補助員が行なった。

編集作業においては、まず遺構・遺物の説明を時代ごとに節を分けて行なうこととした。章立てについては、基本的に『南溝手遺跡1・2』に準拠することとした。しかしながら、今回の調査区にお

調査区分	調査期間	面積㎡	担当者
K（管理棟予定地）	1990. 4.16～1990. 7.13	1,600	柳瀬・桑田・川崎・横山・竹原
HO（本部棟）	1990. 7.16～1990.11.27	1,906	柳瀬・桑田・川崎・横山・竹原
TA（体育館）	1991. 1. 7～1991. 3.31	2,977	柳瀬・岡本・桑田・川崎・小松原
H18・19（排水路）	1991.10.18～1991.12.16	559	松本・柴田・竹原
CH3（中道川）	1991.12.10～1992. 3.31	1,024	柴田・竹原
KO2（講堂）	1991. 1.15～1992. 3.12	774	光永・川崎
KO1（講堂）	1991. 2. 4～1992. 3.31	956	葛原・光永・川崎・久保
K10（共同溝）	1991.10.25～1991.12.10	180	葛原・久保
H20（排水路）	1991.10.25～1991.12. 9	480	葛原・久保
CH1（中道川）	1992. 4. 1～1992. 7. 6	1,681	岡田・竹原
BU（部室棟）	1992. 6. 6～1992.10. 9	814	岡田・竹原
HW2（堀割）	1992. 4. 9～1992. 6.18	434	平井・三上
HW3（堀割）	1992. 5. 6～1992. 6.18	870	平井・三上
CH2（中道川）	1992. 4. 1～1992. 5.27	976	光永・長門
CH4（中道川）	1992. 5.13～1992. 7. 4	985	光永・長門
CH5（中道川）	1992. 7. 6～1992. 9.30	945	光永・長門
PU2・3（プール）	1992.10. 1～1992.12.11	1,530	松本・長門
HW1（堀割）	1992. 4. 1～1992. 5. 7	420	葛原・川崎・久保
PU1（プール）	1992.10.13～1992.12. 9	770	葛原・川崎・久保

第3表 第3分冊掲載対象調査区一覧

第1章 発掘調査および報告書作成の経緯

いては、弥生時代から古墳時代にまで継続する河道などの遺構や、古墳時代から古代あるいは、中世から近世と明確な区分ができない遺構があり、その取り扱いには苦慮したが、遺物の区分により両方に記述した遺構もある。

遺物のうち土器・石器・木器・ガラス玉については観察表を作成した。そのため本文中ではこれらの説明を省略したところも少なくない。また、『南溝手遺跡1・2』では本文中に観察表を掲載していたがレイアウト作業がきわめて煩雑になるため、今回から巻末に一括収載することとした。

土器観察表はスペースの関係から十分なものにはなっていないが、特徴欄における記載のうち、縄文時代の巻貝はヘナタリ貝あるいはカワアイ貝を想定しており、アルカ属貝条痕としているのは貝の特定はできないが、ハイガイなどのアルカ属に属する二枚貝による条痕を指している。また、ケズリの原体は不明ながらも砂粒の動きが観察できたもので、通常ヘラケズリとされている調整である。ミガキは通常ヘラミガキと呼称されている調整で、ハケメは板材による線条痕を指している。板ナデはハケメほど顕著ではないが、板材でナデたような条痕が観察されたものである。

色調については、外面の色調のみを記載している。土器によっては複数の色調をもつものもあったが、主要な色調のみを記載した。胎土については記載していないが、基本的には長石・石英・雲母といった花崗岩起源の砂礫を含んでおり、特徴的な胎土をもつ土器については、備考欄に記載するようにした。

報告書に関わる自然遺物や金属・ガラス製品の鑑定・分析については、例言に記載した諸氏、機関に依頼し、その一部については付載に報文を掲載させて頂いた。

文章の執筆については、基本的に発掘調査担当者が分担し、文責は文末に記載した。

報告書の作成にあたっては下記の方々の援助を受けた。ここに氏名を記し深謝の意を表する次第である。

(岡田)

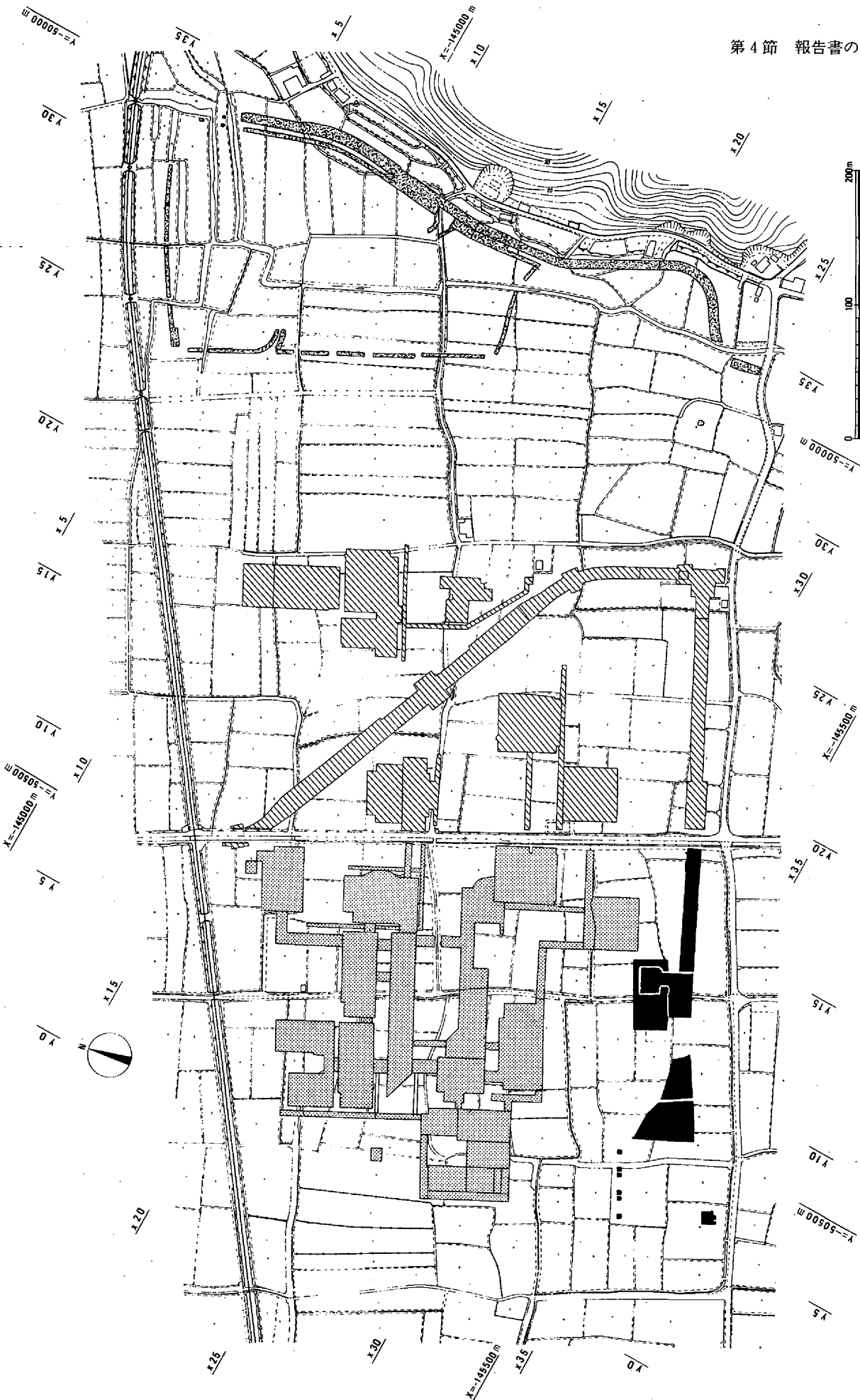
報告書作成協力者

阿部 典子	荒木 孝子	石戸 宏美	板野 佳子	遠藤七都子	大西 信子
片山 典子	川上 陽子	熊代千津子	甲坂めぐみ	河内 一美	斉藤 直子
田中 淑子	坪井 婦美	中野 晴美	芳谷 綾子	平田 純子	松野 千里
三垣佐知子	虫明佐枝美	森田 洋子	山形 五美	横溝 節子	

報告書作成体制

1993(平成5)年度

岡山県教育委員会		主 査	時長 勇
教育長	森崎岩之助	岡山県古代吉備文化財センター	
教育次長	岸本憲二	所 長	横山常實
文化課		次 長	葛原克人
課 長	渡邊淳平	(総務課)	
課長代理	松井新一	課 長	北原 求
課長補佐(埋蔵文化財係長)		課長補佐(総務係長)	小西親男
	高畑知功	主 査	石井 茂



■ 第1分冊 ▨ 第2分冊 ▩ 第3分冊 □ 第4分冊

第3図 全調査区配置図(2) (1/4,000)

第1章 発掘調査および報告書作成の経緯

主 査 石井善晴
 (調査第一課)
 課 長 正岡睦夫
 課長補佐(第三係長)岡田 博

文化財保護主査 平井泰男 (報告書作成担当)
 文化財保護主事 川崎新太郎(")
 文化財保護主事 久保恵里子(")

1994(平成6)年度

岡山県教育委員会

教育長 森崎岩之助
 教育次長 岸本憲二
 文化課
 課 長 渡邊淳平
 課長代理 松井新一
 課長補佐(埋蔵文化財係長)
 高畑知功
 主 任 若林一憲
 岡山県古代吉備文化財センター
 所 長 河本 清

次 長 葛原克人
 (総務課)
 課 長 丸尾洋幸
 課長補佐(総務係長) 杉田卓美
 主 査 石井善晴
 (調査第一課)
 課 長 正岡睦夫
 課長補佐(第三係長) 岡田 博
 文化財保護主査 平井泰男 (報告書作成担当)
 文化財保護主事 久保恵里子(")
 主 事 澁田東美 (")

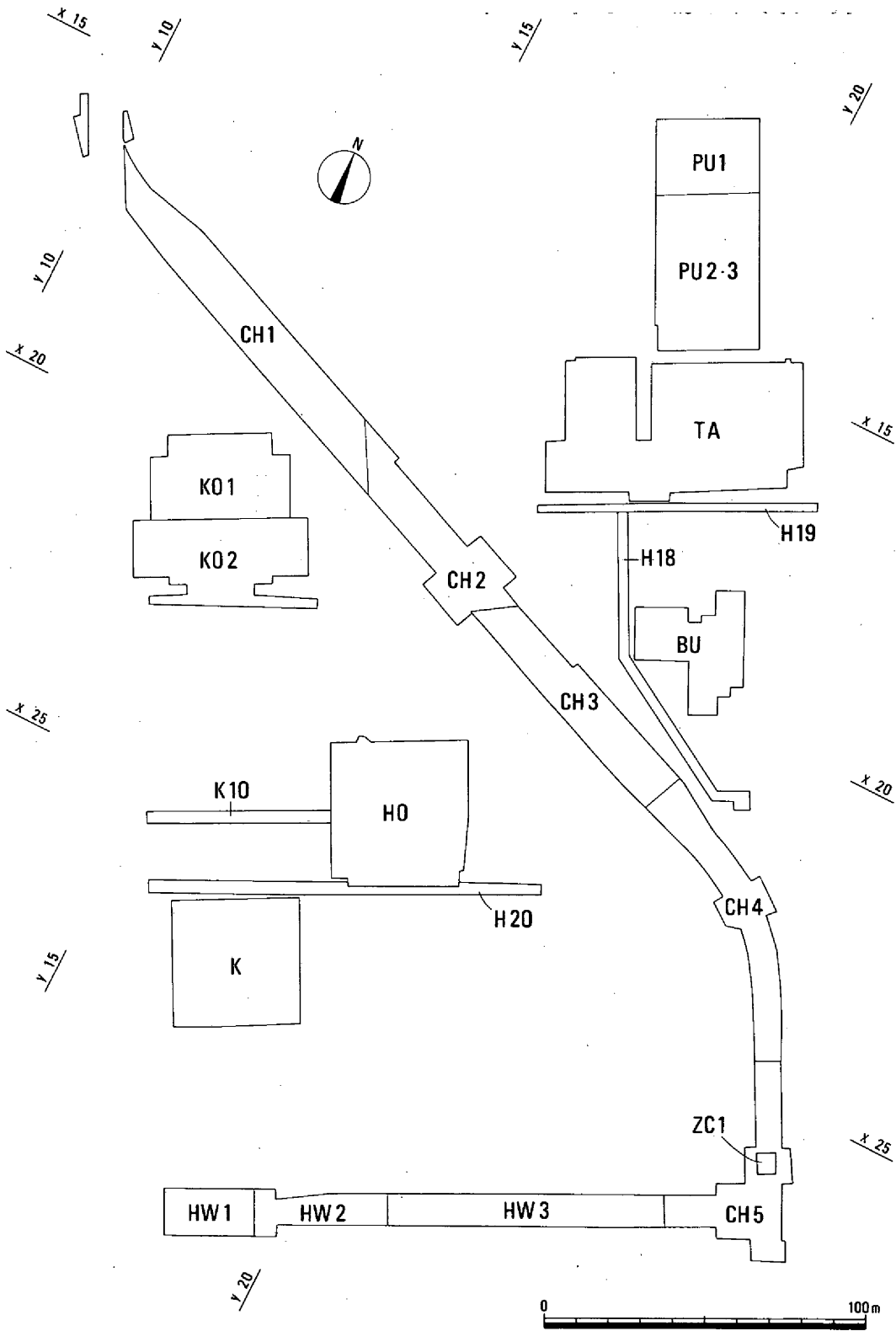
1995(平成7)年度

岡山県教育委員会

教育長 森崎岩之助
 教育次長 黒瀬定生
 文化課
 課 長 大場 淳
 課長代理 樋本俊二
 参 事 葛原克人
 課長補佐(埋蔵文化財係長)
 高畑知功
 主 任 若林一憲

岡山県古代吉備文化財センター

所 長 河本 清
 次 長 高塚恵明
 (総務課)
 課 長 丸尾洋幸
 課長補佐(総務係長) 井戸丈二
 主 査 石井善晴
 (調査第一課)
 課 長 正岡睦夫
 課長補佐(第二係長) 岡田 博(報告書作成担当)
 文化財保護主査 光永真一(")



第4図 『窪木遺跡1』調査区名およびグリッド設定図 (1/1,500)

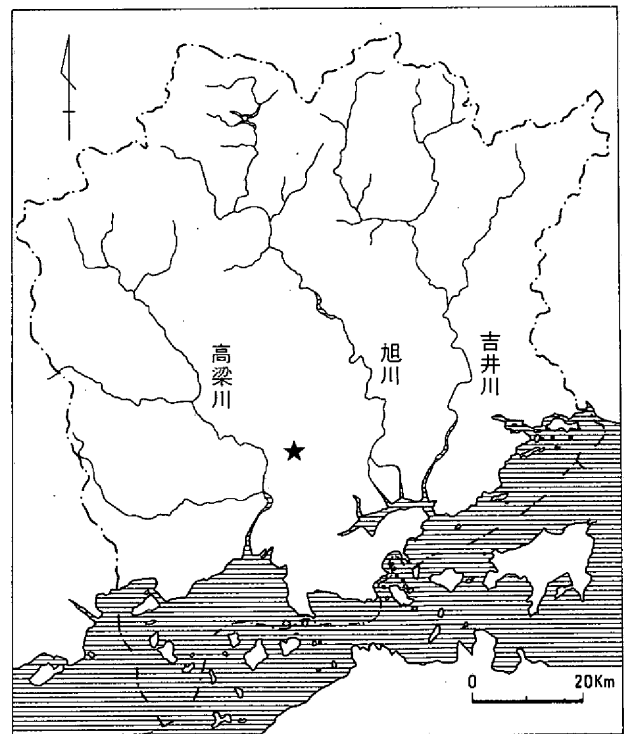
第2章 遺跡の位置と環境

窪木遺跡は、南縁を都窪丘陵などの低位丘陵、北縁を吉備高原南端の山地に挟まれた東西に細長い総社平野の東半部に位置する。当遺跡は、南溝手遺跡⁽¹⁾と同一集落と考えられ、遺跡の範囲は南北約0.5 km、東西約1 kmにおよび、幾つかの微高地部と低位部で構成されている。総社平野はもとは高梁川の乱流による氾濫原と考えられており、発掘調査や現在の地形に残された痕跡から旧地形の復原も成されている。旧河道のひとつ、現在の前川にその名残をとどめる流れは、「備中国風土記」逸文の「宮瀬川」に比定され、古代の郡境にあたると考えられている⁽²⁾。この宮瀬川より南は窪屋郡、北は賀陽郡となり、当遺跡は古代の律令行政区画でいうところの賀陽郡に包括される。

さて、海浜部からやや奥まったこの平野に至るには、高梁川・足守川を北上する川沿いのルートや南部の丘陵の谷あい抜けるルートが考えられるが、これらのルート沿いには著名な弥生墳丘墓や古墳、古代寺院などが数多く分布している。丘陵越えのルートのひとつに水別峠越えがあり、峠を北に抜けると古代の官道山陽道と交差する。この付近には作山古墳や宿寺山古墳などの大前方後円墳やこうもり塚古墳・緑山8号墳・江崎古墳といった巨石墳が築かれ、備中国分寺・備中国分尼寺が建立されている。さらに三須と上林の間を北へ抜けると総社平野中央部に至るが、そこは現在残る「北国府」「南国府」などの地名から備中国府推定地の最有力候補とされている⁽³⁾。南溝手・窪木遺跡はこの備中国府推定地に隣接しており、古代吉備政権の中核の一画に位置しているといえよう。鬼ノ城はこの中核域を見下ろす背後の山上に位置している。

総社平野における集落址の調査から当遺跡周辺の歴史をふりかえると、総社平野周辺で現在確認されている旧石器時代の遺跡としては、高梁川をのぞむ北縁の丘陵上に位置している浅尾遺跡⁽⁴⁾・宝福寺裏山遺跡⁽⁵⁾が著名であるが、造山古墳の東側にある独立小丘陵上でもナイフ形石器が数点出土している⁽⁶⁾。当遺跡の南約1 kmに位置する窪木薬師遺跡⁽⁷⁾では旧石器時代のナイフ形石器が包含層中より出土しているが、これは平野内に人々が既に居住していたのではなく、近隣の丘陵上や台地上に遺跡が存在し、そこから流れ込んできたと考えられている。

平野内では、真壁遺跡⁽⁸⁾から縄文時代早期の遺物が出土しており、早いところではこの期に微高地の形成が始まっていたことを示唆している。しかし、ほかには長良山斜面から押型文土器片が出土している⁽⁹⁾のみで、平野部に



第5図 遺跡位置図



●墳墓 ■集落跡 ▲窯跡 □寺院跡 — — —古墳群（「岡山市遺跡分布図」および岡山県遺跡地図」に準じる）

1. 窪木遺跡 2. 南溝手遺跡 3. 窪木宮後遺跡 4. 長良山遺跡 5. 深町遺跡 6. 栢寺廃寺 7. 備中国府推定地 8. 金井戸新田遺跡 9. 北溝手遺跡 10. 服部遺跡 11. 西山遺跡・西山古墳群 12. 中山遺跡・中山古墳群 13. 奥ヶ谷窯跡 14. 福井大塚古墳群 15. 金黒池遺跡 16. 新山廃寺 17. 鬼ノ城 18. 千引遺跡 19. 千引かなくろ谷遺跡 20. 随庵古墳 21. 余町遺跡 22. 足守庄関連遺跡 23. 南坂遺跡 24. 南坂2号墳 25. 上土田4号墳 26. 上土田1号墳 27. 延寿寺 28. 鶴免遺跡 29. 生石神社境内弥生墳丘墓 30. 高松田中遺跡 31. すりばち池古墳群 32. 尼子山古墳 33. 西山遺跡群弥生遺跡 34. 明神遺跡 35. 宮後遺跡 36. 浅尾遺跡 37. 西三軒屋遺跡 38. 樋本遺跡 39. 三軒屋遺跡 40. 屋毛手遺跡 41. 惣善寺遺跡 42. 真壁遺跡 43. 三手遺跡 44. 高塚遺跡 45. 庚申山遺跡 46. 折敷山遺跡・折敷山古墳 47. 小造山古墳 48. 夫婦塚古墳 49. 翁塚古墳 50. 鶴亀遺跡 51. 窪木薬師遺跡 52. 中林遺跡 53. 亀山下遺跡 54. 亀山塚 55. 山屋敷遺跡 56. 金井戸・見延遺跡 57. 緑山8号墳 58. 緑山17号墳 59. 三須畠田遺跡 60. 美野田遺跡 61. 天満遺跡 62. 三須廃寺 63. 清水角遺跡 64. 作山古墳 65. 山津田遺跡 66. 江崎古墳 67. 備中国分寺 68. こうもり塚古墳 69. 備中国分尼寺 70. 法蓮23号墳 71. 新池大塚古墳 72. 造山古墳 73. 榊山古墳 74. 千足古墳 75. 造山古墳付6号墳 76. 矢部堀越貝塚

第6図 周辺主要遺跡分布図 (1/40,000)

立地する遺跡の動向から、微高地が安定した居住域となるのは縄文時代後期以降のようである。真壁遺跡の南に位置する三軒屋遺跡⁽¹⁰⁾では中期から晩期の、屋毛手遺跡⁽¹¹⁾・惣善寺遺跡⁽¹²⁾では後・晩期の遺構や遺物が検出されている。また、南溝手遺跡から出土した石器群や後期中葉の土器から検出されたイネのプラント・オパール⁽¹³⁾が示唆するように、沖積平野への進出が稲作の導入といった生活基盤の変化に密接に結びついているのではないかと考えられる。

弥生時代前期になると、真壁遺跡のほか足守庄関連遺跡⁽¹⁴⁾や山津田遺跡⁽¹⁵⁾など広範囲に遺跡が散見され、沖積平野の安定と微高地の拡大をうかがい知ることができる。当遺跡では前期最古段階の遺構が多数確認されており、県下における弥生時代の始まりや編年を考える上で新しい知見を与えている。また南溝手遺跡では弥生時代前期の「松菊里型」住居や玉作り、中期のガラス滓などにみられるように⁽¹⁶⁾積極的に新技術を導入しており、いちはやく対外的に開けた地域であったと推察される。

前期以降平野部の集落はさらに展開をみせ、多くは弥生時代中期後半から後期前半にかけて最盛期を迎えている。そうした中のひとつが、後期後半には墳丘墓を築き、古墳時代にいたっては大前方後円墳や巨石墳の造営主体となる一大勢力へ発展していったと考えられる。しかし、総社平野内に高塚遺跡⁽¹⁷⁾や津寺遺跡⁽¹⁸⁾、足守川加茂・矢部南向遺跡⁽¹⁹⁾といった大集落に匹敵するような集落は確認されておらず、実態は不明な点が多い。

古墳時代の集落についても不明な点が多いが、近年の総社市教育委員会の調査などでその実態が明らかにされつつある⁽²⁰⁾。なかでも、後期になって集落遺跡が急速に増加したことは従来から指摘されているが、鉄生産の伸展がその背景のひとつとして考えられている。実際、平野部の窪木薬師遺跡で5世紀前半から7世紀前葉にかけての鍛冶集団の居住した集落が確認されており、丘陵・山地では千引かなぐろ谷⁽²¹⁾といった6世紀後半に遡る製鉄遺跡が存在し、また随庵古墳のように鍛冶道具一式を副葬する古墳が築かれるなど、鉄生産や鉄器製作と関連深い遺跡が多く存在している。加えて、亀山下遺跡⁽²²⁾といった須恵器工人集落と考えられる遺跡の存在や、TK73型式に先行する奥ヶ谷窯跡⁽²³⁾が築かれるなど、農耕に依拠するだけでなく、鉄生産や須恵器製作など当時の先端技術のいちはやい導入と展開がこの地の経済基盤の一端を支え、さらには後の吉備政権をになう勢力を支えていったと考えられる。

古代には、先に述べたように、備中国賀陽郡に属し、備中国府域の最有力地や白鳳期創建の栢寺廃寺⁽²⁴⁾に隣接している。当遺跡の長良山山際の調査区の一部では奈良および平安期の建物群や緑釉、灰釉、陶馬、陶硯などが出土しており、官衙に付随する施設と考えられる⁽²⁵⁾。しかし、平地部では溝や柵列および水田で占められており、後世の削平も考慮に入れなければならないが、すでにこの一帯が耕地として利用されていた可能性を示唆している。また、国府域の研究はおもに文献資料に残された地名の比定から進められてきたが、総社市教育委員会によって実施された国府推定域内の調査においても国府の存在を示す物証がなく、いまだ明らかとなっていない。一方、推定地に南接する金井戸・見延遺跡⁽²⁶⁾や、約4 km西方にある宮後遺跡⁽²⁷⁾からは奈良期の遺構や遺物が検出されており、大きく視点を変えてみなければならないのかもしれない。

当遺跡周辺は条里区画の残る地域としても古くから注目されているが、平野東端に位置する足守庄関連遺跡では、平安時代には条里に基づく地割と水田の再開発が施行されたことが確認されている。当地と足守地域は、郷は違うが条里方向の同一性や足守地域を本拠地とする賀陽氏が栢寺廃寺の地に賀陽地門満寺を再建するなど深い関りのある地である。当遺跡の平安時代の溝の一部で、その掘削方向が、地形に沿って弧を描くものから現在の地割りと合致する方向に変化していることが確認されて

おり、足守地域と同じ頃条里に編入された可能性が高い。

古代から中世における集落の調査例としては平安時代末から中世にかけての鍛冶関連遺構が検出された榎本遺跡³¹⁾や屋敷地と考えられる真壁遺跡³²⁾、中林遺跡³³⁾、金井戸新田遺跡³⁴⁾、清水角遺跡³⁵⁾などがある。当遺跡においても屋敷地や土墳墓が検出されているが大部分は水田域である。「備中国賀夜郡服部郷」³⁶⁾では当遺跡周辺は田畑として利用されていた事がうかがえるが、周辺遺跡の調査成果や南溝手遺跡および当遺跡の調査地全面に中世以降水田層が継続的に堆積していることから、遅くとも中世には平野内の大部分が水田化され、現在と変わらぬ景観を呈していたと推察される。(久保)

註

- (1) 「南溝手遺跡1・2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100・107 岡山県教育委員会 1995・1996
- (2) 葛原克人「吉備豪族の誕生」『歴史手帖』4巻6号 名著出版 1976
「三須・畠田遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』2 総社市教育委員会 1993
- (3) 「備中国府跡 緊急確認調査」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』7 総社市教育委員会 1989
- (4) 「浅尾遺跡」『総社市史』考古資料編 総社市史編纂委員会 1987
- (5) 間壁茂子「高梁川下流域の無土器時代遺跡」『倉敷考古館集報』第2号 1967
「宝福寺裏山遺跡」『総社市史』考古資料編 総社市史編纂委員会 1987
- (6) 黒住・雲山遺跡、甫崎天神山遺跡など「山陽自動車道建設に伴う発掘調査8」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89 1994
- (7) 「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86 岡山県教育委員会 1993
- (8) 「真壁遺跡」『総社市史』考古資料編 総社市史編纂委員会 1987
- (9) 「長良遺跡」『総社市史』考古資料編 総社市史編纂委員会 1987
- (10)~(12) 「駅南区画整理事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』5 総社市教育委員会 1985
- (13) 「南溝手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107 岡山県教育委員会 1996
- (14) 『足守庄(足守幼稚園)関連遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会 1994
- (15) 「山津田遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』1 総社市教育委員会 1984
- (16) 「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100 岡山県教育委員会 1995
- (17)・(18) 「山陽自動車道建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』19~21 岡山県教育委員会 1989~1991
- (19) 「足守川加茂A遺跡・足守川加茂B遺跡・足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94 岡山県教育委員会 1995
- (20) 鶴免遺跡、鶴亀遺跡、金井戸新田遺跡、中林遺跡など
- (21) 「三須・畠田遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』2 総社市教育委員会 1993
- (22) 「鬼ノ城ゴルフクラブ造成に伴う発掘調査概報」『総社市埋蔵文化財調査年報』1 総社市教育委員会 1991年
- (23) 『随庵古墳』総社市教育委員会 1965
- (24) 「前川地区ほ場整備事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』4 総社市教育委員会 1994
- (25) 「中国横断自動車道建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』24 岡山県教育委員会 199
- (26) (3)に同じ。国府城の比定については第2章第2節に簡潔にまとめられている。
- (27) 「栢寺廃寺緊急発掘調査報告書」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』34 岡山県教育委員会
- (28) 来年度刊行予定の「窪木遺跡2」に収載
- (29) 国道429号線改良工事に伴う発掘調査を岡山県古代吉備文化財センターで1992年度から断続的に継続中。金井戸・見延遺跡はその一部で、調査成果については担当者から教示を得た。
- (30) 総社市教育委員会からの御教示による。
- (31) 「榎本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』65 岡山県教育委員会 1987
- (32) 「平成4年度ほ場整備事業に伴う発掘調査の概要」『総社市埋蔵文化財調査年報』3 総社市教育委員会 1994
- (33) 「金井戸新田遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』3 総社市教育委員会 1994
- (34) 「清水角遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』1 総社市教育委員会 1984
- (35) 高重進「中世村落の復元—服部郷図による農業経営の分析—」『史学研究』第73号 史学研究会1959

第3章 発掘調査の概要

第1節 調査区の概要

当該地の発掘調査着手前の状況は、南溝手遺跡と同様水田・畑地などであった。現耕作土直下には20cm前後の厚さの近世～近代に比定される水田層が、全体にわたって堆積していた。この近世の水田層を除去した段階で、調査区によっては中世あるいは、古墳～弥生時代の遺構面が検出された。微高地部分は、縄文時代晩期以降の基盤層である黄色土面に到達し、その面がおもに各時期の主要な遺構検出面となる。地形的には、南溝手遺跡で確かめられた第3低位部（北）の東縁部がKO1・2区に現われる以外は、第3微高地が広がっている。HW2・3区では河道が検出され、これらの複雑な流路の一部が確かめられている。

縄文時代の遺構・遺物が検出された調査区としては、北東に位置するPU区、一部南溝手遺跡にかかる、北西に位置するCH1区がある。前者では、全面にわたって小ピット群が検出されたほか少数の土壌も確認されている。地形的には北方向に低くなる傾向が認められている。後者では、微高地部分で縄文時代晩期中葉の土器溜りが検出され、竪穴住居の痕跡もしくは至近に位置すると想定される遺構・遺物の検出状態に注目される。KO1・2区では、低位部の東側の微高地部分で土壌・火処も検出されている。CH4区でも火処が検出されているので、本来は微高地の広範な範囲に縄文時代の集落が存在した可能性を示唆している。HW2・3区では前述のように河道が検出されており、発掘調査面積は比較的狭小であるが、多量の縄文土器が出土している。

弥生時代の遺構は、前期に比定されるものは今回の報告書に収載する窪木遺跡の西半部分に集中しておりKO1・2区、HO区、K10区で竪穴住居・土壌・溝などの遺構が多く、CH4・5区では土壌のほか河道が検出されている。中期から後期にかけては遺構・遺物ともに大幅に増大し、遺跡のほぼ全面で検出されている。とりわけTA区のまとまりのある竪穴住居群は、近接する周辺のBU区やCH2区などの住居や溝と関連し、多彩な遺構群と共に、後期前葉を主体とする大規模な集落の存在を暗示するものとして特筆される。

古墳時代では、南溝手遺跡でも検出された水田がPU区、TA区、H18・19区、BU区で検出されている。これらは高まりをもった畦畔の痕跡ではなく、畦畔の痕跡が鉄分やマンガンの凝集となって視認され、検出されたものである。このほか、CH4区では小規模な建物も検出されている。

古代から中世・近世にかけては、便宜上一つの章にまとめて記述することとした。建物や土壌など集落を形成する単位遺構のほか、溝や素掘溝群など農業生産に関わる遺構も確認されている。中世から近世に比定される素掘溝群のなかには犁（からすき）による耕作が行なわれた可能性を示す部分もあるが、調査区の全面においては、遺構の残存度や調査の精粗の差もあって検出されていない。

調査区と時期区分による概要をのべたが、今回の報告対象調査区が広範であるため、記述や遺構・遺物の把握の方法として、基本的に北東のPU区からBU区まで南下してCH1区に達する範囲で遺構全体図などを作成し同様にKO1・2区からK区、CH2区からHW区へと記述することとした。そのため、止むを得ず、同一の遺構で「遺構番号」が異なる場合がある。（岡田）

第2節 縄文時代晩期の遺構・遺物

1. 概要

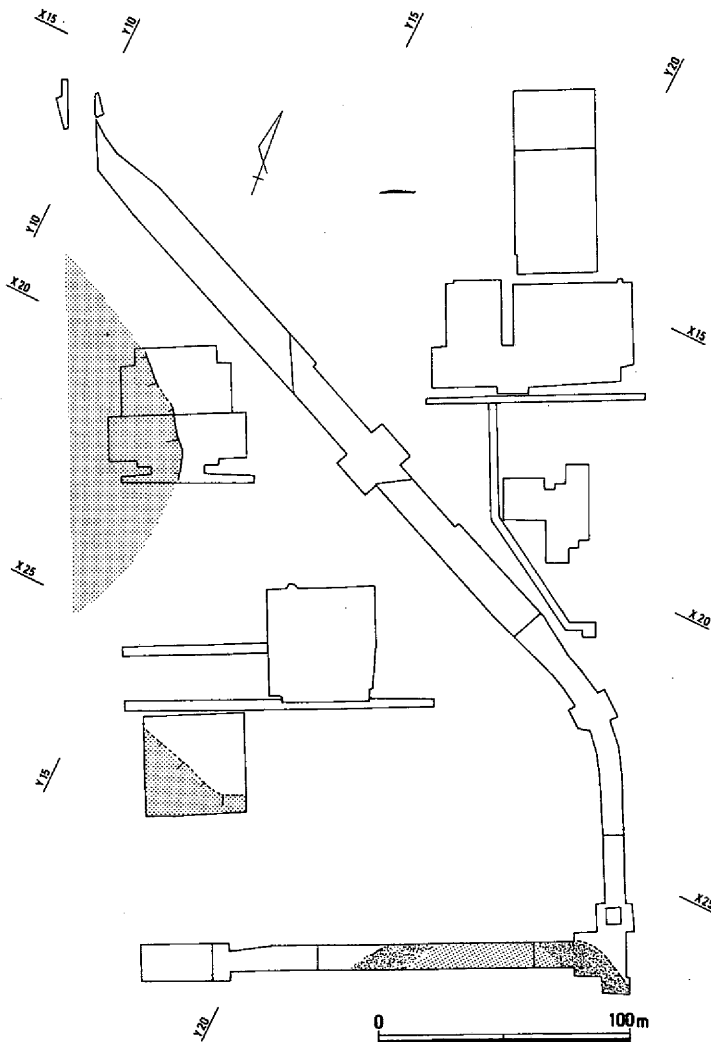
縄文時代晩期の遺構は、土壇・小ピット群・土器溜り・火処・河道がある。それぞれの遺構に伴う遺物は、河道を除くと少量であるが、時期的には中葉から後葉に比定される。南溝手遺跡では、イネの籾痕が看取される縄文時代後期後半の土器が出土しており、稲作の始まりという歴史的な画期に深く関わる注目すべき遺跡であることが明らかになっている。窪木遺跡では、縄文時代後期に遡る知見は得られなかったが、これらの事実を認識した上で遺構ごとに記述を進めたい。(岡田)

2. 遺構・遺物

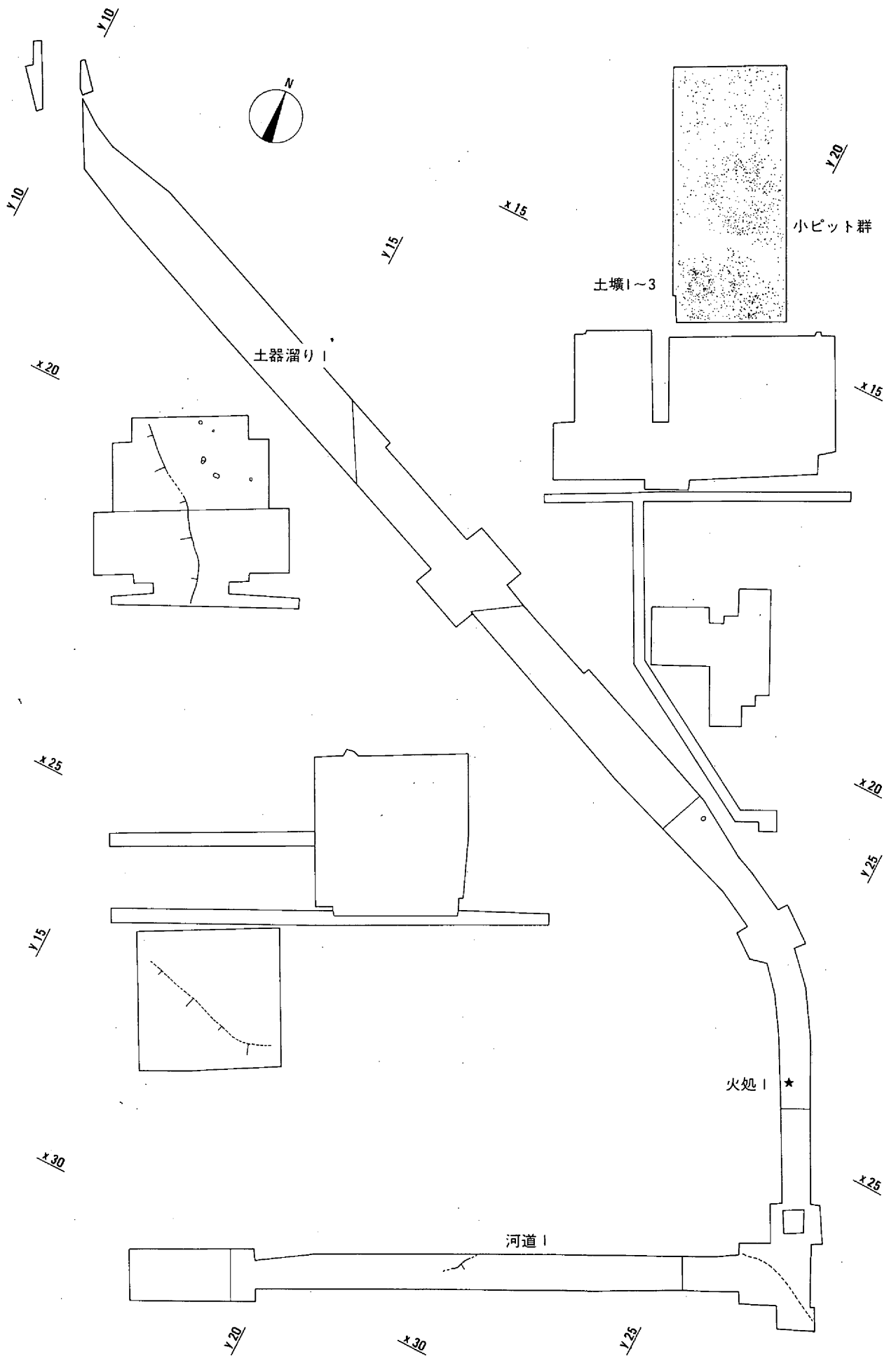
(1) 土壇

土壇1 (第10図)

PU3区の北西端で検出された。削平されているが、規模は120×131cmで不整形を呈し、深さは

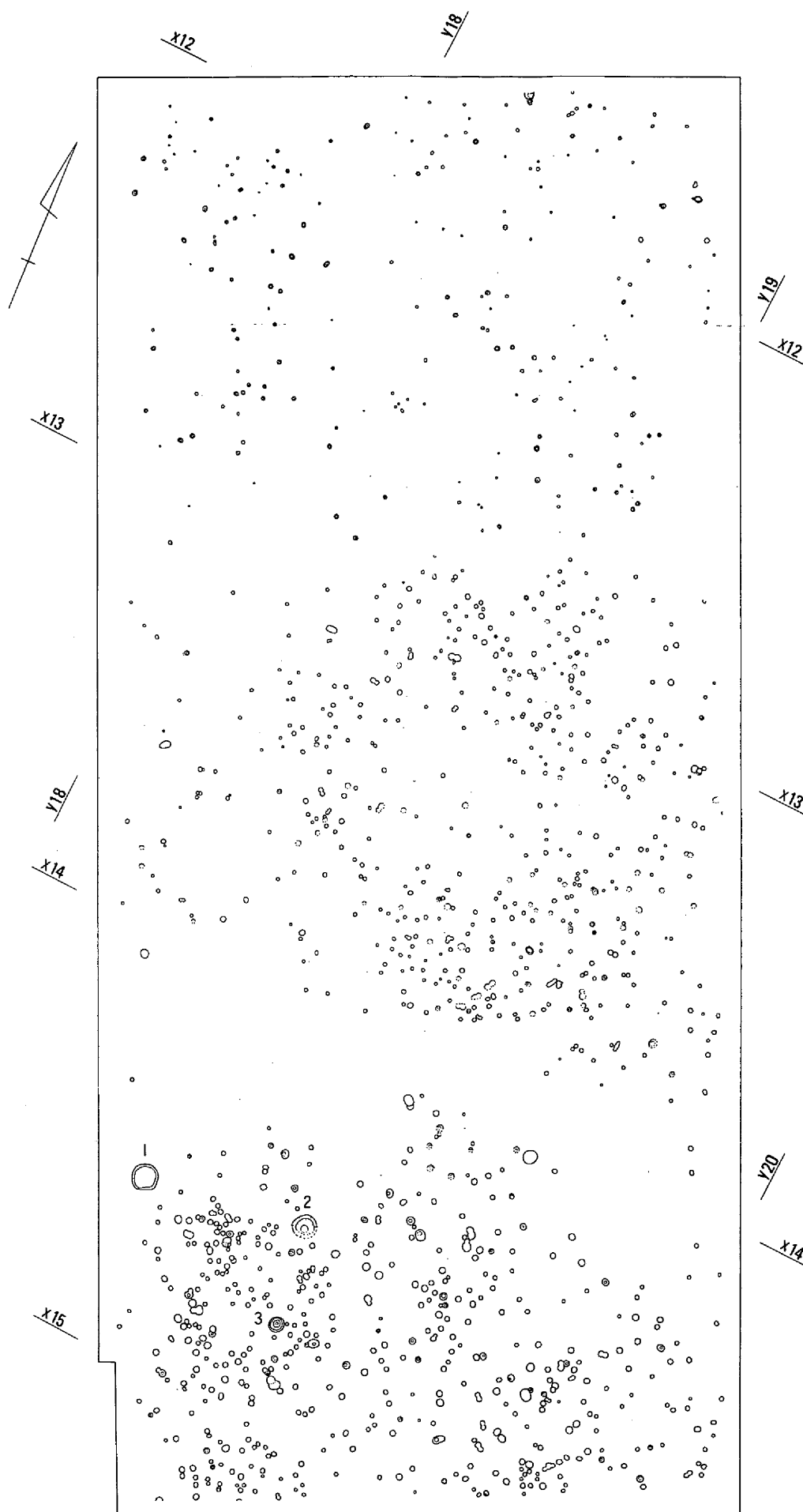


第7図 縄文時代晩期
地形概略図(1/3,000)



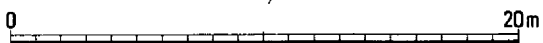
第 8 図 縄文時代遺構配置図 (1/1,500)

0 100m

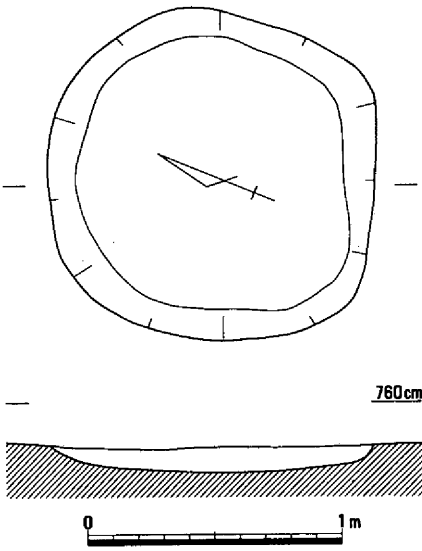


※番号は土壌を示す

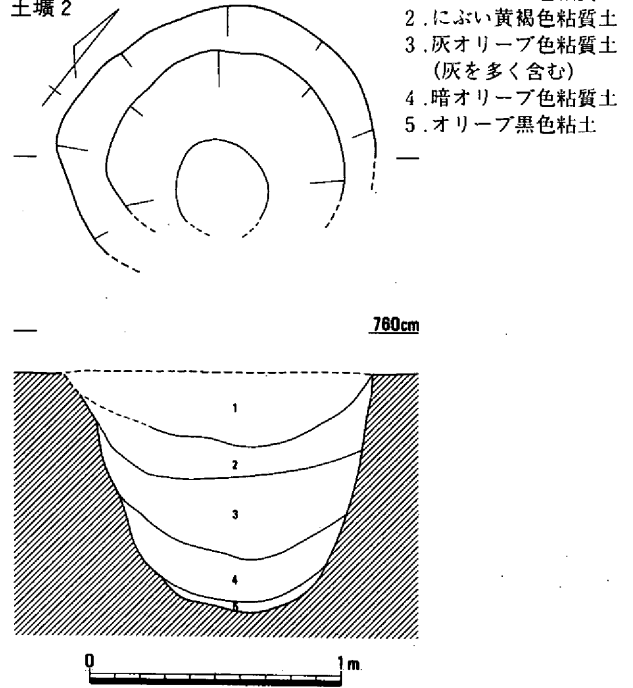
第9図 縄文時代遺構図(PU区; 1/300)



土壌 1

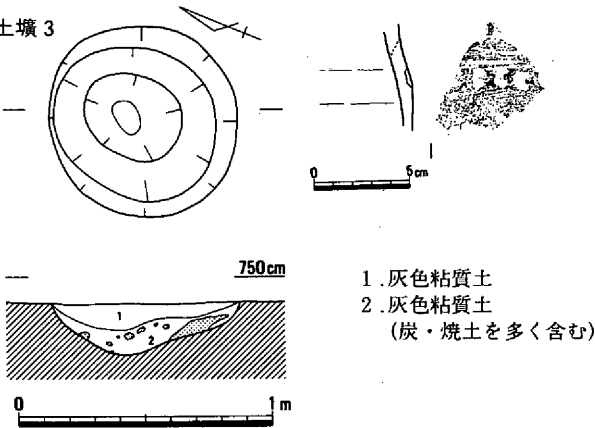


土壌 2



1. 灰オリブ色粘質土
2. にぶい黄褐色粘質土
3. 灰オリブ色粘質土 (灰を多く含む)
4. 暗オリブ色粘質土
5. オリブ黒色粘土

土壌 3



1. 灰色粘質土
2. 灰色粘質土 (炭・焼土を多く含む)

第10図 土壌 1～3 (1/30) ・出土遺物(1/4)

遺構検出面から約10cmを測る。断面はU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は灰色オリブ色粘質土である。遺物の出土はないが、検出面からみて、縄文時代晩期と考えられる。(松本)

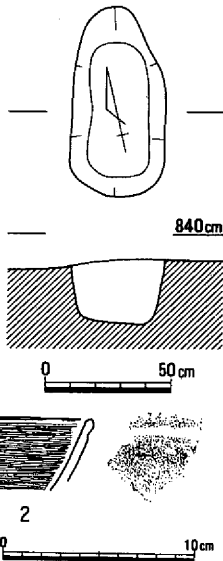
土壌 2 (第10図、図版 2)

土壌 1 の南東約 7 m の位置で検出した土壌である。東半は欠損しているが、規模は径120 cm前後の円形を呈し、深さは約94cmを測る。埋土は5層に区分することができた。特に3層では多量の灰とともに焼土が含まれていた。出土遺物はないが、検出面からみて、縄文時代晩期の遺構と考えられる。(松本)

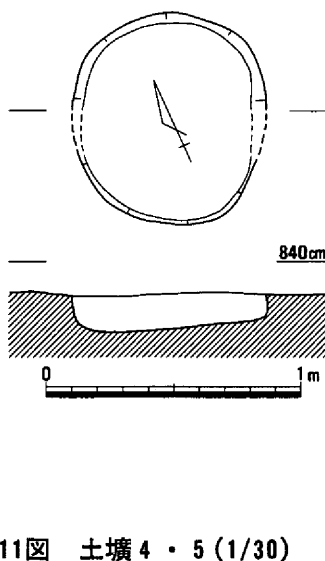
土壌 3 (第10図)

土壌 2 の南約 4 m の位置で検出された土壌である。削平されてはいるが、規模は径約75 cm前後の円形を呈し、深さは検出面から20cmを測る。断面はU字状を呈するが、中央部が一段深くなっている。埋土は2層に区分され、上層は灰色粘質土、下層は炭や焼土ブロックを含む灰色粘質土であった。

土壌 4

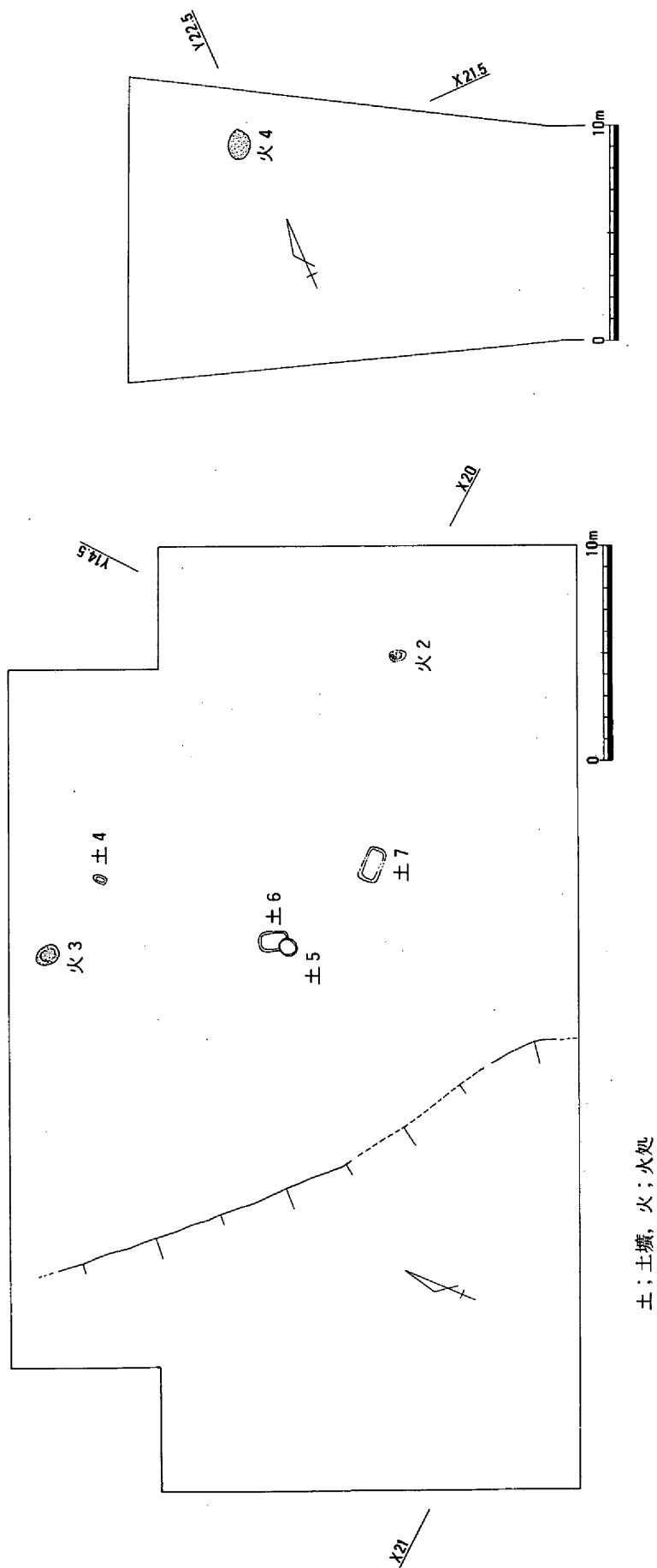


土壌 5



第11図 土壌 4・5 (1/30) ・出土遺物(1/4)

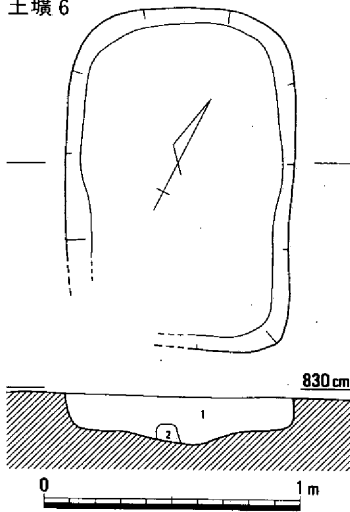
遺物は、縄文時代晩期の土器片(1)が出土している。器種は深鉢である。胴部片である



第12図 縄文時代遺構全体図(KO1・CH4区; 1/300)

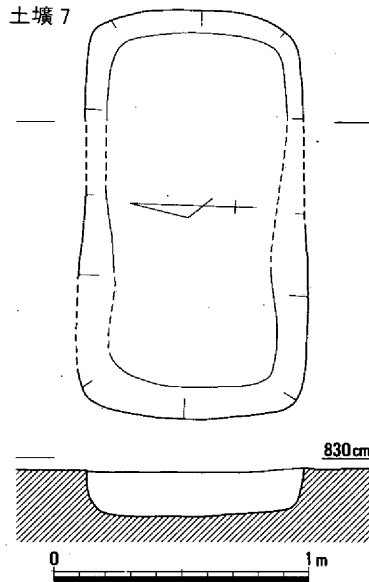
第3章 発掘調査の概要

土壌6

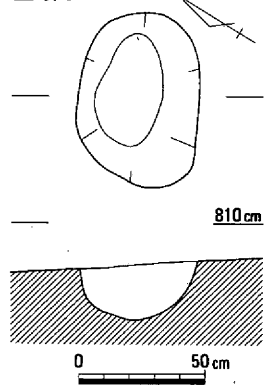


- 1. 黄褐色粘質微砂
- 2. 暗灰黄色粘質微砂

土壌7



土壌8



第13図 土壌6～8 (1/30)

が器壁外面には1列のC字形の刺突文が施されている。これらの土器から時期は縄文時代晩期中葉と考えられる。(松本)

土壌4 (第11図)

KO1区北端近くに位置し、土壌6との距離約7.5mを測る。平面形は不整楕円形を呈し、75×37×27cmの規模で、埋土は灰黄褐色粘質微砂である。縄文土器2の出土により、縄文時代晩期後葉に比定される。(光永)

土壌5 (第11図)

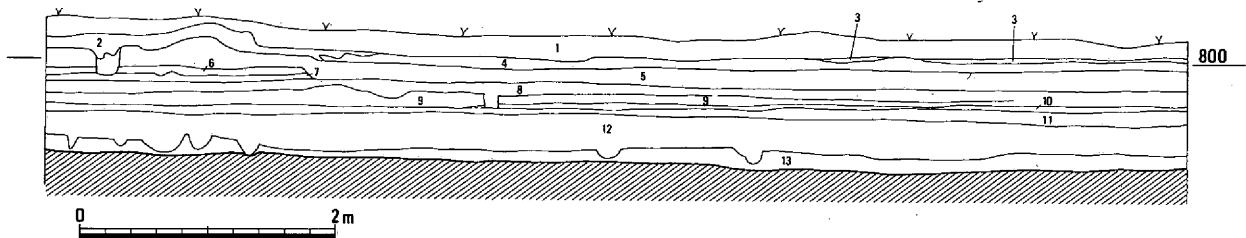
KO1区中央部に位置し、土壌6を削っている。平面形は楕円形で、84×76×14cmの規模を測り、埋土は黄褐色粘質微砂である。縄文土器小片の出土により、縄文時代晩期に比定される。(光永)

土壌6 (第13図)

KO1区中央部に位置し、土壌5に削られている。平面形は長方形に復元され、長軸長136cm、短軸長89cm、深さ19cmを測る。黄褐色粘質微砂の埋土中に暗灰黄褐色粘質微砂塊が含まれている。縄文土器小片の出土と土壌5との関係から縄文時代晩期に比定される。(光永)

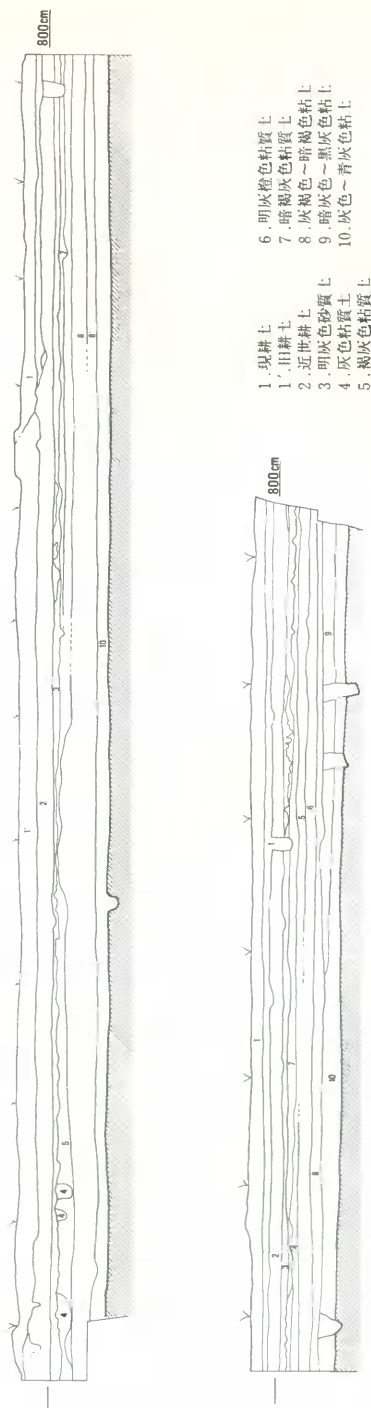
土壌7 (第13図)

KO1区中央部に位置しており、土壌6との距離は約4.3mである。平面形は長方形を呈し、163×



- 1. 現耕作土(暗灰色砂質土)
- 2. 現耕作土(明灰色砂質土)
- 3. 明灰色砂質土
- 4. 明黄灰色粘質微砂
- 5. 明黄色粘質微砂(近世)
- 6. 明灰～灰白色粘質土
- 7. 褐灰色粘質土
- 8. 明灰橙色粘質土
- 9. 灰褐色～暗褐色粘土
- 10. 暗灰褐色土(マンガン集積層)
- 11. 灰褐色土
- 12. 暗灰色～黒灰色土
- 13. 灰色～緑灰色粘土

第14図 PU1区北壁土層断面図(1/60)



第15図 PU1区西壁土層断面図(1/60)

91×18cmを測る。縄文土器小片の出土と、埋土の共通性から土壌6と同時期と考えられる。(光永)

土壌8 (第13図)

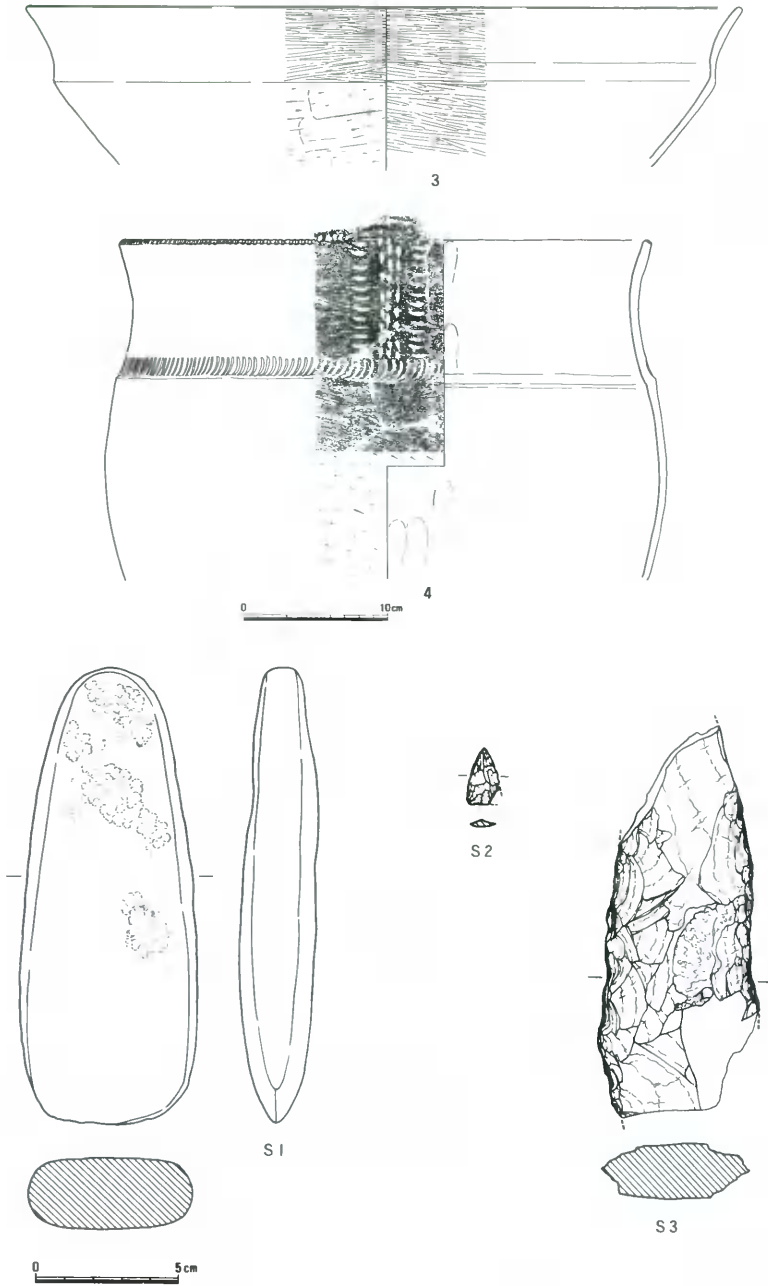
KO1区中央部南寄りで、低位部への肩口に位置し、土壌7との距離約10mを測る。平面形は楕円形を呈し、長軸長69cm、短軸長48cm、深さ24cmの規模で、埋土は褐色粘質土である。遺物は出土していないが、検出状況から縄文時代晩期に比定しうものとする。(光永)

(2) 小ピット群

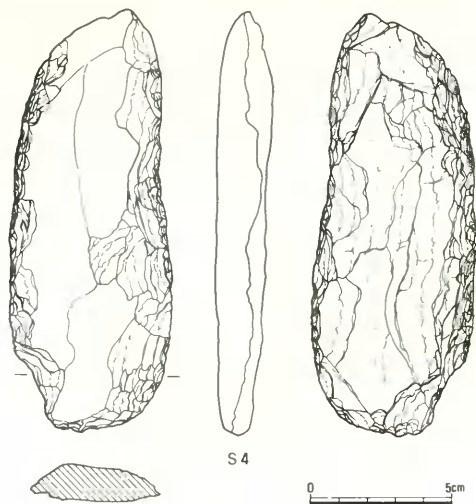
調査の結果、PU区の縄文時代晩期の遺構面から無数の小ピットを検出した。(第9図)この小ピット群は北の低位部に向って減少しており、大きく3ブロックに分かれるように見えるが、弥生時代中期の溝に切られているため、本来は調査区のほぼ全域に存在したと思われる。

ピットの規模は径3～4cm、深さ1～35cmとばらつきがみられたが、最も多いものは径、深さとも10～20cmであった。これらは杭および柱穴の性格をもつものと考えられるが、いずれも灰色粘土化し、杭痕、柱痕跡を確認することができなかった。

遺物は小ピット及び土壌の検出面において、土器(3、4)石器(S1～4)などが出土している。3は浅鉢である。平縁の口縁で、推定口径は45.6cmを測り、杯部はやや屈折している。口縁部外面と内面にはミガキの調整が施されている。4は推定口径36.6cmを測る深鉢である。口唇部には刻目を施し、突起部分には縦位の刺突文、口頸部と胴部の境は半截竹管による刺突文(爪形文)が施されている。縦位の刺突文は、中央に3列の列点文とその両側に爪形文を施すものである。器壁外面にはアルカ属具による条痕、胴部にはケズリの調整が施されている。S1は磨製石斧である。晩期遺構面真上の包含層において出土している。石材は閃緑岩である。S2は打製石鏃である。基部が欠損している。晩期遺構面において出土した。S3は上下両端が欠損しているが、両側縁には丁寧な調整が施された石器である。形態



第16図 縄文時代晩期遺構面出土遺物(1)(PU 2・3区; 1/4・1/2)



第17図 縄文時代晩期遺構面出土遺物(2)
(PU2・3区; 1/2)

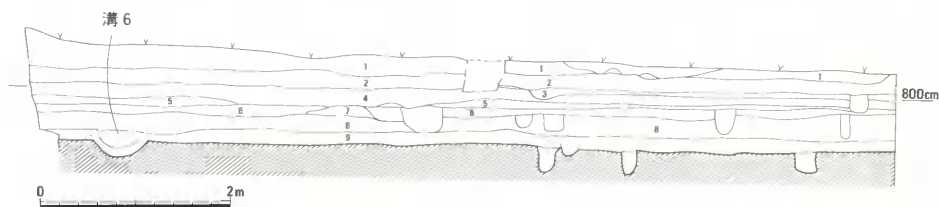
からみて打製石鎌と考えられるものである。晩期遺構面から出土している。S4はPU調査区の2区の晩期遺構面から検出された石器である。欠損が見られるが、器種は打製石鎌である。両側縁は丁寧な調整が施され、刃部には使用による磨減痕が認められた。石材は粘板岩である。

小ピット群は微高地の縁辺部において検出された遺構であるが、このような小ピット群は南溝手遺跡においては確認されていない遺構である。時期は縄文時代晩期中葉のものと考えられる。(松本)

(3) 土器溜り

土器溜り1 (第19・20図、図版3)

CH1区の南端で検出された東西約5

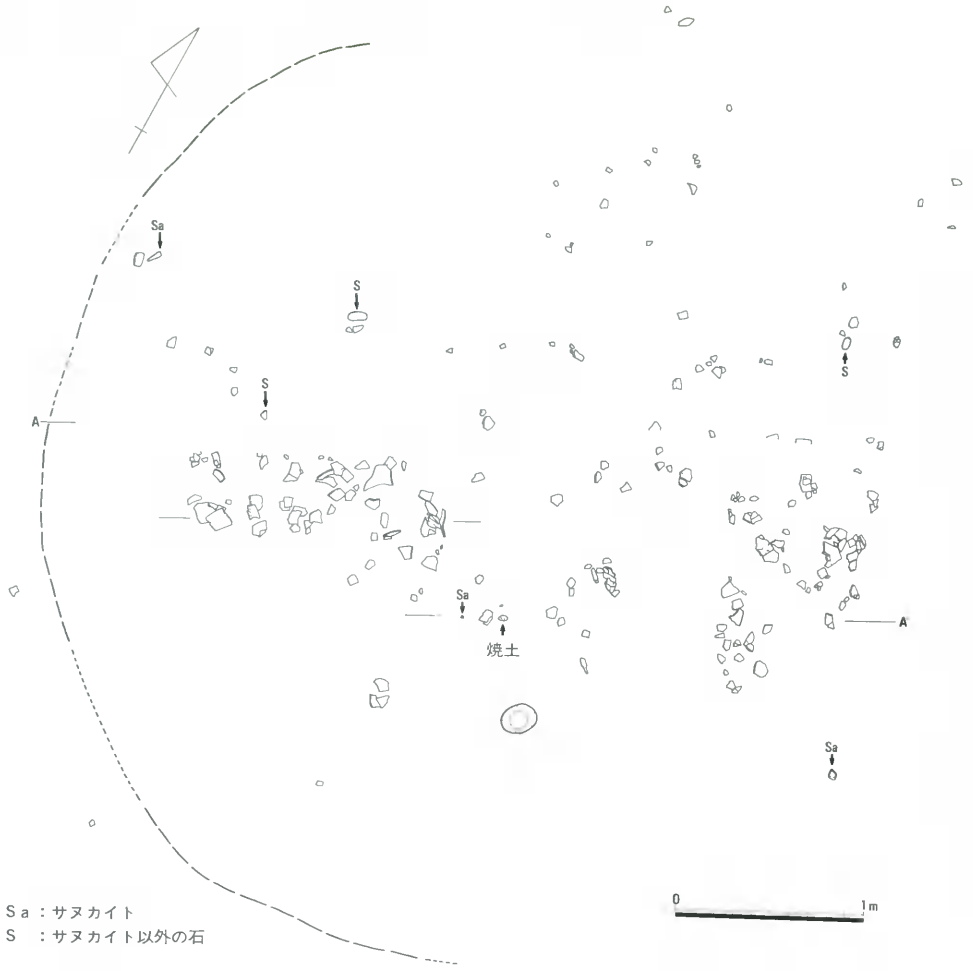


PU2・3区
南壁土層断面図

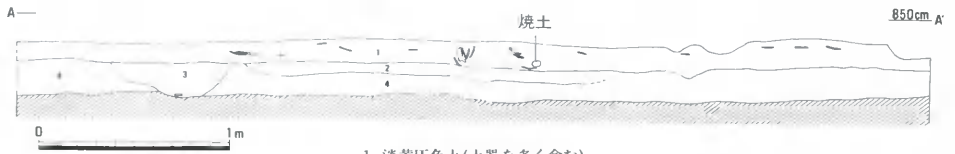
1. 耕作土	5. 淡灰褐色土
2. 灰黄色土 (近世水田層)	6. 暗褐色土
3. 黄褐色土	7. 黄褐色土
4. 黒褐色土	8. 黄灰褐色土
	9. 淡黄灰色土

第18図 PU3区土層断面図(1/60)

m、南北約9mの範囲に広がる、縄文土器が集中的に出土した遺構である。上面は弥生時代後期以降の著しい削平を受けているが、幸い深さ約20cmほどの縄文土器を包含する土層は比較的良好な残存状態を保っていた。第19図に示すような緩やかな弧を描く破線および点線に示す範囲が周辺の基盤層の遺構検出面に比べ焼土片が含まれ、しかも土色もやや濃い部分である。検出時には堅穴住居の可能性もあるとみて慎重な精査を行ったが、住居と断定するには至らなかった。その理由の一つには被熱した箇所すなわち「火処」がないことと明確な柱穴が発見できなかったことなどがあげられる。検出範囲の中央南寄りでは径15×20cm、深さ約15cmを測る長円形の小ピットが発見されたが、ほかにまったく検出されず唯一のピットではあるが住居の柱と断定するに至らなかった。出土遺物は、比較的多数の縄文土器と石器がある。前者は浅鉢と深鉢で構成されており、正確に計測できるものはなかったが、深鉢が大半を占める。深鉢の体部外面には、アルカ属の貝殻条痕文が施されるのが一般的である。口唇部に刻み目が施された22などはごくわずかである。石器には、S5・6の石鎌をはじめ、S7のスクレイパーなど打製のサヌカイト製のほか、石鎌の可能性のあるS9・10やS11の敲き石がある。土

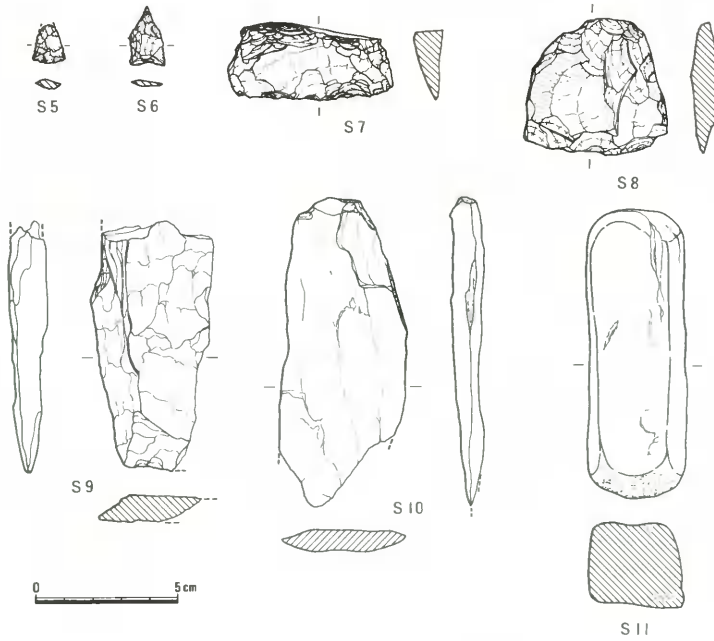


Sa : サヌカイト
 S : サヌカイト以外の石



1. 淡黄灰色土(土器を多く含む)
2. 黄灰色土
3. 灰黄色土
4. 灰黄色～黄灰色土

第19図 土器溜り1 (CH1区; 1/30)



第20図 土器溜り1出土遺物(1/4・1/2)

器の観察から縄文時代晩期中葉に比定されよう。(岡田)

(4) 火処

火処1 (第21図)

CH4区南端近くに位置する。

弥生時代前期ないしは縄文時代晩期の基盤層となる遺構面より下層の状況を調べるために、調査区の西壁沿いにトレンチを掘削したところ、海拔6.30m前後で焼土塊と炭の集中する箇所が110×150cm以上の範囲にわたって検出されたものである。断面観察によれば、7層を掘り込んで焼土塊等を一括して廃棄したようにも見られ、堆積の厚さは30cmに及ぶ。焼土塊は褐色を呈する熱影響の低いものが多いが、熱影響の高い橙色の部分平面・断面ともに混在している。

この周辺では、弥生時代前期の基盤層上面は海拔8.00m付近に認められ、その面からは170cm下層となる。また、検出された海拔6.30m付近では、上層の灰色粘土から下層のオリブ黒色粘土へ土層の変換が認められるが、2・3・5層の灰オリブ色粘土は他には見られない。

遺物を伴わないが、縄文時代晩期よりは古く、後期に属する可能性をもつ。

(光永)

火処2 (第22図)

KO1区東部に位置し、火処3と約21m離れる。70×50cmの平面楕円形の範囲に焼土粒が散布しており、これを除去すると深さ10cm前後の凸凹のあるくぼみとなる。

(光永)

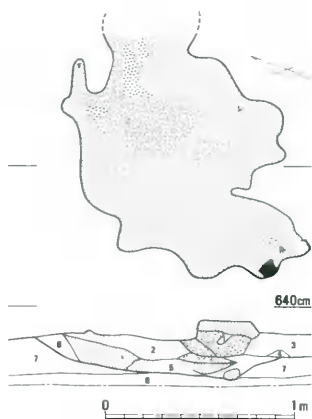
火処3 (第22図)

KO1区北端に位置し、竪穴住居20に削られている。107×84cmの範囲に焼土粒が散布し、これを含む灰黄褐色粘質微砂を除去すると深さ23cmの土壌状を呈する。

(光永)

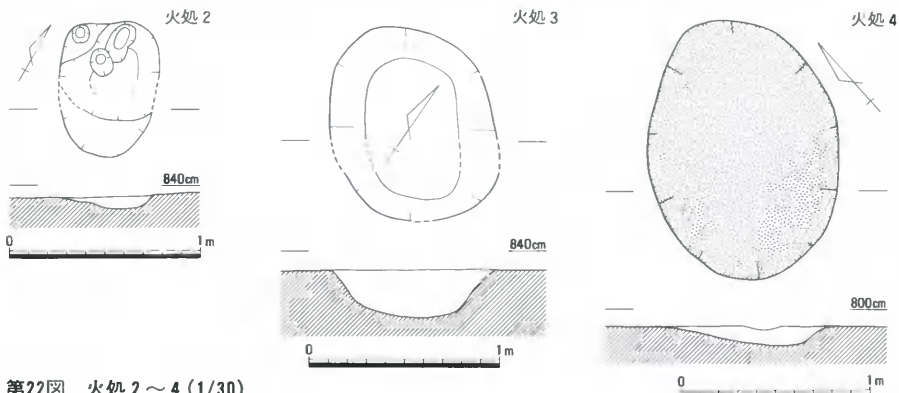
火処4 (第22図)

CH4区北端に位置し、137×102cmの平面形楕円形の範囲に厚さ10cm程焼土粒が堆積している。火



1. 灰オリブ色粘質土(焼土粒を少し含む)
2. 灰色粘質土(炭・焼土粒を少し含む)
3. 灰オリブ色粘質土
4. 灰オリブ色粘質土
5. 灰オリブ色粘質土
6. 灰色粘質土
7. オリブ黒色粘土
8. オリブ黒色硬質粘土

第21図 火処1 (1/30)



第22図 火処2～4 (1/30)

処2～4は時期の決め手を欠くが、検出状況から縄文時代晩期の可能性を考えたい。(光水)

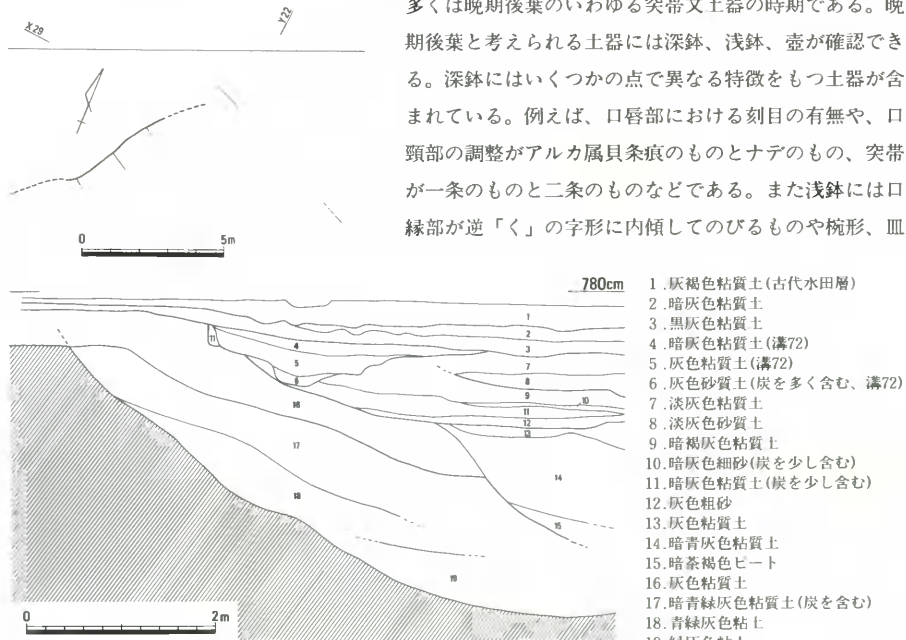
(5) 河道

河道1 (第23～28図、図版3-1)

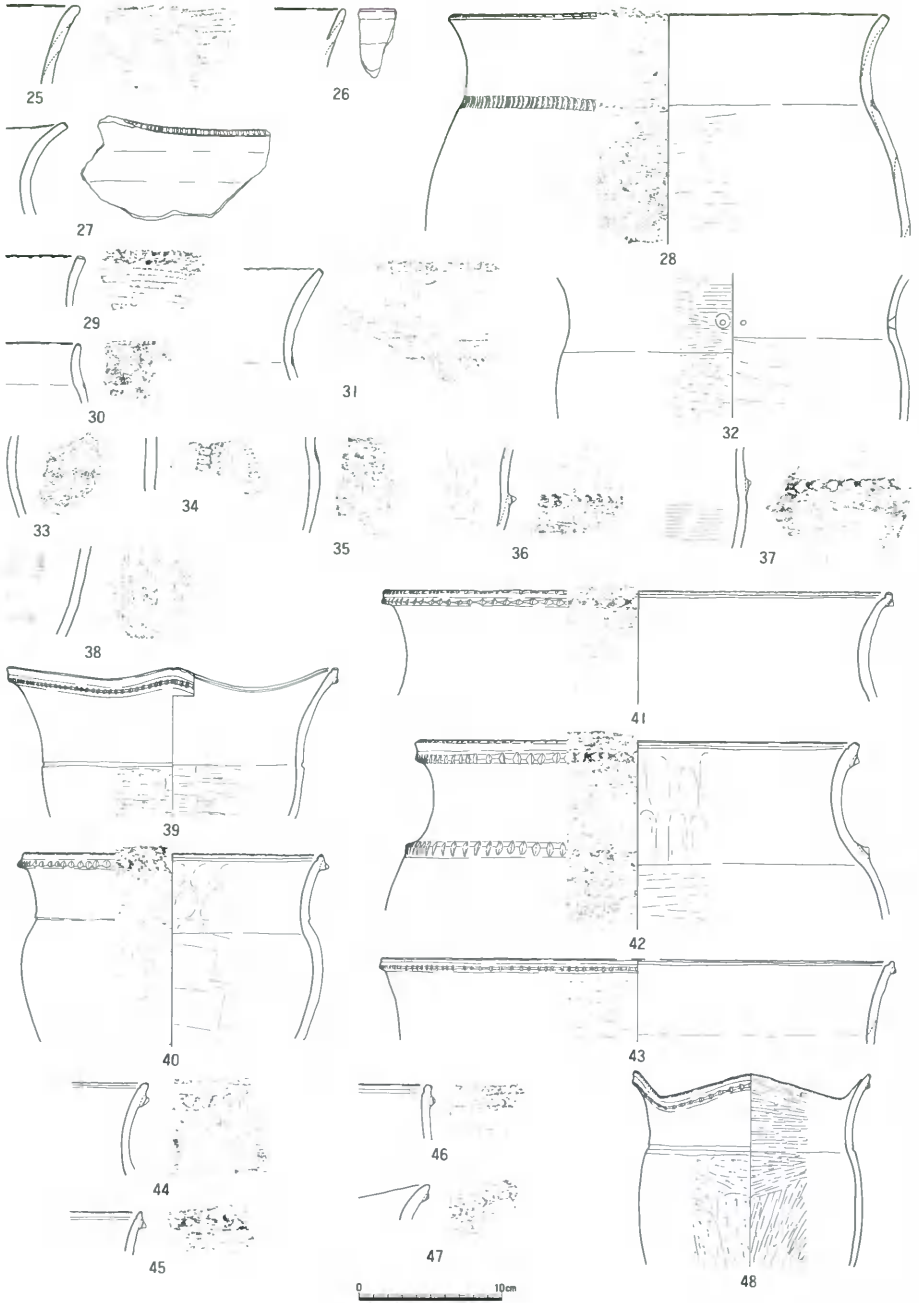
HW3区の西半部において検出した晩期の旧河道である。調査できた面積については、弥生時代においてもこの同じ箇所が河道となっていたことや調査区の幅が狭かったことなどから、約10×5mの範囲に限られた。調査できたのは河道の西側にあたる肩部分で、第23図に示したように、この河道は北東から南西方向に走っていたものと考えられる。東側の肩については、弥生時代の河道によって削られたものと考えたい。したがって河道の幅については明確ではないが、10～15mではないかと推定できる。深さは検出面から約3mまでは確認することができた。河道肩部の土の堆積状況については、第23図に断面図を示している。図の1層は古代の水田層(水田層か)である。2・3層中には6世紀後半の須恵器が含まれていた。4～6層は古墳時代初頭の溝72で、7層は古墳時代初頭に埋没した水田と考えている。9～15層は弥生時代後期の旧河道の堆積層である。そして16～19層が晩期の河道の堆積層である。これらは色や質の違いによって大きくは、16層(上層)と17～19層(下層)とに区分することができる。

出土した遺物としては土器、石器、獣骨、植物遺体などがある。土器はコンテナに約3箱出土しており、ほとんどは下層からの出土である。これらの土器は口縁部や底部、および文様などの特徴をもつ胴部についてはほとんどすべて実測し、第28図に上層出土土器を、第24～27図に下層出土土器を示している。土器の時期については、晩期中葉のものが少量認められるものの(25～31・34・73など)、

多くは晩期後葉のいわゆる突帯文土器の時期である。晩期後葉と考えられる土器には深鉢、浅鉢、壺が確認できる。深鉢にはいくつかの点で異なる特徴をもつ土器が含まれている。例えば、口唇部における刻目の有無や、口頸部の調整がアルカ属貝条痕のものとナデのもの、突帯が一条のものと二条のものなどである。また浅鉢には口縁部が逆「く」の字形に内傾してのびるものや碗形、皿



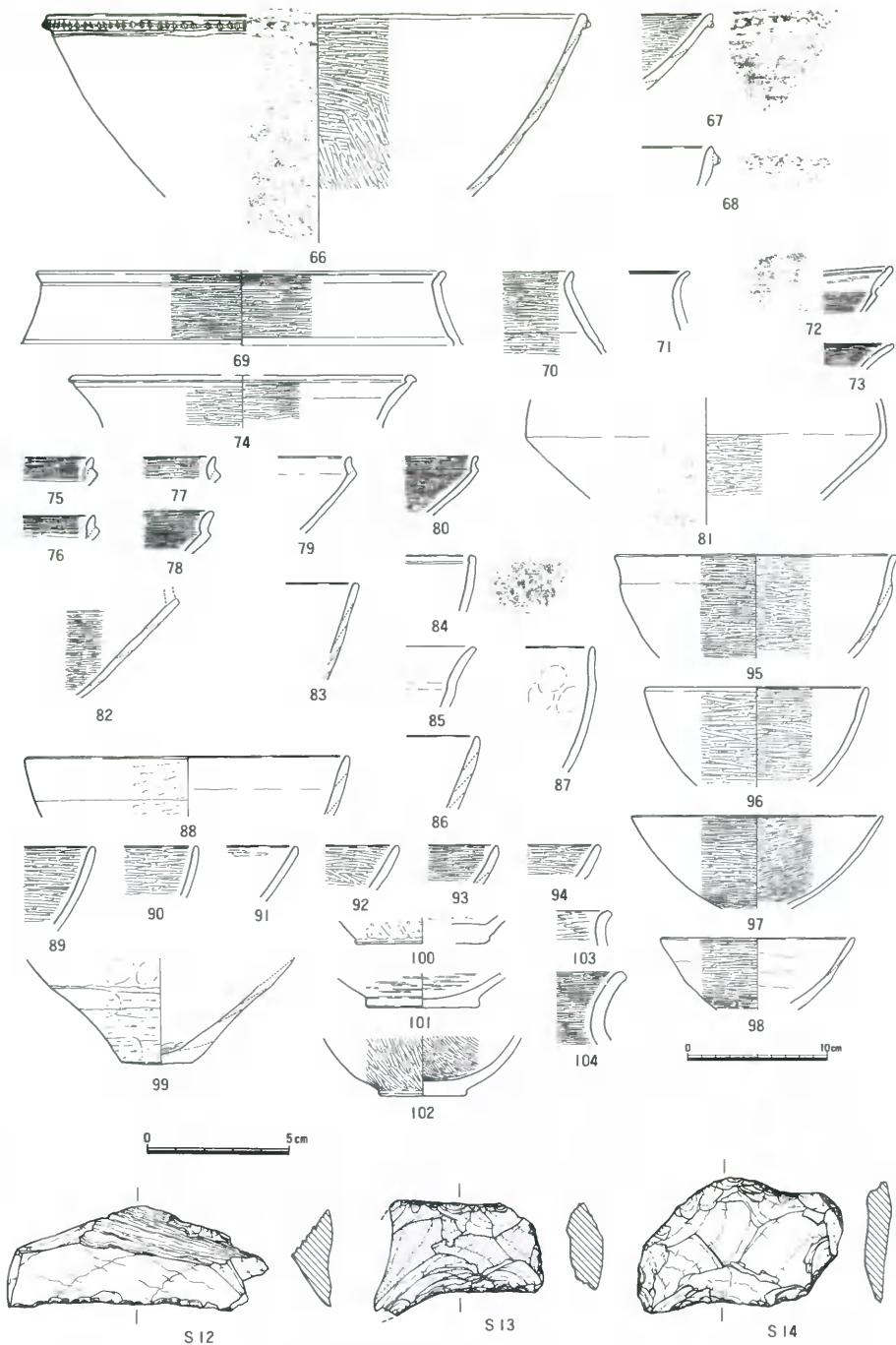
第23図 河道1 (1/200・1/60)



第24図 河道1出土遺物(1)(1/4)

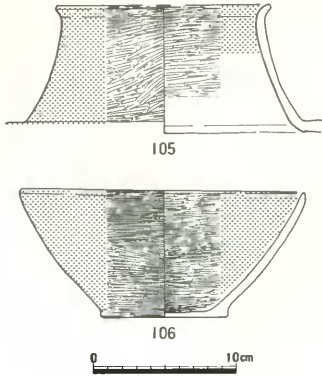


第25図 河道1出土遺物(2)(1/4)

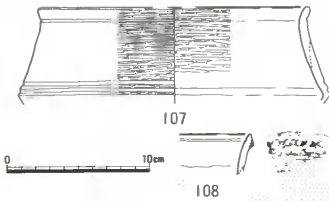


第26図 河道1出土遺物(3)(1/4・1/2)

形のものが認められる。特筆すべき土器として105・106の「丹塗り磨研」土器がある。105は胎土が灰白色の精製の壺で、従来県下で出土している壺とは異なっており、「夜白式」の壺に類似している。106は国内ではあまり類例を見ない鉢で、外面には黒班が認められる。石器はいずれも下層から出土した。S12はスクレイパー、S13・14はスクレイパーを楔に転用したのではなからうか。獣骨はシカの顎、歯、関節などが出土している。(平井)



第27図 河道1出土遺物(4)(1/4)



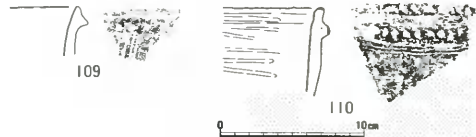
第28図 河道1出土遺物(5)(1/4)

(6) その他の遺構・遺物

第3 低位部～第3 微高地 (第29～31図)

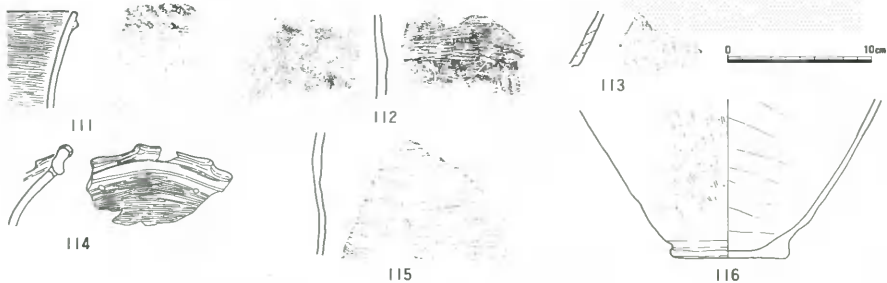
第3 微高地及びその東部については、縄文時代晩期の遺構も少なく、弥生時代以降の遺構への混入も含めて、出土量は少ない。第29図の110がPU1区、109がCH1区からの出土で、刻目突帯をもつ深鉢である。第30図にあつては、波状口縁の浅鉢114がCH3区、深鉢112がK区、深鉢111・116がH20区のそれぞれ包含層ないし基盤層から出土している他、深鉢113・115はCH5区の弥生時代前期の河道2からの出土である。

第31図に示した土器は、KO1・2区の境界部分で弥生時

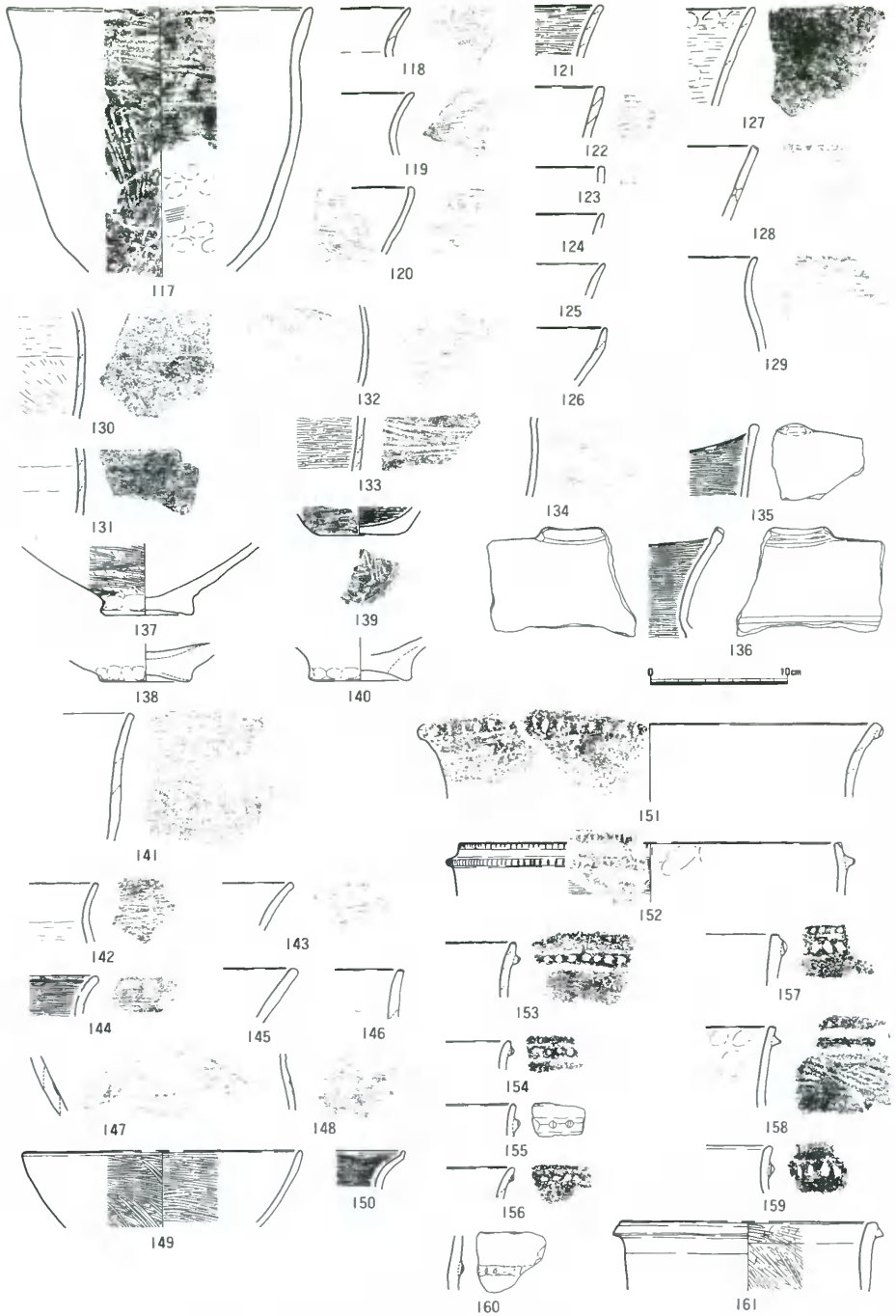


第29図 包含層出土遺物(縄文時代晩期1)

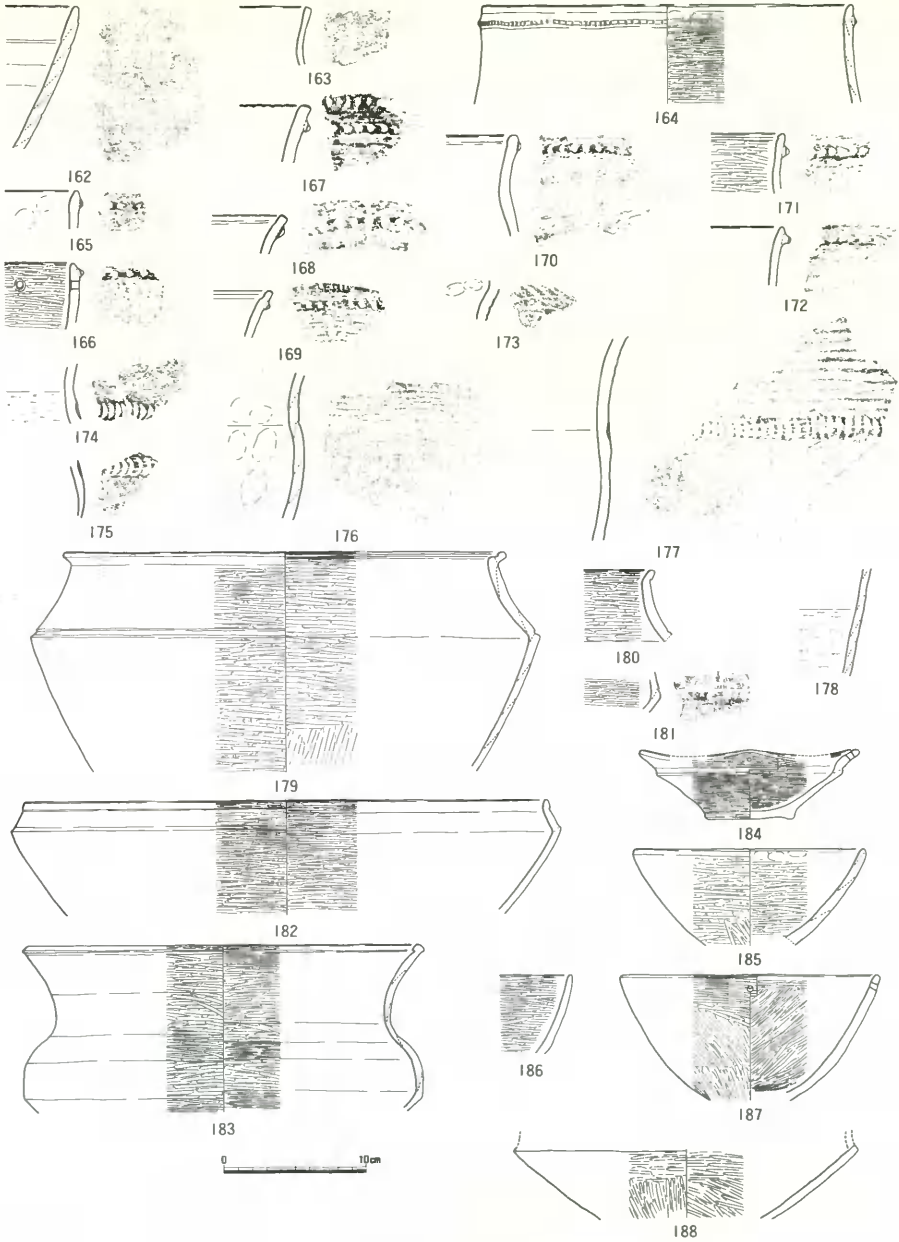
(PU1・CH1区; 1/4)



第30図 包含層出土遺物(縄文時代晩期2)(1/4)

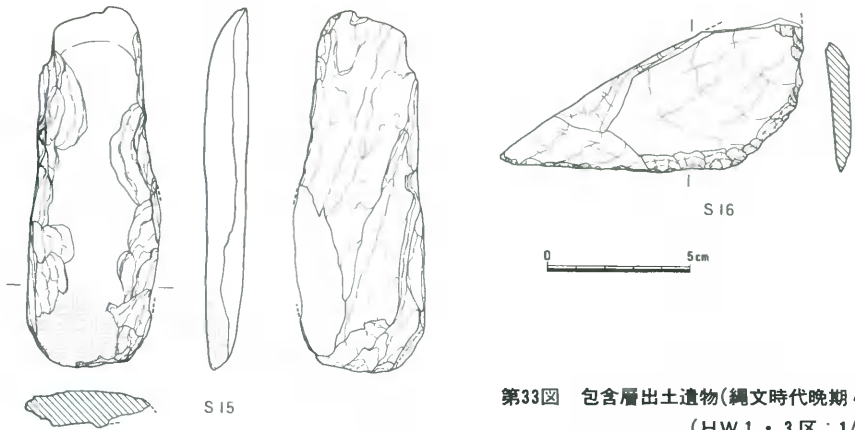


第31図 KO2区出土遺物(1/4)



第32図 包含層出土遺物(縄文時代晩期3)(HW1~3区:1/4)

代前期の低位部より下層の堆積状況を確認するために行った掘り下げにより出土したものである。152の弥生時代前期からの混入を除いて、117~140はその中でもより下層からの出土である。127~129を除いて口唇部に刻目はなく、端部に明瞭な面をもつものは123・128のみで、頸部外面にはアルカ属具



第33図 包含層出土遺物(縄文時代晩期4)
(HW1・3区; 1/2)

条痕が施されている。137・138・140の底部は上げ底である。141～161の上層の土器にあっては、151・153～160の刻目突帯をもつ深鉢が見られる。(光永)

HW1・3区 (第32・33図)

第32図に示した遺物は、HW1・3区においてトレンチ掘り下げ中や弥生時代以降の土層から出土した縄文時代の土器である。これらのうち162・163・165・166・170・172・174～176・179～188については、先に記述した晩期の河道を検出するために設定したトレンチを掘り下げ中に出土した土器であり、その出土層位から河道出土土器に含めて考えて良い資料である。器種としては深鉢と浅鉢がある。165・166・171・172は口縁端部に刻目突帯を施している。口唇部は尖り気味に仕上げられており、刻目は施されていない。外面はナデ仕上げである。166は焼成後に穿孔している。174・175の口頸部と胴部の境には逆C字形の刺突文が、また176には抉ったような沈線が施されている。浅鉢には口縁部が逆「く」の字形に内傾しながらのびるものや楕形のものなどがある。184の口縁部は波状になっている。なお183についてはその形状から晩期中葉ではないかと考えているが、その他の土器については晩期後葉と考えられる。

その他の土器のうち167～169・177はHW3区の弥生時代の河道から出土した晩期の土器である。177の口頸部外面の調整はアルカ属貝条痕である。

164はHW1区において縄文時代晩期以降の黄色砂質土基盤層を掘り下げ中に出土した晩期後葉の土器である。口縁部外面には端部からやや下がった位置に刻目突帯を施している。口唇部は尖り気味で口頸部外面はナデ仕上げである。

173はHW1区において黄色砂質土基盤層から下位の上層堆積状況を調べるために設定したトレンチから出土した土器である。出土したのは基盤層から約1.5m下の海拔約6.5m付近に厚さ30cm前後でほぼ水平に堆積している暗黒褐色粘質土である。土器は小片のため明確ではないが縄文時代後期中葉頃のものではないかと考えておきたい。(平井)

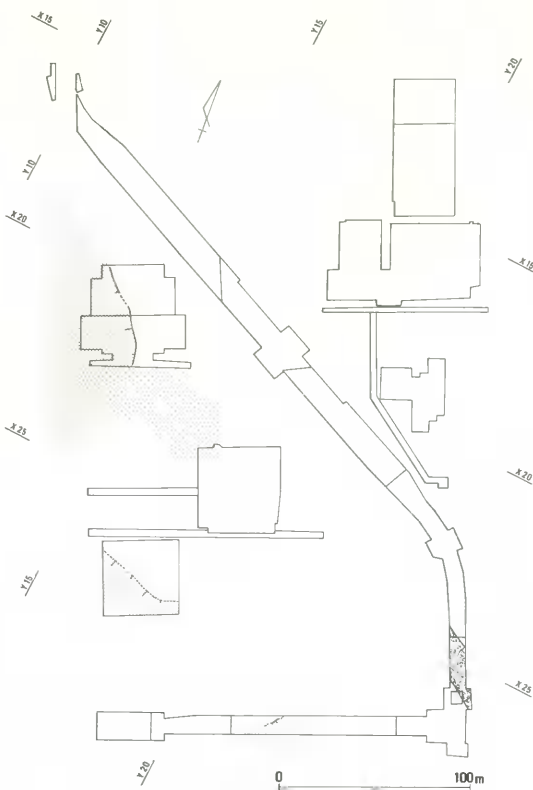
第3節 弥生時代前期～中期前葉の遺構・遺物

1. 概要

この段階の地形には、縄文時代晩期の状況と大きな変化は見られないが、HW3区～CH5区南部の河道に換わってCH5区の北部に河道が認められる。

遺構の分布状況を見ると、調査区相互の隔たりが大きいものの、KO1・2区からK10区あるいはHO区にかけての第3微高地西寄りの部分にまとまりが見られ、竪穴住居4軒はここに集中している。第3低位部を挟んで南溝手遺跡竪穴住居1～3と指呼の間という距離である。土壌もこの周辺に26基と多く、他にはCH4区南半に6基が検出される程度である。遺物の出土状況についても同様の傾向がみられる。溝は2条が検出され、溝1については南溝手遺跡溝1～5との関係を検討しようが、溝2については不明である。CH5区河道2との関係を検討すべきであろうか。墓域等については不明である。

CH2・3区より北東側で第3微高地の東向きの緩斜面に相当する調査区では、遺構・遺物ともに希薄な検出状況である。(光永)



第34図 弥生時代前期～中期前葉地形概略図
(1/3,000)

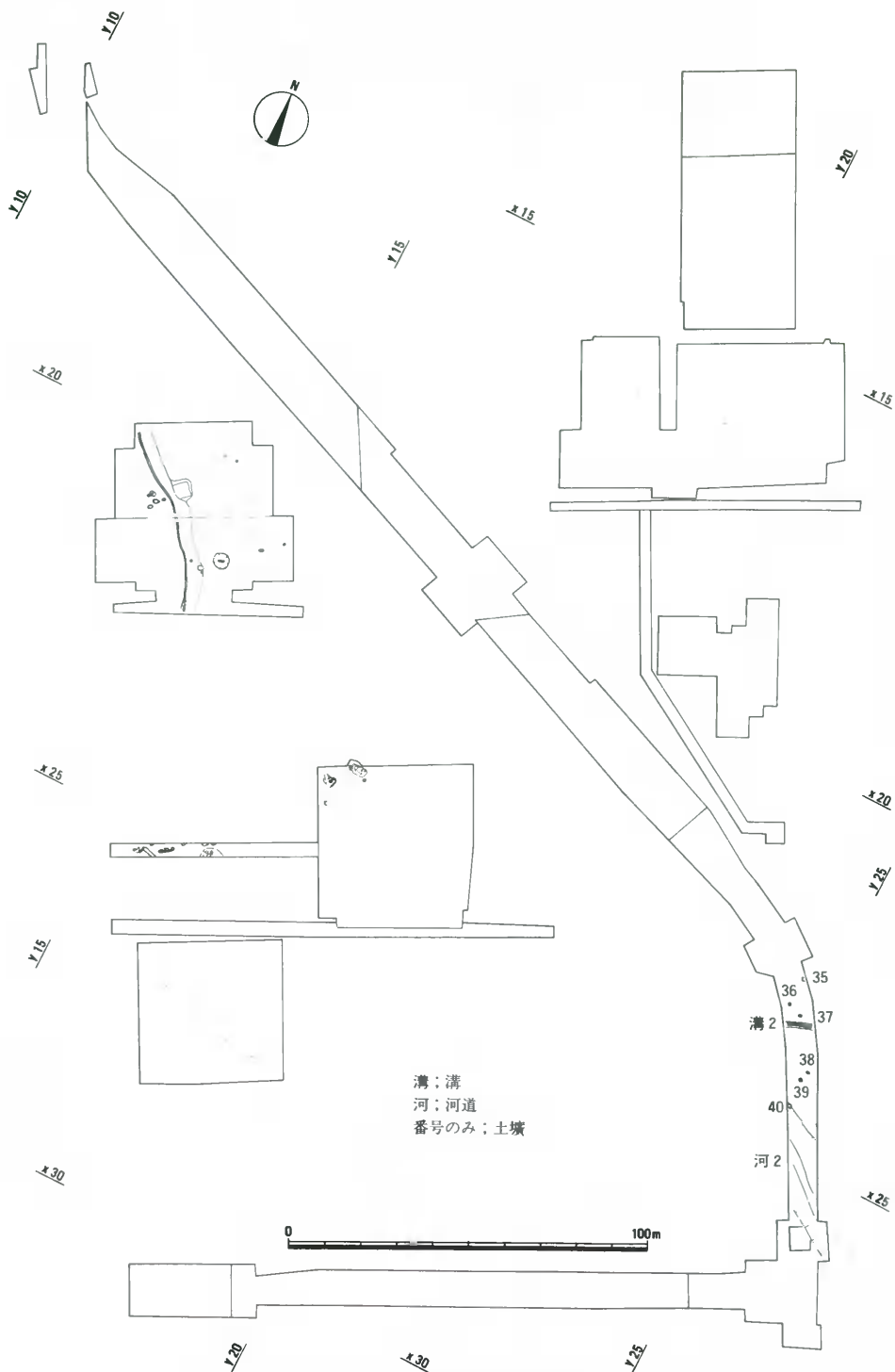
2. 遺構・遺物

(1) 竪穴住居

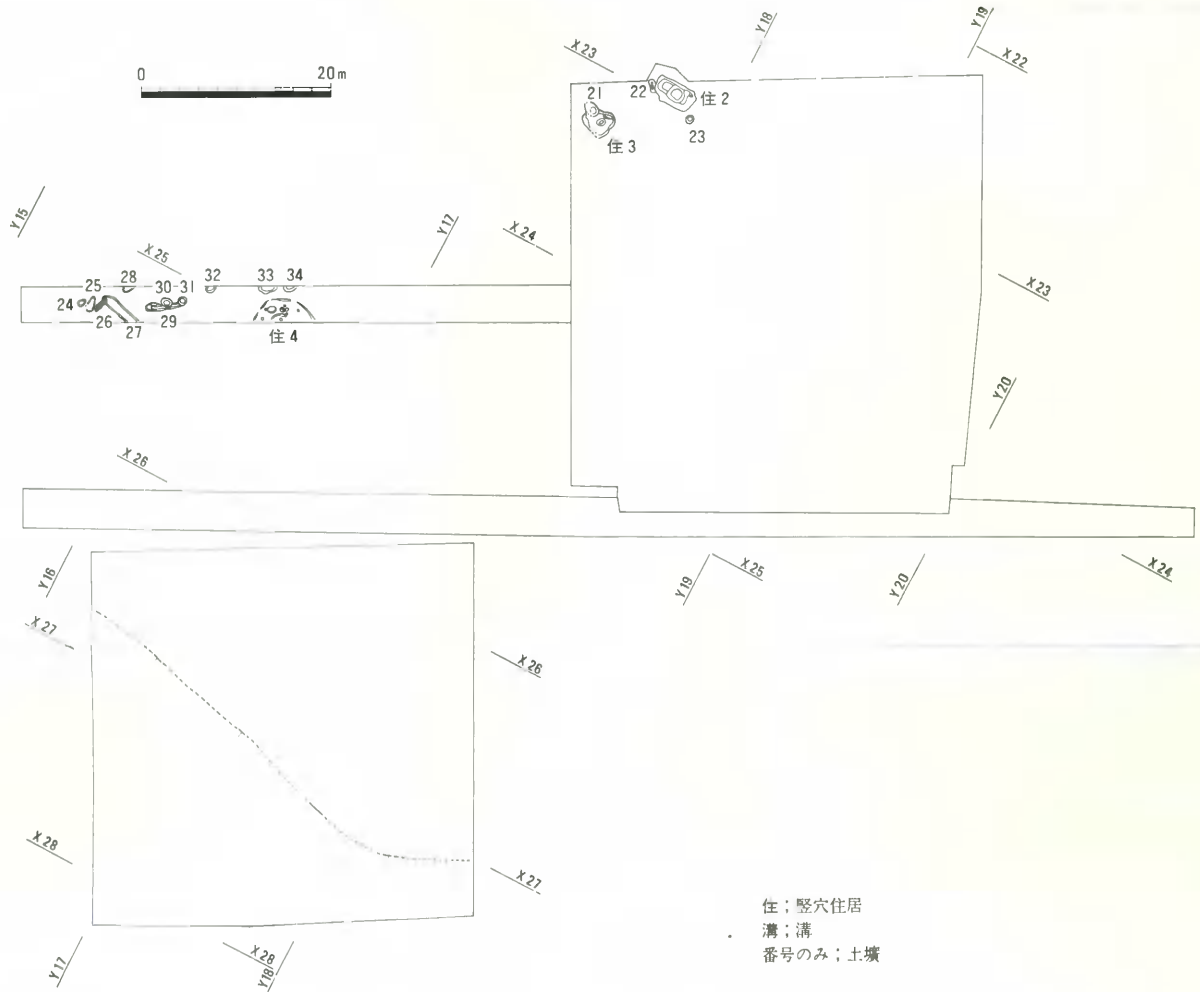
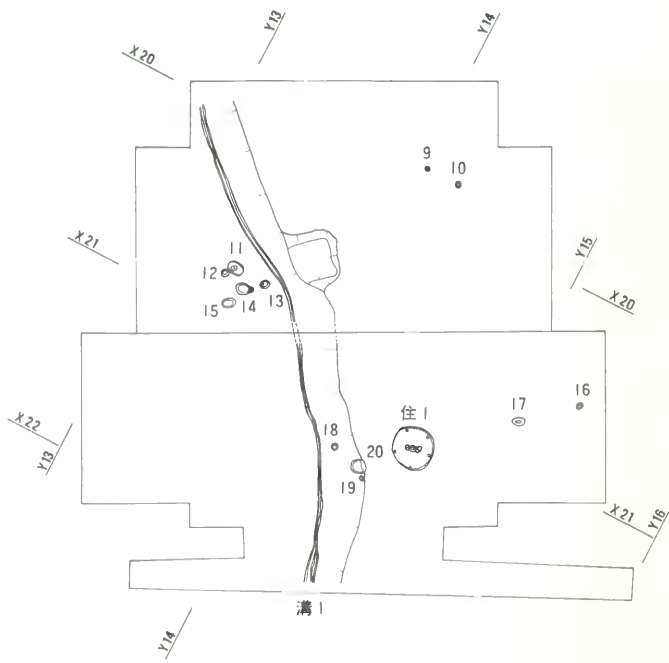
竪穴住居1 (第37図、図版4-3)

KO2区中央部で低位部肩口から3.3m離れて位置し、土壌17との距離は約8.5mである。

平面形はやや不整な円形を呈し、径430～445cmを測る。側壁はやや外傾し、床面への変換点は明瞭な角をもたずに曲面となっており、壁体溝は認められない。側壁下端から3～14cm内側にP1～5の5本の柱穴が柱間195～263cmで検出された。平面形はほぼ円形で、径18～25cm、深さ7～21cmと小規模なものである。主たる柱穴は、側壁から110～125cm内側の床面中央部に中央土壌を挟んで2本が検出されている。床面での柱間は芯心で125cmを測るが、深さ63cm前後の柱痕跡は東側の柱が内傾する状況を示し、柱の径は15cm前後に復元できる。中央土壌は平面楕円形の船底状を呈し、89×49×26cmの



第35図 弥生時代前期～中期前葉遺構全体図(1)(1/1,500)

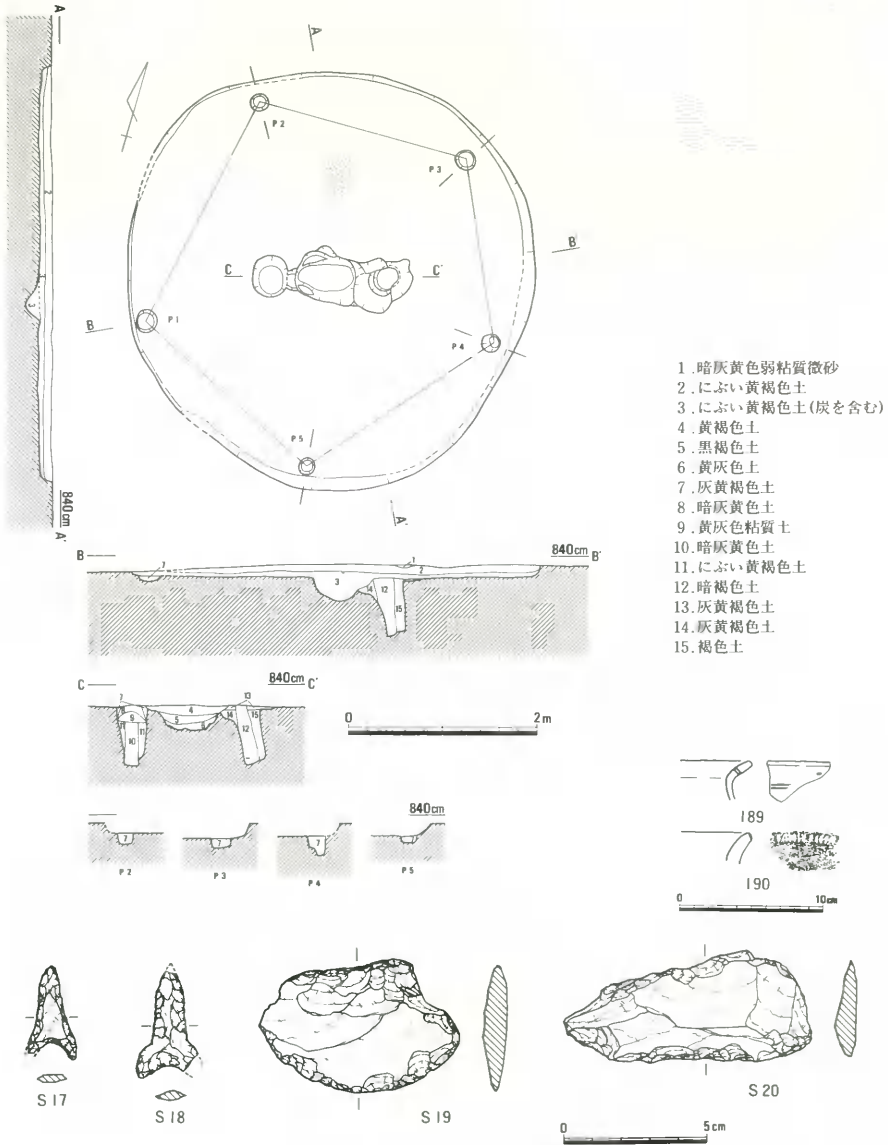


住：竪穴住居
溝：溝
番号のみ；土壇

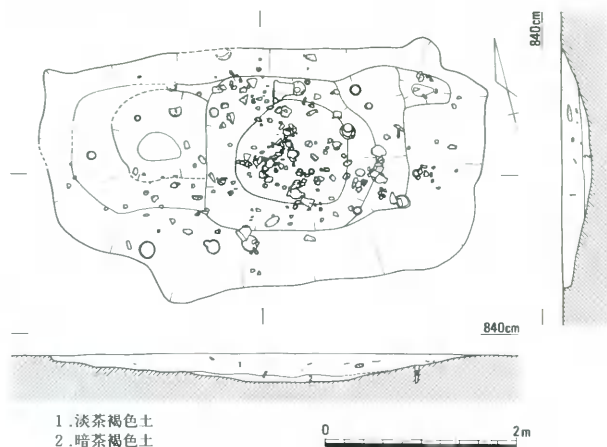
第36図 弥生時代前期～中期前葉遺構全体図(2)(KO1・2・HO・K10・H20・K区；1/600)

規模で、埋土に炭・灰は明瞭でない。床面の海拔高は8.28m前後でほぼ平坦であるが、中央土壌の北60cmで側壁の内側90cmの箇所では45×28cmの平面楕円形の範囲が熱影響を受けている。

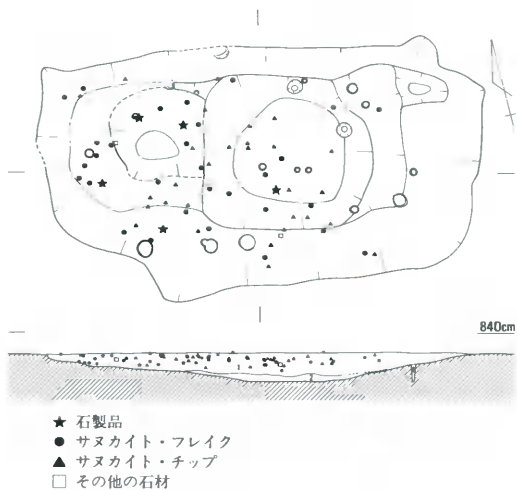
弥生土器の甕189・190の他にも若干の出土はあるが、いずれも小片である。石器は、鏃S17・18、スクレイパーS19・20が出土した他、床面からサヌカイトの薄片多数が出土している。時期は、弥生時代前期前葉～中葉の枠で捉えたい。(光永)



第37図 竖穴住居1(1/60)・出土遺物(1/4・1/2)



- 1. 淡茶褐色土
- 2. 暗茶褐色土



- ★ 石製品
- サヌカイト・フレイク
- ▲ サヌカイト・チップ
- その他の石材

第38図 竪穴住居 2 (1/60)

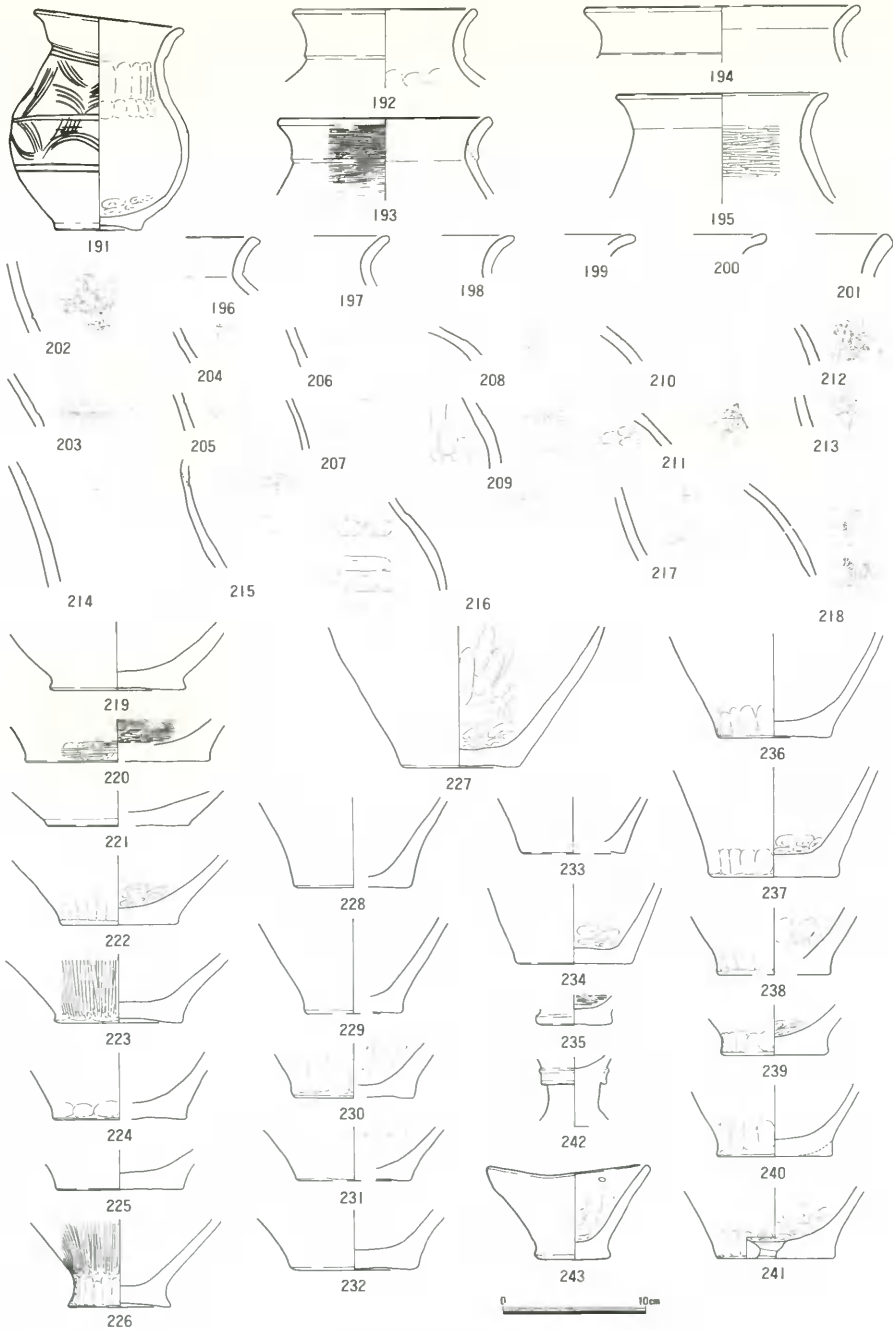
竪穴住居 2

(第38～41図、図版5-1)

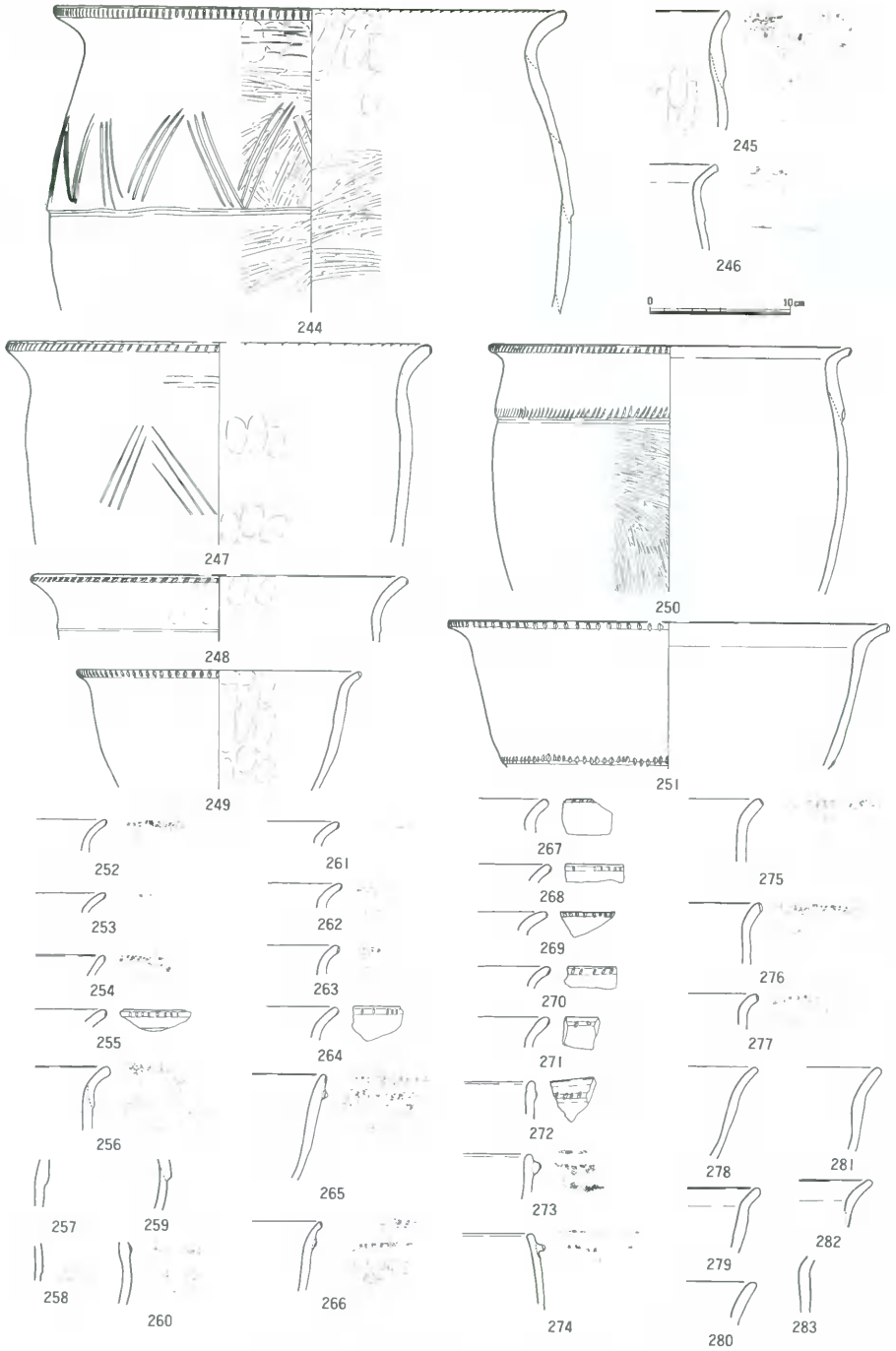
第3微高地(北)のHO区北西隅に検出された、不整形長方形の落ち込みである。検出面では短辺約2.5m、長辺約4.7m、深さは最深部で約30cmを測り、左図のように中央に向かって徐々に深さを増す。平面的には、底部の中央やや東寄りを中心とする約1.7m四方が浅く窪んでいる。そして、その窪みの部分に第2層の基盤層に近い暗茶褐色土が堆積していた。

覆土の第1層中からは比較的多量の土器片に加えて、おもにサヌカイトの石器数点、剥片・チップ60数片(他にチャート・水晶の剥片各1片)が出土している。土器片はおもに遺構中央部の第1層下部、石器類は遺構西寄りの第1層中位にそれぞれ分布が認められる。また、遺構のほぼ中央の覆土第1層の中位レベルで比較的多くの炭・焼土粒の集積も見られた。

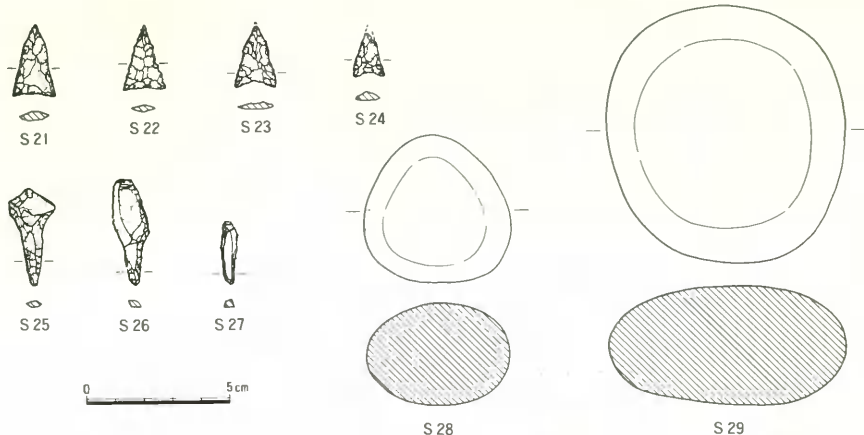
遺構的には、典型的な竪穴住居のように壁体溝や柱穴、水平な床面などが見られず、単なる大形土壌の可能性もある。さらに遺物が二次的に覆土中に混入する、いわゆる浮いた状況で出土する点は、この遺構の廃絶後の埋没過程での1パターンを示すだけで、この遺構そのものの性格とは



第39図 竪穴住居2出土遺物(1)(1/4)



第40図 竪穴住居2出土遺物(2)(1/4)



第41図 竪穴住居 2 出土遺物(3)(1/2)

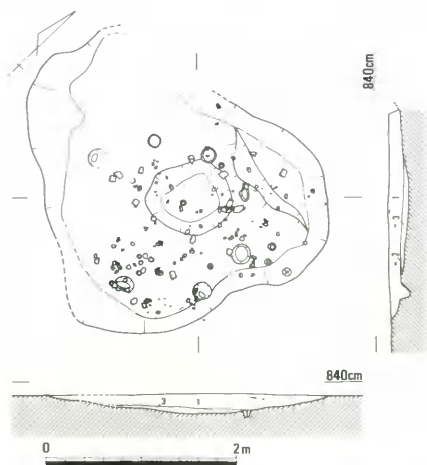
直接の関係はない。ただ、この規模の遺構が単なる上墳であった場合の方がその性格付けが困難であり、住居址あるいは工房址であった可能性も捨てきれない。ここでは竪穴住居として扱っておく。

遺物は、弥生土器（壺・甕・高杯・鉢）、石器（石鏃・石錐・刮片など）が出土している。小形壺191は唯一の完形に近い土器で、口縁部下に段をもち、肩部から胴部にかけてヘラガキの重線文や三～四重の弧文を施す。同様の文様は212・213・217・218などの肩部片にも施され、とくに212は木葉文の一部とみられる。口縁部下の段は比較的顕著な192・193と沈線様の二者が認められる。甕は、ほぼ直線的に立ち上がる口縁端部からわずかに下がった外面に突帯を繞らせる260・265・266・272～274と、口縁部が緩やかに外反しながら開く前者以外の二者がある。前者は突帯頂部にキザミ目を施し、さらに265・266は口唇部にも施す。これらは縄文晩期の突帯土器に酷似するが、器表の調整や胎土は弥生土器である。後者はさらに、肩部下に段をもつ244～246・248・250・256～259などと、それ以外のもたないものにわかれ、またそれらの両者にも口唇部にキザミ目の有無などの違いも認められる。

土器の時期は、弥生時代前期前葉を当てることができよう。（柳瀬）

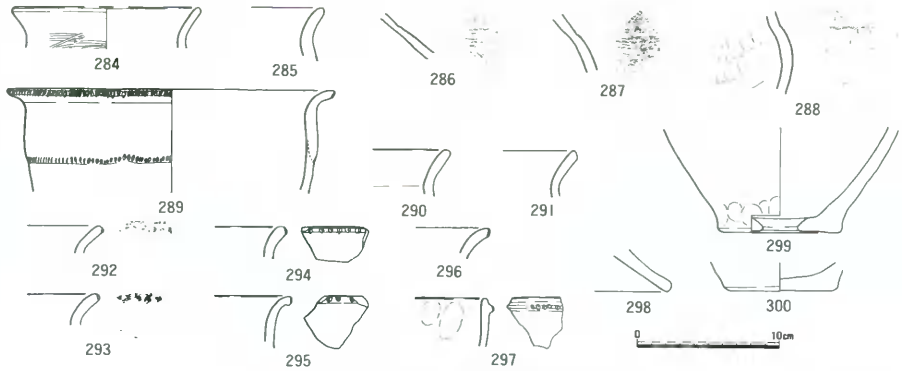
竪穴住居 3（第42・43図、図版5-2）

H O区の北西隅に検出され、竪穴住居 2 とは約 5 m 離れて存在する。土壌21の上部を部分的に削平し、溝44には一部を切られている。平面形態は不整形円形を呈し、底部は中央に向かって徐々に深さを増す。長径約 3 m、短径 2 m 前後、深さは最深部で約 20 cm を測る。底部には径 15～20 cm、深さ 10 cm 前後の小ピットが 7 本検出されている。それらは、径 160～170 cm の円周上に約 60 cm 間隔で並ぶ状況が看取され、側溝等で削平を受けた南西部の



- 1. 暗灰褐色土
- 2. 焼土・炭
- 3. 暗黄褐色土

第42図 竪穴住居 3 (1/60)

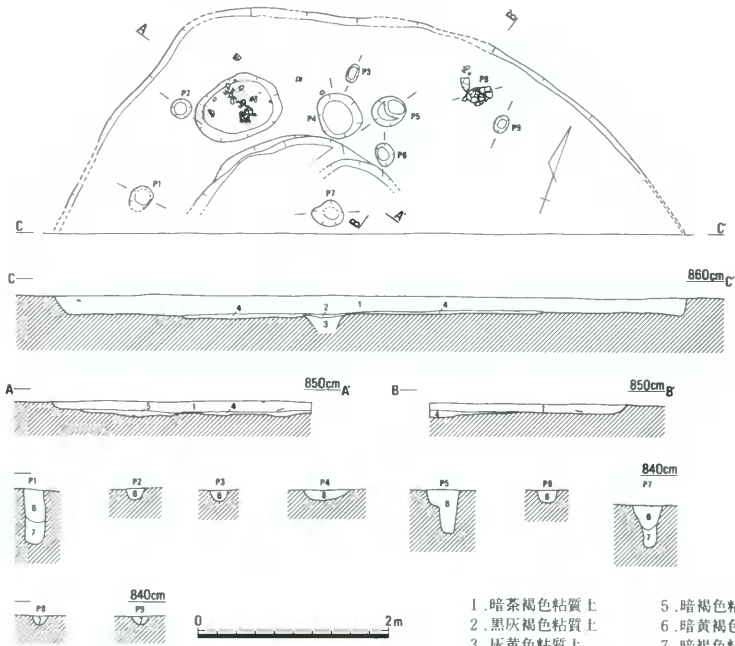


第43図 竪穴住居3出土遺物(1/4)

間隔の広い部分にも1本あったとみられることから合計8本柱であった可能性が高い。この遺構も平面形態が歪であることや壁体溝をもたない点に竪穴住居2や4と共通点があり、この時期の竪穴住居の特徴であるのかも知れない。

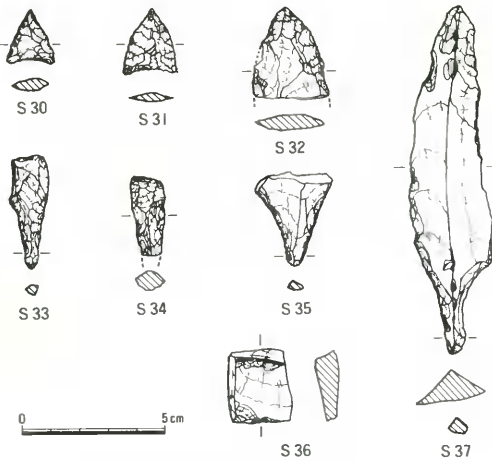
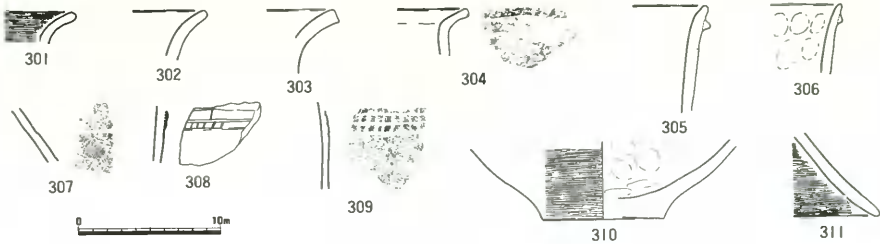
覆土中には東に寄った範囲に70数片の土器片の散布がみられたが、いずれも底からいくらか浮いて出土している。土器以外の遺物は伴っていない。

土器は壺・甕・蓋(298)が認められる。小さな破片が多く、口縁部が壺か甕かの区別がつかないものもある。甕は突帯をもつ297も含まれ、時期的に竪穴住居2と大差はない。(柳瀬)



第44図 竪穴住居4(1/60)

- | | |
|------------|------------|
| 1. 暗茶褐色粘質土 | 5. 暗褐色粘質土 |
| 2. 黒灰褐色粘質土 | 6. 暗黄褐色粘質土 |
| 3. 灰黄色粘質土 | 7. 暗褐色粘質土 |
| (焼土粒を若干含む) | 8. 茶褐色粘質土 |
| 4. 黄灰色粘質土 | (焼土粒・炭を含む) |



第45図 竪穴住居4出土遺物
(1/4・1/2)

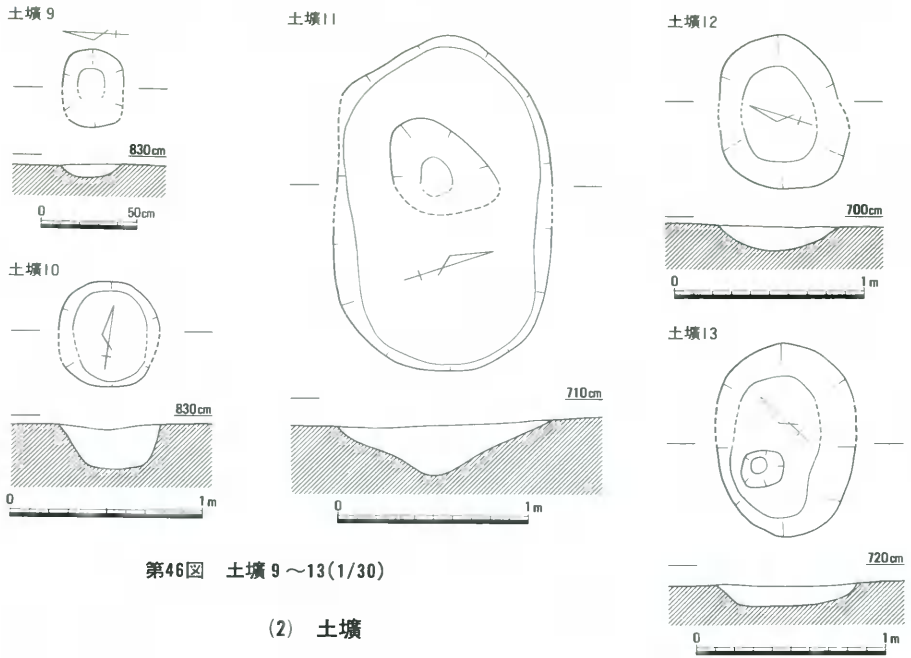
竪穴住居4 (第44・45図、図版5-3)

竪穴住居3の南西、K10区の中央に位置する。検出された平面形を正円の一部とすると、直径7mに復元でき、発掘面積は全体の1/4～1/5程度となる。検出面からの深さは15cmで床面は海拔8.2mを測る。柱穴はP1～P9の9本検出されたが、深さから主柱穴と考えられるのはP1・5・7の3本である。南溝手遺跡の竪穴住居3では主柱穴が2重に配されており、当住居でもP1・5とP7の2重に配される可能性が考えられる。P2の東には平面規模90×60cm、深さ4cm程度の浅いくぼみがある。床面が被熱しており、火処と考えられる。また中央部分が浅くぼんでいるが、この埋土にあたる第4層上面は堅くしまっており、P7も第4層から掘り込まれることから床面は第4層上面と考えられる。

出土土器はコンテナ約半分と少なく、その多くは細片で、図示しえたのは11点のみである。303・306が火処、304がP8、301がP5、それ以外は覆土からの出土である。甕には沈線を持つものはみられなかった。石器にはサヌカイト製の槍、鏃、錐、楔、チップ、フレイクが出土しているが、それ以外にメノウと思われるチップが数点出土しており、南溝手遺跡の竪穴住居2のように玉作りを行っていた可能性がある。しかし、グリーンタフといった玉材は出土しなかった。

時期は弥生時代前期前葉に遡る可能性が考えられる。

(久保)



第46図 土壇 9～13(1/30)

(2) 土壇

土壇 9 (第46図)

KO 1区北東部に位置し、低位部肩口から約16.5m離れている。

平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸長41cm、短軸長32cm、深さ7cmの規模である。埋土は暗灰黄色粘質微砂で、弥生時代前期の土器小片が出土している。(光永)

土壇10 (第46図)

KO 1区北東部に位置し、土壇 9との距離は約3mである。

平面形はほぼ円形で、径53～56cm、深さ22cmの規模である。少量の弥生土器片の出土と埋土から弥生時代前期に比定される。(光永)

土壇11 (第46図)

KO 1区低位部の谷底で土壇12～15とともに近接して検出されたもので、その検出状況から5基とも弥生時代前期に属するものと考えられる。

平面形は楕円形を呈し、長径179cm、短径115cm、深さ20cm弱の規模で、中央部がさらにくぼんで深さ27cmを測る。(光永)

土壇12 (第46図)

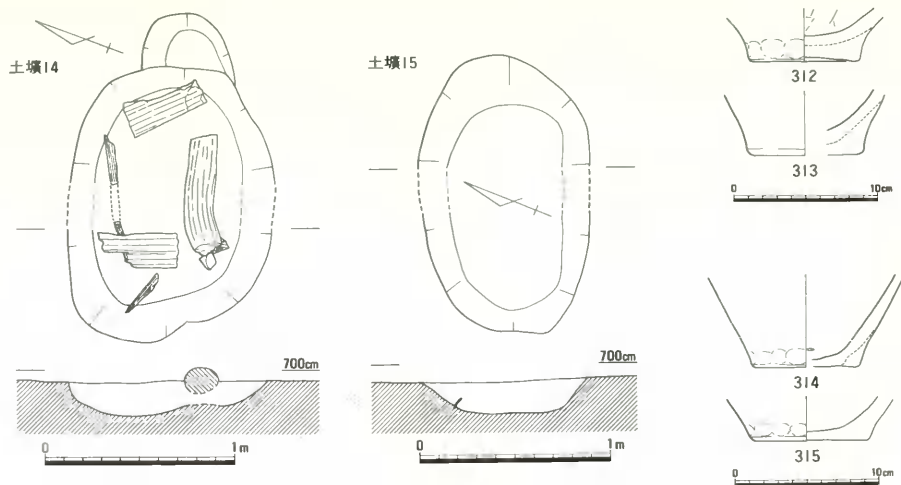
KO 1区低位部で土壇11に接して検出された。

平面形は楕円形で、長径85cm、短径68cm、深さ13cmを測る。(光永)

土壇13 (第46図)

KO 1区低位部で溝1から約1m下に位置する。

平面形は楕円形を呈し、長径103cm、短径72cm、深さ11cmを測る。ほぼ平坦な底面の西寄りには22×19×12cmの規模でくぼんでいる。(光永)



第47図 土壌14・15(1/30)・出土遺物(1/4)

土壌14 (第47図)

KO1区低位部で土壌11との距離80cmに位置する。

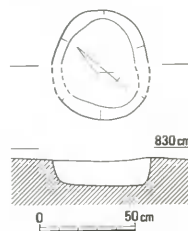
平面形は不整な楕円形で、147×107×17cmの規模を測る。墳内には木質が遺存しているが、構造物とは認められない。弥生土器の底部312・313等が出土している。(光永)

土壌15 (第47図)

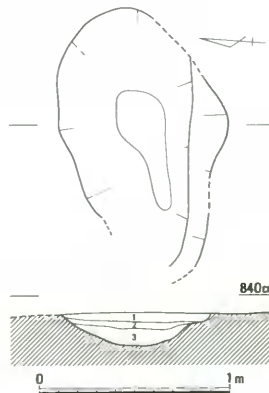
KO1区低位部で土壌14との距離80cmに位置する。

平面形は楕円形で、147×90×17cmの規模である。埋土からは、底部314・315等の弥生土器片が出土している。(光永)

土壌16



土壌17



1. 灰黄褐色粘質微砂
2. にぶい黄褐色粘質微砂
3. 灰黄褐色粘質微砂

第48図 土壌16・17(1/30)

土壌16 (第48図)

KO2区の東端に位置し、土壌17との距離は約5.7mである。

平面形は楕円形を呈し、58×50×14cmの規模である。少量の弥生土器片の出土により、弥生時代前期に比定される。(光永)

土壌17 (第48図)

KO2区東部に位置し、西端を失っているが平面形は不整な楕円形に復元され、現存長径152cm、短径83cm、深さ18cmを測る。少量の弥生土器片により弥生時代前期に比定される。(光永)

土壌18 (第49図)

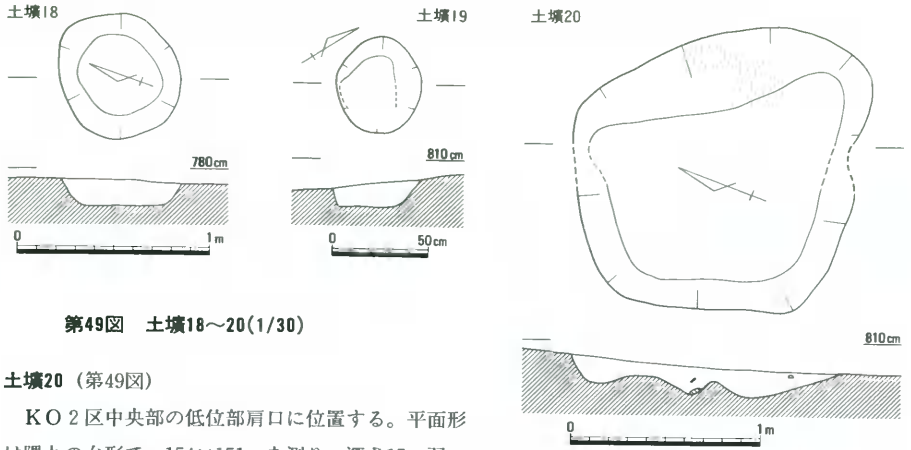
KO2区中央部で低位部への斜面に位置し、溝1との距離は1.1mである。平面形は不整な楕円形で、67×60×13cmの規模を示す。検出状況と少量の土器片から弥生時代前期に比定される。(光永)

土壌19 (第49図)

KO2区中央部で低位部の肩口に位置し、土壌20に近接する。

平面形は楕円形で、50×45×15cmの規模である。(光永)

第3章 発掘調査の概要



第49図 土壌18～20(1/30)

土壌20 (第49図)

KO 2区中央部の低位部肩口に位置する。平面形は隅丸の台形で、154×151cmを測り、深さ15cm弱の底面には凹凸がある。少量の土器片の出土により、弥生時代前期に比定される。

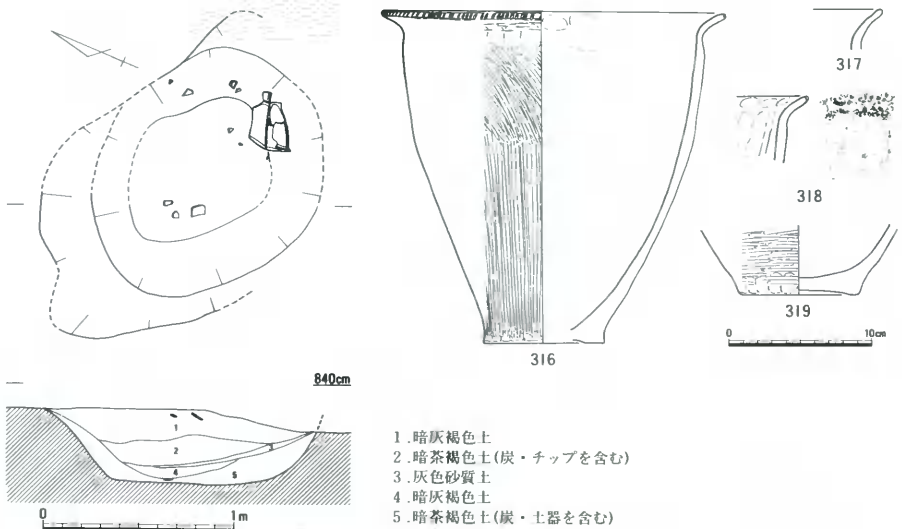
(光永)

土壌21 (第50図、図版6-1)

竪穴住居3の北西端の一部重複した位置に検出され、切り合い関係でいえば、竪穴住居3に先行する。平面的には、長軸推定1.9m、短軸約1.2mの不整楕円形、検出面から約10cm下では径1.2m前後のほぼ円形を呈す。深さは約40cmを測り、底部は比較的平たく、掘り方の断面は逆台形に落ち込む。土壌内の土層堆積状況から、第1～4層と第5層の2時期にわたって使用されたことが看取される。

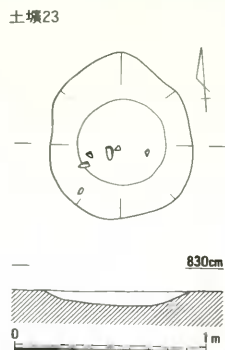
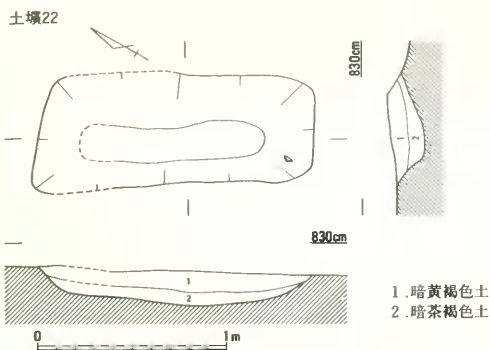
出土遺物は、図示した前期土器のほかはサヌカイトの剥片3片と少量の炭しかなく、317と剥片が第1・2層、それ以外は第5層に伴っていた。土器にとくに時期差は認められない。

(柳瀬)



第50図 土壌21(1/30)・出土遺物(1/4)

1. 暗灰褐色土
2. 暗茶褐色土(炭・チップを含む)
3. 灰色砂質土
4. 暗灰褐色土
5. 暗茶褐色土(炭・土器を含む)



第51図 土壌22・23(1/30)

土壌22・23 (第51図)

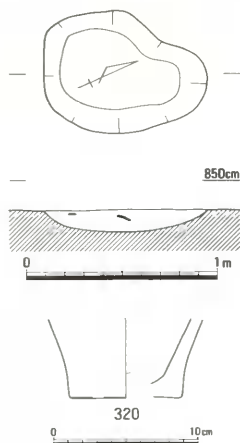
土壌22は、一部を竪穴住居2の西端部に切られて存在する。平面形は約150×60cmの隅丸長方形を呈し、深さは18cmを測る。規模は小さいが形態的には土壌墓の可能性もある。遺物は第1層から土器片と土鏝が各1点出土しているのみである。土壌23は、竪穴住居2の南東隅から50～60cmほど離れた位置に検出された、径80cm前後のほぼ円形で深さ7～8cmの浅い土壌である。数片の土器片のみ出土している。いずれも暗褐色系の土が堆積し、時期も土壌21などと大差はないと思われる。(柳瀬)

土壌24 (第52図)

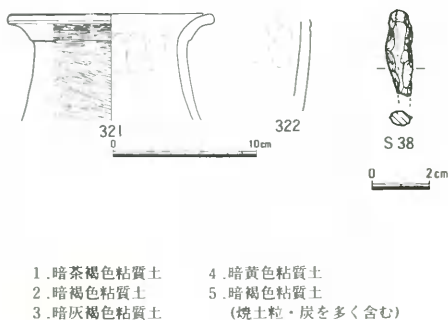
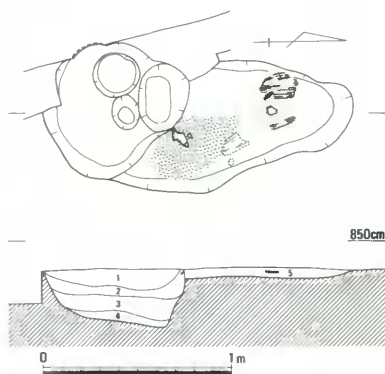
K10区の西端、竪穴住居4の西に位置する。平面規模85×65cm、深さ12cm、底面の海拔は8.22mを測る。土壌32と同じ暗茶灰褐色粘質土で埋没しており弥生時代前期中葉と考えられる。(久保)

土壌25 (第53図、図版6-2)

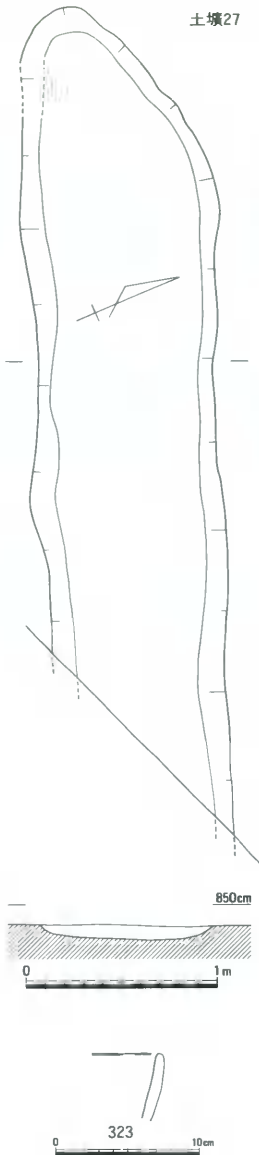
土壌24の東に位置し、南半を他土壌に切られて全容は不明である。深さ6cm、底面の海拔高8.3mを測る。床面の一部が被熱し、炭化材も散布していた。出土土器から弥生時代前期中葉と考えられる。(久保)



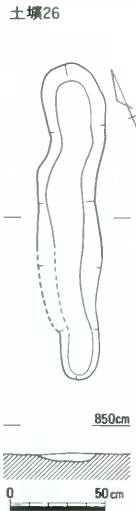
第52図 土壌24(1/30)・出土遺物(1/4)



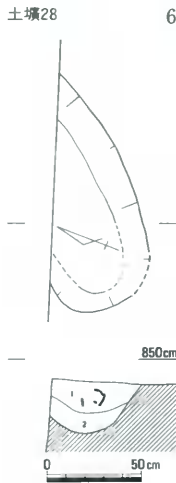
第53図 土壌25(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)



土壌27



土壌26



土壌28

土壌26 (第54図)

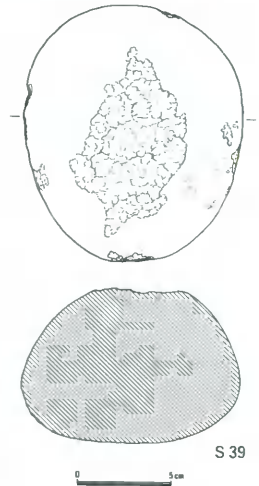
土壌25の東に位置し、土壌27を切る。170×30cmの細長い平面形を呈し、深さ5cm、底面の海拔高は8.3mを測る。土器は出土しているが細片で、時期の特定はできない。埋土の状況から弥生時代前期であろう。(久保)

土壌27 (第54図)

土壌26の北側に位置し、土壌26に一部切られる。南端が調査区外にのびるため全容は不明である。検出された規模で長さ4.5m、幅90cm、深さ8cm、底面の海拔高8.3mを測る。323のほかにも土器が少量出土しており、弥生時代前期と考えられる。(久保)

土壌28 (第54図)

土壌27の北に位置する。北側が調査区外となるため全容は不明である。断面U字で他の土壌群とは形状が異なっており、後述する土壌29のような形態をとるのかもしれない。幅60cm、深さ約30cm、底面の海拔高8.1mを測る。



- 1. 暗灰褐色粘質土
- 2. 暗黄灰色粘質土



第54図 土壌26～28(1/30)・出土遺物(1/4・1/3)

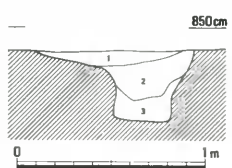
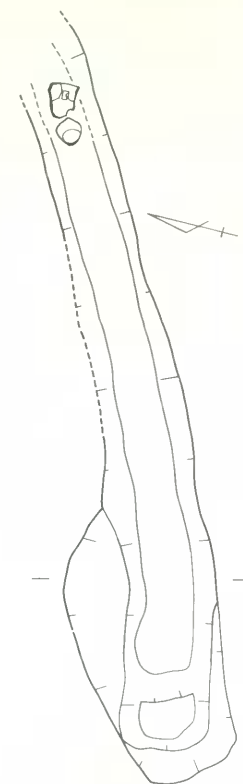
遺物には**324～326**の土器のほか、敲石と思われる石器**S39**も出土している。弥生時代前期中葉と考えられる。(久保)

土壌29 (第55図、図版6-3)

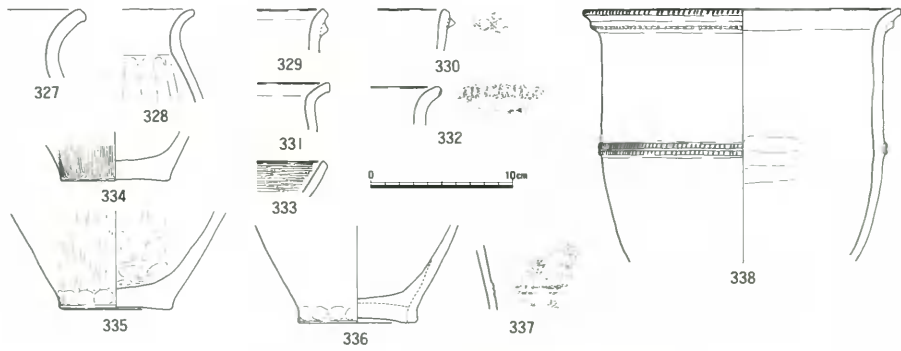
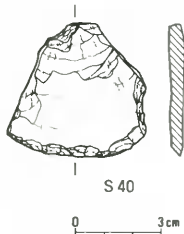
土壌28の東に位置する。土壌30・31に切られる。西端が広がっているが、幅約45cm、長さ4mの東西に細長い溝状の遺構で、深さ約40cm、底面の海拔高8.0mを測る。断面は台形で、底面もほぼ平らである。出土遺物には土器、石器がある。**338**は平面図に図示してある土器で、刻目突帯を持つ甕である。口縁形態は緩やかな如意状で、胴部もあまり張らない。胴部中央は幅1～1.5cm程度の低い隆起帯を付し、縦に沈線状の刻みを施し、さらにその中央に沈線を加えている。胴部の段が変化したものであろうか。図示した以外に沈線をめぐらした壺もあるが、弥生時代前期前葉に遡る可能性が高いと考えられる。(久保)

土壌30 (第56図、図版7-1)

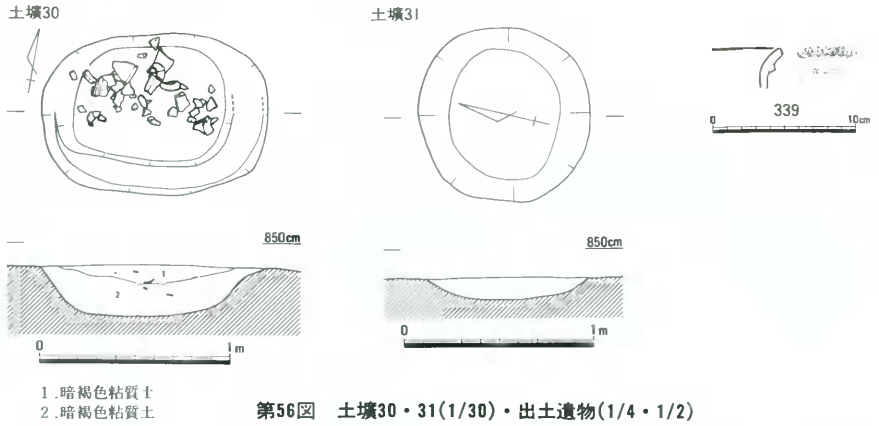
土壌29の中央付近に一部かかる土壌で、120×85cmの楕円形を呈し、深さは約30cm、底面の海拔高8.1mを測る。出土遺物は比較的多く、**340～348**の土器や石器がある。多くは上層から出土しているが、**340**は底面に接していた。また、**340**には直径1cm弱の朱塊が付着していた(朱の成分分析については付載2に譲る)。土器には図示したように削出突帯の壺、刻目突帯を有する甕、沈線化した段を有する鉢などがある。時期は弥生時代前期中葉と考えられる。(久保)



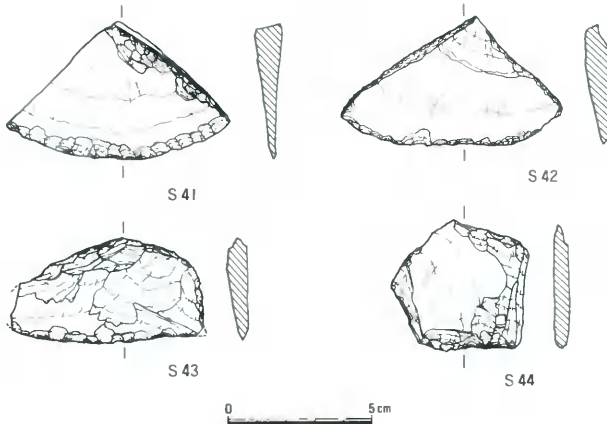
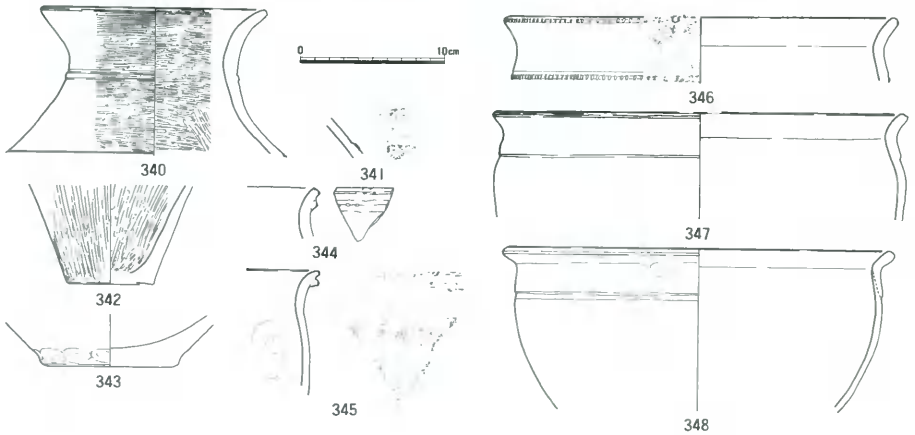
- 1. 暗褐色灰色粘質土
- 2. 暗茶褐色灰色粘質土
- 3. 暗黄灰色粘質土



第55図 土壌29(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)



第56図 土壌30・31(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)

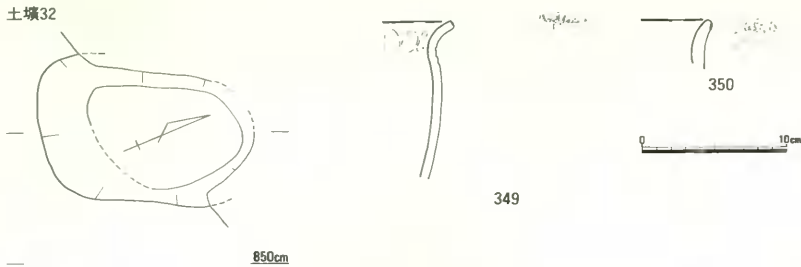


土壌31 (第56図)

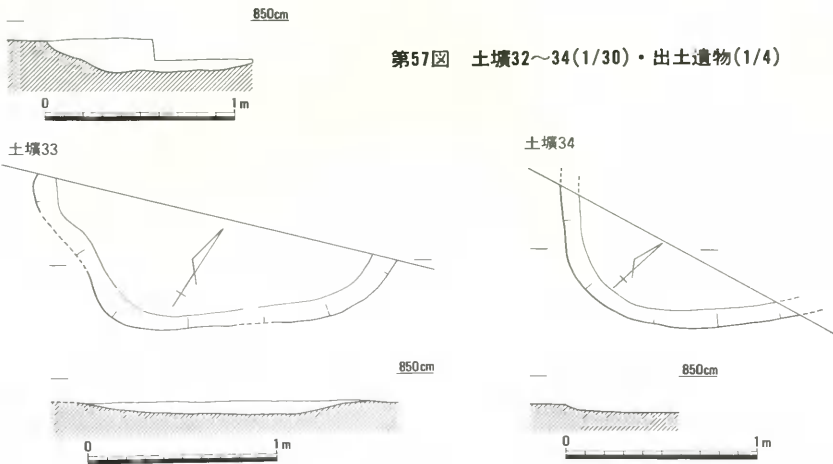
土壌30の東に位置し、土壌29の東端を切る。直径90cm、深さ約10cm、底面の海拔高8.23mを測る。切り合いから土壌29よりは新しいが、弥生時代前期中葉の範疇と考えられる。(久保)

土壌32 (第57図)

土壌31の北東に位置し、北側を側溝で欠く。深さ約20cm、底面の海拔高8.23m



第57図 土壌32～34(1/30)・出土遺物(1/4)



を測る。349・350など土器が少量出土しており、弥生時代前期中葉と考えられる。(久保)

土壌33 (第57図)

土壌32の東に位置する。北側が調査区外となり全容は不明である。深さ7cm程度の浅い土壌で底面の海拔高は8.3mを測る。図化し得なかったが土器が少量出土しており、口縁直下に刻目突帯を持つ甕片などがみられる。時期は弥生時代前期中葉頃と考えられる。(久保)

土壌34 (第57図)

土壌33の東に位置する。北側が調査区外となり全容は不明である。深さ4cm、底面の海拔高は8.3mを測る。壺の肩部細片が出土しており、弥生時代前期中葉と考えられる。(久保)

土壌35 (第58図)

CH4区中央部に位置し、土壌36との距離は約7mである。北東隅を調査区外に置くが、平面形は長方形に復元され、現存長軸長100cm、現存短軸長65cm、深さ13cmを測る。遺物は出土していないが、検出状況から弥生時代前期に比定しうる。(光永)

土壌36 (第58図)

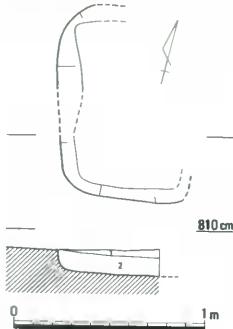
CH4区中央部に位置し、土壌37との距離は約3.7mである。

平面形は楕円形で、長径85cm、短径78cm、深さ25cmを測る。埋土にはふい黄色粘質微砂で、検出状況により、弥生時代前期に比定される。(光永)

土壌37 (第58図)

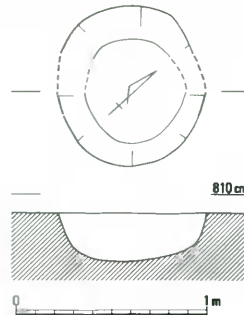
CH4区中央部南寄りに位置し、溝2との距離は1.5mである。

土壌35

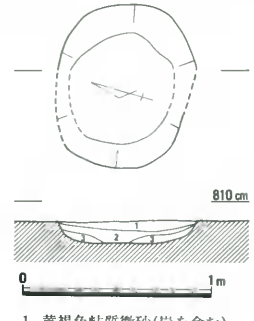


1. 暗灰黄色粘質微砂
2. 黄褐色粘質微砂

土壌36



土壌37



1. 黄褐色粘質微砂(炭を含む)
2. 黄褐色粘質微砂(焼土粒を含む)
3. 濃い黄色粘質微砂

第58図 土壌35～37(1/30)

平面形は楕円形を呈し、長径87cm、短径71cm、深さ11cmの規模で、埋土は3層に分けられる。検出状況から弥生時代前期に比定される。(光永)

土壌38 (第59図)

CH 4区南部に位置し、溝2から約11.5m離れる。

平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸長87cm、短軸長50cm、深さ10cmをそれぞれ測る。埋土は黄褐色粘質微砂で、これにより弥生時代前期に比定される。(光永)

土壌39 (第59図)

CH 4区南部に位置し、土壌38との距離2.2mを測る。

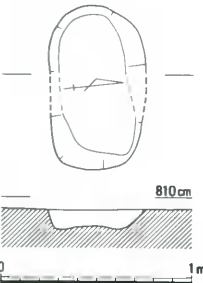
平面形は隅丸の長方形で、長軸長105cm、短軸長71cm、深さ9cmの規模を示す。埋土により、弥生時代前期に比定される。(光永)

土壌40 (第59図)

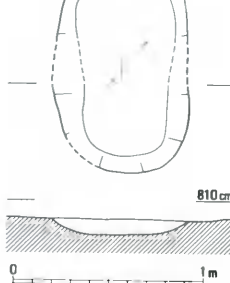
CH 4区南部で、河道2の肩口に位置し、土壌39との距離は6.7mである。

西辺を側溝で失っているが、平面形は楕円形に復元され、現存長軸長130cm、現存短軸長94cm、深さ38cmを測って、北東部が深くなっている。埋土と検出状況から弥生時代前期に比定される。(光永)

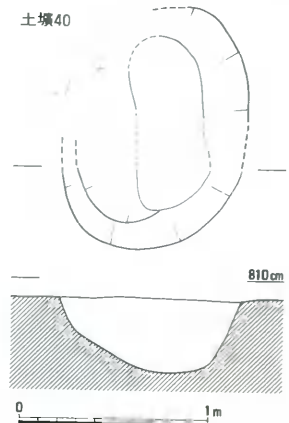
土壌38



土壌39



土壌40



第59図 土壌38～40(1/30)

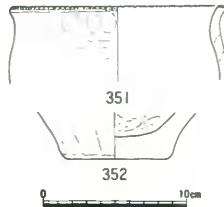
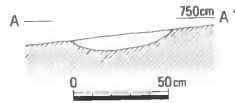
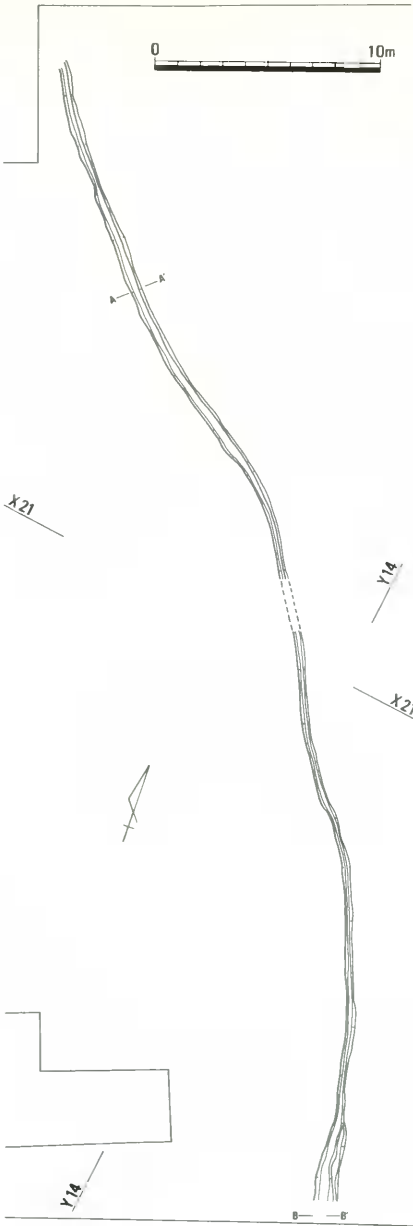
(3) 溝

溝1 (第60図、図版7-2)

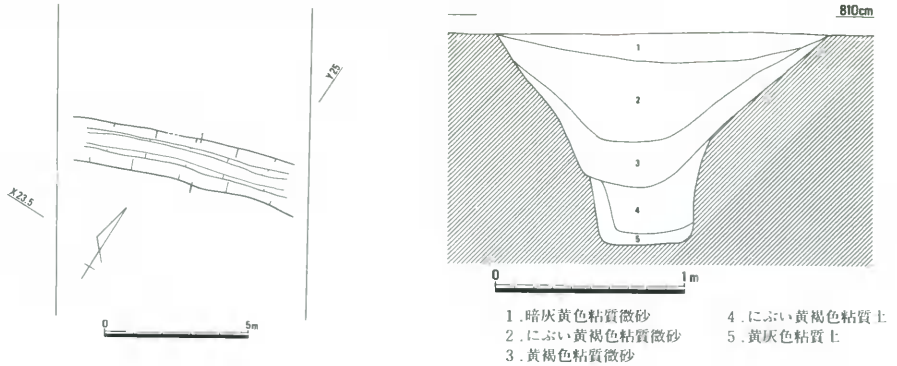
KO1・2区において、第3低位部の東斜面に沿うように、肩口から3.5～4.5mの位置で、延長53m以上が検出された。北半においては、上幅25～50cmであるが、南端では上幅75cm、下幅45cm、深さ16cmの規模を示す。甕351・352等の弥生土器や、石鏃S45等が出上しており、時期は弥生時代前期前葉～中葉に求められる。(光永)

溝2 (第61図、図版7-3)

CH4区中央やや南寄りの地点を東西に横断する形で延長17mが検出された溝で、他の調査区にこれと繋がる溝は見当らない。上幅170cm強の検出面から深さ60cm程度まではV字形に開き、下幅45cm前後で海拔6.90mの底面から50cm程は矩形の断面を呈する。第4・5層の堆積後に第3層下面迄の掘り直しが行なわれたとも見える。少量の土器片の出土により、弥生時代前期に比定される。(光永)



第60図 溝1 (1/250・1/30)・出土遺物(1/4・1/2)



第61図 溝2 (1/200・1/30)

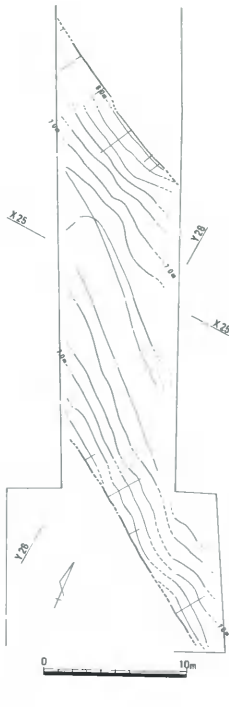
(4) 河道

河道2 (第62・63図、図版8-1)

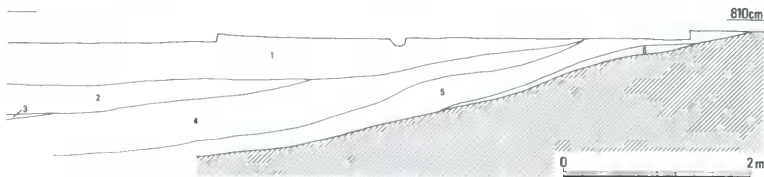
CH 4区南隅からCH 5区北部で検出された河道で、北西から南東へ流路を置く。

肩口で計測して延長80m程度を検出したこととなるが、幅については推定値で約16mとなる。北岸肩口の海拔高約8.0mに対して南岸では7.5m程度と低く、底面の海拔高は6.4m程度である。埋土は下半の粘質微砂に対して中層に粘土化した部分が見られる。

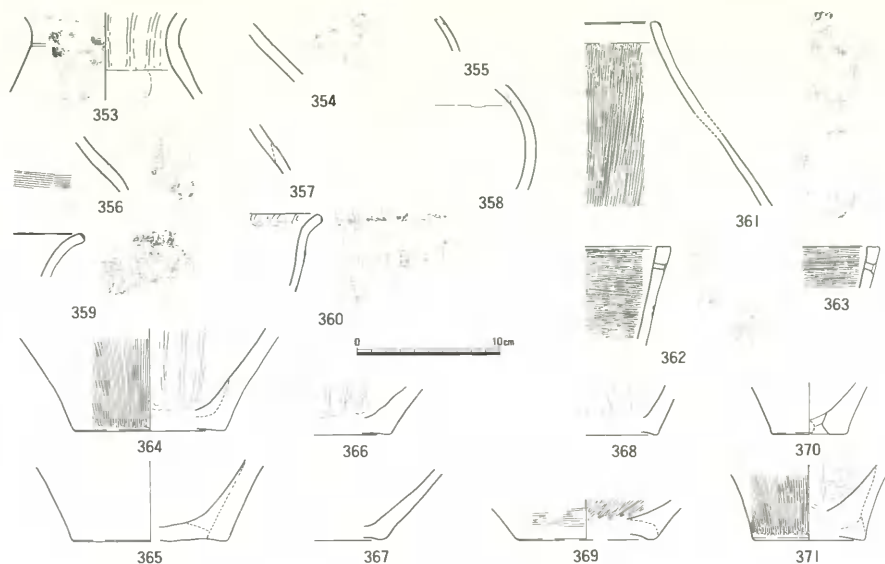
出土遺物には、弥生土器の壺**353~358**、無頸壺**361**、甕**359・360**、鉢**362・363**、底部**364~371**等がある。**353・354・356・357**の頸部には沈線が巡り、**361**は口唇部外面に刻目をもち、櫛描沈線による波状文が施されている。**359・360**の口唇部外面にも刻目が施されており、**362・363**には穿孔が残る。底部の外面はほぼ平底であり、**370**には焼成前の穿孔が見られる。これらにより、河道の埋没時期は弥生時代中期前葉に求められる。



- | | |
|--------------------------|-------------|
| 1. 暗褐色粘質微砂
(炭・燼土粒を含む) | 4. 灰黄褐色粘質微砂 |
| 2. 暗灰黄色粘土 | 5. 黒褐色粘質微砂 |
| 3. 黒褐色粘土 | 6. 灰黄褐色粘質微砂 |



第62図 河道2 (1/400・1/60)



第63図 河道2 出土遺物(1/4)

前段階の縄文時代晩期においては、南溝手遺跡から東へ続く河道が、K区南西部を經由して東へ進み、その東側の調査対象外の範囲内で大きく湾曲してHW3区からCH5区南部へと流路をのびた状況が想定され、HW3区での検出状況を河道1として前述している。これに対して、この河道2の検出状況は、K区東側での湾曲が想定される地点において、弥生時代前期段階に変化がみられ、その湾曲の度合いを鈍化させてこの河道2の方向へ向けたとも考えるものである。

後述する河道4との関連については、河道4の開析が弥生時代中期中葉を遡らないことから、考えられない。

(光水)

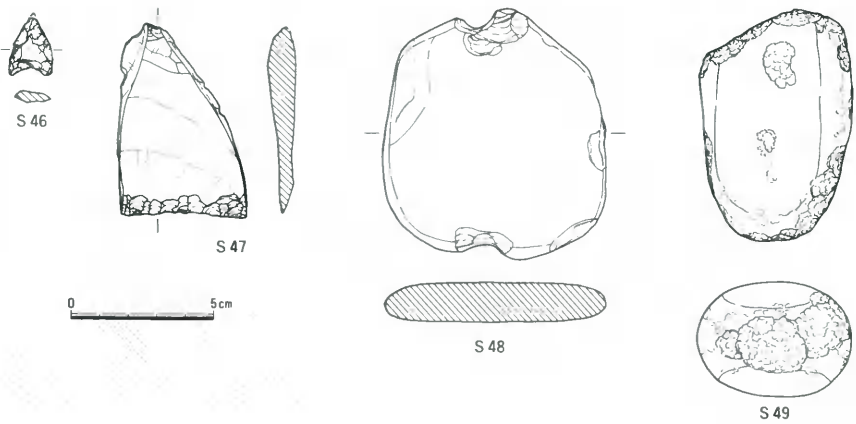
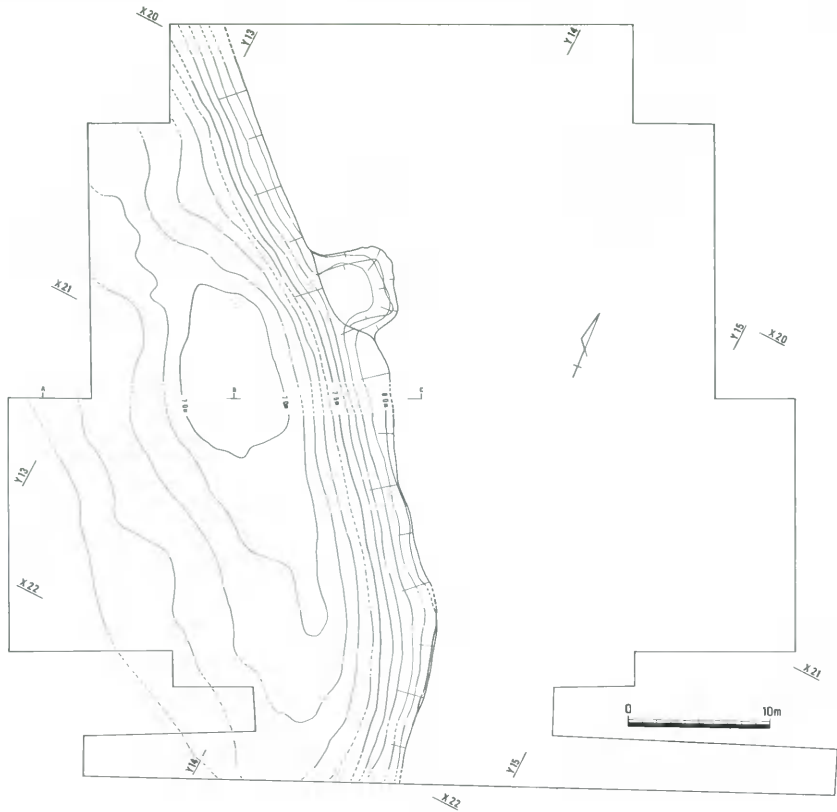
(5) その他の遺構・遺物

第3低位部 (第64～67図)

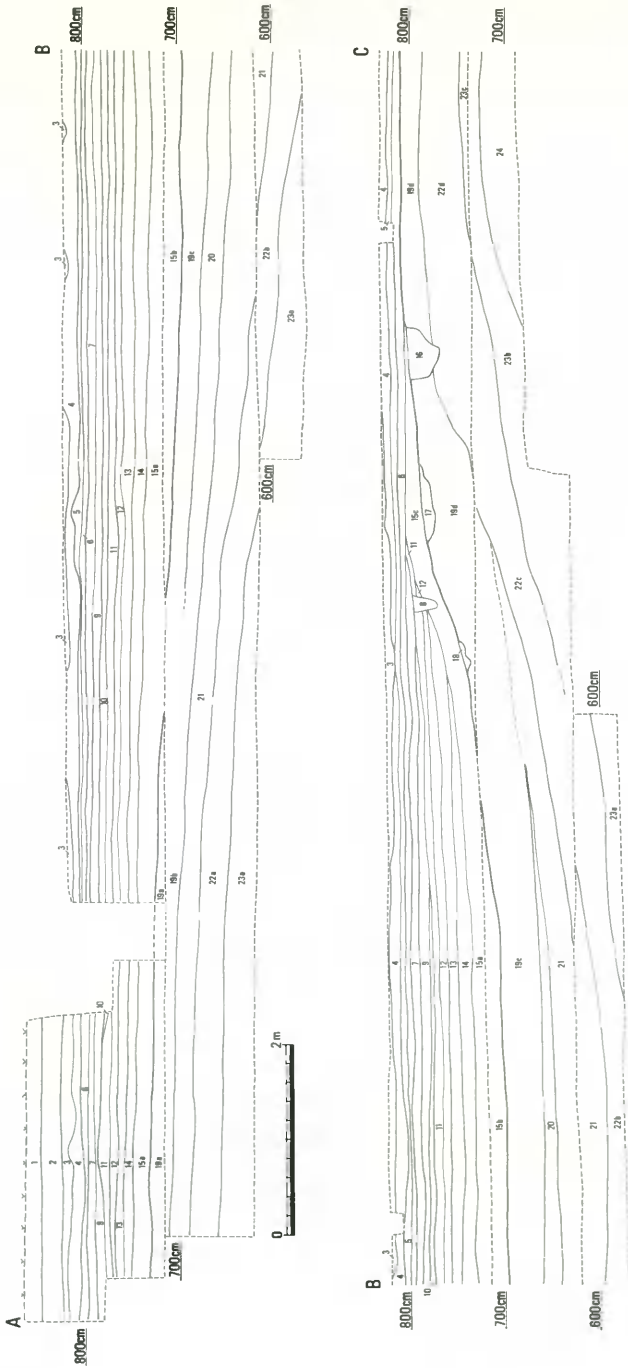
第3低位部の調査された調査区は、KO1・2区であるが、その東肩口を辿ると、KO1区中央部やや南寄りの部分で平面方形に窪む箇所が認められる。竪穴住居1との距離は17mを測り、底面において溝1より50cmほど高位に位置する。検出された最大規模は南北長約6m、東西長約4.6mであるが、これからやや下がって1辺約4.1mの方形を呈する肩が見られるものである。海拔7.8m前後を測る底面へは緩やかに下がり、壁面との屈曲点は見られない。この部分の埋土は周辺の低位部肩口と同様で、この部分のみが別個の遺構という判断はできないが、その形状は人為的なものを思わせる。

第64・66・67図に出土遺物を掲載しているが、土器については一部文様の残る胴部片を除いて、口縁部および底部を図化している。口径を算出できない口縁部の破片については、その傾きの不明確なものも多い。

壺の口縁部から胴部については、372～390の19点を掲載している。口縁部はいずれも「く」字状に屈曲して開くものであるが、375は屈曲が弱く、372・374・376・377では屈曲部外面に削り出しによる



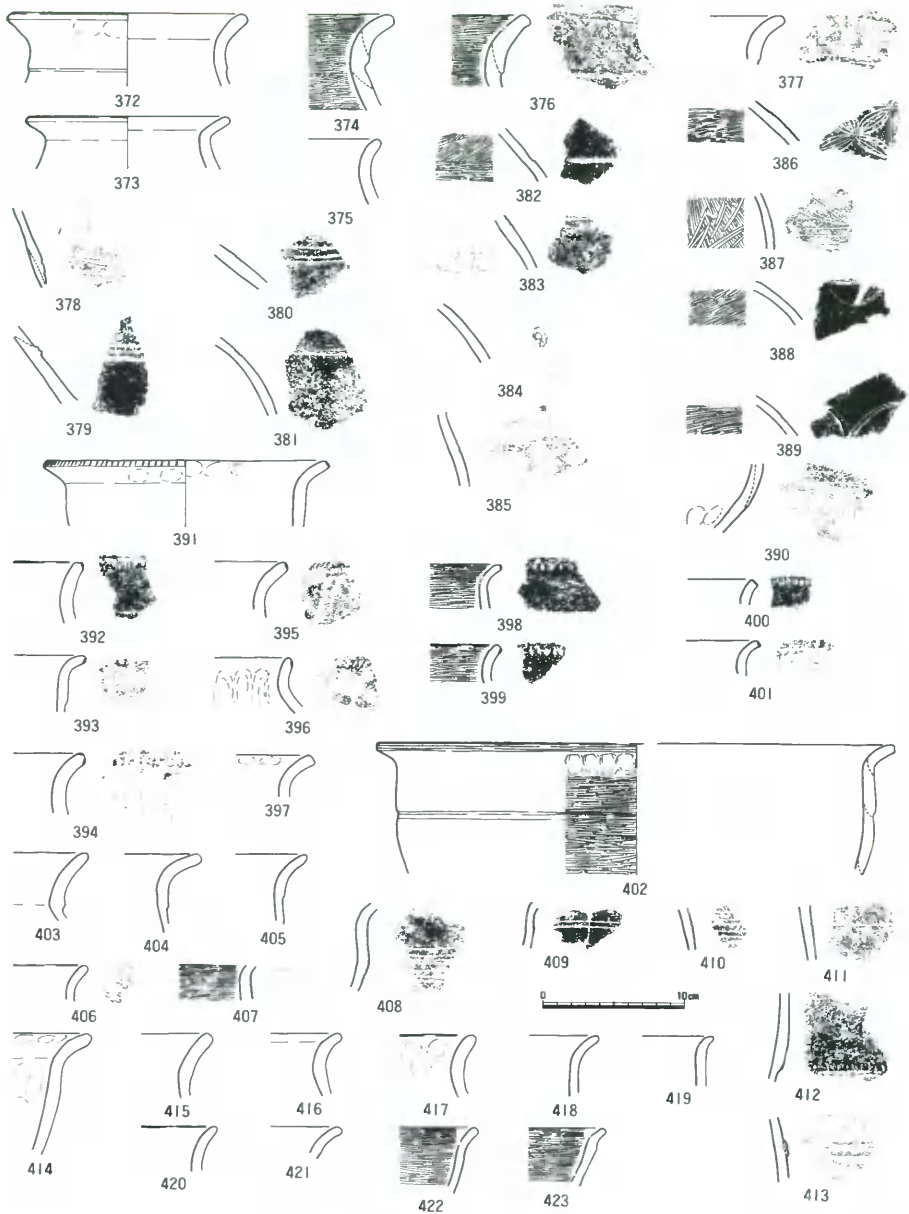
第64図 第3低位部(1/400)・出土遺物(1)(1/2)



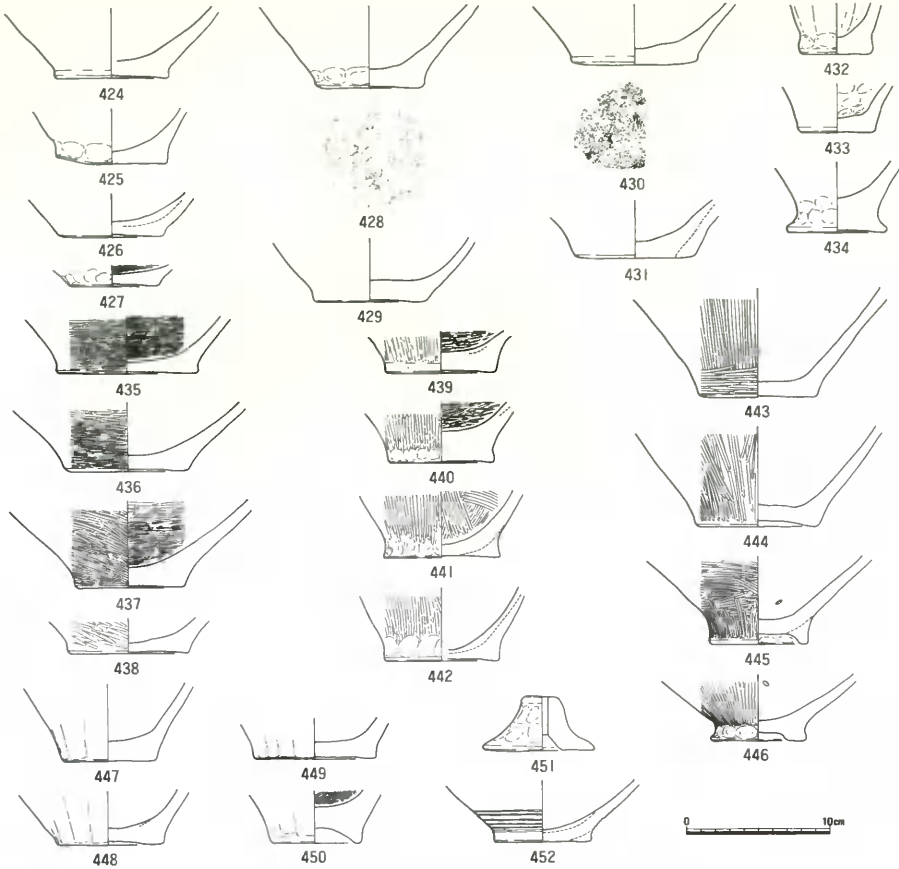
- | | | |
|-------------------------|-----------------------|------------------|
| 1. 暗灰黄色弱粘質微砂(砂粒を含む) | 19b. 灰オリーブ色粘質微砂 | 22c. 灰色粘土(炭を含む) |
| 2. 黄褐色粘質微砂(Mn層を数層含む) | 19c. 灰色粘質微砂 | 22d. オリーブ褐色弱粘質微砂 |
| 3. 黒褐色粘質微砂と灰白色粘質微砂の互層 | 19d. 黄褐色弱粘質微砂 | 23a. オリーブ黒色粘土 |
| 4. 黒褐色粘質微砂 | 20. オリーブ灰色粘質微砂 | 23b. オリーブ灰色弱粘質細砂 |
| 5. 暗灰黄色粘質微砂 | 21. オリーブ黒色粘土(土器・炭を含む) | 23c. 灰オリーブ色細砂 |
| 6. 暗オリーブ褐色粘質微砂 | 22a. オリーブ灰色粘質微砂 | 23d. オリーブ褐色細砂 |
| 7. 黒褐色粘質微砂 | 22b. 灰色粘質微砂 | 24. 暗オリーブ色粘質微砂 |
| 8. 灰黄褐色粘質微砂 | | |
| 9. 暗褐色粘質微砂 | 15a. オリーブ黒色粘質微砂 | |
| 10. にぶい黄褐色粘質微砂(炭・土器を含む) | 15b. 黒色粘土 | |
| 11. 暗褐色粘質微砂 | 15c. 暗褐色粘質微砂(炭・土器を含む) | |
| 12. 黄褐色弱粘質微砂 | 16. 暗灰黄色粘質微砂 | |
| 13. 暗灰黄色粘質微砂 | 17. 灰黄褐色粘質微砂 | |
| 14. 灰色粘質微砂 | 18. 黄褐色粘質微砂 | |
| | 19a. 黄褐色粘質微砂 | |

第65図 第3低位部断面図(1/60)

段が見られる。肩部の**382**に逆向きの削り出しによる沈線が見られる他、**378・380・381・383**に2条の沈線が施され、**385**では2条の沈線間に縦線が刻まれている。**379**では削り出しによる突帯上に1条の沈線が巡らされている。胴部の文様については、**386・387**が有軸木葉文で、**388**が下向き、**389・390**が



第66図 第3低位部出土遺物(2)(1/4)



第67図 第3低位部出土遺物(3)(1/4)

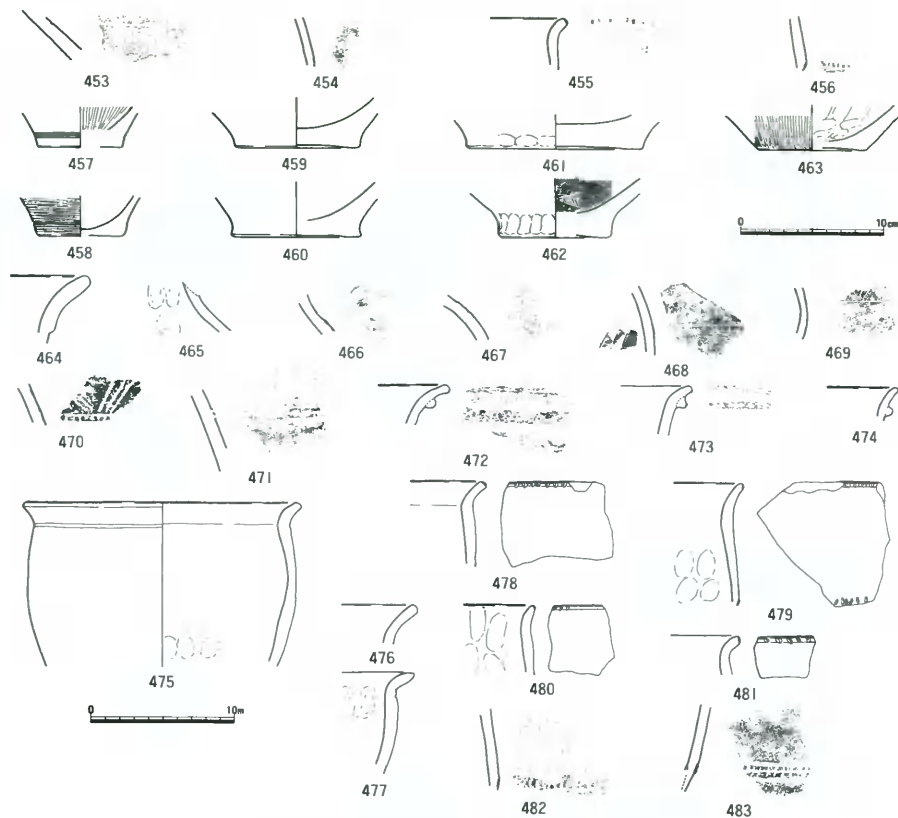
上向きの重弧文である。

甕の口縁部のうち、391～401は口唇部外面に刻目をもつもので、394では上面にも刻目が施されている。393・402～406・412は胴部上方に削り出しによる段が見られ、412では段の肩に刻目が施されている。407～411では胴部上半にヘラ描きの沈線が巡らされている。413は貼り付け突帯の上に1条の沈線と縦線が刻まれている。口縁部の屈曲はいずれも緩やかである。

底部については、全体にほとんど平底に近いが若干上げ底が残るという傾向である。424・425・428・434・435・441・442・452等には胴部下端を外方へ角ばらせる傾向が見られ、425・427・428・432・434・440～442には胴部外面下端に指押えの痕跡が残る。447～449には同じ箇所にも面取りの工具の使用痕が見られる。445・446・450は高台的な上げ底であり、452の胴部外面下端にはヘラ描の平行沈線が巡らされている。428・430の底部外面と445・446の胴部内面には靱痕が残っている。451は蓋と考えられるが、中央に貫通孔がある。

時期は、弥生時代前期前葉から中葉に属するものと考えられる。

(光永)



第68図 南半調査区出土遺物(弥生時代前期)(1/4)

第3 微高地 (第68図)

微高地上からはこの時期の遺物は多く出土してはいない。

453～462がH O区の溝40に混入したものである他、466・467・469・476・478～481・483がH O区からの出土である。464・470もK区内の溝40から出土している。473・475がK10区の柱穴から出土し、474もK区からの出土である。この他、465・468・477はHW1区の包含層から出土している。

いずれも、弥生時代前期前葉～中葉の枠に入るものと思われる。

(光永)

第4節 弥生時代中期中葉～後期の遺構・遺物

1. 概要

弥生時代中期中葉から後期にかけての遺跡地は、河道部分を除くと大部分が微高地となっており、大規模な集落の存在が想定される。最盛期を迎えるのは後期前葉で、竪穴住居・掘立柱建物・袋状土壙・井戸・土壙墓・溝などの多様な遺構群によって構成される。溝の中には、溝20や溝27のように長大なものもあり、集落の中でどのような機能を担っていたのか注目される。

出土遺物の大半を占めるのは弥生土器で、壺・甕などの煮沸器種のほかに高杯・器台などがみられる。このほか鏃・槍などの武器、狩猟具としての石器や、農耕具を主体とした木製品がある。(岡田)

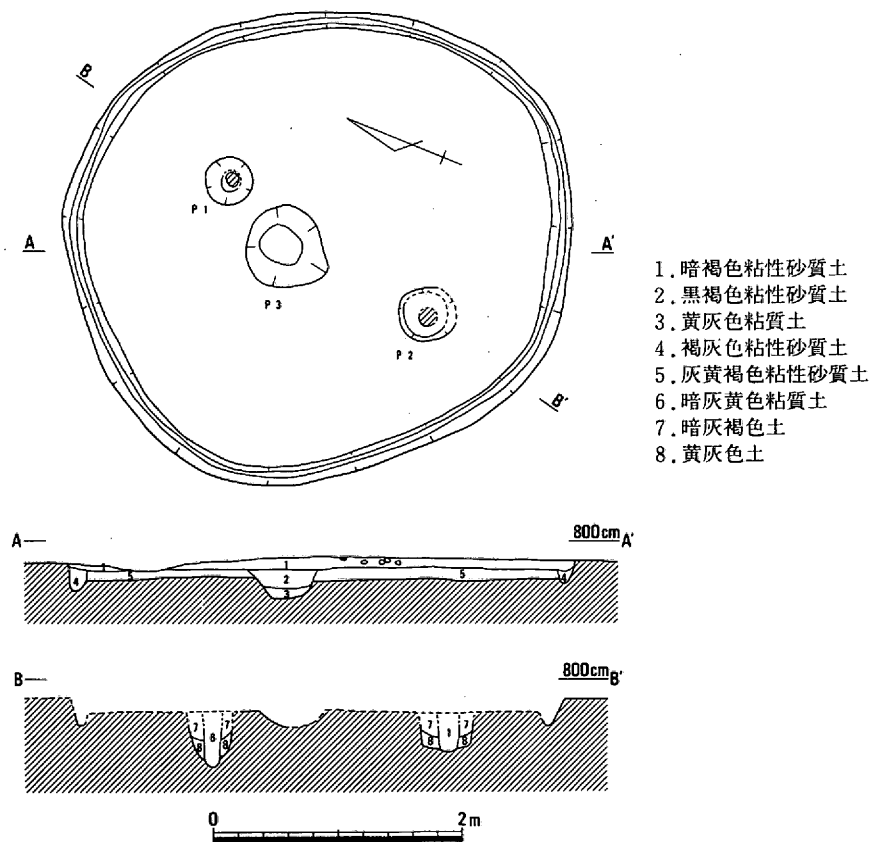
2. 遺構・遺物

(1) 竪穴住居

竪穴住居 5 (第69図、図版 8-2)

T A区の東半北部で検出された。平面形は不整な円形で、長径が412cm、短径は375cmを測る。残存状況は悪く、床面までの深さは10cmにすぎなかった。主柱穴は2個で、それらの中間から北西にずれて中央穴が掘られていた。柱穴の長径は48cmと49cmで、深さは40cmと34cmであった。ともに直径15cm

程度の柱痕が確認された。中央穴の平面形は円形に近く、断面は橢圓形を呈する。その規模は長径が73cm、深さは23cmであった。中央穴の周囲には堤状の施設は認められなかった。中央穴の埋土は2層で、上層には焼土が、下層では多量の炭が含まれていた。竪穴の縁辺には幅20cm前後の壁体溝が巡り、床面からの深さは10~20cmであった。竪穴住居内の埋土は暗褐色粘性砂質土の1層だけで、焼土や炭の塊を含んでいた。



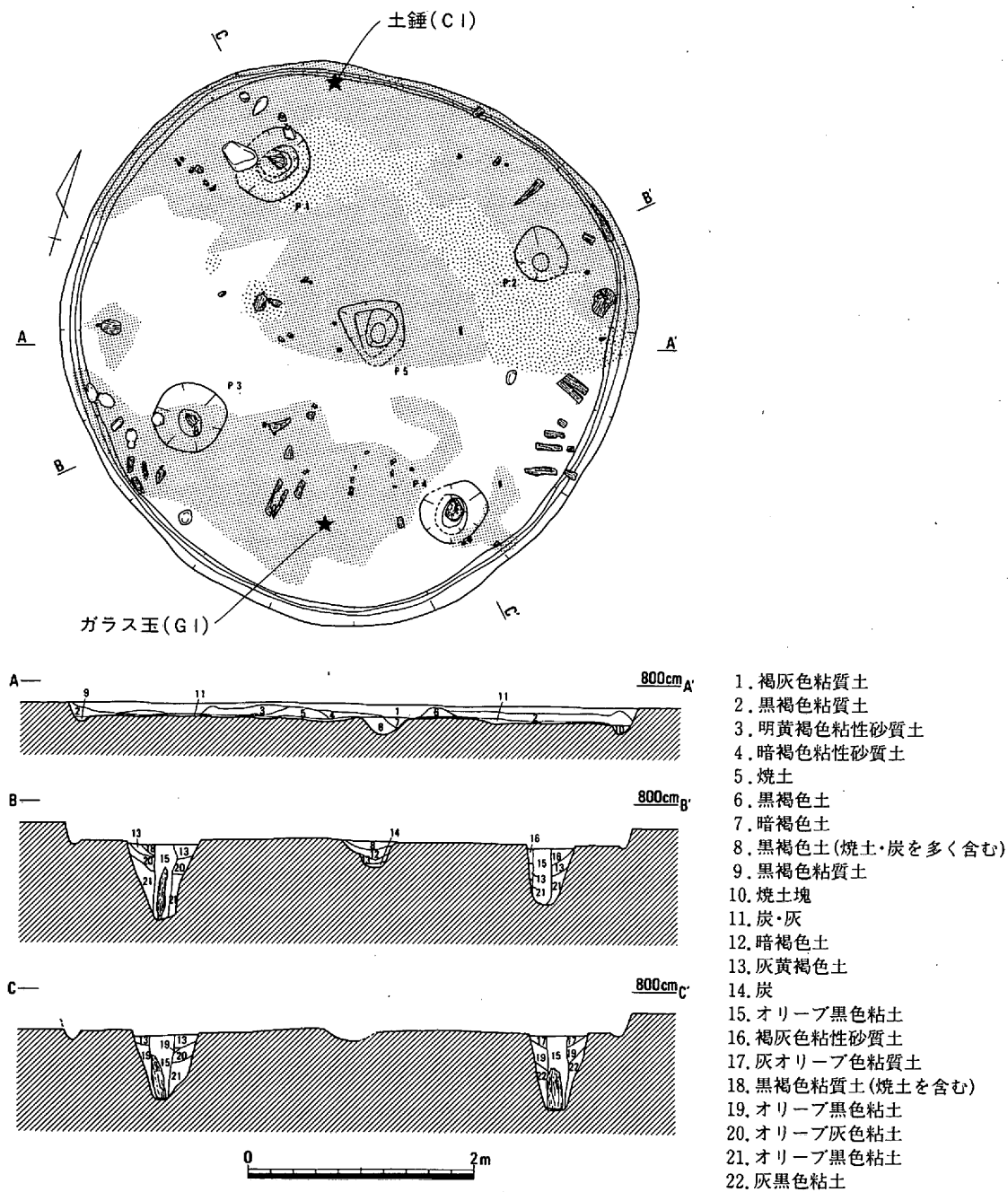
1. 暗褐色粘性砂質土
2. 黒褐色粘性砂質土
3. 黄灰色粘質土
4. 褐灰色粘性砂質土
5. 灰黄褐色粘性砂質土
6. 暗灰黄色粘質土
7. 暗灰褐色土
8. 黄灰色土

第69図 竪穴住居 5(1/60)

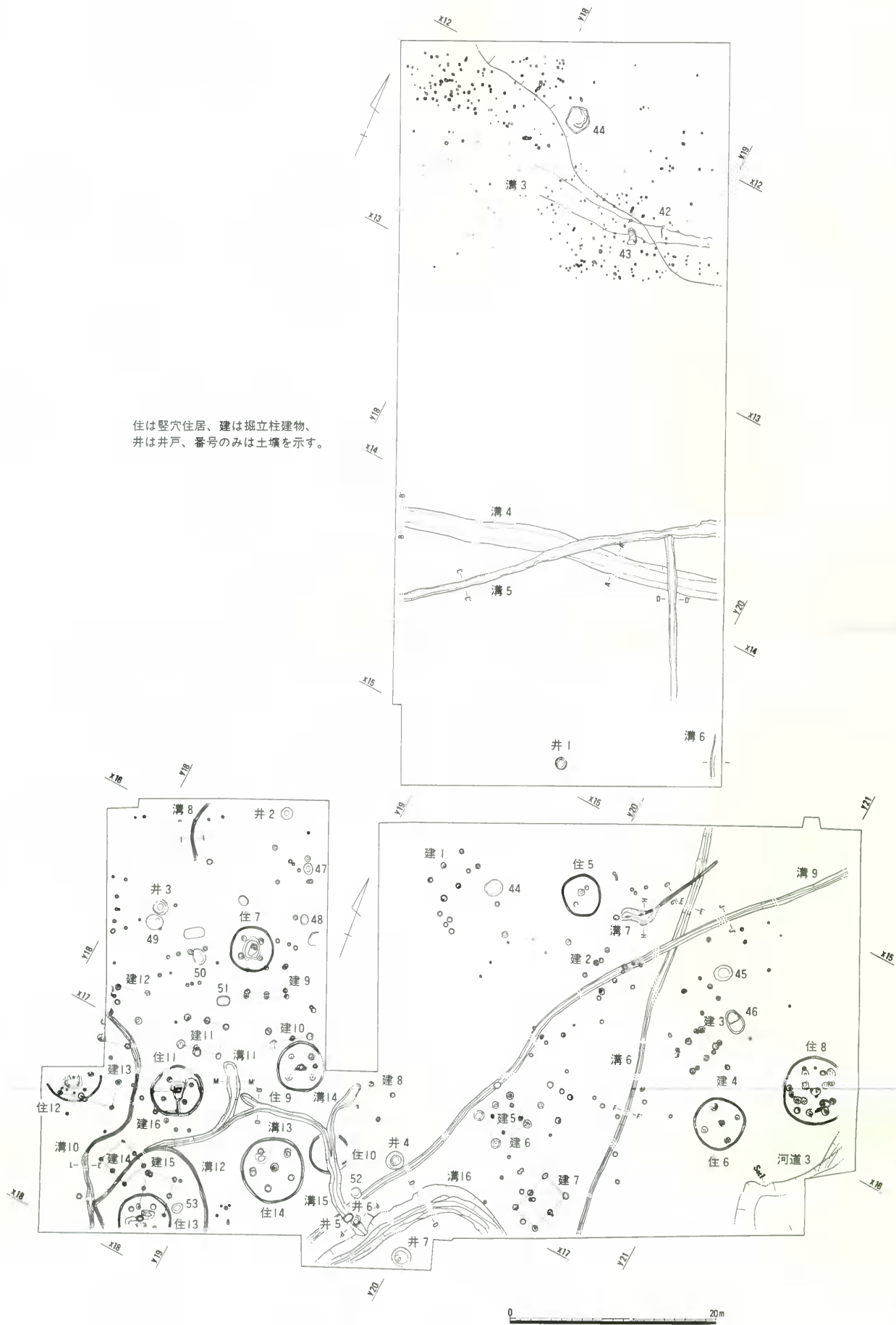
第69図の第5層は貼り床層と考えられる。厚さが10cm程度の灰黄褐色粘性砂質土で、焼土を含んでいた。出土した土器片は少なく、竪穴住居の年代は弥生時代後期としか判断できない。(岡本)

竪穴住居 6 (第70・72図、図版 8-3)

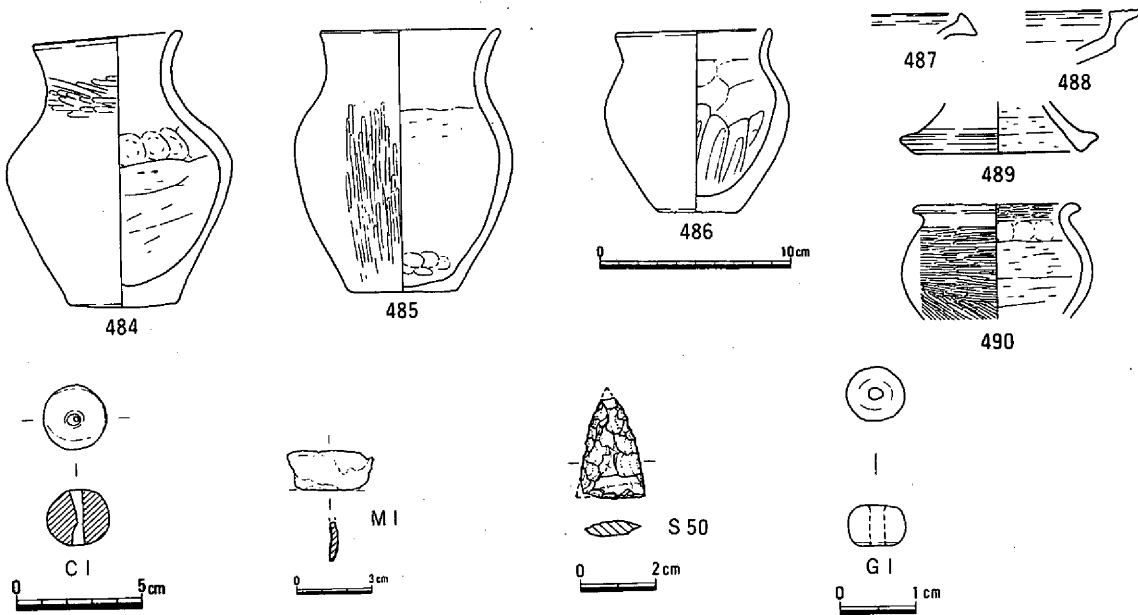
TA区の東半南東部に位置していた。焼失した住居跡で、床面は炭と焼土に覆われ、炭化した屋根の構造材の一部が放射状に残存していた。南西縁辺部からは完形の小形壺が3点(484~486)集中して出土した。住居の平面形は円形に近く、長径で510cmを測り、床面までの深さは15cmであった。柱穴は4個で、竪穴の中央には長径64cm、深さ18cmの穴が掘られていた。柱穴の掘り方は円形で、長径は49~70cm、深さが53~63cmを測った。各柱穴で柱痕が確認され、柱穴1と3では柱根部分が残存していた。それらから柱の太さは直径15cm前後と推定される。竪穴の縁辺には幅20cm程度の壁体溝が全周



第70図 竪穴住居 6(1/60)



第71図 弥生時代中期中葉～後期遺構配置図(PU・TA区；1/400)

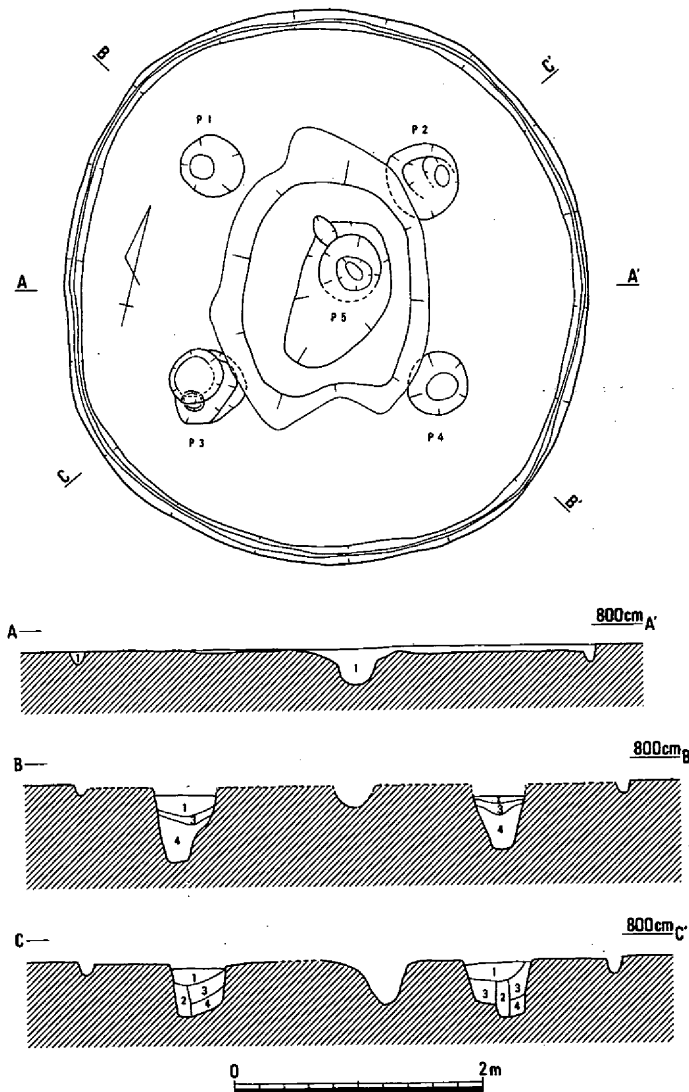


第72図 竪穴住居6出土遺物(1/4・1/3・1/2・1/1)

し、床面からの深さは7～13cmであった。住居の焼失時期は弥生時代後期の前葉末と判断される。(岡本)

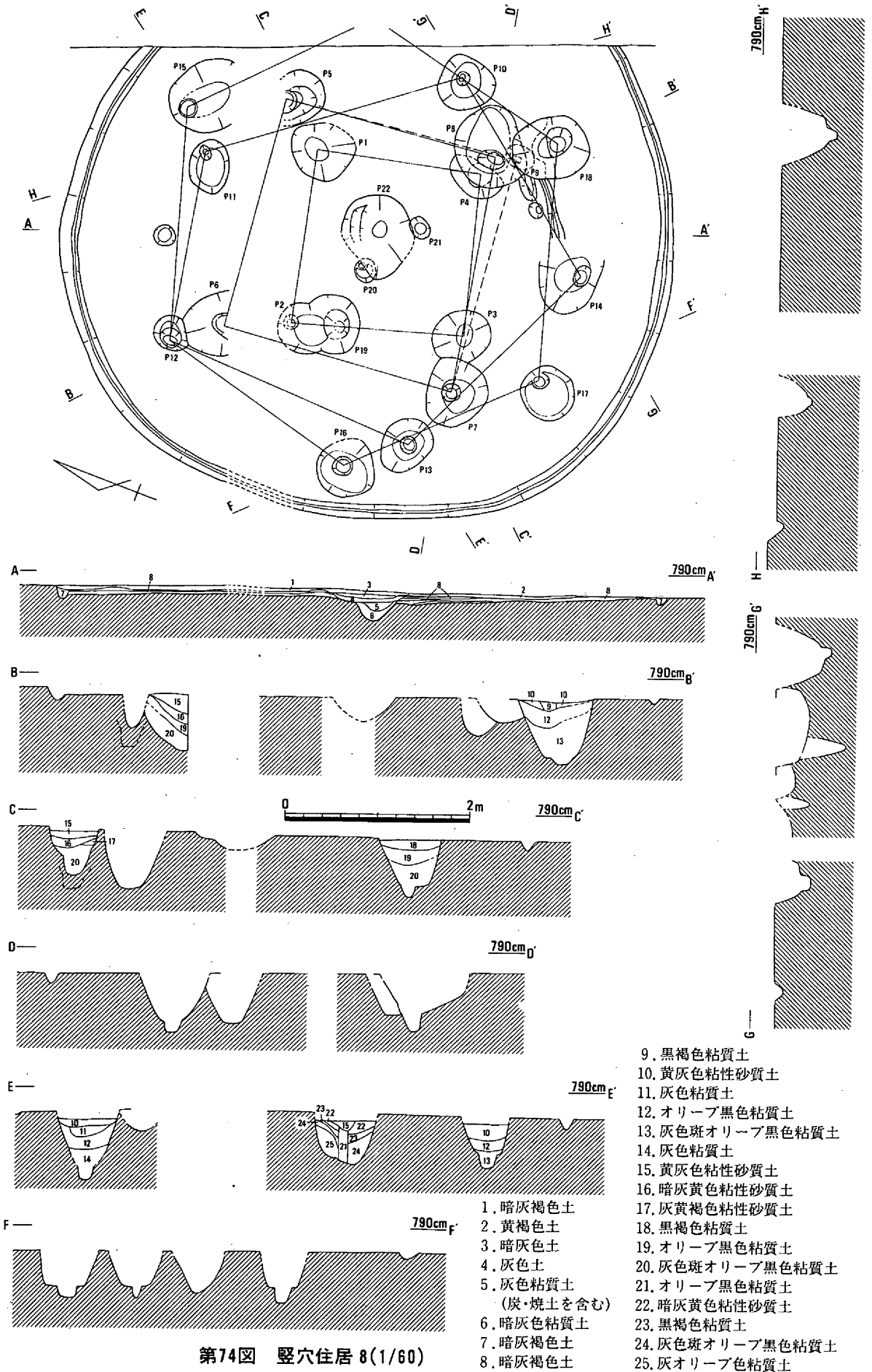
竪穴住居7 (第73図、図版9-3)

TA区の西半北部で検出された。平面形はほぼ円形で、長径は440cmを測った。残存状況は悪く、西端の床面は消失していた。幅15cm、深さ10cmの壁体溝が全周していた。柱穴は4個で、竪穴の中央から少し北東寄りで中央穴を検出した。中央穴は直径52cmの円形で、深さは31cmあったが、周囲に高さ数cmのかすかな高まりが取り巻いていた。柱穴の掘り方は円形で、長径が50～62cm、深さは43～54cmであった。柱穴2と3では柱痕が確認され、その直径は10cm程度を測った。住居の年代は弥生時代後期とみられる。(岡本)



第73図 竪穴住居7(1/60)

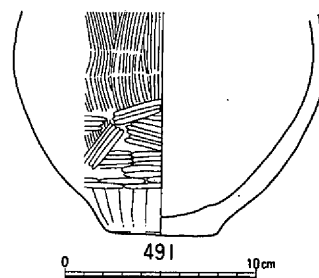
1. 黒褐色粘性砂質土
2. オリーブ黒色粘土(焼土を含む)
3. 黒褐色粘土
4. 灰オリーブ色粘土



第74図 竪穴住居 8(1/60)

竪穴住居 8 (第74・75図、図版9-2)

TA区の東端に位置し、竪穴住居6の北東4mにあった。3m南東には河道の西岸が接近し、河道の年代観からすれば竪穴住居8と共存していた可能性が高い。TA区では大形の住居跡で、平面形は不整な円形を呈し、長径が662cm、床面までの深さは8cmであった。柱穴の検出はきわめて困難で、数段階に及ぶ掘り下げを繰り返した。検出初期には壁体溝と柱穴5～8が現れたが、最終的には柱穴は19個となった。このように、調査段階では4本柱の



第75図 竪穴住居8 出土遺物(1/4)

一組を除いて柱の組み合わせについての理解ができていなかったが、報告書作成の整理段階で図示したような対応関係を想定し、二度にわたる拡張が考えられるようになった。建築構造も最初は4本柱で始まり、次に5本柱となり、最後には6本柱になったとみられる。ただ、柱穴12が5本の時にも6本の際にも使用されていたと考えざるをえないのは問題である。埋土の観察によれば第2層は貼り床層とみられたが、壁体溝は一周するのみで住居の拡張は認められず、わずかに中央穴の作り直しが認識されただけであった。おそらく拡張にあたって従来の床面をさらに掘り下げたためであろう。

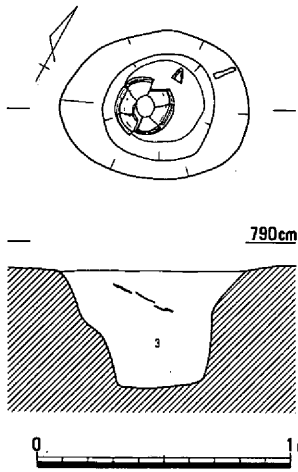
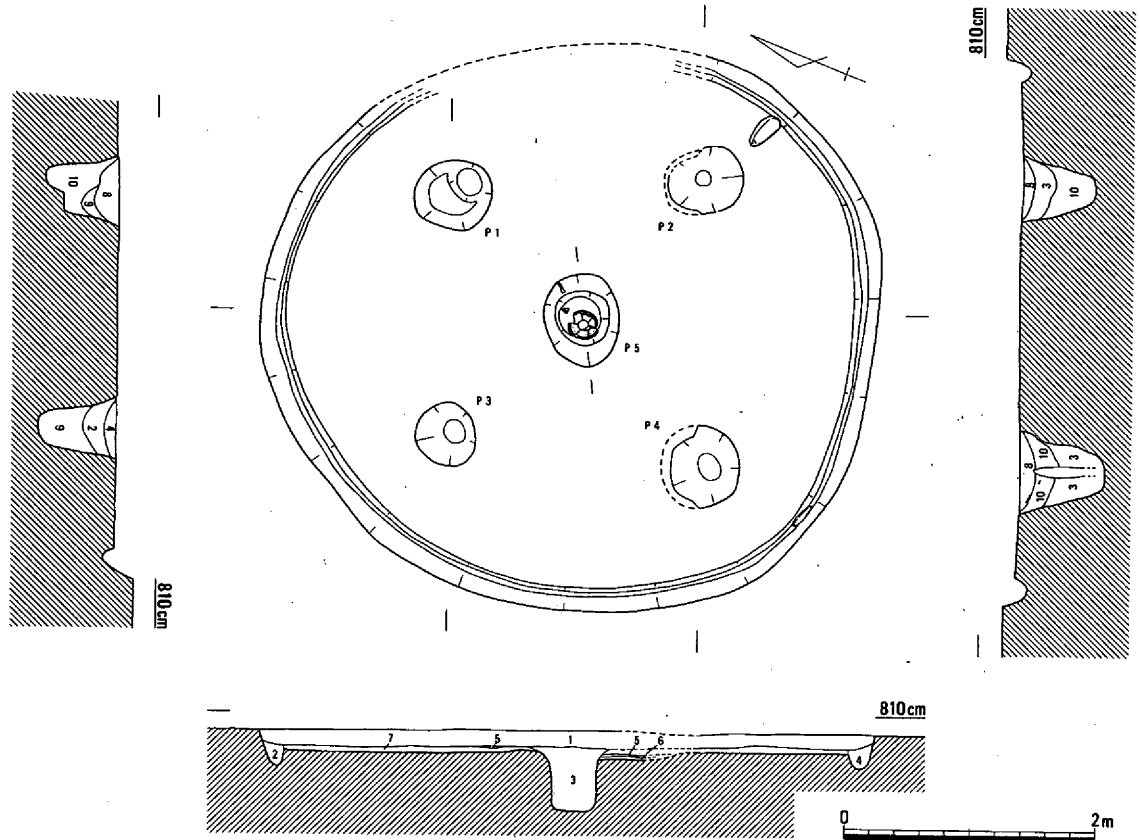
4本柱は二期あったとみられ、柱穴の位置やわずかに残存した壁体溝と柱穴8の重複関係から拡張を伴うものであったと判断される。柱間は初期が177～190cm、次期が234～260cmを測る。柱穴の長径は60～90cm、深さが44～64cmだった。初期の竪穴住居は直径400cm前後であったと考えられる。5本柱への建て替えは規模が大きかったと思われるが、6本柱への建て替えには竪穴の拡張はなされなかった可能性が高い。それは、床の張り直しや中央穴の重複が検出された壁体溝の中でおさまっているように断面で観察されたことによる。壁体溝は幅が15cmで、深さは床面から10cmだった。中央穴は新しいものが長径90cm、深さ10cmを測り、古いものは長径46cm、深さ22cmであった。5本柱の柱穴は長径が42～64cm、深さは29～57cmを測り、6本柱の柱穴は長径が42～87cm、深さは39～62cmとやや規模が大きくなっていった。柱のめり込みを残す柱穴が多く、その直径は10～15cm前後を測った。

TA区で検出された竪穴住居の中で拡張が認められたものは竪穴住居8のみであり、他では柱穴の掘り直しや床の張り替えはあったものの、拡張はなされなかった。竪穴住居8は長期にわたって続き、その間にTA区の西半では竪穴住居10から竪穴住居14へのような移築が行われていたこともありえる。このようなことや出土土器から竪穴住居8の年代は弥生時代後期前葉と考える。(岡本)

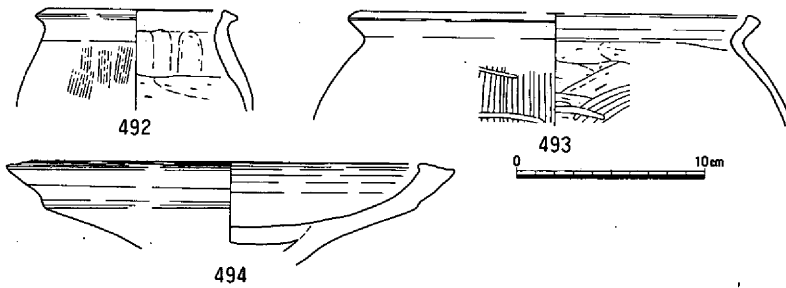
竪穴住居 9 (第76・77図、図版9-3、10-1)

TA区の西半中央の東端で検出された。竪穴住居7の南東8mにあり、建物10と重複していた。平面形は不整な円形で、長径が498cm、床面までの深さは14cmであった。柱穴は4個で、竪穴のほぼ中心に中央穴を備えていた。竪穴の縁辺には幅20cm前後、床面からの深さ15cmの壁体溝が巡らされていた。埋土を観察すると、第7層は貼り床層とみられ、その下に炭層が認められることから、床を一度貼り直したようである。柱穴の掘り方は円形で、長径が52～66cm、深さは61～73cmであった。柱穴4では直径9cmの柱痕が確認され、柱穴1・2の形状からは10cm前後の柱が復元される。中央穴は楕円形で、長径が72cm、断面は箱形で、深さは51cmを測った。

中央穴からは高杯の杯部(494)と砥石(S52)が出土した。高杯は第76図の左下に示すように杯部が完存し、穴の底からは30～40cm上方に傾いてあった。砥石は方柱状で4面ともに使用され、中央部分がくぼんでいた。493の土器は柱穴4、S50の石鏃は柱穴1、S53の砥石は壁体溝出土である。S53

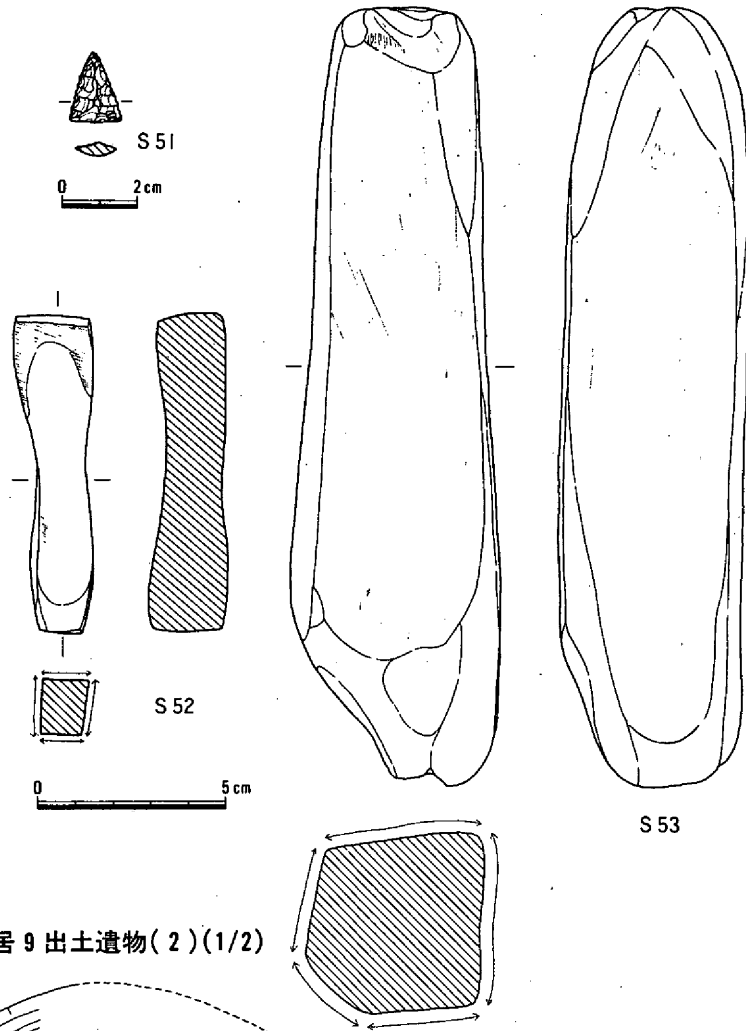


1. 暗褐色粘性砂質土
2. 暗灰黄色粘質土
3. 黒褐色粘質土
4. 暗オリーブ褐色粘質土
5. 炭
6. 褐灰色粘質土
7. 褐灰色粘性砂質土
8. 暗褐色粘性砂質土
9. 黄灰色粘質土
10. オリーブ黒色粘土

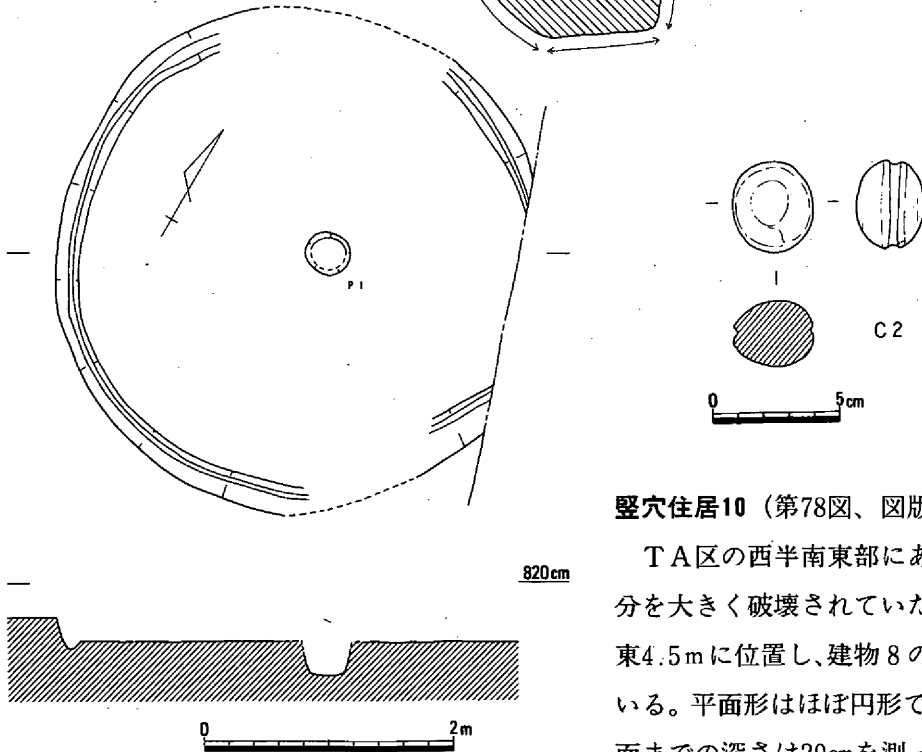


第76図 竪穴住居 9 (1/60・1/30)・出土遺物(1)(1/4)

の砥石の両端は未調整で、中央部の断面は五角形を呈していた。これらの遺物や周辺の遺構との関係から、住居の年代は弥生時代後期の前葉と考えられる。(岡本)



第77図 竪穴住居9出土遺物(2)(1/2)



第78図 竪穴住居10(1/60)・出土遺物(1/3)

竪穴住居10 (第78図、図版10-2)

TA区の西半南東部にあり、溝13で中央部分を大きく破壊されていた。竪穴住居9の南東4.5mに位置し、建物8の南3mにあっている。平面形はほぼ円形で、長径が404cm、床面までの深さは20cmを測った。埋土観察によれば貼り床層はなく、暗褐色粘性砂質土によ

って埋没していた。中央穴が検出されたのみで、柱穴は確認できなかった。中央穴の周辺では少くはみ認められ、灰層の堆積がみられた。中央穴は溝15の底で検出され、楕円形の長径が37cm、深さは16cmだった。溝15に先行するものの、弥生時代後期前葉の住居と考えられる。(岡本)

竪穴住居11 (第79図、図版10-3)

TA区の西半中央部で、竪穴住居9の南西6mにあたる。溝10・11に挟まれるが、溝11は2.5mの距離をおいて竪穴の周壁と平行して弧を描き、両者の密接な関係がうかがえる。竪穴の平面形はやや角張った円形で、長径は512cm、床面までの深さが10cmであった。床面では、西隅で炭と焼土の広がりが見られ、南端では焼土塊が壁体溝にかけて存在した。また、東半の床面は数cm低くなっていた。住居の中心には中央穴が掘られ、周囲には10cm程度の高さで盛土による堤が認められた。埋土の観察によると第9・11層はともに貼り床層と考えられるため、床を貼り替えている。第7・8層が堤にあたる。柱穴は4個で、長径が40~50cm、深さは55~68cmであった。底部に残る柱のめり込みから柱は直径15cm前後と推定された。中央穴は長径が65cm、深さは45cmを測る。壁体溝は幅20~30cm、床面からの深さは10cmだった。遺物のうち496は床面下出土である。S55の板状石製品は剝離性のある黒灰色の石材で作られ、長さ45.5mm、幅32.5mm、厚さ5.8mm、重さ13.8gを測る。一方の短辺は折損していたが、もう一つの短辺は調整が加えられて丸くおさまられ、長辺も面取りがなされている。石剣の柄ではないかという可能性が指摘される。住居の年代は弥生時代後期前葉と判断される。(岡本)

竪穴住居12 (第80図)

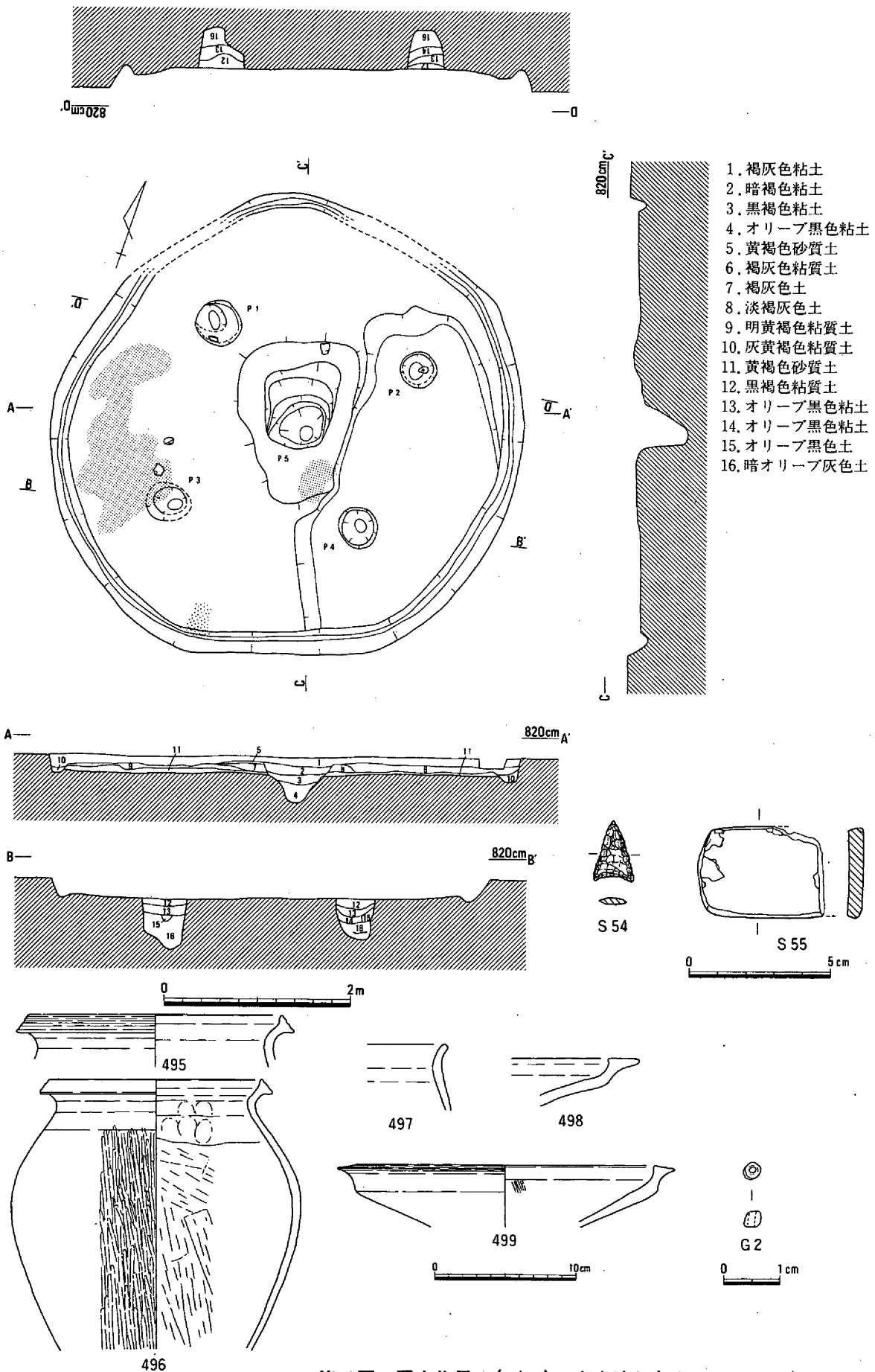
TA区西端で半分を検出した。溝10が3m離れて取り巻く。竪穴住居11の南西5mにあたる。平面形は不整形で、検出部分の長径は534cm、床面までの深さは16cmであった。壁体溝は幅が13cm、深さは床面から5cmと浅い。柱穴は3個が確認され、その配置から全体で5個あった確率が高い。柱穴1は側溝で破壊した。柱穴の長径は58cm、深さは33~75cmで、浅い柱穴1は他の柱穴ほどは壁体溝に近接していなかった。中央穴(P4)を持ち、その南には長径が126cm、床面からの深さが5cm程度の浅い穴が接し、これらを取り巻いて高さ6cmの堤が巡らされていた。中央穴は長径が94cm、深さは40cmあった。土製勾玉は柱穴3から出土した。住居の年代は弥生時代後期前葉とみられる。(岡本)

竪穴住居13 (第81図、図版11-2)

TA区の西半南端にあり、 $\frac{3}{5}$ を発掘した。竪穴住居11の南7.5mにある。やはり溝12が3m離れて取り巻いていた。平面形は円形で、長径が520cm、床面までの深さは10cmを測った。床面には数cmの高さで凹凸があった。幅20cm前後のごく浅い壁体溝が巡っていた。柱穴は4個と推定され、3個を検出した。長径が52~54cm、深さは60cmだった。柱痕の直径は15cmを測った。竪穴の中心から西にずれて中央穴(P5)があった。楕円形で、長径が70cm、深さは28cmであった。中央穴の南にも穴(P3)があったが、土層観察ではその上面に住居の床面である炭層が広がり、住居に伴うか疑問である。501・504の土器は床面出土である。住居の年代は弥生時代後期前葉と考えられる。(岡本)

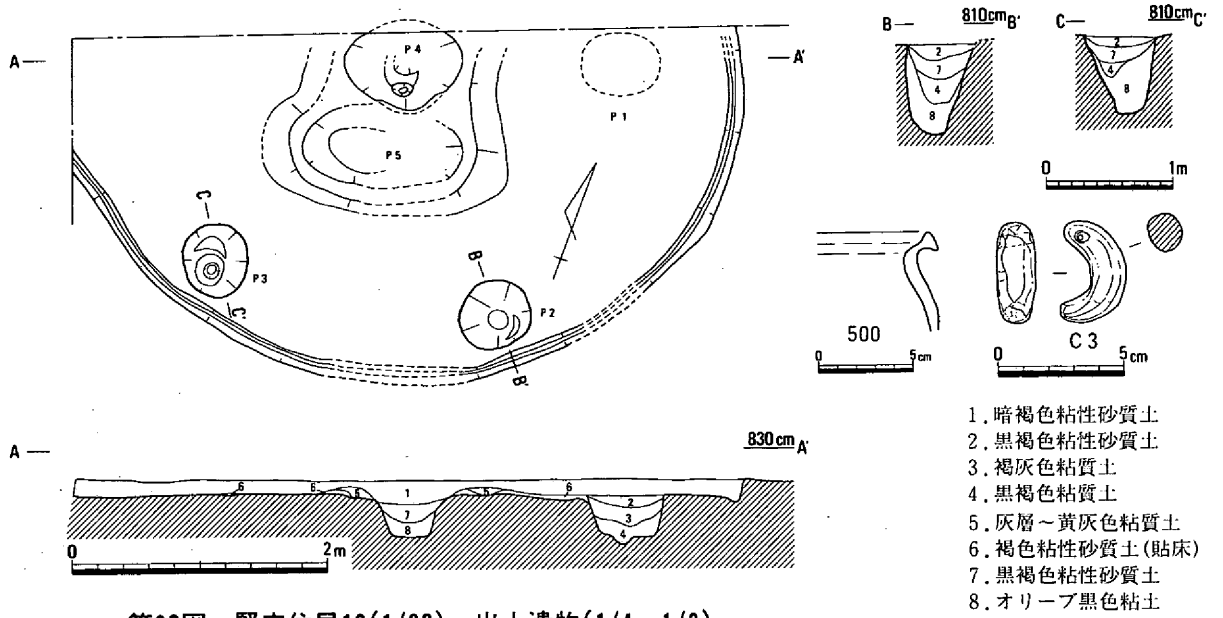
竪穴住居14 (第83図、図版11-3)

TA区の西半南東隅で検出した。竪穴住居9の南5mにあり、竪穴住居10に近接していた。溝13・15が2m離れて取り巻いていた。平面形は円形に近く長径が645cm、床面までの深さは16cmであった。埋土を観察すると第4層の貼り床層の下に第5層の炭層があり、床を貼り直したことがわかる。これに伴って中央穴も掘り直されていた。柱穴は5個で、長径が63~72cm、深さは46~54cmであった。柱穴2・6は建て直したものである。検出面では直径15cm前後の柱痕を認めたが、埋土の断面では確認



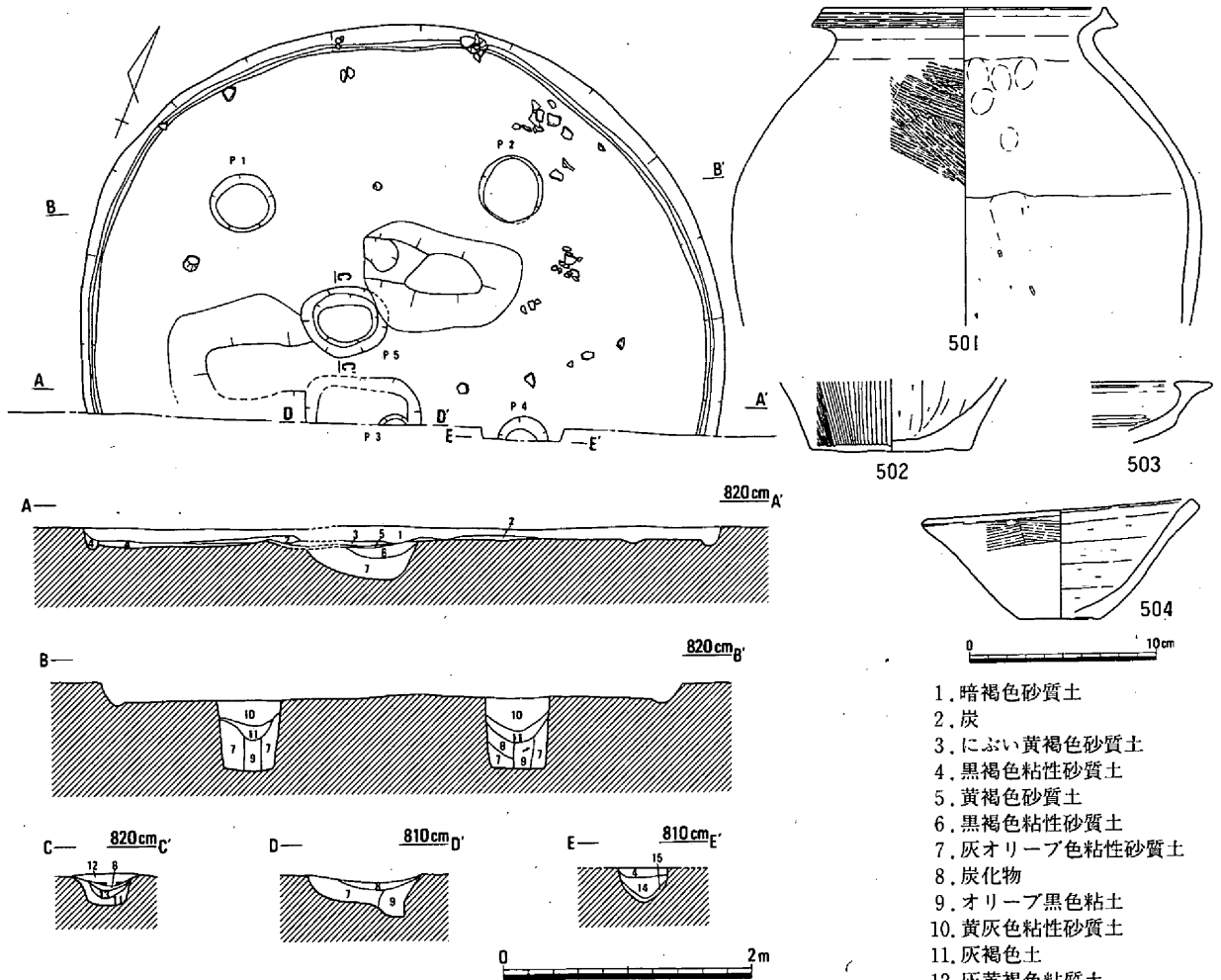
1. 褐灰色粘土
2. 暗褐色粘土
3. 黒褐色粘土
4. オリーブ黒色粘土
5. 黄褐色砂質土
6. 褐灰色粘質土
7. 褐灰色土
8. 淡褐灰色土
9. 明黄褐色粘質土
10. 灰黄褐色粘質土
11. 黄褐色砂質土
12. 黒褐色粘質土
13. オリーブ黒色粘土
14. オリーブ黒色粘土
15. オリーブ黒色土
16. 暗オリーブ灰色土

第79図 竪穴住居11(1/60)・出土遺物(1/4・1/2・1/1)



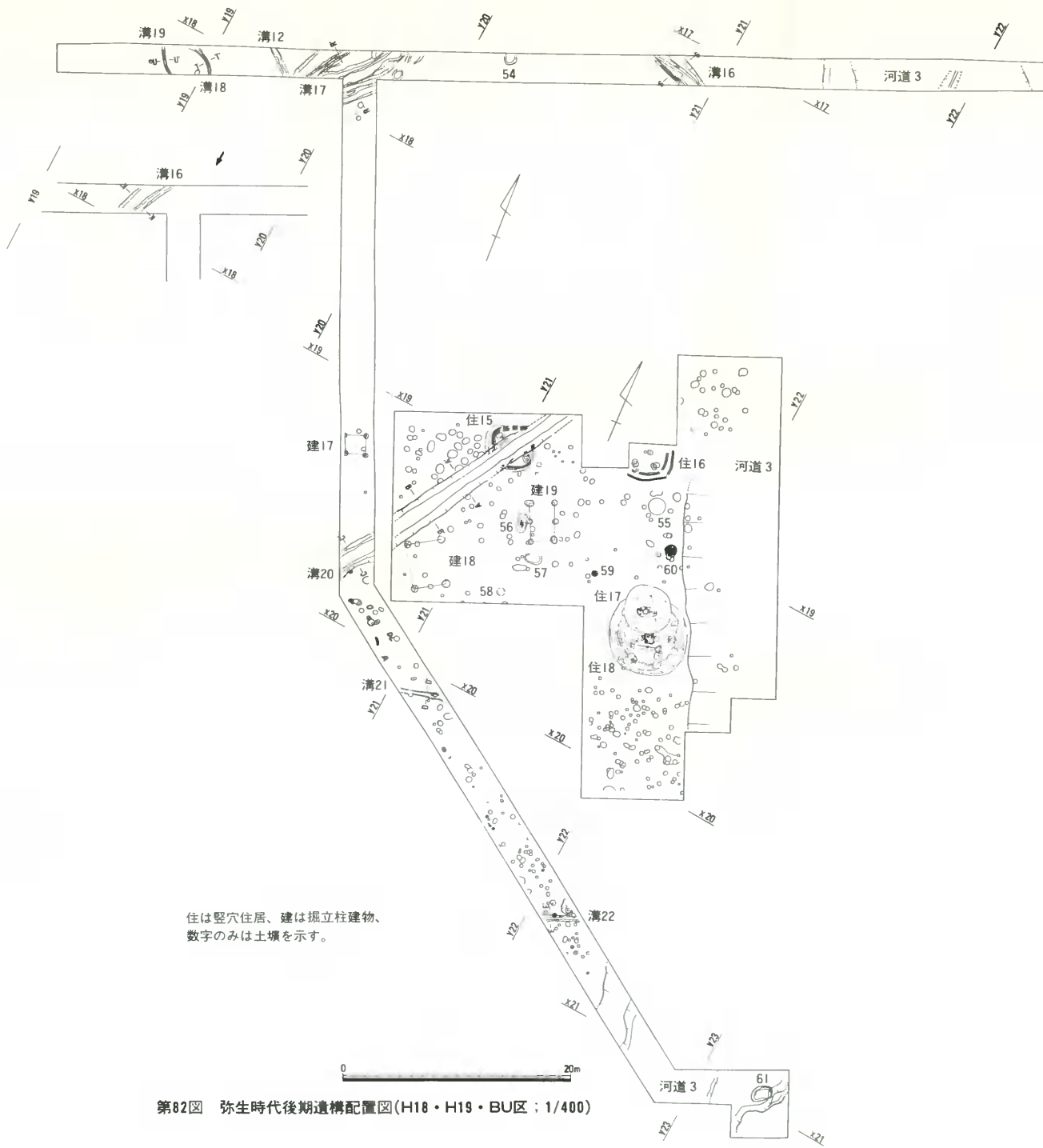
第80図 竪穴住居12(1/60)・出土遺物(1/4・1/3)

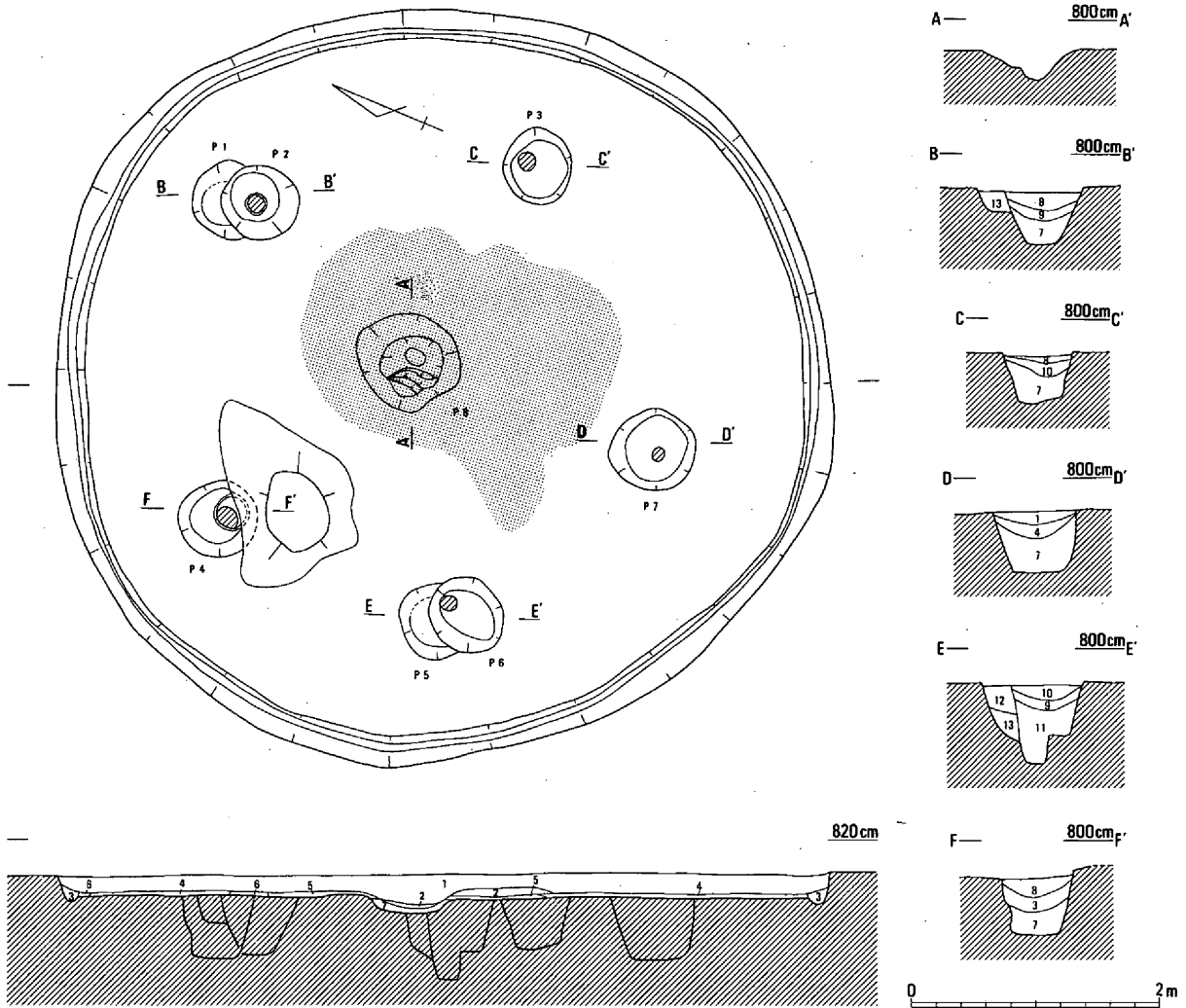
1. 暗褐色粘性砂質土
2. 黒褐色粘性砂質土
3. 褐灰色粘質土
4. 黒褐色粘質土
5. 灰層～黄灰色粘質土
6. 褐色粘性砂質土(貼床)
7. 黒褐色粘性砂質土
8. オリーブ黒色粘土



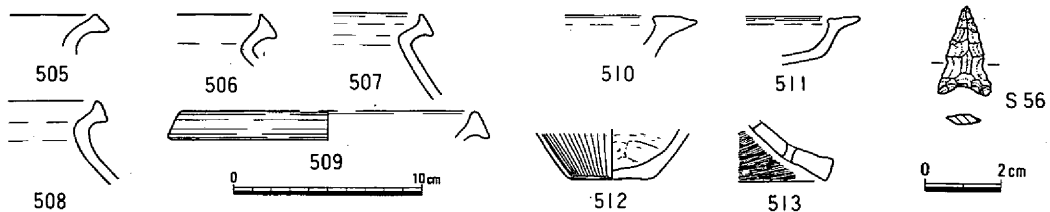
第81図 竪穴住居13(1/60)・出土遺物(1/4)

1. 暗褐色砂質土
2. 炭
3. にぶい黄褐色砂質土
4. 黒褐色粘性砂質土
5. 黄褐色砂質土
6. 黒褐色粘性砂質土
7. 灰オリーブ色粘性砂質土
8. 炭化物
9. オリーブ黒色粘土
10. 黄灰色粘性砂質土
11. 灰褐色土
12. 灰黄褐色粘質土
13. 黒褐色粘質土
14. 暗灰オリーブ色粘土
15. 灰オリーブ色粘土





- | | | | |
|-------------|------------------|--------------|-----------|
| 1. 褐灰色粘性砂質土 | 5. 灰色粘土(炭を含む) | 9. オリーブ黒色粘土 | 13. 灰色粘質土 |
| 2. 黒褐色土 | 6. 明黄褐色土 | 10. 黒褐色粘性砂質土 | |
| 3. 黒褐色粘質土 | 7. オリーブ黒色粘土 | 11. オリーブ黒色土 | |
| 4. 明黄褐色砂質土 | 8. 黄灰色砂質土(焼土を含む) | 12. 黒褐色粘性砂質土 | |

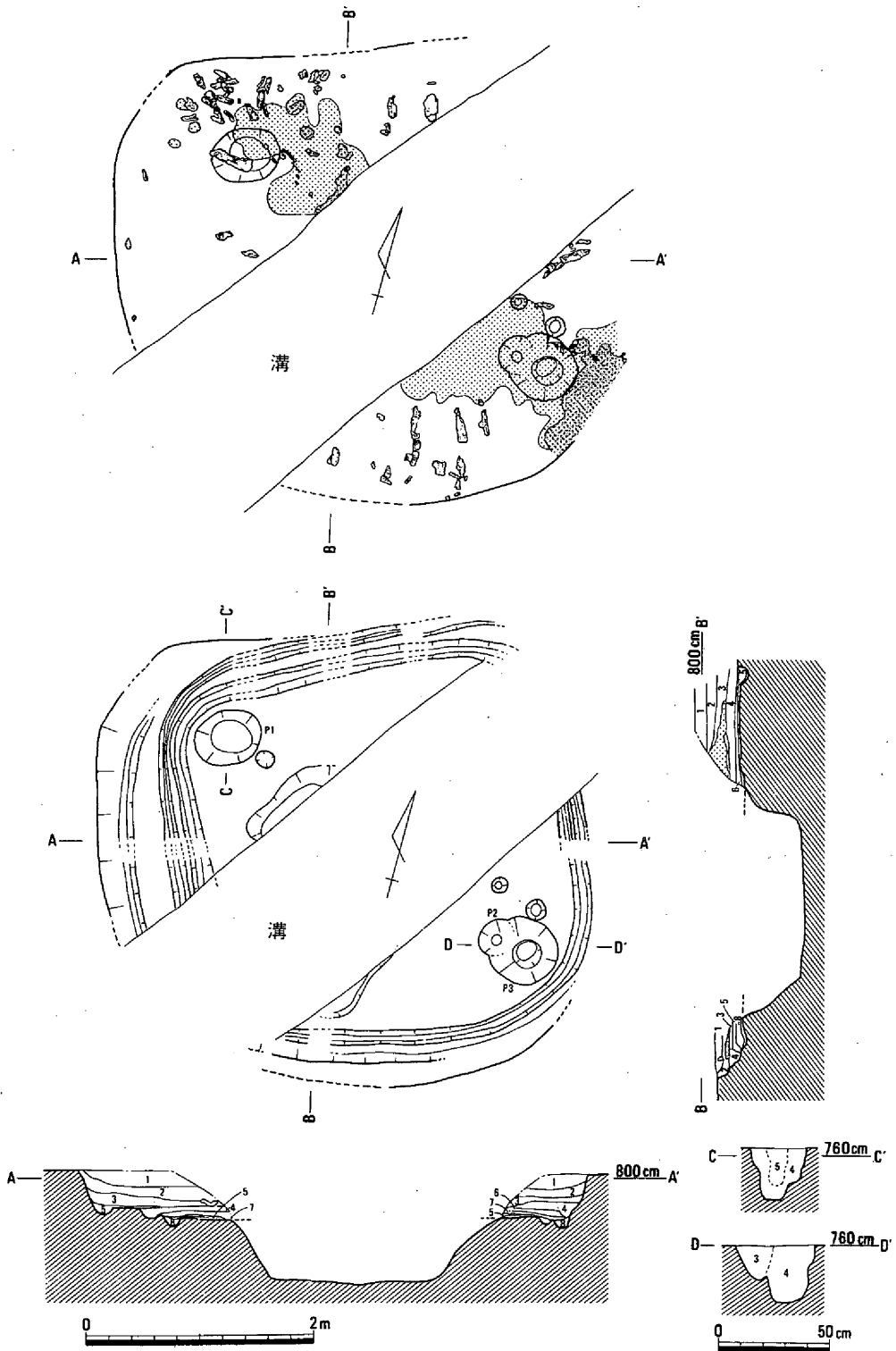


第83図 竪穴住居14(1/60)・出土遺物(1/4)

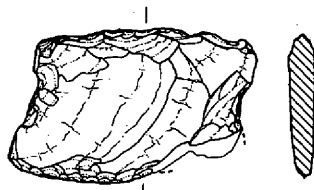
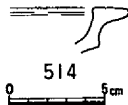
できなかった。柱穴4に接して高さ6cmの床面の高まりが認められた。中央穴は長径が90cm、深さは25cmと浅かった。中央穴の周囲には広く炭の広がりがあり、焼土塊も存在した。壁体溝は幅が20～30cm、床面からの深さは8cmであった。住居の年代は弥生時代後期の前葉と考えられる。(岡本)

竪穴住居15 (第84図、図版12-2)

BU区で検出された隅丸方形を呈する竪穴住居で、溝18に切られる。最終的には火災に遭って焼失したと考えられ、最終床面では炭化材や焼土が顕著に認められた。住居の北東から南西にかけてのス



1. 灰黄色粘性微砂
2. 暗灰黄色土
3. 灰褐色土
4. 灰黒褐色土
5. 暗灰褐色土
6. 黄褐色土
7. 暗灰褐色土(灰色土混じり)
8. 暗灰黄褐色土



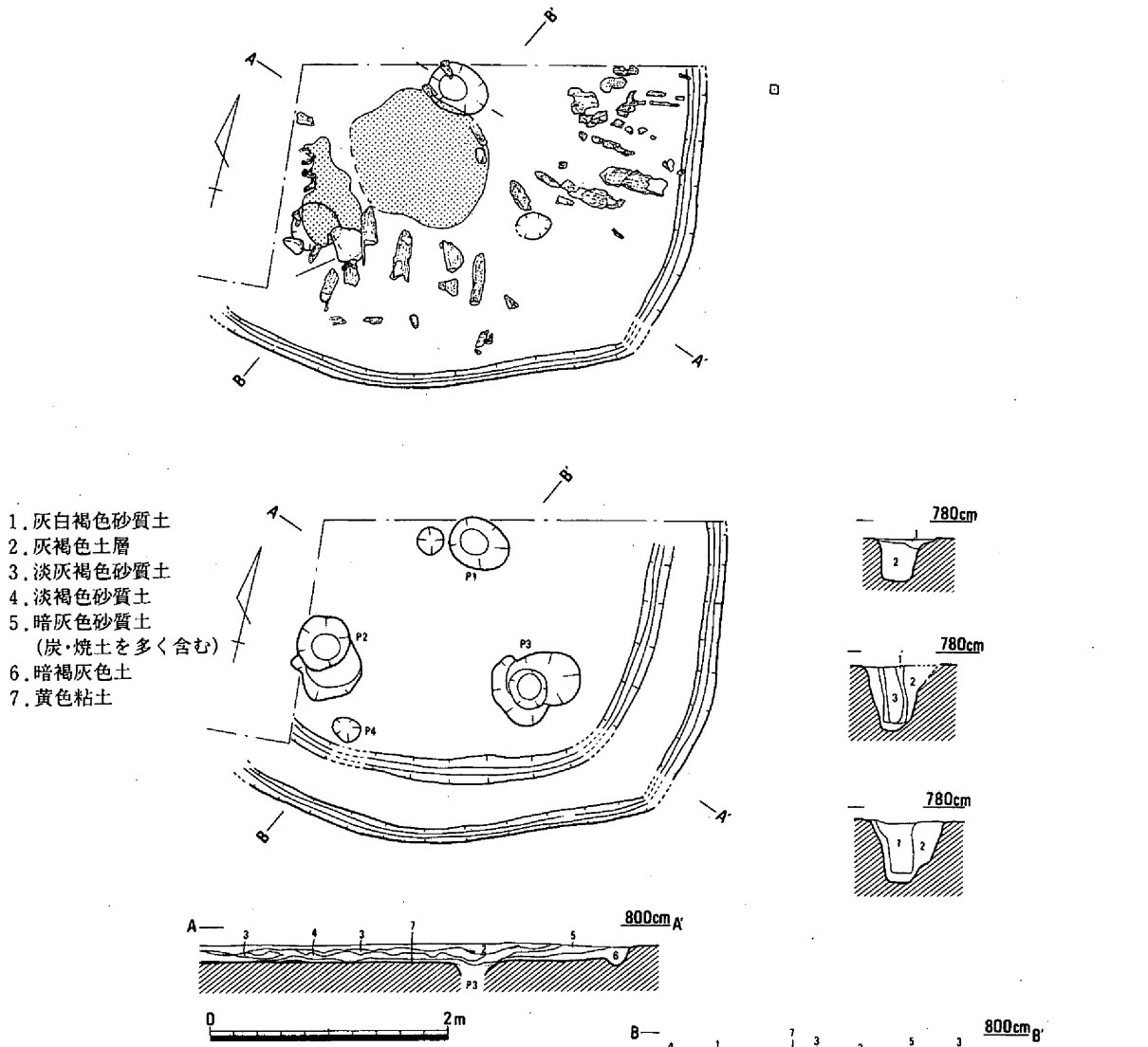
S 57



G 3

第84図 竪穴住居15(1/60)

・出土遺物(1/4・1/2・1/1)



第85図 竪穴住居16(1/60)・出土遺物(1/2)

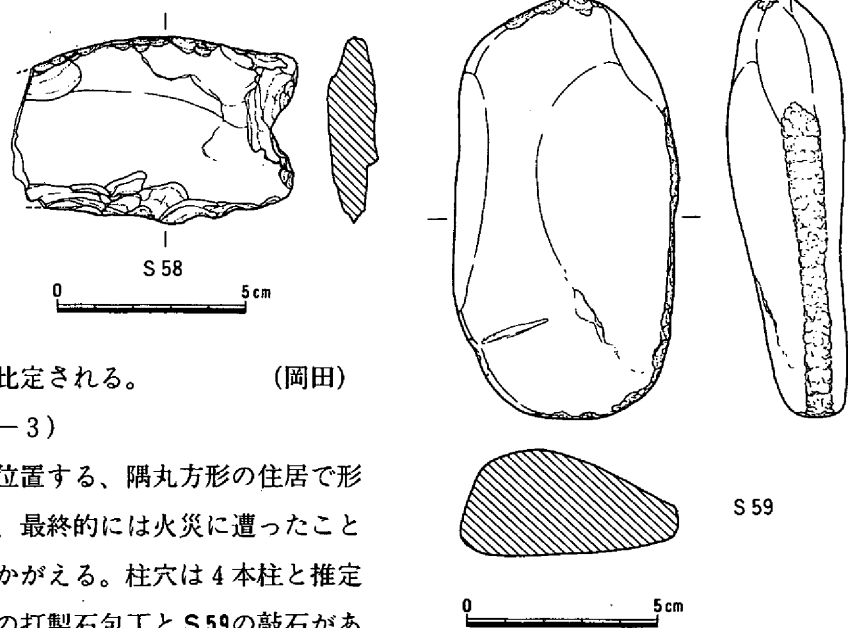
ペースが溝18によって失われているが、柱穴は4本と推定される。最初の住居は一辺約3.5mほどの小規模な始まりで、2度の拡張が行なわれたことが推察される。出土遺物は少量であるが、S14の高杯から弥生時代後期前葉の時期が比定される。

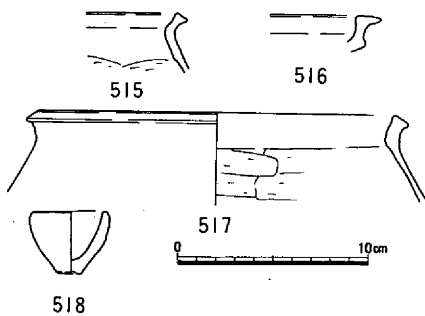
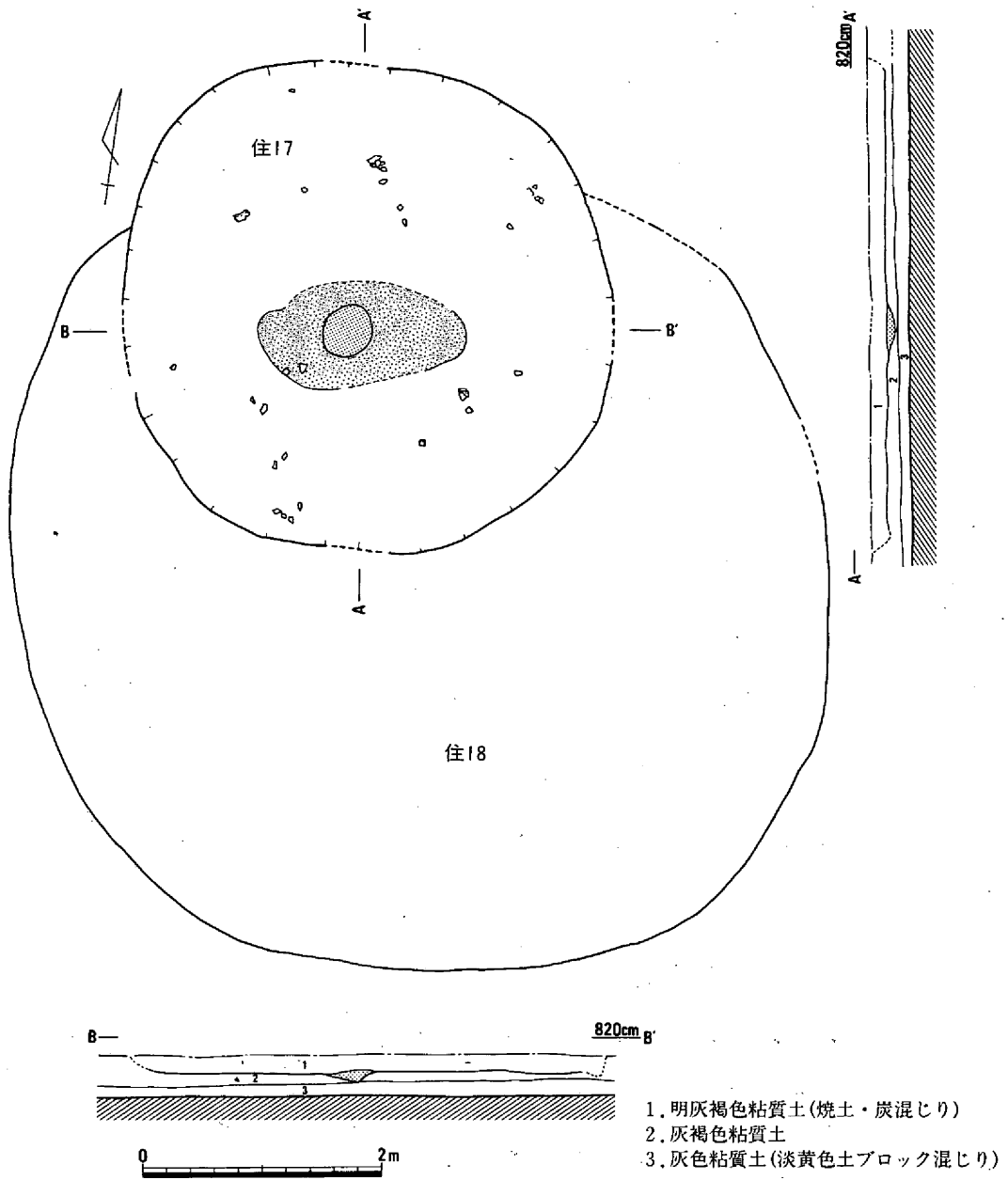
(岡田)

竪穴住居16 (第85図、図版12-3)

竪穴住居15の東方約10mに位置する、隅丸方形の住居で形態・規模は酷似する。同様に、最終的には火災に遭ったことが炭化材の出土状態からもうかがえる。柱穴は4本柱と推定される。出土遺物には、S58の打製石包丁とS59の敲石がある。弥生時代後期前葉に比定される可能性が高い。

(岡田)





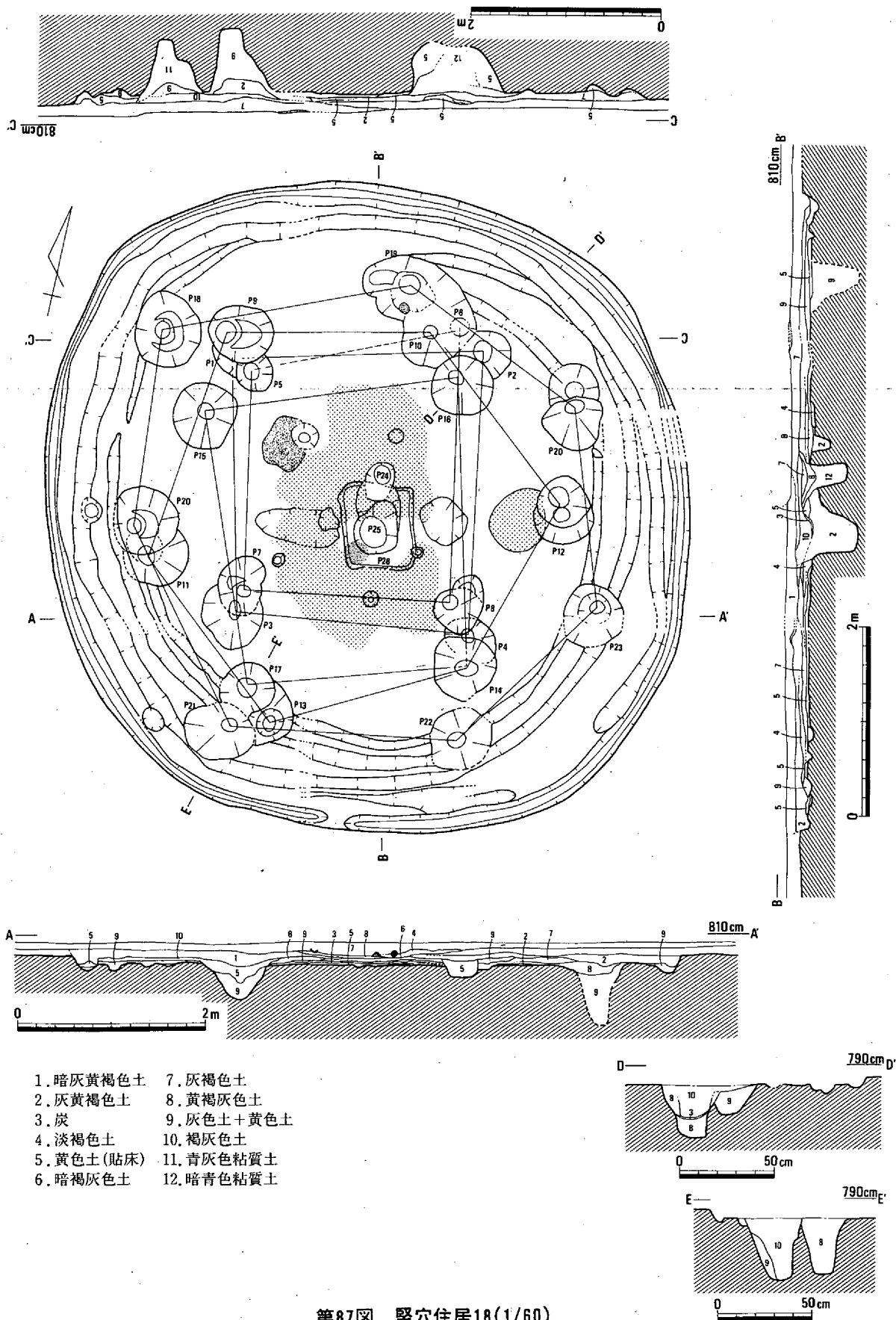
第86図 竪穴住居17(1/60)・出土遺物(1/4)

竪穴住居17 (第86図、図版13-1)

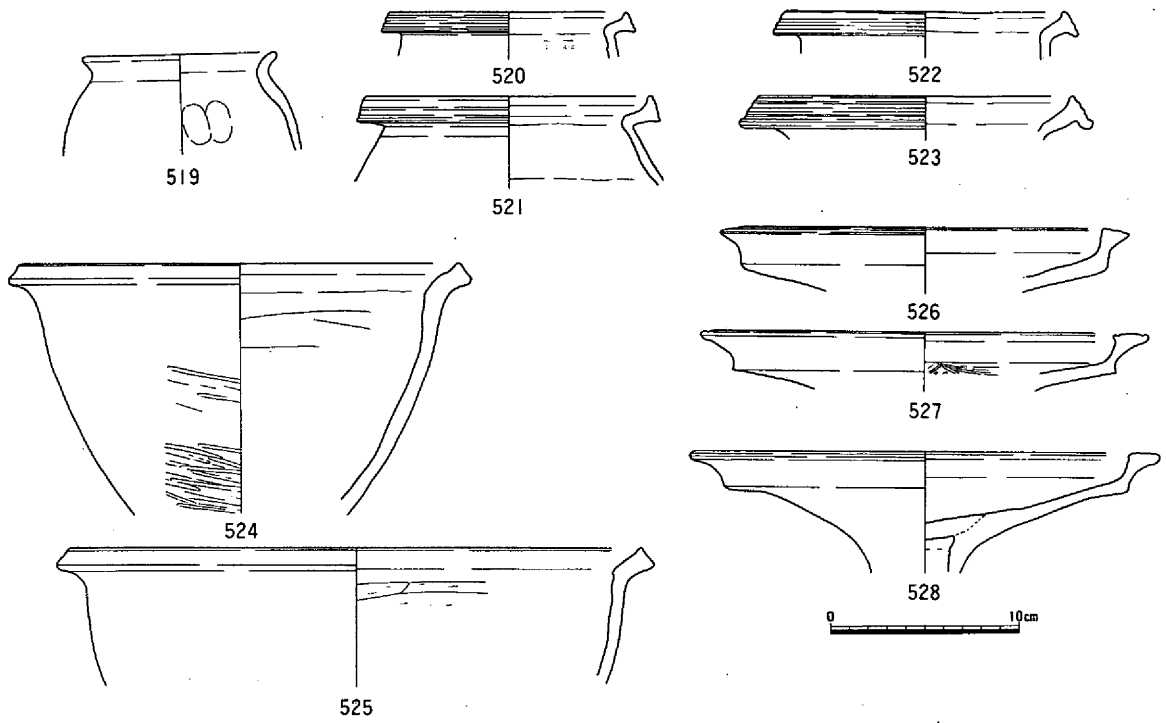
竪穴住居18を切って掘りこまれた住居で、径約4mのほぼ円形の平面形が検出されたが柱穴などは発見することができなかった。床面のほぼ中央部に堅く焼けた火処の痕跡があり周辺には炭が散布する。出土遺物には、515～518の土器がある。いずれも弥生時代後期前葉に比定される。(岡田)

竪穴住居18 (第87～89・91図、図版13-2・3)

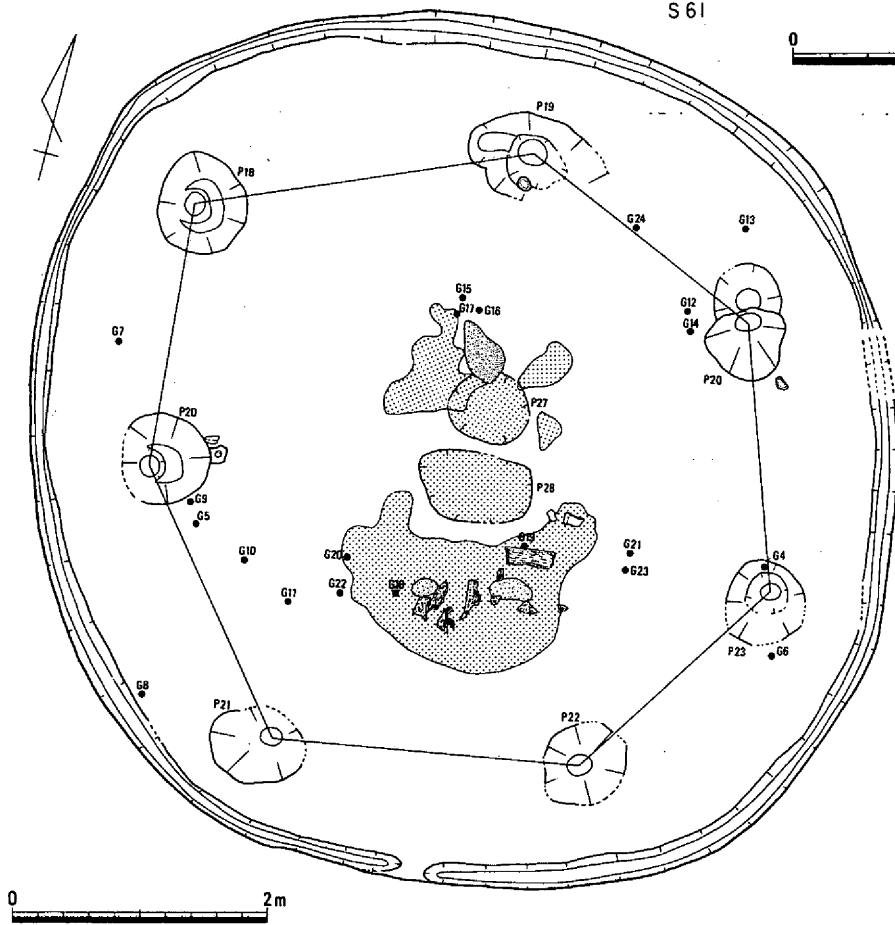
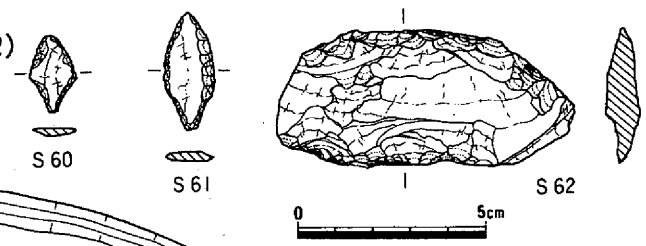
最終時期の規模は径約7mに達するほどの大きな住居で、T A区の竪穴住居8をしのぐ。前述の竪穴住居15～17などとともに、建て替えを繰り返した拡張住居



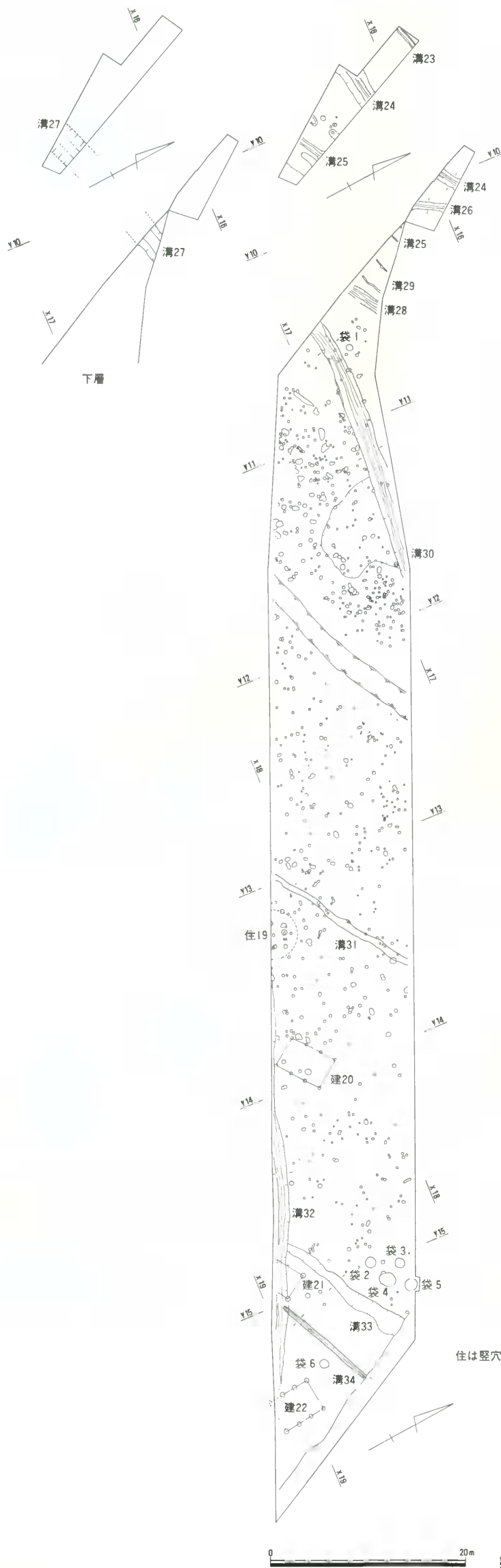
第3章 発掘調査の概要



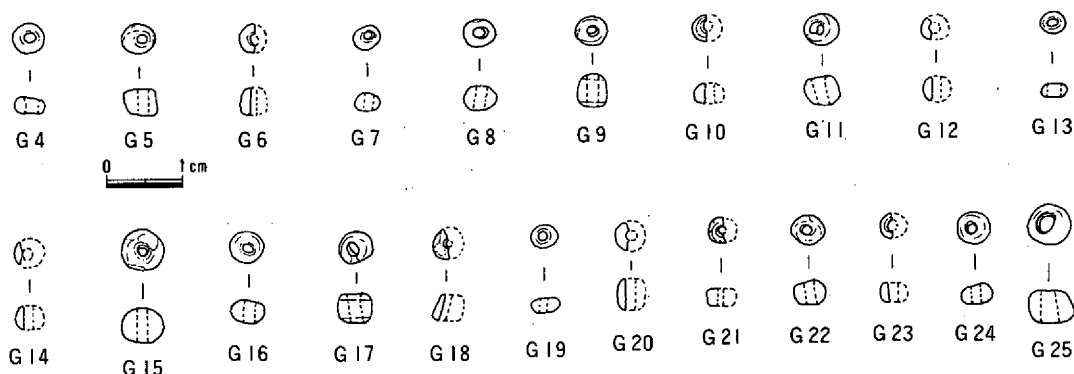
第88図 竪穴住居18出土遺物(1)(1/4・1/2)



第89図 竪穴住居18最終時の平面図・ガラス小玉出土位置(1/60)



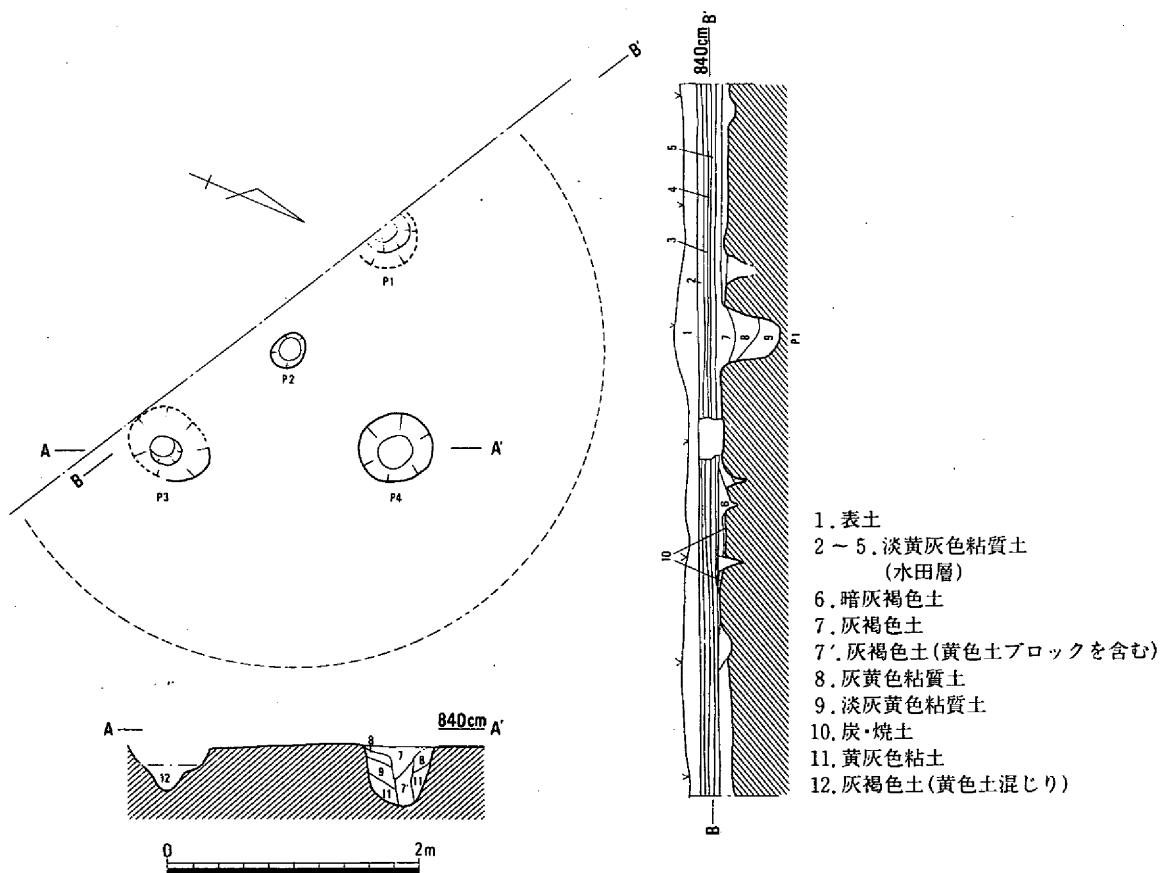
第90図 弥生時代後期遺構全体図(CH1区；1/400)



第91図 竪穴住居18出土ガラス小玉(1/1)

である点が、TA調査区の多数の住居と時期的には近いにもかかわらず、大きな相違点となっている。最初の住居は、P1～P4の4本柱で径も4～5m前後と推定される。最終的な住居の平面形は第89図に掲げるように7本柱と推定される。最終的には、火災に遭ったことが炭化材の出土によって推察される。中央穴は火処としてさほど位置を変えずに使用され、P26のように方形の時期もある。住居の中央部分では貼り床面が重層的に検出された。最終床面や貼り床から細片を含め24個のガラス玉が出土している。また住居の規模の割りには少量の土器が出土しているが、弥生時代後期前葉に比定される一括性の高い土器である。石器としてはS60・S61の有茎のサヌカイト製石鏃2点とS62のスクレイパーが出土している。

(岡田)



第92図 竪穴住居19(1/60)

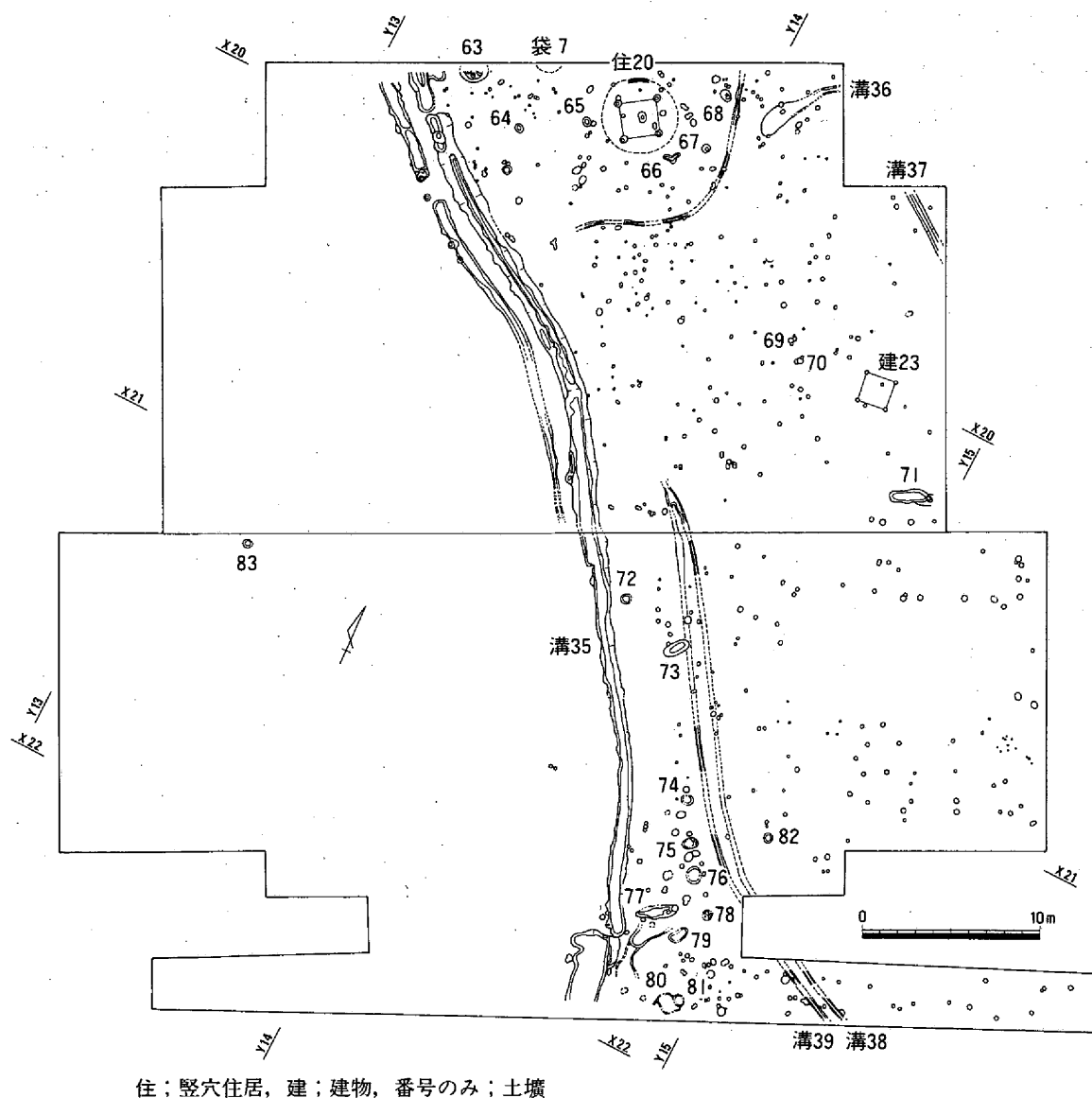
竪穴住居19 (第92図、図版14-1)

CH1区、建物20の西方約10mで検出された竪穴住居の痕跡である。後世の削平を受けて住居の平面形は明らかではない。P1~P3はいずれも調査区の境界となるぎりぎりの側溝部分で検出され、完存していないが、P4と平面的に住居の柱穴を形成する可能性がきわめて高くなった。P2は、周囲に焼土や炭が看取され、中央穴と想定される。弥生時代後期の時期的範囲に比定される。(岡田)

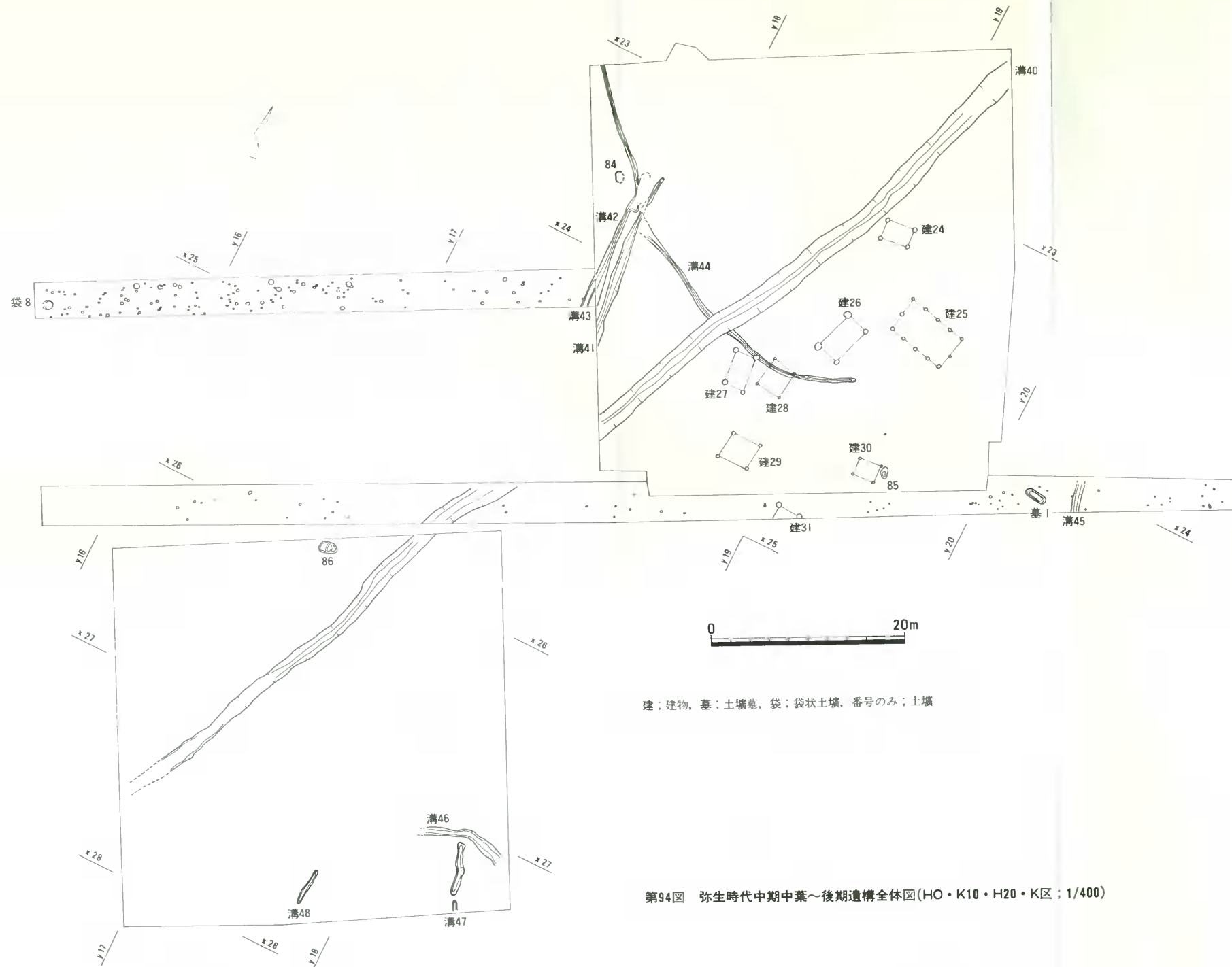
竪穴住居20 (第96図、図版14-2)

KO1区北端に位置し、第3低位部東肩口からの距離約7.5mを測る。この住居の東から南を3~4mの距離で巡る溝は、TA区等において見られるように、この住居に伴う溝と考えられる。

後世の削平が著しく、住居の構造物として検出できたのは、4本の柱穴と中央穴および北辺の壁体溝の一部であり、床面も削平を受けている。幅10~15cm、深さ2cm程度で検出された壁体溝から想定される平面形は、円形よりも隅丸の方形に求められ、推定長軸長は4.4m程度である。柱穴掘り方は径

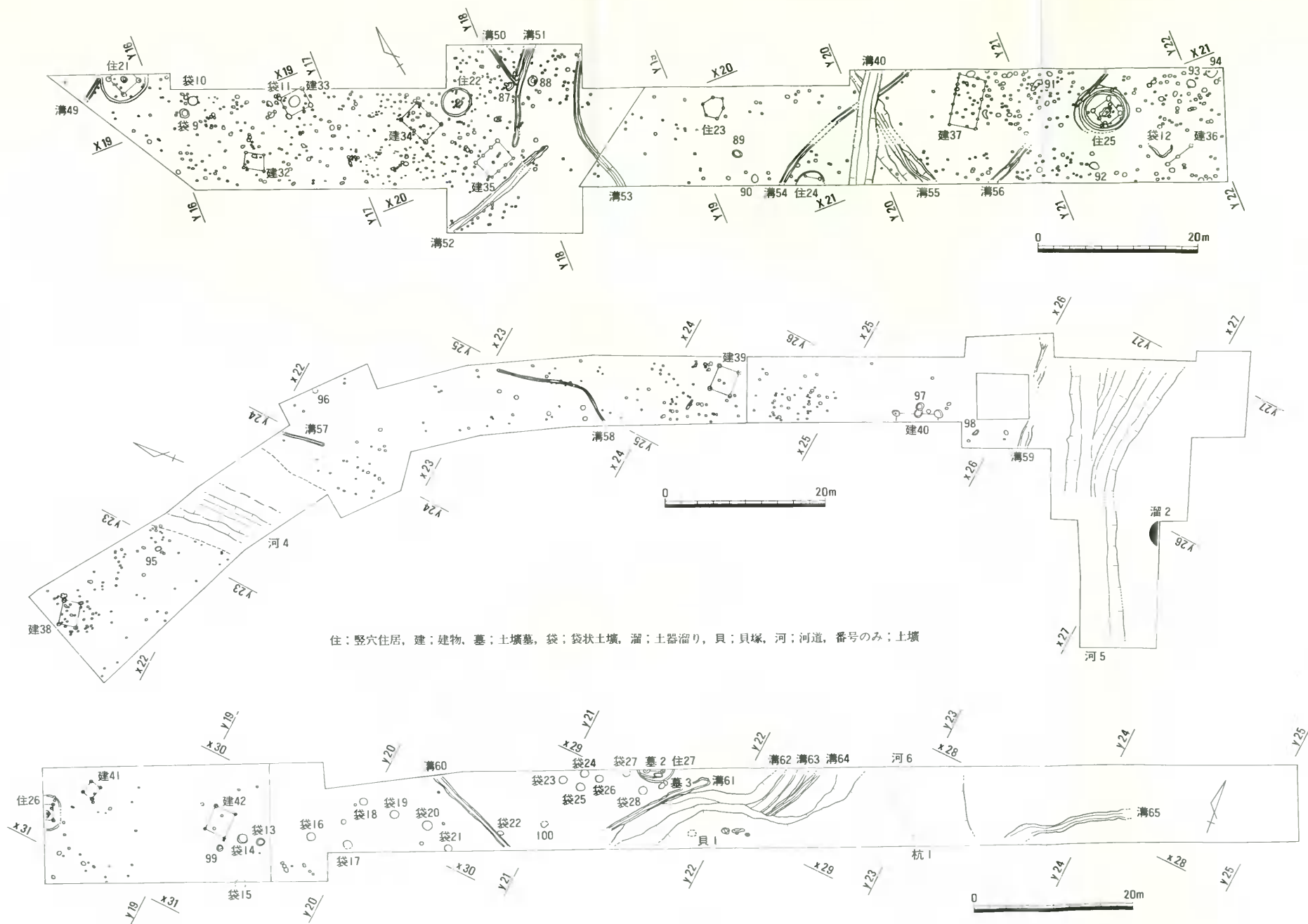


第93図 弥生時代中期中葉~後期遺構全体図(KO1・2区；1/400)

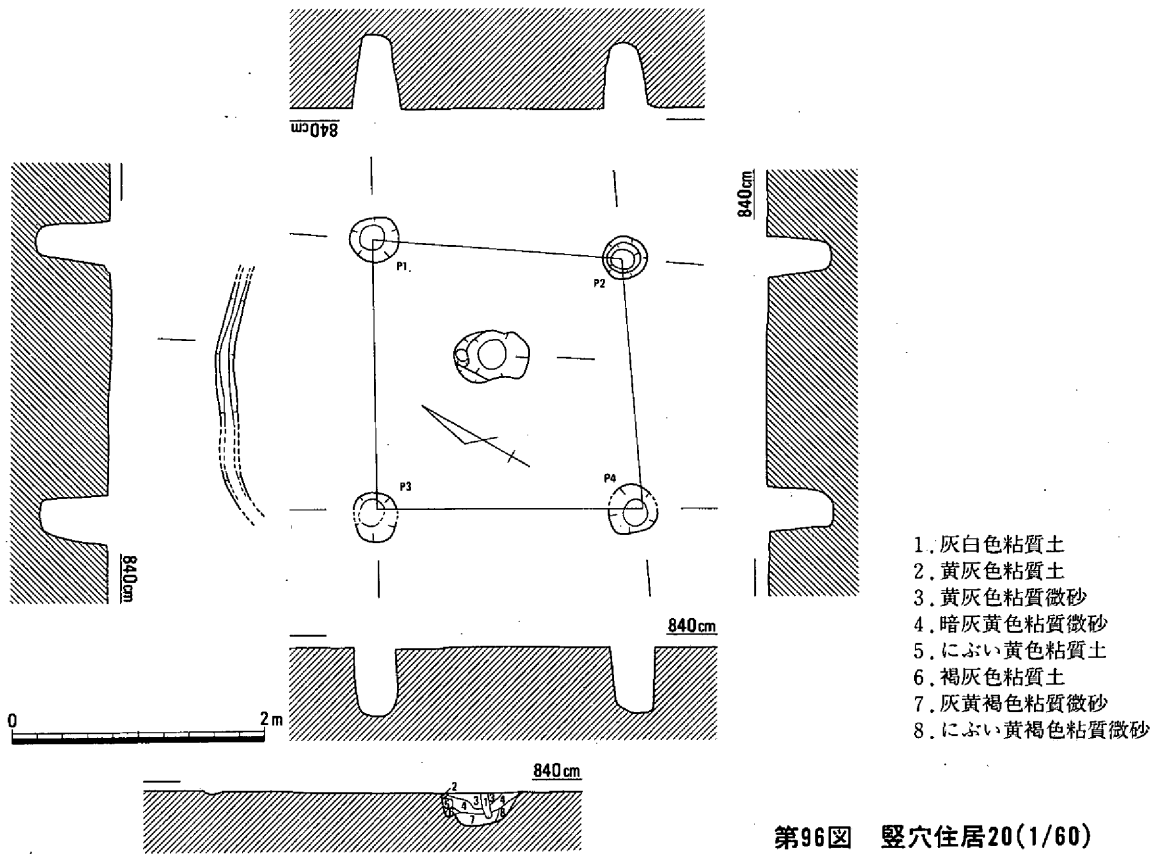


建：建物，墓：土壌墓，袋：袋状土壌，番号のみ；土壌

第94図 弥生時代中期中葉～後期遺構全体図(HO・K10・H20・K区；1/400)



第95図 弥生時代中期中葉～後期遺構全体図(CH2～5・HW1～3区；1/500)



第96図 竪穴住居20(1/60)

35～40cm、深さ50～56cmの不整な円形で、柱間は196～213cmである。中央穴は平面楕円形で、60×42×27cmを測る。弥生土器小片の出土により、弥生時代中期後半～後期前半に比定される。(光永)

竪穴住居21 (第97図、図版14-3)

CH 2区北端に位置して北東部を調査区外に置き、溝49を削っている。平面形は円形に復元され、径590cmを測る。幅20～43cm、深さ7～11cmの壁体溝が巡り、床面の海拔高は8.25m前後でほぼ平坦である。4本と想定される柱穴のうちの3本を柱間250cmと265cmで検出し、掘り方は長径55～60cm、深さ60～81cmの平面楕円形を呈する。中央穴は、1辺65cm、深さ5cmの平面方形の段の北西部が57×51×45cmの規模で平面楕円形に掘りくぼめられたもので、炭・焼土を含む埋土は掘り直しを示す。弥生土器小片の出土により、弥生時代中期後半～後期前半に比定される。(光永)

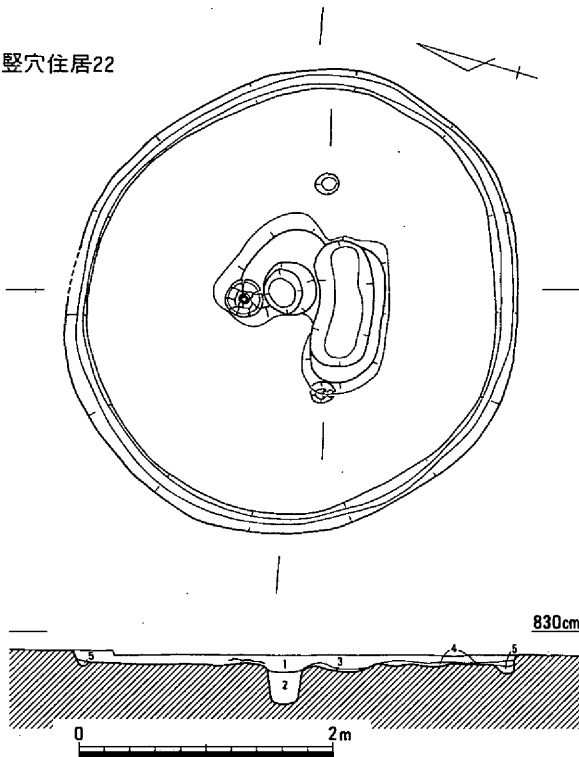
竪穴住居22 (第97図、図版15-1)

CH 2区東部に位置し、建物34との距離1.2mと近接する。平面形は382×346cmの楕円形を呈し、壁体は最大8cm程度が残っている。海拔高8.03m前後でほぼ平坦な床面に幅16～21cm、深さ4～8cm程度の壁体溝が全周する。柱穴は中央やや南寄りに柱間158cmで2本が検出され、掘り方は長径19cm、深さ8～12cmの楕円形である。中央穴は円形で、径41cm、深さ33cmを測り、西辺を除いて上幅2～25cm、高さ2cm前後の低い土手に囲まれている。この土手は中央穴の南側にも続き、100×42×6cmの規模の平面楕円形のくぼみを形成している。床面から出土した弥生土器の高杯529により、時期は弥生時代後期前葉に比定される。(光永)

竪穴住居23 (第98図、図版15-2)

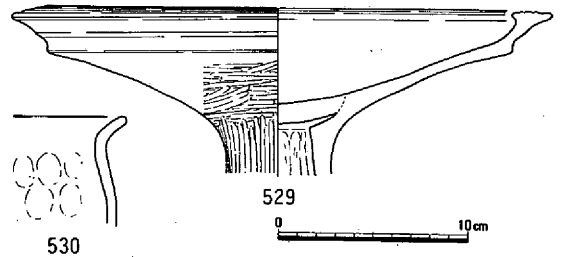
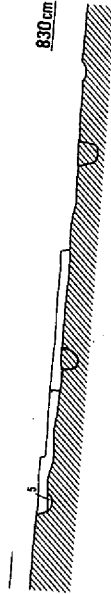
CH 3区の北部に位置する竪穴住居で、壁体溝などは残存していなかったが、6本の柱穴が確認された。しかし、東の柱穴P3は比較的小さく、深さも浅いため主柱穴は5本である可能性が高い。柱

竪穴住居22

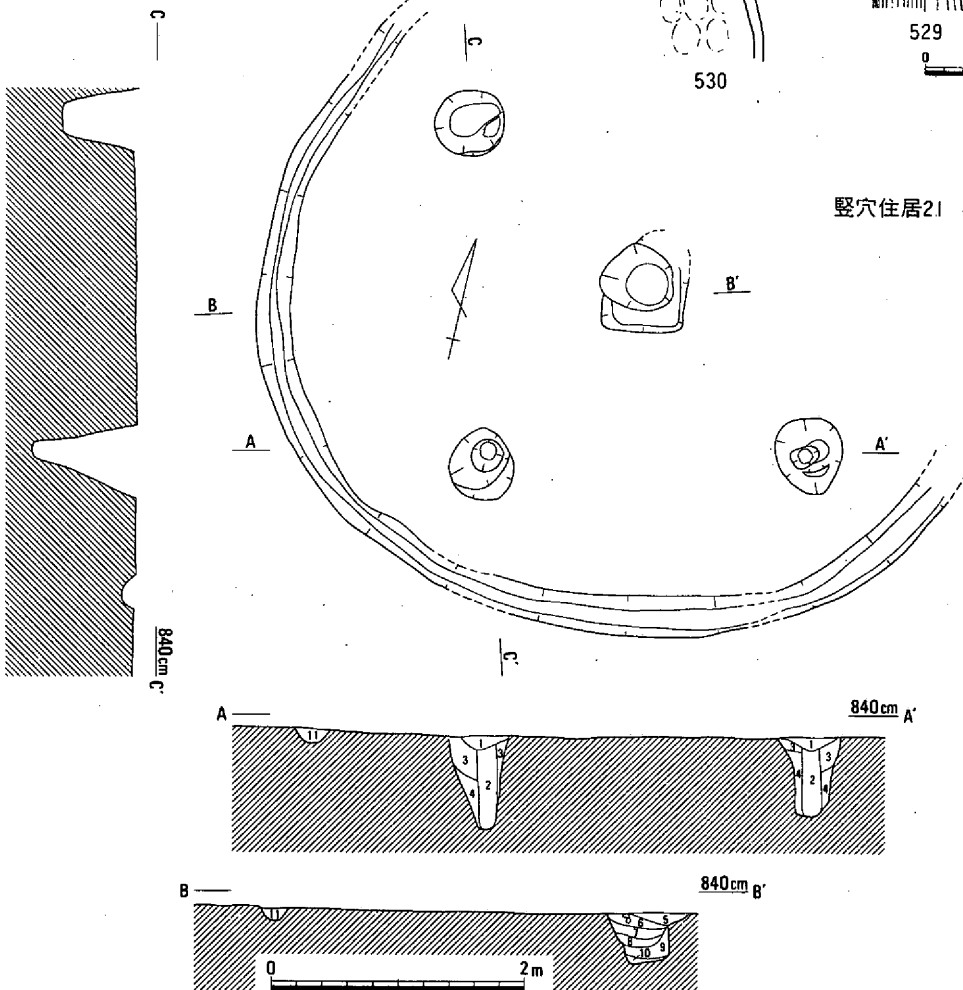


第97図 竪穴住居21・22
(1/60)・出土遺物(1/4)

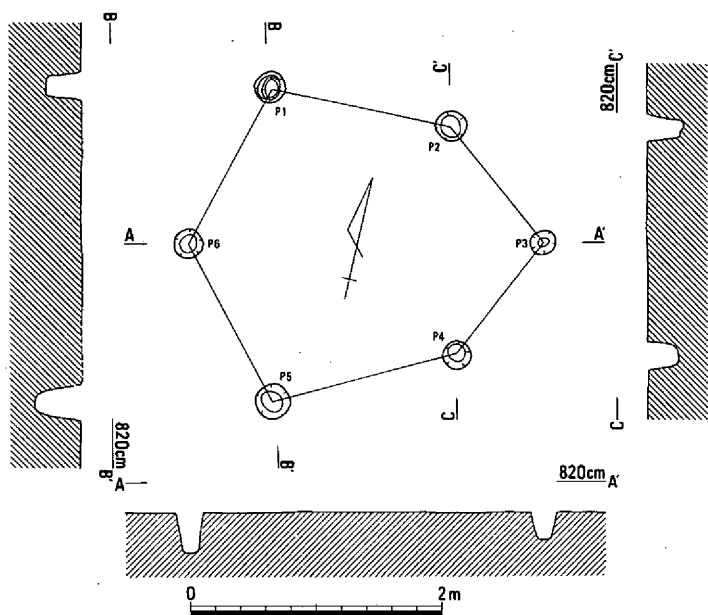
1. 暗灰黄色粘質微砂
2. 暗灰褐色粘質土
(炭・焼土を多く含む)
3. 灰黄褐色粘質土
(炭を多く含む)
4. 灰黄褐色粘質土
5. 黄灰色粘質土



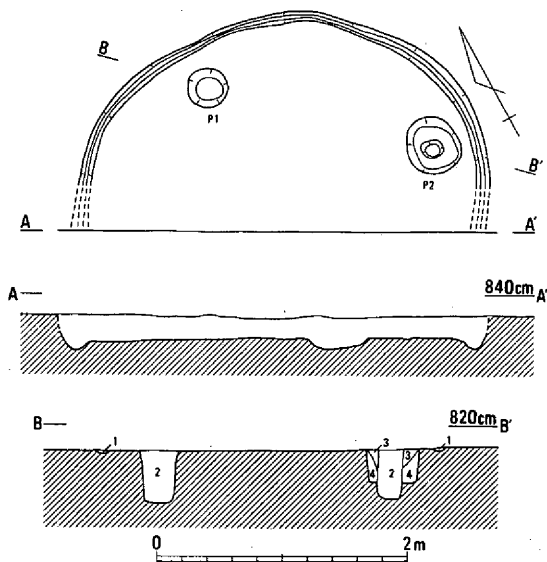
竪穴住居21



1. 灰黄褐色粘質微砂
(炭・焼土を含む)
2. にぶい黄褐色粘質微砂
(炭・焼土を少し含む)
3. 暗灰黄色粘質微砂
4. 黄褐色粘質土
5. 暗灰黄色粘質微砂
6. 暗灰黄色粘質微砂
(炭・焼土を多く含む)
7. 暗灰黄色粘質土
(炭・焼土を含む)
8. 黄灰色粘質土
(炭・焼土を含む)
9. 黄褐色粘質土
(炭を含む)
10. 黄褐色粘質土
(灰色粘質土を含む)
11. 灰黄褐色粘質微砂



第98図 竪穴住居23(1/60)



- 1. 暗灰茶褐色微砂
- 2. 暗黄茶褐色微砂
- 3. 明黄褐色微砂
- 4. 暗灰褐色微砂

第99図 竪穴住居24(1/60)

円形で、深さ72～90cmである。また径19cm程度の円形の柱痕跡も認められる。床面中央では楕円形のピットを検出した。長さ95cm、幅49cm、深さ42cmを測り、埋土中に炭と焼土を含む小礫が多量に認められる。ピットの東西両脇には径30cm前後の円形のピット2本、南では焼土面を検出している。

拡張は壁体溝で50～70cm程度行われており、住居の規模は径5.22～6.25mを測る。南西の柱穴も40cm程度南に移設されている。

覆土中から高杯532が出土している。時期は弥生時代中期後葉と思われる。(柴田)

竪穴住居26 (第101図、図版16-2)

HW1区の西端に位置する。西半は調査区外となり全容は不明である。検出された部分から、長さ4.5mの隅丸方形を呈する4本柱の竪穴住居と想定される。床面の海拔高は8.16mを測る。壁体溝は幅

間は111～153cmを測る。柱穴の平面は径24～30cm程度の円形で、深さ24～37cmである。住居の規模は确实ではないが4m以上、円形であると思われる。出土遺物はないが、時期は周囲の状況などから弥生時代後期前葉と思われる。(柴田)

竪穴住居24 (第99図、図版15-3)

CH3区の北部、竪穴住居23の南東に位置する竪穴住居である。平面形は円形であるが、南西半部は調査区外である。規模は径3.3mを測り、深さは検出面から21cmである。壁体溝は幅6～13cmを測る。確認された2本の主柱は壁体溝近くに位置し、

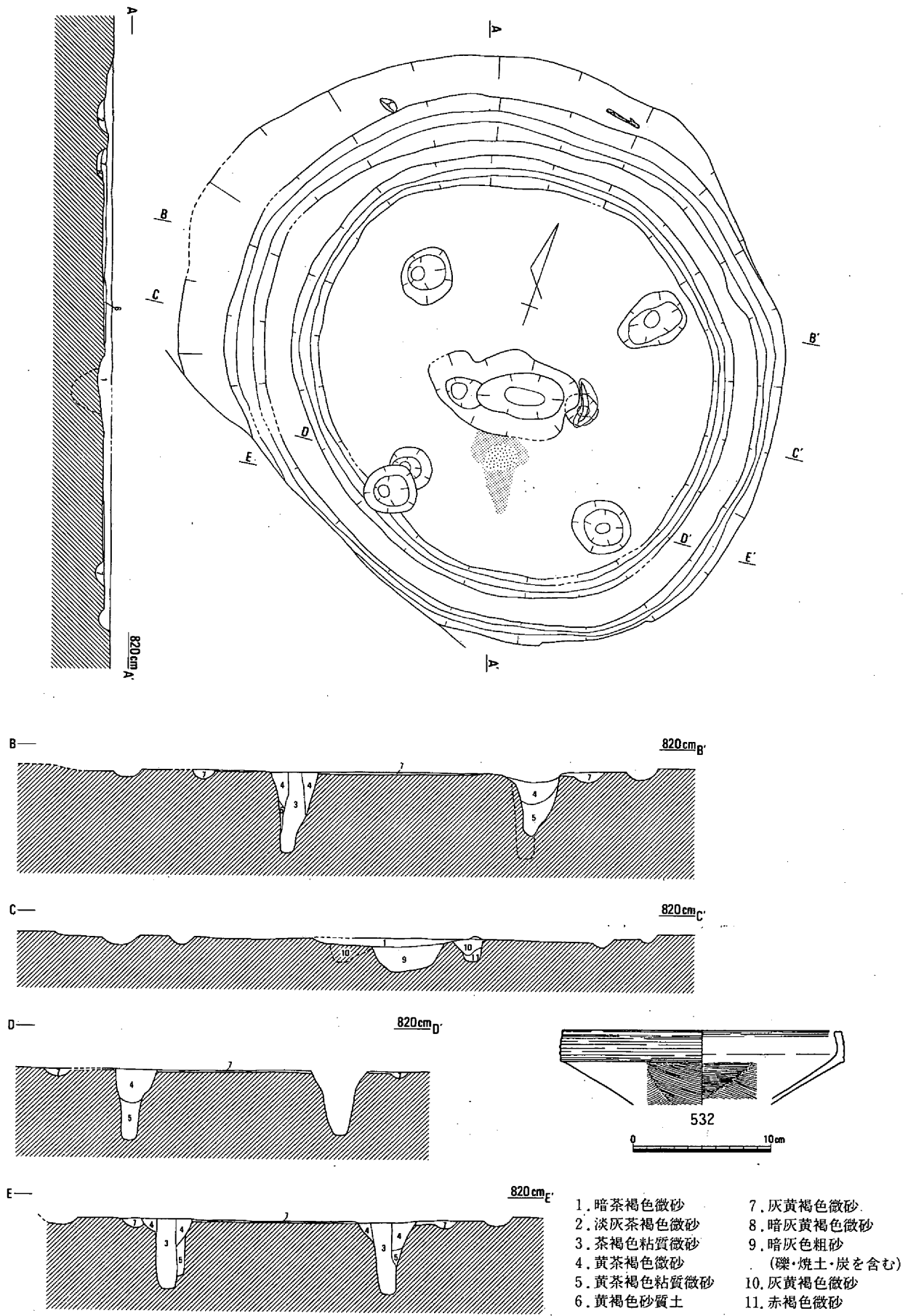
柱間は185cmを測る。柱穴の平面は円形で径31cmと48cm、深さ42cmと39cmである。P2には径19cmの円形の柱痕跡が認められる。

時期を示す遺物は出土していないが、周囲の状況などから弥生時代後期前葉と思われる。(柴田)

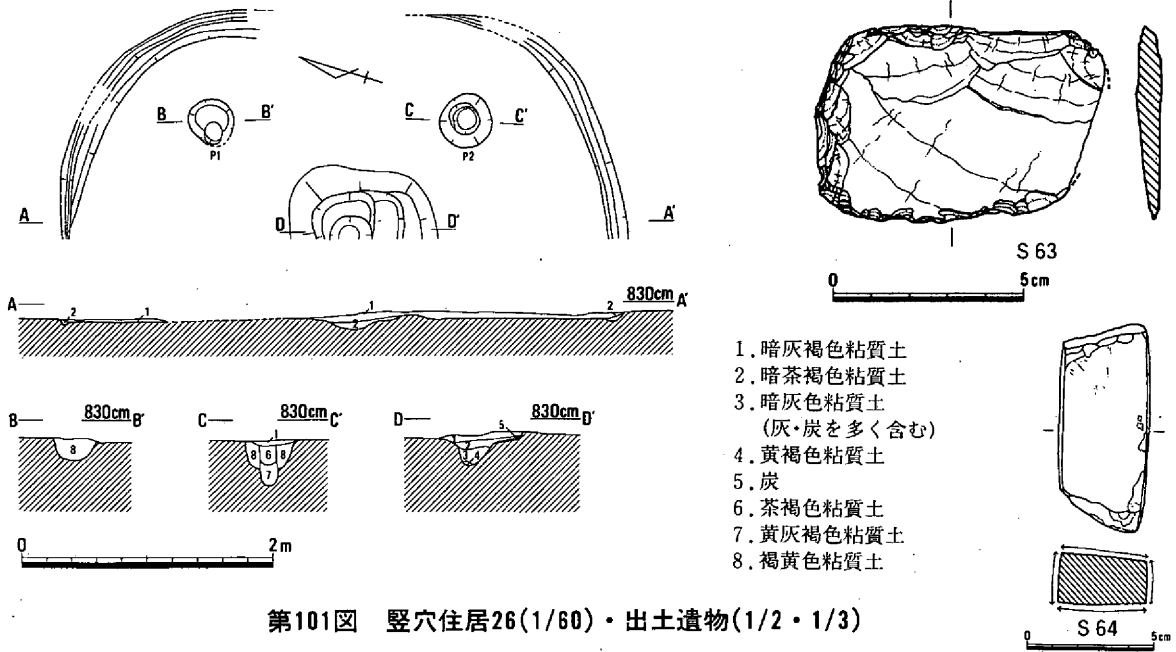
竪穴住居25 (第100図、図版16-1)

CH3区南中央に位置する竪穴住居で、検出面からの深さは12cmである。拡張が1回認められるが、いずれも平面形は楕円形気味の円形で、主柱穴は4本である。拡張時の掘り方の南西側は現代溝によって切られている。

当初の住居は径4.59～5.50mを測り、主柱穴は壁体溝近くに位置する。柱間は210～261cmを測る。柱穴の平面は径48～66cmの円形あるいは78×57cmの楕



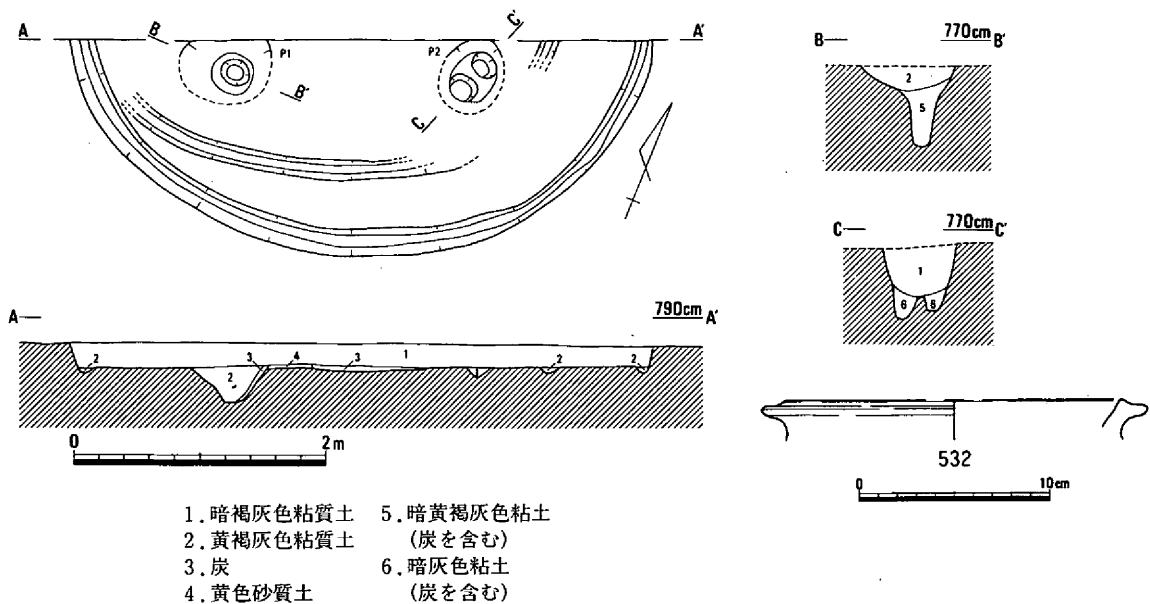
第100図 竪穴住居25(1/60)・出土遺物(1/4)



15cm、深さ5cmを測る。中央穴の周囲には盛り上がり認められ、北半が一段深い2段掘りの構造をもつ。被熱痕跡は認められなかったが、第3層には灰や炭が充満していた。一段高い南側の底面にも炭が広がっていた。土器細片が少量出土しており、弥生時代中期後葉と考えられる。(久保)

竪穴住居27 (第102図、図版16-3)

HW3区の北西端部において検出した。全体の約2/3は調査区外に位置しているが、平面形はほぼ円形で、深さは検出面から20cm残存していた。床面はほぼ平らで、中央部付近には厚さ2~3cmの炭層が確認できた。壁体溝は図示したように2本検出できたため、一度の建て替えが想定できる。柱穴は2本確認でき、P2には柱痕が2か所検出できた。遺物は少量の土器片が出土したのみで、時期は弥生時代後期前葉と考えられる。(平井)



(2) 建物

建物1 (第103図、図版17-1)

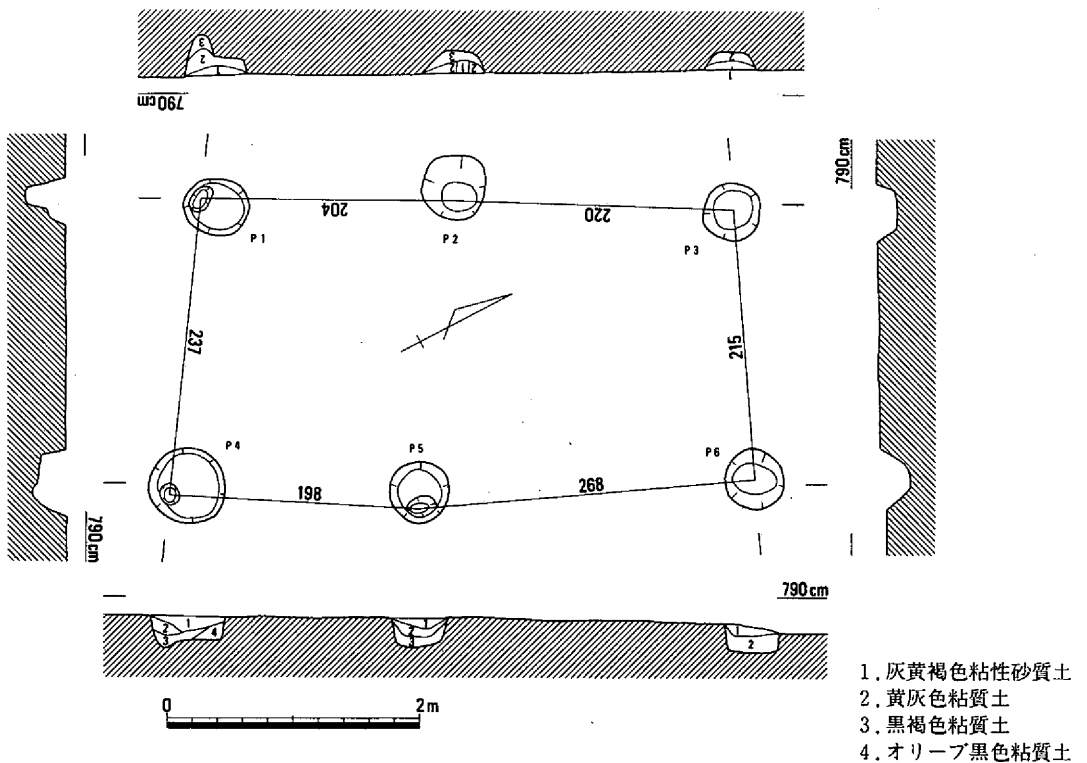
TA区の東半北西隅で検出した桁行2間、梁間1間の掘立柱建物である。柱穴の位置は長方形の規格からはずれ、桁行の中央柱穴も中点にはなく、南に片寄っていた。西側桁行の柱間は204・220cm、東側桁行では198・268cm、梁間は215・237cmであった。床面積は11.3m²を測る。柱穴の掘り方は円形で、長径が49~63cm、深さは15~23cmあった。柱穴2では断面で幅10cmの柱痕が確認され、柱穴1・4・5では直径15cm前後の柱のめり込みがみられた。年代は弥生時代後期とされる。(岡本)

建物2 (第104図、図版17-2)

TA区の東半中央部にあった。建物1の15m東にあって、棟の方向を平行させていた。溝9の埋没後に建てられていた。桁行2間、梁間1間の掘立柱建物である。東側桁行の中央柱穴が東にずれている。柱間は、東側桁行が151・173cm、西側桁行が163・167cm、梁間は225・236cmであった。床面積は7.9m²を測る。柱穴の掘り方は円形で、長径が48~66cm、深さは16~32cmあった。柱穴2~4の断面で柱痕が確認され、その幅は10~15cmを測った。年代は弥生時代後期とみられる。(岡本)

建物3 (第105図)

TA区の東半中央部で建物2の東9mに棟を平行して検出された。建物4と重複していたが、棟方向を90°異にしていた。桁行2間、梁間1間の掘立柱建物である。西側の中央柱穴は建て直されたようで、柱穴7と8についてもその可能性がある。西側桁行の柱間は175~181cm、東側桁行では144・189cm、梁間は211・221cm、床面積は7.9m²を測った。柱穴は円形で、長径が53~67cm、深さは25~52cmと幅がある。柱痕の直径は15~20cmであった。年代は弥生時代後期と考えられる。(岡本)



第103図 建物1(1/60)

建物4 (第106図)

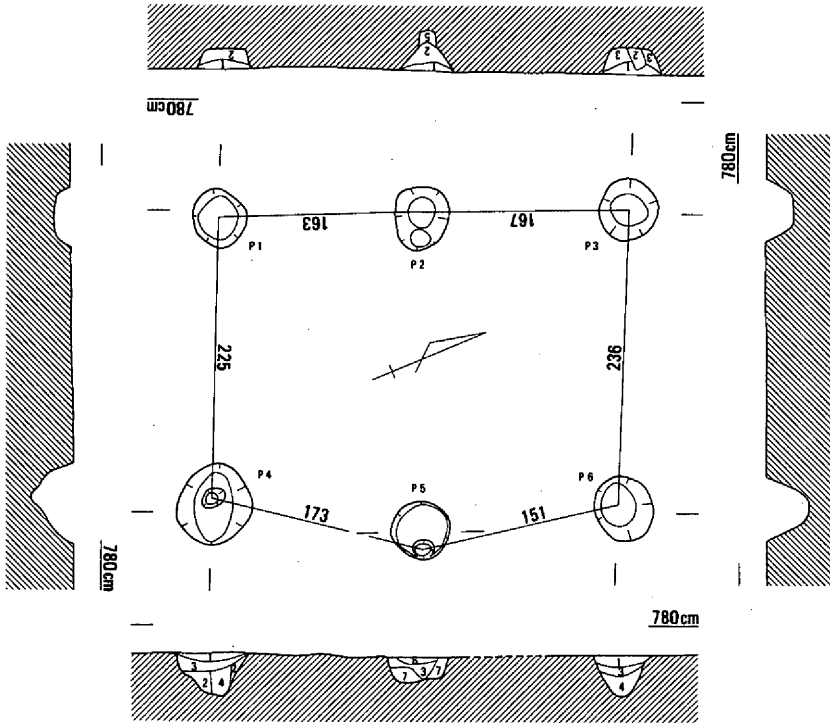
TA区の東半中央部、建物3と重複して検出された。棟方向は建物3と90°異なっている。桁行2間、梁間1間の掘立柱建物と考えるが、南東隅の柱穴は検出されず、平面形も梁間が東西でかなり差があり、建物とすることに疑問もある。柱間は、桁行が198~267cm、梁間が255cmで、床面積は推定で12.2㎡を測る。柱穴の掘り方は円形で、長径が39~51cm、深さは16~62cmであった。南西隅の柱穴は重複の可能性がある。年代は弥生時代後期とみられる。(岡本)

建物5

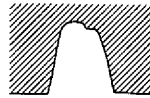
(第107図、図版17-3)

TA区の東半南西部で検出され、建物6と重複関係にあった。1間×1

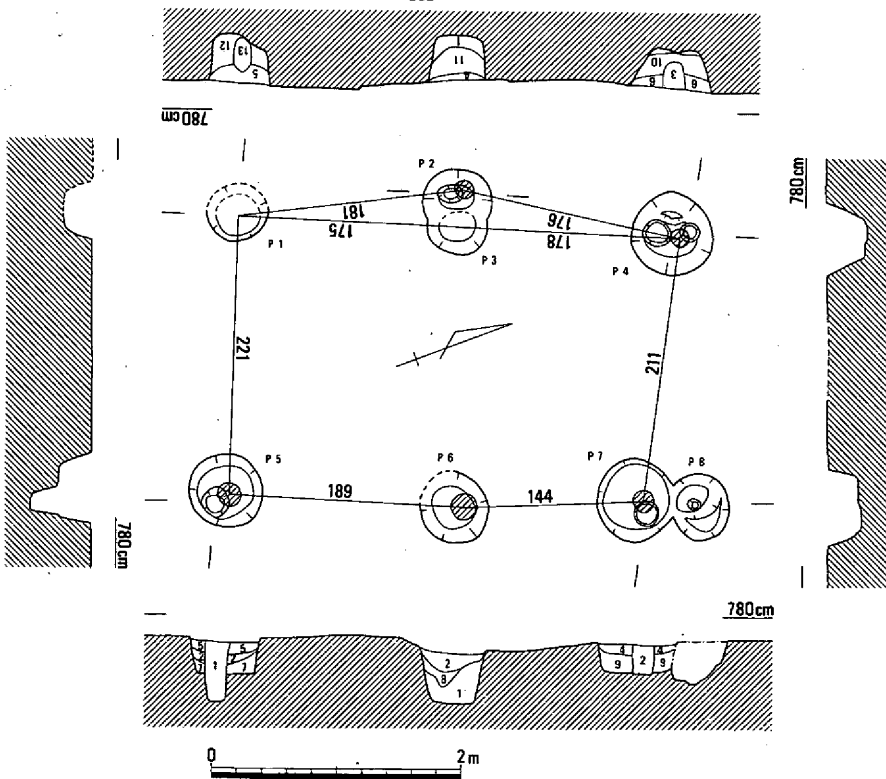
1. オリーブ黒色粘質土
2. 褐色粘性砂質土
3. 暗オリーブ褐色粘質土
4. 黒褐色粘性砂質土
5. 暗褐色粘性砂質土
6. 黒褐色土
7. 灰色粘質土
8. オリーブ褐色粘質土
9. 暗灰黄色粘質土
10. 灰オリーブ色粘土
11. 黄灰色粘質土
12. 黄灰色粘質土
13. 黒褐色粘質土



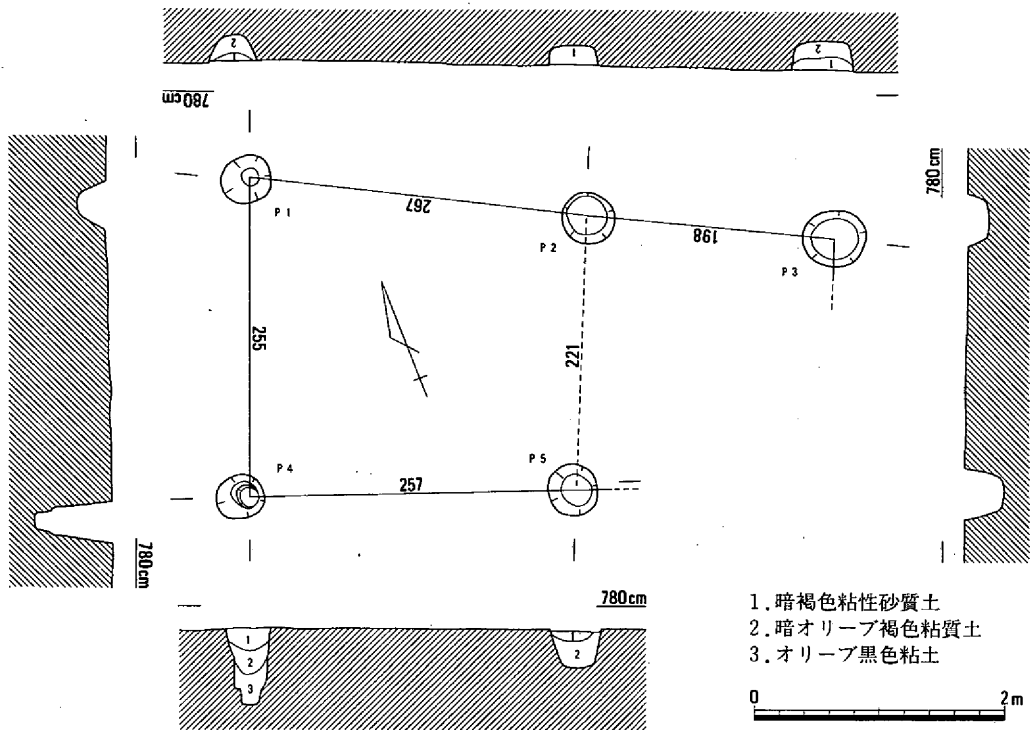
第104図 建物2(1/60)



1. 暗灰黄色粘性砂質土
2. オリーブ黒色土
3. 黄灰色粘質土
4. 黒褐色粘質土
5. 灰オリーブ色粘質土
6. 明黄褐色土
7. 灰オリーブ色粘質土



第105図 建物3(1/60)

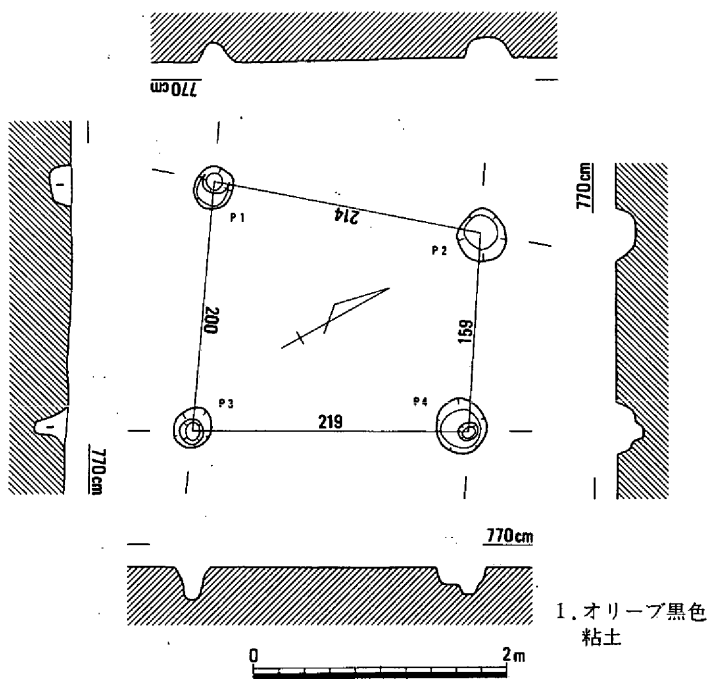


第106図 建物4(1/60)

間の掘立柱建物と考えるが、柱穴規模の差や平面形の歪みなど疑問もある。柱間は桁行が214・219cm、梁間は159・200cmとなる。床面積は4.4㎡である。柱穴の長径が35～44cm、深さは17～20cmだった。柱のめり込みの直径は10～15cmであった。年代は弥生時代後期か。(岡本)

建物6 (第108図、図版18-1)

建物5と重複していた。1間×1間の掘立柱建物で、平面形はほぼ長方形をなす。中心には穴はなく、柱穴の残存状況からしても竪穴住居とは考えられない。柱間は桁行が354・364cm、梁間は317・321cmで床面積は11.5㎡を測った。柱穴は円形で、長径が72～104cm、深さは49～55cmだった。全柱穴で柱痕が確認され、その幅は15～20cmであった。柱穴の規模は、柱痕も含め、TA区内の竪穴住居・建物を通じて最大である。柱穴2から土器片が出土していて、弥生時代後期前葉末～中葉初頭かと考えられる。(岡本)

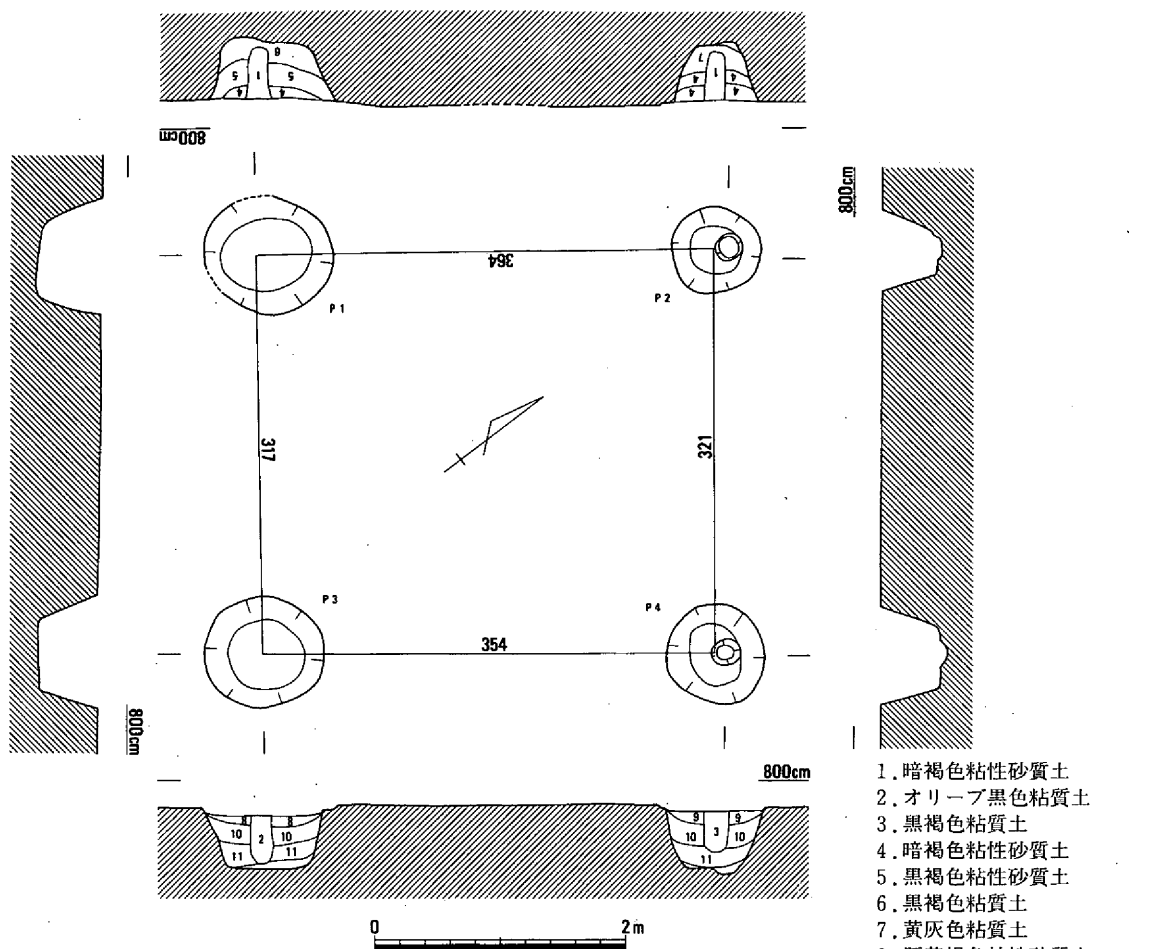


第107図 建物5(1/60)

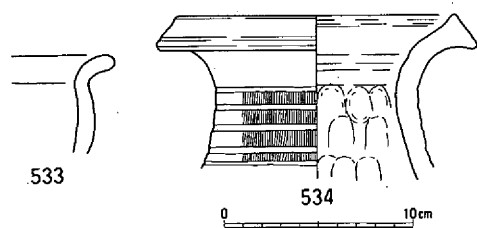
く、柱穴の残存状況からしても竪穴住居とは考えられない。柱間は桁行が354・364cm、梁間は317・321cmで床面積は11.5㎡を測った。柱穴は円形で、長径が72～104cm、深さは49～55cmだった。全柱穴で柱痕が確認され、その幅は15～20cmであった。柱穴の規模は、柱痕も含め、TA区内の竪穴住居・建物を通じて最大である。柱穴2から土器片が出土していて、弥生時代後期前葉末～中葉初頭かと考えられる。(岡本)

建物7 (第109図、図版18-2)

TA区の東半南端で検出された。建物3と棟の方向を等しくし、南に17m離れていた。前述の建物6の東



- 1. 暗褐色粘性砂質土
- 2. オリーブ黒色粘質土
- 3. 黒褐色粘質土
- 4. 暗褐色粘性砂質土
- 5. 黒褐色粘性砂質土
- 6. 黒褐色粘質土
- 7. 黄灰色粘質土
- 8. 灰黄褐色粘性砂質土
- 9. 暗褐色粘性砂質土
- 10. 暗オリーブ褐色粘性砂質土
- 11. 黄灰色粘質土



5 mにあたる。桁行2間、梁間1間の掘立柱建物である。柱穴3が長方形の規格から少し北西へずれていた。床面積は12.3㎡であった。桁行の柱間は東側が194・227cm、西側は218・224cm、梁間は274・283cmを測った。

第108図 建物6(1/60)・出土遺物(1/4)

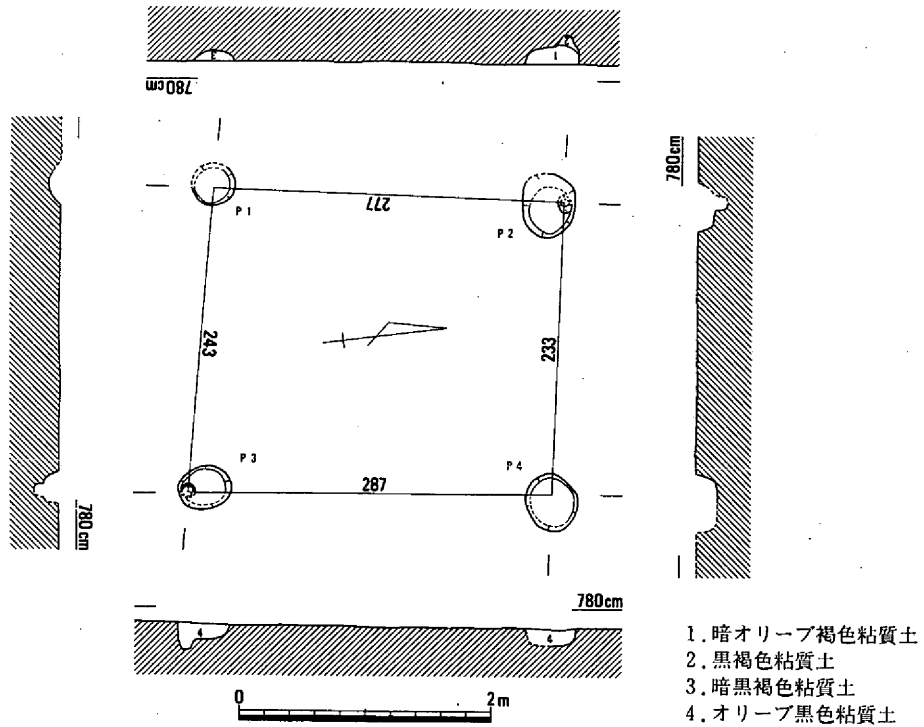
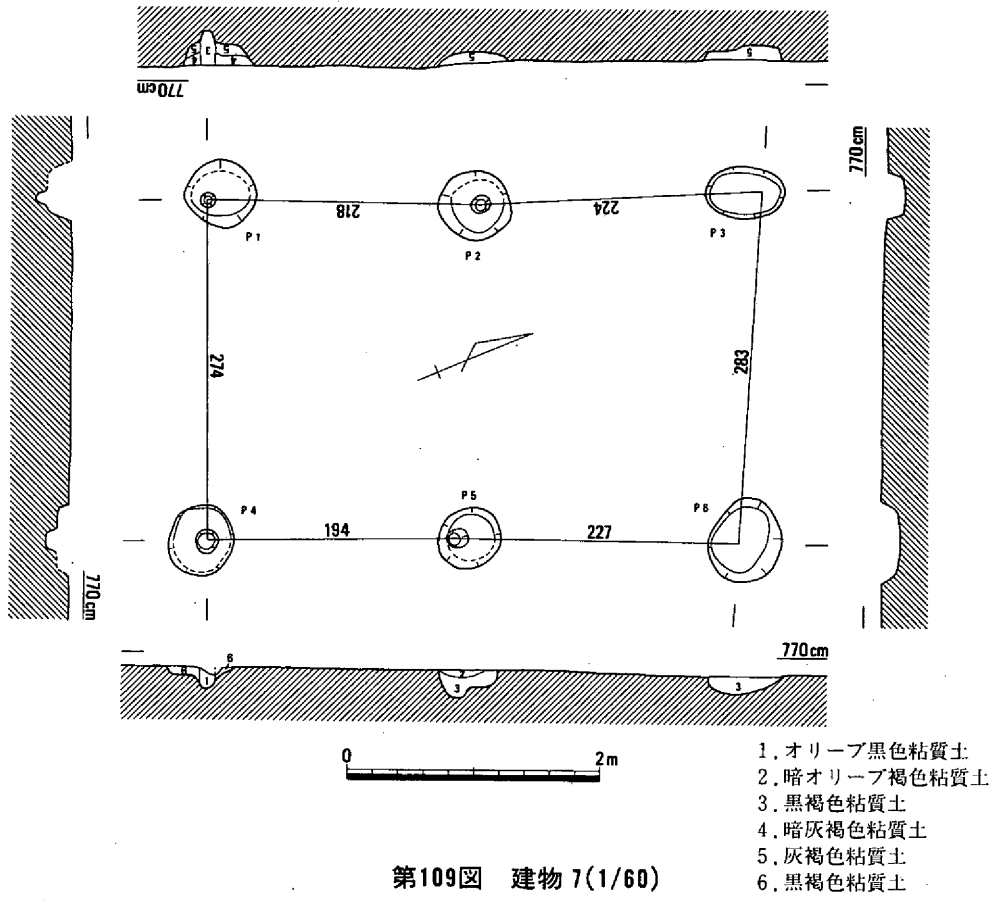
柱穴の掘り方は円形で、長径が52～69cm、深さは10～19cmであった。柱穴1・4では柱痕が確認され、その幅は12cmだった。年代は弥生時代後期と思われる。(岡本)

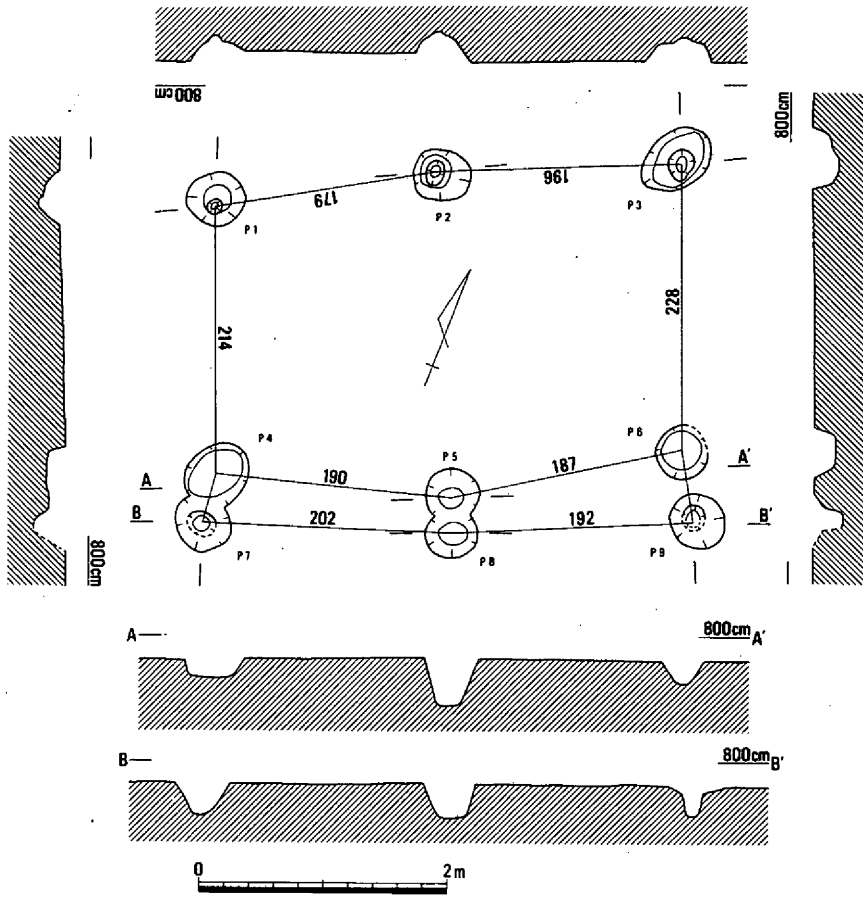
建物8 (第110図、図版18-3)

TA区の中央部にあり、建物6から8 m西に位置していた。1間×1間の掘立柱建物である。南北棟と考えるが、棟方向は建物7のそれよりは少し北が西に振っていた。柱間は、桁行が277・287cm、梁間は233・243cmあって、床面積は7.0㎡だった。柱穴は円形で、長径が34～52cm、深さが9～15cmを測った。柱穴の底に直径10cm程度の柱のめり込みがあった。年代は弥生時代後期か。(岡本)

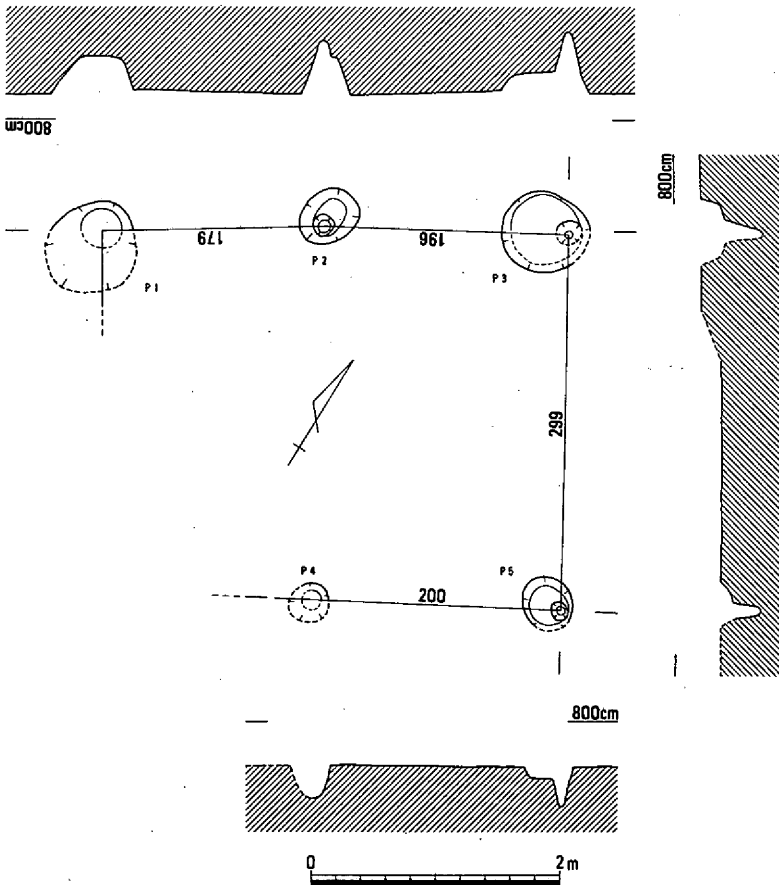
建物9 (第111図)

TA区の西半中央部で竪穴住居7と重複し、建物8の西12mにあたる。東西棟の掘立柱建物で、桁行2間、梁間1間である。南桁行が2列あり、柱穴底の形状から拡張された可能性がある。床面の形状は胴張りで面積は当初が9.0㎡であった。北桁行の柱間は179・196cm、南桁行は187～202cm、梁間では当初が214・228cmを測った。柱穴は円形で長径が42～63cm、深さは15～38cmであった。柱痕は直径





第111図 建物9(1/60)



第112図 建物10(1/60)

が10～15cm程度だった。近接例からすれば竪穴住居7に後れる弥生時代後期の建物か。(岡本)

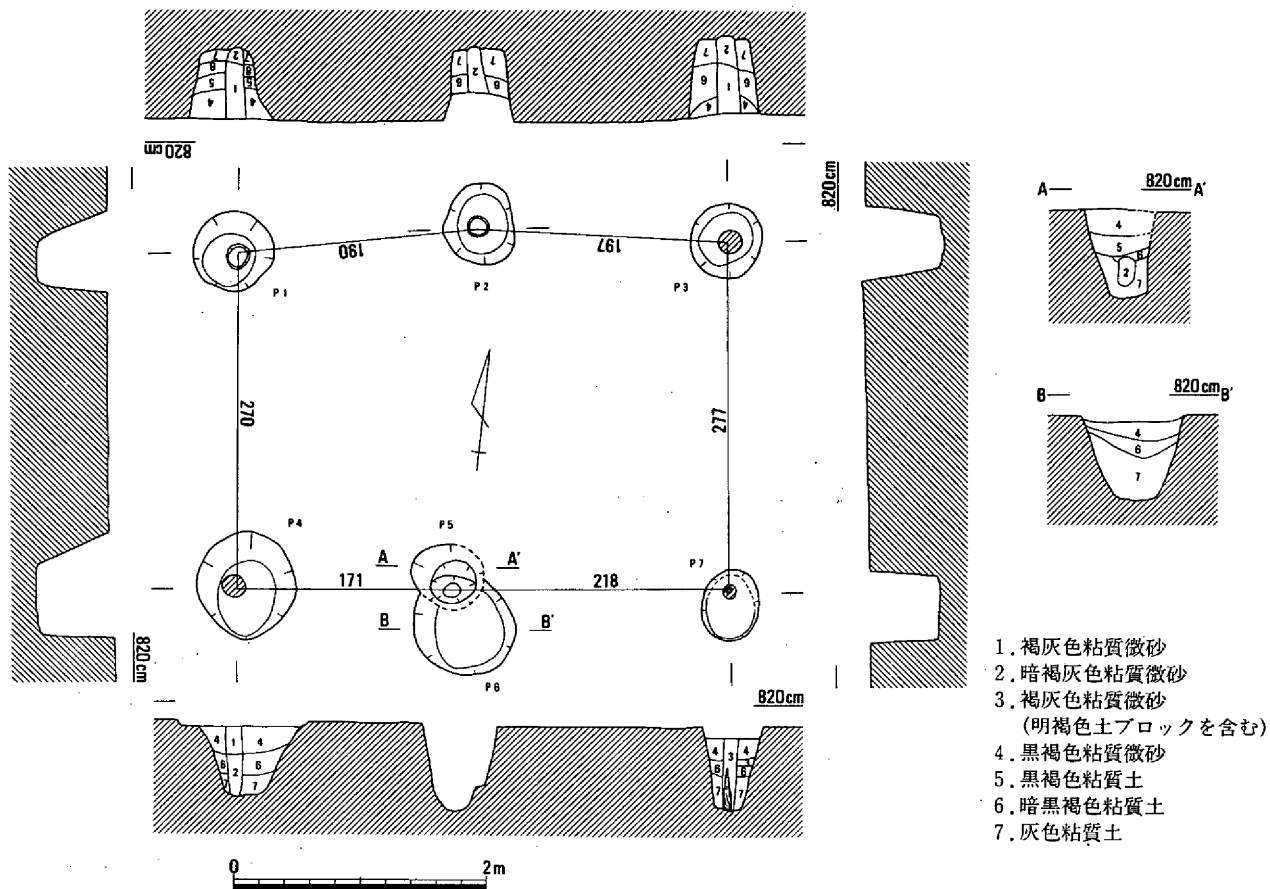
建物10 (第112図)

建物9の南東4mにあり、竪穴住居9と重複していた。桁行2間、梁間1間の掘立柱建物と考えているが、南西隅の柱穴は検出できなかった。棟の方向は東西だが、建物9とはやや異なる。柱間は桁行が179～200cm、梁間が299cm、床面積は

第3章 発掘調査の概要

推定で11.4㎡であった。柱穴は円形で長径は50~71cm、深さは19~32cmだった。南桁行の柱穴は15cm低い堅穴住居9の床面で検出している。柱痕は10cm前後を測った。建物9と近接した年代か。(岡本) 建物11 (第113図、図版19-1)

TA区の西半中央で検出された。建物9の南3.5m、建物10の西5mにあり、堅穴住居11からは2m北にあたる。桁行2間、梁間1間の掘立柱建物である。棟方向は東西だが、建物7・建物10ともに平行しない。平面形は少し胴張りで、床面積は10.9㎡を測った。柱間は、北桁行で190・197cm、南桁行が171・218cm、梁間は270・277cmであった。柱穴は円形で長径が58~87cm、深さは57~72cmもあり、直径11~18cmの柱痕が各柱穴の断面で確認された。堅穴住居群に後出する年代か。(岡本)



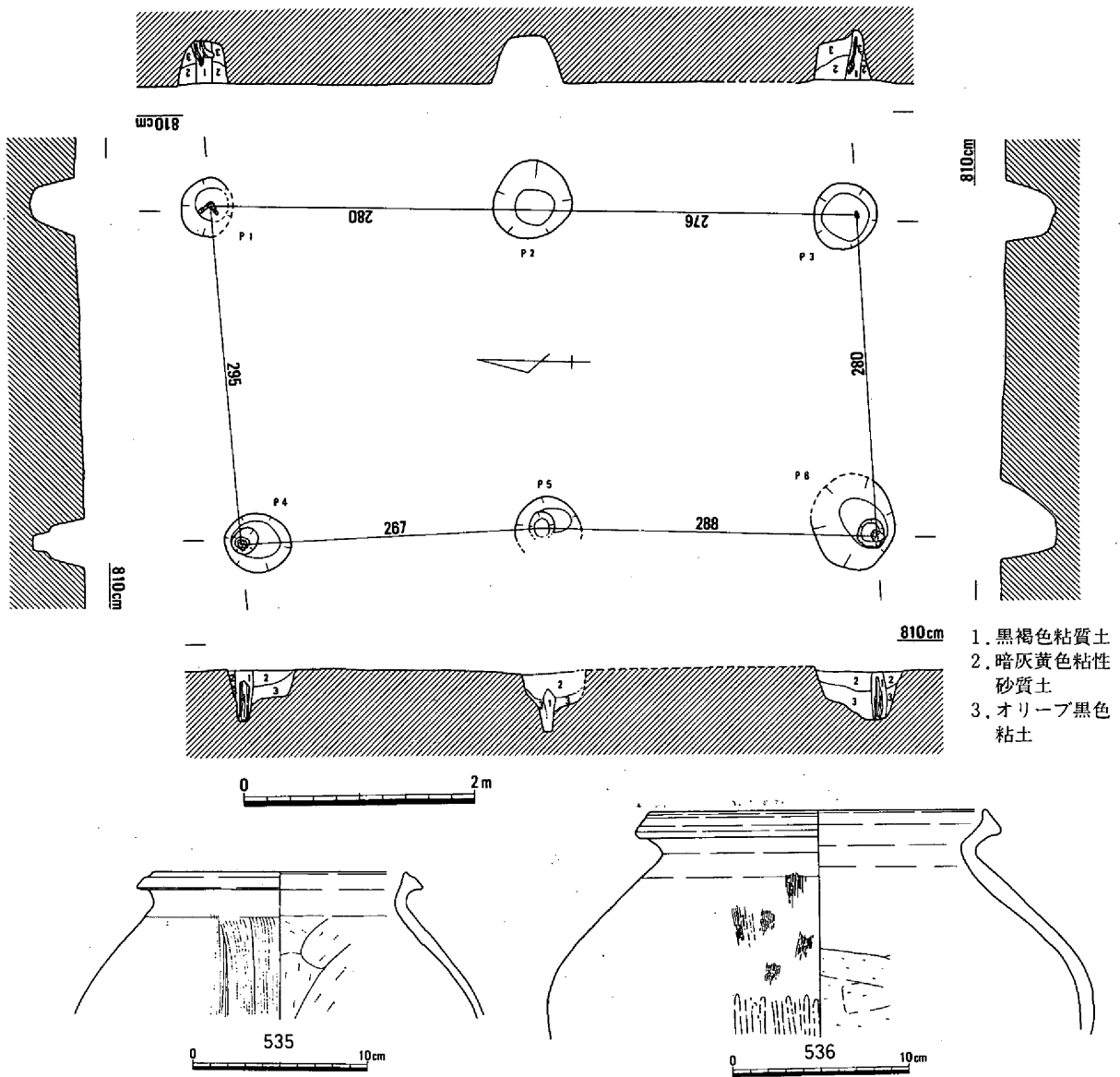
第113図 建物11(1/60)

建物12 (第114図、図版19-2)

TA区の西端、建物11の4.5m西で、溝10と重なっていた。桁行2間、梁間1間の掘立柱建物で、南北の棟方向は建物13と約90°異なる。平面形はかなり歪んでいた。東桁行の柱間は276・280cm、西桁行で267・288cm、梁間は280・295cmだった。床面積は16.8㎡である。柱穴は円形で、長径が51~79cm、深さは30~43cmあり、幅11~17cmの柱痕が確認された。柱根も四隅の柱穴で残存していた。掲載土器は柱穴6から出土した。年代は弥生時代後期前葉末から中葉初頭と考えられる。(岡本)

建物13 (第115図)

TA区の西端、建物12の3.5m南に位置する掘立柱建物である。棟方向は建物11と平行する。堅穴住居12と重複し、調査区の端にあるため不明確だが、桁行2間、梁間1間と想定される。柱穴1は側溝で破壊した。柱間は桁行が241・275・292cm、梁間で260cm、床面積は10.9㎡と推定される。建物12と同じく、梁間の倍が桁行全長に近い。柱穴は円形で、長径が43~57cm、深さは12~34cmと幅がある。



第114図 建物12(1/60)・出土遺物(1/4)

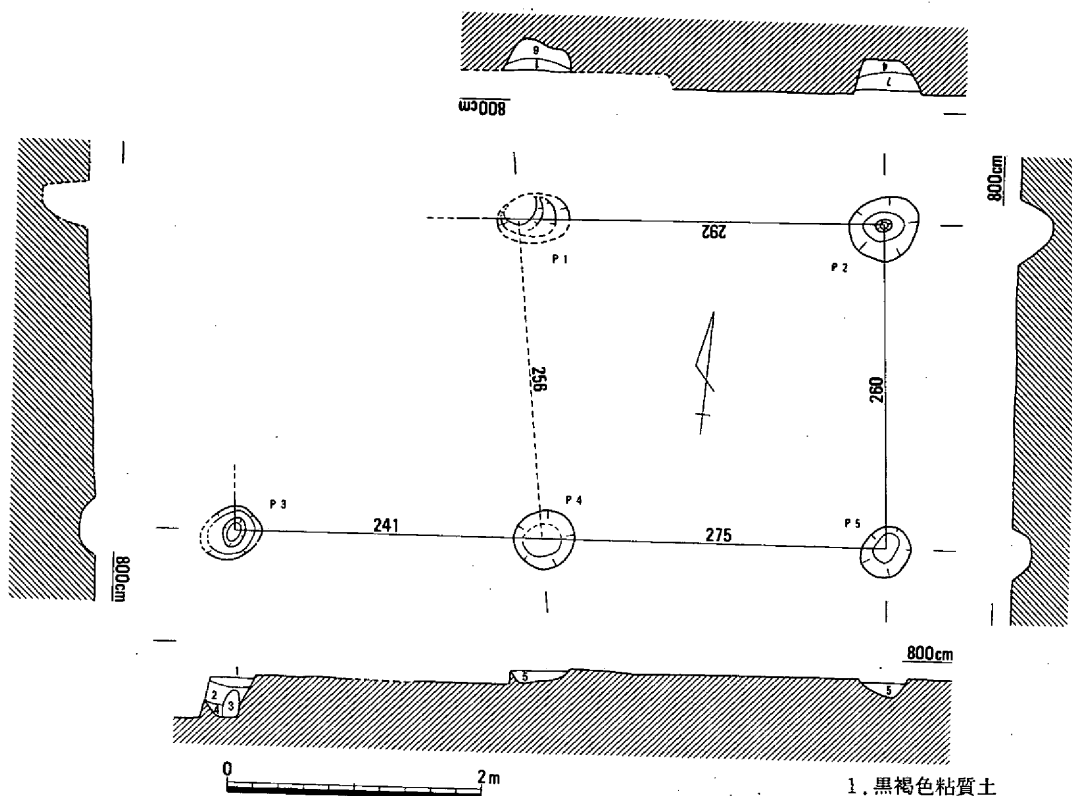
柱穴3で幅12cmの柱痕を確認した。年代は弥生時代後期で、竪穴住居12に続く。(岡本)

建物14 (第116図、図版19-3)

TA区の西半南西部で検出され、溝12と重複していた。桁行2間、梁間1間の掘立柱建物で、棟方向は東西を指し、建物1のそれとほぼ90°異なる。建物13の南東3.5mにあり、建物15と近接していた。柱間は北桁行が156・170cm、南桁行で162・176cm、梁間は258・280cmであった。柱穴3が少し内側にあるため平面形が歪んでいた。床面積は9.5m²を測る。柱穴は円形で、長径が38～44cm、深さは32～62cmであった。幅12～15cmの柱痕を確認した。年代は弥生時代後期中葉以降か。(岡本)

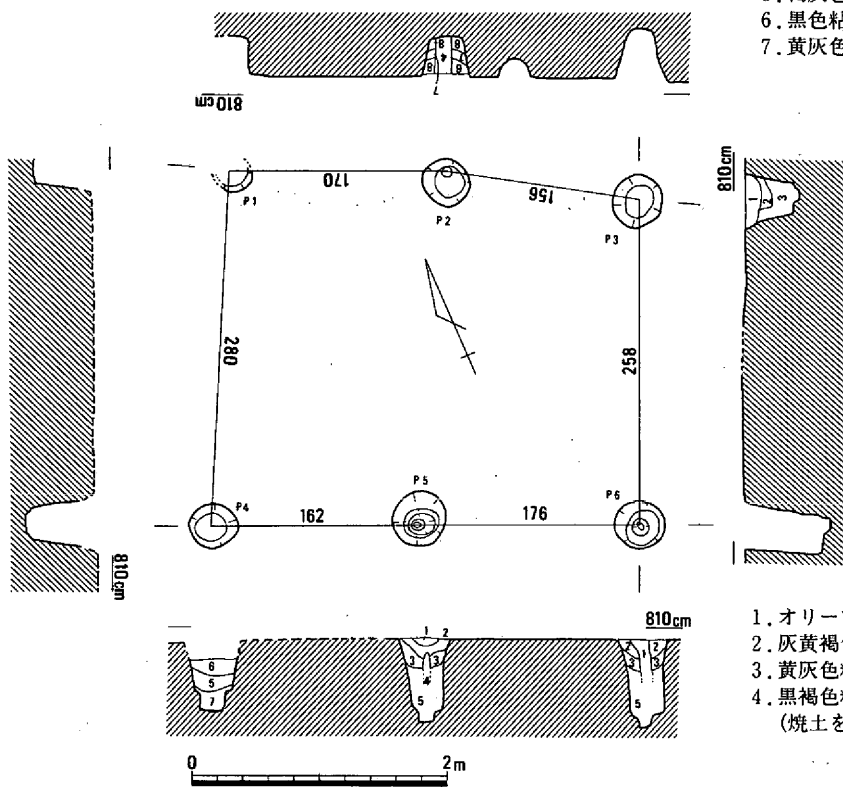
建物15 (第117図、図版19-3)

TA区の西半南端で竪穴住居13と重複していた。桁行2間、梁間1間の規模で、棟の方向は建物12とほぼ平行する。建物11から南に13m離れていた。平面形は歪んだ平行四辺形に近い。床面積は9.7m²であった。柱間は東桁行が169・193cm、西桁行は176・182cm、梁間では259・270cmを測った。柱穴の掘り方は円形で、長径が36～56cm、深さは16～36cmあり、幅10～16cmの柱痕が確認された。弥生時代後期前葉の高杯が出土したが、建物の年代は竪穴住居13に後れるとみられる。(岡本)



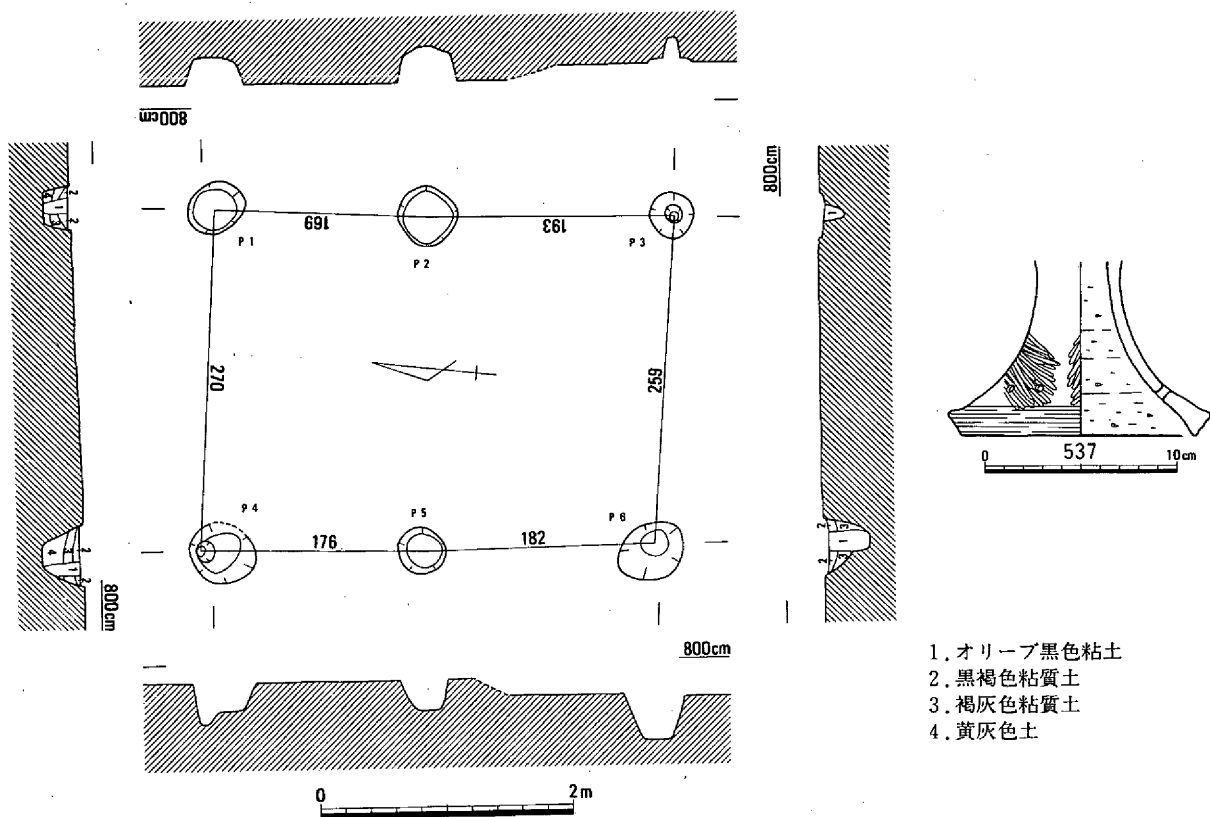
第115図 建物13(1/60)

- 1. 黒褐色粘質土
- 2. オリーブ黒色粘質土
(灰色土混じり)
- 3. 暗オリーブ黒色粘質土
- 4. オリーブ黒色粘質土
- 5. 褐灰色粘質土
- 6. 黒色粘土(炭を含む)
- 7. 黄灰色土



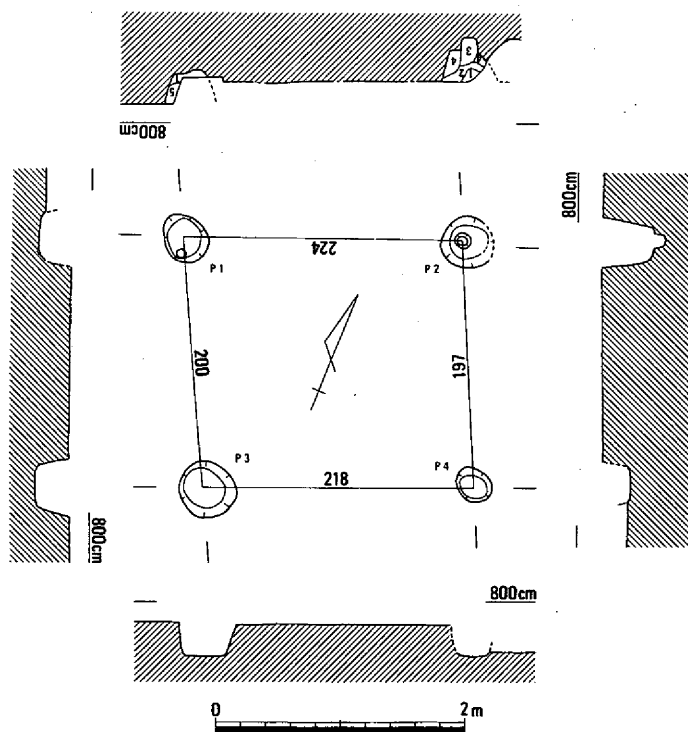
第116図 建物14(1/60)

- 1. オリーブ黒色粘性砂質土
- 2. 灰黄褐色粘性砂質土
- 3. 黄灰色粘性砂質土
- 4. 黒褐色粘質土
(焼土を含む)



1. オリーブ黒色粘土
2. 黒褐色粘質土
3. 褐灰色粘質土
4. 黄灰色土

第117図 建物15(1/60)・出土遺物(1/4)



1. オリーブ黒色粘土
2. 灰色粘土
3. オリーブ黒色粘土
4. 灰オリーブ色粘土
5. 黒褐色粘性砂質土

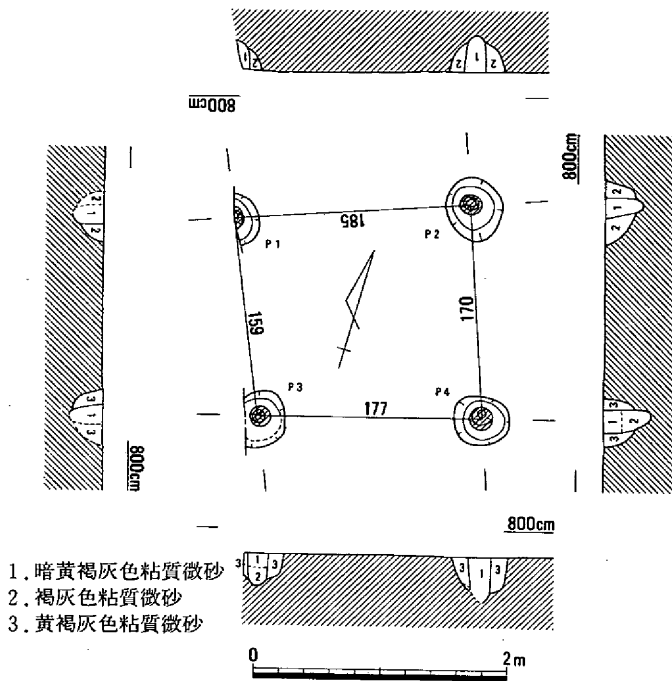
第118図 建物16(1/60)

建物16 (第118図)

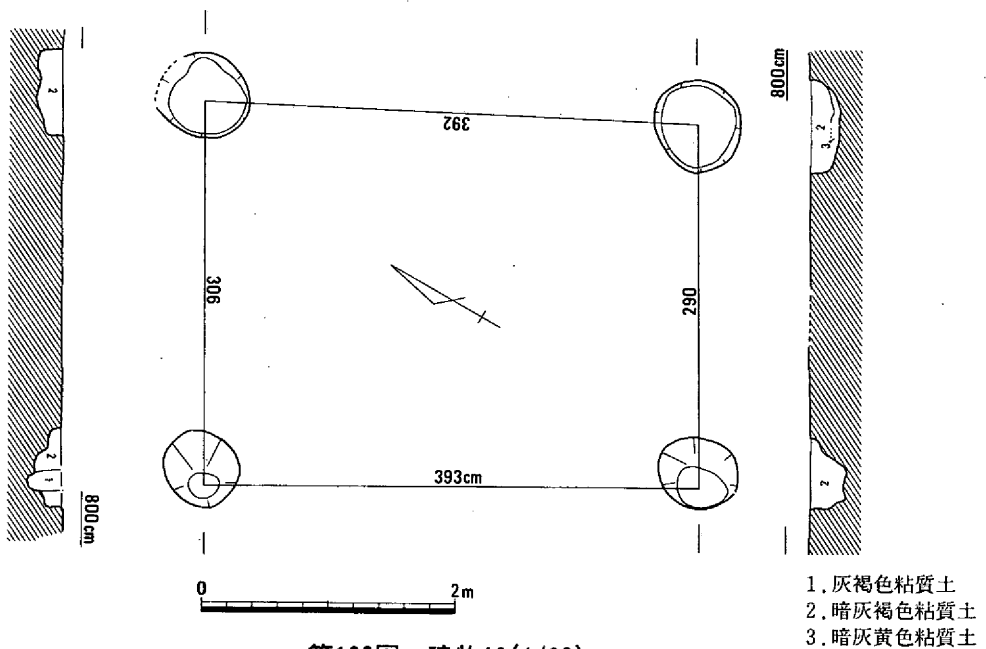
建物11～15に囲まれ、竪穴住居11と重複していた。建物11の南4.5mにあたる。1間×1間の建物で、棟方向は建物9に近い。柱間は桁行が218・224cm、梁間は197・200cmで、床面積は4.4㎡を測った。柱穴は長径が40～46cm、深さは30cm程であった。柱痕は幅13cmだった。近接する建物と同期と考える。(岡本)

建物17 (第119図、図版20-1)

H18区のほぼ中央に位置する。狭い調査区の中で、4本の柱穴が検出された。柱穴は平面楕円形で径約40～52cmを測り、深さ24～36cmが残存している。平面円形の柱痕跡が確認できており、径18cmを測る。埋土の状況などから、時期は弥生時代中期後葉と思われる。(柴田)



第119図 建物17(1/60)



第120図 建物18(1/60)

建物18 (第120図、図版20-2)

BU区の西端、溝20のすぐ南で検出された1×1間のややいびつな掘立柱建物である。棟方向は南北で不整な円形の掘方は、60cm前後を測る。

出土遺物は皆無であるが、竪穴住居18などと同時期に存在した可能性が高く、弥生時代後期前葉に比定される。

(岡田)

建物19 (第121図)

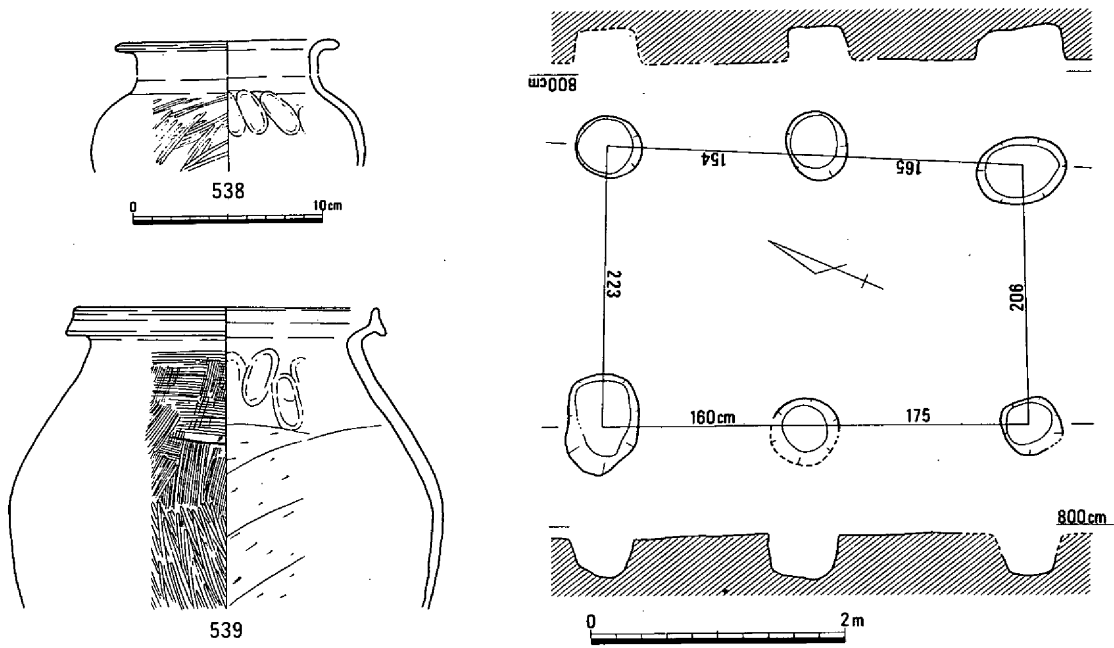
建物20の北東方約10mに位置する2×1間の掘立柱建物である。北の梁間より南のそれは狭く、平面形はややいびつな長方形を呈している。出土遺物には538の壺のほか539の甕が柱穴から出土している。弥生時代後期前葉に比定される。

(岡田)

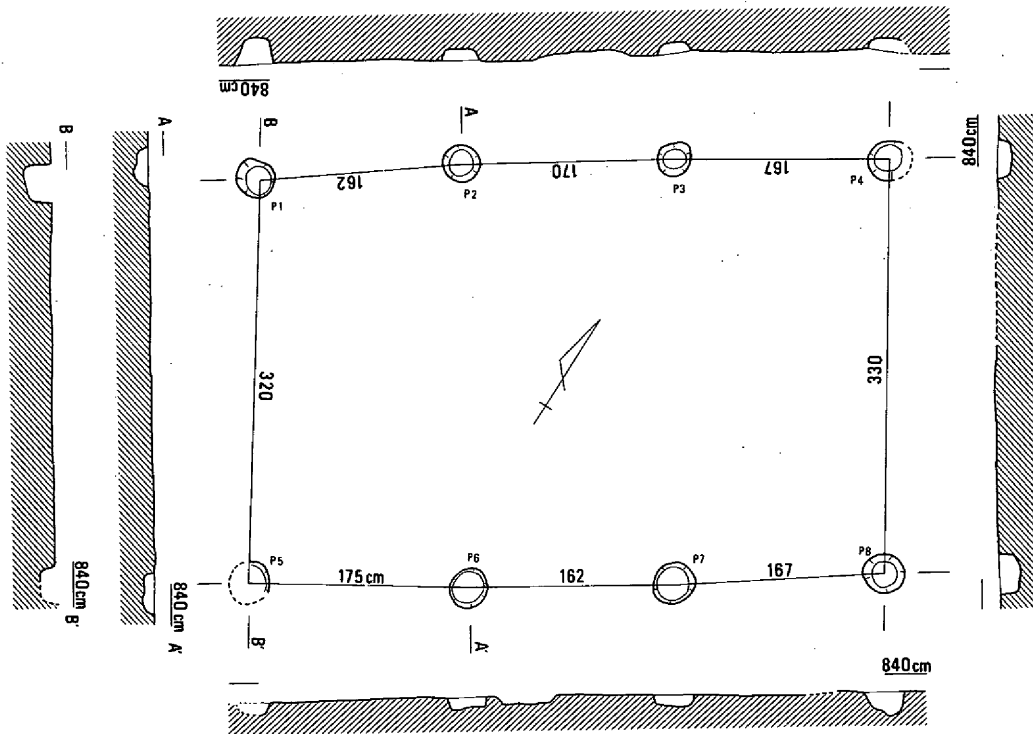
建物20 (第122図、図版20-3)

CH1区、竪穴住居14の南約10mで検出された3×1間の掘立柱建物である。棟方向は溝31・溝34などと平行する。P5が溝33と同様に溝32に切られていることから、平行する溝とは同時期に存在した可能性がある。このあたりの削平は、東約20mの袋状土壙群に顕著であるようかなり激しい。建物掘方内からの出土遺物は皆無であるが、弥生時代後期、それも前葉に比定されよう。

(岡田)



第121図 建物19(1/60)・出土遺物(1/4)

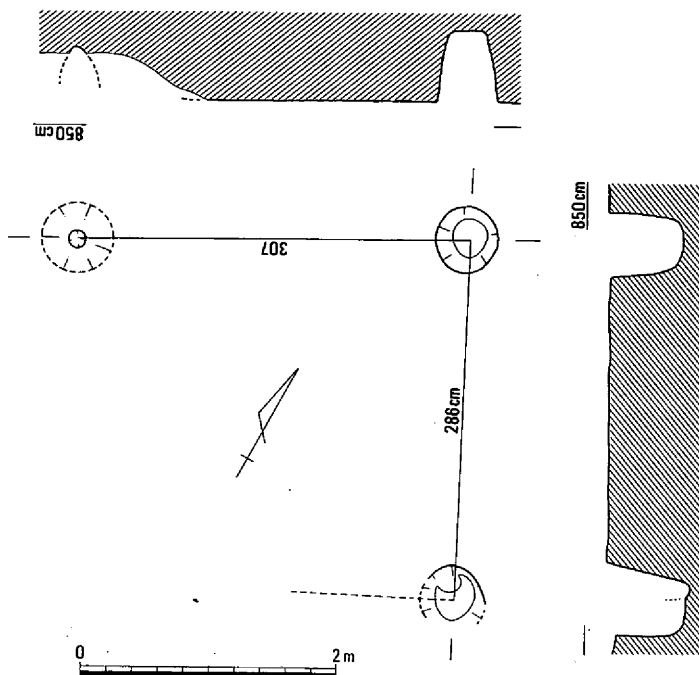


第122図 建物20(1/60)

建物21 (第123図)

建物20の南東方約20mで検出された掘立柱建物の一部である。柱穴は溝32に切られて残りが悪いが建物20よりは少し大きめの円形の掘方を示す。柱間は広めで、建物8・18などの建物に類似する可能性が高い。柱穴の深さは周辺の溝と同じくらいで、建物としてはかなり深い。

出土遺物はほとんどみられないが、弥生時代後期に比定される可能性がもっとも高い。(岡田)



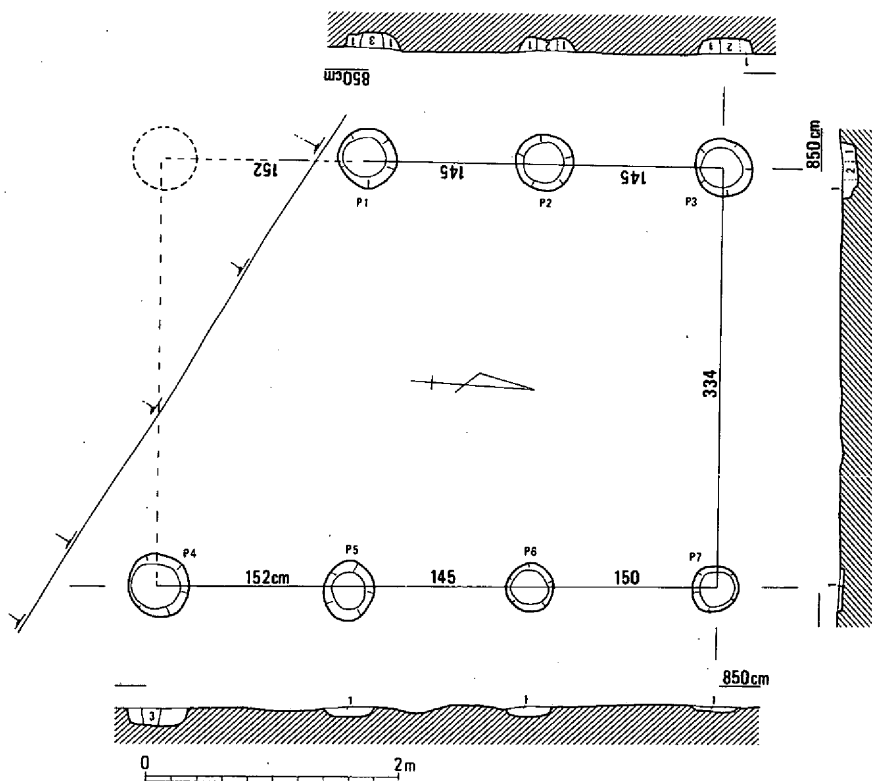
第123図 建物21(1/60)

建物22 (第124図・図版21-1)

建物21の南東方約10mに位置する、3×1間となる可能性が高い掘立柱建物である。棟方向はほぼ南北方向を指し示す。柱の掘方は40~50cm前後で円形を呈する。周辺の遺構、たとえば袋状土壇6や北方約15mの4基の袋状土壇群などと同様、削平が基だしく柱穴の深さも15cmにも満たない。

出土遺物はほとんどないが、弥生時代後期前葉に比定される可能性が高い。

(岡田)



1. 暗灰褐色粘質土
(黄色土混じり)
2. 暗灰褐色粘質土
3. 灰褐色粘質土

第124図 建物22(1/60)

建物23 (第125図、図版21-2)

KO1区東端部で、竪穴住居20との距離17mに位置する。

1×1間の掘立柱建物で、柱間は165~173cmを測るが、桁行・梁間が不明瞭で、主軸方向を決めがたい。柱掘り方は平面楕円形で、長径15~21cm、深さ13~16cmと小規模である。

出土遺物はないが、埋土等から弥生時代中期後半～後期前半と考えられる。(光永)

建物24 (第125図、図版21-3)

HO区の中央から北東寄りに検出された、1×1間の掘立柱建物である。4本の柱穴は径約40~50cm強のほぼ円形を呈し、深さも35~40cmとほぼ一定している。柱穴の埋土は灰褐色~茶褐色系の粘質土で、柱痕跡は不明であった。柱穴の中央間の距離は第125図のとおりであり、建物の方位は短軸方向がほぼ南北である。

遺物は出土していないが、柱穴の径や埋土の土色等から後期の建物と思われる。(柳瀬)

建物25 (第126図、図版22-1)

建物24の南東側に約10m離れて検出された、桁行4間×梁間2間の掘立柱建物である。柱穴の大きさは、最小で約20cm、最大で約40cmを測るが、32~33cmが多い。深さは10~20cmで、大半が13cm前後である。埋土は暗灰褐色~暗黄褐色を呈し、P8とP10にはそれぞれ径14~15cmと10cmほどの暗灰色の柱痕跡が認められている。

灰黄色系の埋土と柱穴規模からすれば、中世の可能性もある。(柳瀬)

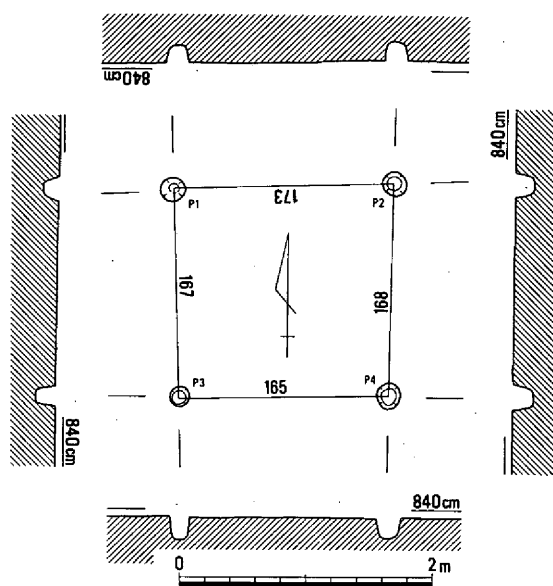
建物26

(第126図、図版22-2)

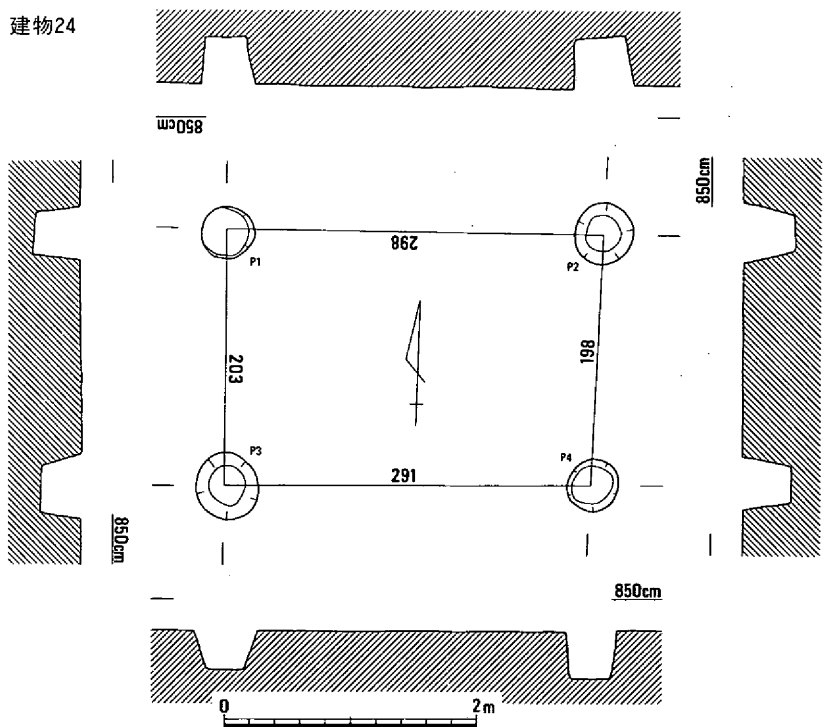
HO区の中央から南東寄りに検出された1×1間の建物である。柱穴は径約50~70cmと比較的大きいが、P1・3の柱痕跡は径15cmほどしかない。深さは20~30cmを測る。埋土は暗灰褐色、柱痕跡は暗茶褐色を呈す。

遺物は出土していないが、

建物23



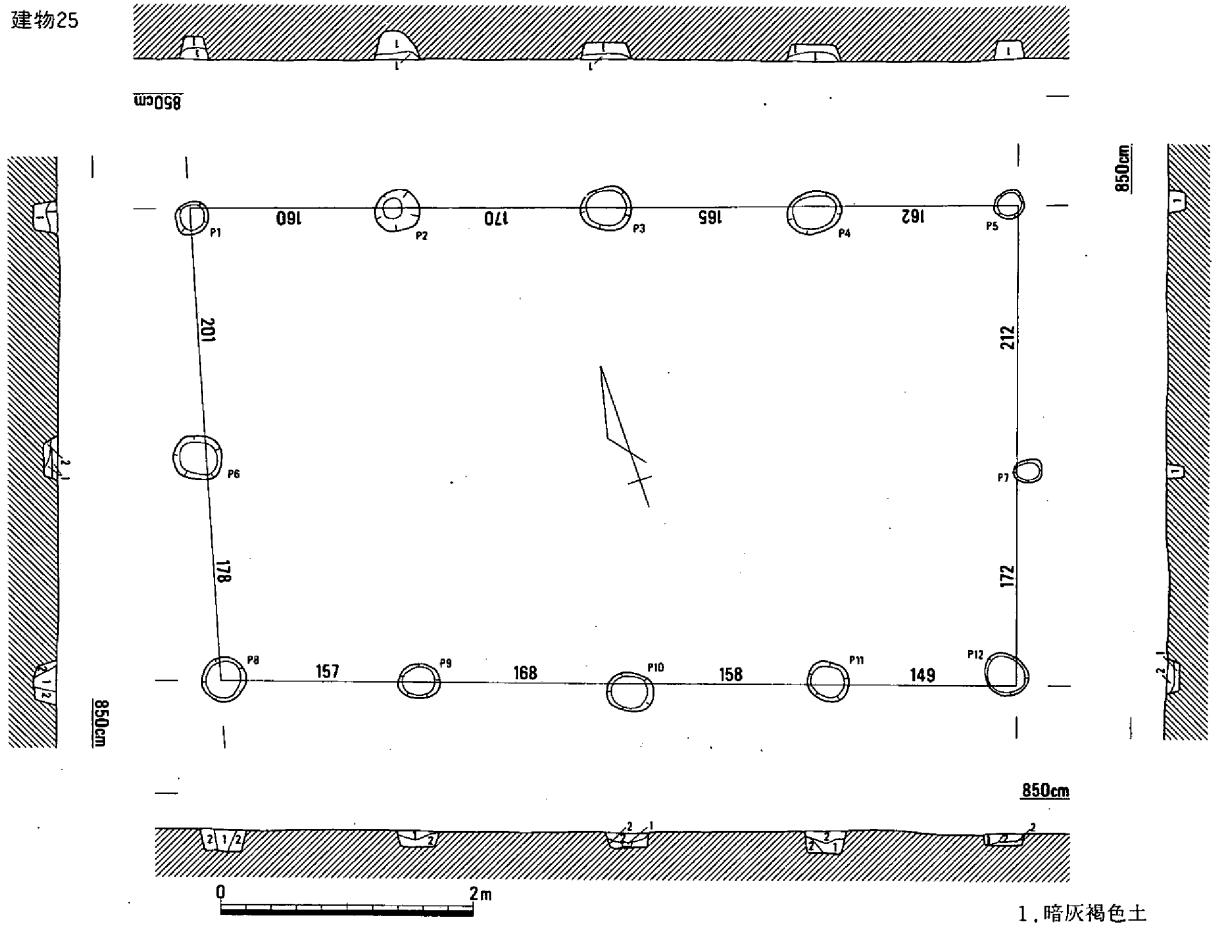
建物24



第125図 建物23・24(1/60)

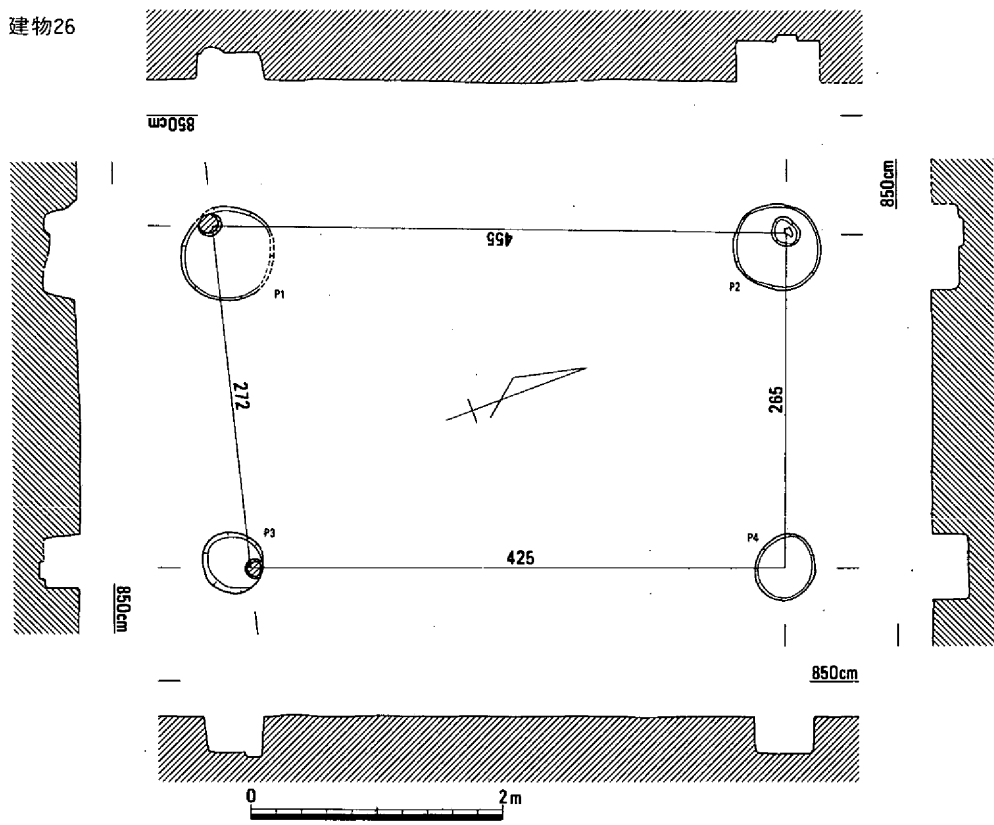
第3章 発掘調査の概要

建物25



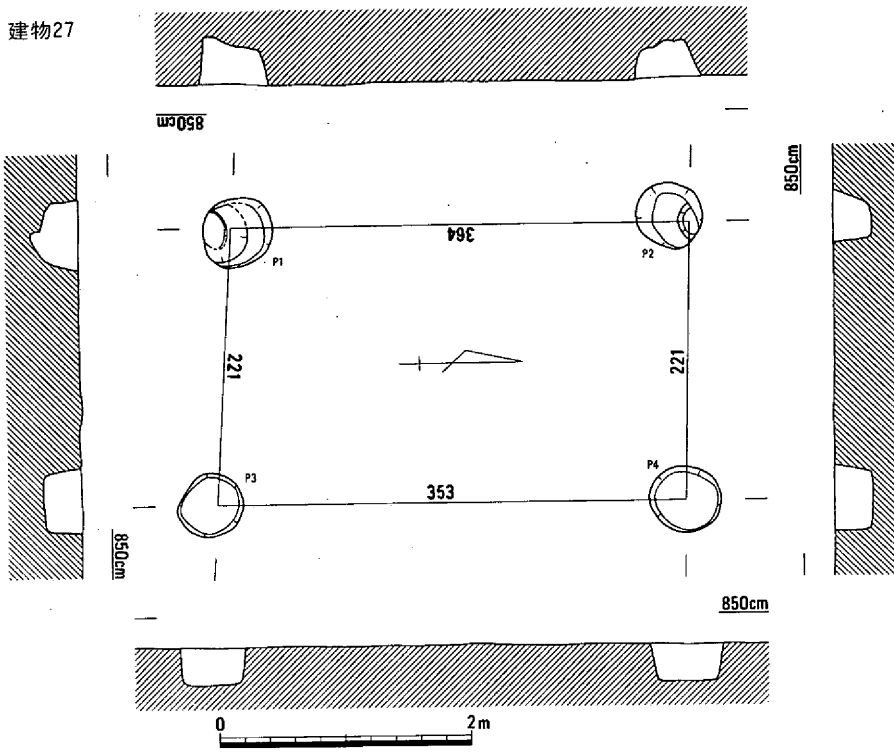
- 1. 暗灰褐色土
- 2. 暗黄褐色土

建物26



第126図 建物25・26(1/60)

建物27



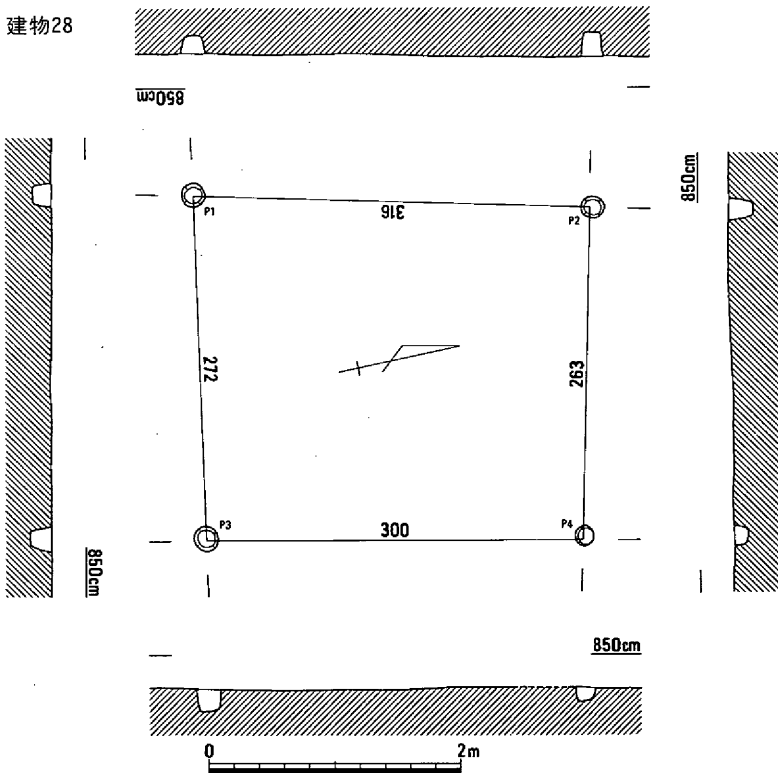
柱穴の規模等から弥生後期と判断した。

(柳瀬)

建物27 (第127図)

H O区の中央から10mほど南寄りに位置する。1×1間の掘立柱建物で、長軸方向がほぼ南北に沿う。柱穴はほぼ円形で、いずれも径50cm強、深さ30～40cmを測る。埋土は暗灰褐色を主体として3層にわけられるが、柱痕跡はなく、柱を抜き取られた後に自然堆積した状況が看取される。

建物28



堆積した状況が看取される。

遺物は出土していないが、掘り方の規模や土色等から弥生時代後期とした。(柳瀬)

建物28 (第127図、図版22—3)

建物27の東側に隣接して検出された1×1間の建物である。柱穴は円形を呈し、径16～18cm、深さ10～18cmを測る。覆土は暗灰褐色あるいは灰褐色を呈す。柱穴の規模が非常に小さいことから、中世の可能性もある。また、建物25と方向をほぼ同じくしている。(柳瀬)

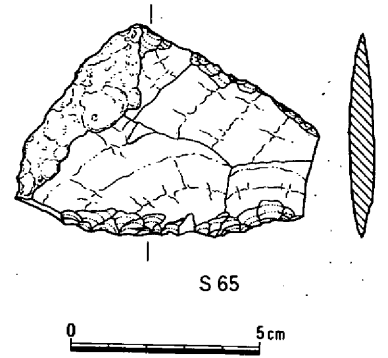
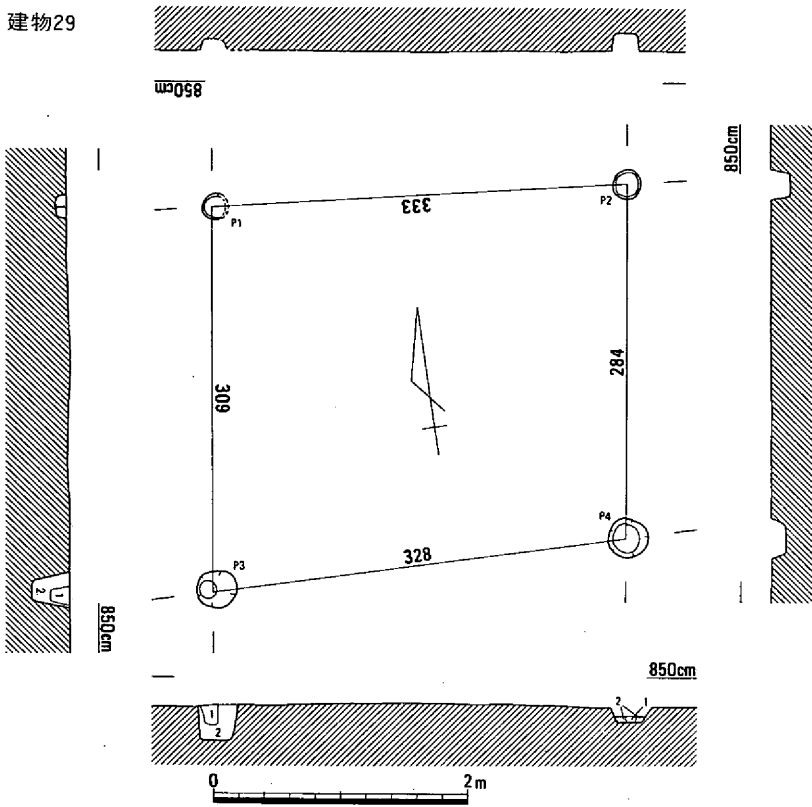
建物29 (第128図、図版23—1)

H O区の南端近くに検出された1×1間の建物である。径約20cmのP 1・2と径約30cmのP

3・4で柱穴が構成されている。柱穴の深さは浅いもので12～13cm、深いもので約30cmを測り、P 3・4には径12～14cmほどの柱痕跡を認めた。建物の方位はほぼ南北に沿う。遺物はS 65のスクレイパー状の石器を伴うが、埋土は灰褐色、柱痕跡は暗灰褐色を呈し、中世の可能性もある。(柳瀬)

第127図 建物27・28(1/60)

建物29



建物30

(第128図、図版23-2)

H O区の南東端近くに検出した1×1間の建物である。柱穴は小さいもので径23cm、他は30~34cmを測り、深さは約40~60cmと他の建物に比べて残存がよい。4本ともに柱痕跡が認められ、焼土と炭が落ち込んでいた。柱が抜かれた後の堆積であろう。柱の径は15cm前後と推定される。

埋土は暗茶褐色を呈し、後期の可能性が強い。(柳瀬)

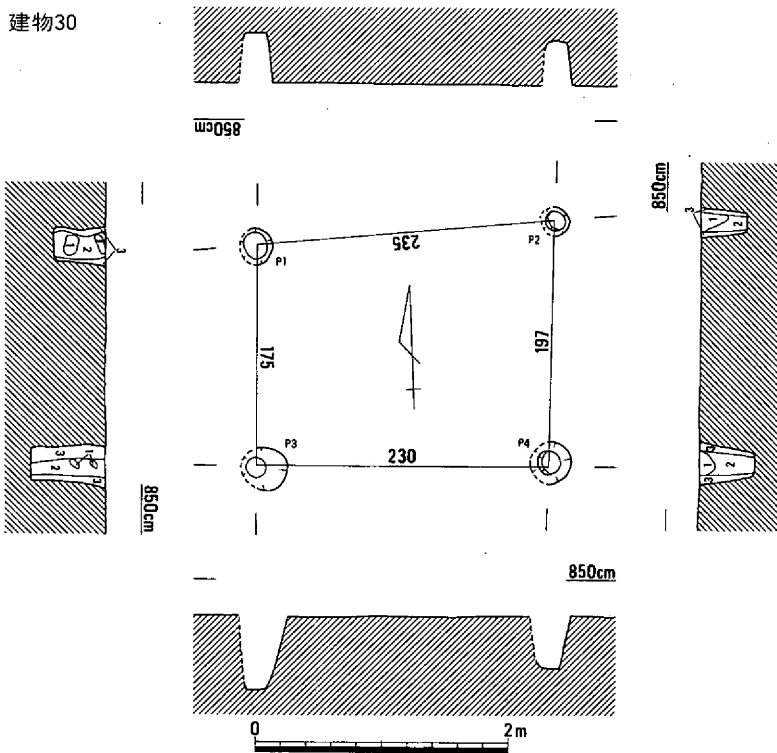
建物31 (第129図)

建物30の南、H20区に位置する。南側が調査区外となるため検出された柱穴は2本のみであるが、柱穴の規模や特徴から、後述する建物33のような1×1間の建物になると考えられる。柱穴の規模は直径約60cm、深さ40cm、底面の海拔高7.85mを測る。時期の特定できる遺物はないが、埋土の状況から弥生時代中~後期と考えられる。(久保)

建物32 (第129図)

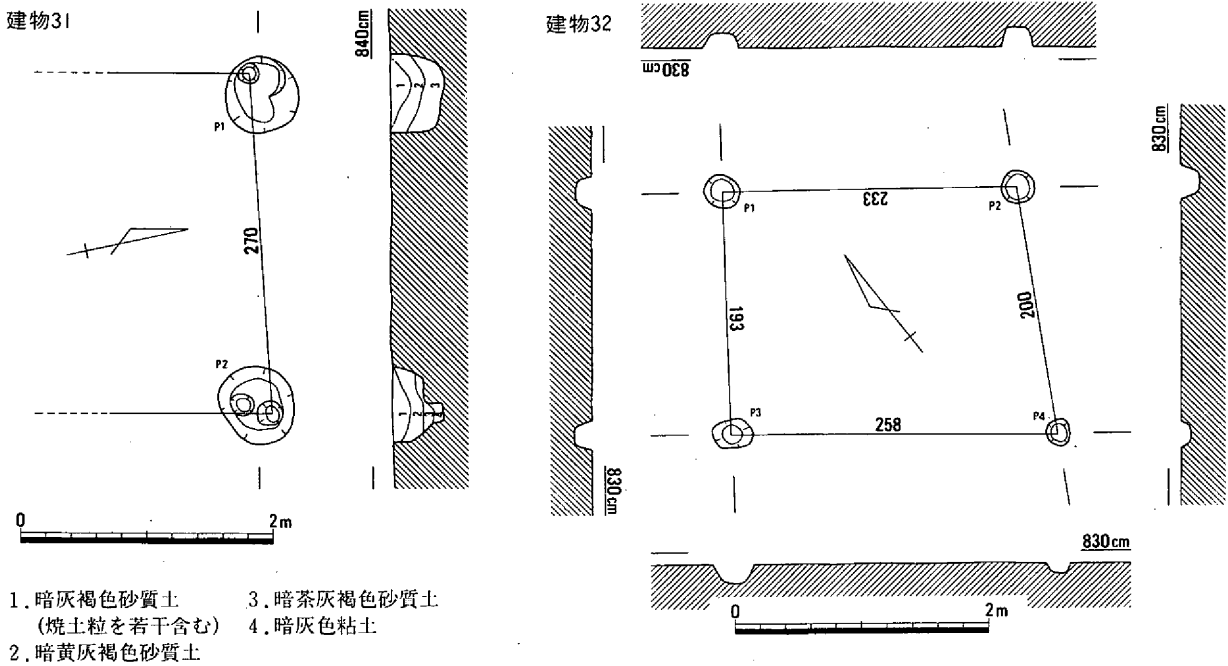
CH 2区西寄り、建物33と5.2m離れる。1×1間の掘

建物30



1. 焼土・炭
2. 暗灰褐色土
3. 暗茶褐色土

第128図 建物29・30(1/60)・出土遺物(1/2)



第129図 建物31・32(1/60)

立柱建物で、桁行233～258cm、梁間193～200cmを測り、主軸方向はN-53°-Wである。柱掘り方は長径20～32cmの楕円形で、深さ8～13cmと浅い。遺物は伴わない。(光永)

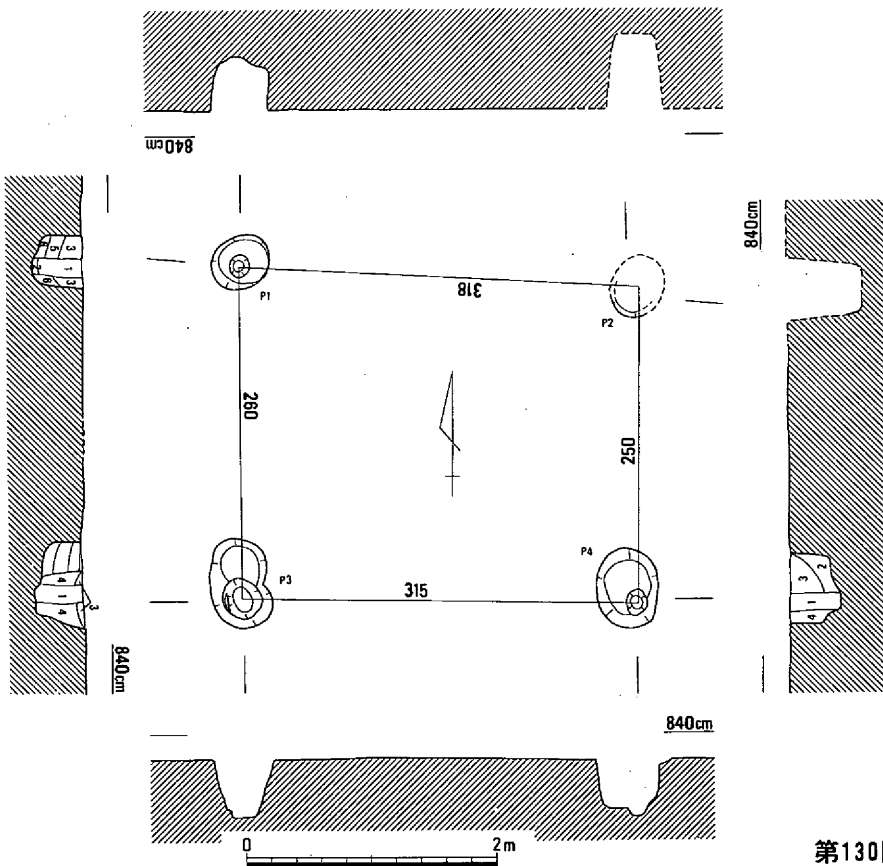
建物33 (第130図、図版23-3)

CH2区中央部で、袋状土壇11を囲む位置にある。1×1間の掘立柱建物で、桁行315～318cm、梁

間250～260cmを測り、主軸方向はN-89°-Wを示す。柱掘り方は、長径50～65cm、深さ40～60cmの楕円形で、P3は他の柱穴との重複と考えられ、柱痕跡から、柱の径は15～20cmに復元される。少量の弥生土器片が出土している。(光永)

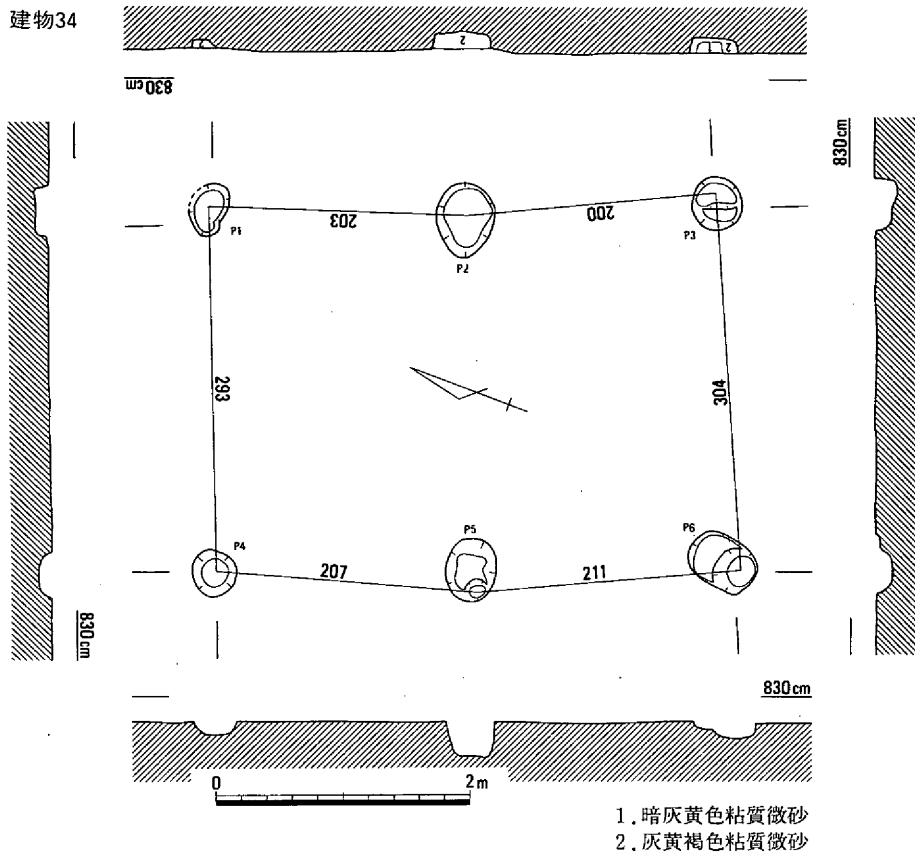
建物34(第131図、図版24-1)

CH2区東部で、豎



第130図 建物33(1/60)

建物34

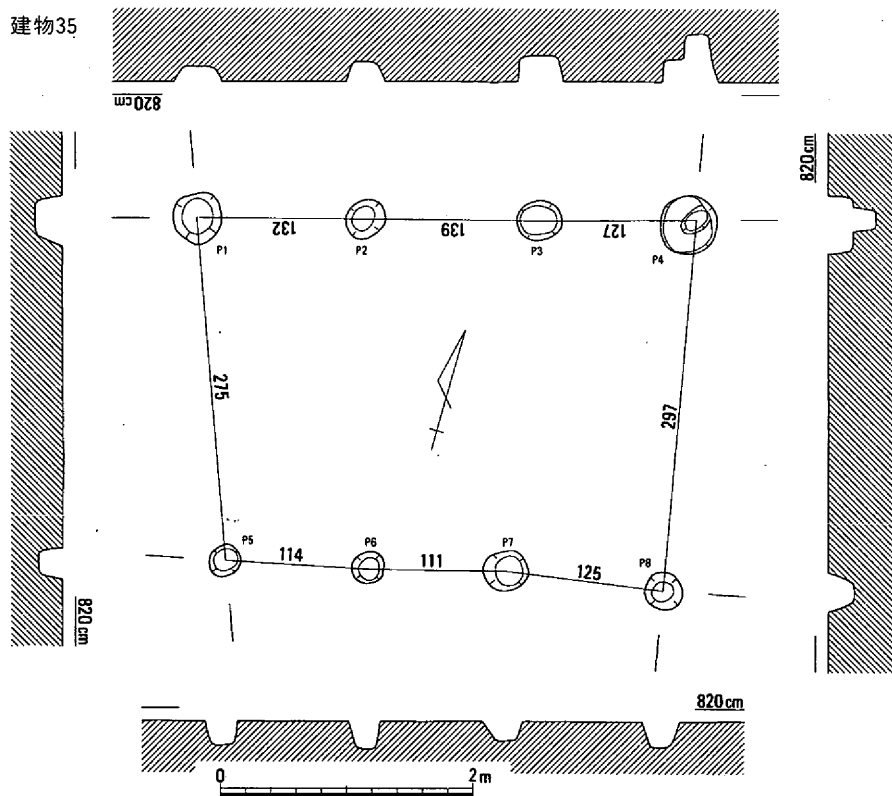


穴住居22と近接している。主軸をN-22°-Wに置く2×1間の掘立柱建物で、400×304cmの規模になる。柱間は、桁行200~211cm、梁間293~304cmを測り、柱穴掘り方の平面形は円形ないし楕円形で、長径43~60cm、深さ7~18cmとやや不揃いである。少量の弥生土器片が出土している。(光永)

建物35 (第131図)

CH2区東部で建物34の南6mに主軸方向をほぼ直交させて位置する。3×1間の掘立柱建物で、柱間は桁行で111~139cm、梁間で275~297cmを測る。柱掘り方は平面形楕円形で、長径25~58cm、深さ10~38cmを測り、P1・4が他より大きい。埋土から弥生時代に比定される。(光永)

建物35

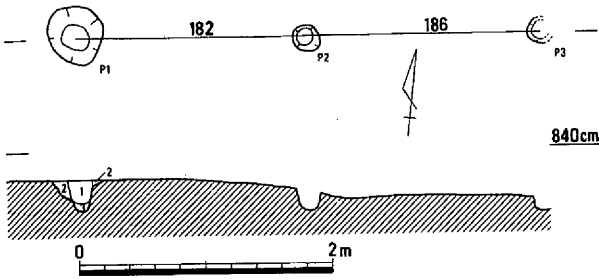


第131図 建物34・35(1/60)

建物36 (第132図)

CH3区の南端に位置する掘立柱建物と思われるが、柱穴列とP2の南3mで対応する可能性のある柱穴1本のみが検

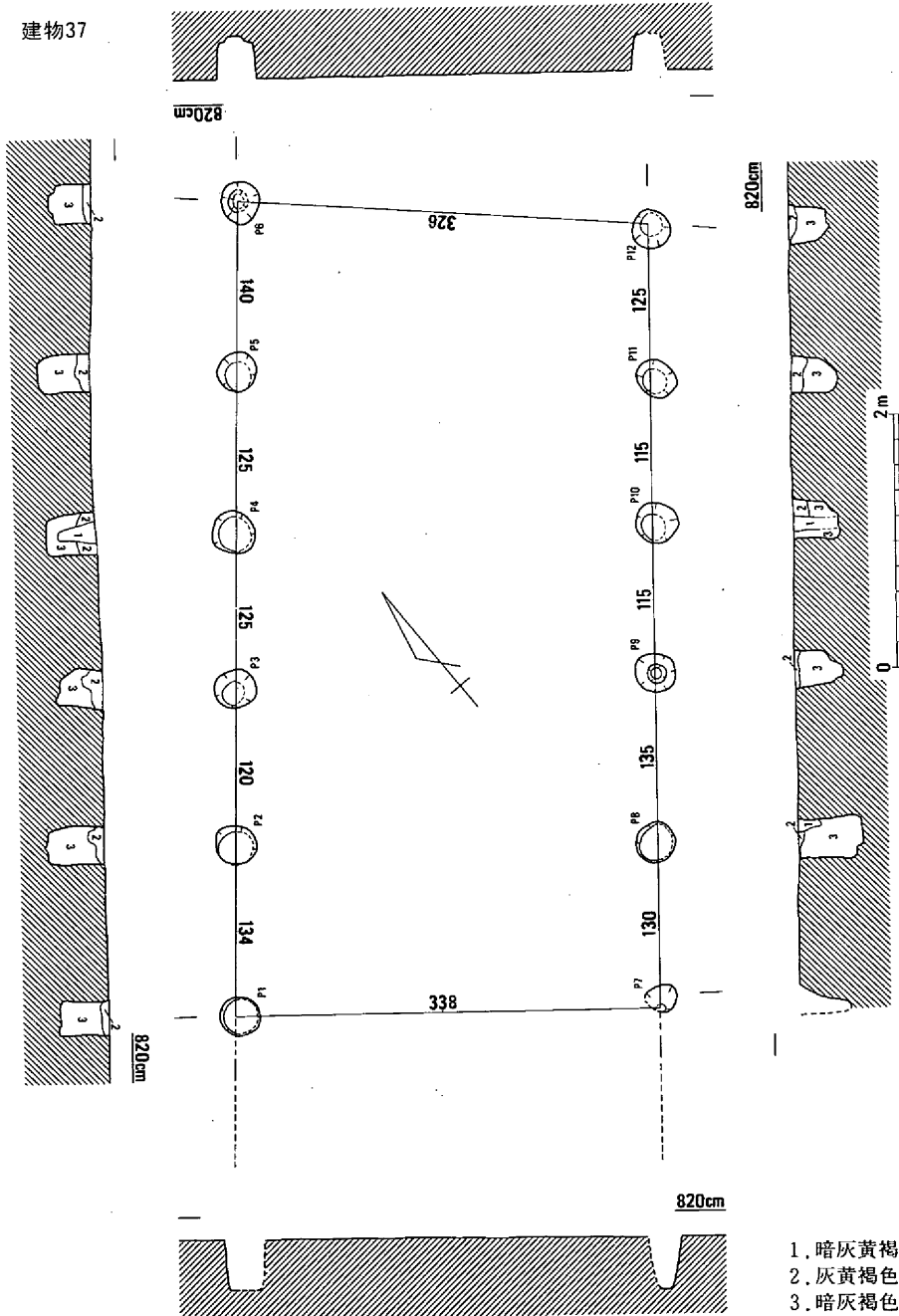
建物36



- 1. 暗茶褐色微砂
- 2. 灰黄褐色微砂
- 3. 灰黄褐色微砂

出されている。柱間は182・186cmである。P1は平面円形で径47cmを測り、深さ25cmが残存する。平面円形の柱痕跡が確認できており、径18cmを測る。P2・3は掘り方上半は残っておらず、柱痕跡と思われる。埋土の状況などから時期は弥生時代中期後葉と思われる。(柴田) 建物37(第132図、図版24-2)

建物37



- 1. 暗灰黄褐色微砂
- 2. 灰黄褐色微砂
- 3. 暗灰褐色微砂

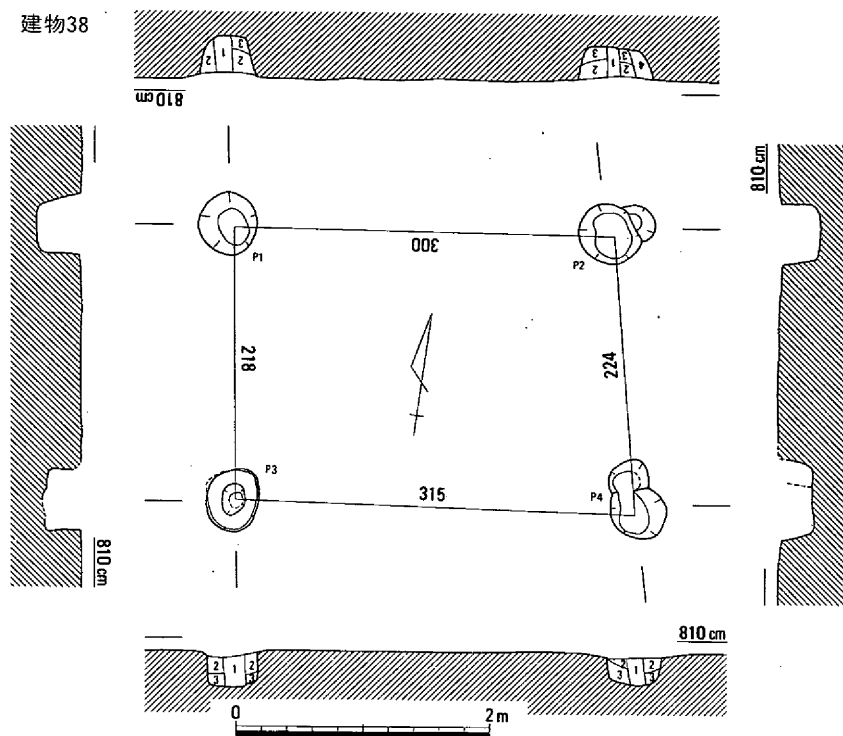
CH3区の中央に位置する長い掘立柱建物である。南西側は現代溝に切られており、柱穴が続くかどうか不明である。確認できる範囲での規模は5×1間であり、比較的時間の短い桁行に対して梁間は非常に広い。桁行648cm、梁間338cmを測る。柱穴は平面円形で径30~37cmを測り、深さ35~49cmが残存している。また平面円形の柱痕跡が確認できており、径15cm前後を測る。

埋土の状況等から、時期は弥生中期後葉と思われる。(柴田)

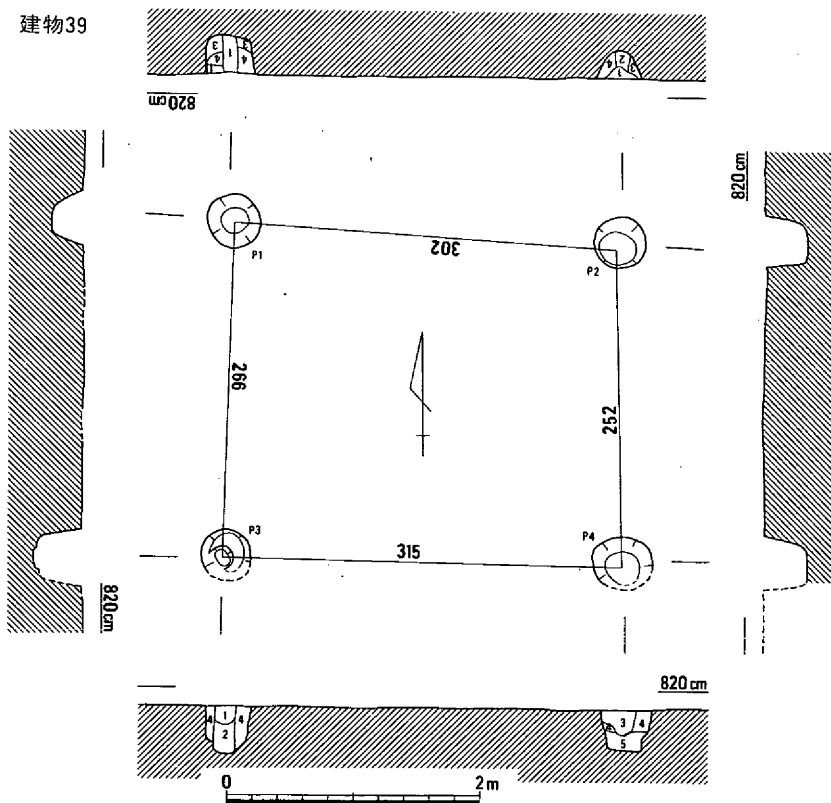
建物38(第133図、図版24-3)

CH4区北西隅で建物36との距離約7mに位置する1×1間の掘立柱建物で、柱間は桁行300~315cm、梁間で218~224cmを測る。柱

第132図 建物36・37(1/60)



- 1. 暗灰黄色粘質微砂
- 2. 灰黄褐色粘質微砂
- 3. 黄褐色粘質微砂
- 4. 褐黄色粘質微砂



- 1. 暗灰黄色粘質微砂
- 2. 灰黄褐色粘質微砂
- 3. 黄褐色粘質微砂
- 4. 灰黄褐色粘質微砂
- 5. にぶい黄褐色粘質微砂

第133図 建物38・39(1/60)

掘り方の平面は楕円形で、長径50~52cm、深さ26~34cmを測り、柱痕跡から柱の径8~17cmに復元される。少量の弥生土器片が出土している。(光永)

建物39

(第133図、図版25-1)

CH 4区南端で、主軸方向をN-88°-Wに置く1×1間の掘立柱建物である。柱間は、桁行302~315cm、梁間252~266cmを測る。柱掘り方の平面形は円に近い楕円形で、長径40~46cm、深さ22~38cmを測り、柱痕跡から柱の径は10~17cmに復元される。土器小片の出土により、弥生時代後期中葉に比定される。(光永)

建物40

(第134図、図版25-2)

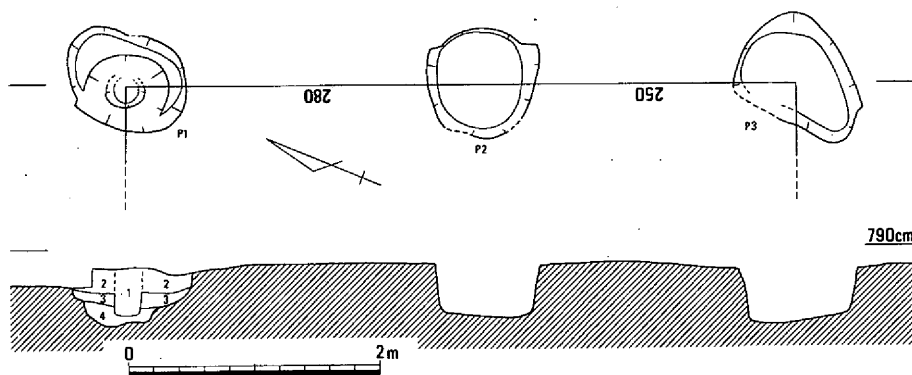
CH 5区中央部で3本の柱穴列として検出され、調査区西外方へ続くものと考えられて、柱間は250・260cmを測る。柱掘り方の平面形は方形に近い楕円形で、長径90~115cmと大きく、深さ40~45cmの断面の柱痕跡から径20cm程度に復元される。弥生土器片が少量出土している。(光永)

建物41

(第134図、図版25-3)

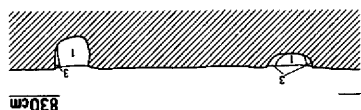
HW 1区の西端、竪穴住居26の北に位置する1×1間の建物である。柱の掘り

建物40

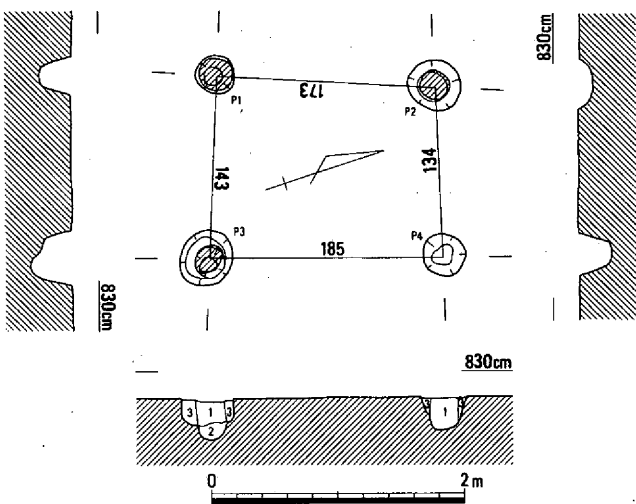


1. におい黄褐色粘質微砂
2. におい黄褐色粘質微砂
3. 灰黄褐色粘質微砂
4. 暗灰黄色粘質土

建物41



1. 茶褐色粘質土
2. 茶灰褐色粘質土
3. 黄褐色粘質土



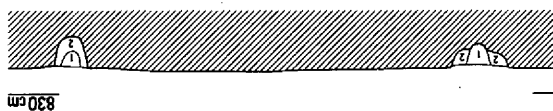
第134図 建物40～42(1/60)

方は直径40cm前後で、P 1～3 には20～25 cmの柱痕跡が認められた。柱の深さは35cm程度で、底面の海拔高は7.75～7.97mである。遺物の出土はないが、埋土の状況から弥生時代中～後期と考えられる。(久保)

建物42 (第134図、図版26-1)

建物41の東に位置する1×1間の建物である。柱の掘り方は直径20cm前後で、各柱で直径15cm前後の柱痕跡が確認された。底面の海拔高は7.85～7.90mである。柱自体は建物41と比べて小さく浅いが、逆に平面規模は桁行・梁間ともに2倍近くあり、性格の異なる建物であったと考えられる。遺物の出土はないが埋土の状況から弥生時代中～後期と判断した。建物41と併存していた可能性も考えられる。(久保)

建物42

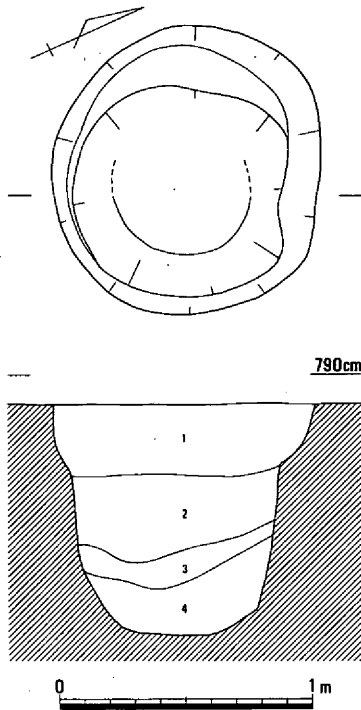


1. 茶褐色粘質土
2. 褐黄色粘質土

(3) 井戸

井戸1 (第135図、図版26-1)

PU調査区の南端中央において、単独で検出された遺構である。検出面での平面形はほぼ円形を呈し、規模は118×116cm、深さは90cmを測る。底面の海拔高が6.86mあり、湧水が著しいことから井戸



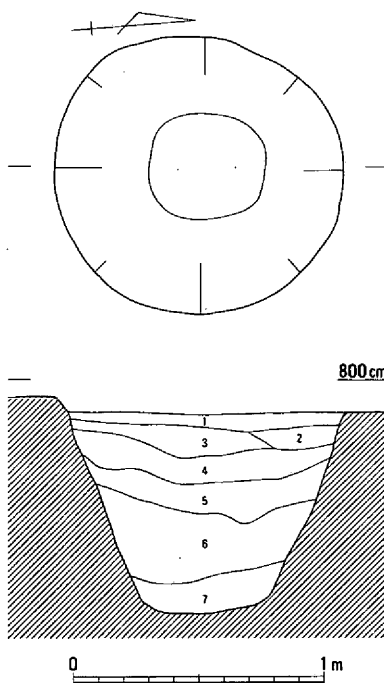
第135図 井戸1(1/30)

1. にぶい黄褐色粘質微砂
2. 褐灰色粘質土
3. 灰オリーブ色粘質土
4. 暗灰オリーブ色粘質土

と判断した。断面観察では、埋土は4層に区分され、1層は粘質微砂、2～4層は灰色系の粘質土であった。出土遺物はないが、隣接するTA区での弥生期の遺構検出面とほぼ同レベルであることから本遺構も弥生時代後期の可能性をもつ遺構と考えられる。(松本)

井戸2 (第136図、図版26-3)

TA区の西半北東隅で検出された。平面形が円形の素掘りの井戸である。壁の傾斜は急角度で、断面形は「U」字形に近い。検出面で長径が115cmあり、底面もほぼ平坦な円形で、その長径は48cmを測った。深さは86cmであった。埋土は順序良く堆積し、第6層には炭と焼土が少量含まれ、第7層では植物繊維らしいものが混在していた。第1・4層は2種の塊状の土が混合していた。周辺の遺構の年代から判断して、弥生時代後期の前半かとみられる。(岡本)

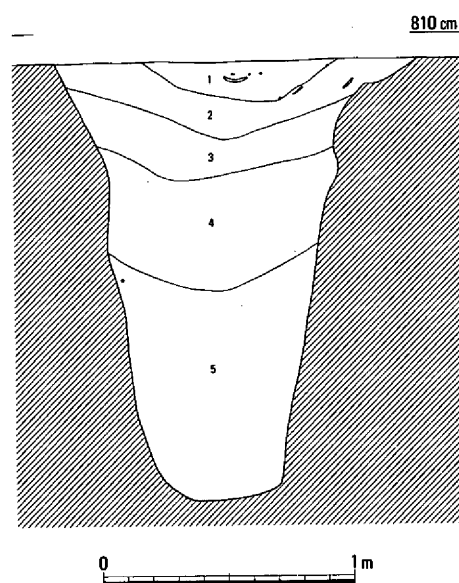
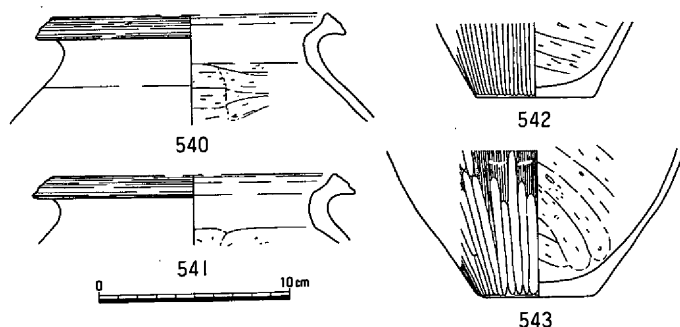
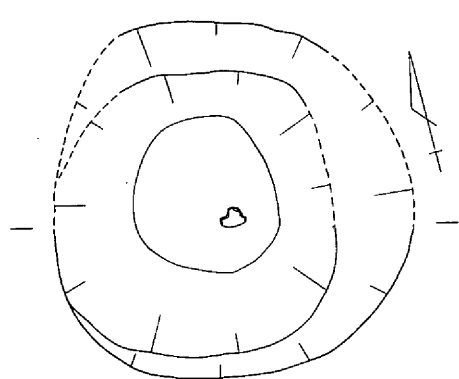


第136図 井戸2(1/30)

1. 褐灰色粘性砂質土 (焼土を含む)
2. 灰色粘性砂質土
3. 褐灰色粘性砂質土
4. オリーブ黒色粘質土
5. 黒褐色粘土
6. 黒褐色粘土 (炭・焼土を多く含む)
7. オリーブ黒色粘性微砂

井戸3 (第137図)

TA区の西半北部で検出された。竪穴住居7の西7m、建物12の北8mにあたる。平面形は円形に近く、長径が150cm、短径は144cmを測った。井戸の上部は逆「ハ」の字状に広がるため、壁の傾斜角度は上方 $\frac{1}{3}$ 付近で変化し、それから底に向かっては垂直に近くなる。井戸の深さは172cmであった。井戸



1. 褐灰色粘性砂質土
(炭を多く含む)
2. 暗褐灰色粘性砂質土
3. オリーブ黒色粘質土
4. 黒褐色粘土
5. オリーブ黒色粘性微砂

の底部はかすかな凹面をなしていたが、長径63cmの不整な円形であった。埋土の堆積は整然とし、下層ほど厚くなっていた。第1層には炭粒が多く含まれ、焼土も混入していた。土器片もかなり含まれていて、井戸の埋没後にゴミ穴として利用されたものと思われる。第2層も上層と類似し、土器片が散見された。第5層は井戸の下半を埋めていたが、植物繊維状のものが混在していた。底

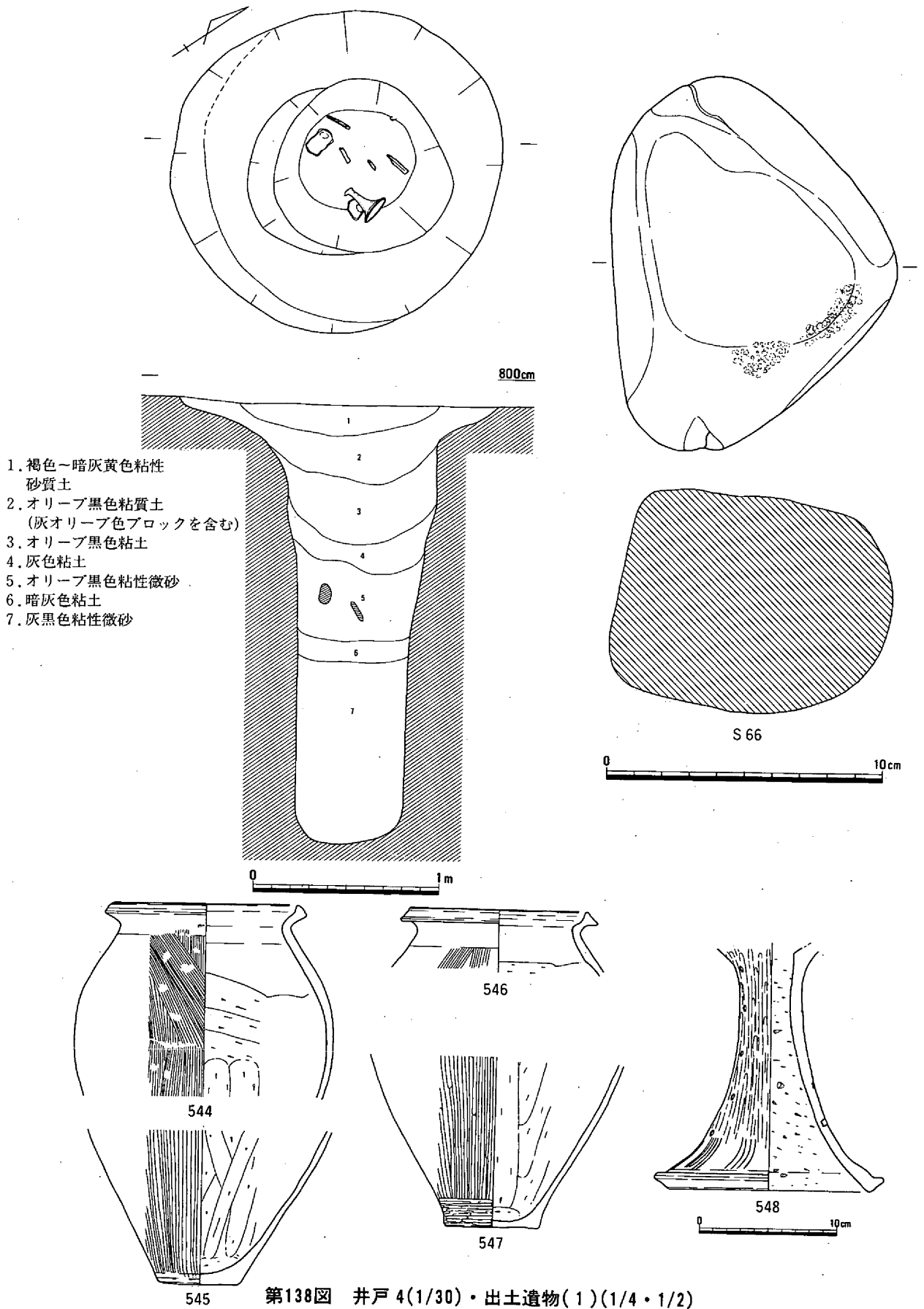
第137図 井戸3 (1/30)・出土遺物(1/4) 面の海拔高度は628cmを測り、調査中も湧水がみられた。図示した土器のうち、540・542は第1層から、541は第2層から、543は第5層から出土した。これらの土器の年代は弥生時代後期の前葉末と考えられ、このことから井戸が機能していたのは弥生時代後期の前葉と判断される。(岡本)

井戸4 (第138・139図)

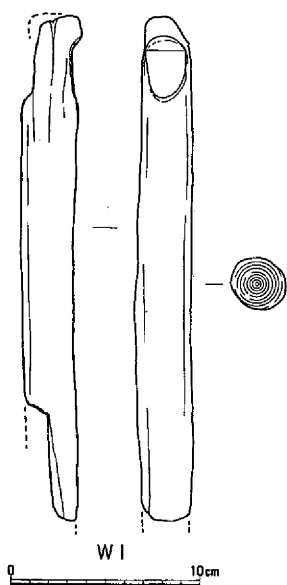
TA区の南半中央付近にあり、溝9と接していた。竪穴住居10の東3mにあたる。平面形は円形で、長径が180cm、短径は173cmであった。井戸の上端はラッパ状に大きく開き、検出面から20cmほど下方で井戸本来の規模に縮小する。その直径は80～90cmとみられる。井戸の底部は長径63cmの円形で、底面は凹面だった。井戸の深さは242cm、底面の海拔高度は546cmを測り、この調査区では最深の井戸である。埋土は7層で、じょじょに埋没した状況を示す。第4層と第6層は薄くて同じ色調をもつことから、第4層と第5層、第6層と第7層がセットとして同じような埋没過程を経たように思われる。第5層からは図示したように大形の土器片や木片・礫が出土した。掲載した遺物のうち、544・545・548・S66・W1は第5層から、546・547は第6層からの出土である。井戸の使用時に埋没した可能性が高い。第1層では炭粒や焼土・土器片が含まれていて、廃絶後のゴミの投棄による堆積と考えられる。出土土器の年代から井戸が機能していたのは弥生時代後期前葉とされる。(岡本)

井戸5 (第140図)

TA区の南半中央部、井戸4の南5.5m、竪穴住居10の南西4mに位置していた。溝15と重複し、そ



第138図 井戸 4(1/30)・出土遺物(1)(1/4・1/2)

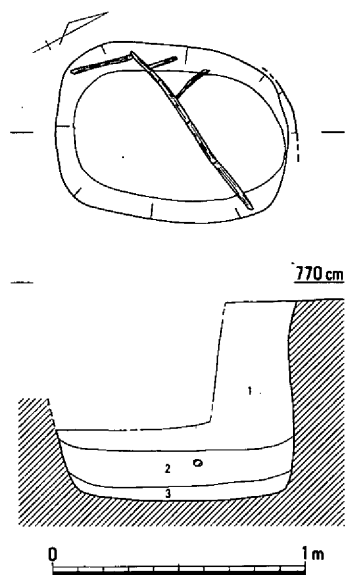


第139図 井戸4出土遺物(2)(1/4)

の上面で検出された。平面形は楕円形に近く、長径が92cm、短径は70cmであった。深さは79cmで、底面の海拔高度686cmを測った。底面の形状も楕円形をなす。形状や規模からすると井戸としての機能はやや疑問である。埋土は3層で水平に堆積し、第1層には炭と焼土が、第2・3層ではヒョウタンの種子が多く含まれていた。図示した木片は竹とみられた。年代は弥生時代後期前葉か。(岡本) 井戸6 (第141図)

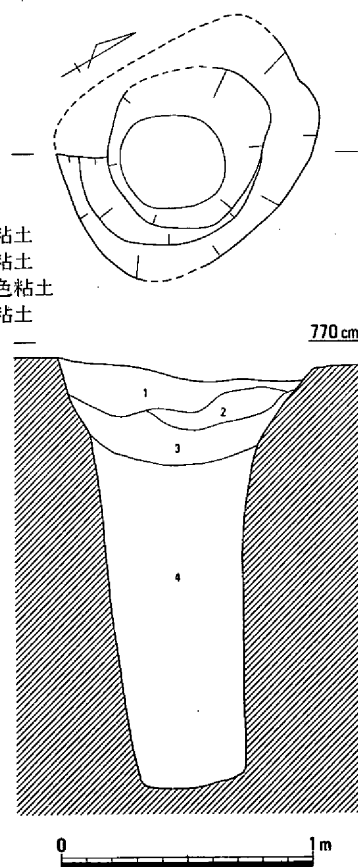
井戸5に接し、溝15の底で検出した。平面形は溝の底にあるため長円形で、長径は68cmだった。底面はほぼ平らな円形で、長径は42cmを測る。深さは171cm、底面の海拔高度は593cmと低い。井戸の形状は円筒形で、いっきに埋まったためか埋土は1層であった。第1層～第3層までは溝15の埋土であり、井戸6の年代は溝15より古いと考えられるが、弥生時代後期前葉であろう。(岡本) 井戸7 (第142～148図、図版26-3)

TA調査区の南端部において検出した。検出できた平面形は南端部の一部が側溝によって切られているが、約190×182cmのほぼ円形を呈する。断面形は基本的には逆台形であるが、底面の南東隅において61×58cmの楕円形で、深さ20cm前後のく



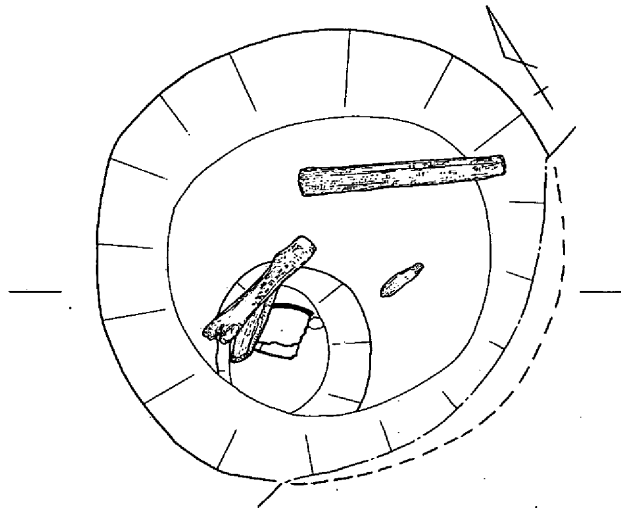
第140図 井戸5(1/30)

1. 灰黒色粘土
2. 灰黒色粘性微砂
3. 暗灰色粘質土

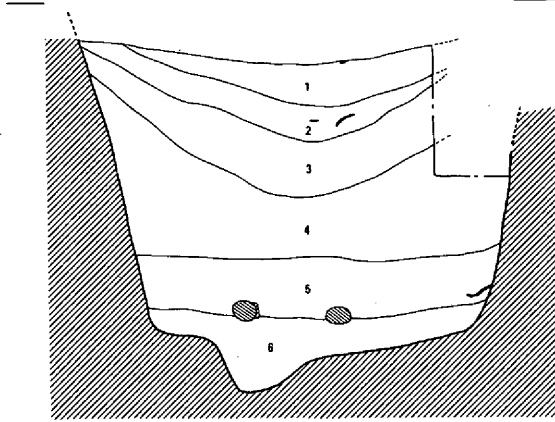


第141図 井戸6(1/30)

1. オリーブ黒色粘土
2. オリーブ黒色粘土
3. 暗オリーブ灰色粘土
4. オリーブ黒色粘土



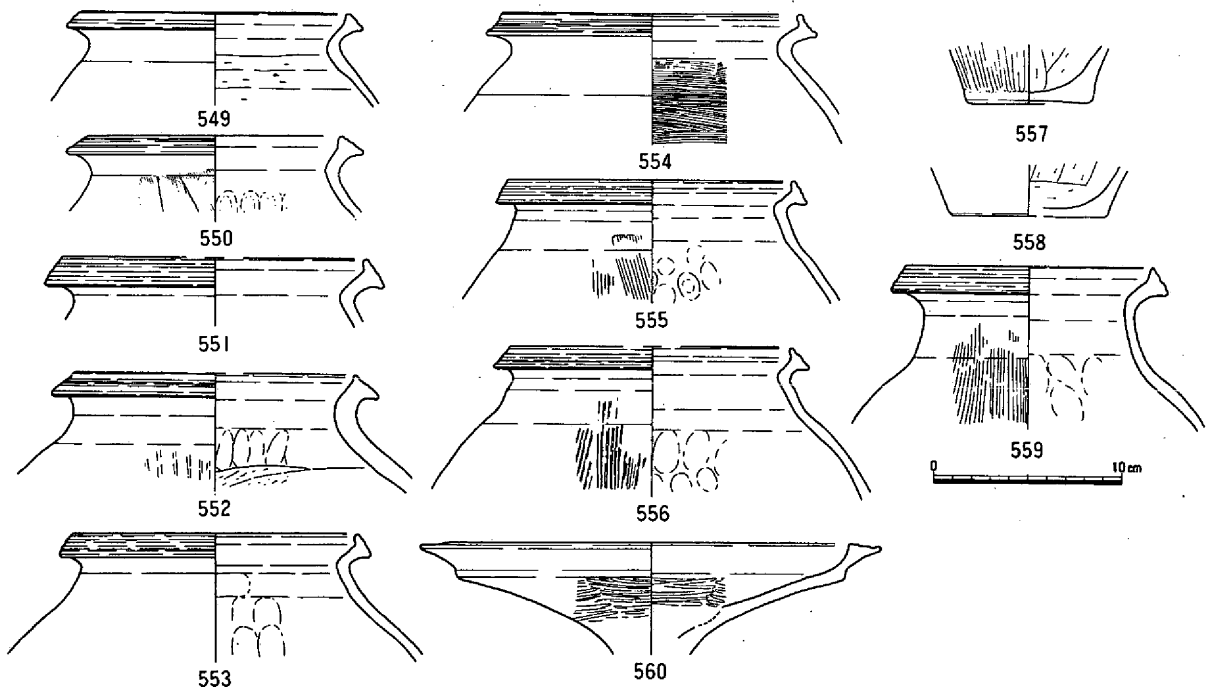
780 cm



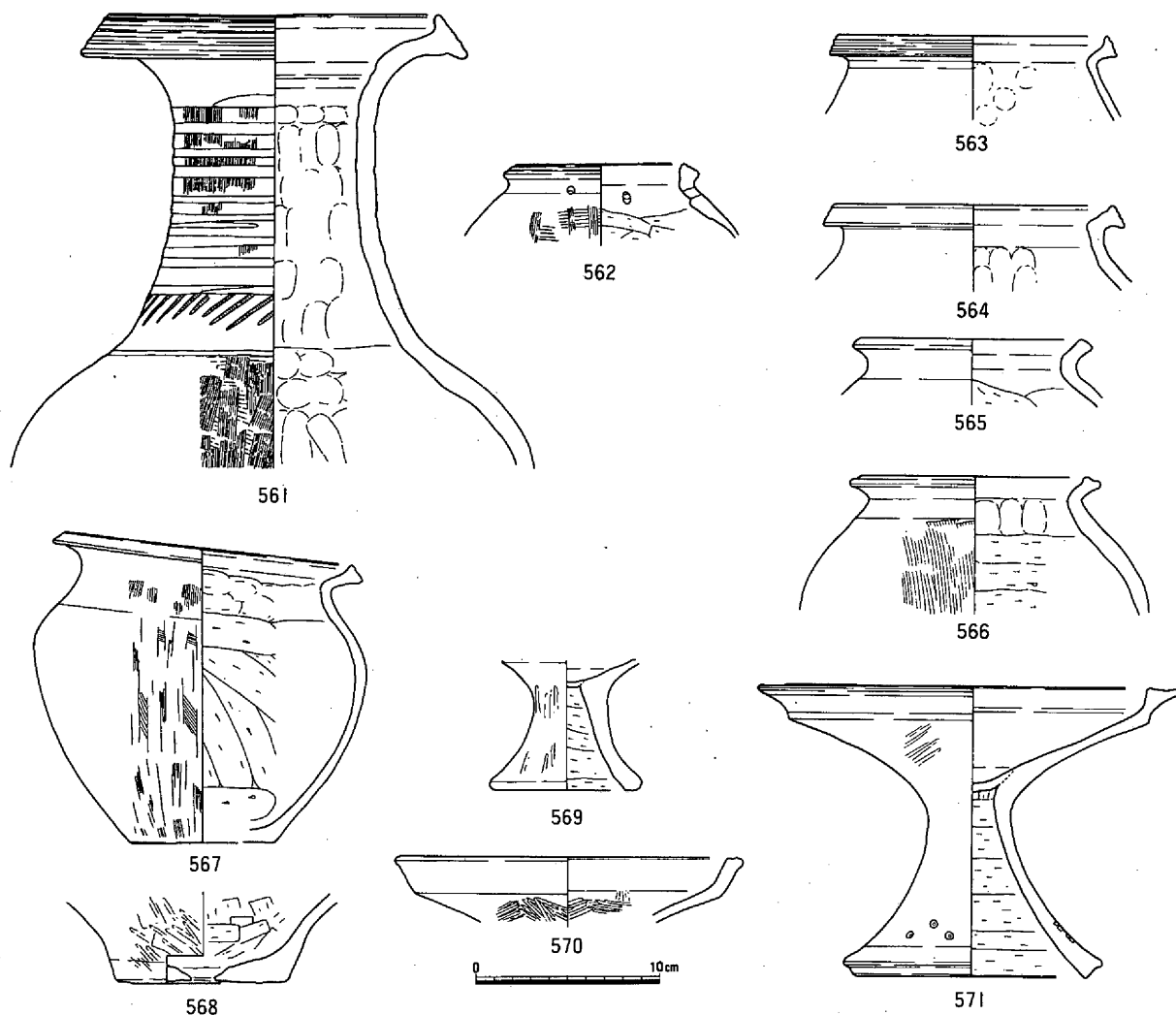
1. オリーブ灰色粘土
2. 暗灰色粘土
3. 黒灰色粘土
(灰色粘土を含む)
4. 暗灰色粘土
(炭混じり)
5. 黒色粘土
(植物遺体を含む)

ほみが認められた。深さはこのくぼみの底までで約140cmであった。埋土は図示したように6層に分離することができたが、大きくは1～3層(上層)、4層(中層)、5・6層(下層)に区分することができる。このうち下層は暗灰～黒色の粘土で、土器の他に木器や木材、炭化物、種子(モモなど)が含まれていた。

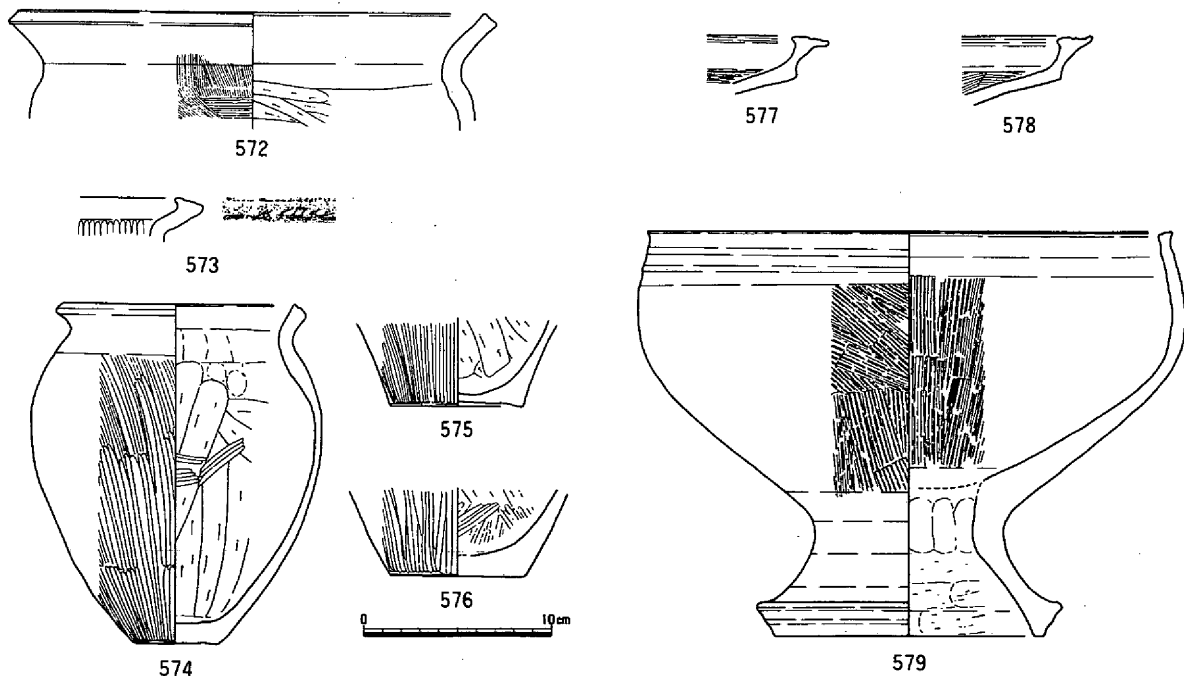
埋土中から出土したおもな遺物は、土器、木製品、木材、種子である。土器は壺、甕、高杯、鉢が出土した。これらの土器は、おもに上層と下層から出土しており、第142図に上層出土土器、第144・145図に下層出土土



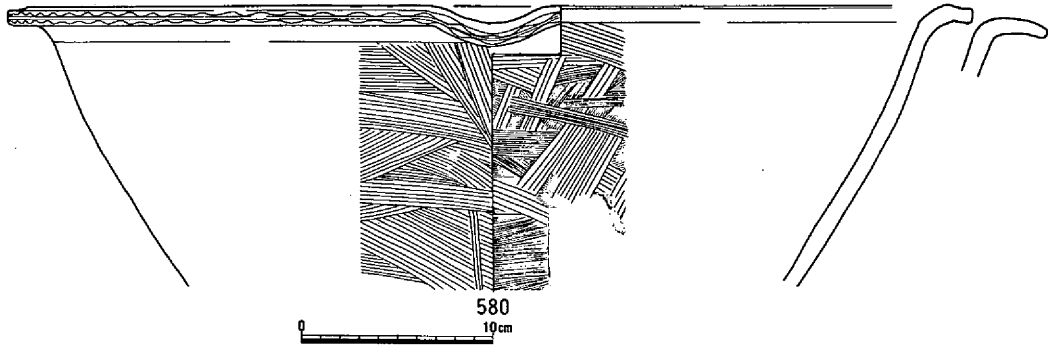
第142図 井戸7(1/30)・出土遺物(1)(上層出土遺物; 1/4)



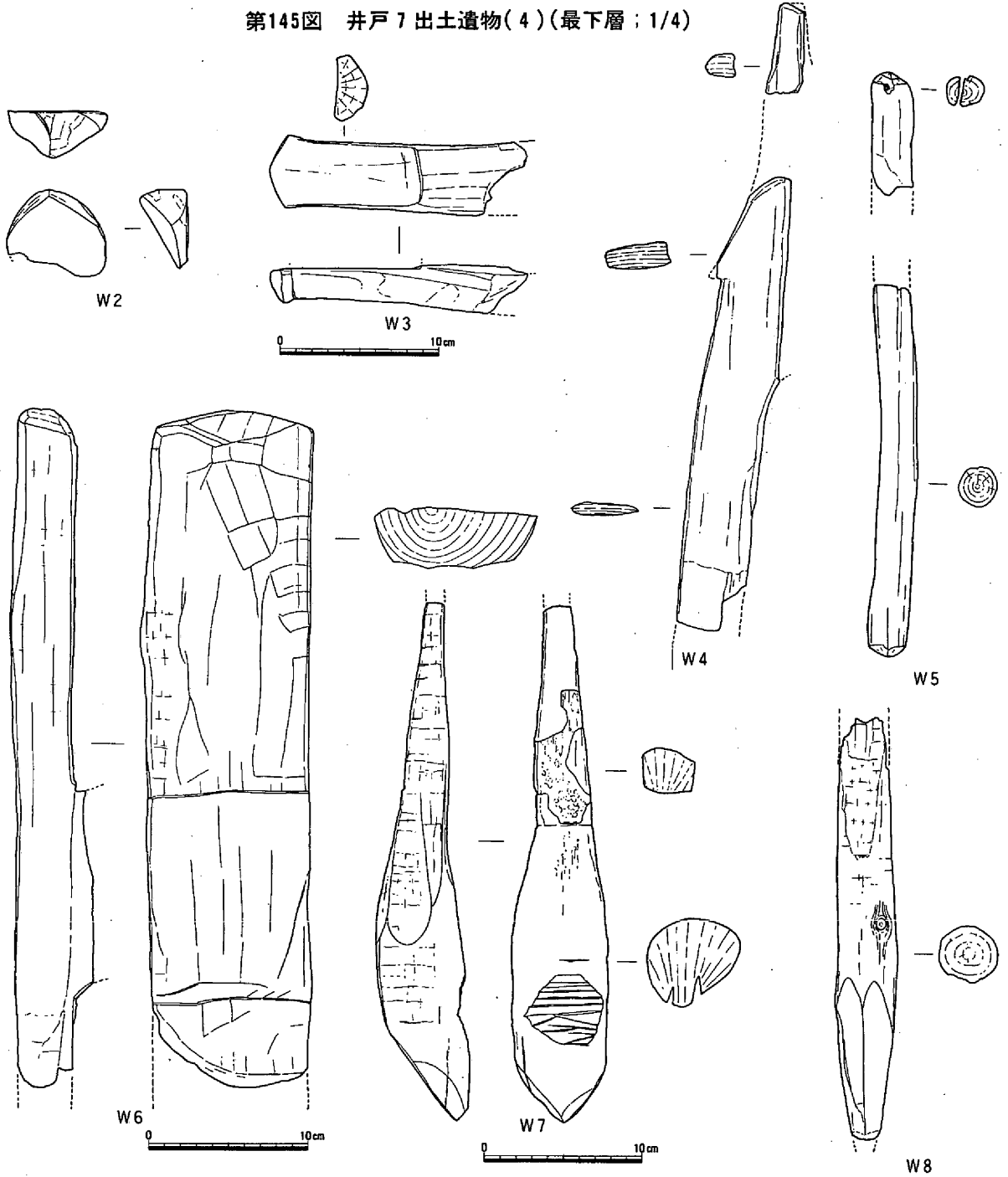
第143図 井戸7出土遺物(2)(上層と中層; 1/4)



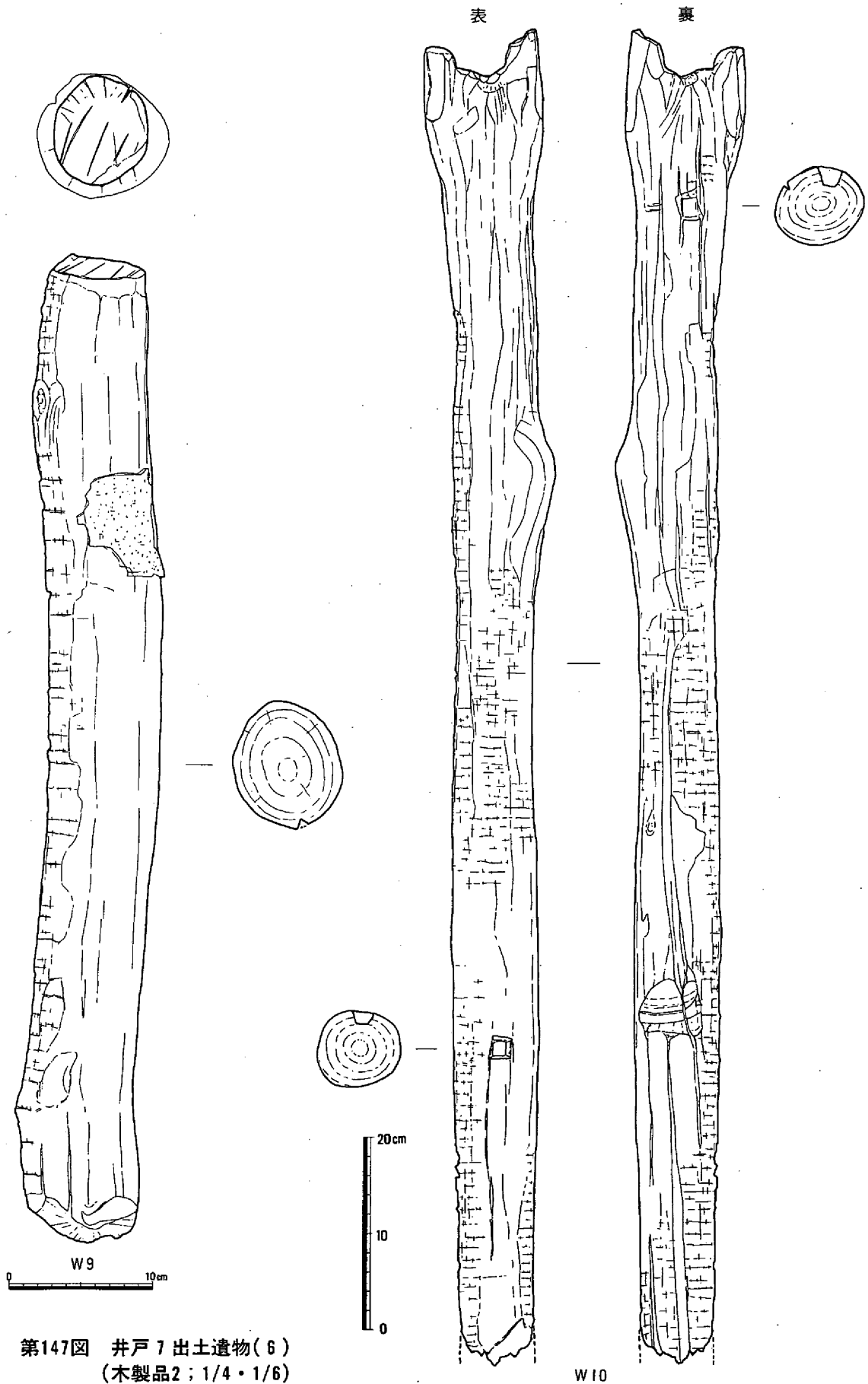
第144図 井戸7出土遺物(3)(下層; 1/4)



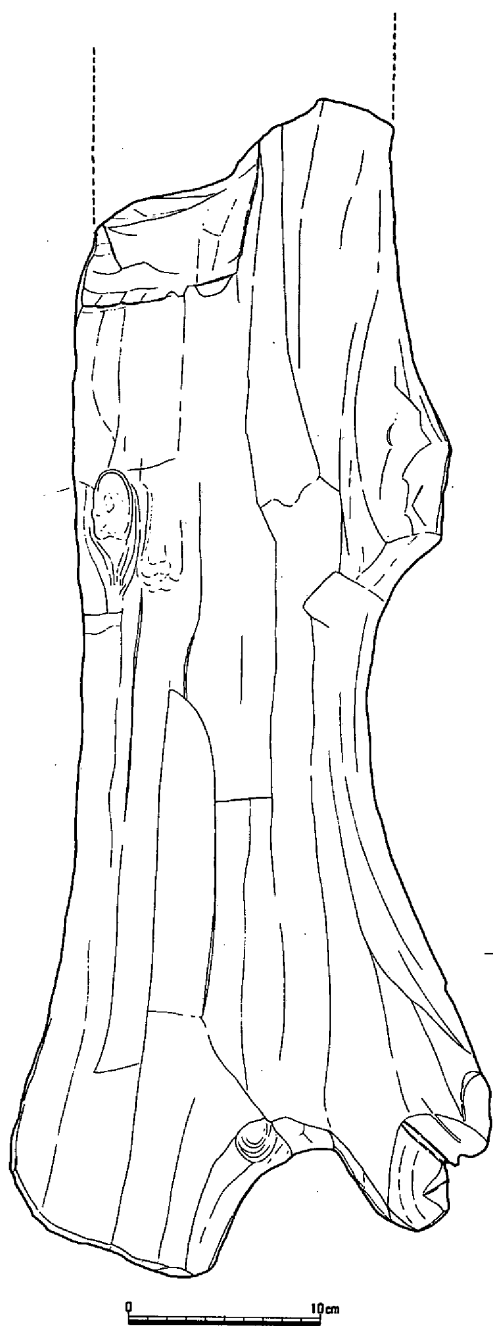
第145図 井戸7出土遺物(4)(最下層:1/4)



第146図 井戸7出土遺物(5)(木製品1:1/4)

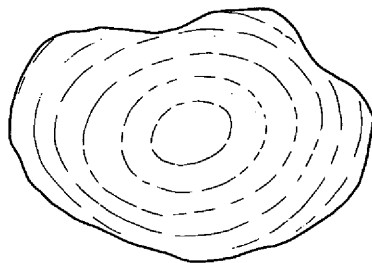


第147図 井戸7出土遺物(6)
(木製品2; 1/4・1/6)



器を、また第143図には上層あるいは中層出土土器を掲載している。これらの土器については型式的には中期後葉のもの(551・553～556・563・575など)と後期前葉のものが認められるが、全体的には上層と下層とに時期的な差異は考えにくい。

木器はおもに下層から出土した。W2は器種は不明だが丁寧な面取りが施されている。W3は端部の上面を長さ約9.5cmにわたって平らに面取りし、かつ下面には幅1cm、高さ0.4cmの隆帯を削り出している。板状鉄斧の斧台とも考えられるが明確ではない。W4は曲柄又鍬の破損品である。W5は棒状の木製品で両端部は面取りされている。W6は幅10.5cm、厚さ3.8cmの板材で破損しているが図示したような突起部が一か所認められる。他の類例に比べて幅がややせまいが梯子の破損品と考えてよいのではなかろうか。W7は一部欠損しているがその形状から横槌あるいは掛矢と考えている。W8は杭である。

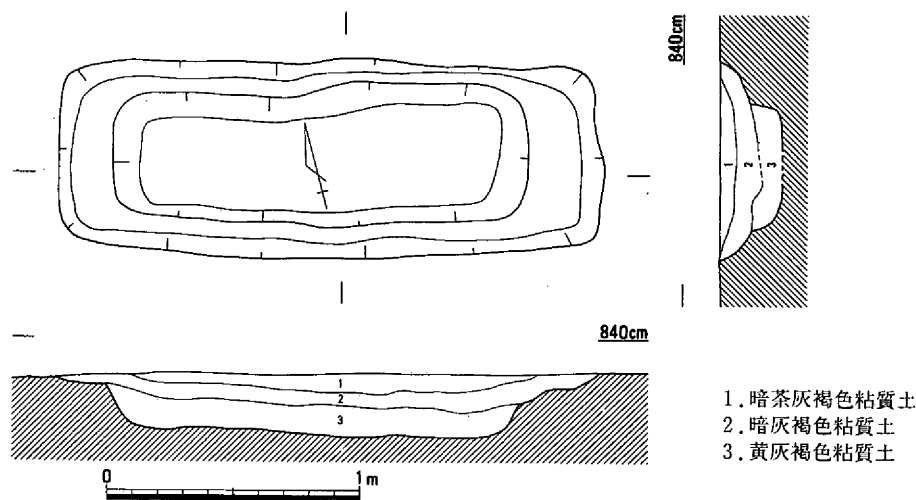


W11

第148図 井戸7出土遺物(7)(木製品3:1/4)

W9は丸木材で長さ68cmに切断されている。W10は丸木材の破損品である。端部を凹字形に加工しており、また図示したように二か所にほぞ穴が穿たれている。建築材(柱)であろう。W11は太さが最大で約20cmの丸木材で、表面には粗い面取りが施されている。また端部は幹と枝の部分を切断しており、二股状になるように意識されている。建築材(柱)ではなかろうか。これら図示した木製品の大きさおよび樹種については一覧表に示している。なおW6～10には火災によって炭化したと思われる部分が認められる。火災を被った竪穴住居や高床倉庫の建築材が廃棄されたのではなかろうか。

種子はフローティングによってモモの他に多数検出できたが同定は行っていない。この遺構については、北隣りに位置する井戸4・6に比べて底面の海拔高が高いことや断面形状が異なっていることから、井戸以外の用途(貯蔵穴など)も考えられる。時期は弥生時代後期前葉である。(平井)

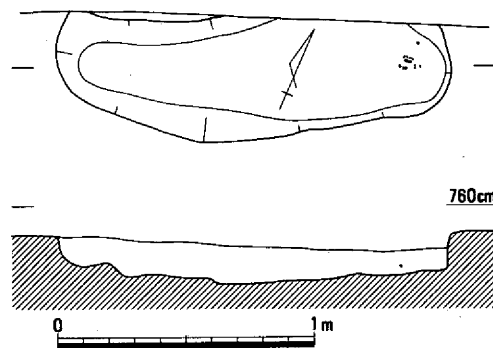


第149図 土壙墓 1(1/30)

(4) 土壙墓

土壙墓 1 (第149図、図版27-1)

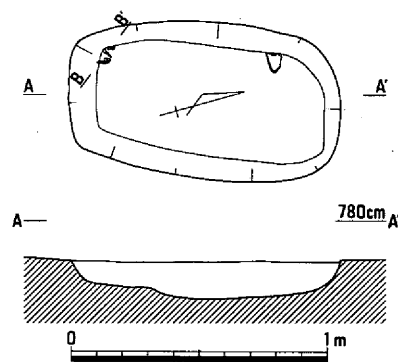
H20区の東端に位置する長方形の2段掘りの土壙で、人骨や歯などの出土はないがその形状から土壙墓と考えた。木棺痕跡や木質も遺存していなかった。規模は上面で215×80cm、中段で164×55cm、底で143×40cm、中段から底面までの深さ13cm、底面の海拔高8.01mである。時期の特定できる遺物の出土はないが、埋土の状況から弥生時代中～後期と考えた。(久保)



第150図 土壙墓 2(1/30)

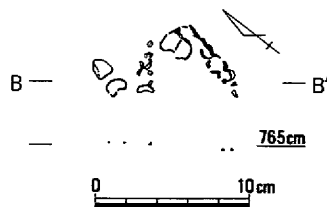
土壙墓 2 (第150図、図版27-2)

HW 3 区の北西端部の竪穴住居27と切り合い関係にあり、明確ではなかったが竪穴住居27を切っていると考えている。平面形は北端部が側溝によって切られているが、154×50cm前後の長形状で、深さは19cm残存していた。埋土は褐灰色粘質土である。北東隅の底面から約3cm上でヒトの歯が確認できたため、この土壙を墓と考えた。時期は弥生時代後期前葉頃であろう。(平井)



土壙墓 3 (第151図、図版27-3)

土壙墓 2 の南東約 1 m に位置する。平面形は106×63cmの長方形で、深さは15cm残存していた。断面形は皿形で、北側が少し低くなっていた。埋土は褐灰色粘質土である。南西隅の検出面近くにおいて、図示したようにヒトの歯が確認できたため、この土壙は墓であると考えた。なお土壙墓 2・3 ともに小口溝は検出できなかった。時期は弥生時代後期前葉頃であろう。(平井)

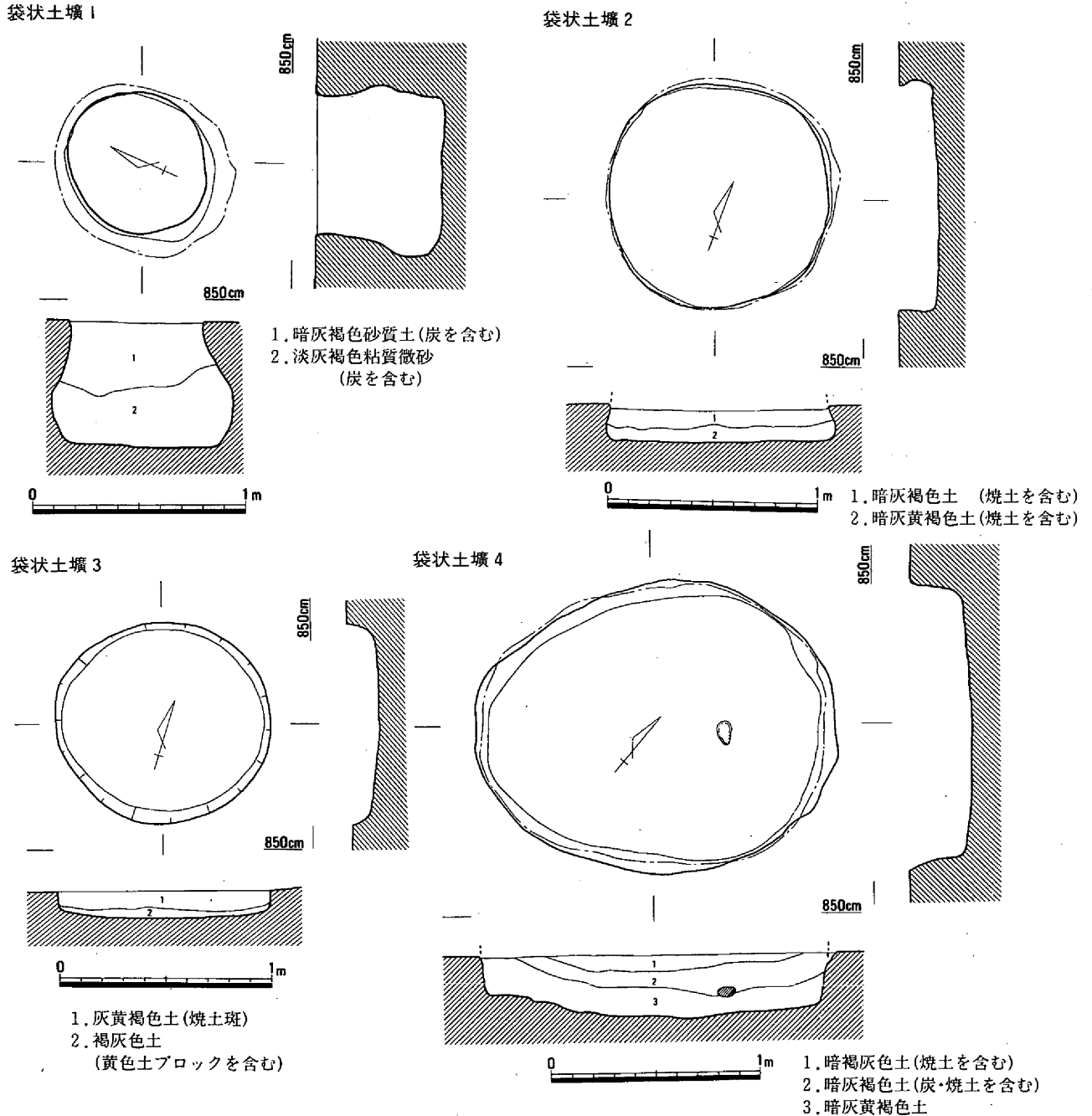


第151図 土壙墓 3(1/30・1/5)

(5) 袋状土壙

袋状土壙 1 (第152図、図版28-2)

袋状土壙は、第3微高地の北方のCH1区で集中的に検出された。後世の大規模な削平により、本来存在したはずの上部が大幅に失われている。しかし、この袋状土壙1ではおよそ60cmの深さが確認され、フラスコ状の断面形態がよく観察される。南方の袋状土壙2~6が、きわめて浅く検出された



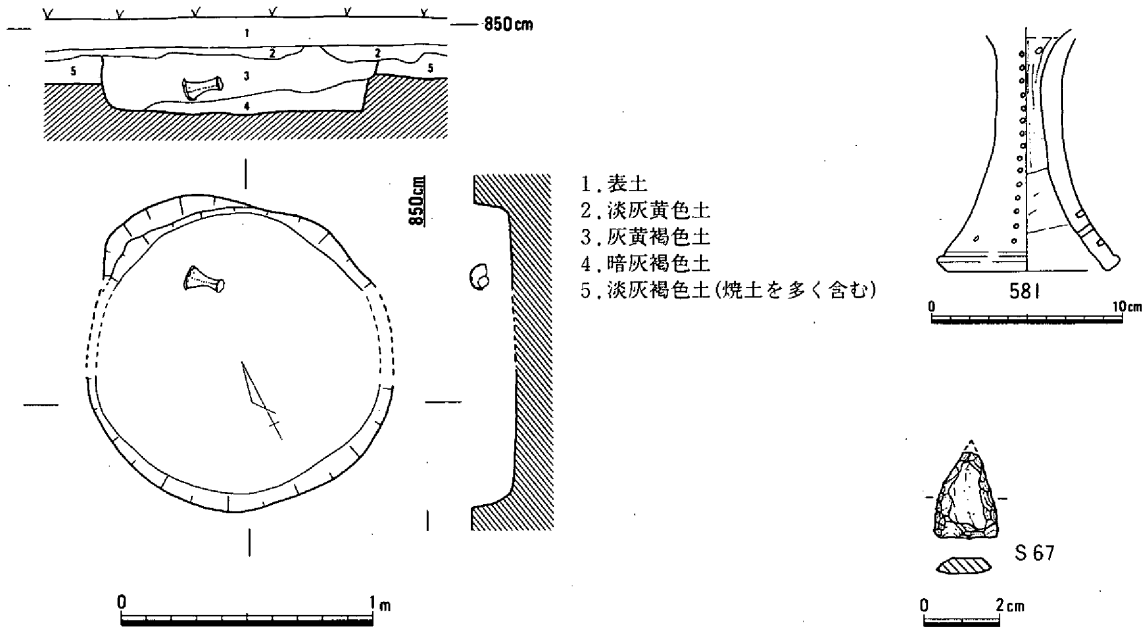
第152図 袋状土壙 1~4(1/30)

ことは、北方へ向けて地形がやや低くなっていくことを示唆しているといえる。

出土遺物は皆無であるが、周囲の遺構から弥生時代後期前葉に比定されよう。

(岡田)

袋状土壙 2 (第152図、図版28-3)



第153図 袋状土壙 5(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)

袋状土壙 1 から南東方約90mに位置し、袋状土壙 3～5 とかたまって検出された。底面の径は1 mを越えほぼ正円を描く。壁体は、内側に傾いて約16cmの深さを残す。埋積土は残存する上・下層いずれも比較的多めの焼土細粒が含まれる。

出土遺物は皆無であるが弥生時代後期前葉に比定されるであろう。(岡田)

袋状土壙 3 (第152図、図版29-1)

袋状土壙 2 の北東約2 mで検出された。袋状土壙 2 よりひとまわり小さいが、底面はほぼ正円を描き、深さ10数cmの直立する壁体が観察される。埋積土には焼土細粒

のほか最下層には基盤層の黄褐色土が多く含まれる。時期的には弥生時代後期前葉に比定される。

(岡田)

袋状土壙 4 (第152図、図版29-2)

袋状土壙 3 の南東約1 mで検出された。壁体はやや開き気味に直立している。埋積土の中には焼土の細粒が多く含まれる。時期的には弥生時代後期前葉に比定される。

(岡田)

袋状土壙 5 (第153図、図版29-3)

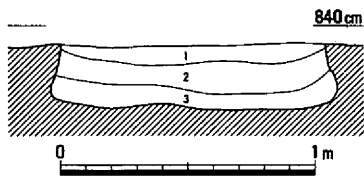
袋状土壙 4 の北東約1 mで検出された。袋状土壙 2～4 と共に4基が集中して検出されたことになる。表土から深さわずか15cmほどで検出されたことは、後世の土地利用による削平の激しさをよく物語っている。出土遺物に581の高杯があり時期を推定する重要な手がかりとなっている。またS67の石鏃も出土している。時期的には弥生時代後期前葉と比定される。

(岡田)

袋状土壙 6 (第154図)

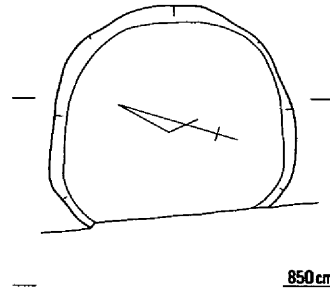
袋状土壙 5 の南方約12m、建物22のすぐ北側で検出された。底面はほかの袋状土壙と異なりややい

袋状土壙 7



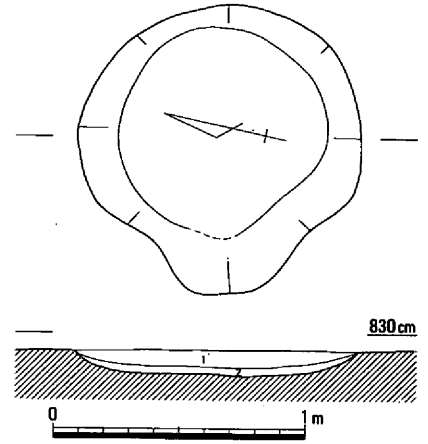
1. 褐灰色粘質微砂
2. 暗灰黄色粘質微砂
3. 灰黄褐色粘質微砂

袋状土壙 8



1. 暗褐色粘質土
2. 黒灰褐色粘質土

袋状土壙 9



1. 暗灰黄色粘質微砂
2. 黄褐色粘質微砂

第155図 袋状土壙 7～9(1/30)

びつな不整長円形を呈している。埋積土は焼土細粒を含む淡灰褐色土である。

出土遺物は皆無であるが、やはり弥生時代後期前葉と比定されよう。

(岡田)

袋状土壙 7 (第155図)

KO1区北端の側壁で断面のみを確認したもので、過半は北側の調査区外にある。検出できた最大径は、海拔高8.07m前後で平坦な底面直上にあつて112cmを測るが、側溝の幅から考えて、本来の径はこれより大きいものと考えられる。深さは26cmが残る。

(光永)

袋状土壙 8 (第155図)

K10区の西端に位置する。一部が調査区外となるが、直径90cm前後の円形を呈すると考えられる。検出面からの深さは15cmと浅いが、断面の形状から袋状土壙に含めた。底面の海拔高は8.18mを測る。時期は、出土土器が細片のため特定できず、弥生時代前期に遡る可能性も考えられる。

(久保)

袋状土壙 9 (第155図)

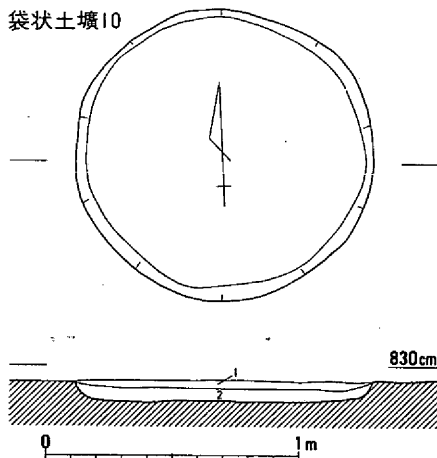
CH2区北西部に位置し、竪穴住居21との距離5.2mを測る。

後世の削平により、深さ10cm程度で平面形が径112cm前後の不整な円形を呈する浅い土壙として残るのみであるが、規模・形状から袋状土壙と判断した。底面の海拔高は8.14m前後である。

遺物は出土していないが、袋状土壙10と同時期と考えられる。

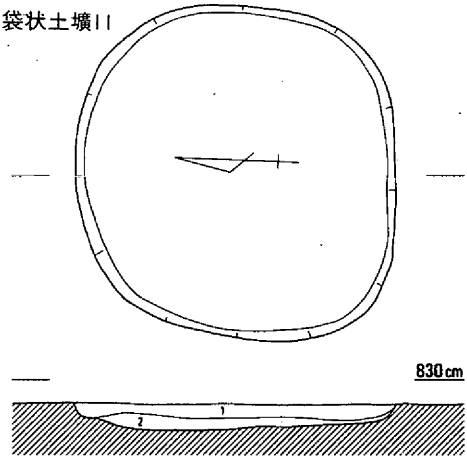
(光永)

袋状土壙10



1. 暗灰黄色粘質微砂
2. 黄褐色粘質微砂

袋状土壙11



1. 灰黄褐色粘質微砂
2. 黄褐色粘質微砂

第156図 袋状土壙10・11(1/30)

袋状土壙10 (第156図)

CH2区北西部で、袋状土壙9との距離80cmと近接している。検出された平面形は円形で、径117cmを測る。深さ8cmが残っており、平坦な底面の海拔高は、8.16m前後と袋状土壙9と同様である。弥生土器小片の出土により、弥生時代中期後半～後期前半に比定される。(光永)

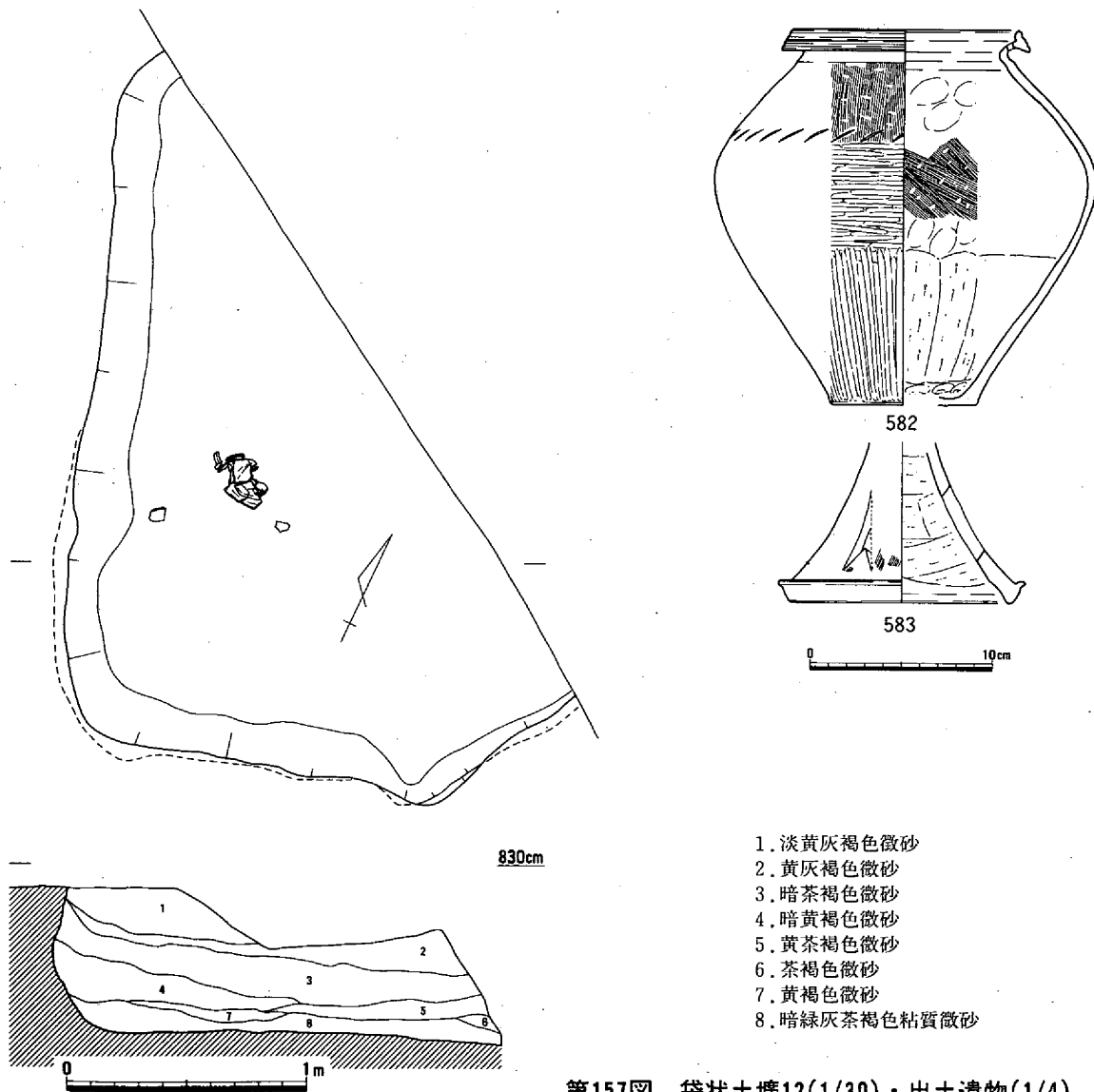
袋状土壙11 (第156図)

CH2区の中央部で、建物33と重複して検出された。深さ9cm程度が残るだけであるが、検出された平面形は隅丸方形を呈し、127×131cmの規模を示す。ほぼ平坦な底面の海拔高は、8.10m前後である。少量の弥生土器が出土しており、弥生時代中期後半～後期前半に比定される。(光永)

袋状土壙12 (第157図、図版30-1)

CH3区の南端に位置する袋状土壙である。北半部分は現代溝によって切られている。平面は南北に長い長方形と考えられ、規模は250×300cm程度と推定される。検出面からの深さは60cmを測る。床面はほぼ水平である。ほぼ床面から甕と高杯が出土している。

甕582は最大径が胴部の中央付近にある。胴部内面のヘラケズリは下半までである。高杯583は脚端部が上方に拡張しており、矢羽状のスカシを施す。時期は弥生時代中期後葉と思われる。(柴田)



第157図 袋状土壙12(1/30)・出土遺物(1/4)

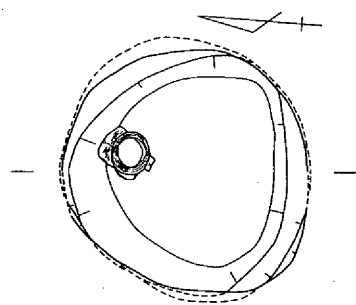
袋状土壙13 (第158図、図版30-2)

HW1区と2区の境、土壙99の東に位置する。上面は1辺90cm程度の隅の丸い三角形を呈するが、中は直径約1mの円形に膨らんでいる。検出面からの深さ70cm、底面の海拔高7.45mを測る。底面はほぼ平らである。埋土は4層に分かれ、第2層には若干の焼土粒が混在していた。最上層からも土器が出土しているが、584は平面図に図示してあるように口縁部を上にした状態で、底面から出土している。時期は弥生時代後期前葉と考えられる。(久保)

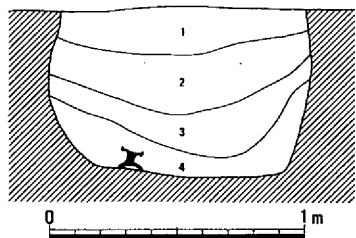
袋状土壙14 (第158図、図版30-3)

袋状土壙13と土壙99の間に位置する。上面は直径約1.1mのほぼ円形で、中は直径1.2mに膨らんでいる。底面は水平でなく皿状で、中央が少しくぼんでいる。底面の海拔高は最も深いところで7.52mを測る。埋土から土器が少量出土しており、弥生時代中期後葉と考えられる。(久保)

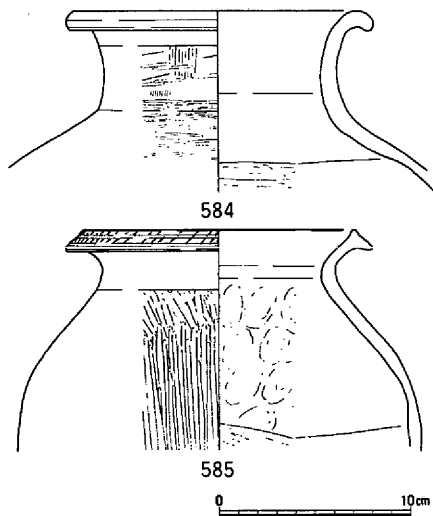
袋状土壙13



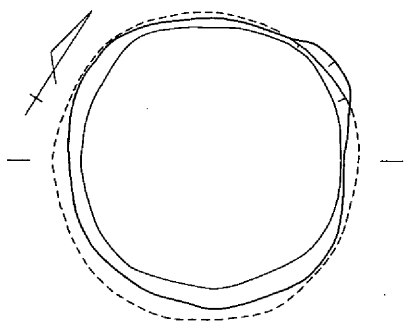
830cm



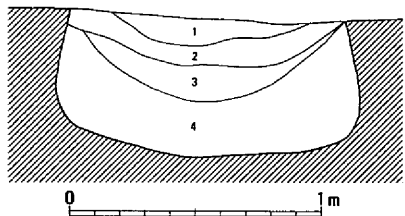
1. 褐灰色粘質土
2. 茶褐色粘質土(焼土を含む)
3. 褐灰色粘質土
4. 黄褐色粘質土



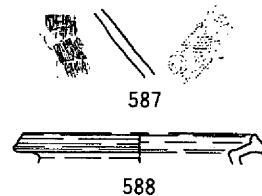
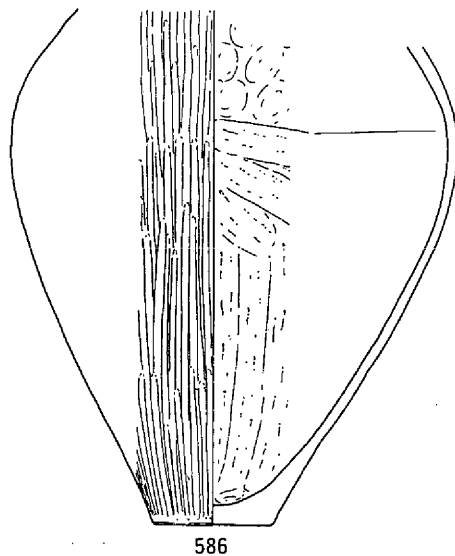
袋状土壙14



830cm

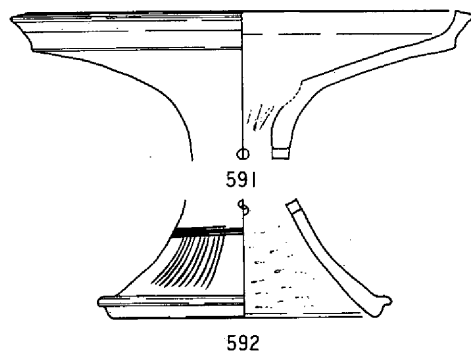
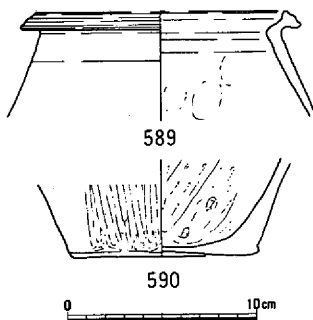
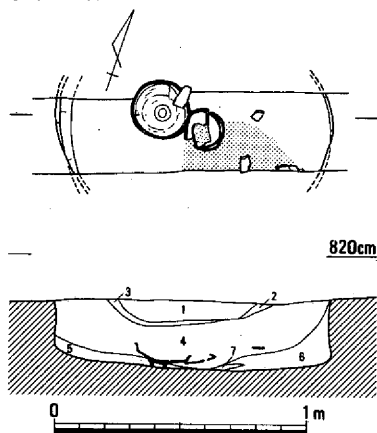


1. 褐灰色粘質土
2. 茶褐灰色粘質土
3. 褐灰色粘質土
4. 茶褐灰色粘質土



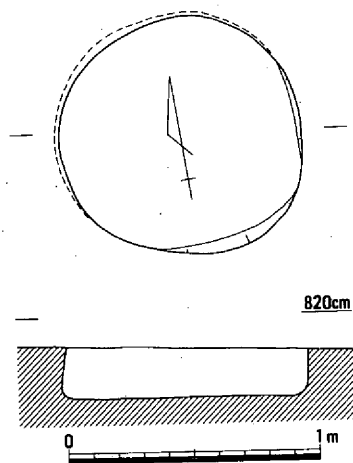
第158図 袋状土壙13・14(1/30)・出土遺物(1/4)

袋状土壙15



- 1. 暗褐色粘質土
- 2. 黄褐色粘質土
- 3. 黄褐色粘質土
- 4. 暗褐色粘質土
- 5. 黄褐色粘質土
- 6. 黄褐色粘質土
- 7. 炭

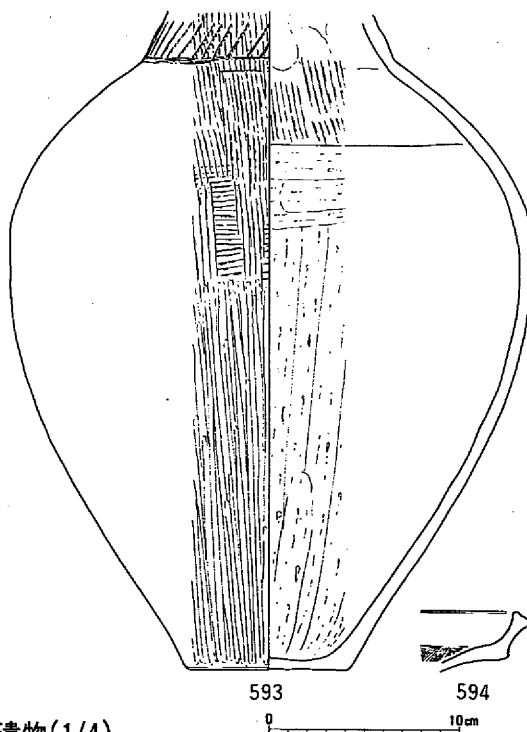
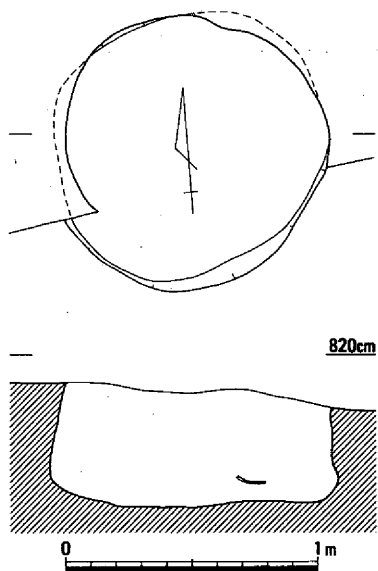
袋状土壙16



袋状土壙15 (第159図)

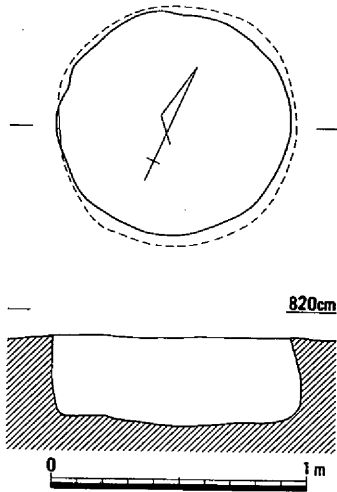
袋状土壙14の南に位置する。北側は側溝で切られ、南側は調査区外となるため30cm幅程度しか検出できなかったが、直径1.1mの円形を呈すると考えられる。底面の海拔高7.75mを測る。底面はほぼ平らで、部分的に炭が薄く堆積していた。埋土は4層に分かれるが、遺物は主に第3・4層から出土している。平面図に図示してある土器のうち、西側が591、東側が592で、同一個体と思われるが脚柱部を欠いており、接合できなかった。時期は弥生時代後期前葉と考えられる。(久保)

袋状土壙17

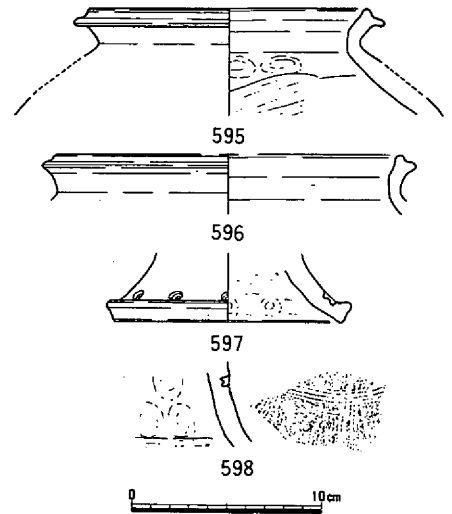
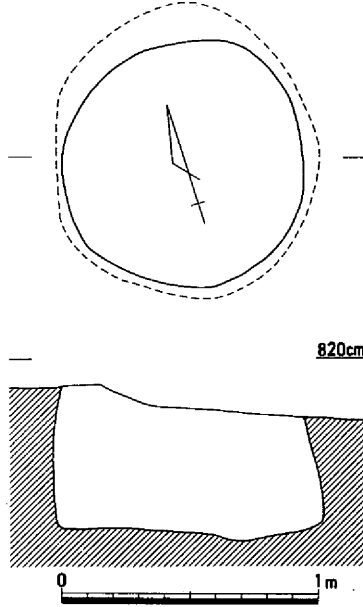


第159図 袋状土壙15～17(1/30)・出土遺物(1/4)

袋状土壙18



袋状土壙19



第160図 袋状土壙18・19(1/30)・出土遺物(1/4)

袋状土壙16 (第159図)

HW 2区西端部に位置する。平面形は直径約95cmの円形で、深さは21cm残存していた。断面形は北側約半分が袋状で、底面はほぼ平らであった。埋土は黄褐色砂質土ブロックを含む暗褐色灰色粘質土であった。遺物は出土しなかったが、埋土の特徴などから弥生時代後期前葉と考えておきたい。(平井)

袋状土壙17 (第159図、図版31-1)

HW 2区の南西端部に位置する。平面形は南端部が側溝によって切られているが、本来は直径約1mの円形であったであろう。深さは49cm残存していた。断面形は袋状で、埋土は炭・焼土粒や黄褐色砂質土ブロックを含む暗褐色灰色粘質土であった。遺物は弥生時代後期前葉の土器が出土している。(平井)

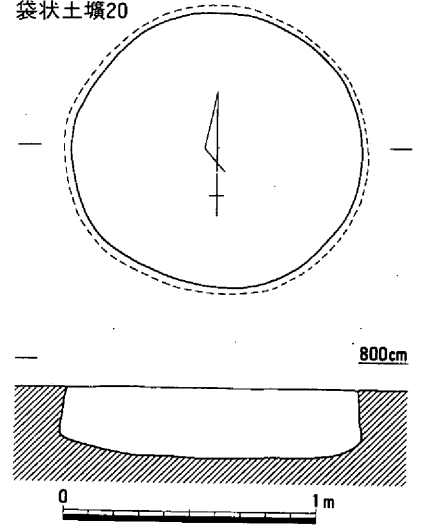
袋状土壙18 (第160図、図版31-2)

HW 2区の西半部に位置する。平面形は直径約90cmの円形で深さは35cm残存していた。断面形は袋状で、埋土は炭・焼土粒や黄褐色砂質土ブロックを含む暗褐色灰色粘質土であった。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は弥生時代後期前葉と考えられる。(平井)

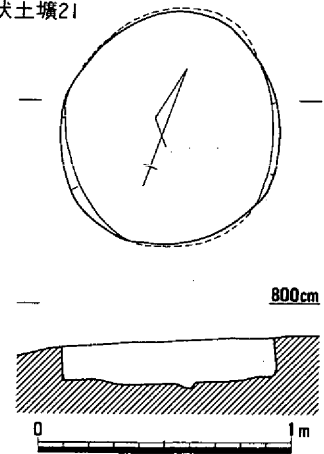
袋状土壙19 (第160図、図版31-3)

袋状土壙18の東約3mに位置する。平面形は直径1m前後の円形で、深さは63cm残存していた。断面形は袋状で、埋土は炭・焼土粒や黄褐色砂質土ブロックを含む暗褐色灰色粘質土であった。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は弥生時代後期前葉と考えられる。(平井)

袋状土壙20

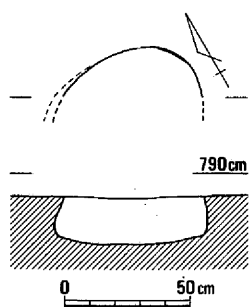


袋状土壙21

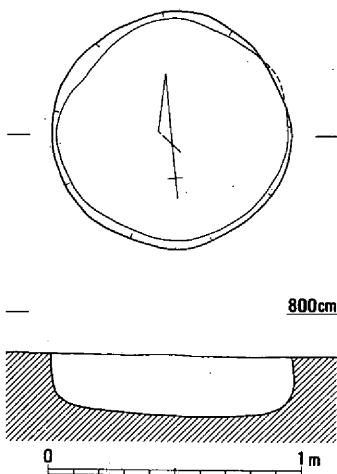


第161図 袋状土壙20・21(1/30)

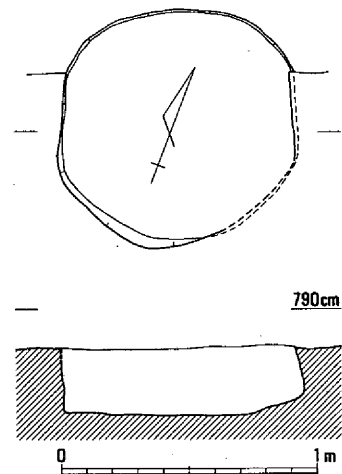
袋状土壙22



袋状土壙23



袋状土壙24



第162図 袋状土壙22～24(1/30)

袋状土壙20 (第161図、図版32-1)

袋状土壙19の東約3 mに位置する。平面形は直径110 cm前後の円形で、深さは28 cm残存していた。断面形は袋状で、埋土は炭・焼土粒や黄褐色砂質土ブロックを含む暗褐色粘質土である。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は弥生時代後期前葉と考えられる。(平井)

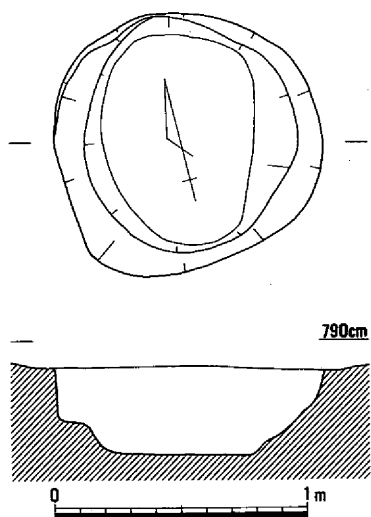
袋状土壙21 (第161図)

袋状土壙20の南東約3 mに位置する。平面形は直径90 cm前後の円形で、深さは17 cm残存していた。断面形は一部袋状になっており、埋土は炭粒や黄褐色砂質土ブロックを含む暗褐色粘質土である。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は弥生時代後期前葉であろう。(平井)

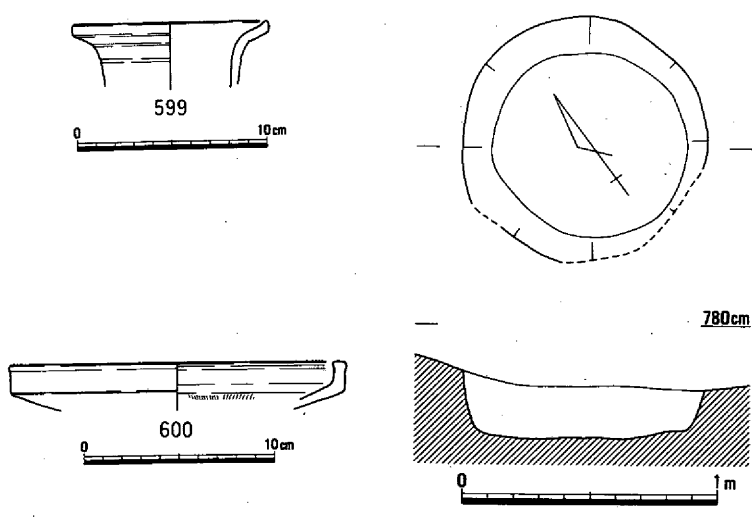
袋状土壙22 (第162図)

HW2区の中央部に位置する。南西部の約半分が溝60によって切られているため、全体の形状や規模は不明である。深さは18 cm残存していた。断面形は袋状を呈し、埋土は暗褐色粘質土であった。遺物は出土しなかったが、埋土の状況などから時期は弥生時代後期前葉と考えたい。(平井)

袋状土壙25

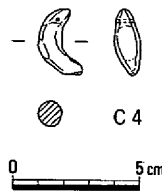
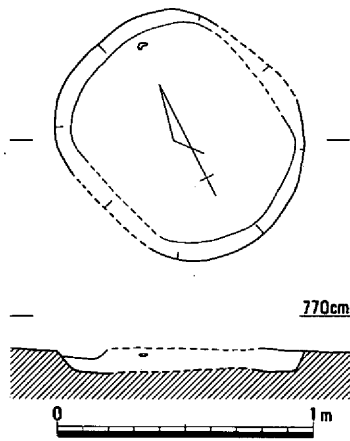


袋状土壙26

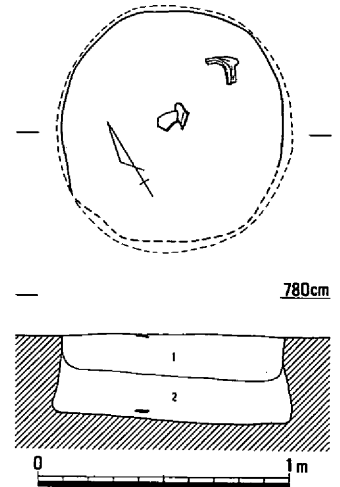


第163図 袋状土壙25・26(1/30)・出土遺物(1/4)

袋状土壙27



袋状土壙28



1. 暗褐色粘質土
2. 暗褐色粘質土

第164図 袋状土壙27・28(1/30)・出土遺物(1/3)

袋状土壙23 (第162図)

HW 2 区の北東部において検出した。平面形は直径95cm前後の円形で、深さは24cm残存していた。断面形は一部袋状で、埋土は黄褐色砂質土ブロックを含む暗褐色粘質土であった。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は弥生時代後期前葉と考えられる。(平井)

袋状土壙24 (第162図、図版32-2)

袋状土壙23の北東約2mに位置する。平面形は一部側溝に切られているが、直径約1mの円形で、深さは26cm残存していた。断面形は東側の一部が袋状で、埋土は暗褐色粘質土であった。遺物は出土しなかったが、埋土の状況などから、時期は弥生時代後期前葉と考えられる。(平井)

袋状土壙25 (第163図、図版32-3)

袋状土壙24の南東約1mに位置する。平面形は110×107cmのややいびつな円形で、深さは35cm残存していた。掘り方は二段になっており、埋土は炭・焼土粒や黄褐色砂質土ブロックを含む暗褐色粘質土であった。時期は出土した少量の土器片から弥生時代後期前葉と考えられる。(平井)

袋状土壙26 (第163図、図版33-1)

袋状土壙25の北東約2mに位置する。平面形は直径約1mの円形で、深さは27cm残存していた。断面形は残存部分では袋状になっていない。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は弥生時代後期前葉と考えられる。(平井)

袋状土壙27 (第164図)

HW 3 区の北西端部において検出した。平面形は一部側溝によって切られてはいるが、99×85cmの長楕円形で、深さは9cm残存していた。断面形は袋状ではなく、埋土は暗褐色粘質土である。こうした形状から、他の袋状土壙とは異なる性格の土壙と考えたい。遺物は少量の土器片とともに土製勾玉が出土している。時期は弥生時代後期前葉と考えておきたい。(平井)

袋状土壙28 (第164図)

袋状土壙27の南東2mに位置する。平面形は直径95cm前後の円形で、深さは35cm残存していた。断面形は袋状で、埋土は2層認められた。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は弥生時代後期前葉ではないかと考えられる。(平井)

(6) 土壙

土壙41 (第165図、図版33-2)

PU区北部で検出された、南北258cm、東西216cmの不整形の土壙である。著しく上面を削平されており、検出面からの深さは5cm程度と浅い。暗灰色粘質土で埋没していた。時期の特定できる遺物の

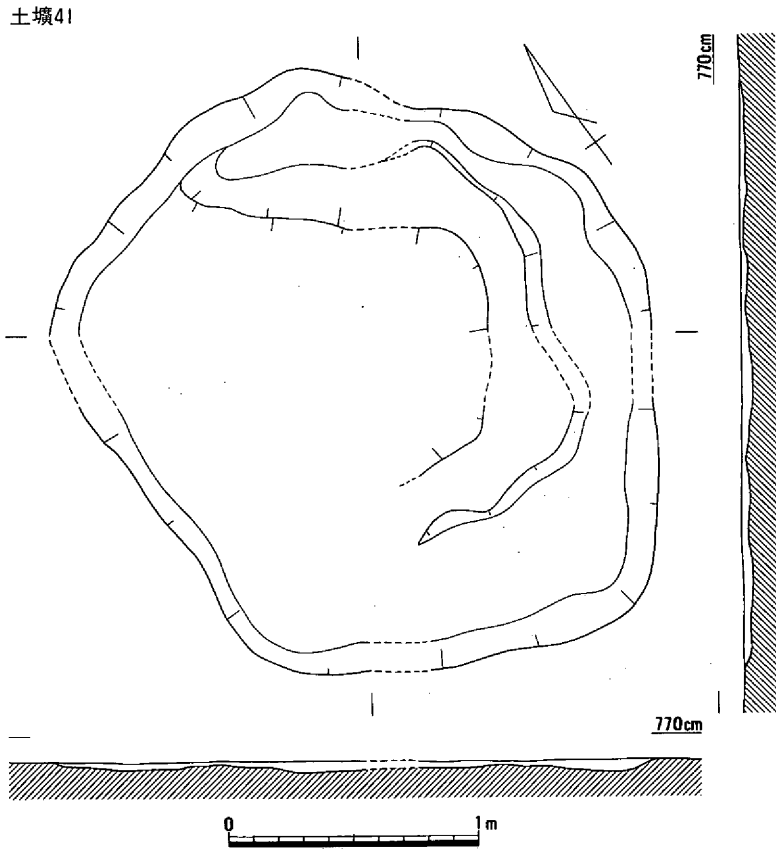
出土はみられないが、検出状況から、弥生時代に属すると考えられる。(久保)

土壙42 (第165図)

土壙41の南に位置する。溝3に設定したトレンチによって大部分が削平されており、全容は不明である。土壙43と同様の粘質土で埋没している。検出の状況から弥生時代と考えた。(久保)

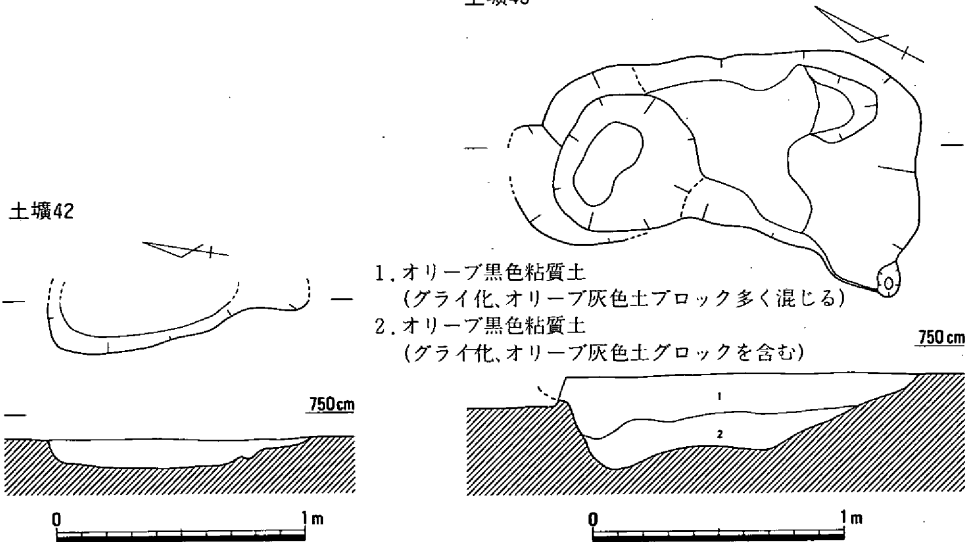
土壙43 (第165図)

土壙42の西に位置する。長軸164×短軸66cmの不整長方形を呈し、深さは30~36cmを測る。遺物の出土は皆無で、時期の特定はできないが、検出の状況から土壙42と同じく弥生時代と考えた。(久保)

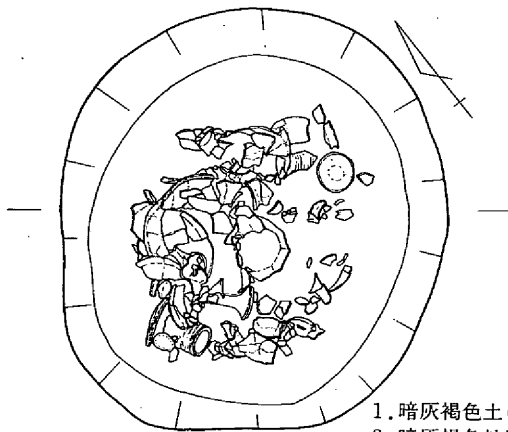


土壙43

土壙42

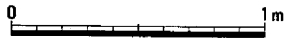


第165図 土壙41~43(1/30)



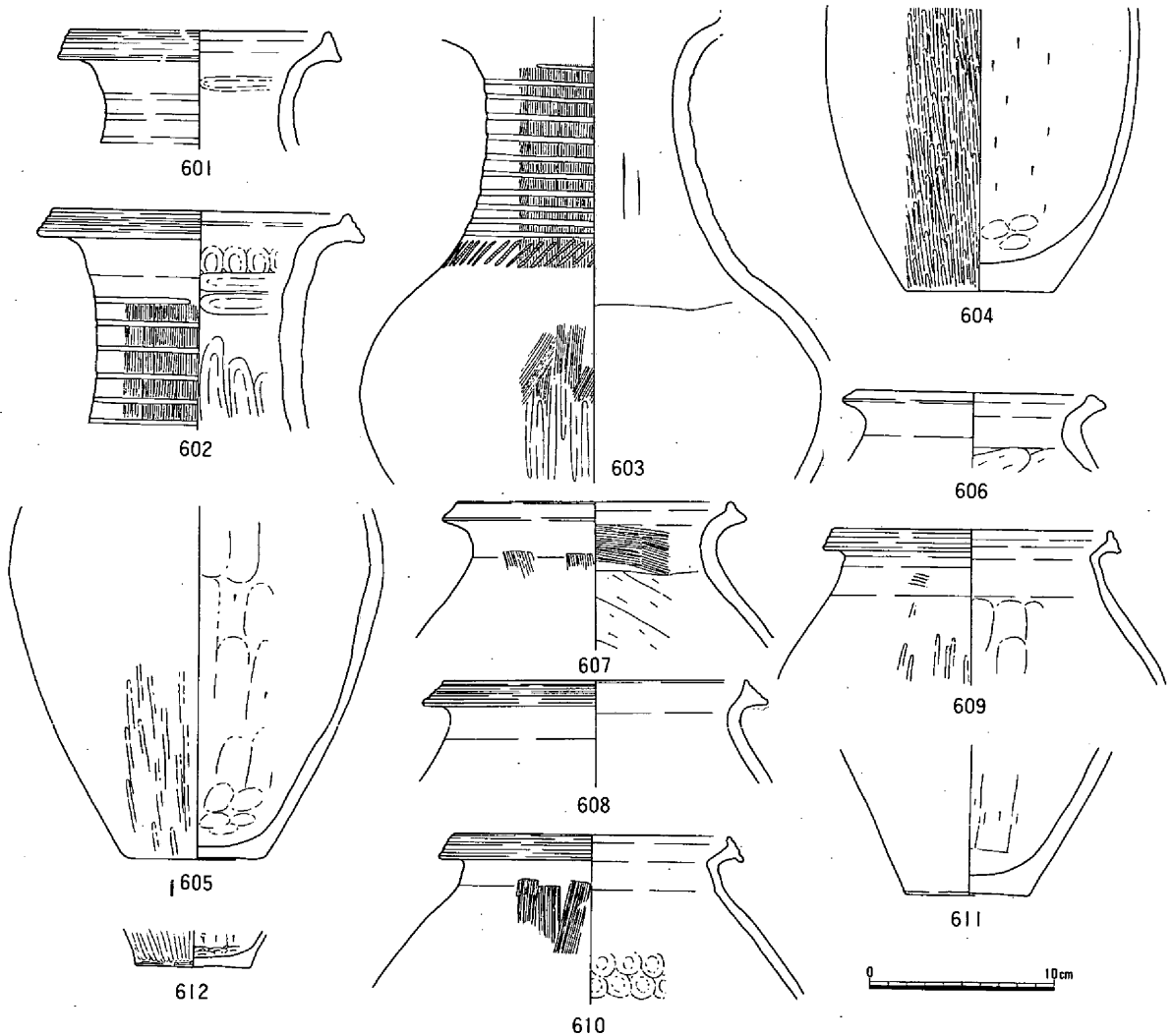
- 1. 暗灰褐色土(焼土・炭を含む)
- 2. 暗灰褐色粘質土
(灰色粘土混じり)

790cm

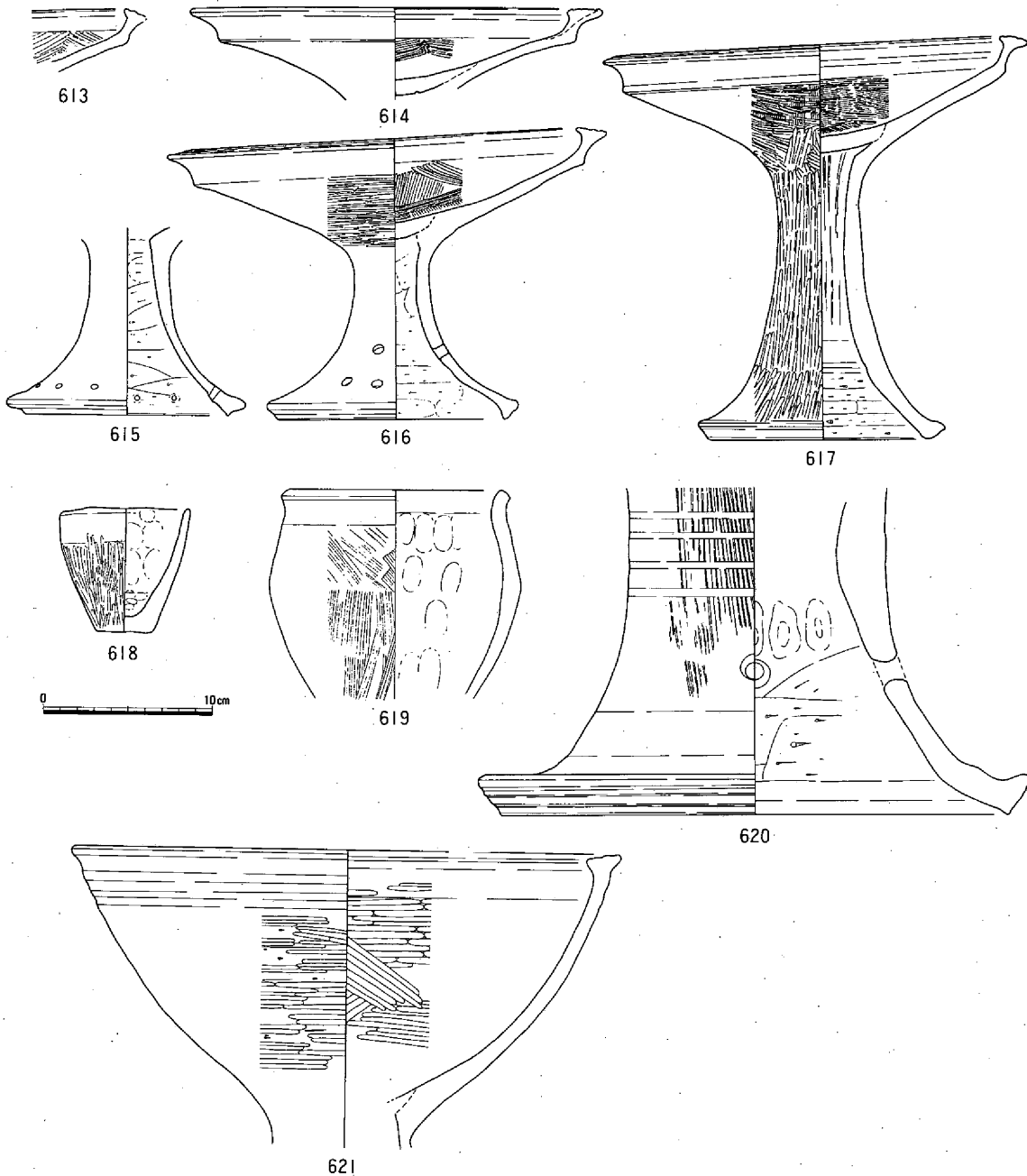


土壙44 (第166・167図、図版33-3)

TA区の東半北西部にあった。建物1の1.5m東、竪穴住居5の6m南西にあたる。平面形は長円形で、長径が168cm、短径は152cmを測り、深さは30cmであった。壙壁はかなり急傾斜で、底部は広い平坦面となる。検出面では土器片が環状に出土した。断面で観察すると、土器溜まりの下端線は椀状を描き、土壙が少し埋没した段階で土器片が多量に投棄され、再度、土砂によってさらに埋没していったことが想定される。出土土器の多くは弥生時代後期前葉と考えられるが、610・621のように中期後葉の様相を示すものもある。土壙の年代は弥生時代後期前葉とみられる。(岡本)



第166図 土壙44(1/30)・出土遺物(1)(1/4)



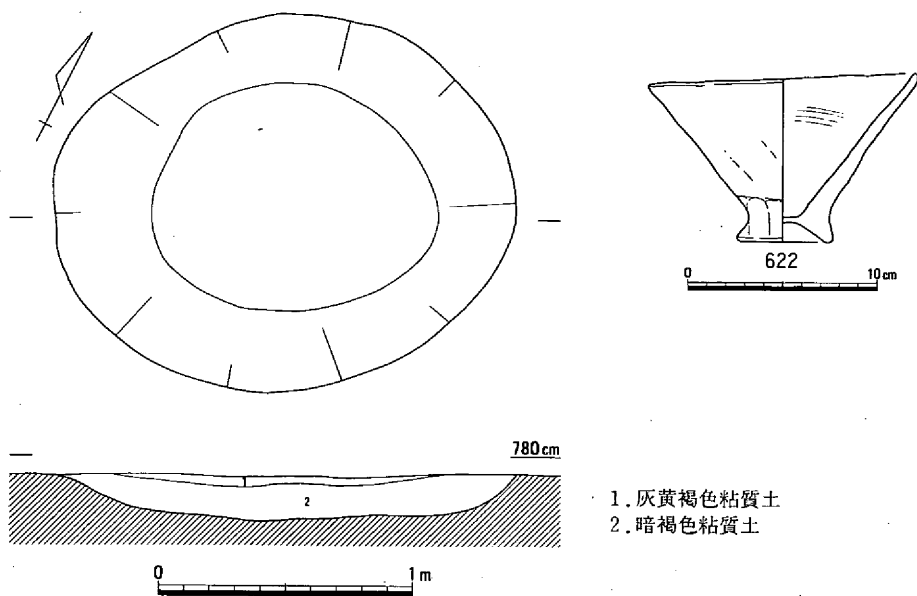
第167図 土壙44出土遺物(2)(1/4)

土壙45 (第168図)

TA区の東半北東部、建物3の北5m、竪穴住居8の北西10mにあたる。平面形は長円形で、長径が183cm、短径は150cmを測った。深さは18cmと浅く、断面形は皿状を呈していた。埋土は2層に分けられ、第1層には炭粒が多く含まれていた。掲載土器は弥生時代後期後半とみられる。(岡本)

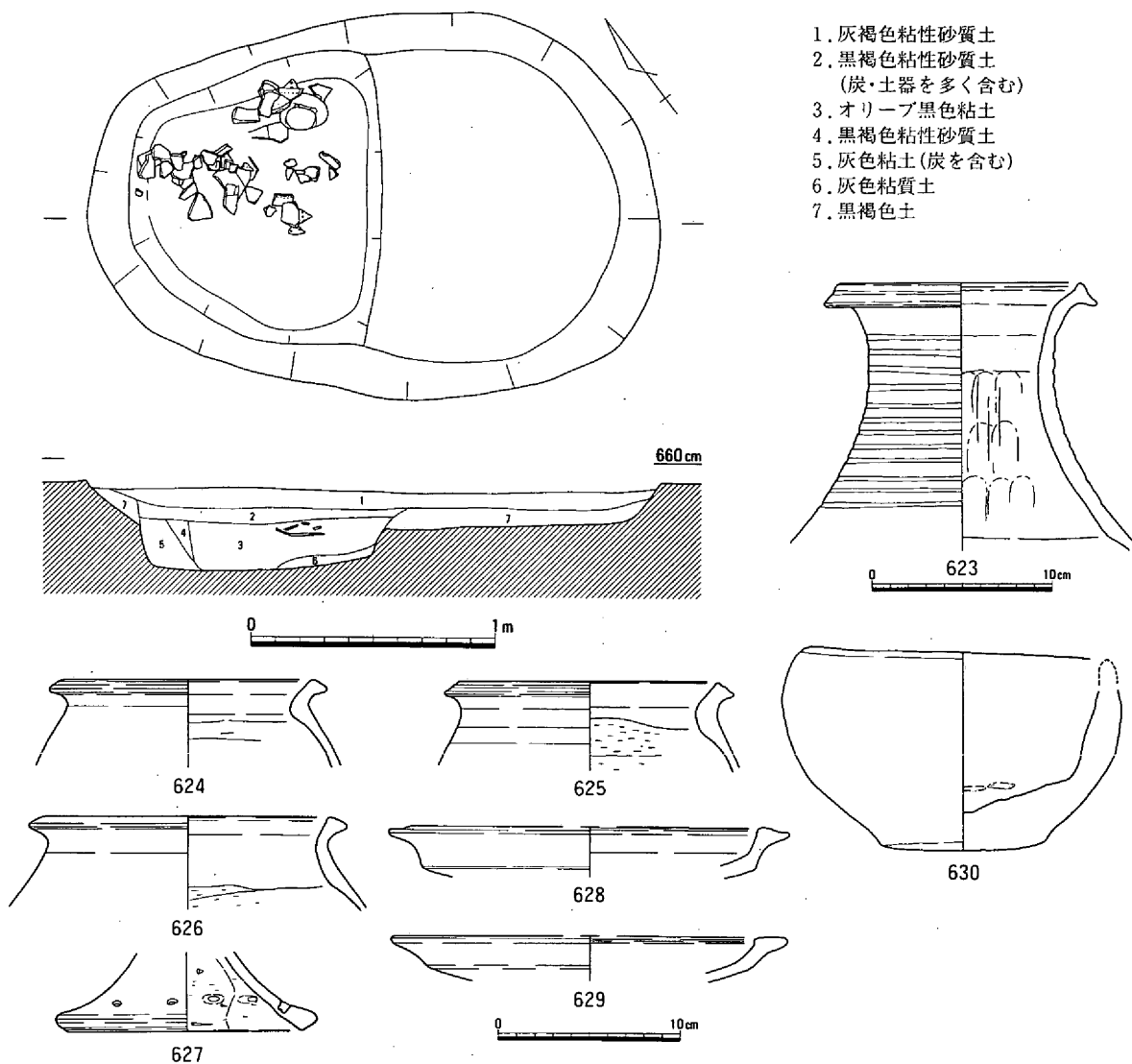
土壙46 (第169図)

TA区の東半、建物3の北2m、竪穴住居8の西6mにあたる。土壙は段構造をなす。長径235cm、短径160cmの楕円形の落ち込みがあり、その西半に長径126cmの穴が掘られていた。検出面からの深さは、落ち込みが11cm、西半の穴は37cmを測った。西半の穴の底は広い平坦面になっていた。西半の穴の底より15~20cmほど上方、第2層と第3層の上半で土器片が集中して出土した。第1層にも土器片が多く含まれ、第1~3・7層には炭粒も多く含まれていた。第7層は土壙掘削前の地面のたわみに堆積した土とみられる。出土土器は弥生時代後期の前葉と考えられ、土壙の年代を示す。(岡本)



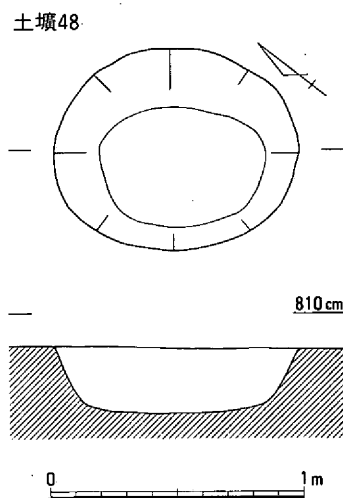
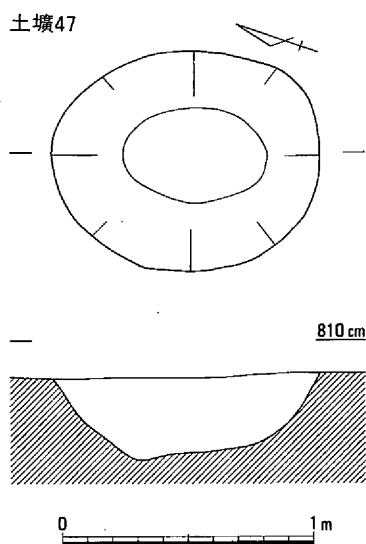
- 1. 灰黄褐色粘質土
- 2. 暗褐色粘質土

第168図 土壌45(1/30)・出土遺物(1/4)

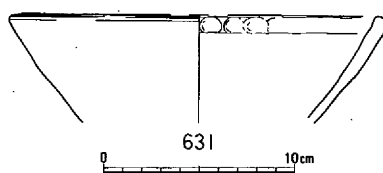
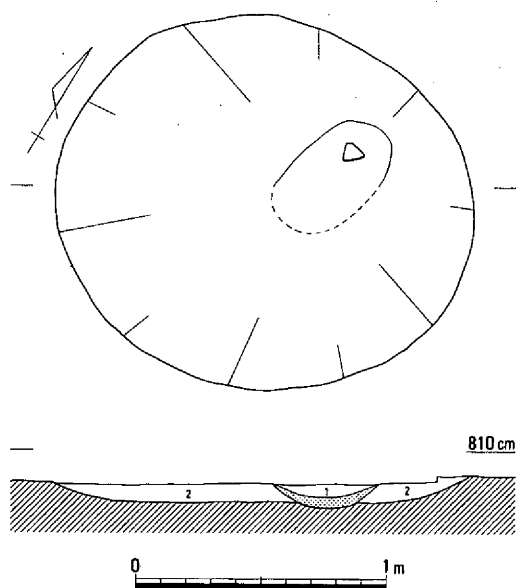


- 1. 灰褐色粘性砂質土
- 2. 黒褐色粘性砂質土 (炭・土器を多く含む)
- 3. オリーブ黒色粘土
- 4. 黒褐色粘性砂質土
- 5. 灰色粘土(炭を含む)
- 6. 灰色粘質土
- 7. 黒褐色土

第169図 土壌46(1/30)・出土遺物(1/4)



第170図 土壙47・48(1/30)



1. 暗褐色粘性微砂(炭を多く含む)
2. 褐灰色粘性微砂

第171図 土壙49(1/30)・出土遺物(1/4)

土壙47 (第170図)

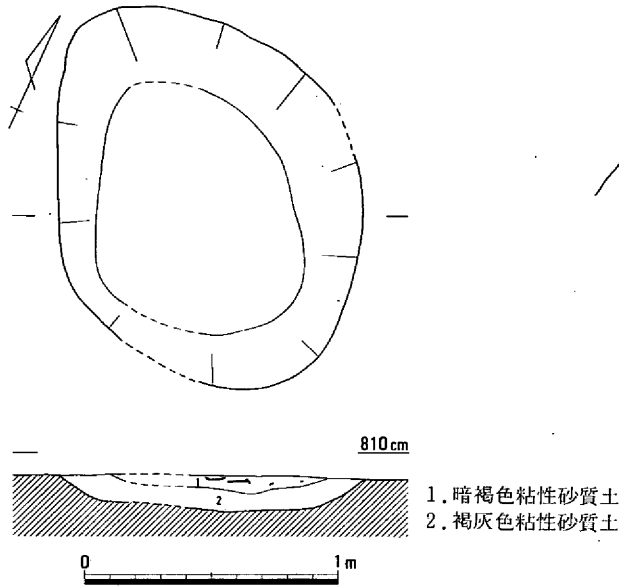
TA区の西半北東隅、竪穴住居7の北7mにあたる。平面形は長円形で、長径は106cm、短径が88cm、深さは34cmを測った。埋土は1層で焼土を含み、遺物はなかった。弥生時代後期か。(岡本)

土壙48 (第170図)

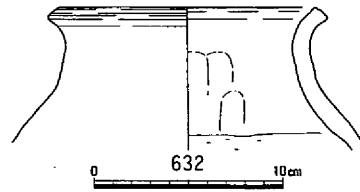
TA区の西半北東部、竪穴住居7の北東3mにあった。平面形は長円形で、長径は96cm、短径が80cm、深さは27cmを測った。埋土は1層で焼土を含み、遺物はなかった。弥生時代後期か。(岡本)

土壙49 (第171図)

TA区の西半北西部で井戸3と近接し、竪穴住居7の西7m、建物12の北6mにあたる。断面観察によると、長径が168cm、短径147cmの不整な円形で、深さ8cmの落ち込みの中に、長径が55cmぐらいの穴が掘られていると考えられる。この穴の深さは10cmで、埋土には焼土が含まれ、下半は炭の層であった。図示した土器は第2層出土である。弥生時代後期前葉の土壙であろうか。(岡本)

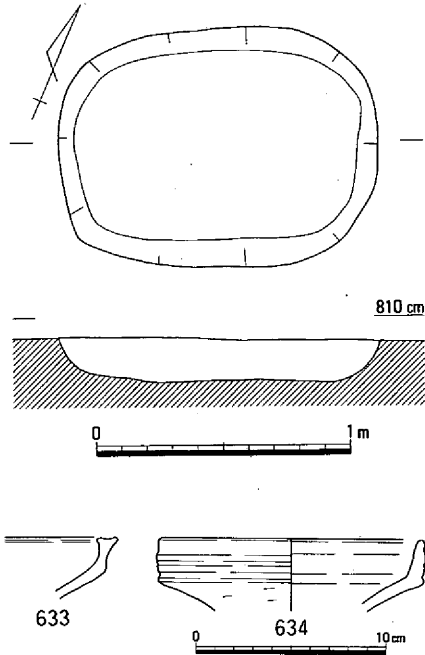


第172図 土壙50(1/30)・出土遺物(1/4)

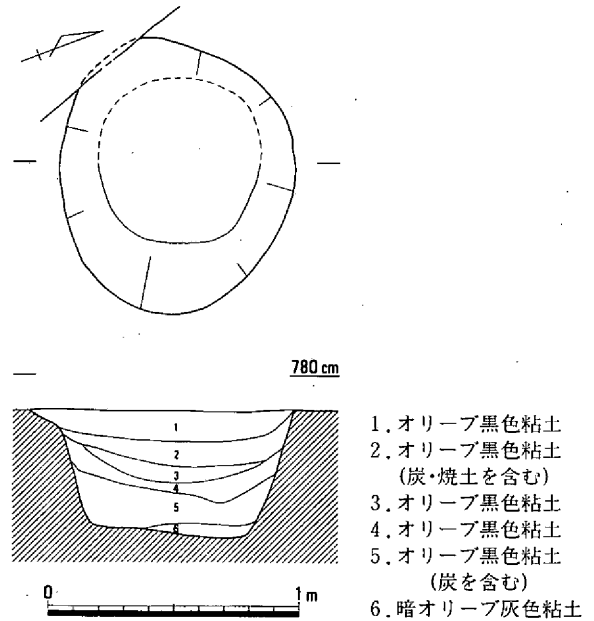


土壙50 (第172図、図版)

TA区の西半中央部、竪穴住居7から3 m南西にあった。平面形は隅の丸い菱形で、長軸が164cm、短軸は123cmを測った。断面形は皿状で、深さが15cmだった。埋土は2層あり、第1層には炭粒が多く含まれ、土器片もみられた。出土土器から弥生時代後期前葉の土壙と考えられる。(岡本)



第173図 土壙51(1/30)・出土遺物(1/4)



第174図 土壙52(1/30)

土壙51 (第173図)

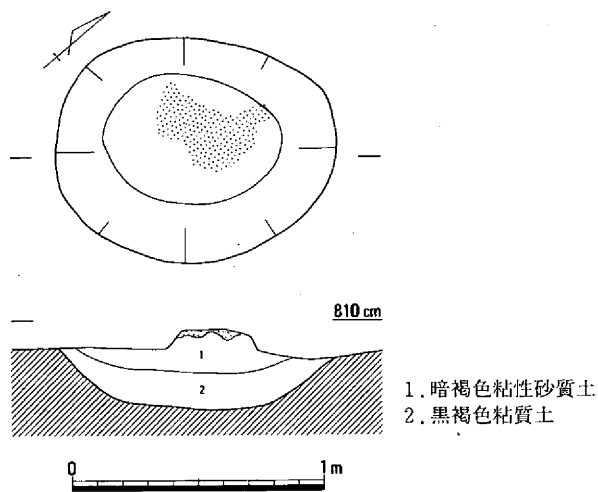
TA区の西半中央部、竪穴住居7の南3 m、建物11の北2 mに位置していた。平面形は隅丸方形に近く、長軸が126cm、短軸は96cmを測った。壙壁は湾曲し、底面はほぼ平坦で、深さは18cmだった。埋土は1層だけであった。出土土器の年代から、弥生時代後期前葉の土壙とみられる。(岡本)

土壙52 (第174図)

TA区の中央南端、竪穴住居10の南東2 mにあった。溝9と重複し、その埋没後に掘られていた。不整な円形で、長径が111cm、短径は95cmであった。壙壁は急傾斜で、底面は平坦なため、断面形は箱形に近い。深さは50cmを測った。遺物はなかったが、弥生時代後期前葉かと思われる。(岡本)

土壙53 (第175図)

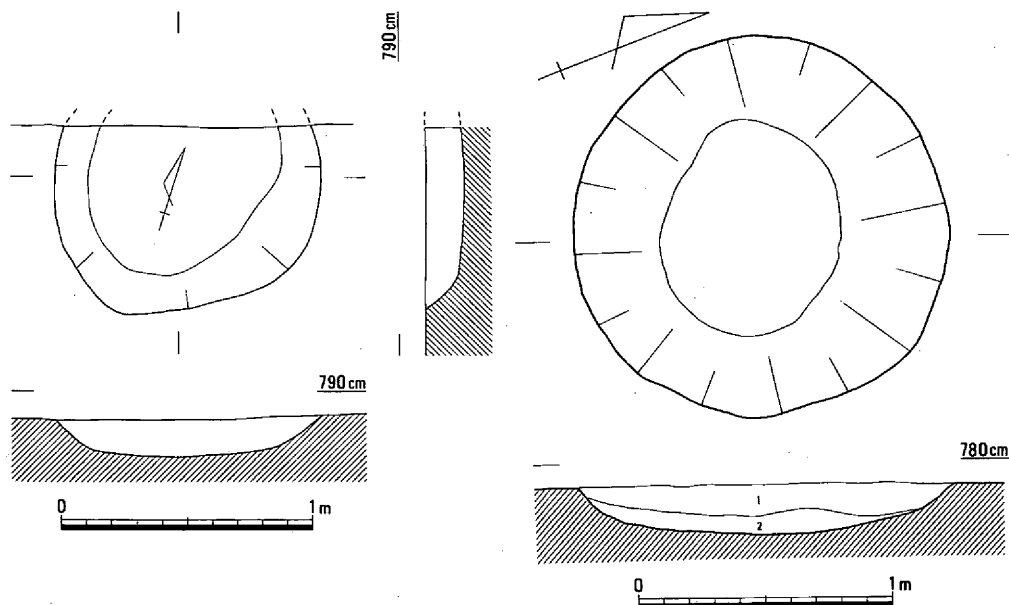
TA区の西半南端で、竪穴住居13のすぐ北東にあった。長径45cmの焼土塊がみつき、周辺を5cmほど掘り下げて精査したところ、長径112cm、短径90cmの土壙が検出された。土壙の深さは32cmあり、焼土の厚さは3～5cmであった。遺物はないが、弥生時代後期前半の土壙とみたい。(岡本)



第175図 土壙53(1/30)

土壙54 (第176図)

H19区の中央に位置する。平面は不整形円形で、規模は東西106cmを測る。深さは14cmで、北側の一部が調査区外で



第176図 土壙54(1/30)

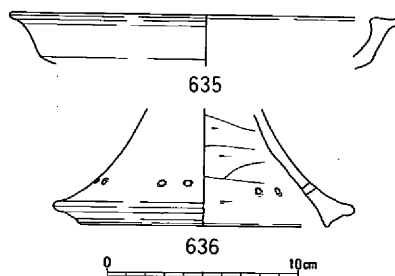
- 1. 暗灰黄褐色土 (炭・焼土混じり)
- 2. 淡黄褐色土

ある。断面は皿状で、床面は水平である。

出土遺物はほとんど無いが、時期は弥生後期の範疇に納まると思われる。(柴田)

土壙55 (第177図)

竪穴住居16の南東方約2mで検出された、ほぼ円形を呈する土壙である。出土遺物には、635・636の高杯があり、弥生時代後期前葉に比定される。(岡田)



第177図 土壙55(1/30)・出土遺物(1/4)

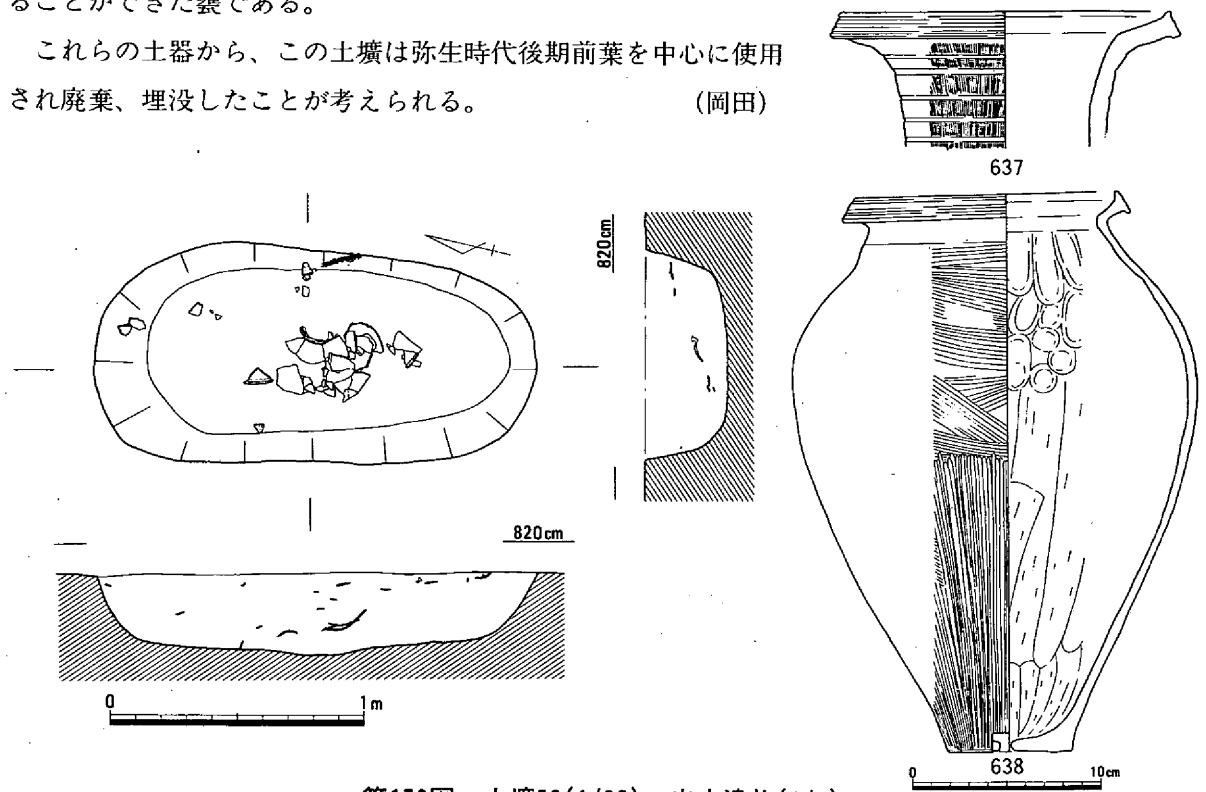
土壙56 (第178図、図版34-1)

建物19のすぐ西側に接して検出された長円形の土壙である。北側はやや幅が広く、残存する深さは約30cmで比較的深い。埋積土は暗灰褐色を呈する粘質土である。土壙の中央部を中心に土器片が多く

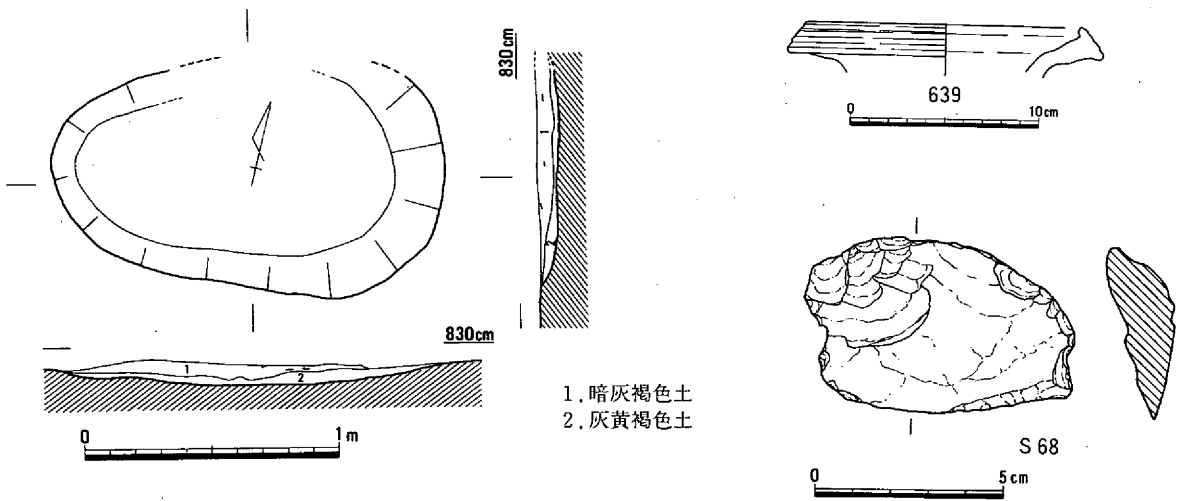
第3章 発掘調査の概要

出土している637は長頸壺の口頸部、638はほとんど完形に復元することができた甕である。

これらの土器から、この土壌は弥生時代後期前葉を中心に使用され廃棄、埋没したことが考えられる。(岡田)



第178図 土壌56(1/30)・出土遺物(1/4)



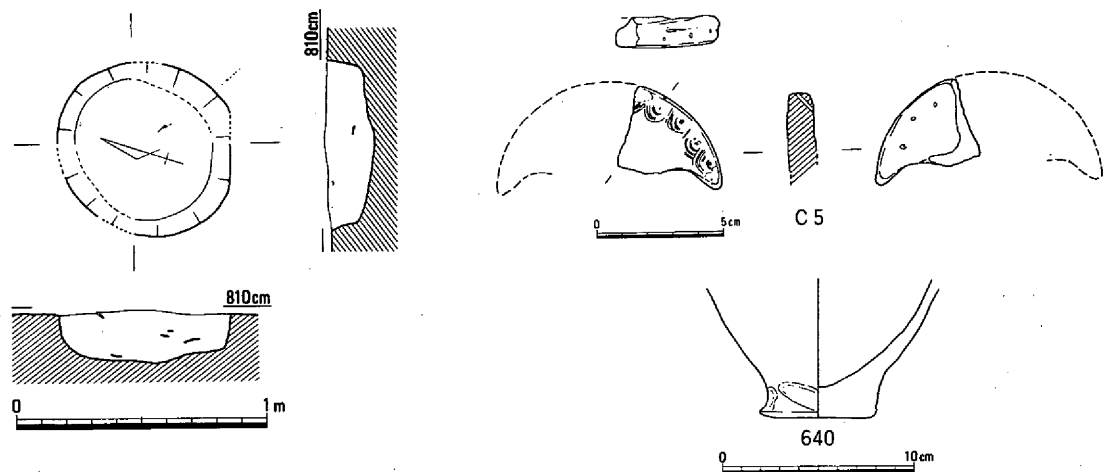
第179図 土壌57(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)

土壌57 (第179図)

建物19の南約1m、土壌56の南東方約2mで検出されたいびつな長円形を呈する土壌である。検出された深さは10cm足らずできわめて浅い。出土遺物には639の壺口縁部と、サヌカイト製の打製石包丁があり、弥生時代後期に比定される。(岡田)

土壌58 (第180図)

建物18の東約5mで検出された径約70cmほどの小土壌である。埋積土は、炭・焼土を含む暗灰黄褐色を呈し、C5の分銅形土製品の破片と640の甕が出土している。前者の残存部は比較的残りがよく細かな文様が看取される。弥生時代後期に比定される土壌と考えてよいだろう。(岡田)



第180図 土壙58(1/30)・出土遺物(1/3・1/4)

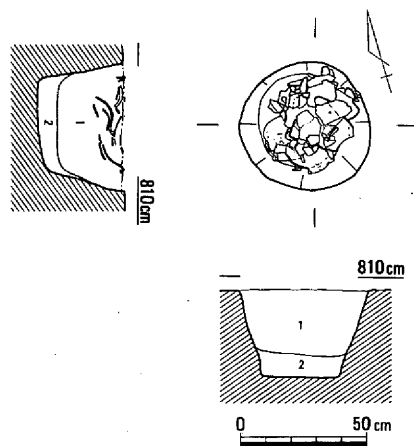
土壙59 (第181図、図版34-2)

建物19の東約5m、竪穴住居18の西約5mとそれぞれの遺構のほぼ中間に位置する小土壙である。土壙の壁体は急で柱穴の可能性も考えられたが、柱の痕跡は認められなかった。

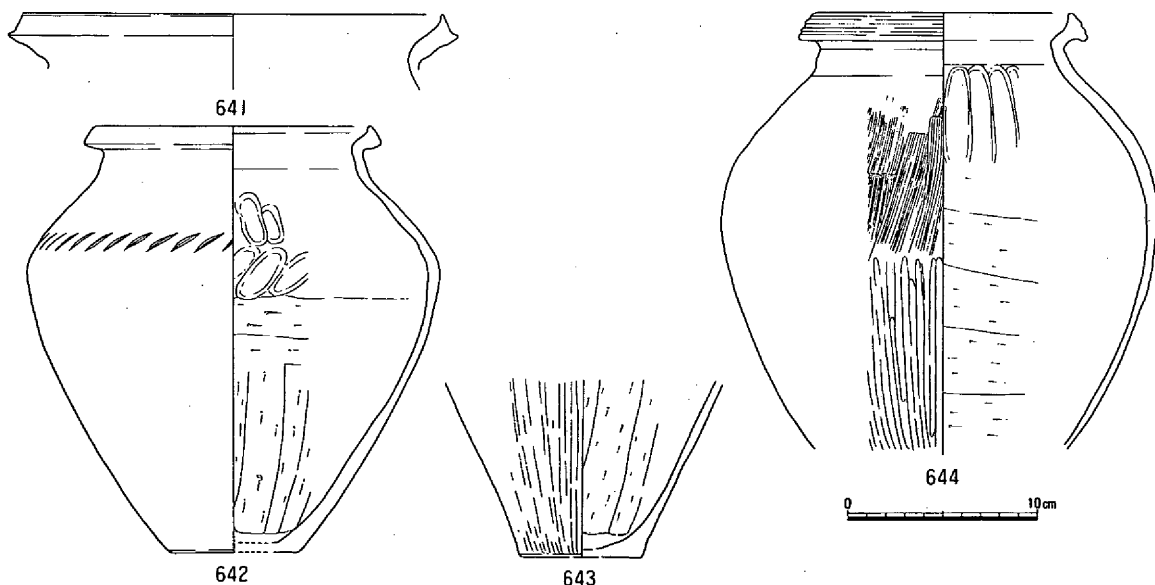
おもに上層を中心に多数の土器片が出土しており、641～644の甕類が復元実測可能となった。642・644のように胴部内面上部のヘラケズリの形状観察からみると、弥生時代後期前葉に比定してよいだろう。(岡田)

土壙60 (第182・183図、図版34-3)

竪穴住居18の北約5m、土壙15の南約4mに位置するいびつな円形を呈する土壙である。検出状態ではびっしりと土器片が出土し、土壙上面を覆いつくしていた。おそらく



- 1. 暗灰褐色粘質土 (炭・焼土を含む)
- 2. 灰褐色粘質土

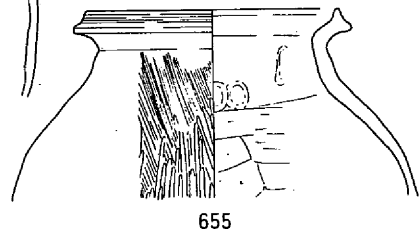
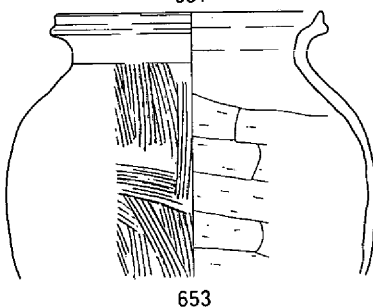
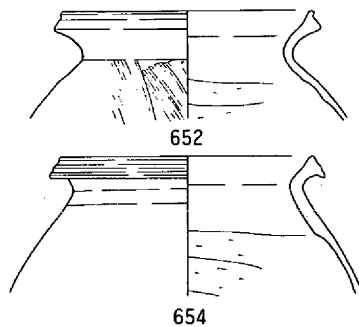
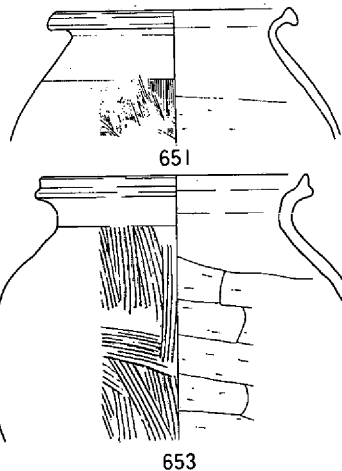
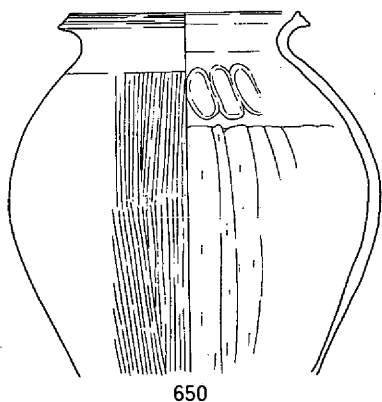
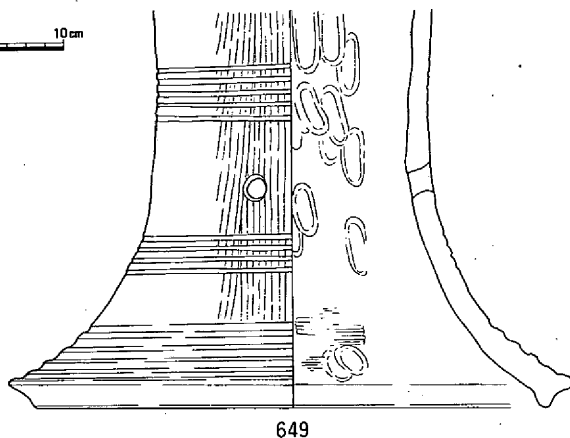
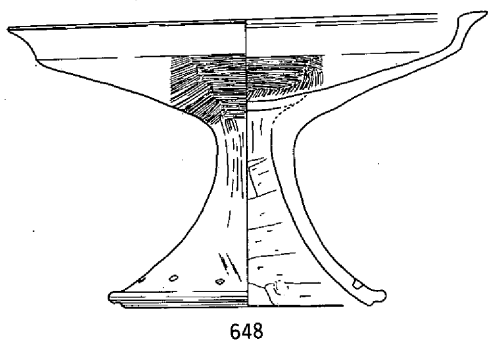
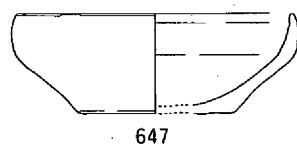
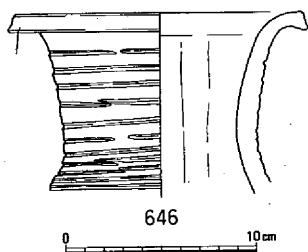
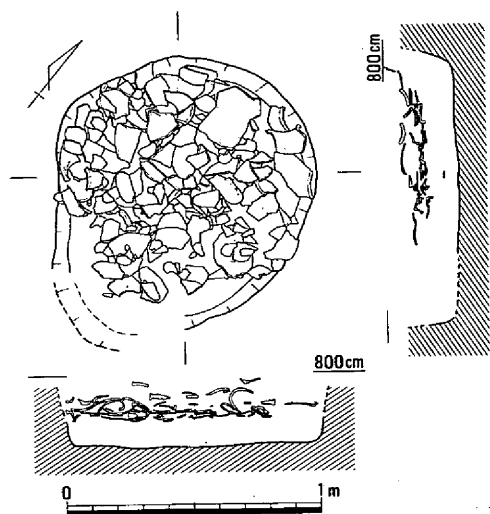


第181図 土壙59(1/30)・出土遺物(1/4)

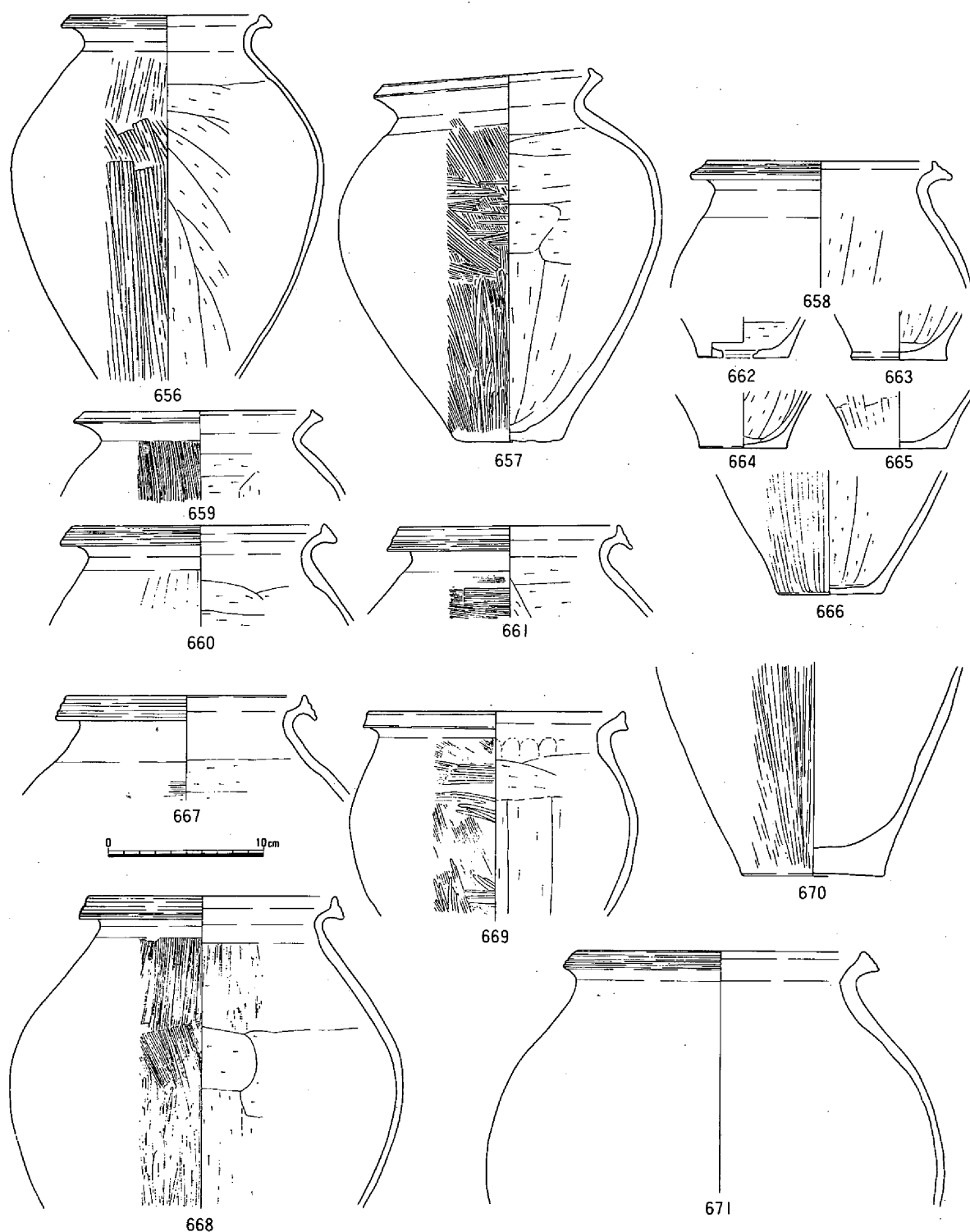
土器の廃棄穴として利用されたのであろう。

埋積土は、炭・焼土を含む灰褐色土で土器が出土するのは上層に限定される。

出土遺物のすべては土器で、このBU区ではもっとも出土量が豊富な遺構である。645は壺ではほぼ完形である。647はさほど多くはみられない浅い鉢である。647は高杯で内外面の成形調整の痕跡がよく観察される。648は器台で上半部を失う。筒部には横方向の沈線と円孔で飾られる。もっとも多い器種は650~671の甕である。口径はもっとも小さいもので12cm大きいもので20



第182図 土壙60(1/30)・出土遺物(1)(1/4)



第183図 土壙60出土遺物(2)(1/4)

cmを測り、長胴のタイプが大半を占める。また口唇部には凹線がめぐるものがほとんどである。これらの中には、口唇部の上下方の拡張が顕著で弥生時代中期後半の土器の面影を残すものもある。胴部の調整は、ハケメあるいはハケメ調整ののちヘラミガキを加えるものが存在する。

661・667のように横方向のハケメを残すものは少数である。胴部内面では下半をヘラケズリするのが一般的で頸部すぐ下の胴部上位では、ナデあるいは不調整、まれにハケメが施されるものがある。これらの土器は器種の比率は、当時日常的に使用される土器の比率に非常に近いのではないかと思わ

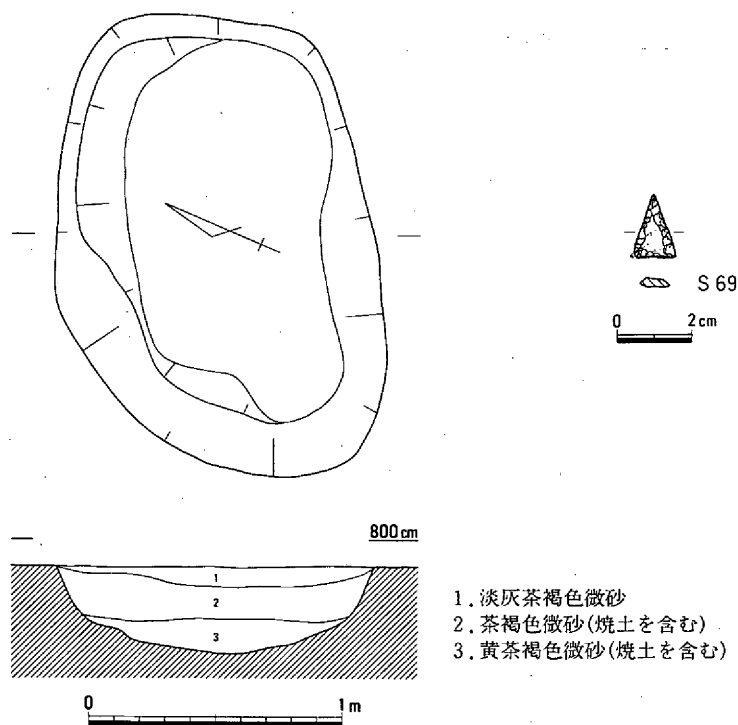
れる。したがって甕の多さは、おもに煮沸に使用され、その苛酷な使用頻度からすれば当然の量であるかもしれない。

これらの土器によって示される時期は、弥生時代後期前葉に比定され、当時の良好な一括の土器と考えてよいだろう。(岡田)

土壙61 (第184図)

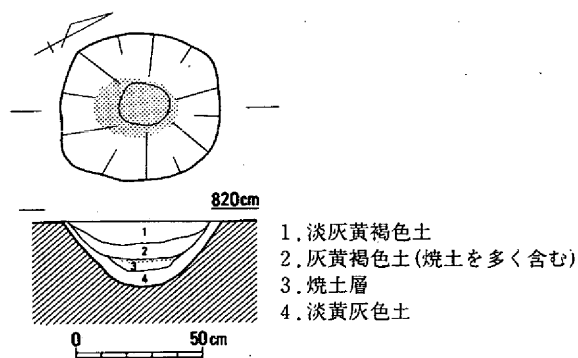
H18区の南端に位置する。河道の東岸に検出された。平面は不整長円形で、東西方向に長くなっている。規模は193cm×124cm、深さは34cmを測る。断面は皿状を呈し、床面はややくぼんでいる。下層の埋土は水平に堆積しており、焼土を含んでいる。

遺物としては、石鏃S69が埋土から出土している。これは平基式で、長さ17mm・幅11mmを測る。詳細な時期は不明だが、弥生後期と考えたい。(柴田)



- 1. 淡灰茶褐色微砂
- 2. 茶褐色微砂(焼土を含む)
- 3. 黄茶褐色微砂(焼土を含む)

第184図 土壙61(1/30)・出土遺物(1/2)



- 1. 淡灰黄褐色土
- 2. 灰黄褐色土(焼土を多く含む)
- 3. 焼土層
- 4. 淡黄灰色土

第185図 土壙62(1/30)・出土遺物(1/2)

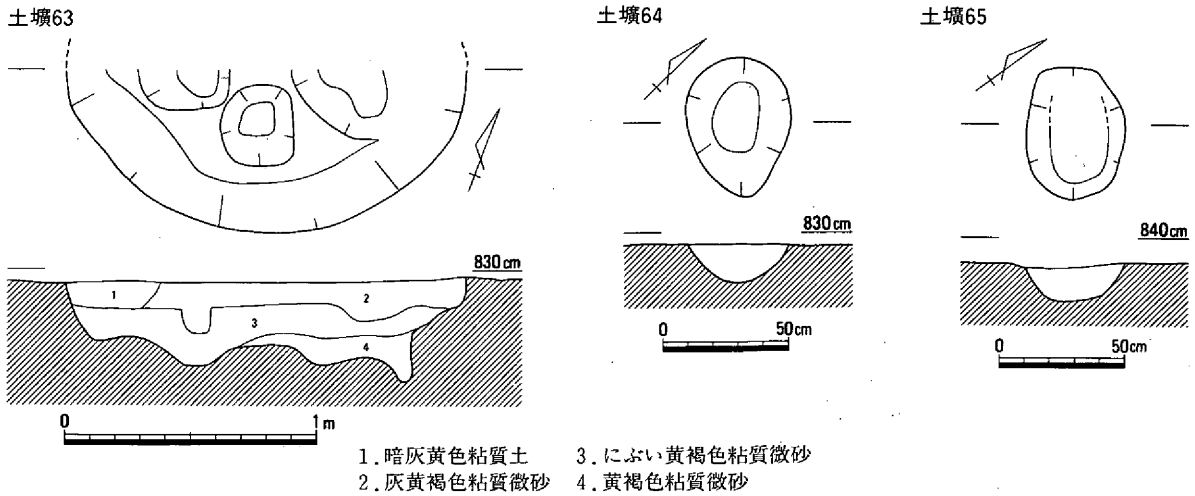
土壙62 (第185図、図版35-1)

竪穴住居14の北東約10m、溝29を切って検出された小土壙である。やや隅丸の方形を呈し、壙底に向かって摺り鉢状に急激にすぼむ。

第3層は焼土であるが、周壁も被熱の影響で赤変している。削平された竪穴住居の中央ピットの可能性もあるが、性格は不明である。

出土遺物は認められないが、埋積土の特徴などから弥生時代後期の遺構と考えてよいだろう。

(岡田)



第186図 土壙63～65(1/30)

土壙63 (第186図)

KO1区北端で南半を検出した平面円形と想定される土壙で、第3低位部肩口に近い。検出された最大径は160cmを測り、底面は深さ25cm程度の海拔高8.02m前後にあるが、さらに深さ8～15cm前後のくぼみが見られる。少量の土器片により、弥生時代中期後半～後期前半に比定される。(光永)

土壙64～68 (第186・187図)

いずれもKO1区北部の竪穴住居20周辺で検出されたもので、相互の距離は1～4.5mを測る。

土壙66が92×38×13cmの不整形を呈する他は平面形は楕円形を呈し、長径48～65cm程度で、深さも7～21cmと小規模である。埋土は濃淡の差はあるものの基本的に黄褐色粘質微砂で、炭・焼土粒等の混入も見られない。

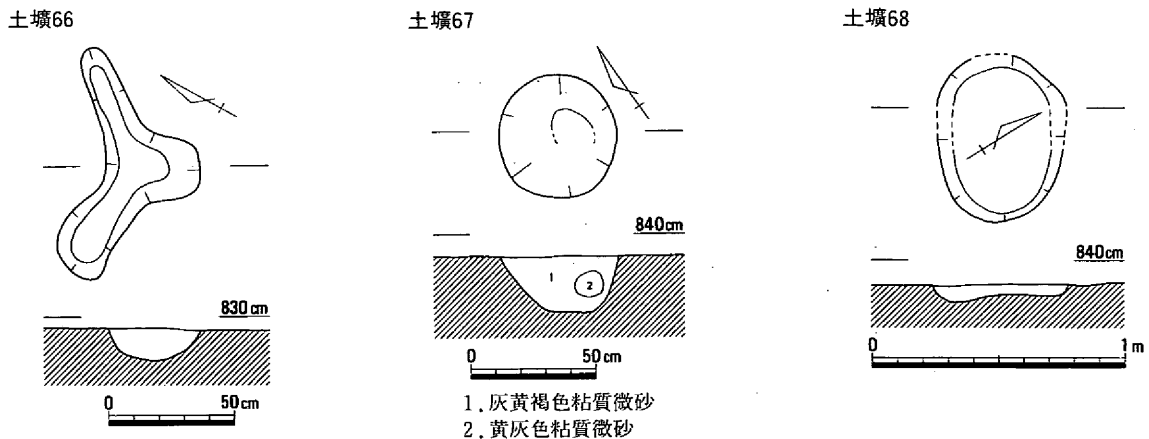
土壙64～66からは土器片が出土しており、弥生時代中期後半～後期前葉に比定される。(光永)

土壙69・70 (第188図)

KO1区東部において80cmの間隔で検出された。平面形は隅丸長形状を呈し、長軸長38～46cm、深さ9cm程度と小規模である。弥生土器小片が出土している。(光永)

土壙71 (第188図)

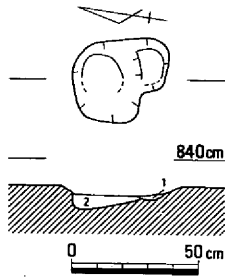
KO1区南東隅に位置し、建物23との距離約4.5mを測る。東端を側溝で失っているが、平面形は不整な隅丸長方形で、現存最大長242cm、最大幅95cm、深さ15cmの規模である。少量の弥生土器片が出土しており、弥生時代中期後半～後期前半に比定される。(光永)



第187図 土壙66～68(1/30)

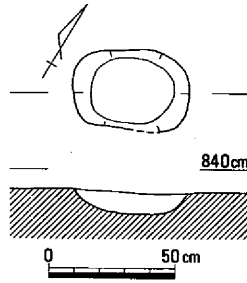
第3章 発掘調査の概要

土壙69

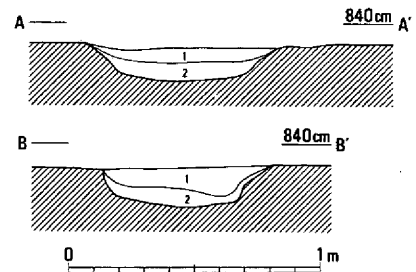
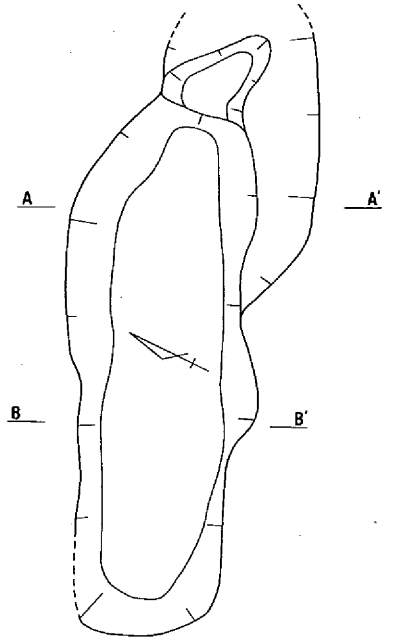


1. 暗灰黄色粘質微砂(焼土を含む)
2. 黄灰色粘質微砂(焼土を含む)

土壙70

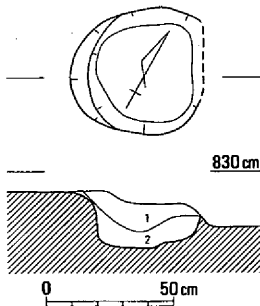


土壙71



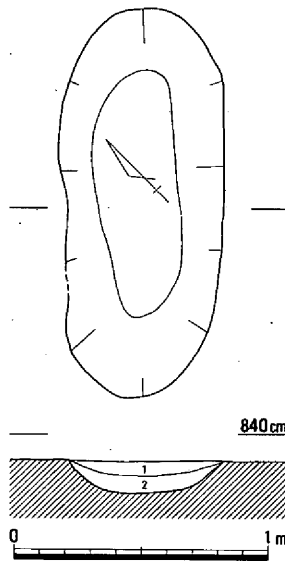
1. 暗灰黄色粘質微砂
2. 暗灰黄色粘質微砂

土壙72



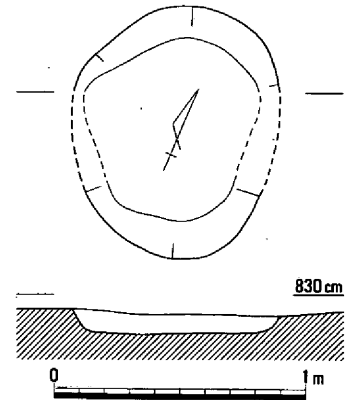
1. 黄灰色粘質土
2. 褐灰色粘質土

土壙73

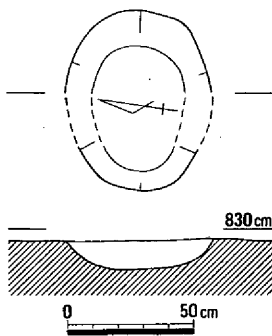


1. にふい黄褐色土
2. 灰黄褐色土(焼土粒を含む)

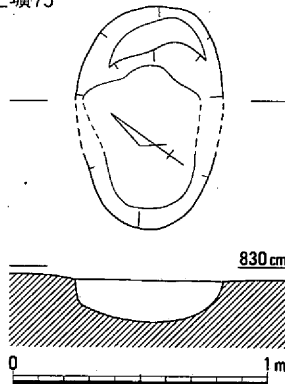
土壙76



土壙74



土壙75

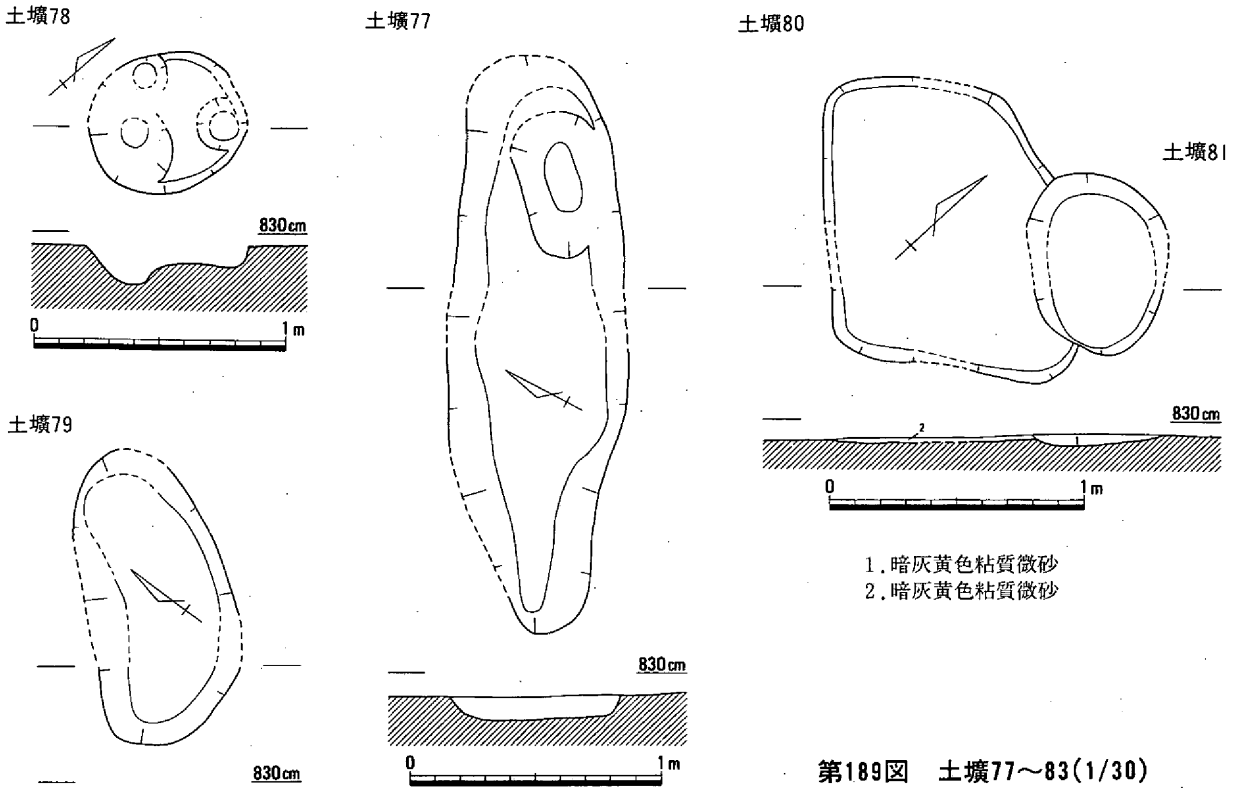


第188図 土壙69~76(1/30)

土壙72~76 (第188図)

KO 2区中央部で、第3低位部の東肩口で溝39の西側に位置し、土壙72・73の他はその南部に集中している。土壙72は平面隅丸方形に近く、1辺50cm前後、深さ20cmを測る。他の土壙は平面楕円形を呈し、長径は71~155cmと大小あるが、深さは8~15cmといずれも浅い。土壙72からは弥生土器小片が出土しているが、他には出土遺物がない。検出状況の共通性から、土壙72により、弥生時代中期後半~後期前半に属するものと考えたい。

(光永)



第189図 土壙77～83(1/30)

土壙77 (第189図)

KO 2区南部に集中する土壙の一つである。平面形は不整な長楕円形を呈し、229×71×10cmの規模で、主軸を低位部に直交させ、底面東端にくぼみをもつ。弥生土器小片が出土している。(光永)

土壙78 (第189図)

土壙77の東1.3mに位置し、平面形は径55cm程度の円形に復元される。底面に3か所のくぼみが見られ、遺物は出土していない。(光永)

土壙79 (第189図)

土壙77の南0.8mに位置する平面楕円形の土壙で、119×59×8cmの規模を示す。遺物は出土していない。(光永)

土壙80・81 (第189図)

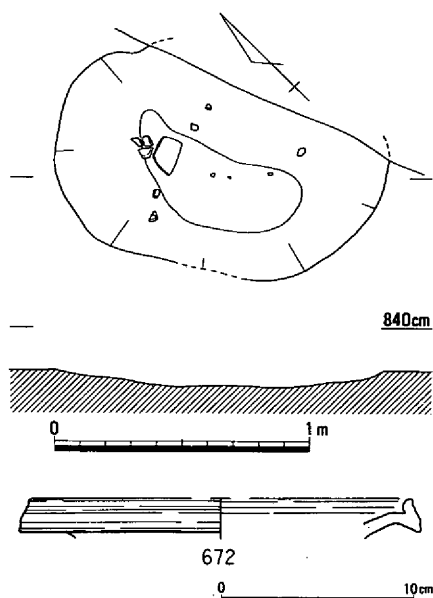
KO 2区南端に位置する。113×98cmの平面台形を呈する土壙80が、平面楕円形で73×54cmを測る土壙81に切られるもので、いずれも深さ2～5cmと浅い。弥生土器少量が出土している。(光永)

土壙82 (第189図)

KO 2区南部で、溝38の東2.5mに位置する。平面楕円形で、55×50×9cmを測る。遺物は出土していない。(光永)

土壙83 (第189図)

KO 2区の第3低位部で、古墳時代初頭の水田下から検出された。現存径52cm、深さ19cmを測り、遺物は出土していない。(光永)



第190図 土壙84(1/30)

・出土遺物(1/4)

土壙84 (第190図)

H O区の北西寄りに検出された楕円形の土壙である。長軸1.3m、短軸推定90cm、深さ約5cmを測る。暗茶褐色の埋土に比較的多くの焼土を含み、底からわずかに浮いた位置に10片ほどの土器を認めた。

土壙の性格は不明ながら、時期は甕672の特徴から後期前葉とみてよい。

(柳瀬)

土壙85 (第191図)

建物30の東側に隣接する位置に検出され、平面形態は65×120cmほどの不整楕円形を呈す。断面形は中央が深い漏斗形を呈す。土壙南西寄りの第5層中に炭粒・炭塊を多く含み、中央から北側の肩部にかけてのとくに第1層中に多量の焼土が認められた。土器の細片から後期とみられる。

(柳瀬)

土壙86 (第192図)

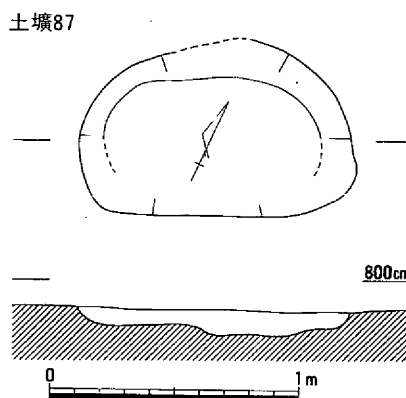
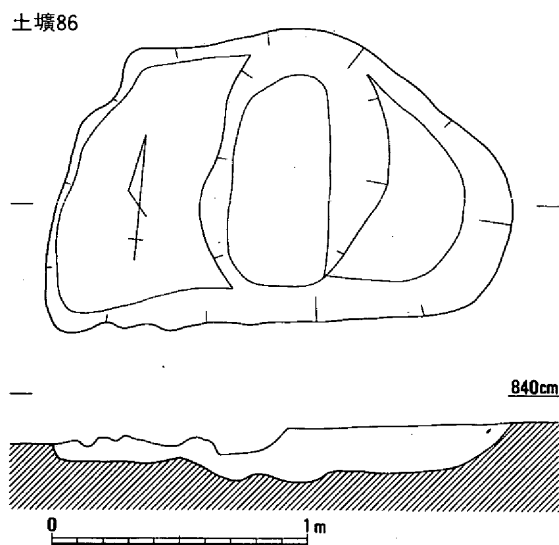
K区北端のほぼ中央に位置する不整楕円形の土壙である。長軸約1.8m、短軸1.2m弱、深さ10~20cmを測る。遺物は、黒褐色の埋土中から弥生後期の土器が数片出土しているにすぎない。

(柳瀬)

土壙87 (第192図)

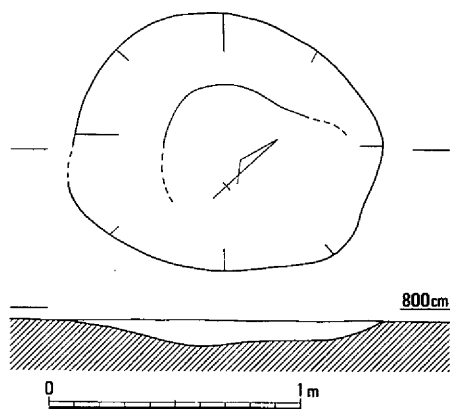
CH2区東部で溝50に近接する。平面形は楕円形を呈し、110×69×9cmの規模で、海拔7.8m前後の底面には若干の凹凸がある。土器片少量の出土により、弥生時代中~後期に比定される。

(光永)

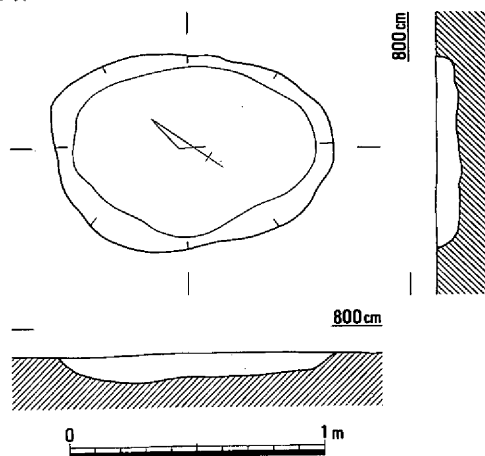


第192図 土壙86・87(1/30)

土壙88



土壙89



第193図 土壙88・89(1/30)

土壙88 (第193図)

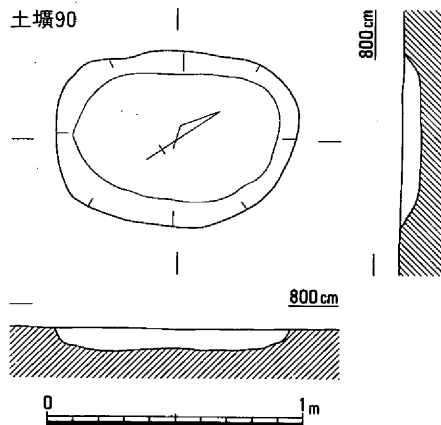
CH 2区東部で土壙87との距離1.7mに位置する。平面形は不整な楕円形で、119×101×9cmを測る。遺物は出土していないが、埋土から弥生時代中～後期と考えられる。(光永)

土壙89 (第193図)

CH 3区の北半に位置する土壙である。平面は南北に長い楕円形で、規模は111×78cmを測る。検出面からの深さは11cmである。床面はほぼ水平である。出土遺物は認められないが、埋土などから弥生時代の範疇におさまると思われる。(柴田)

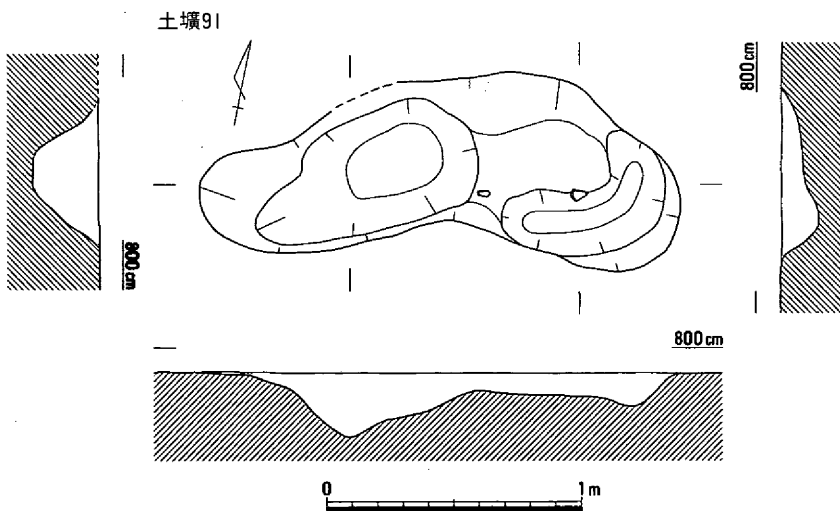
土壙90 (第194図)

CH 3区の北半に位置する土壙である。平面は南北に長い楕円形で、規模は96×68cmを測る。検出面からの深さは8cmである。床面はほぼ水平である。遺物は認められないが、埋土などから弥生時代の範疇におさまると思われる。(柴田)



土壙91 (第194図)

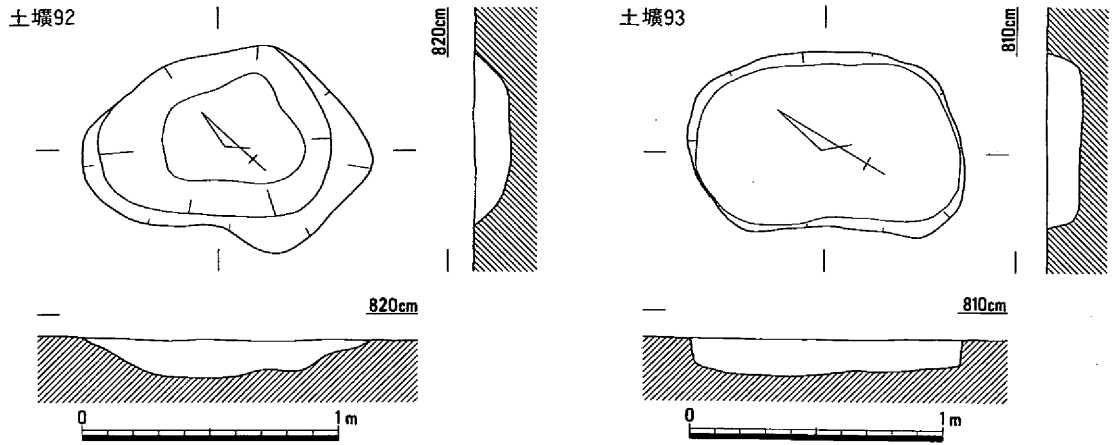
CH 3区の南半に位置する土壙である。平面は東西に長い不整な楕円形で、規模は189×57cmを測る。床面には凹凸があり、検出面からの深さは東端で13cm、西端で34cmを測る。縄文晩期の土器の小片が出土しているが、時期は不明である。(柴田)



土壙92 (第195図)

CH 3区の南半に位置する土壙である。平面は不整な楕円形で、規模は112×85cmを測る。検出面からの深さは16cmである。床面は若干凹凸がある。出土遺物は

第194図 土壙90・91(1/30)



第195図 土壙92・93(1/30)

認められないが、埋土などから弥生時代の範疇におさまると思われる。

(柴田)

土壙93 (第195図)

CH 3 区の南端に位置する土壙である。平面は南北に長い楕円形で、規模は111×70cmを測る。検出面からの深さは14cmである。床面はほぼ水平である。時期は弥生時代と思われる。

(柴田)

土壙94 (第196図)

CH 3 区の南端に位置する土壙である。平面は長方形と思われ、長さは130cm以上、幅は108cmを測る。検出面からの深さは11cmである。床面はほぼ水平である。出土遺物は認められないが、埋土などから弥生時代の範疇におさまると思われる。

(柴田)

土壙95 (第196図)

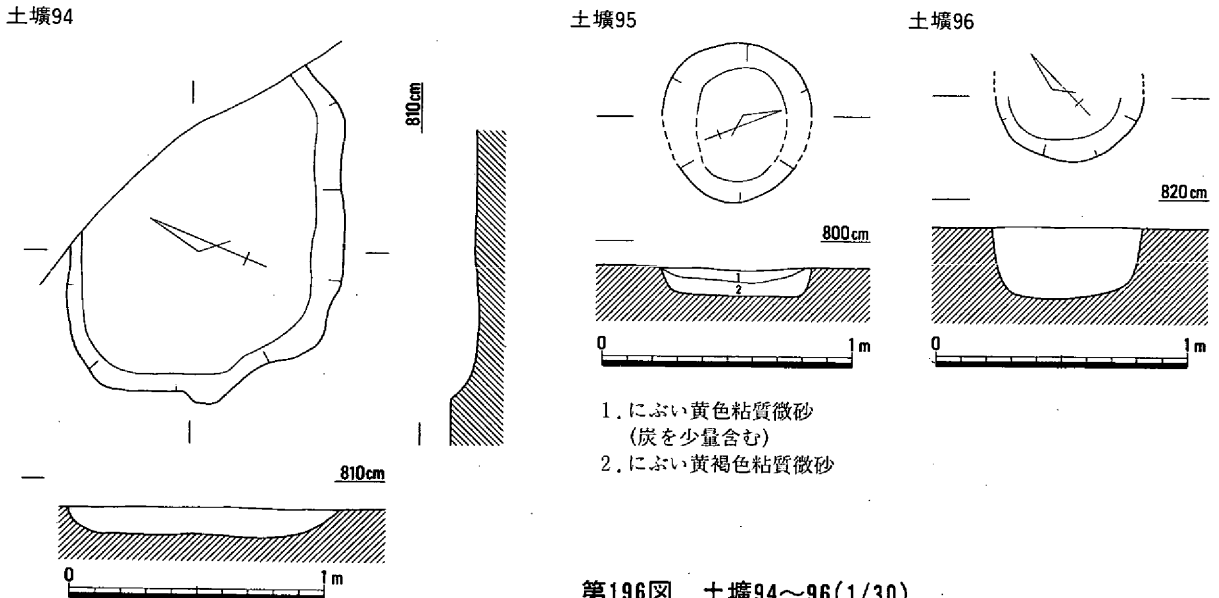
CH 4 区北西部で河道 4 の西岸に位置する。平面形は楕円形を呈し、65×59×11cmの規模である。土器少量の出土により、弥生時代中～後期に比定される。

(光永)

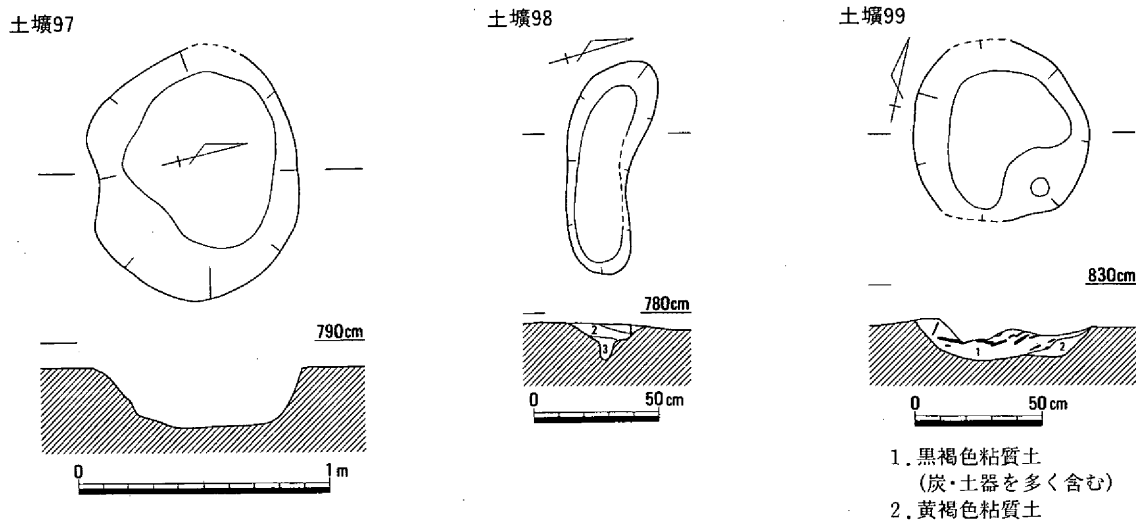
土壙96 (第196図)

CH 4 区中央部で溝57の東5.7mに位置する。東半を側溝で失っているが、現存径59cm、深さ27cmを測り、平面円形に復元される。土器片の出土により、弥生時代中～後期と考えられる。

(光永)



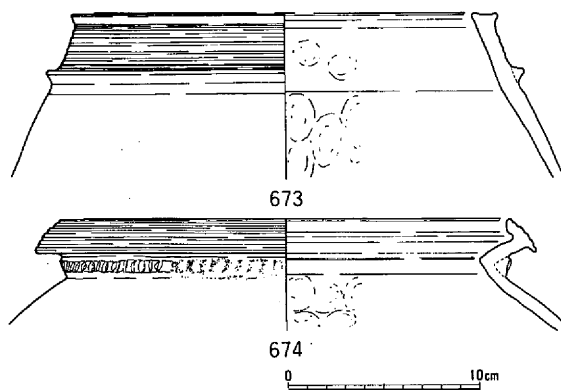
第196図 土壙94～96(1/30)



第197図 土壙97～99(1/30)・出土遺物(1/4)

土壙97 (第197図)

CH 5 区中央部に位置して、建物40を削っている。平面形は不整な楕円形を呈し、現存長径100cm、短径82cm、深さ22cmをそれぞれ測る。土器片少量の出土により、弥生時代中期後半～後期前半に比定される。
(光永)



土壙98 (第197図)

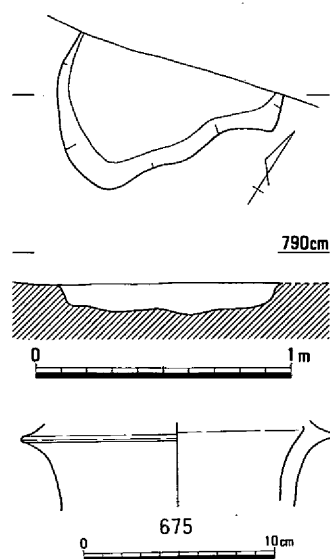
CH 5 区中央部に位置し、建物40との距離6.7mを測る。平面形は不整な楕円形を呈し、85×30×7cmの規模で、底面に凹凸がみられる。遺物は出土していないが、埋土から弥生時代中～後期に比定される。
(光永)

土壙99 (第197図)

HW 1 区の建物42の南西に位置する。直径70cm前後の不整円形で、検出面からの深さ15cm、底面の海拔高8.0mを測る。埋土には炭が多く混じっていた。土器はいずれも小片で、図化したのは2点のみである。673は口縁端部に面をつくり、外方に若干拡張している。また、口縁から3cm下がったところに断面三角の突帯を貼り付け、口縁端部と突帯間に凹線をめぐらしている。無頸の壺であろうか。時期は弥生時代中期後葉と考えられる。
(久保)

土壙100 (第198図)

HW 2 区の東半部において検出した。北端部が現代の暗渠によって切られていたため全体の形状は明らかではないが、120×80cmぐらいの不定形な長楕円形を呈していたのではないかと考えられる。断面形は皿形で、底面には凹凸が認められた。埋土は炭・焼土粒を含む暗褐色灰色粘質土であった。



遺物は少量の土器片が出土しており、時期は弥生時代後期前葉と考えられる。
(平井)

第198図 土壙100(1/30)・出土遺物(1/4)

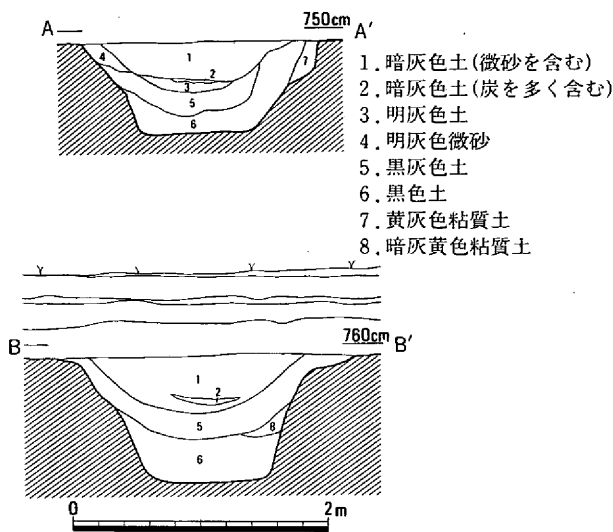
(7) 溝

溝3 (第71図)

古墳時代の水田検出面より下位の面で検出された。東西に帯状に焼土や土器の散布が認められ、若干土色も変化していたが、明確な掘り方は確認できなかった。溝の痕跡と考えられる。時期は散布していた土器や検出面の関係から、弥生時代後期の可能性が高い。(久保)

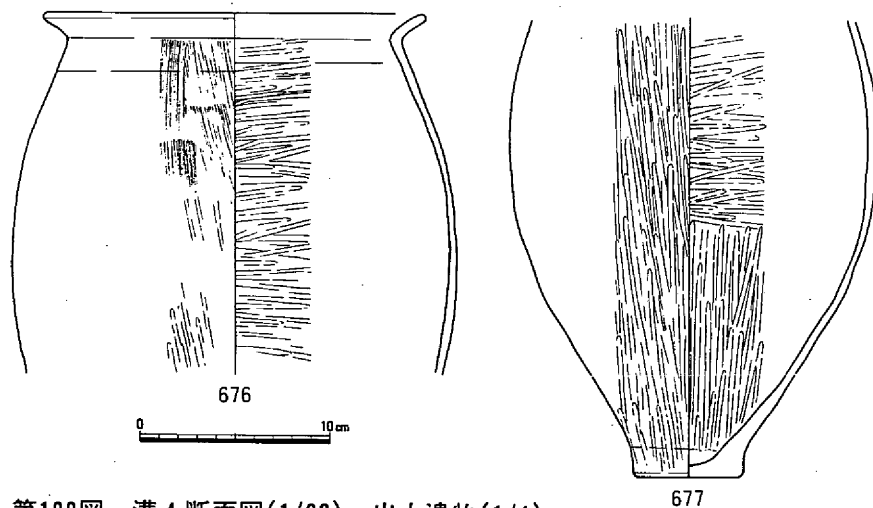
溝4 (第199図、図版35-2・3)

PU調査区の2区と3区の境で検出された。本調査区は南から北に微高地が下がる、いわゆる微高地の端部に位置する地形であることから、本遺構も微高地縁辺に沿うかたちで掘削された溝と考えられる。溝は東西方向に延びるが、土層断面図にみられるように上部が削平されている。検出面での溝



幅は190~240cm、深さは66~95cmを測り、やや西側で底面が一段と低くはなるが、溝の流走方向は不明であった。なお、底面はほぼ平坦で、断面は逆台形を呈する溝であった。埋土はA断面では7層、B断面では5層に区別できる。いずれの地点においても、上層では炭層、下層においても炭を含む黒灰色および黒色粘質土が堆積していた。

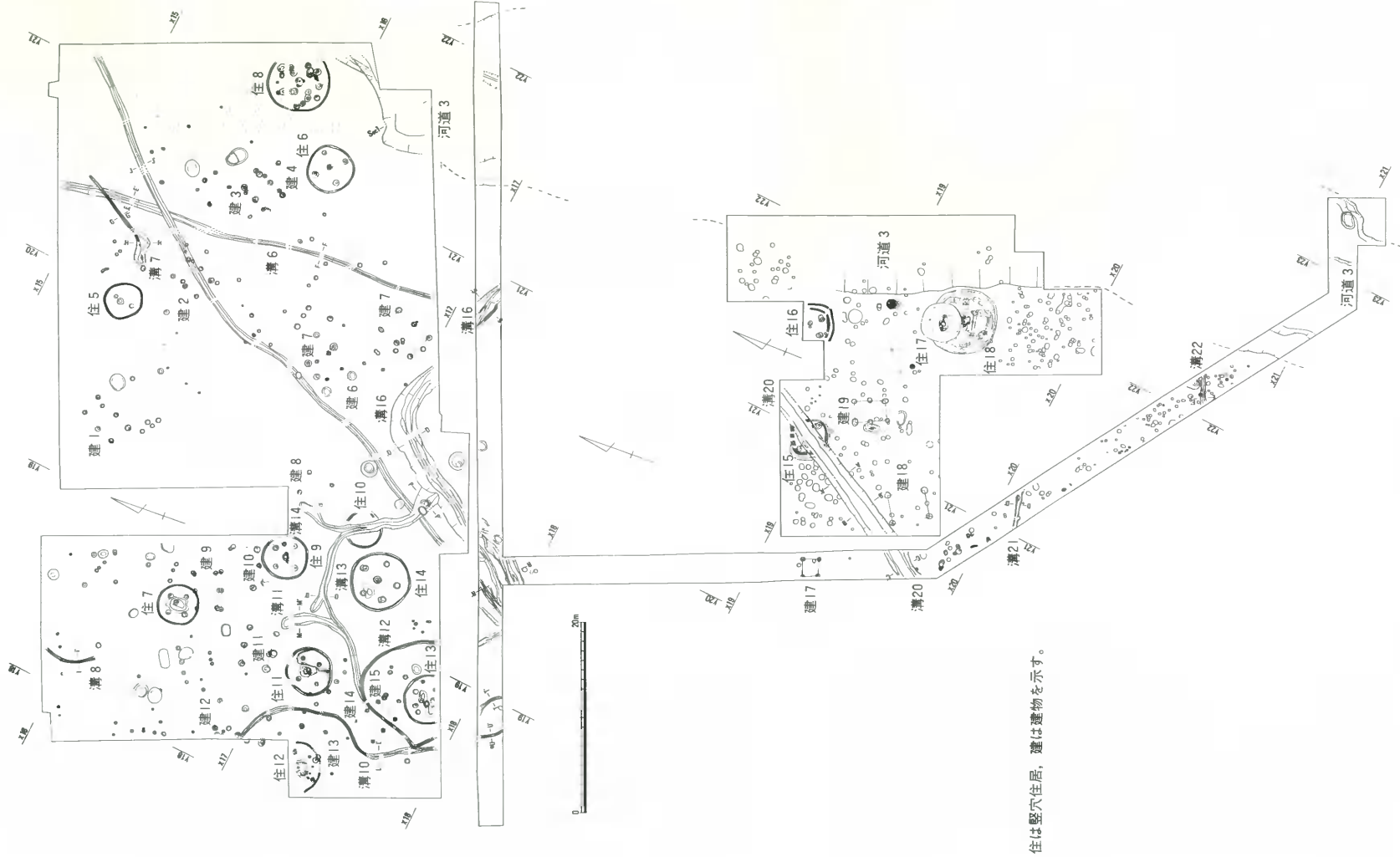
遺物は溝の西端部の上層で出土していた。676・677は甕である。器形、調整などからみて、弥生時代中期中葉のものと考えられる。したがってこの溝は弥生時代中期中葉頃にはすでに機能していなかったと考えられる。(松本)



第199図 溝4断面図(1/60)・出土遺物(1/4)

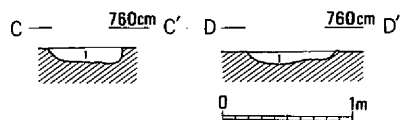
溝5 (第201図、図版36-2)

PU調査区の2、3区で検出された。溝4を切って作られた遺構である。溝はT字状に検出されており、規模は東西の溝幅が70~120cm、深さ約110cm、北方向に延びる溝幅が60~90cm、深さ10~12cmを測る。底面のレベル高は東西がほぼ同じであるが、北方向が若干高いことから、北から南に流走し、

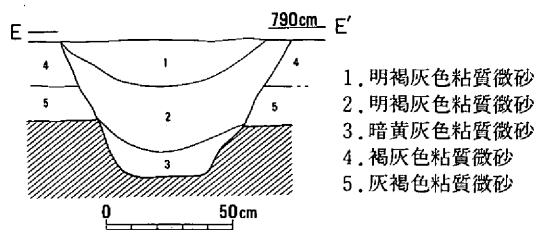


第200図 弥生時代後期遺構配置図(TA・H18・H19・BU区; 1/500)

東と西に分流したことが想定される溝である。断面は浅いU字状を呈し、埋土は灰オリーブ色の粘質土である。遺物の出土はない。溝の南端は消失していた。時期は溝4との切り合い関係から、弥生時代後期のものと考えられる。(松本)



第201図 溝5断面図(1/60)



- 1. 明褐灰色粘質微砂
- 2. 明褐灰色粘質微砂
- 3. 暗黄灰色粘質微砂
- 4. 褐灰色粘質微砂
- 5. 灰褐色粘質微砂

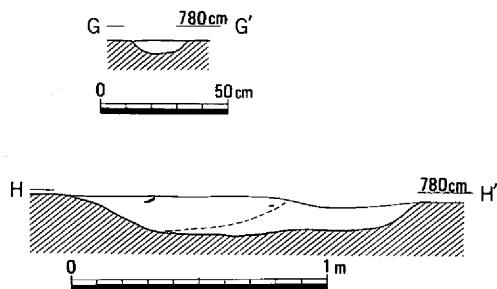
第202図 溝6断面図(1/30)

溝6 (第202図)

TA区の東半中央付近を南北方向にほぼ直線的に延びる溝である。幅15~28cm、深さ55cm、検出全長は41mであった。溝底の海拔高度を測ると、北端では730cmであったが、南端では741cmといくらか高くなっていたことから、南から北への流れが推測される。検出は困難で、地山直上で確認した。第202図の左は調査区北壁での断面である。溝7より古いが、弥生時代後期前葉であろう。(岡本)

溝7 (第203図)

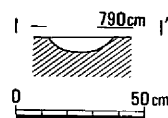
TA区の東半北部、竪穴住居5の東で検出された。長径320cm、短径110cm、深さ16cmの不整形な土壙と、それから北東に8mほど延びた幅20~30cmの溝からなる。土壙部西端と竪穴住居5との距離は2mであった。溝は東へ向かって浅くなっていて、溝6を過ぎたあたりでなくなっていた。第203図の上は溝部、下は土壙部の断面である。いずれの埋土にも土器片や焼土が含まれていた。溝6よりは新しく、弥生時代後期前半か。(岡本)



第203図 溝7断面図(1/30)

溝8 (第204図)

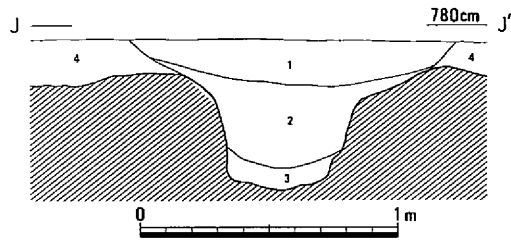
TA区の西半北端で検出された。弧状を描く溝で、調査区の北端から南へ6mあまり延びて確認できなくなった。溝の幅が23~32cm、深さは6cmと浅く、断面形は皿状を呈していた。TA区の南西部では弧状の溝が竪穴住居を取り巻くような形で検出されているが、溝8については竪穴住居は伴わなかった。年代は弥生時代後期前半と考えたい。(岡本)



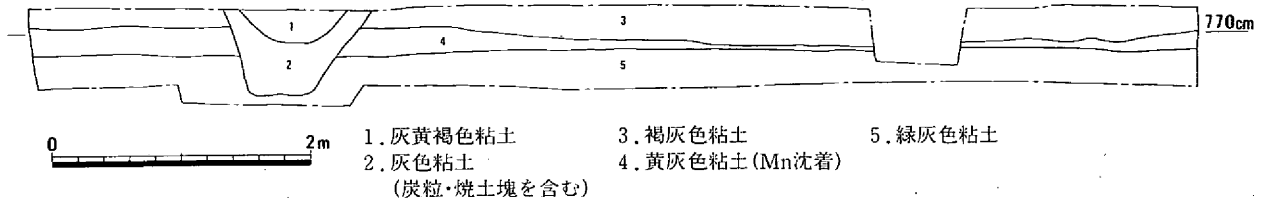
第204図 溝8断面図(1/30)

溝9 (第205・206図)

TA区の東半を北東隅から南西隅へ、わずかに屈曲しながらも長々と続き、H19区でも検出された。検出長は75mを超える。TA区では幅128cm、深さ77cmを測る。断面形は、上半は逆「ハ」の字状に開き、下半は箱形に近い。H19区では上半がさらに広がり、溝16に破壊された検出部分でも幅170cmを測った。第205図の上はTA区北東部における断面、下はTA区東半中央部に直交に設けたトレンチの断面で、第5層が基盤層にあたる。埋土の第1層には炭粒や焼土が含まれていた。溝底の海拔高度はT

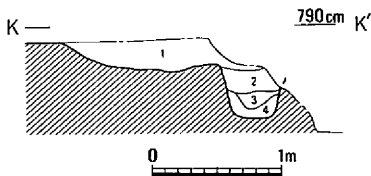


- 1. 褐灰色粘質土(炭粒・焼土を含む)
- 2. 灰色粘質土(炭を含む、上部にMn沈着)
- 3. 青灰色粘質土(砂質土混じる)
- 4. 褐灰色粘質土(炭・焼土を含む)

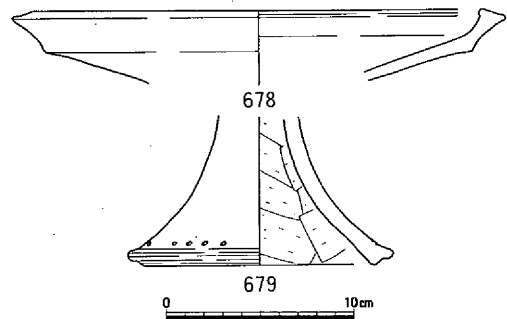


- 1. 灰黄褐色粘土
- 2. 灰色粘土
(炭粒・焼土塊を含む)
- 3. 褐灰色粘土
- 4. 黄灰色粘土(Mn沈着)
- 5. 緑灰色粘土

第205図 溝9断面図(TA区; 1/30・1/60)



- 1. 灰褐色砂質微砂
(炭・土器を含む)
- 2. 暗灰褐色粘質微砂
(炭を含む)
- 3. 灰黄褐色粘質微砂
- 4. 灰褐色粘質微砂

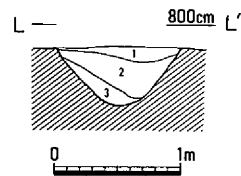


第206図 溝9断面図(H19区; 1/30)・出土遺物(1/4)

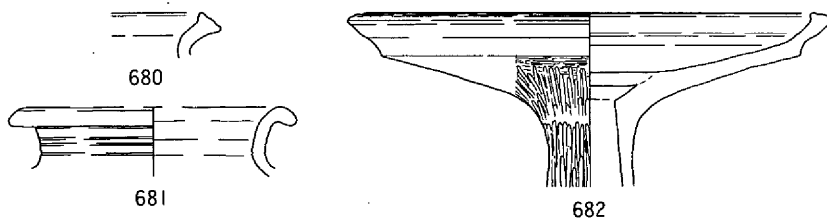
A区の北東隅で714cm、同区南端では717cm、H19区でも716cmと差が認められず、流れの方向は確定できない。出土土器から弥生時代後期前葉と考えるが、溝15・16よりは古い。(岡本)

溝10 (第207図)

TA区の南西隅にあって竖穴住居12を取り巻くように環状を描き、南東部で屈曲して竖穴住居13の西側へ至る。溝12との合流点から南では2筋に枝分かれし、H19区では3mの距離を隔てていた。溝の幅は20~50cmで、溝12との合流部では70cmと広がっていた。深さは5~22cmであった。溝底の海拔高を測ると、竖穴住居12の付近では775cm、溝12との合流点では762cm、H19区では782cmと779cmとなり、大きな差はみられないものの、溝12との合流点がもっとも低い。ただ、H19区で

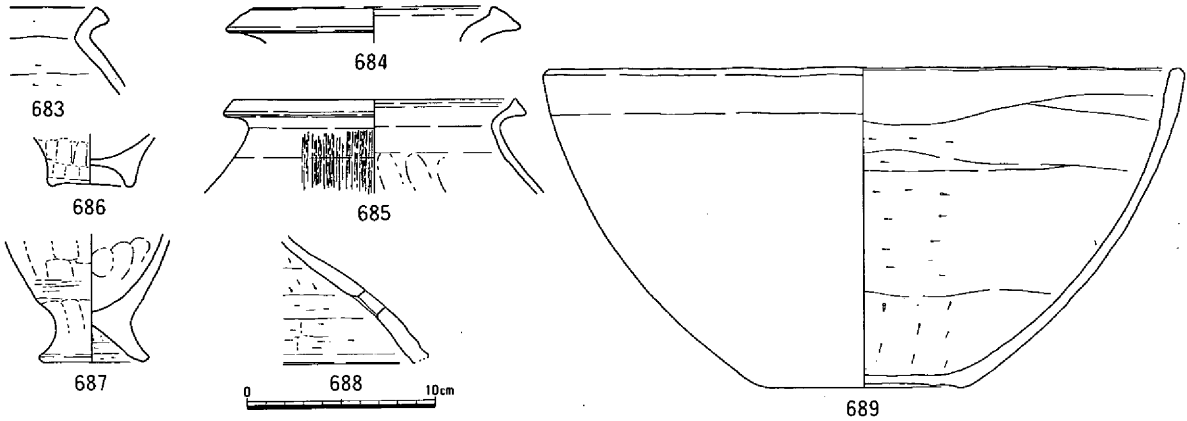
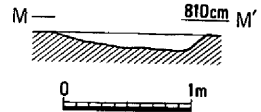


- 1. 褐灰色粘性砂質土
(炭・焼土を多く含む)
- 2. 黒褐色粘質土
- 3. 褐灰色粘質土



第207図 溝10断面図(1/60)・出土遺物(1/4)

は南へ下る状況がみられた。埋土は合流点付近では複数の層が認められたが、それ以外では1層であった。埋土の上部には炭粒や焼土が含まれていた。弥生時代後期前葉の土器が出土し、竪穴住居の年代からしても同期の溝と判断される。(岡本)



第208図 溝11断面図(1/60)・出土遺物(1/4)

溝11 (第208図、図版36-3)

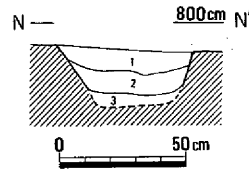
T A区の西半南部で竪穴住居11を取り巻き、西端は溝12と合流していた。また、東隣の溝13とも溝で連絡していた。幅が55~128cm、深さは15cm前後だった。溝底は南へ下がるが、北端でも9cmの深さがあり、さらに北へ延びていた可能性は低い。溝13と繋ぐ溝は10cmほど深かった。埋土には炭粒や焼土・土器片が含まれていた。年代は弥生時代後期前葉である。(岡本)

溝12 (第209図)

T A区の西半南端で竪穴住居13の周囲を巡り、溝11と合流して、さらに溝10と繋がっていた。南東端はT A区外で屈曲し、H19区では南東へ直線的に延びていた。幅が22~54cm、深さは10~20cmであった。底の海拔高度では溝11との合流点が777cmでもっとも高く、H19区の南端では761cmを測り、南東へ排水したとみられる。年代は弥生時代後期前葉である。(岡本)

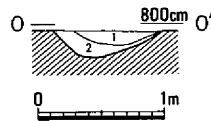
溝13 (第210図)

T A区の西半南部、竪穴住居9と竪穴住居14の間に位置していた。主流は溝11から繋がって竪穴住居14を巡るが、竪穴住居9も意識していたようで、北西方向に枝分かれした部分があった。また、二軒の竪穴住居の中間部分では、わずかに竪穴住居9に平行して湾曲させていた。南東端は溝14と合流して、より広い溝

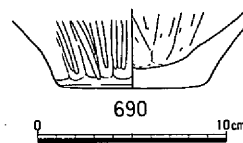


- 1. 暗灰褐色粘質土
- 2. 青灰黄色粘質土
- 3. 黄灰色粘質土

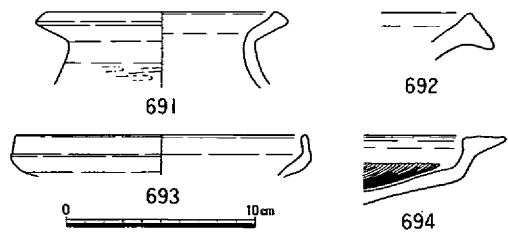
第209図 溝12断面図(1/60)



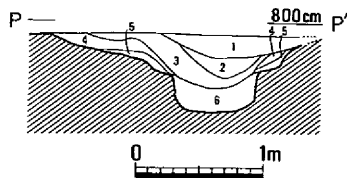
- 1. 褐灰色粘性砂質土 (焼土・炭を含む)
- 2. 褐灰色粘性砂質土



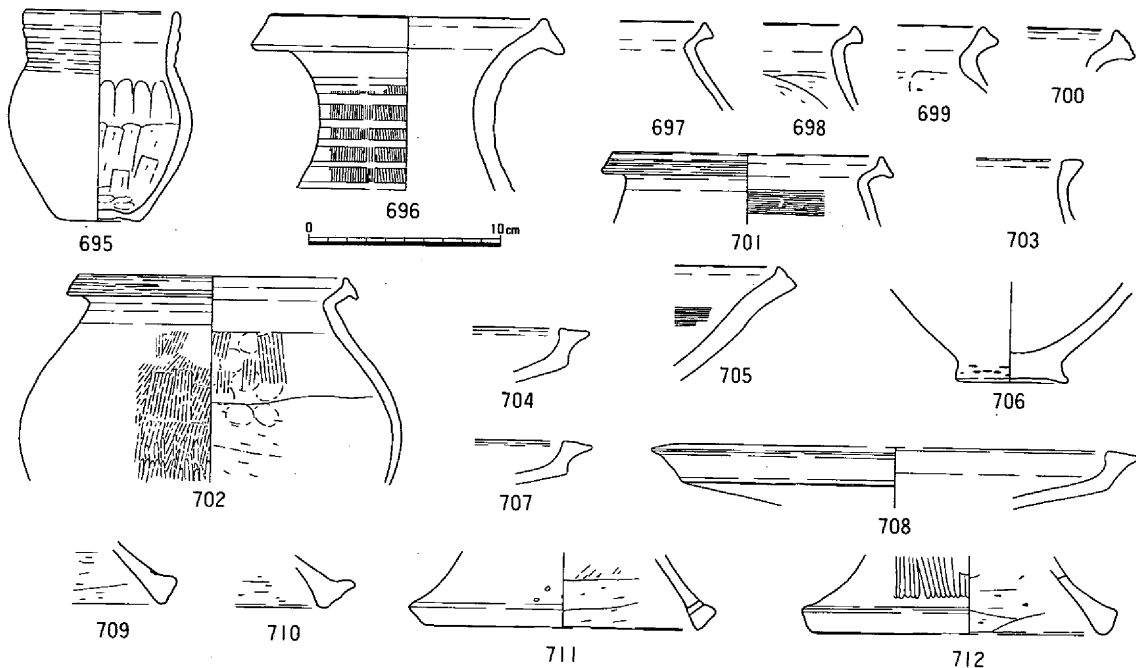
第210図 溝13断面図(1/60)・出土遺物(1/4)



第211図 溝14出土遺物(1/4)



- | | |
|---------------------------------|-----------|
| 1. 暗灰黄色粘性砂質土
(焼土・炭あり) | 5. 黒褐色粘質土 |
| 2. 灰色粘質土微砂
(焼土・炭あり) | 6. 暗褐色粘質土 |
| 3. 灰オリーブ色粘質微砂
(明黄褐色ブロック土を含む) | |
| 4. 灰黄褐色粘性砂質土 | |



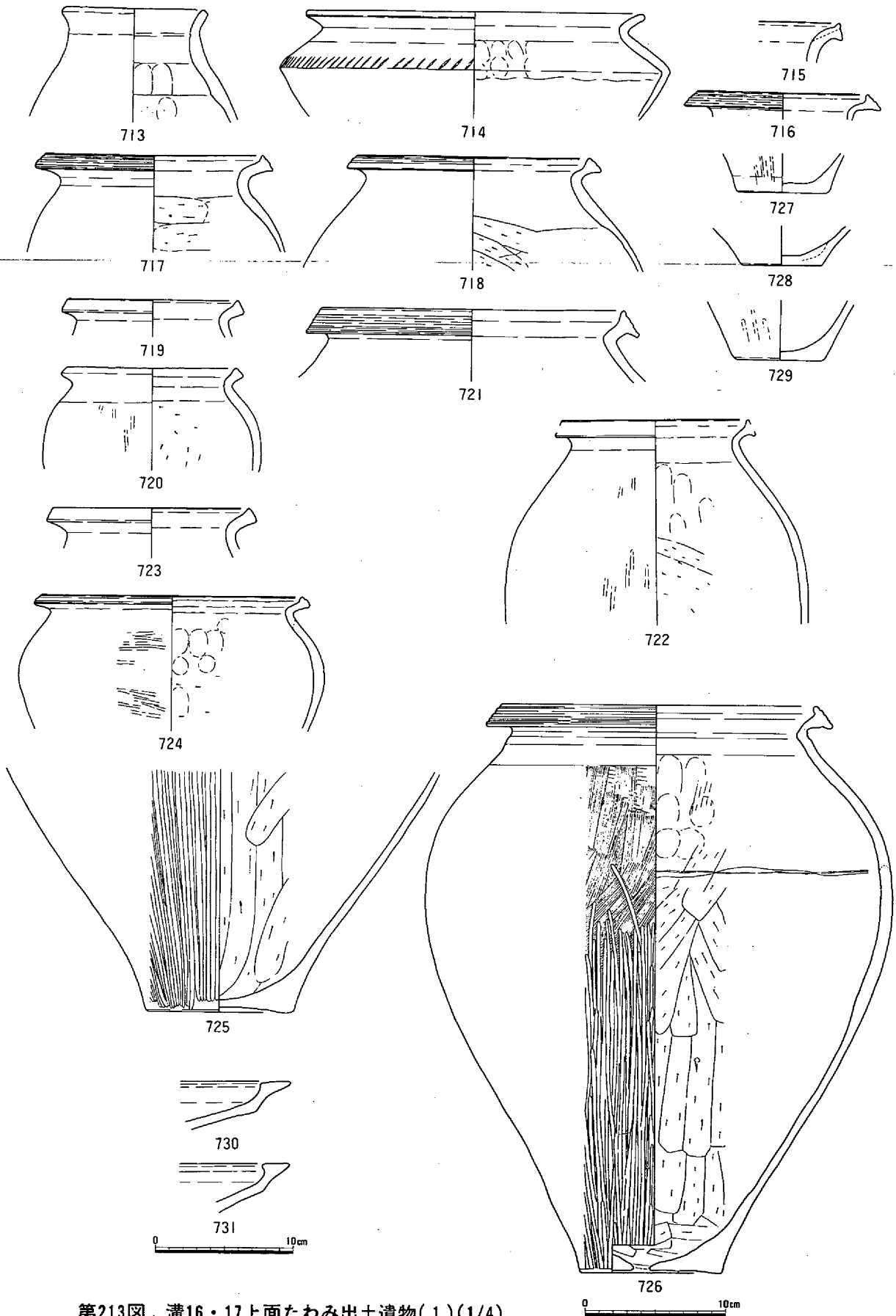
第212図 溝15断面図(1/60)・出土遺物(1/4)

15となっていた。幅が50～84cm、深さは5～21cmであった。北西の先端がもっとも浅く、南東へ向かって低くなっていた。埋土上部には焼土や炭粒が含まれていた。弥生時代後期前葉である。(岡本) 溝14 (第211図)

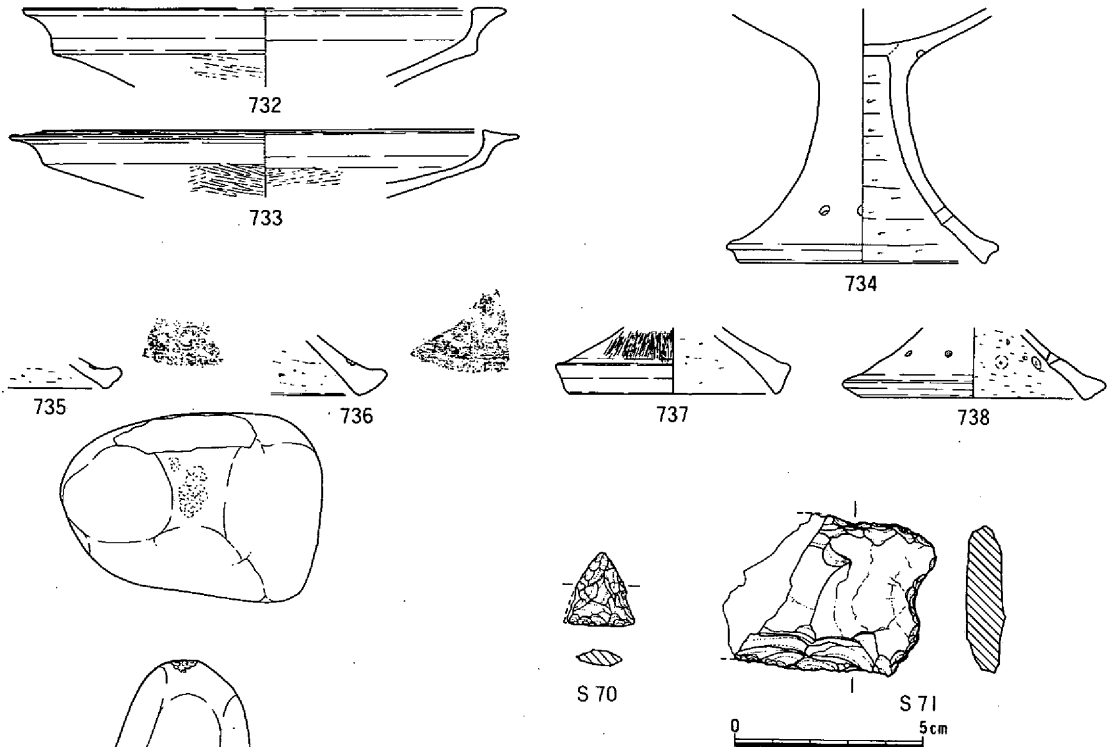
TA区の西半南東部にあった。溝13とともに竖穴住居9を囲むようで、北端部分は住居と2.5m離れて平行し、南東へ曲がって溝13と合流して溝15へ続いていた。溝底の高度は南へ低くなり、南東方向へ流れていたと考えられる。溝の幅が43～95cm、深さは20cmであった。北端は深さが1.5cmしかなく、さらに北へ延びていた可能性もある。埋土には炭粒や焼土が含まれていた。溝の年代は弥生時代後期前葉である。掲載した土器のうち693は古墳時代初頭のものと考えるが、溝14と関連する同時期の遺構から出土した遺物はいずれも弥生時代後期前葉のものであるため混入と考えたい。(岡本)

溝15 (第212図)

溝13・14の合流点から溝16に注ぐ9m分を指す。この間は幅が95～140cmあり、溝16との合流部では235cmと開いていた。深さは20～26cmだった。溝底の海拔高度を測ると、溝13・14の合流点付近では763cmであったのが、溝16との合流部分では753cmとなり、南へ流れていたことが推測される。掲載した断面図は溝16との合流部から80cm上流にあたる。ここでは溝底に長径70cmの穴があり、そこに堆積していた第6層の土が下流の溝底にも堆積し、溝16の底まで続いて堆積していたことが確認された。溝15と溝16が一連のものとして同時に機能していたことは確実である。埋土の第1・2層には焼土と炭粒が含まれていた。695の壺はほぼ完形である。弥生時代後期前葉の溝と考える。(岡本)



第213図 溝16・17上面たわみ出土遺物(1)(1/4)

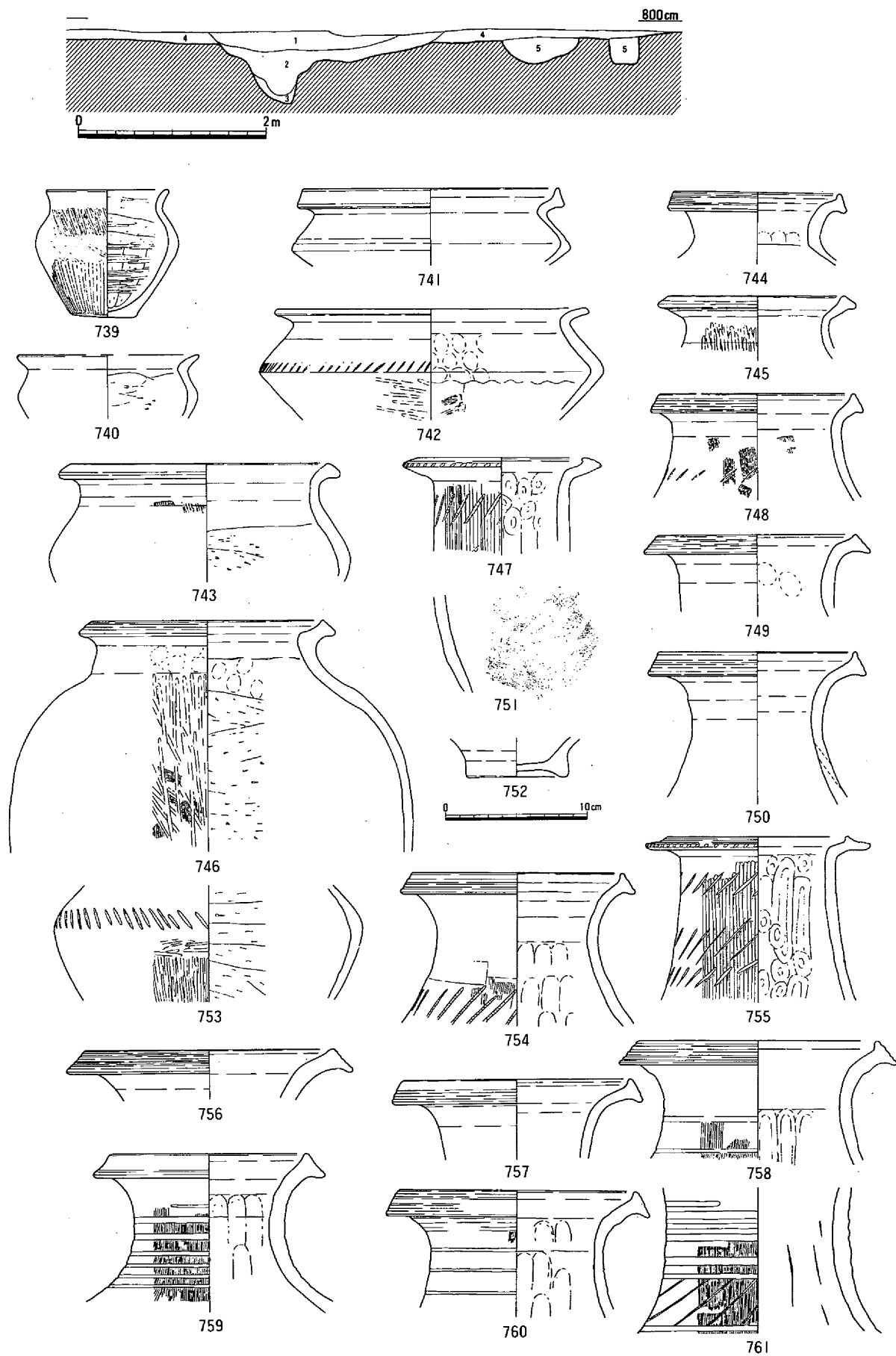


第214図 溝16・17上面たわみ出土遺物(2)(1/4・1/2)

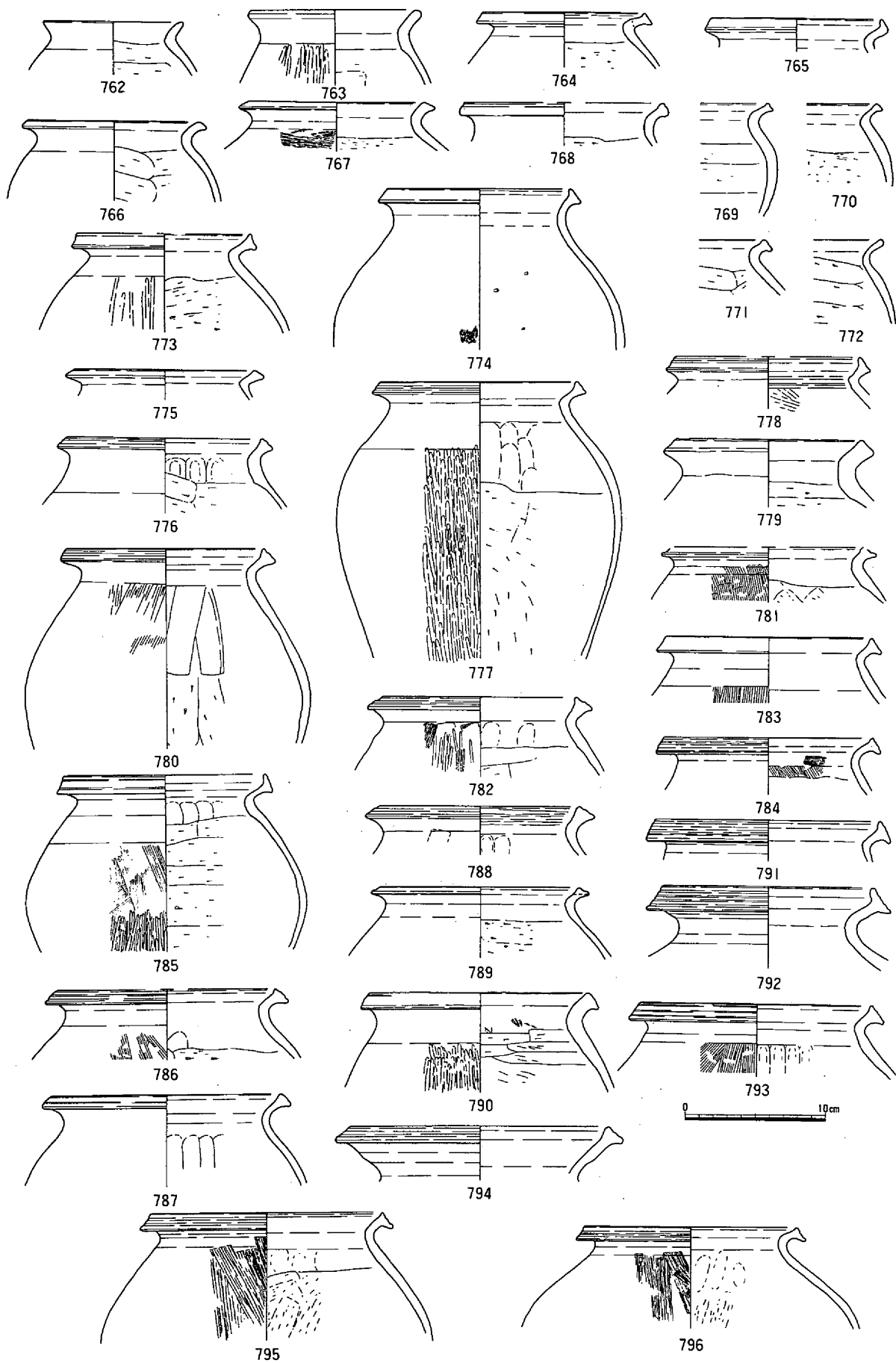
溝16 (第213~223図、図版37-2・3)

〈T A区〉

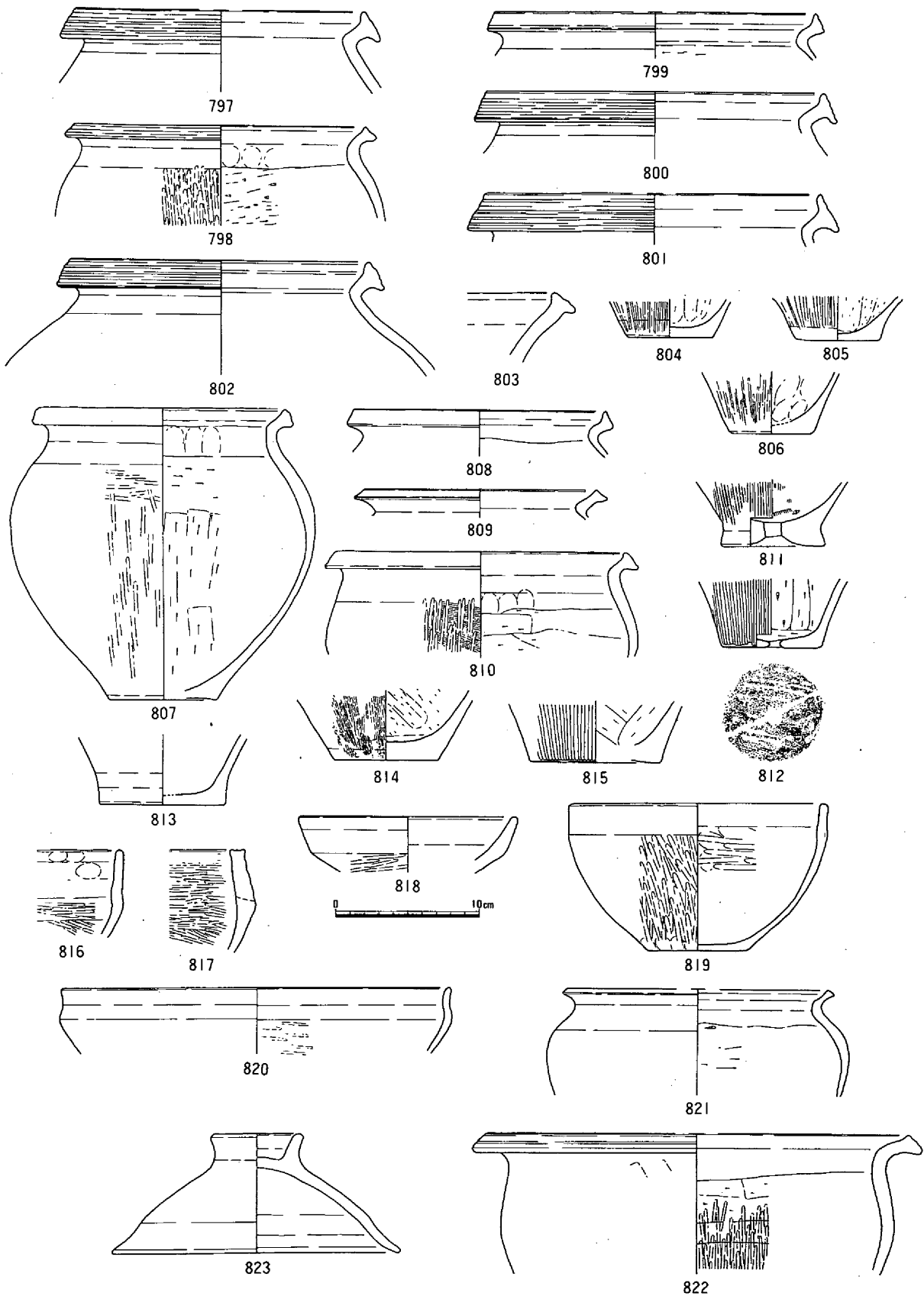
T A区の南端中央部で検出した。「L」字状に屈曲した溝で、南のH19区においても連続して発掘された。溝は段構造になっていて、上部は幅が広く壁の傾斜の緩やかな落ち込み状を呈し、その中央から南に片寄って二段目の溝本体が掘られていた。溝本体の壁は急傾斜で、断面形は「U」字状に近い。検出面での幅は210~280cm、溝本体では80~140cmを測った。溝の深さは検出面からは72~78cm、溝本体では45~55cmであった。溝底の海拔高度を測ると、東端で706cm、検出部の中央付近では699cm、西端で707cmとなり、大きな差は認められなかった。またH19区でも、東端で713cm、西端でも710cmを測り、むしろT A区の中央付近がもっとも低くなっていた。このため溝の流水方向は明確にできない。溝内の埋土は3層に分けられた。第3層は溝が機能していた時の堆積とみられ、第2層によって溝は埋没していた。第2層は溝上部の落ち込み部分から溝底近くまで堆積し、土器片を多く含むとともに炭粒が顕著に認められた。第1層においても多量の遺物が包含され、溝が埋没した後のくぼみに次々と投棄されたものと考えられる。溝15との合流部分での土層観察から、溝15から溝16にかけて土層の連続が確認され、二つの溝は同時に存在して機能し、溝10から



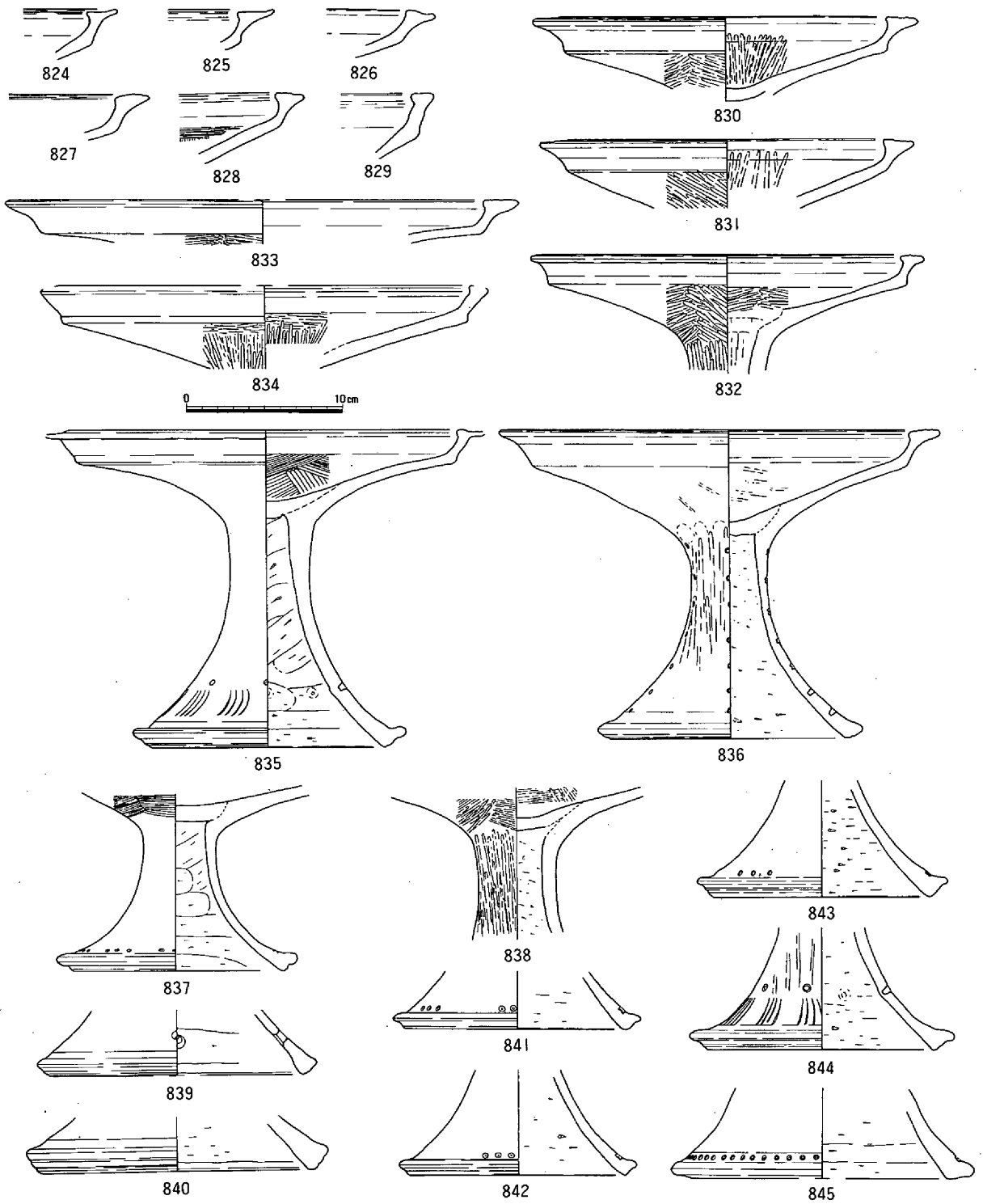
第215図 溝16断面図(1/60)・出土遺物(1)(1/4)



第216図 溝16出土遺物(2)(1/4)



第217図 溝16出土遺物(3)(1/4)

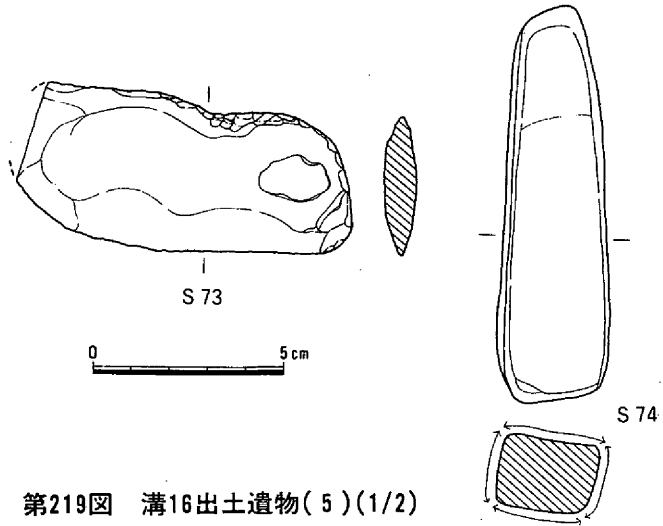


第218図 溝16出土遺物(4)(1/4)

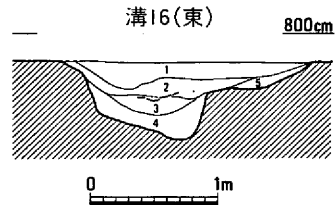
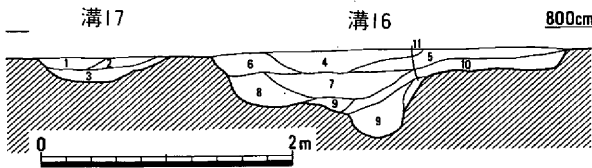
溝16に続く一つの水路体系を形成していたと判断される。掲載した遺物のうち、第213・214図は第1層から出土したもので、第215～218図は第2層出土の土器である。両者の土器をみると、体部が鋭角的に張る壺がともに出土し、高杯はいずれも杯部の口縁部が外傾気味に立ち上がって端面を内外に拡張して凹線を巡らすなど、同じ器形を示して時期差は認めがたい。むしろ、第2層の762や772など弥生時代後期前葉でも新しい様相を認めるものがある。溝が機能していたのは弥生時代後期前葉で、多量の出土土器は集落の廃絶時期との関係で考えたい。(岡本)

〈H19区〉(第220～223図、図版37-3)

TA区から続いている溝で、H19区の西半部分と東半分に別れて検出された。TA区では直角に屈曲しており、その両端である。西側の溝は、検出面での幅が279cm、深さ72cmを測る。断面は、2段の段があり、中央がU字状の溝となっている。東側の溝は検出面での幅が192cm、深さ62cmを測る。断面は段があり、中央は東側の底が深いが、箱形を呈する溝となっている。東西の底の高さは西の方が24cm高い。埋土中からは多くの遺物が出土

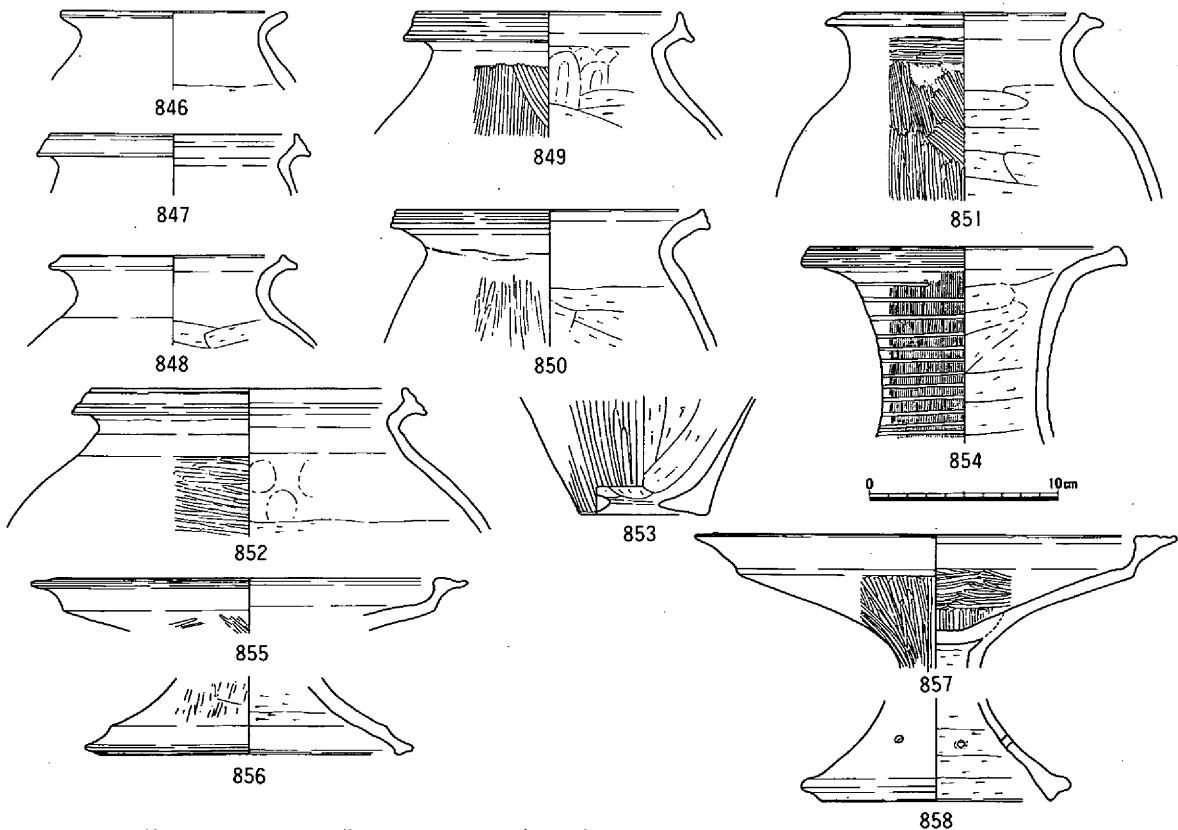


第219図 溝16出土遺物(5)(1/2)

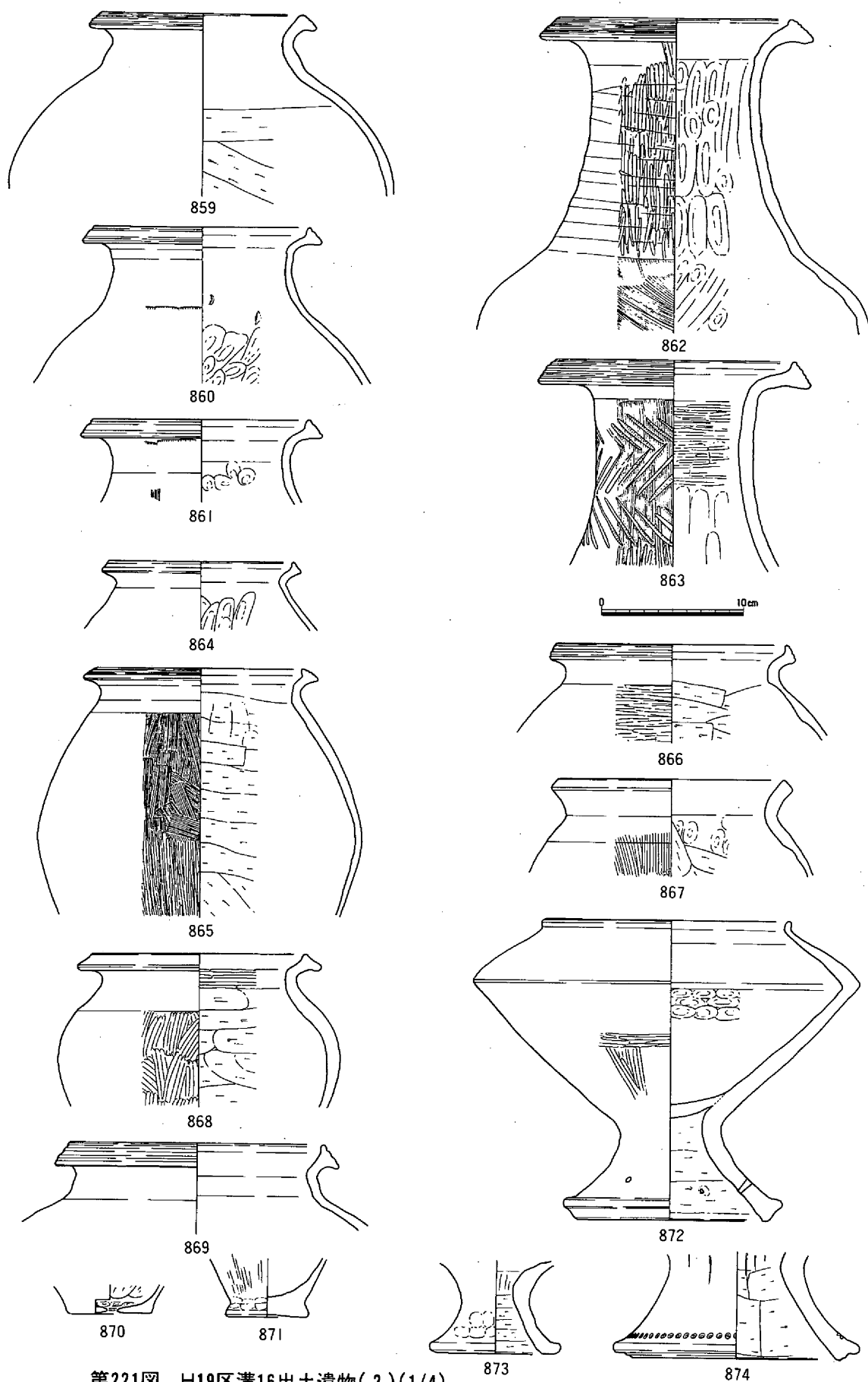


- | | |
|--------------------|---------------|
| 1. 暗茶褐色砂質微砂 | 7. 暗灰褐色粘質微砂 |
| 2. 黄褐色砂質微砂 | (土器・炭を含む) |
| 3. 灰黄褐色砂質微砂 | 8. 暗灰褐色粘質微砂 |
| 4. 灰黄褐色砂質微砂 | 9. 灰褐色粘質微砂 |
| (土器・炭・焼土を含む) | (黄褐色土ブロックを含む) |
| 5. 黄茶褐色砂質微砂(土器を含む) | 10. 暗灰茶褐色粘質微砂 |
| 6. 灰黄褐色粘質微砂 | 11. 黄褐色粘質微砂 |

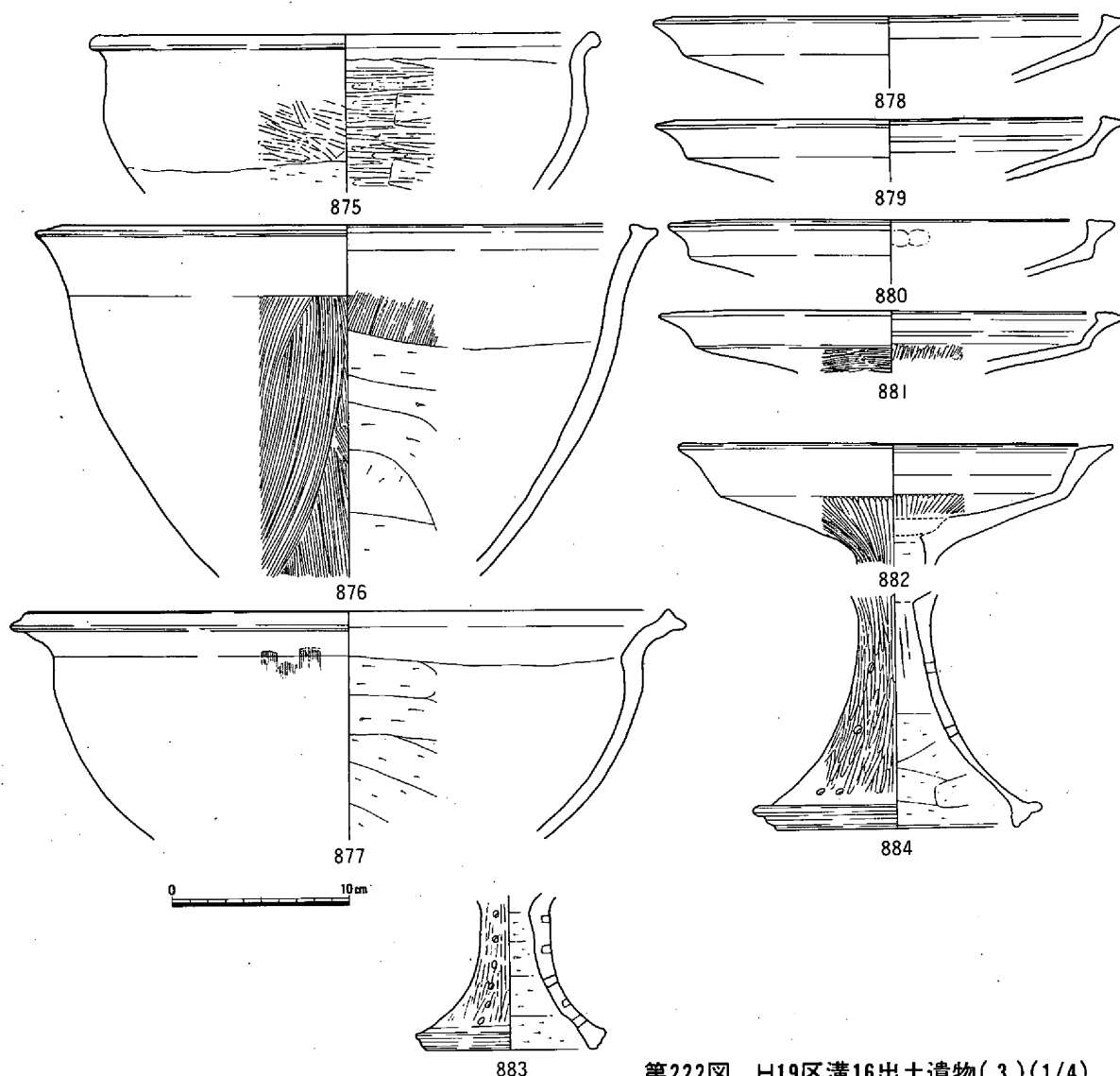
1. 淡灰黄褐色粘質微砂
2. 暗灰褐色粘質微砂
3. 暗灰黄褐色粘質微砂
4. 淡黄褐色砂質微砂
5. 黄褐色砂質土



第220図 H19区溝16・17断面図(1/60)・溝16出土遺物(1)(1/4)



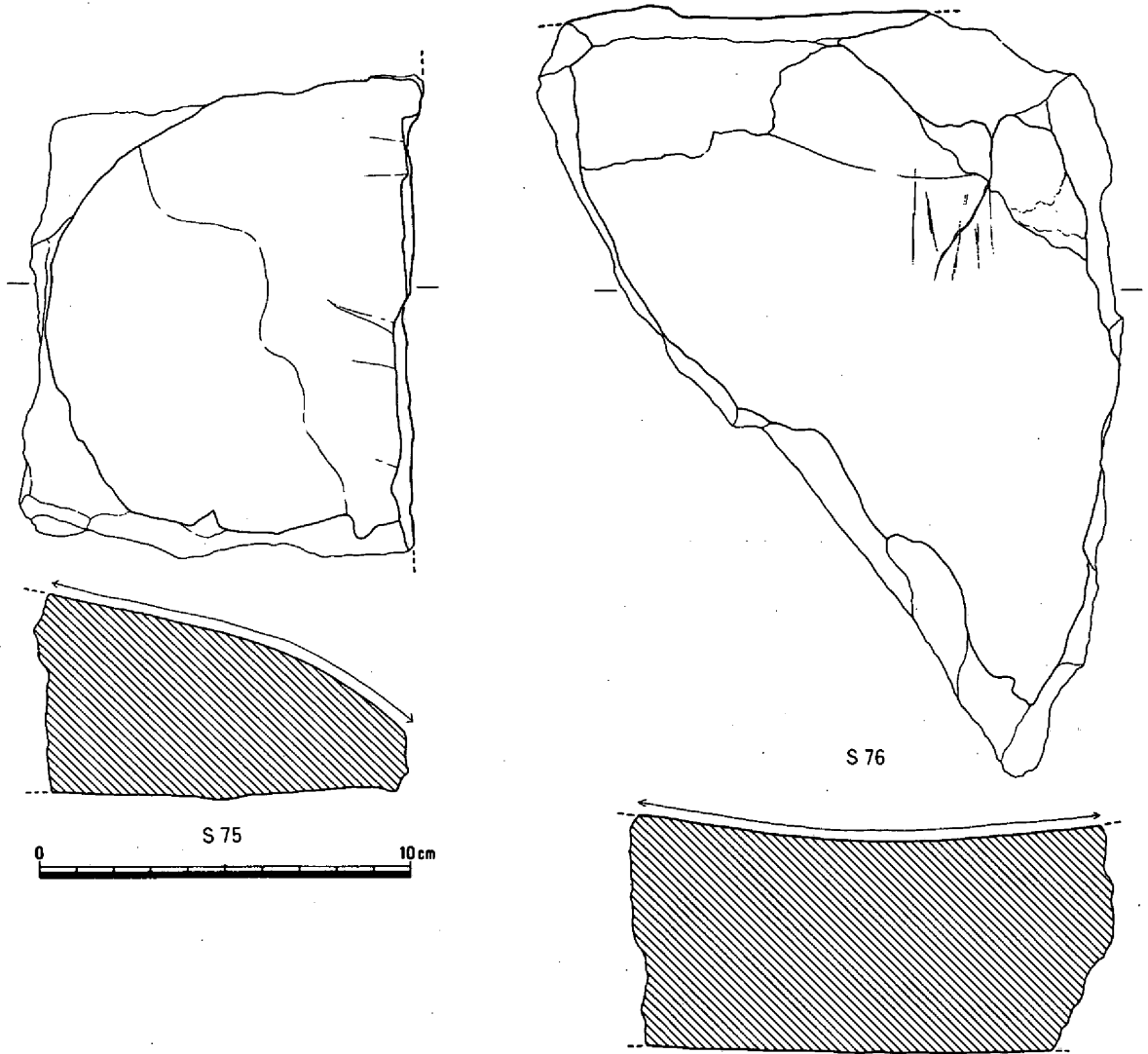
第221図 H19区溝16出土遺物(2)(1/4)



第222図 H19区溝16出土遺物(3)(1/4)

している。

この溝からは、壺・甕・高杯・鉢・台付鉢(846～884)、スクレイパー・砥石(S73・74)が出土している。壺は長頸壺である。854は口縁端部が若干上下に拡張し、凹線が3条施される。頸部には凹線を施し、頸部内面は右上がりにヘラケズリが施される。862は、口縁端部が上下に拡張するが、下方が大きい。頸部には強いハデが凹線状に巡り、頸部内面には指圧痕が認められる。863は口縁端部が上下に拡張する。頸部には板状工具による刺突文が羽状に施される。頸部内面には横方向のヘラミガキが施される。甕には大小があるが、口縁端部は面を形成する。859の口縁端部は下方に大きく拡張する。底部853は焼成後の穿孔が認められるが、上げ底気味である。高杯は口縁端部が水平方向に拡張し、面を形成するものが多いが、855・857は外方への拡張が大きく、882は内側への拡張は認められない。857・882は円盤充填が認められる。脚端部は下方と水平方向に拡張するものが多い。856の端部は斜め外方にのび、拡張の度合いは比較的小さい。台付鉢872は肩部が鋭く屈曲し、口縁部は短く上方にのびる。鉢はボウル状であるが、876はかなり深いものである。砥石S74は流紋岩製である。溝の時期は弥生時代後期前葉と思われる。(柴田)

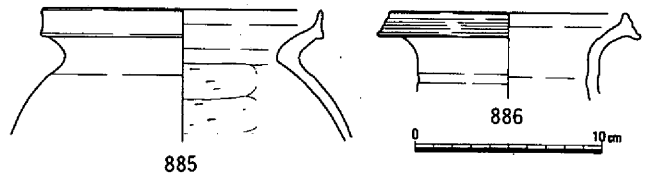


第223図 H19区溝16出土遺物(4)(1/2)



溝17 (第224図、図版37-3)

TA区から続いている溝の一部で、溝16の西部分に平行する。検出面での幅が102cm、深さ20cmを測る。断面は、箱形を呈する。埋土中から885・886が出土している。

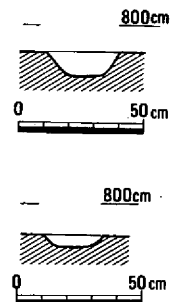


第224図 溝17出土遺物(1/4)

甕885は、口縁端部が上方に立ち上がり、壺886は長頸で凹線が巡り、口縁端部は上下に拡張する。溝の時期は弥生時代後期後葉と思われる。(柴田)

溝18・19 (第225図)

H19区の西端で検出された溝である。いずれも南北方向にのび、わずかに弧を描く。両者は約3m離れている。溝18は断面箱形を呈し、検出面で幅28cm、深さ9cmを測る。溝19は断面皿状を呈し、検出面で幅24cm、深さ5cmを測る。時期は弥生時代中期～後期前葉と思われる。(柴田)

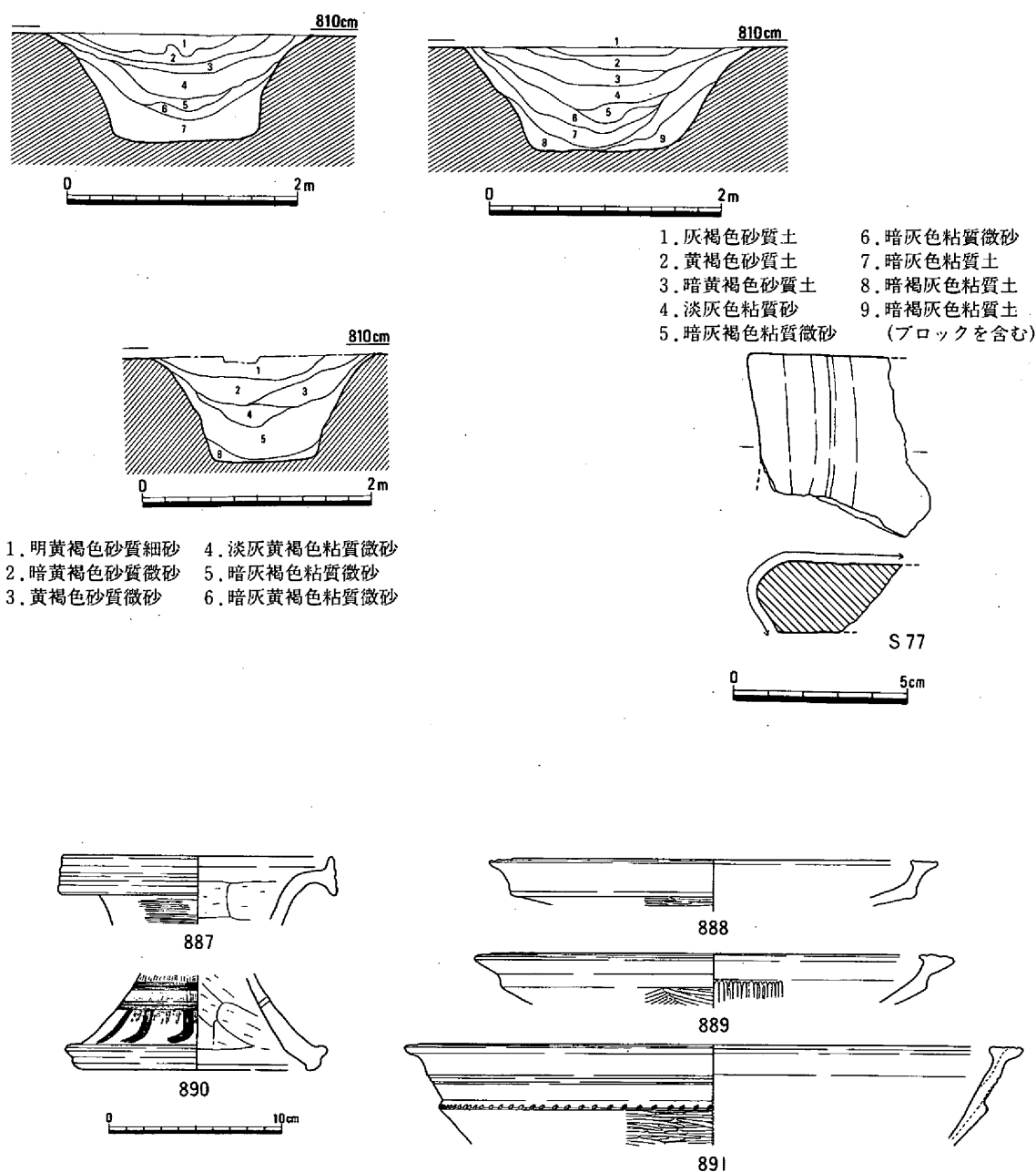


第225図 溝18・19断面図(1/30)

溝20 (第226図、図版38-2・3、39-1)

B U区とH18区、そしてCH3区にかけて直線的に検出された、北東方から南西方に流路を示す検出全長約25mの溝である。B U区では弥生時代後期前葉に比定される竪穴住居15を切って開削されている。幅約195~250cm、深さ約90cm前後、溝底幅約90~120cmを測る比較的大きな溝で、断面形は整った逆台形を呈する。北東方すなわちH19区にははっきりとしたこの溝の延長部は現われず、もし直線的に延びるとすれば河道1によって消滅したと考えられる。一方で断面形の形状の相違はあるが、T A区で検出された溝16と延長部で屈曲してつながる可能性も少なからずあり、そうするとこの部分では溝に囲まれた矩形のエリアの存在が浮かび上がる。このエリアの内部は未掘部分が大半を占め、その周縁部と遺構構成などの比較はできないが、溝の性格を考える上で注意を要する。

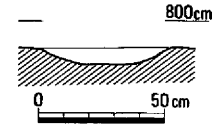
出土遺物にはS77の砥石のほか、土器が少量あり弥生時代後期前葉の時期を示している。(岡田)



第226図 溝20断面図(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)

溝21 (第227図)

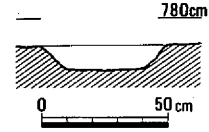
H18区の中央で検出された溝である。東西方向に真っすぐのび、溝22と類似する。断面は皿状を呈し、検出面で幅24cm、深さ6cmを測る。出土遺物は認められないが、時期は弥生時代中期～後期と思われる。(柴田)



第227図 溝21断面図(1/30)

溝22 (第228図)

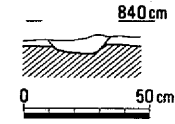
H18区の南半部分で検出された溝である。東西方向に真っすぐのび、溝21と類似する。断面は皿状を呈し、検出面で幅49cm、深さ10cmを測る。出土遺物は認められないが、時期は弥生時代中期～後期と思われる。(柴田)



第228図 溝22断面図(1/30)

溝23 (第229図)

CH1区の中道川をはさんだ西調査区のもっとも北端で検出された。幅約40数cm、深さ約12cm前後を測る直線的な溝である。埋積土は灰黒色粘土であるが、出土遺物は皆無である。時期的には弥生時代後期に比定してよいだろう。(岡田)

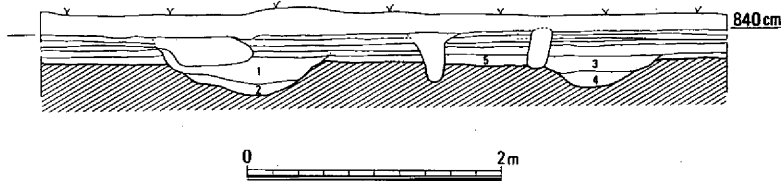
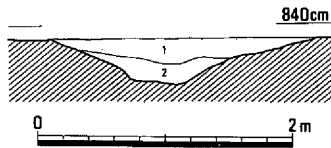


第229図 溝23断面図(1/30)

溝24 (第230図)

CH1区の西区から続く約20mにわたって検出されたやや蛇行する溝である。西区で検出された部分では幅約200cm、深さ25cmを測る浅い溝である。溝底は約40cmと狭く、東の端では溝の幅も狭まってU字形を示している。

出土遺物はまったくみられないが、埋積土から溝26などとあい前後する、弥生時代後期に比定されるものと考えている。(岡田)



第230図 溝24・26断面図(1/60)

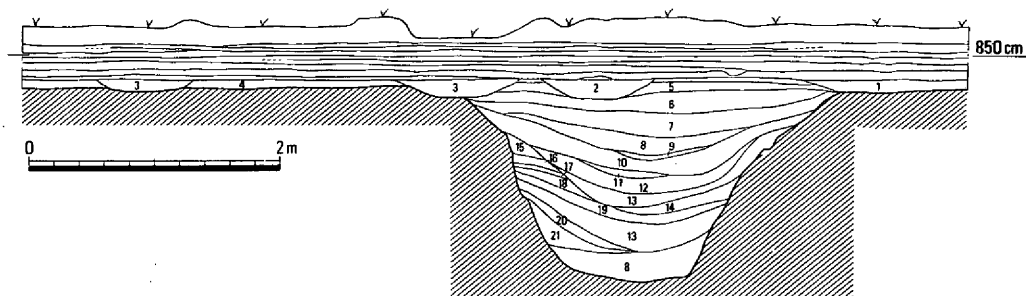
溝25 (第231図、図版39—2)

溝26とつながる可能性もある溝で、西区から東西方向に延びている。第230図の第12・13層に現われる部分では、幅約100cm、深さ20cmを測る。

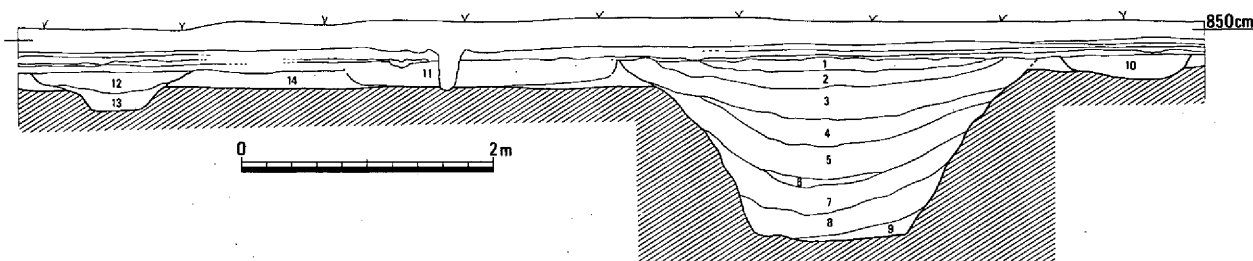
出土遺物は皆無であるが、埋積土や層位的な観察から弥生時代後期に比定される。(岡田)

溝26 (第230図)

幅約90cm、深さ25cmを測る溝で溝24の南側に位置する。検出全長約4mであるが、溝25につながる



- | | | | | |
|----------|-----------|-------------|---------------|-----------|
| 1. 暗褐灰色土 | 6. 灰黄褐色土 | 11. 黒灰色砂 | 16. 黒灰色土 | 20. 灰黒色土 |
| 2. 褐灰色土 | 7. 暗褐灰色土 | 12. 灰色微砂質土 | 17. 灰黄色土 | 21. 明灰黄色土 |
| 3. 暗褐灰色土 | 8. 暗灰色土 | 13. 黒色土+黄色土 | 18. 淡灰黄色土(縞状) | |
| 4. 黄褐灰色土 | 9. 灰色土 | 14. 青灰色微砂 | 19. 黒色土+黄色土 | |
| 5. 淡褐灰色土 | 10. 暗青灰色土 | 15. 黄色土 | (縞状土層の最下層) | |



- | | | | |
|----------------|--------------------|-----------------|-----------|
| 1. 灰黄褐色土 | 5. 暗灰黒褐色土(炭を含む) | 9. 暗青灰色土 | 13. 暗茶褐色土 |
| 2. 暗褐灰色土 | 6. 暗灰色砂 | 10. 暗褐灰色土(溝28) | 14. 黄褐灰色土 |
| 3. 灰茶褐色土(炭を含む) | 7. 暗黒灰褐色微砂(炭を含む) | 11. 暗褐色土(溝29) | |
| 4. 暗灰褐色土(炭を含む) | 8. 暗黒青灰白色微砂(木片を含む) | 12. 暗灰茶褐色土(溝25) | |

第231図 溝25・27～29断面図(1/60)

可能性もある。

出土遺物は皆無であるが、埋積土などから弥生時代後期に比定されよう。

(岡田)

溝27 (第231図)

西区の溝25の下位に位置し、東区にかけて検出された。検出復元全長約16mで、実際に掘り上げた部分は約230cmずつである。

西区では幅約300cm、深さ約160cm、溝底幅約100cmを測る。東区では幅約320cm、深さ約145cm、溝底幅約115cmを測り、どちらの断面形も直線的な逆台形を示している。溝の埋積は徐々に進行し、その深さを減じていった経過が明瞭に示される。この溝の形態や規模は溝18のそれをひとまわり大きくしたもので、集落の縁辺に開削された環濠の可能性を示唆していると考えられる。出土遺物は土器細片のみであるが、弥生時代後期前葉に比定される可能性が高い。

(岡田)

溝28 (第231図)

溝25の南約3mで検出された、検出全長約4mの溝である。幅約125cm、深さ約20cmを測る逆台形を呈する。時期的には、弥生時代後期に比定される可能性が高い。

(岡田)

溝29 (第231図)

溝25のすぐ南側で検出された浅いたわみ状の溝で、埋積土は暗褐色の単一土層が堆積している。時

期的には溝25などと隔たりのない弥生時代後期の範囲に限定されよう。

(岡田)

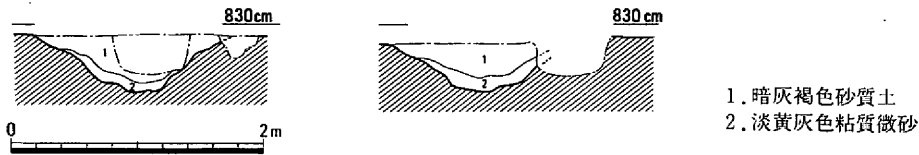
溝30 (第232図、図版39—3)

検出全長約28mのほぼ東西方向の溝で、幅約160~200cm、深さ45cm前後を測り、断面形はV字形に近い逆台形を呈している。

南約50mあたりから現われる溝30よりやや規模は大きい、ほぼ平行して存在していることは注目される。

出土遺物は土器細片のみであるが、弥生時代後期に比定される可能性が高い。

(岡田)



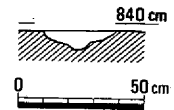
第232図 溝30断面図(1/60)

溝31 (第233図)

溝28の南約35mで検出された南西から北東に流路を示す溝で幅約55cm、深さ約15cmを測る。埋積土は、淡灰黄色粘質微砂である。

出土遺物は皆無であるが时期的には、弥生時代後期にもっとも近いといえよう。

(岡田)



第233図

溝31断面図(1/60)

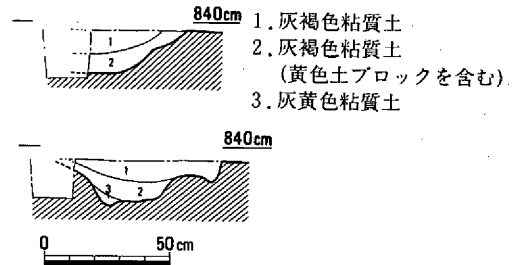
溝32 (第234図、図版40—1)

CH1区の南西辺に沿って検出された東西方向の溝である。検出全長は45mに達しわずかに弧を描くように曲折している。幅約100~120cm前後、深さ約30~35cmを測り、断面形は丸みをもった幅広なU字形を示す。後述の溝31を切って掘りこまれている。

建物24との関係は明らかではないが、同時には存在しない位置関係にある。しかし、溝34よりは古いことは明白である。

溝からの出土遺物は土器細片のみで図化できるものは皆無であったが、これらの観察から溝の時期は弥生時代後期前葉頃に比定できる可能性が高い。

(岡田)

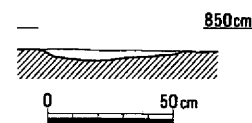


第234図 溝32断面図(1/60)

溝33 (第235図)

南西から北東に向けて検出された浅く、しかも幅が不安定な溝で袋状土壙群の南側に位置している。また溝31や溝34とも平行する方向を示している。埋積土は黄灰色粘質微砂で、出土遺物はないが弥生時代後期に比定される可能性が高い。

(岡田)



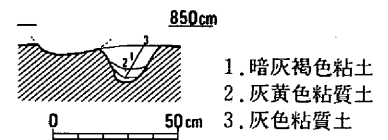
第235図 溝33断面図(1/60)

溝34 (第236図、図版40—2)

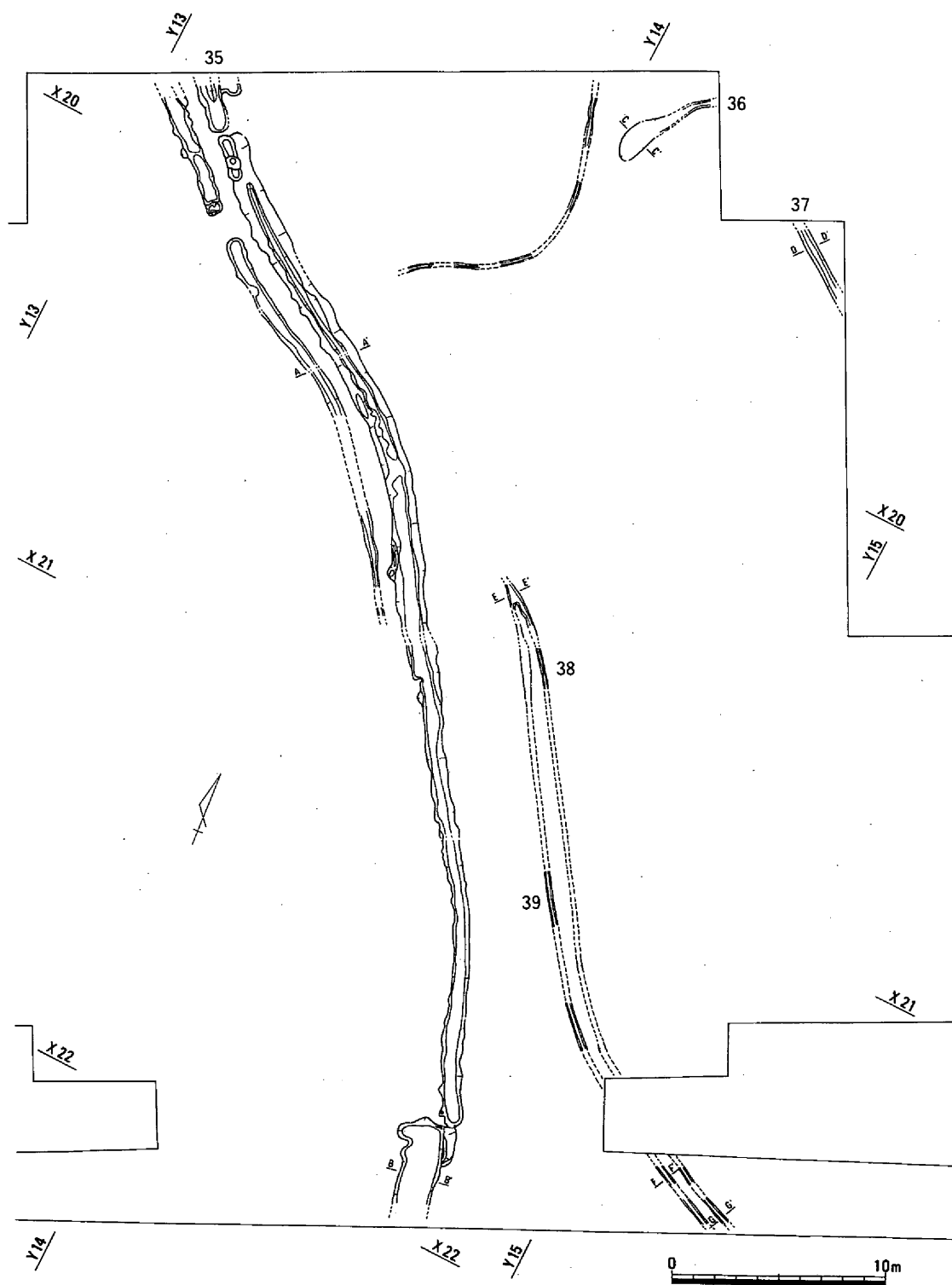
溝32を切って検出された。検出全長約11mのきわめて直線的な溝である。

幅約50cm、深さ約30cmを測る丸みをもった逆台形の溝である。出土遺物は土器細片のみであるが、弥生時代後期に比定される可能性が高いと考えられる。

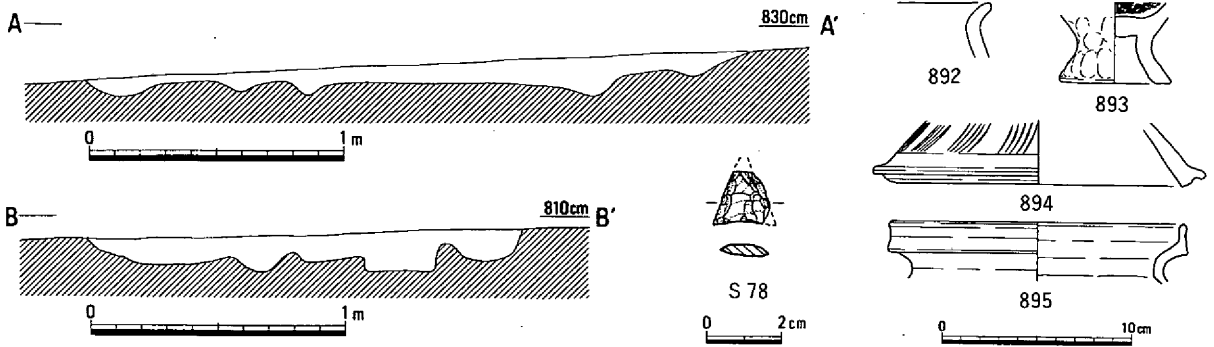
(岡田)



第236図 溝34断面図(1/60)



第237図 溝35～39(1/300)



第238図 溝35断面図(1/30)・出土遺物(1/4・1/2)

溝35 (第237・238図)

KO1・2区の第3低位部東肩口で、古墳時代初頭の水田下から検出された溝状遺構である。検出された規模は、上幅での差が大きいですが、平均的には1m前後とみられる。底面には凹凸が激しく、深さもまちまちである。KO1区内では2条が1m前後の間隔で並行する形状を呈し、KO2区に続く東側のものもその北端と南端では途切れている。その際、相互の底面海拔高は隣接していても10cm前後の違いを示す場合が多く、機能的に水路とは考えられない。出土遺物には、甕・高杯・台付鉢等の弥生土器と石鏃S78があり、時期は弥生時代後期前葉に求められる。(光永)

溝36 (第237・239図)

KO1区北東隅で検出され、竪穴住居20との距離4.6mに位置する。東端では上幅30cm、深さ4cmの溝状を呈するが、西端では幅1m、深さ5cm程度に広がって終わっている。出土遺物はないが、埋土から弥生時代中期～後期と考えられる。(光永)

溝37 (第237・239図)

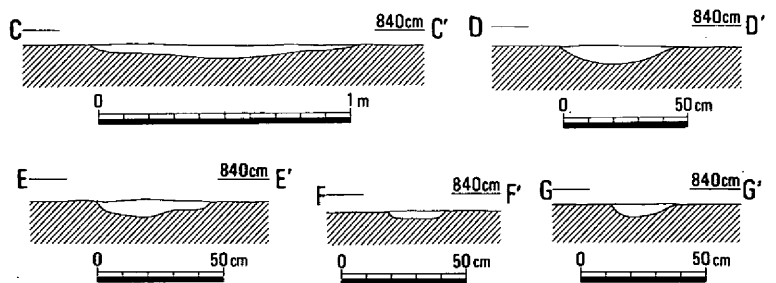
KO1区北東隅で検出された溝で、第3低位部東肩口から約21m離れている。北西から南東方向へ直線的に流路を置き、検出された上幅で45cm、深さ8cm程度の規模を測る。出土遺物はないが、埋土により弥生時代中期～後期に比定される。(光永)

溝38・39 (第237・239図)

KO1区南部からKO2区にかけて検出された2条の溝で、KO1区では2条が重なるが、土層断面に前後関係は認められない。KO2区北部では第3低位部東肩口から3.5m離れてこれに並行し、相互に60cmの間隔を保っている。KO2区南部では相互の並行関係を保ったまま第3低位部を離れる形で南東方向へ流路を曲げている。いずれも上幅25cm、深さ5cm前後の小規模なものである。弥生土器小片の出土により、弥生時代中期～後期に比定される。(光永)

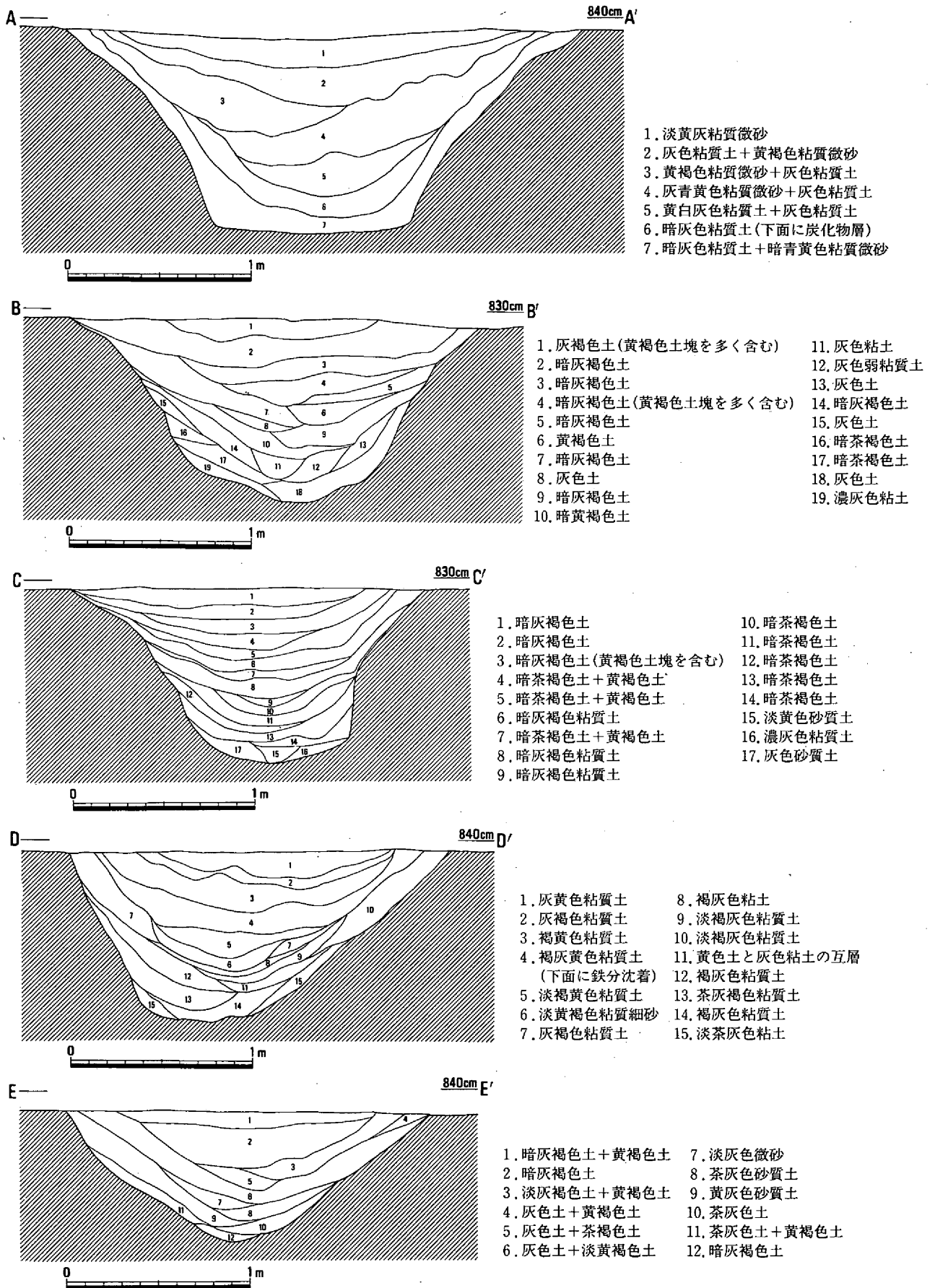
溝40 (第240～242・245図、

図版40—3、41—1・2)
K・H20・HO・CH3の各区を南西から北東方向へ直線的に流れる溝で、前述の溝27と繋がる。いずれの調査区においても土層断面から複数回の溝浚えが確認されているが、CH3区での規模は、上幅280cm、下



第239図 溝36～39断面図(1/30)

第3章 発掘調査の概要



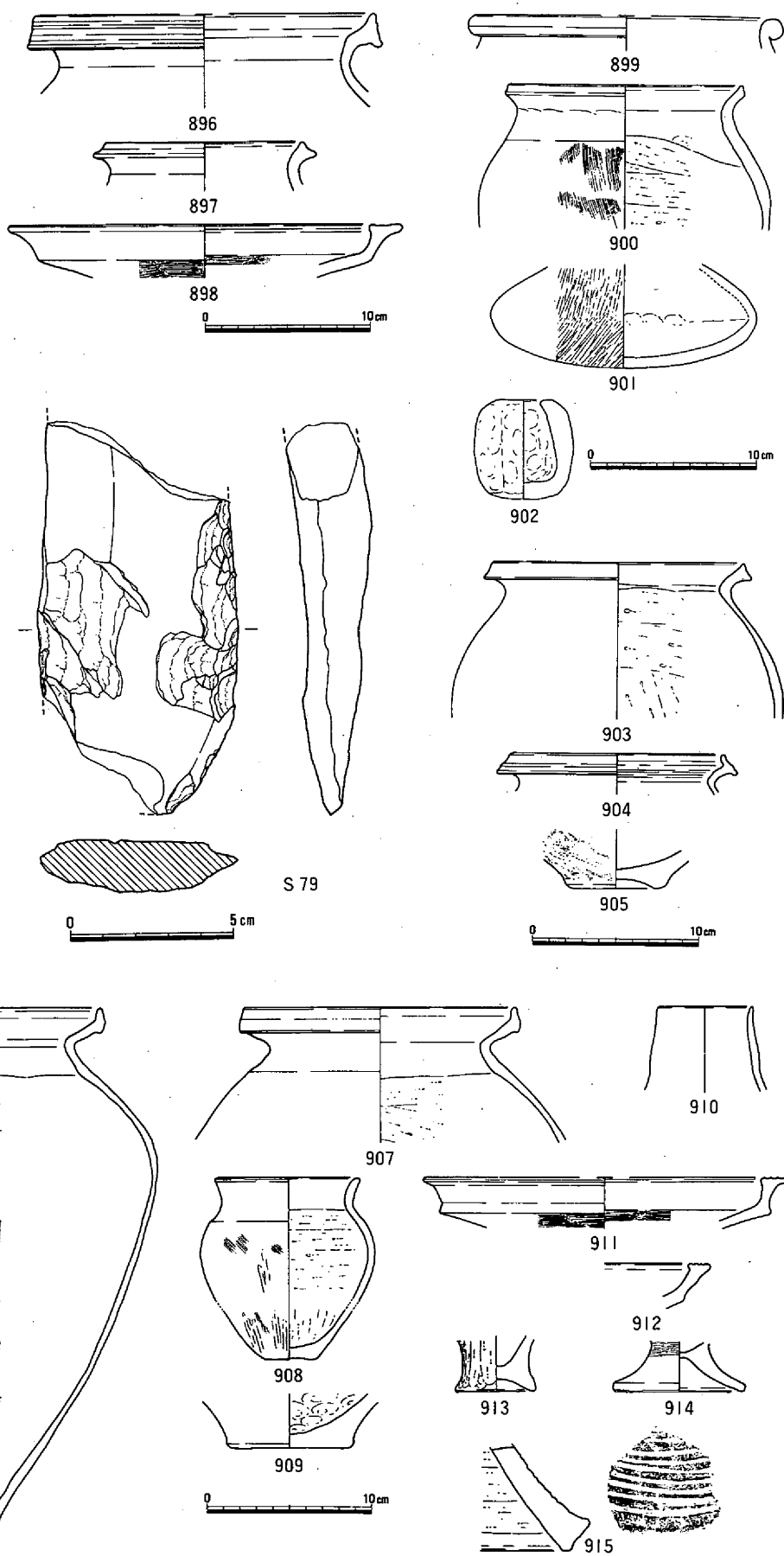
第241図 溝40断面図(1/30)

幅110cm、深さ105cmを測る。断面形は下半の形状、とくに底面が平坦なものと曲面を呈するものの違いは見られるが、上半は「V」字形に開いている。底面の海拔高をみると、西端のK区で7.60m、東端のCH3区で7.22mを測り、100mで40cm下がっていることとなる。

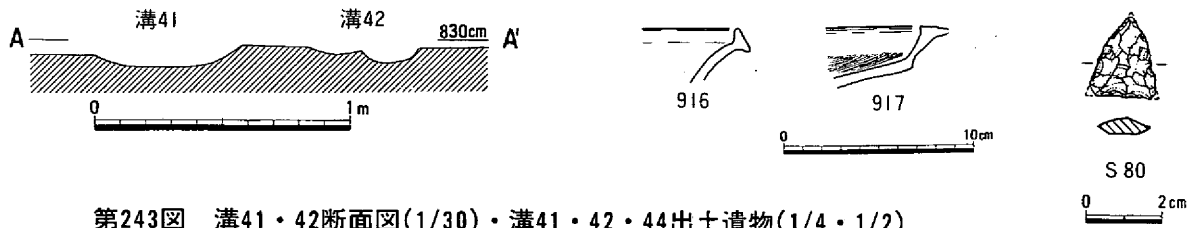
第242図の出土遺物のうち、896～898がCH3区、899～902がH20区、903～905がHO区、906～915とS79がK区からそれぞれ出土している。

時期は、弥生時代後期前葉に比定される。

(光永)



第242図 溝40出土遺物(1/4・1/2)



第243図 溝41・42断面図(1/30)・溝41・42・44出土遺物(1/4・1/2)

溝41・42 (第240・243図)

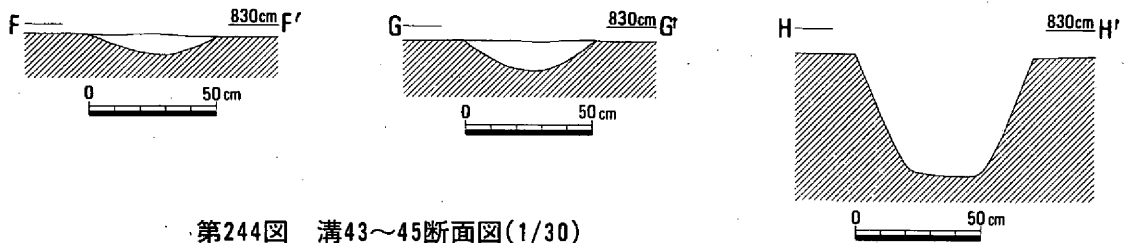
両者ともにH〇区の西端部に位置し、約1mの間隔で並走するほぼ南北方向の溝である。溝44とは先端部付近で交差するが、その地点に攪乱が及んでいるため新旧関係は不明である。ただ、溝42は溝44から分岐している可能性もある。両者ともに南下するほど幅が広くなり、深さも増す。埋土は暗茶褐色を呈し、溝41から壺片、溝42から高杯片が出土しており、いずれも後期前葉である。(柳瀬)

溝43 (第240・244図)

K10区の東端で検出された。幅60cm、深さ7cm、底面の海拔高8.19mを測る。検出面の違いで規模に差があるものの、位置からみて溝42に続くものであろう。(久保)

溝44 (第240・243・244図)

H〇区北西隅から中央より南東によった辺りまで、弧状に約53mにわたって検出されている。幅50cm前後、深さ10cm強を測る。遺物は石鏃S80と土器細片しかないが、後期前葉とみられる。(柳瀬)



第244図 溝43～45断面図(1/30)

溝45 (第240・244図)

H20区の東端で検出された。

幅70～75cm、深さ55cm、底面の海拔高7.75mを測る。断面形態は台形を呈する。

土器は出土していないが、埋土の状況により弥生時代中～後期と考えられる。(久保)

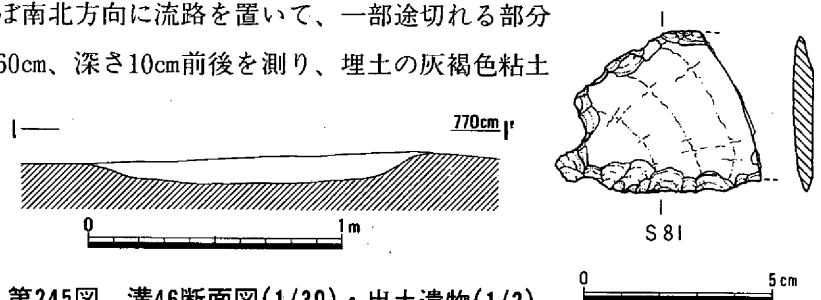
溝46 (第240・245図)

K区の南東寄りの微高地肩部に沿うように、ほぼ東西方向に検出された幅60cm～1.4m、深さ10cm前後の溝である。土層的には、微高地肩部から低位部に広がる後期水田層に上部を削平された形で検出されており、後期の早い時期の用水路の可能性が高い。遺物はS81以外ほとんどない。(柳瀬)

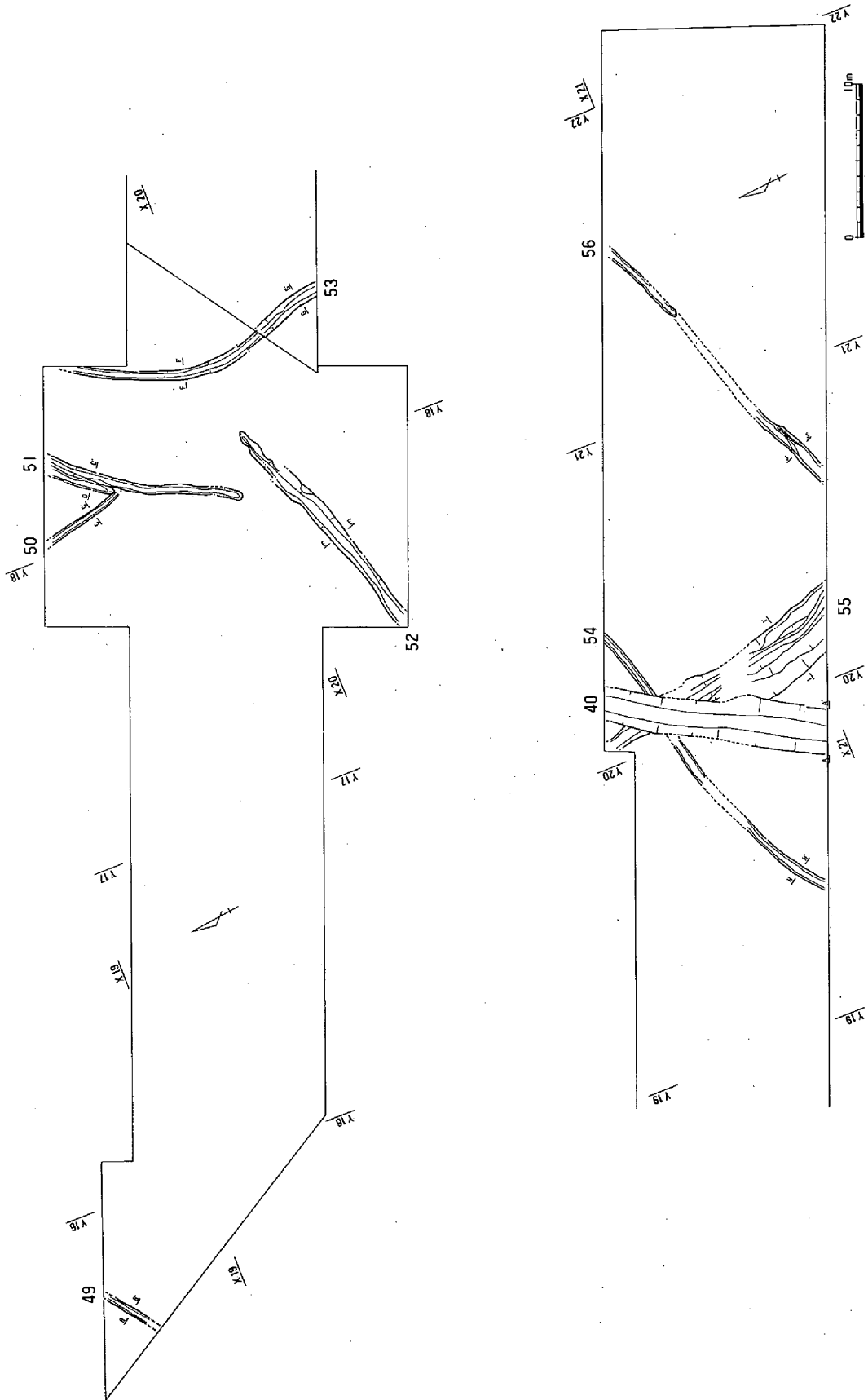
溝47 (第240・247図)

K区南東隅に近い位置に、ほぼ南北方向に流路を置いて、一部途切れる部分を見せている。北部では幅50～60cm、深さ10cm前後を測り、埋土の灰褐色粘土層中から、高杯片918が出土している。南部では幅30～35cm、深さ6～7cmを測る。

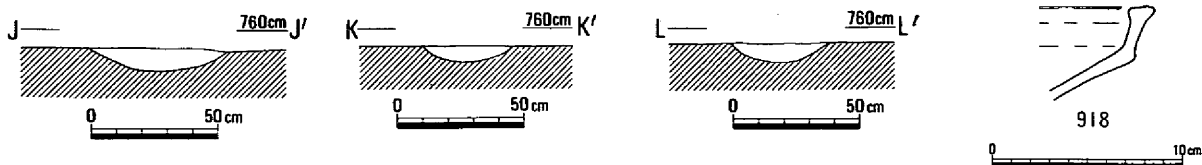
検出面は溝46と同様の条件下、つまり後期水田層の下部



第245図 溝46断面図(1/30)・出土遺物(1/2)



第246図 溝40・49～56(1/400)



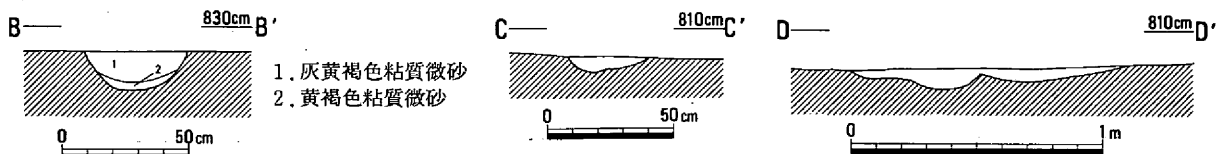
第247図 溝47・48断面図(1/30)・出土遺物(1/4)

であり、出土遺物からも後期前葉の溝と考えてよい。

(柳瀬)

溝48 (第240・247図)

K区の南端近くに検出されたほぼ南北方向の溝である。全長約4m、幅40cm前後、深さ約8cmを測る。埋土の青灰色粘土中に遺物はない。検出レベルから、時期は溝47などと同じであろう。(柳瀬)



第248図 溝49～51断面図(1/30)

溝49 (第246・248図)

CH2区北西隅に位置し、竪穴住居21に削られている。流路を東西に置き、上幅40cm、深さ15cmの規模である。土器片少量の出土により、弥生時代中期～後期に比定される。(光永)

溝50 (第246・248図、図版41-3)

CH2区東部に位置し、南北方向に流路を置く。上幅30cm、深さ7cm程度の規模を示すが、溝51より南の状況は不明である。土器片少量の出土により、弥生時代中期～後期に比定される。(光永)

溝51 (第246・248図、図版41-3)

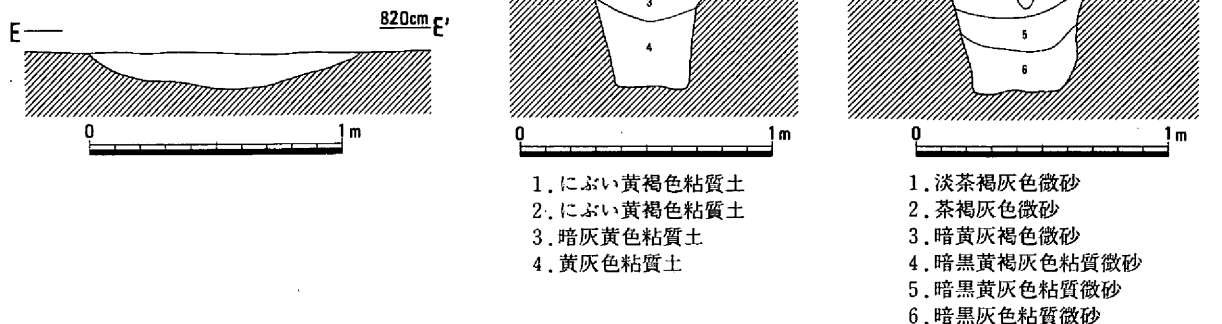
CH2区東部に位置し、北東から南西方向へ流路を置く。東端では2条が重複しているが、いずれも西端が調査区内で途切れている。規模は上幅で50～70cm、深さ5～8cm程度を測る。少量の土器が出土しており、時期は弥生時代中期～後期の枠でとらえられる。(光永)

溝52 (第246・249図、図版41-3)

CH2区南部に位置し、直線的な流路をほぼ東西方向に置いている。東端は調査区内で途切れているが、西半での規模は、上幅80～130cm、深さ15cm前後を測る。土器片少量が出土しており、時期は弥生時代中期～後期の枠でとらえられる。(光永)

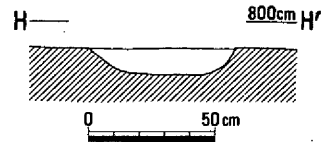
溝53 (第246・249図、図版41-3、42-1)

CH2・3区の境界付近に位置し



第249図 溝52・53断面図(1/30)

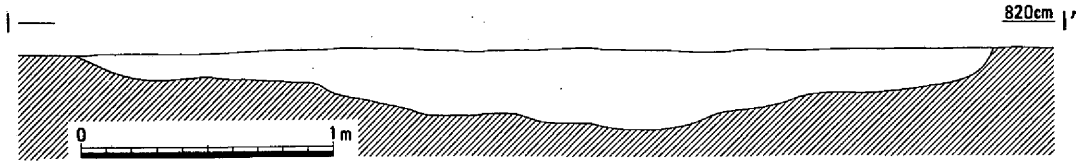
て、南から北東方向へ緩やかに蛇行する溝である。上幅50～80cm、下幅30cm前後、深さ75cm程度の規模で、断面は逆台形を呈する。土器片少量の出土により、時期は弥生時代後期前葉に比定される。(光永)



第250図 溝54断面図(1/30)

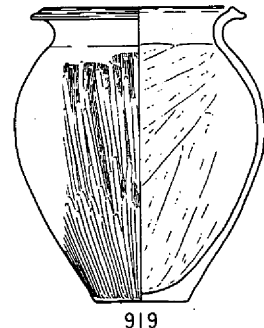
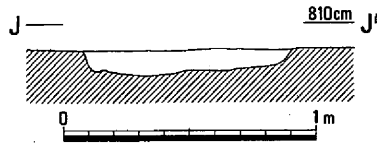
溝54 (第246・250図)

CH3区の中央で検出された溝である。東西方向にのび、H18区の溝21につながると思われる。断面は皿状を呈する。検出面で幅50～65cm、深さ10cm程度である。出土遺物は認められず、溝40に切られているが、時期は弥生時代後期と思われる。(柴田)



第251図 溝55・56断面図(1/30)

・出土遺物(1/4)

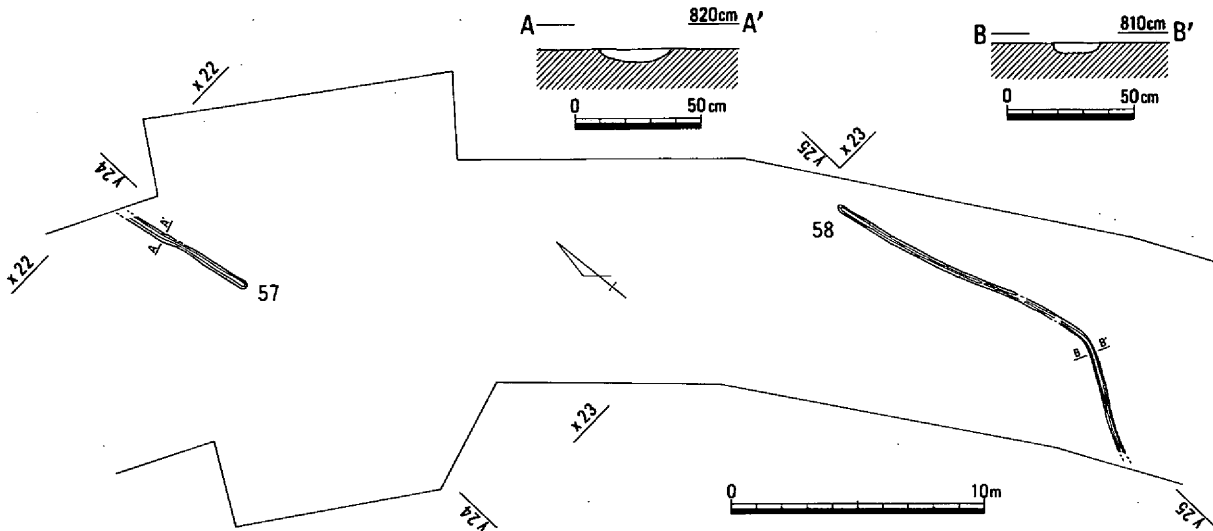


溝55 (第246・251図、図版42-2)

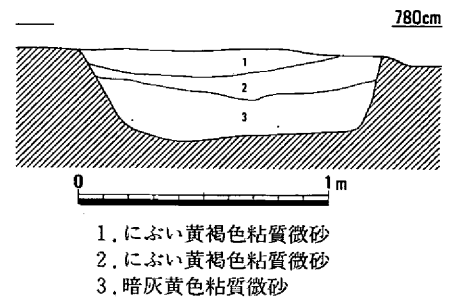
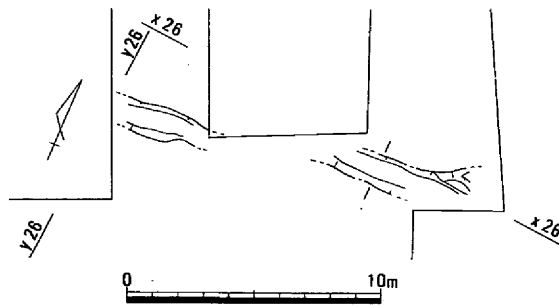
CH3区の中央で検出された溝である。南北方向に真っすぐのび、断面は浅い皿状を呈する。H19区の溝16や17につながると思われる。検出面での幅363cm、深さ32cmを測る。溝40に切られているが、埋土から919が出土しており、時期は弥生時代後期前葉と思われる。(柴田)

溝56 (第246・251図)

CH3区の南半で検出された溝である。東西方向に真っすぐのび、断面は皿状を呈する。H18区の溝22につながると思われる。検出面で幅50～90cm、深さ10cmを測る。出土遺物は認められないが、時期は弥生時代後期と思われる。(柴田)



第252図 溝57・58(1/300・1/30)



第253図 溝59(1/300・1/30)

溝57 (第252図)

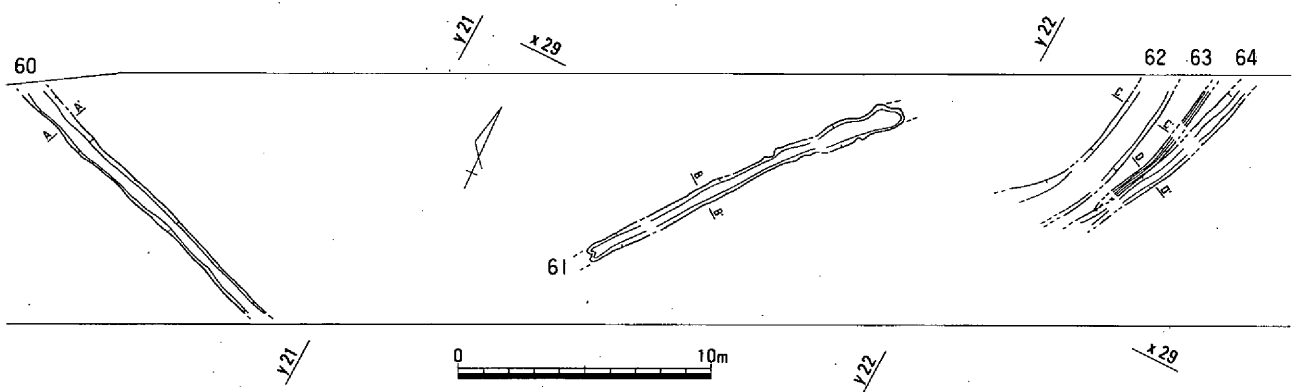
CH 4 区中央部において検出された溝で、ほぼ南北方向に流路を置き、南端は調査区内で途切れている。検出された上幅約30cm、深さ5cm前後を測る。土器細片の出土と埋土から、弥生時代中期～後期に比定される。
(光永)

溝58 (第252図)

CH 4 区南部で検出された。南半の流路は南西から北東へ向き、調査区中央部でほぼ北へ向きを変えて直進し、北端は途切れている。検出された規模は、上幅20cm前後、深さ5cm程度を測る。弥生土器小片が出土しており、時期は弥生時代中期～後期に比定される。
(光永)

溝59 (第253図)

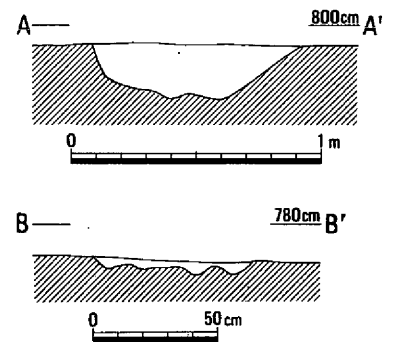
CH 5 区中央部で、流路をほぼ東西方向に置いて検出された。西部での検出状況は、上幅120cm、下幅93cm、深さ35cm程度の断面逆台形を示し、東端部では北東方向へ浅く分流する可能性を示している。土器片少量の出土により、弥生時代中期後半～後期に比定される。
(光永)



第254図 溝60～64(1/300)

溝60 (第254・255図)

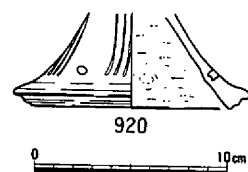
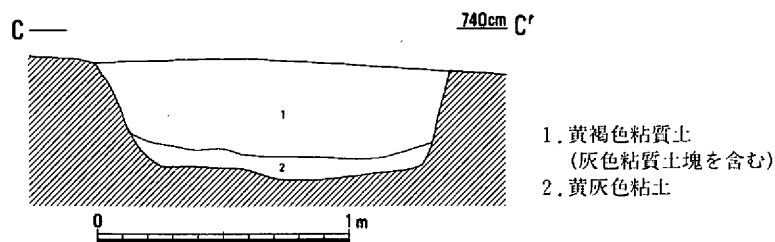
HW 2 区のほぼ中央部において検出した北西から南東に流走する溝である。検出できた幅は54～94cmで、深さは10～21cmであった。底面の海拔高は7.7m前後である。断面形は皿形で、埋土は褐灰色粘質土であった。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は弥生時代中期後葉から後期前葉と考えられる。
(平井)



溝61 (第254・255図)

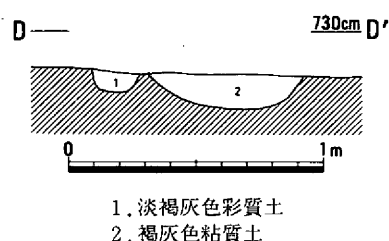
HW 3 区の西端部において検出した。検出できた幅は50～110cm、

第255図 溝60・61断面図(1/30)



第256図 溝62～64断面図(1/30)・出土遺物(1/4)

長さは約13.7m、深さは最大でも10cm残存していたにすぎない。底面の海拔高は7.65m前後である。底面には凹凸が認められ、埋土は黄色砂質土ブロックを含む暗褐灰色砂質土である。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は弥生時代後期前葉である。(平井)



溝62 (第254・256図、図版42-3)

HW3区の西部の微高地上で検出したほぼ南北方向の溝である。

検出できた幅は140～160cmで、深さは48cm前後であった。長さは約

7mで、南に位置する河道6にむかって流れ込むものと考えられる。埋土は2層で、底には粘土が堆積していた。遺物は少量の土器片が出土し、時期は弥生時代後期前葉と考えられる。(平井)

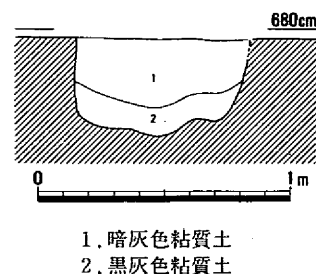
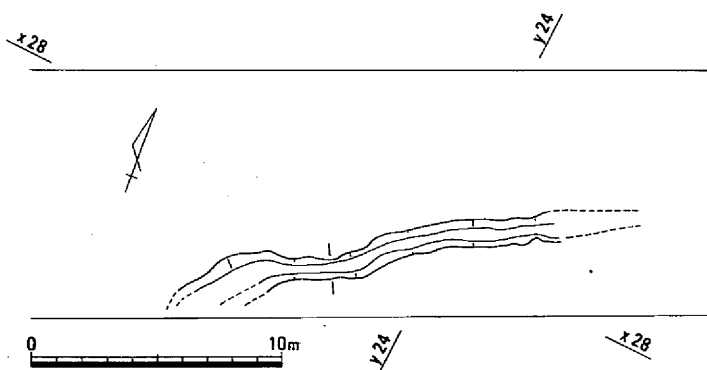
溝63・64 (第254・256図、図版42-3)

溝62の東に約1m離れてほぼ並行するかたちで検出した溝である。この2本の溝は切り合っており、溝64が溝63を切っている。

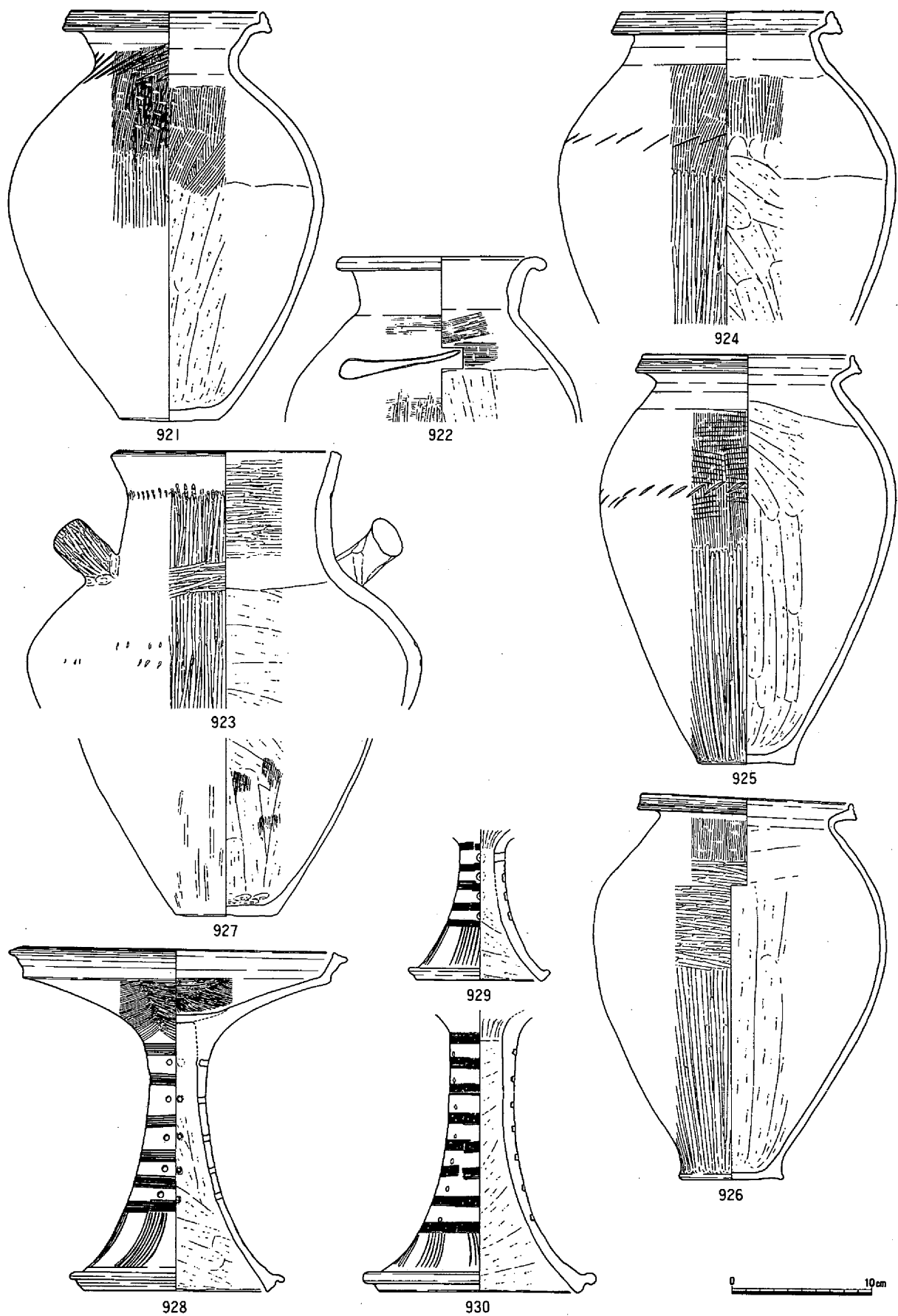
溝64は幅50～74cmで、深さは13～25cm残存していた。底面の海拔高は7m前後である。遺物は縄文時代晩期の土器片が出土したのみである。溝63は幅32～38cmで、深さは9～23cm残存していた。底面の海拔高は7.05m前後である。遺物は弥生時代後期前葉の土器片が少量出土した。これらの溝は溝62と同じく河道6に流れ込む溝で、時期は弥生時代後期前葉におさまるものと考えられる。(平井)

溝65 (第257図、図版43-1)

HW3区の東半部において検出した北東から南西方向の溝である。検出できた幅は70～170cmで、深さは40cm前後残存していた。長さは約15mで、東側は古墳時代の溝73・76によって切られているものと考えられる。断面形は逆台形にちかく、埋土は2層確認できた。遺物は少量の土器片が出土し、時期は弥生時代後期(前葉か)と考えておきたい。(平井)



第257図 溝65(1/300・1/30)



第258図 土器溜り2 出土遺物(1/4)

(8) 土器溜り

土器溜り2 (第95・258図)

CH5区の南辺中央部の側溝掘り下げ途上に、大形の土器片が集中する地点が認められ、周辺を精査したが、明瞭な遺構としてとらえることはできなかった。ここでは土器溜りとして遺物について報告する。壺921、甕924～926の口縁部外面には凹線文が施され、921頸部、924・925肩部にはハケ状工具による刺突文が巡らされる。922の口縁端部は折り曲げて丸く収められ、肩部にヘラ描の文様を施されている。半環状の把手が二つ付く水差形土器923は、口縁端部に凹線が施され、頸部への屈曲部と肩部に刺突文を巡らせた後にヘラミガキしている。高杯928～930の脚柱部には櫛描沈線文の間に3ないし4列の円孔が配されている。時期は、弥生時代後期前葉である。(光永)

(9) 貝塚

貝塚1 (第259図、図版43-2)

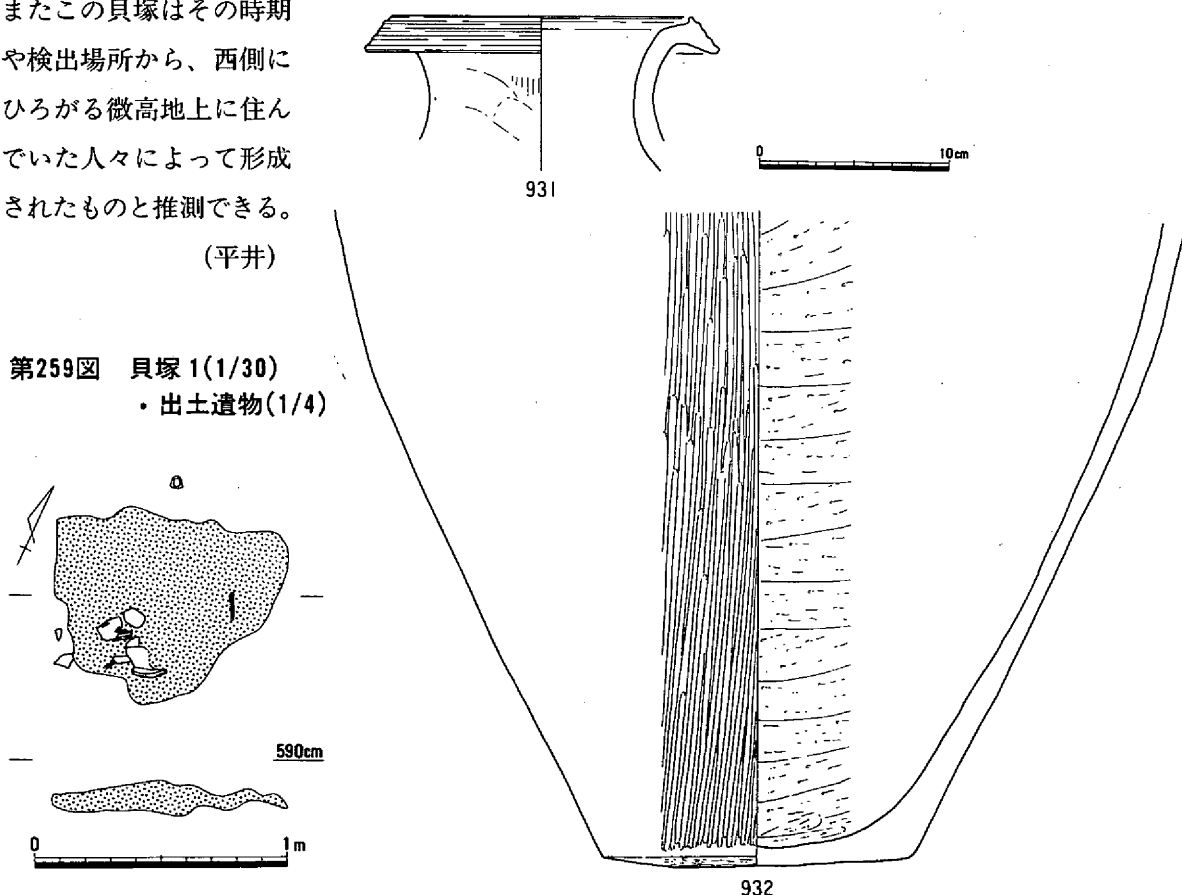
HW3区の西半部の弥生時代の河道6内に形成されていた貝塚である。規模は小さく、平面形が約90×80cmの不定形(第259図)で、貝層の厚さは最大でも約30cmを測るにすぎない。貝層は少量の土を含む混土貝層である。貝塚に含まれている貝の種類はヤマトシジミが最も多く、次にハイガイで、その他にカワアイガイとマガキが少量含まれていた。

貝塚が形成された時期については、貝層の上面から出土した土器(931・932)や後に述べる弥生時代の河道6の堆積土中に位置していることなどから、弥生時代後期前葉頃ではないかと考えられる。

またこの貝塚はその時期や検出場所から、西側にひろがる微高地上に住んでいた人々によって形成されたものと推測できる。

(平井)

第259図 貝塚1(1/30)
・出土遺物(1/4)



(10) 河道

河道3は、ほぼ南北方向に蛇行しながら流走する。北端はTA区の東隅で、そこからすぐ南のH19区の北東端部を経て、BU区・H19区・H18区・CH4区にかけて検出された長大な遺構である。

発掘調査は、調査区の制約によりこの河道3の全貌を明らかにすることはできなかったが、検出全長約150m、深さ1.5～2m前後、幅約13～15m前後の規模をもつ河道であることを確認することができた。各調査区での土層断面図の観察では、河道の法面は比較的緩やかな下降線を示し、最下層で砂層を主とする堆積層が顕著である。

この河道3の起点は明確ではないが、TA区からみると北東方のHC区あたりの低位部周辺に求められる可能性が高い。

土器を中心とした出土遺物からみると、河道の存続期間は上限が弥生時代中期中葉、下限は古墳時代後期と考えられ、長期間にわたって存続したことが推察される。全体図では、最終掘り上がりの形状を図化しているが、それぞれの時期でかなりの形態変化があったことが推定される。

埋没過程で示されるそれぞれの時期にも、すぐそばで建物や竪穴住居などで構成される集落の形成が認められており、日常生活を脅かすほどの豊富な水流が常時存在したものではないだろう。

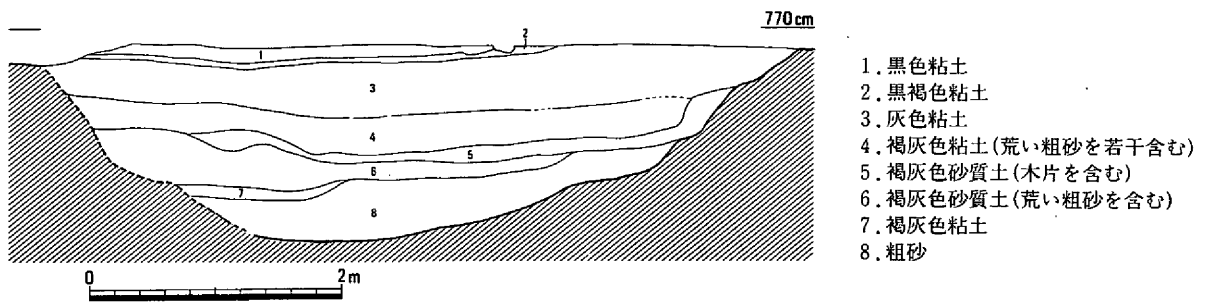
しかし、河道内の湿潤な条件が幸いして多くの木質遺体が出土している。とりわけ農耕具の出土は特筆される。杭として使われた芯持ち用材の多くは、護岸に使用された可能性もある。

本節では、おもに弥生時代に比定される出土遺物について述べ、古墳時代のそれらについては後節で土層断面図を再掲し併せて説明を加えることとしたい。 (岡田)

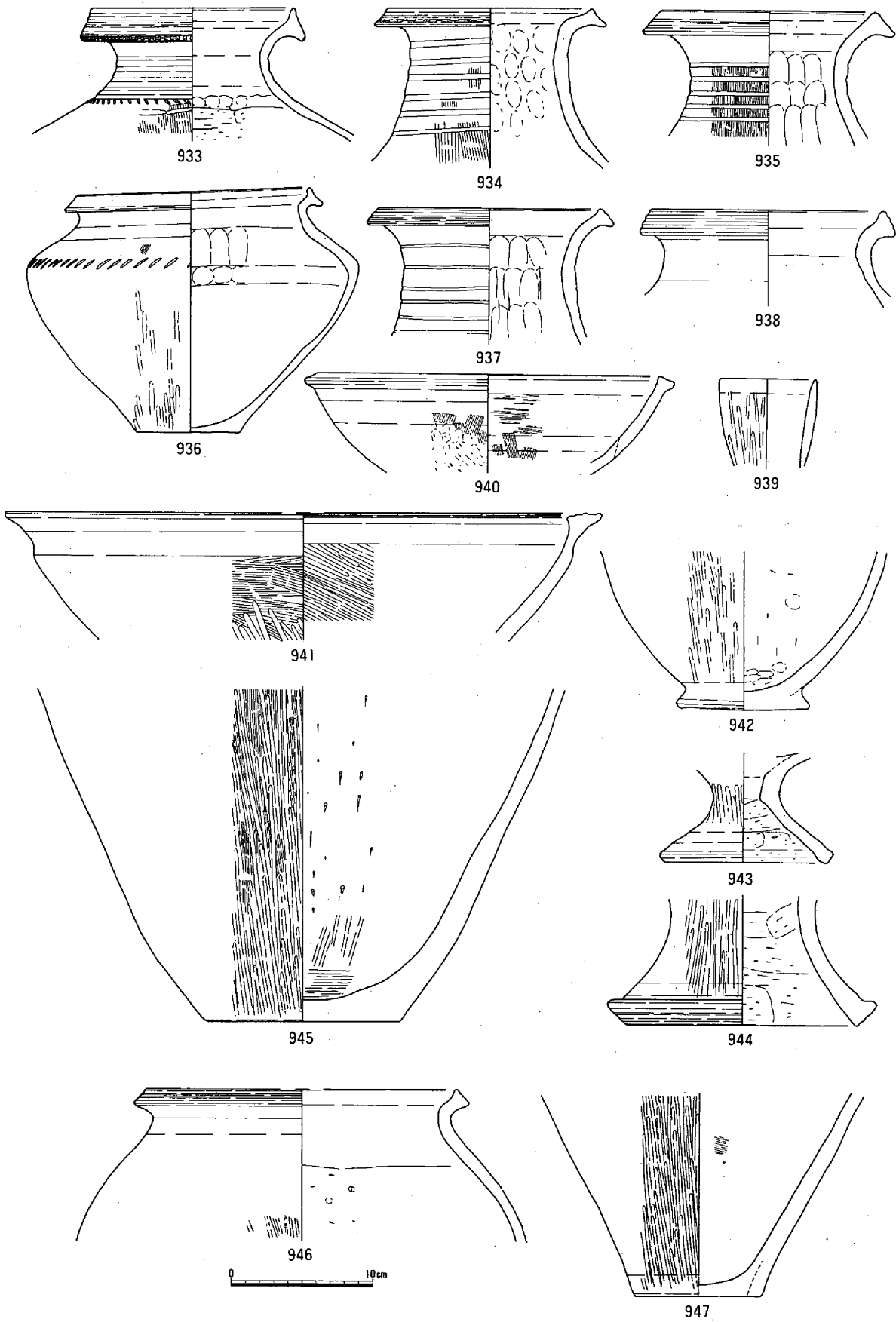
河道3 (TA区; 第260～263図、図版43-3)

TA区の南東隅で西岸の一部を検出したにとどまる。検出部分は北東からの流れが南へ屈曲した状況を示し、これより南のH19区・BU区・H18区を通して河道は南方向へ流れていくようであった。流水の方向はTA区とBU区での底部の海拔高度の差から推定しているが、その差は検出部分の比較で28cmにすぎない。河道の西岸に近接して竪穴住居6と竪穴住居8が並んでいた。西岸との距離は4mと3mで、あたかも2軒の並びが平行するようであった。

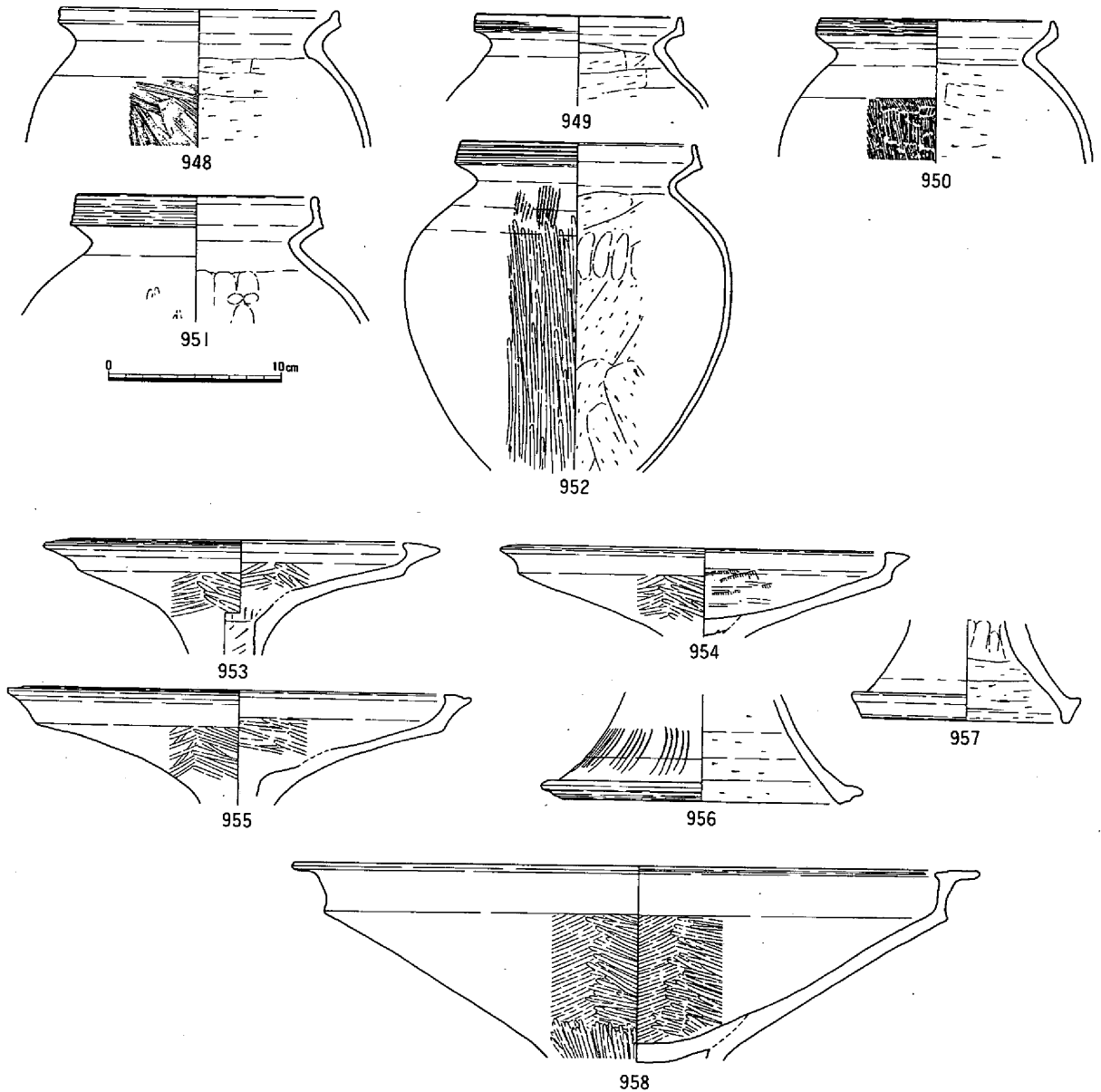
河道の埋土は8層に分けられた。第260図の左側の破線は調査区の壁であり、河道はさらに南東へ続いている。TA調査区の東壁の土層観察によれば、第1層と第2層は河道の上面から西岸を越え、竪穴住居の検出面まで覆っていた。このため、これらの層は河道が埋没してできた凹地に堆積したものと考えられる。第3層は緻密な粘土層で、第260図の右側の河道斜面にある段のもっとも上のものに対



第260図 河道3断面図(TA区; 1/60)



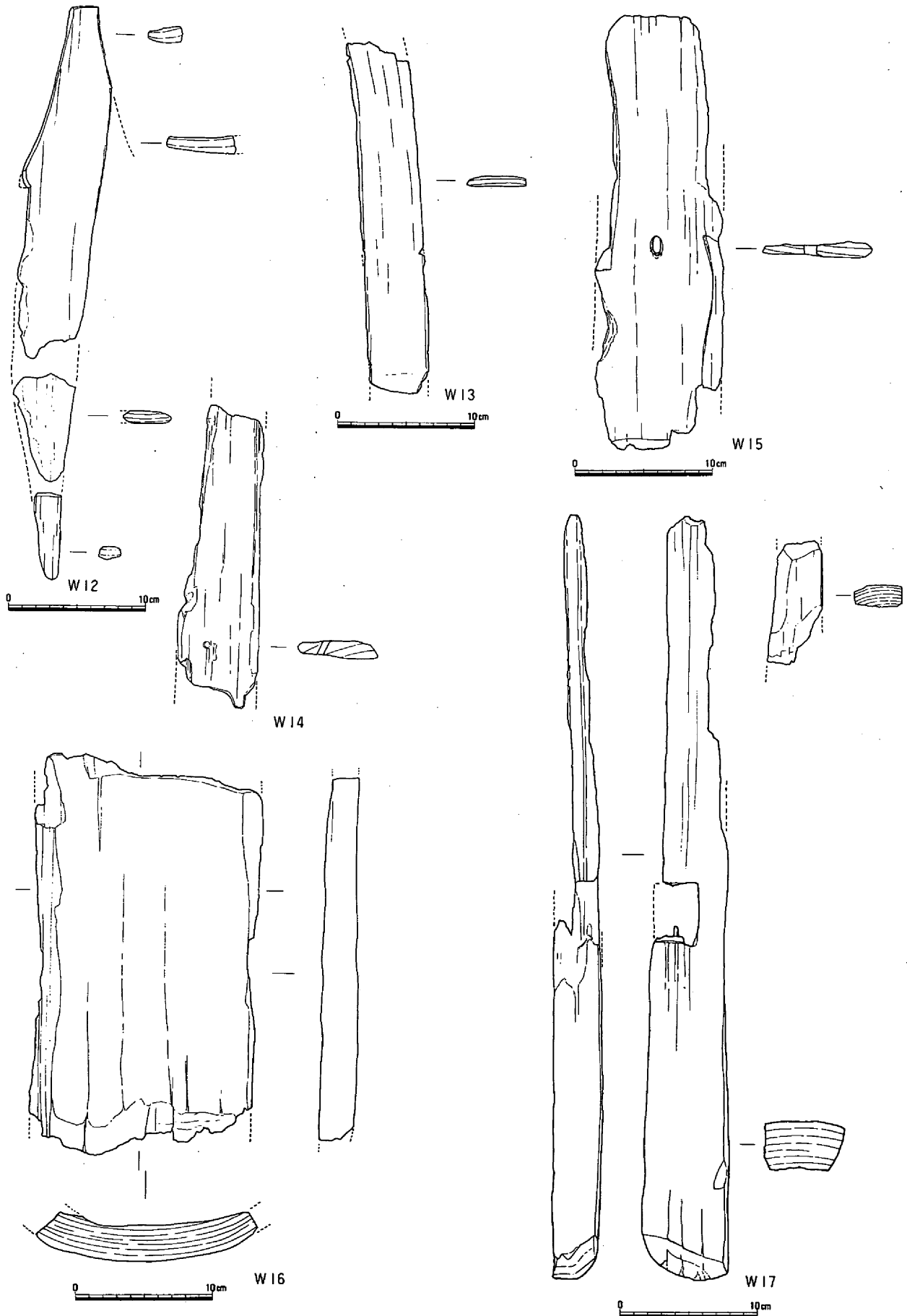
第261図 河道3出土遺物(1)(1/4)



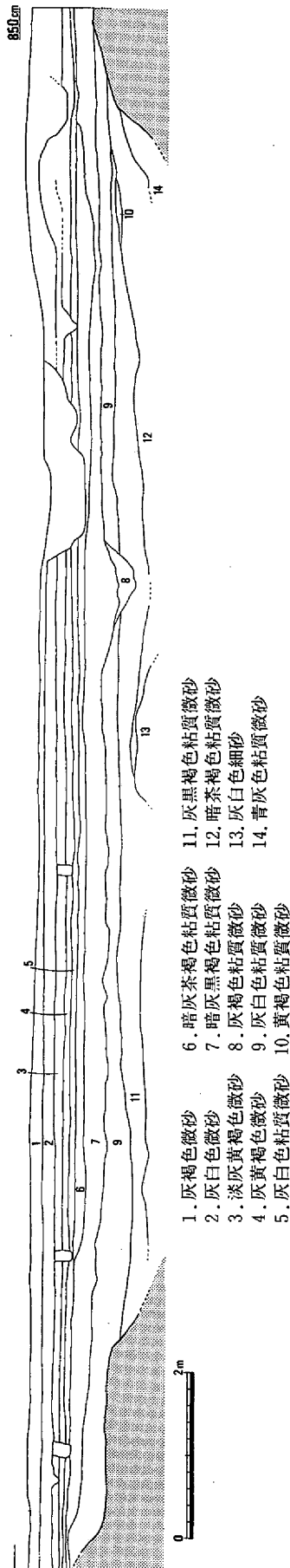
第262図 河道3出土遺物(2)(1/4)

応し、河道の最終段階での堆積とみられる。第4層から第6層までがその下の段に対応し、河道の改修がなされたと思われる。第4層は粗い砂粒をわずかに含むものの粘土層であるが、第5層と第6層は砂層で盛んな流水があったことがうかがわれる。第6層では第5層よりも多くの粗砂が含まれていた。第5層は粘土を混在させた層で木片を含み、W12・13のような木器も出土したことから、生活に密着した用水路としての性格が考えられる。最下の第7層・第8層が当初の河道の堆積とみられる。第7層は粘土層で、停水状態のあったことが知られる。第8層は粗砂を含む砂層であるが、灰色粘土の薄層を何層も含んだ互層状を呈していた。

出土土器の年代は大きく2時期に分かれる。一つは948～952の甕で、弥生時代末葉から古墳時代初頭にかけてのものと考えられる。いま一つは939を除くそれ以外の土器で、体部が鋭角的に張り出す壺や、杯の口縁部が外傾して立ち上がって端部を内外に拡張する高杯の存在から弥生時代後期前葉と判断される。先の土層と関係させると、古墳時代の土器は改修に伴うもので、弥生時代の土器は竪穴住居群が存在していた時期に河道へ投棄されたものとみることができる。(岡本)



第263図 河道3出土遺物(3)(1/4)



第264図 河道3断面図(H18区; 1/60)

- 1. 灰褐色微砂
- 2. 灰白色微砂
- 3. 淡灰黄褐色微砂
- 4. 灰黄褐色微砂
- 5. 灰白色粘質微砂
- 6. 暗灰茶褐色粘質微砂
- 7. 暗灰黑褐色粘質微砂
- 8. 灰褐色粘質微砂
- 9. 灰白色粘質微砂
- 10. 黄褐色粘質微砂
- 11. 灰黑褐色粘質微砂
- 12. 暗茶褐色粘質微砂
- 13. 灰白色細砂
- 14. 青灰色粘質微砂

<H18・19区> (第264図、図版44-1)

TA区の東隅で検出された河道3は南に向かっており、H19区の東端とH18区の南端でも検出された。

河道の肩は、湾曲する部分も若干認められるが、おおむね南北に真っすぐ流路をとっていると思われる。検出面での河道の幅は18.5~18.9mを測る。河道の深さは、調査区の幅が狭く、また砂の堆積による崩落のため確認することができなかった。検出面は海拔762~782cmである。それより上層は、第6層のたわみの堆積を最後にほぼ水平堆積が続き、水田となっていると思われる。河道の法面は海拔738cmから急になっており、この部分で河道の幅は15.1cmを測る。断面下層のほぼ中央に認められる第13層の状況から、流路は一時的に狭くなるなど変化があったようである。また、H19区では河道の幅9mを測る部分もある。

H19区では、河道の埋没後の海拔754cmで南北方向の溝が認められる。溝の幅は104cm、深さ40cmを測る。断面は箱形を呈する。時期は古墳時代の可能性もある。

河道の時期は、弥生時代後期が中心で、古墳時代には埋没していたと思われる。(柴田)

<BU区> (第265~267図、図版44-2・3)

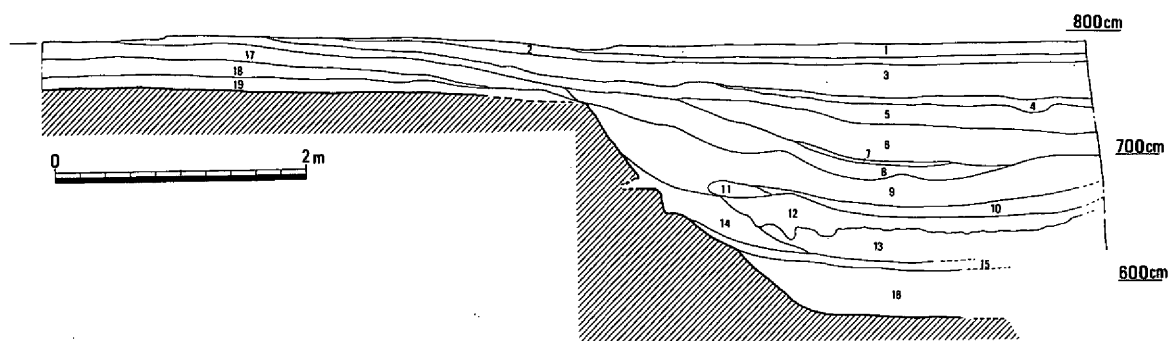
調査区の東側で検出された。南北方向の検出全長は約30mである。西岸ぎりぎりの位置に竪穴住居16・18や土壇60が存在している。

第265図の土層断面図は竪穴住居16のすぐ東側の東西方向のものである。第9層の暗灰色粘質土層には、弥生時代後期末葉の土器、たとえば966などが出土しており、この段階ではかなり浅くなっていたことがわかる。そして第6層では、後節で述べる古墳時代の遺物が出土している。

全体に微砂質の粘土層と砂層が堆積している状況が顕著であり、長期間にわたって徐々に河道が埋没していった様子がわかる。第3層の段階ではほぼ河道の埋没が完了し、もはや豊富な流量はなかったことが推定され、埋没後のたわみと認識される。

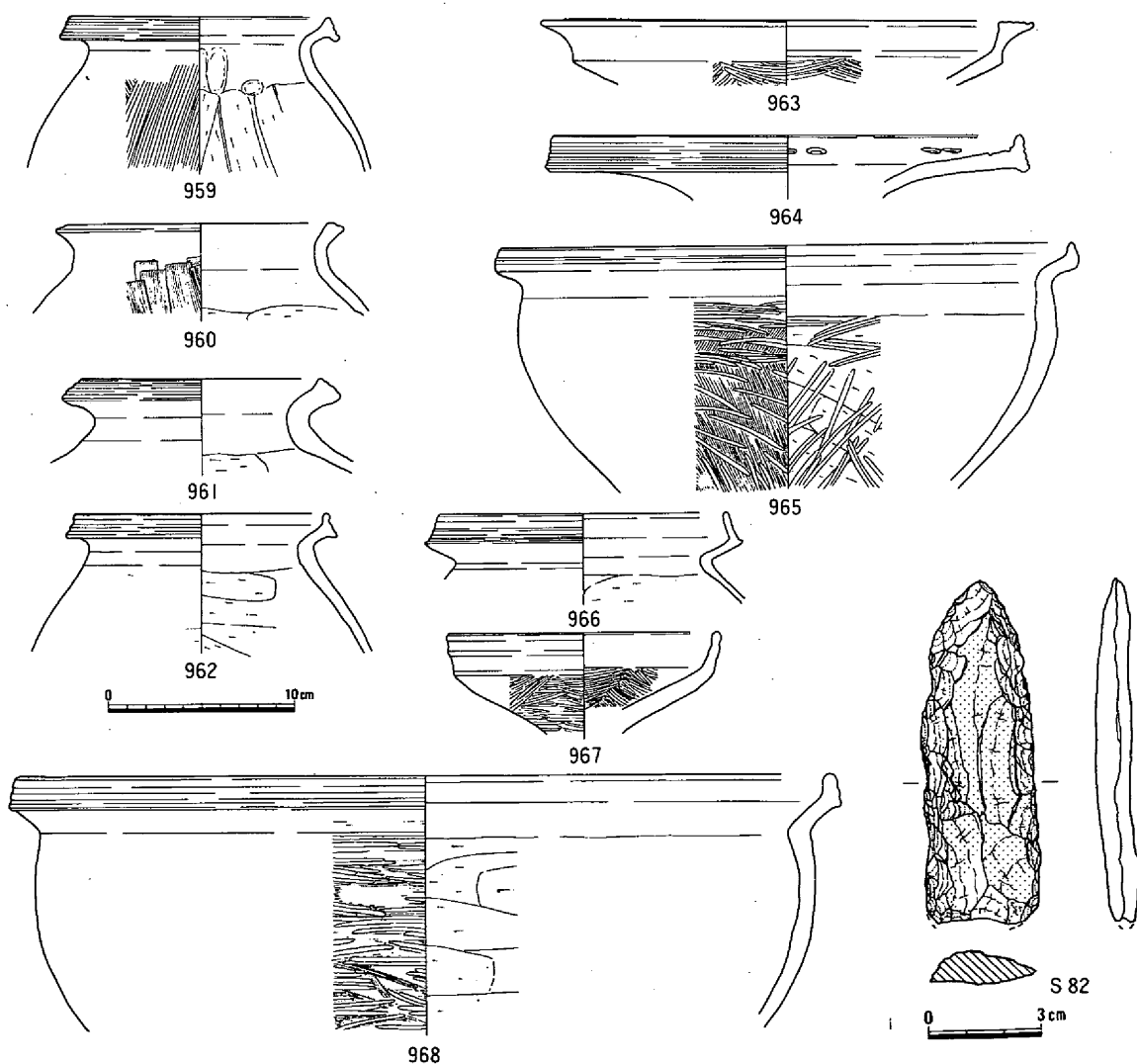
出土遺物には土器・石器のほか、湿潤な条件が幸いして遺存していた木質遺体があり、この中に数点の木製品も含まれている。

下層出土の土器の多くは弥生土器である。第266図に掲げる土器は、後期前葉から後期末葉に比定されるもので、甕・高

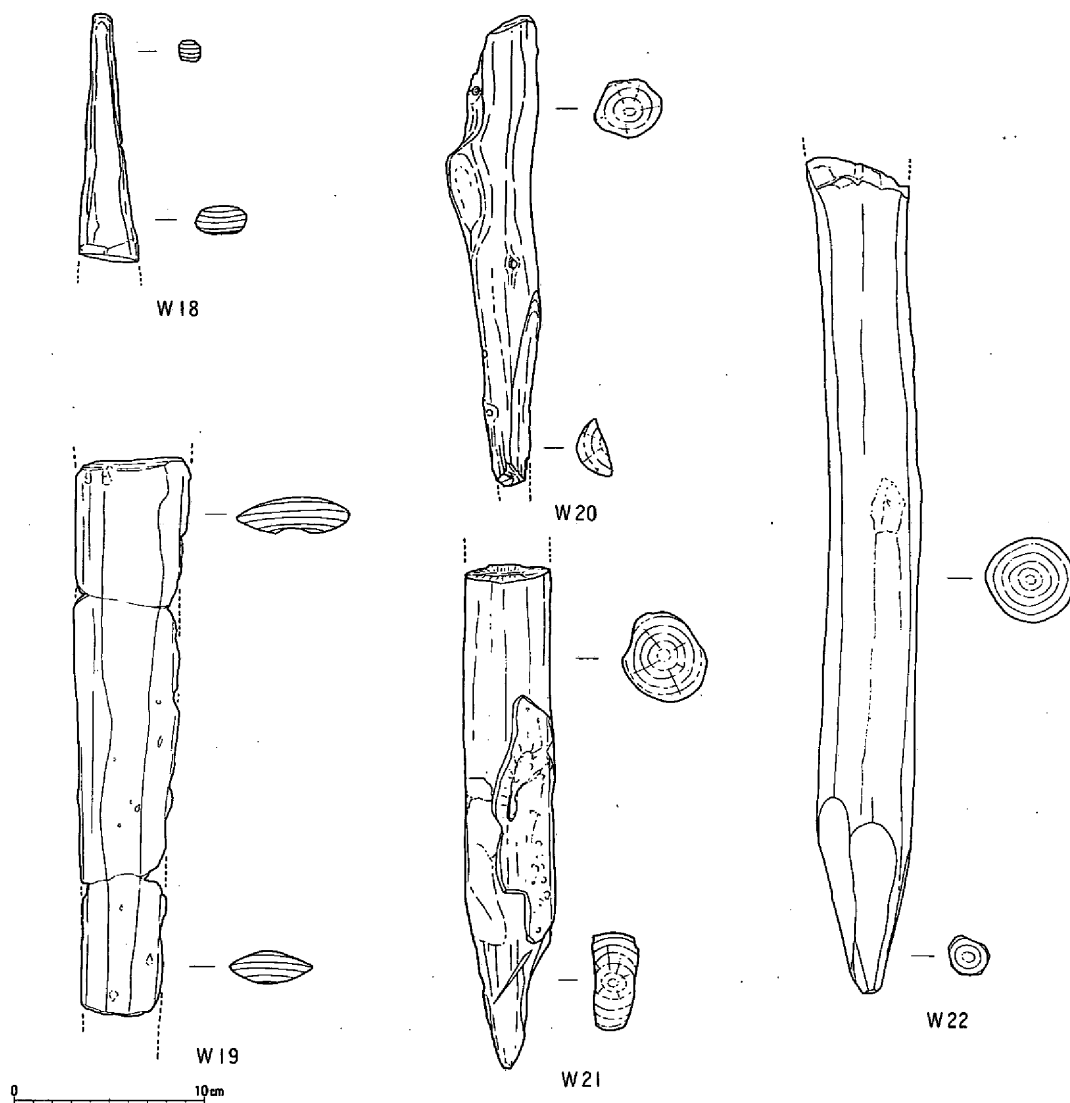


- | | | |
|--------------------------|------------------|-----------|
| 1. 暗褐色土 | 8. 淡灰色粘土層 | |
| 2. 褐色土 | 9. 暗灰色粘土(弥生後期末) | |
| 3. 黒灰色粘土 | 10. 暗灰色粘土(粗砂を含む) | |
| 4. 黒灰色土
(黄色土小ブロックを含む) | 11. 黒灰色粘土 | |
| 5. 青灰色粘土層
(黒灰色土を含む) | 12. 黄褐色砂層 | |
| 6. 青灰色粘土層 | 13. 黒灰色粘土(砂を含む) | 17. 暗灰褐色土 |
| 7. 白灰色微砂粘土 | 14. 黒灰色粘土(黄色粘土) | 18. 灰褐色土 |
| | 15. 淡青灰色粘土 | 19. 淡灰黄色土 |
| | 16. 淡褐色粘土 | |

第265図 河道3断面図(BU区; 1/60)



第266図 河道3出土遺物(4)(1/4・1/2)



第267図 河道3出土遺物(5)(木製品; 1/4)

杯・鉢など日常生活用具としての器種が大半を占める。959・962・963などが下層出土の典型的な時期を示し、それは河道が機能した時期を示しているともいえる。後期後葉の土器としては968のようにかなり大型の鉢もみられる。

S82は、打製石槍でほぼ完形品である。先端は鋭く、基部はやや凹んでいる。片面には磨いた痕跡も明瞭で、平滑に仕上げられている。

W18は、曲柄又鍬の着柄軸部分と考えられる。W19は又鍬の鍬先と考えられる破片で上・下端を欠失している。これらはアカガシが使われており、いずれも板目材である。弥生時代後期後葉から古墳時代初頭に比定される農耕具と考えられる。

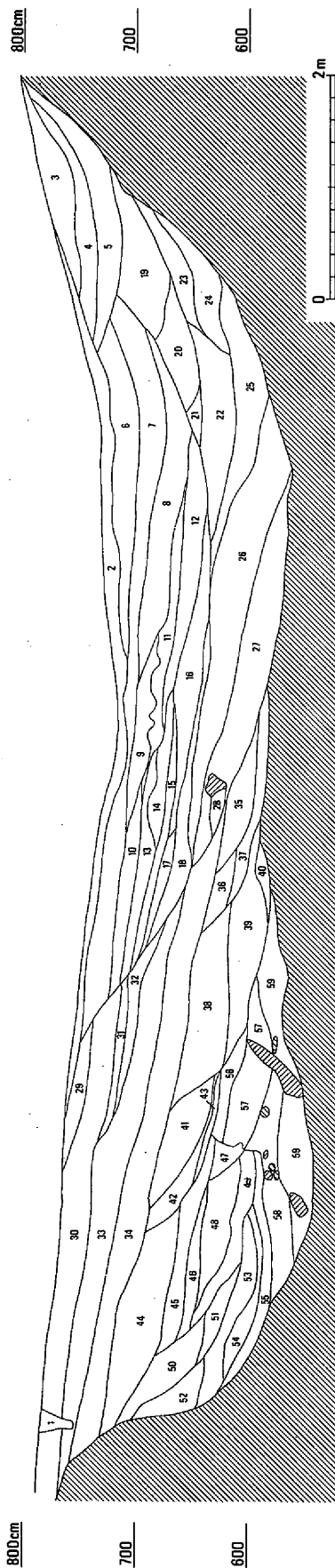
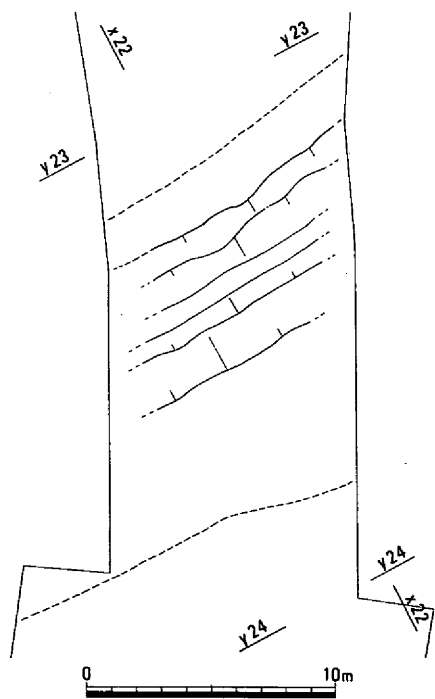
W20~22は、いずれも先端を尖らせた杭で芯持ち材が使われている。W20・21の樹種はいずれもウバメガシである。後者は、樹皮をそのまま残し、杭として加工・使用されたようである。先端の加工には、手斧のような鋭利な鉄器が使用されたと推定される。なおW22は、ヌルデが用いられている。これらの杭は河道の法面あるいは、岸に近い部分に打ち込まれて出土したものではなく、多くは第9・10層の木質遺体が多くみられた層位から堆積遺物として出土したものである。(岡田)

河道4 (第268～273図、図版45-1・2)

CH4区北部で調査区を横断する形で検出された河道で、前述の河道3の延長上に位置し、南西方向へやや湾曲の傾向をみせる。第268図の第29～59層がこれに相当し、9回以上の流路変化が辿れる。最大幅約7m、深さ2.2mを測り、底面近くには自然木が遺存していた。第1～28層からは古墳時代の遺物が出土し、弥生土器にも時期差を含むが、第273図に新しいものをまとめている。

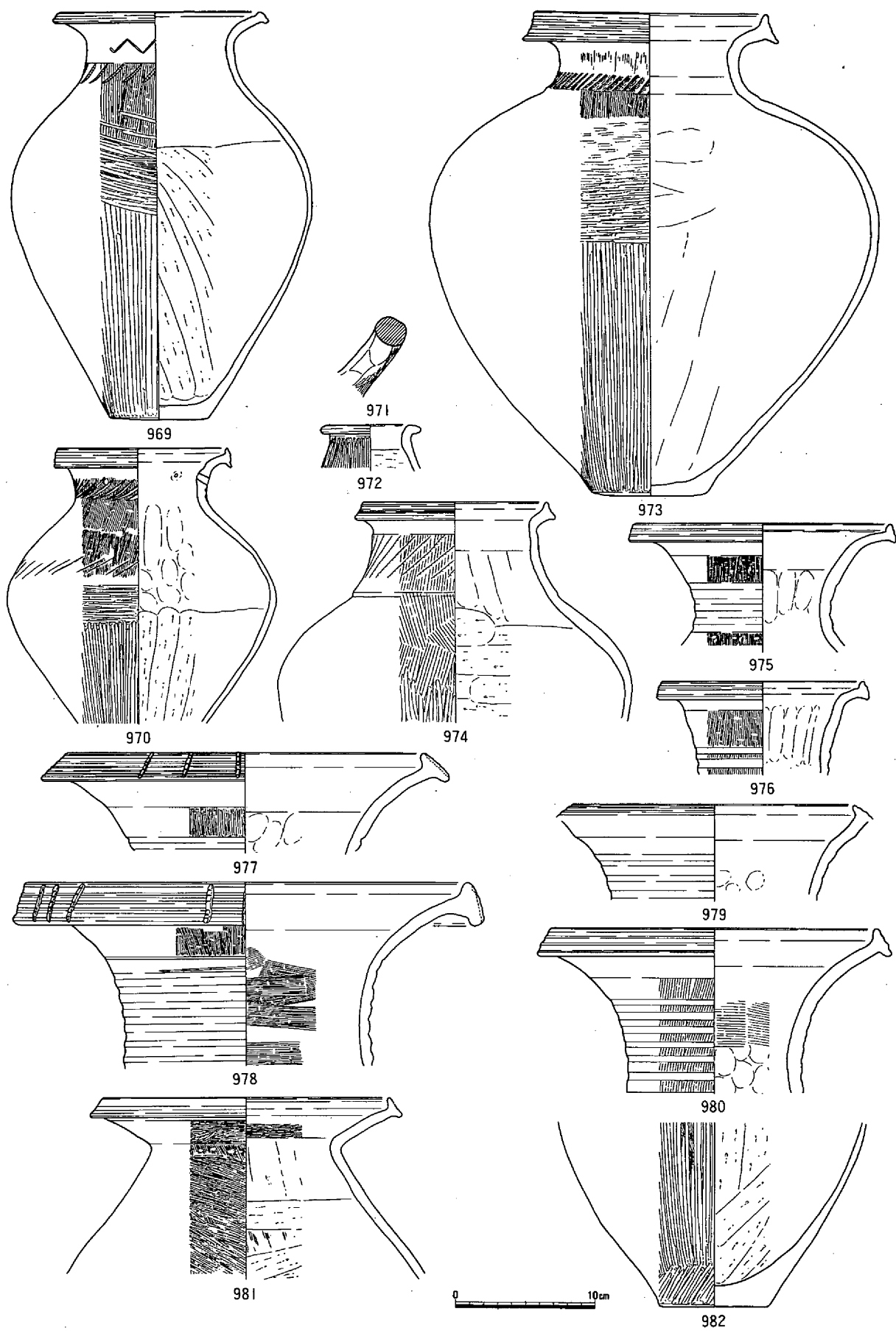
壺の口縁部は、丸く収められた972を除いて外面に凹線文が施されている。969・970・973・974には頸部に刺突文が巡らされ、970では肩部にも施されている。975～980は直立からやや外傾する頸部に凹線文が巡らされ、977・978の口縁部外面には棒状浮文が貼られている。971は水差形土器の把手である。

甕の口縁部も、983・1002を除いて外面に凹線が巡らされている。肩部から「く」字状に屈曲するものが多いが、988・989・998は頸状に直立する部分をもつ。991・992の頸部には

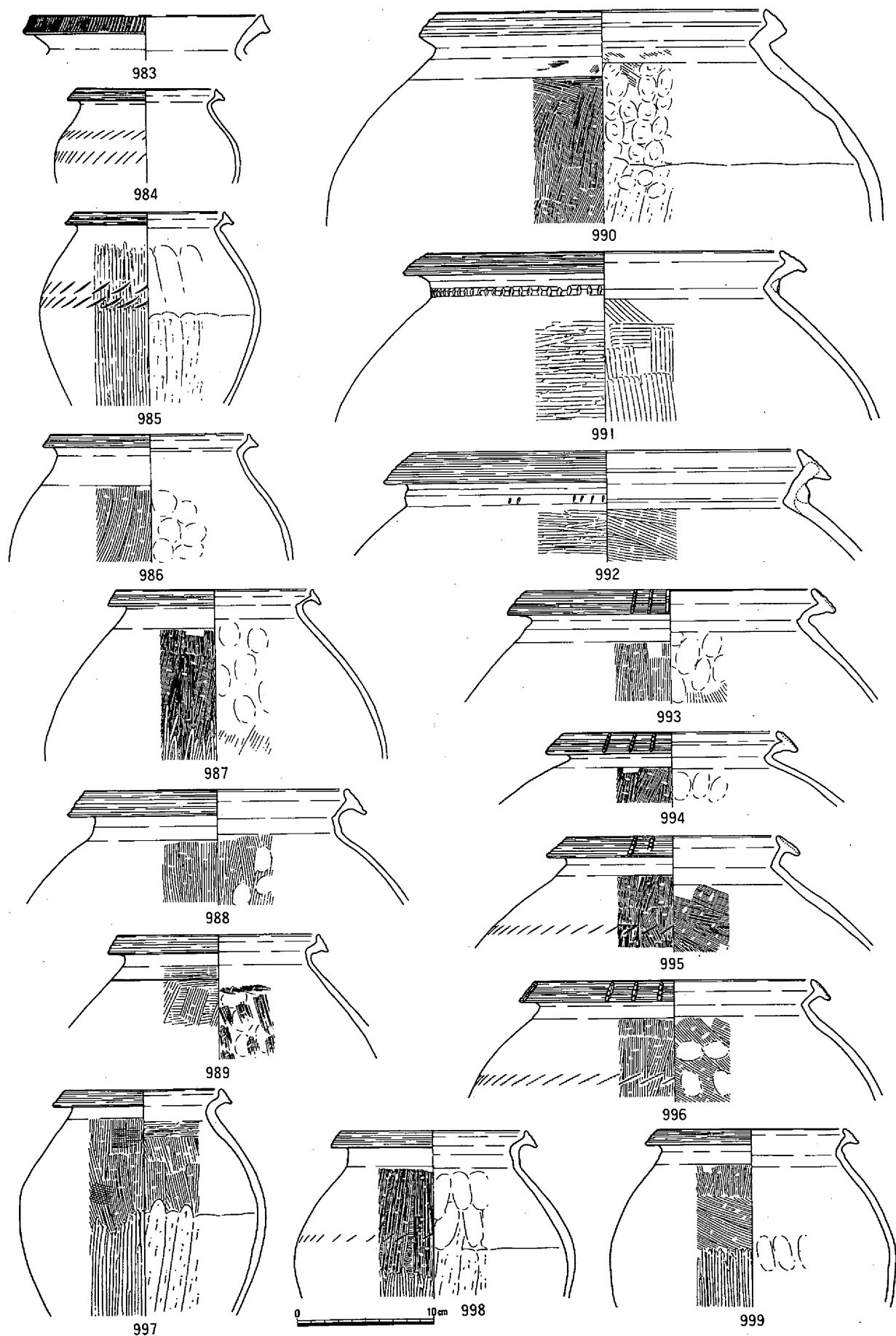


- 1. 黄灰色粘質土
- 2. 灰色粘質土
- 3. にぶい黄褐色粘質土
- 4. にぶい黄褐色粘質土
- 5. 褐色粘質土
- 6. 黄灰色粘質土
- 7. 黄灰色粘質土
- 8. 黄灰色粘質土
- 9. 黄灰色粘質土
- 10. 黄灰色粘質土
- 11. 褐色粘質土
- 12. 灰色粗砂
- 13. 黄灰色粘質土
- 14. 黄灰色粗砂
- 15. 褐色粘質土
- 16. 灰色粗砂
- 17. 黄灰色粘質土
- 18. 黄灰色粘質土
- 19. 灰色粘質土
- 20. 黄灰色粘質土
- 21. 灰オリーブ色粘質土
- 22. 灰色粘質土
- 23. 灰色粘質土
- 24. 黄灰色粘質土
- 25. 灰色粘質土
- 26. 灰色粗砂
- 27. にぶい黄色粗砂
- 28. 灰色粘質土
- 29. 暗灰色粘質土
- 30. 暗灰色粘質土
- 31. 黄灰色粘質土
- 32. 暗灰色粘質土
- 33. 黄灰色粘質土
- 34. 暗灰色粘質土
- 35. 黄灰色粘質土
- 36. 黄灰色粘質土
- 37. 灰色粘質土
- 38. 灰色粘質土
- 39. 暗灰色粘質土
- 40. 灰色粘質土
- 41. 灰色粘質土
- 42. 灰色粘質土
- 43. 黄灰色粘質土
- 44. 暗灰色粘質土
- 45. 灰色粘質土
- 46. 褐色粘質土
- 47. 褐色粘質土
- 48. 褐色粘質土
- 49. 暗灰色粘質土
- 50. 灰オリーブ色粘質土
- 51. 灰色粗砂
- 52. 灰オリーブ色粘質土
- 53. 灰色粗砂
- 54. 灰色粗砂
- 55. 黄灰色粘質土
- 56. 灰色粘質土
- 57. 灰色粘質土
- 58. 黄灰色粘質土
- 59. 黄灰色粘質土

第268図 河道4(1/300・1/60)

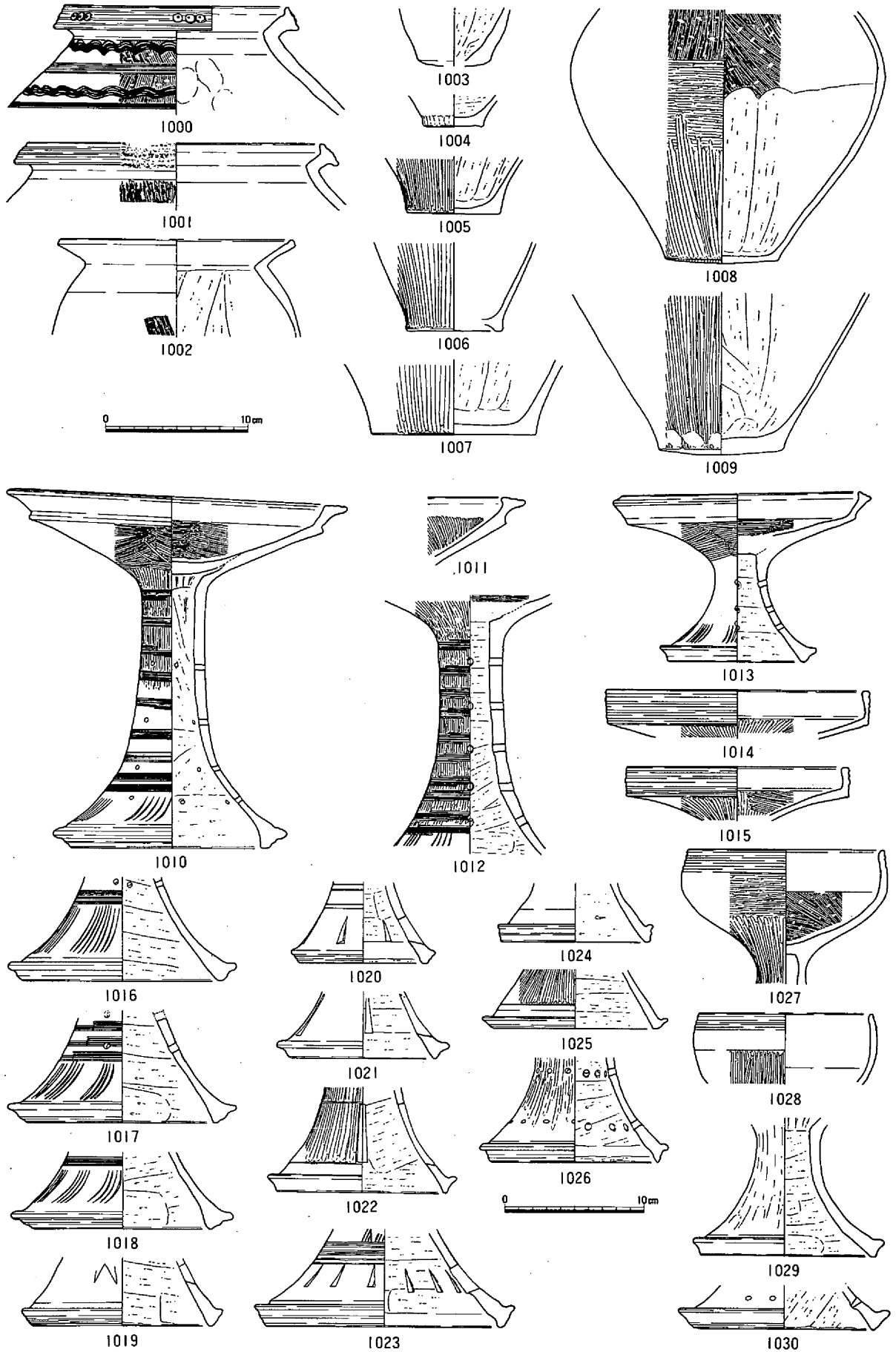


第269図 河道4出土遺物(1)(1/4)

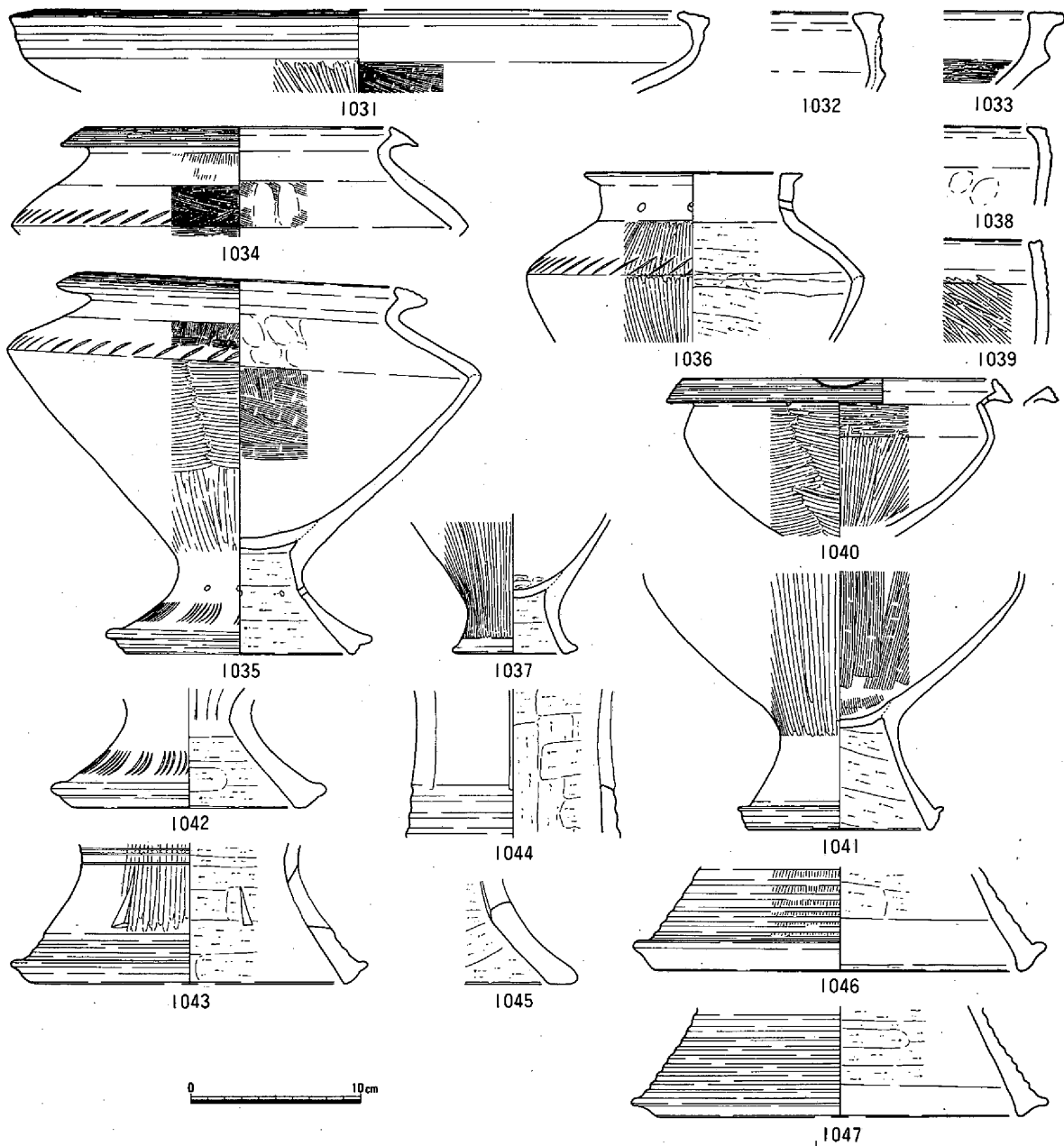


第270図 河道4 出土遺物(2)(1/4)

第3章 発掘調査の概要



第271図 河道4 出土遺物(3)(1/4)

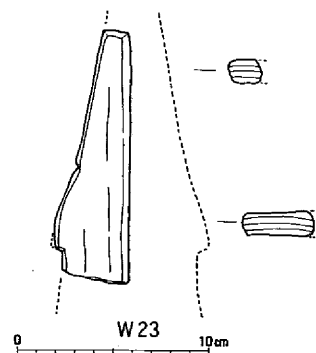


貼り付け突帯があり、993・996・1000・1001の口縁部外面に棒状ないし円形の浮文が貼られる。肩部への刺突文は984・985・995・996・998に見られ、1000には櫛描文が施されている。

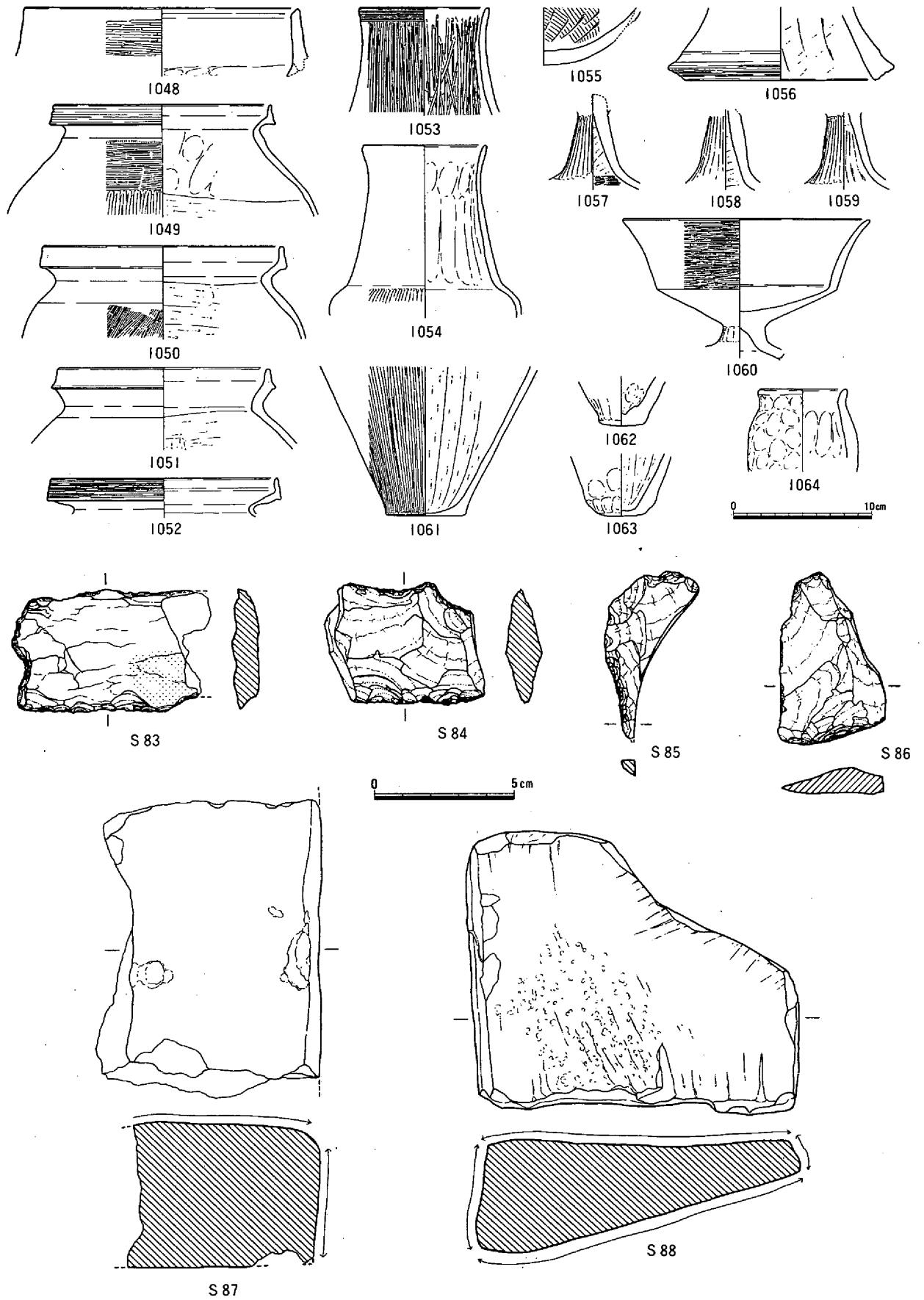
高杯の口縁部には、湾形のもの1027・1028、直立するもの1014・1015、上端が外方へ拡張するもの1010・1011・1013等があるが、いずれも端部外面に凹線が巡らされる。脚柱部は櫛描沈線文の間に円孔が配されるものが多く、脚裾部には弧状の平行沈線、三角形の透し孔の他に矢羽形透し孔1019もみられる。

この他に、鉢・台付鉢・器台等の弥生土器が出土し、木器・石器も出土しており、河道は後期前葉に出現し、古墳時代に継続するものと考えられる。

(光永)



第272図 河道4
出土遺物(4)(1/4)



第273図 河道4 出土遺物(5)(1/4・1/2)

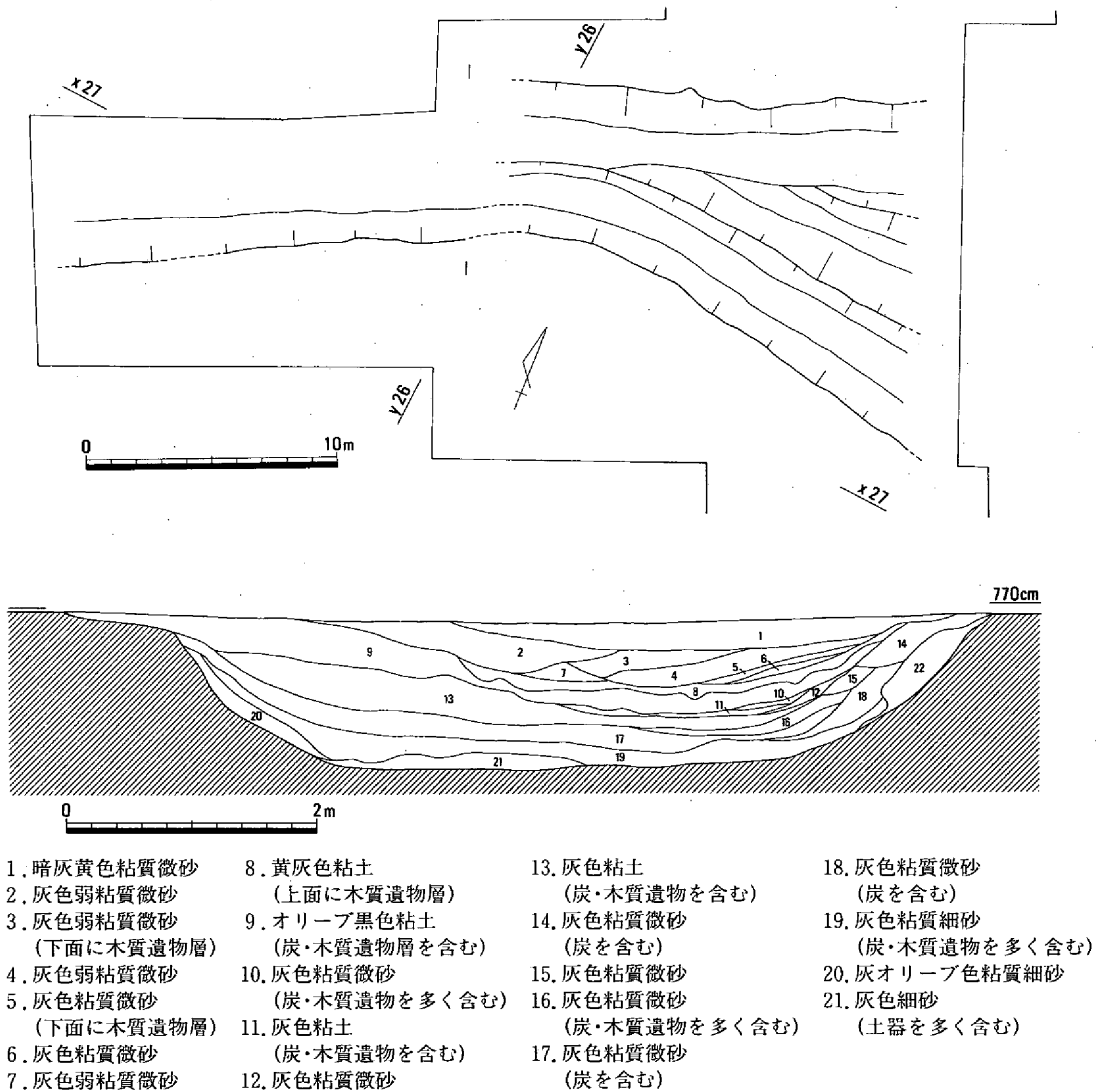
河道5 (第274～278図、図版45-3)

CH5区南部で流路をほぼ東西に置いて検出された。西端のHW3区への続き方は不詳であり、東端の状況は、南東方向へ緩く湾曲しながら何度も流路を変えた様子を示すものと思われる。位置的には縄文時代に比定される河道の北肩口に相当する。

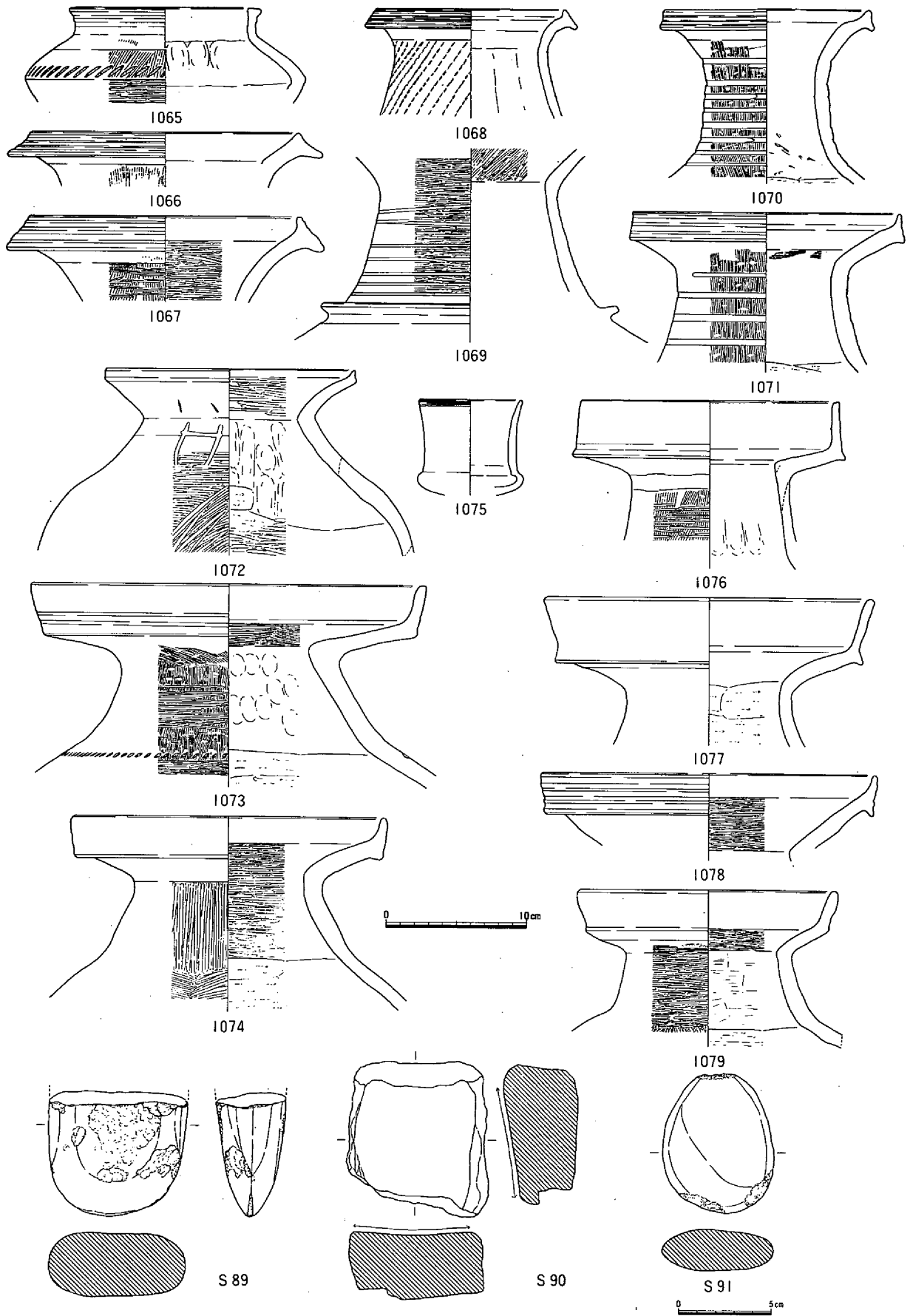
中央部での断面観察によれば、第9層以下が弥生時代の河道とみなされ、上幅6.5m、下幅3.5m、深さ1.1m程度の規模を示し、この段階では堆積に偏りは顕著ではない。

出土遺物には、弥生時代後期前葉以降の土器を含み、その中でも前葉より後葉から末葉に属するものの量が多い傾向は、河道4および河道6の弥生時代遺物の時期的構成と異なる。土器の他には、石器・石製品がある。

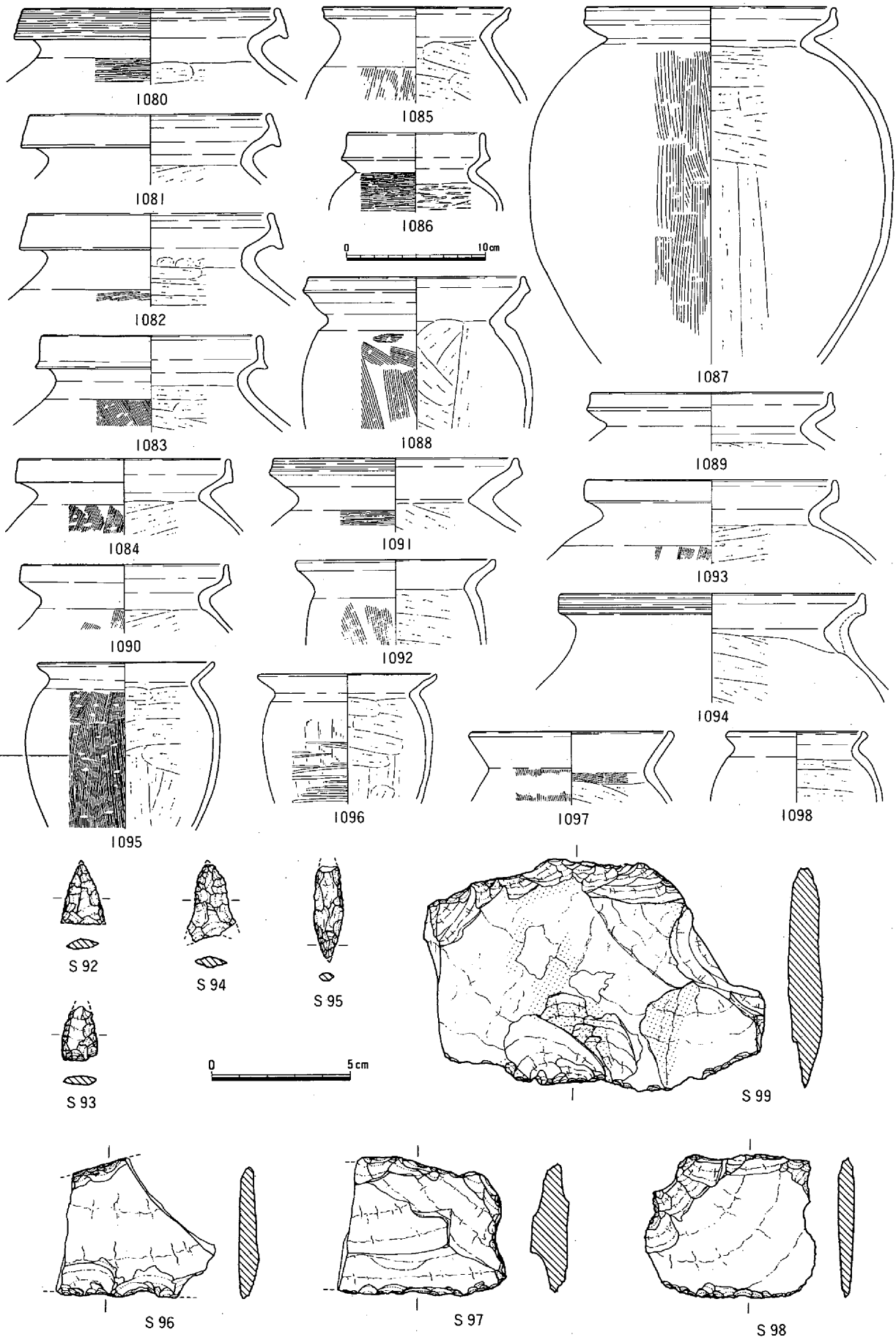
南溝手遺跡を北西から南下し、東へ流下する河道2からの出土遺物においても、後期の主体はその前葉にあり、後葉から末葉の遺物は少ない。窪木遺跡で検出された弥生時代の河道3・4・6においても主体は前葉の遺物である。周辺の微高地上で検出された遺構にも後期後葉から末葉に属するものは少なく、この河道5に接するCH5区内の微高地上でも同時期の遺構は確認されていない。このような状況の中で、河道5下層において出土した一群の遺物は注目されるものである。(光永)



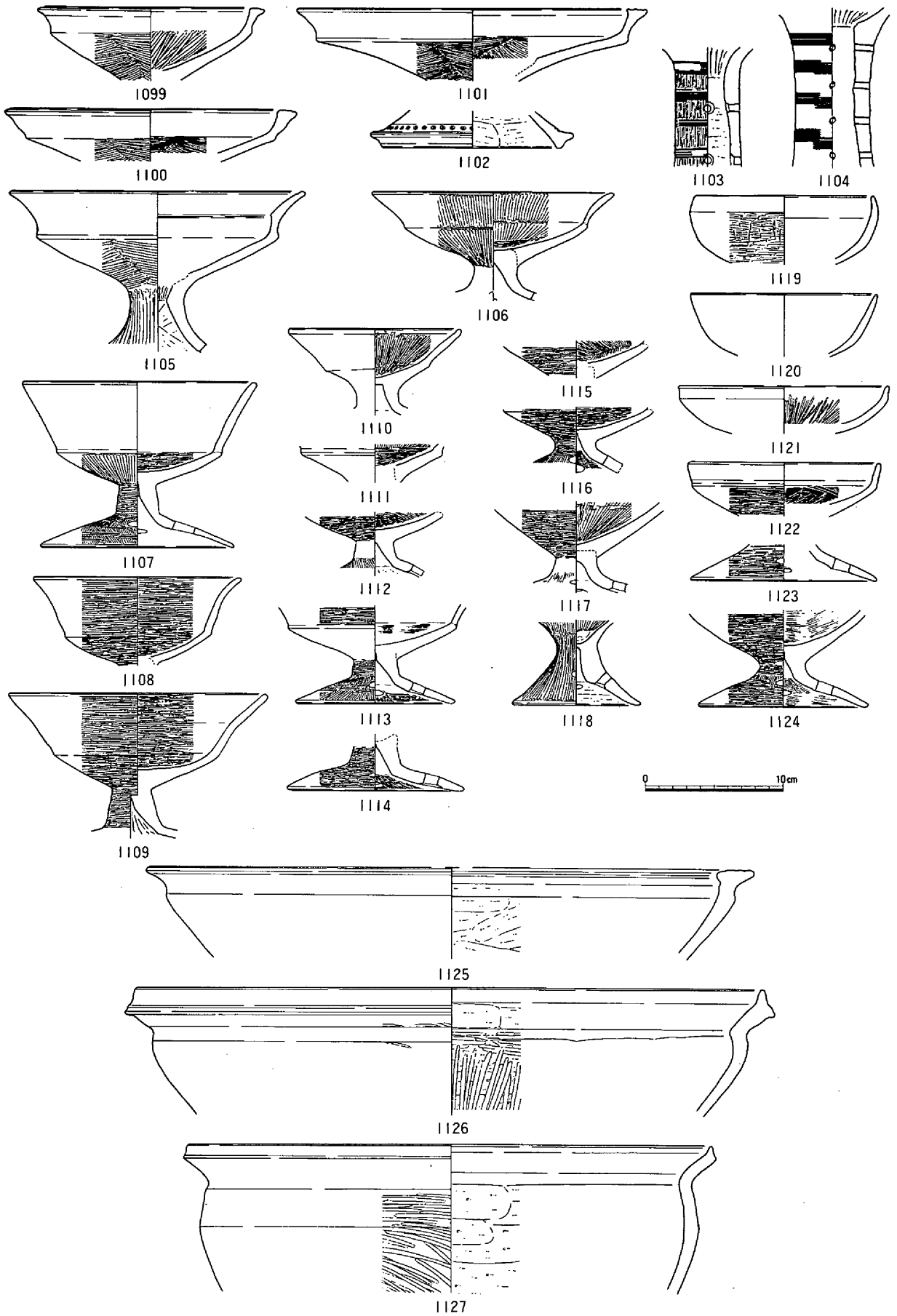
第274図 河道5(1/300・1/60)



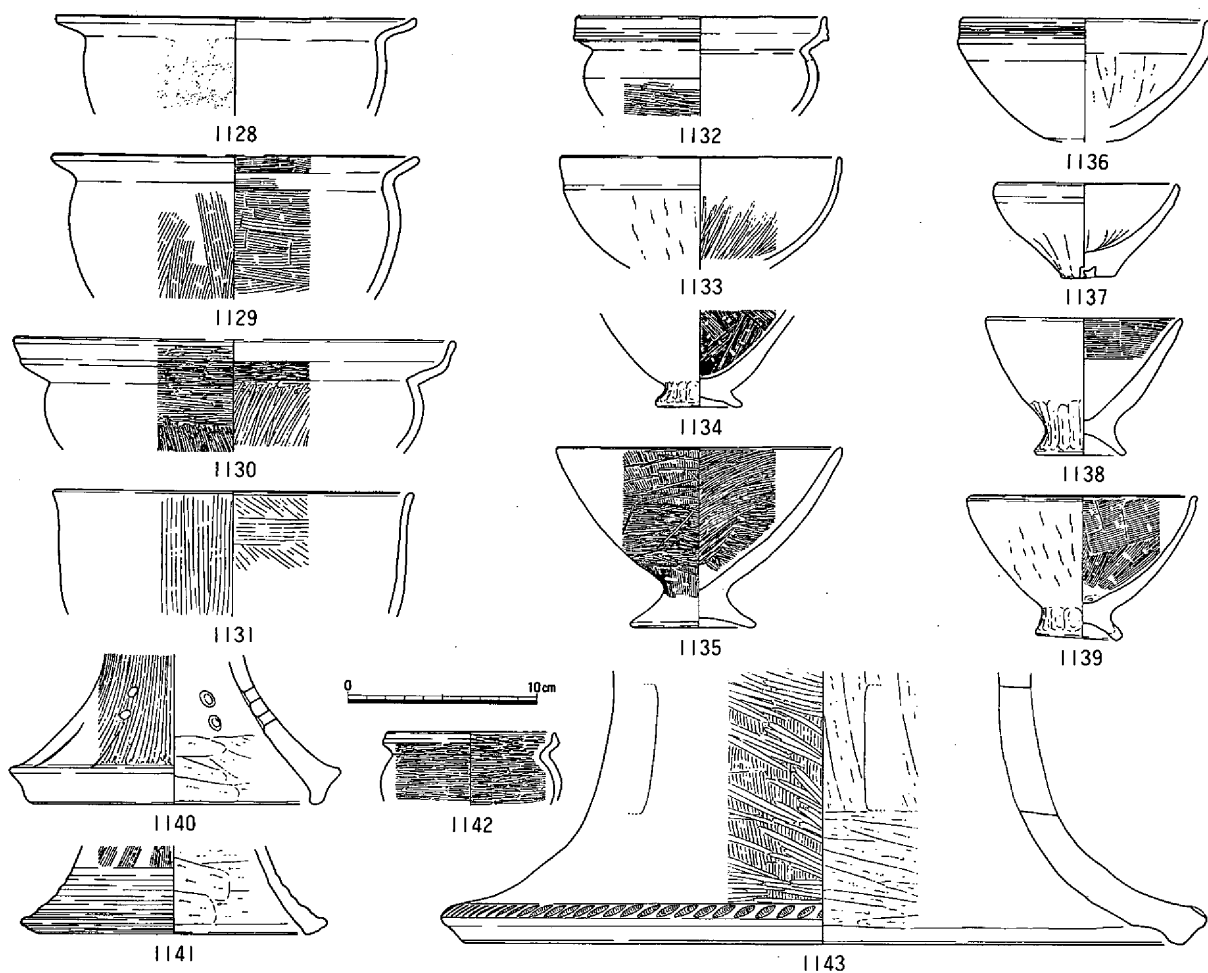
第275図 河道5出土遺物(1)(1/4・1/3)



第276図 河道5出土遺物(2)(1/4・1/2)



第277図 河道5 出土遺物(3)(1/4)

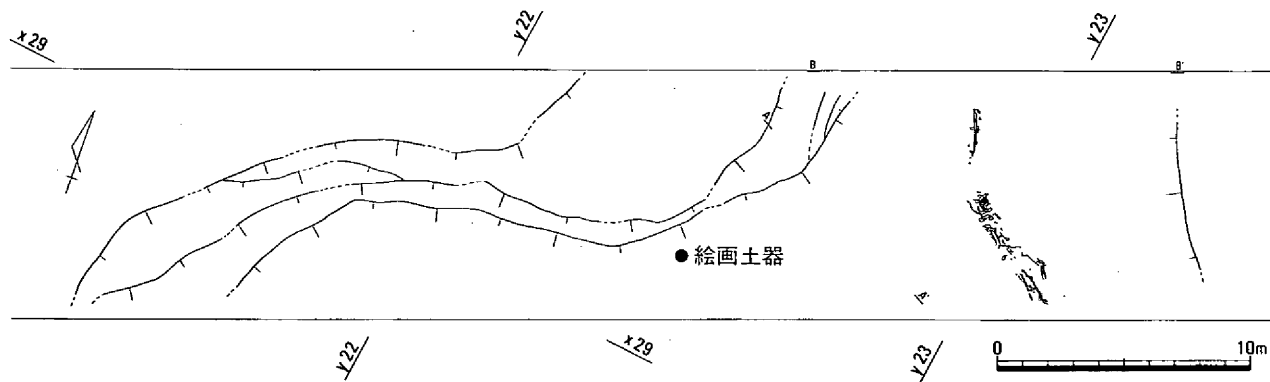


第278図 河道5出土遺物(4)(1/4)

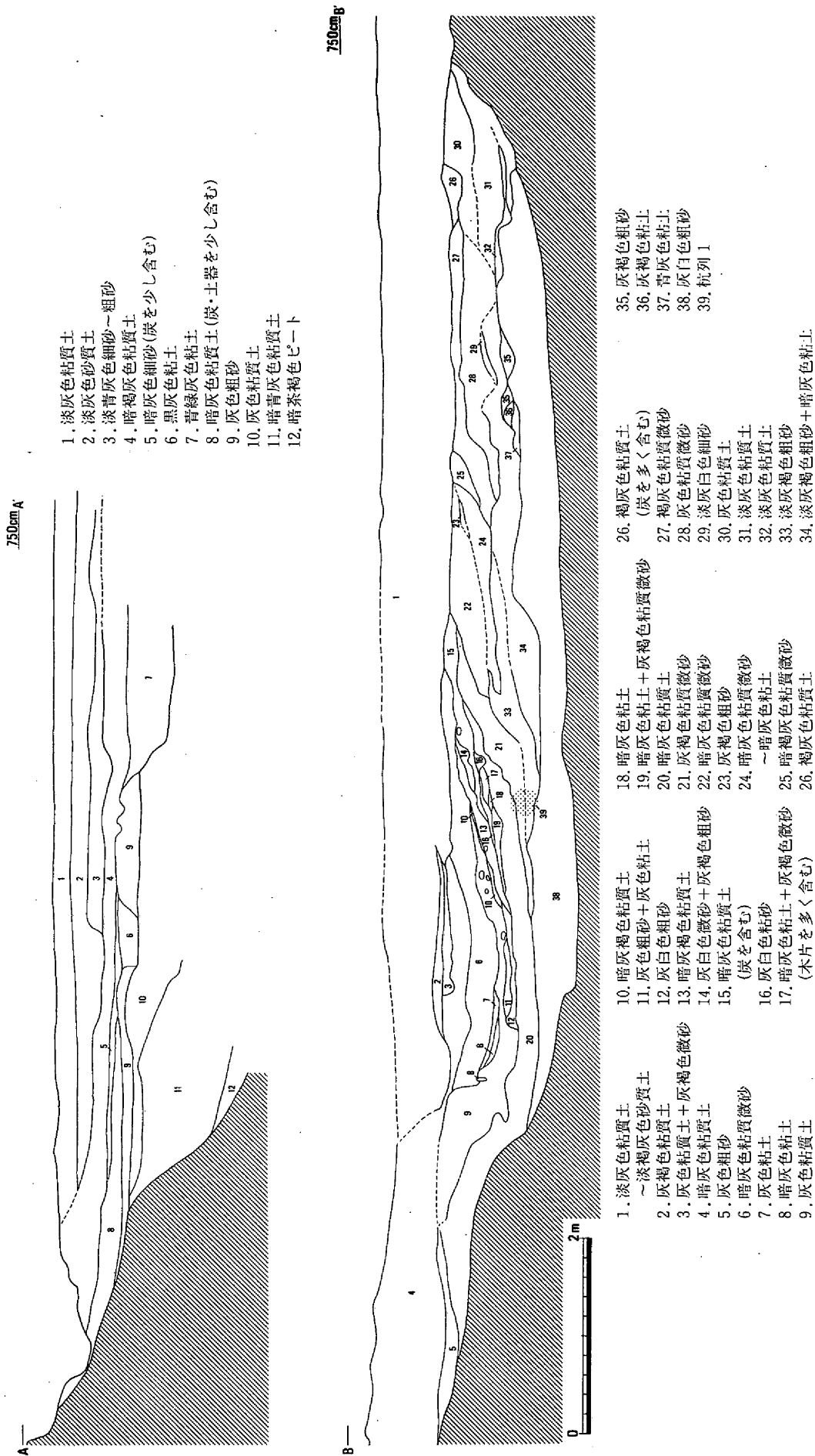
河道6 (第279～289図、図版46-1)

HW3区の西半部において検出した河道である。調査区の幅が狭いことや深さが現地表面から3m以上あったこと、および土層の堆積状況が複雑であることなどから必ずしも十分なかたちで調査できたとは言いがたいが、以下に説明を加えたい。

河道の西側の肩については第95図の溝62～64が途切れるラインを想定している。このラインは第280図A-A'の11層、同図B-B'の20層の肩部に対応している。東側の肩は弥生時代後期末葉から古墳時代前期前葉の水田層を除去した後に検出した。調査区内では北西から南東方向に確認でき、土層断面



第279図 河道6・杭列1(1/300)



- 1. 淡灰色粘質土
- 2. 淡灰色砂質土
- 3. 淡青灰色細砂～粗砂
- 4. 暗褐色粘質土
- 5. 暗灰色細砂(炭を少し含む)
- 6. 黒灰色粘土
- 7. 青緑灰色粘土
- 8. 暗灰色粘質土(炭・土器を少し含む)
- 9. 灰色粗砂
- 10. 灰色粘質土
- 11. 暗青灰色粘質土
- 12. 暗茶褐色ピート

- 1. 淡灰色粘質土
- 2. 淡褐色粘質土
- 3. 灰褐色粘質土+灰褐色微砂
- 4. 暗灰色粘質土
- 5. 灰色粗砂
- 6. 暗灰色粘質微砂
- 7. 灰色粘土
- 8. 暗灰色粘土
- 9. 灰色粘質土
- 10. 暗灰色粘質土
- 11. 灰色粗砂+灰色粘土
- 12. 灰白色粗砂
- 13. 暗灰色粘質土
- 14. 暗灰色微砂+灰褐色粗砂
- 15. 暗灰色粘質土(炭を含む)
- 16. 灰白色粘土
- 17. 暗灰色粘土+灰褐色微砂(木片を多く含む)
- 18. 暗灰色粘土
- 19. 暗灰色粘土+灰褐色粘質微砂
- 20. 暗灰色粘質土
- 21. 暗褐色粘質微砂
- 22. 暗灰色粘質微砂
- 23. 暗灰色粗砂
- 24. 暗灰色粘質微砂
- 25. 暗灰色粘土
- 26. 暗褐色粘質微砂
- 27. 暗褐色粘質微砂
- 28. 暗褐色粘質微砂
- 29. 淡灰白色細砂
- 30. 灰色粘質土
- 31. 淡灰色粘質土
- 32. 淡灰色粘質土
- 33. 淡褐色粗砂
- 34. 淡褐色粗砂+暗灰色粘土
- 35. 灰褐色粗砂
- 36. 灰褐色粘土
- 37. 青灰色粘土
- 38. 灰白色粗砂
- 39. 杭列 I

第280図 河道6・杭列1断面図(1/60)

図では、B-B'の31層の肩部に対応している。こうした状況から河道の幅については、調査区内では13～16mという数値が得られる。また河道の流れについては、窪木遺跡全体の地形から考えて北から南へと想定でき、かつ西側の肩の状況からはかなり蛇行しているものと考えられる。

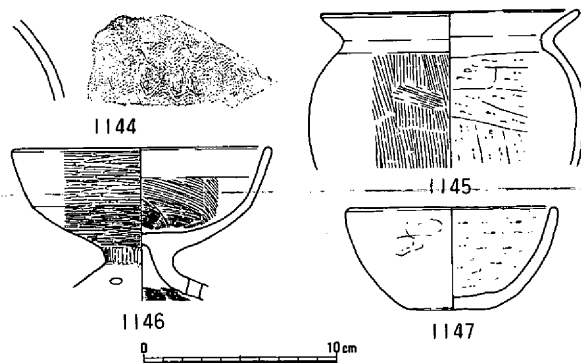
河道の西岸斜面の貝塚周辺には散在したかたちではあるが10本余りの杭が打ち込まれているのが確認できた。また東岸に沿うかたちで後に説明する杭列1が存在していた。

河道の深さや土層の堆積状況については、B-B'を参考にしたい。これによると深さは検出面から約1.4mである。また西側の微高地上における弥生時代後期の遺構検出面からは約2.4mを測る。肩部の傾斜については全体的に東側の方が急傾斜であった。土層の堆積状況については、図の6～38層が対応する。これらは大きくは6～20層と21～37層、そして38層とに区分できるように思われる。そして後に説明する杭列1は20層と21層との境界に位置していることが判明している。

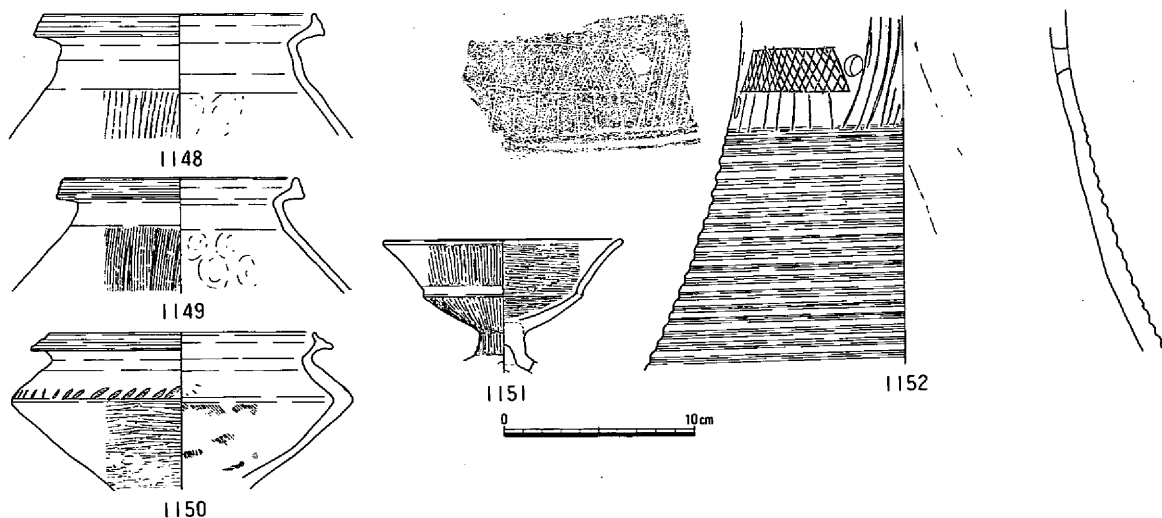
出土遺物は土器、石器、木器、獣骨、植物遺体などが整理箱約16箱出土した。図示した遺物のうち1144～1147、1151はA-A'の1・2層やB-B'の1層に対応する土層から出土した土器である。この土層は河道が埋没した後の堆積土で、特にA-A'の1層は水田層ではないかと考えている。遺物の時期は弥生時代後期末葉～古墳時代前期前葉である。

1148～1150、1152はA-A'の4～9層に対応する土層から出土したもので、これまでに述べてきた河道の上層に堆積しているが、この段階まで河道は存在していたものと考えられる。遺物の時期は弥生時代中期後葉～後期前葉である。

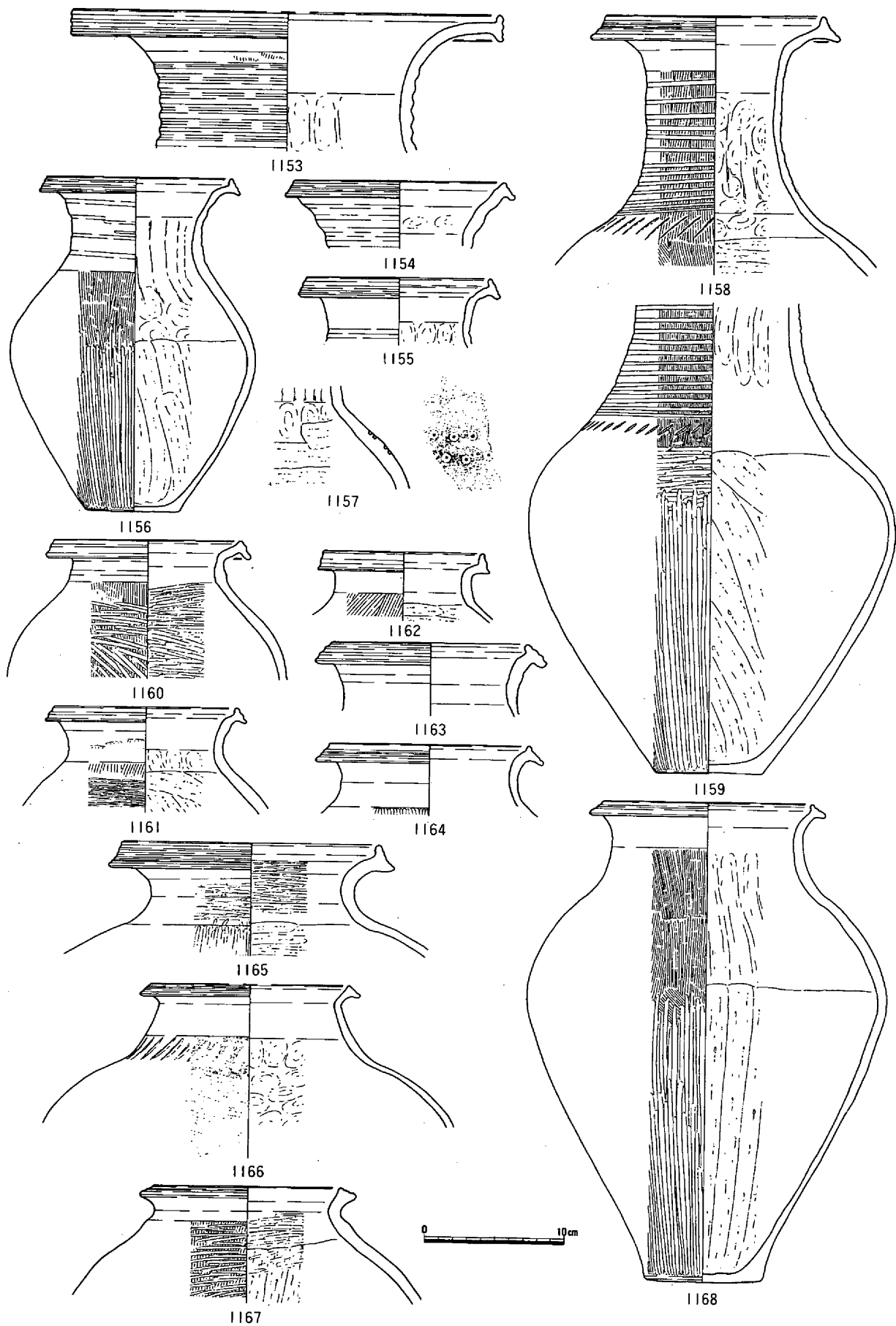
1153～1270は河道の埋土中から出土した土器である。これらのうち、1155～1157・1162・1163・1165・1169・1170・1176～1181・1184・1186・1191・1195～1197・1203・1205～1208・1212・1214・1219～1222・1224・1225・1227・1228・1232・1239・1243・1249・1261・1263・1264・1270および分銅形土製品C6は河道南西部においてA-A'11層に対応する土層からまとめて



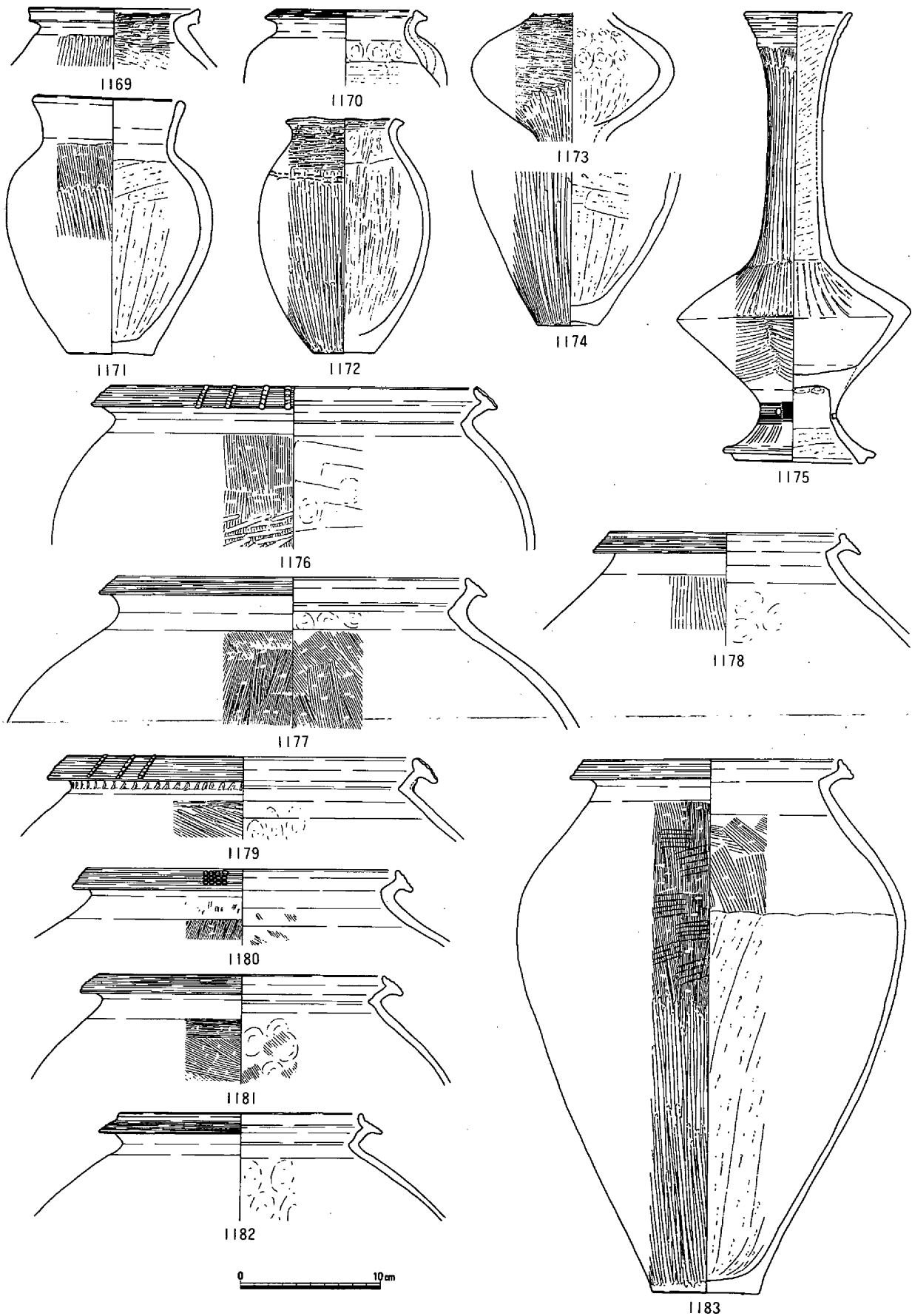
第281図 河道6出土遺物(1)(1/4)



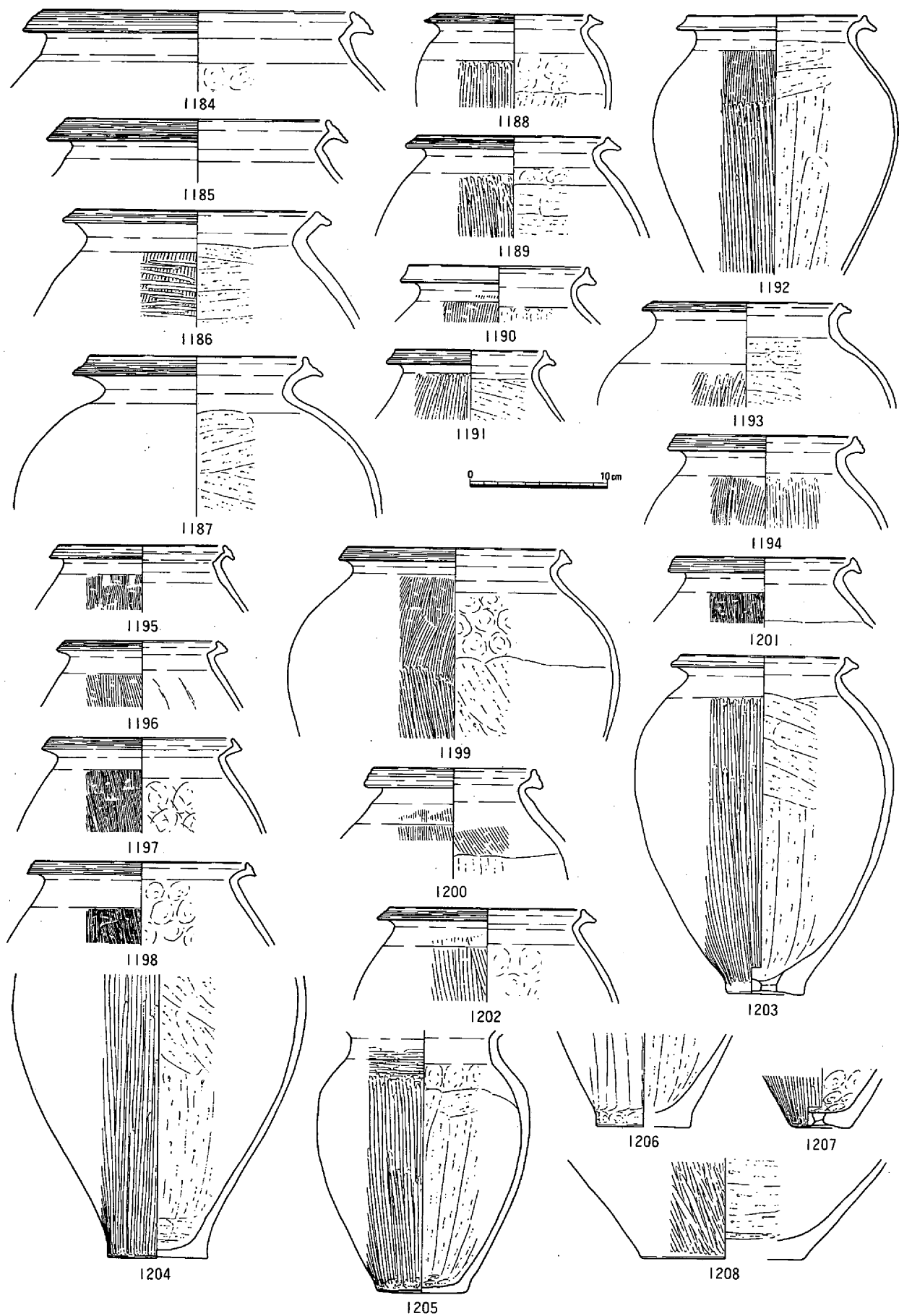
第282図 河道6出土遺物(2)(1/4)



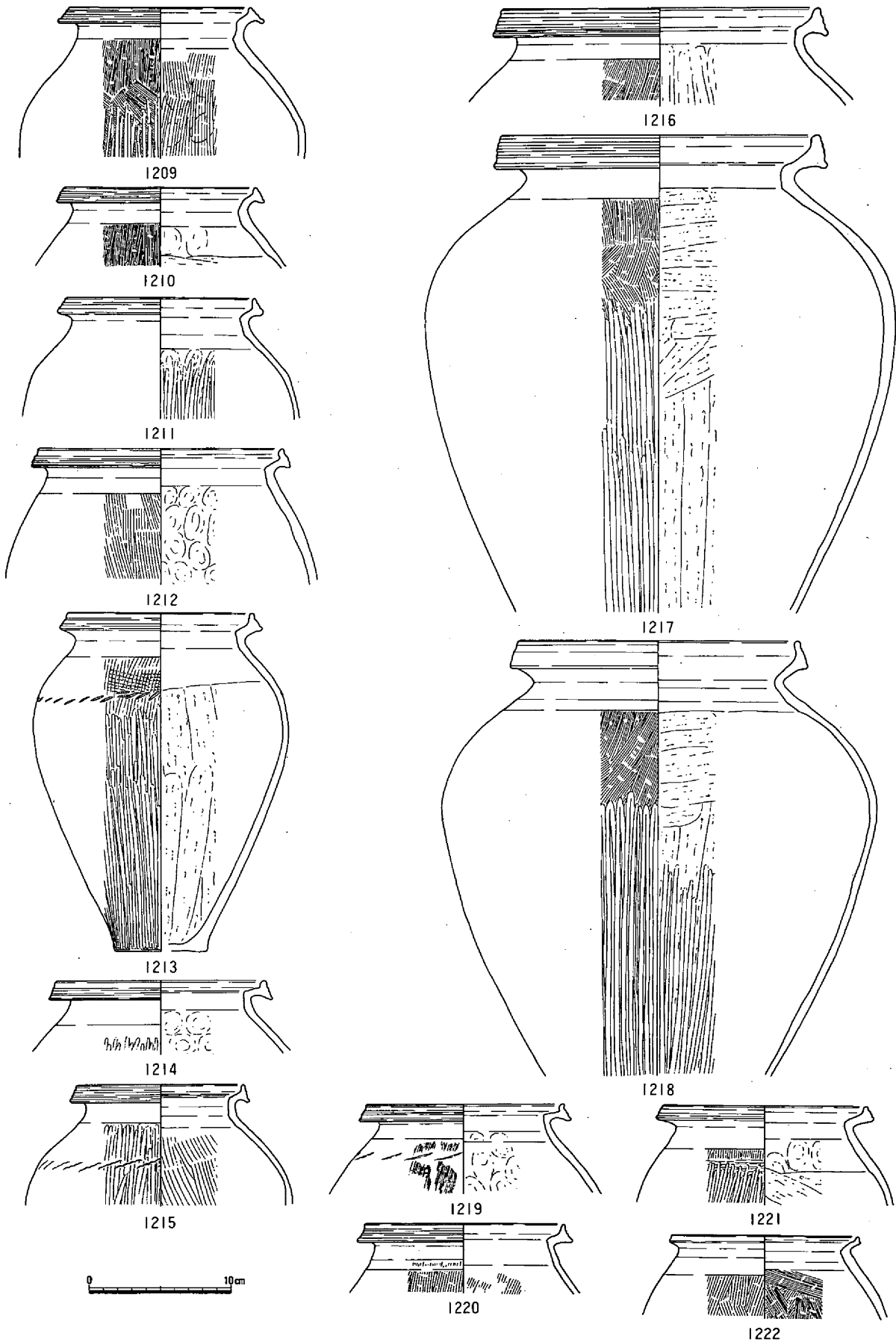
第283図 河道6 出土遺物(3)(1/4)



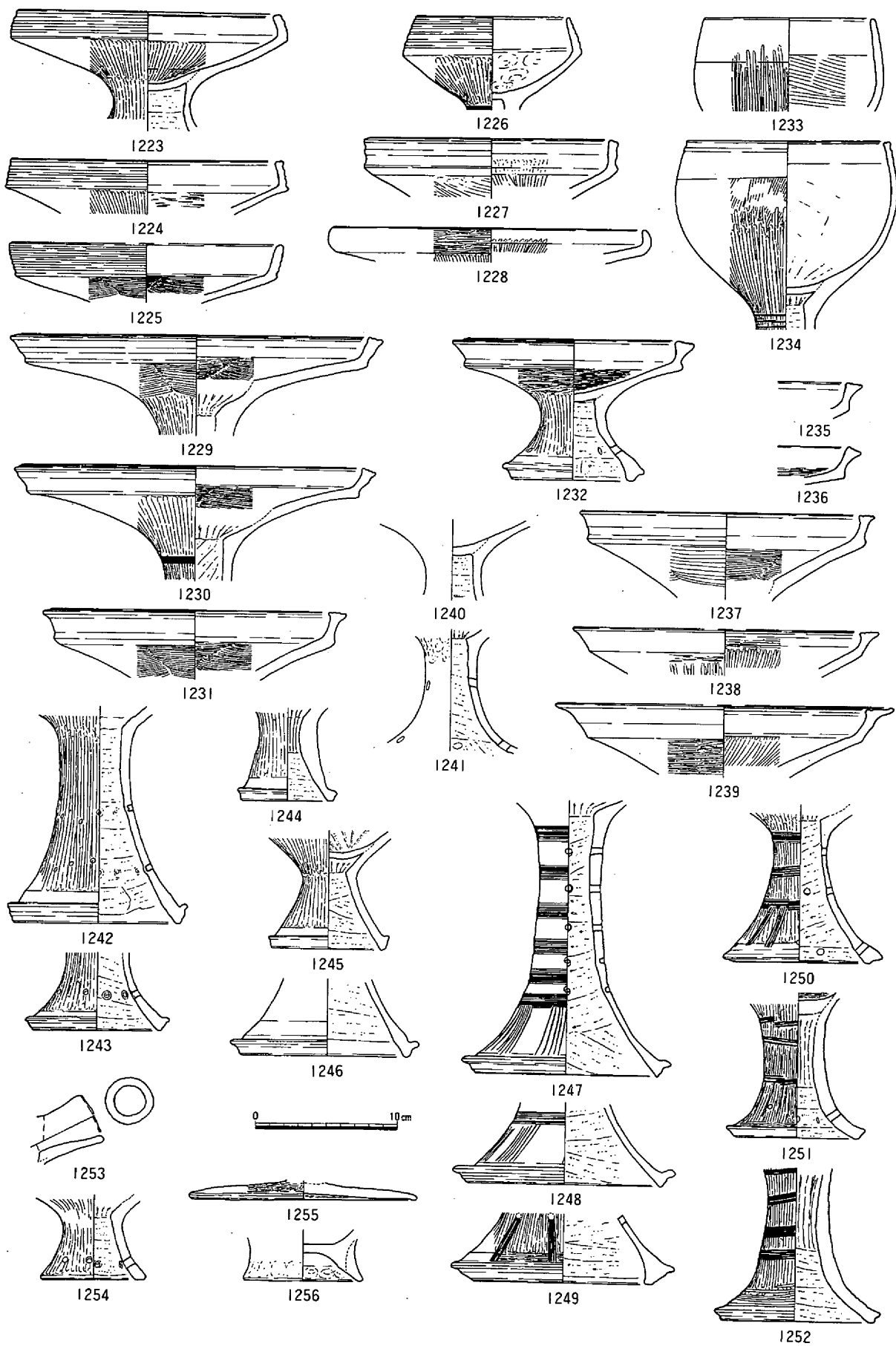
第284図 河道6出土遺物(4)(1/4)



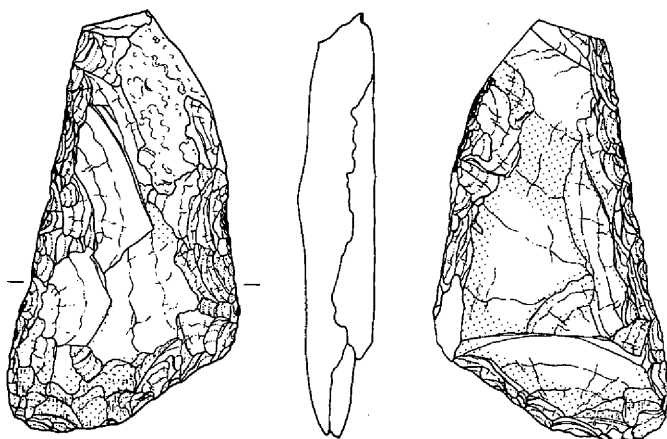
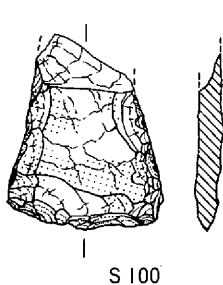
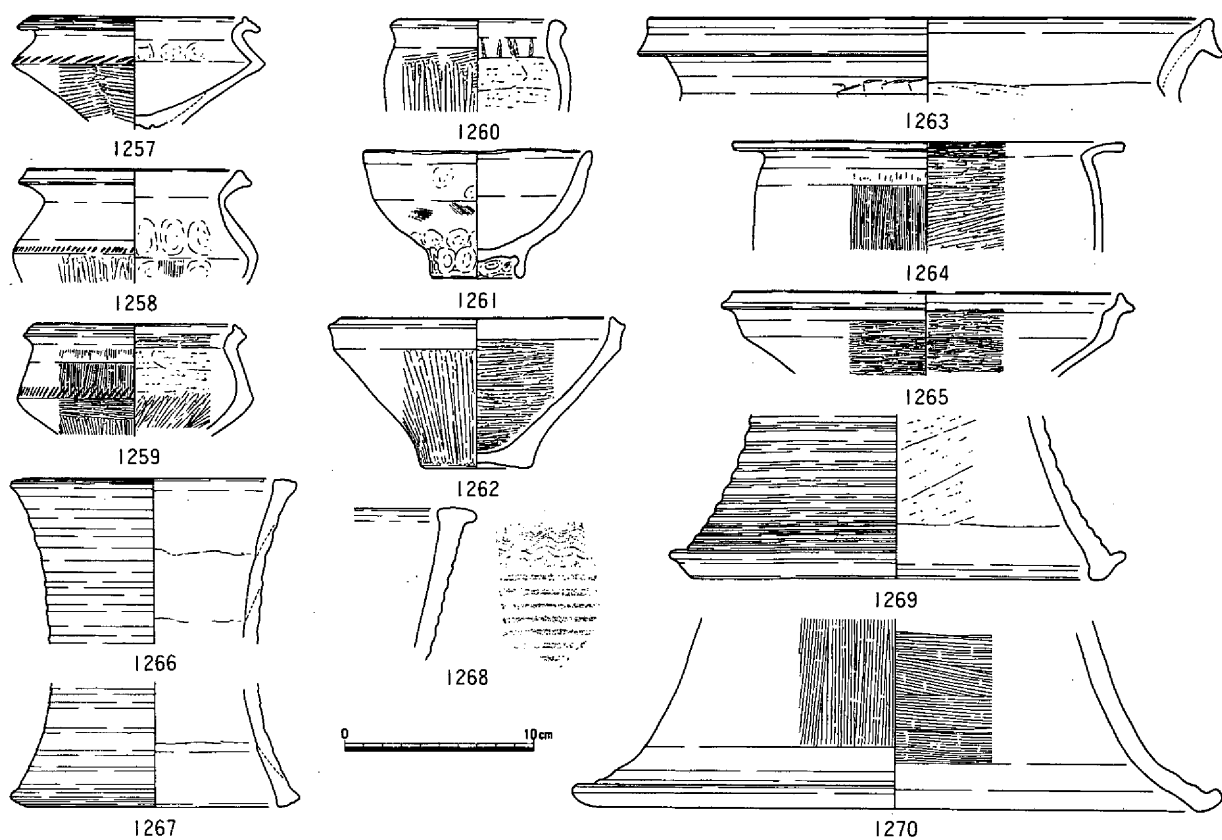
第285図 河道6 出土遺物(5)(1/4)



第286図 河道6出土遺物(6.)(1/4)



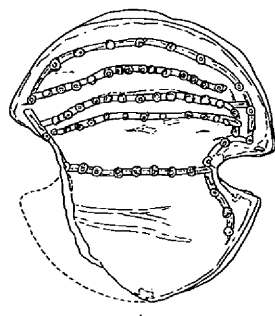
第287図 河道6出土遺物(7)(1/4)



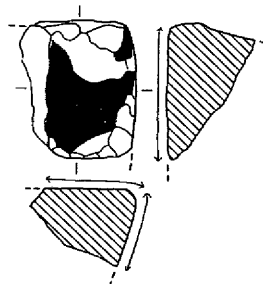
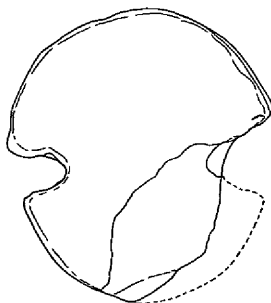
第288図 河道6出土遺物
(8)(1/4・1/2・1/3)



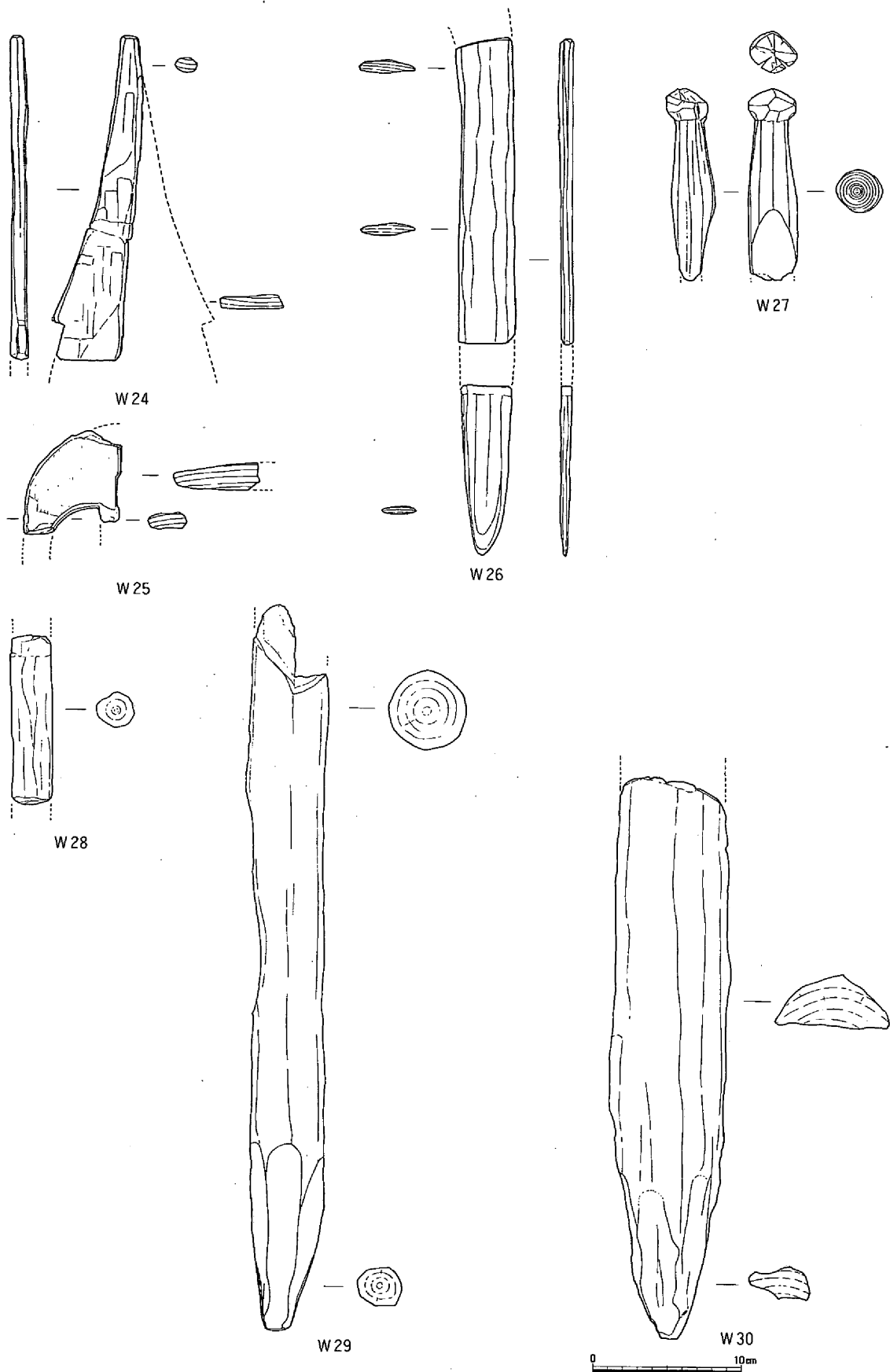
S 101



C 6



S 102



第289図 河道6出土遺物(9)(1/4)

出土している。また1161・1164・1166・1168・1171～1173・1175・1187・1188・1192～1194・1200～1202・1204・1210・1211・1213・1215・1226・1238・1244・1245・1247・1248・1250・1251・1254・1257・1259・1266はおもに東部の最下層の灰白色粗砂層（B-B'38層）から出土した。

これら上層と最下層から出土した土器はいずれも弥生時代中期後葉～後期前葉のものが混在している。したがってこの河道は後期前葉頃に埋没していったものと考えておきたい。

石器のうちS100はスクレイパーで、内外面に手ずれと思われる磨耗痕が観察できる。S101は先端部に磨耗痕と線条痕が確認でき、石鍬であろう。S102は細粒花崗岩製の砥石で図のトーンの部分にベンガラが付着している。S101・102は最下層からの出土である。分銅形土製品は通常のものに比べて大型で、表面に押し引きの竹管文による文様が施されている。木器はほとんどが最下層からの出土である。W24・26は曲柄又鍬である。W25は又鍬であろう。W27・28は何らかの柄、W29・30は杭であろう。獣骨はイノシシの肩甲骨が出土している。

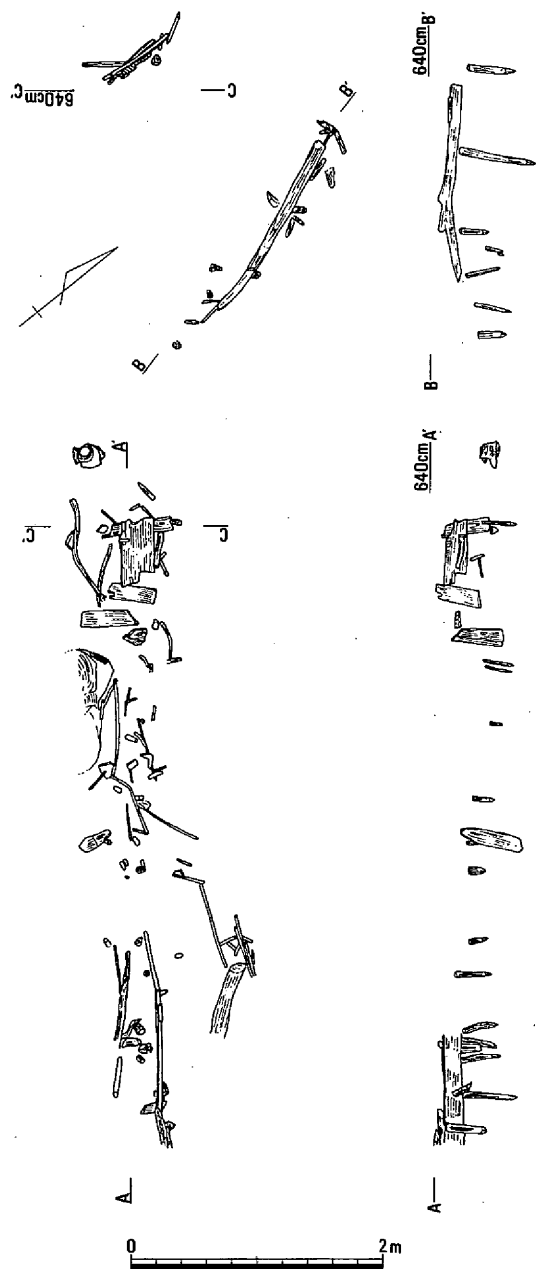
植物遺体としては現在までのところ、エゴノキとモモの核やトチノキの種子、コナラ属の果実・葉が確認できている。
(平井)

(1) 杭列

杭列1（第279・280・290～295図、図版46-2）

先に述べた弥生時代の河道6内において検出した。場所は東側の肩口から7～8m内側である。残存状態が良好ではないため、構造については明確になったとはいいがたいが、基本的には直径5～10cm前後の杭を約1～5mの間隔で不規則に打ち込み、その杭に挟まれるかもたれかける状態で、板材（建築材などの転用材が多い）や丸太材を設置したものと理解している。杭はほぼ垂直に打ち込まれており、長いもので約60cm残存していた。また板材を杭のように縦に打ち込んだものも認められた。平面的には、北端部から約3mぐらいの地点で東側に鈍角に屈曲しているように観察できる。残存していた高さは一定ではなかったが、最大で約50cmであった。なお意味は不明ではあるが、周辺には面的に一定量の焼土塊が分布していた。

この施設の性格については、第一に設置されている場所と方向が、第279図に示したように東側の肩のラインに沿っており、河道をせき止めるような位置にないこと、第二にこの施設を境にして堆積土層に大きな違いが認められること（第280図B-B'においてはこの施設は20層と21層の境の海拔



第290図 杭列1(1/60)



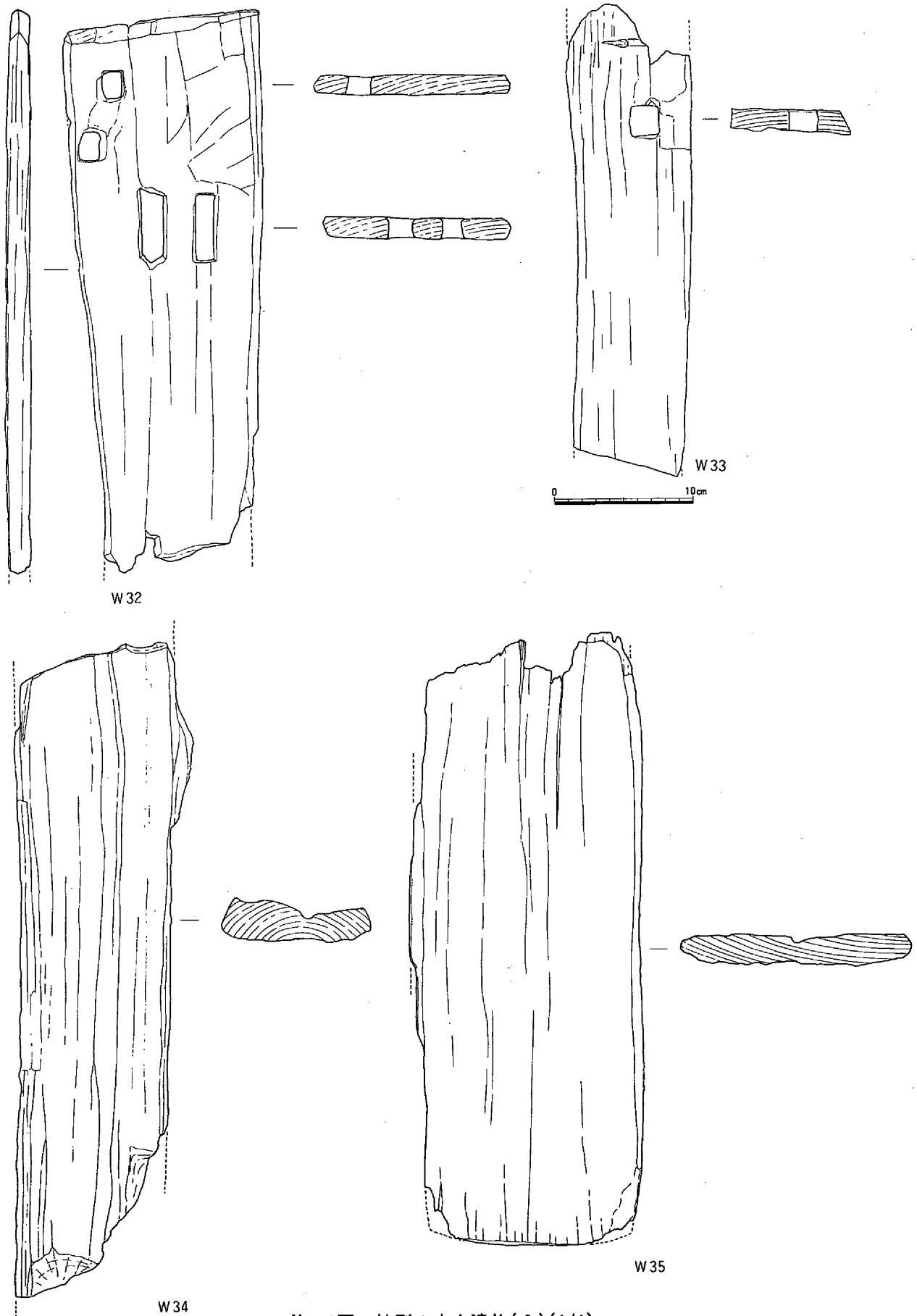
5.7m付近に位置している)から、護岸施設(水の流れを変える機能も含めて考えている)ではないかと考えている。

1271~1273はこの施設周辺から出土した土器で、1271・1272は壺、1273は甕である。時期は弥生時代後期前葉であろう。

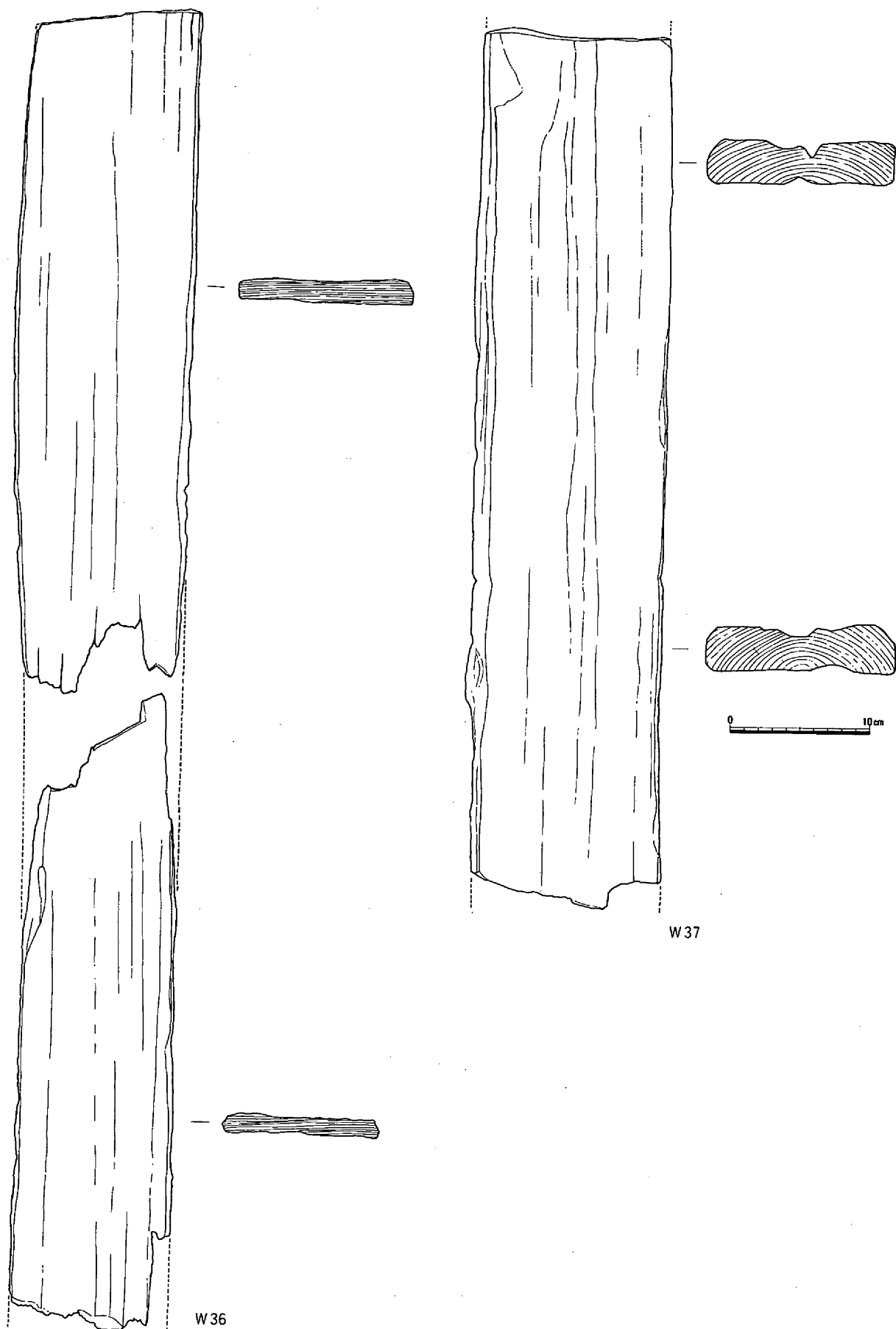
またW31~49はこの施設に用いられていた木器と杭である。

W31は残存する長さ63cm、幅16cm、厚さ2.4cmの大型品で、杭のように打ち込まれていた。鋤であろうか。樹種はアカマツと鑑定されている。W32~38は建築材を転用したものではなかろうか。W32・33にはほぞ穴が確認できる。またW34には縦方向に意識的な溝が穿たれているように観察できる。樹種はW32・36がスギ、W33がアカマツ、W34・37・38がクリ、W35がクロマツ

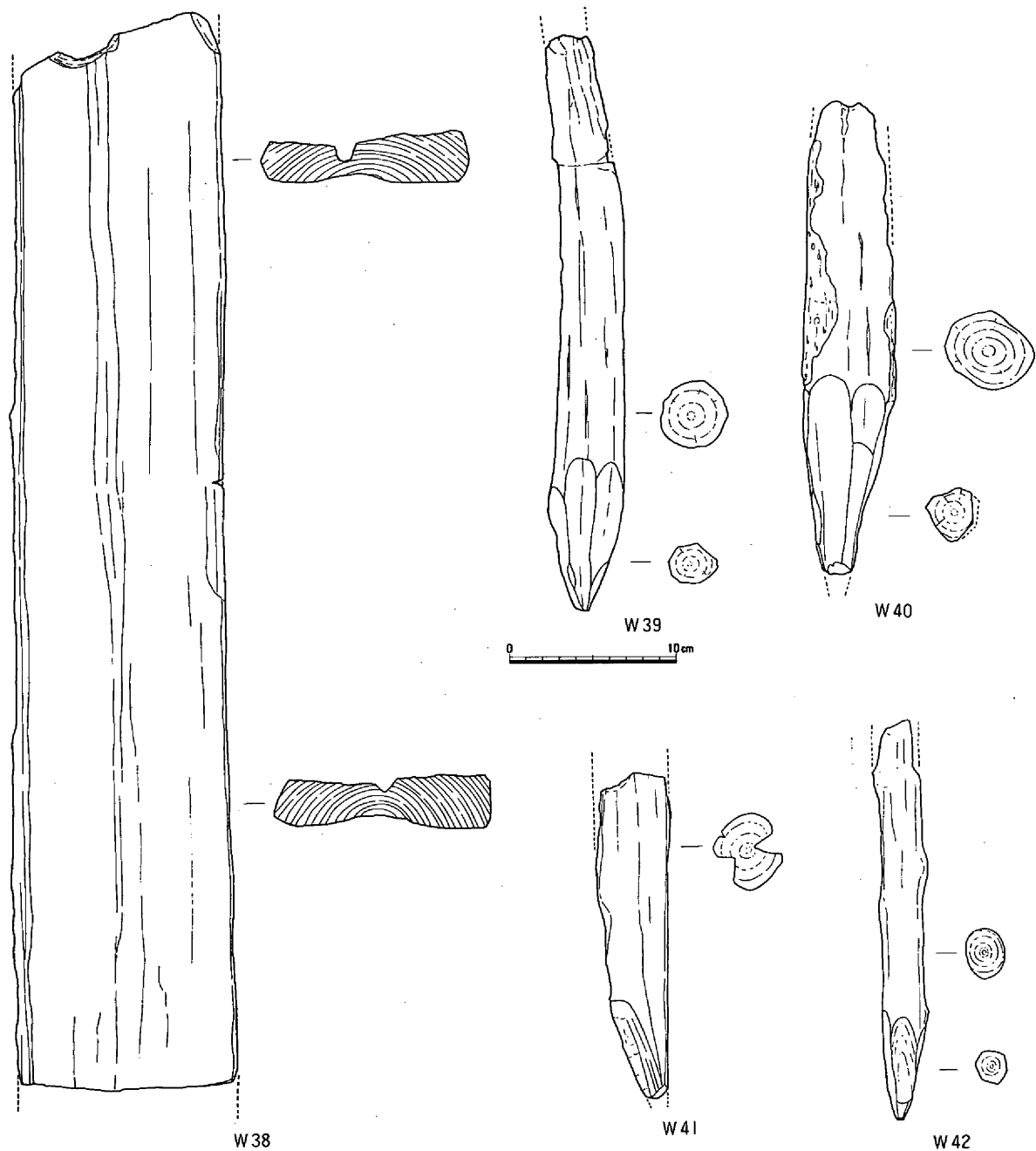
第291図 杭列1出土遺物(1)(1/4・1/2)



第292図 杭列1出土遺物(2)(1/4)



第293図 杭列1出土遺物(3)(1/4)



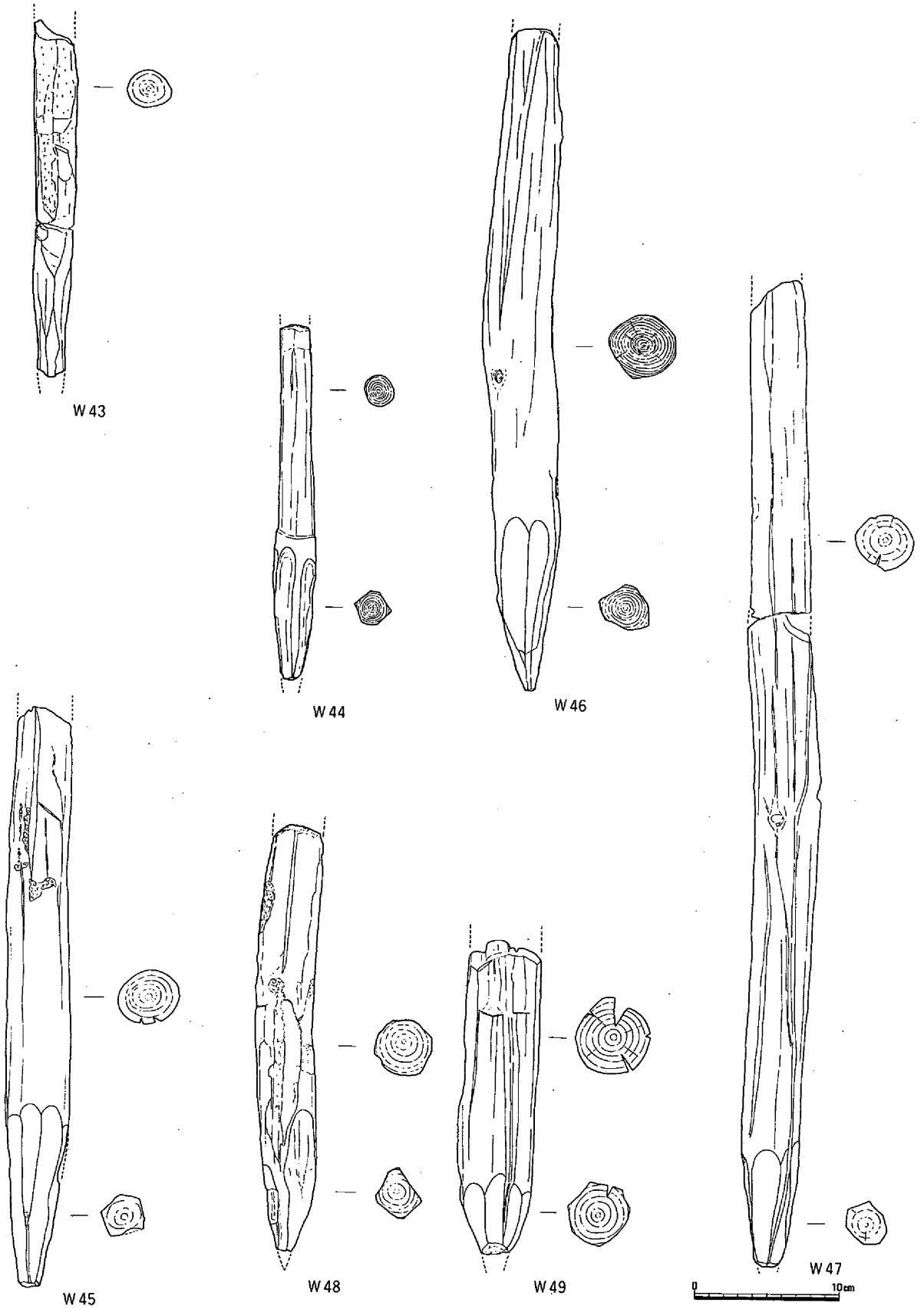
第294図 杭列1出土遺物(4)(1/4)

と鑑定されている。

W39～49は杭である。いずれも先端部を鋭利な刃物で尖らせている。W40・43・45・48には樹皮が残存していた。W39はノグルミ、W40・42はカシワ、W41・45・49はエノキ、W43はカワヤナギ、W44はニガキ、W46はネズミサシ、W48はアベマキ、W47はアラカシと鑑定されている。

この施設の設置時期については、弥生時代中期後葉か後期前葉で、廃絶時期は後期前葉と考えておきたい。

(平井)



第295図 杭列1出土遺物(5)(1/4)

(12) その他の遺構・遺物

北半調査区 (第296～299図)

ここでは、窪木遺跡のおもに北東部分すなわちPU1～3区・TA区・H18区・H19区・BU区・CH1区について、(1)～(11)の各項で取り上げることができなかつた遺構・遺物について補足的に述べたい。

PU1～3区はどちらかといえば遺構検出密度は希薄で、包含層からの出土遺物も目立たない。北方へ地形的に下がってゆく条件とも関連がある。土器の出土は少ないが、石器ではS104・110～112・119のサヌカイト製の打製石鏃やS122のスクレイパーがみられる。とりわけ、S127の磨製石包丁は時期的に遡って、弥生時代前期の比定される可能性も高い。微高地縁辺部での水田耕作との関連が考えられる遺物である。

TA区では、おもに弥生時代後期前葉の遺構検出密度がきわめて高く、井戸・土壇のほか多数の溝群とも関わって、まとまりのある集落の存在形態が明らかにされている。既述の遺構のほかに、大小多数の柱穴がある。建物としてまとめた柱穴と規模の差異はなく、あい前後する時期に存在した建築物を構成した可能性が高い。これらの柱穴の中からG26のガラス小玉が出土している。また、包含層からは、C7の紡錘車のほかに1274～1278、1283・1284、1287～1293の後期を主体とした弥生土器がみられる。また、S105・106、113～117・120のサヌカイト製打製石鏃やS124・126の石包丁などの多数の石器の出土も特筆される。

H18・19区、BU区でもやはり弥生時代後期前葉の柱穴が多数みられるが、建築遺構としてまとまるのは少ない。BU区では1279の蓋をはじめ、1281・1282・1285・1286などの土器が包含層から出土している。

CH1区では明瞭な柱穴は少なく、浅い凹みのようなピットが多数散在している。削平によって包含層も薄く、遺構を含め出土量は少ない。石器としてS123・128のスクレイパー、敲石やS131の砥石などがある。

(岡田)

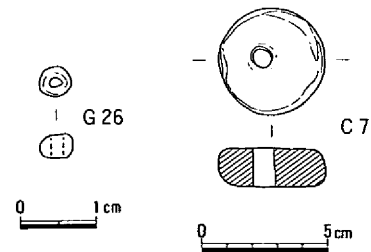
南半調査区 (第300・301図)

南溝手遺跡においては、低位部においてこの時期の水田を報告しているが、窪木遺跡においても土層からは同様の状況が指摘されるものの、平面的には十分な把握ができなかつた。

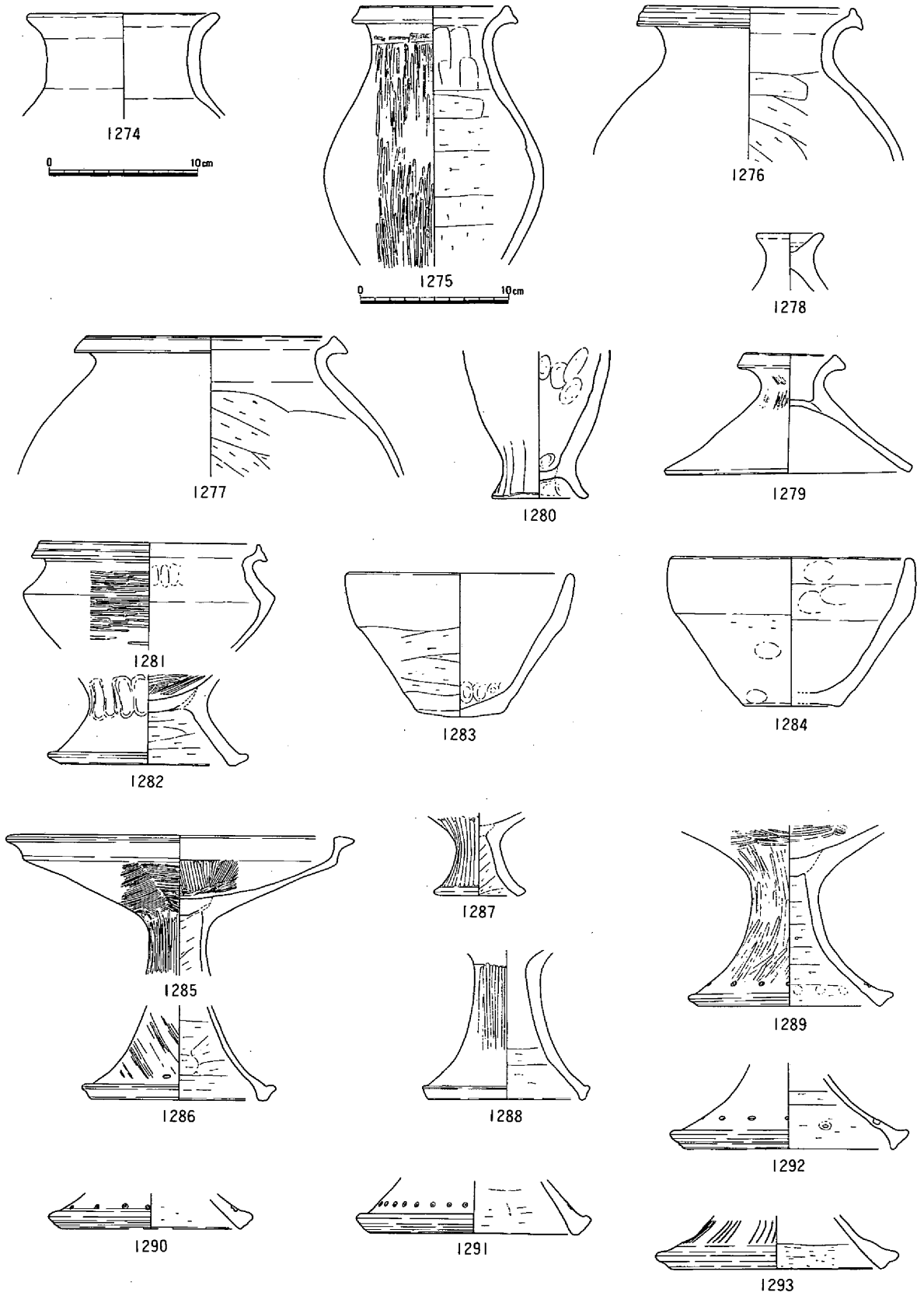
第300図の土器のうち、1294・1307・1310がHO区、1304・1311がK区、1305がCH2区、1296・1303・1306がCH5区、1313がHW1区の出土で、他はHW3区からの出土である。土製紡錘車C9および同未製品C8はCH5区からの出土である。

第301図の石器のうち、S140・142・145・148・151～153・155・156・159・162・163・165・166・171がKO1区、S141・143・144・146・147・149・150・154・157・158・160・161・164がKO2区、S132・135・169がK10区、S133・134・170がK区、S137・138がCH3区、S167・168がCH4区、S136・139がHW3区から、それぞれ出土している。

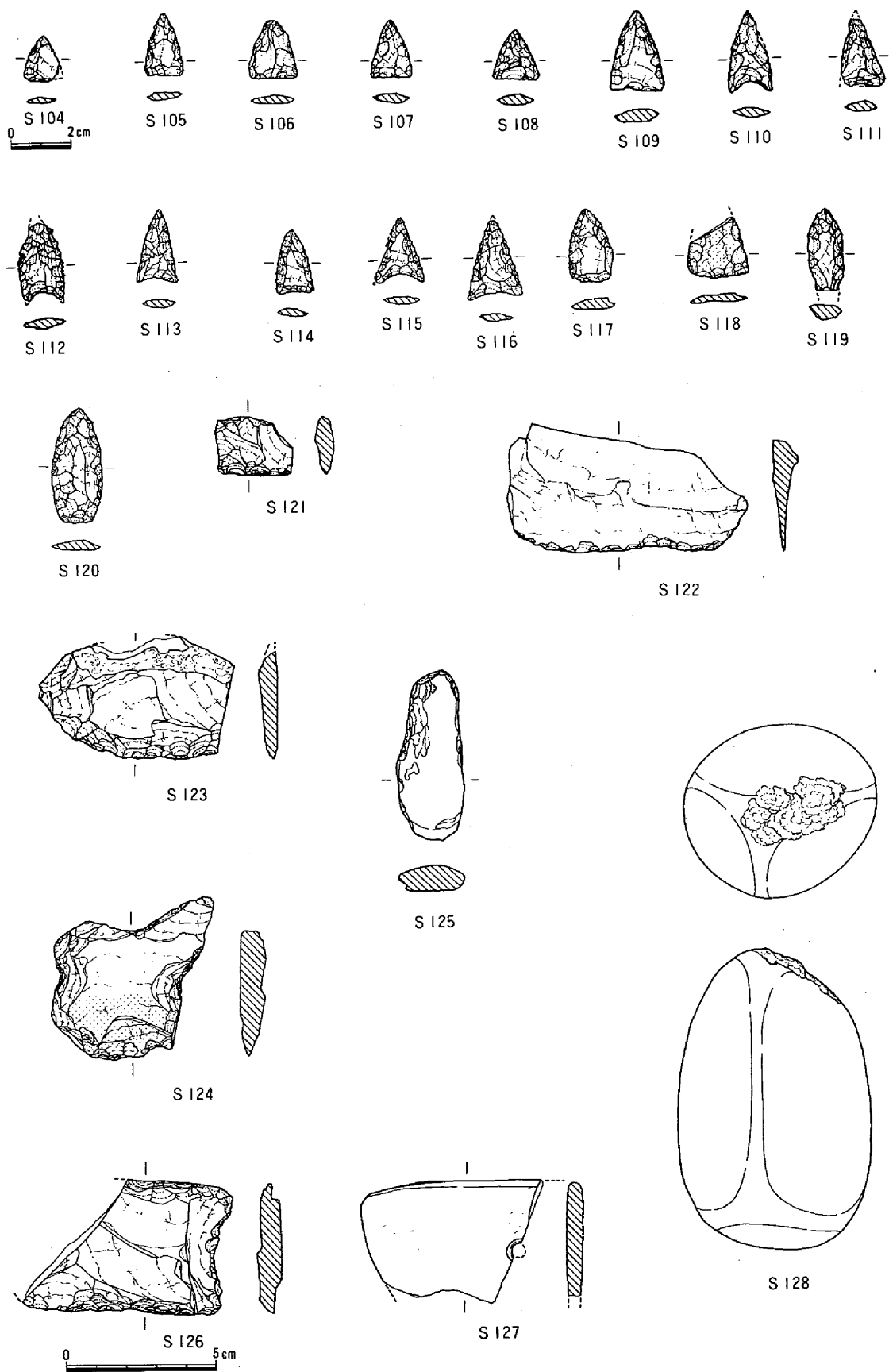
(光永)



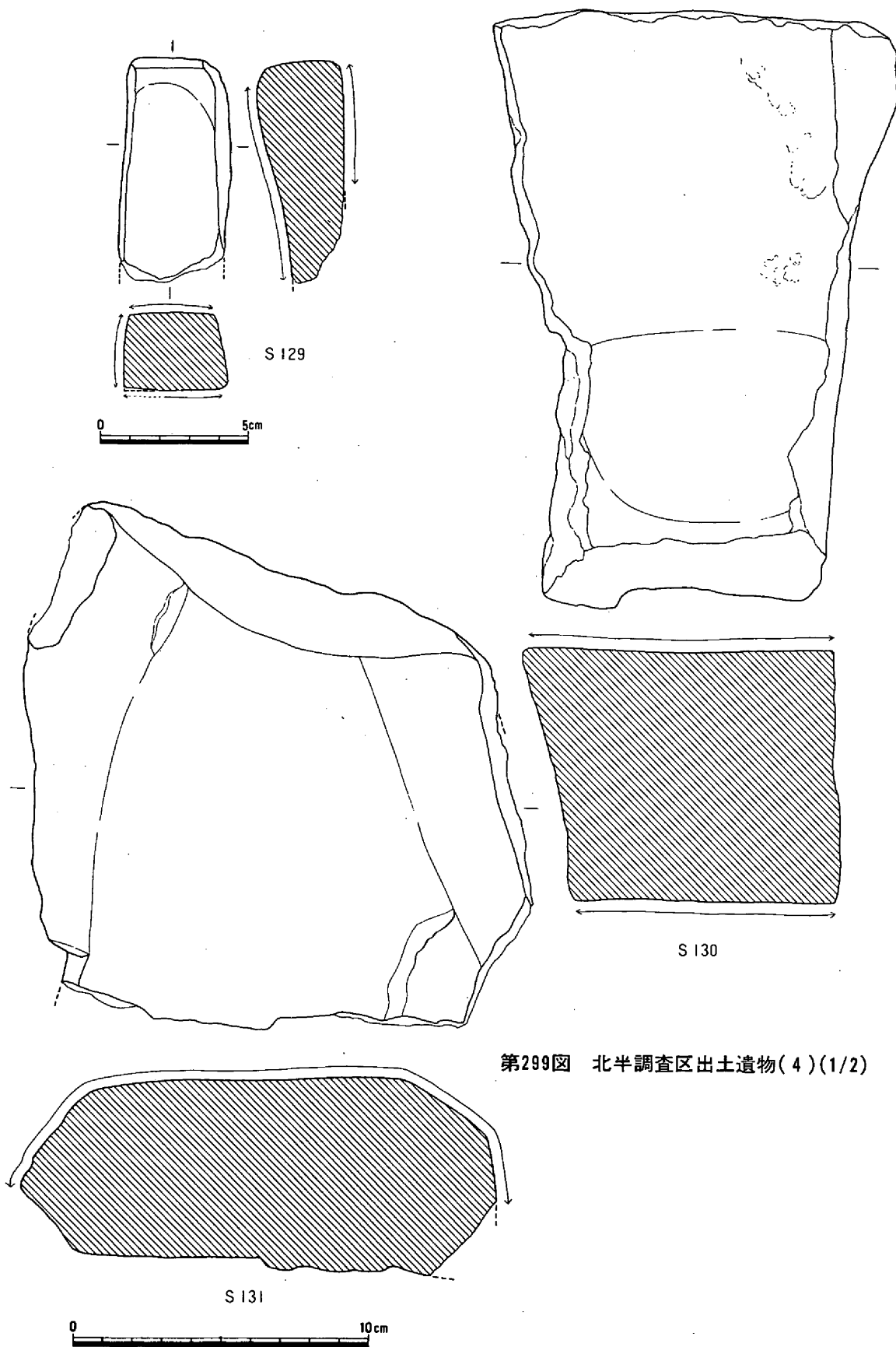
第296図 北半調査区出土遺物
(1)(1/2・1/3)



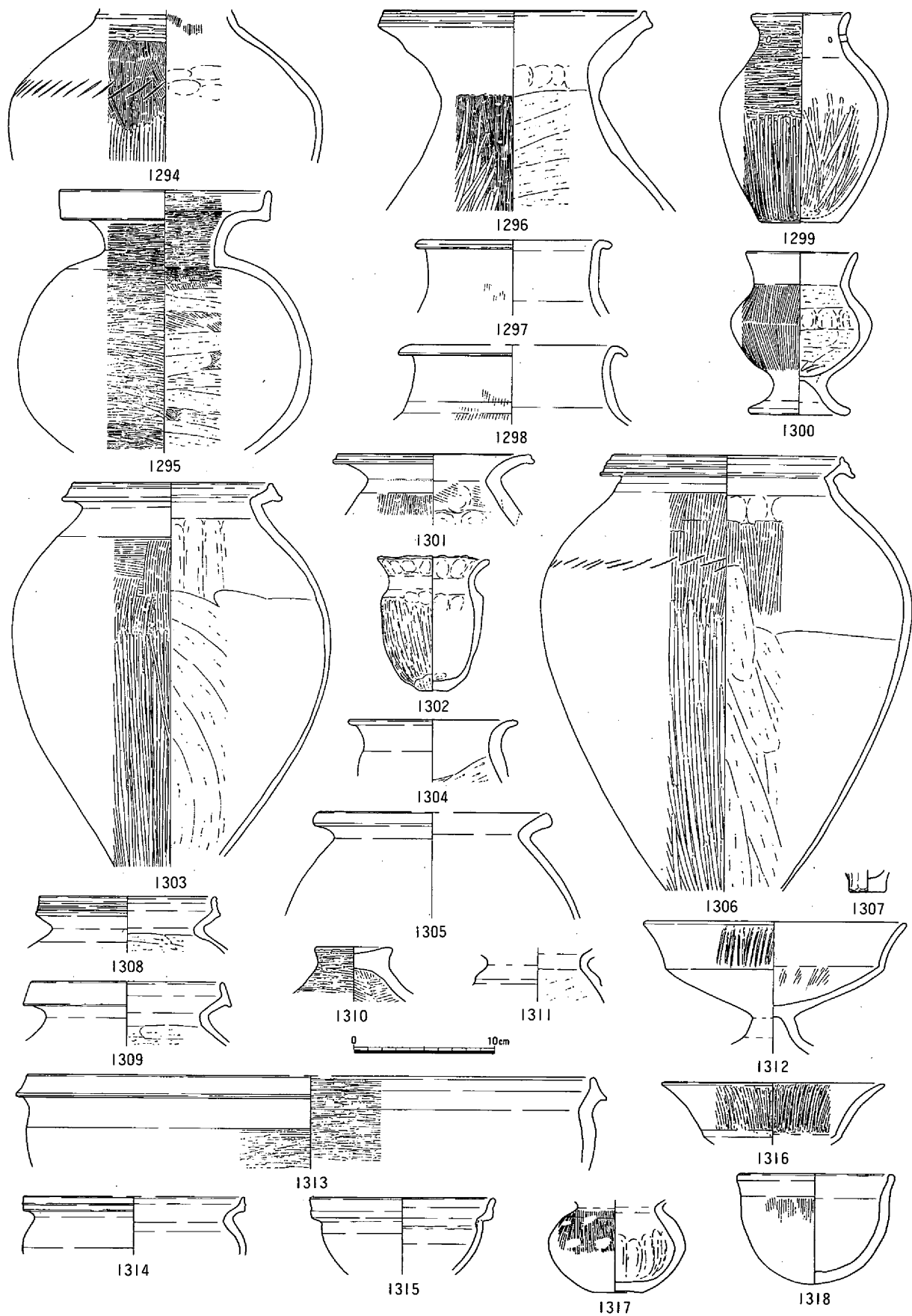
第297図 北半調査区出土遺物(2)(1/4)



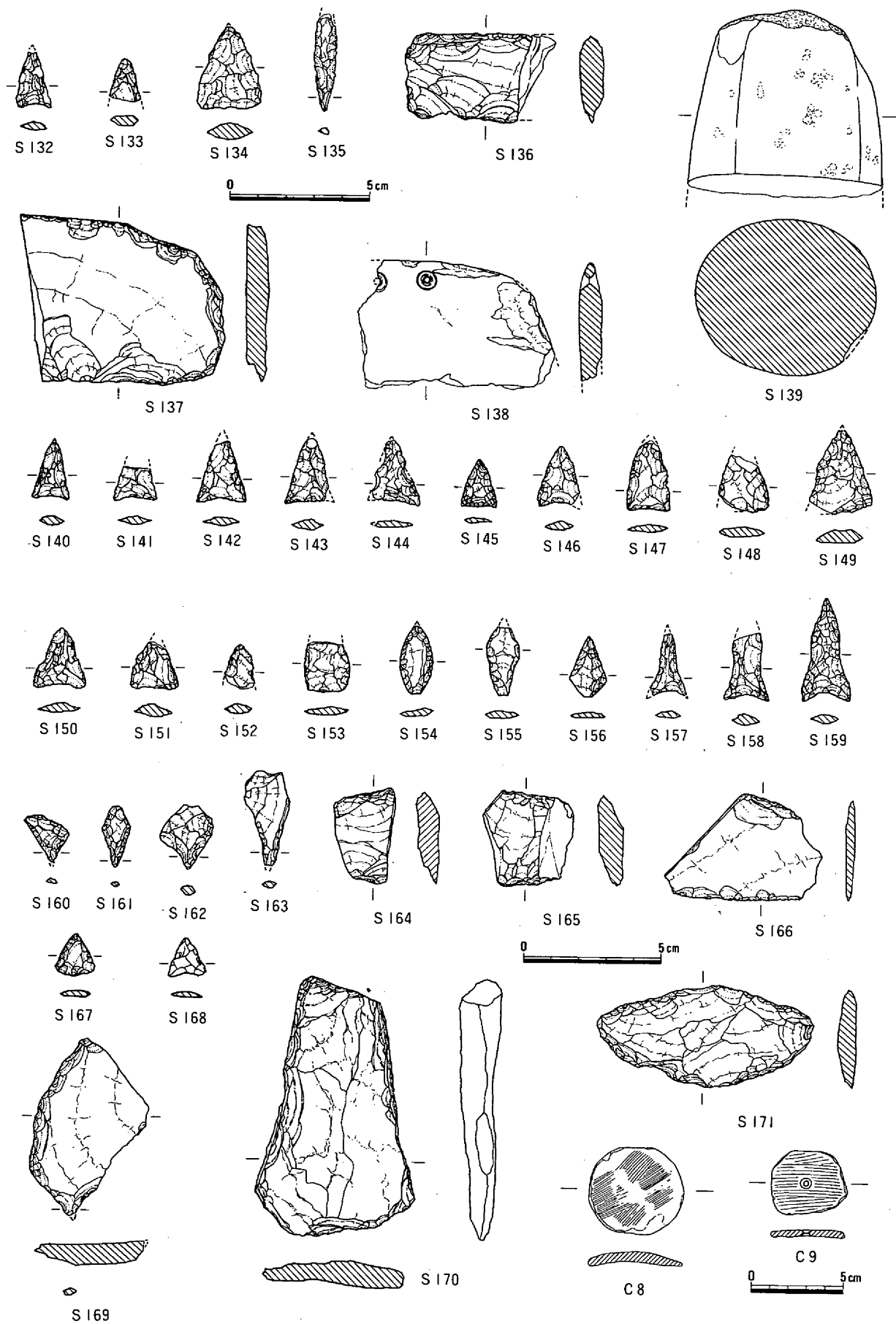
第298図 北半調査区出土遺物(3)(1/2)



第299図 北半調査区出土遺物(4)(1/2)



第300図 南半調査区出土遺物(1)(1/4)



第301図 南半調査区出土遺物(2)(1/2・1/3)

第5節 古墳時代の遺構・遺物

1. 概要

この時期の地勢は、弥生時代から大きくは変化していない。河道はそれぞれ継続して確認され、低位部では水田として利用された状況がみられるのにくわえて、第3微高地の緩やかな東斜面においても、水田畦畔が検出されている。微高地上では竪穴住居は検出されず、CH4・5区で検出された5棟の掘立柱建物や、H20区の井戸等に居住域の片鱗が窺える程度である。この時期以降、南半調査区では柵列状遺構が検出される。(光永)

2. 遺構・遺物

(1) 建物

建物43 (第302図、図版46-3、47-1)

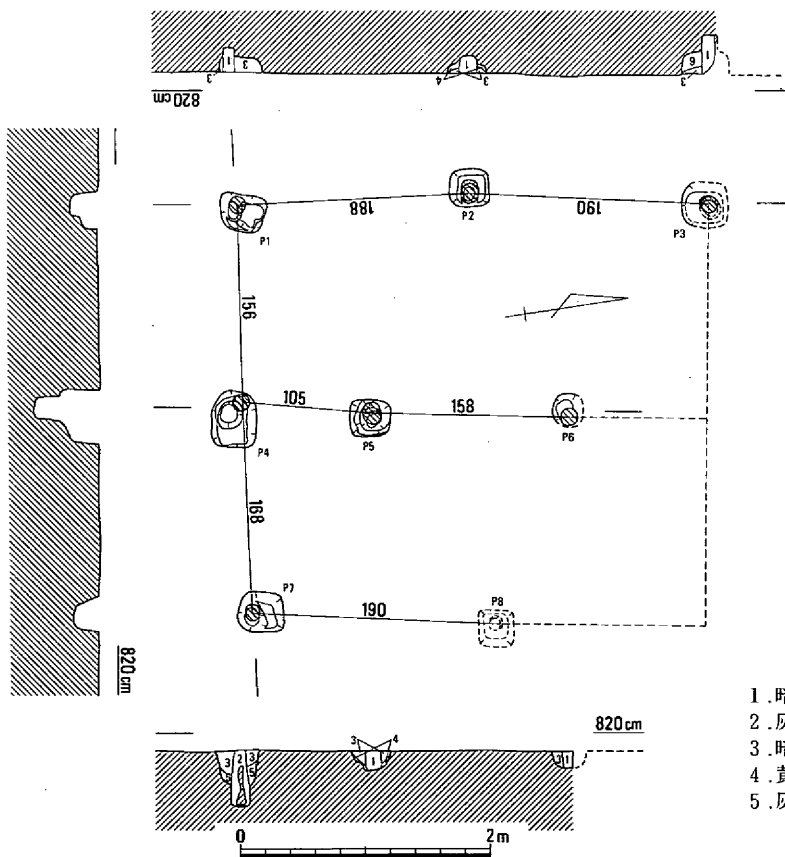
CH4区中央部に位置し、N-9°-Eで建物44と棟方向を揃え、距離5.2mを測る。北東部を調査区外に置くが、2×2間の総柱建物と考えられ、375×324cmの規模に復元される。桁行中央の柱列は3間となり、検出された柱間は105cmと158cmを測る。柱掘り方は平面形が方形に近く、各柱穴で柱痕跡を確認し、P4には柱根も遺存した。土器少量の出土により、古墳時代後半に比定される。(光永)

建物44 (第304図、

図版46-3、47-2)

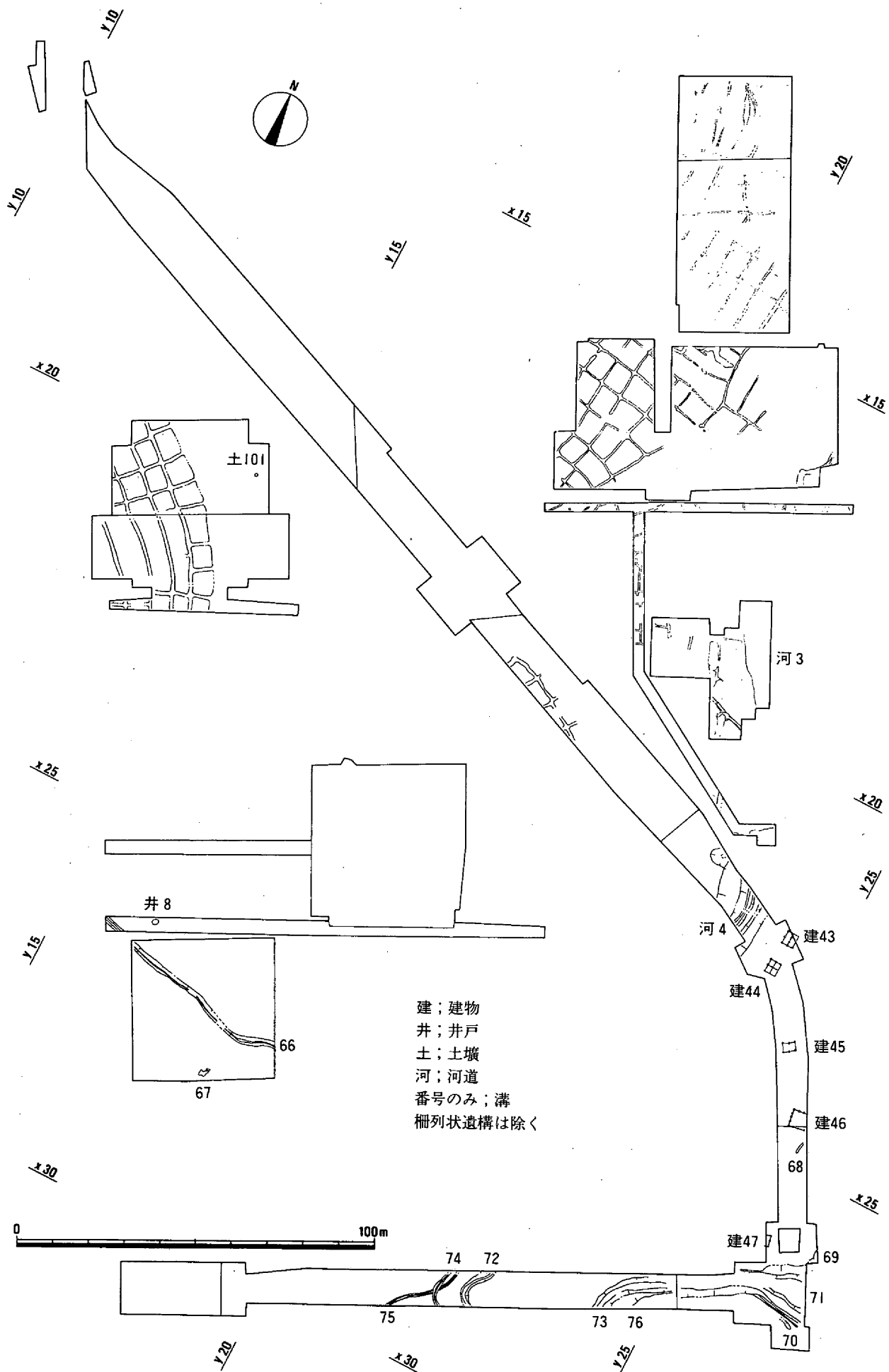
CH4区中央部で、河道4の7m東に位置する。南半を失っているが、2×2間の総柱建物と考えられ、東西長で315cmを測る。柱間の比較により、南北方向が主軸とみなされる。P4・5の掘り方は平面方形に近いが、他は不整形で、いずれも柱痕跡をとどめる。

建物43とは東辺の柱通りで約60cmのずれを生じ、同じ2×



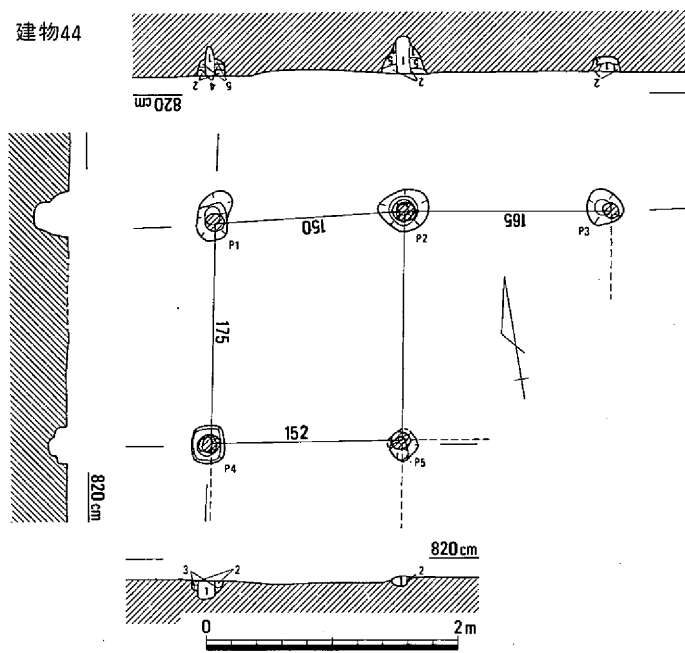
1. 暗灰黄色粘質微砂
2. 灰黄褐色粘質微砂
3. 暗灰黄色粘質微砂
4. 黄褐色粘質微砂
5. 灰黄色粘質土

第302図 建物43(1/60)



第303図 古墳時代遺構配置図(1/1,500)

建物44



1. 暗灰黄色粘質微砂
2. にぶい黄色粘質微砂
3. 黄灰色粘質微砂
4. 暗灰黄色粘質微砂
5. 黄灰色粘質微砂

1. 灰黄褐色粘質微砂
2. 暗灰黄色粘質微砂
3. 黄褐色粘質微砂
4. 黄褐色粘質微砂
5. 黄褐色粘質微砂

2間の総柱ながらその構成が異なるなどの相違点をもつものの、柱穴埋土等の検出状況から、2棟の建物は同時期と考えられる。

(光永)

建物45 (第304図、図版47-3)

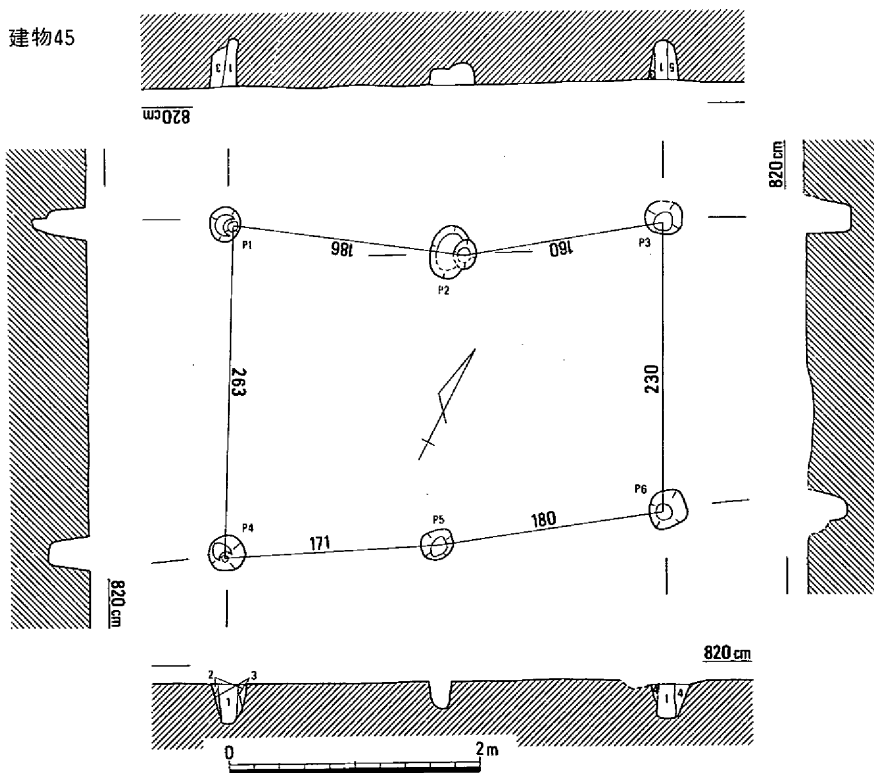
CH 4区南部に位置し、主軸方向をN-63°-Eに置く、2×1間の掘立柱建物である。平面形は不整四辺形で、柱間は桁行160~180cm、梁間230・263cmを測り、346×263cmの規模である。柱掘り方の平面形は楕円形を呈し、P 2・5が浅く、他の4本には径13cm弱の柱痕跡がみられる。須恵器小片の出土により、古墳時代後半以降の建物と考えられる。

(光永)

建物46 (第305図)

P 1~6をCH 4区南端で、P 7~9をCH 5区北端で別個に検出し、後に1棟の建物になる可能性を考えたものである。

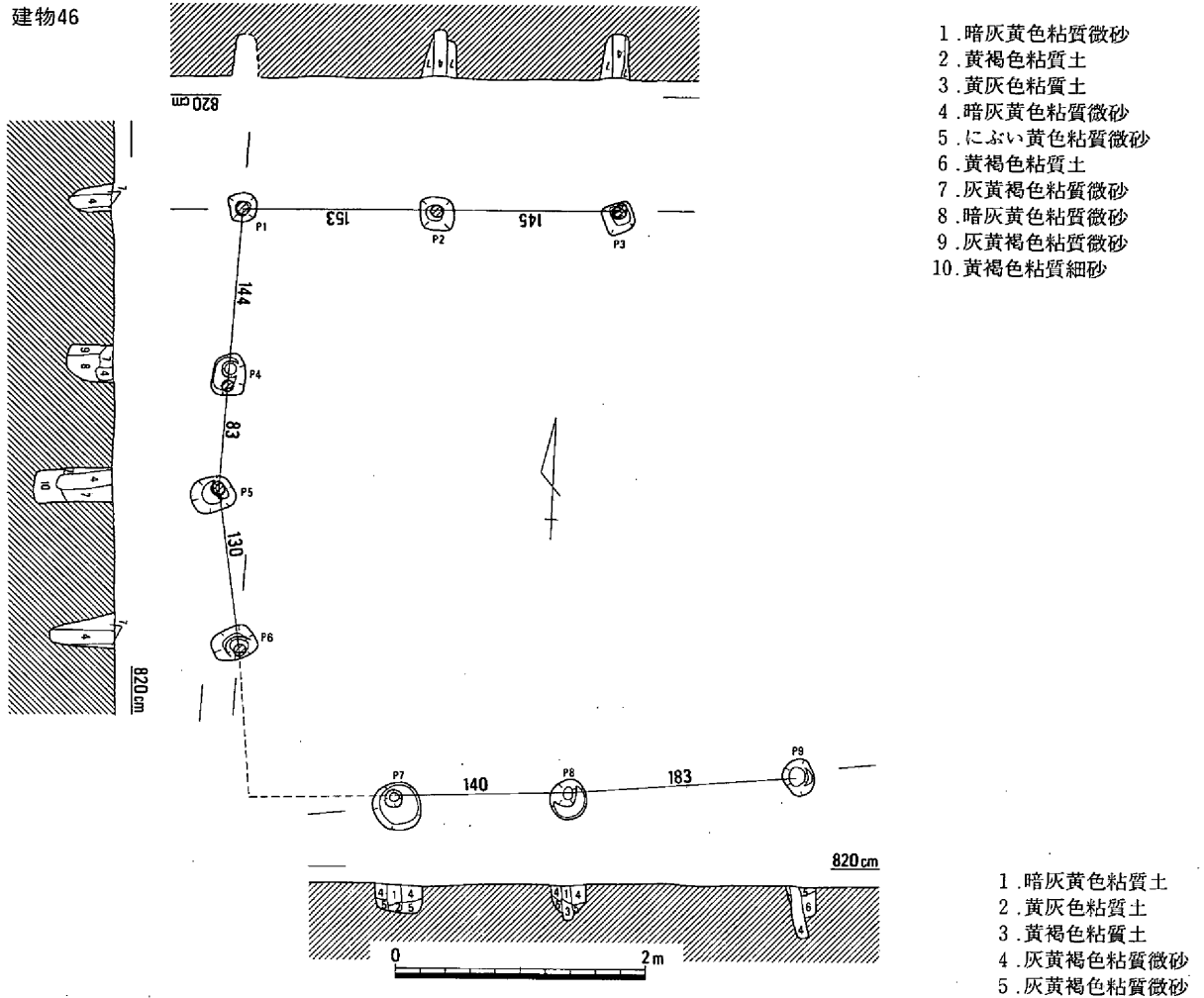
建物45



想定によれば南北4間、東西3間以上で、465×450cm以上の規模となる。柱間は南北方向が相対的に短く、83~183cmの幅がある。柱掘り方の平面形はP 1~6が方形ないし長方形に近く、P 7~9はより隅丸である。深さも23~60cmとまちまちであるが、それぞれの柱痕跡は径10cm強で、あまり差がない。須恵器小片の出土により、時期は古墳時代後半以降と考えられる。

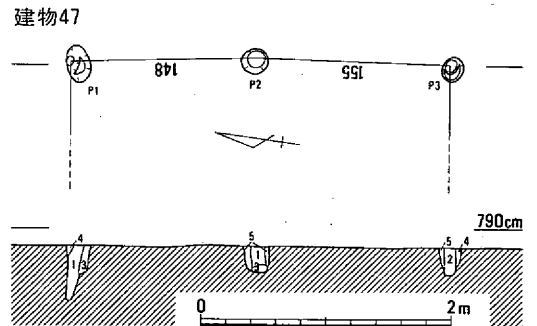
(光永)

第304図 建物44・45(1/60)



建物47 (第305図)

CH 5 区中央部西寄りで検出された3本の柱穴に対応する柱穴を調査区外に想定して建物とした。軸線方向はN-8°-Wを指し、南北長302cmを測る。柱の掘り方は楕円形で、長径20~30cm、深さ20~40cmを測り、径10cm前後の柱痕跡がみられる。遺物は出土していないが、検出状況から古墳時代後半以降と考えられる。
(光永)

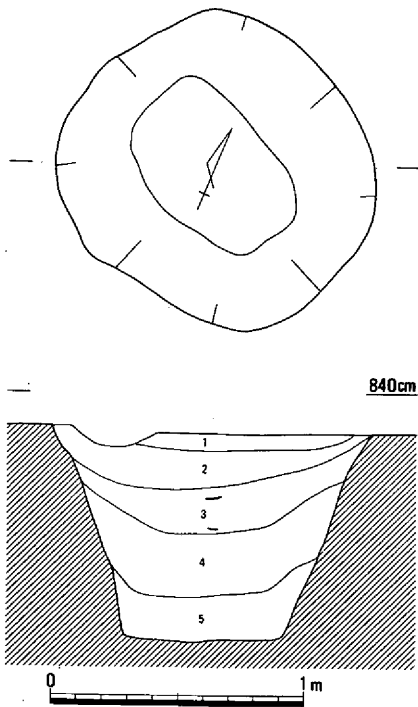


第305図 建物46・47(1/60)

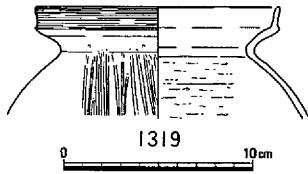
(2) 井戸

井戸 8 (第306図、図版48-1)

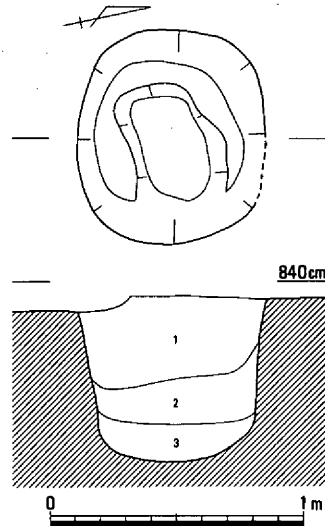
H20区の中央付近に位置する。上面は円形に近いが底面は隅丸長方形で、南北1.12m、東西1.27m、深さ85cm、底面の海拔高7.42mを測る。断面は台形に近く、底面はほぼ平らである。埋土は5層に分かれ、第3層には有機質が比較的多く含まれていた。土器はあまり多くないが各層から出土している。細片が多く、図化したのは1319の甕1点で、これは第3層から出土している。時期は古墳時代前期前葉と考えられる。
(久保)



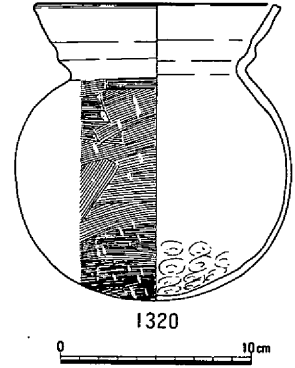
- 1. 暗灰褐色粘質土
- 2. 黄褐色粘質土
- 3. 暗褐色粘質土
(有機質を多く含む)
- 4. 茶灰色粘質土
- 5. 暗褐色粘質土



第306図 井戸 8 (1/30)・出土遺物(1/4)



第307図 土壇101(1/30)・出土遺物(1/4)



- 1. 黄灰色粘質微砂
- 2. 黄灰色粘質土
- 3. 暗灰黄色粘質土

(3) 土壇

土壇101 (第307図、図版48-2)

KO 1区東部に位置し、柵列状遺構6に削られている。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸長85cm、短軸長64cmを測る。側壁は直立に近く、深さ55cmが残って、底面の海拔高は7.68mである。底面は中央部がややくぼんでいる。

底面から完形の甕1320が出土しており、時期は古墳時代前期前葉に比定される。(光永)

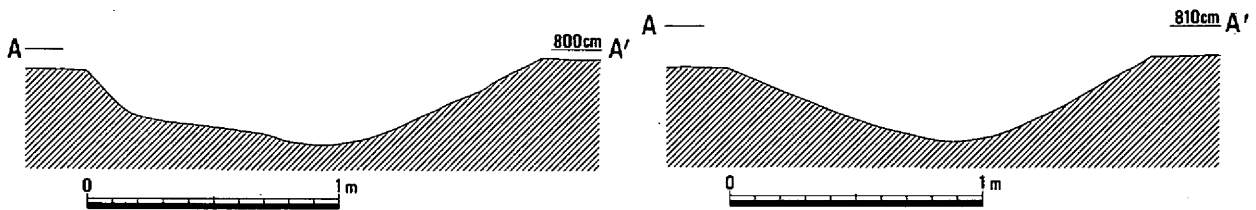
(4) 溝

溝66 (第308・309図、図版48-3)

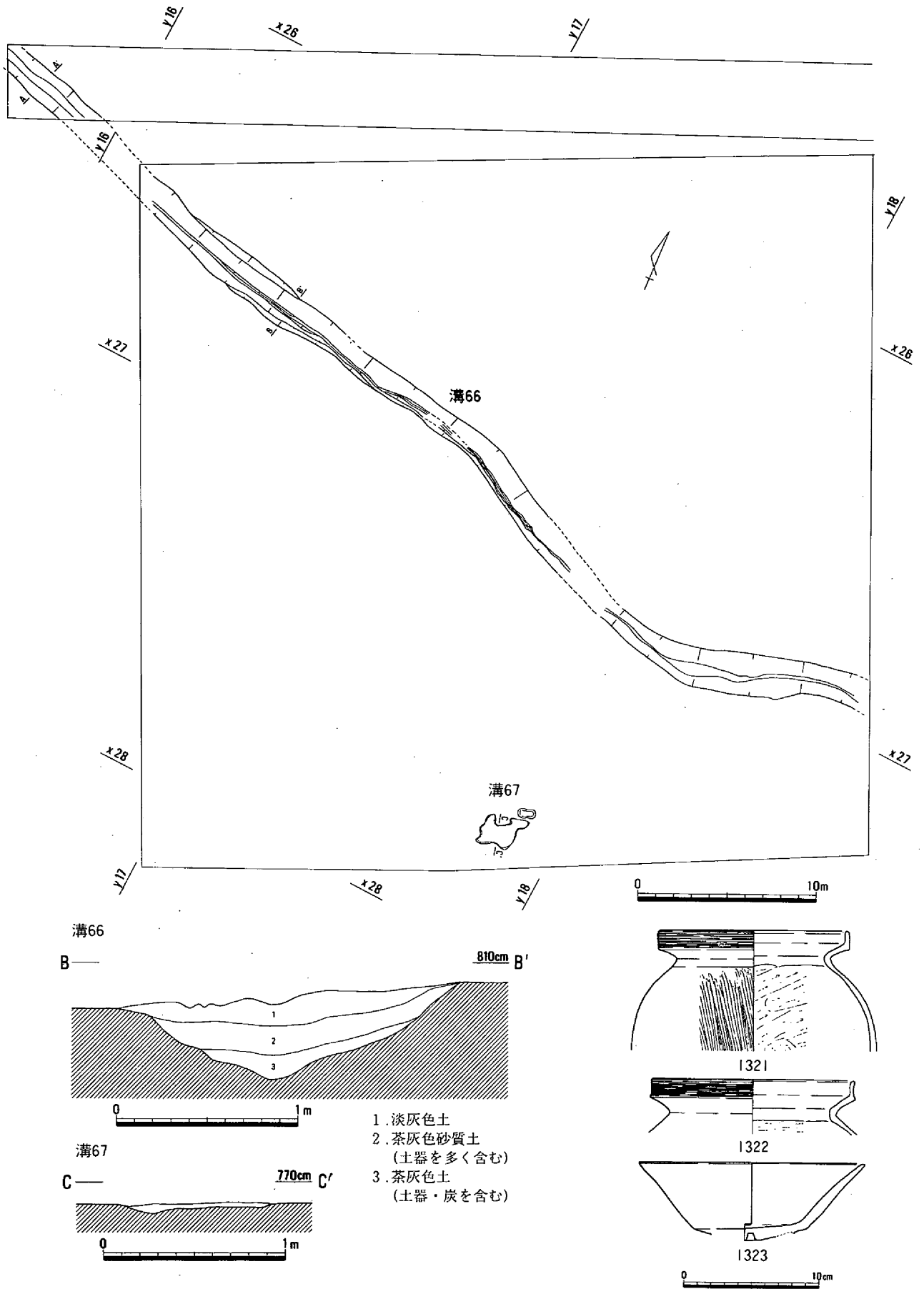
H20区西端からK区中央部において、第4低位部の北肩口に沿う形で低位部側に検出された溝で、流路は北西から南東へ向き、K区南東部で東へ曲がる。K区での土層観察によれば上幅190cm、深さ50cmを測り、H20区では溝浚えによる2段階の設定がなされている。出土遺物には、土師器の甕1321・1322、高杯1323等があり、時期は古墳時代前期前葉に比定される。同時期と想定されている水田層が上面に広がるが、機能としては用・排水路と考えられる。(光永)

溝67 (第309図)

K区南端の低位部で検出された不整形な遺構で、溝としての機能はもたないと思われる。古墳時代前期前葉の水田層下に所在する。(光永)

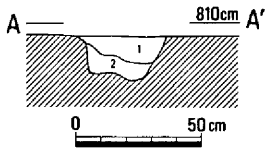


第308図 溝66断面図(1/30)



第309図 溝66・67(1/300・1/30)・出土遺物(1/4)

溝68



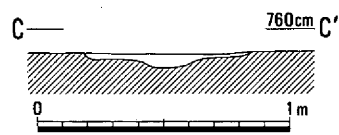
- 1. 暗灰黄色粘質微砂
- 2. 暗灰黄色粘質微砂

溝69

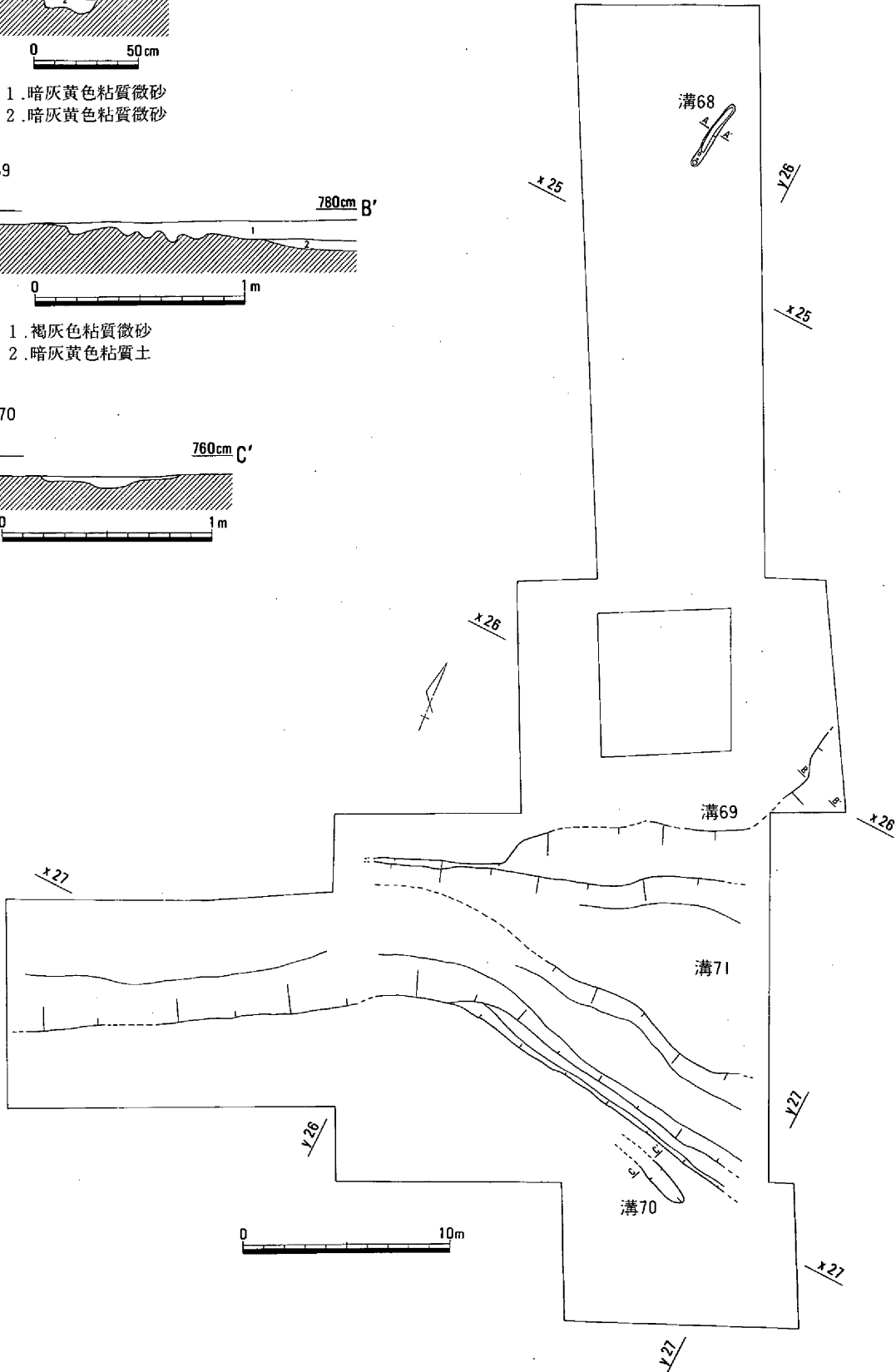


- 1. 褐灰色粘質微砂
- 2. 暗灰黄色粘質土

溝70



- 1. 暗灰黄色粘質微砂
- 2. 暗灰黄色粘質土



第310図 溝68~71(1/300・1/30)

溝68 (第310図)

CH 5 区北部に位置する溝状遺構で、南北方向に3.5mにわたって検出された。上幅33cm、下幅20cm、深さ17cmを測り、断面逆台形を呈する。須恵器小片の出土により、時期は古墳時代後半に比定されるが、機能は不明である。(光永)

溝69 (第310図)

CH 5 区中央部の東寄りに位置し、溝71の北肩口に検出された。底面に凹凸をみせながら緩やかに南東方向へ下がる肩口が溝71の北側約2mを東へ続き、東端が北へ曲がるものである。溝71の屈曲方向とは直交する形となる。須恵器小片により、古墳時代後半以降と考えられる。(光永)

溝70 (第310図)

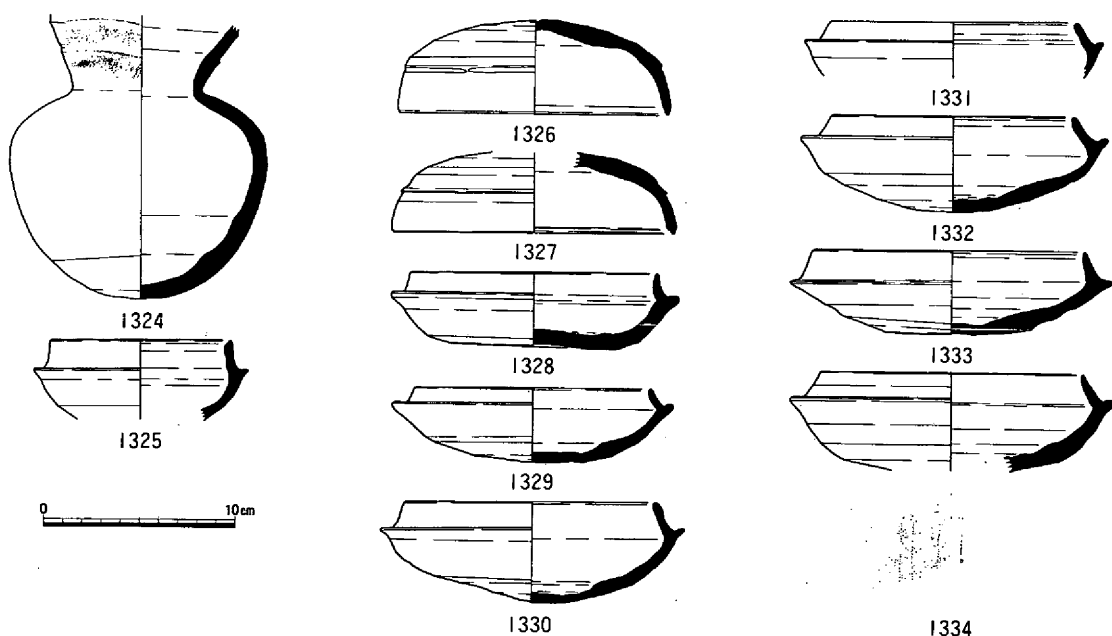
CH 5 区南東部で延長約4mが検出された。流路を溝71の南肩口に平行させて、上幅65cm、深さ6cm程度がかろうじて残っていたものである。土器少量の出土と、流路方向の同一性から、溝71の時期に近いものと考えられる。(光永)

溝71 (第274・310～313図、図版49-1)

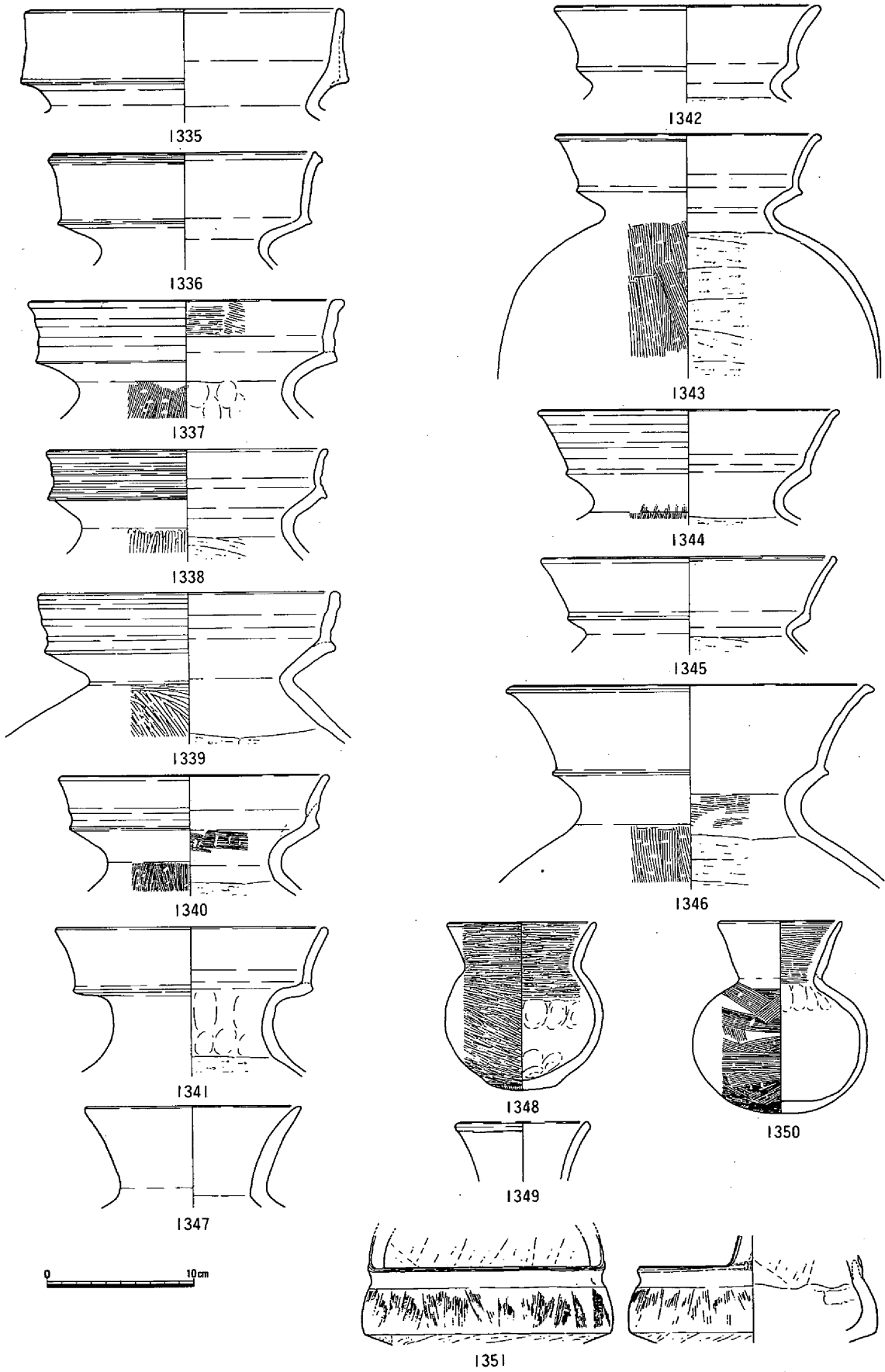
CH 5 区南部で、河道5の上層に位置する。第274図においては、第13層以上の部分が溝71に相当する。調査区の西半では南肩口を検出できただけであるが、この間はほぼ直線的に北東へ進み、調査区中央で上幅6.3mを測ったのちに流路を東へ曲げている。調査区東半では上幅を最大11.7mまで広げた状態で検出されるが、流路の中心は中央部で北寄りに位置したのに対して、東半では南に寄っている。前述のとおり、南北両岸で溝69・70が検出されている。堆積土は粘質微砂であるが、炭や木質遺物を多く含み、層の境目では面をなしている。規模の大きさと前段階からの継続性からいえば、人工の溝というよりも河道と見做されるものかもしれない。

遺物は、出土時には弥生時代の遺物と混在するものが多く、整理段階で分別して、古墳時代に属するものを第311～313図に示している。

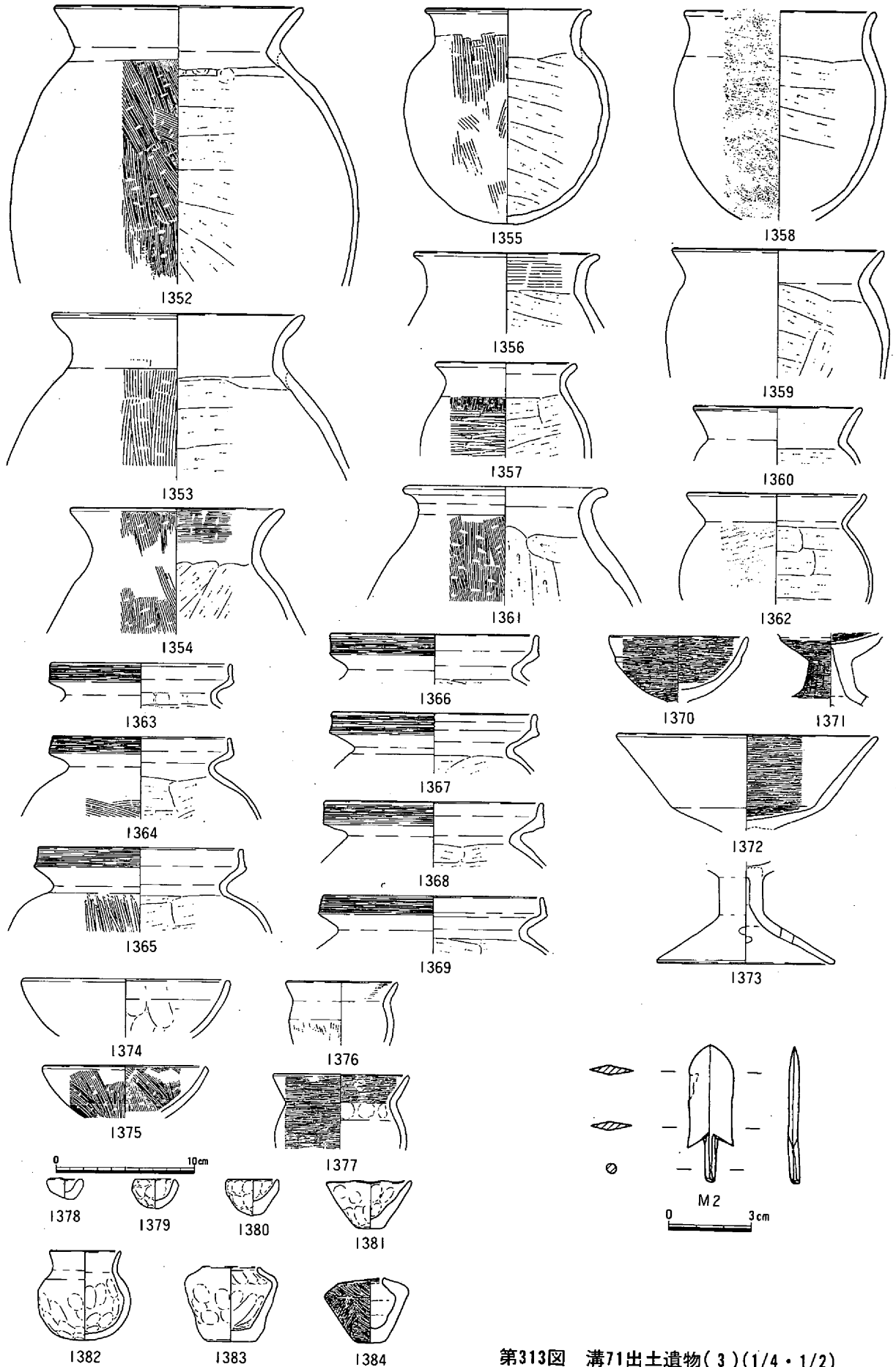
1324～1334は須恵器で、壺・高杯・杯身・杯蓋がみられる。壺・高杯はやや古いが、杯身・杯蓋は6世紀後半以降に比定されようか。



第311図 溝71出土遺物(1)(1/4)



第312図 溝71出土遺物(2)(1/4)



第313図 溝71出土遺物(3)(1/4・1/2)

1335～1346は複合口縁を呈するもので甕も含まれるが、口縁部の立ち上がりも外傾の度合いに変化をみせている。1348では底部が明瞭であるが、1349は丸底であり、手焙形土器1351は平底に近いものである。直立する口縁部外面に櫛描沈線を巡らせる甕は1363～1369を図示しているが、この他にも小片であるが量が多い。1378～1384の小形の手捏ね土器のうち、1384にはヘラミガキが施されている。銅鏃M2は有茎平根の腸袂柳葉式のほぼ完形品である。

この溝は、後述する溝73・76の東部分を分離せずに調査したものと考えられる。 (光永)

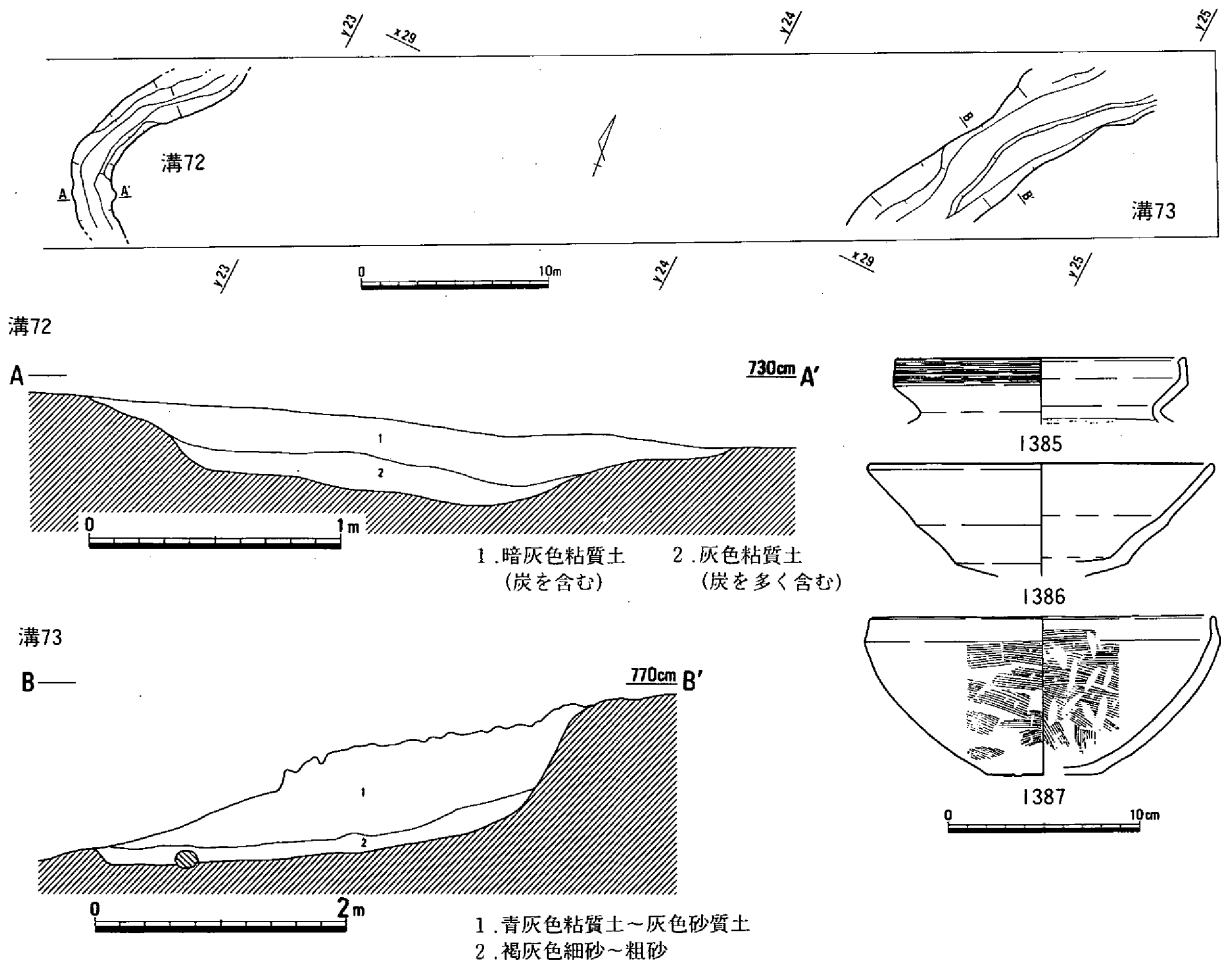
溝72 (第314・316図、図版49-2)

HW3区の西半部において検出した。検出できた幅は約1.8～2.6mで、深さは約30cm残存していた。断面形は皿形で、埋土は2層に分離できた。底面の海拔高は6.8m前後である。遺物は弥生時代後期末葉から古墳時代前期前葉の土器片(1385～1387)や作業台(S173)が出土している。

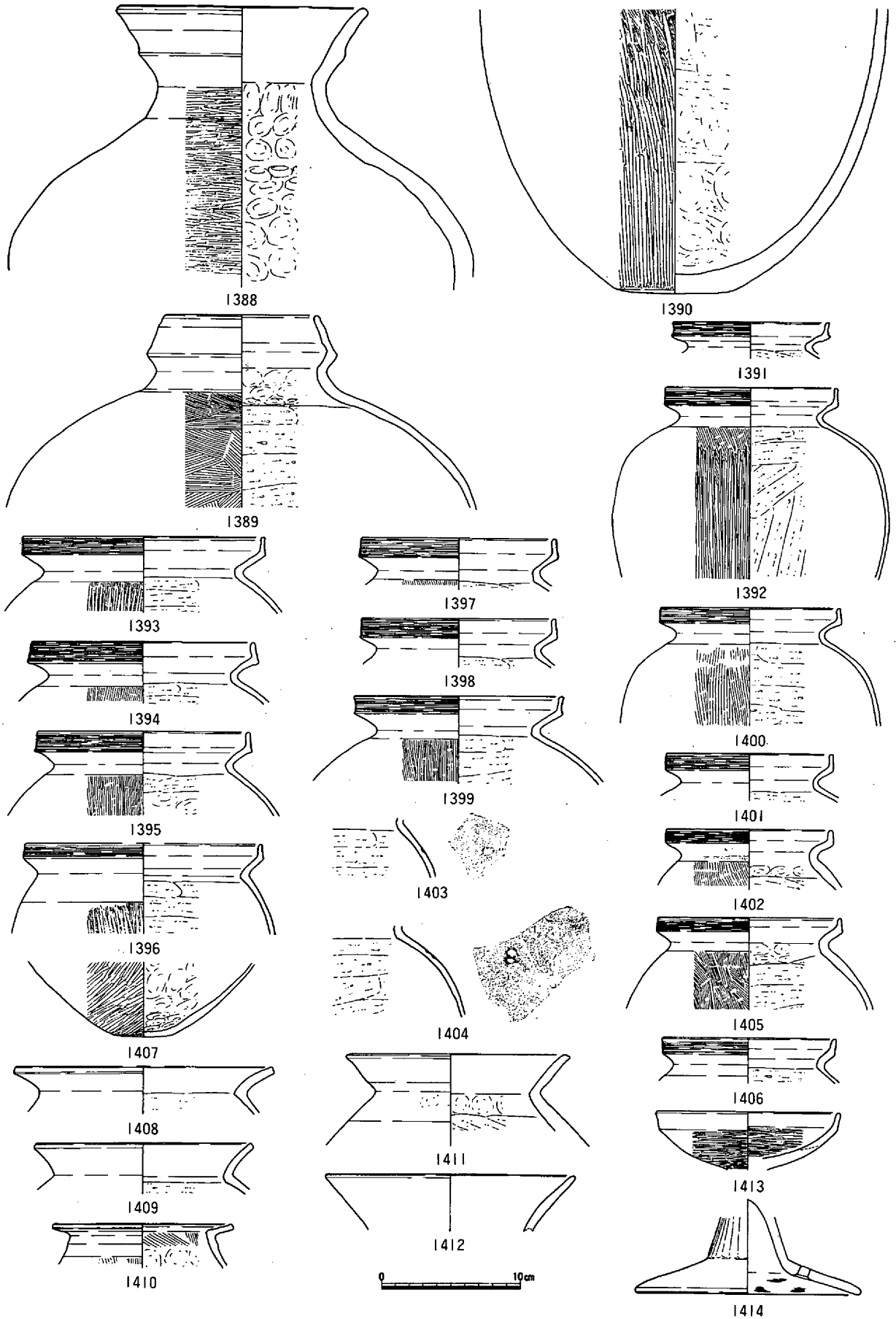
この溝は後に述べる水田の西側に沿うかたちで掘削されており、水田に伴う用・排水路と考えて良いのではなかろうか。 (平井)

溝73 (第314～316図、図版49-3)

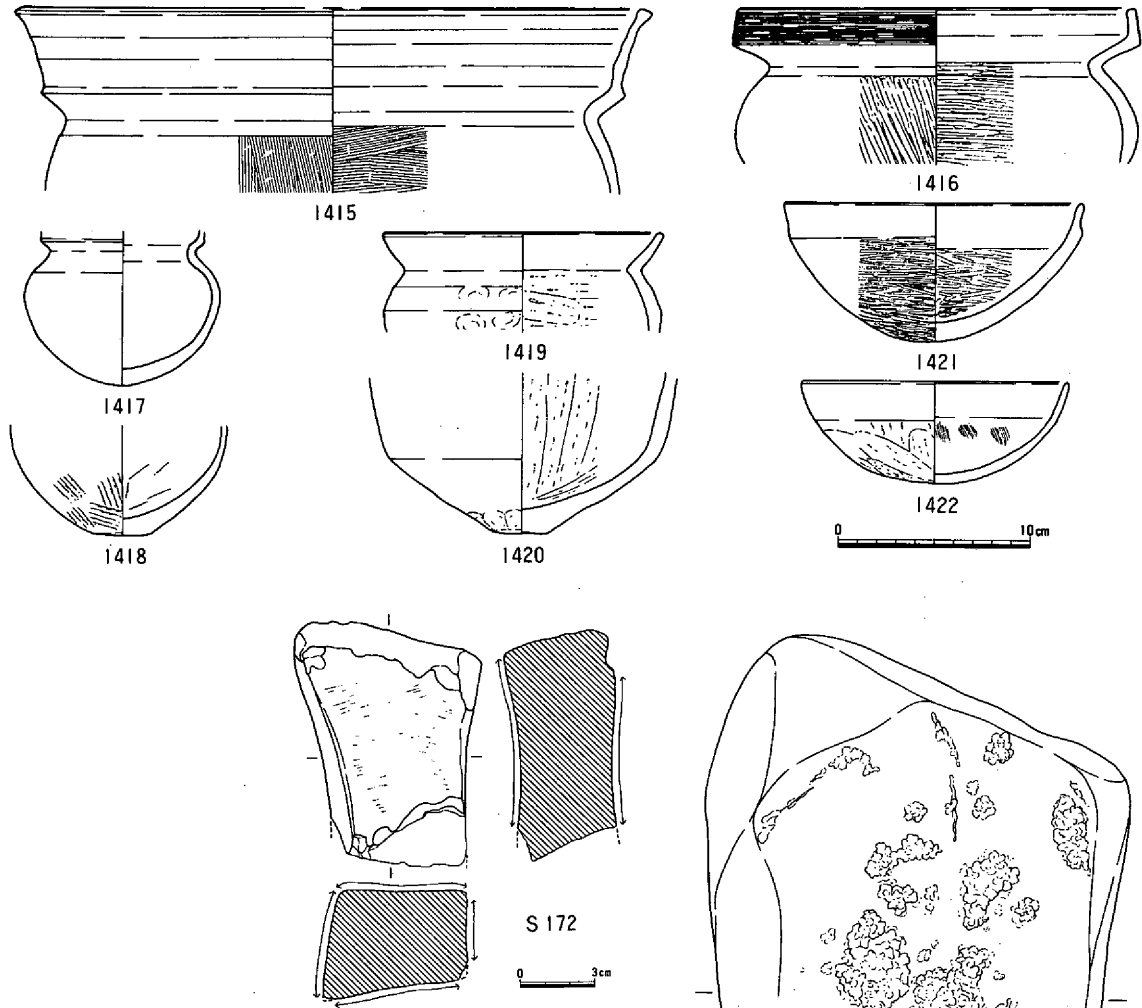
HW3区の東端部において検出した。後に述べる古墳時代後半の溝76によってほぼ西半部が切られているため本来の幅は確認できなかったが、断面の観察などから4.6m前後ではなかったかと推測でき



第314図 溝72・73(1/400・1/60・1/30)・溝72出土遺物(1)(1/4)



第315図 溝73出土遺物(1)(1/4)

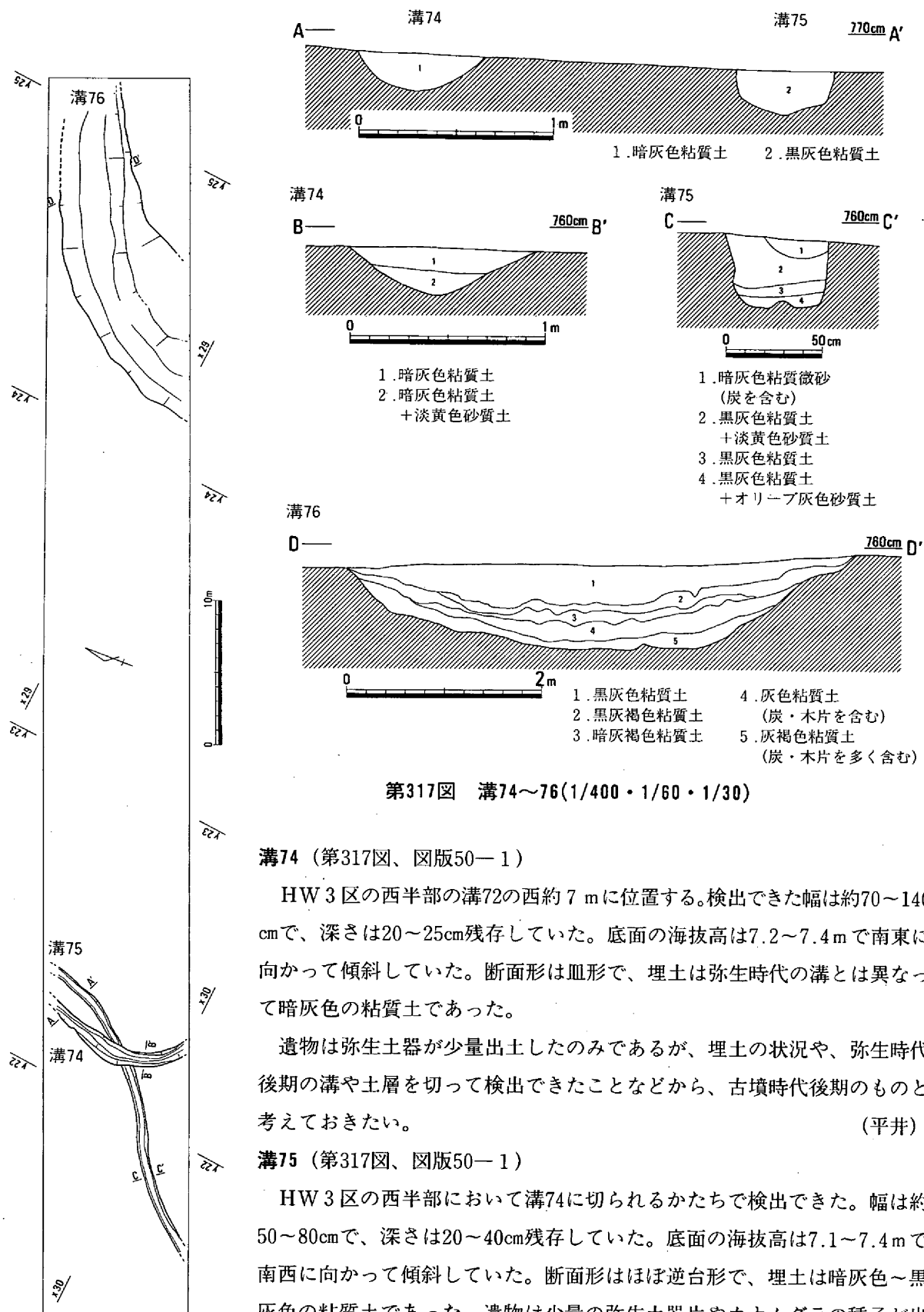


第316図 溝72・73出土遺物(2)(1/4・1/3)

る。深さは検出面から約120cm残存していた。埋土は場所によって若干異なっているが、砂の堆積が多く認められた。また最下層には10~20cmの厚さで木片や炭を含む細砂・粗砂が堆積していた。

遺物は土器(1388~1422)や砥石(S172)、モモ(核)が出土している。1388・1389・1391~1394・1397・1399~1401・1404~1406・1412・1414・1416・1422の土器とS172、モモが断面図の1層に対応する層から、その他の土器は2層に対応する層から出土した。1389の形状は備後地方南部のものに類似している。1407の底部内面には炭化した米粒が付着している。1420はいびつな底部ではあるが、図の左右は反転復元で推測している。

この溝は水田の東側に沿うかたちで掘削されており、溝72と同じく水田に伴う用・排水路で、古墳時代前期前葉に埋没したと考えたい。
(平井)



第317図 溝74～76(1/400・1/60・1/30)

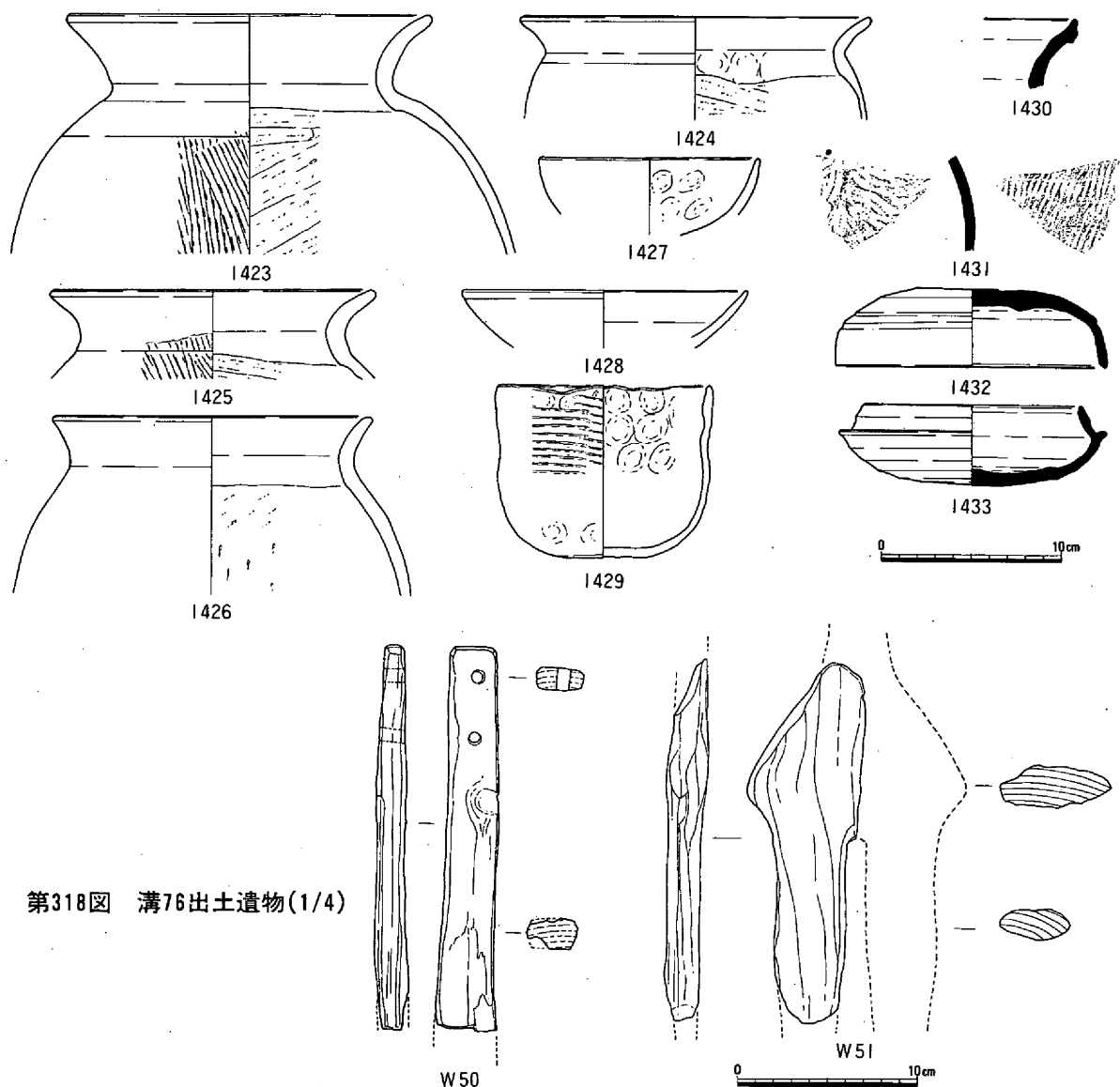
溝74 (第317図、図版50-1)

HW 3 区の西半部の溝72の西約 7 m に位置する。検出できた幅は約 70～140 cm で、深さは 20～25 cm 残存していた。底面の海拔高は 7.2～7.4 m で南東に向かって傾斜していた。断面形は皿形で、埋土は弥生時代の溝とは異なって暗灰色の粘質土であった。

遺物は弥生土器が少量出土したのみであるが、埋土の状況や、弥生時代後期の溝や土層を切って検出できたことなどから、古墳時代後期のものと考えておきたい。
(平井)

溝75 (第317図、図版50-1)

HW 3 区の西半部において溝74に切られるかたちで検出できた。幅は約 50～80 cm で、深さは 20～40 cm 残存していた。底面の海拔高は 7.1～7.4 m で南西に向かって傾斜していた。断面形はほぼ逆台形で、埋土は暗灰色～黒灰色の粘質土であった。遺物は少量の弥生土器片やカナムグラの種子が出土したのみであるが、埋土の状況や検出面などから、古墳時代後期のものと考えておきたい。
(平井)



第318図 溝76出土遺物(1/4)

溝76 (第317・318図、図版50-2)

HW 3 区の東半部において古墳時代前期前葉の溝73を切るかたちで検出できた。幅は3.8~4.3mで、深さは1m前後残存していた。底面の海拔高は6.3~6.5mで、北東から南西方向に向かってわずかに傾斜していた。断面形は皿形で、肩はなだらかであった。

埋土は大きくは4層に分離することが可能であった(第317図の1と2・3と4と5層に対応する)。このうちで海拔7m付近に堆積している2・3層はいわゆるピート層で、木片や植物の葉が良好なかたちで多く堆積していた。したがってこの時点では溝内に水が流れる状況にはなかったものと推測できる。また、4・5層にも木片や炭が含まれていた。

遺物は土器、木器、種子がコンテナ2箱出土した。土器は須恵器と土師器で、第318図に示したもののうち1427を除いた土器はいずれも1層から出土している。1429は製塩土器と考えている。約1/2残存しており、実際に使用されたとは考えにくい状態である。図示した木器はピート層中から出土した。W50には2か所に穿孔が認められるが、用途は不明である。W51は曲柄又鍬の破片であろう。種子はモモ(核)で、最下層から出土した。土器の時期は6世紀前葉~中葉であろう。(平井)

(5) 柵列状遺構

柵列状遺構 1 (第320図、図版50—3)

KO1区中央部で、水田東端から8～9m離れてこれに並行するように緩く弧を描きながら北西から南東方向へ続き、延長約25mが検出された。柱穴状遺構の規模は30×20×8cm程度と小さく、1対の芯心距離は20cm、単位の間隔は70cm前後を測る。柱穴状遺構の重複はみられず、単一の柵列状遺構と考えられる。遺物は出土していない。(光永)

柵列状遺構 2 (第320図、図版50—3、51—1)

KO1区では柵列状遺構1の80cm程度東側に並行し、KO2区北東部では逆に東寄りに緩く曲がって検出された。3段階以上の柵列状遺構が重複しており、各々の単位構造あるいは単位相互の距離等を明確にしたいが、最終段階では40×25×5cm程度の柱穴状遺構が距離20cmで1対となり、70cm前後の間隔で並ぶ。新しい段階の南端が柵列状遺構1の延長線上に続くのに対して、最古段階のものはやや東寄りに進む。個別の対応関係を限定できないが、柵列状遺構1・2は柵列状遺構4・5に続くものと考えられる。土器少量が出土しているが、時期の決め手とはならない。(光永)

柵列状遺構 3 (第320図、図版51—1)

KO2区北東部で、柵列状遺構2の西側に枝分かれする形で検出された。60～80cm間隔で並ぶ5単位が深さ5cm程度で残るのみであった。柵列状遺構1・2から柵列状遺構5へ想定される弧線から南へ派生する形となり、後の溝139と方向性を同じくする。遺物は出土していない。(光永)

柵列状遺構 4 (第320図、図版51—1)

KO2区北東部で東西方向に延長約10mにわたって直線的に検出された。約80cm間隔で並ぶ単位の深さは5cm程度の残存状況である。間隔のずれは目立たないが、2段階以上の柵列状遺構が重複している。柵列状遺構1ないし柵列状遺構2の新段階の延長上に位置付けられるが、柵列状遺構3に直交して終わる可能性も否定できない。(光永)

柵列状遺構 5 (第320図、図版51—1)

KO2区北東部で柵列状遺構4の北側約20cmでこれと並行して検出された。2段階以上の柵列状遺構が重複しているものと考えられ、深さ20cm以上のものもみられる柱穴状遺構の単位は、東寄りでは約70cmの間隔を保つが、西寄りでは各段階ごとに間隔の変化が見られる。西端ではやや北寄りにずれる段階が認められると同時に、柵列状遺構4と5に交差する別な柵列状遺構と見做しうような並びもみられる。黄灰色の微砂を主体とする埋土からは、木片数点も出土している。(光永)

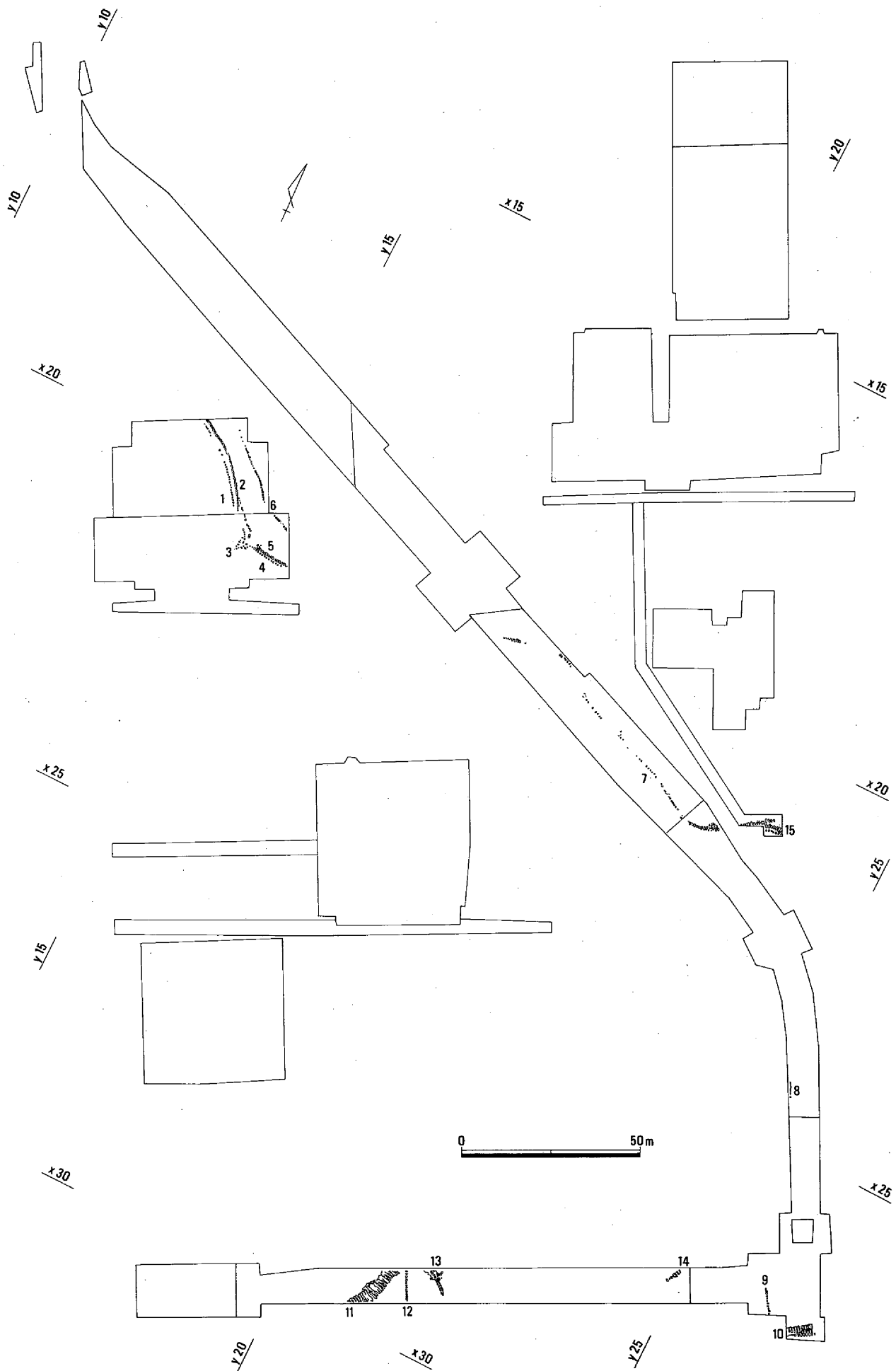
柵列状遺構 6 (第320図、図版50—3、51—1)

KO1区東端からKO2区北東隅で検出された。柵列状遺構2の北東5～6.5m、柵列状遺構5の北約8mで、これらに並行するような方向性と緩やかな蛇行の傾向をみせるが、北西端は不明瞭になるものの柵列状遺構2とは逆にやや北寄りに続く可能性を示している。柱穴状遺構の単位は約70cm間隔で並び、2段階の重複と考えられる。

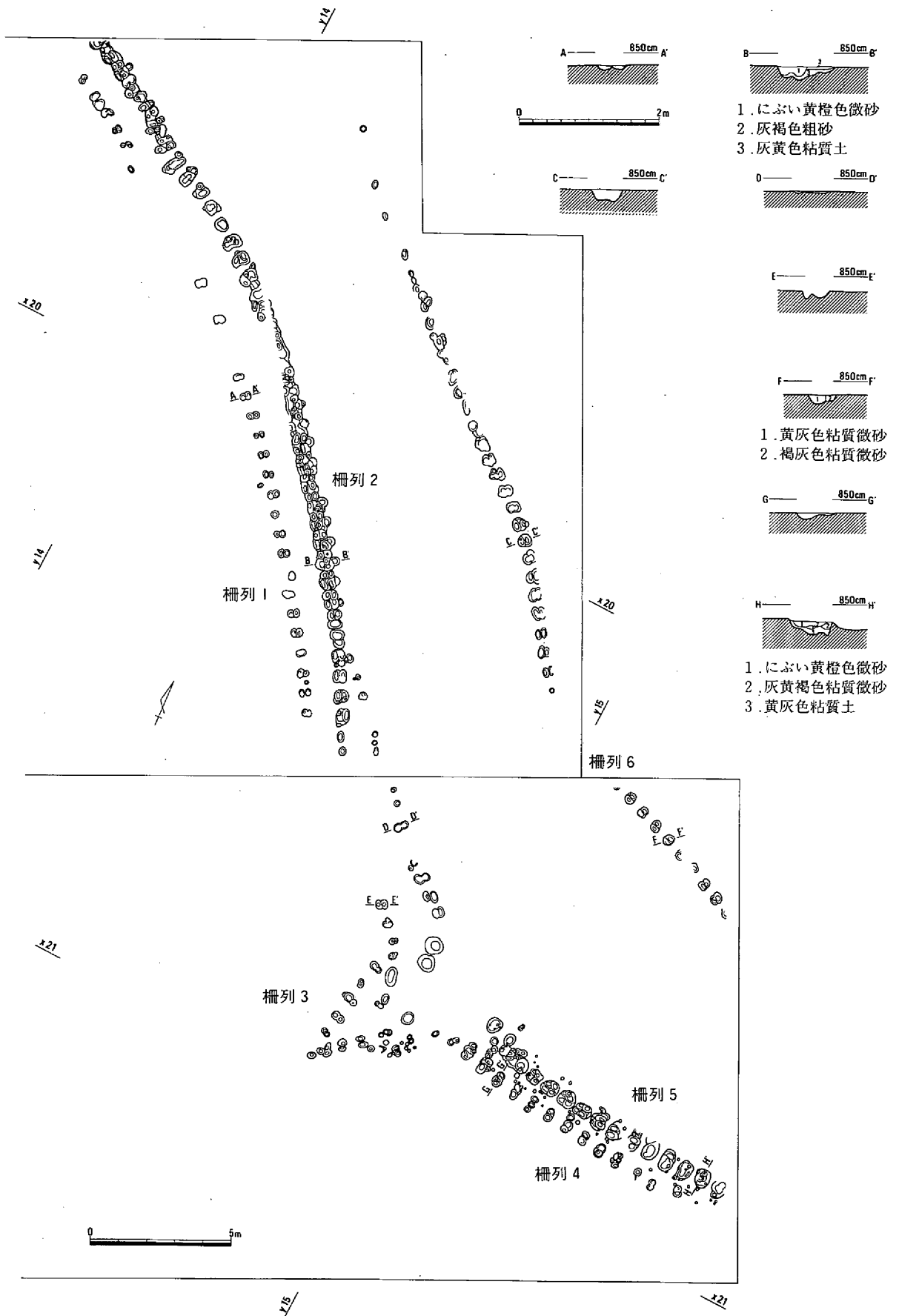
KO1・2区で検出された柵列状遺構1～6については時期を示す遺物を伴わないが、古墳時代後半～古代の幅で考えておきたい。(光永)

柵列状遺構 7 (第321・322図、図版51—2・3)

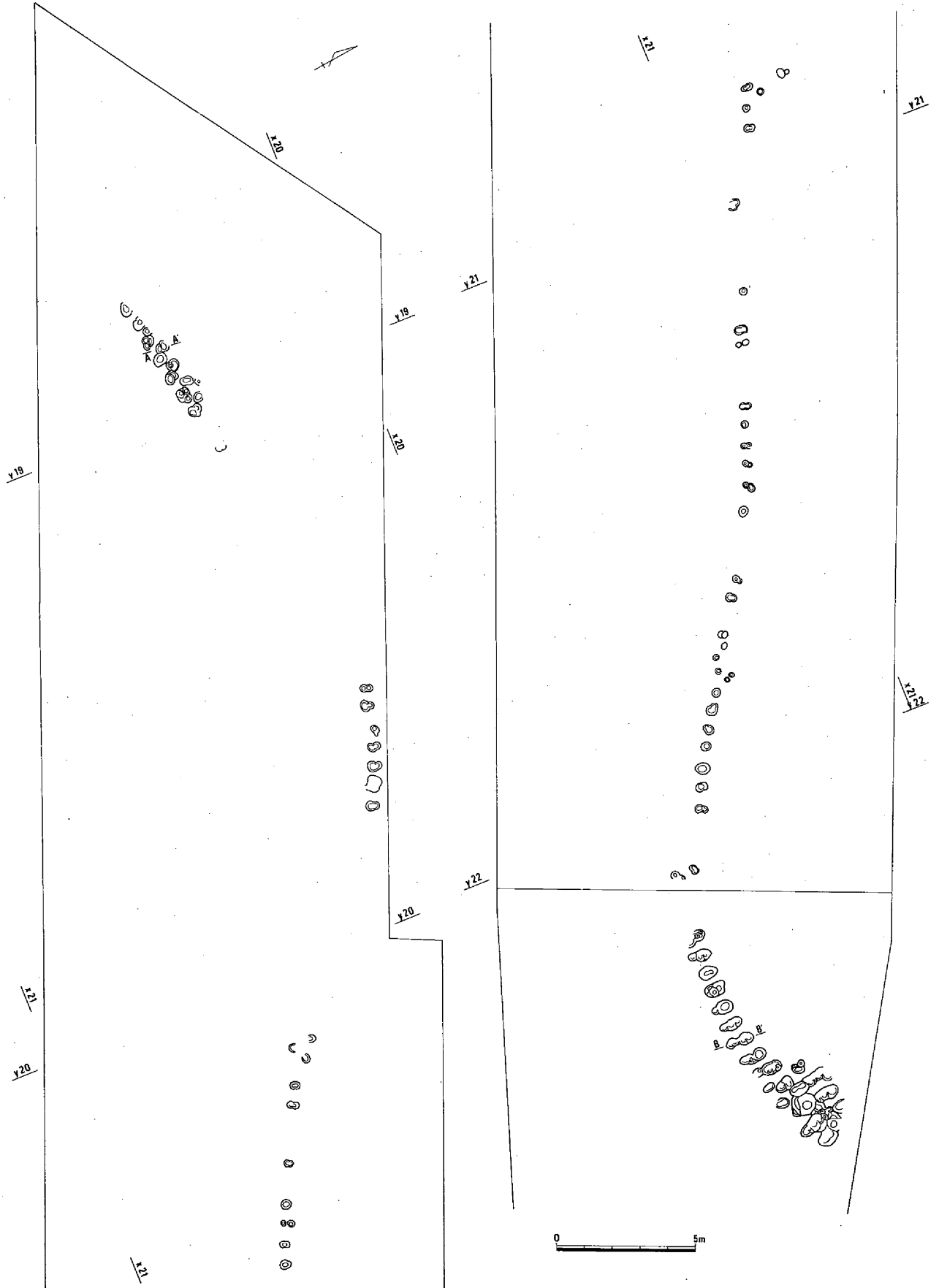
CH3区からCH4区北端まで延長約85m以上にわたって検出された。CH3区北部で調査区の西



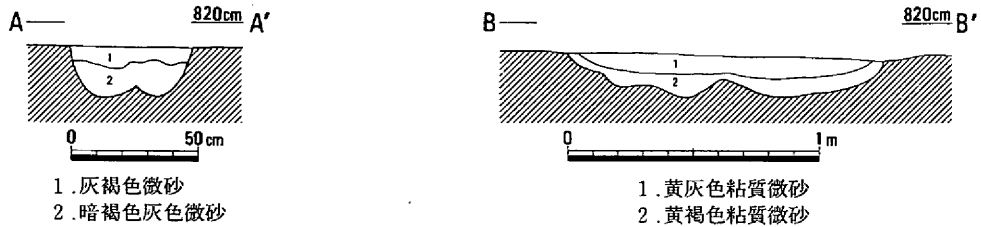
第319図 柵列状遺構全体図(1/1,500)



第320図 柵列状遺構 1～6 (1/200・1/80)



第321図 柵列状遺構 7 (1/200)



第322図 柵列状遺構7断面図(1/30)

側から東向きに出現し、調査区幅のほぼ中央を若干の蛇行をみせながら北西から南東へ進み、CH4区に入って再び東へ曲がる、という経路がとぎれとぎれながら迎えられるものである。複数の柵列状遺構が重複しており、CH4区では3段階以上を確認できる。この柵列状遺構を西へ延長すると、KO1・2区で検出された柵列状遺構群のいずれかへ続くものと考えられる。逆に、東へ延長するとH19区の柵列状遺構15へ続く可能性が高いが、柵列状遺構15は古代に比定されている。(光永)

柵列状遺構8 (第323図)

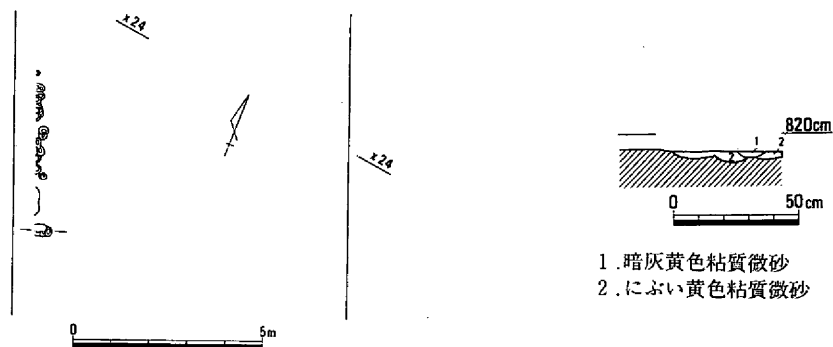
CH4区南部の西端で、南北方向からやや西に振って延長4.5mほどを検出した。側溝によって西半分を失っており、構造が分かりにくい、25×15×5cm程度の柱穴状遺構がみられる。単位の間隔も判然としないが、他の例から70cmに設定すると、4段階以上の重複となる。埋土は微砂で、遺物は出土していない。(光永)

柵列状遺構9 (第324図)

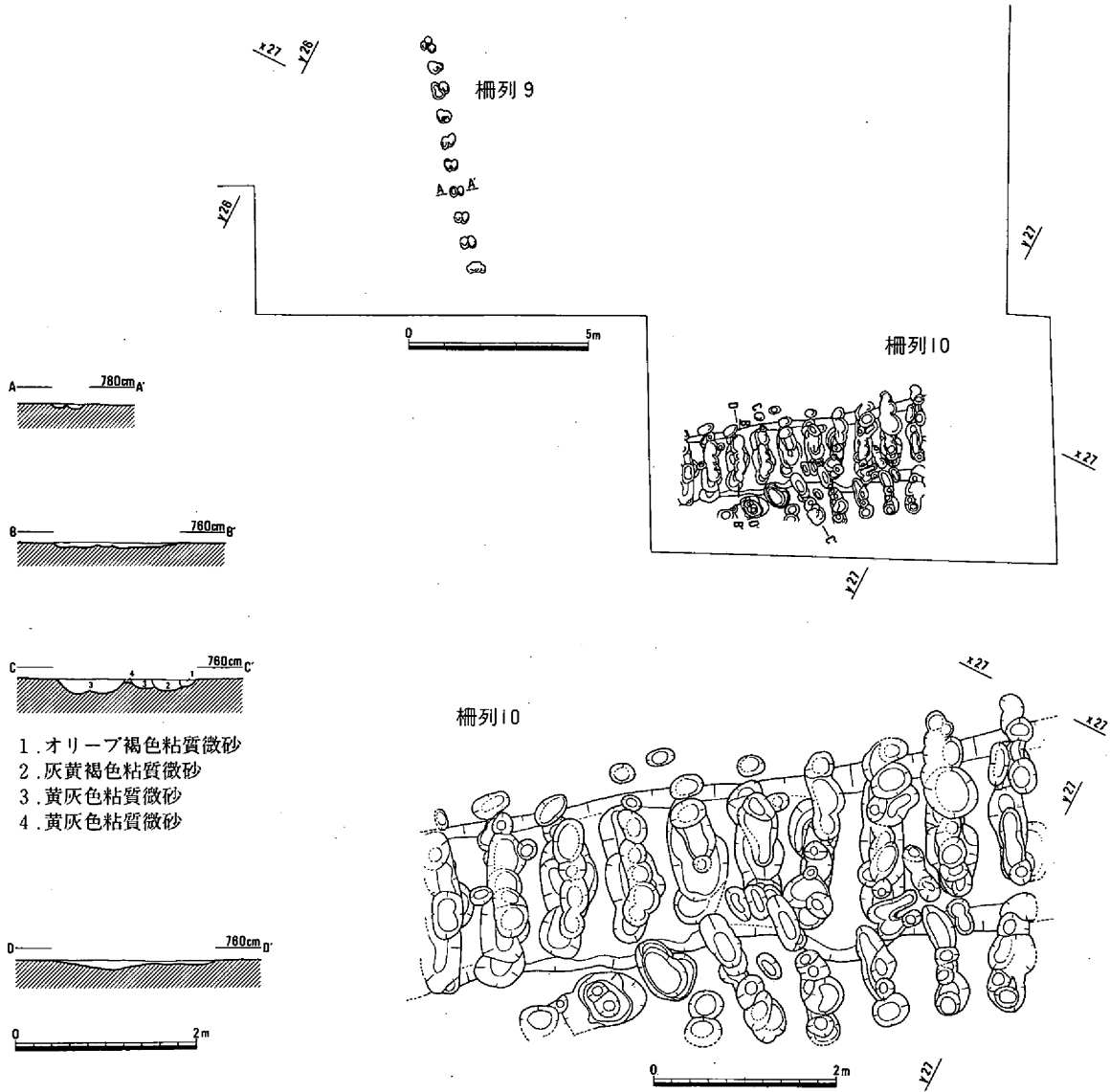
CH5区南部中央付近で、溝71の南に延長6m弱が直線的に検出された。北西から南東方向へ続いており、柵列状遺構10と直交するかたちとなる。35×20×7cm程度の柱穴状遺構が芯心距離20cmで1対となり、約70cm間隔に並ぶもので、単一の柵列状遺構と考えられるが、両端の単位には重複の可能性もある。遺物は出土していない。(光永)

柵列状遺構10 (第324図、図版52-1・2)

CH5区南東隅に位置する柵列状遺構群である。延長7mが検出されたのみであるが、方向は南西から北東を示し、柵列状遺構9と直交する。調査できた幅3mの間に夥しい重複をみせ、少なくとも15段階以上の柵列状遺構が想定されるが、これを大きくは三つのグループに分けることができる。最上層のグループは北西寄りに位置し、N-52~66°-Eの方向で5段階以上が重複している。この南東側に位置するグループは、N-43~62°-Eの方向で7段階以上が想定される。いずれも単位の間隔は70~80cmで辿ることができる。これらの下層では、幅170~215cm、深さ10cm前後を測る溝状遺構の底面で、



第323図 柵列状遺構8 (1/200・1/30)



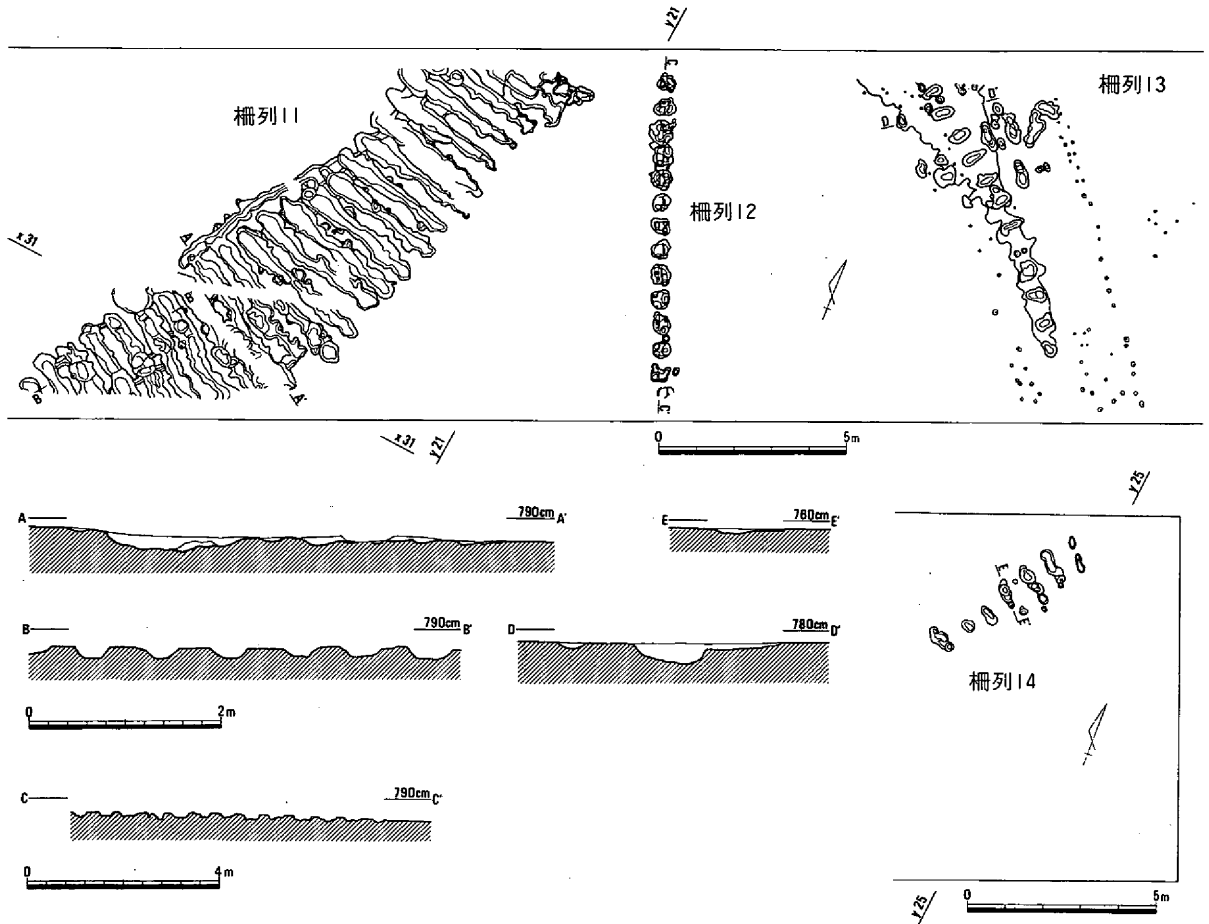
第324図 柵列状遺構 9・10(1/200・1/80)

柱穴状遺構 5本相当の単位が約70cm間隔で並ぶ状況が確認されている。柵列状遺構としては3段階以上と見做しうるもので、方向はほぼN-58°-Eである。埋土は灰黄褐色の粘質微砂で、溝状部分と柱穴状部分を分層できない。時期の決め手となる遺物は伴わないが、各柵列状遺構間の時期差も含めて古墳時代後半～古代と考えたい。(光永)

柵列状遺構11 (第325図、図版52-3)

HW 2・3区の境において検出した。図示したように検出面の幅30~60cm前後で、長さ4m前後、深さ20cm前後の東西方向の溝が約70cm間隔でほぼ南北方向に整然と連なっていた。また西端部には一部ではあるが、幅20~30cmの溝が南北方向に検出できた。それぞれの溝の断面形は皿形で、底面には凹凸が認められたが、杭が打ち込まれたような痕跡は認められなかった。埋土は灰色～灰白色の微砂という特徴を示している。遺物は古墳時代後半の須恵器片が少量出土したのみである。

この遺構の性格については明確ではないが、東西方向の溝に材木を並べた道路の基礎部分の可能性を考えておきたい。時期は古墳時代後期～古代の幅で考えている。(平井)



第325図 柵列状遺構11~14(1/200・1/160・1/80)

柵列状遺構12 (第325図、図版52-3)

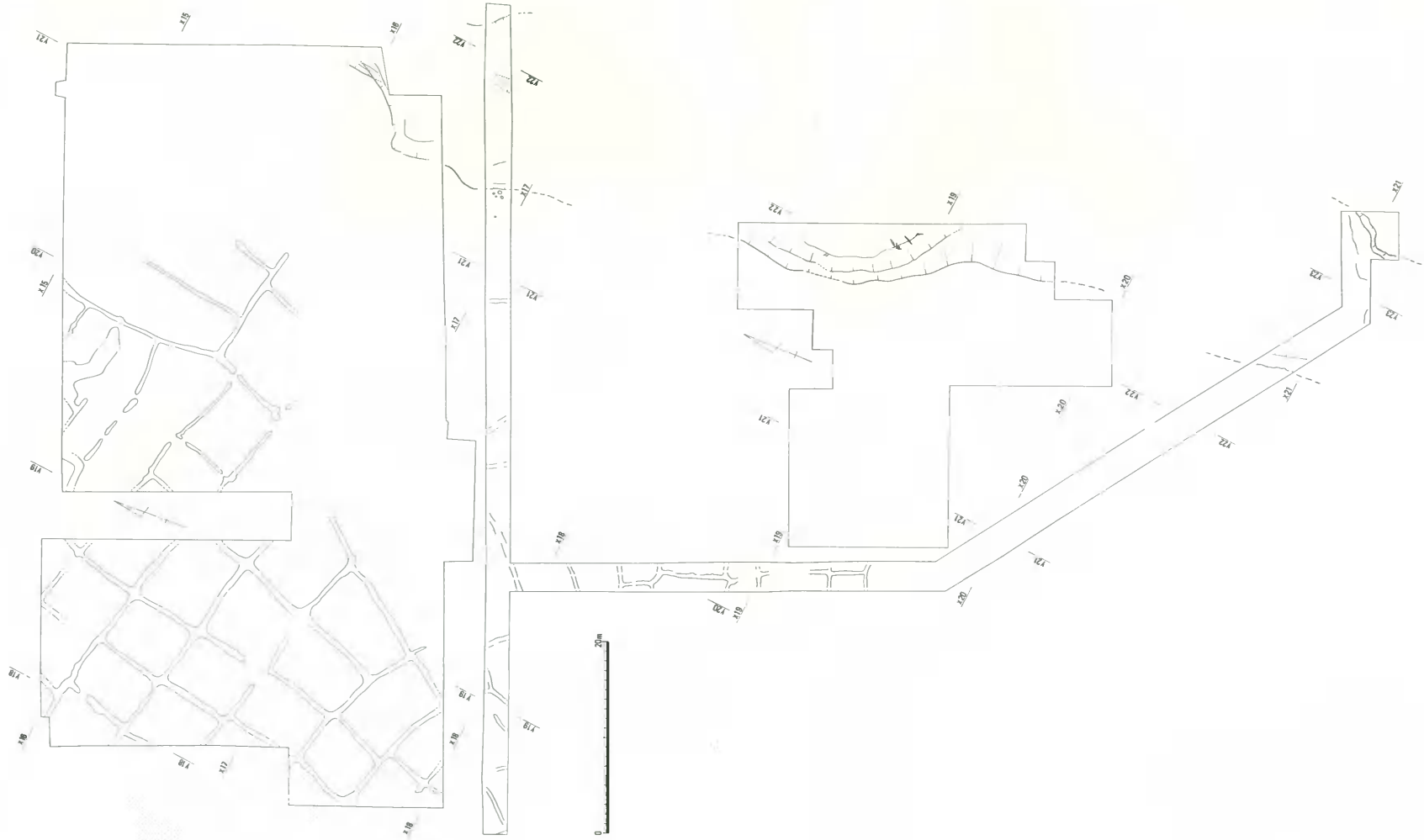
柵列状遺構11の東において検出した。図示したように、直径50cm前後の柱穴状の遺構が、北西から南東方向にほぼ等間隔で直線的に並んでいる。柱穴状の遺構の底には、柱痕状の痕跡がほぼ3か所ずつ確認できたことが特徴的である。埋土には柵列状遺構11と同じような微砂が存在していた。遺物は少量の弥生土器片が出土したのみである。古墳時代後期~古代の柵列であろうか。(平井)

柵列状遺構13 (第325図、図版53-1)

柵列状遺構12の東5~10mにおいて検出した。基本的には浅い溝の底面に60×30cm前後の楕円形で深さ10~20cm前後のくぼみが、約70cm間隔でやや曲線的に並んでいる。埋土は柵列状遺構11・12と同じような灰白色~淡灰色の微砂であった。なお図示した杭の痕跡については柵列状遺構を調査後にその下層において確認できた。その多くには杭の先端部が残存していた。柵列状遺構との関係は不明である。遺物はくぼみ内から6~7世紀の須恵器片が少量出土している。(平井)

柵列状遺構14 (第325図)

HW3区の北東端部において、図示したように長楕円形のくぼみが、約70cmの間隔で並んで検出できたが、検出状態は平面・断面とも明瞭ではなかった。埋土は微砂まじりの淡黄灰色粘質土であった。並びの方向については柵列状遺構11とほぼ同じと考えられる。時期や性格を明らかにできる資料は得られなかった。(平井)



第326図 水田(P・U・T・A・B・U・H18・H19区：1/500)

(6) 水田

南溝手遺跡では、通常の盛り上がりをもった畦畔を伴う水田遺構と、畦畔の痕跡すなわち鉄分の凝集・沈着によって帯状の痕跡が検出された水田痕跡とふたつの類型があることが確かめられている。さらに、時期的にも古墳時代前期前葉に比定されることや、海拔約7.8~8.5m前後を測ることが確かめられている（『南溝手遺跡1』第4章第7節参照）。窪木遺跡でも、もっとも北寄りのPU区からCH3区にかけてのほぼ南北方向の範囲と、KO1・2区で検出されている。後者は、南溝手遺跡の水田8（C地区）の南東方約80mにあたる。

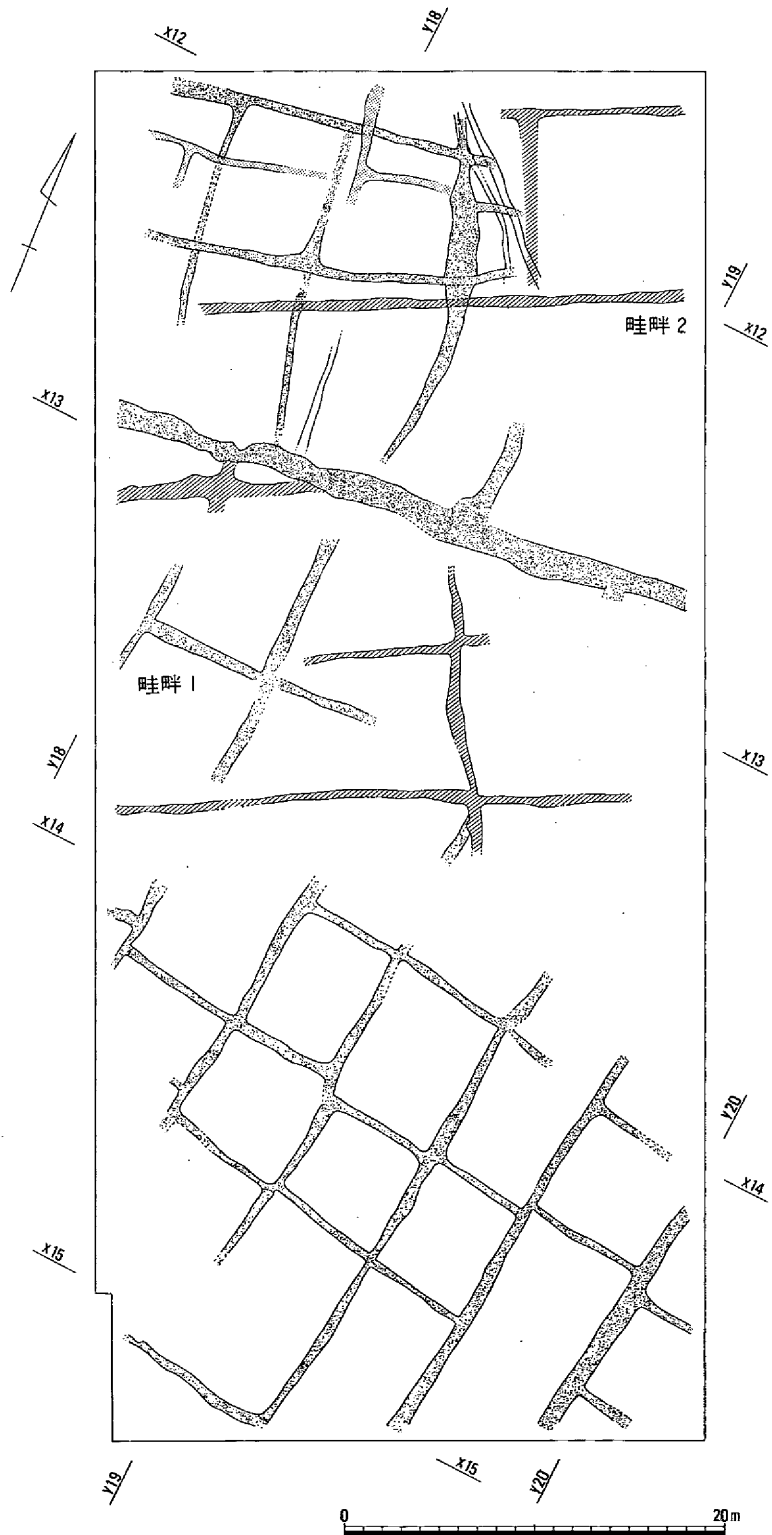
CH1・2区やCH4・5区さらにHO区などは微高地部分で、水田耕作は行なわれず、もっぱら居住地域として利用されたと考えている。

以下、各調査区の水田遺構について概要を述べる。（岡田）

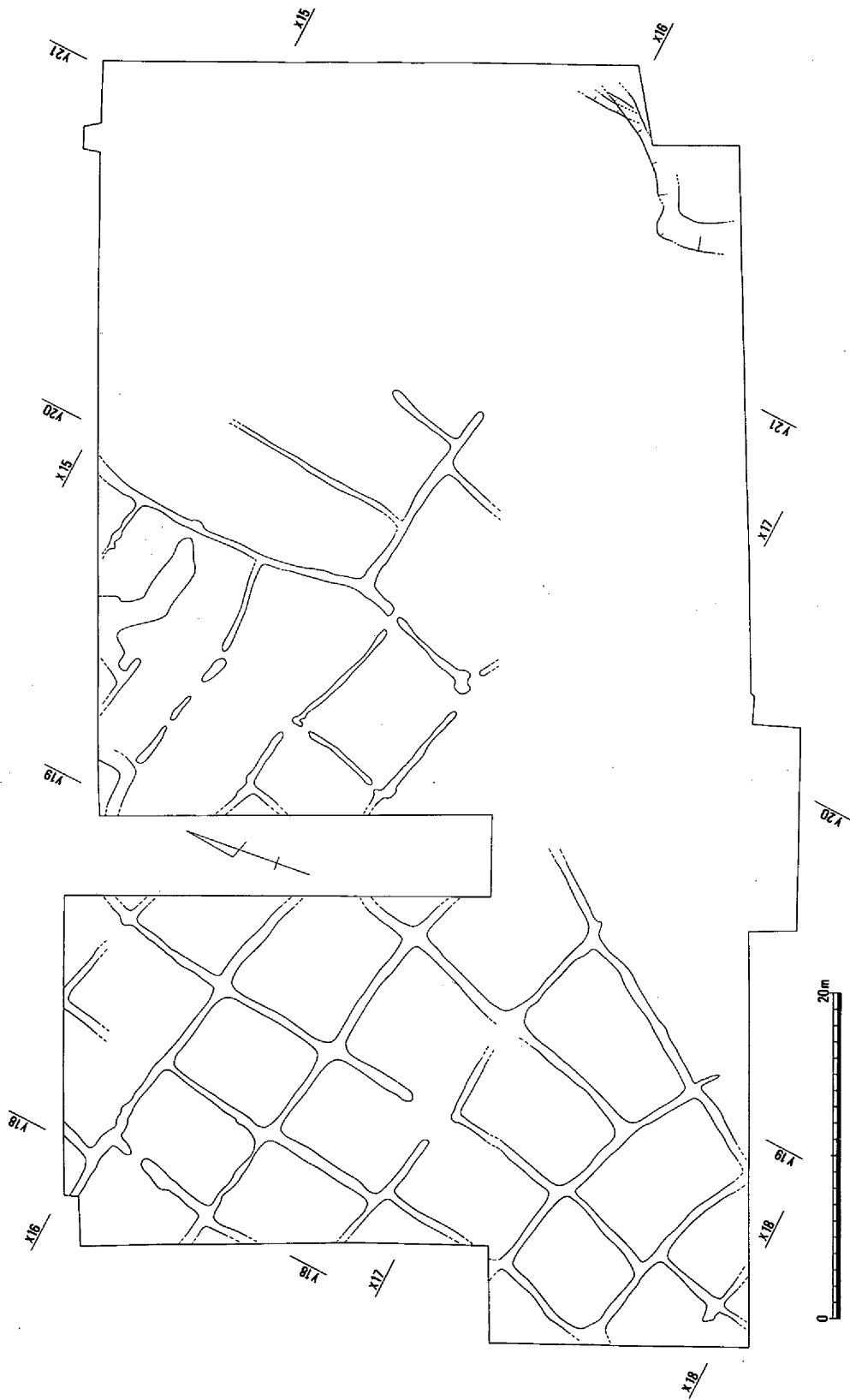
〈PU区の水田〉（第327図）

北半は削平のため明瞭ではないが、南半では格子状を呈しており、南溝手遺跡で報告された水田畦畔の痕跡と同様のものと考えられる。錯綜がみられるが、その方向性から2種に分け、調査区に対し斜行するものを畦畔1、平行するものを畦畔2として記述をすすめていく。

畦畔1は調査区に斜行するが、方位と整合するもので、TA区で検出された水田と同一のものと考えられる。x13ライン北の東西方向のものは盛りあがりを確認できたが、他は鉄分やマンガンが帯状に集積したものである。検出レベルは北端で海拔7.7~



第327図 水田畦畔痕跡(PU区; 1/400)



第328図 水田畦畔痕跡(TA区; 1/400)

7.8m、南端で7.8～7.94mと北に向かって下がっている。確認された一面の面積は31～47㎡である。畦畔の幅は南北50～75cm、東西35～45cmを測り、南北方向の畦畔が広い。一方x13ラインの北にある畦畔は最大1.6mの規模を測り、またその上面が踏みしめられたように固く、鉄分やマンガンの集積が3cm前後認められることから、畦路として使用されたと考えられる。畦畔1の時期については、この畦路とみられる部分の構築が弥生時代後期の遺物を含む層を削り出しており、また検出面上面での古墳時代初頭の甕小片が出土していることから、南溝手遺跡で報告された水田と同一期の水田の可能性が高い。

畦畔2は調査区と平行する一群で、すべて鉄分やマンガンが帯状に集積したものである。検出レベルは7.7～7.84mである。幅は30～50cmで、どちらかといえばやはり南北方向の畦畔が広いようである。また、x13ライン付近の畦畔が最も規模が大きく、畦畔1とよく似た状況を呈している。時期は検出面からいけば畦畔1と同じであるが、方向は現在の地割、つまりは条里にのっており、古代以降の畦畔の痕跡である可能性が高い。 (久保)

〈TA区の水田〉(第328図)

PU区では2種の痕跡を認めたが、TA区では畦畔1に連続するもののみが検出された。水田痕跡は中世水田層とみられる暗灰黄色粘質土を除去した面で見つかったが、この面は弥生時代後期の遺構検出面にあたる。マンガン分の集積による斑紋が帯状に密集し、調査区全体ではその帯が格子目を描くことから、この集積部分を畦畔の痕跡と考えた。帯状部分の断面をみると、マンガン分の集積はその部分に限られ、両側では認められなかった。

通常、水田の下方には鉄やマンガン分の集積が形成されるが、畦畔の下では南溝手遺跡B地区水田8で確認されたように集積が厚く、土壌の硬度が高くなっていた。TA区では中世に大規模な地下げが行われ、斑紋集積部の直上付近に新しい水田が営まれたため、湛水や稲株痕等によって斑紋集積に再び影響が及び、その多くは溶脱して下降し、畦畔下の厚い硬度の高い部分で一部の残存が生じたのではないかと想像する。この現象は地下水位の変化とも関連していたと思われ、地下水の影響を受け易かった深い溝や河道の付近、また、もっとも低位にあたる北西隅では水田痕跡は検出されなかった。時期的には改修時の河道3と関連する可能性が高い。

水田畦畔は幅が30～74cmあり、検出面の海拔高度は南西隅がもっとも高く8.06m、東端の痕跡で7.74mを測った。水田区画は南西隅を要とした扇形に展開するようで、東西畦畔は連続するのに対し、南北畦畔はジグザグに伸びる。水田一画の面積は32.6～57.3㎡であった。 (岡本)

〈H18・19区の水田〉(第330図、図版54-1)

PU区、TA区で検出されたものと類似する水田がH18・19区でも検出された。畦そのものは検出されなかったが、その痕跡とも思われるマンガン粒の沈着箇所が帯状に認められた。中世の水田層を除去した段階で検出され、検出レベルは海拔7.84～8.10mを測る。東に向かって低くなる傾向はTA区と同様である。

マンガン粒の沈着は幅35～40cmを測る。調査区の幅が狭いため、他の調査区のように明確な区画を検出することはできなかったが、H18区とH19区のものは方向性がやや異なるようである。PU区からH19区までの南北畦は北東—南西方向であるが、この方向の畦は、H18区にかけて徐々に東西方向に変わっている。また、区画が小さくなっていることも確認される。これは南西方向に河道と自然堤防状の地形などが存在し、東に向かって徐々に下がっているために生じた結果と思われる。

これらの時期については、周辺の状況から古墳時代初頭の可能性も考えられる。 (柴田)

〈BU区の水田〉(第329・330図、図版53-3)

BU区で検出された水田畦畔痕跡は、前述のPU区・TA区・H18区・H19区で検出された水田遺構と比べると整った形態すなわち、基盤目状の方格の平面形は観察できない。その原因のひとつには、後世の開墾や土地利用によって著しい削平や掘削が行なわれたこともあげられる。

さらに、調査区の東側にTA区の南東隅から続く河道が存在することによって、近接してしかも共存して実際に水田経営が可能であったかという疑問も残る。

しかし、各区でみられたような畦畔痕跡が不明瞭ながらも観察されたため水田遺構と断定した。通常の盛り上がった畦畔そのものの検出や、埋没時の洪水砂などの厚みをもった、立体的な水田遺構の検出は不可能で、水田に直接結びつく出土遺物は皆無であり、正確な水田遺構の時期を決定する手がかりは得られていない。

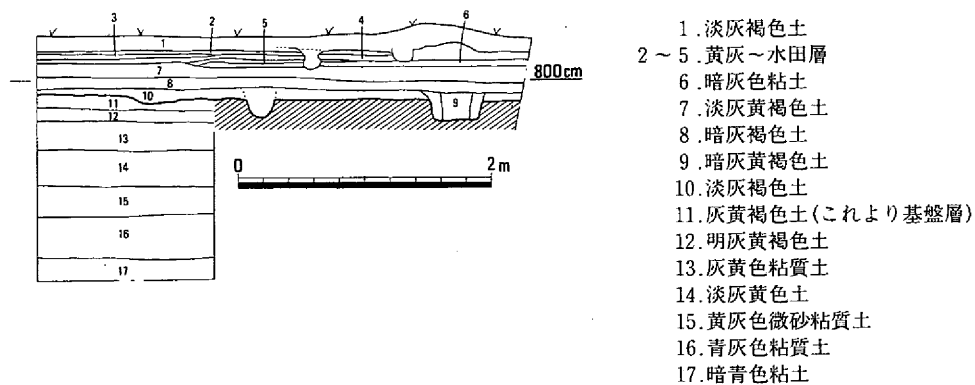
第330図に示す網目部分は、黄色を帯びた赤褐色を呈する鉄分やマンガンの沈着・凝集がきわめて濃い部分である。実際に掘り下げてみると、約10cmほどの厚みがある。

中央部では、河道側が若干低くなる傾向が認められ、西側の高位と多少の段差が生じている。河道に近づくにつれて畦畔痕跡の検出は一層困難となり、河道との平面的な関係については解明することはできなかった。

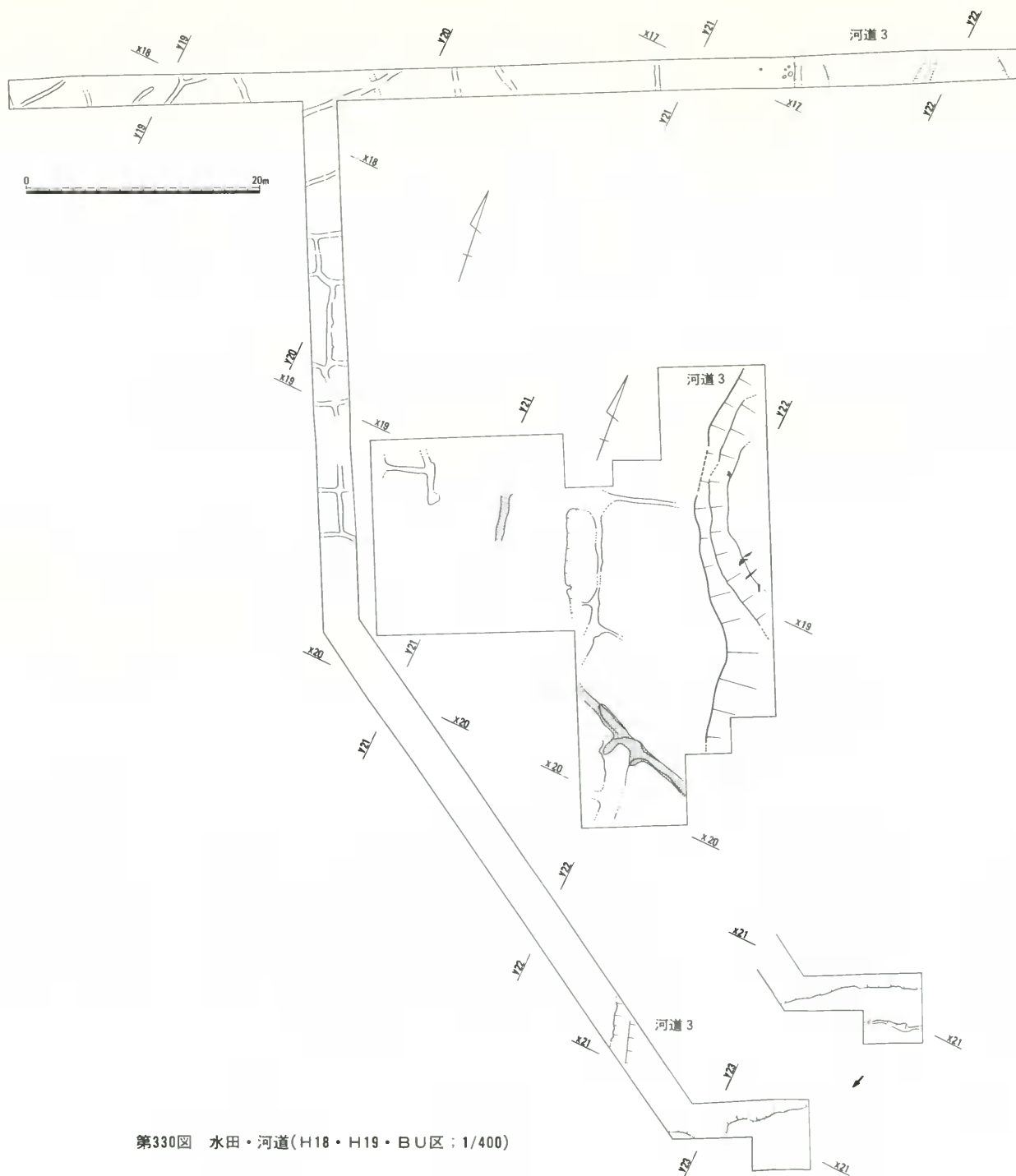
第329図に示す土層断面図では、レベル的には第8・10層に対応し、弥生時代後期の遺構検出面のすぐ直上層かあるいは、そのすぐ下層となっており本来存在したはずの畦畔は現われない。

南溝手遺跡では、明瞭な方形区画を示しかつ、畦畔の高まりをもつ水田遺構が確認されている。その畦畔を除去した際、ほぼ同じ位置の下層で畦畔の鉄分の沈着が認められたことから、畦畔の高まりをもたない各所の鉄分やマンガンが沈着した帯状の痕跡が、畦畔痕跡にまちがいないとした。

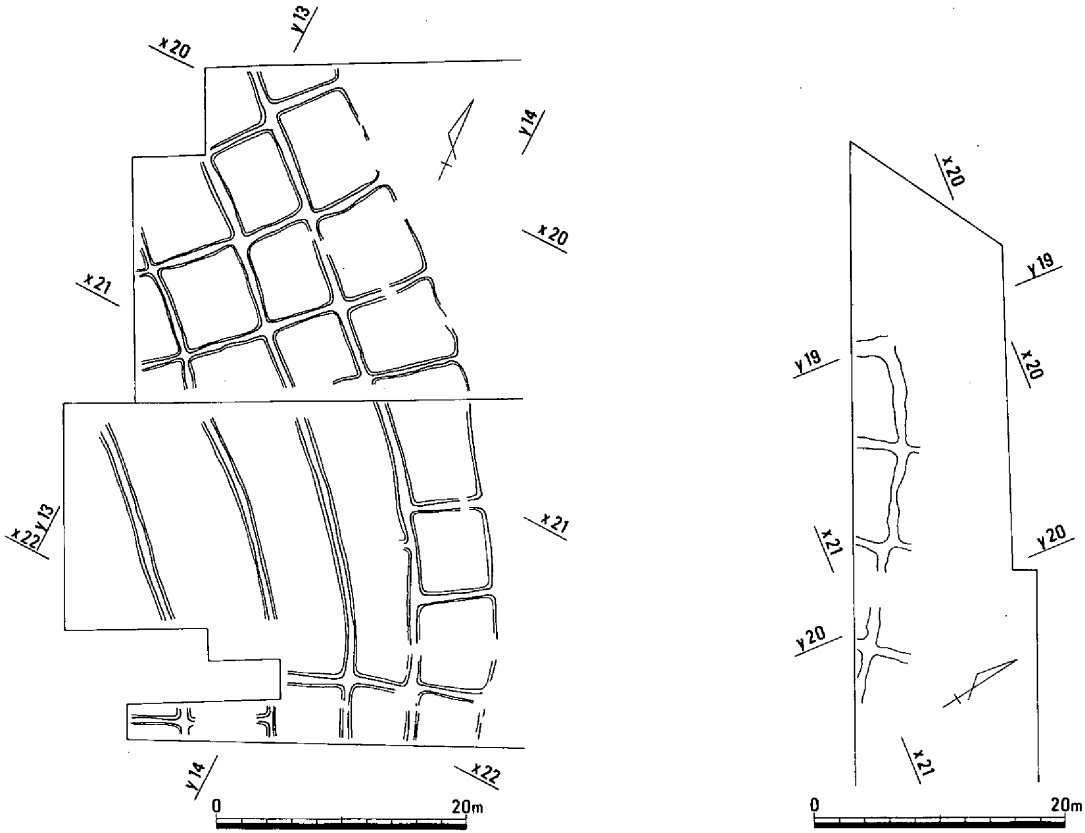
なお、残りの良い水田層からは古墳時代前期前葉の土師器が出土している。さらに、検出レベルは7.8~8.0mで、BU区で検出された水田痕跡が7.85~7.9mであることも共通する。(岡田)



第329図 BU区南区西壁土層断面図(1/60)



第330図 水田・河道(H18・H19・BU区; 1/400)

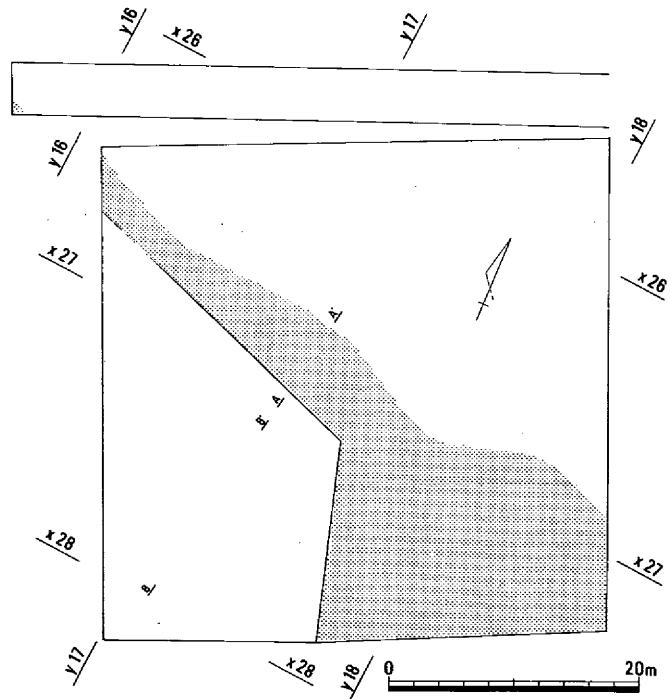


〈KO1・2区の水田〉

(第331図、図版54-2)

第3低位部上で水田面とこれを区画する畦畔を検出した。水田面の海拔高は、微高地沿いには北端で8.22m、南端で8.21mと差がなく、KO2区の5段を東から辿ると8.20m→8.10m→8.02m→8.02m→8.05mと変化する。畦畔は上幅30~50cm、高さ5cm程度の規模であるが、南北方向に対して東西方向の方が貧弱である。区画は長方形になされ、畦畔が十文字に交差する部分が多いが、T字形の箇所もある。確認された1区画の面積で、最小は約33.5㎡である。水口あるいは用排水路に該当する遺構は確認されていない。

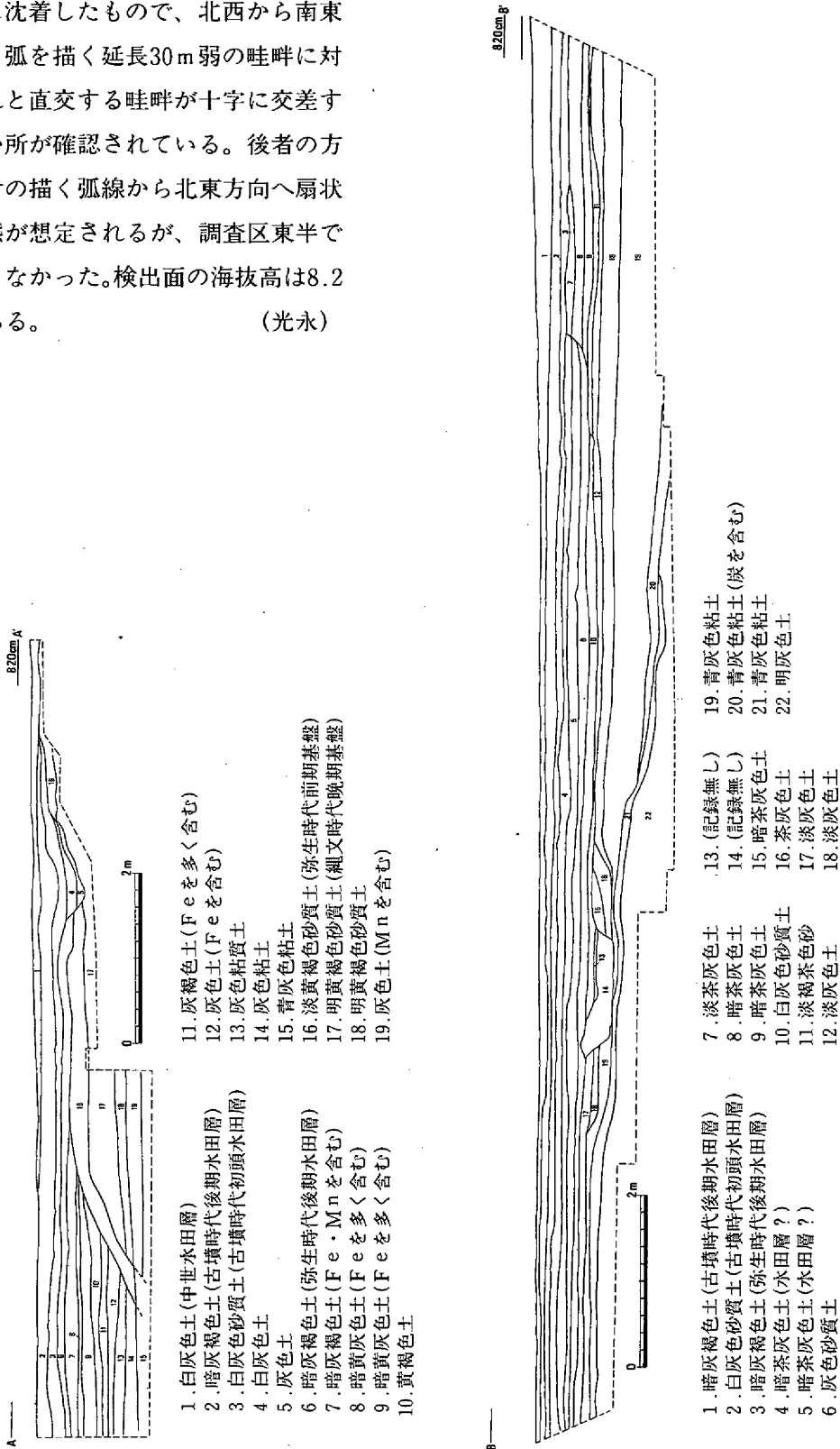
KO1区では、この水田層下で畦畔状の鉄分沈着が認められたが、方向性等は大きく異なる。(光永)



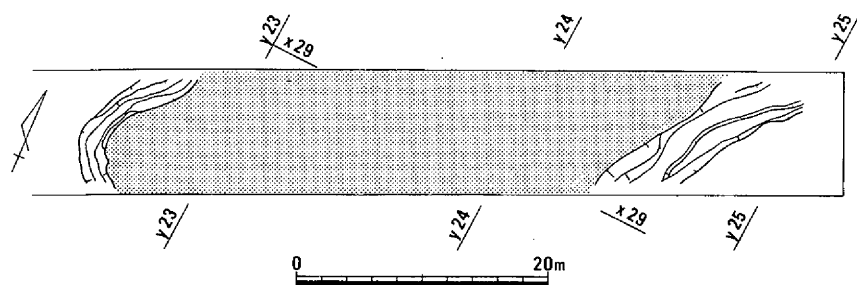
第331図 水田
(KO1・2・CH3・H20・K区; 1/600)

〈CH3区の水田〉(第331図)

調査区の南半において、畦畔の痕跡を確認した。幅40~120cm程度に鉄分・マンガン粒が帯状に沈着したもので、北西から南東方向へ緩く弧を描く延長30m弱の畦畔に対して、これと直交する畦畔が十字に交差する地点4か所が確認されている。後者の方向性と前者の描く弧線から北東方向へ扇状に開く形態が想定されるが、調査区東半では検出できなかった。検出面の海拔高は8.2m前後である。(光永)



第332図 K区土層断面図(1/80)



第333図 水田(HW 3区; 1/600)

〈K区の水田〉(第331・332図)

K区南半の第4低位部でもこの時期の水田層を確認したが、低位部全域を対象とした掘り下げを行なわなかったこともあってか、畦畔等の検出はできなかった。水田面の海拔高については、微高地近くで7.75m、南端で7.62mを測る。この水田層は前述の溝66を越えてより北へ広がっており、低位部北岸には用・排水路に相当する溝がないこととなる。

なお、第332図A—A'第6層、B—B'第3層も水田層と考えられ時期的には弥生時代に遡る可能性が高いものであるが、同様に平面的な構造は不明である。(光永)

〈HW 3区の水田〉(第333図)

HW 3区の中央部に位置する。この部分の地形は、かつては弥生時代後期前葉頃まで河道が存在していた場所で、西と東に広がる微高地に挟まれた低位部になっていたと考えられる。

水田層と考えた土層は弥生時代後期前葉の河道が埋没後に堆積している第280図A—A'の2層やB—B'の1層で、淡灰色の粘質土である。この土層は南溝手遺跡で検出されている古墳時代前期前葉の水田層に類似している。畦畔は検出できなかった。時期についてはこの水田の用・排水路と考えた溝72・73の埋土中から出土した土器から古墳時代前期前葉に廃棄されたと考えている。(平井)

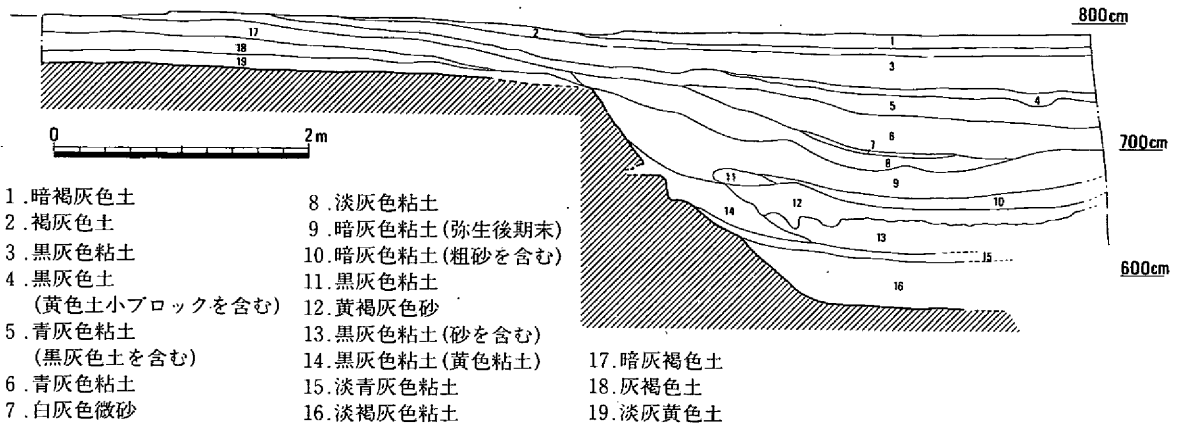
(7) 河道

河道3 (第334・335図、図版43—3、44)

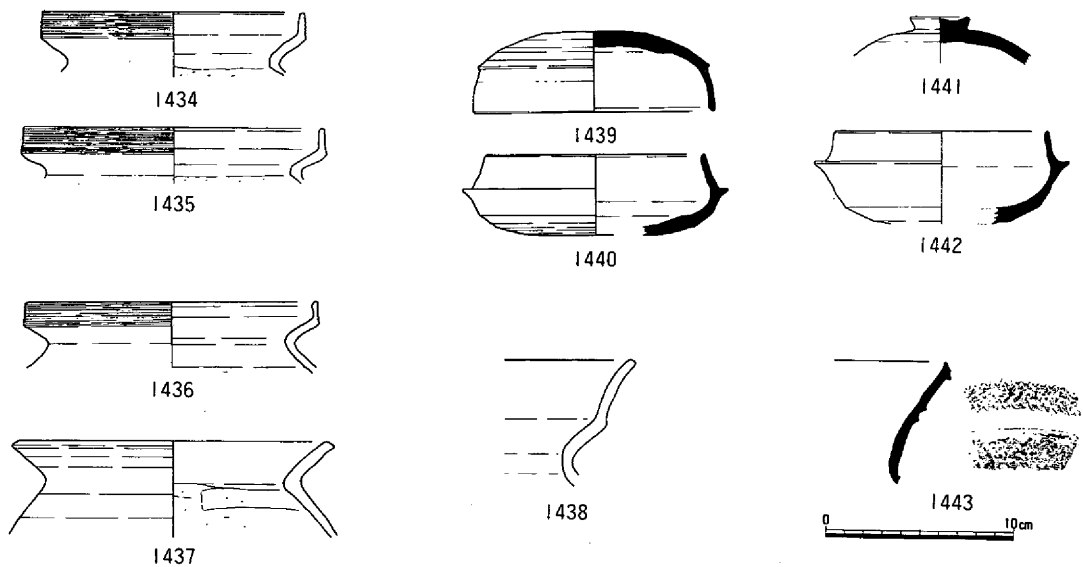
この河道3は、すでに第4節で既述の河道3と同一の河道である。上層の埋積が古墳時代であることや、古墳時代の出土遺物について掲載するためここにあらためて掲載するものである。

再掲図となる第334図(第265図再掲)は、BU区の土層断面図である。図の第9層は、弥生時代後期末葉の出土遺物がみられる層位で、木質遺体の遺存も少なからずみられた。第5～7層からは土師器を主体とした土器の出土がみられるが、この調査区では第12層まで少量ながら古墳時代前期前葉の土師器の出土が確認されている。1434～1436はいずれも吉備地方特有の甕で、口縁部に平行櫛描き沈線が巡る特徴が明瞭に看取される。また、1266・1271はいずれも上層の第3層から出土した須恵器で、比較的古式の形態を示している。一方、H18区でも、1435・1439・1443のあい前後する時期の須恵器が出土している。これらが埋積し始めた時期には、河道も流量は激減したものと推察され、たわみ状をなしていた部分に遺物が埋積したと理解される。

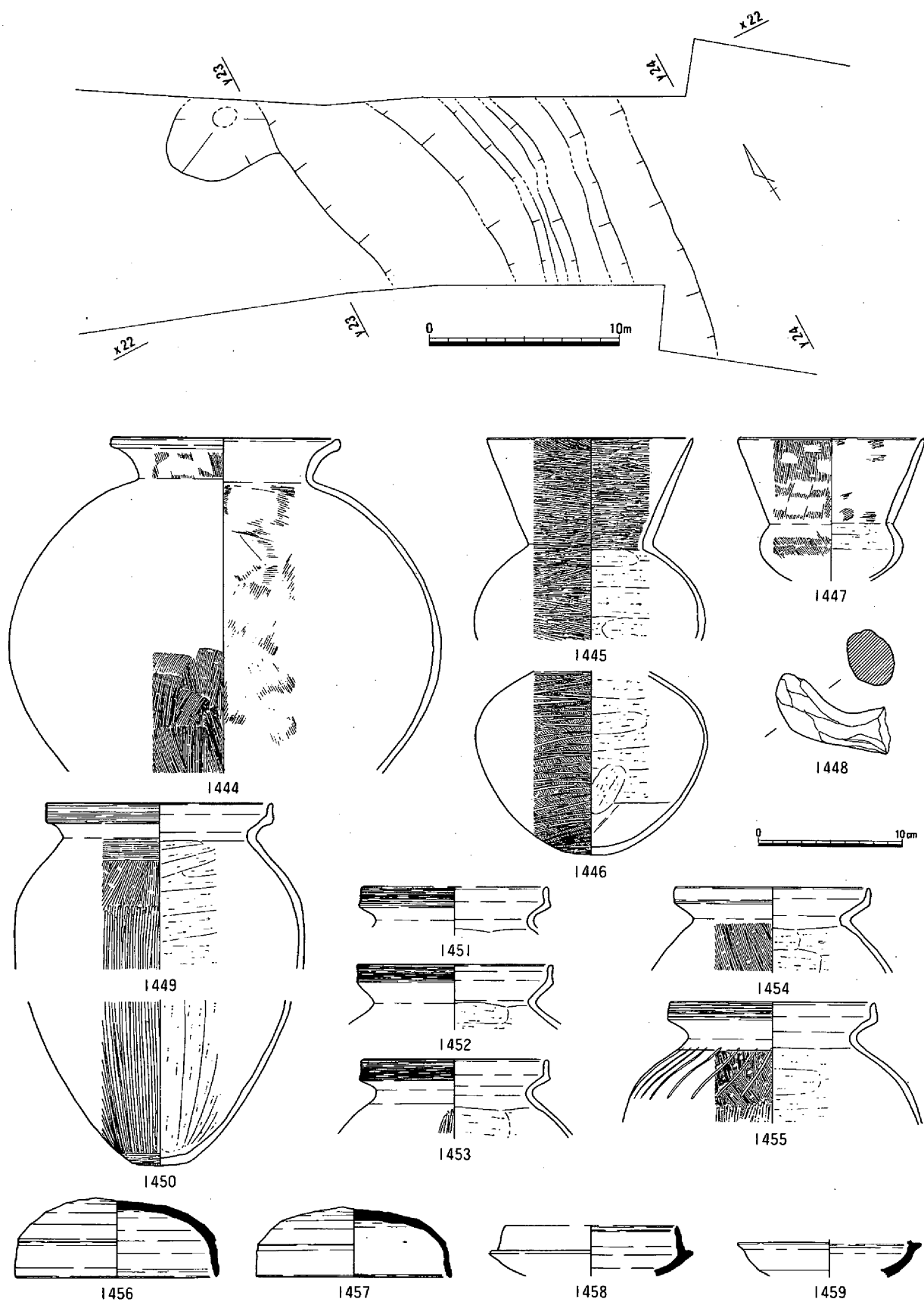
発掘調査は、いずれの調査区でも狭小な範囲にとどまっており、長大な遺構のごく一部の知見が判明したにとどまったが、この北側延長部についてはHC調査区の成果(次年度刊行の『窪木遺跡2』に収載)もあわせてあらためて検討する必要がある。(岡田)



第334図 河道3東西土層断面図(再掲図=BU区; 1/60)



第335図 河道3上層出土遺物(BU・H18区; 1/4)



第336図 河道4 (1/300)・出土遺物(1/4)

河道4 (第268・336図、図版54—3)

CH4区に位置する河道4についても、河道3と同じ状況であり、弥生時代の流路の上層に堆積をみせている。

検出された最大幅は15mを測るが、流路の中心は東寄りにあるために西肩から約5mまでは緩い斜面となっている。調査区内での西肩北端部では、肩口からの奥行5mで、深さ30cmの規模の摺り鉢状のくぼみが検出されているが、人工的な構造物とは見做しがたい。底面については延長11m強を検出したのみであるが、この間にやや南西方向へ曲がっている。

第268図第28層以上が古墳時代の堆積によるものと考えられ、埋没の過程でこの時期に至っても大規模な洪水に見舞われた状況を見ることができる。第1～3層は規模が小さく、人工的に掘られた溝の可能性もあるが、調査時には認識できなかった。

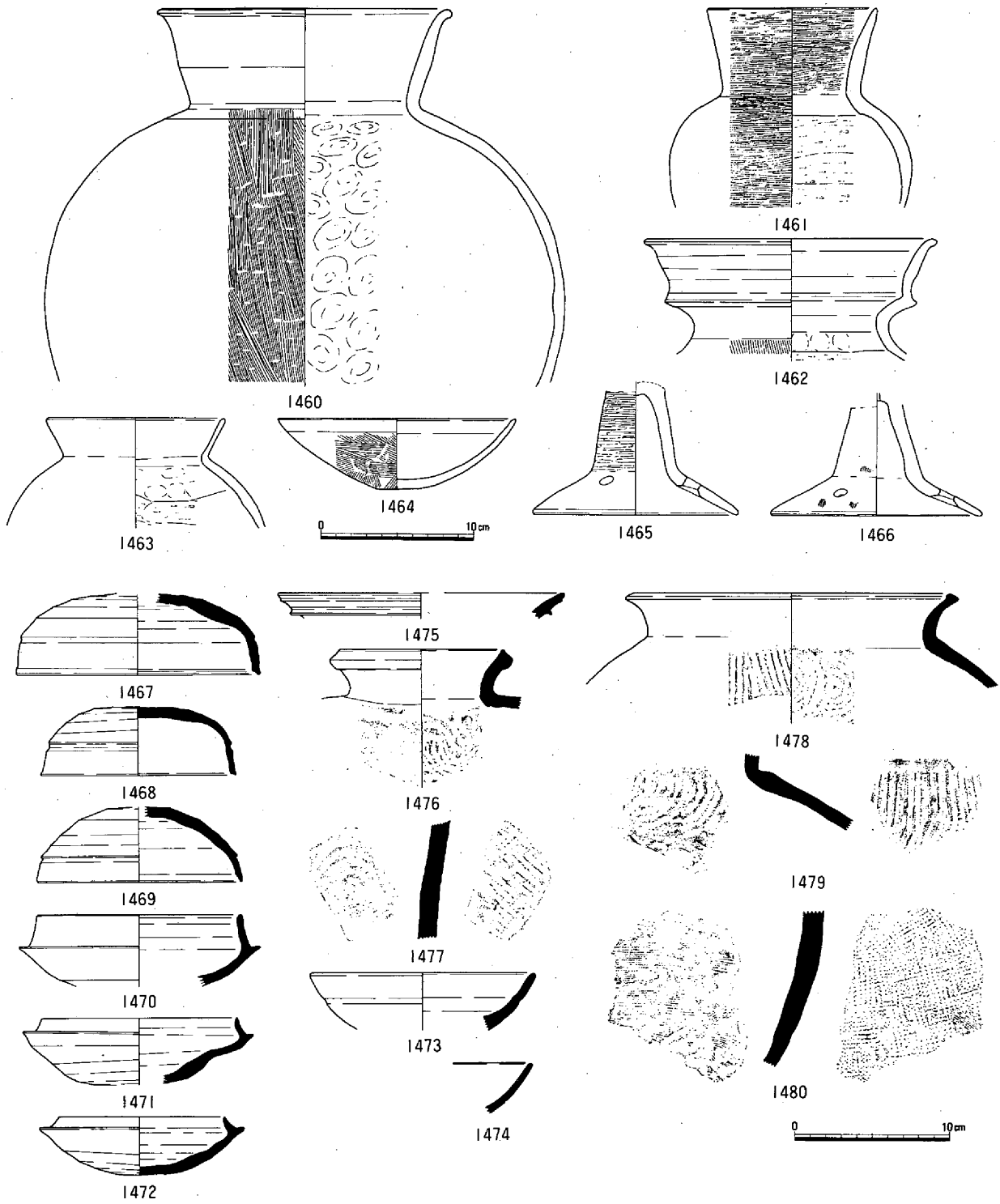
多くの土器が出土しているが、量的には弥生時代に属するものより少ない。第336図の1444～1455は土師器、1456～1459が須恵器である。1444は胴部が球状に張り、内面はヘラケズリされていない。1447はやや小形で、台付となる可能性がある。1448は上反する甑の把手である。1449・1451～1453・1455は口縁部外面に櫛描沈線が巡る甕で、1450の底部は平底を残している。須恵器は杯身・杯蓋を図示したが、CH5区の溝71出土遺物より古く、HW3区の溝76出土遺物に近いものである。(光永)

(8) その他の遺構・遺物

北半の調査区においては、河道3の他では古墳時代に属する遺物はほとんど出土していない。したがって第337図に示した遺物は南半調査区、それもK区以南から出土したものである。1460～1466が土師器、1467～1480が須恵器である。

調査区でみると、1461・1462・1465・1466の土師器と、1467・1469～1471の須恵器がCH5区からの出土である。このうち、1467の杯蓋は調査区北部で検出された建物構成不明の柱穴から出土したもので、時期を特定できなかったCH4区周辺の建物に関連する可能性もある。これ以外は側溝掘り下げ等による出土で、溝71に伴う可能性が高いものである。1460はHW3区からの出土である。その他の土師器甕1463、鉢1464と、須恵器の杯蓋1468、杯身1472、壺?1473、横瓶1467、甕1477～1480、椀1473・1474はK区からの出土であり、第4低位部の古代以降の堆積土に含まれていたものである。

(光永)



第337図 南半調査区出土遺物(古墳時代)(1/4)

第6節 古代・中世・近世の遺構・遺物

1. 概要

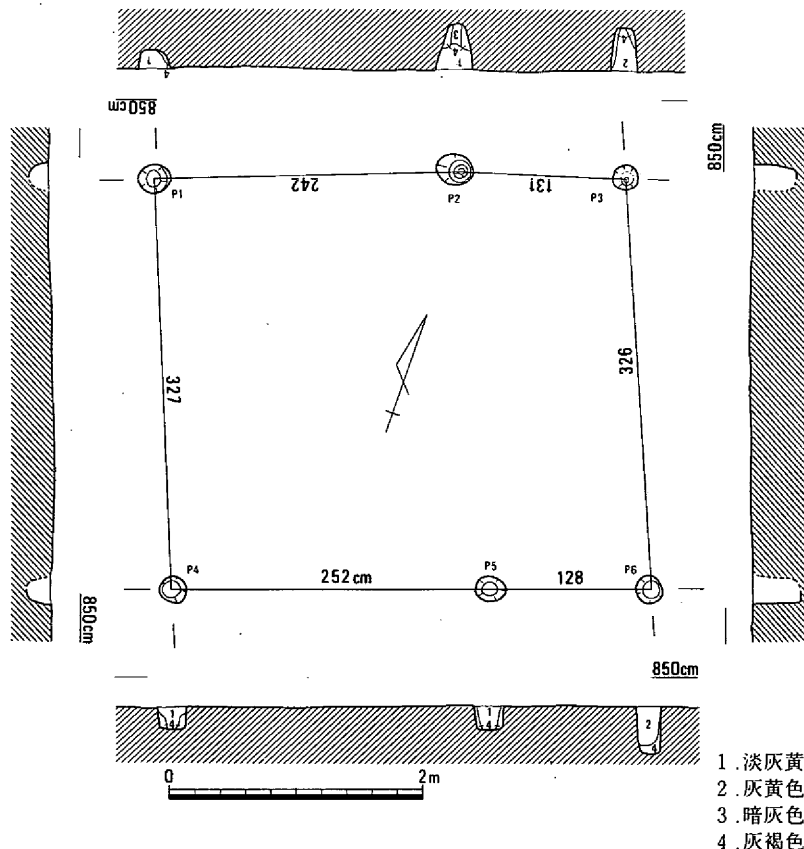
南溝手遺跡では、古代・中世と考えられる遺構として掘立柱建物、井戸、土壇、土壇墓、柵列状遺構、溝、素掘溝群、土手状遺構、水田、柱穴多数が検出された。

窪木遺跡でも同様に、集落遺跡を構成する掘立柱建物など居住に関わる遺構、そして水田・溝など生産に関わる遺構とに大別して検出されている。古代に限定される遺構は比較的少なく、むしろ中世に比定される遺構が多い。しかも、素掘溝群のように平面的な広がりをもつ遺構は、近世にも継承されてゆく傾向がある。調査区によっては、中世と近世の明確な区分ができない溝などの遺構があり、ほぼ同じ位置で掘り直して利用された溝の一部は、方向なども継承しながら近代・現代にいたるまで幹線水路として存続したことが確かめられた。以下、遺構の種別ごとに概要を述べる。(岡田)

2. 遺構・遺物

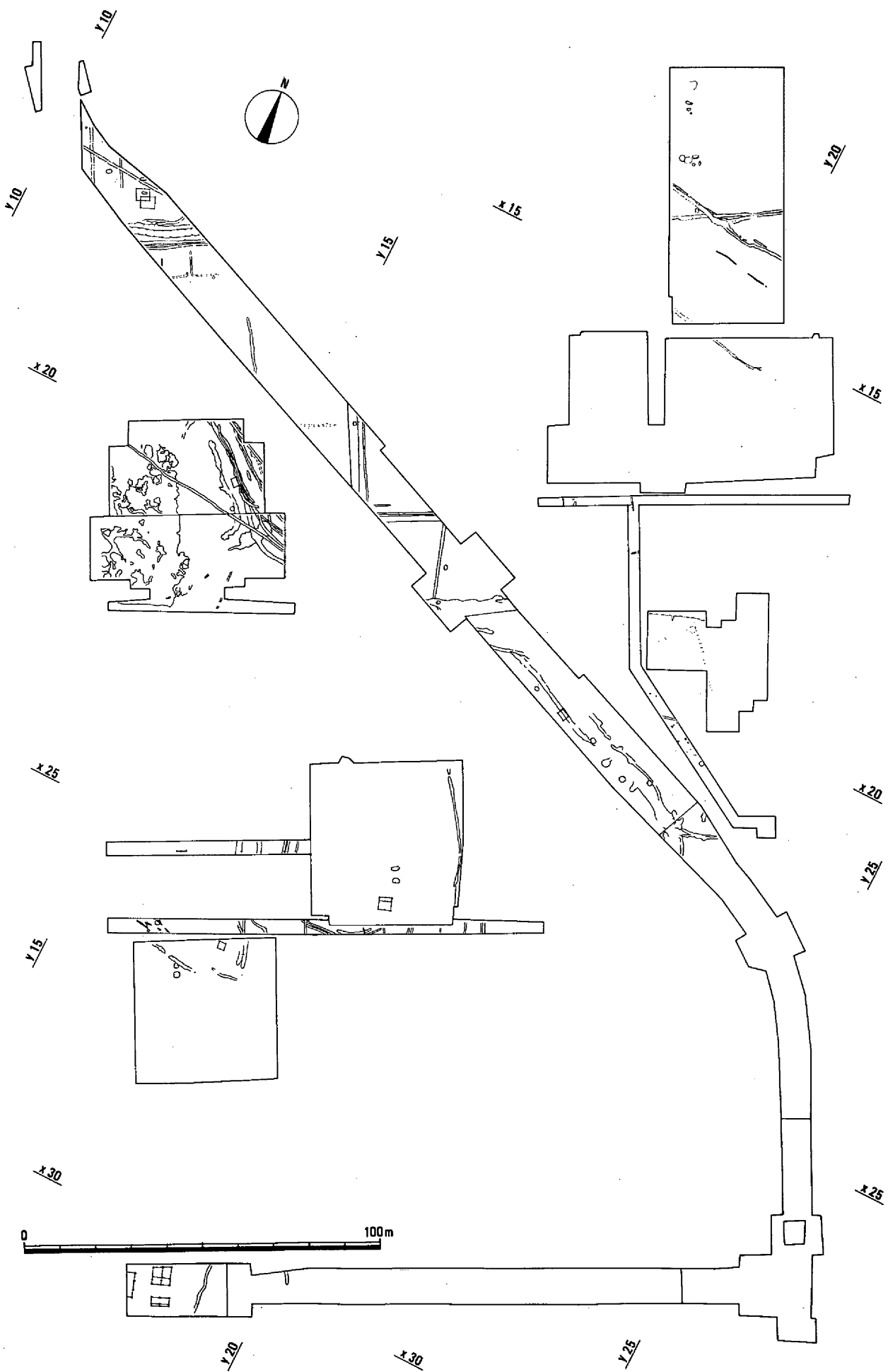
(1) 建物

建物48 (第338図、図版55-1)

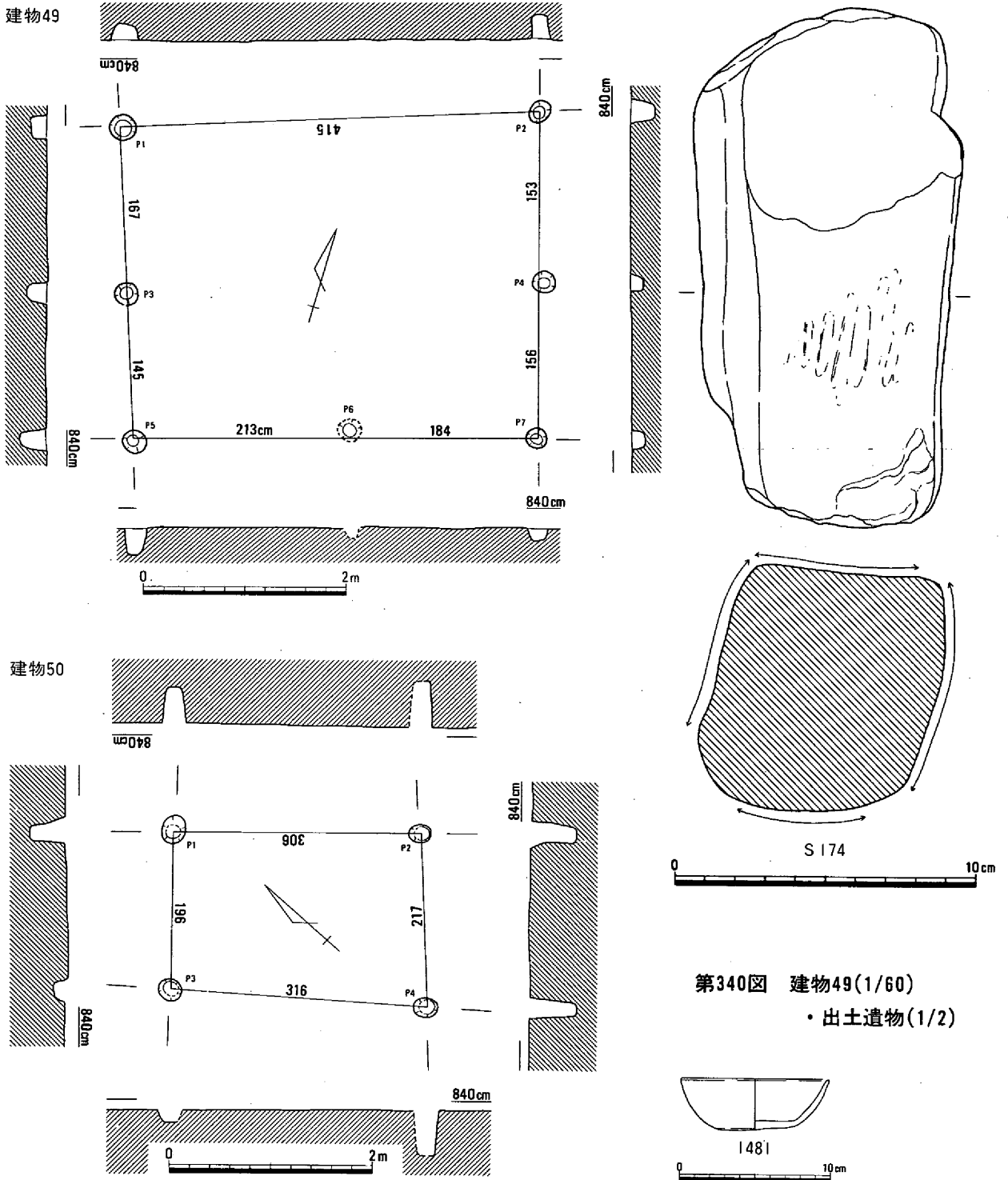


CH1区で検出された掘立柱建物で、2×1間の側柱建物である。棟方向はやや北に振る東西を指し示す。南側の一部分が重なるように建物49と同時に検出されたが、柱の掘方は円形でP2には柱痕跡が観察され、径約10cm足らずの断面が残されている。出土遺物は認められないが、中世それも鎌倉時代に比定されるだろう。(岡田)

第338図 建物48(1/60)



第339図 古代・中世・近世遺構全体図(1/1,500)



第341図 建物50(1/60)・出土遺物(1/4)

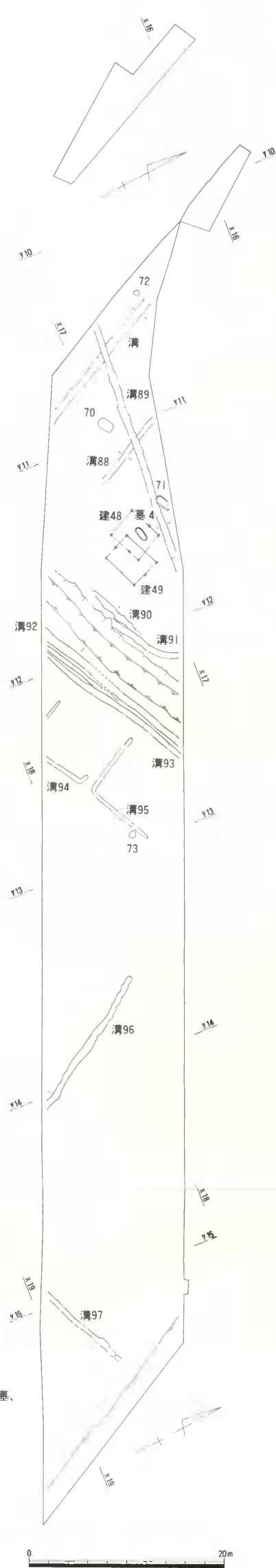
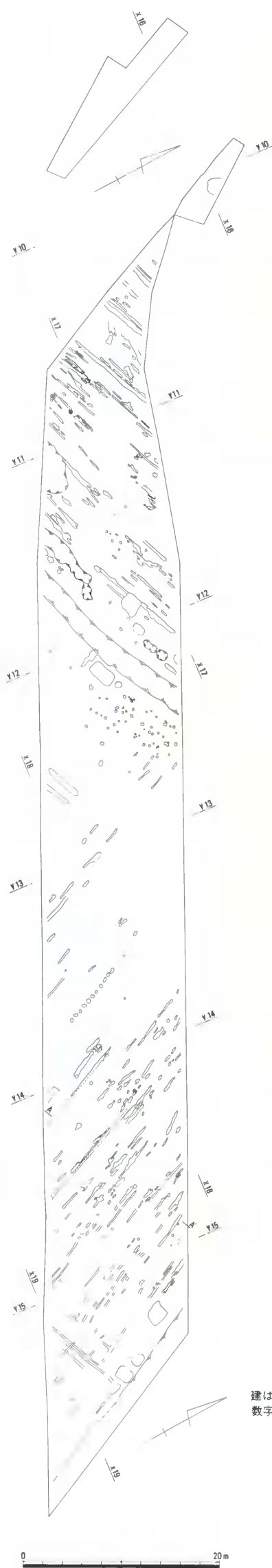
建物49 (第340図、図版55-2)

建物48の南側に重なって検出された。間仕切りをもつ、ごく一般的な普通の民家と考えられる。建物48とほぼ同時期と推定され、遺物には、P5から出土したS174の砥石がある (岡田)

建物50 (第341図)

KO1区東部に位置する1×1間の掘立柱建物で、主軸方向をN-42°-Wに置き、溝123を切っている。柱の掘り方は長径20~30cmの楕円形で、深さはP3が10cm強と浅いが、他は32~45cmを測る。土師器

近世

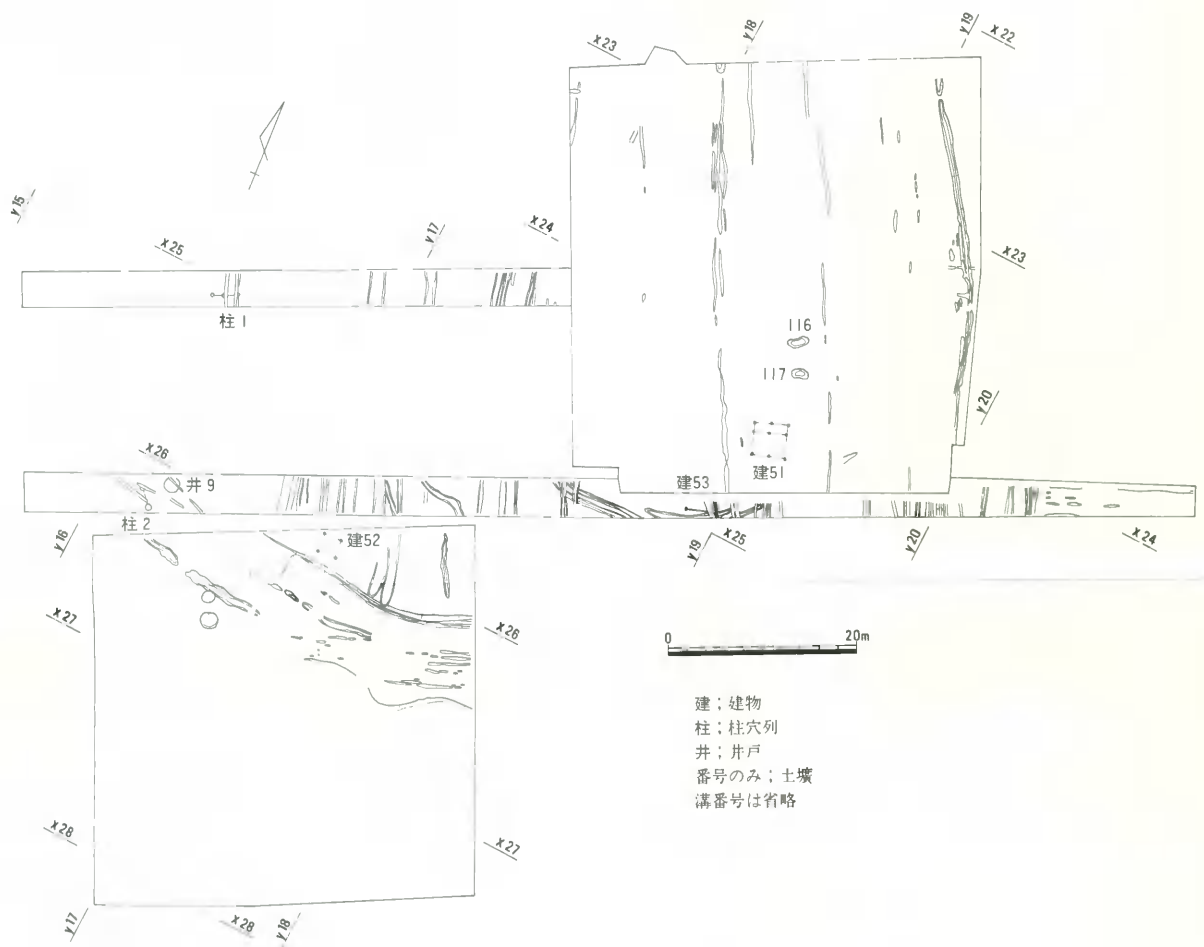
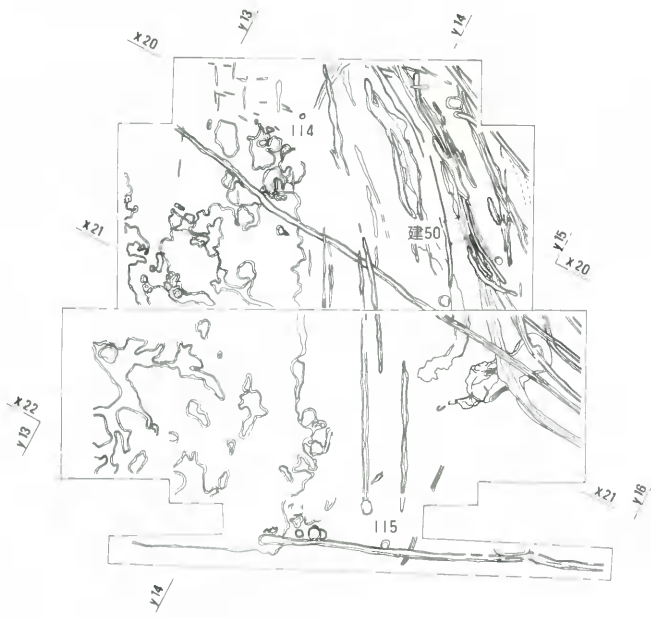


建は掘立柱建物、墓は土壇墓、
数字のみは土壇を示す。

0 20m

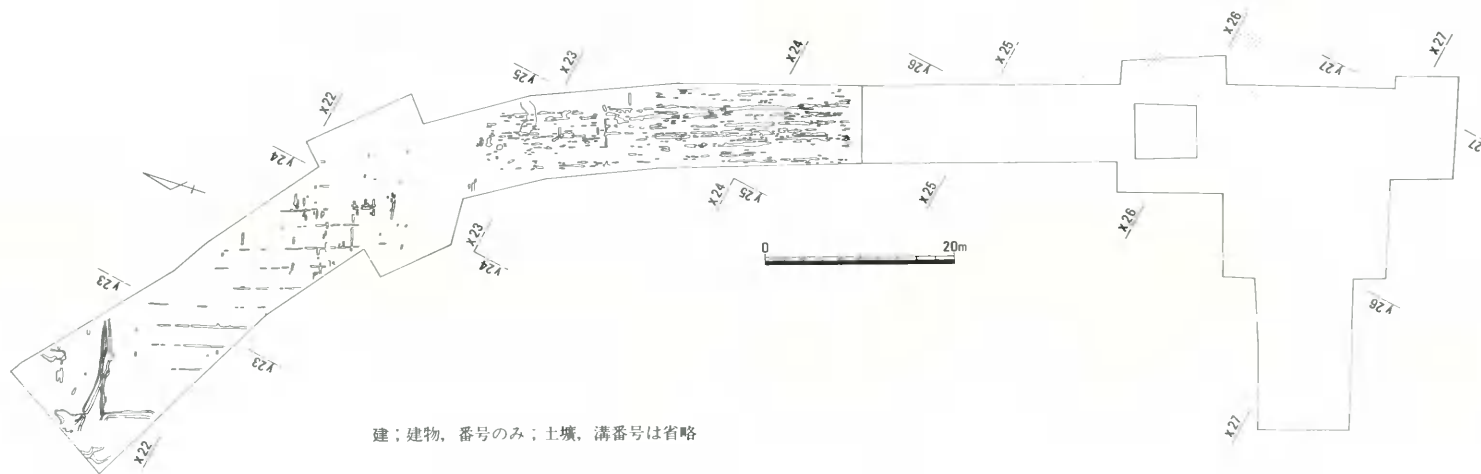
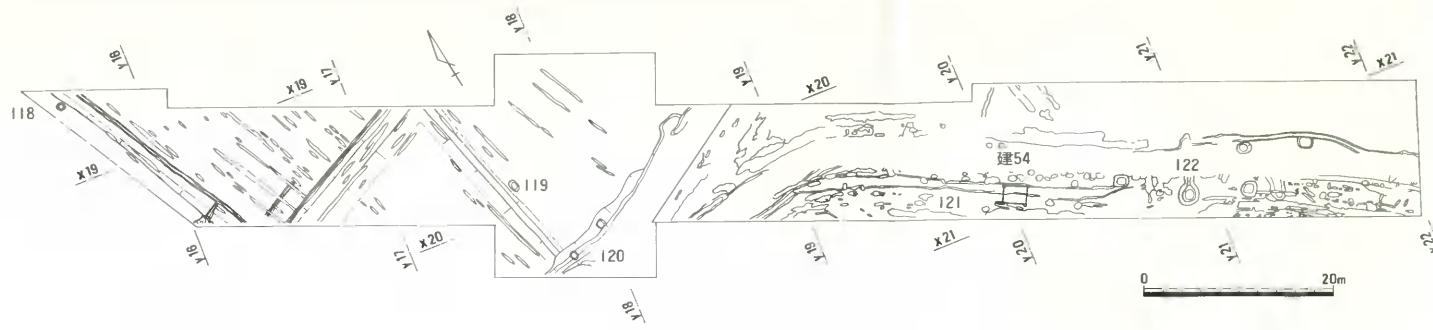
0 20m

第342図 遺構全体図(CH1区; 1/400)

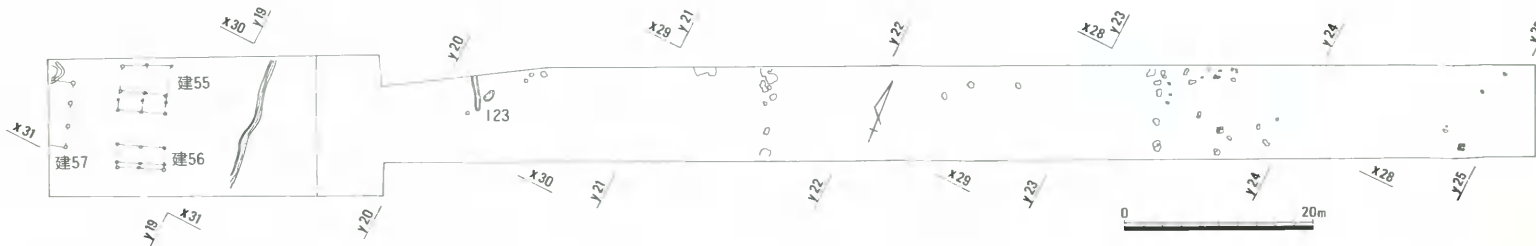


建：建物
 柱：柱穴列
 井：井戸
 番号のみ；土壌
 溝番号は省略

第343図 古代・中世・近世遺構全体図(KO1・2・HO・K10・H20・K区；1/600)

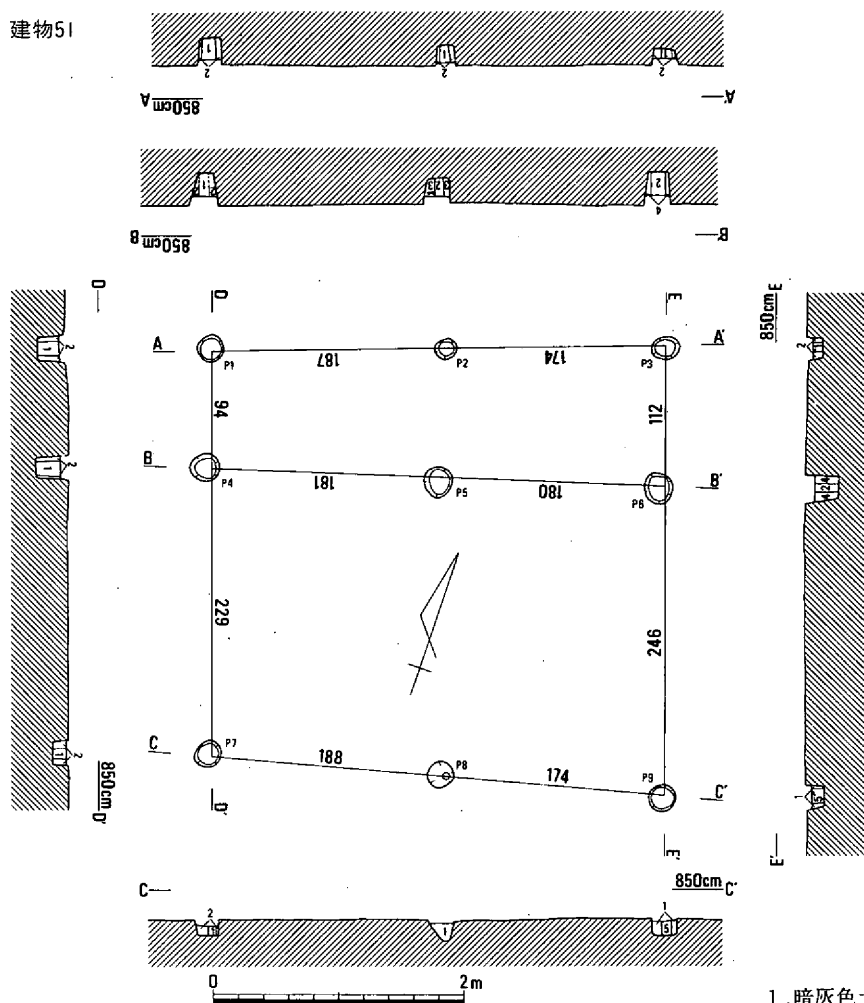


建：建物，番号のみ；土境，溝番号は省略



第344図 古代・中世・近世遺構全体図(CH 2～5・HW 1～3区；1/600)

建物51



の杯1481が出土しており、鎌倉時代に比定される。
(光永)

建物51 (第345図、

図版55—3)

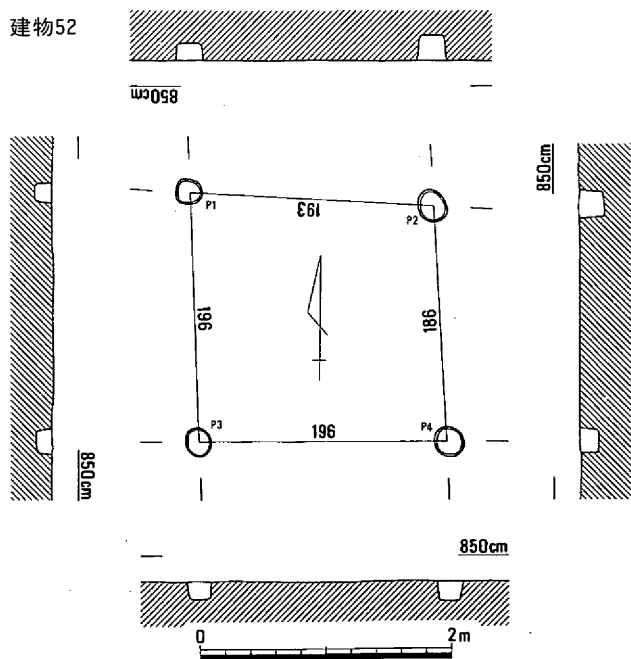
H O区の南端近くに検出された2×1間の掘立柱建物であり、北側に底をもつ。柱穴掘り方は径20cm前後を測り、9本の柱穴のうち8本には径7cm前後の柱痕跡が認められる。埋土は灰色系粘質土で、遺物はないが中世建物であろう。(柳瀬)

建物52 (第345図)

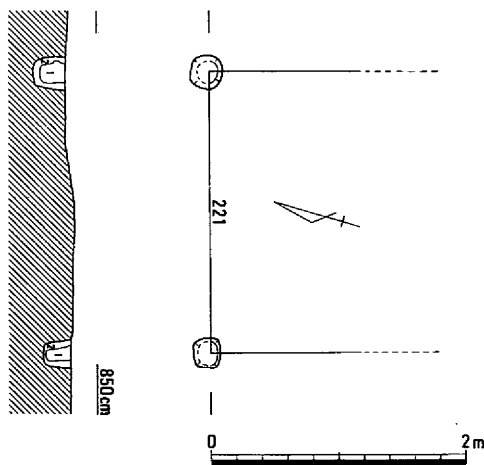
K区の北端中央部に検出された1×1間の建物である。柱穴は径20~25

- | | |
|-------------------|----------|
| 1. 暗灰色土
(炭を含む) | 3. 暗灰褐色土 |
| 2. 灰色土 | 4. 淡灰褐色土 |
| | 5. 濃灰色土 |

建物52



建物53



- | | |
|--------------------|-----------|
| 1. 暗灰色粘土
(炭を含む) | 2. 淡灰色粘質土 |
|--------------------|-----------|

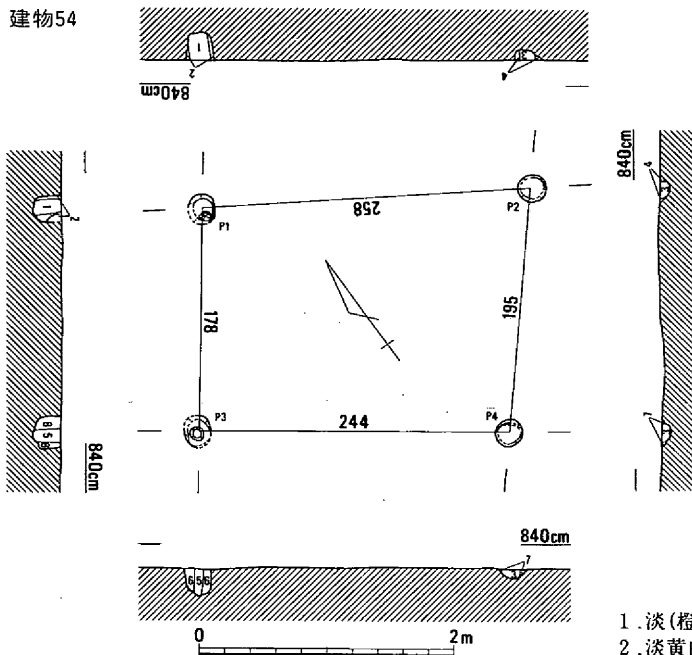
第345図 建物51~53(1/60)

cmのほぼ円形を呈し、深さは12~20cmを測る。

埋土は暗灰褐色土を呈し、遺物はないが中世の可能性が高い。

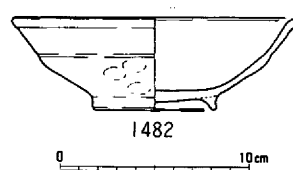
(柳瀬)

建物54



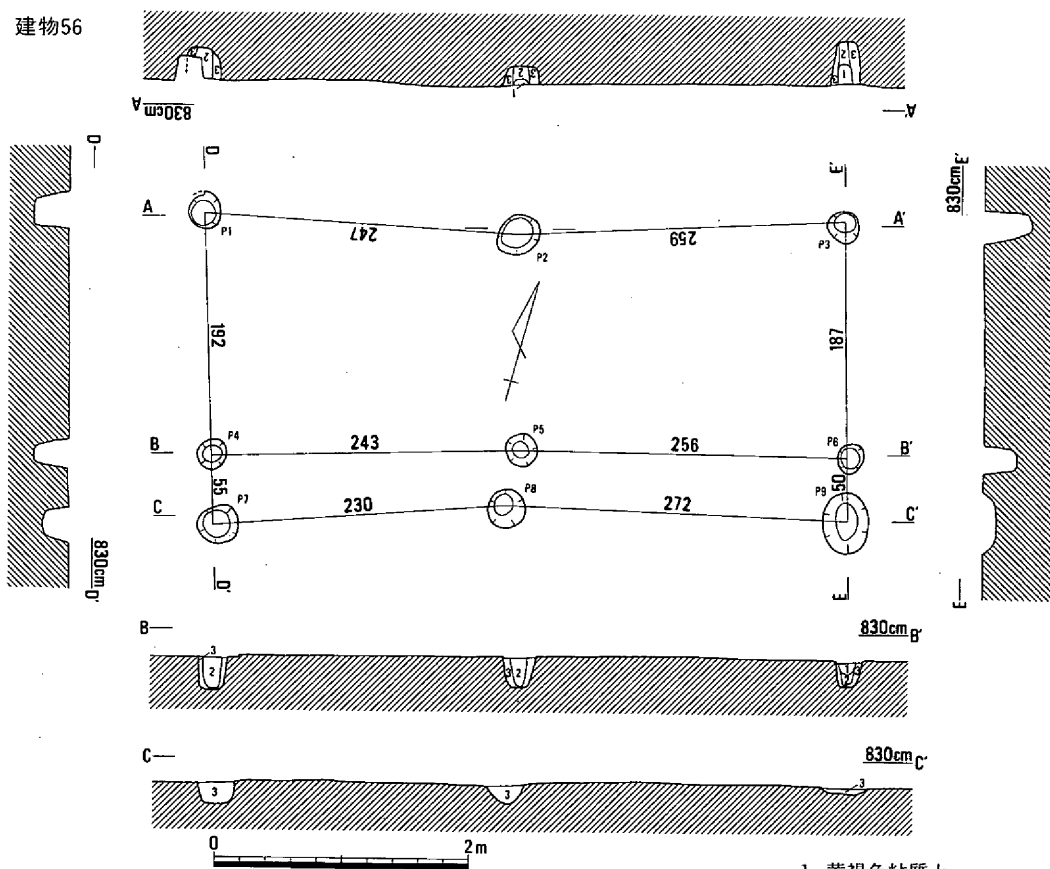
建物53 (第345図)

建物51の南に位置する。この西側にさらに2本柱穴が等間隔で並んでおり、桁行3間の建物になる可能性もあったが、底面の海拔高や埋没状況の違いから梁間1間の建物と考えた。柱穴は径25cm前後で、15~20cmの柱痕跡が認められた。土器は出土



- 1. 淡(橙)灰色粘質微砂
- 2. 淡黄白灰色粘質微砂
- 3. 淡(白)黄灰色粘質微砂
- 4. 淡黄褐色灰色粘質微砂
- 5. 淡黄灰色粘質微砂
- 6. 淡(白)黄灰色粘質微砂
- 7. (淡)灰色粘質微砂

建物56



- 1. 黄褐色粘質土
- 2. 淡灰色粘質土
- 3. 褐灰色粘質土

第346図 建物54・56(1/60)・出土遺物(1/4)

していないが、埋土からこの時期に含めた。

(久保)

建物54 (第346図)

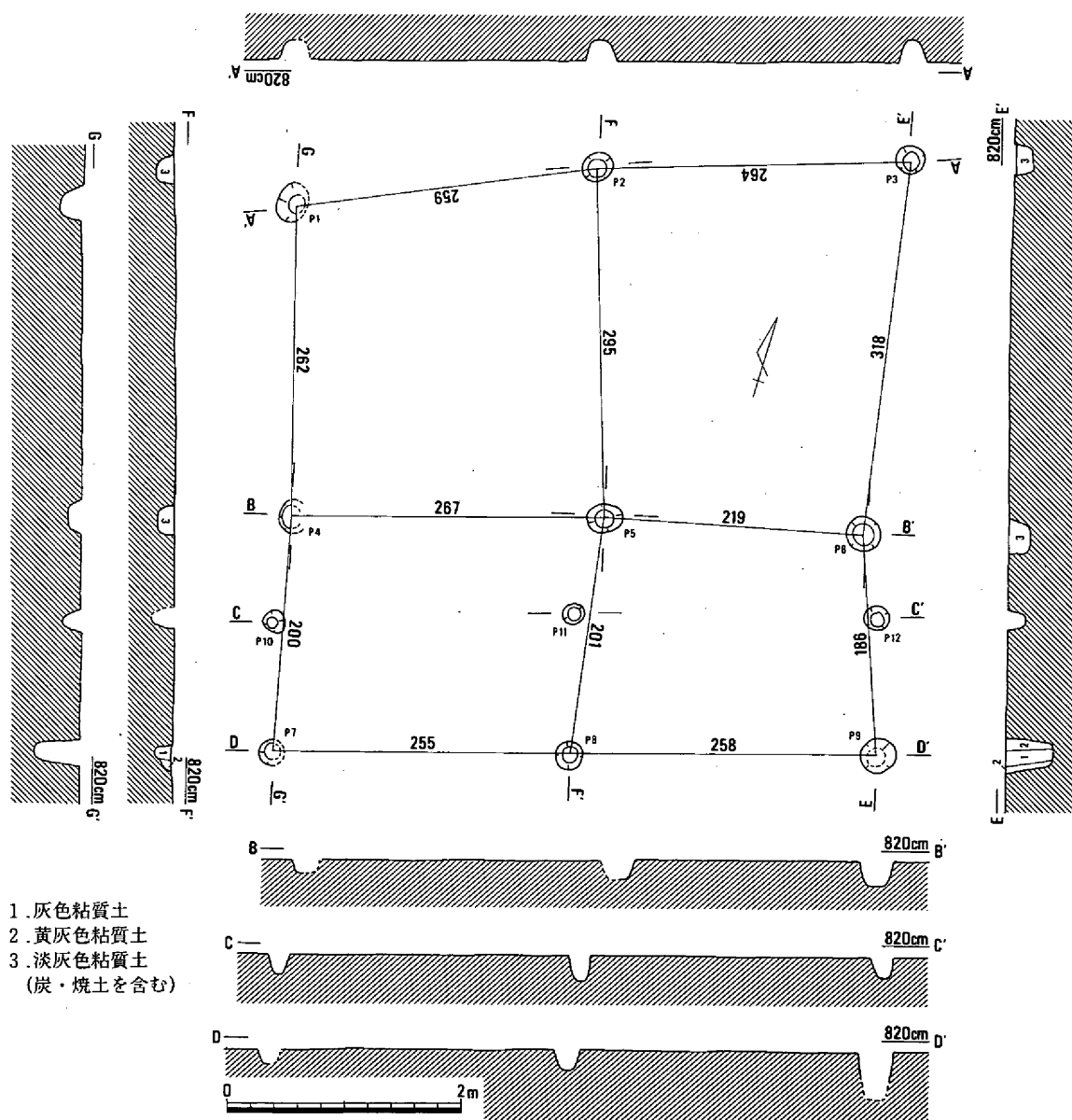
CH 3区の中央に位置する1×1間の掘立柱建物である。主軸方向は北西—南東方向である。柱間は、桁で244cmと258cm、梁で178cmと195cmを測る。P 2がやや離れた位置にあるため、ややいびつな平面形である。柱穴は平面円形で径21~24cmを測り、深さ6~24cmが残存している。また平面円形の柱痕跡が確認できており、径12cm前後を測る。

柱穴埋土から高台付椀1482が出土しており、建物の時期は鎌倉時代と考えられる。

(柴田)

建物55 (第347図、図版56—1)

HW 1区に位置する2×2間の建物である。東辺と南辺は約5mと等しいが、西辺が約4.6mと短いためいびつな平面形を呈する。P10~12は他の柱穴と比べて一回り小さく、身舎南半の床を支える束柱と考えられる。P1~9の直径は30cm前後とほぼ同一であるが、P1~6・8・10~12の深さが20



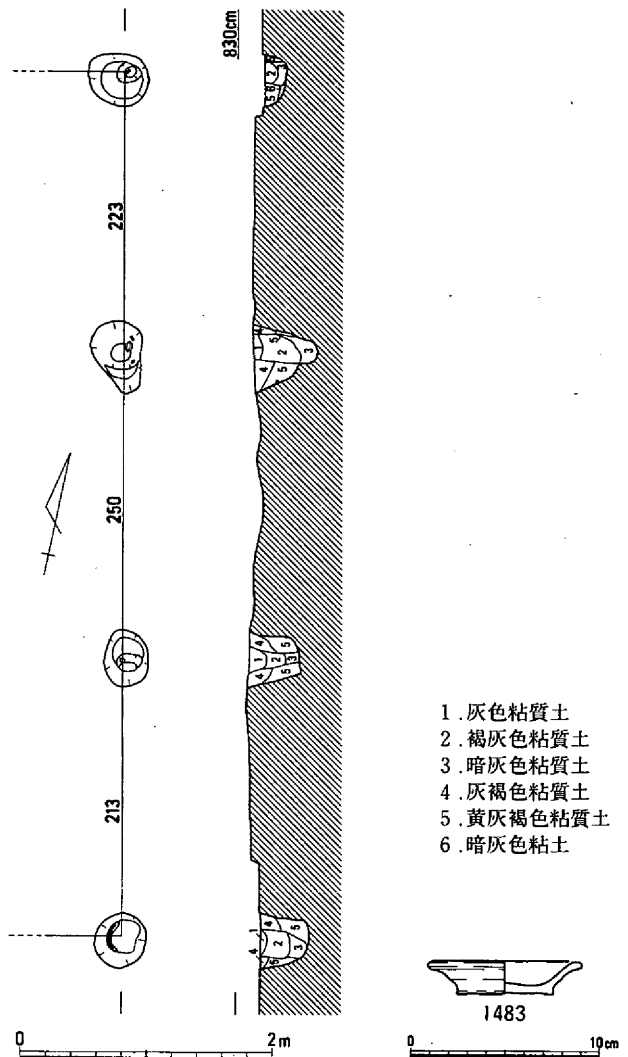
第347図 建物55(1/60)

第3章 発掘調査の概要

cmを超えないのに対して南辺の両端にあたるP7・9は約40cmと深く、また東柱も伴うことから、身舎の南半がかなりの重量に耐えるような構造をもち、北半とは違った用途に使用されたことを示唆している。柱穴から土器細片が少量出土しており、中世と考えられる。(久保)

建物56 (第346図、図版56-2)

建物55の南に位置し、東西に棟方向をもつ1×2間の建物で、南面に庇を有する。P1~6は平面規模や深さにばらつきがあるが、いずれからも径10~15cm程度の柱痕跡が確認された。底にあたるP7~9は比較的浅く、柱痕跡も確認されなかった。図化しえなかったが土師質の椀や小皿片が出土しており、中世と考えられる。(久保)

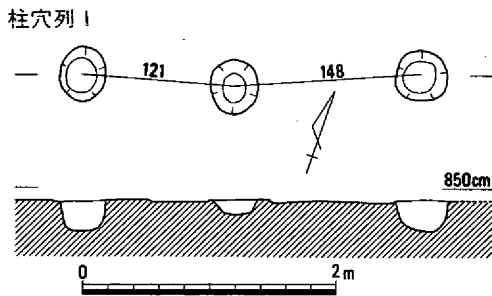


- 1. 灰色粘質土
- 2. 褐灰色粘質土
- 3. 暗灰色粘質土
- 4. 灰褐色粘質土
- 5. 黄灰褐色粘質土
- 6. 暗灰色粘土

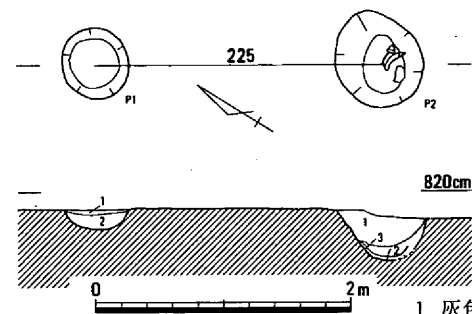
第348図 建物57(1/60)・出土遺物(1/4)

建物57 (第348図)

建物55・56の西に位置する。柱穴は直径45cm前後、深さはP1を除いて40~50cmを測り、建物55・56と比較して大きい。総ての柱穴において直径約20cmの柱痕跡を確認している。柱穴から土師質の小皿1483や椀が出土しており中世と考えられる。建物55・56と併存していた蓋然性は高く、これらの3棟は位置的にも平行もしくは直交する関係にあり、後述する溝150と共に屋敷地を構成していたものと考えられる。(久保)

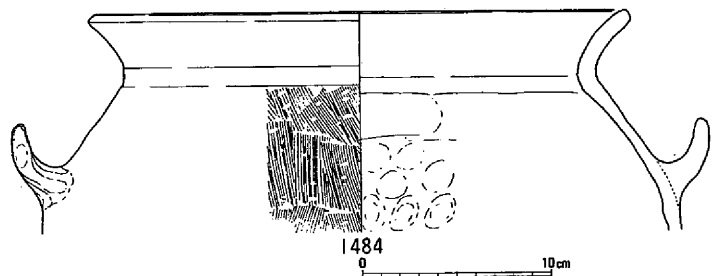


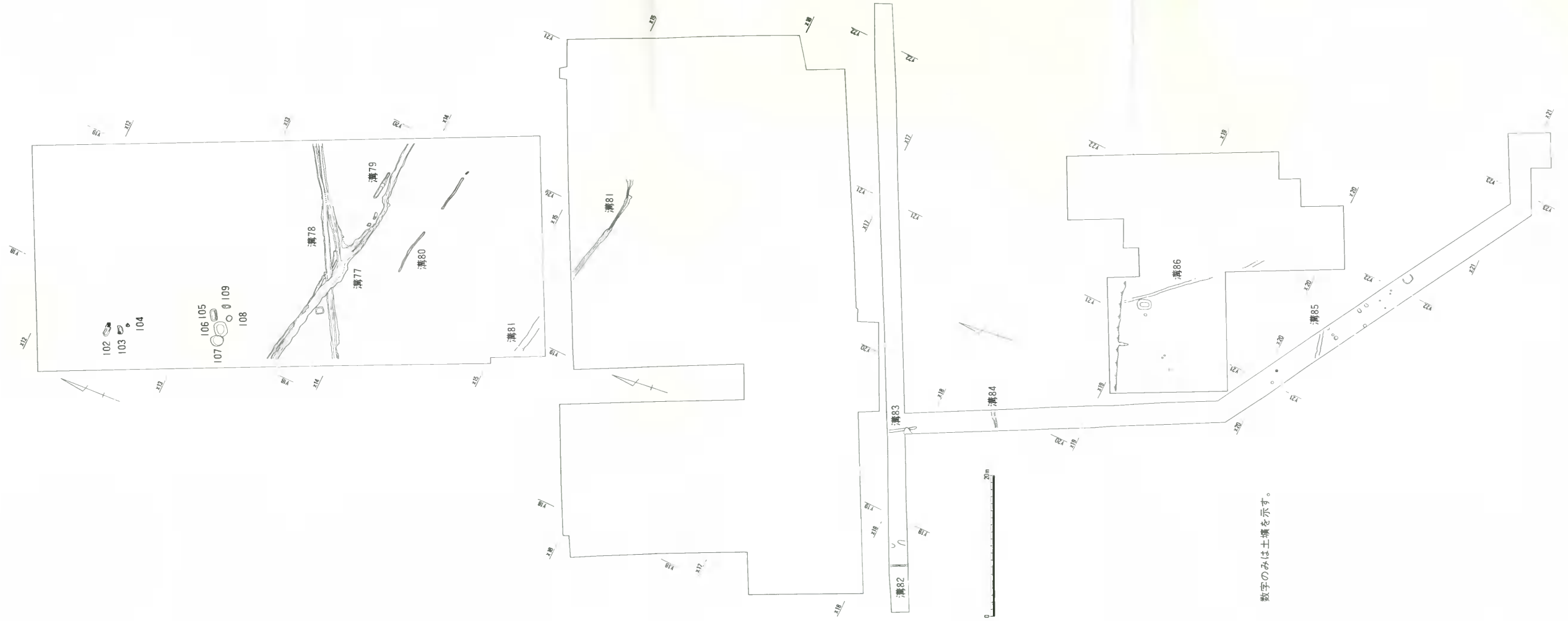
柱穴列2



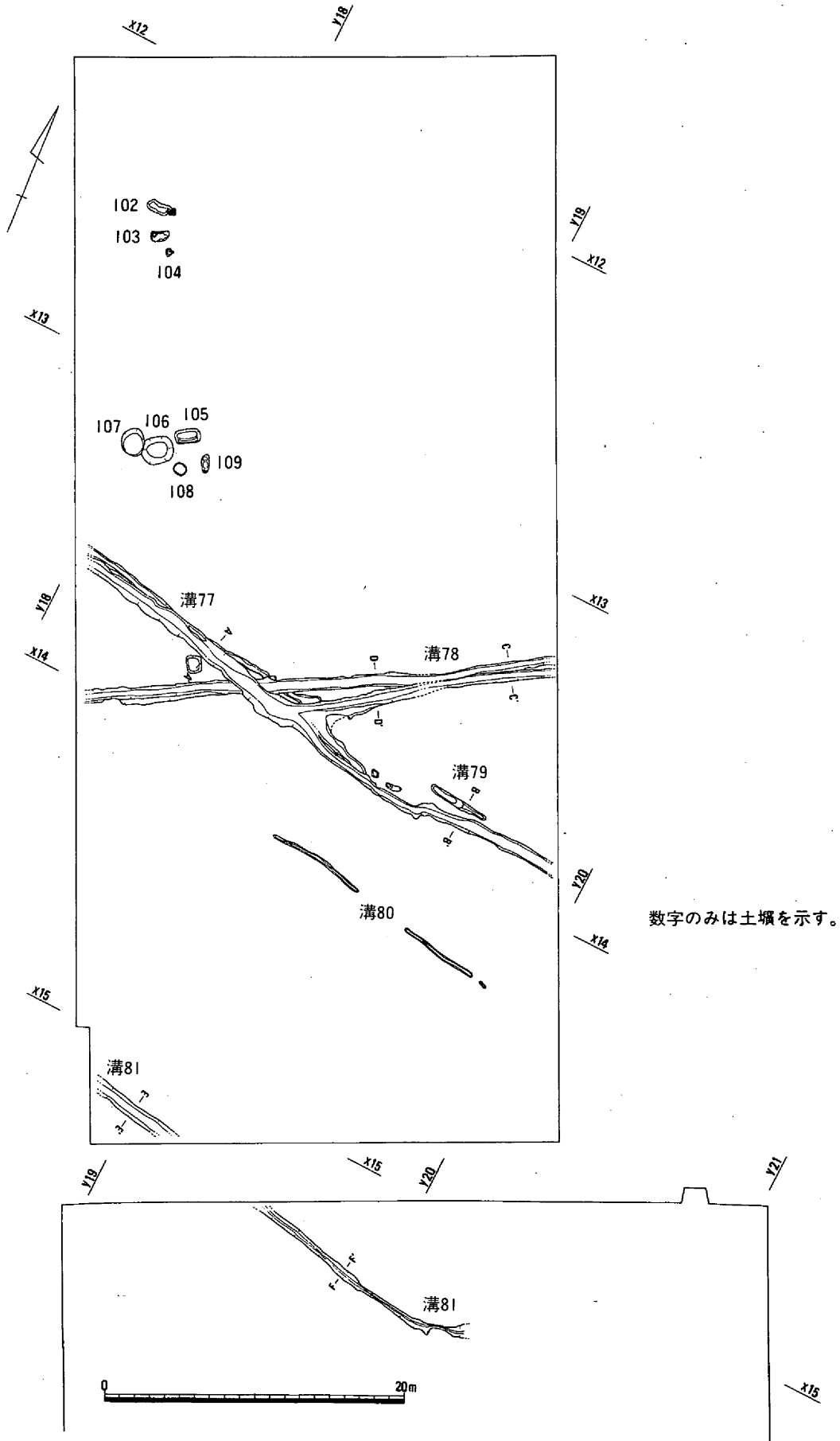
- 1. 灰色粘質土
- 2. 黄灰色粘質細砂
- 3. 暗灰色粘土

第349図 柱穴列1・2(1/60)・出土遺物(1/4)





第350図 中世～近世遺構全体図(PU・TA・H18・H19・BU区；1/500)

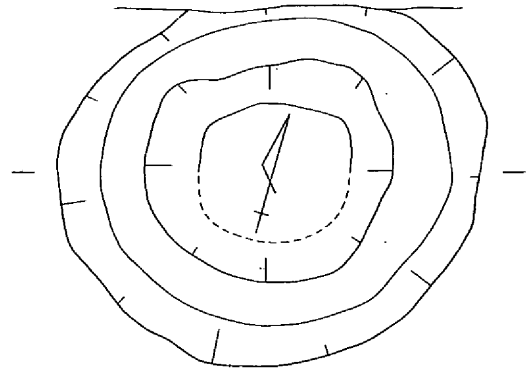


第351図 遺構全体図(PU区; 1/400)

(2) 柱穴列

柱穴列1 (第349図)

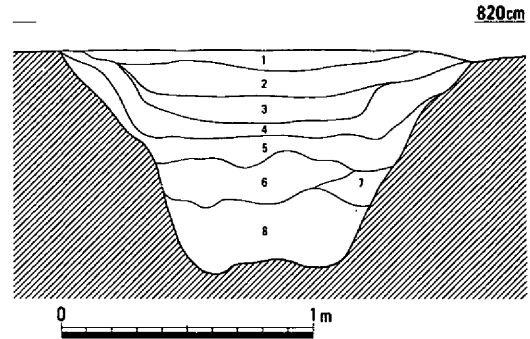
K10区の中央、竪穴住居4の西に位置する。両端の深さは25cmあるが、中央は10cmと浅い。調査区が狭いため柱穴を3本しか検出できていないが、建物の梁側で、中央は束柱となる可能性が高い。土器は出土していないが埋土からこの期に含めた。(久保)



柱穴列2 (第349図)

柱穴列1の南、H20区の西端に位置する。P1は直径55cmの円形で、底面の海拔高7.9m、P2は80×68cmの楕円形で、底面の海拔高7.68mを測る。時期はP2から1484が出土しており、古代と考えられる。

(久保)



(3) 井戸

井戸9 (第352図)

H20区の西端で、柱穴列2の北に位置する。検出面上で170×140cmの不整形円形を呈するが、検出面から30cm下がったところで傾斜が急になり、底面では一辺60cmの方形を呈している。底面の海拔高は7.2mである。埋土は8層に分かれ、浅いくぼみ状になった第1・2層から土器が若干出土している。土器は細片のため図化しえなかったが、古代と考えられ、奈良時代に遡る可能性もある。(久保)

- | | |
|------------|-----------|
| 1. 黒灰色粘質土 | 5. 暗灰色粘質土 |
| 2. 淡灰色粘質微砂 | 6. 灰黄色砂質土 |
| 3. 暗灰色粘質土 | 7. 暗黄灰色粘土 |
| 4. 灰色粘質土 | 8. 暗青灰色粘土 |

第352図 井戸9 (1/30)

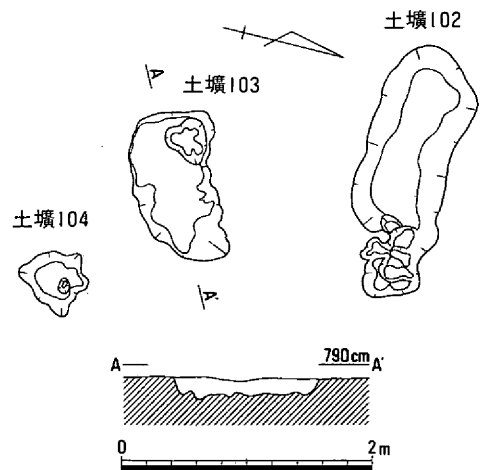
(4) 土壌

土壌102~104 (第353図)

PU区北西部分で検出された不整形土壌群である。中~近世耕土除去後に検出された。深さ10~15cmと浅く、床面も凹凸があり、安定していない。その形状から柵列状遺構との類似が指摘されるが、これら以外周辺に検出されていないことからその可能性は低いと考えられる。時期は、土壌内の埋土が上層と同じ耕土であることから、中世以降と考えられる。(久保)

土壌105~109 (第351・354図)

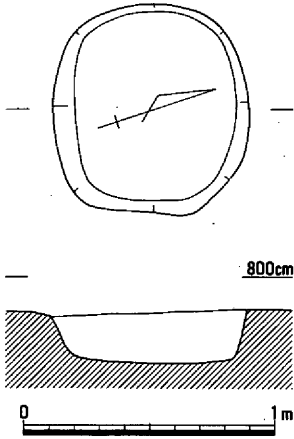
PU区の中央よりやや西側で、まとめて検出された土壌群である。土壌106と土壌107の関係は切り合いによって、土壌107が新しいことを確認している。土壌108は、平面形が隅丸方形を呈し、規模は80×84cm、深



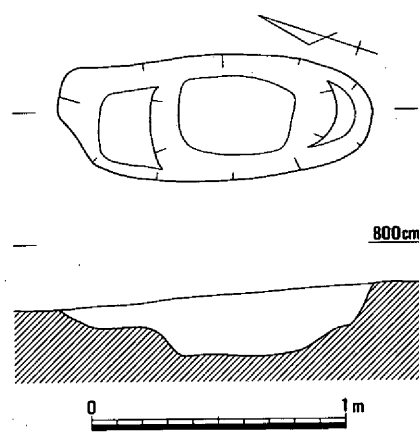
第353図 土壌102~104 (1/60)

さは検出面から約20cmを測る。掘り方は北側がほぼ垂直となっている。埋土は灰白色弱粘質土で、遺物は出土していない。土壌109の規模は50×124cmで、平面が不整形な長方形を呈し、深さは検出面から24cmを測る。削平を受けているが、掘り方は二段掘りとなって、底面はほぼ平坦である。埋土は灰白色弱粘質土である。遺物の出土は認められなかった。これらはいずれも同一の土層において検出されたこと、埋土が灰白色の粘質土であることなどから、中世に比定される遺構と思われる。(松本)

土壌108



土壌109



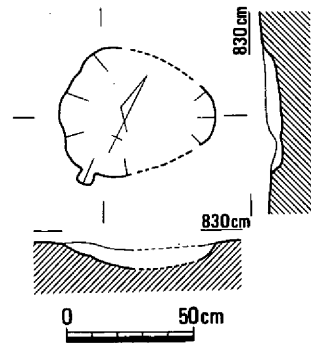
第354図 土壌108・109(1/30)

土壌110

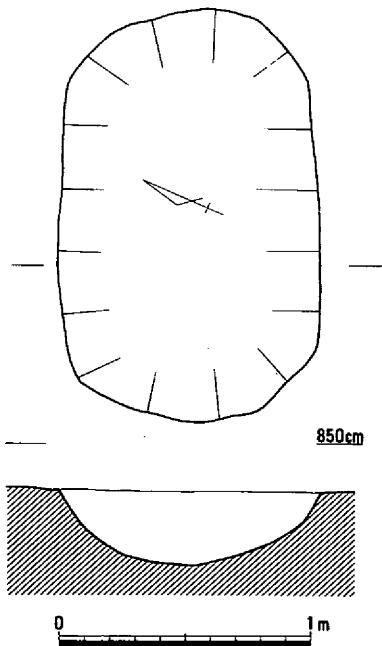
土壌110 (第355図)

溝87の北端のすぐ西側付近で検出されたいびつな円形を示す小土壌である。坑底は丸みをもって終わる。埋積土は、木炭片と焼土の小塊とで形成される。出土遺物は皆無であるが、中世に比定される遺構と推定される。

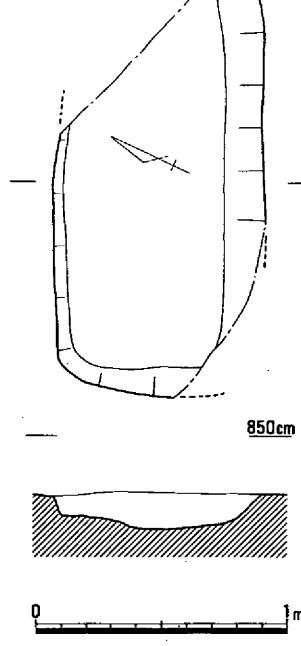
(岡田)



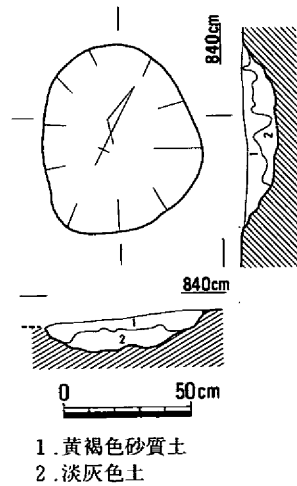
土壌111



土壌112



土壌113



1. 黄褐色砂質土
2. 淡灰色土

第355図 土壌110～113(1/30)

土壌111 (第355図)

溝89の南側で検出された長円形を呈する土壌である。墳底は丸みをもって終わり、断面形は凸レンズ形を示す。埋積土は淡黄灰色粘質微砂である。中世、鎌倉時代に比定される可能性が高い。(岡田)

土壌112 (第355図)

溝89に切られて検出された隅丸長方形を呈する土壌である。形態からは土壌墓の可能性も考えられたが、埋葬痕跡はない。埋積土は土壌111と同様で鎌倉時代に比定される可能性が高い。(岡田)

土壌113 (第355図)

溝95の東端の南側で検出されたいびつな円形を示す小土壌である。出土遺物は認められないが、埋積土などから時期的には中世に比定される可能性が高い土壌である。(岡田)

土壌114 (第356図)

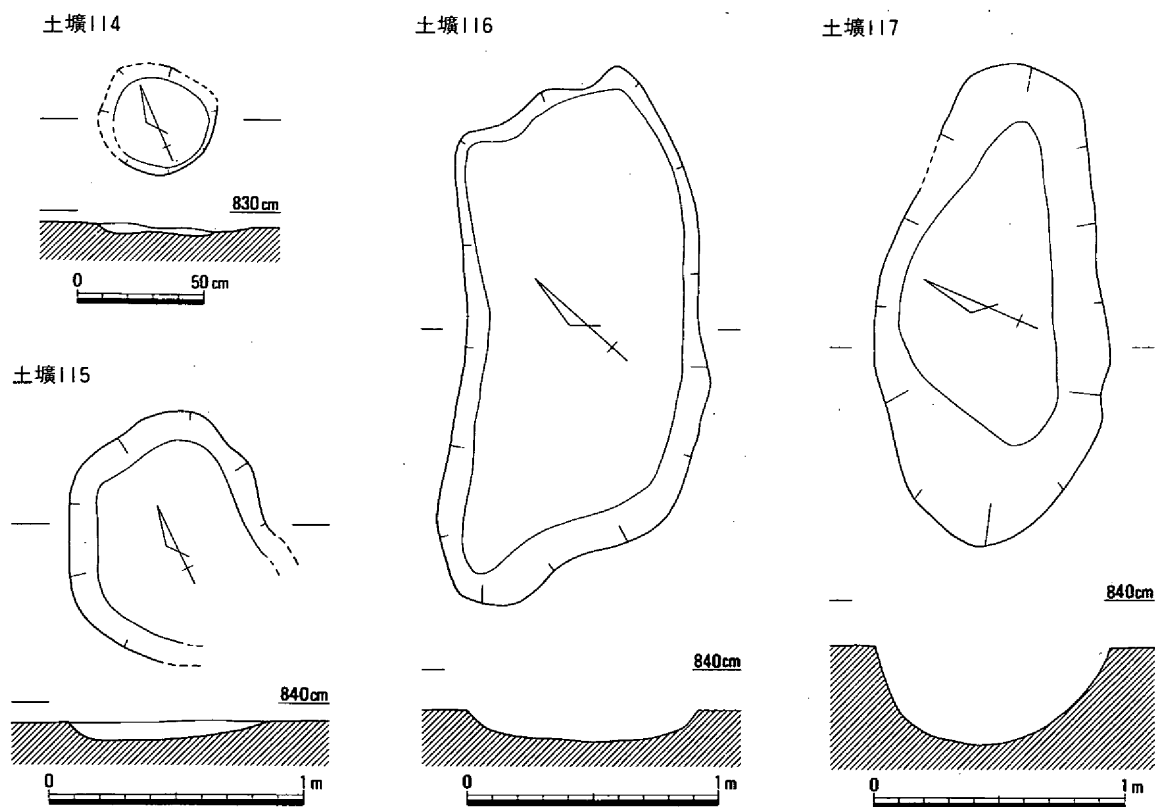
KO1区北部に位置する。深さ4cm程度が残るのみで、北半が不明瞭ではあるが平面形は隅丸の方形に復元され、1辺約43cm前後と想定される。埋土から中世に属するものと考えられる。(光永)

土壌115 (第356図)

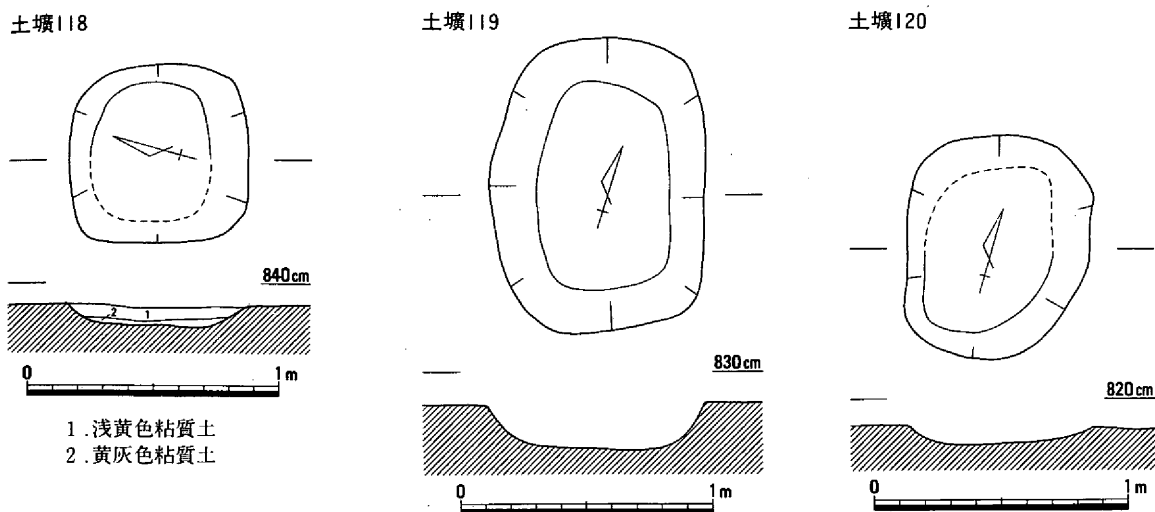
KO2区南端に位置し、溝139との距離約2mである。南端を欠くが、平面形は不整な楕円形に復元され、現存長径100cm、現存短径80cm、深さ7cm程度で、底面の海拔高8.25mを測る。土器細片の出土と埋土から中世に属するものと考えられる。(光永)

土壌116 (第356図)

HO区の中央南東寄りに検出された、不整楕円形の土壌である。長軸約2m、短軸約90cm、深さ12~13cmを測る。埋土は灰色~灰褐色を呈す粘質土である。遺物は出土していないが、周辺の同色埋土をもつ小ピットに含まれる土器片から中世の時期の土壌と考えてよい。性格は不明である。(柳瀬)



第356図 土壌114~117(1/30)



第357図 土壙118～120(1/30)

土壙117 (第356図)

土壙116の南側に約3m離れた位置に検出され、わずかに歪な長楕円形を呈す。長軸約1.9m、短軸90cm強、深さ約40cmを測り、比較的深い。埋土は土壙116と大差はなく、ほぼ同時期の土壙と思われるが、遺物の出土はない。形態的には土壙墓の可能性もある。(柳瀬)

土壙118 (第357図)

CH2区北西隅で、後述する水田畦畔上で検出された。平面形は隅丸方形で、1辺72cm、深さ8cmを測り、底面の海拔高は8.23mである。遺物は出土していないが、辺が水田畦畔の方向に平行することから、この水田畦畔の時期以降と考える。(光永)

土壙119 (第357図)

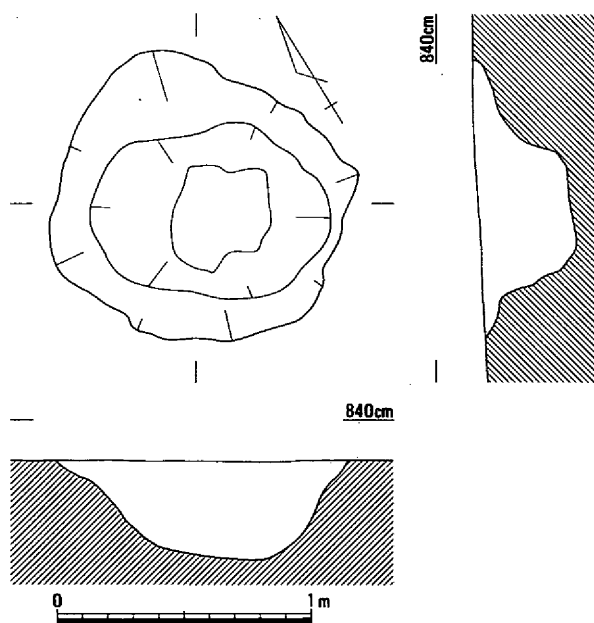
CH2区南東部で、水田畦畔に沿って検出された。平面形は隅丸の長方形を呈し、117×87×18cmの規模で、底面の海拔高は8.00mを測る。水田との関係では田面に掘られたことになるが、土壙118以上に共存の可能性が高いといえる。(光永)

土壙120 (第357図)

CH2区南端で、後述する溝143の埋没後に掘られている。平面形は不整な楕円形を呈し、89×72×8cmの規模である。遺物は出土していないが、土壙118・119より新しい時期のものと考えられる。(光永)

土壙121 (第358図)

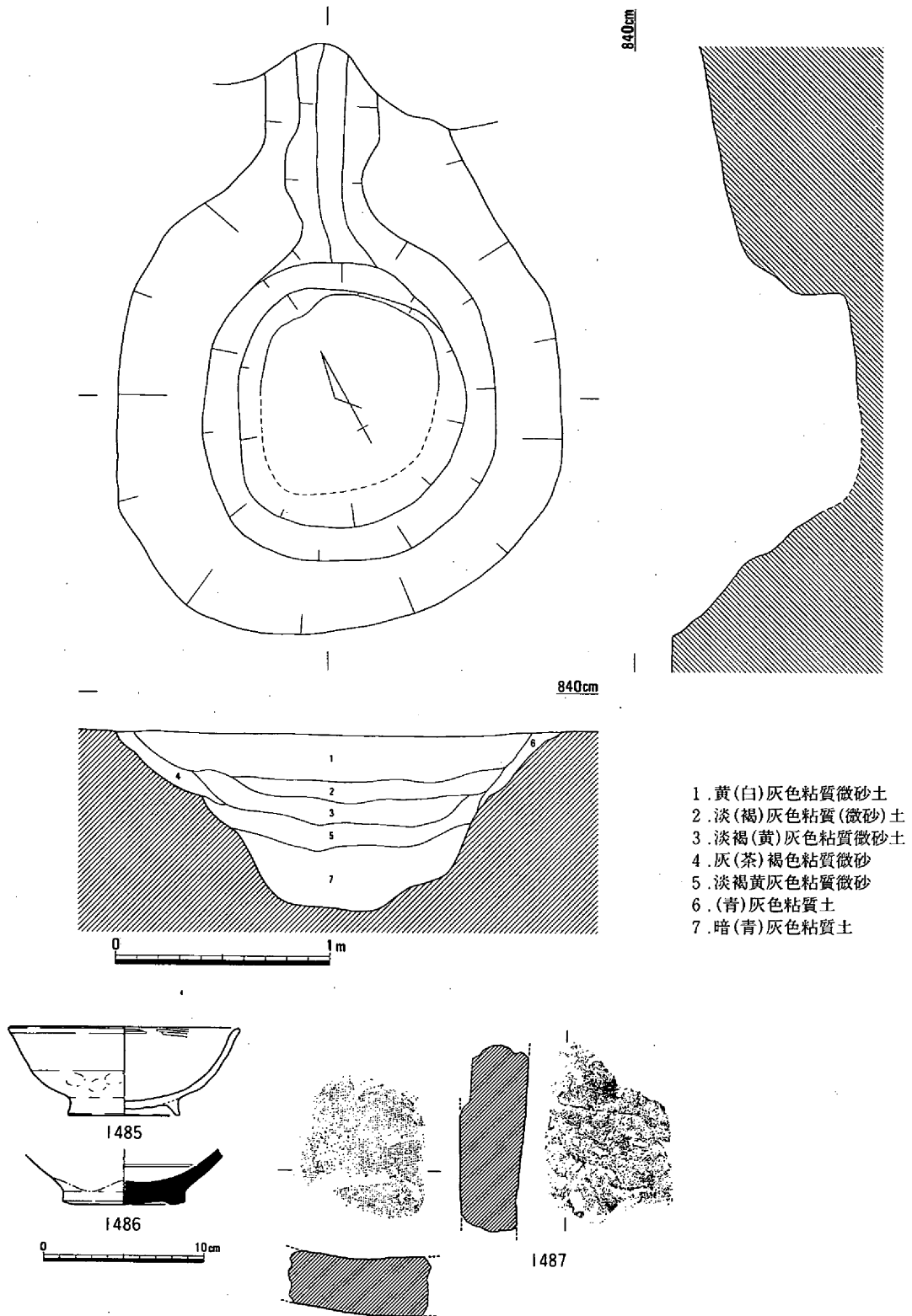
CH3区の北半に位置する土壙である。主軸方向は北西-南東方向である。掘り方上面の平面は不整形であるが、中段は楕円形である。規模は1辺111cm程度である。検出面からの深さは39cmを測る。床面は南側に向かって低い。出土遺物は認められないが、埋土の状況などから中世と思われる。(柴田)



第358図 土壙121(1/30)

土壌122 (第359図)

CH3区の南半に位置する土壌である。北方向に溝が接続している。平面はやや方形気味の円形を呈する。規模は上面で径210cm、中段で径138cmを測る。検出面からの深さは81cmを測る。床面はほぼ水平である。接続する溝は北東方向にのびているが、この先は用水路に切られている。おそらく土壌

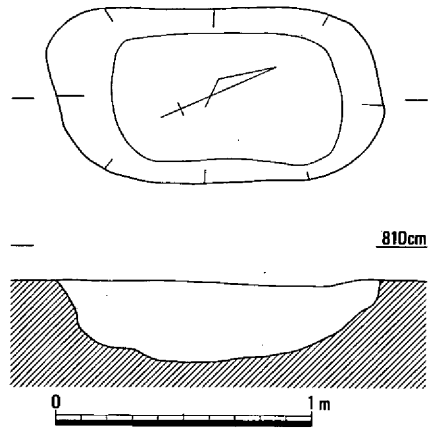


第359図 土壌122(1/30)・出土遺物(1/4)

と同時期の溝が同じ流路であったと思われる。溝の上面幅は87cmを測り、底は北側がかなり高い。埋土からは高台付椀1485や白磁碗1486、平瓦1487が出土している。時期は鎌倉時代と思われる。(柴田)

土壌123 (第360図)

HW 2 区の中央部に位置する。平面形は130×70cmの長方形で、深さは32cm残存していた。埋土は褐灰色粘土ブロックを含む淡灰色粘質土であった。遺物は少量の土器片が出土しており、時期は中世であろう。(平井)



第360図 土壌123(1/30)

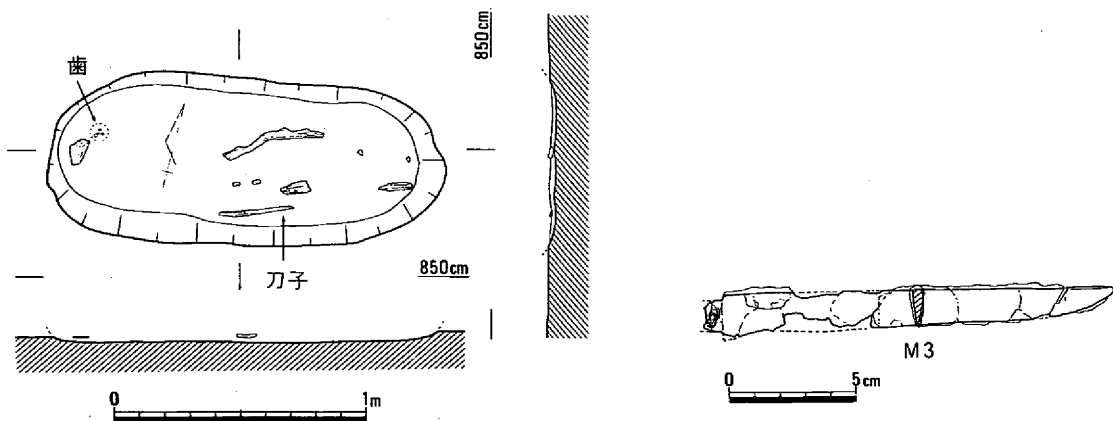
(5) 土壌墓

土壌墓 4 (第361図、図版56-3)

溝89の南、建物48の身舎の中で検出された土壌墓である。木棺などの棺材の痕跡はなく、素掘りの土壌に直接埋葬されたようである。掘方はほぼ東西方向で、長円形を示している。しかし残存度はきわめて悪く、掘方も鮮明とは言いがたい状態であった。埋葬は伸展位で、わずかな歯と頭骨の一部遺存から頭位は西であることが明らかとなった。掘方の中央部から東半分にかけておもに四肢骨の出土が認められたがいずれも風化が甚だしく詳細な観察は不可能な状態であった。出土遺物には、M3の刀子がある。掘方のほぼ中央南側で、切っ先を東に向けた状態で出土した。「腰刀」あるいは、「守刀」という性格が考えられる。時期的には、中世それも鎌倉時代の範囲におさまる可能性がきわめて高い。かろうじて採取が可能となった4点の歯について、鳥取大学解剖学第二講座 井上貴央先生に所見を依頼し、下記のコメントを頂いたので収載する。

歯は、すべて歯冠のエナメル質の部分のみで歯根はない。いずれも成人の永久歯で乳歯ではない。歯冠の完全な歯のうち、ひとつは上顎小白歯、もうひとつは左上第3大臼歯と考えられる。後者は咬耗がほとんど進んでいないが前者には象牙質に達する Martin 分類2度の咬耗がある。

以上の歯の所見から被葬者は壮年と推定されるが、食生活によっては青年の可能性もあり、年齢は「青年～壮年」と幅をもって推定される。性別は不明である。(岡田)

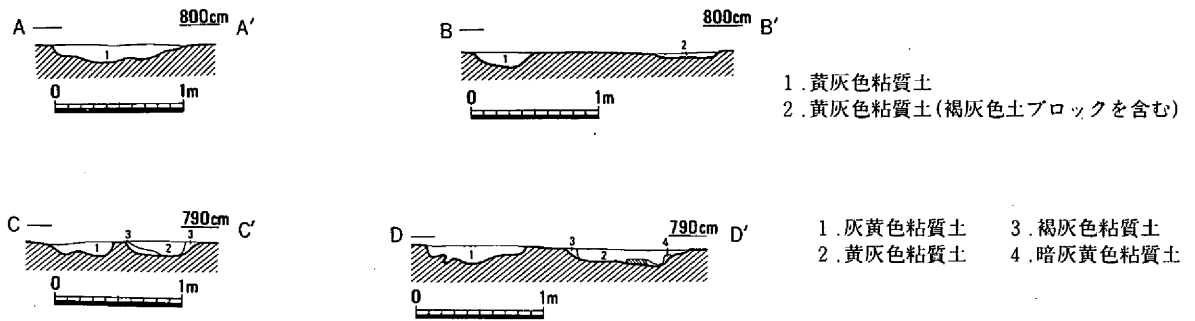


第361図 土壌墓 4 (1/30)・出土遺物(1/3)

(6) 溝

溝77 (第362・363図)

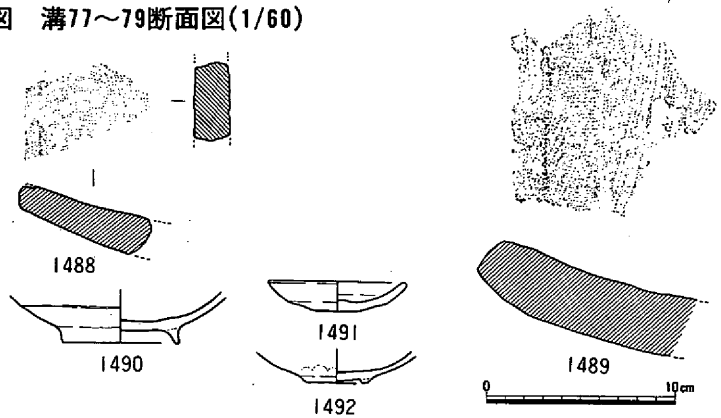
PU区の中央部(2・3区)で検出された。溝は東西に流走するが、調査区の中央部でY字状に分岐している。最初の溝幅は直線であったが、改修後に溝を分岐させたと思われる。溝全体はかなり削平を受けているが、最初の溝幅は東端で30~50cm、深さ約10cm程であった。改修後の溝の幅は、東端付近で約100cm、深さ9~16cm、分岐点付近で幅170cm、深さ15cmを測る。調査区の中央部で、溝は北東と南西方向に分岐するが、北東に流走する溝幅は70~100cm、深さ7~9cmを測り、南西に流走する溝幅は60~90cm、深さ8~10cmを測る。底面のレベル高から見て、溝77は東から西に向けて流走していることが確認できた。埋土は1層ないし3層に区分され、黄・灰色の色調を呈する粘質土で埋まっ



第362図 溝77~79断面図(1/60)

ていた。遺物は瓦(平瓦)、土師質土器(椀・皿)などが出土した。平瓦の凹面には、いずれも布目が認められた。椀(1490・1492)には底部に貼り付け高台がつくが、1492は退化した高台となっている。時期は中世と考えられる。

(松本)



第363図 溝77出土遺物(1/4)

溝78 (第362図)

溝77に切られた状態で検出された溝である。削平を受けているが、溝の幅は55~100cmを測り、深さは10~15cm程残存していた。埋土は部分的に2層に区分できるが、大部分は黄灰色粘質土で埋まっていた。遺物は無いが、溝77と同一層で検出されたため、中世の時期に比定される。

(松本)

溝79 (第362図)

東西に流走する溝である。溝幅は30~60cm、深さ15cmを測る。埋土は黄灰色粘質土である。遺物の出土は無いが、埋土が同じであることから、中世の時期に比定される。

(松本)

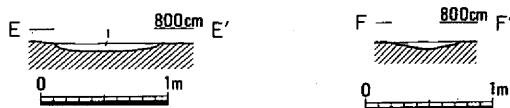
溝80 (第360図)

東西に流走する溝である。溝幅は30~60cm、深さ15cmを測る。埋土は黄灰色粘質土である。遺物の出土は無いが、埋土が同じであることから、中世の時期に比定される。

(松本)

溝81 (第364図)

PU区南西隅からTA区東半北部にかけて検出した。流走方向は溝77・80と平行し、東西方向をとっていた。PU区では幅が60cm前後、深さは6cmとわずかな残存に過ぎず、東端では浅くなって検出されなくなっていた。溝底は東端が西端より7cm低く、東に流れた可能性が考えられる。埋土は褐灰色粘性砂質土であった。



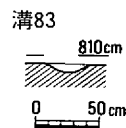
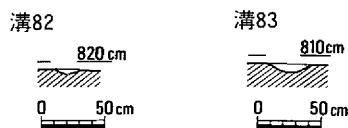
第364図 溝81断面図(1/60)

(岡本)

溝82 (第365図)

H19区の西端で検出された。断面は皿状で、検出面での幅19cm、深さ5cmを測る。時期は中世と思われる。

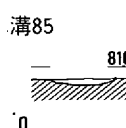
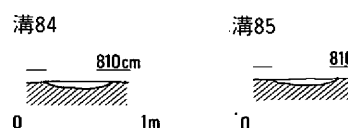
(柴田)



溝83 (第365図)

H19区の西側で検出され、南北方向にのびる。断面は皿状で幅33cm、深さ6cmを測る。時期は中世と思われる。

(柴田)



溝84 (第365図)

H18区の北半部分で検出され、溝82・83とは異なり東西方向にのびる。断面は皿状を呈し、検出面で幅51cm、深さ6cmを測る。時期は中世と思われる。

(柴田)

第365図 溝82～85断面図(1/60)

溝85 (第365図)

H18区の南半分で検出された。溝84と同様に東西方向に真っすぐのびる。断面は皿状を呈し、検出面で幅49cm、深さ5cmを測る。出土遺物は認められないが、時期は中世と思われる。

(柴田)

溝86 (第350図)

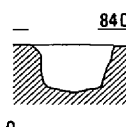
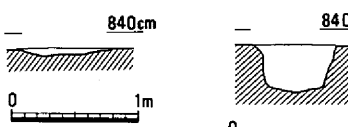
BU区のはほぼ中央で検出された北西から南東方向を指し示す溝である。深さは数cm前後できわめて浅く、埋積土は淡灰色である。出土遺物は皆無であるが、中世に比定される可能性が高い。

(岡田)

溝87 (第366図)

CH1区の北端で検出された直線的な溝で、灰褐色の粘質微砂が埋積する。南東方の溝92・93と直行している。出土遺物は皆無であるが、中世に比定される可能性が高い。

(岡田)



第366図 溝87・89断面図(1/60)

溝88 (第342図)

溝87の東8mで検出された。溝87に比べると幅は狭く、さらに浅い。溝87と同時期に存在した可能性も高く、時期は中世に比定される。

(岡田)

溝89 (第366図)

溝87・88を切ってほぼ西から東に走流する、検出全長約28mの東西溝である。断面形は逆台形を示しほかの溝に比べるとかなり深い。埋積土は暗灰褐色微砂の単一土層である。また、ほぼ東西を示す点にも注意される。出土遺物はないが、中世の時期的範囲に比定される。

(岡田)



第367図 溝90断面図(1/60)

溝90 (第367図)

建物49の南方約5mで検出された。後世の同一方向の溝に破壊されており、本来の規模は不明である。時期は中世と考えている。

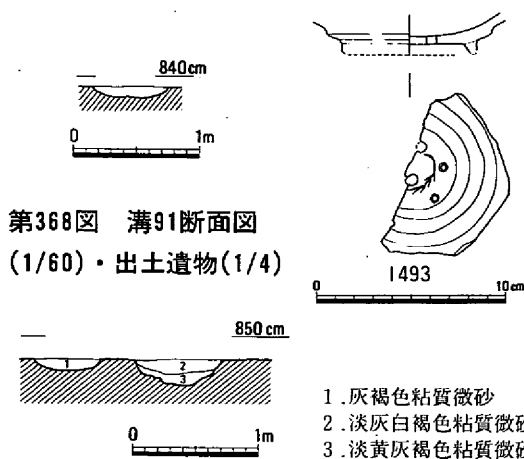
(岡田)

溝91 (第368図、図版57-1)

建物49の南東約6mで検出された、溝90に切られるかあるいは合流する可能性もある溝で、直線的でなく弧を描く断面形は浅い皿形を示す。埋積土は灰白褐色を呈する粘質微砂である。

出土遺物には1493の土師器碗がある。焼成前に底部に4個以上の穿孔がみられ、特殊な用途が付加された可能性がある。

时期的には古代末から中世初期の可能性が高いが、直接この溝に伴うか否かは明らかでないが、溝の機能した時期は、中世と考えてよいだろう。(岡田)



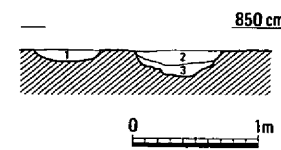
第368図 溝91断面図 (1/60)・出土遺物(1/4)

溝92・93 (第369図、図版57-1)

溝91と新しい時期の溝を挟んで南約5mで検出された。いずれも平行して検出され、北に振る東西方向を示している。溝92の方が深く、埋積土もわずかながら異なっている。

すでに述べたように溝87とほぼ直行する方向性を示し、これより北側の区画内で建物や、土壇・土壇墓などがおもに検出されている点は特筆されるだろう。

おそらく、当時の集落内の区画溝の機能が果たされた可能性が高いだろう。出土遺物はほとんどみられないが、中世に比定されると考えられる。(岡田)



第369図 溝92・93断面図(1/60)

溝94・95 (第370図、図版57-1)

溝92・93の南側で検出された、どちらもL字形を示す溝である。埋積土はいずれも灰褐色粘土である。断面形も丸みをもった逆台形で浅い。

両者ともにまったく同一の検出の形状から、密接に関連する機能が考えられるが、建物を取りまく溝にしては規模が小さく、むしろ農耕(畑作?)に関わる、排水機能などをもつ区画溝の可能性を指摘しておきたい。出土遺物はないが、中世に比定されるだろう。(岡田)

溝96 (第368図)

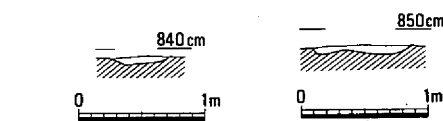
溝94・95の東方約25mで検出された。やや西に振る南北方向を示す直線的な溝で、埋積土も似る溝96とつながって直行し、一連の区画溝となる可能性もある。溝の断面形は浅い逆台形を示し、埋積土は単一で灰褐色の粘質土である。

出土遺物は認められないが、中世に比定されるものと考えている。(岡田)

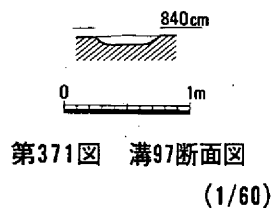
溝97 (第371図)

溝96の東方約20mで検出された、大きく北に振る東西方向の直線的な溝である。断面形は逆台形で浅く、褐灰色粘質土が埋積する。

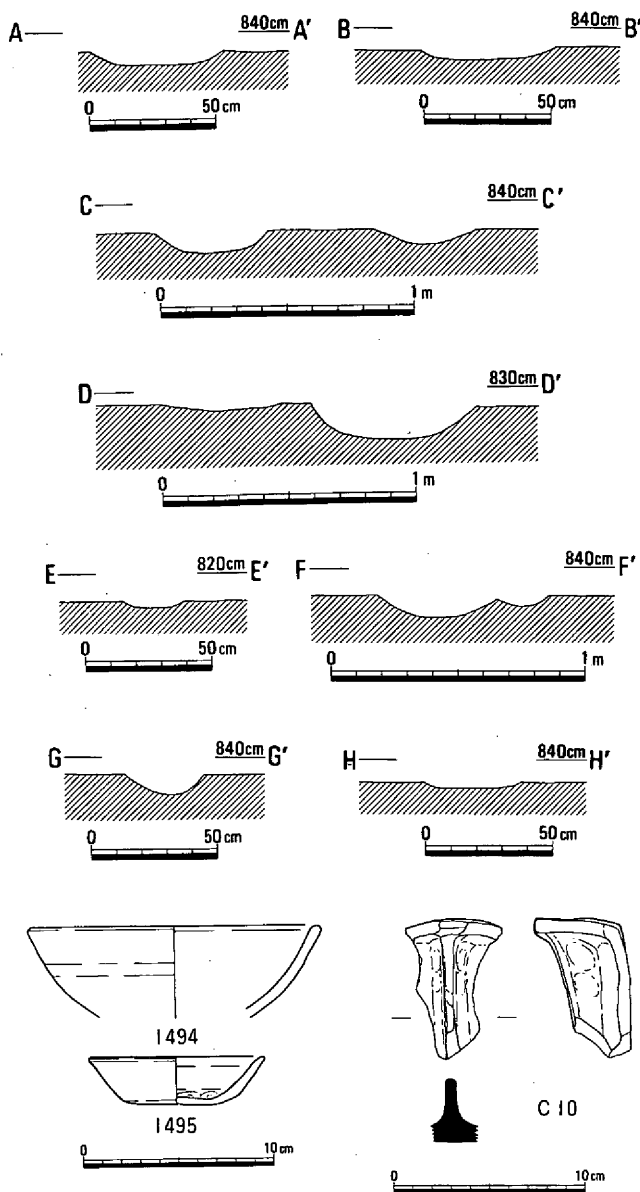
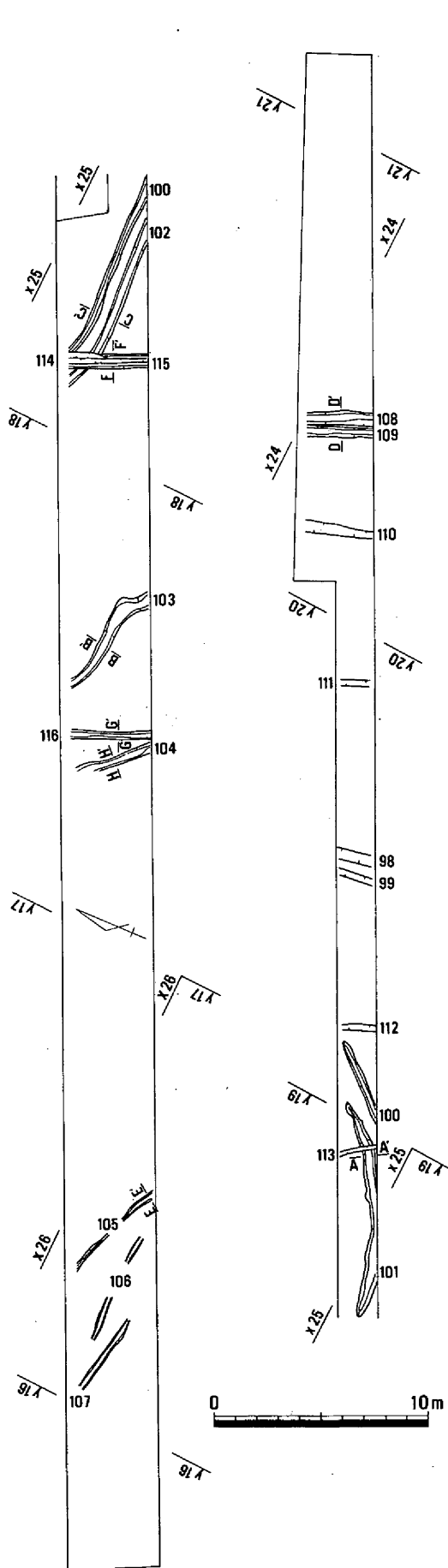
出土遺物は皆無であるが、溝96とともに中世に比定される可能性が大である。やはり、集落内の何らかの区画溝として機能した可能性が高いだろう。(岡田)



第370図 溝95・96断面図(1/60)



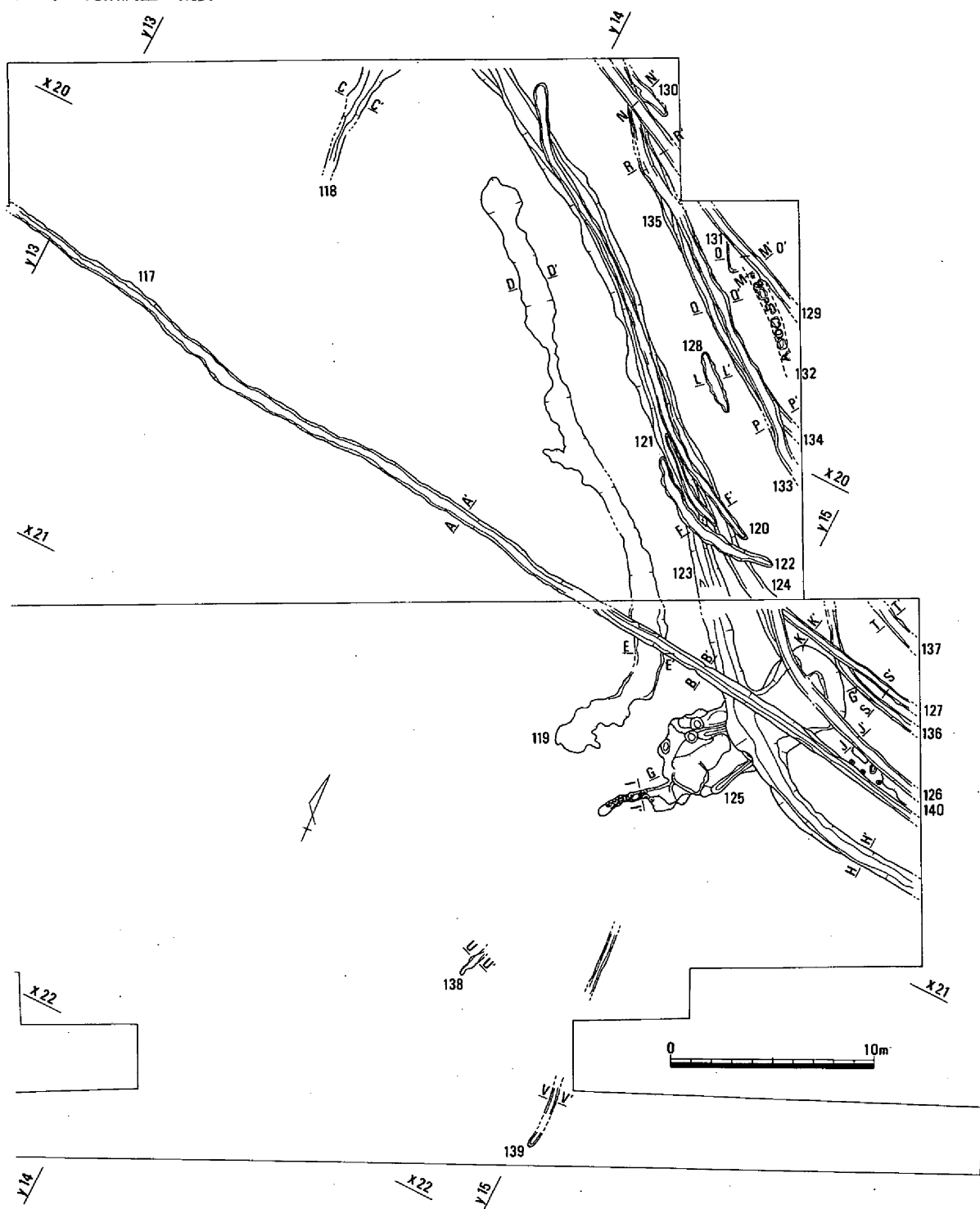
第371図 溝97断面図 (1/60)



第372図 溝98～116(1/300・1/30)・出土遺物(1/4)

溝98～116 (第372図)

H20区の全面に掘削された溝群である。方向性および切り合いから溝98～107と溝108～116の2群に分けられる。前者は調査区に対して斜めになるもので、中央では弧を描いている。調査区の西端では溝105～107に平行する斜面の肩口が検出されており、地形に沿って掘削されたと考えられる。一方、後者は調査区と平行に南北に延びているが、調査区の方法は現在の地割りと一致しており、これらの溝が地割りを意識して掘削された可能性も考えられる。時期は溝107からC10、溝108の下層から1494が出土しており、平安時代の範疇でとらえられる。(久保)



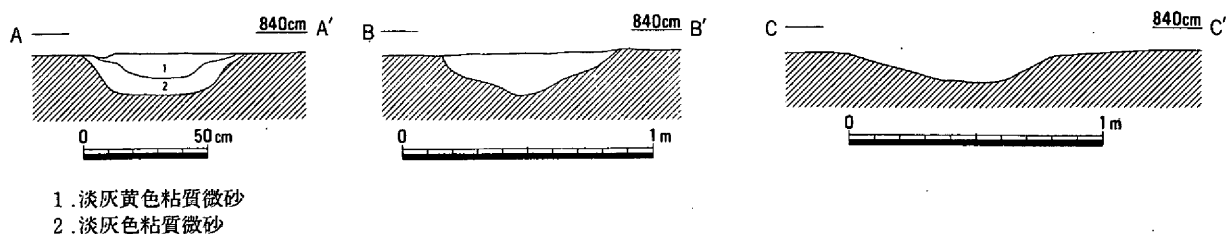
第373図 溝117~142(1/300)

溝117 (第373・374図、図版57-2・3)

KO 1・2 区の中央やや北寄り、東西方向に延長約53mが検出された。上幅50~70cm、下幅20~40cm、深さ15cm前後の規模で、断面形は逆台形を呈する。底面の海拔高は東端で8.2m、西端で8.1mを測り、東から西への水流となる。周辺の溝群では最も新しいものである。 (光永)

溝118 (第373・374図)

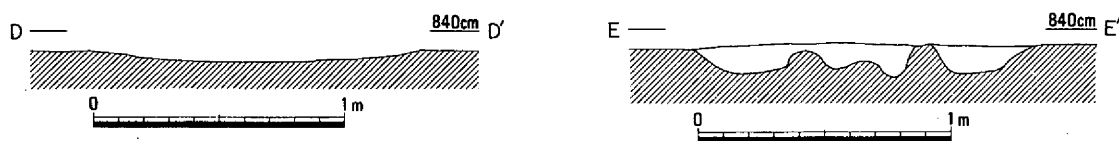
KO 1 区北端で南北方向に検出された。北半では上幅80cm、深さ10cm程度を測るが、延長約6mで南端は消滅する。溝117と直交する方向性を示している。遺物は出土していない。 (光永)



第374図 溝117・118断面図(1/30)

溝119 (第373・375図、図版57-2・3)

KO1・2区の東寄りに検出された。KO1区では北西から南東の方向性を示し、KO2区で南西方向へ曲がっている。KO1区では深さ5cm前後の浅いたわみ状を呈し、KO2区内では深さは10cmを超えるものの、底面に凹凸が著しい。溝としての機能をもたない可能性もある。(光永)



第375図 溝119断面図(1/30)

溝120~122 (第373・376図、図版57-2)

KO1区で、溝119の東2~4mに位置する。第376図の第5層が溝120、第4層が溝121、第1層が溝122にそれぞれ対応する。溝120は北西から南東への方向性を示すが、北端で北寄りに、南端で東寄りにやや湾曲している。溝121・122はその南端での湾曲に対応するが、溝122の湾曲は溝120より急である。底面の海拔高は8.15mを前後して、延長約25mが検出された溝120の両端においても明確な差はみられない。溝120・122の底面には部分的に深さ5cm前後のくぼみがみられる。

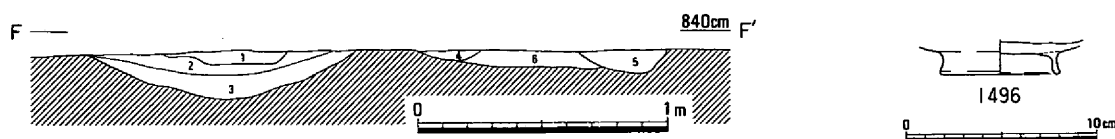
溝122からは高台付椀1496が出土しており、鎌倉時代に比定される。溝120・121についても近い時期を想定できる。(光永)

溝123 (第373・376図、図版57-2)

KO1区で、溝120~122の下層から検出された。流路は北西から南東へ向き、北から約8m付近で緩くやや南へ湾曲するが比較的直線的である。第376図の第2・3層が相当し、底面の海拔高は、北端で8.15m、南端で8.11m程度を測る。時期を明確にする遺物は出土していない。(光永)

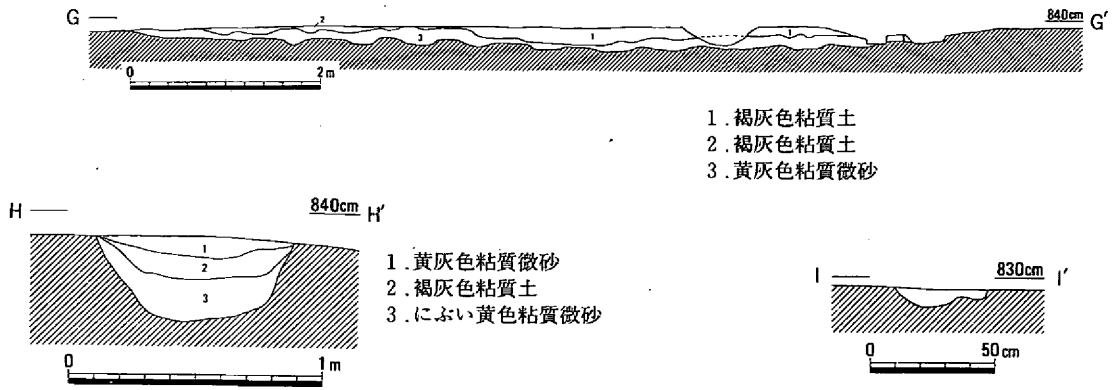
溝124 (第373・376図、図版57-2)

KO1区に位置し、流路はその北半を溝123に削られているが、南半は溝123より東へ緩く湾曲してこれと離れていく。第376図第6層が対応し、底面の海拔高は、南端で8.25mと溝123より高い位置にある。遺物は出土していないが、溝123等と大きく離れない時期と思われる。(光永)



- 1. 淡灰色粘質土~粘質微砂 3. 淡灰色粘質土~粘質微砂 5. 淡灰白色粘質微砂
- 2. 淡茶灰色粘質土~粘質微砂 4. 淡灰黄色粘質微砂 6. 淡茶灰色粘質微砂~粘質土

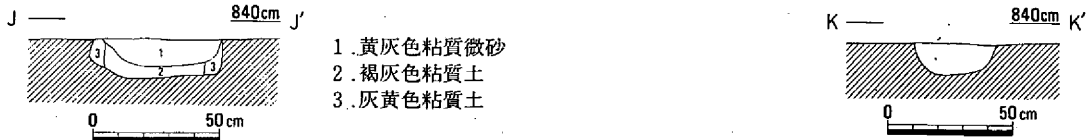
第376図 溝120~123断面図(1/30)・出土遺物(1/4)



第377図 溝125断面図(1/80・1/30)

溝125 (第373・377図、図版57-2・3)

KO2区東部に位置し、溝117・126に切られている。基本的な流路は北西から湾曲して東へむかうもので、溝123に続くものと考えられる。規模は、上幅85~125cm、下幅25~50cm、深さ20cm前後で、断面形は逆台形を呈する。底面の海拔高は、北端で8.15m、南端で8.00mである。埋土はH-H'断面では3層に分けられるが、この第2層は流路方向と直交する形で不整形なたわみを形成しており、G-G'断面の第1・2層がこれに相当する。範囲は南北10m、東西4mにおよび、南北両端は浅くなって終わっているが、南端では南西方向へ約4m溝状にのびている。底面には凹凸が著しい。この部分の下層には柵列状遺構16が所在し、これとの関係を考慮すべき遺構と思われる。(光永)



第378図 溝126・127断面図(1/30)

溝126 (第373・378図、図版57-2・3)

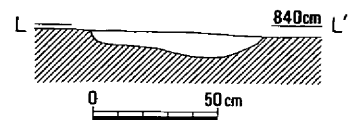
KO2区北東部で、溝127・140と溝125のたわみ部分を切っている。流路は、北端が二筋の合流に見えるが、北西から湾曲して東へ向かっている。北端は溝124に接するが屈曲の度合いは整合しない。平均的規模は上幅50cm、下幅30cm、深さ15cm前後で、底面海拔高8.20m以下である。(光永)

溝127 (第373・378図、図版57-2・3)

KO2区北東隅で、溝136を切り、溝126に切られている。流路は東西方向に近く直線的で、溝124の延長上に位置する。規模は、上幅35~43cm、下幅15~28cm、深さ15~20cmで、底面の海拔高は8.20m以下である。土器細片が出土しているが、時期は中世の枠にとどまる。(光永)

溝128 (第373・379図、図版57-2)

KO1区東部で、溝124の東1.7mに延長3mが検出された溝状遺構である。方向は北西から南東で、周辺の溝群と一致する。最大上幅70cm、底面の海拔高8.28mである。(光永)

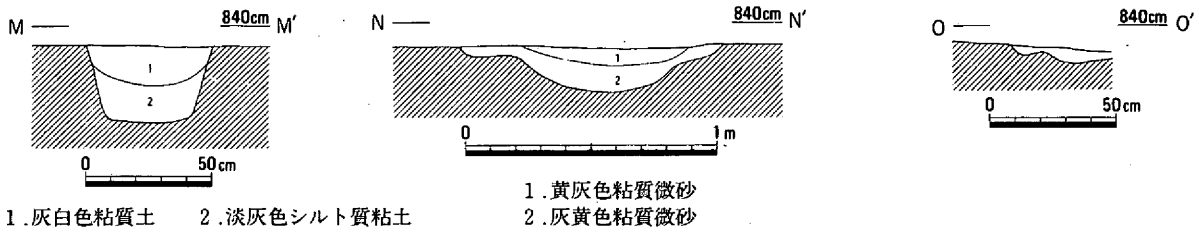


第379図 溝128断面図

(1/30)

溝129 (第373・380図、図版57-2)

KO1区北東隅に位置し、溝131~135を切って、北西から南東方向



第380図 溝129～131断面図(1/30)

へ直線的に検出された。平均的規模は、上幅50cm、下幅32cm、深さ30cmで、断面形逆台形を呈する。平坦な底面の海拔高は、北端で7.95m、南端で8.03mを測る。遺物は出土していないが、直線的な流路と、北西に向かって底面が下がる点は、溝117に共通点を求められる。(光永)

溝130 (第373・380図、図版57-2)

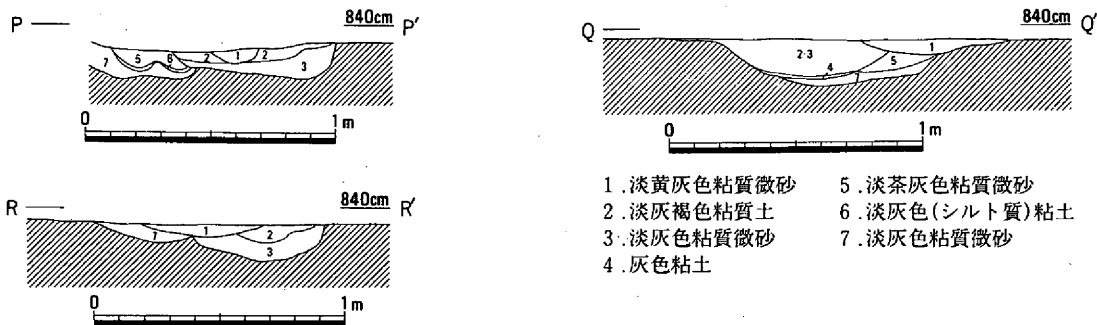
KO 1区北東隅で、溝129と平行し、溝133～135に切られて、延長3m弱が検出された。最大幅113cm、深さ17cmの規模で、底面の海拔高8.2m以上である。(光永)

溝131 (第373・380図、図版57-2)

KO 1区北東部で、溝129に切られている。方向は北西から南東と思われるが、延長1.3mで、東肩口が不明な状態で、規模を明らかにできない。底面の海拔高は8.27m程度である。(光永)

溝132 (第373図、図版57-2)

KO 1区東端に位置し、北端を溝129に切られている。方向は北西から緩く南に湾曲して南東方向を指す。下幅50cm前後を測る溝の底面がかろうじて残存し、底面の凹凸が検出されたものと考えたが、この凹凸を柵列状遺構と見做すことができるかもしれない。(光永)

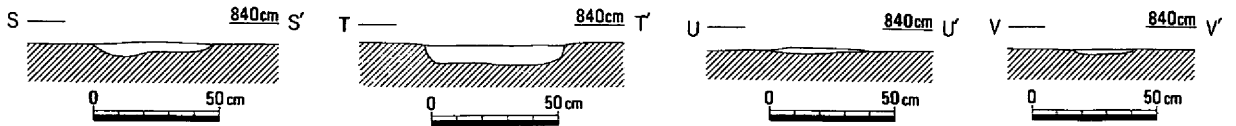


第381図 溝133～135断面図(1/30)

溝133～135 (第373・381図、図版57-2)

KO 1区東部に位置し、溝129に切られている。溝135→134→133の順に新しく、第381図に共通して付けた土層番号では、第5～7層が溝135、第2～4層が溝134、第1層が溝133にそれぞれ対応している。溝133からは「早島式」の土師質高台付椀が出土している。

流路方向についてみていくと、この溝133～135の一群は、溝120～124の一群との関係が注目される。最上層の溝133は同じく最上層の溝120との距離3.5mを測り、北端でやや北へ振り、南端でやや東へ向かう緩い湾曲の傾向も一致している。溝134・135の北端は逆にやや西へ振っており、溝135は南端で溝134から東へ離れるが、これも溝121・122の関係に当てはめられる。したがって、この二群の溝は、大きく3段階に分かれて、それぞれの段階において距離約3.5mで対をなすものと考えられる。その時期については段階ごとの限定はできないが、鎌倉時代以前としておきたい。(光永)



第382図 溝136～139断面図(1/30)

溝136 (第373・382図、図版57-3)

KO2区北東隅に位置し、溝127に切られている。流路は北西から湾曲して東へ向いている。規模は、上幅35～50cm、下幅20～30cm、深さ10cm前後を測り、底面の海拔高は8.25m程度である。流路方向は溝125と平行するが、距離は4.5～5.5mである。西へ延長すると溝135の方向になる。(光永)

溝137 (第373・382図、図版57-3)

KO2区北東隅に位置し、延長約2.5mが検出された。上幅60cm前後、下幅40cm、深さ10cm弱の規模で、底面の海拔高は8.25mを測る。西への延長は溝133等の方向になり、流路方向は北西から南東で溝126との距離は4.5mである。(光永)

溝138 (第373・382図)

KO2区中央部で延長2m程度が南北方向に検出された溝状遺構である。幅40cm、厚さ3cm程度に灰黄色粘質土が堆積していたもので、北へ延長すると溝125の南端へ続く可能性がある。遺物は出土していないが、埋土から中世の枠に含めたい。(光永)

溝139 (第373・382図、図版57-2・3)

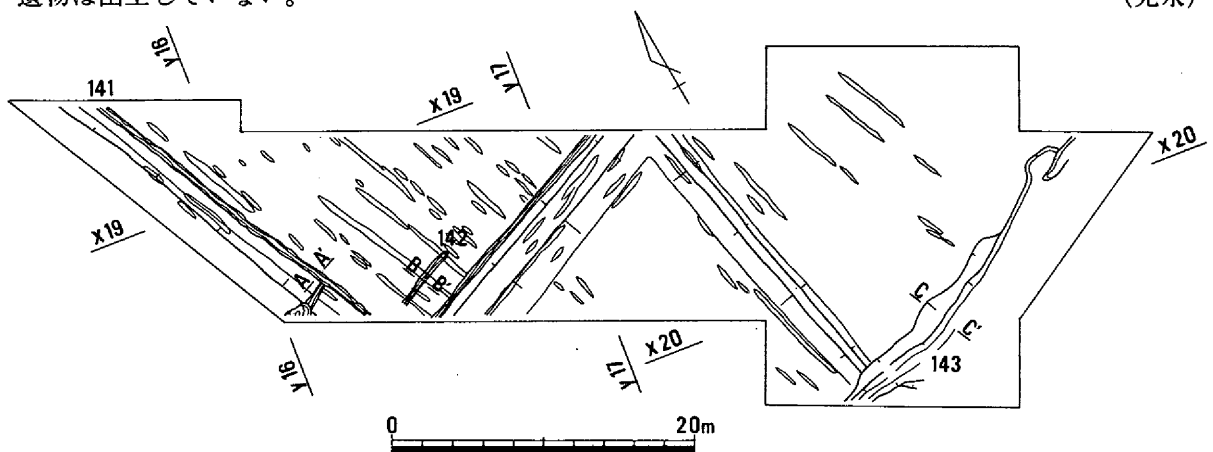
KO2区南部で、流路を南北方向においてとぎれとぎれに延長17m弱が検出された。幅25cm、深さ2cm程度が残るのみであるが、北端は溝125に繋がる可能性がある。遺物は出土していない。(光永)

溝140 (第373図、図版57-3)

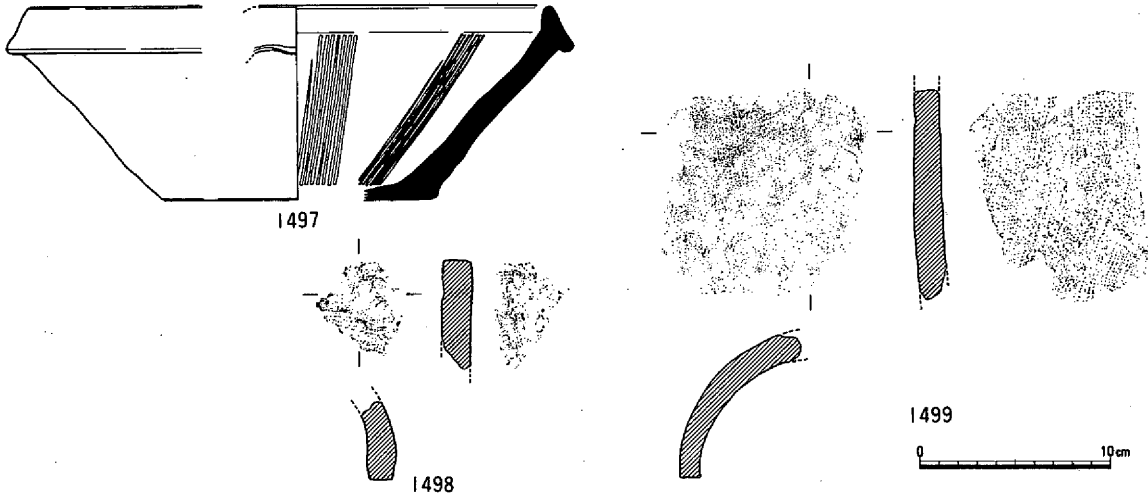
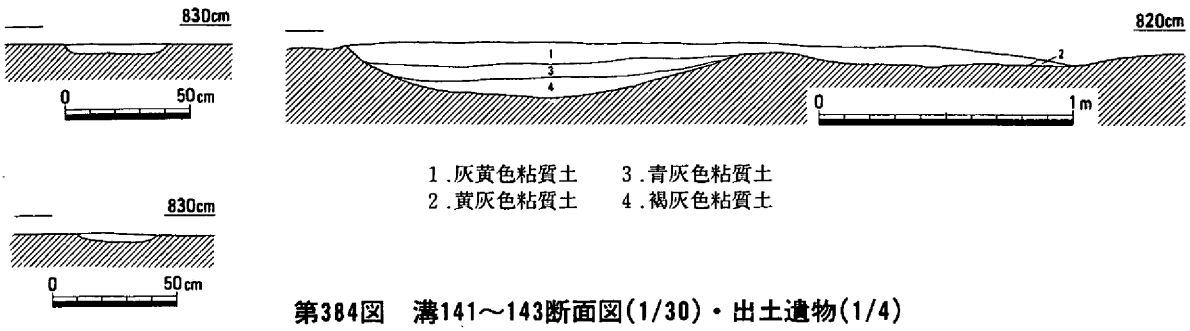
KO2区東部で、溝125南半の西2mで検出された。流路を東西方向に置いた溝の凹凸のある底面が幅60cm弱残存したものと考えたが、この凹凸が柵列状遺構と見做される可能性もある。(光永)

溝141・142 (第383・384図)

CH2区北西端で、後述する水田畦畔との並行関係をもって検出された。溝141は南北方向を示す畦畔の東約1mで平行し、幅40cm、深さ5cm程度の規模を有する。溝142は東西方向の畦畔の北約1.8mで平行するが、南北畦畔からの想定距離7m前後で消滅する。上幅30cm、深さ4cm程度の規模である。遺物は出土していない。(光永)



第383図 溝141～143・水田(1/500)



溝143 (第383・384図)

CH2区南端で、流路を東西方向に置いて検出された。方向は後述の東西方向の畦畔と平行する。備前焼の播鉢1497、丸瓦1498・1499等が出土しており、近世の溝と考えられる。(光永)

溝144 (第385図)

CH3区の南半で検出された溝である。南北方向より西に振って真っすぐのび、用水路とほぼ同じ方向である。断面は台形で、検出面で幅150cm、深さ34cmを測る。一部で西にのびる枝溝も認められる。埋土から白磁碗の口縁部1500が出土しており、時期は鎌倉時代と思われる。(柴田)

溝145 (第385図)

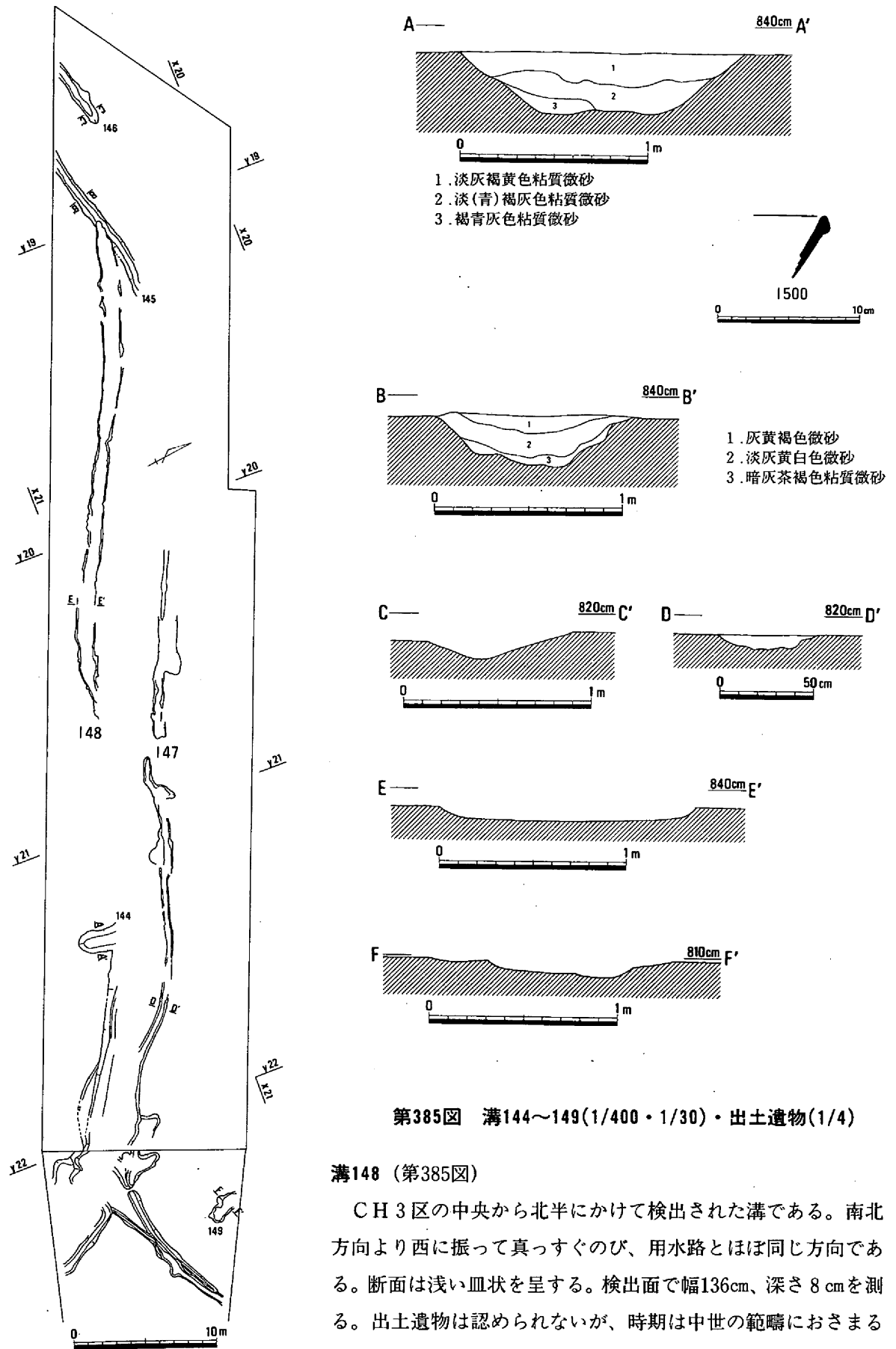
CH3区の北半で検出された溝である。東西方向に真っすぐのび、用水路とほぼ同じ方向である。断面は基本的に台形であるが、底面は凹凸がある。検出面で幅105cm、深さ28cmを測る。出土遺物は認められないが、時期は中世の範疇におさまると思われる。(柴田)

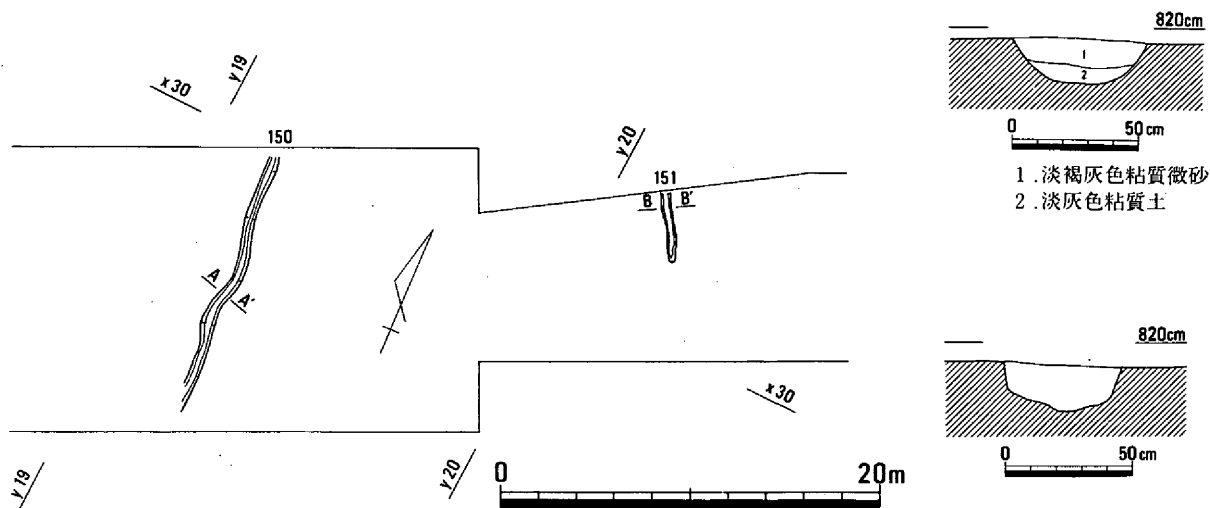
溝146 (第385図)

CH3区の北端で検出された溝である。溝145とほぼ平行し、距離約3mを測る。断面は浅いV字状を呈する。検出面で幅77cm、深さ10~15cmを測る。出土遺物は認められないが、時期は中世の範疇におさまると思われる。(柴田)

溝147 (第385図)

CH3区の南半で検出された溝である。南北方向より西に振っており、用水路とほぼ同じ方向である。断面は浅い皿状を呈する。検出面で幅51cm、深さ8cmを測る。出土遺物は認められないが、時期は中世の範疇におさまると思われる。(柴田)





第386図 溝150・151(1/400・1/30)・出土遺物(1/4)

溝149 (第385図)

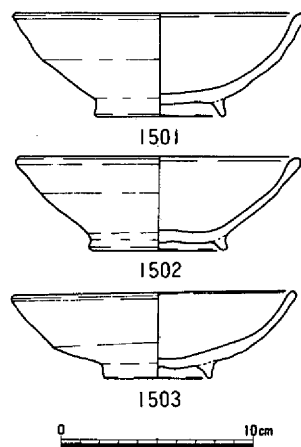
CH 4区北端に位置する不整形な溝状遺構で、最大幅140cm、深さ8cm程度の規模である。埋土から中世に含まれる。(光永)

溝150 (第386図)

HW 1区の建物55~57の東に位置する。土師質碗1501・1503は溝の底から完形の状態で出土した。建物群との位置関係およびこの溝以東では同時期の遺構が希薄なことから、屋敷地の東端を区画する溝で、『南溝手遺跡2』収載の溝165と対をなすと考えられる。(久保)

溝151 (第386図)

HW 2区の中央部に位置する。幅30~50cm、深さ18cm、長さ約3.8mが残存していた。断面形はU字形で、埋土は淡灰色粘質土である。少量の土器片が出土しており、時期は中世であろう。(平井)



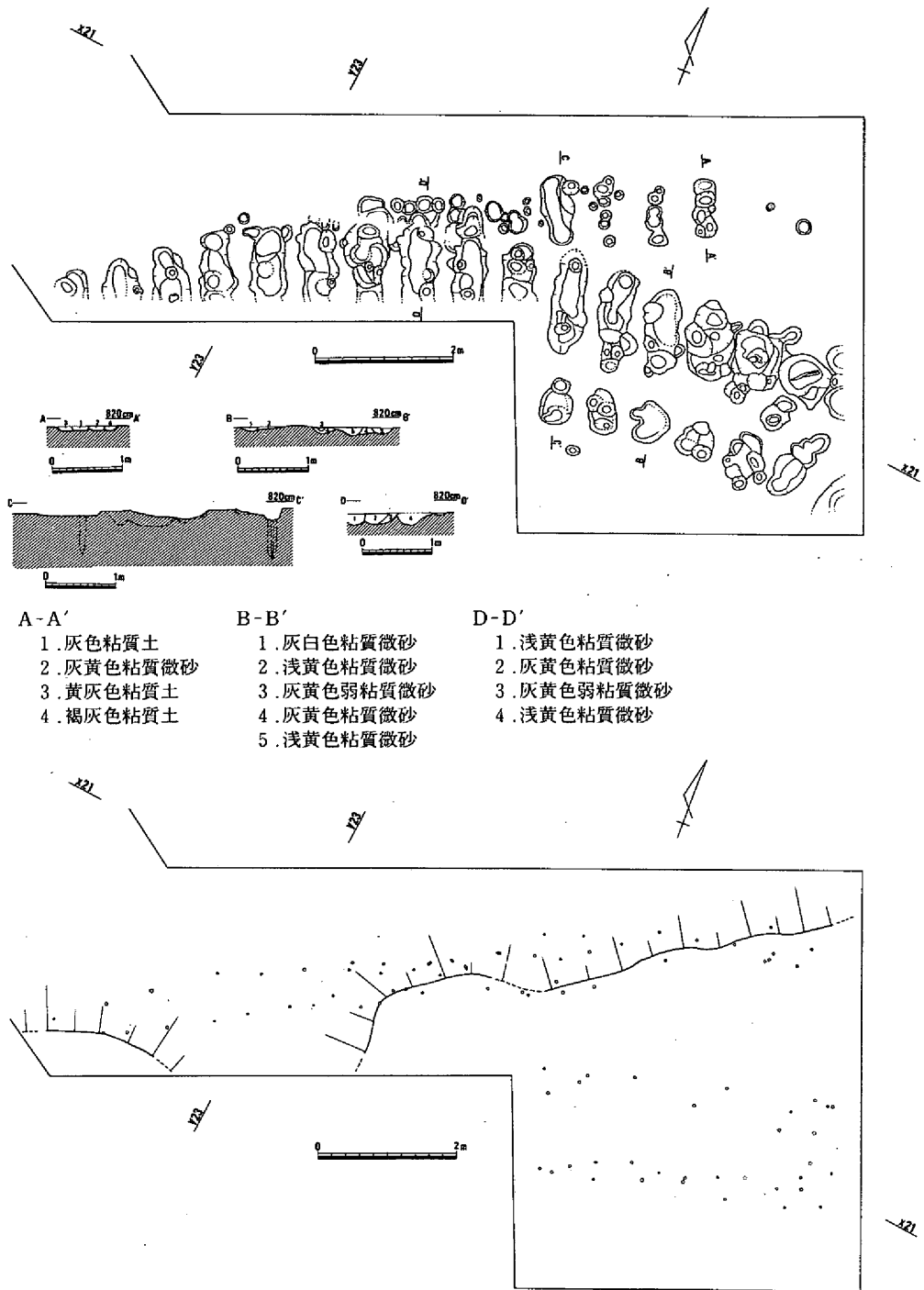
(7) 柵列状遺構

柵列状遺構15 (第387図、図版58—1・2)

H18区の南端で検出された柵列状遺構である。検出された地点は、弥生時代から古墳時代にかけての河道3が南北方向の流路で存在していた地点である。柵列が施された時期には、この河道は埋没し、本来の東岸は東西方向のわずかな高まりの肩として残っていたようである。柵列はほぼこの肩に沿って東西方向に検出された。

柵列は大きく分けて、3つの列が認められる。北の列は残存状況はあまり良くない。中央の列は良好に残存しており、やや湾曲している。西に向かって北の列と重なっている。この列の杭の抜き取り痕跡は不整な楕円形を呈し、長さ120~150cm・幅50cm前後、深さは20cm程度を測る。南の列の抜き取り痕跡は不整な円形で、径60cm、深さは10cm程度を測る。床面にはいくつかの凹凸が認められるが、埋土の状況から切り合い関係が認められ、複数の杭の打ち込みによって生じたものと思われる。

残存していた杭列は6列で、抜き取り痕跡の列とほぼ一致している。さらに2列で対をなしている様子が認められた。列の杭間隔は平均的に50cm前後、対の杭間隔は30~50cmを測る。北と中央、中央



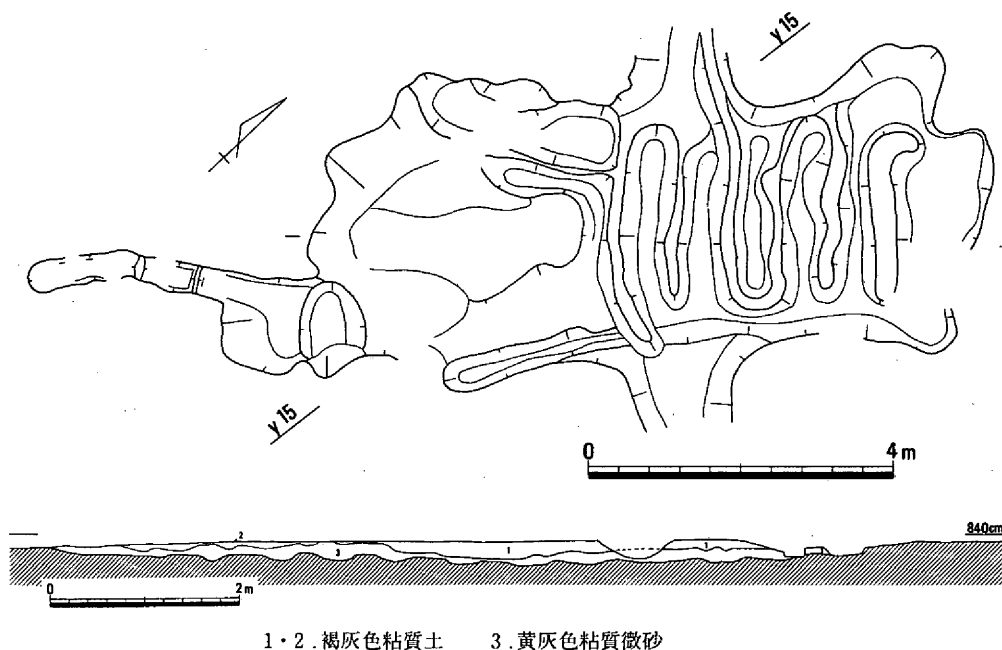
第387図 柵列状遺構15(1/100)

と南の列の間隔はそれぞれ100~170cm、100cmを測る。杭は径5cm程度の枝杭である。

時期の限定は困難であるが、埋土の状況からは中世まで下る可能性があると思われる。(柴田)

柵列状遺構16 (第378図)

KO2区の北東部で、溝125のたわみ部分の下層から検出された。南北長9.7m、東西幅4.5m程度の不整な長方形を呈する範囲が一つの遺構として捉えうようである。中央部では検出面からの深さ25cmを測り、南北両端は浅くなって終わっている。この範囲の北半では、底面に高さ2~3cm程度の畦状の高まりが東西方向に主軸を置いて6列みられ、間隔は20~70cmを測る。南半では底面中央部はほ



第388図 柵列状遺構16(1/100・1/80)

は平坦であるが、東西の両端が溝状に窪んでいる。このような構造的な違いはあるものの、同一層で埋まっており、個別の遺構とは考えがたい。

時期を明確にできる遺物は出土していないが、北半の構造はHW3区の柵列状遺構12に似ている。また、この柵列状遺構16の位置する箇所は古墳時代後半から古代と想定した柵列状遺構群が方向を変換する地点にも相当することから、時期的に大きな隔たりがないとも考えられる。(光永)

(8) 素掘溝群

今回収載する窪木遺跡では、南溝手遺跡でも確認された素掘溝群がいくつかの調査区で検出されている。すべての調査区で検出されたわけではなく、地勢や近・現代における耕作によって検出不可能であった調査区が多かったことも事実である。

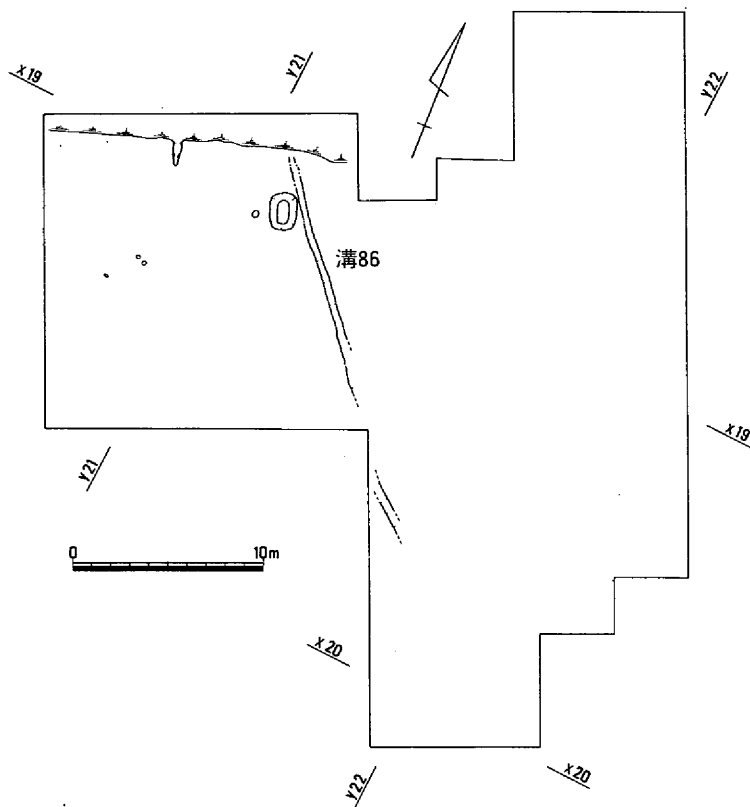
南溝手遺跡では、時期的に古代末から中世段階に比定されている素掘溝群が、窪木遺跡では中世もしくは中世以降すなわち、近世に比定される溝群が存在する。これは、個々の調査区によって遺構の切り合い関係が明瞭な地点とそうでない地点の相違がある。

以下素掘溝群が検出された調査区ごとに所見を述べる。

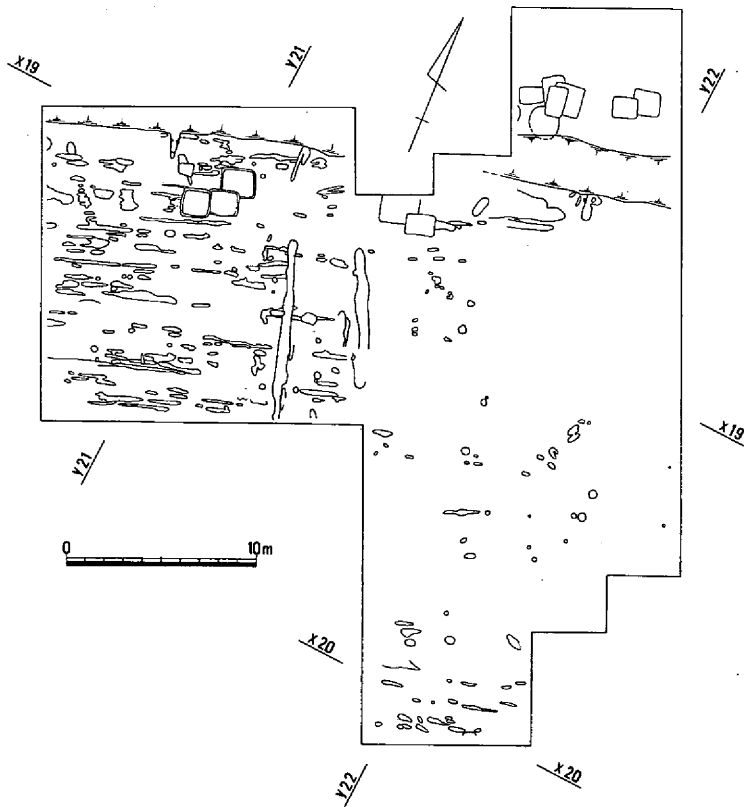
BU区 (第390図)

第390図は中世末から近世にかけての遺構で、いわゆる素掘溝群が途切れ途切れ検出されている。これらは基本的に東西方向を示しているが、幅の変化も大きく、何よりも途切れている点で南溝手遺跡で検出された素掘溝群とは大きな違いが認められる。いずれも深さは数cm前後で、断面形は凸レンズ形を示しているものが多い。

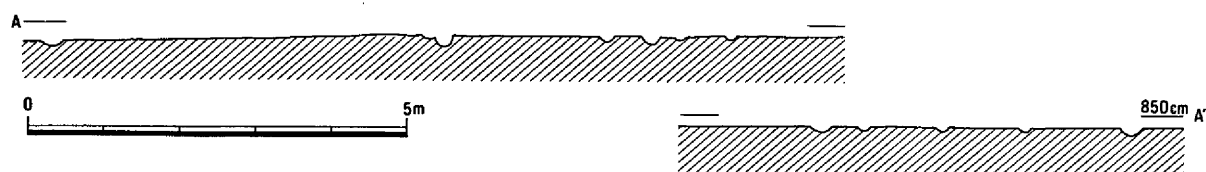
この素掘溝群を切る方形の土壌は、肥料溜めの可能性が高く、調査区の北側で数箇所にとまって検出された。同じ場所に何回も掘りこまれた土壌もあり、位置に対するこだわりがあるのかあるいは地境や地割などとも関わりが深いことを示唆しているともいえる。



第389図 中世遺構全体図(BU区; 1/400)



第390図 近世遺構全体図(BU区; 1/400)



第391図 素掘溝群断面図(CH1区; 1/100)

一方で、これらの土壌が藺草の生産に関わる遺構との考えもあるが、断定はできない。(岡田)

CH1区 (第342・391図)

調査区のほぼ全面で検出されている。基本的な方向は南北を示し、約27°西に振る。やはり南溝手遺跡で検出された素掘溝群とは残存度がかなり異なる。そして、時期的にもむしろ中世末から近世にかけての時期が比定されるのではないかと考えている。明確な出土遺物によって厳密な時期を与えることはできないが、第342図に示すように、明らかに古代末から中世にかけての時期が比定される建物や溝が、この素掘溝群によって明らかに切られている事実がある。

この素掘溝群自体にも相当な時期的な幅があると考えられるが、それは一部で切り合い関係が確かめられたり、それぞれの溝の間隔が本来ならばこれほど密ではない、すなわち同時に存在し得ないと考えられるからである。埋積土は微妙に異なっているが、一般的には黄灰色あるいは、灰白色の微砂質土が認められている。牛馬を使っていたいわゆる唐鋤による耕作痕跡の可能性が高い。(岡田)

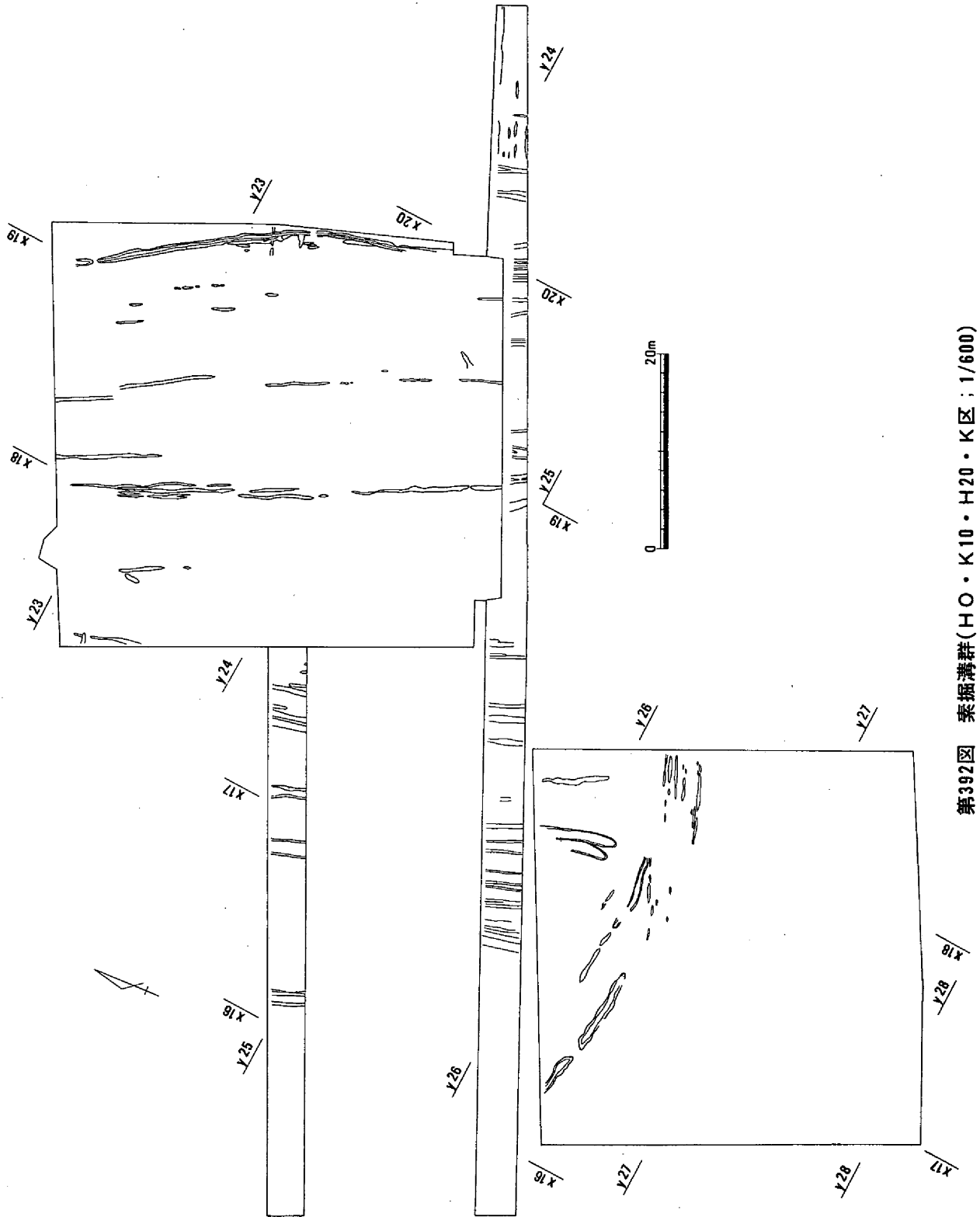
HO・K10・H20・K区 (第392図)

第392図に示した溝群を一括して記述するものであるが、遺構としての残存状況が良好とはいえないものであるだけに、隣接する調査区であっても相互の直接の関係を指摘できないものが多く、全体としての傾向を指摘できるとどまる。また、おもにH20区の溝群の一部は個別の溝として掲載しており、K区の溝の一部はこれとの関係において検討すべきものも含まれる。

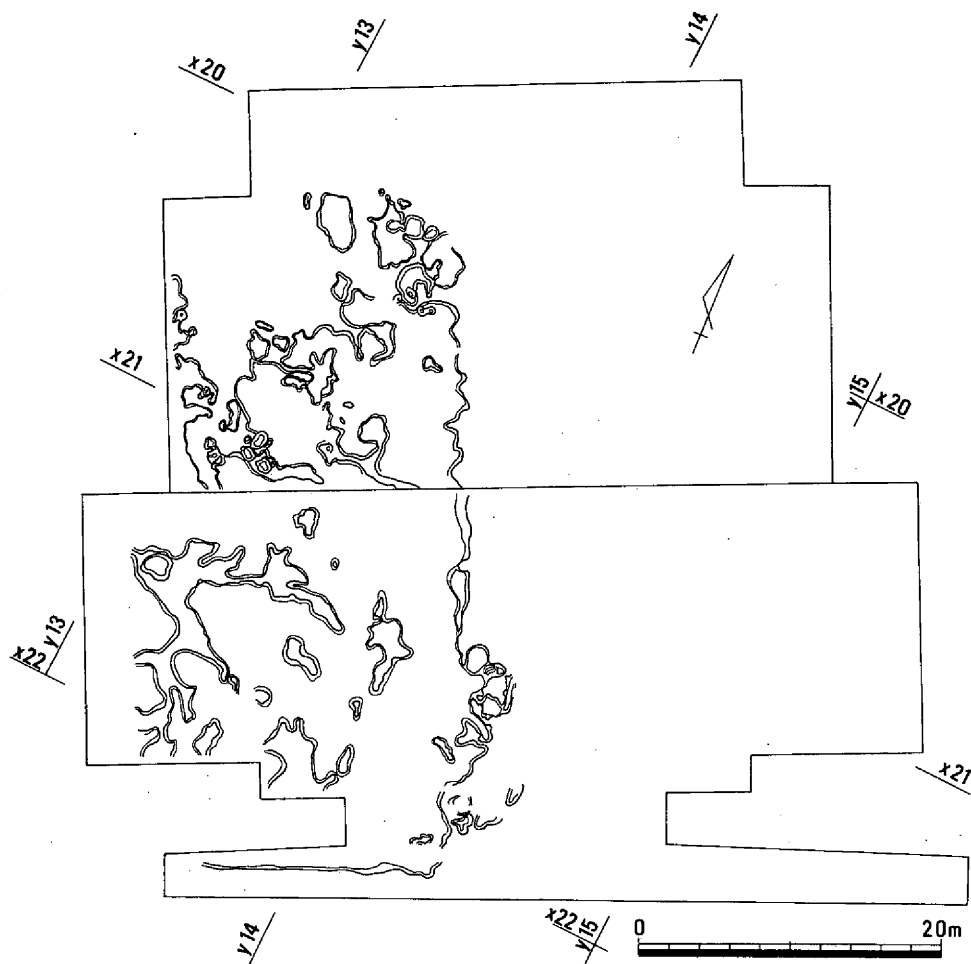
HO区では、調査区の南北方向の辺に平行する溝群が検出されている。中でも東端に位置するものは、上幅70cm、深さ10cm前後の規模を有する箇所もみられるなど、他の溝とは異なって十分に水路としての機能を果たしうるものである。次に明瞭なものは中央やや西よりに位置する一群で、東端のものとの距離は23~25mを測る。前者が東寄りにやや膨らむ弧線に近いのに対して、後者はほぼ直線的である。両者の中間やや後者寄りにも、とぎれとぎれながら1条がたどれる。これらに平行する断続的な溝状遺構は散見されるが、1.5m程度の間隔をもっているようである。東端の溝の中央付近と調査区の北西隅では、これらに直交する方向の小溝もみられる。

他の3区においても、HO区同様の南北方向の溝群が検出されており、これに直交する方向性を示すのは、H20区東端とK区北東部の一部に限られている。K区で溝群が検出されるのは旧地形において微高地部分に相当する範囲であり、低位部に移行する肩口に近い部分では、北西から東へ緩く弧を描く、あるいは直線的な溝が屈曲して方向を変えているようにみえる溝群がみられる。これらは、H20区において、溝98~107として前述した一群に相当するものと考えられる。H20区では、この一群は南北方向の溝群に先行することが確認されている。

図化する遺物はほとんど出土していないが、H20区での古代の土器の出土状況等から、ここで取り上げた素掘溝群については古代以降のものと考えておきたい。(光永)



第392図 索掘溝群(HO・K10・H20・K区; 1/600)



第393図 粘土採掘跡(KO1・2区; 1/500)

(9) 粘土採掘跡

KO1・2区西半の旧第3低位部上のたわみ部分において検出された不整形な浅いくぼみの集合体である。検出面の海拔高は場所ごとに異なるが、海拔8.2m以上であり、第65図の第3層上面に相当する。第3層は黒褐色粘質微砂と灰白色粘質微砂の混層で、第4層は黒褐色粘質微砂であるが、前者の2層の混層の割合には場所ごとに違いがあるため、このうちの灰白色粘質微砂の多い部分を第4層上面まで掘削し、黒褐色粘土が多い部分は掘り残したものと考えられる。第393図に示した検出状況からは、1回の掘削の単位等は読み取ることができなかった。

「早島式」土師質高台付椀が出土しており、時期は中世、鎌倉時代頃と考えられる。(光永)

(10) 水田

CH4区北部において、第383図に示すような水田畦畔が確認された。方向は北西の畦畔で $N-21^{\circ}-W$ 、次の畦畔はほぼこれと直交し、南東の畦畔はやや北へ振って $N-13^{\circ}-W$ を指している。高さ数cmが残るのみであるが、いずれも開田時に水田面を掘り下げて畦畔部分を掘り残すことによって造られている。この形成方法は、『南溝手遺跡1』収載のH2・4区で検出された土手状遺構に共通するものである。時期を明確にできないが、方向性は現代の地割りに一致している。(光永)

(1) その他の遺構・遺物

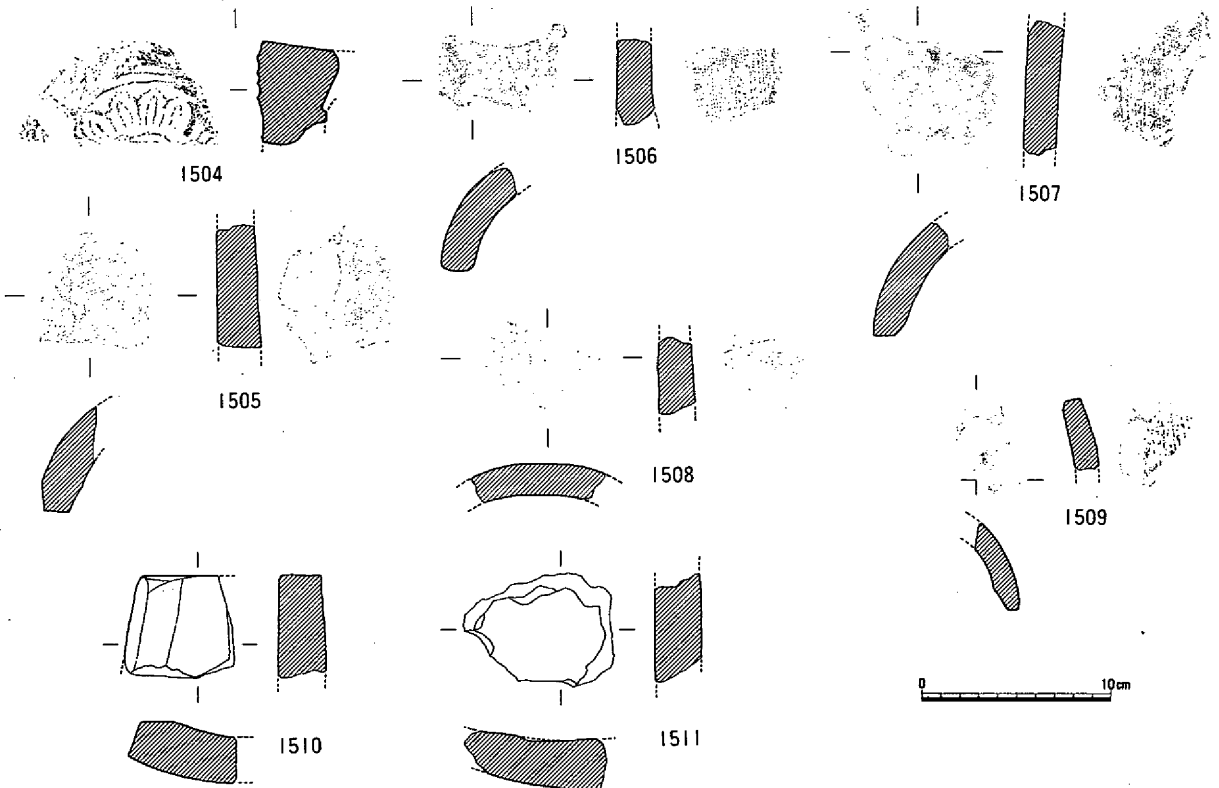
北半調査区では、すでに述べた掘立柱建物・溝・土壇などの遺構のほかに多数の柱穴がある。また農業生産に関わる細溝が確認されたりしている。古代から中世にかけての包含層は比較的薄く、後世の地下げなどに起因する削平によるものと考えている。

古代の柱穴から出土した遺物にCH1区から出土した1572の黒色土器碗がある。平安時代中ごろに比定される遺物で、『窪木遺跡2』で報告するYA区の出土遺物とあい前後する時期を示している。

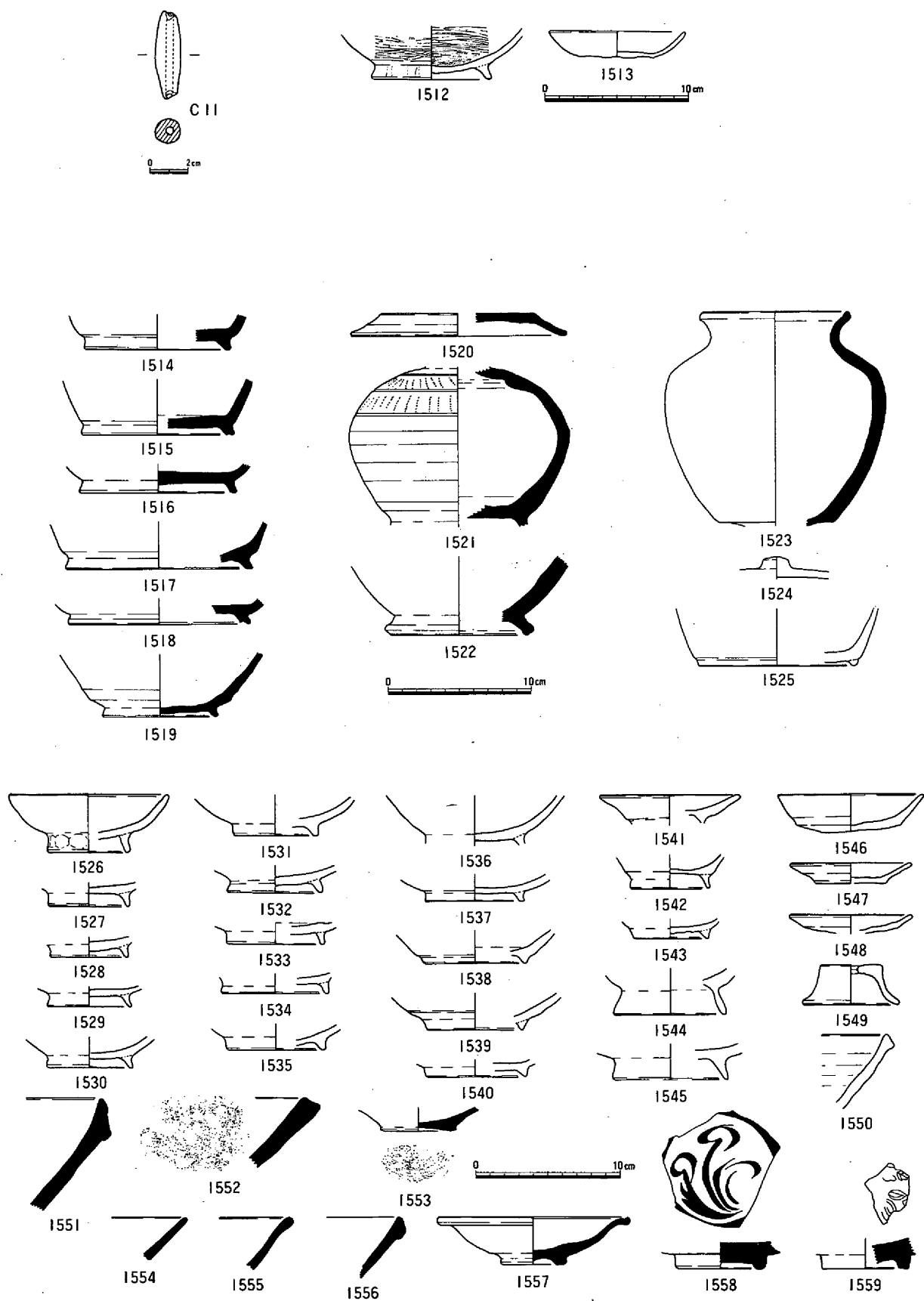
PU区では中世に比定されるC11の土鍾が出土しており、付近での漁労に使われたものであろう。
(岡田)

南半調査区では、古代～中世の遺物は旧低位部が所在する調査区において出土量が多い傾向にあるが、KO1・2区ではやや少ない。また、瓦片の出土は南東部に多いようである。以下、第394～396図に掲載した遺物について、その出土調査区を記述しておく。

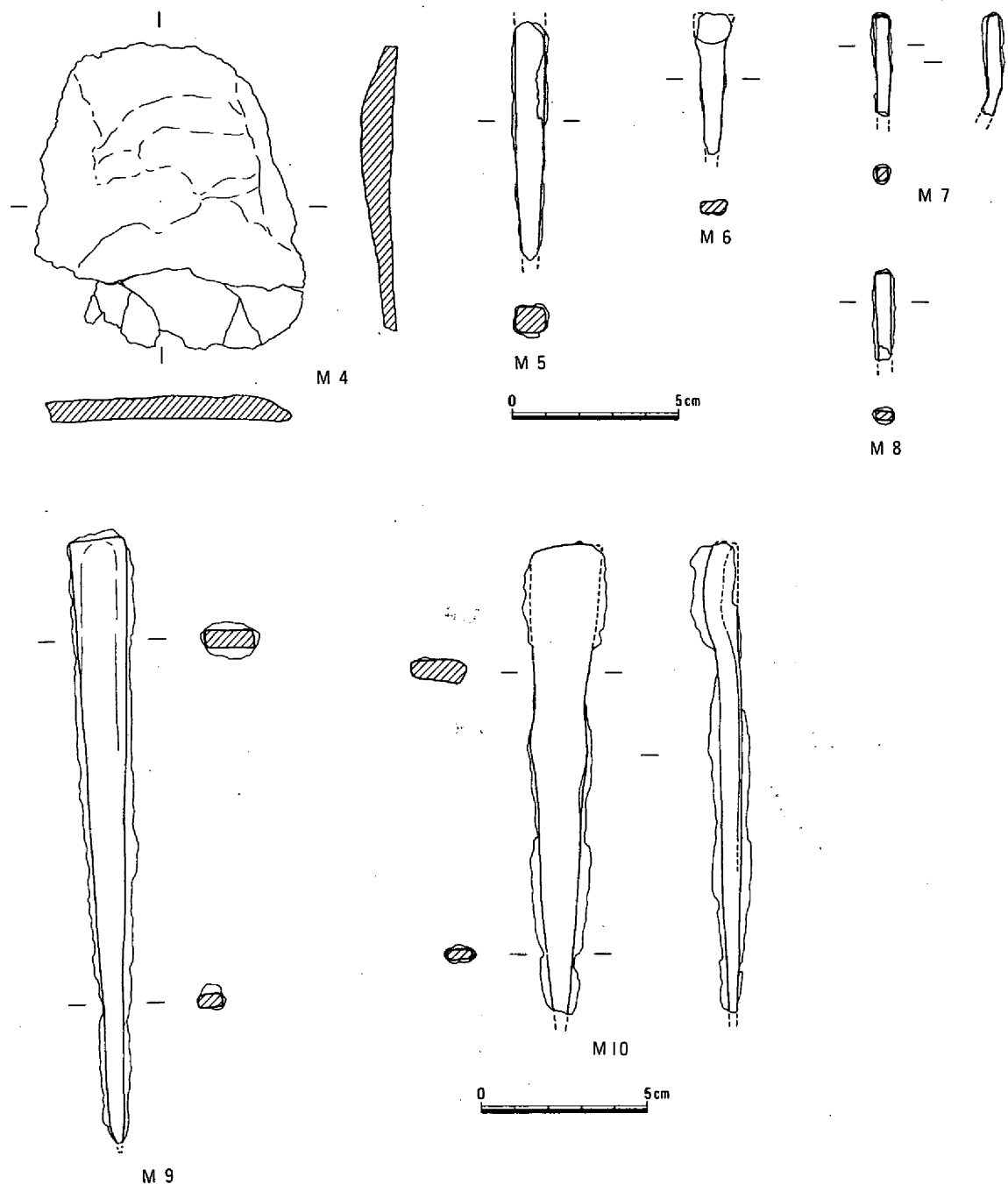
K区からの出土が最も多く、平瓦1511、須恵器の高台付杯1514～1518、高台付碗1519、壺1521・1522、甕1523、土師器の杯蓋1524、高台付杯1525、高台付碗1527・1529・1534・1536・1542～1545、高台付皿1541、脚台1549、備前焼の播鉢1551・1552、碗1553、青磁の碗1555・1559、皿1557、鉄器M4・6～8がある。その他の調査区では、KO2区で鉄器M5・10が出土し、HO区からは土師器の碗1526、皿1546、小皿1548、青磁の碗1558が出土している。CH2区からは丸瓦1506・1507が、CH3区からは丸瓦1509、平瓦1510、青磁の碗1556が出土し、CH5区からは丸瓦1505・1508が出土している。土



第394図 その他の遺物(古代・中世・近世1)(1/4)



第395図 その他の遺物(古代・中世・近世2)(1/3・1/4)



第396図 その他の遺物(古代・中世・近世3)(1/2)

師器の小皿1547、鉢1550がHW1区、土師器の高台付椀1528・1530・1532がHW2区から出土し、HW3区からは、軒丸瓦1504、須恵器の蓋1520、土師器の高台付椀1531・1533・1535・1538～1540が出土している。
(光永)

第4章 ま と め

第1節 発掘調査の概要

窪木遺跡は、吉備高原をへて中国山地に連なる標高200~500m前後の丘陵部の南に広がる平野部に位置しており、すでに報告した南溝手遺跡（註）の東側に位置する。発掘調査前の状況は、南溝手遺跡と同様に標高8.5~8.8m前後の水田地帯であった。

第3章の各節で述べたように、遺跡は縄文時代晩期から中・近世にかけての集落跡として、人々の生活基盤が形成され、継続的に利用されてきたことが明らかにされた。

縄文時代では、集落を形成した住居の存在を間近に感じさせる、CH1区の土器溜り1をはじめ、比較的出土遺物は多い。縄文土器はもとより石器も石鏃・石斧のほか農耕に関わる石鍬などがあり、南溝手遺跡1の第4章第2節「縄文時代後期の稲作について」でふれたように、早くから定住地として生活に適した場所であったことが一層明確になったといつてよいだろう。HW3区で出土した丹塗り磨研土器（鉢；106、壺；105）はとりわけ重要な土器である。これらを含め、縄文晩期土器については第2節で総括的に詳述するものとする。

一方、プラント・オパール分析を含めた自然科学分析については付載1に収載したので、南溝手遺跡の分析成果と併せ参考に具したい。

弥生時代では前期の住居跡が少数ながら検出された。これらにともなう前期土器についても、第3節で、南溝手遺跡の知見と併せまとめることとしている。竪穴住居や掘立柱建物とともに、もっとも集落のまとまりが把握されたのは後期前葉から中葉にかけてである。とりわけTA区では溝を伴う集落の在り方が注目される。遺構としては、貯蔵穴（あなぐら）と考えられる袋状土壙が各所で検出されている点も看過できない。なお、出土土器の中に高床の家屋を描いた線刻絵画土器（HW3区出土土器台；1152）があり、当時の集落を構成する「家」を考えられる上で貴重な資料である。

古墳時代では、南溝手遺跡に続く水田遺構の検出がPU区・TA区などで顕著に認められた。居住に関わる遺構としては、掘立柱建物があるほかは少ない。溝・柵列状遺構・河道などの長大な遺構の一部が各所で検出されたにとどまる。CH5区で出土した銅鏃（M2）古墳以外からの出土例として注目に値する。

古代では、やはり備中国府との関わりが当初より注目されていたが、具体的な遺構の発見には至らなかった。出土遺物としては1504の軒丸瓦が特筆される。この時期の知見としては、次に刊行される「窪木遺跡2」に収載されるYA区の遺構・遺物と関連的な報告に期待したい。

中世から近世にかけては遺構面の削平が目立ち。少数の掘立柱建物などがまとまった集落の一部が確認されている。土壙・土壙墓のほか溝が集落内あるいは、近接して存在する。素掘溝群は、農業生産に関わる遺構と考えられ、唐鋤による牛馬による耕作が推察される。（岡田）

註

- 「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100 岡山県教育委員会 1995年
 「南溝手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107 岡山県教育委員会 1996年

第2節 縄文時代晩期の土器について

今回報告する調査区から出土した縄文時代晩期の土器は全体でもコンテナ10箱以下と少ないが、本文中において詳しく触れることができなかつたため、まとめとして報告しておきたい。

I. 窪木遺跡出土の晩期中葉の土器について

CH1区土器溜り1から出土した土器は多くはないが、そのおもな特徴は、(a)深鉢の口唇部に刻目がほとんど施されていないこと、(b)深鉢の口頸部外面の調整がアルカ属貝条痕であること、(c)深鉢の底部がくぼみ底であること、(d)口縁端部を僅かではあるが上方に拡張した浅鉢が存在していることなどである(第20図5~24)。これらの特徴は、すでに報告している『南溝手遺跡1』⁽¹⁾の土器溜り1や『南溝手遺跡2』⁽²⁾の土器溜り5出土土器の特徴とほぼ一致している。したがってこれらの土器は、これまで資料の少なかつた「南溝手B1類」⁽³⁾に新たな資料を追加することができたといえよう。時期は晩期中葉を古・中・新に区分した場合の古段階と考えたい。

PU2区出土の第16図4は口縁端部に突起をもつ深鉢で、口唇部には刻目、口頸部には口唇部の突起から胴部にむかって三列の縦の刺突文が、また口頸部と胴部の境には逆C字形の刺突文が横位に施されている。調整は口頸部外面がアルカ属貝条痕、胴部外面がケズリである。これらの特徴から時期は晩期中葉の新段階であろう。岡山県立大学建設に伴って調査した南溝手遺跡、窪木遺跡においては出土例の少ない時期の土器である。

II. 窪木遺跡出土の晩期後葉の土器について

HW3区の河道1の肩部の斜面堆積層からコンテナ約3箱分の土器が出土している。これらの土器には少量の晩期中葉の土器が含まれているが(混入と考えている)、多くは晩期後葉の土器である。また本文中において述べているように、包含層として図示している土器のなかにも本来河道1に伴っていたと考えて良い土器がある。そこでこれらの土器について以下に述べるような分析方法でいくつかの特徴を指摘してみたい。まず深鉢では、(a)口唇部刻目の有無については、有るものが17/33で52%と約5割存在している。(b)口唇部形態については、刻目を施したものについては刻目の方法や形態に左右されている場合があることや磨滅などの条件によって明確に分離できないものも多いが、面取りをして角張るものが11/33で33%、先細りのものが10/33で30%、丸味をもつものが12/33で36%である。(c)口縁端部内面に沈線あるいは沈線状の抉りを入れたものは8/33で24%である。(d)口頸部外面の最終調整はナデが22/33で67%、ケズリ・擦痕が8/33で24%、アルカ属貝条痕が3/33で9%である。(e)胴部外面はほとんどがケズリである。(f)口縁部外面の突帯の位置については、口縁端部に接するものはない。ほとんどは口縁端部から5~10mm下がった位置に貼り付けられているが、特定の傾向は認められない。(g)口頸部外面に文様を施したものは存在しない。(h)口頸部と胴部の境に突帯を施したもの(いわゆる二条突帯深鉢)が三点確認できる。(i)底部は平底のみが三点確認できる。次に浅鉢では胴部から「く」の字形にのびる口縁部が外反するもの(A類72・78・80・184など)、「く」の字形に内傾する口縁部が短いもの(B1類182など)、長いもの(B2類69・107・179など)、椀・皿形のもの(C類95・98、185~187などなど)があり、量的にはB・C類が多いといえる。なおA類の72・184は方形浅鉢になる可能性も考えられるが、小片のためはっきりしない。またB2類は口縁端部が外側に折れ曲がり、口縁部外面には沈線を施したものが多い。色調は黒色~暗灰色である。C類に

は内外面ともミガキ調整で、暗灰色の色調のものが多い。なお106はいわゆる丹塗り磨研の鉢で、この土器についてはのちにやや詳しく述べたい。壺は二点確認できた⁽⁴⁾。103は暗灰色の色調で、内外面とも横方向のミガキが施されている。105はいわゆる丹塗り磨研の壺であり、この土器についてものちにやや詳しく述べたい。

以上のような方法で河道1出土の土器の特徴を全体として理解するならば、これらの土器群は、同じ岡山県立大学建設に伴って発掘調査を実施した南溝手遺跡の河道1から出土した晩期後葉の土器群⁽¹⁾に近い様相を示していると考えて良いであろう。そしてやや細かく検討するならば、窪木遺跡河道1の方が口唇部に刻目を施した深鉢や口頸部外面の最終調整がアルカ属貝条痕である深鉢の割合が少ないことから、時期的にはやや新しい様相を示しているとも考えることもできる。

次におもに深鉢の口唇部刻目の有無や口唇部形状、口頸部外面調整、底部形状などを、今回と同じような分析方法（各項目ごとに比率を出して比較する）を用いて⁽⁵⁾これまでに出土している岡山県内出土の晩期後葉のおもな土器群と比較するならば、『南溝手遺跡1』や『南溝手遺跡2』において報告したような理由によって、「阿津走出遺跡⁽⁶⁾」・「南方前池遺跡⁽⁷⁾」・「南溝手遺跡河道3⁽²⁾」→「南溝手遺跡河道1⁽¹⁾」・「窪木遺跡河道1」→「津島岡大遺跡⁽⁸⁾」→「百間川沢田遺跡⁽⁹⁾」という時間的序列・編年的序列を想定することもできる。

しかしながら、これまで述べてきたような分析方法である一定量のいくつかの土器群を分析するならば、それぞれが少しずつでも異なった様相を示すことはある意味では当然のことと考えられる。従ってこうした分析の結果想定できる土器群をそのまま編年的序列のための資料とするためには、今一度それらの資料的吟味が必要であろう⁽¹⁰⁾。

岡山県内でこれまでに出土している晩期後葉の土器資料は弥生土器などに比べて量的にはかなり少ない。また河道や土器溜り、包含層出土のものも多く、公表されている資料には層位や切り合いによって新旧関係が捉えられるものはほとんどない。一方、遺跡内の地点ごとに様相の異なる土器群が出土した遺跡としては百間川遺跡群や津島岡大遺跡、南溝手遺跡、黒土遺跡⁽¹¹⁾などが知られているが、資料的に十分であるとはいえない。しかしながら、こうしたなかでも1985年の百間川沢田遺跡出土土器の報告以降公表された新たな資料に基づいて、重要な編年的研究が発表されるようになってきていることは周知のとおりである。

このまとめにおいて岡山県内の晩期後葉の土器編年の研究史や成果について詳述する余裕はないが、筆者の理解するところでは、古い様相（古段階）については阿津走出遺跡や南方前池遺跡出土土器などで、また新しい様相（新段階）については百間川沢田遺跡出土土器によってかなり判明しているものの、それらとは異なる中間的な様相（中段階）の土器群についての位置づけが一定していないように思われる。それはおもに資料的制約によるものであろうが、今回報告する窪木遺跡河道1やすでに報告した南溝手遺跡河道1出土土器がそうした中段階の土器群が抽出できる資料として意味あるものと考えられる。そこで以下において中段階の土器群を抽出する試みを行ってみたい。

方法は窪木遺跡河道1と南溝手遺跡河道1から出土した晩期後葉の土器群は古・中・新段階の土器が混在している資料として捉え、これらの中から形態や技法の特徴で古段階および新段階と考えられる土器を差し引いた残りの土器群を中段階の土器群として設定することにする。その際に古段階、新段階と考える土器の特徴としては、これまでに指摘されているように、深鉢ではおもに角張った口唇部に刻目を施し、口頸部外面の調整がアルカ属貝条痕の土器を古段階に、また先細りの口唇部に刻目

は施されず、口頸部外面の調整が丁寧なナデの土器を新段階と考えた。浅鉢については古段階の特徴は把握できないが、新段階については先述した窪木遺跡河道1において浅鉢B2・C類としたものを想定した。実際には古・中段階の浅鉢の区別をはじめ全ての土器を古・中・新に分類できた訳ではないが、特徴的な土器については編年表に掲載している。

こうした試みによって得られた中段階の土器の特徴としては、深鉢では、(1)口唇部形状は統一されていないが刻目を施すこと、(2)口頸部外面の調整にアルカ属貝条痕が用いられずナデ(新段階のナデのように丁寧ではない)や擦痕(ケズリを含む)であることに特徴を見い出しておきたい。また(3)口縁端部内面、あるいは外面の口頸部と胴部の境に沈線あるいは沈線状の抉りを施す深鉢、波状口縁の深鉢、いわゆる「二条突帯」の深鉢もこの段階に存在していると考えたい。浅鉢については、明確ではないがいわゆる「く」の字状の口縁部ものをこの段階として理解しておきたい。またいわゆる「方形浅鉢」や波状口縁をもつ浅鉢もこの段階の特徴と考えたい。(編年表参照)

III. 晩期中葉～後葉の土器編年

以上のように不十分ではあるが、岡山県立大学建設に伴って出土した晩期後葉の土器を従来の編年研究を参照しながら古・中・新の3段階に区分した。また晩期中葉の土器についてはすでに報告した内容に変更はない^(IX2)。岡山県立大学建設に伴う発掘調査の報告書は来年度(1998年度)に刊行予定の第4分冊で完結する予定であるが、第4分冊で報告する予定の調査区からは晩期の土器は少量出土しているのみである。そこで今回、岡山県立大学建設に伴って発掘調査を実施した南溝手遺跡・窪木遺跡出土の晩期中葉～後葉の土器について編年表を作成し、試案として提示することとする。紙幅の関係でおもな土器を掲載するにとどまっていること、および掲載した土器の報告書が三冊の報告書に及んでいることもあり、編年表についての簡単な説明を加えておきたい。

晩期中葉の古段階(I a期)は南溝手遺跡の土器溜り1と5を基準資料としており、『南溝手遺跡2』において「南溝手B1類」とした土器群が相当する。深鉢の特徴は、(1)器形が「く」の字状にゆるやかに外反する短めの口頸部と卵形の胴部もち(A類)、底部はくぼみ底であること、(2)口唇部に刻目を施さないこと、(3)口頸部外面の調整はナデのものが少し存在するが、ほとんどはアルカ属貝条痕であること、(4)胴部外面の調整はアルカ属貝条痕かケズリであることなどである。浅鉢は胴部からゆるやかに外反する口縁部をもち(A類)、口縁端部が短く屈曲して立ち上がる、あるいはわずかに上方に拡張しているのが特徴である。この段階の土器は南溝手遺跡の河道2や土器溜り2や包含層からも出土しているが、量的には多くない。

晩期中葉の中段階(I b期)は南溝手遺跡の河道2や土器溜り2出土土器から想定した。深鉢については、(1)A類に加えてのちの時期の器形の主流となるゆるく外反する長めの口頸部に肩の張らない胴部とくぼみ底をもつもの(B類)やいわゆるバケツ形のものが存在すること、(2)口縁端部に突起をもつものが多いこと、(3)いずれの器形においても口唇部に刻目を施していること、(4)口頸部外面の調整は基本的にはアルカ属貝条痕でナデやケズリが少量存在すること、(5)胴部外面の調整は基本的にはケズリであり、アルカ属貝条痕やナデが少量存在すること、(6)底部はほとんどくぼみ底であることなどが特徴である。浅鉢については、(1)器形がA類以外にA類と同じく胴部に外反する口頸部をもつが、口頸部が短いものや(M451・2266)、外反する短い口頸部と肩部が強く張り出した胴部をもつもの(M2375・352)、椀形のもの(M2284・2334など)、皿形のもの(M357)が存在していること、(2)口縁端部の形状はI a期のような上方に立ち上がるものはなく、内面に抉りや沈線・凹線あるいは削

晩 期 中 葉 (I 期)	古 段 階 (I a)	M2391	M93	M97	M449	M2396	M2393	M114	M94	M110	M111	M2400	M2402	M108								
	中 段 階 (I b)	M2340	M2216	M2293	M366	M2248	M367	M2294	M2349	M2268	M451	M2266	M2375	M352	M2357	M357	M2334	M476				
	新 段 階 (I c)	K4	M57	K28	M2307																	
	古 段 階 (II a)	M2412	M2413	M139	M2424	M140	M141	M2431	M2442	M306	M199	M2425	M2445	M2449	M330	M331						
	中 段 階 (II b)	M165	M166	K60	M167	K59	K48	M205	M296	K42	M258	M256	K182	K184	M254	K105	K106					
新 段 階 (II c)	M204	M206	K64	M210	M209	K65	M207	M206	K37	K101	K57	K58	K107	K179	M264	M275	K187	K96	M304	K103	K97	K185

掲載した土器実測図番号のうち、Mは南溝手遺跡、Kは窪木遺跡出土土器を示している。

第4表 縄文時代晩期中葉～後葉の土器編年表(1/12)

り出しによる段を施したものや丸味をもっておさめたものが多い。『南溝手遺跡2』で述べた「南溝手B2類」の主体をなす土器で、今回の調査では出土量が最も多い。

晩期中葉の新段階（Ic期）は近年「谷尻式」とも呼ばれている土器の特徴にちかいものを抽出して設定している。まとめて出土しておらず、出土量もごく少ないのが遺跡の特徴でもある。編年表には深鉢のみを掲載しており、特徴は(1)角張った口唇部に刻目を施すこと、(2)口縁端部に突起をもつものが多いこと、(3)口縁端部の突起部分から口頸部外面に縦の刺突文(爪形文が多い)を施すこと、(4)口頸部と胴部の境には横方向に刺突文(爪形文が多い)を施すこと、(5)口頸部外面の調整はアルカ属貝条痕かナデ、胴部外面の調整はケズリであること、(6)底部はくぼみ底であることなどである。また、突起の形状と刺突文の大きさによって新古が推定できるのではないかと考えている。すなわちM2307のように大きく明瞭な突起や小さめの刺突文をもつものが古く、K4・M57のように低く小さな突起や突起が波状口縁の波長部のように簡略化され、刺突文も大きめなものが新しいと考えられる。このことはIb期の突起が大きくしっかりしていることやIIa期の刺突文が大きめであることから推測した。

晩期後葉（貼付突帯の出現によって中葉と後葉を区分した）の古段階（IIa期）は南溝手遺跡河道3出土土器から想定した「南溝手B3類」土器の特徴と同じである⁽²⁾。そのおもな特徴は、深鉢では、(1)角張った口唇部に刻目を施すこと、(2)口縁端部の刻目貼付突帯は口唇部からやや下がった位置にあること、(3)口頸部外面の調整がアルカ属貝条痕がほとんどであること、(4)口縁端部内面に沈線を施すものが一定量存在していること、(5)口頸部と胴部の境には横方向の刺突文が施されているものが多いこと、(6)底部は尖り底と小さな平底であること、(7)バケツ形も存在することなどである。浅鉢については南溝手遺跡河道3から出土したカマボコ形の無刻目貼付突帯を施したM2445や口縁部が逆「く」の字形に内傾するM2449を想定しているが明確ではない。IIa期には南溝手遺跡河道1から出土した土器のうち先述した古段階の深鉢も掲載している。またM330・331の浅鉢は口縁部の形状からこの段階と判断した。今回の調査ではまとめて出土した土器は少なく、器種構成など不明瞭な部分も多い。これまでの編年案との比較では、平井氏の「I期」、岩見氏の「I期」にちかいと考えている。

晩期後葉の中段階（IIb期）は先述したように、南溝手遺跡河道1と窪木遺跡河道1出土土器資料を操作して設定している。深鉢や浅鉢の特徴については先述している。従来の編年案との比較では、平井氏の「II期」、岩見氏の「II期」にちかいと考えている。

晩期後葉の新段階（IIc期）は南溝手遺跡河道1や窪木遺跡河道1出土土器のなかから百間川沢田遺跡土器溜り13・14出土土器（沢田式）の特徴をもつ土器を抽出して設定している。したがって深鉢や浅鉢、壺などの特徴は沢田式と同じである。従来の編年との比較では、平井氏の「III期」、岩見氏の「III期」にちかいと考えている。

IV. 「丹塗り磨研」壺について

HW3区の河道1から出土した第27図105の土器はいわゆる「丹塗り磨研」の壺である（塗布されている赤色顔料については、付載2として掲載しているような本田光子氏・成瀬正和氏による分析の結果、ベンガラと鑑定されている）。土器は三片確認でき、約15×10cmの大きさに接合・復元することができている。土器片は口縁部・頸部・肩部の破片で、口径は約15.0cmと推測できる。

復元実測の結果判明した形態は、口縁端部が大きくはないが外反しており、頸部は「ハ」の字形を呈するが、直立気味である点に特徴がある。肩部は僅かしか残存していないが、頸部から強く張り出

しているのが特徴である。粘土紐の接合方法は不明瞭である。

外面の調整は口縁端部が横方向のミガキ、頸部が横および斜め右上がり方向のミガキ、肩部が横方向のミガキである。ミガキはいずれも丁寧である。内面は口縁端部から頸部の上半約2/3までが横方向のミガキである。頸部下半約1/3にはミガキは施されておらず、ナデのままである。肩部の残存部分は少ないため明確ではないが、板によるナデかケズリではなからうか（ハケメ状の細い条線が観察できる）。

胎土はおもに1~2mmの石英や長石、それに1mm以下の角閃石などを少量含んでいる。胎土に含まれる鉱物としては量的な差異はあるものの一緒に出土している他の深鉢や浅鉢と大きな違いはないように思われる。

色調は残存する外面のすべて、および内面のうち口縁端部から下約3.5cmまで水平にベンガラが塗られているため、その部分は明赤褐色（2.5Y R5/6）である。ベンガラは残存状態から焼成前に塗られたものと考えられる。内面のうちベンガラの塗られていない部分は灰白色であり、特徴的である。断面の色調が表面の約1mmを除いてサンドイッチ状に黒灰色となっているのも特徴であり、表面が意識的に白く焼かれた可能性が考えられる⁹⁰。

縄文時代晩期後葉と考えられる壺は、岡山県内ではこれまで百間川沢田遺跡や津島岡大遺跡などで20例前後報告されているが、赤色顔料の塗られたものは知られていない。また105のような肩部から口縁部の形状や胎土・焼成に関しても県内においては現段階では類例を求めがたい。そこで「丹塗り磨研」の壺が多く出土している北部九州での報告例を参考にすると、第397図に示したような雀居遺跡出土土器などが形態的に類似した土器として求められる。ところで北部九州出土の壺については、大型・中型・小型の区別や、福岡平野部・唐津湾沿岸部・有明海沿岸部などの地域による特色をふまえながら編年が行われている。このうち105のような大型・中型壺については、基本的には口縁端部の外反度が小さく、頸部が直立気味で、肩部が強く張り出すものが古い段階のものとして理解されているように思われる（底部については丸底に近い平底）。したがって105の壺を北部九州地域で考えるとすれば、古い段階のもので、山崎氏の編年でいえば夜白1式段階と考えられるのではなからうか。ただし105の土器については北部九州のどこかから搬入された可能性もあるが、現段階では遺跡周辺で作成されたものと考えている。したがって岡山県内出土の壺についても時期的な新古を想定することができ、105は百間川沢田遺跡や津島岡大遺跡出土の壺よりは古く位置づけられるであろう⁹¹。そして今回想定した編年のなかでは、晩期後葉の中段階に位置づけておきたい。

V. 「丹塗り磨研」鉢について

HW3区の河道1から出土した第27図106はいわゆる「丹塗り磨研」の鉢である（塗布されている赤色顔料については付載2として掲載しているような分析によってベンガラと鑑定されている）。土器は三片確認でき、全体の約4/5について接合・復元することができている。

復元実測の結果判明した形態は、口径20.0cm、底径8.8cm、器高8.7cmの大きさで、少し外に張り出した平底の底部から体部および口縁部がわずかに内湾しながらもほぼ直線的にのびている。口唇部は丸くおさめられている。器壁は5mm前後と薄く、粘土紐の接合方法は明確ではないが内傾接合と思われる。

調整は内外面ともに丁寧なミガキである。ミガキの方向は体部上半約2.5cmと体部内面が横方向、体部下半約6.2cmが左斜め上方向、底部内外面が不定方向である。

断面の色調は黒灰色で、胎土は1mm前後の石英や長石などを少量含んでいる。共伴した他の土器とは量的な差異はあるものの、含まれている鉱物組成には大きな違いはないように思われる。

この土器については以下に述べる三つの事柄について考察してみたい。第一に器形について考えてみたい。まず国内出土の晩期後葉の鉢については、口縁部や底部の破片では類似したものが存在するが、全体の器形が判明しているもののうちでは近似するものは見あたらない。平底の底部から直線的に開く体部をもつ鉢という点では雀居遺跡出土土器⁹⁹などを類例として掲げることができるが、口縁部と底部の直径の比率など全体のバランスは異なっている(第397図)。これら国内出土土器に比べて朝鮮半島出土土器のなかからは、量的には少ないがより類似した土器を見出すことができる。例えば鳳溪里遺跡⁹³や大也里遺跡⁹⁴、松菊里遺跡出土土器⁹⁵である(第397図)。ミガキの方向など調整方法や大きさは異なっているが、現時点では国内出土土器よりは朝鮮半島出土土器に原型を求めることができる。

第二に「丹塗り磨研」である点について考えてみたい。赤色顔料(ベンガラ)は、内外面の色調や残存状況などから、焼成前に土器の内外全面に塗られたものと考えている。「丹塗り磨研」の壺や鉢は日本国内でもおもに北部九州において出土例が多く知られている。それらは少量の朝鮮半島からの搬入品のほかには国内産のものが多いが、この時期の土器に「丹塗り」を施すという方法自体は朝鮮半島に由来すると考えられている。したがって105の鉢に「丹塗り」が施されていることについては、北部九州の影響と考えることもできるし、また朝鮮半島からの直接的な影響とも考えることができる。

第三にベンガラの塗布とともにこの土器を特徴づけるのは、おもに外面において観察できる灰黄色と黒色の文様である。この文様については一部不鮮明な部分があり、本来の形を正確に図化できたとは言いがたいが、第397図に実測図を示している。この文様についてはまず意識的なものなのか焼成時に生じた偶然的なものなのかを判断する必要がある。どちらであるのかを判断できる明確な根拠があるわけではないが、現段階では外面の図の上半部分の文様が手のひらの形に似ていると思われるので、意識的な文様と考えておきたい。そう考えるとこの文様は、あらかじめベンガラを塗った土器に対して、何らかの化粧土的なものを手のひらや指によって塗り付けることによって描かれたものと推測したい。

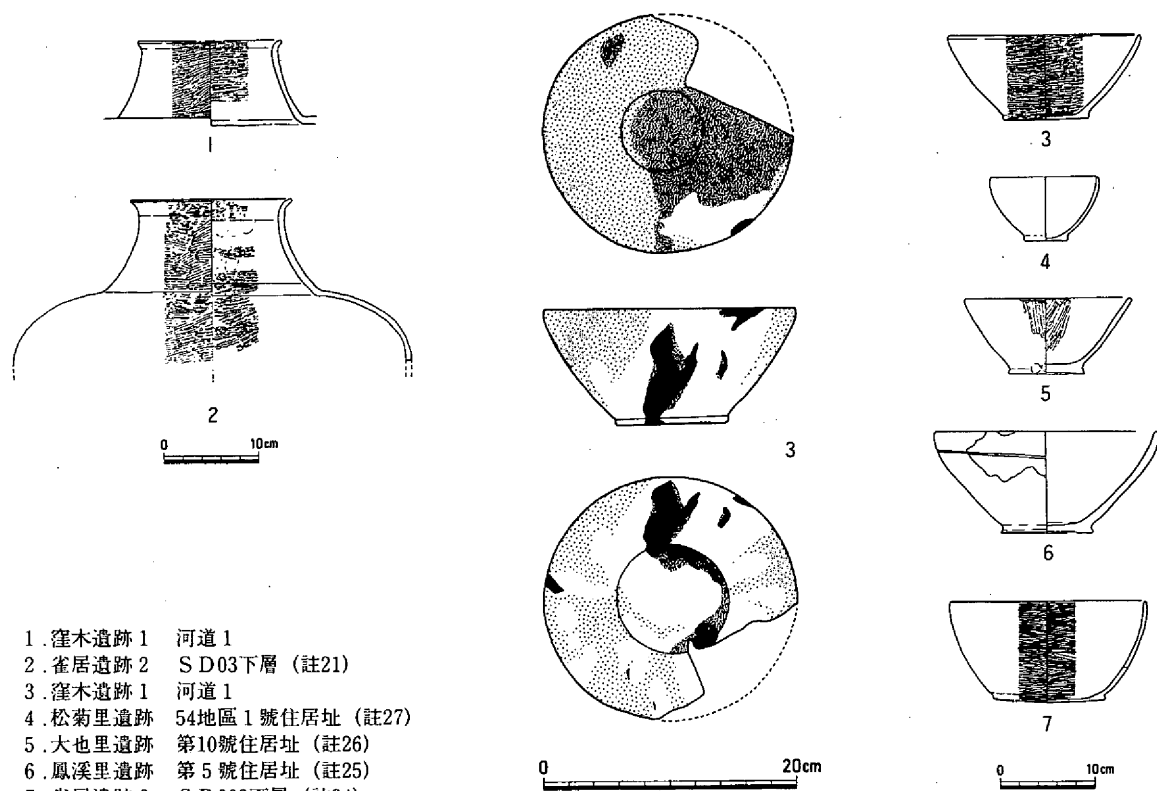
次に問題としたいのは、灰黄色と黒色部分の違いについてである。少なくとも二つの考え方ができると思う。一つは本来文様部分全体を黒くするつもりであったのが、焼成時に高温のために部分的に黒色がとんでしまったと推測することである。もう一つは逆に黒色部分のほうが、焼成時にいわゆる黒班として付着したと推測することである。現段階では文様部分のみを黒く焼きあげることが技術的に困難であったであろうと考えて、後者と考えている。後者のように黒色の部分を黒班と考えた場合、その黒班が意識的なものかどうか問題となる。なぜならばこの土器と大きくは同時代と考えられるであろう朝鮮半島製の土器に意識的に黒班を施した土器(「彩文土器」)⁹⁸が知られているからである。器種は窪木遺跡出土の鉢とは異なり、壺で丹塗りを施していないものが多いらしい。しかしながら少なくとも岡山県内出土の浅鉢や鉢に黒班が認められる例は存在していないことから意識的なものと考えておきたい⁹⁶。そして黒班を付ける意識の背景には、土器制作者が朝鮮半島の黒班を有する土器の存在や方法を直接的にせよ間接的にせよ知っていたことに関連するものと考えられる。

以上述べてきたように河道1出土の106の鉢の制作者は、(1)器形の特徴、(2)「丹塗り磨研」であること、(3)意識的と思われる文様や黒班があることから、朝鮮半島の土器についての知識を持ち合わせていた人物か、あるいはそうした人物の指導によって製作されたと考えられるのではなかろうか。

河道1出土の106の鉢が遺跡周辺において製作されたと考えるならば、『南溝手遺跡1』で報告した「孔列文土器」や弥生時代前期前半の玉つくり関連遺物、南溝手遺跡・窪木遺跡で検出できたいわゆる「松菊里型住居」として捉えることもできる弥生時代前期前半の竪穴住居などとあわせて、当該地域においては、縄文時代晩期後葉から弥生時代前期前半に朝鮮半島文化の少なからぬ影響があったことを推測することができよう。(平井)

註

- (1) 「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100』 岡山県教育委員会 1995年
- (2) 「南溝手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107』 岡山県教育委員会 1996年
- (3) 割合を示す根拠にした資料は、実測図として掲載し、かつ調整の判明した土器に限っている。
- (4) 104も壺の可能性が考えられるが、はっきりしなかった。
- (5) すでに山崎氏(後掲註22)や家根氏、泉氏、平井氏(後掲註12)などの土器編年において、こうした方法は取り入れられている。
家根様多「縄文土器と弥生土器へ」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所 1984年
泉 拓良「西日本凸帯文土器の編年」『文化財學報』第八集 奈良大学文学部文化財学科 1990年
- (6) 「阿津走出遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告71』 岡山県教育委員会 1988年
- (7) 『南方前池遺跡—縄文時代木の実貯蔵穴の発掘—』 岡山県山陽町教育委員会 1995年
- (8) 「津島岡大遺跡3」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第5冊』 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1992年
- (9) 「百間川沢田遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59』 岡山県教育委員会 1985年
- (10) ある遺跡の遺構や包含層中からまとまって出土した土器群(一括資料)であっても、それらが同一時期の資料であるのかどうか、時期的に異なった資料が混在したものなのかどうかを検討する必要があることはすでに指摘されているとおりである。検討方法としては、一般的には同じ様な土器の組み合わせや特徴などをそなえた資料が多数存在する場合や、土器の技法、形態、組み合わせなどについてバラツキの少ない場合には同一時期の資料である可能性が高いと考えられ、またそれらが明らかに層位や切り合いで新旧関係が判明する場合や、遺跡内の出土地点ごとに異なる場合には編年のためには有効な資料ということができる。
- (11) 高橋 護氏はすでに、笠岡市高島黒土遺跡出土の晩期後葉の土器についてはA B地点下層、竹地点、X Y地点・A B地点上層の3地点でそれぞれ様相を異にしており、三時期に区分できることを指摘されている。
- (12) 平井 勝「岡山における縄文晩期突帯文土器の様相」『古代吉備』第10集 1988年
- (13) M2307は南溝手遺跡土器溜り2から出土しているが、時期は晩期中葉新段階の古相と考えている。
- (14) 平井 勝「瀬戸内地域における突帯文土器の出現と展開」『古代吉備』第18集 1996年
- (15) 岩見和泰「刻目突帯文土器の成立と展開」『古代吉備』第14集 1992年
- (16) ちかいたしたのは、たとえば筆者は南方前池遺跡出土の貼付刻目突帯を施さない深鉢や「く」の字形の口縁部をもつ浅鉢は晩期中葉の時期の土器と考えて「前池式」には含めないからで、全くは一致しない。
- (17) 違いは先述したように筆者が、南溝手遺跡河道1出土土器を古・中・新段階の土器が混在したものとして一時期とは考えないことや後述する津島岡大遺跡出土土器の位置づけであろう。
- (18) 違いは津島岡大遺跡出土土器の位置づけで、筆者は中段階と新段階の土器が混在しているという考え方に従っている。
- (19) 実際の発掘調査では、それぞれの段階においてその前後の土器が伴出する場合はほとんどであると考えられるが、そうした土器が時期的に共伴なのか混入なのかの判断が求められる。その際の明確な基準は持ち合わせていないが、現状では量的な状況や遺構のあり方などを総合して判断せざるを得ないのではないかと考えている。
- (20) 1993年2月19日付けの山陽新聞はこの壺について「表面に粒子の細かい白土をはけで塗布。その上に赤色顔料で着色し、へら状のもので丁寧に磨き、焼き上げたらしい」と報道した。いわゆる化粧土を下地に塗っているというこの見解については、筆者は肉眼的な表面や断面の観察では賛否の判断はできなかった。そこで表面の赤色顔料の塗られた赤色部分と塗られていない白色部分とに何らかの違いが認められるかどうかを調べるために、蛍光X線分析を岡山理科大学自然科学研究所の白石純氏に依頼した。氏の結果報告では、化粧土が塗られていたと判断できる分析結果は得られていない。白石純氏に深く感謝いたします。
- (21) 「雀居遺跡2」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第406集』 福岡市教育委員会 1995年
- (22) 山崎純男「弥生文化成立期における土器の編年学的研究—板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合—」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』 1980年



- 1. 窪木遺跡1 河道1
- 2. 雀居遺跡2 S D03下層 (註21)
- 3. 窪木遺跡1 河道1
- 4. 松菊里遺跡 54地区1 號住居址 (註27)
- 5. 大也里遺跡 第10號住居址 (註26)
- 6. 鳳溪里遺跡 第5號住居址 (註25)
- 7. 雀居遺跡3 S D003下層 (註24)

第397図 窪木遺跡河道1 出土の縄文時代晩期壺・鉢および関連土器(1/8、1/6)

- (23) 県内には105のような壺以外にも頸部が直立気味に短く立ち上がるものや短く外反する口縁部に卵形の胴部をもつ壺が存在しているが、これらの位置づけについては今後の課題としたい。
- (24) 「雀居遺跡3」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第407集』 福岡市教育委員会 1995年
- (25) 沈奉謹「陝川鳳溪里遺蹟」『古蹟調査報告書第十五冊』 東亞大學校博物館 1989年
- (26) 「大也里住居址II」『東義大學校博物館學術叢書3』 東義大學校博物館 1989年
- (27) 「松菊里I」『國立博物館古蹟調査報告第十一冊』 國立中央博物館 1978年
- (28) 李健茂「韓国無文土器の器種と編年」『日韓交渉の考古学 (弥生時代編)』 1991年
- (29) 現在までに日本国内では、縄文時代晩期の「丹塗り」と黒班を施した土器が以下の三遺跡で出土している。大淵遺跡(愛媛県)の壺、口酒井遺跡(兵庫縣)の浅鉢、船橋遺跡(大阪府)の浅鉢でこれらについては松山市考古館で開催された「平成7年度特別展 瀬戸内の初期農耕—農耕文化の伝播と受容—」において実見することができた。
- (30) 「丹塗り磨研」壺、「丹塗り磨研」鉢については、おもに以下に記す諸氏に実見していただき、貴重なご教示をいただいた。記して深く感謝いたします。小田富士雄氏、片岡宏二氏、後藤直氏、高橋護氏、武末純一氏、田崎博之氏、中園聡氏、西谷正氏、橋口達也氏、吉留秀敏氏。

第3節 弥生時代前期の土器について

1. はじめに

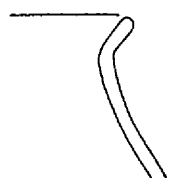
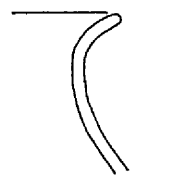
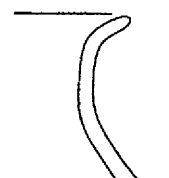
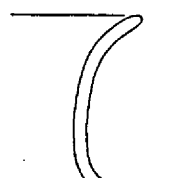
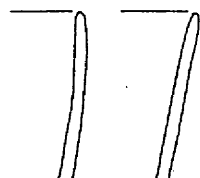
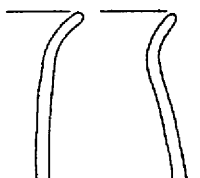
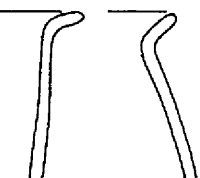
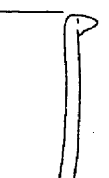
岡山県下における弥生時代前期土器の編年研究は先学諸氏によって精力的にすすめられており、細部に若干の違いがあるものの、段の盛行、平行沈線とその多条化、貼付突帯の出現と盛行、口縁端部に突帯を貼り付けた甕の出現などに型式学的な前後関係を与える方向で一致をみている。一方、従来の編年の基準となった資料は、包含層や河道から出土していたり全体が公表されていないなど質的な制約が多く、発掘調査例も少ないこともあって、裏付けとなる具体的資料に乏しいものであったことは否めない。南溝手⁽²⁾・窪木遺跡では前期全般にわたる集落の調査が実施され、出土した土器は包含層出土を合わせると図化し得たものだけでも1000点以上にのぼり、質量共に豊富な資料を得ることができた。今回はその成果をもとに従来の編年の裏付けをはかり、具体的な様相を明かにしていきたい。

2. 編年の方法

各時期を通してある程度の量が出土している壺および甕の変化を追うが、その多くが細片で全体の形態を復元できるものが少ないことから、両者の口縁形態および頸部文様を分類の基準とした。特に、竪穴住居や土壙および時期幅のあまりないと考えられる溝から出土した一括性の高い資料を極力対象として、一定期間内における壺と甕のバリエーションをみていきたい。一方、実見できる資料も少なく、南溝手・窪木遺跡の資料も磨滅が激しかったので、個々の調整や手法などの細かな観察は行えなかった。また、文中にある文様の構成比率は、各時期の代表にあげた遺跡・遺構出土土器の主に報告書に掲載された個体から算出していることを予め断っておきたい。ここで出された比率は参考程度のものであるが、概ね各時期の傾向を反映していると思われる。

(1) 口縁形態の分類 (第5表)

壺はA：頸部から直接短く屈曲するもの、B：屈曲した口縁部が外反してのびるもの、C：直線的な頸部が形成されたもの、D：頸部がさらに長くのびたものの4類に、甕はA：直線的に立ち上がるもの、B：如意状を呈するもの、C：直角近く折れ曲がるもの、D：口縁端部に断面三角形の突帯を貼り付けたもの4類に分類する。

	A	B	C	D
壺				
甕				

第5表 壺及び甕口縁形態分類表

(2) 文様の分類

段には、接合部のはみだしをそのまま残した段と、接合部のはみだしの下部にナデを加えたり、磨き低めるなどして形成された段、接合部に関係なく器壁を削り落とす、もしくは磨くことによって下部を相対的に低めた段がある。しかし後2者については、結果として器面に残る形態は同様であり、判別できない場合が多くあった。そこで前者を段a、後2者をまとめて段bとした。段bには沈線の意匠を持つものがあり、段と沈線の区別のつかない場合がある。突帯は佐原真氏の設定に準じ、削出突帯と貼付突帯に分け、その幅の広さに関係なく上面にヘラ描沈線を加えてないものをI種、沈線を加えたものをII種とし、さらに少条と多条とした。

(3) 時期区分 (第6表)

岡山県では3期もしくは4期に大別する場合が多いが、いずれの場合も段の盛行と衰退、平行沈線文の成立と多条化、削出突帯および貼付突帯の出現、甕口縁の貼付突帯の成立などを画期として設定されている。この方向性は南溝手・窪木遺跡でも追認されており、本文中では壺や甕に段が多用される時期を前葉、壺に削出突帯が用いられ、甕の胴部に沈線が数条施された時期を中葉、貼付突帯と甕の多条沈線出現以降を後葉として3区分してきた。この中では沈線の条数を細かく規定せず、削出突帯I種とII種を同列に扱っていたが、高尾遺跡⁽³⁾では段や沈線1~2条施した一群が第二貝層直下から、削出突帯II種少条の壺と沈線を3条施した甕が「黒色の腐植土よりなる間層」を挟んだ第三貝層から出土しており、沈線2条までと沈線3条が層位的にも分離可能で、2期に区分することができると考えた。そこで南溝手・窪木遺跡出土資料を中心として、前葉をI期、中葉をII・III期、後葉をIV期として大きく4期に区分し、県下出土資料の再編を試みた。

南溝手・窪木遺跡			高橋 護 (1980)	藤田憲司 (1982)	高畑知功 (1992)	正岡陸夫 (1992)	平井 勝 (1992・1995)	
前葉	I a	(南)土70・79 (窪)住2~4・土29	I a	前期前半 a	I-1	I-1	I	津島 I式
	I b	(南)土80・90						津島 II式
中葉	II a	(窪)土30	I b	前期前半 b	I-2	I-2	II	
	II b	(南)住1・溝3・溝1						
	III	(南)土65・T24内住 居状遺構	I c	前期後半 a	I-2	I-3	III	
後葉	IV a	(南)河道3下層	II a	前期後半 b	I-3	I-4	IV	
	IV b	(南)溝125・140	II b					

(南)：南溝手遺跡、(窪)：窪木遺跡、土：土壌、住：竪穴住居

第6表 弥生時代前期編年対比表

4. 編年試案

I期は津島遺跡南池地点出土資料をもって設定された時期であるが、この資料は包含層から出土しており、複数型式にわたる可能性が高橋護氏や藤田憲司氏によって従来から指摘されていた。近年、平井勝氏によって津島遺跡南池地点出土土器に再検討が加えられ、型式学的見地から津島I式とII式への細分が提示されたが、窪木遺跡⁽⁴⁾において沈線文を全く含まない甕で構成された竪穴住居が調査さ

れ、また南溝手遺跡における土壙79と土壙80の切り合いから1条の沈線を伴う一群が無文および段で構成される一群に後出する事が立証された。そこでI期を、甕が無文および段のみで構成されるIa期と段が主体であるが沈線1条が少量伴うIb期に細分することとした。

Ia期には南溝手遺跡土壙34・79、窪木遺跡竪穴住居2~4、土壙29⁽⁵⁾があげられる。竪穴住居2では比較的多くの土器が出土しているが、壺と甕の構成比は壺：甕=3：4で甕が若干多い。また高杯の脚柱部らしき241も出土しているが、現在確認される中では最古の資料である。壺は無文もしくは段で構成されており、段はすべてb類である。竪穴住居2から出土した完形の壺190には頸部段の下にも3条の平行沈線が巡らされている。これは頸部から胴部にかけて平行線と重弧文を組み合わせたヘラ描文様を施した特殊な壺で、段の下の沈線は頸部文様というよりは胴部文様の一部と考えている。肩部には段と平行沈線を1~2条巡らしたものが多い。口縁形態はA・B類あるがA：Bはおおよそ1：6となり、B類の比率が高い。一方、津島遺跡南池地点ではA：Bが4：9とA類の比率が高く、1のような特に短く屈曲した口縁部形態の壺がみられる。このような口縁形態の壺は縄文時代晩期突帯文の影響を濃く残しているといえるが、南溝手・窪木遺跡にはみられず、ここに設定したIa期は沈線を含まないという点では津島I式に包括されるが、壺の口縁形態からは津島I式の中でも新しく位置付けられよう。甕は無文、段のほか突帯を有するものが一定量出土している。無文：段：突帯は2：1：1である。段にはa・b類があり、段の上に刻目を残すものがあるなど、壺と比べて古い要素を残しているように見受けられる。胴部に段や削出突帯状の隆起帯、山形文を配したものもみられる。削出突帯状の隆起帯は337では胴部中位に巡らされており、段と同じく胴部屈曲部の刻目突帯から変化した可能性が考えられる。同様の隆起帯を有する壺肩部片が窪木遺跡竪穴住居2・3からも出土している。甕の口縁形態はA・B類のほか、C類も認められる。胴部の屈曲した形態は認められず、甕においても津島遺跡南池地点の最も古い様相は欠落している。さて、突帯を有する甕は瀬戸内周辺各地で出土しており、縄文時代晩期突帯文の系譜を引くものとして注目されている。ここで若干の説明を加えておく。断面形態からは縄文時代晩期突帯文と大差ないものも存在するが、粘土接合痕は全て外傾のうえ橙色を帯びた明るい色調を呈しており、容易に識別できる。また口縁端部に刻目を施したり、如意状口縁にも付されるなど弥生的要素も併せ持っている。口縁形態と突帯の位置、刻目の有無は第7表に示したとおりである。口縁形態ではA：Bが無文や段の通常の甕ではおおよそ1：4に対して3：4とA類が多く、口縁端に突帯を有するものにその傾向が強い。突帯の位置は様々で、縄文時代晩期ですでに存在していた形態のバリエーションを反映しているものとみられるが、刻目をもたないタイプに関しては口縁端に接するものが認められず、口縁形態もC類が存在するなど刻目を有するものより後出的な様相を含んでいる。これらの各要素がどのような相関関係にあり、どのように変化してい

刻目の有無	突帯の位置	A	B	C	計
刻目をもたない	口縁端に接する				0
	口縁端から下がる	9	8	2	19
	口縁端と下がった位置と2つ	1			1
突帯上に刻目を有する	口縁端に接する	5	1		6
	口縁端から下がる	12	3		15
突帯上および口縁端部に刻目を有する	口縁端に接する	1	4		5
	口縁端から下がる	5	28		33
	計	33	44	2	79

第7表 突帯を持つ甕の口縁形態と突帯の貼付位置

くのか現状では判断できなかったが、少なくとも通常の甕と同じようにⅠ期よりⅡ期の方が如意状口縁の割合が高くなる傾向が認められた。この甕がいつまで存続するのかという問題があるが、確実に遺構に伴うのはⅡ期までで、沢田遺跡溝⁸¹22出土資料もⅡ期に属す可能性が高い。また包含層出土資料は今回の編年に照らして考えるとおおむねⅡ期の様相を示しており、南溝手遺跡溝4・5も切り合い関係からⅢ期以降に位置付けてはいるが出土遺物の多くはⅠ～Ⅱ期の様相を示しているなど、突帯を有する甕はⅡ期までしか存続しないのではないかと現状では考えている⁸²。

Ⅰb期は南溝手遺跡土壙34・80・90をあてる。壺には1条の沈線の加えられた834と、沈線間を縦線で充填した文様帯を口縁部および肩部の段上に巡らした835がある。口縁形態は2点ともBである。甕にも沈線1条が出現するが、全体の中での比率は少ない。土壙80では5個体中、土壙90では8個体中で1点ずつのみである。段は接合部を利用したb類のみであるが、比較的強く、沈線状を呈しているものが認められる。口縁形態はBが主体で一部Cも認められる。817は口縁下の段の上下を削り出した隆起帯がみられるが、337の胴部の隆起帯と酷似しており、口縁部の段が胴部と同じ過程で変化して成立したと考えられる。壺の口縁部や肩部の段の中にも、その上下を強くなでたり削り出すことによつて隆起したものが認められ、この技法が削出突帯の出現に関わるものとして注目される。

Ⅱ期は沈線を1～2条件う時期で、南溝手遺跡や百間川沢田遺跡（以下、他の百間川遺跡群の遺跡名は「百間川」を省略して呼称する。）の主体となる時期と考えられるが、これらには沈線1条が主体となる一群と沈線2条が主体となる一群が認められた。南溝手遺跡ではⅠa期の土壙79とⅠb期の土壙80と沈線2条の甕を含む溝3の切り合い関係から段→沈線1条→沈線2条への段階的な変化を追うことができ、前者をⅡa期、後者をⅡb期に細別することとした。

Ⅱa期には高尾遺跡第二貝層直下の一群および沢田遺跡高縄手A調査区土壙29があげられる。壺は高尾遺跡の3点しか現状ではあげられないが、無文、段、沈線1条からなり、バリエーションはⅠb期と変わらないようである。しかし、口縁部が若干外方へのびた新しい形態へと変化しており、後出的な要素を認めることができる。甕も無文、段、沈線1条が主体であるが、高尾遺跡および沢田遺跡土壙29共に1点ずつ沈線2条が出土している。無文：段：沈線1条：沈線2条は9：4：3：1で、沈線1条までが9割以上を占める。高尾遺跡の山形文を描いた甕の頸部の沈線も1条である。口縁形態はBおよびCで、Bの方が多い。

Ⅱb期は沢田遺跡高縄手A調査区堅穴住居8、土壙33・38⁸³、四元調査区土器溜り16、南溝手遺跡溝1・3があげられる。壺は無文、段、沈線のほか削出突帯Ⅰ種がみられる。Ⅰa期の窪木遺跡土壙29を切る土壙30からも無文の甕と共に幅の狭い低い削出突帯Ⅰ種の壺が出土しており、高尾遺跡出土の壺にも削出突帯らしき隆起が認められることなどから、Ⅱa期の段階で削出突帯が成立していた可能性も考えられる。段はb類で、下部が沈線状を呈するものが多い。沈線は2条が主体で、肩部の沈線も2条以上になっている。口縁形態はBに分類されるが、口縁部の開きが大きく若干頸部が伸び気味になっている。南溝手遺跡柱穴20から単独で出土した871は頸部と肩部に沈線を2条巡らしており、当期に属する可能性が高い。甕も沈線2条が主体となり、山形文の上下に横走る沈線も2条になっている。沈線2条の中には沈線化した段の上方に沈線を加えたものや上側の沈線は断面U字だが下側は削り出した段を意識したような断面∟形のもがみられ、沈線2条の成立を考える上で興味深い資料である⁸⁴。無文：段：沈線1条：沈線2条は壺では6：3：3：5、甕では7：2：2：12となり、壺・甕共に全体の中で沈線を有するものの比率が高く、段が減少する傾向にある。沈線3条がわずかにみられる

が、壺では約1割、甕では5%にも満たず、例外的な存在といえよう。また、沈線間を円形刺突で充填したものが出現する。この文様帯は壺の頸部や肩部にも認められるが、I期にみられた段上の刻みがさらに形骸化したものと考えられる。655は段の上位に沈線を2条巡らし、下段の沈線と段の間に刺突を施している。口縁形態は南溝手遺跡溝3にA類が1点あるほかはB・C類で占められるが、突帯を有する甕に限ってはAに分類される直線的なタイプや内湾するタイプが半数近く存在している。

III期は高尾遺跡第三貝層出土の削出突帯II種少条の壺と沈線3条の甕の組み合わせをもって設定しており、南溝手遺跡T24内の竪穴住居と考えられる遺構や土壌⁶⁵、原尾島遺跡4 P30・土壌¹⁰⁹、沢田遺跡高縄手A区土壌⁴¹、畑中遺跡土壌⁶⁹などがあげられる。溝や河道の資料で若干の時期幅があると思われるが、南溝手遺跡の河道1や沢田遺跡溝⁶⁹・70、当麻遺跡溝²、津島岡大遺跡¹⁰~12層、川入遺跡法万寺区包含層⁶⁹なども当期の範疇でとらえられよう。壺では削出突帯II種が出現し、頸部や肩部に沈線を3条巡らしたものが多くなる。また当麻遺跡溝²では貼付突帯の壺が出土しているが、この貼付突帯は断面カマボコ状の幅の狭く低い外見上では削出突帯と変わらないもので、口縁形態もIV期以降の壺とは明らかに異なっている。溝という性格上混入の可能性もあるが、IV期以降の壺とは考えられず、III期の壺と考え、貼付突帯の初現ととらえている。従来からの無文や削出突帯I種もあるが、畑中遺跡から出土した削出突帯I種はII期にみられた断面カマボコ状の細いものと比べて、幅の広い帯状のものに変化している。削出突帯II種や肩部の沈線には4条以上のものも認められる。これら文様帯の拡大に呼応して頸部が長く立ち上がりを見せるようになり、口縁形態ではC類がB類より多くなり、D類も出現する。甕は溝や河道の資料を除くと沈線3条が約7割をこえ、主体を占めるようになる。段は南溝手遺跡T24内の2点のみで例外的な存在となっている。また段の種類もb類の中でも接合部と関係なく削り出された段と思われ、段本来の意味を失った文様の要素が強くなっている。口縁形態はB・C類で、B:Cはおおよそ2:1となり、C類の占める割合が高くなる。原尾島遺跡4 P30と畑中遺跡土壌の甕には沈線4条が1点あり、また原尾島遺跡4 P30は壺の貼付突帯片も出土しており、当期の中でも新しい様相が認められる。理論的には貼付突帯と沈線4条を含まない一群と含む一群とに細分される可能性があるが、その他の要素と合わせて具体的に検討できる資料が少ないので、今回はその可能性を指摘するにとどめ、今後の資料の蓄積を待ちたい。

IV期は貼付突帯の盛行や沈線の多条化、甕の口縁に突帯を貼り付けた「逆L字口縁」が出現する時期で、門田貝塚S T6・12のS D03⁶⁹や南溝手遺跡溝¹²⁵・140・144・148、河道3、沢田遺跡横田調査区や原尾島遺跡丸田調査区⁶⁹の土壌・溝・河道の多くが当期に含まれる。しかし、南溝手遺跡河道3下層では甕口縁の貼付突帯がみられず、沈線も5条前後が多く、10条を超えるものはごくわずかである。また、従来門田下層式と呼ばれてきた一群と、本稿のIII期の様相にはギャップが感じられ、直接連続するとは考えにくい。河道3下層の一群は両者の中間的様相を示すものであり、IV期を河道3下層とそれ以外の2期に分け、前者をIV a期、後者をIV b期とした。

南溝手遺跡河道3はNC1区の北東隅と北西隅で検出されている。河道の堆積層のうち下層とするのは、東側が断面図第49図7~9層、第50図11~13層、西側が第155図4・5層、第156図12~18層で、東側から出土した土器が第157図および第161図2734~2738・2744・2745、西側の第155図に対応するのが第169~171図、第156図に対応するのが第166図となっている。これらの層の上位にも前期後葉の遺物が含まれているが第162・168・172図にみられるような中期前葉の遺物と混在していた。第157図は東側の当期の堆積層のうち最も下位から出土している。壺には無文、沈線2条、5条、9条、貼付突

帯1条が各1点、削出突帯I種2点、II種5点、貼付突帯を複数巡らすものが3点みられ、沈線を多く巡らしたのものや、削出突帯II種多条の占める割合が増加している。貼付突帯は高さのあるしっかりしたもので、複数巡らしたのも認められる。口縁形態は頸部の長く伸びたD類が6割をこえ、口縁は外方に開きを見せる。甕は沈線2条1点、3条5点、4条9点、5条以上が11点で従来から指摘されていたように沈線の多条化と文様帯の拡大が認められる。胴部中位の沈線数も増加している。一方、鉢は段b類と沈線2条で構成されており、鉢に関して言えば古い要素を残すようである。口縁形態はB・Cのみであるがその比率は2：3となり、III期と逆転する。特に、4条以上のものにC類が多いようである。出土点数が少ないので対象から外しているが、南溝手遺跡溝144・147も当期に属する可能性がある。

IVb期は南溝手遺跡では溝が数条検出されているのみであるので、主に原尾島遺跡出土資料からその様相をみていく。壺では頸部および胴部の沈線や貼付突帯の数がさらに多くなる。貼付突帯は口縁内面や胴部全体にも多用されている。頸部に1条だけ突帯を貼り付く場合は、突出度の高い突帯で、突帯上の刻みも2722にみられる甕の口縁部の刻みに似たものから2796のような鎖状に変化すると考えられる。またIVa期まではかつて段のあった肩部や胴部上方に施文されていた沈線などが胴部最大径付近へ移動しており、段の影響が完全に払拭されたことがうかがえる。口縁形態はD類がほとんどで、長く伸びた頸部からラップ状に大きく開いた口縁形態や、全体に胴部の張りが無い卵形の中期的なプロポーションがみられる。甕も壺と同様の傾向を示し、沈線が10条をこえるものが半数以上となる。IV期になると、沈線の数に今まで見られたような規則性がなく、一定の範囲を沈線で充填することが目的で、「〇条引かねばならない」といった規制がないようである。沈線の多条化に伴って口縁下と胴部の文様帯の間隔が狭くなり、そこに幅の狭い山形文や刺突列点文、波状文が施されるものがみられる。沈線が3条以下のものも残っているが、沈線が太くなったり、沈線の間隔が広いものへ変化している。口縁形態はC類の中でも端部を折り曲げて水平近くのぼしたのものや、突帯を貼り付けたD類が出現している。全体のプロポーションも胴部の張りのない底部へ急激にすぼまる形態に変化する。このようないわゆる「瀬戸内甕」が当期に特徴的に存在する。この瀬戸内甕の成立に関しては縄文時代晩期突帯文の系譜に求められているが、前述したように当地域では突帯を有する甕の系譜はII期で途絶えており、現状ではやはり他地域の影響を受けて成立したと考えるのが妥当⁸⁰である。

5. 問題点と今後の課題

以上、壺および甕の文様や口縁形態の変化を通して従来の編年の再編を試みた。その結果、表4に示したように段、沈線、各種突帯の変化の一端が明らかとなり、漠然としか捉えられていなかった沈線の動きが、1条から2条、2条から3条、さらに増加して多条への段階的な変化が明確になり、沈線数の変化によってII～III期の細別を設定することができた。また、この沈線の変化と削出突帯の動きは連動しており、密接に関係していると考えられる⁸⁰。一方、竪穴住居や土壇、溝から出土した土器は廃棄の結果を表すものであって、必ずしも同時期に製作されたとは限らず、個々の文様や形態の変化の始まりと終わりに明確に線を引くことは不可能で、数的な処理だけでは割り切れないのが現状である。今回は特にその点に注意して、特徴のわかる壺と甕が複数個体出土した遺構を中心に編年を試みたが、このような条件のそろう資料は少なく、不透明な部分が多く残った。特に削出突帯や貼付突帯の出現に関しては現時点で結論を出すのは早急であろうし、突帯を有する甕の継続期間や、IV期の細分の是非などさらに資料の蓄積をまたねば解決できない問題が多く残った。また今回は筆者の力量

	壺	甕
Ia	 K 195, M 765, K 193, K 192, K 191, TS 6, TS 1, TS 19	 M 770, K 247, K 250, M 811, K 248, M 812, K 244, K 324, K 264, K 297, K
Ib	 M 834, M 795, M 835, TS 1, TS 2	 M 816, M 842, M 838, M 819, M 822, M 820, M 841, TS 13, M 817, M 801
IIa	 TK, TK, TK, S 621	 TK, S 625, TK, S 622, S 623, TK, TK
IIb	 S 633, M 892, M 893, M 895, Y 2230, Y 2233, M 825, Y 2229, M 871, S 114, K 326, Y 2235	 M 910, M 749, S 677, M 826, S 637, S 641, M 747, M 913, M 914, S 642, S 655, M 748, S 638, M 915, M 917, M 918, M 919
III	 TO 7, HT 3, S 763, TM 1, TM 7, H 2726, TM 8, S 771, H 496, S 770, M 792	 S 800, M 25, HT 13, M 21, M 793, S 787, M 23, HT 9, H 507, HT 8, HT 7, H 511, M 1126, H 512, S 230, TM 12
IVa	 M 2721, M 2736, M 2735, M 2722, M 2783, M 2780, M 2738, M 2723	 M 2730, M 2797, M 2731, M 2796, M 2744, M 2801
IVb	 H 1123, SY 25, KD 201, M 2669, M 2635, H 1124, SY 7, KD 218, KD 217, H 1125, KD 218	 H 1228, H 1226, M 2701, KD 231, SY 46, H 1230, H 1238, M 2640, M 2672, H 1246, M 2675, KD 221

K : 窪木遺跡
 TS : 津島遺跡
 M : 南溝手遺跡
 TK : 高尾遺跡
 S : 沢田遺跡高縄手A調査区
 SY : 沢田遺跡横田調査区
 H : 原尾島遺跡
 HT : 畑中遺跡
 TM : 当麻遺跡
 TO : 津島岡大遺跡
 KD : 門田貝塚

第8表 弥生時代前期土器(壺・甕)編年表(Y 7=1/20、他は1/10)

不足および時間的制約から県内の出土資料のみを対象とし、まず県内の様相を明らかにすることに努めたが、今後は周辺地域での様相を通して、これらの問題を検証していくと共に、今回設定した基準の有効性や他地域との併行関係なども考えて行かねばならない。

	壺				甕					
	段	沈線 1~3条 4条以上	削出突帯 I種 II種	貼付突帯 少条 多条	段	沈線 1条 2条 3条 4~6条 多	口縁形態 A B・C D			突帯を有する
I _a	■				■					■
I _b		■				■				
II _a			■			■				
II _b			■	■		■				■
III	■	■	■	■	■	■	■			
IV _a		■	■	■		■	■			
IV _b						■	■			■

第9表 壺及び甕の文様消長概念表

註

- (1a) 高橋護「入門講座—山陽1」『考古学ジャーナルNo.173』(1980)
- (1b) 藤田憲司「中部瀬戸内の前期弥生土器の様相」『倉敷考古館研究集報』第17号(1982)
- (1c) 網本善光「稲作受容期における中部瀬戸内地域の遺跡の動向」『比較考古学試論』(1987)
- (1d) 高畑知功「備前地域」『弥生土器の様式と編年』(1992)
- (1e) 正岡陸夫「備中地域」『弥生土器の様式と編年』(1992)
- (1f) 秋山浩三「弥生前期土器」『吉備の考古学的研究』上巻(1992)
- (1g) 平井勝「弥生時代への移行」『吉備の考古学的研究』上巻(1992)
- (1h) 平井勝「岡山平野における遠賀川系土器の出現」『古代吉備』第17集(1995)
- (2) 「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100』岡山県教育委員会(1995)
「南溝手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107』岡山県教育委員会(1996)
- (3) 鎌木義昌・高橋護「岡山県高尾遺跡」『日本農耕文化の生成』(1961)
- (4) 前掲(1h)
- (5) 正岡陸夫氏は西江遺跡出土資料を備中I-1様式として、最古段階に位置付けているが、包含層出土であり、今回の編年基準となる口縁部の資料が壺・甕ともに1点づつしかないので今回は対象から外している。
「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告20』岡山県教育委員会(1977)
- (6) 「弥生時代早期」という用語が提唱されているが、本報告書では沢田式の段階も含めて縄文時代晩期後葉と呼称している。
- (7a) 高知県田村遺跡や香川県下川津遺跡、同大浦浜遺跡、愛媛県朝美澤遺跡など
- (7b) 松山平野の様相については梅木謙一氏の論考に詳しく分析されている。
梅木謙一「西部瀬戸内地方の弥生時代前期土器」『牟田裕二君追悼論集』(1994)
また、梅木謙一氏からは貴重な報告書を送付して下さり有益な教示を得ました。記して感謝いたします。
- (8) 『百間川沢田(市道)遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会(1992)
- (9) 前掲(7b)によると松山平野においては、口縁部に突帯を貼り付ける「甕B」が前期全般を通して継続しており、その系譜の中から「瀬戸内甕」が出現すると考えている。
- (10) 「百間川沢田遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59』岡山県教育委員会(1985)
「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84』岡山県教育委員会(1993)
- (11) 土壙38には報告書に掲載された以外に沈線2条の甕片があるので当期に含めた。
- (12) 沈線2条の成立過程について前掲(1h)において平井勝氏が削出突帯の上下端区画線から生じるとしているが、沈線化した段に1条沈線を加えて成立した過程も考えられ、削出突帯の成立と沈線2条が同様の原

理により同時に成立した可能性も考えられる。

- (13) 「百間川原尾島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39』岡山県教育委員会(1980)
 「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56』岡山県教育委員会(1984)
- (14) 「畑中遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告22』(1992)
- (15) 「百間川当麻遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52』岡山県教育委員会(1982)
- (16) 「津島岡大遺跡4—第5次調査—」岡山大学埋蔵文化財調査研究センター(1994)
- (17) 「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16』岡山県教育委員会(1977)
- (18) 近年東大阪市若江北遺跡・植附遺跡で、本稿の編年でいえばII a期以前に遡りうる貼付突帯を持つ壺が出土している。形態から長原式土器の影響が想定されるが、当地域は長原式の分布圏ではなく、当麻遺跡溝2にみられる貼付突帯は削出突帯を模倣することから成立したと考えられ、東大阪市で出土した壺とは系譜が異なるのではないかと考えている。また、高知県田村遺跡や愛媛県朝美澤遺跡などからも頸部に刻目のある貼付突帯を付した壺が出土しているが、これらについても今後の課題としたい。
 『田村遺跡群』第1分冊 高知県教育委員会(1986)
 「朝美澤遺跡」『朝美澤・辻町遺跡』(岡山県生涯学習振興財団埋蔵文化財センター(1992)
 資料の実見に際して、東大阪市教育委員会芋本隆裕氏、東大阪市文化財協会福永信雄氏、大阪府教育委員会岩瀬透氏をはじめ多くの方々の協力を賜った。記して感謝いたします。
- (19) 「門田貝塚」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告55』岡山県教育委員会(1983)
- (20) 前掲(10)と同じ
- (21) 前掲(12)および「百間川原尾島遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106』岡山県教育委員会(1996)
- (22) 前掲(9)と同じ。
- (23) 前掲(1h)の中で、沈線の多条化について述べられているように、沈線の多条化と削出突帯I種からII種、II種少条から多条への変化が同一原理による可能性を肯定するものと考えている。

< I a期>

T S U : 南池地点 K191~193・195・244・247・248・250・264 : 竪穴住居2 K297 : 竪穴住居3
 M765・770 : 土壇34 M811・812 : 土壇79

< I b期>

T S U : 南池地点 M795・801 : 土壇70 M816・817・819・820・822 : 土壇80
 M834 : 835・838・841・842 : 土壇90

< II a期>

T K : 第二貝層 S 621~623・625 : 沢田2—土壇29

< II b期>

K 326 : 土壇30 M748・749 : 土壇91 M825・826 : 土壇81 M871 : 柱穴20
 M892・893・895・908・910・913~915・917~919 : 溝1 S 633・637・638・641・642 : 沢田2—土壇33
 S 655 : 沢田2—土壇38 S 677 : 沢田2—土壇42 S 114 : 沢田3 竪穴住居8
 Y : 2229・2230・2233・2235 : 沢田—土器溜り16

< III期>

T O 7 : 5次(11-W) H T 3・7~9・13 : 土壇一括 T M 1・7・8・12 : 溝2 T K : 第3貝層
 M21・25・23 : T24内竪穴住居状遺構 M792・793 : 土壇65 M1126 : 河道1
 S 230 : 沢田3—溝44 S 763・770・771・787・800 : 沢田2—溝70
 H496・507・511・512 : 原尾島1—左岸用水調査区4 P30 H2726 : 原尾島2—丸田調査区土壇109

< IV a期>

すべて南溝手遺跡河道3下層

< IV b期>

M2635・2640 : 溝125 M2669・2672 : 溝140 M2701 : 溝148 Y25 : 沢田2—土壇3
 Y46 : 沢田2—溝1 Y7 : 沢田3—弥生時代前期包含層 K D 201・217・221・231 : S T 12—S D 03
 H2796 : 原尾島2—丸田調査区河道3 H1123—1125 : 原尾島5—三ノ坪・横田調査区土壇59
 H1226・1228・1238・1246・1230 : 原尾島5—三ノ坪・横田調査区溝52

第4節 河道6出土の線刻絵画土器について

HW3区の河道6の堆積土中から弥生時代の線刻絵画土器が出土した。本文中において詳しくふれることができなかつたため、この節において報告しておきたい。

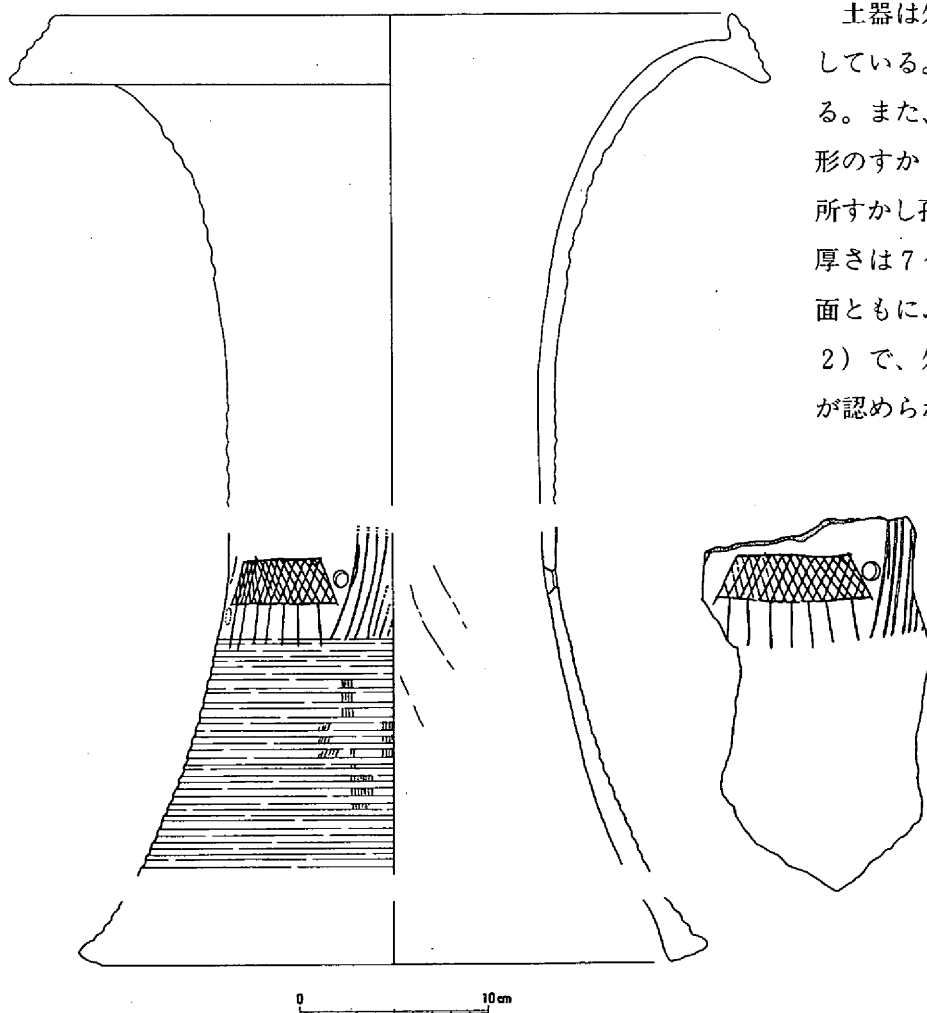
(1) 出土状況について

土器はHW3区の西半部において、北東から南西方向に検出できた弥生時代の河道の西岸近くの堆積土中から出土した(第279図)。出土層位は、第280図のA-A'断面の7層に対応する土層であった。この土層は、本来の河道内にすでに約1.2m程度土が堆積した状態の後に堆積した土層である。しかしながら、層位的には時期差が想定できるものの、この土層と下層から出土した土器は弥生時代中期後葉と後期前葉の土器で、土器型式からはいずれも後期前葉に堆積したものと考えられる。したがって土器は後期前葉に廃棄されたと考えている。

(2) 土器の残存状態と時期について

土器は約20×13cmの大きさの器台の下半分の破片である(第398図)⁽¹⁾。

図示したような破損部分のうち右辺上端部約7cmは調査中の破損で、その他は古い破損である。調査中の破損部分については全体の形状から幅1cm程度ではないかと推測している。



第398図 河道6出土絵画土器(1/4)

土器は外面に凹線が18本残存している。内面はナテ調整である。また、上半部に完存する円形のすかし孔が1個ともう一か所すかし孔の存在が推定できる。厚さは7～12mmで、色調は内外面ともにふい黄橙色(10Y R 7/2)で、外面には部分的に黒班が認められる。胎土は5mm前後

の大粒を含む長石や石英が比較的多く含まれている。こうしたことから土器は岡山県南部の器台の特徴を備えており、遺跡周辺で製作されたと考えてもよいと思われる。

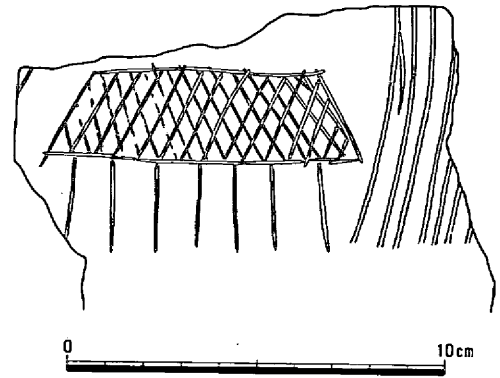
土器の製作時期については、形態や色調、胎土の特

徴から弥生時代中期後葉と考えておきたい。⁽²⁾

(3) 土器に描かれた絵画について

絵画は破片土器の上半部に描かれていた。想定される器台の全体像から考えると、凹線文の間に設けられた中央を巡る無文帯に描かれていると推測でき、最も目立つ部分と言える（第398図）。

絵画は三つ確認できる（第399図）。全体の形のわかるのは中央のもののみである。これは先端が丸味をもった1mm弱の細い工具を用いて描かれている。描き順



第399図 土器絵画(1/2)

については線の切り合い関係を図示している。屋根の部分の左端は磨滅のために不明瞭である。

右端の絵画は中央のものとは異なる工具によって描かれている。工具は先端部の幅が1mm前後の半截竹管状のものと推測できる。ただし左端の二本の線の間にかかれた長さ約2cmの線の工具は異なっている。中央の絵画の工具に似ているが、意図的な線でない可能性も考えられる。

左端の絵画は1本の線が描かれているのみである。工具は中央のものと同じであろう。

(4) 絵画の解釈について

中央の絵画は建物と考えられる。屋根は斜格子で表現されており、その形状から寄棟の屋根と推測できる。柱は1本の直線で表現されていると考えられ、7本確認できる。⁽³⁾ 壁があったかどうかは不明だが、あったとすれば真壁構造と考えられる。建物は平側から眺めたものと思われるため、桁行6間の建物が描かれていると考えられる。梁間については不明である。

軒までの柱の高さが全体の高さの約半分であることや梯子が描かれていないことから、この建物は高床ではなく平屋建築であると理解したい。⁽⁴⁾ 棟飾りは描かれていない。

この中央に描かれた建物については全体像がほぼ判明していること、および柱の数が多く大型の建物であることに大きな特徴があるといえよう。

右端の絵画については、僅かにカーブする線が斜め方向に、ほぼ並行するように7本描かれている。このような描き方は弥生時代の絵画土器には見あたらないので、何を表現しているかについては明確ではない。下端面が中央の建物と同じであることから、下端面を地面と考えれば、中央の建物よりも大きな建築物を表現しているのかもしれない。

左端の絵画は直線が1本残存しているのみである。中央の建物と同じ工具を用いていることや線の方向から、想像をたくましくするならば、切妻屋根の高床倉庫の屋根の右端が描かれているのかもしれない。

建物が描かれた弥生時代の土器は全国で50例近く知られている。一つの建物の絵画の破片が出土するケースが多いが、建物の絵画は、奈良県唐古・鍵遺跡や鳥取県稲吉角田遺跡、兵庫県養久山・前池遺跡の例のように鹿や人物、舟など複数の絵画とともに描かれている例が存在している。こうした同一個体に描かれた複数の絵画については、弥生時代の農耕儀礼を描いたものと解釈されており、建物については、収穫した稲を納めた高床倉庫（神聖な稲倉）や祭議用の神聖な建物と理解されている。⁽⁵⁾

証明は難しいが、稲吉角田遺跡や養久山・前池遺跡の例から、土器に建物が描かれるのは、複数に、⁽⁶⁾ かつ他の絵画と共に農耕祭祀や儀礼を表現するために、さらにはそうした場所と期間において使用されるために描くのが目的であったのではなかろうか。

窪木遺跡の場合も中央の寄棟の建物は複数の絵画の一つとして描かれている。唐古・鍵遺跡や養久山・前池遺跡の寄棟建物のように棟飾りは表現されていないものの、桁行6間という大型の建物であることから、祭式や儀礼に使用される建物と考えるとよいのではなかろうか。⁽⁷⁾

ところで、近年では池上曾根遺跡で確認された弥生時代中期後葉の棟持柱をもつ桁行10間の高床倉庫⁽⁸⁾など弥生時代の大型の掘立柱建物の遺構が相次いで検出されている。窪木遺跡の土器に描かれたような桁行6間以上の平屋構造と考えると良い掘立柱建物についても、弥生時代中期に限っていえば福岡県久保園遺跡⁽⁹⁾や那珂遺跡⁽¹⁰⁾、佐賀県柚比本村遺跡において検出されるようになっている。

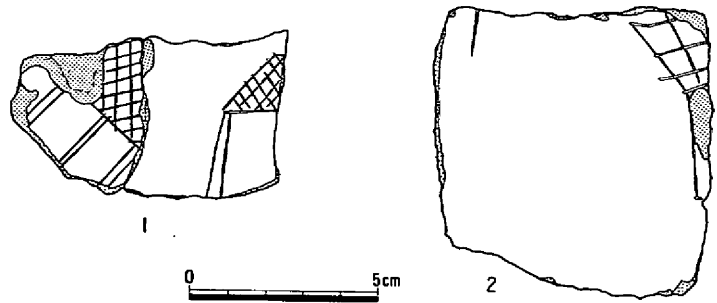
窪木遺跡周辺、および岡山県南部地域においては桁行6間あるいはそれ以上の弥生時代の掘立柱建物は発見されていないものの、窪木遺跡の絵画土器に描かれた建物は、他地域での検出例から実在の建物を描いたものと考えてよいであろう。(平井)

註

- (1) 第398図の復元図の径・傾きについては多少の誤差は考えられるものの、器高50cm前後の大形品である可能性が高い。これまでに出土している絵画土器の器種については大和などの畿内をはじめとして壺が多いといわれている。器台に描かれた例としては岡山県内では天瀬遺跡の竜?や足守川加茂A遺跡の人面蛇体獣、宮山遺跡の人物がある。岡山県南部地域は他地域に比べて器台そのものが祭式や儀式に使用する風習があったためであろうか。
- (2) 1992年6月の報道機関への発表の時点では、土器の時期は弥生時代後期初頭と考えた。その理由は土器の色調が中期後葉のものに多い灰白色ではなかったこと、すかし孔が円形であること、共伴遺物に後期初頭のものが多かったことなどであった。しかしながら現在ではこれらの理由は後期初頭とするには十分とはいえないと考えている。岡山県南部では後期初頭の器台の様相が十分に把握されていないと考えるもの(現状では中期後葉に比べて器高が低く、器壁が厚く、橙色っぽい色調のものになると思っている)、今回の報告では中期後葉とする。
- (3) 柱については、1本を並行する2本の直線で表現している寄棟建物の例(岡山県雄町遺跡、奈良県中曾司遺跡、奈良県清水風遺跡など)や手前と奥側の柱を2本の直線で表現している高床倉庫の例(奈良県芝遺跡、1996年6月6日付毎日新聞記事)などがいくつか存在しているものの、窪木遺跡の場合は柱の間隔が広いことや奇数本であることなどから7本と考えている。
- (4) 屋根と軒までの柱の高さの関係が解る例は少ないが、寄棟の屋根構造をもつ建物に高床建築が存在することは、稲吉角田遺跡や奈良県唐古遺跡、新庄尾上遺跡で梯子が描かれていることから想定できる。ただしこれらの建物は特殊な建物で、稲吉角田遺跡の例は極端に柱が長く表現されており、物見櫓的な機能が想定されている。また唐古遺跡の例は屋根に棟飾りが描かれており、祭殿の可能性も指摘されている。新庄尾上遺跡の場合は、棟飾りや高床が表現されていることや同一個体に鳥装の人物が描かれていることから、祭祀か儀式に使用された高床建物の可能性が高いであろう。切妻の高床倉庫と考えられている絵画の場合は極端に柱が長い例はないが、梯子や高床が表現されている場合が多い。また弥生時代の土器に描かれた建物のすべてが、高床建築と考える意見もあるが、少なくとも窪木遺跡や中曾司遺跡の寄棟建物は平屋建築と考えたほうがよいのではなかろうか。
(長谷川一英「御津町新庄尾上遺跡出土の絵画土器」『古代吉備』第14集 1992年)
- (5) 春成秀爾「描かれた建物」『弥生時代の掘立柱建物一本編一』埋蔵文化財研究会 1991年
金関 恕「弥生土器絵画における家屋の表現」『国立歴史民俗博物館研究報告』7 1985年
宮本長二郎「唐古・鍵遺跡出土の建築画」『しにか』VOL.3/NO.12 1992年
岡山県新庄尾上遺跡出土の人物と高床倉庫の絵画も同一個体に描かれていると報告されている。
(長谷川一英「御津町新庄尾上遺跡出土の絵画土器」前掲註4)
- (6) 金関 恕「弥生土器絵画における家屋の表現」(前掲註5)
岸本道昭「絵画土器の復元と諸問題」『養久山・前池遺跡』龍野市教育委員会 1995年
全ての絵画は残存していないが、用途の異なる複数の建物が描かれていたと推定できる例は寄棟と切妻の建物の描かれた中曾司遺跡が知られている。また岡山県内の資料では、雄町遺跡の弥生時代中期後葉の例に2軒の寄棟建物が描かれており、左側は寄棟の平屋建物、右側は寄棟の高床建物と理解することもできる(第400図1)。また後期の例にも切妻の高床倉庫の左側に、柱とも考えられる1本の線が描かれており、複数の建物が描かれた可能性も考えられる(第400図2)。
- (7) 報道期間への発表の際には首長の居住建物や集落成員の共同作業場の可能性も考えていたが、現段階では

第4章 まとめ

本文中に述べているように、土器に建物が描かれるのは祭式や儀礼を表現するため、さらにはそうした場所と期間に用いられるためと考へて、祭式や儀礼に使用される建物と理解している。



第400図 雄町遺跡(岡山市)出土絵画土器(1/2)

- (8) 「特集 池上曾根遺跡の弥生遺跡と東アジア」『ヒストリア』第152号
- (9) 「席田遺跡群—久保園遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第91集 福岡市教育委員会 1983年
- (10) 「那珂遺跡4」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第290集 福岡市教育委員会 1992年

弥生土器に描かれた絵画については註に掲げた文献の他に以下の文献をおもに参照した。

- 1. 『特別展 弥生人のメッセージ 絵画と記号』 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 1986年
- 2. 「天理市庵寺町清水風遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1986年度 1987年
- 3. 藤田三郎「唐古・鍵遺跡の絵画土器」『弥生の神々—祭りの源流を探る—』 大阪府立弥生文化博物館 図録4 1992年
- 4. 『弥生の環濠都市と巨大神殿—池上曾根遺跡史跡指定20周年記念シンポジウム資料集』 池上曾根遺跡史跡指定20周年記念事業実行委員会 1996年

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	時期	絵画の種類	土器の器種	文 献
1	雄町遺跡	岡山市	竪穴住居	弥生中期後葉	寄棟建物2	壺	「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1972年
2	雄町遺跡	岡山市	包含層	弥生後期	切妻高床倉庫1+?1	壺	1の文献と同じ
3	下市瀬遺跡	真庭郡落合町	井戸	弥生後期末葉	人物1、渦巻き文1	高杯	「下市瀬遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』1973年
4	城遺跡	倉敷市	包含層	弥生中期後葉	舟1	壺	「倉敷市(児島)城遺跡発掘調査報告書」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告19』1977年
5	天瀬遺跡	岡山市		弥生後期	竜2以上	器台	出宮徳尚「竜を祭った遺跡」『月刊文化財187号』1979年
6	百間川原尾島遺跡	岡山市	井戸	弥生後期中葉	水鳥1	壺	「百間川原尾島遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56』1984年
7	津島遺跡	岡山市		弥生中期後葉	鹿1以上	高杯	「倉敷考古館—解説と周辺の歴史—」1987年
8	一倉遺跡	総社市	溝状遺構	弥生後期末葉	人面1	鉢	「一倉遺跡」『総社市史 考古資料編』1987年
9	鹿田遺跡	岡山市	井戸	弥生後期末葉	人面1+?	高杯	「鹿田遺跡1」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊』1988年
10	百間川米田遺跡	岡山市	井戸	弥生後期末葉	鹿1	鉢	「百間川米田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74』1989年
11	板井砂遺跡	総社市	土墳	弥生中期後葉	鹿1	壺	「板井砂遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告9』1991年
12	新庄尾上遺跡	御津郡御津町	竪穴住居	弥生中期後葉	鳥装人物1、寄棟高床建物1	壺	長谷川一英「御津町新庄尾上遺跡出土の絵画土器」『古代吉備第14集』1992年
13	宮山遺跡	総社市	採集	弥生後期	人物1	器台	河本 清「絵画土器、人形、鳥形スタンプ文土器」『吉備の考古学的研究 上』1992年
14	足守川加茂A遺跡	岡山市	包含層	弥生後期後葉	舟?+?	壺	「足守川加茂A遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』1995年
15	足守川加茂A遺跡	岡山市	竪穴住居	弥生後期末葉	人面蛇体獣1+鹿?	器台	14の文献と同じ
16	津寺遺跡	岡山市	溝	古墳初頭	舟2	壺	「津寺遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98』1995年
17	津寺・三本木遺跡	岡山市	土墳	弥生中期後葉	鹿2、犬1、鳥2	壺	「卑弥呼の動物ランド—よみがえった弥生犬—」『大阪府立弥生文化博物館図録12』1996年
18	南方遺跡	岡山市		弥生中期後葉	切妻高床倉庫1	分銅形土製品	17の文献と同じ
19	堀遺跡	総社市	包含層	弥生中期後葉	鹿1	壺	「光あざやかに吉備のくに総社—展示概要—」総社市埋蔵文化財学習の館 1996年
20	新本・横寺遺跡	総社市	土墳・包含層	弥生後期前葉?	竜?ほか	器台ほか	「光あざやかに吉備のくに総社—展示概要—」総社市埋蔵文化財学習の館 1996年 総社市教育委員会告示
21	中溝遺跡	岡山市	溝	弥生後期	?	壺	岡山県古代吉備文化財センター告示
22	窪木遺跡	総社市	旧河道	弥生中期後葉	寄棟建物1+?2	器台	「窪木遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告120』1997年
23	窪木遺跡	総社市	土器溜り	弥生後期前葉	?2	壺	22の文献と同じ

第10表 岡山県における線刻絵画土器一覧表(弥生時代~古墳時代初頭)

I 窪木遺跡のプラント・オパール分析

1. はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。この微化石は植物によりそれぞれ固有の形態的特徴を持っていることから、これを土壤中より検出してその組成や量を明らかにすることで過去の植生環境の復原に役立てることができる。プラント・オパール (植物珪酸体) 分析と呼ばれるこの方法は、とくに埋蔵水田跡の確認や探査において極めて有効であり、これまでに多くの実績をあげている。

ここでは、プラント・オパール分析を用いて、窪木遺跡における稲作跡の探査を試みた結果について報告する。

2. 試料

調査地点は、KO 2 区・H19 区・PU 1 区の 3 地点である。試料採取地点を第 1 図に示す。各地点の土層および試料採取箇所については、第 2 図に土層断面図と分析試料の採取箇所を示したので参照されたい。試料はいずれも遺跡の調査担当者によって採取され、当研究所に送付されたものである。

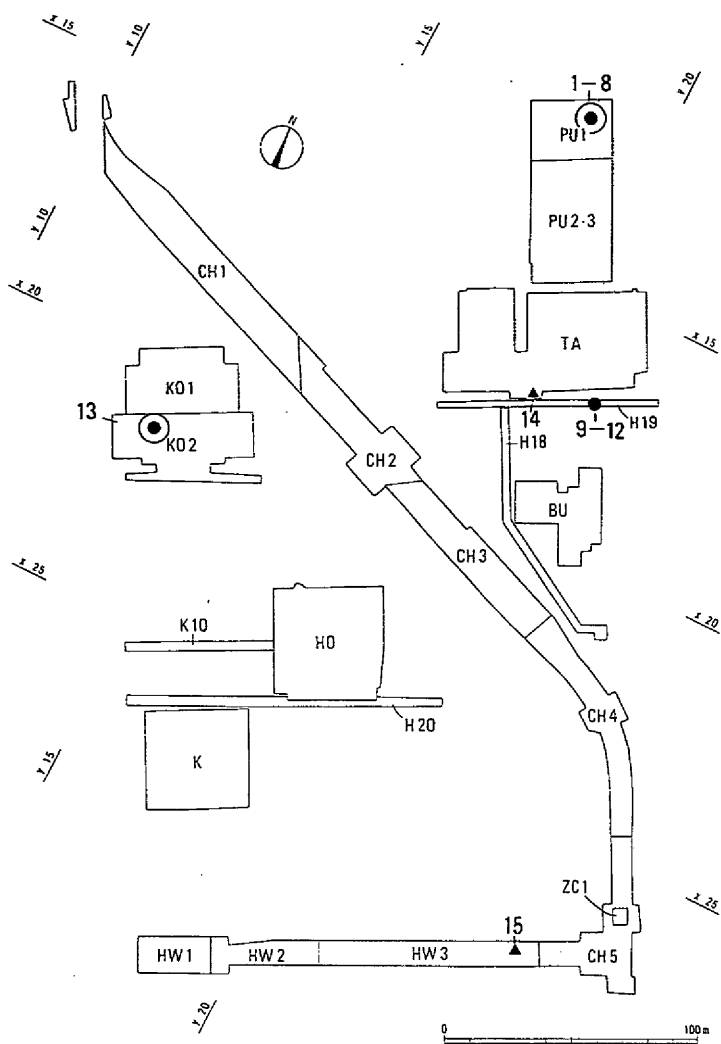
3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法 (藤原、1976)」をもとに次の手順で行った。

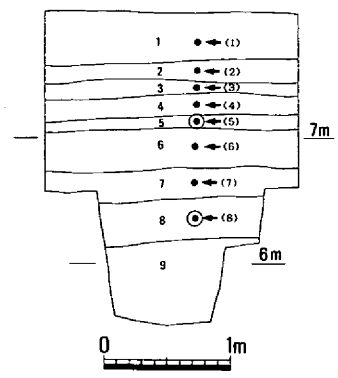
- 1) 試料土の絶乾 (105°C ・24時間)、仮比重測定
- 2) 試料土約 1 g を秤量、ガラスビーズ添加 (直径約 $40\mu\text{m}$ 、約 0.02 g)
※電子分析天秤により 1 万分の 1 g の精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散 (300W ・ 42kHz ・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子 ($20\mu\text{m}$ 以下) 除去、乾燥
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもに機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール (以下、プラント・オパールと略す) を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。なお、稲作跡の探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族、(ススキやチガヤなどが含まれる)、キビ族 (ヒエなどが含まれる) の主要な 5 分類群に限定した。計数は、ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。

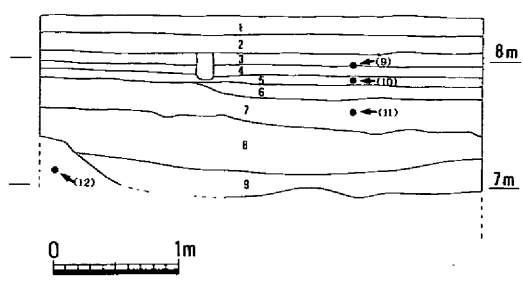
検鏡結果は、計数値を試料 1 g 中のプラント・オパール個数 (試料 1 g あたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパール) とガラスビーズの個数の比率を乗じて求める) に換算して示した。また、この値に試料の仮比重 (1.0 と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体 1 個あたりの植



第1図 窪木遺跡プラント・オパール、花粉分析鑑定試料採取地点 (二重丸は両方、黒丸印はプラント・オパールのみ、黒三角印は花粉分析のみ)

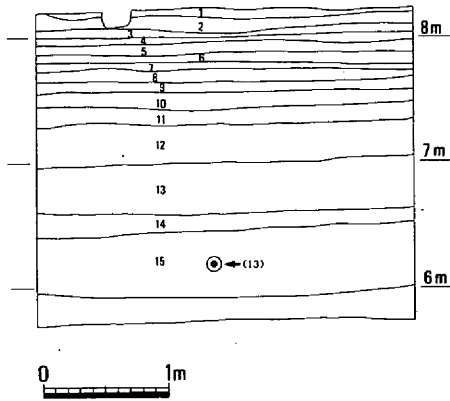


- PU1区
- 1…オリブ灰色粘質微砂
 - 2…灰色粘質微砂
 - 3…オリブ黒色粘質土
 - 4…灰色粘質土
 - 5…オリブ黒色粘質土
 - 6…暗黒色粘質土
 - 7…黒色粘質土
 - 8…灰黒色粘質土
 - 9…オリブ灰色砂質土

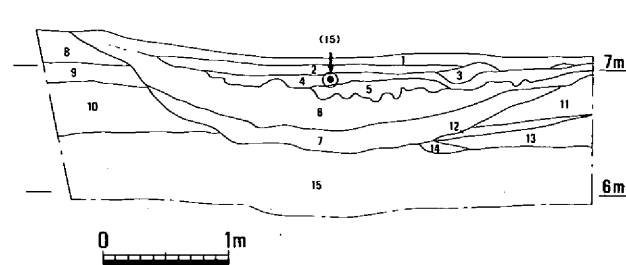


- H19区
- 1…灰褐色砂質微砂
 - 2…灰白色砂質微砂
 - 3…淡灰黄褐色砂質微砂
 - 4…灰白色粘質微砂
 - 5…暗灰茶褐色粘質微砂
 - 6…暗灰黒褐色粘質微砂
 - 7…灰褐色粘質微砂
 - 8…灰白色粘質微砂
 - 9…淡灰黒褐色粘質微砂

第2図 試料採取地点土層断面図(1)(括弧数值は試料番号; 1/60)

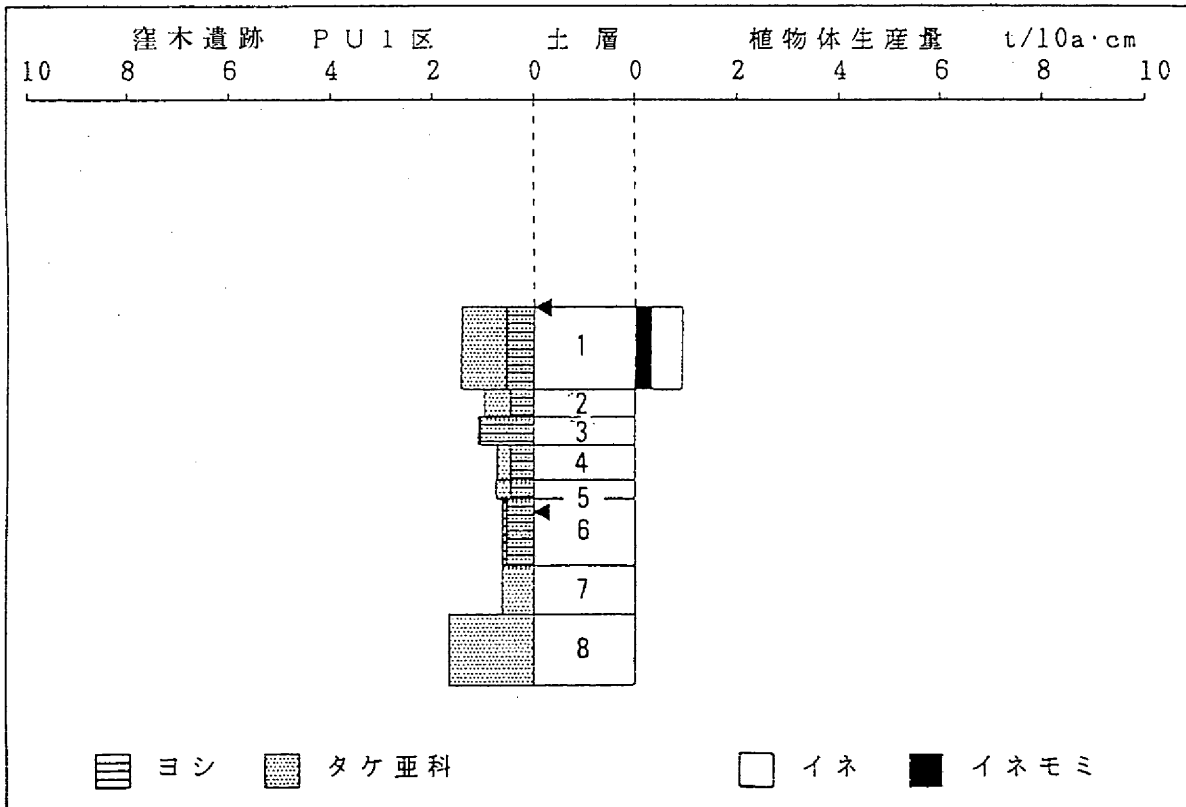


- KO2区
- | | |
|-----------------|---------------|
| 1…黒褐色・灰白色粘質微砂混層 | 10…暗灰黄色粘質微砂 |
| 2…黒褐色粘質微砂 | 11…灰色粘質微砂 |
| 3…暗灰黄色弱粘質微砂 | 12…オリーブ黒色粘質微砂 |
| 4…暗オリーブ褐色粘質微砂 | 13…黄褐色粘質微砂 |
| 5…黒褐色粘質微砂 | 14…オリーブ黒色粘質土 |
| 6…暗褐色粘質微砂 | 15…灰色粘質微砂 |
| 7…にぶい黄褐色弱粘質微砂 | |
| 8…暗褐色弱粘質微砂 | |
| 9…黄褐色弱粘質微砂 | |



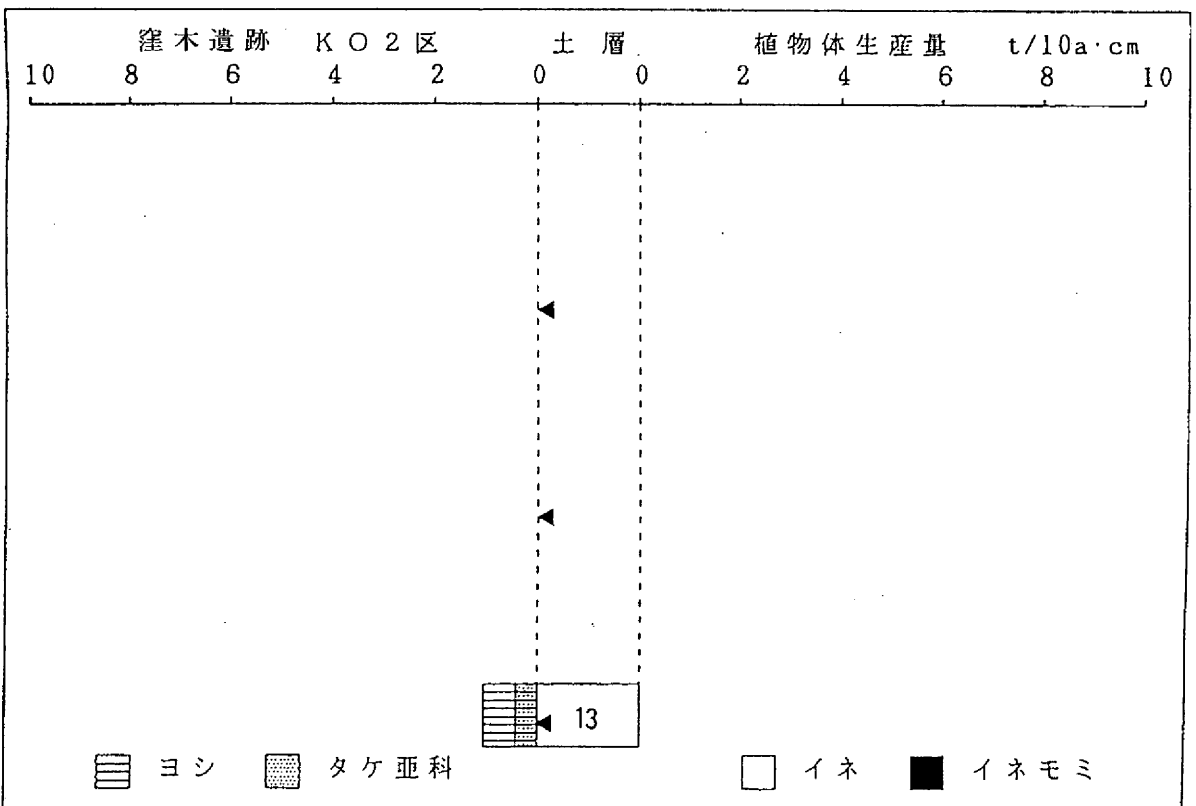
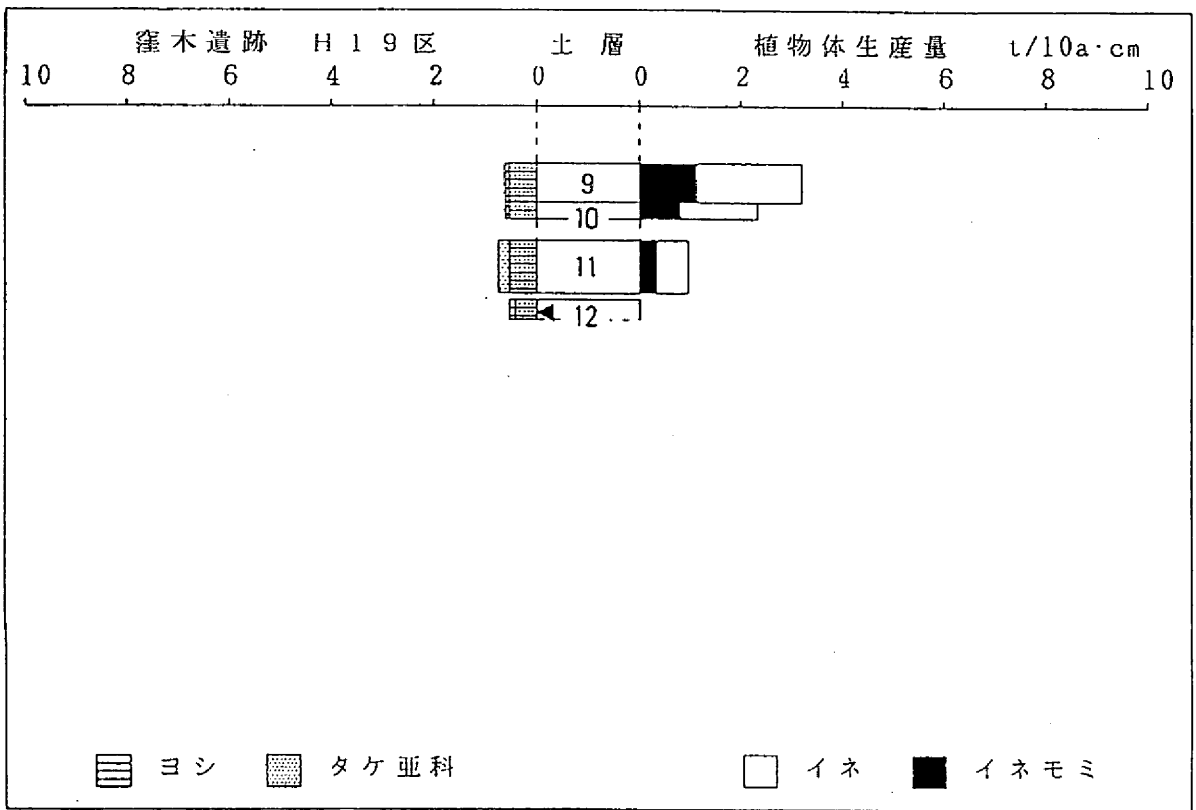
- HW3区
- | | |
|---------------------|--------------|
| 1…黒灰色粘質土 | 10…砂層(炭含まず) |
| 2…黒灰色粘質土(褐色を帯びる) | 11…褐灰色砂質土 |
| 3…黒灰褐色粘質土 | 12…褐灰色細砂～粗砂層 |
| 4…暗灰褐色粘質土 | 13…淡灰色粘質土 |
| 5…灰色粘質土(炭含む) | 14…暗灰色粘質土 |
| 6…灰褐色粘質土(細砂・炭・木片含む) | 15…灰色粘質土 |
| 7…淡青灰色粘質土 | |
| 8…砂層(炭を多く含む) | |
| 9…灰色粘質土 | |

第3図 試料採取地点土層断面図(2)(括弧数值は試料番号; 1/60)



(注) ◀印は100cmのスケール

第4図 PU1区 おもな植物の推定生産量と変遷



(注) ◀印は100cmのスケール

物体乾重、単位： 10^{-6} g)を乗じて、単位計算で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出し図示した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科については数種の平均値を用いた。その値は、それぞれ2.94(種実量は1.03)、6.31、0.48、である。(杉原・藤原、1987)。

4. 分析結果

試料1g中のプラント・オパール個数をそれぞれの文末表に示す。なお、イネに関してはダイアグラムにして第4図に示した。次ページに主な分類群の顕微鏡写真を示した。

(1) PU1区地点

本地点では、試料No.1～8の8点が採取された。これらすべてについて分析を行った結果、イネは試料No.1のみで検出された。ヨシ属は試料No.7とNo.8を除く各試料から検出されたが、密度はいずれも低値である。タケ亜科はすべての試料から高い密度で検出された。ウシクサ族は試料No.3、No.5、No.7、No.8の各試料から検出されたが、いずれも低い密度である。キビ族は検出されなかった。

試料名	深さcm	層厚cm	仮比重	イネ(個/g)	(総穂量：t/10a)	ヨシ属(個/g)	タケ亜科(個/g)	ウシクサ族(個/g)	キビ族(個/g)
1	100	40	1.00	3,100	12.83	700	29,500	700	0
2	140	13	1.00	0	0.00	600	19,800	0	0
3	153	14	1.00	0	0.00	1,500	21,500	700	0
4	167	17	1.00	0	0.00	600	14,900	0	0
5	184	9	1.00	0	0.00	600	16,000	1,300	0
6	193	33	1.00	0	0.00	700	12,700	0	0
7	226	24	1.00	0	0.00	0	12,600	1,400	0
8	250	34	1.00	0	0.00	0	34,300	900	0

(2) H19区

本地点では、試料No.9～12の4点が採取された。分析の結果、イネは試料No.9、No.10、No.11の3点から検出された。このうち、試料No.9、No.10においては高い密度である。ヨシ属はすべての試料から検出されたがいずれも低い密度である。タケ亜科はすべての試料から比較的高い密度で検出された。ウシクサ族もすべての試料から検出されたが、密度はいずれも低い値である。キビ族は検出されなかった。

試料名	深さcm	層厚cm	仮比重	イネ(個/g)	(総穂量：t/10a)	ヨシ属(個/g)	タケ亜科(個/g)	ウシクサ族(個/g)	キビ族(個/g)
9	28	19	1.00	10,800	21.31	900	10,800	1,800	0
10	47	8	1.00	7,800	6.50	700	12,600	1,500	0
11	65	26	1.00	3,200	8.67	800	15,300	800	0
12	94	—	1.00	0	—	700	8,600	700	0

(3) KO2区

本地点では、試料No.13の1点が採取された。分析の結果、イネは検出されなかった。ヨシ属タケ亜科は検出されたがいずれもそれほど高い密度ではない。ウシクサ族とキビ族は検出されなかった。

試料名	深さcm	層厚cm	仮比重	イネ(個/g)	(総穂量：t/10a)	ヨシ属(個/g)	タケ亜科(個/g)	ウシクサ族(個/g)	キビ族(個/g)
13	281	31	1.00	0	0.00	1,500	8,200	0	0

5. 考察



PU1区(8)
タケ亜科
(×400)



H19区(9)
ウシクサ族(ススキ属)
(×400)



H19区(9)
イネ
(×400)

植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

(1) 稲作の可能性について

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、各地点ごとに稲作の可能性について検討を行った。

1) PU1区

ここでは、試料No.1においてのみイネのプラント・オパールが検出された。プラント・オパール密度は比較的高い値であることから、本試料が採取された層準において稲作が行われていた可能性が考えられる。

2) H19区

ここでは、No.9、No.10、No.11、においてイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの試料が採取された層準で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、試料No.9と試料No.10ではプラント・オパール密度がそれぞれ10,800個/g、7,800個/gと高い値である。したがって、これらの層準ではその可能性が特に高いと考えられる。

3) KO2区

試料No.13について分析を行ったが、イネのプラント・オパールは検出されなかった。したがって、本試料が採取された層準では稲作が行われていた可能性は考えにくい。

(2) 古環境の推定（第4図参照）

ネザサなどのタケ亜科植物は比較的乾いた土壌条件のところに生育し、ヨシは比較的湿った土壌条件のところに生育している。このことから、両者の出現傾向を比較することによって土層の堆積環境（乾湿）を推定することができる。

本遺跡では、全体にタケ亜科が卓越しており、ヨシ属は比較的少量である。このことから、本調査区一帯は、縄文時代後期より現在にいたるまで、比較的乾燥した土壌条件であったものと推定される。

6. まとめ

窪木遺跡においてプラント・オパール分析を行い、稲作跡の探査を試みた。その結果、PU1区の試料No.1、H19区の試料No.9、No.10、No.11の層準で稲作が行われていた可能性が認められた。とくにH19区の試料No.9、No.10の層準ではその可能性が高いと判断された。

参考文献

- ・杉山真二・藤原宏志（1987）川口市赤山陣屋遺跡におけるプラント・オパール分析。赤山一古環境編一。川口市遺跡調査会報告、10、P281—298。
- ・藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学9、P15—29。
- ・藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究（3）—福岡・板付遺跡（夜白式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（*O. sativa* L）生産総量の推定—。考古学と自然科学12、P29—41。

- ・藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オパール分析による水田の探査—。考古学と自然科学17、P 73～85。

II 窪木遺跡の花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、湖沼などの堆積域および集水域の大きな堆積物を対象とし、広域な森林変遷を主とする時間軸の長い植生と環境の変遷を解析する手法として自然科学で用いられてきた。考古遺跡ではこれら水域の堆積物以外に埋没土や遺構内堆積物などの堆積域が限定された生成の異なる堆積物も対象となり、これらからは狭い植生や短い時間を反映することも指摘されている。また、花粉遺体には風媒花の植物は反映されやすく虫媒花などの植物が反映されにくい特性もある。ここでは以上のことも考慮して、植生と農耕について分析を行った。

2. 試料

以下の試料の3点を一覧表にする。

番号	調査区	採取地点	推定時期
13	KO2区	中央トレンチ最下層	縄文時代晩期前半
14	TA区	井戸7最下層	弥生時代後期前葉
15	HW3区	溝73中層	古墳時代後期

3. 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、試料に以下の順で物理化学的処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分間放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無氷酢酸9：1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は1500rpm 2分間の遠心分離を行った後上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）を基本とし、所有の現生標本との対比によって行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群として示した。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類したが、個体変化や類似種も存在するため、イネ属型とした。

学名	分類群	PU1区		KO2区	TA区	HW3区
		(5)	(6)	(12)	(14)	(15)
Arboreal pollen	木本花粉					
<i>Podocarpus</i>	マキ属				1	
<i>Abies</i>	モミ属					1
<i>Tsuga</i>	ツガ属					1
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属				2	16
<i>Sciadopitys verticillata</i>	コウヤマキ					
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ				7	24
<i>Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressace</i>	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科					6
<i>Myrica</i>	ヤマモモ属				1	
<i>Juglans</i>	クルミ属			3	1	
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ			1		2
<i>Alnus</i>	ハンノキ属		1			
<i>Betula</i>	カバノキ属					
<i>Corylus</i>	ハシバミ属				1	1
<i>Carpinus-Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ			1	1	1
<i>Castanea-Castanopsis</i>	クリ-シイ属			8	5	45
<i>Fagus</i>	ブナ属				3	1
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属		2	19	5	72
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属			2	8	145
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ					
<i>Celtis-Aphananthe aspera</i>	エノキ属-ムクノキ			2	2	
<i>Zanthoxylum</i>	サンショウ属					
<i>Ilex</i>	モチノキ属					1
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ					1
<i>Acer</i>	カエデ属					
<i>Sambucus-Viburnum</i>	ニワトコ属-ガマズミ属			1		
Arboreal・Nonarboreal pollen	木本・草本花粉					
Moraceae-Urticaceae	タワ科-イラクサ科				1	
Leguminosae	マメ科					
Nonarboreal pollen	草本花粉					
<i>Typha-Sparganium</i>	ガマ属-ミクリ属					10
<i>Sagittaria</i>	オモダカ属					1
<i>Caldesia parnassifolia</i>	マルバオモダカ			2		
Gramineae	イネ科		2	6	12	37
<i>Oryza type</i>	イネ属型				2	2
Cyperaceae	カヤツリグサ科			5		
<i>Monochoria</i>	ミズアオイ属					
<i>Aneilema keisak</i>	イボクサ					
<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節					1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科				5	2
Caryophyllaceae	ナデシコ科					1
Cruciferae	アブラナ科				234	10
Umbelliferae	セリ科				7	5
Labiatae	シソ科					
Valerianaceae	オミナエシ科					1
<i>Actinostemma lobatum</i>	ゴキズル					4
Lactuoidae	タンポポ亜科					
Asteroidae	キク亜科					
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	1	2		77	57
Fern spore	シダ植物胞子					
Monolate type spore	単条溝胞子	2		58	1	1
Trilate type spore	三条溝胞子			7		1
Arboreal pollen	樹木花粉	0	3	37	37	3,170
Arboreal・Nonarboreal pollen	木本・草本花粉	0	0	0	1	0
Nonarboreal pollen	草本花粉	1	4	13	337	131
Total pollen	花粉総数	1	7	50	375	448
Unknown pollen	未同定花粉	0	1	4	4	6
Fern spore	シダ植物胞子	2	0	65	1	2

表 窪木遺跡の花分析結果

4. 結果

(1) 出現する分類群

検出された花粉・胞子は、樹木花粉28、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉21、シダ植物胞子3形態の計51分類群であった。結果は、花粉遺体一覧を表にまとめた。花粉総数が200個以上の試料は花粉総数を基本数とする百分率を求め、花粉組成図を示した。なお、100個以上の試料も参考に示した。主な分類群は写真に示した。

以下に同定された分類群を示す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複雑維管束亜属、コウヤマキ、スギ、イチ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、クルミ属、サワグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシテ属—アサダ、クリーシイ属、ブナ属、コナラ属、コナラ亜属、カナラ属アカガシ亜属、ニレ属—ケヤキ、エノキ属—ムクノキ、サンショウ属、ウルシ属、モチノキ属、ニシキギ科、トチノキ、カエデ属、モクセイ科、トネリコ属、ニワトコ属—ガマズミ属

〔草本花粉〕

ガマ属—ミクリ属、オモダカ属、マルバオモダカ、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、イボクサ、タデ属サナエタデ節、アカザ科—ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ科、アブラナ科、アリノトウグサ属—フサモ属、セリ科、シソ科、オミナエシ科、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子、ミズワラビ

(2) 花粉組成

1) KO2区 中央トレンチ (試料番号13)

花粉遺体がほとんど含まれていなかった。

2) TA区 井戸7最下層 (試料番号14)

アブラナ科花粉が約60%で優占し、ヨモギ属が伴われる。他は低率である。

3) HW3区 溝73中層 (試料番号15)

草本花粉より樹木花粉の占める割合が高い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属の出現率が高く、コナラ属コナラ亜属・クリーシイ属とスギなどの針葉樹が伴われる。草本花粉ではヨモギ属がやや多く、イネ属型を含むイネ科も出現する。

5. 植生と農耕の復原

1) KO2区 中央トレンチ (試料番号13)

花粉遺体がほとんど含まれていなかった。このことは堆積物に花粉遺体が含まれていないのは、堆積物の堆積速度が著しく速いか、森林土壌などの植物遺体が分解する土壌生成作用を受けつつ生成され花粉が分解されたかである。

2) TA区 井戸7最下層 弥生時代後期 (試料番号14)

アブラナ科花粉の出現率が極めて高く、アブラナ科の栽培植物の畑作が近接して営まれていたと推定される。人里畑作の雑草でもあるヨモギ属花粉も多く矛盾しない。閉鎖的な遺構内の堆積のため、

近くの植物の花粉が反映されたと考えられる。

3) HW3区 溝73 古墳時代後半(試料番号15)

周囲は樹木も多くコナラ属アカガシ亜属・コナラ属コナラ亜属・クリーシイ属とマツ属複雑維管束亜属・スギの針葉樹の森林も分布していた。ヨモギ属の生育する乾燥地と、水田も分布している。溝内にはガマ属ーミクリ属が繁茂していた。

6. まとめ

すでに公表した南溝手遺跡の分析結果もあわせて、時代別に植生と農耕の変化を概観する。

1) 縄文時代晩期～弥生時代前期

周囲はコナラ属アカガシ亜属とシイ属を主とする照葉樹林が多く分布していたと推定される。急河道周辺には、ガマ属ーミクリ属・イネ科・カヤツリグサ科の水湿地草本が分布し、やや乾いたところにはヨモギ属が分布していた。

2) 弥生時代前期～弥生時代後期

コナラ属アカガシ亜属を主とする照葉樹林が減少する。全体に草本が増加するが当初周囲ではあまり広く水田が営まれていなかったと推定される。上部になるとイネ属型を含むイネ科が増加し近接して水田が営まれていた。弥生時代後期にはアブラナ科植物の栽培が行われている。

3) 古墳時代

水田が大きく増加した可能性がある。

参考文献

中村 純(1973) 花粉分析、古今書院。

金原正明(1993) 花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店。

日本四紀学会編(1993) 第四紀試料分析法、東京大学出版会。

島倉巳三郎(1973) 日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集。

中村 純(1980) 日本産花粉の標徴、大阪市立自然科学博物館収蔵目録第13集。

中村 純(1974) イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として、第四紀研究13。

中村 純(1977) 稲作とイネ花粉、考古学と自然科学 第10号。

付載 2 窪木遺跡出土の赤色顔料について

別府大学文学部助教授 本田光子

宮内庁正倉院事務所保存科学室室長 成瀬正和

窪木遺跡HW2区で出土した赤色塗彩の土器2点(104・105)と、K10区で検出された弥生時代前期の土壇30の埋積土中の赤色顔料について顕微鏡観察とX線分析(蛍光X線分析・X線回折)を行い、赤色顔料の種類や特徴を調査した。墳墓出土例や土器・木器等の彩色例に関する現在までの知見に寄れば、出土赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄 Fe_2O_3 を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀HgSを主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。ここでは、これら三種類の赤色顔料を考えて調査を行った。試料の一覧と分析結果及び推定される赤色顔料の種類を表に示した。

試料

一般に「丹塗り磨研」土器と呼ばれる焼成前塗彩の赤彩の残りは良好であるが、縄文時代の赤彩の多くや弥生時代前期の彩文土器は焼成後塗彩のため、土器の赤色塗彩の残り具合はその埋蔵文化財環境に大きく左右される。試料No.1と2は焼成前塗彩なので良好な状態である。試料No.3は朱(硫化水銀HgS)と思われる赤色顔料が凝集した塊で周囲の土も含めて約2gである。

顕微鏡観察

光学顕微鏡により透過光・反射光40~400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類を判断するものである。古代の三種の赤色顔料(朱、ベンガラ、鉛丹)は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等の違いから検鏡により見極めがつく。

土器片はそのままで落射光により40~400倍で検鏡し、赤色顔料の有無、その種類、付着残存状態を観察した。また、赤色部分から針先に付く程度の量を採取しプレパラートを作製し、透過光・落射光40~400倍で検鏡した。

試料No.1、2は赤色顔料としては、はっきりしたベンガラ粒子を認められず、いわゆる広義のベンガラと呼ぶ赤土に近い状態であった。これに対してNo.3にははっきりしたベンガラ粒子を認めた。試料No.3には、赤色顔料としては朱粒子だけが認められ、ベンガラ粒子は認められなかった。粒子径は最大で約 $20\mu m$ で、 $10\mu m$ 以上の粒子もかなり含まれるが、約 $0.5\sim 5\mu m$ 前後が大半を占める。

蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。土器資料は土器片そのものを測定試料とした。No.4は約10mgを研和し、測定試料とした。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業(株)製蛍光X線分析装置を用い、X線管球；クロム対陰極、印加電圧；40kv、印加電流；20mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲(2θ)； $10\sim 65^\circ$ の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。

全試料とも鉛が検出されなかったため、表には鉄と水銀の有無のみ記した。赤色顔料の主成分元素

としては試料No.1、2に鉄がNo.3には鉄と水銀が検出された。その他、マンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されるが、それらはみな主として胎土部分や土砂に由来するものなので、省略した。但し土器資料では鉄は胎土部分にも必ず含まれ、採取を行わない今回の分析では赤色顔料由来のものとの区別は困難である。

X線回折

赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的としたものである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機(株)製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧；25kv、印加電流；10mA、検出器；シンチレーション計数管、発散および受光側スリット；0.034°、照射野制限マスク（通路幅）；4mm、ゴニオメーター走査範囲（ 2θ ）；30~66°の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。土器資料は土器片そのものを測定試料とした。表には辰砂(Cinnabar 赤色硫化水銀)、赤鉄鉱 (Hematite 酸化第二鉄) の有無のみについて記した。赤色顔料の主成分鉱物としてはNo.3に辰砂を同定した。試料No.1、2については赤鉄鉱ははっきりと確認できなかった。その他、石英、長石などが確認されたが、それは主として胎土部分あるいは混入土砂に由来するものなので、やはり省略している。赤色顔料の付着量が少ないものについては、X線回折では赤色顔料に由来する鉱物が検出できない場合がある。

表 窪木遺跡出土赤色物の分析結果と推定される赤色顔料の種類

No.	試料	蛍光X線分析		X線回折		顕微鏡観察	赤色顔料の種類	挿図
		鉄	水銀	赤鉄鉱	辰砂			
1	鉢形土器	+	-	?	-	(ベンガラ)	(ベンガラ)	105
2	壺形土器	+	-	?	-	(ベンガラ)	(ベンガラ)	104
3	K10区土壌30埋積土	+	+	-	+	朱	朱	第56図

+は検出 -は未検出 ?は確定できない

まとめ

1. 窪木遺跡の丹塗り磨研土器について

焼成前塗彩である「丹塗り磨研土器」の赤色は、当然のことであるが焼成による鉄分の酸化による発色である。そのため、本来的に酸化鉄含有量の多い「ベンガラ」が使われる場合と、本来の酸化鉄含有量は少ないが適度の焼成条件により明るい赤色に発色するような「赤土」を用いる場合がある。前者はベンガラという赤色顔料が必要であるが後者は「赤土」があれば良く、磨きの状態ではそれさえ必要でない場合がある。試料No.1、2の赤色はいわゆる丹塗りであり酸化鉄による発色であるが、X線回折で鉱物としての赤鉄鉱ははっきりとは確認されない。検鏡においても顕著なベンガラ粒子は見いだせず、赤い土砂である。つまり、試料No.1、2は赤色顔料としてのベンガラは使用していない可能性が高く、赤い土砂を使ったかあるいは使っていないかも知れない。しかし実際には赤く発色している。このような状態の酸化鉄系赤色顔料を筆者は広義のベンガラと呼んでおり、表中では(ベン

ガラ)で示した。これらは次に述べる焼成後塗彩に用いるような良質なベンガラは必要ではなく、焼成技術によるもので、このタイプの丹塗り磨研土器の出現は大きな意味を持つ。福岡市那珂遺跡の夜白II式と板付I式の丹塗り磨研土器では8点の内小型壺、鉢の6点がベンガラで大型壺2点が広義のベンガラであった。今回のNo.1、2についてはさらに条件を整えて分析を行い検討したい。

2. 窪木遺跡K10区土壌30出土の赤色顔料

赤色顔料の種類は朱(硫化水銀 HgS)であり、粒子径範囲は0.5~約20 μm 、10 μm 以上の粒子はかなりあるが、大半は5 μm 以下である。津山市大田茶屋遺跡出土朱(註)と比べるとやや10 μm 以上の粒子が多いようである。色合いも異なるが、粒度の差によるものか、微量成分によるものかは不明である。

北部九州地方では朱は時期により粒度が異なる可能性があると思われる。今までの調査例は少数であり、おおまかな傾向としてしか捉えられないが、大きく二つのタイプにはわかれる。前漢鏡を伴う甕棺墓から出土する朱はその細かさ・均一性においても傑出しているようであり、それ以前、以降の甕棺墓出土朱はそれに比べて粒度が大きい。前期出土朱は調査例が少ないが、最大粒子径は50 μm 以上粒度は大きい。本試料の最大粒子径は約20 μm であり、それに比べると非常に細かいものになる。赤色顔料の入手経路、使用方法の違い等を考えることもできるかもしれないが、今後の調査例の増加に期待したい。

今回調査の機会を頂きました岡山県古代吉備文化財センター平井 勝氏、平井泰男氏に感謝致します。

註

本田光子・成瀬正和『大田茶屋遺跡出土の赤色顔料について』—岡本寛久「大田茶屋遺跡1~県道津山加茂線建設に伴う発掘調査」(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告96)所収 1994年 岡山県教育委員会。

付載3 窪木遺跡出土木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

窪木遺跡では、弥生時代～古墳時代の木製農耕具が出土している。このような木製農耕具の用材については、川入・上東遺跡や百間川遺跡群などで調査された例がある（畦柳, 1974, 1977; 未公表資料）。それらの結果では、鍬・鋤には他地域で行われた例と同様にアカガシ亜属が多く認められる。しかし、百間川遺跡群では鋤にクスノキが集中する結果も得られており、鍬と鋤の用材選択に違いがあった可能性もある。このことを明らかにするためには、さらに多くの資料蓄積が必要である。

本報告では、窪木遺跡から出土した木製農耕具の樹種を明らかにし、その用材選択に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、出土した木製品15点（試料番号1～15）である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

2. 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製する。切片は、ガム・クロラル（抱水クロラル・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で透過光による木材組織の観察を行ない、その特徴から種類を同定する。

3. 結果

15点の木製品は、針葉樹3種類（マツ属複維管束亜属・モミ属・ツガ属）、広葉樹3種類（コナラ属アカガシ亜属・シイノキ属・サカキ）に同定された（表1）。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon* sp.）マツ科

早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道及び水平樹脂道が認められる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は、単列、1～15細胞高のものと水平樹脂道をもつ紡錘形のものがある。

・モミ属（*Abies* sp.）マツ科

早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は薄い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・ツガ属（*Tsuga* sp.）マツ科

早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅はやや厚い。樹脂細胞が認められる。放射組織は仮道管と柔細胞よりなり、柔細胞壁は滑らかで、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はヒノキ型で1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cylobalanopsis* sp.) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は単列、1～20細胞高。

表1 樹種同定結果

番号	遺物番号	出土地区・遺構	時代・時期	用途	樹種
1	W23	CH4区溝 南半下層	古墳時代?	曲柄又鋏	コナラ属アカガシ亜属
2	W19	BU区溝	弥生時代	又鋏	コナラ属アカガシ亜属
3	W18	BU区溝	弥生時代後期	曲柄鋏	コナラ属アカガシ亜属
4	W16	TA区溝	弥生時代後期	板材(桶?)	マツ属複維管束亜属
5	W5	TA区溝	弥生時代後期	棒状木製品	コナラ属アカガシ亜属
6	W13	TA区溝	弥生時代後期	又鋏	コナラ属アカガシ亜属
7	W4	TA区井戸	弥生時代後期	鋤先	コナラ属アカガシ亜属
8	W3	TA区井戸	弥生時代後期	斧膝柄	サカキ
9	W2	TA区井戸	弥生時代後期	不明	サカキ
10	W6	TA区井戸	弥生時代後期	梯子	ツガ属
11	W24	HW3区河道 下層	弥生～古墳時代	曲柄又鋏	コナラ属アカガシ亜属
12	W32	HW3区溝	弥生～古墳時代	建築部材	ツガ属
13	W31	HW3区溝	弥生～古墳時代	鋤未製品?	モミ属
14	W38	HW3区溝	弥生～古墳時代	建築材	シイノキ属
15	W51	HW3区溝 腐食土層	弥生～古墳時代	鋤	シイノキ属

・シイノキ属 (*Castanopsis* sp.) ブナ科

環孔材～放射孔材で孔圏部は3～4列、孔圏部で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。柔組織は周囲状、散在状および短接線状。

・サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc) ツバキ科サカキ属

散孔材管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2～3個が複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、単列(稀に2列)、1～20細胞高。

4. 考察

鋤は1点(W51)がシイノキ属である以外は全てアカガシ亜属であった。またW31(鋤未製品?)はモミ属であった。これまで西日本を中心に行なわれてきた調査では、鋏・鋤の用材の多くがアカガシ亜属である(島地・伊東、1988;伊東、1990)。岡山県内でも川入・上東遺跡で同様の結果が得られている。シイノキ属は少数ではあるが使用例がある。共に強度の高い木材であり、このような材質に注目した用材選択が行なわれていたと考えられる。今回の結果はこれまでの類例とも調和的であり、

本地域においても同様な用材選択が行なわれていたことが推定される。ところで、百間川遺跡群では、鋤にクスノキが選択されている傾向があり、鋤と鋤とで用材選択に違いがあった可能性が指摘されている。(未公表資料)。今回の結果では、クスノキが確認できず、用材選択に違いがあったか否かは不明である。モミ属については、鋤の用材としては適当な木材ではない。香川県下川津遺跡でもモミ属の鋤が出土したが、後の観察から鋤以外の用途(靱すくい)が指摘されている。(島地・林、1990)。これらのことを考慮すれば、W31(鋤未製品?)も鋤以外の可能性がある。

斧の柄(W3)はサカキであった。斧の柄については、これまでの類例からサカキやアカガシ亜属の多いことが知られている。(島地・伊東、1988)。とくにサカキは鋤・鎌などの柄には少ない。このことは、サカキが斧の柄に選択的に利用されていた可能性がある。

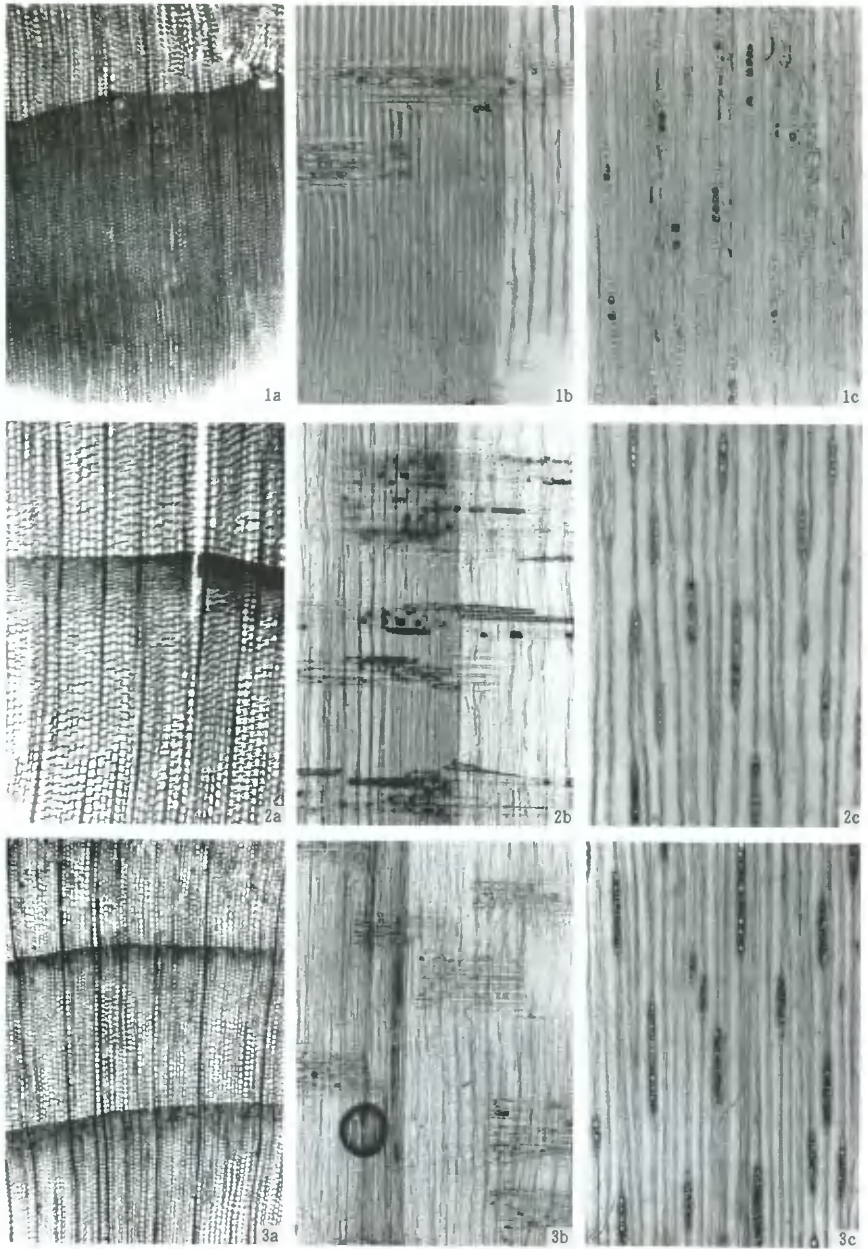
ハシゴ(W6)はツガ属に同定された。これまでの類例では、ハシゴには様々な木材が使用されている。(島地・伊東、1988;伊東、1990)。これらの木材は強度が高い種類が多く、用材選択に強度が重視されたと推定される。ツガ属は針葉樹材としては強度の高い種類である。

板材(W16・38)は複維管束亜属とシノキ属であった。このうち複維管束亜属は桶の可能性が指摘されている。桶はこれまでの調査でヒノキが多く確認されている(島地・伊東、1988)。ヒノキ属は耐水性に優れた材質を有し、板状への加工も容易である。これらのことがヒノキ属が多数利用された背景に考えられる。複維管束亜属は、耐水性が高い点や加工が容易な点でヒノキ属に共通する特徴がある。しかし、桶と断定されていないため、詳細は不明である。シノキ属についてもどのような用途の板材かは不明である。強度が高い材質を考慮すれば、この特徴を必要とするような用途であった可能性がある。今後用途を明らかにする必要がある。

<引用文献>

- 畦柳 鎮(1974)川入・上東遺跡出土木器類樹種鑑定所見。「山陽新幹線建設に伴う発掘調査II」、P 351—353、岡山県教育委員会。
- 畦柳 鎮(1977)上東・川入遺跡出土木器の樹種鑑定。岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16「川入・上東都市計画道路(富本町・三田線)に伴う埋蔵文化財発掘調査」、P 169、岡山県教育委員会。
- 伊東隆夫(1990)日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途II。木材研究・資料、26、P 91—189。
- 島地 謙・林 昭三(1990)昭和61年度調査の分析委託結果。「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告VII 下川津遺跡—第2分冊一」、P 520—532、香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター・本州四国連絡橋公園。
- 島地 謙・伊東隆夫編(1988)日本の遺跡出土木製品総覧。P 296。、雄山閣。

図版1 木材(1)



1. マツ属複雑管束亜属(試料番号4)

2. モミ属(試料番号13)

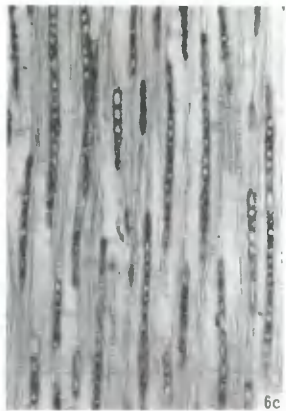
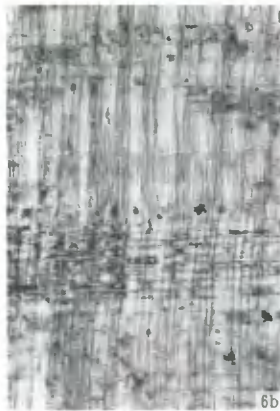
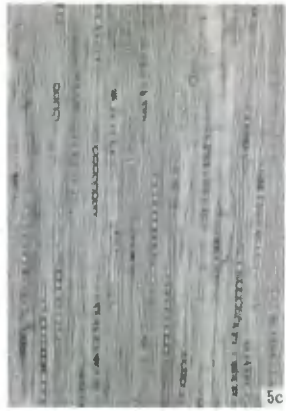
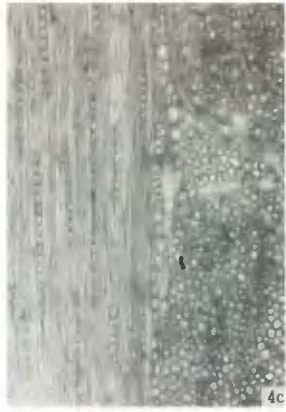
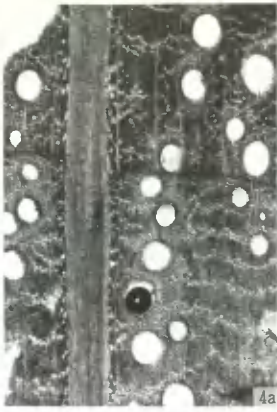
3. ツガ属(試料番号10)

a : 木口、b : 柾目、c : 板目

200 μ m : a

200 μ m : b、c

図版 2 木材(2)



4. コナラ属アカガシ亜属(試料番号5)
 2. シイノキ属(試料番号14)
 3. サカキ(試料番号8)
 a: 木口, b: 柎目, c: 板目

200 μ m: a
 200 μ m: b, c

付載 4 窪木遺跡BU区およびTA区出土のガラス小玉の分析

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

窪木遺跡BU区竪穴住居15・18およびTA区の竪穴住居11ほかの遺構内から出土したガラス小玉の成分・色調の違いについて検討するためエネルギー分散型蛍光X線分析を実施した。エネルギー分散型蛍光X線分析法は、測定試料を非破壊で分析することができ、しかもX線源が弱いため試料に与える損傷がほとんどない⁽¹⁾。分析の結果、窪木遺跡BU区の竪穴住居18(弥生時代後期前葉)内出土のガラス小玉24個の試料からは、 SiO_2 (二酸化珪素)、 Fe_2O_3 (酸化鉄)、 K_2O (酸化カリウム)、 CaO (酸化カルシウム)、 TiO_2 (酸化チタン)が主成分として検出され、アルカリ石灰ガラスであることがわかる。特に、No.8の試料をのぞいて K_2O (酸化カリウム)量が平均7~15%と多く含まれている。また、ほとんどの試料で Al_2O_3 (酸化アルミニウム)が検出されなかった。

色調の由来についての検討では試料No.G 1~13・15~21・23・25の色調がスカイブルー(淡青色)のガラス小玉20個からは CuO (酸化銅)2~3%、 PbO (酸化鉛)1%前後が検出された。また、試料No.G 14・22の色調がブルー(濃青色)のガラス小玉からは、 MnO (酸化マンガン)が2%ほどと、試料No.G 14・24の小玉からは MnO (酸化マンガン)と BaO (酸化バリウム)が検出された。このように、スカイブルー色の着色には CuO 、 PbO が、ブルー色には MnO 、 BaO がそれぞれ関係していると考えられる。また、スカイブルー色のガラス小玉に比べブルー色の小玉のほうが Fe_2O_3 (酸化鉄)の量が多く、酸化鉄も着色剤として使用されたと考えられる⁽²⁾。

窪木遺跡TA区の弥生時代後期前葉の竪穴住居6・11とピットから出土したガラス小玉G 1・2・26からは主成分として SiO_2 、 Fe_2O_3 、 K_2O 、 CaO 、 TiO_2 が検出されアルカリ石灰ガラスであることがわかる。また、ガラス小玉3個とも CuO (3%前後)、 PbO (1.5%前後)検出していることから、このスカイブルーのガラス小玉の着色にはこれらの成分が関与している。

註

(1)分析装置：セイコー電子工業株式会社卓上蛍光X線分析計SEA2010L

(マイラー膜使用のため Na_2O は測定していない。)

定量にはファンダメンタル・パラメーター法(理論計算法)により算出した。

(2)富沢 威1986(古代ガラスの化学 古代オリエントから日本まで)『続考古学のための化学10章』
東京大学出版会 pp. 53-80

第1表 窪木遺跡T A区竪穴住居ほか出土ガラス小玉の分析値 (%)

試料番号	出土地点	時 期	色調	SiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	CuO	PbO	BaO
G 1	竪穴住居 6	弥生時代後期前葉	淡青色	78.11	—	1.00	12.29	2.52	0.30	—	3.53	1.65	—
G 2	竪穴住居11	弥生時代後期前葉	淡青色	83.70	—	1.07	8.94	1.41	0.30	0.03	2.78	1.25	—
G26	ピット内	弥生時代後期前葉?	淡青色	78.31	—	1.01	13.99	1.69	0.31	—	3.03	1.20	—

第2表 窪木遺跡B U区竪穴住居15・18出土ガラス小玉の分析値 (%)

試料番号	出土地点	時 期	色調	SiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	CuO	PbO	BaO
G 3	竪穴住居15	弥生時代後期前葉	淡青色	78.15	—	0.88	14.88	1.54	0.42	—	2.92	0.80	—
G 4	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	淡青色	79.22	—	1.03	13.89	1.74	0.26	—	2.71	0.78	—
G 5	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	淡青色	80.88	—	1.14	14.25	—	0.31	—	2.18	0.87	—
G 6	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	淡青色	88.45	—	0.95	4.60	1.83	0.34	—	2.67	0.89	—
G 7	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	淡青色	74.70	7.83	0.79	11.57	1.50	0.26	—	2.35	0.87	—
G 8	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	淡青色	78.30	—	0.99	13.48	1.71	0.51	—	3.37	1.08	—
G 9	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	淡青色	79.17	—	0.98	14.79	1.37	0.26	—	2.15	0.88	—
G10	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	淡青色	84.55	—	0.98	8.30	2.00	0.31	—	2.69	0.89	—
G11	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	淡青色	74.76	7.81	0.89	10.79	1.80	0.32	—	2.36	0.93	—
G12	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	淡青色	87.03	—	0.93	6.58	1.56	0.32	—	2.55	0.83	—
G13	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	淡青色	77.31	—	1.25	13.27	2.71	0.27	0.06	3.12	1.45	—
G14	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	濃青色	84.62	—	2.03	8.36	2.31	0.32	2.20	0.04	—	0.03
G15	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	淡青色	77.65	—	0.95	15.29	1.62	0.30	0.02	2.74	1.02	—
G16	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	淡青色	77.96	—	1.05	14.49	1.78	0.32	0.04	2.85	1.10	—
G17	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	淡青色	77.18	—	0.94	15.32	1.74	0.27	0.03	2.88	1.16	—
G18	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	淡青色	86.39	—	0.95	7.42	1.50	0.31	—	2.41	0.71	—
G19	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	淡青色	74.38	7.96	0.85	11.42	1.37	0.23	0.04	2.41	0.94	—
G20	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	淡青色	83.15	—	0.94	10.33	2.37	0.30	—	1.98	0.66	—
G21	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	淡青色	73.26	8.20	0.86	11.48	1.71	0.34	—	2.64	1.10	—
G22	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	濃青色	74.19	—	3.37	15.19	4.29	0.33	2.47	0.07	—	—
G23	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	淡青色	84.29	—	0.86	9.12	1.81	0.28	—	2.56	0.83	—
G24	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	濃青色	79.24	—	3.12	12.24	2.25	0.41	2.39	0.06	—	0.21
G25	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	淡青色	78.36	—	0.99	14.04	1.61	0.37	—	2.98	1.21	—

付載 5 窪木遺跡CH5区出土の銅鏃の分析

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

窪木遺跡CH5区溝71から出土した銅鏃（古墳時代中期；M2）について、エネルギー分散型蛍光X線分析⁽¹⁾を実施した。

この結果、第1表に示したようにCu（銅）93.33%、Sn（錫）1.01%、Pb（鉛）0.67%、Ni（ニッケル）0.11%、As（ヒ素）0.18%、Si（珪素）2.43%の成分が検出された。Sn量が1.01%と少し含まれている銅鏃であることがわかった。

銅鏃の分析例としては、岡山県柵原町月の輪古墳（5世紀中葉）の中央主体部から出土した柳葉形の銅鏃が分析されている⁽²⁾。この分析でもSn量が0.98%と特に少なく特異な例として報告されており、窪木遺跡の銅鏃の分析値と同様な結果であった。また、このSn量が少ないことから鏃の硬度が劣り、武器として実用的でないことが述べられている⁽³⁾。

以上のように、銅鏃の分析ではSn（錫）の含有量が非常に少ない鏃であることがわかったが、比較する分析量が余りにも少なく分析例の増加を待って銅鏃の含有成分の問題点を改めて検討したい。

第1表 窪木遺跡CH5区内出土銅鏃の分析値（%）

出土地点	時期	Cu	Sn	Pb	Ni	As	Si
CH3区中央河道内	古墳時代中期	93.33	1.01	0.67	0.11	0.18	2.43

註

(1)非破壊分析を原則にしているため、エネルギー分散型X線分析装置を使用した。この装置は試料の形状を変えたり変色させたりすることなく試料の表面を分析することができる。

分析装置：セイコー電子工業株式会社卓上蛍光X線分析計SEA2010L

（マイラー膜使用のためNa₂Oは測定していない。）

定量分析ではファンダメンタル・パラメーター法（理論計算法）により算出した。

(2)山崎一雄 1987「銅鏡・銅鐸および銅利器などの化学成分」『古文化財の科学』思文閣出版 pp 303~309

(3)註(2)

第11表 竪穴住居一覽表

番号	平面形	規模 (cm)		床面積 (m ²)	主柱穴数	中央穴			焼土面	壁体溝	時期
		長軸×短軸	形			規模 (cm)	深さ (cm)				
1	円	445×430	—	—	2	楕円	63×48	27	—	無	弥生時代前期
2	不整長方	466×265	—	—	—	—	—	—	—	無	弥生時代前期
3	不整	290×230	—	—	—	—	—	—	—	無	弥生時代前期
4	円	—	—	—	—	—	—	—	—	無	弥生時代前期
5	円	400×365	12.6	2	不整円	70×65	20	—	—	有	弥生時代後期前葉?
6	円	500×485	18.9	4	不整円	60×50	25	1	—	有	弥生時代後期前葉
7	円	450×415	13.5	4	不整円	55×50	25	—	—	有	弥生時代後期前葉?
8	円	655×	33.7	4~6	円	90×80	20	—	—	有	弥生時代後期前葉
9	円	495×450	18.9	4	長円	75×55	50	—	—	有	弥生時代後期前葉
10	円	395×	12.2	なし	円	35×30	25?	—	—	有	弥生時代後期前葉?
11	円	515×480	18.2	4	不整方	85×70	30	1	—	有	弥生時代後期前葉
12	円	525×	21.6	5	不整円	約90×70	35	—	—	有	弥生時代後期前葉
13	円	525×	21.6	4	不整円	70×65	30	1	—	有	弥生時代後期前葉
14	円	630×615	30.7	5	不整円	90×80	25	1	—	有	弥生時代後期前葉
15	隅丸方	470×400	6.2~7.3	4?	不明	—	—	2	—	有	弥生時代後期前葉
16	隅丸方	465×	17.0	3以上	長円	55×40	35	1	—	有	弥生時代後期前葉?
17	円	435×410	13.3	—	不明	—	—	1	—	無	弥生時代後期前葉
18	円	685×695	37	4~7	方~円	90×75	55	3	—	有	弥生時代後期前葉
19	円?	495×	19.2	3以上	長円	30×25以上	5以上	?	—	不明	弥生時代後期
20	円	—	—	4~6	楕円	60×37	27	—	—	有	弥生時代後期
21	円	595×—	—	4~6	不整長方	×70	40	—	—	有	弥生時代後期
22	円	377×352	—	2	円	42×41	30	—	—	有	弥生時代後期
23	?	—	—	5	—	—	—	—	—	無	弥生時代後期
24	円	330×—	—	2以上	—	—	—	—	—	有	弥生時代後期
25	円	693×—	—	4	楕円	95×51	35	1	—	有	弥生時代後期
25	円	503×457	—	4	楕円	95×51	35	—	—	有	弥生時代後期
26	隅丸方	450×—	—	4	長方	73×—	30	—	—	有	弥生時代後期前葉
27	円	—	—	2以上	—	—	—	—	—	有	弥生時代後期

第12表 建物一覽表

番号	規模 (間)	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (m ²)	柱穴形状	時期
		桁	梁					
1	2×1	198~268	215~237	424~466	215~237	11.3	円	弥生時代後期
2	2×1	151~173	225~236	324~330	225~236	7.9	円	弥生時代後期
3	2×1	144~189	211~221	333~357	211~221	7.9	円	弥生時代後期
4	2×1	198~267	~255	465	255	12.2	円	弥生時代後期

番号	規模 (間)	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	柱穴 形状	時 期
		桁	梁					
5	1×1	214~219	159~200	214~219	159~200	4.4	円	弥生時代後期
6	1×1	354~364	317~321	354~364	317~321	11.5	円	弥生時代後期前葉末~中葉初頭
7	2×1	194~227	274~283	421~442	274~283	12.3	円	弥生時代後期
8	1×1	277~287	233~243	277~287	233~243	7.0	円	弥生時代後期
9	2×1	179~202	214~228	375~394	214~228	9.0	円	弥生時代後期
10	2×1	179~200	299	375	299	11.4	円	弥生時代後期
11	2×1	171~218	270~277	387~389	270~277	10.9	円	弥生時代後期
12	2×1	267~288	280~295	555~556	280~295	16.8	円	弥生時代後期前葉末~中葉初頭
13	2×1	241~292	~260	416	260	10.9	円	弥生時代後期
14	2×1	156~173	258~283	322~342	258~283	9.5	円	弥生時代後期中葉以降
15	2×1	169~193	259~270	358~362	259~270	9.7	円	弥生時代後期
16	1×1	218~224	197~200	218~224	197~200	4.4	円	弥生時代後期
17	1×1	177~185	159~170	177~185	159~170	3.1	円	弥生時代中期後葉
18	1×1	392~393	290~306	392~393	290~306	12.1	円	弥生時代後期前葉
19	2×1	154~175	206~223	319~335	206~223	7.5	円	弥生時代後期前葉
20	3×1	162~175	320~330	499~504	320~330	16.5	円	弥生時代後期前葉
21	?×1	307	286	307	286	—	円	弥生時代後期
22	1×3	145~152	334	(442)~447	334	14.9	円	弥生時代後期前葉
23	1×1	165~173	167~168	173	168	2.8	円	弥生時代中期後半~後期前半
24	1×1	291~298	198~203	298	203	6.0	楕円	弥生時代後期
25	4×2	149~170	172~212	657	384	25.2	楕円	弥生時代中期後半~後期前半
26	1×1	425~455	265~272	455	265	12.1	円	弥生時代後期
27	1×1	353~364	221	364	221	8.0	楕円	弥生時代後期
28	1×1	300~316	263~272	316	272	8.3	円	弥生時代中期後半~後期前半
29	1×1	328~333	284~309	333	309	9.6	円	弥生時代中期後半~後期前半
30	1×1	230~235	175~197	235	197	4.5	円	弥生時代後期
31	1×1	—	270	—	270	—	円	弥生時代中~後期
32	1×1	233~258	193~200	258	193	5.0	円	弥生時代中期後半~後期前半
33	1×1	315~318	250~260	315	250	7.9	円	弥生時代中期後半~後期前半
34	2×1	200~211	293~304	412	304	12.5	楕円	弥生時代中期後半~後期前半
35	3×1	111~139	275~297	395	291	10.8	楕円	弥生時代後期?
36	(2×)	182~186	—	—	—	—	楕円	弥生時代中期後葉
37	5×1	115~135	326~338	645	335	21.2	円	弥生時代中期後葉
38	1×1	300~315	218~224	315	218	6.9	円	弥生時代中期後半~後期前半
39	1×1	302~315	252~266	315	296	9.3	円	弥生時代中期後葉
40	2×	250~280	—	530	—	—	楕円	弥生時代中期後半~後期前半
41	1×1	173~185	134~143	185	143	2.6	円	弥生時代中~後期

番号	規模 (間)	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	柱穴 形状	時 期
		桁	梁					
42	1 × 1	330~334	272~274	334	274	9.2	円	弥生時代中~後期
43	2 × 2	188~190	156~168	383	314	12.0	方	古墳時代後半
44	(2 × 2)	~175~	150~165	318	318	—	方	古墳時代後半
45	—	160~186	230~263	263	263	8.6	楕円	古墳時代後半
46	(4 × 3)	83~144	140~183	466	440	—	隅丸方	古墳時代後半
47	2 ×	148~155	—	303	—	—	楕円	古墳時代後半
48	2 × 2	128~252	326~327	373~380	326~327	12.4	円	中世
49	2 × 2 ?	184~415	145~167	397~415	309~312	12.9	円	中世
50	1 × 1	306~316	196~217	306	217	6.6	楕円	鎌倉時代
51	2 × 1	174~188	229~246	361	246	8.9	円	中世
52	1 × 1	193~196	186~196	196	196	3.8	円	中世
53	× 1	—	221	—	221	—	隅丸方	古代
54	1 × 1	244~258	178~195	244	195	3.3	円	中世
55	2 × 2	255~264	186~318	543	504	26.6	円	中世
56	2 × 1	243~259	187~192	509	192	9.8	楕円	中世
57	× 3	—	213~250	—	686	—	楕円	中世

第13表 井戸一覧表

番号	平面形	長軸×短軸(cm)	深さ(cm)	底海拔高(m)	時 期	備 考
1	不整円	118×106	90	6.88	弥生時代後期	
2	円	115×108	86	7.08	弥生時代後期前葉	
3	不整円	150×144	172	6.28	弥生時代後期前葉	
4	円	180×173	242	5.46	弥生時代後期前葉	
5	長円	92×70	79	6.86	弥生時代後期前葉	
6	不整長円	68×64	171	5.93	弥生時代後期前葉	
7	円	190×182	132以上	6.24以下	弥生時代後期前葉	木製品多く出土。
8	円	125×118	81	7.42	古墳時代前期前葉	
9	不整円	173×149	89	7.2	7世紀末~8世紀前半	

第14表 ガラス小玉一覧表

遺物番号	出土地区	遺構名	厚さ	計測最大値(mm)		重量(g)	時期	備考(色調)
				径	孔径			
G 1	TA	竪穴住居 6	5.5	7.6	1.8	0.39	弥生時代後期前葉	(淡青色)
G 2	TA	竪穴住居11	2.8	3.4	1.2	0.03	弥生時代後期前葉	(淡青色)
G 3	BU	竪穴住居15	3.5	3.2	1	0.04	弥生時代後期前葉?	(淡青色)
G 4	BU	竪穴住居18	2.3	4.3	1.1	0.05	弥生時代後期前葉	(淡青色)
G 5	BU	竪穴住居18	3.5	4.3	1.1	0.09	弥生時代後期前葉	(淡青色)
G 6	BU	竪穴住居18	3.5	3.9	0.8	0.04	弥生時代後期前葉	1/2 残存 (淡青色)
G 7	BU	竪穴住居18	2.4	3.8	1.3	0.04	弥生時代後期前葉	(淡青色)
G 8	BU	竪穴住居18	3.2	4.6	1.5	0.07	弥生時代後期前葉	(淡青色)
G 9	BU	竪穴住居18	4.5	4.2	0.9	0.1	弥生時代後期前葉	(淡青色)
G10	BU	竪穴住居18	2.8	4	1	0.02	弥生時代後期前葉	1/2 残存 (淡青色)
G11	BU	竪穴住居18	3.9	4.6	1.7	0.1	弥生時代後期前葉	(淡青色)
G12	BU	竪穴住居18	3.5	約4	—	0.03	弥生時代後期前葉	1/3 残存 (淡青色)
G13	BU	竪穴住居18	1.8	3.5	1.5	0.03	弥生時代後期前葉	(淡青色)
G14	BU	竪穴住居18	3.4	—	—	0.02	弥生時代後期前葉	1/2 残存 (コバルトブルー)
G15	BU	竪穴住居18	4.5	5.8	1.4	0.2	弥生時代後期前葉	(淡青色)
G16	BU	竪穴住居18	3.2	4.6	1.4	0.08	弥生時代後期前葉	(淡青色)
G17	BU	竪穴住居18	3.8	4.6	2.3	0.09	弥生時代後期前葉	(淡青色)
G18	BU	竪穴住居18	3.4	4.1	1.1	0.03	弥生時代後期前葉	1/2 残存 (淡青色)
G19	BU	竪穴住居18	1.9	3.8	1.1	0.03	弥生時代後期前葉	(淡青色)
G20	BU	竪穴住居18	—	約4	—	0.02	弥生時代後期前葉	1/2 残存 (淡青色)
G21	BU	竪穴住居18	2.3	3.9	0.7	0.03	弥生時代後期前葉	1/2 残存 (淡青色)
G22	BU	竪穴住居18	3.2	4.6	1.4	0.07	弥生時代後期前葉	(コバルトブルー)
G23	BU	竪穴住居18	2.7	約3.5	—	0.02	弥生時代後期前葉	1/2 残存 (淡青色)
G24	BU	竪穴住居18	3	4.6	1.5	0.06	弥生時代後期前葉	(コバルトブルー)
G25	BU	竪穴住居18	4.3	4.3	2.4	0.04	弥生時代後期前葉	(淡青色)
G26	TA	ピット	3.2	4.5	1.8	0.07	弥生時代後期前葉	(淡青色)

第15表 土製品一覧表

遺物番号	出土地区	遺構名	器種	計測最大値(mm)			重量(g)	時期	備考
				長さ	幅(径)	厚さ			
C 1	TA	竪穴住居 6	土製丸玉	—	24.8~25.1	21.5	12.95	弥生時代後期前葉	浅黄橙色。完形品。焼成前穿孔。
C 2	TA	竪穴住居10	土錘	36	31.6~35.9	26.3	28.78	弥生時代後期前葉	灰白色。完形品。
C 3	TA	竪穴住居12	土製勾玉	39.9	14.0	15.0	11.43	弥生時代後期前葉	灰白色。完形品。
C 4	BU	土城58	分銅形土製品	—	約90	11	—	弥生時代後期前葉	約1/4残存。側面から裏面に貫通孔。
C 5	TA	ピット	紡錘車	—	41.6~42.1	14.5~15.5	31.80	弥生時代後期前葉?	灰白色。黒斑あり。焼成前穿孔。

第16表 石器・石製品一覧表

番号	調査区	出土地点	時期	器種	型式	石材	残存率	長さ(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	重量(g)
S 1	PU 2	包含層	縄文時代晩期後葉	斧		サヌカイト	完	161.5	62.5	28.0	449.2
S 2	PU 2・3	晩期遺構面上面	縄文時代晩期	石鏃	I	サヌカイト	欠	20.0	11.0	3.0	0.5
S 3	PU 2・3	晩期遺構面	縄文時代晩期	鍬の基部		サヌカイト	欠	139.5	56.5	22.0	167.4
S 4	PU 2	晩期遺構面	縄文時代晩期	鍬		粘板岩	完	149.0	57.5	19.0	208.4
S 5	CH 1	土器溜り 1	縄文時代晩期中葉	石鏃	III	サヌカイト	欠	14.0	11.5	4.0	0.6
S 6	CH 1	土器溜り 1	縄文時代晩期中葉	石鏃	V	サヌカイト	完	19.0	12.5	3.0	0.7
S 7	CH 1	土器溜り 1	縄文時代晩期中葉	スクレイパー		サヌカイト	完	58.5	27.0	10.5	15.5
S 8	CH 1	土器溜り 1	縄文時代晩期中葉	スクレイパー		サヌカイト	完	48.0	50.5	10.0	25.4
S 9	CH 1	土器溜り 1	縄文時代晩期中葉	石鍬		流紋岩?	欠	88.0	43.5	14.0	53.9
S10	CH 1	土器溜り 1	縄文時代晩期中葉	石鍬		頁岩	欠	108.5	46.0	12.0	58.6
S11	CH 1	土器溜り 1	縄文時代晩期中葉	敲石		サヌカイト	完	102.0	35.5	33.0	211.5
S12	HW 3	河道 1	縄文時代晩期後葉	スクレイパー	II a	サヌカイト	完	92.0	36.5	15.5	38.8
S13	HW 3	河道 1	縄文時代晩期後葉	楔	I	サヌカイト	欠	60.5	41.0	17.2	34.4
S14	HW 3	河道 1	縄文時代晩期後葉	楔	II	サヌカイト	完	73.5	48.5	9.8	35.5
S15	HW 2	包含層	縄文時代晩期	鍬		安山岩?	完	127.0	46.0	15.0	122.0
S16	HW 1	包含層	縄文時代晩期	スクレイパー	II	サヌカイト	欠	106.5	55.0	10.0	48.1
S17	KO 2	竪穴住居 1	弥生時代前期前葉~中葉	石鏃	VII	サヌカイト	欠	33.0	17.0	3.0	1.4

番号	調査区	出土地点	時期	器種	型式	石材	残存率	長さ (mm)	幅 (mm)	厚み (mm)	重量 (g)
S18	KO2	竪穴住居1	弥生時代前期前葉～中葉	石鏃	VII	サヌカイト	欠	37.0	22.0	4.0	1.7
S19	KO2	竪穴住居1	弥生時代前期前葉～中葉	スクレイパー	I b	サヌカイト	完	71.0	46.0	9.5	30.6
S20	KO2	竪穴住居1	弥生時代前期前葉～中葉	スクレイパー	I b	サヌカイト	完	86.5	39.0	8.5	27.4
S21	HO	竪穴住居2	弥生時代前期前半	石鏃	I a	サヌカイト	完	25.5	15.0	3.4	0.9
S22	HO	竪穴住居2	弥生時代前期前半	石鏃	I a	サヌカイト	欠	21.5	14.5	3.0	0.6
S23	HO	竪穴住居2	弥生時代前期前半	石鏃	II a	サヌカイト	欠	21.5	14.5	2.5	0.6
S24	HO	竪穴住居2	弥生時代前期前半	石鏃	II a	サヌカイト	欠	15.5	11.0	3.3	0.4
S25	HO	竪穴住居2	弥生時代前期前半	錐	I	サヌカイト	完	34.5	16.0	5.0	1.6
S26	HO	竪穴住居2	弥生時代前期前半	錐	I	サヌカイト	完	37.5	12.5	8.5	3.6
S27	HO	竪穴住居2	弥生時代前期前半	錐	III	鉄石英	完	22.0	5.5	4.0	0.6
S28	HO	竪穴住居2	弥生時代前期前半	磨石			完	52.0	51.5	37.0	149.2
S29	HO	竪穴住居2	弥生時代前期前半	磨石			完	91.0	83.0	43.0	499.2
S30	K10	竪穴住居4	弥生時代前期前葉	石鏃	II a	サヌカイト	完	19.0	16.5	4.1	0.9
S31	K10	竪穴住居4	弥生時代前期前葉	石鏃	IV a	サヌカイト	完	23.0	18.5	3.0	1.0
S32	K10	竪穴住居4	弥生時代前期前葉	石槍?		サヌカイト	欠	32.0	26.5	6.5	5.3
S33	K10	竪穴住居4	弥生時代前期前葉	錐	I	サヌカイト	完	40.0	13.0	9.5	3.9
S34	K10	竪穴住居4	弥生時代前期前葉	錐	III	サヌカイト	欠	28.0	12.0	7.0	2.5
S35	K10	竪穴住居4	弥生時代前期前葉	錐?	II	サヌカイト	完	33.0	27.0	7.7	4.9
S36	K10	竪穴住居4	弥生時代前期前葉	楔	II	サヌカイト	完	22.0	26.0	9.0	6.2
S37	K10	竪穴住居4	弥生時代前期前葉	錐	I	サヌカイト	完	121.5	29.0	13.5	34.9
S38	K10	土壇25	弥生時代前期中葉	錐	III	サヌカイト	欠	30.0	9.5	6.0	1.9
S39	K10	土壇28	弥生時代前期中葉	敲石			完	136.5	116.0	84.0	1820.8
S40	K10	土壇29	弥生時代前期中葉	スクレイパー	II a	サヌカイト	完	48.0	47.0	6.0	16.0
S41	K10	土壇30	弥生時代前期中葉	スクレイパー	I b	サヌカイト	完	47.5	78.0	11.5	24.0
S42	K10	土壇30	弥生時代前期中葉	スクレイパー	I b	サヌカイト	完	77.0	45.0	13.5	27.3
S43	K10	土壇30	弥生時代前期中葉	スクレイパー	I b	サヌカイト	欠	67.5	36.5	9.0	18.1
S44	K10	土壇30	弥生時代前期中葉	スクレイパー	I a	サヌカイト	完	48.0	45.5	10.5	20.3
S45	KO2	溝1	弥生時代前期前葉～中葉	錐	III	サヌカイト	欠	26.0	9.5	5.7	1.4
S46	KO2	第3低位部	弥生時代前期	石鏃	IV b	サヌカイト	欠	20.5	15.0	4.0	1.0
S47	KO2	第3低位部	弥生時代前期	スクレイパー	I a	サヌカイト	完	68.0	45.5	10.0	31.5
S48	KO2	第3低位部	弥生時代前期	錘	I	安山岩	完	87.5	78.0	14.0	158.0
S49	KO2	第3低位部	弥生時代前期	敲石			欠	81.5	54.0	40.0	239.0
S50	TA	竪穴住居6	弥生時代後期前葉	石鏃	I	サヌカイト	欠	26.5	17.0	4.3	1.9
S51	TA	竪穴住居9	弥生時代後期前葉	石鏃	I	サヌカイト	完	18.5	13.5	3.7	0.6
S52	TA	竪穴住居9	弥生時代後期前葉	砥石		頁岩	完	84.0	21.0	21.0	60.1
S53	TA	竪穴住居9	弥生時代後期前葉	砥石		泥岩	完	206.0	56.0	49.0	788.4
S54	TA	竪穴住居11	弥生時代後期前葉	石鏃	II	サヌカイト	完	21.0	13.5	2.5	0.6
S55	TA	竪穴住居11	弥生時代後期前葉	板状石製品		サヌカイト	欠	45.5	32.5	5.8	13.8
S56	TA	竪穴住居14	弥生時代後期前葉	石鏃	V	サヌカイト	完	23.0	14.0	3.0	0.7
S57	BU	竪穴住居15	弥生時代後期前葉	石包丁		サヌカイト	欠	65.5	41.0	8.3	24.6
S58	BU	竪穴住居16	弥生時代後期前葉	石包丁		安山岩	欠	75.5	49.5	13.5	66.0
S59	BU	竪穴住居16	弥生時代後期前葉	敲石		安山岩?	完	111.0	59.0	31.0	259.2
S60	BU	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	石鏃	IV	サヌカイト	完	20.0	12.0	2.3	0.6
S61	BU	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	石鏃	IV	サヌカイト	完	31.5	14.0	2.5	1.2
S62	BU	竪穴住居18	弥生時代後期前葉	スクレイパー		サヌカイト	完	79.0	36.5	9.0	32.0
S63	HW1	竪穴住居26	弥生時代中期後葉	スクレイパー	I b	サヌカイト	欠	75.5	51.5	7.5	36.3
S64	HW1	竪穴住居26	弥生時代中期後葉	砥石			欠	82.5	35.5	22.5	123.8
S65	HO	建物29	弥生時代中期中葉～後期	スクレイパー	I b	サヌカイト	完	76.0	56.0	6.0	31.7
S66	TA	井戸4	弥生時代後期前葉	磨石		サヌカイト	完	135.5	104.0	87.0	1613.0
S67	CH1	袋状土壇5	弥生時代後期前葉	石鏃	I	サヌカイト	完	22.5	17.0	5.0	2.1
S68	BU	土壇57	弥生時代	石包丁		安山岩?	完	72.0	46.0	18.0	59.3
S69	H18	土壇61	弥生時代後期	石鏃	I	サヌカイト	欠	17.0	11.0	2.7	0.4
S70	TA	溝16・17 上面たわみ	弥生時代後期前葉	敲石		花崗岩?	完	157.0	68.5	49.5	696.5
S71	TA	溝16・17 上面たわみ	弥生時代後期前葉	石鏃	I	サヌカイト	欠	19.5	17.5	4.0	1.2
S72	TA	溝16・17 上面たわみ	弥生時代後期前葉	石包丁		安山岩?	欠	56.5	42.5	13.7	32.0
S73	TA	溝16	弥生時代後期前葉	スクレイパー		玄武岩?	欠	88.5	43.5	9.0	45.1
S74	TA	溝16	弥生時代後期前葉	砥石		流紋岩	完	105.0	29.5	24.0	114.3
S75	H19	溝14	弥生時代後期前葉	砥石		流紋岩	欠	132.0	108.0	54.0	1047.3
S76	H19	溝14	弥生時代後期前葉	砥石		流紋岩	欠	211.0	159.0	71.0	2510.0

番号	調査区	出土地点	時期	器種	型式	石材	残存率	長さ (mm)	幅 (mm)	厚み (mm)	重量 (g)
S77	BU	BU区 溝20	弥生時代後期前葉	砥石		泥岩	欠	52.0	53.5	20.8	66.9
S78	KO2	溝35	弥生時代後期後期後葉	石鏃	I a	サヌカイト	欠	14.5	15.0	3.0	0.6
S79	K	溝40	弥生時代後期後期後葉	鍬		安山岩?	欠	120.0	61.0	23.0	191.6
S80	HO	溝42	弥生時代後期後期後葉	石鏃	I a	サヌカイト	欠	21.5	17.5	4.8	1.4
S81	K	溝46	弥生時代後期後期後葉	スクレイパー	I b	サヌカイト	欠	54.5	42.5	5.0	14.5
S82	BU	河道3	弥生時代後期	石槍		サヌカイト	完	91.5	31.5	11.0	31.9
S83	CH4	河道4	弥生時代後期前葉~古墳時代	石包丁		サヌカイト?	欠	70.5	44.5	11.0	40.2
S84	CH4	河道4	弥生時代後期前葉~古墳時代	楔	I	サヌカイト	完	57.0	44.0	13.0	36.6
S85	CH4	河道4	弥生時代後期前葉~古墳時代	錐	I	サヌカイト	完	60.0	33.5	9.5	10.5
S86	CH4	河道4	弥生時代後期前葉~古墳時代	スクレイパー	I a	サヌカイト	完	62.0	39.0	9.0	19.8
S87	CH4	河道4	弥生時代後期前葉~古墳時代	砥石			欠	107.0	81.0	55.0	778.8
S88	CH4	河道4	弥生時代後期前葉~古墳時代	砥石		砂岩	完?	120.0	102.0	44.5	610.7
S89	CH5	河道5	弥生時代後期前葉~	斧		安山岩	欠	67.0	74.5	37.0	269.8
S90	CH5	河道5	弥生時代後期前葉~	砥石		細粒花崗岩	欠	83.5	76.5	40.0	374.6
S91	CH5	河道5	弥生時代後期前葉~	敲石			完	75.0	60.0	22.0	138.0
S92	CH5	河道5	弥生時代後期前葉~	石鏃	I a	サヌカイト	欠	22.0	14.5	3.5	0.9
S93	CH5	河道5	弥生時代後期前葉~	石鏃	I a	サヌカイト	欠	19.0	12.5	3.0	0.9
S94	CH5	河道5	弥生時代後期前葉~	石鏃	VII	サヌカイト	欠	27.5	17.5	4.5	1.5
S95	CH5	河道5	弥生時代後期前葉~	錐	III	サヌカイト	欠	33.0	10.5	5.5	2.3
S96	CH5	河道5	弥生時代後期前葉~	石包丁?		サヌカイト	欠	57.5	50.0	7.8	25.9
S97	CH5	河道5	弥生時代後期前葉~	石包丁		サヌカイト	欠	61.0	50.0	13.8	48.5
S98	CH5	河道5	弥生時代後期前葉~	スクレイパー	I b	サヌカイト	完	52.0	61.0	6.0	25.8
S99	CH5	河道5	弥生時代後期前葉~	スクレイパー	I b	サヌカイト	完	122.5	83.0	22.5	173.6
S100	HW3	河道6	弥生時代中期後葉~後期前葉	鍬		サヌカイト	欠	41.0	51.0	7.0	17.0
S101	HW3	河道6	弥生時代中期後葉~後期前葉	鍬		サヌカイト	完	111.0	62.0	20.5	139.9
S102	HW3	河道6	弥生時代中期後葉~後期前葉	砥石		細粒花崗岩	欠	36.0	30.0	25.0	30.7
S103	HW3	杭列1	弥生時代中期後葉~後期前葉	鍬		頁岩	欠	53.5	48.5	19.5	59.0
S104	PU3	包含層	弥生時代後期	石鏃	I	サヌカイト	欠	15.0	12.0	2.2	0.3
S105	TA	南西区 褐灰色包含層	弥生時代後期	石鏃	I	サヌカイト	完	20.5	13.0	3.0	0.8
S106	TA	南西区 褐灰色包含層	弥生時代後期	石鏃	I	サヌカイト	完	19.5	16.5	3.1	0.9
S107	H19	包含層	弥生時代後期	石鏃	I	サヌカイト	完	19.5	14.0	3.5	0.8
S108	CH1	包含層	弥生時代後期	石鏃	I	サヌカイト	完	17.0	15.5	3.5	0.6
S109	CH1	弥生時代遺構面	弥生時代後期	石鏃	I	サヌカイト	完	27.0	17.5	4.8	1.8
S110	PU2・3	包含層	弥生時代後期	石鏃	II	サヌカイト	欠	27.0	14.0	3.3	0.9
S111	PU2・3	水田遺構面	弥生時代後期	石鏃	II	サヌカイト	欠	22.0	14.5	3.4	1.0
S112	PU21	表土除去面	弥生時代後期	石鏃	II	サヌカイト	完	25.5	15.0	4.0	1.5
S113	TA	北東区 包含層	弥生時代後期	石鏃	II	サヌカイト	完	25.0	14.0	3.0	0.7
S114	TA	中北区 溝81	弥生時代後期	石鏃	II	サヌカイト	完	21.5	12.5	2.8	0.8
S115	TA	南西区 褐灰色粘質土	弥生時代後期	石鏃	II	サヌカイト	欠	21.5	16.0	2.5	0.6
S116	TA	南西区 褐灰色粘質土	弥生時代後期	石鏃	II	サヌカイト	欠	26.0	18.0	3.4	1.2
S117	TA	南西区 褐灰色粘質土	弥生時代後期	石鏃	III	サヌカイト	完	24.5	14.5	3.6	1.4
S118	H18	古墳時代遺構面	弥生時代後期	石鏃	III	サヌカイト	欠	19.5	20.0	3.1	1.4
S119	PU2・3	包含層	弥生時代後期	石鏃?	IV	サヌカイト	欠	27.0	12.0	5.0	1.9
S120	TA	中東区 褐灰色粘質土	弥生時代後期	石鏃	IV	サヌカイト	欠	38.0	17.0	4.0	3.0
S121	H18	古墳時代遺構面	弥生時代後期	楔		サヌカイト	完	26.0	19.5	7.0	4.1
S122	PU1	包含層	弥生時代後期	スクレイパー		サヌカイト	完	79.0	43.0	6.5	23.3
S123	CH1	包含層	弥生時代後期	スクレイパー		サヌカイト	欠	65.0	41.0	7.0	22.3
S124	TA	南西区 包含層	弥生時代後期	石包丁		サヌカイト	欠	55.0	54.0	9.0	28.1
S125	TA	中北区 褐灰色粘土	弥生時代後期	石包丁		サヌカイト	欠	70.0	44.0	8.0	29.0
S126	CH1	溝32付近	弥生時代後期	ノミ状石器		斑岩	完	57.0	22.5	8.0	16.4
S127	PU1	南西隅 包含層	弥生時代前期?	磨製石包丁		不明	欠	61.0	41.5	5.5	19.6
S128	CH1	包含層	弥生時代後期?	磨石兼敲石		粘板岩	完	100.0	64.0	57.5	498.9
S129	PU1	包含層	弥生時代後期?	砥石		流紋岩	欠	77.0	37.0	29.5	105.9
S130	BU	包含層	弥生時代後期前葉	砥石		流紋岩	欠	204.0	138.0	90.0	3890.0
S131	CH1	柱穴	弥生時代後期	砥石		不明	欠	178.0	175.5	67.0	2990.0
S132	K10	包含層	弥生時代後期	石鏃	II a	サヌカイト	欠	21.0	12.5	3.0	0.6
S133	K	溝66	弥生時代後期	石鏃		サヌカイト	欠	15.5	11.5	4.0	0.6
S134	K	包含層	弥生時代後期	石鏃	I a		完	30.0	23.0	6.5	4.0
S135	K10	包含層	弥生時代後期	錐	III	サヌカイト	欠	35.0	8.5	3.5	1.0

番号	調査区	出土地点	時期	器種	型式	石材	残存率	長さ (mm)	幅 (mm)	厚み (mm)	重量 (g)
S136	HW3	水田	弥生時代後期	楔?	I	サヌカイト	欠	54.5	32.0	9.2	18.2
S137	CH3	包含層	弥生時代後期	スクレイパー	I b	サヌカイト	欠	73.0	61.0	7.5	53.7
S138	CH3	包含層	弥生時代後期	石包丁		サヌカイト	欠	71.0	47.0	8.3	43.9
S139	HW3	包含層	弥生時代後期	斧		安山岩	欠	67.5	70.5	59.8	443.2
S140	KO1	包含層	弥生時代後期	石鏃	II a	サヌカイト	欠	21.0	13.0	3.3	0.6
S141	KO2	包含層	弥生時代後期	石鏃	II a	サヌカイト	欠	12.5	15.0	3.3	0.5
S142	KO1	包含層	弥生時代後期	石鏃	II a	サヌカイト	欠	22.5	17.5	3.0	0.9
S143	KO2	包含層	弥生時代後期	石鏃	I a	サヌカイト	欠	22.0	15.5	3.7	0.9
S144	KO2	溝110	弥生時代後期	石鏃	I a	サヌカイト	欠	23.5	17.5	2.7	0.8
S145	KO1	水田	弥生時代後期	石鏃	I a	サヌカイト	欠	17.0	12.5	2.0	0.4
S146	KO2	水田	弥生時代後期	石鏃	II a	サヌカイト	欠	22.0	15.5	3.7	0.9
S147	KO2	溝127	弥生時代後期	石鏃	I a	サヌカイト	欠	25.5	15.5	3.0	1.2
S148	KO1	包含層	弥生時代後期	石鏃	I a	サヌカイト	欠	20.5	18.0	3.4	1.3
S149	KO2	包含層	弥生時代後期	石鏃	I a	サヌカイト	欠	31.0	22.5	6.0	4.0
S150	KO2	包含層	弥生時代後期	石鏃	II a	サヌカイト	完	21.5	18.5	3.5	0.9
S151	KO1	包含層	弥生時代後期	石鏃	II a	サヌカイト	欠	17.0	16.5	4.8	1.2
S152	KO1	包含層	弥生時代後期	石鏃		サヌカイト	欠	16.0	11.0	4.3	0.7
S153	KO1	溝112	弥生時代後期	石鏃	I a	サヌカイト	欠	18.0	16.5	3.0	1.1
S154	KO2	包含層	弥生時代後期	石鏃	VIII a	サヌカイト	欠	24.0	12.0	3.0	0.8
S155	KO1	水田	弥生時代後期	石鏃	VIII a	サヌカイト	欠	24.5	12.0	2.9	0.9
S156	KO1	包含層	弥生時代後期	石鏃	VI a	サヌカイト	完	22.0	13.5	2.0	0.4
S157	KO2	溝120	弥生時代後期	石鏃	VII	サヌカイト	欠	22.0	13.0	2.8	0.5
S158	KO2	溝118	弥生時代後期	石鏃	VII	サヌカイト	欠	24.5	16.5	4.3	1.3
S159	KO1	水田	弥生時代後期	石鏃	VII	サヌカイト	完	37.0	17.5	3.3	1.6
S160	KO2	包含層	弥生時代後期	錐	I	サヌカイト	欠	17.0	16.0	2.7	0.5
S161	KO2	溝118	弥生時代後期	錐	I	サヌカイト	完	22.5	10.0	2.8	0.5
S162	KO1	水田	弥生時代後期	錐	I	サヌカイト	完	23.0	19.0	5.5	2.2
S163	KO1	溝116	弥生時代後期	錐	I	サヌカイト	欠	34.0	16.5	5.0	2.4
S164	KO2	包含層	弥生時代後期	楔	I	サヌカイト	完	34.5	22.0	7.2	8.2
S165	KO1	柵列状遺構2	弥生時代後期	楔	I	サヌカイト	完	32.5	34.5	10.7	10.6
S166	KO1	包含層	弥生時代後期	スクレイパー	I b	サヌカイト	完	57.5	38.5	3.8	8.6
S167	CH4	包含層	弥生時代後期	石鏃	III	サヌカイト	完	15.0	14.5	2.0	0.4
S168	CH4	包含層	弥生時代後期	石鏃	II a	サヌカイト	完	13.5	13.4	2.0	0.3
S169	K10	包含層	弥生時代後期	錐	II	サヌカイト	欠	63.5	42.5	9.0	20.4
S170	K	包含層	弥生時代後期	鍬		サヌカイト	完	93.5	57.5	14.8	70.3
S171	KO1	包含層	弥生時代後期	スクレイパー	II b	サヌカイト	欠	79.0	36.5	7.0	21.1
S172	(欠番)										
S173	(欠番)										
S174	CH1	建物49	鎌倉時代?	砥石		細粒花崗岩	完	172.0	89.2	86.0	1926.1

第17表 木器一覧表

遺物番号	名称	出土地区	遺構名	法量mm			木取法	手法	樹種	特徴
				長さ	幅(径)	厚さ				
W1	棒状木製品	TA	井戸4	266	30	—	芯持ち	丸物	ネズミサシ?	
W2	不明	TA	井戸7	50	60	30以下	板目	面取り	サカキ	丁寧な面取りを施し、装飾部分の一部と考えられる。
W3	斧膝柄	TA	井戸7	160	40-45	18	板目	面取り	サカキ	斧先のみ残存し、残りは欠失。
W4	鍬先	TA	井戸7	約400	20-45	8-14	板目	板物	アカガシ	いわゆるナスビ形の鍬先で片側は失われている。
W5	棒状木製品	TA	井戸7	約320	24	—	芯持ち	面取り	ネズミサシ	両端は面取りされている。
W6	梯子	TA	井戸7	425	105	38	板目	面取り	ツガ属	階段部分はわずかに残る。
W7	かけや?	TA	井戸7	328	20-60	28-56	板目	面取り	ヤブツバキ	廃棄未製品か。
W8	杭	TA	井戸7	266	36	—	芯持ち	丸物	ウバメガシ	先端を欠く。
W9	丸木	TA	井戸7	680	78-86	—	芯持ち	丸物	カツラ	両端は切断。焼けて炭化している。
W10	建築材?	TA	井戸7	1370	80-120	80	芯持ち	丸物	カツラ	火災にあい、炭化している。ほぞ穴あり。
W11	建築材?	TA	井戸7	628	190-250	130	芯持ち	丸物	カシワ	柱の下端とする見方もある。荒い面取りが施される。
W12	曲柄又鍬	TA	河道	推定420	30-50	10	板目	面取り	アカガシ	部分的に樹皮残す。
W13	又鍬	TA	河道	252	42	8	板目	面取り	アカガシ	

遺物 番号	名称	出土地区	遺構名	法量mm			木取法	手法	樹種	特 徴
				長さ	幅(径)	厚さ				
W14	又鍬?	TA	河道	218	60	13	板目	面取り	ゴシイ	斜めに穿孔1ヶ所
W15	柄材	TA	河道	318	90	6-10	板目	板物	ゴシイ	円孔1ヶ所
W16	容器?	TA	河道	282	163	26	板目	剥り物	マツ	剥り抜きの桶か。
W17	建築材	TA	河道	556	56	32	板目	面取り	ネズミサシ	ほぞ穴の一部を残す。
W18	曲柄鍬	BU	河道	135	15-30	12	板目	面取り	ウバメガシ	鍬先を欠く。
W19	鋤先	BU	河道	298	40-60	16	板目	面取り	ツクバネガシ	3片に折損。
W20	杭?	BU	河道	254	36	-	芯持ち	丸物	ウバメガシ	
W21	杭	BU	河道	270	46	-	芯持ち	丸物	ウバメガシ	部分的に樹皮残す。護岸杭か。
W22	杭	BU	河道	450	50	-	芯持ち	丸物	ヌルア	護岸杭か。
W23	曲柄又鍬	CH4	河道4	134	49	13	板目	板物	カシワ	ナスビ形。
W24	曲柄又鍬	HW3	河道6	220	46	11	板目	板物	ゴシイ	ナスビ形。W26と同一個体?
W25	又鍬	HW3	河道6	121	60	18	板目	板物	カシワ	
W26	曲柄又鍬	HW3	河道6	322	38	10	板目	板物	ゴシイ	ナスビ形。W24と同一個体?
W27	柄	HW3	河道6	130	33	30	芯持ち	面取り	ウバメガシ	
W28	柄	HW3	河道6	115	27	25	芯持ち	面取り	ウバメガシ	
W29	杭	HW3	河道6	490	54	53	芯持ち	丸物	カシワ	
W30	杭	HW3	河道6	377	79	36	板目	面取り	アベマキ	
W31	鋤	HW3	杭列1	633	158	24	板目	板物	アカマツ	未製品。
W32	建築材	HW3	杭列1	412	144	16	板目	板物	スギ	ほぞ孔4。
W33	建築材	HW3	杭列1	343	84	19	板目	板物	アカマツ	ほぞ孔1。貫通孔1。
W34	建築材	HW3	杭列1	476	129	30	板目	板物	クリ	
W35	建築材	HW3	杭列1	447	168	23	板目	板物	クロマツ	
W36	建築材	HW3	杭列1	約950	114-126	14-18	板目	板物	スギ	
W37	建築材	HW3	杭列1	632	139	36	板目	板物	クリ	
W38	建築材	HW3	杭列1	653	133	32	板目	板物	クリ	
W39	杭	HW3	杭列1	348	45	42	芯持ち	丸物	ノグルミ	
W40	杭	HW3	杭列1	289	54	47	芯持ち	丸物	カシワ	樹皮遺存。
W41	杭	HW3	杭列1	195	42	45	芯持ち	丸物	エノキ	
W42	杭	HW3	河道6	241	28	30	芯持ち	丸物	カシワ	
W43	杭	HW3	河道6	266	30	27	芯持ち	丸物	カワヤナギ	樹皮遺存。
W44	杭	HW3	河道6	245	29	27	芯持ち	丸物	ニガキ	
W45	杭	HW3	河道6	400	44	39	芯持ち	丸物	エノキ	
W46	杭	HW3	河道6	458	47	43	芯持ち	丸物	ネズミサシ	
W47	杭	HW3	河道6	681	46	42	芯持ち	丸物	アラカシ	
W48	杭	HW3	河道6	293	40	39	芯持ち	丸物	アベマキ	樹皮遺存。
W49	杭	HW3	河道6	216	52	52	芯持ち	丸物	エノキ	
W50	不明	HW3	溝76	216	34	27	板目	板物	アカマツ	目釘孔2。
W51	鋤	HW3	溝76	203	63	23	板目	板物	ウバメガシ	

第18表 土器観察表

挿図 番号	種別	器種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
1	縄文土器	深鉢	上位アルカ属貝条痕。下位ケズリ。C形刺突文がめぐる。	ナデ。	灰 5Y4/1	
2	縄文土器	浅鉢				
3	縄文土器	深鉢	口縁部~胴部上位ミガキ。下半ケズリ。	胴部ミガキ。	灰黄褐 10YR5/2	
4	縄文土器	浅鉢	口唇部刻み目。口縁部に突起をもつ。アルカ属貝条痕。下半ケズリ。	胴部ユビオサエ、ナデ。	灰黄 2.5Y7/2	
5	縄文土器	浅鉢	口縁部ナデ。	磨滅。	にふい黄 2.5Y6/3	
6	縄文土器	深鉢	ミガキ?	磨滅。	黄灰 2.5Y4/1	
7	縄文土器	浅鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ?	黄灰 2.5Y4/1	
8	縄文土器	浅鉢	ナデ?	ナデ?	浅黄 2.5Y7/3	
9	縄文土器	深鉢	ナデ?	ナデ?	黄灰 2.5Y6/1	
10	縄文土器	深鉢	口唇部刺突文。ナデ?	ナデ?	にふい黄橙 10YR6/3	
11	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	擦痕?	黄褐 2.5Y5/3	
12	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ?	黄灰 2.5Y4/1	
13	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ?	黄灰 2.5Y4/1	
14	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ?	浅黄 2.5Y7/3	
15	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ?	浅黄 2.5Y7/3	
16	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ?	にふい黄橙 10YR7/4	
17	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	アルカ属貝条痕?	にふい橙 7.5YR7/3	
18	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	黄灰 2.5Y6/1	
19	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ?	黄褐 2.5Y5/3	
20	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ?	にふい黄橙 10YR7/3	

押図 番号	種別	器種	特徴		色調	備考
			外面	内面		
21	縄文土器	深鉢	擦痕。	ナデ。	にぶい黄橙 10YR 7/3	
22	縄文土器	深鉢	口唇部刺突文。アルカ属具条痕。	ナデ。	灰白 10YR 7/1	
23	縄文土器	鉢	ナデ?	ナデ?	にぶい黄橙 10YR 7/4	
24	縄文土器	鉢	ケズリ。	ナデ?	黄褐 2.5Y 5/3	
25	縄文土器	深鉢	アルカ属具条痕。	ナデ?	黄灰 2.5Y 6/1	傾き不詳。
26	縄文土器	浅鉢?	ミガキ? 粘土組織。	ミガキ?	黄灰 2.5Y 6/1	傾き不詳。内面剥落。
27	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。ナデ? 波状口縁。	ナデ?	にぶい橙 5YR 6/4	
28	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。口頸部アルカ属具条痕。肩部刺突文。胴部ケズリ。	ナデ。	にぶい褐 7.5YR 6/3	
29	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。アルカ属具条痕。	ナデ。	黄灰 2.5Y 5/1	傾き不詳。
30	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。口頸部ナデ。肩部刺突文。胴部ケズリ。	ナデ。	黄灰 2.5Y 6/1	傾き不詳。外面煤付着。
31	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。口頸部アルカ属具条痕。肩部刺突文。胴部ケズリ。	ナデ。	灰黄 2.5Y 6/2	傾き不詳。
32	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属具条痕。胴部ケズリ。焼成後穿孔1孔。	丁寧なナデ。	褐灰 10YR 4/1	外面煤付着。
33	縄文土器	深鉢	ナデ? 肩部沈線による段。	ナデ?	灰黄 2.5Y 6/2	傾き不詳。
34	縄文土器	深鉢	ナデ垂下刺突文2条。	ナデ。	褐灰 10YR 4/1	傾き不詳。外面煤付着。
35	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。肩部刺突文。胴部ケズリ。	ナデ。	黄灰 2.5Y 5/1	傾き不詳。
36	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。肩部貼付突帯に刻目。	ケズリのちユビオサエ。	黒 5Y 2/1	傾き不詳。
37	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属具条痕。肩部刻目突帯文。胴部ケズリ。	アルカ属具条痕?	にぶい褐 7.5YR 5/3	傾き不詳。
38	縄文土器	深鉢	縦方向ケズリ。	ケズリのちナデ。	灰黄 2.5Y 6/2	傾き不詳。
39	縄文土器	深鉢	波状口縁。口唇部刻目。直下に刻目突帯文。口頸部ナデ。肩部沈線による段。胴部ケズリ。	口縁端部に沈線1条。ナデ。	褐灰 10YR 5/1	外面煤付着。
40	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。直下に刻目突帯文による段。頸部アルカ属具条痕。肩部に沈線による段。胴部ケズリ。	ナデ。	灰白 5Y 7/1	内外面煤付着。
41	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。頸部アルカ属具条痕。	口縁端部に沈線1条。ナデ。	灰黄褐 10YR 5/2	外面煤付着。
42	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。頸部アルカ属具条痕。肩部刻目突帯文。胴部ケズリ。	口縁端部に沈線1条。ナデ。	灰黄 2.5Y 7/2	内外面煤付着。
43	縄文土器	深鉢	口唇部刻目? 直下に刻目突帯文。頸部ケズリ。	口縁端部に沈線1条。ナデ。	褐灰 10YR 4/2	
44	縄文土器	深鉢	口唇部刻目? 直下に刻目突帯文。頸部ケズリ。	口縁端部に沈線1条。ナデ。	灰黄 2.5Y 7/2	傾き不詳。
45	縄文土器	深鉢	口唇部刻目? 直下に刻目突帯文。頸部ケズリ。	口縁端部に沈線1条。ナデ。	灰黄褐 10YR 6/2	傾き不詳。
46	縄文土器	深鉢	口唇部刻目? 直下に刻目突帯文。頸部ケズリ。	口縁端部に沈線1条。ナデ。	黄灰 2.5Y 4/1	傾き不詳。
47	縄文土器	浅鉢?	波状口縁。口縁端部直下に刻目突帯文。頸部ナデ?	ナデ。	灰白 10YR 8/2	傾き不詳。
48	縄文土器	深鉢	波状口縁。口唇部刻目。直下に刻目突帯文。頸部ナデ。肩部沈線による段。胴部ケズリ。	ナデのちミガキ?	黄灰 2.5Y 4/1	
49	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。頸部ケズリ?	ナデのちミガキ?	灰黄 2.5Y 7/2	
50	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。頸部アルカ属具条痕。	ナデ。	灰白 10YR 7/1	傾き不詳。
51	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。頸部アルカ属具条痕。	ナデ。	黒 N1.5/	傾き不詳。外面煤付着。
52	縄文土器	深鉢	口縁端部直下に刻目突帯文。頸部ケズリ?	ナデのちミガキ?	灰黄 2.5Y 6/2	傾き不詳。
53	縄文土器	深鉢	口縁端部直下に刻目突帯文。頸部ケズリ?	ナデ。	灰黄 2.5Y 6/2	傾き不詳。
54	縄文土器	深鉢	口縁端部直下に刻目突帯文。頸部ナデ?	ナデ。	黒褐 2.5Y 3/1	傾き不詳。
55	縄文土器	深鉢	口縁端部直下に刻目突帯文。頸部アルカ属具条痕。	ナデ。	灰オリーブ 5Y 6/2	傾き不詳。
56	縄文土器	深鉢	口縁端部直下に刻目突帯文。頸部ナデ?	ナデ。	灰黄褐 10YR 5/2	傾き不詳。内外面煤付着。
57	縄文土器	深鉢	口縁端部直下に刻目突帯文。頸部ナデ?	ナデ。	オリーブ黒 5Y 3/1	傾き不詳。
58	縄文土器	鉢	口縁端部直下に刻目突帯文。頸部ナデ?	ナデ。	灰白 2.5Y 8/2	
59	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。頸部ナデ。	ナデ。	黄灰 2.5Y 6/1	
60	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。頸部ナデ?	ナデ。	灰黄 2.5Y 6/2	
61	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。頸部ナデ?	ナデ?	灰黄褐 10YR 5/2	
62	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。胴部アルカ属具条痕。	ナデ。	浅黄 2.5Y 7/4	内外面煤付着。
63	縄文土器	深鉢	口縁端部直下に刻目突帯文。頸部アルカ属具条痕。胴部ケズリ。	頸部ナデ。胴部工具ナデ?	灰黄褐 10YR 5/2	焼成後穿孔1孔。
64	縄文土器	深鉢	口縁端部直下に刻目突帯文。頸部ケズリのちナデ?	ケズリ?	灰黄 2.5Y 6/2	
65	縄文土器	深鉢	口縁端部直下に刻目突帯文。頸部ナデ。胴部ケズリ。	工具ナデ。	黒 10YR 2/1	内外面煤付着。
66	縄文土器	鉢	口縁端部直下に刻目突帯文。胴部ケズリ。	ナデのちミガキ?	灰白 2.5Y 8/2	外面煤付着。
67	縄文土器	深鉢	口縁端部直下に刻目突帯文。胴部ケズリ。	ミガキ。	灰黄 2.5Y 6/2	傾き不詳。
68	縄文土器	深鉢	口縁端部直下に刻目突帯文。胴部ナデ?	ナデ。	灰白 5Y 7/1	傾き不詳。
69	縄文土器	浅鉢	口縁部上下端に沈線1条。ミガキ。	ミガキ。	褐灰 10YR 4/1	
70	縄文土器	浅鉢	口縁部上端に沈線1条。下端に2条。ミガキ。	ミガキ。	にぶい黄橙 10YR 7/3	傾き不詳。
71	縄文土器	浅鉢	ナデ。	口縁端部に沈線1条。ナデ。	にぶい褐 7.5YR 6/3	傾き不詳。
72	縄文土器	浅鉢	波状口縁。ミガキ?	口縁上下端に沈線各1条。ミガキ?	黄灰 2.5YR 5/1	傾き不詳。
73	縄文土器	浅鉢	ミガキ?	口縁端部に沈線1条。ミガキ。	褐灰 10YR 4/1	傾き不詳。
74	縄文土器	浅鉢	ミガキ?	口縁端部に沈線1条。ミガキ。	黒褐 2.5Y 3/1	
75	縄文土器	浅鉢	ミガキ?	ミガキ。	黄灰 2.5Y 4/1	傾き不詳。
76	縄文土器	浅鉢	ミガキ?	ミガキ。	黄灰 2.5Y 4/1	傾き不詳。
77	縄文土器	浅鉢	ミガキ?	ミガキ。	オリーブ黒 5Y 3/1	傾き不詳。
78	縄文土器	浅鉢	ミガキ?	ミガキ。	褐灰 10YR 5/1	口縁部煤付着。
79	縄文土器	浅鉢	口縁部ナデ。体部ケズリ。	口縁部ナデ。体部ミガキ?	暗灰黄 2.5Y 5/2	傾き不詳。
80	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	灰黄褐 10YR 6/2	傾き不詳。外面煤付着。
81	縄文土器	浅鉢	口縁部ミガキ。体部アルカ属具条痕。	ミガキ。	灰黄 2.5Y 6/2	傾き不詳。
82	縄文土器	深鉢	体部ケズリ。	ミガキ。	灰白 2.5Y 7/1	傾き不詳。
83	縄文土器	浅鉢	ユビオサエ。	ナデ?	灰 5Y 6/1	傾き不詳。

押図 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
84	縄文土器	深鉢	ケズリのちナデ?	口縁端部沈線1条。ナデ。	にぶい黄橙 10YR 6/3	傾き不詳。
85	縄文土器	深鉢	口唇部刻目? ナデ?	ナデ。	灰黄 2.5Y 6/2	傾き不詳。
86	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	灰白 2.5Y 7/1	傾き不詳。
87	縄文土器	深鉢?	ナデ?	ナデ?	灰黄褐 10YR 6/2	傾き不詳。
88	縄文土器	深鉢	ケズリ。	ナデ?	黒褐 2.5Y 3/1	傾き不詳。
89	縄文土器	鉢	ミガキ?	ミガキ?	暗灰黄 2.5Y 5/2	傾き不詳。
90	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	灰黄褐 10YR 6/2	傾き不詳。外面煤付着。
91	縄文土器	浅鉢?	ミガキ?	ミガキ?	黄灰 2.5Y 6/1	傾き不詳。
92	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	オリーブ黒 5Y 3/1	傾き不詳。
93	縄文土器	浅鉢?	ミガキ。	ミガキ。	黒褐 2.5Y 3/1	傾き不詳。口縁部煤付着。
94	縄文土器	浅鉢?	ミガキ。	ミガキ。	黒 2.5Y 2/1	傾き不詳。
95	縄文土器	鉢	ミガキ。	ミガキ?	灰褐 7.5YR 5/2	
96	縄文土器	鉢	ケズリのちミガキ。	ミガキ。	褐灰 10YR 4/1	
97	縄文土器	鉢	ミガキ。	ミガキ。	灰 5Y 4/1	
98	縄文土器	鉢	ミガキ。	不詳。	灰黄 2.5Y 6/2	
99	縄文土器	深鉢	ユビオサエのち体部下端-底部ケズリ。	ユビオサエのち体部ナデ。	灰黄 2.5Y 6/2	
100	縄文土器	浅鉢	ケズリ。	ケズリ。	にぶい橙 7.5YR 6/3	
101	縄文土器	浅鉢	ミガキ?	ミガキ?	灰黄褐 10YR 5/2	
102	縄文土器	鉢?	ミガキ。	ミガキ。	灰白 10YR 7/1	
103	縄文土器	深鉢?	ミガキ?	ミガキ?	黄灰 2.5Y 6/1	傾き不詳。外面煤付着。
104	縄文土器	深鉢	ミガキ。	ミガキ。	にぶい黄橙 10YR 6/3	傾き不詳。外面煤付着。
105	縄文土器	壺	頸部上半ミガキ、丹塗り。ナデ。	ミガキ。丹塗り。	にぶい黄橙 10YR 7/2	
106	縄文土器	鉢	ミガキ。丹塗り。	ミガキ。丹塗り。	明赤橙 2.5YR 5/6	黒斑。
107	縄文土器	浅鉢	口縁部上端沈線1条、下端2条。口縁部ミガキ。体部ナデ?	口縁部ミガキ。	灰 5Y 4/1	
108	縄文土器	深鉢	口唇部刻目? 直下に刻目突帯文。頸部アルカ属具条痕。	ナデ。	灰黄褐 10YR 5/2	傾き不詳。
109	縄文土器	深鉢			にぶい黄橙 10YR 7/3	
110	縄文土器	深鉢			灰黄褐 10YR 5/2	
111	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。刻目突帯文。	ミガキ?	にぶい黄橙 10YR 6/4	傾き不詳。
112	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属具条痕。胴部ケズリ。	ナデ。	にぶい黄橙 10YR 5/3	傾き不詳。
113	縄文土器	深鉢	アルカ属具条痕。	ナデ。	灰白 2.5Y 8/2	傾き不詳。
114	縄文土器	浅鉢	波状口縁。ミガキ。	ナデ。	黄灰 2.5Y 6/1	焼成後穿孔3孔。
115	縄文土器	深鉢	アルカ属具条痕。	ナデ。	黒褐 10YR 3/1	傾き不詳。
115	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属具条痕。胴部ケズリ。	ナデ。	にぶい黄橙 10YR 7/2	傾き不詳。
116	縄文土器	深鉢	胴部ケズリ。底部無調整。	工具ナデ。	灰褐 7.5YR 5/2	
117	縄文土器	深鉢	上半アルカ属具条痕。下半ナデ。	上半アルカ属具条痕。下半ナデ。	にぶい黄橙 7.5YR 7/4	内外面煤付着。
118	縄文土器	深鉢	アルカ属具条痕。	ナデ。	黄灰 2.5Y 4/1	傾き不詳。内外面煤付着。
119	縄文土器	深鉢	アルカ属具条痕。	ナデ。	黄灰 2.5Y 4/1	傾き不詳。内外面煤付着。
120	縄文土器	深鉢	アルカ属具条痕。	アルカ属具条痕。	灰黄 2.5Y 7/2	傾き不詳。
121	縄文土器	浅鉢?	ミガキ。	ミガキ。	黒褐 2.5Y 3/1	傾き不詳。
122	縄文土器	深鉢	アルカ属具条痕。	ナデ。	黒 7.5Y 2/1	傾き不詳。
123	縄文土器	深鉢	アルカ属具条痕。	ナデ。	灰黄 2.5Y 6/2	傾き不詳。
124	縄文土器	深鉢	アルカ属具条痕。	アルカ属具条痕?	黒褐 2.5Y 3/1	傾き不詳。
125	縄文土器	浅鉢?	ナデ?	ナデ?	灰白 2.5Y 8/1	傾き不詳。
126	縄文土器	浅鉢?	ナデ?	ナデ?	灰白 7.5YR 8/1	傾き不詳。
127	縄文土器	深鉢	アルカ属具条痕?	アルカ属具条痕?	灰黄褐 10YR 6/2	傾き不詳。外面煤付着。
128	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。ナデ。	ナデ。	褐灰 10YR 4/1	傾き不詳。焼成後穿孔1孔。
129	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。頸部アルカ属具条痕。胴部刻突文?	ナデ。	灰白 2.5Y 8/1	傾き不詳。
130	縄文土器	深鉢	上半アルカ属具条痕。下半ケズリ。	ケズリ?	黒褐 2.5Y 3/1	傾き不詳。内外面煤付着。
131	縄文土器	深鉢?	ケズリ。	ナデ。	褐灰 10YR 6/1	傾き不詳。
132	縄文土器	深鉢?	アルカ属具条痕。	ナデ。	暗灰 N 3/	傾き不詳。
133	縄文土器	深鉢	アルカ属具条痕。	ミガキ。	にぶい黄橙 10YR 7/2	傾き不詳。
134	縄文土器	深鉢	ナデ?	ナデ?	黄灰 2.5Y 4/1	傾き不詳。
135	縄文土器	浅鉢	波状口縁。突起有り。ミガキ。	ミガキ。	灰 N 3/	傾き不詳。
136	縄文土器	浅鉢	波状口縁。突起有り。口縁部上下端に沈線各1条。ミガキ。	口縁端部に沈線1条。ミガキ。	灰白 10YR 8/2	傾き不詳。
137	縄文土器	浅鉢?	体部ケズリのちミガキ? 底部ナデ?	ミガキ?	暗灰黄 2.5Y 5/2	
138	縄文土器	浅鉢?	底部ケズリ?	ナデ?	灰白 10YR 8/2	剥落顕著。
139	縄文土器	鉢?	アルカ属具条痕。	ミガキ?	にぶい黄橙 10YR 7/2	
140	縄文土器	浅鉢?	底部ケズリ。	不詳。	橙 5YR 6/6	剥落顕著。
141	縄文土器	深鉢	アルカ属具条痕。	ナデ?	にぶい黄橙 10YR 7/3	傾き不詳。
142	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。アルカ属具条痕。	頸部ナデ。胴部工具ナデ。	褐灰 10YR 5/1	傾き不詳。
143	縄文土器	深鉢?	アルカ属具条痕。	ナデ。	灰黄 2.5Y 7/2	傾き不詳。
144	縄文土器	浅鉢	頸部沈線2条。ミガキ。	口縁部沈線2条。ミガキ。	灰白 10YR 8/2	傾き不詳。
145	縄文土器	浅鉢?	ナデ。	ナデ。	灰黄褐 10YR 5/2	傾き不詳。
146	縄文土器	深鉢?	口唇部刻目? アルカ属具条痕?	工具ナデ?	褐灰 10YR 4/1	傾き不詳。
147	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属具条痕。頸部刻突文。	ナデ?	灰白 2.5Y 8/1	傾き不詳。
148	縄文土器	深鉢?	頸部アルカ属具条痕。頸部刻突文。胴部ナデ?	ナデ。	黄灰 2.5Y 7/3	傾き不詳。
149	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	暗灰 N 3/	
150	縄文土器	浅鉢	口縁端部沈線1条。ミガキ。	ミガキ。	黄灰 2.5Y 6/1	傾き不詳。
151	縄文土器	深鉢	口縁端部直下に刻目突帯文。頸部アルカ属具条痕。	ナデ。	灰黄褐 10YR 6/2	
152	弥生土器	壺	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。頸部ミガキ。	ナデ。	にぶい橙 7.5YR 7/4	
153	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。頸部ナデ。	ナデ。	橙 2.5YR 6/6	傾き不詳。
154	縄文土器	深鉢	口唇部刻目? 直下に刻目突帯文。	不詳。	灰黄褐 10YR 6/2	傾き不詳。剥落顕著。
155	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。	ナデ。	褐灰 7.5YR 6/2	傾き不詳。剥落顕著。
156	縄文土器	深鉢	口縁端部直下に刻目突帯文。頸部ナデ?	ナデ?	灰黄褐 10YR 5/2	傾き不詳。
157	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。	ナデ。	灰白 2.5Y 7/1	傾き不詳。外面剥落。
158	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。アルカ属具条痕。	丁寧ナデ。	灰黄褐 10YR 6/2	傾き不詳。

押図 番号	種別	器種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
159	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。ナデ?	不詳。	にぶい橙 7.5YR 7/3	傾き不詳。内面剥落。
160	縄文土器	深鉢	肩部に刻目突帯文。	不詳。	灰白 2.5Y 7/1	傾き不詳。剥落顕著。
161	縄文土器	深鉢	口縁部直下に貼付突帯文。ミガキ?	ミガキ。	灰黄褐 10YR 6/2	傾き不詳。外面剥落。
162	縄文土器	深鉢	ナデ?粘土紐痕。	ナデ?	灰白 2.5Y 8/2	傾き不詳。
163	縄文土器	深鉢	ケズリのちミガキ?	工具ナデ?	黄灰 2.5Y 5/1	傾き不詳。
164	縄文土器	深鉢	口縁部直下に刻目突帯文。頭部不詳。	ミガキ。	明褐灰 7.5YR 7/1	内外面煤付着。
165	縄文土器	深鉢	口縁部直下に刻目突帯文。頭部ミガキ?	ミガキ?	灰褐 7.5YR 5/2	傾き不詳。
166	縄文土器	深鉢	口縁部直下に刻目突帯文。頭部ミガキ?	ミガキ。	黒褐 2.5Y 3/1	傾き不詳。焼成後穿孔1孔。
167	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。頭部アルカ 属貝条痕。	ミガキ?	灰黄 2.5Y 6/2	傾き不詳。
168	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。ナデ。	口縁部に沈線1条。ナデ。	灰黄 2.5Y 6/2	傾き不詳。
169	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。アルカ属貝条痕。	口縁部に沈線1条。ナデ。	暗灰黄 2.5Y 5/2	傾き不詳。
170	縄文土器	深鉢	口縁部直下に刻目突帯文。アルカ属貝条痕。	口縁部に沈線1条。ナデ。	暗灰黄 2.5Y 5/2	傾き不詳。
171	縄文土器	深鉢	口縁部直下に刻目突帯文。ナデ?	口縁部に沈線1条。ミガキ?	黒褐 7.5YR 3/1	傾き不詳。
172	縄文土器	深鉢?	口縁部直下に刻目突帯文。ナデ?	ナデ?	灰黄 2.5Y 7/2	傾き不詳。
173	縄文土器	深鉢	沈線3条。不詳。	不詳。	にぶい黄 2.5Y 6/3	傾き不詳。
174	縄文土器	深鉢	頭部ミガキ。刺突文。	頭部ミガキ?胴部ケズリ。	浅黄 2.5Y 7/3	傾き不詳。
175	縄文土器	深鉢	肩部刺突文。胴部ケズリ。	ナデ。	灰 5Y 4/1	傾き不詳。
176	縄文土器	深鉢	頭部アルカ属貝条痕。肩部に沈線による段。 胴部ケズリ。	頭部ケズリ?胴部ナデ。	にぶい黄橙 10YR 7/2	傾き不詳。外面煤付着。
177	縄文土器	深鉢	頭部アルカ属貝条痕。肩部刺突文。胴部ケズリ。	ミガキ?	灰黄 2.5Y 6/2	傾き不詳。
178	縄文土器	深鉢	ケズリのちミガキ?	ケズリ。	褐灰 10YR 4/1	傾き不詳。
179	縄文土器	浅鉢	口縁部工具ナデ。下端に沈線による段。ケズ リのちミガキ。	口縁部に沈線1条。工具ナデ?	黒褐 2.5Y 3/1	
180	縄文土器	浅鉢	口縁部上下端に沈線各1条。ミガキ。	ミガキ。	黒褐 2.5Y 3/1	
181	縄文土器	深鉢	口縁部下端に沈線1条。ミガキ?	ミガキ。	灰 5Y 4/1	傾き不詳。
182	縄文土器	浅鉢	口縁部上端に沈線による段。ミガキ。	ミガキ。	黒褐 2.5Y 3/1	
183	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	口縁部に沈線による段。ミガキ。	灰 5Y 4/1	
184	縄文土器	浅鉢	波状口縁。口縁部ナデ。体部-底部ミガキ。	口縁部に沈線による段。口縁部ナデ。体部 -底部ミガキ。	灰黄 2.5Y 7/2	焼成前穿孔1孔。
185	縄文土器	浅鉢	ケズリのちミガキ?	ミガキ。	褐灰 10YR 4/1	
186	縄文土器	浅鉢	ミガキ?	ミガキ?	にぶい黄橙 10YR 7/2	焼成前穿孔1孔。外面煤 付着。
187	縄文土器	浅鉢	ミガキ?	ミガキ。	灰白 10YR 7/1	傾き不詳。
188	縄文土器	鉢	体部ミガキ。	体部ミガキ。	黄灰 2.5Y 6/1	口縁部剥落。
189	弥生土器	壺	頭部沈線2条。焼成後穿孔1孔。	不詳。	橙 5YR 6/6	傾き不詳。剥落顕著。
190	弥生土器	甕	口唇部刻目。	不詳。	にぶい橙 7.5YR 7/3	傾き不詳。剥落顕著。
191	弥生土器	壺	頭部-胴部へラ描き沈線文。口縁部-胴部ヨ コミガキ。	ナデ。	淡黄 2.5Y 8/3	剥落顕著。
192	弥生土器	壺	頭部に段。へらミガキ。	ナデ。	灰白 10YR 8/1	
193	弥生土器	壺	頭部に段。へらミガキ。	ナデ。	灰白 7.5YR 8/2	
194	弥生土器	壺?	頭部に段。	不詳。	灰白 7.5YR 8/2	剥落顕著。
195	弥生土器	壺	頭部に段。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。頭部へらミガキ。胴部ナデ?	橙 5YR 6/6	外面剥落。
196	弥生土器	壺	頭部に段。ヨコミガキ。	口縁部ヨコナデ。	橙 5YR 7/6	傾き不詳。剥落顕著。
197	弥生土器	壺	ナデ?	不詳。	明赤褐 2.5YR 5/8	傾き不詳。
198	弥生土器	壺	ナデ。	ナデ?	明赤褐 2.5YR 5/8	傾き不詳。
199	弥生土器	壺	ナデ。	ナデ。	橙 5YR 6/6	傾き不詳。
200	弥生土器	壺	ヨコナデ?	ヨコナデ?	橙 2.5YR 6/6	傾き不詳。
201	弥生土器	壺	ヨコナデ?	ヨコナデ?	橙 5YR 6/8	傾き不詳。
202	弥生土器	壺	沈線1条。ミガキ。	ナデ。	橙 5YR 6/6	傾き不詳。
203	弥生土器	壺	沈線1条。ナデ?	ナデ?	灰白 7.5YR 8/1	傾き不詳。
204	弥生土器	壺	沈線1条。ヨコミガキ。	ナデ。	赤褐 5YR 4/6	傾き不詳。
205	弥生土器	壺	沈線1条。ミガキ。	ナデ。	橙 5YR 7/8	傾き不詳。
206	弥生土器	壺	沈線1条。ナデ?	不詳。	橙 2.5YR 6/8	傾き不詳。
207	弥生土器	壺	沈線1条。ナデ?	ナデ。	にぶい黄橙 10YR 7/3	傾き不詳。
208	弥生土器	壺	沈線1条。ヨコミガキ。	ナデ?	明赤褐 2.5YR 5/6	傾き不詳。
209	弥生土器	壺	沈線1条。ナデ?	ユビオサエ。	橙 5YR 7/6	傾き不詳。
210	弥生土器	壺	沈線3条。ナデ?	へラケズリ?	浅黄橙 7.5YR 8/4	傾き不詳。
211	弥生土器	壺	沈線2条。ヨコミガキ。	ユビオサエ。	明赤褐 2.5YR 5/6	傾き不詳。
212	弥生土器	壺	へら描き木葉文。ナデ?	ユビオサエ。	にぶい黄橙 10YR 6/4	傾き不詳。
213	弥生土器	壺	へら描き木葉文。不詳。	ナデ?	灰褐 7.5YR 4/2	傾き不詳。
214	弥生土器	壺	沈線1条。ナナメミガキ。	ヨコミガキ?	にぶい黄橙 10YR 7/3	傾き不詳。
215	弥生土器	壺	沈線1条。ヨコミガキ。	ナデ?	明赤褐 2.5YR 5/6	傾き不詳。
216	弥生土器	壺	肩部沈線による段。ヨコミガキ。	ユビオサエ。ナデ。	にぶい橙 7.5YR 7/4	傾き不詳。
217	弥生土器	壺	沈線1条。垂下沈線2条。	ナデ。	橙 5YR 7/6	傾き不詳。
218	弥生土器	壺	垂下沈線3条。	ナデ。	橙 5YR 7/6	
219	弥生土器	壺?	ナデ?	ナデ?	浅黄橙 7.5YR 8/4	
220	弥生土器	壺?	体部ヨコミガキ。底部ナデ?	ヨコミガキ?	浅黄橙 10YR 8/3	
221	弥生土器	壺?	体部ナデ?	不詳。	灰黄 2.5Y 6/2	剥落顕著。
222	弥生土器	甕?	体部下端面取状工具ナデ。	ナデ。オサエ。	にぶい橙 7.5YR 7/4	
223	弥生土器	壺?	体部タテミガキ。底部ミガキ。	タテケズリのちナデ?	橙 5YR 6/6	
224	弥生土器	甕?	ナデ?	ナデ?	橙 7.5YR 7/6	
225	弥生土器	甕?	ナデ?	ナデ	褐灰 7.5YR 6/1	
226	弥生土器	甕	体部タテミガキ。底部ナデ?	ナデ	浅黄橙 7.5YR 8/4	
227	弥生土器	甕	ナデ?	オサエ。ナデ。	橙 5YR 7/6	
228	弥生土器	甕	ナデ?	ナデ?	にぶい橙 7.5YR 7/3	剥落顕著。外面煤付着。
229	弥生土器	甕	ナデ?	ナデ?	灰白 10YR 8/2	
230	弥生土器	甕	体部下端面取状工具ナデ。底部ナデ?	タテケズリ。	灰白 10YR 8/2	
231	弥生土器	甕?	ナデ?	ナデ?	にぶい橙 7.5YR 7/4	
232	弥生土器	甕?	ナデ?	ナデ。	浅黄橙 10YR 8/3	

挿図 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
233	弥生土器	甕?	ナデ。	ナデのちタデミガキ?	橙 2.5YR 7/8	
234	弥生土器	甕?	不詳。	体部ナデ。底部オサエ。	橙 2.5YR 7/6	外面煤付着。剥落顕著。
235	弥生土器	鉢?	ミガキ?	ヨコミガキ?	淡橙 5YR 8/3	
236	弥生土器	甕?	ナデ?	ナデ?	にぶい黄橙 10YR 7/4	
237	弥生土器	甕	体部ナデ。底部ナデ。	体部ナデ。底部オサエ。	橙 2.5YR 6/6	
238	弥生土器	甕?	体部面取状工具ナデ。底部ナデ?	ナデ。	にぶい橙 5YR 8/3	
239	弥生土器	壺?	ナデ。	ナデ。	浅黄橙 10YR 8/3	
240	弥生土器	甕?	ナデ。	不詳。	灰黄 2.5Y 7/2	内面剥落。
241	弥生土器	甕	ナデ。	ナデ。	にぶい橙 7.5YR 7/4	底部焼成後穿孔1孔。
242	弥生土器	高杯	脚柱部貼付突帯。ナデ。	ナデ。	灰白 10YR 8/1	
243	弥生土器	鉢	ナデ?	上半ヨコケズリ。下半オサエ。	灰白 10YR 8/1	内面剥落。
244	弥生土器	甕	口唇部上下端刻目。口縁部オサエ。頸部へラ描き沈線文。肩部沈線による段。ヨコミガキ。	口縁部オサエ。体部ヨコミガキ。	橙 5YR 6/6	外面被熱痕。
245	弥生土器	甕	口唇部刻目。肩部沈線による段。	ナデ、オサエ。	にぶい黄橙 10YR 6/3	傾き不詳。
246	弥生土器	甕	口唇部刻目。オサエ。肩部沈線による段。ヨコナデ。	口縁部オサエ。体部ナデ。	にぶい橙 7.5YR 6/4	傾き不詳。
247	弥生土器	甕	口唇部上下端刻目。へラ描き沈線文。ナデ。	ナデ、オサエ。	灰黄褐 10YR 4/2	
248	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。頸部沈線による段。ナデ、オサエ。	ナデ、オサエ。	橙 5YR 6/6	
249	弥生土器	甕	口唇部刻目。ナデ?	ナデ、オサエ。	にぶい黄橙 10YR 6/3	
250	弥生土器	甕	口唇部刻目。頸部段、刻目。口縁部~頸部ヨコナデ。胴部ナメミガキ。	ナデ?	褐 7.5YR 4/3	
251	弥生土器	甕	口唇部刻目。頸部段、刻目。ナデ?	ナデ。	浅黄橙 7.5YR 8/4	外面煤付着。補修痕。
252	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。オサエ。	ナデ。	にぶい黄橙 10YR 7/4	傾き不詳。
253	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ナデ。	ナデ。	にぶい黄橙 10YR 6/3	傾き不詳。
254	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。オサエ。	ナデ。	にぶい黄橙 10YR 7/2	傾き不詳。
255	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ナデ。	ナデ。	灰白 7.5YR 8/2	傾き不詳。
256	弥生土器	甕	口唇部刻目? 粘土接合による段。ナデ。	ナデ。	にぶい黄橙 10YR 7/2	傾き不詳。剥落顕著。
257	弥生土器	甕	頸部段。不詳。	不詳。	浅黄橙 7.5YR 8/2	傾き不詳。剥落顕著。
258	弥生土器	甕	頸部段、沈線2条。ナデ。	ナデ?	灰オリーブ 7.5Y 6/2	傾き不詳。
259	弥生土器	甕	頸部段。不詳。	ナデ。	灰白 10YR 8/1	傾き不詳。外面剥落。
260	弥生土器	甕	頸部段、刻目。ナデ?	不詳。	橙 5YR 7/6	傾き不詳。剥落顕著。
261	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ヨコナデ。	ヨコナデ。	明赤褐 5YR 5/6	傾き不詳。
262	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ヨコナデ。	ヨコナデ。	にぶい橙 7.5YR 6/4	傾き不詳。
263	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ナデ。	ナデ。	赤橙 10R 6/6	傾き不詳。
264	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ナデ。	ナデ。	にぶい黄橙 10YR 7/2	傾き不詳。
265	弥生土器	甕	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。	ナデ。	灰白 2.5Y 8/1	傾き不詳。外面剥落。
266	弥生土器	甕	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。	不詳。	浅黄橙 7.5YR 8/4	傾き不詳。剥落顕著。
267	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ナデ。	ナデ。	灰白 10YR 8/2	傾き不詳。
268	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ナデ。	ナデ。	灰白 2.5Y 8/2	傾き不詳。
269	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ヨコナデ。	ヨコナデ。	褐灰 7.5YR 6/1	傾き不詳。
270	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ナデ。	ナデ。	にぶい黄褐 10YR 4/3	傾き不詳。
271	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ナデ?	ナデ?	灰白 10YR 8/2	傾き不詳。剥落顕著。
272	弥生土器	甕	口縁部直下に刻目突帯文。ナデ?	ナデ?	灰白 10YR 8/1	傾き不詳。
273	弥生土器	甕	口縁部直下に刻目突帯文。ナデ?	ナデ?	灰黄褐 10YR 5/2	傾き不詳。
274	弥生土器	甕	口縁部直下に刻目突帯文。ナデ?	ナデ?	黄橙 10YR 8/6	傾き不詳。
275	弥生土器	甕	口唇部刻目。	ナデ。	灰白 2.5Y 7/1	傾き不詳。外面剥落。
276	弥生土器	甕	口唇部刻目。口縁部ナデ。頸部ヨコミガキ?	ナデ。	にぶい橙 7.5YR 7/4	傾き不詳。
277	弥生土器	甕	口唇部刻目。ナデ。	ナデ。	明赤褐 2.5YR 5/6	傾き不詳。剥落顕著。
278	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部ヨコミガキ。	口縁部ヨコナデ。体部ナデ?	にぶい黄橙 10YR 6/3	傾き不詳。
279	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	口縁部ヨコナデ。体部ナデ?	にぶい黄橙 10YR 6/3	傾き不詳。内面剥落。
280	弥生土器	甕	ナデ?	ナデ?	にぶい黄褐 10YR 5/3	傾き不詳。剥落顕著。
281	弥生土器	甕	口唇部刻目。不詳。	不詳。	灰白 7.5YR 8/2	傾き不詳。剥落顕著。
282	弥生土器	甕	ナデ?	ナデ?	黄橙 10YR 8/6	傾き不詳。剥落顕著。
283	弥生土器	甕	頸部沈線2条?	不詳。	にぶい橙 2.5YR 6/4	傾き不詳。剥落顕著。
284	弥生土器	甕	頸部ヨコミガキ?	ナデ?	橙 5YR 7/6	傾き不詳。
285	弥生土器	甕	ナデ?	ナデ。	浅黄橙 7.5YR 8/6	傾き不詳。
286	弥生土器	壺	頸部段。へラ描き沈線文。ナデ。	不詳。	にぶい黄橙 10YR 7/3	傾き不詳。
287	弥生土器	壺	頸部段。沈線2条。ナデ。	不詳。	明赤褐 2.5YR 5/8	傾き不詳。
288	弥生土器	壺?	頸部段。ヨコミガキ。	タデハケメ?	橙 5YR 6/6	傾き不詳。
289	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。頸部段、刻目。ナデ?	不詳。	灰黄褐 10YR 5/2	剥落顕著。
290	弥生土器	甕	ヨコミガキ。	ヨコナデ?	橙 5YR 7/6	傾き不詳。
291	弥生土器	甕	ナデ?	ナデ?	浅黄橙 10YR 8/3	傾き不詳。
292	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ナデ?	ナデ。	灰黄褐 10YR 4/2	傾き不詳。
293	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ナデ。	ナデ。	にぶい黄橙 10YR 7/3	傾き不詳。
294	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ヨコナデ?	ヨコナデ?	灰黄褐 10YR 6/2	傾き不詳。
295	弥生土器	甕	口唇部刻目。ナデ?	ヨコナデ。	にぶい橙 7.5YR 7/4	傾き不詳。
296	弥生土器	甕	口唇部刻目。ナデ。	不詳。	にぶい黄橙 10YR 6/3	傾き不詳。内面剥落。
297	弥生土器	甕	口縁部直下に刻目突帯文。ナデ?	オサエ。	褐灰 10YR 6/1	傾き不詳。剥落顕著。
298	弥生土器	壺	ナデ?	ナデ?	灰白 2.5Y 7/1	
299	弥生土器	甕	ナデ。	ナデ。	橙 5YR 7/6	焼成後穿孔1孔。
300	弥生土器	甕?	ナデ。	ナデ。	にぶい黄橙 10YR 7/4	剥落顕著。
301	弥生土器	壺	ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	橙 7.5Y 7/6	傾き不詳。
302	弥生土器	壺	不詳。	不詳。	にぶい褐 7.5YR 5/3	傾き不詳。剥落顕著。
303	弥生土器	壺?	ヨコミガキ?	ヨコミガキ?	にぶい赤橙 5YR 4/3	傾き不詳。
304	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ナデ。	ナデ?	にぶい橙 5YR 6/4	傾き不詳。
305	弥生土器	壺?	沈線1条。へラ描き沈線文。不詳。	不詳。	にぶい黄橙 10YR 7/3	傾き不詳。剥落顕著。
306	弥生土器	甕?	格子状へラ描き沈線文。不詳。	不詳。	にぶい橙 7.5YR 7/4	傾き不詳。剥落顕著。
307	弥生土器	甕	突帯上面に沈線1条。刻目不詳。	不詳。	にぶい橙 7.5YR 6/4	傾き不詳。剥落顕著。
308	弥生土器	甕	口縁部直下に突帯。刻目不詳。	不詳。	灰褐 7.5YR 6/2	傾き不詳。剥落顕著。

押図 番号	種別	器種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
309	弥生土器	甕	口縁端部直下に突帯。刻目不詳。	オサエのちミガキ?	灰黄褐 10YR 5/2	傾き不詳。剝落顕著。
310	弥生土器	壺	体部ヨコミガキ。底部ミガキ。	オサエ、ナデ。	にふい黄橙 10YR 5/2	
311	弥生土器	蓋	タテミガキ。	タテミガキ。	灰黄 2.5Y 7/2	傾き不詳。
312	弥生土器	甕?	ナデ?	工具ナデ。	にふい橙 7.5YR 7/4	
313	弥生土器	甕?	ナデ。	ナデ?	にふい褐 7.5YR 6/3	外面煤付着。
314	弥生土器	甕	ナデ。	ナデ。	浅黄橙 7.5YR 8/4	内外面煤付着。底部内面 剝底。
315	弥生土器	甕?	ナデ。	不詳。	浅黄橙 7.5YR 8/3	
316	弥生土器	甕	口唇部刻目。口縁部オサエ、ナデ。体部タテ ミガキ。	ハケメのちナデ?	橙 5YR 6/6	
317	弥生土器	甕	ナデ?	ナデ?	灰白 10YR 7/1	傾き不詳。
318	弥生土器	甕	口唇部刻目。口縁部ナデ。体部タテミガキ。	タテミガキ?	浅黄橙 7.5YR 8/3	傾き不詳。
319	弥生土器	壺?	体部ヨコミガキ。底部ナデ。	ナデ。	にふい橙 7.5YR 7/4	内外面煤付着。
320	弥生土器	甕	体部ミガキ?	体部ナデ。底部オサエ。	黄灰 2.5Y 6/1	
321	弥生土器	壺	頸部段。ヨコミガキ。	口縁部ヨコナデ。頸部不詳。	明赤褐 5YR 5/6	
322	弥生土器	甕	沈線1条。タテハケメ?	オサエ、ナデ。	にふい橙 5YR 6/4	傾き不詳。
323	弥生土器	鉢	不詳。	不詳。	橙 5YR 7/6	傾き不詳。
324	弥生土器	壺	頸部段、沈線2条。口縁部オサエ、ナデ。	ヨコミガキ。	灰褐 7.5YR 6/2	
325	弥生土器	甕?	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	にふい黄橙 10YR 7/3	傾き不詳。
326	弥生土器	甕?	口唇部刻目。不詳。	不詳。	にふい橙 7.5YR 7/3	傾き不詳。剝落顕著。
327	弥生土器	壺?	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	灰黄 2.5Y 7/2	傾き不詳。
328	弥生土器	甕	ナデ?	ナデ?	浅黄橙 10YR 8/3	傾き不詳。
329	弥生土器	甕	口縁端部直下に刻目突帯文。不詳。	不詳。	にふい黄 2.5Y 6/3	傾き不詳。剝落顕著。
330	弥生土器	甕	口縁端部直下に刻目突帯文。不詳。	不詳。	にふい赤褐 5YR 5/4	傾き不詳。剝落顕著。
331	弥生土器	甕	不詳。	不詳。	にふい黄橙 10YR 7/3	傾き不詳。剝落顕著。
332	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ナデ?	不詳。	にふい黄橙 10YR 7/2	傾き不詳。
333	弥生土器	鉢?	ヨコミガキ?	ヨコミガキ。	灰白 2.5Y 7/1	傾き不詳。
334	弥生土器	甕?	体部タテミガキ。底部ミガキ。	ナデ。	にふい赤褐 5YR 5/4	
335	弥生土器	甕?	体部タテミガキ。底部ミガキ。	ナデ。	にふい橙 7.5YR 7/3	
336	弥生土器	壺?	体部不詳。底部ナデ?	ナデ?	橙 5YR 6/6	
337	弥生土器	壺?	突帯上面に沈線1条。ミガキ。	オサエのちミガキ?	にふい黄橙 10YR 5/4	傾き不詳。
338	弥生土器	甕	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。肩部突帯上 面沈線1条、刻目。	ナデ?	灰黄 2.5Y 6/2	
339	弥生土器	甕	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。	不詳。	にふい黄橙 10YR 7/3	傾き不詳。
340	弥生土器	壺	頸部削り出し突帯1条。肩部沈線1条。ヨコ ミガキ。	ヨコミガキ。	灰黄 2.5Y 6/2	
341	弥生土器	壺	肩部削り出し突帯1条。上面に刻目。ミガキ?	不詳。	灰白 10YR 7/1	傾き不詳。
342	弥生土器	甕	口唇部上下端に刻目。直下に刻目突帯文。	不詳。	にふい黄橙 10YR 7/2	傾き不詳。
343	弥生土器	甕?	タテミガキ。	オサエのちタテミガキ。	にふい黄橙 10YR 7/3	
344	弥生土器	壺?	不詳。	不詳。	にふい橙 7.5YR 7/3	剝落顕著。
345	弥生土器	甕	口唇部刻目。直下に刻目突帯文。ミガキ?	口縁部ヨコナデ。体部ミガキ?	黄灰 2.5Y 6/1	傾き不詳。
346	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。頸部ミガキ?削り出し突帯 上面刻目。	不詳。	灰白 10YR 7/1	傾き不詳。
347	弥生土器	甕	口唇部沈線1条?頸部段。	不詳。	灰白 10YR 8/2	
348	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。頸部段。体部ヨコミガキ?	口縁部ヨコナデ。	にふい黄橙 10YR 7/3	
349	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。頸部沈線3条。	オサエ?	にふい橙 7.5YR 7/3	傾き不詳。
350	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ナデ?	不詳。	褐灰 7.5YR 5/1	傾き不詳。
351	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。工具ナデ?	ナデ?	灰黄褐 10YR 6/2	
352	弥生土器	壺?	ナデ?	オサエ、ナデ。	灰白 2.5Y 8/1	
353	弥生土器	壺	頸部沈線1条。ナデ?	頸部ナデ上げ。体部ヨコケズリ?	灰白 7.5YR 8/2	
354	弥生土器	壺	頸部へラ描き沈線文。ナデ?	ナデ。	灰白 10YR 8/2	傾き不詳。
355	弥生土器	壺	肩部へラ描き沈線文。ヨコミガキ。	ナデ。	にふい赤褐 5YR 5/4	傾き不詳。
356	弥生土器	壺	肩部沈線1条。ヨコミガキ?	上半ナデ。下半ヨコハケメ?	灰黄褐 10YR 4/2	傾き不詳。
357	弥生土器	壺	肩部沈線1条。ヨコミガキ。	上半ナデ。下半ヨコケズリ?	浅黄橙 7.5YR 8/4	傾き不詳。
358	弥生土器	壺	肩部沈線2条。ヨコミガキ。	ナデ。	灰白 2.5Y 8/2	傾き不詳。外面煤付着。
359	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。アルカ属具痕。	ナデ。	黒褐 2.5Y 3/1	傾き不詳。
360	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。口縁部オサエ。頸部沈線2 条間に刻目。体部ナデ?	口縁部オサエ。体部ナデ?	浅黄橙 10YR 8/3	傾き不詳。
361	弥生土器	壺	口唇部外面刻目。頸部描き沈線文。タテミガキ。	タテミガキ。	灰黄褐 10YR 6/2	
362	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。体部タテミガキ。剝突文2列。	ヨコミガキ。	褐灰 10YR 4/1	焼成前穿孔2孔。
363	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。体部タテハケメ。	ヨコミガキ。	にふい褐 7.5YR 5/4	焼成前穿孔1孔。
364	弥生土器	甕?	体部タテミガキ。	ナデ上げ。	灰黄褐 10YR 6/2	
365	弥生土器	甕?	体部タテミガキ?底部ナデ。	ナデ?	にふい黄橙 10YR 7/4	
366	弥生土器	甕?	体部タテミガキ。底部ナデ?	ナデ上げ?	褐灰 7.5YR 4/1	
367	弥生土器	壺?	不詳。	ナデ?	赤 10R 5/8	剝落顕著。
368	弥生土器	甕?	ナデ?	タテケズリ?	にふい褐 7.5YR 5/4	
369	弥生土器	壺?	体部ヨコミガキ?底部ナデ。	タテミガキ。	浅黄 2.5Y 7/3	
370	弥生土器	甕?	底部ナデ?焼成前穿孔1孔。	ナデ。	明黄褐 10YR 7/6	外面剝落。
371	弥生土器	甕?	体部タテミガキ。	オサエ、ナデ。	にふい赤褐 5YR 5/4	
372	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。頸部段。	口縁部ヨコナデ。頸部ナデ?	灰白 7.5YR 8/2	
373	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。頸部ナデ?	口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。	黄灰 2.5Y 6/1	
374	弥生土器	壺	頸部段。ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	灰黄 2.5Y 6/2	傾き不詳。
375	弥生土器	壺	不詳。	不詳。	灰黄 2.5Y 6/2	傾き不詳。剝落顕著。
376	弥生土器	壺	頸部段。ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	褐灰 10YR 4/1	傾き不詳。
377	弥生土器	壺?	体部タテミガキ。	オサエのちミガキ?	灰白 10YR 8/2	
378	弥生土器	壺	肩部沈線2条。ヨコミガキ。	ナデ上げ?	橙 5YR 7/6	傾き不詳。
379	弥生土器	壺	肩部削り出し突帯上面沈線1条。ミガキ。	オサエのちミガキ?	にふい黄橙 10YR 7/2	傾き不詳。
380	弥生土器	壺	肩部沈線3条。ナデ?	不詳。	黄灰 2.5Y 4/1	傾き不詳。内面剝落。
381	弥生土器	壺	肩部沈線2条。ミガキ?	オサエ、ナデ。	灰褐 7.5YR 6/2	傾き不詳。外面煤付着。
382	弥生土器	壺	肩部沈線による段。ミガキ。	ヨコミガキ。	にふい黄橙 10YR 7/2	傾き不詳。

排図 番号	種別	器種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
383	弥生土器	壺	肩部沈線2条。ミガキ。	オサエ、ナデ。	にふい黄橙 10YR7/3	傾き不詳。
384	弥生土器	壺	ヨコミガキ。	ナデ?	にふい黄橙 10YR7/3	傾き不詳。外面粗面。
385	弥生土器	壺	肩部沈線2条間に刻目。ナデ?	ナデ。	浅黄橙 7.5YR8/3	傾き不詳。外面煤付着。
386	弥生土器	壺	ヘラ描き木葉文。ヨコミガキ。	ヨコミガキ?	にふい橙 7.5YR7/4	傾き不詳。
387	弥生土器	壺	ヘラ描き木葉文。ナデ?	タテミガキ。	灰黄 2.5Y7/2	傾き不詳。
388	弥生土器	壺	肩部沈線による段。ヘラ描き重弧文。ヨコミガキ。	オサエのちヨコミガキ。	灰褐 7.5YR5/2	傾き不詳。389と同一個体?
389	弥生土器	壺	ヘラ描き重弧文。ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	褐灰 10YR4/1	傾き不詳。388と同一個体?
390	弥生土器	壺	肩部ヘラ描き沈線文。ナデ?	オサエ、ナデ?	浅黄橙 10YR8/3	傾き不詳。
391	弥生土器	甕	口唇部刻目。口縁部オサエ。体部ナデ?	口縁部オサエ。	灰黄褐 10YR6/2	傾き不詳。内面剥落。
392	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。頸部沈線による段。ナデ。	ナデ。	灰白 10YR8/2	傾き不詳。
393	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。頸部段。ナデ。	ナデ。	灰白 7.5YR8/2	傾き不詳。
394	弥生土器	甕	口唇部上下端刻目。ナデ。	ナデ。	灰白 7.5YR8/2	傾き不詳。
395	弥生土器	甕	口唇部刻目。ヨコナデ。	ヨコナデ。	にふい橙 7.5YR7/4	傾き不詳。
396	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ナデ?	ナデ?	灰黄 2.5Y7/2	傾き不詳。
397	弥生土器	甕	口唇部沈線2条。オサエ、ナデ。	オサエ、ナデ。	灰褐 7.5YR5/2	傾き不詳。
398	弥生土器	甕	口唇部刻目。ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	にふい橙 5YR6/3	傾き不詳。
399	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	褐灰 10YR6/1	傾き不詳。
400	弥生土器	甕	口唇部刻目。オサエ、ナデ。	不詳。	灰黄褐 10YR5/2	傾き不詳。内面剥落。
401	弥生土器	甕	口唇部刻目。ナデ。	ナデ。	浅黄橙 10YR8/3	傾き不詳。
402	弥生土器	甕	口唇部沈線1条。口縁部ナデ。頸部有段。ヨコミガキ。	口縁部ヨコナデ。内面ナデ?	灰白 10YR8/2	
403	弥生土器	壺?	頸部段。ナデ?	ナデ?	灰白 10YR8/3	傾き不詳。
404	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。頸部段。	口縁部ヨコナデ。体部ナデ?	橙 5YR7/6	傾き不詳。
405	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。頸部段。	口縁部ヨコナデ。体部ナデ?	にふい黄橙 10YR7/2	傾き不詳。
406	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。頸部段。	ヨコナデ。	灰白 2.5Y8/2	傾き不詳。
407	弥生土器	甕?	頸部ヘラ描き沈線4条。ヨコミガキ?	ヨコミガキ?	橙 5YR6/6	傾き不詳。
408	弥生土器	甕?	頸部ヘラ描き沈線8条。ヨコミガキ?	不詳。	灰白 10YR8/2	傾き不詳。内面剥落。
409	弥生土器	甕	頸部ヘラ描き沈線2条。ナデ?	ナデ?	にふい黄橙 10YR7/3	傾き不詳。
410	弥生土器	甕?	ヘラ描き沈線6条。ヨコミガキ。	不詳。	黒 2.5Y2/1	傾き不詳。内面剥落。外面煤付着。
411	弥生土器	甕?	沈線1条。ナデ。	不詳。	浅黄橙 10YR8/3	傾き不詳。
412	弥生土器	甕	頸部段、刻目。	不詳。	灰黄褐 10YR6/2	傾き不詳。剥落顕著。外面煤付着。
413	弥生土器	壺?	削り出し尖帯上面に沈線1条。ナデ?	ナデ?	灰白 10YR8/2	傾き不詳。
414	弥生土器	甕	口縁部ヨコミガキ。	オサエ、ナデ。	橙 5YR6/6	傾き不詳。
415	弥生土器	壺?	オサエのちミガキ。	ミガキ?	明赤褐 2.5YR5/6	傾き不詳。内面剥落。
416	弥生土器	甕?	口縁部ヨコナデ?	口縁部ヨコナデ?	にふい黄橙 10YR7/3	傾き不詳。剥落顕著。
417	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	にふい褐 7.5YR6/3	傾き不詳。
418	弥生土器	甕	不詳。	不詳。	浅黄橙 10YR8/3	傾き不詳。剥落顕著。
419	弥生土器	甕?	ナデ。	ナデ。	灰白 10YR8/2	傾き不詳。
420	弥生土器	甕?	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白 10YR8/2	傾き不詳。
421	弥生土器	壺?	ヨコミガキ?	ヨコミガキ?	灰褐 7.5YR6/2	傾き不詳。
422	弥生土器	鉢?	ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	灰黄褐 10YR6/2	傾き不詳。外面煤付着。
423	弥生土器	鉢?	ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	明褐灰 7.5YR7/1	傾き不詳。
424	弥生土器	壺?	ナデ?	ナデ?	浅黄橙 10YR8/3	
425	弥生土器	壺?	ナデ。	ナデ。	にふい橙 7.5YR7/3	
426	弥生土器	壺?	不詳。	不詳。	浅黄橙 7.5YR8/3	剥落顕著。
427	弥生土器	壺?	体部オサエ。底部ナデ。	ミガキ。	褐灰 10YR5/1	
428	弥生土器	壺?	ナデ?	ナデ?	にふい黄橙 10YR7/2	底部外面粗面多。
429	弥生土器	壺?	体部ミガキ?底部ナデ。	ナデ。	橙 2.5YR7/6	
430	弥生土器	壺?	底部ナデ?	ナデ。	浅黄橙 7.5YR8/3	底部外面粗面多。
431	弥生土器	壺?	ナデ。	ナデ。	灰白 10YR8/2	
432	弥生土器	鉢?	ナデ?	タテズリ。	黄灰 2.5Y6/1	
433	弥生土器	壺?	不詳。	オサエ、ナデ。	灰白 10YR8/2	剥落顕著。
434	弥生土器	鉢?	不詳。	不詳。	橙 2.5YR6/6	剥落顕著。
435	弥生土器	壺	体部ヨコミガキ。底部ミガキ。	ヨコミガキ。	にふい橙 10YR7/4	
436	弥生土器	壺	体部ヨコミガキ。底部ナデ?	ナデ?	にふい橙 5YR6/4	
437	弥生土器	壺	体部ヨコミガキ。底部ミガキ。	ヨコミガキ。	にふい橙 7.5YR7/3	
438	弥生土器	壺	ミガキ?	ミガキ?	にふい黄橙 10YR7/2	剥落顕著。
439	弥生土器	壺?	体部タテミガキ。	ミガキ?	灰白 10YR8/2	
440	弥生土器	壺?	体部タテミガキ。底部ミガキ。	ヨコミガキ。	にふい橙 7.5YR7/3	
441	弥生土器	壺?	体部タテミガキ。底部ミガキ。	ミガキ。	浅黄橙 7.5YR8/3	
442	弥生土器	甕?	体部タテミガキ。底部ナデ?	ナデ?	にふい黄橙 10YR7/2	
443	弥生土器	壺?	体部タテミガキ、下端ヨコミガキ。底部ナデ?	ナデ。	にふい褐 7.5YR5/4	
444	弥生土器	壺?	体部タテミガキ。底部ミガキ。	ナデ。	灰白 10YR8/2	
445	弥生土器	壺?	体部ヨコミガキ、下端タテミガキ。底部オサエ。	ナデ。	浅黄橙 7.5YR8/4	内面粗面。
446	弥生土器	鉢?	体部タテミガキ。下端~底部オサエ。	ナデ。	灰白 2.5Y8/2	内面粗面。
447	弥生土器	壺?	体部タテ工具ナデ。底部ナデ?	ナデ?	にふい黄橙 10YR7/2	
448	弥生土器	壺?	体部タテ工具ナデ。底部ナデ。	ナデ?	にふい赤褐 5YR5/4	
449	弥生土器	壺	体部タテ工具ナデ。底部ナデ。	ナデ。	浅黄橙 7.5YR8/3	
450	弥生土器	壺?	体部タテ工具ナデ。底部ナデ。	ヨコミガキ。	橙 7.5YR7/6	
451	弥生土器	甕	オサエ、ナデ。	ナデ。	にふい黄橙 10YR7/2	焼成前穿孔。
452	弥生土器	壺?	体部下端ヘラ描き沈線6条。ナデ。	ナデ。	灰白 10YR8/2	
453	弥生土器	壺	沈線1条。ナデ?	ナデ?	にふい黄橙 10YR7/4	傾き不詳。
454	弥生土器	壺	沈線3条。ナデ?	ナデ?	灰褐 7.5YR6/2	傾き不詳。
455	弥生土器	甕	口唇部刻目。ナデ?	ナデ?	橙 5YR7/8	傾き不詳。
456	弥生土器	甕	頸部段、刻目。ナデ?	ナデ?	にふい黄橙 10YR7/3	傾き不詳。
457	弥生土器	甕?	体部下端沈線2条。底部ナデ?	タテミガキ?	灰白 5YR8/2	

押図 番号	種別	器種	特徴		色調	備考
			外面	内面		
458	弥生土器	甕?	体部下端沈線2条。体部ヨコミガキ。底部ナデ?	ナデ。	灰白 10YR 8/2	
459	弥生土器	壺?	ナデ?	ナデ?	にぶい橙 7.5YR 7/3	
460	弥生土器	壺?	体部ナデ。底部ミガキ?	ナデ?	にぶい橙 7.5YR 7/4	
461	弥生土器	壺?	体部ナデ。底部オサエ、ナデ。	ナデ?	橙 7.5Y 7/6	
462	弥生土器	壺?	オサエ、ナデ?	ヨコハケメのちナデ?	橙 5YR 6/6	
463	弥生土器	壺?	体部タテミガキ?	オサエ、ナデ。	灰黄褐 10YR 6/2	底部焼成後穿孔?
464	弥生土器	壺?	頸部段。ナデ?	ナデ?	にぶい橙 7.5YR 7/3	傾き不詳。
465	弥生土器	壺	ヨコミガキ?	オサエ・ナデ?	にぶい橙 7.5YR 7/3	傾き不詳。
466	弥生土器	壺?	削り出し突帯上面に沈線1条、刻目。ヨコナデ?	ナデ。	灰黄褐 10YR 5/2	傾き不詳。
467	弥生土器	壺	肩部ヘラ描き沈線4条。ヨコミガキ?	ナデ。	灰黄褐 10YR 6/2	傾き不詳。
468	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線4条。ヨコミガキ?	下半ヨコハケメ?	にぶい黄橙 10YR 6/3	傾き不詳。
469	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。ヨコミガキ。	ナデ。	にぶい橙 7.5YR 5/3	傾き不詳。
470	弥生土器	壺?	ヘラ描き沈線文。	不詳。	黄灰 2.5Y 5/1	傾き不詳。剥落顕著。
471	弥生土器	壺	削り出し突帯上面に沈線1条。ヨコミガキ。	不詳。	にぶい橙 7.5YR 6/4	傾き不詳。
472	弥生土器	甕?	口唇部下端刻目、直下に突帯文。	不詳。	灰黄褐 10YR 4/2	傾き不詳。
473	弥生土器	甕	口唇部下端刻目、直下に刻目突帯文。	ナデ。	灰白 10YR 8/2	傾き不詳。
474	弥生土器	甕?	口縁部直下に突帯文。	ミガキ?	にぶい橙 7.5YR 7/4	傾き不詳。
475	弥生土器	甕	頸部段。不詳。	不詳。	にぶい黄橙 10YR 7/3	傾き不詳。
476	弥生土器	甕	ナデ?	ナデ?	浅黄橙 10YR 8/4	傾き不詳。剥落顕著。
477	弥生土器	甕?	頸部沈線2条。不詳。	不詳。	黄灰 2.5Y 6/2	傾き不詳。
478	弥生土器	甕	口唇部刻目。頸部段、刻目。ナデ?	ナデ。	にぶい橙 7.5YR 7/4	傾き不詳。
479	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。頸部段、刻目。ナデ?	オサエ、ナデ。	灰白 10YR 7/1	傾き不詳。
480	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。頸部段、刻目。ナデ?	オサエ。	灰黄褐 10YR 4/2	傾き不詳。
481	弥生土器	甕	口唇部刻目。ナデ?	ナデ?	浅黄橙 10YR 8/3	傾き不詳。
482	弥生土器	甕	頸部段、刻目。ナデ?	ナデ。	灰白 10YR 7/1	傾き不詳。
483	弥生土器	壺	削り出し突帯上面に沈線1条、刻目。ヨコミガキ。	不詳。	橙 7.5YR 7/6	傾き不詳。内面剥落。
484	弥生土器	壺	口頸部は横方向のヘラミガキ。	口頸部ヨコナデ。胴部ケズリ。	淡黄 2.5Y 8/3	完形品。
485	弥生土器	壺	胴部わずかなヘラミガキ。	胴部ケズリ。	にぶい橙 5YR 6/3	完形品。
486	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。	胴部ケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	完形品。
487	弥生土器	壺	ヨコナデ。	ヨコナデ?	にぶい黄橙 10YR 7/2	
488	弥生土器	高杯	口唇部凹線4本。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	灰白 10YR 7/1	
489	弥生土器	高杯	剥落。	ケズリ。	灰白 10YR 7/1	
490	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ヘラミガキ。	口縁部ヘラミガキ。胴部ケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	
491	弥生土器	壺	上位ハケメ。下位ヘラミガキ。		橙 7.5YR 7/6	内面剥落。
492	弥生土器	壺	胴部ハケメ。	胴部上位ユビオサエ、下位ケズリ。	灰白 10YR 7/1	
493	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメにヘラミガキが加わる。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR 6/2	
494	弥生土器	高杯	口唇部凹線3本。杯部ヨコナデ。	杯部ヘラミガキ。円板充填。	にぶい黄橙 10YR 7/2	
495	弥生土器	甕	口縁部凹線3本。	口縁部ヨコナデ。	にぶい黄橙 10YR 7/2	
496	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	胴部上位ユビオサエ、下半ケズリ。	灰白 7.5YR 8/2	
497	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	口縁部ヨコナデ。	にぶい黄橙 10YR 7/2	
498	弥生土器	高杯	口唇部ヨコナデ。杯部ミガキ。	杯部ミガキ?	灰白 2.5Y 7/2	
499	弥生土器	高杯	口縁部3、4条の凹線。	杯部ハケメ?	にぶい橙 7.5YR 7/4	
500	弥生土器	甕	磨減。	磨減。	橙 5YR 6/6	
501	弥生土器	甕	口縁部凹線。胴部上半ハケメ。	口縁部ヨコナデ。体部上位ユビオサエ、下半ケズリ。	明褐灰 5YR 7/2	煤付着。
502	弥生土器	甕	胴部下半ミガキ。	胴部下半ケズリ。	灰黄褐 10YR 6/2	
503	弥生土器	高杯	口唇部凹線4、5本。杯部ヨコナデ。	杯部ミガキ。	赤 10R 5/6	
504	弥生土器	鉢?	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ。	胴部ケズリ。	にぶい橙 5YR 7/4	
505	弥生土器	甕?	口縁部ヨコナデ。		にぶい橙 5YR 6/4	
506	弥生土器	甕?	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。	灰黄褐 10YR 4/2	
507	弥生土器	甕?	口唇部凹線。	胴部ナデ?	橙 5YR 7/8	
508	弥生土器	甕	口唇部凹線。	胴部ナデ?	にぶい黄橙 10YR 7/2	
509	弥生土器	甕?	口縁部ヨコナデ。		灰白 10YR 8/2	
510	弥生土器	高杯	口唇部凹線4本。		にぶい橙 5YR 7/4	
511	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ナデ?	杯部ナデ?	にぶい橙 5YR 7/3	
512	弥生土器	甕	ミガキ。	ケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	
513	弥生土器	高杯	ミガキ。脚端ヨコナデ。	ハケメ。	明赤褐 5YR 5/6	
514	弥生土器	高杯	口唇部凹線5本。	ヨコナデ。	橙 5YR 7/6	
515	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	口縁部~胴部上半ヨコナデ。胴部下半ケズリ。	灰白 7.5YR 8/2	
516	弥生土器	高杯	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。	橙 5YR 7/6	
517	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい橙 7.5YR 7/3	煤付着。
518	弥生土器	鉢	ナデ。	ナデ。	灰白 2.5Y 8/2	ミニチュア土器。2/3残存。
519	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ナデ、ユビオサエ。	灰白 2.5Y 8/2	
520	弥生土器	甕	口唇部凹線。	胴部上半ハケメ。	灰白 7.5YR 8/2	
521	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ナデ、下半ケズリ。	灰白 7.5YR 8/2	
522	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。		橙 5YR 6/6	
523	弥生土器	甕	口唇部凹線。		橙 5YR 6/6	
524	弥生土器	鉢	口縁部~胴部上半ヨコナデ。胴部下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい橙 7.5YR 7/4	
525	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。	胴部ケズリ。	淡黄 2.5Y 8/3	
526	弥生土器	高杯	口唇部凹線。		橙 5YR 7/6	
527	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ヨコナデ~ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	にぶい橙 7.5YR 7/4	
528	弥生土器	高杯	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	黄灰 2.5Y 6/1	
529	弥生土器	高杯	口縁部上面退化凹線4条。	杯部内面ヨコミガキ?	にぶい橙 7.5YR 7/4	
530	弥生土器	鉢?	体部ヨコミガキ?	オサエ、ナデ。	にぶい橙 5YR 6/4	
531	弥生土器	高杯	口唇部凹線1条。口縁部ヨコナデ。	オサエ、ナデ。	明褐灰 7.5YR 7/2	
532	弥生土器	甕	ヨコナデ。	体部ケズリ。	橙 2.5YR 6/8	
533	弥生土器	鉢		胴部ケズリ。	灰白 2.5Y 8/1	

押図 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
534	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。頸部ハケメのち沈線。	口縁部ヨコナデ。頸部ユビオサエ、ナデ。	灰白 10YR 8/2	
535	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にふい橙 5YR 7/4	
536	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。胴部上位ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部下半ケズリ。	橙 5YR 7/6	
537	弥生土器	高杯	脚部ミガキ。脚端ヨコナデ。	脚部ケズリ。	にふい橙 7.5YR 7/3	2個一組の裝飾的透し孔が穿たれる。
538	弥生土器	壺	口頸部ヨコナデ。胴部ミガキ。	口頸部ヨコナデ。胴部ユビオサエ、ケズリ。	淡橙 5YR 8/3	
539	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部上位ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上位ユビオサエ、ナデ。下半ケズリ。	浅黄橙 7.5YR 8/3	
540	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	橙 5YR 7/6	
541	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にふい橙 5YR 7/3	
542	弥生土器	甕	胴部ミガキ。	胴部ケズリ。	橙 5YR 6/8	
543	弥生土器	甕	胴部ハケメのちミガキ。	胴部ケズリ。	にふい橙 7.5YR 7/4	
544	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部上位ナデ、下半ケズリ。	にふい橙 7.5YR 7/4	
545	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ナデ。	胴部ケズリ。	灰黄 2.5Y 6/2	煤付着。
546	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にふい黄橙 10YR 7/3	
547	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ナデ。	胴部ケズリ。	浅黄橙 7.5Y 8/3	
548	弥生土器	高杯	脚部ミガキ。縦方向の透し孔、刺突文。下端にヘラ描き文。	脚部ケズリ。	にふい橙 7.5YR 7/3	
549	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 10YR 8/2	
550	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	橙 2.5YR 7/6	
551	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。	灰白 10YR 7/1	
552	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	灰白 2.5YR 7/1	
553	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ。	灰白 10YR 8/2	
554	弥生土器	甕			淡黄 2.5Y 8/3	
555	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ。	灰白 10YR 8/1	
556	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ。	灰白 10YR 8/2	
557	弥生土器	甕?	胴部ミガキ。	胴部ケズリ。	灰褐 7.5YR 6/2	
558	弥生土器	甕?		胴部ケズリ。	橙 2.5YR 7/6	
559	弥生土器	壺	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口頸部ヨコナデ。胴部ナデ、ユビオサエ。	黄灰 2.5Y 5/1	煤付着。
560	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	灰黄 2.5YR 7/2	
561	弥生土器	壺	口縁部凹線。頸部ハケメのち沈線、下部に刺突文。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。頸部ユビオサエ。	灰白 2.5Y 8/2	
562	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄 2.5Y 7/2	頸部に2個一組、2箇所の穿孔。
563	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ。	黄灰 2.5Y 6/1	
564	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ。	灰黄褐 10YR 6/2	
565	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ。	にふい黄橙 10YR 7/2	
566	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 2.5Y 7/1	煤付着。
567	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。	灰白 7.5Y 8/2	
568	弥生土器	甕	胴部ミガキ。	胴部ケズリ。	淡黄 2.5Y 8/3	底部焼成後穿孔。
569	弥生土器	高杯	杯部ヨコナデ。脚部ミガキ。	杯部ミガキ。脚部ケズリ。	灰白 10YR 8/2	
570	弥生土器	高杯	口唇部凹線1本。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	褐灰 10YR 6/1	
571	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。脚部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。脚部ケズリ。	浅黄橙 7.5YR 8/4	3孔一組の刺突文。
572	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	暗灰 N 3/	
573	弥生土器	甕	口唇部凹線のち刺突文。		黄灰 2.5Y 6/1	
574	弥生土器	甕?	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にふい橙 5YR 6/4	
575	弥生土器	甕	胴部ミガキ。	胴部ケズリ。	赤橙 10R 6/6	
576	弥生土器	甕?	胴部ミガキ。	胴部ケズリ。	灰黄 2.5Y 7/2	
577	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ。	杯部ミガキ。	灰白 10YR 8/2	
578	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ケズリのちナデ。	杯部ミガキ。	灰白 10YR 8/2	
579	弥生土器	台付鉢	口縁部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。脚部上半ナデ、下半ケズリ。	浅黄橙 7.5YR 8/4	
580	弥生土器	鉢	口唇部沈線1本。連続押圧文。胴部ハケメ。	胴部ハケメ、ナデ。	灰黄 2.5Y 6/2	
581	弥生土器	高杯	脚部ナデ、脚端ヨコナデ。縦4列に刺突小透し孔を加飾する。	脚部シボリメ、ケズリ。	にふい橙 7.5YR 7/4	脚部完存。
582	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。胴部刺突文。	体部中央ハケメ。	灰白 2.5Y 8/2	
583	弥生土器	高杯	脚部ナデハケメ。矢羽形透し孔3孔。	ケズリ。	灰黄 2.5Y 7/2	
584	弥生土器	壺	頸部~肩部ハケメのちヨコミガキ。	体部ヨコケズリ。	橙 5YR 6/8	
585	弥生土器	甕	口縁部凹線2条、刺突文。	体部上半オサエ、ナデ。	にふい橙 7.5YR 7/4	586と同一個体。
586	弥生土器	甕	円形突起1か所。	体部下半ヨコケズリ。	にふい橙 7.5YR 7/4	585と同一個体。
587	弥生土器	壺	上半帯描き沈線文。下半ヘラ描き沈線文。	オサエのちタテハケメ。	黒褐 7.5Y 3/1	傾き不詳。
588	弥生土器	壺	口縁部凹線2条。ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰黄 2.5Y 7/2	
589	弥生土器	甕	口縁部凹線2条? 体部不詳。	体部オサエ。	橙 7.5YR 6/6	
590	弥生土器	甕	底部ミガキ。	ナメケズリ。	にふい赤橙 5YR 5/3	
591	弥生土器	高杯	口縁部上部凹線2条。杯部ミガキ?脚部凹線透し孔4孔。	口縁部ヨコナデ。	浅黄橙 7.5YR 8/6	内面剥落。592と同一個体。
592	弥生土器	高杯	円形透し孔4孔。ヘラ描き沈線5~6条。ヘラ描き沈線文5か所。ミガキ?	ケズリのちナデ。	浅黄橙 7.5YR 8/6	591と同一個体。
593	弥生土器	壺	頸部刺突文。肩部ヨコタタキのちタテハケメ。	肩部タテハケメ。	浅黄橙 10YR 8/4	外面煤付着。
594	弥生土器	高杯	杯部ヨコケズリ。	杯部タテハケメ。	橙 5YR 6/6	傾き不詳。
595	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	灰白 2.5Y 8/2	外面剥落。
596	弥生土器	甕	口縁部凹線1条。	口縁部ヨコナデ。	橙 5YR 7/6	
597	弥生土器	高杯	脚部竹管文12か所。	ヨコケズリ。	橙 5YR 7/6	
598	弥生土器	器台	竹管文。ヘラ描き沈線文。	下半ヨコケズリ。	淡橙 5YR 7/6	傾き不詳。
599	弥生土器	壺	頸部凹線2条。ヨコナデ。	ヨコナデ。	浅黄 2.5Y 7/4	
600	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。	杯部タテハケメ?	灰黄 2.5Y 7/2	
601	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部沈線。	口縁部~頸部ヨコナデ。	灰白 10YR 8/2	頸部に稜痕。
602	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ハケメのち沈線。	口縁部ヨコナデ。頸部ナデ、ユビオサエ。	灰白 5Y 8/2	
603	弥生土器	壺	頸部ハケメのち沈線。頸部と胴部の境に刺突文がめぐる。	頸部シボリメ。胴部ケズリ。	橙 5YR 6/6	
604	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ミガキ。	胴部ケズリ。底部ユビオサエ。	灰白 10YR 8/2	煤付着。

押図 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
605	弥生土器	甕	胴部下半ミガキ。	胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ。	浅黄橙 7.5YR 8/3	煤付着。
606	弥生土器	甕	口縁部ヨコナテ。	胴部ケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	
607	弥生土器	甕	口縁部ヨコナテ。胴部ハケメ。	頸部ハケメ。胴部ケズリ。	におい黄橙 10YR 7/2	
608	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナテ。	灰白 7.5YR 8/2	
609	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ミガキ。	胴部上半ユビオサエ。	浅黄橙 7.5YR 8/3	
610	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部-頸部ヨコナテ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナテ。胴部ナデ-ユビオサエ。	浅黄橙 10YR 8/3	煤付着。
611	弥生土器	甕	胴部ハケメ。底部ミガキ。	胴部ケズリ。	におい橙 5YR 6/4	
612	弥生土器	甕?	胴部ミガキ。	胴部ケズリ。	灰白 5YR 8/2	
613	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナテ。杯部ミガキ。	灰白 10YR 8/2	
614	弥生土器	高杯	口唇部凹線。口縁部ヨコナテ。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナテ。杯部ミガキ。	灰白 7.5YR 8/2	
615	弥生土器	高杯	脚部ミガキ。脚端ヨコナテ。	脚部ケズリ。	灰白 10YR 8/2	円板充填痕跡。裝飾的透し孔がめぐる。
616	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ。脚部ミガキ。脚端凹線。	口縁部ヨコナテ。杯部ミガキ。脚部ケズリ。	橙 2.5YR 7/6	円板充填痕跡。脚部に3個一組の透し孔がめぐる。
617	弥生土器	高杯	口唇部凹線2本。口縁部ヨコナテ。杯部-脚部ミガキ。	口縁部ヨコナテ。杯部ハケメ。脚部シボリメ、ケズリ。	灰白 10YR 8/2	ほぼ完形品。
618	弥生土器	鉢	胴部ミガキ、ハケメ。	胴部オサエ、ナデ。	灰白 10YR 8/2	完形品。煤付着。
619	弥生土器	甕	口縁部ヨコナテ。胴部ハケメ。	胴部ユビオサエ、ナデ。	灰白 2.5Y 7/1	
620	弥生土器	器台	筒部ハケメのち沈線。脚端部凹線。	筒部ユビオサエ、ケズリ。	におい黄橙 10YR 7/2	透し孔3箇所。
621	弥生土器	台付鉢	口唇部凹線。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナテ。胴部ミガキ。	灰白 5YR 8/2	
622	弥生土器	台付鉢	胴部剝落。脚部ユビオサエ。	胴部ハケメ。	におい橙 5YR 7/4	
623	弥生土器	壺	口縁部ヨコナテ。頸部沈線12条。	口縁部ヨコナテ。頸部シボリメ、ユビオサエ。胴部ケズリ。	灰白 10YR 8/2	
624	弥生土器	甕	口縁部ヨコナテ。胴部ミガキ?	口縁部ヨコナテ。胴部ケズリ。	黄灰 2.5Y 5/1	
625	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部-頸部ヨコナテ、ナデ。胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR 6/2	
626	弥生土器	甕	口縁部ヨコナテ。	口縁部-頸部ヨコナテ、ナデ。胴部ケズリ。	におい黄橙 10YR 7/2	
627	弥生土器	高杯	脚端ヨコナテ。	脚部ケズリ。	灰白 10YR 8/1	脚部透し孔12孔。
628	弥生土器	高杯	口唇部凹線。		灰白 2.5Y 8/2	
629	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナテ。		灰白 10YR 7/1	
630	弥生土器	鉢	磨滅。	胴部ユビオサエ。	灰白 10YR 8/2	砂粒多く含み、鈍重な形態。
631	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナテ。	胴部ナデ?	灰白 2.5Y 8/2	
632	弥生土器	壺	口縁部ヨコナテ。	口縁部ヨコナテ。頸部ユビオサエ。胴部ケズリ。	灰白 10YR 8/2	
633	弥生土器	高杯			橙 2.5YR 6/6	小片。
634	弥生土器	高杯	口縁部凹線。杯部ケズリのちミガキ。	ヨコナテ。	におい橙 2.5YR 6/4	
635	弥生土器	高杯	口唇部凹線。		浅黄橙 7.5YR 8/4	
636	弥生土器	高杯	脚部ナデ。脚端部ヨコナテ。	脚部ケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	透し孔2孔一組。
637	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ハケメのち沈線。	口縁部ヨコナテ。	におい橙 7.5YR 7/4	
638	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部上半ハケメ。胴部下半ミガキ。	口縁部ヨコナテ。胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ。	灰白 10YR 8/2	完形品。煤(タール状)付着。底部焼成後穿孔。
639	弥生土器	壺	口唇部凹線。		浅黄橙 7.5YR 8/4	
640	弥生土器	鉢?	胴部下半ナデ、下端ユビオサエ。	胴部下半ナデ。	橙 2.5YR 6/6	底部ふ厚い。
641	弥生土器	甕	口縁部ヨコナテ。		橙 5YR 7/6	
642	弥生土器	甕	口縁部ヨコナテ。肩部に刺突文。剝落顕著。	口縁部ヨコナテ。胴部上半ナデ、ユビオサエ。下半ケズリ。	橙 5YR 7/6	ほぼ完形品。
643	弥生土器	甕	胴部ミガキ。	胴部ケズリ。	橙 7.5YR 6/6	
644	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。被熱により器表面剝落。	口縁部ヨコナテ。胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ。	におい黄橙 10YR 7/3	煤付着。
645	弥生土器	壺	口頸部ヨコナテ。胴部ナデ。	口頸部ユビオサエ。胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ。	灰白 7.5YR 8/1	
646	弥生土器	壺	口縁部ヨコナテ。頸部沈線11本。	頸部ナデ。	橙 5YR 6/6	
647	弥生土器	鉢	器表面剝落。		におい橙 7.5YR 7/4	
648	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ。脚部ナデ、ミガキ。	口縁部ヨコナテ。杯部ミガキ。脚部シボリメ、ケズリ。	灰白 10YR 8/2	ほぼ完形品。竹管文。
649	弥生土器	器台	筒部ハケメのち沈線。下半に凹線5本。	筒部ナデ、ユビオサエ。下半ハケメ。	灰白 7.5YR 8/2	
650	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナテ。胴部上位ユビオサエ、下半ケズリ。	におい黄橙 10YR 7/2	
651	弥生土器	甕	口縁部ヨコナテ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナテ。胴部上位ユビオサエ、下半ケズリ。	におい橙 7.5YR 6/4	
652	弥生土器	甕	口縁部ヨコナテ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナテ。胴部ケズリ。	灰白 10YR 8/2	
653	弥生土器	甕	口縁部ヨコナテ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナテ。胴部ケズリ。	におい黄橙 10YR 7/4	
654	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナテ。胴部ケズリ。	におい褐 7.5YR 6/3	
655	弥生土器	甕	口縁部ヨコナテ。胴部ハケメ、ミガキ。	口縁部ヨコナテ。胴部上位ユビオサエ、下半ケズリ。	におい黄橙 10YR 7/3	
656	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナテ。胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR 4/2	650と同一製作者による。
657	弥生土器	甕	口唇部-頸部ヨコナテ。胴部ハケメ、ミガキ。	口縁部ヨコナテ。胴部ケズリ。	浅黄橙 7.5YR 8/3	ほぼ完形品。
658	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナテ。胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR 6/2	
659	弥生土器	甕	口縁部ヨコナテ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナテ。胴部ケズリ。	明褐灰 7.5YR 7/2	
660	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナテ。胴部ケズリ。	橙 7.5YR 7/6	
661	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナテ。胴部ケズリ。	におい黄橙 10YR 7/4	
662	弥生土器	甕		胴部ケズリ。	におい黄橙 10YR 7/2	焼成後底部穿孔。
663	弥生土器	甕		胴部ケズリ。	におい褐 7.5YR 6/3	
664	弥生土器	甕	胴部ハケメ?	胴部ケズリ。	におい黄橙 10YR 6/3	煤付着。
665	弥生土器	甕	胴部ケズリ。被熱器表面剝落。		橙 2.5YR 6/6	
666	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ナデ。	胴部ケズリ。	におい褐 7.5YR 6/3	底部被熱により赤変。
667	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部-胴部上位ヨコナテ、ナデ。胴部下半ケズリ。	におい黄橙 10YR 7/3	
668	弥生土器	甕	口縁部ヨコナテ。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナテ。胴部上半ハケメ、下半ケズリ。	におい橙 7.5YR 7/4	
669	弥生土器	甕	口縁部ヨコナテ。胴部ハケメ、ミガキ。	胴部ユビオサエ、ケズリ。	におい黄橙 10YR 7/2	
670	弥生土器	甕	胴部ハケメ。	胴部ナデ、ケズリ。	橙 5YR 6/6	
671	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部剝落。	口縁部ヨコナテ。胴部ケズリ。	橙 5YR 7/6	
672	弥生土器	甕	ヨコナテ。	ヨコナテ。	灰黄褐 10YR 6/2	

押図 番号	種別	器種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
673	弥生土器	壺	頸部へラ幅き凹線8条。貼付突起。体部ミガキ?	オサエ、ナデ。	明褐色 7.5YR 7/1	
674	弥生土器	甕	口縁部凹線5条。頸部刻目突起。	体部オサエ、ナデ。	にんい黄橙 10YR 7/2	
675	弥生土器	壺	口縁部凹線1条?	不詳。	橙 2.5YR 6/6	
676	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	橙 7.5YR 6/6	
677	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ナデ。	胴部ミガキ。	にんい赤褐 2.5YR 5/4	
678	弥生土器	高杯	口唇部凹線。		橙 5YR 6/6	
679	弥生土器	高杯	脚部ミガキ。下端に4孔一組の円形刺突文。	脚部ケズリ。	灰白 10YR 8/2	
680	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。		にんい橙 7.5YR 7/3	
681	弥生土器	壺?	口縁部ヨコナデ。頸部沈線4本。	口縁部~頸部ヨコナデ。	橙 5YR 6/6	
682	弥生土器	高杯	口唇部凹線2本。杯部ミガキ。脚部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	浅黄橙 7.5YR 8/3	円板充填。
683	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	胴部ケズリ。	にんい橙 7.5YR 7/4	
684	弥生土器	壺?	口唇部凹線。		灰白 10YR 8/2	
685	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	胴部上半ナデ。	明赤褐 5YR 5/6	
686	弥生土器	製塩土器?	胴部ケズリ。脚部ナデ。	胴部ナデ。脚部ユビオサエ、ナデ。	褐色 7.5YR 4/1	煤付着。
687	弥生土器	製塩土器?	胴部ケズリ。脚部ユビオサエ。	胴部ユビオサエ、ナデ。	浅黄橙 7.5YR 8/3	内面煤付着。
688	弥生土器	器台	口唇部磨減。脚部ナデ。透し孔を穿つ。	脚部ケズリ。	にんい橙 5YR 6/4	外面煤付着。
689	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。	胴部ケズリ。	灰白 10YR 8/2	
690	弥生土器	壺?	胴部ミガキ。	胴部ケズリ。	にんい黄橙 10YR 7/3	
691	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。	灰黄 2.5Y 6/2	
692	弥生土器	壺	口唇部凹線。		灰白 10YR 8/2	
693	弥生土器	甕	磨減。		灰白 10YR 7/1	
694	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ。	杯部ミガキ。	灰白 10YR 8/2	
695	弥生土器	壺	口唇部凹線。	胴部上半オサエ、ナデ。下半ケズリ。	灰白 7.5YR 8/2	小型の壺。ほぼ完形品。
696	弥生土器	壺	口唇部凹線5本。頸部ハケメのち沈線。	口縁部ヨコナデ。頸部シボリメ、ナデ。	橙 7.5YR 7/6	
697	弥生土器	甕?	口唇部凹線。		にんい橙 7.5YR 6/4	
698	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR 4/2	
699	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR 6/2	
700	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。	暗赤褐 5YR 3/2	
701	弥生土器	甕?	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	橙 5YR 6/6	
702	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ、ハケメ。下半ケズリ。	にんい黄橙 10YR 7/3	煤付着。
703	弥生土器	鉢	磨減。		浅黄 2.5Y 8/3	
704	弥生土器	高杯	口唇部凹線。		橙 5YR 7/8	
705	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。	胴部ハケメ。	灰白 10YR 7/1	
706	弥生土器	鉢			灰白 2.5Y 8/1	
707	弥生土器	高杯	口唇部凹線。		灰白 10YR 8/2	
708	弥生土器	高杯	口唇部凹線。	杯部ハケメのちミガキ。	灰白 10YR 8/2	
709	弥生土器	高杯	脚部下端円形刺突文。脚端凹線。	脚部ケズリ。	にんい黄橙 10YR 7/3	
710	弥生土器	高杯	脚端凹線。	脚部ケズリ。	灰黄褐 10YR 6/2	
711	弥生土器	高杯	脚部ハケメ。3個一組の穿孔。	脚部ケズリ。	褐色 10YR 5/1	
712	弥生土器	高杯	脚部ミガキ。脚端ヨコナデ。	脚部ケズリ。	にんい橙 5YR 7/4	
713	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ、ナデ。下半ケズリ。	浅黄橙 7.5YR 8/4	
714	弥生土器	台付壺	口縁部ヨコナデ。肩部に刺突文。	胴部上半ユビオサエ。	にんい黄橙 10YR 6/3	
715	弥生土器	甕	口唇部凹線。肩部に刺突文。	胴部上半ユビオサエ。	にんい赤橙 2.5YR 4/4	
716	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。	橙 7.5YR 7/6	
717	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	浅黄橙 10YR 8/3	
718	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	黄橙 10YR 8/6	
719	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。		灰黄 2.5Y 7/2	
720	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	黄灰 2.5Y 6/1	
721	弥生土器	甕	口唇部凹線。		浅黄橙 7.5YR 8/3	
722	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	胴部上半ユビオサエ、ナデ。下半ケズリ。	にんい橙 5YR 7/4	
723	弥生土器	甕			灰黄 2.5Y 7/2	
724	弥生土器	甕	口縁部凹線。胴部ミガキ?	胴部下半ケズリ。	灰白 10YR 7/1	
725	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ユビオサエ、ナデ。	胴部ケズリ。	浅黄橙 10YR 8/4	煤付着。
726	弥生土器	甕			灰白 7.5YR 8/2	煤付着。
727	弥生土器	甕	胴部下半ミガキ。底部ナデ。		灰黄 2.5Y 6/2	
728	弥生土器	甕	磨減。		灰黄 2.5Y 7/2	
729	弥生土器	甕	磨減。		にんい黄橙 10YR 7/2	
730	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。		赤橙 10R 6/6	
731	弥生土器	高杯	磨減。	口縁部ヨコナデ。	にんい橙 7.5YR 6/4	
732	弥生土器	高杯	磨減。		灰黄 2.5Y 7/2	
733	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ。	杯部ミガキ。	にんい黄橙 10YR 7/2	
734	弥生土器	高杯	杯部剥落。脚下部に2個一組穿孔。脚端ヨコナデ。	脚部ケズリ。	橙 2.5YR 6/8	
735	弥生土器	高杯	脚下部に円形刺突文。	脚部ケズリ。	にんい黄橙 10YR 7/2	
736	弥生土器	高杯	脚下部に円形刺突文。	脚部ケズリ。	灰黄 2.5Y 7/2	
737	弥生土器	高杯	脚部ハケメ。脚端ヨコナデ。	脚部ケズリのちナデ。	にんい黄橙 10YR 6/4	
738	弥生土器	高杯	脚下部に円形刺突文。	脚部ケズリ。	にんい橙 7.5YR 7/3	
739	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	胴部ケズリのちミガキ。	浅黄 2.5Y 7/3	完形品。
740	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。	胴部ケズリ。	淡橙 5YR 8/4	
741	弥生土器	壺	口縁部~胴部上半ヨコナデ。	胴部下半ミガキ?	にんい橙 7.5YR 6/3	
742	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。胴部下半ミガキ。肩部に刺突文。	胴部上半オサエ、ナデ。下半ハケメ。	にんい橙 7.5YR 7/4	
743	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰オリーブ 5Y 6/2	
744	弥生土器	壺	口唇部凹線。	頸部ユビオサエ。	灰黄 2.5Y 7/2	
745	弥生土器	壺	頸部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。	にんい褐 7.5YR 6/3	
746	弥生土器	壺	口唇部凹線8本。頸部ユビオサエ。胴部ハケメのちナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 10YR 8/2	
747	弥生土器	壺			にんい黄橙 10YR 7/4	

押印 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
748	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ハケメのち刺突文。	口縁部ヨコナデ。	灰白 7.5YR 8/2	
749	弥生土器	壺	口唇部凹線。	頸部ユビオサエ。	灰白 2.5Y 7/1	
750	弥生土器	壺	口唇部凹線。		にふい橙 7.5YR 6/4	
751	弥生土器	壺	肩部に刺突文、櫛掻き文1条。		灰白 5Y 7/1	
752	弥生土器	壺?	胴部-頸部ナデ。		灰白 10YR 7/1	
753	弥生土器	壺?	肩部に刺突文。胴部下半ミガキ。	胴部ケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	
754	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部クシメのち刺突文。	口縁部ヨコナデ。頸部ユビオサエ、ナデ。	灰白 10YR 8/2	
755	弥生土器	壺	口唇部に刻目。頸部ミガキのち2段の刺突文。	口縁部ヨコナデ。頸部ユビオサエ、ナデ。	にふい黄橙 10YR 7/4	
756	弥生土器	壺	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。	灰黄 2.5Y 6/2	
757	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。	胴部上半オサエ、ナデ。下半ケズリ。	にふい黄橙 10YR 7/2	
758	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ハケメのち沈線。	口縁部ヨコナデ。頸部ユビオサエ、ナデ。	灰白 5Y 7/1	
759	弥生土器	壺	口唇部凹線1本。頸部ハケメのち沈線。	口縁部ヨコナデ。頸部ユビオサエ、ナデ。	にふい黄橙 10YR 7/2	
760	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ハケメのち沈線。	口縁部ヨコナデ。頸部ユビオサエ、ナデ。	灰白 2.5Y 8/2	
761	弥生土器	壺	頸部ハケメのち沈線。	頸部ナデ。	にふい黄橙 10YR 7/3	
762	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にふい黄橙 10YR 7/4	
763	弥生土器	甕?	口縁部ヨコナデ。	胴部ケズリ。	灰白 10YR 7/1	
764	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	胴部ケズリ。	灰白 2.5Y 8/1	
765	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。		にふい橙 7.5YR 7/4	
766	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄 2.5Y 7/2	
767	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 10YR 8/2	
768	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	胴部ケズリ。	にふい黄橙 10YR 7/2	
769	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	胴部ケズリ。	浅黄橙 7.5YR 8/3	
770	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	胴部ケズリ。	にふい黄 7.5YR 6/3	
771	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にふい黄橙 10YR 7/2	
772	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	
773	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄 2.5Y 7/2	
774	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にふい橙 7.5YR 7/4	
775	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	磨減。	黄灰 2.5Y 6/1	
776	弥生土器	甕	口唇部凹線。	胴部ケズリ。	灰黄 2.5Y 7/2	
777	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部上位ヨコナデ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ、ナデ。下半ケズリ。	にふい黄橙 10YR 7/3	
778	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。		褐灰 10YR 4/1	
779	弥生土器	甕	磨減。	胴部ケズリ。	灰白 10YR 8/1	
780	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄 2.5Y 7/2	
781	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 10YR 7/1	
782	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ、ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 10YR 8/2	
783	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。	浅黄 2.5Y 7/3	
784	弥生土器	甕	口唇部凹線。		にふい黄橙 10YR 7/3	
785	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	明褐灰 7.5YR 7/1	
786	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にふい橙 7.5YR 7/3	
787	弥生土器	甕	口唇部凹線。		灰白 10YR 8/2	
788	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。	浅黄橙 7.5YR 8/3	
789	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄 2.5Y 7/2	
790	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	明褐灰 7.5YR 7/2	
791	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。	橙 5YR 6/6	
792	弥生土器	壺	口唇部凹線。		灰白 10YR 8/2	
793	弥生土器	壺	口唇部凹線。胴部ハケメ。	胴部上位ナデ。	灰白 10YR 8/2	
794	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。	胴部ケズリ。	灰オレンジ 5Y 6/2	
795	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 10YR 8/1	
796	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部上位ユビオサエ、下半ケズリ。	浅黄橙 10YR 8/3	
797	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。	灰白 10YR 8/2	外面煤付着。
798	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ミガキ。	胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR 6/2	
799	弥生土器	甕		胴部ケズリ。	灰褐 7.5YR 6/2	
800	弥生土器	甕	口唇部凹線。		にふい橙 5YR 7/3	
801	弥生土器	甕	口唇部凹線。		にふい黄橙 10YR 7/2	
802	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。胴部上位ナデ。	浅黄橙 10YR 8/3	
803	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。	灰黄 2.5Y 7/1	
804	弥生土器	甕	胴部ミガキ。	胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR 6/2	
805	弥生土器	甕	胴部ミガキ。	胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR 5/2	
806	弥生土器	甕	胴部ミガキ。	胴部ケズリ。	にふい橙 2.5YR 6/4	
807	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。頸部ユビオサエ。胴部ケズリ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 10YR 8/2	外面煤付着。
808	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	胴部ケズリ。	にふい黄褐 10YR 5/3	
809	弥生土器	甕	磨減。	口縁部ヨコナデ。	にふい黄橙 10YR 7/2	
810	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	黒 10YR 1.7/1	
811	弥生土器	甕	胴部ハケメ。	胴部ケズリ。	灰黄 2.5Y 7/2	底部穿孔。
812	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部陥状圧痕。	胴部ケズリ。	灰黄 2.5Y 7/2	底部焼成前穿孔。
813	弥生土器	甕	胴部ミガキ。		黄灰 2.5Y 6/1	
814	弥生土器	甕	胴部ハケメ。	胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR 5/2	
815	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ナデ。	胴部ケズリ。	浅黄橙 10YR 8/3	外面煤付着。
816	弥生土器	鉢?	刻落。	胴部上位ユビオサエ、下半ミガキ。	灰白 10YR 7/2	
817	弥生土器	鉢?	口縁部凹線。胴部ミガキ。	胴部ミガキ。	褐灰 7.5YR 5/1	
818	弥生土器	鉢?	胴部上半ヨコナデ、下半ミガキ。	胴部ヨコナデ。	灰黄 2.5Y 6/2	
819	弥生土器	鉢	胴部上位ヨコナデ、下半ミガキ。	胴部ナデのちミガキ。	にふい黄橙 10YR 7/2	
820	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部下半ミガキ。	にふい橙 7.5YR 6/4	
821	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	浅黄橙 7.5YR 8/3	
822	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。下半の一部にミガキ。	灰黄褐 10YR 6/2	
823	弥生土器	蓋	ツマミ部分ヨコナデ。		灰白 7.5YR 8/2	

神図 番号	種別	器種	特徴		色調	備考
			外面	内面		
824	弥生土器	高杯	口唇部凹線。		橙 5YR7/6	
825	弥生土器	高杯	口唇部凹線。		赤橙 10YR6/6	外面煤付着。
826	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。磨減。		灰白 10YR8/1	
827	弥生土器	高杯	口唇部凹線。		にぶい橙 7.5YR7/4	
828	弥生土器	高杯	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	灰白 10YR7/1	
829	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	褐灰 10YR6/1	
830	弥生土器	高杯	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。杯部磨減。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
831	弥生土器	高杯	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。杯部磨減。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	灰黄 2.5Y7/2	
832	弥生土器	高杯	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。杯部磨減。脚部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。脚部シボリメ。	にぶい黄橙 10YR7/2	円板充填。
833	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ケズリのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	灰白 10YR8/2	
834	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ。一部にハケメ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	灰白 10YR8/2	
835	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部~脚部ミガキ。脚下部に円形刺突文とヘラ描き沈線文。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。脚部ケズリ。	灰白 10YR8/2	ほぼ完形品。
836	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部~脚部ミガキ。脚部円形刺突文。脚端ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。脚部ケズリ。	橙 2.5Y6/6	
837	弥生土器	高杯	杯部ミガキ。脚端に3個一組の円形刺突文。	脚部ケズリ。	灰白 10YR8/2	
838	弥生土器	高杯	杯部ミガキ。脚部ハケメ、ミガキ。	杯部ミガキ。脚部ケズリ。	褐灰 10YR6/1	
839	弥生土器	高杯	脚下部に透し孔。脚端凹線2本。	脚部ケズリ。	にぶい橙 7.5YR7/3	
840	弥生土器	器台	脚端凹線。	脚部ケズリ。	明褐灰 5YR7/1	
841	弥生土器	高杯	脚下部に3、4個一組の円形刺突文。	脚部ケズリ。	にぶい橙 5YR7/4	
842	弥生土器	高杯	脚下部に3個一組の円形刺突文。	脚部ケズリ。	橙 5YR7/8	
843	弥生土器	高杯	脚下部に円形刺突文。脚端凹線。	脚部ケズリ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
844	弥生土器	高杯	脚部ミガキ。脚下部に円形刺突文とヘラ描き沈線文。	脚部ケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
845	弥生土器	高杯?	脚部ミガキ、ナデ。脚下部に多数の円形刺突文。	脚部ケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
846	弥生土器	甕	剥落。	胴部ケズリ。	灰白 10YR8/2	
847	弥生土器	甕	口唇部凹線。		灰白 5YR8/2	
848	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄 2.5Y6/2	
849	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	浅黄橙 10YR8/4	
850	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	褐灰 10YR5/1	煤付着。
851	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい橙 7.5YR7/4	煤付着。
852	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上位ユビオサエ、下半ケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
853	弥生土器	甕	胴部ミガキ。	胴部ケズリ。	浅黄橙 7.5YR8/4	底部焼成後穿孔。
854	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ハケメのち沈線。	頸部ケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	
855	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ。	杯部ミガキ。脚部ケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/2	台付鉢?円板充填。
856	弥生土器	高杯	脚部ケズリ、ミガキ。脚端部ヨコナデ。	脚部ケズリ。	灰黄褐 10YR6/2	
857	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部~脚部ミガキ。	杯部ミガキ。	灰黄褐 10YR5/2	外面煤付着。
858	弥生土器	高杯	脚下部透し孔。脚端部ヨコナデ。	脚部ケズリ。	灰白 10YR8/2	
859	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ヨコナデ。	胴部ケズリ。	浅黄橙 7.5YR8/6	
860	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部~頸部ヨコナデ、ナデ。胴部ケズリ。	橙 5YR7/6	
861	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。頸部ユビオサエ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
862	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ミガキのち沈線。	口縁部ヨコナデ。頸部ユビオサエのちナデ。	灰黄 2.5Y7/2	
863	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ハケメのち刺突文。	口縁部ヨコナデ。頸部ユビオサエのちミガキ、ナデ。	灰白 10YR7/1	
864	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	胴部上位ナデ。	灰黄 2.5Y7/2	
865	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 10YR8/2	煤付着。
866	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR6/2	
867	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部オサエ、ケズリ。	灰褐 7.5YR6/2	
868	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄褐 10YR6/2	
869	弥生土器	甕	口唇部凹線。頸部ヨコナデ。	口縁部~頸部ヨコナデ。	灰白 10YR8/2	
870	弥生土器	甕		胴部ケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/4	煤付着。焼成前底部穿孔。
871	弥生土器	甕	胴部ミガキ。		にぶい黄橙 10YR7/2	煤付着。
872	弥生土器	台付鉢	口縁部ヨコナデ。胴部~脚部ミガキ。脚部透し孔。	胴部下半ユビオサエ。脚部ケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	
873	弥生土器	台付鉢	脚部ユビオサエのちナデ。	脚部シボリメ、ケズリ。	灰黄 2.5Y8/2	
874	弥生土器	台付鉢	胴部ミガキ。脚下部に多数の円形刺突文。	脚部ケズリ。	浅黄 2.5Y7/3	
875	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	明褐灰 7.5YR7/1	煤付着。
876	弥生土器	鉢			黄灰 2.5Y6/1	
877	弥生土器	鉢		口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 10YR8/2	
878	弥生土器	高杯	磨減。		浅黄橙 7.5YR8/3	
879	弥生土器	高杯	磨減。		にぶい橙 7.5YR7/3	
880	弥生土器	高杯	口唇部凹線。磨減。		にぶい橙 5YR7/4	
881	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ。	杯部ミガキ。	赤褐 10R5/4	煤付着。
882	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ。	杯部ミガキ。脚部ケズリ。	にぶい橙 7.5YR5/3	全面丹塗り。
883	弥生土器	高杯	脚部ミガキ。透し孔を含む円形刺突文3列。脚端凹線。	脚部ケズリ。	灰黄褐 10YR6/2	
884	弥生土器	高杯	脚部ミガキ。3段の透し孔。	脚部ケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	
885	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	胴部ケズリ。	にぶい黄 2.5Y6/3	煤付着。
886	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
887	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。頸部ケズリ。	灰白 7.5YR8/2	
888	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ。	口縁部~杯部ヨコナデ。	灰白 10YR8/1	
889	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	灰白 2.5YR8/2	
890	弥生土器	高杯	脚部ミガキのち描き文。	脚部ケズリ。	灰白 10YR8/2	
891	弥生土器	高杯?	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。杯部に刻目。杯部下半ミガキ。	杯部ナデ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
892	弥生土器	鉢	不詳。	不詳。	灰白 10YR8/2	
893	弥生土器	台付鉢	オサエ。	ハケメ?	灰白 2.5YR8/2	
894	弥生土器	高杯	脚端部ヘラ描き沈線文。	ケズリ?	にぶい橙 5YR6/4	
895	弥生土器	甕	ヨコナデ。	体部ケズリ。	浅黄橙 10YR8/3	
896	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。	体部ナデハケメのちナデ?	浅黄橙 7.5YR8/4	

押図 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
897	弥生土器	甕	ヨコナデ。	ヨコナデ。	浅黄橙 10YR 8/3	
898	弥生土器	高杯	口縁端部上面凹線3条。杯部ヨコミガキ。	杯部ヨコミガキ。	にぶい黄橙 10YR 7/3	
899	弥生土器	甕	玉縁。	不詳。	明赤褐 5YR 5/6	
900	弥生土器	甕	口縁部凹線1条、ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	にぶい黄橙 10YR 7/3	
901	弥生土器	壺	タテミガキ。	不詳。	にぶい赤橙 5YR 5/4	
902	弥生土器	手捏	オサエ、ナデ。	オサエ、ナデ。	褐灰 7.5YR 6/1	
903	弥生土器	甕	不詳。	体部ケズリ。	橙 2.5YR 7/6	剥落顕著。
904	弥生土器	甕	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白 2.5Y 8/2	
905	弥生土器	鉢?	体部粗いハケメ。	ナデ。	灰黄 2.5Y 6/2	
906	弥生土器	甕	体部下端一底部ナデ。	底部オサエ。	にぶい橙 7.5YR 7/4	外面煤付着。
907	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	頸部ナデ。	浅黄橙 10YR 8/3	外面剥落。
908	弥生土器	甕	体部ハケメのちミガキ。	体部ヨコナデケズリ。	橙 5YR 6/6	
909	弥生土器	甕	底部オサエ。	オサエ、ナデ。	灰白 2.5Y 8/2	
910	弥生土器	直口壺	ナデ?	ナデ?	にぶい黄橙 10YR 7/3	剥落顕著。
911	弥生土器	高杯	口縁端部上面凹線3条。杯部ヨコミガキ。	杯部ヨコミガキ。	にぶい橙 7.5YR 6/4	
912	弥生土器	高杯	口縁端部上面凹線3条。	ヨコナデ。	浅黄橙 7.5YR 8/6	
913	弥生土器	台付鉢	杯部タテケズリ。	ナデ。	にぶい黄橙 10YR 7/3	製塩土器。
914	弥生土器	台付鉢	体部ヨコミガキ。	ナデ?	橙 5YR 7/6	
915	弥生土器	器台	円形透し孔。ヘラ描き沈線8条。	ヨコケズリ。	浅黄橙 10YR 8/4	
916	弥生土器	壺?	口唇部退化凹線?	ナデ。	淡黄 2.5Y 8/3	
917	弥生土器	高杯	口縁端部上面沈線4条。	杯部ヨコミガキ。	橙 5YR 6/6	
918	弥生土器	高杯	口縁端部上面沈線4条。杯部ケズリのちナデ?	ナデ?	灰白 10YR 8/2	
919	弥生土器	甕	口縁部凹線2条。底部ミガキ。	底部ナデ。	にぶい橙 7.5YR 7/4	外面煤付着。
920	弥生土器	高杯	脚底部ヘラ描き沈線文。竹管文。脚端部凹線2条。	ヨコケズリ。	にぶい橙 5YR 6/3	
921	弥生土器	壺	口縁部凹線3条。頸部刺突文。体部下半タテミガキ?底部ミガキ。	体部上半タテハケメ、下半タテケズリ。	にぶい橙 7.5YR 7/4	
922	弥生土器	壺	肩部ヘラ描き沈線文。タテハケメ?	体部上半ナメハケメ、下半ナメケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	内外面煤付着。
923	弥生土器	水差	口唇部凹線。頸部刺突文1条。肩部刺突文1条。	口頸部ヨコミガキ。体部ヨコケズリ。	灰白 10YR 8/2	
924	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。肩部刺突文。	体部上半タテハケメ、下半タテケズリ。	浅黄橙 10YR 8/3	
925	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。肩部刺突文。底部ハケメ。	体部上半ナメハケメケズリ。	にぶい橙 5YR 7/4	内外面煤付着。
926	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。肩部ヨコタタキのちハケメ、ヨコミガキ。	肩部ヨコ工具ナデ。	橙 7.5YR 7/6	内外面煤付着。外面剥落。
927	弥生土器	甕	ミガキ?	体部タテケズリのちタテハケメ。	灰白 10YR 8/2	外面剥落。
928	弥生土器	高杯	口縁端部上面凹線4条。円形透し孔4列。櫛描き沈線6段。ヘラ描き沈線8か所。	杯部ヨコミガキ6区画。	浅黄橙 7.5YR 8/4	
929	弥生土器	高杯	円形透し孔。竹管文4列。櫛描き沈線5段。ヘラ描き沈線9か所。	脚柱部上半ナデ。	橙 5YR 7/6	
930	弥生土器	高杯	竹管文5列。櫛描き沈線8段。ヘラ描き沈線9か所。	ヨコナメケズリ。	灰白 10YR 8/2	
931	弥生土器	蓋	口縁部凹線4条。肩部工具ナデ。	ナデのちタテミガキ。	赤褐 10R 5/4	二次焼成痕。
932	弥生土器	甕	底部凸面。ケズリ。	ヨコケズリ。	灰褐 7.5YR 6/2	
933	弥生土器	壺	口唇部凹線。端部刻目。頸部凹線、下位に刺突文。	口頸部ヨコナデ。胴部ケズリ。	明赤橙 2.5YR 5/6	
934	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ハケメのち沈線。	口縁部ヨコナデ。頸部ユビオサエ。	灰白 2.5Y 7/1	
935	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ハケメのち沈線。	口縁部ヨコナデ。頸部ユビオサエ。	にぶい黄橙 10YR 7/2	
936	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。胴部刺突文。胴部下半ミガキ。	口頸部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ。	灰白 10YR 8/2	
937	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部沈線。	口縁部ヨコナデ。頸部ユビオサエ。	灰白 10YR 7/1	
938	弥生土器	壺	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。	にぶい黄橙 10YR 7/2	
939	弥生土器	壺	口唇部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。	灰黄褐 10YR 6/2	
940	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメのちケズリ。	胴部ハケメ。	にぶい黄橙 10YR 7/2	
941	弥生土器	鉢	口唇部凹線。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	灰黄 2.5Y 7/2	
942	弥生土器	壺	胴部ミガキ。底部ミガキ。	胴部ケズリ。	灰白 10YR 8/2	
943	弥生土器	台付鉢	脚部ミガキ。脚端ヨコナデ。	脚部ケズリ。	灰黄 2.5Y 7/2	
944	弥生土器	台付鉢	脚部ミガキ。脚端ヨコナデ。	脚部ケズリ。	にぶい黄橙 10YR 7/2	
945	弥生土器	壺	胴部ハケメのちミガキ。	胴部ケズリ。	にぶい黄橙 10YR 7/2	
946	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	胴部ケズリ。	浅黄橙 10YR 8/3	
947	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ミガキ。	口頸部ヨコナデ、ナデ。胴部ケズリ。	にぶい褐 7.5YR 6/3	
948	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	胴部ケズリ。	灰白 10YR 7/1	煤付着。
949	弥生土器	甕	口唇部櫛描き沈線?胴部ナデ?	胴部ケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	口縁部に若干煤付着。
950	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	煤付着。
951	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部わずかにミガキ。	胴部ユビオサエ、ナデ。	にぶい黄橙 10YR 7/2	煤付着。
952	弥生土器	甕	口唇部細い沈線。胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	橙 5YR 6/6	
953	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ。脚部ナデ。	杯部ミガキ。脚部ケズリ。	にぶい橙 7.5YR 7/3	
954	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	杯部ミガキ。脚部ケズリ。	にぶい橙 5YR 6/4	
955	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	灰白 10YR 7/1	
956	弥生土器	高杯	脚部ヘラ描き文。	脚部ケズリ。	浅黄橙 10YR 8/3	
957	弥生土器	高杯	脚端部ヨコナデ。	脚部ケズリ。	にぶい橙 7.5YR 7/3	
958	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	杯部ハケメのちミガキ。	灰白 10YR 8/2	円盤充填。
959	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 7.5YR 8/2	煤付着。
960	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい橙 7.5YR 7/4	
961	弥生土器	甕	口唇部凹線。	胴部上位ユビオサエ、ナデ。下半ケズリ。	灰白 10YR 8/2	
962	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	灰白 2.5YR 7/1	
963	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	にぶい橙 5YR 7/4	
964	弥生土器	器台?	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。円形刺突文。	にぶい黄橙 10YR 7/2	
965	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメのちミガキ。	胴部ケズリのちミガキ。	灰白 5Y 8/1	
966	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄 2.5Y 6/2	
967	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	浅黄橙 10YR 8/3	
968	弥生土器	鉢	口唇部凹線。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	灰白 10YR 8/1	
969	弥生土器	壺	頸部刺突文。底部ミガキ。	頸部ナデ。	橙 7.5YR 7/6	

押図 番号	種別	器種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
970	弥生土器	壺	口縁部凹線3条。頸部・肩部刺突文。焼成前穿孔2孔一対2組。	頸部一部上半オサエ、ナデ。	灰黄 2.5Y6/2	
971	弥生土器	水差	ミガキ?	オサエ、ナデ。	灰黄 2.5Y7/2	
972	弥生土器	小形壺	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	灰 5Y6/1	
973	弥生土器	壺	口縁部凹線4条。頸部刺突文。底部ミガキ。	体部ケズリのちナデ。	灰黄 2.5Y7/2	
974	弥生土器	壺	口縁部凹線3条。頸部刺突文。	頸部～肩部ナデ上げ。	灰白 7.5YR8/2	
975	弥生土器	壺	口縁部凹線3条。頸部凹線3条。	頸部オサエ、ナデ。	灰白 5Y8/1	
976	弥生土器	壺	口縁部凹線3条。頸部凹線3条。	頸部オサエ、ナデ。	灰黄 2.5Y7/2	
977	弥生土器	壺	口縁部凹線6条。棒状浮文3個。頸部凹線2条。	頸部オサエ、ナデ。	暗灰 N3/	
978	弥生土器	壺	口縁部凹線5条。棒状浮文3個一対5か所。頸部凹線7条。	頸部ヨコハケメのちナデ。	灰白 10YR8/1	
979	弥生土器	壺	口縁部凹線4条。	ヨコナデ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
980	弥生土器	壺	口縁部凹線4条。頸部凹線7条。	頸部の一部にヨコハケメ。	淡黄 2.5Y7/3	
981	弥生土器	壺	口縁部凹線1条。頸部～肩部タテハケメのちヨコミガキ。	肩部タテハケメのちヨコケズリ。	灰黄褐 10YR6/2	
982	弥生土器	壺	底部ミガキ。	ナナメケズリ。	にぶい橙 7.5YR7/4	内面補修痕。
983	弥生土器	甕	口縁部刺突文。	ヨコナデ。	暗灰 N3/	
984	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。肩部刺突文2列。	体部ナデ?	褐灰 10YR4/1	外面煤・炭化物付着。
985	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。肩部刺突文2列。	体部上半ナデ上げ。	黒 5Y2/1	内外面炭化物付着。
986	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部ハケメ。	体部ナデ、オサエ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
987	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部ハケメのち下半タテミガキ。	体部下半ナメハケメ。	灰黄 2.5Y7/2	外面煤・炭化物付着。
988	弥生土器	甕	口縁部凹線4条。体部タテハケメ。	体部タテハケメのちオサエ。	灰黄 2.5Y7/2	外面煤付着。
989	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部ヨコのちタテハケメ。	体部オサエのちタテハケメ。	灰白 10YR8/2	外面煤付着。
990	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部ヨコのちタテハケメ。	体部下半タテケズリ。	淡橙 5YR8/3	
991	弥生土器	甕	口縁部凹線5条。頸部刻目突帯。体部ヨコミガキ。	体部ヨコ～タテハケメ。	灰黄褐 10YR6/2	外面煤付着。
992	弥生土器	甕	口縁部凹線6条。頸部刻目突帯。体部ヨコミガキ。	体部ナメハケメ。	淡黄 2.5Y7/3	
993	弥生土器	甕	口縁部凹線5条。棒状浮文3個。体部タテハケメ。	体部下半タテハケメ。	暗灰 N3/	外面煤付着。
994	弥生土器	甕	口縁部凹線4条。棒状浮文3個。体部タテハケメ。	体部ナデ、オサエ。	灰黄 2.5Y7/2	
996	弥生土器	甕	口縁部凹線4条。棒状浮文3個一組5か所。肩部刺突文。	体部ナメハケメ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
997	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部タテハケメのちタテミガキ。	頸部ヨコミガキ。体部上半タテハケメ、下半タテケズリ。	灰白 10YR8/2	外面煤付着。
998	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。肩部刺突文。体部下半タテミガキ。	体部下半タテケズリ。	淡黄橙 10YR8/3	外面煤付着。
999	弥生土器	甕	口縁部凹線4条。体部下半タテミガキ。	体部ナデ、オサエ。	黒 N2/	内外面煤付着。
1000	弥生土器	甕	口縁部凹線4条。円形浮文3個一組。肩部襷描き沈線文。	体部ナデ、オサエ。	灰黄 2.5Y7/2	
1001	弥生土器	甕	口縁部凹線4条。竹管文。体部タテミガキ。	体部ナデ?	にぶい黄橙 10YR7/2	外面煤付着。内面炭化物付着。
1002	弥生土器	甕	体部下半タテハケメ?	体部タテケズリ。	淡黄 2.5Y8/3	外面煤付着。
1003	弥生土器	壺?	ナデ?	タテケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	
1004	弥生土器	甕?	ナデ?	ヨコケズリ。	灰黄 2.5Y6/2	
1005	弥生土器	甕	底部ミガキ。	底部ナデ。	灰黄褐 10YR6/2	内面煤付着。
1006	弥生土器	甕?	体部タテミガキ。	体部タテケズリのちナデ?	にぶい黄橙 10YR7/2	外面煤付着。
1007	弥生土器	甕	底部ミガキ。	底部ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/2	内面炭化物付着。
1008	弥生土器	甕	底部ミガキ。	底部ナデ。	灰褐 7.5YR6/2	外面煤付着。
1009	弥生土器	甕	底部ナデ。	タテケズリ。	灰白 2.5Y8/2	
1010	弥生土器	高杯	口縁部上面凹線3条。脚部円形透し孔5～7孔4段。脚部凹線2条。	脚部ヨコ～ナナメケズリ。	淡黄橙 7.5YR8/4	
1011	弥生土器	高杯	口縁部上面凹線3条。杯部ヨコミガキ。	杯部ヨコミガキ。	褐灰 10YR6/1	
1012	弥生土器	高杯	脚部円形透し孔4列。	杯部ヨコミガキ。	灰白 2.5Y8/2	
1013	弥生土器	高杯	口縁部上面凹線2条。脚部円形透し孔4列。脚部凹線2条。	杯部ヨコミガキ。	淡黄 2.5Y7/4	
1014	弥生土器	高杯	口縁部凹線5条。杯部タテミガキ。	杯部ヨコハケメのちタテミガキ。	黄灰 2.5Y5/1	
1015	弥生土器	高杯	口縁部凹線5条。杯部タテミガキ。	杯部タテ・ヨコミガキ。	灰白 2.5Y7/1	
1016	弥生土器	高杯	脚部円形透し孔。襷描き沈線。ヘラ描き沈線文。ナデ?	ヨコケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
1017	弥生土器	高杯	円形透し孔2段。襷描き沈線。ヘラ描き沈線文。脚部凹線2条。ミガキ?	ヨコケズリ。	淡黄 2.5Y7/3	
1018	弥生土器	高杯	襷描き沈線。ヘラ描き沈線文。脚部凹線2条。ナデ。	ヨコケズリ。	灰白 10YR8/2	
1019	弥生土器	高杯	矢羽形透し孔。ナデ。	ヨコケズリ。	淡黄 2.5Y7/3	
1020	弥生土器	高杯	ヘラ描き沈線2条2段。三角形透し孔6孔。脚部凹線2条。	ヨコケズリ。	淡黄橙 10YR8/3	
1021	弥生土器	高杯	三角形透し孔5孔。ミガキ?	ヨコケズリ。	にぶい橙 5YR7/3	
1022	弥生土器	高杯	沈線1条。四角形透し孔。タテミガキ。	ヨコケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	
1023	弥生土器	高杯	ヘラ描き鋸歯文、沈線文。三角形透し孔16孔。脚部凹線2条。	ヨコケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	
1024	弥生土器	高杯	脚部凹線2条。ナデ、ヨコナデ。	ヨコケズリ。	灰白 10YR8/2	
1025	弥生土器	高杯	沈線1条。タテミガキ?	ヨコケズリ。	淡黄橙 10YR8/3	
1026	弥生土器	高杯	円形透し孔2段。脚部凹線2条。タテミガキ?	ヨコケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	
1027	弥生土器	高杯	口縁部上端凹線4条。杯部ヨコミガキ。脚部タテミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部タテハケメ。脚部ヨコケズリ。	灰白 10YR7/1	
1028	弥生土器	高杯	口縁部上端凹線3条。杯部タテミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ナデ。	灰黄 2.5Y7/2	
1029	弥生土器	高杯	工具ナデのちナデ。	ヨコケズリ。	灰白 2.5Y7/1	
1030	弥生土器	高杯	円形透し孔。ミガキ?	ナナメケズリ。	にぶい橙 2.5YR7/4	
1031	弥生土器	高杯	口縁部上面凹線3条。口縁部凹線2条。タテミガキ。	杯部ヨコハケメ。	灰黄 2.5Y7/2	
1032	弥生土器	高杯	口縁部凹線4条。ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰黄 2.5Y7/2	
1033	弥生土器	高杯	口縁部上面凹線3条。杯部ヨコミガキ。	杯部ヨコミガキ。	にぶい赤褐 5YR5/4	
1034	弥生土器	台付鉢	口縁部凹線5条。肩部刺突文。体部ヨコミガキ。	肩部ヨコハケメのちナデ上げ。	橙 5YR6/6	
1035	弥生土器	台付鉢	口縁部凹線4条。肩部刺突文。脚部円形透し孔8孔。ヘラ描き沈線10か所。脚部凹線2条。	体部下半ナデ?	にぶい橙 7.5YR7/4	

挿図 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
1036	弥生土器	台付鉢	口縁部上面凹線3条。頸部円形透し孔2孔二組。肩部刺突文。	体部ヨコケズリ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
1037	弥生土器	台付鉢	タテミガキ。	体部ナデ、オサエ。	にぶい橙 7.5YR7/3	
1038	弥生土器	鉢	口縁部上端凹線4条。体部タテミガキ。	体部ナデ、オサエ。	灰黄 2.5Y7/2	
1039	弥生土器	鉢	口唇部凹線1条。口縁部上端凹線7条。ヨコナデ。	体部ナナメミガキ。	灰黄 2.5Y7/2	
1040	弥生土器	鉢	口縁部凹線4条。肩口、焼成前穿孔1孔。	体部ヨコ〜タテミガキ。	灰黄 2.5Y6/2	内面炭化物付着。
1041	弥生土器	台付鉢	台部タテミガキ?	体部タテハケメ。台部ヨコケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	台部補修痕。
1042	弥生土器	台付鉢	ヘラ描き沈線文16か所?	ヨコケズリ。	黄灰 2.5Y6/1	
1043	弥生土器	器台	ヘラ描き沈線3条。三角形透し孔6孔。凹線3条。	ヨコケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	
1044	弥生土器	器台	長方形透し孔。凹線3条。ナデ?	ヨコケズリ。	暗灰黄 2.5Y5/2	
1045	弥生土器	器台	円形ないし巴形透し孔。タテハケメ。	ヨコケズリ。	にぶい橙 7.5YR7/4	
1046	弥生土器	器台	凹線7条。タテハケメ。	ヨコケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	
1047	弥生土器	器台	凹線10条。ヨコナデ。	ヨコケズリ。	灰 5Y5/1	
1048	弥生土器	壺?	ヨコミガキ。	ヨコナデ。	にぶい黄橙 10YR6/3	
1049	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部ヨコハケメ〜タテミガキ。	体部上半ナデ上げ。	灰白 10YR8/1	
1050	弥生土器	甕	体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	灰白 2.5Y8/2	
1051	弥生土器	甕	体部ナデ?	体部ヨコケズリ。	浅黄橙 7.5YR8/4	
1052	弥生土器	甕	口縁部描き沈線8条。	体部ヨコケズリ。	灰黄 2.5Y6/2	
1053	弥生土器	直口壺	口縁部上端沈線5条。タテミガキ。	ナデ、オサエのちタテミガキ。	橙 2.5YR6/8	
1054	弥生土器	直口壺	口頸部ナデ?	体部ナデ?	橙 5YR7/8	剥落顯著。
1055	弥生土器	台付鉢		ナナメハケメ。		体部内面煤付着。
1056	弥生土器	器台?	脚端部凹線3条。ナデ?	ヨコケズリ。	灰白 5Y7/1	
1057	弥生土器	高杯	脚柱部タテミガキ。	脚柱部ヨコハケメ。	灰白 2.5Y8/2	
1058	弥生土器	高杯	タテミガキ。	ヨコケズリ。	灰白 10YR8/2	
1059	弥生土器	高杯	タテミガキ。	絞り痕。	浅黄橙 7.5YR8/4	
1060	弥生土器	高杯	杯部ヨコミガキ?脚柱部円形透し孔。	杯部ヨコミガキ?	浅黄橙 10YR8/3	
1061	弥生土器	甕	底部ミガキ。	タテケズリ。	灰白 10YR8/2	
1062	弥生土器	鉢?	ナデ、オサエ。	ナデ、オサエ。	灰白 2.5Y8/1	
1063	弥生土器	鉢?	オサエ、ナデ。	タテケズリ。	灰白 10YR8/2	
1064	弥生土器	鉢	オサエ、ナデ。	オサエ、ナデ。	灰白 2.5Y8/2	
1065	弥生土器	直口壺	口唇部凹線1条。口縁部上端凹線2条。肩部刺突文。	体部ナデ上げ。	灰白 2.5Y8/2	
1066	弥生土器	壺	口縁部凹線3条。頸部タテハケメ。	ヨコナデ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
1067	弥生土器	壺	口縁部凹線4条。頸部タテハケメのちヨコミガキ。	頸部ヨコミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
1068	弥生土器	壺	口縁部凹線5条。肩部刺突文。	頸部タテナデ。	灰白 10YR8/2	
1069	弥生土器	壺	頸部沈線9条。突帯。肩部ミガキ?	口縁部タテミガキ。頸部ナデ。	灰白 5Y7/2	
1070	弥生土器	壺	口縁部沈線3条。頸部沈線8条。	頸部ナデ。体部ヨコケズリ。	灰白 2.5Y8/2	
1071	弥生土器	壺	口縁部沈線3条。頸部沈線4条。	頸部ナデ。体部ヨコケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	
1072	弥生土器	壺	頸部ヘラ描き沈線文。肩部ヨコミガキ。	口縁部ヨコミガキ。肩部ヨコケズリのちヨコミガキ。	灰黄 2.5Y6/2	
1073	弥生土器	壺	口縁部凹線2条。肩部刺突文。	口縁部ヨコミガキ。頸部オサエ、ナデ。	灰白 5Y8/2	
1074	弥生土器	壺	頸部タテミガキ。肩部ヨコミガキ。	口頸部ヨコミガキ。	灰白 2.5Y8/2	
1075	弥生土器	台付直口壺	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	ヨコナデ。	浅黄橙 10YR8/3	
1076	弥生土器	壺	口縁部ヨコミガキ?頸部タテハケメのちヨコミガキ。	口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。	淡黄 2.5Y8/3	
1077	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。頸部ヨコミガキ。	口縁部ヨコナデ〜ヨコミガキ?	浅黄橙 10YR8/3	
1078	弥生土器	壺	口縁部凹線4条。ヨコナデ。	ヨコミガキ。	灰白 2.5Y8/2	
1079	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。頸部ヨコミガキ。	口縁部ヨコナデ〜ヨコミガキ。頸部ヨコハケメのちナデ。	橙 5YR7/6	
1080	弥生土器	甕	口縁部沈線5条。頸部ヨコミガキ。	体部ヨコケズリ。	灰白 10YR8/2	
1081	弥生土器	甕	ヨコナデ。	体部ヨコケズリ。	浅黄橙 10YR8/3	
1082	弥生土器	甕	体部ナナメミガキ。	体部ヨコケズリ。	浅黄橙 10YR8/3	
1083	弥生土器	甕	丹塗。体部タテハケメ。	口縁部丹塗。体部ヨコケズリ。	橙 2.5YR6/8	
1084	弥生土器	甕	体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	淡黄 2.5Y8/3	外面煤付着。
1085	弥生土器	甕	体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	灰白 2.5Y8/2	外面煤付着。
1086	弥生土器	鉢	体部ヨコミガキ。	体部ヨコミガキ。	赤橙 10R6/6	
1087	弥生土器	甕	体部タテハケメ。	体部ヨコ〜タテケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	
1088	弥生土器	甕	体部タテハケメ。	体部タテケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	
1089	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	体部ヨコケズリ。	灰白 2.5Y8/2	
1090	弥生土器	甕	体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	灰白 7.5YR8/2	
1091	弥生土器	甕	口縁部凹線2条。体部ヨコミガキ。	体部ヨコケズリ。	浅黄 2.5Y7/3	
1092	弥生土器	甕	体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	浅黄 2.5Y7/3	
1093	弥生土器	甕	体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	灰白 10YR8/1	
1094	弥生土器	甕	口縁部沈線3条。体部タテハケメ?	体部ヨコケズリ。	灰白 10YR8/2	
1095	弥生土器	甕	体部タテハケメ。	体部ヨコ〜タテケズリ。	灰白 2.5Y8/1	
1096	弥生土器	甕	体部タテハケメのちヨコミガキ。	体部ヨコ〜タテケズリ。	灰白 2.5Y8/2	
1097	弥生土器	甕	体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	淡黄 2.5Y8/3	外面煤付着。
1098	弥生土器	甕	体部ナデ。	体部ヨコケズリ。	灰白 10YR8/2	
1099	弥生土器	高杯	杯部ヨコミガキ。	杯部タテミガキ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
1100	弥生土器	高杯	口縁部凹線3条。杯部ヨコミガキ。	杯部ヨコミガキ。	灰白 2.5Y8/2	
1101	弥生土器	高杯	口縁部凹線3条。杯部ヨコミガキ。	杯部ヨコミガキ。	灰白 10YR8/2	
1102	弥生土器	高杯	脚端部竹筥文。タテミガキ?	ヨコケズリ。	浅黄橙 7.5YR8/3	
1103	弥生土器	高杯	櫛描き沈線4段。円形透し孔4列2段。	ヨコケズリ。	灰白 7.5YR8/2	
1104	弥生土器	高杯	櫛描き沈線4段。円形透し孔4列4段。	タテケズリ。	灰白 2.5Y8/2	
1105	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部ヨコミガキ。脚部タテミガキ。	脚部ナナメケズリ。	にぶい橙 7.5YR7/4	杯部内面剥落。
1106	弥生土器	高杯	脚部ナデ。円形透し孔4孔。	脚部ナデ。	灰白 2.5Y8/2	
1107	弥生土器	高杯	口縁部ヨコミガキ?脚部円形透し孔4孔。	口縁部ヨコミガキ?脚部ナデ。	赤橙 10YR6/8	
1108	弥生土器	高杯	ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	橙 5YR7/6	

押図 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
1109	弥生土器	高杯	ヨコミガキ。	杯部ヨコミガキ。脚部ナデ。	灰白 2.5Y 8/2	
1110	弥生土器	高杯	杯部ヨコナデ。脚部ナデ。	杯部タテミガキ。脚部ナデ。	灰白 5Y 8/2	杯部内面赤色顔料付着。
1111	弥生土器	高杯	ヨコミガキ?	口縁部タテミガキ。杯部ヨコミガキ。	にふい黄橙 10Y R 7/2	
1112	弥生土器	高杯	脚部凹形透し孔1孔。タテミガキ?	杯部ヨコミガキ。脚部タテズリ?	浅黄橙 7.5Y R 8/3	
1113	弥生土器	高杯	杯部ナデ。脚部凹形透し孔4孔。	杯部・脚部ヨコハケメ。	浅黄橙 7.5Y R 8/4	
1114	弥生土器	高杯	脚部凹形透し孔4孔。	脚部ナナメハケメ。	浅黄橙 10Y R 8/3	
1115	弥生土器	高杯	タテハケメのちヨコミガキ。	ヨコミガキ。	灰白 10Y R 8/2	
1116	弥生土器	高杯	脚部凹形透し孔4孔。タテハケメ。	杯部ヨコミガキ。脚部ヨコハケメ。	にふい橙 7.5Y R 7/4	
1117	弥生土器	高杯	脚部凹形透し孔4孔。タテハケメ。	杯部ヨコミガキ。脚部ナデ。	にふい橙 7.5Y R 7/4	
1118	弥生土器	高杯	脚部凹形透し孔4孔。タテミガキ。	脚部ヨコナデ。	灰白 2.5Y 7/1	
1119	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。杯部ナデ?	にふい黄 2.5Y 6/3	
1120	弥生土器	高杯	不詳。	ナデ?	浅黄橙 10Y R 8/3	外面剥落。
1121	弥生土器	高杯	杯部ナデ。	杯部タテミガキ。	にふい黄橙 10Y R 7/2	
1122	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部ヨコミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ヨコハケメのちヨコミガキ。	灰白 7.5Y R 8/2	
1123	弥生土器	高杯	凹形透し孔4孔。ヨコミガキ。	ナデ。	にふい黄橙 10Y R 7/2	内面煤付着。
1124	弥生土器	高杯	脚部凹形透し孔4孔。	杯部・脚部ヨコハケメ。	灰白 2.5Y 8/2	
1125	弥生土器	鉢	口縁部上面凹線3条。体部ナデ?	体部ヨコナデ。	淡橙 5Y R 8/4	
1126	弥生土器	鉢	口縁部凹線2条。体部タテハケメのちナデ?	口縁部ヨコナデ。体部ヨコナデのちタテミガキ。	にふい黄橙 10Y R 7/2	
1127	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。	体部ヨコナデ。	橙 2.5Y R 6/6	
1128	弥生土器	鉢	体部ナナメタタキ。	体部ナデ。	浅黄橙 7.5Y R 8/3	
1129	弥生土器	鉢	体部タテハケメ。	ヨコハケメ。	灰黄 2.5Y 7/2	
1130	弥生土器	鉢	ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	にふい橙 7.5Y R 7/4	
1131	弥生土器	鉢	タテハケメ。	ナメのちヨコハケメ。	灰黄 2.5Y 7/2	
1132	弥生土器	鉢	体部下ヨコミガキ。	体部ナデ?	淡黄 2.5Y 8/3	
1133	弥生土器	鉢	ナデ。	タテミガキ。	灰黄 2.5Y 6/2	
1134	弥生土器	台付鉢	ナデ? オサエ。	体部タテ・ナメハケメ。	灰白 10Y R 8/2	
1135	弥生土器	台付鉢	台部ナデ、オサエ。	台部ナデ、オサエ。	淡黄 2.5Y 8/3	
1136	弥生土器	鉢	口縁部沈線4条。体部ナデ?	体部タテズリ。	浅黄橙 10Y R 8/3	
1137	弥生土器	鉢	体部工具ナデ? 底部刺突文1か所。	工具ナデ。	にふい橙 7.5Y R 7/3	
1138	弥生土器	台付鉢	体部ナデ? 台部オサエ。	体部下ナデ。台部オサエ。	灰白 2.5Y 8/2	
1139	弥生土器	台付鉢	体部無調整。台部オサエ。	体部ナメハケメ。台部ナデ。	灰黄 2.5Y 7/3	
1140	弥生土器	器台	凹形透し孔2孔一対6組。ヘラ描き沈線文。タテミガキ。	上半ナデ、下半ヨコナデ。	橙 2.5Y R 6/6	
1141	弥生土器	器台	凹線6条。タテハケメ。脚部凹線2条。	ヨコナデ。	浅黄橙 10Y R 8/3	
1142	弥生土器	鉢	ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	にふい橙 7.5Y R 7/4	
1143	弥生土器	器台	長方形透し孔4ないし5孔。脚部上端刺突文。	タテヨコナデ。	浅黄 2.5Y 7/3	外面補修痕。
1144	弥生土器	壺	櫛描き波状文3段。ナデ?	ナデ。	灰白 2.5Y 8/1	傾き不詳。
1145	弥生土器	壺	体部ヨコのちタテハケメ。	体部ヨコナデ。	灰白 2.5Y 8/2	
1146	弥生土器	高杯	脚部凹形透し孔3孔。ミガキ?	杯部・脚部ヨコハケメ。	灰白 7.5Y R 8/2	
1147	弥生土器	鉢	オサエ、ナデ。	ヨコナデ。	灰白 5Y 8/2	
1148	弥生土器	壺	口縁部凹線2条。体部タテハケメ。	体部オサエ、ナデ。	灰黄褐 10Y R 6/2	
1149	弥生土器	壺	口縁部凹線3条。体部タテハケメ。	体部オサエ、ナデ。	橙 2.5Y R 6/6	
1150	弥生土器	台付鉢	口縁部凹線2条。肩部刺突文。	体部ヨコハケメのちナデ。	にふい黄橙 10Y R 7/3	外面煤付着。
1151	弥生土器	高杯	脚部凹形透し孔4孔。ナデ?	杯部ヨコミガキ。脚部ナデ?	にふい黄橙 10Y R 7/3	
1152	弥生土器	器台	タテハケメ。沈線8条現存。凹形透し孔。ヘラ描き家屋文。	工具ナデ?	灰黄褐 10Y R 6/2	
1153	弥生土器	壺	口縁部凹線3条。頸部凹線6条。	頸部ナデ、オサエ。	灰白 2.5Y 8/2	
1154	弥生土器	壺	口縁部凹線3条。頸部凹線2条。	頸部ナデ、オサエ。	灰黄褐 10Y R 5/2	
1155	弥生土器	壺	口縁部凹線3条。頸部凹線2条。	頸部ナデ、オサエ。	灰白 2.5Y 8/1	
1156	弥生土器	壺	口縁部凹線3条。頸部ヘラ描き沈線6条。タテハケメのちタテミガキ。	体部上半オサエ、ナデ。下半タテズリのちナデ。	灰白 10Y R 8/1	外面煤付着。
1157	弥生土器	壺	肩部竹管文2列。ナデ?	工具ナデ?	灰白 2.5Y 7/1	傾き不詳。
1158	弥生土器	壺	口縁部凹線4条。頸部ヘラ描き沈線。肩部刺突文、タテハケメ。	頸部オサエ、ナデ。体部ヨコナデ。	橙 5Y R 6/6	
1159	弥生土器	壺	頸部ヘラ描き沈線3条。肩部刺突文。底部ナデ。	頸部オサエ、ナデ。体部ヨコナデ。	浅黄 2.5Y 7/3	
1160	弥生土器	壺	口縁部凹線2条。体部タテハケメのちヨコミガキ。	体部ヨコナデのちヨコミガキ。	灰白 10Y R 7/1	外面煤付着。
1161	弥生土器	壺	口縁部凹線2条。体部タテハケメのちヨコミガキ。	体部ナデ。	暗灰黄 2.5Y 5/2	
1162	弥生土器	壺	口縁部凹線2条。体部タテハケメ。赤色顔料。	体部ヨコナデ。口縁部赤色顔料?	にふい橙 2.5Y R 6/3	外面煤付着。
1163	弥生土器	壺	口縁部凹線4条。頸部ミガキ?	体部ヨコナデ。	にふい橙 7.5Y R 7/3	
1164	弥生土器	壺	口縁部凹線3条。体部タテミガキ。	ヨコナデ。	黒褐 7.5Y R 3/1	
1165	弥生土器	壺	口縁部凹線4条。ヨコミガキ。	口縁部ヨコミガキ。体部ヨコナデ。	灰白 2.5Y 8/1	
1166	弥生土器	壺	口縁部凹線3条。頸部刺突文。体部タタキ。	頸部~体部オサエ、ナデ。	にふい黄橙 10Y R 7/2	
1167	弥生土器	壺	口縁部凹線2条。体部タテハケメのちヨコミガキ。	頸部ヨコミガキ。体部タテズリ。	黄灰 2.5Y 6/1	
1168	弥生土器	壺	口縁部凹線2条。体部タテハケメのち下半タテミガキ。底部ナデ。	体部上半ナデ、下半タテズリ。	にふい橙 7.5Y R 7/3	
1169	弥生土器	壺	口縁部凹線1条。体部タテミガキ。赤色顔料。	口縁部ヨコミガキ。体部ヨコナデ。	赤褐 10R 5/4	
1170	弥生土器	壺	口縁部凹線3条。体部ヨコミガキ?	体部オサエのち下半ヨコナデ。	にふい橙 2.5Y R 6/4	
1171	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。体部上半タテハケメのちタテミガキ。	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	にふい黄橙 10Y R 7/2	外面下半剥落。
1172	弥生土器	壺	頸部・肩部刺突文各2列。ヨコミガキ。	体部タテズリのちタテミガキ。	褐灰 7.5Y R 4/1	内外面煤付着。
1173	弥生土器	台付直口壺	頸部下半凹線2条。ヨコミガキ。	オサエ、ナデ。	灰褐 7.5Y R 6/2	台部欠損後も使用?
1174	弥生土器	壺	底部ナデ。	ヨコミガキ。	灰黄 2.5Y 6/2	
1175	弥生土器	台付直口壺	口縁部上端凹線5条。台部櫛描き沈線、竹管文、ヘラ描き沈線文。	体部上半無調整。下半ナデ。	にふい黄橙 10Y R 7/2	
1176	弥生土器	壺	口縁部凹線4条。棒状浮文。体部タテハケメのちヨコミガキ。	体部オサエのち工具ナデ。	灰白 10Y R 8/1	
1177	弥生土器	壺	口縁部凹線4条。体部タテハケメ。	体部タテハケメ。	にふい黄橙 10Y R 7/2	
1178	弥生土器	壺	口縁部凹線5条。体部タテハケメ。	体部タテハケメのちナデ。	浅黄 2.5Y 7/4	

押印 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
1179	弥生土器	甕	口縁部凹線4条、棒状浮文。頸部刻目突帯。体部ヨコミガキ。	体部オサエ、ナデ。	灰白 10YR 8/2	
1180	弥生土器	甕	口縁部凹線4条、竹管文。体部タテハケメ。	体部ナナメハケメ。	にふい黄橙 10YR 7/2	
1181	弥生土器	甕	口縁部凹線5条。体部ヨコのちナナメハケメ。	体部ナナメハケメのちナデ。	灰白 2.5Y 7/1	
1182	弥生土器	甕	口縁部凹線5条。体部ハケメのちミガキ?	体部オサエ、ナデ。	灰白 2.5Y 8/2	
1183	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部上半タテハケメのちタテハケメ。底部ナデ。	体部上半タテハケメ、下半タテズリ。底部ナデ。	にふい黄橙 10YR 7/4	口縁部補修痕。
1184	弥生土器	甕	口縁部凹線5条。体部ナデ。	体部オサエ。	灰黄 2.5Y 6/2	
1185	弥生土器	甕	口縁部凹線5条。体部ナデ。	体部ナデ。	灰白 2.5Y 7/1	
1186	弥生土器	甕	口縁部凹線2条。体部タテハケメのちヨコミガキ。	体部ヨコズリ。	褐灰 10YR 4/1	
1187	弥生土器	甕	口縁部凹線4条。体部不詳。	体部ヨコズリ。	灰白 10YR 7/1	
1188	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部タテミガキ。	体部上半オサエのちヨコハケメ、下半タテズリ。	にふい黄橙 10YR 7/2	
1189	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部タテミガキ。	体部ヨコハケメのちナデ?	灰褐 5YR 6/2	
1190	弥生土器	甕	体部タテハケメ。	体部オサエ。	にふい黄橙 10YR 6/3	
1191	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部タテミガキ。	体部ヨコズリ。	にふい橙 7.5YR 7/4	
1192	弥生土器	甕	体部上半タテのちヨコハケメ、下半タテミガキ。	体部ヨコタテズリ。	灰黄 2.5Y 6/2	口縁部補修痕。
1193	弥生土器	甕	口縁部凹線2条。体部タテハケメのちヨコタテミガキ。	体部ヨコズリ。	灰白 10YR 7/1	外面煤付着。
1194	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部タテハケメ。	体部タテミガキ。	にふい赤橙 5R 6/4	
1195	弥生土器	甕	口縁部凹線2条。体部タテハケメのちタテミガキ。	体部ミガキ?	灰白 2.5Y 7/1	外面煤付着。
1196	弥生土器	甕	口縁部凹線4条。体部タテハケメ。	体部工具ナデ?	灰白 5Y 7/1	
1197	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部タテハケメ。	体部工具ナデ?	灰白 10YR 8/1	外面煤付着。
1198	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部タテハケメ。	体部オサエ、ナデ。	灰白 10YR 8/2	外面煤付着。
1199	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部上半タテハケメ、下半タテミガキ。	体部上半オサエ、ナデ。下半タテズリ。	にふい橙 7.5YR 7/3	
1200	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部タテハケメ。	体部上半ナナメハケメ、下半タテズリ。	にふい橙 7.5YR 6/3	
1201	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部タテハケメ。	体部上半オサエ、ナデ。下半ナナメズリ?	にふい黄橙 10YR 7/2	
1202	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部タテハケメ。	体部オサエ、ナデ。	にふい橙 7.5YR 7/3	
1203	弥生土器	甕	口縁部凹線1条。体部タテミガキ。底部ナデ。	体部ヨコタテズリ。底部ナデ。	灰黄褐 10YR 5/2	底部焼成後穿孔1孔。
1204	弥生土器	甕	体部タテミガキ。底部タテズリ。	体部タテズリ。底部ヨコズリ。	褐灰 10YR 6/1	内外面煤付着。
1205	弥生土器	甕	体部ヨコタテミガキ。底部ミガキ。	体部ヨコタテズリ。	灰白 7.5YR 8/2	外面煤付着。
1206	弥生土器	甕	体部工具ナデ。底部ハケメ?	タテズリ。	褐灰 10YR 5/1	
1207	弥生土器	甕	体部タテミガキ。底部ミガキ。	オサエ、ナデ。	灰黄褐 10YR 5/2	焼成前穿孔1孔。
1208	弥生土器	鉢?	体部タテミガキ。底部ナデ。	ヨコズリ。	灰黄 2.5Y 6/2	
1209	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部タテハケメのち下半タテミガキ。	体部オサエのちタテハケメ?	灰白 7.5YR 8/2	外面煤付着。
1210	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部タテハケメ。	体部上半オサエ、ナデ。下半ヨコズリ。	灰黄褐 10YR 6/2	
1211	弥生土器	甕	口縁部凹線2条。体部不詳。	体部タテミガキ。	淡赤橙 2.5YR 7/4	内外面煤付着。外面剥落。
1212	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部タテハケメ。	体部オサエ、ナデ。	灰白 2.5Y 8/1	内面煤付着。
1213	弥生土器	甕	口縁部沈線2条。肩部刺突文。体部上半タテハケメのちタテハケメ。	体部オサエズリ。	橙 5YR 7/6	外面煤付着。
1214	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部タテミガキ?	体部オサエ、ナデ。	灰黄 2.5Y 6/2	外面煤付着。
1215	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。肩部刺突文。体部タテミガキ。	体部オサエのちタテハケメ。	にふい橙 5YR 7/3	外面煤付着。
1216	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部タテハケメ。	体部オサエ。	灰白 10YR 8/2	
1217	弥生土器	甕	口縁部凹線4条。体部上半タテハケメ、下半タテミガキ。	体部ヨコタテズリ。	灰白 2.5Y 8/2	
1218	弥生土器	甕	体部上半タテハケメのちナナメハケメ、下半タテミガキ。	体部上半ヨコズリのち工具ナデ、下半タテズリのちタテミガキ。	にふい黄橙 10YR 6/3	外面煤付着。
1219	弥生土器	甕	口縁部凹線5条。肩部刺突文。体部タテハケメ。	体部オサエ。	にふい橙 7.5YR 7/3	
1220	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。体部タテハケメ。	体部タテハケメ?	灰黄 2.5Y 6/2	
1221	弥生土器	甕	口縁部凹線。体部タテハケメのちタテミガキ。	体部上半ナデ、下半ヨコズリ。	灰褐 5YR 6/2	内外面煤付着。
1222	弥生土器	甕	体部タテハケメ。	体部ハケメ。	黄灰 2.5Y 6/1	
1223	弥生土器	高杯	口縁部凹線4条。杯-脚部タテミガキ。	杯部タテミガキ。脚部ヨコズリ。	にふい黄橙 10YR 7/2	
1224	弥生土器	高杯	口縁部凹線4条。杯部タテミガキ。	杯部ヨコミガキ。	にふい橙 5YR 6/3	
1225	弥生土器	高杯	口縁部凹線6条。杯部ヨコミガキ。	杯部ヨコミガキ。	灰黄 2.5Y 7/2	
1226	弥生土器	高杯	口縁部凹線6条。杯部タテミガキ。脚部横書き沈線。	杯部オサエ、ナデ?	にふい橙 7.5YR 7/3	
1227	弥生土器	高杯	口縁部凹線2条。杯部タテミガキ?	杯部タテミガキ?	明褐色 7.5YR 7/1	
1228	弥生土器	高杯	口縁部ヨコミガキ。杯部タテミガキ。	杯部タテミガキ。	黄灰 2.5Y 6/1	
1229	弥生土器	高杯	口縁部凹線2条。杯部ヨコミガキ。脚部タテミガキ。	杯部ヨコミガキ。	にふい黄橙 10YR 6/3	
1230	弥生土器	高杯	口縁部凹線3条。杯-脚部タテミガキ。脚部横書き沈線。	杯部ヨコミガキ6区画。	にふい橙 2.5YR 6/4	
1231	弥生土器	高杯	口縁部凹線3条。杯部ヨコミガキ。	杯部ヨコミガキ。	灰白 2.5Y 7/1	
1232	弥生土器	高杯	口縁部凹線4条。脚部円形透し孔2孔一対。	杯部ヨコミガキ。脚部ヨコズリ。	にふい橙 7.5YR 7/3	
1233	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部タテミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ヨコハケメ。	にふい黄橙 10YR 7/4	
1234	弥生土器	高杯	口縁部凹線1条。上端凹線2条。脚部ヘラ描き沈線3条。	杯部工具ナデ。脚部ヨコズリ。	灰白 7.5YR 8/1	
1235	弥生土器	高杯	口縁部凹線3条。杯部ヨコミガキ。	ヨコナデ。	にふい橙 5YR 7/3	
1236	弥生土器	高杯	口縁部凹線3条。杯部ナデ?	杯部ヨコミガキ。	灰黄 2.5Y 7/2	
1237	弥生土器	高杯	口縁部凹線3条。杯部ヨコミガキ。	杯部ヨコミガキ。	褐灰 10YR 4/1	
1238	弥生土器	高杯	口縁部凹線3条。口縁部ヨコミガキ?杯部タテミガキ?	口縁部ヨコミガキ。杯部タテミガキ。	淡橙 5YR 8/4	
1239	弥生土器	高杯	口縁部凹線3条。杯部ヨコミガキ。	杯部タテミガキ。	にふい橙 5YR 7/4	
1240	弥生土器	高杯	タテミガキ。	杯部ナデ。脚部ヨコズリ。	灰黄 2.5Y 7/2	
1241	弥生土器	高杯	円形透し孔2段。タテミガキ?	ヨコズリのちナデ?	橙 2.5YR 6/6	
1242	弥生土器	高杯	竹管文2列。タテミガキ。脚端部凹線。	ヨコズリ。	灰白 10YR 8/1	
1243	弥生土器	高杯	円形透し孔8孔。タテミガキ。脚端部凹線。	ヨコズリ。	灰黄 2.5Y 7/2	
1244	弥生土器	高杯	タテミガキ。脚端部凹線。	ヨコズリ。	にふい黄橙 10YR 7/3	
1245	弥生土器	高杯	タテミガキ。	杯部ヨコハケメ。脚部ヨコズリ。	灰白 2.5Y 8/1	
1246	弥生土器	高杯	タテミガキ。脚端部凹線。	ヨコズリ。	灰黄 2.5Y 6/2	

挿図 番号	種別	器種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
1247	弥生土器	高杯	栴檀き沈線6段。円形透し孔4列。ヘラ描き沈線文。	ヨコケズリ。	橙 2.5YR 6/6	
1248	弥生土器	高杯	栴檀き沈線。ヘラ描き沈線文。脚端部凹線2条。	ヨコケズリ。	にふい橙 7.5YR 6/4	
1249	弥生土器	高杯	円形透し孔。ヘラ描き沈線文。タテヨコミガキ。	ヨコケズリ。	にふい橙 7.5YR 7/3	
1250	弥生土器	高杯	栴檀き沈線3段。円形透し孔3段。栴檀き沈線文。	ヨコケズリ。	にふい橙 5YR 2/1	
1251	弥生土器	高杯	栴檀き沈線3段。ヘラ描き沈線文。円形透し孔1段。	杯部ヨコミガキ。胴部上半ナデ。下半ヨコケズリ。	にふい橙 2.5YR 6/4	
1252	弥生土器	高杯	栴檀き沈線4段。ヘラ描き沈線5条。タテミガキ。	上半絞り痕。下半ヨコケズリ。	にふい橙 7.5YR 6/4	
1253	弥生土器	注口	オサエ、ナデ。	ナデ。	灰黄 2.5Y 7/2	
1254	弥生土器	台付鉢	円形透し孔1段。台部タテミガキ。	ヨコケズリ。	にふい黄橙 10YR 7/2	
1255	弥生土器	蓋	オサエのちミガキ。ツマミ刺隆。	ケズリのちミガキ。	黒 10YR 2/1	
1256	弥生土器	台付鉢	オサエ、ナデ。	体部ナデ? 台部オサエ、ナデ。	黄灰 2.5Y 5/1	
1257	弥生土器	台付鉢	口縁部凹線3条。肩部刺突文。体部ヨコミガキ。	体部ナデ。台部ヘラ痕。	にふい橙 7.5YR 7/4	
1258	弥生土器	鉢	肩部刺突文。ヨコナデ。体部タテミガキ?	肩部オサエ。体部タテハケメ?	にふい橙 7.5YR 7/4	
1259	弥生土器	鉢	口縁部凹線2条。肩部刺突文。タテハケメ。体部ヨコミガキ。	頸部ヨコミガキ。肩部ヨコケズリ。体部タテミガキ。	にふい橙 5YR 6/4	
1260	弥生土器	鉢	体部ヨコハケメのちタテミガキ。	体部ヨコケズリのちナデ。	明褐色 7.5YR 7/2	
1261	弥生土器	台付鉢	口縁部ヨコナデ。体部オサエのちヨコハケメ?	体部オサエ、ナデ。	灰褐 5YR 6/2	
1262	弥生土器	鉢	体部ヨコケズリのちヨコミガキ。底部ナデ。	体部ヨコミガキ。	黒褐 10YR 3/1	
1263	弥生土器	鉢	体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	灰白 2.5Y 7/1	
1264	弥生土器	鉢	体部タテハケメ。	ヨコミガキ。	黄灰 2.5Y 5/1	
1265	弥生土器	鉢	体部ヨコミガキ。	体部ヨコミガキ。	橙 2.5YR 6/6	
1266	弥生土器	器台	口縁部凹線3条。体部凹線9条。ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。体部ナデ、オサエ。	にふい橙 7.5YR 7/4	
1267	弥生土器	器台	体部凹線6条。ヨコナデ。脚端部凹線3条。	上半ケズリのちナデ。下半ヨコナデ。	にふい橙 7.5YR 7/3	
1268	弥生土器	器台	栴檀き波状文。凹線8条。	ヨコナデ。	にふい黄 2.5Y 6/3	
1269	弥生土器	器台	凹線9条。ナデ?	ヨコケズリ?のちナデ。下端部ヨコナデ。	にふい黄橙 10YR 7/2	
1270	弥生土器	器台	タテハケメ。下端ヨコナデ。	ヨコハケメ。下端ヨコナデ。	灰白 2.5Y 7/1	
1271	弥生土器	壺	口縁部凹線4条。頸部ヘラ描きから線沈線。ヘラ描き沈線文。肩部刺突文。	口頸部ヨコミガキ。体部ヨコケズリ。	橙 5YR 6/6	
1272	弥生土器	壺	口縁部凹線4条。体部ヨコミガキ。	体部ヨコケズリ。	にふい黄橙 10YR 7/2	
1273	弥生土器	甕	口縁部凹線4条。体部タテハケメ。	体部オサエのちヨコハケメ。	灰白 2.5Y 7/1	
1274	弥生土器	壺	口頸部ヨコナデ。	口頸部ナデ。胴部上位ケズリ。	にふい黄橙 10YR 7/2	
1275	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ。胴部ヨコミガキ。	口縁部ヨコナデ。頸部ユビオサエ。胴部ケズリ。	灰褐 7.5YR 6/2	
1276	弥生土器	壺	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口頸部ヨコナデ。胴部ケズリ。	橙 5YR 7/6	
1277	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	胴部ケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	
1278	弥生土器	甕	磨滅。	ツマミ部分ナデ。	にふい橙 7.5YR 7/4	
1279	弥生土器	蓋	ツマミ部分ヨコナデ。胴部わずかにハケメ。	ツマミ部分ナデ。	灰白 2.5Y 8/2	
1280	弥生土器	台付鉢	脚部面取り。	胴部ユビオサエ。	浅黄 2.5Y 7/4	
1281	弥生土器	鉢?	口唇部凹線。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ。下半ナデ。	にふい黄橙 10YR 7/2	
1282	弥生土器	台付鉢	胴部下位ユビオサエ。脚端ヨコナデ。	胴部ミガキ。脚部ケズリ。	にふい橙 5YR 7/4	
1283	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。胴部下半ケズリ。	胴部ナデ。下半ユビオサエ。	橙 5YR 7/6	
1284	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。胴部下半ケズリ。	胴部上半ユビオサエ。	にふい橙 5YR 7/4	1283と類似する。口縁部煤付着。
1285	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ。	杯部ミガキ。脚部ケズリ。	橙 5YR 6/6	円板充填。
1286	弥生土器	高杯	脚部ミガキ。脚端部ヨコナデ。脚端に透し孔。	脚部ケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	
1287	弥生土器	高杯	脚部ミガキ。	脚部ケズリ。	にふい橙 7.5YR 7/3	小型高杯。円板充填。
1288	弥生土器	高杯	脚部ミガキ。脚下部一脚端ヨコナデ。	脚部上位ナデ。下半ケズリ。	橙 5YR 7/6	
1289	弥生土器	高杯	脚部ナデ。円形刺突文。脚端凹線2本。	脚部ケズリ。	灰黄 2.5Y 7/2	
1290	弥生土器	高杯	杯部ミガキ。脚部ミガキ。円形刺突文。	杯部ミガキ。脚部ケズリ。	灰白 10YR 8/2	
1291	弥生土器	高杯	脚下部円形刺突文30個以上めぐる。脚端部ヨコナデ。	脚部ケズリ。	灰白 10YR 7/1	
1292	弥生土器	高杯			にふい黄橙 10YR 7/2	
1293	弥生土器	高杯			橙 2.5YR 7/6	
1294	弥生土器	壺	頸部凹線。肩部刺突文。タテハケメのち下半タテミガキ。	頸部タテハケメ。体部オサエ、ナデ。	淡黄 2.5Y 8/3	
1295	弥生土器	壺	体部ヨコハケメのちヨコミガキ。	口頸部ヨコミガキ。体部ヨコハケメのちヨコケズリ。ヨコミガキ。	橙 2.5YR 6/6	
1296	弥生土器	壺	口縁部凹線2条。体部タテハケメのちタテミガキ。	体部ヨコケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	
1297	弥生土器	壺	頸部タテハケメ。	ナデ。	灰白 5Y 7/2	
1298	弥生土器	壺	頸部タテハケメ?	オサエ、ナデ。	灰白 10YR 8/2	
1299	弥生土器	壺	肩部穿孔1対2か所。ヨコミガキ。底部ミガキ。	上半ナデ。下半タテミガキ。底部オサエ。	灰白 10YR 8/2	
1300	弥生土器	台付壺	体部タテハケメ。台部オサエ。	体部ヨコケズリ。台部ナデ。	灰白 2.5YR 7/1	
1301	弥生土器	甕	口縁部凹線1条。体部タテハケメ。	体部ナデ、オサエのちヨコハケメ。	にふい黄橙 10YR 6/3	
1302	弥生土器	甕	口頸部オサエ、ナデ。体部タテケズリのちタテミガキ。底部ナデ。	口縁部オサエ、ナデ。体部ナデ。	にふい黄橙 10YR 7/2	
1303	弥生土器	甕	体部上半ヨコのちタテハケメ、下半タテミガキ。	体部上半ナデ上げ。下半タテケズリ。	橙 5YR 7/6	外面煤付着。
1304	弥生土器	甕	ヨコナデ。	体部下半ヨコケズリ。	赤橙 10R 6/6	
1305	弥生土器	甕	不詳。	体部ナデ?	淡黄 5YR 8/4	外面剥落。
1306	弥生土器	甕	口縁部凹線3条。肩部刺突文。体部上半タテハケメ、下半タテミガキ。	体部上半タテハケメ、下半タテケズリ。	にふい橙 5YR 7/4	内外面煤付着。
1307	弥生土器	ミニチュア	オサエ。	オサエ。	灰白 10YR 8/1	
1308	弥生土器	甕	口縁部沈線3条。体部ハケメ?	体部ヨコケズリ。	灰黄褐 10YR 6/2	外面煤付着。
1309	弥生土器	甕	ヨコナデ。	体部ヨコケズリ。	にふい橙 5YR 7/3	
1310	弥生土器	蓋	ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	にふい黄橙 10YR 7/3	
1311	弥生土器	鼓形器台	ヨコナデ。丹塗り。	上半ヨコナデ。下半ヨコケズリ。丹塗り。	橙 5YR 7/6	剥落顯著。
1312	弥生土器	高杯	口縁部タテミガキ。杯部ミガキ?	杯部タテミガキ?	橙 5YR 6/6	
1313	弥生土器	鉢	体部ヨコミガキ?	ヨコミガキ。	にふい橙 7.5YR 6/4	
1314	弥生土器	鉢	口縁部凹線?ヨコナデ。	ヨコナデ。	にふい橙 7.5YR 6/4	
1315	弥生土器	鉢	体部ミガキ?	体部ナデ。	灰白 10YR 8/2	
1316	弥生土器	高杯	口縁部タテミガキ。杯部ケズリのちナデ?	タテミガキ。	にふい黄橙 10YR 7/2	

押印 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
1317	弥生土器	鉢	体部上半ハケメ、下半タテミガキ?底部ナデ。	体部ナデ。	にふい黄橙 10Y R 7/4	
1318	弥生土器	鉢	体部上半タテハケメ、下半~底部不詳。	体部ハケメのちナデ?	灰黄 2.5Y 6/2	
1319	弥生土器	壺	口縁部沈線1条。体部ヨコハケメ。	体部ナデ、オサエ。	にふい黄橙 10Y R 7/3	外面煤付着。
1320	土 師 器	甕	口縁部襷描き沈線8条。体部タテミガキ。	体部ヨコケズリ。	にふい黄橙 10Y R 7/3	
1321	土 師 器	甕	口縁部襷描き沈線7条。体部タテハケメのちタテミガキ。	体部ナナメケズリ。	灰黄 2.5Y 7/2	
1322	土 師 器	甕	口縁部襷描き沈線10条。	体部ヨコケズリ。	にふい黄橙 10Y R 7/2	
1323	土 師 器	高杯	不詳。	不詳。	灰 N 6/	剝落顕著。
1324	須 恵 器	壺	口縁部襷描き波状文。底部ケズリ。	ヨコナデ。	灰 N 6/	自然釉。
1325	須 恵 器	高杯	口縁部ヨコナデ。底部ケズリ。	ヨコナデ。	灰 N 6/	
1326	須 恵 器	杯蓋	口縁部ヨコナデ。天井部ケズリ。	ヨコナデ。	灰白 7.5Y 8/1	
1327	須 恵 器	杯蓋	口縁部ヨコナデ。天井部ケズリ。	ヨコナデ。	灰 N 7/	自然釉。
1328	須 恵 器	杯身	口縁部ヨコナデ。底部ケズリ。	ヨコナデ。	灰 N 7/	
1329	須 恵 器	杯身	口縁部ヨコナデ。底部ケズリ。	ヨコナデ。	灰 N 7/	内面赤色顔料付着。
1330	須 恵 器	杯身	口縁部ヨコナデ。底部ケズリ。	ヨコナデ。	灰 N 6/	
1331	須 恵 器	杯身	口縁部ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰 N 6/	
1332	須 恵 器	杯身	口縁部ヨコナデ。底部ケズリ。	ヨコナデ。	灰 N 6/	
1333	須 恵 器	杯身	口縁部ヨコナデ。底部ケズリ。	ヨコナデ。	青灰 5 P B 6/1	
1334	須 恵 器	杯身	口縁部ヨコナデ。底部ケズリ。ヘラ記号。	ヨコナデ。	灰 N 5/	
1335	土 師 器	壺	ヨコナデ。	ヨコナデ~ナデ。	浅黄橙 10Y R 8/3	
1336	土 師 器	壺	口唇部凹線1条。ヨコナデ。	ヨコナデ~ナデ。	にふい黄橙 10Y R 7/2	
1337	土 師 器	壺	体部タテハケメ。	口縁部ヨコハケメ。頸部ナデ、オサエ。	にふい橙 7.5Y R 7/4	外面煤付着。
1338	土 師 器	壺	口縁部凹線7条。体部タテミガキ。	体部ヨコケズリ。	灰黄 2.5Y 7/2	
1339	土 師 器	壺	口縁部凹線4条。体部タテミガキ。	体部ヨコケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	
1340	土 師 器	壺	体部タテハケメ。	頸部ヨコハケメ。体部ヨコケズリ。	にふい橙 7.5Y R 7/3	
1341	土 師 器	壺	ヨコナデ。	頸部オサエ、ナデ。体部ヨコケズリ。	灰白 5 Y 8/1	
1342	土 師 器	壺	ヨコナデ。	体部ヨコケズリ。	灰白 10Y R 8/2	
1343	土 師 器	壺	体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	
1344	土 師 器	壺	体部タテハケメのちタテミガキ。	体部ヨコケズリ。	にふい黄橙 10Y R 7/3	
1345	土 師 器	壺	ヨコナデ。	体部ヨコケズリ。	浅黄橙 7.5Y R 8/3	
1346	土 師 器	壺	体部タテハケメ。	頸部ヨコハケメ。体部ヨコケズリ。	浅黄 2.5Y 7/3	
1347	土 師 器	壺	ヨコナデ。	体部ヨコケズリ。	浅黄 2.5Y 7/3	
1348	土 師 器	壺	ヨコミガキ。丹塗り。	口頸部ヨコミガキ。丹塗り。体部ナデ、オサエ。	橙 5 Y R 6/6	
1349	土 師 器	壺	ヨコナデ。	ヨコナデ。	にふい橙 7.5Y R 7/4	
1350	土 師 器	壺	口縁部ヨコナデ。体部ヨコハケメ。	口頸部ヨコハケメ。体部オサエ、ナデ。	赤 10R 5/6	
1351	土 師 器	手焙	ナデ。刻目。タテハケメ。ケズリ。	ケズリ、ナデ。	浅黄 2.5Y 8/3	
1352	土 師 器	甕	体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	灰白 2.5Y 7/1	
1353	土 師 器	甕	体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	灰白 5 Y R 8/2	
1354	土 師 器	甕	タテハケメ。	口頸部ヨコハケメ。体部ナナメケズリ。	灰黄 2.5Y 7/2	
1355	土 師 器	甕	体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	
1356	土 師 器	甕	体部ナデ?	頸部ヨコハケメ。体部ヨコケズリ。	灰黄褐 10Y R 6/2	
1357	土 師 器	甕	体部タテハケメのちヨコミガキ。	体部ヨコケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	
1358	土 師 器	甕	体部タタキ。底部ナデ?	体部ヨコケズリ。	浅黄 2.5Y 7/3	
1359	土 師 器	甕	体部ナデ?	体部ヨコケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	
1360	土 師 器	甕	ヨコナデ。	体部ヨコケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	
1361	土 師 器	甕	体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	灰白 10Y R 8/2	
1362	土 師 器	甕	体部タタキ。	体部タテケズリ。	灰白 10Y R 8/2	
1363	土 師 器	甕	口縁部襷描き沈線8条。	体部ヨコケズリ。	にふい黄橙 10Y R 7/2	
1364	土 師 器	甕	口縁部襷描き沈線7条。体部ナナメハケメ。	体部ヨコケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	
1365	土 師 器	甕	口縁部襷描き沈線6条。体部タテミガキ。	体部ヨコケズリ。	浅黄 2.5Y 8/3	
1366	土 師 器	甕	口縁部襷描き沈線8条。	体部ヨコケズリ。	にふい黄橙 10Y R 7/3	
1367	土 師 器	甕	口縁部襷描き沈線7条。体部ナデ?	体部ヨコケズリ。	にふい黄橙 10Y R 7/3	
1368	土 師 器	甕	口縁部襷描き沈線8条。	体部ヨコケズリ。	黒 10Y R 7/1	
1369	土 師 器	甕	口縁部襷描き沈線8条。	体部ヨコケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	
1370	土 師 器	甕	ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	灰白 10Y R 8/2	
1371	土 師 器	高杯	ヨコミガキ。脚部円形透し孔4孔。	杯部ヨコミガキ。脚柱部ナデ。脚部ケズリ?	にふい橙 7.5Y R 7/4	
1372	土 師 器	高杯	ヨコミガキ?	ヨコミガキ。	にふい橙 5 Y R 7/4	
1373	土 師 器	高杯	ナデ。円形透し孔4孔。	ナデ。	にふい橙 7.5Y R 7/3	
1374	土 師 器	高杯	杯部ナデ?	オサエ、ナデ。	灰黄褐 10Y R 6/2	
1375	土 師 器	高杯	ナナメハケメ。	ナナメハケメ。	暗灰黄 2.5Y 5/2	
1376	土 師 器	鉢	口縁部ヨコナデ。体部タテハケメ。	口縁部ヨコハケメ。体部ナデ。	灰白 2.5Y 8/2	
1377	土 師 器	鉢	ヨコミガキ。	口縁部ヨコミガキ。体部ナデ。	にふい橙 7.5Y R 7/3	
1378	土 師 器	ミニチュア	ナデ。	ナデ。	灰黄 2.5Y 6/2	
1379	土 師 器	ミニチュア	オサエ。	オサエ。	浅黄 2.5Y 7/3	
1380	土 師 器	ミニチュア	オサエ。	オサエ。	灰白 10Y R 8/1	
1381	土 師 器	ミニチュア	オサエ。	オサエ。	灰白 5 Y 7/2	
1382	土 師 器	ミニチュア	口縁部ヨコナデ。体部オサエ、ナデ。	口縁部ヨコナデ。体部オサエ、ナデ。	灰白 2.5Y 8/2	
1383	土 師 器	ミニチュア	ナデ、オサエ。	ナデ、オサエ。	灰白 2.5Y 8/2	
1384	土 師 器	ミニチュア	体部ナナメミガキ。底部ナデ。	ナデ。	黒褐 10Y R 3/1	
1385	土 師 器	甕	口縁部襷描き沈線。	体部ヨコケズリ。	灰黄 2.5Y 6/2	
1386	土 師 器	高杯	不詳。	不詳。	橙 5 Y R 7/6	剝落顕著。
1387	土 師 器	鉢	体部ヨコハケメのちナデ?	ヨコハケメ。	明褐灰 7.5Y R 7/1	
1388	土 師 器	壺	口縁部ヨコナデ。頸~体部ヨコミガキ?	口縁部ヨコナデ。体部オサエ、ナデ。	灰黄 2.5Y 6/2	

押図 番号	種別	器種	特徴		色調	備考
			外	内		
1389	土師器	壺	体部ヨコハケメ。	体部ヨコケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
1390	土師器	壺	タテハケメのちタテミガキ。	ケズリのちナデ?	灰白 5Y8/1	
1391	土師器	甕	口縁部襷描き沈線6条。	体部ヨコケズリ。	にぶい褐 7.5YR6/3	
1392	土師器	甕	口縁部襷描き沈線7条。体部タテハケメのち タテミガキ。	体部ヨコケズリ。	明褐灰 7.5YR7/1	外面煤付着。
1393	土師器	甕	口縁部襷描き沈線7条。タテハケメのちタテミガキ。	体部ヨコケズリ。	灰黄 2.5Y6/2	
1394	土師器	甕	口縁部襷描き沈線9条。体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	灰黄 2.5Y6/2	
1395	土師器	甕	口縁部襷描き沈線9条。タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	灰黄 2.5Y6/2	
1396	土師器	甕	口縁部襷描き沈線4条。体部タテハケメのち タテミガキ。	体部ヨコケズリ。	にぶい橙 10YR7/2	
1397	土師器	甕	口縁部襷描き沈線7条。体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	灰黄 2.5Y6/2	
1398	土師器	甕	口縁部襷描き沈線10条。	体部ヨコケズリ。	オリブ黒 5Y3/1	
1399	土師器	甕	口縁部襷描き沈線7条。体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	黄灰 2.5Y6/1	
1400	土師器	甕	口縁部襷描き沈線6条。体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	灰黄褐 10YR6/2	
1401	土師器	甕	口縁部襷描き沈線6条。タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	灰黄 2.5Y6/2	
1402	土師器	甕	口縁部襷描き沈線7条。タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	明褐灰 7.5YR7/1	
1403	土師器	甕	肩部刺突文2個。	体部ヨコケズリ。	灰黄 2.5Y6/2	傾き不詳。
1404	土師器	甕	肩部刺突文3個。タテハケメ。	体部ヨコケズリのちナデ?	灰黄 2.5Y6/2	傾き不詳。
1405	土師器	甕	口縁部襷描き沈線6条。体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	灰白 10YR8/1	外面煤付着。
1406	土師器	甕	口縁部襷描き沈線6条。タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	明褐灰 7.5YR7/2	
1407	土師器	甕	体部ナナメミガキ。底部ミガキ。	オサエのちケズリ?	黒 7.5YR2/1	内外面煤付着。内外面炭 化物付着。
1408	土師器	甕	ヨコナデ。	体部ケズリ?	灰白 2.5Y8/2	
1409	土師器	甕	ヨコナデ。	体部ヨコケズリ。	にぶい橙 7.5YR7/3	外面煤付着。
1410	土師器	甕	体部タテハケメ?	体部オサエのちハケメ。	にぶい赤褐 5YR5/3	
1411	土師器	甕	ヨコナデナデ?	体部ヨコケズリ?	にぶい橙 7.5YR7/3	
1412	土師器	高杯	ヨコナデのちミガキ?	ヨコナデのちミガキ?丹塗り。	灰白 2.5Y8/2	
1413	土師器	高杯	杯部ヨコミガキ。	杯部ヨコハケメのちヨコミガキ。	灰白 2.5Y8/1	
1414	土師器	高杯	ミガキ?脚部凹形透し孔。	脚部縦り痕。脚部ヨコハケメ。	にぶい橙 7.5YR7/3	
1415	土師器	鉢	体部タテハケメ。	体部ヨコハケメ。	灰黄 7.5Y6/2	
1416	土師器	鉢	口縁部襷描き沈線10条。体部タテミガキ。	体部ヨコケズリのちヨコミガキ。	灰黄褐 10YR6/2	
1417	土師器	鉢	体部工具ナデのちミガキ?	体部オサエのちミガキ?	橙 2.5YR7/6	
1418	土師器	鉢	体部上半ナデ。下半~底部タタキ。	工具ナデ。	黄灰 2.5Y6/1	
1419	土師器	鉢	体部ナデ?	体部ケズリ。	灰黄 2.5Y6/2	
1420	土師器	鉢	オサエ、ナデ。	タテケズリ。	黄灰 2.5Y4/1	外面煤付着。
1421	土師器	鉢	体部ヨコケズリのちヨコミガキ。	体部ヨコミガキ。	にぶい橙 7.5YR6/4	
1422	土師器	鉢	体部タテケズリ。	体部タテハケメのちナデ?	灰黄褐 10YR6/2	
1423	土師器	甕	体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	灰白 10YR8/1	外面煤付着。
1424	土師器	甕	体部タテミガキ。	体部ヨコケズリ。	灰白 10YR8/1	
1425	土師器	甕	体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/2	
1426	土師器	甕	体部不詳。	体部ナナメタテケズリ。	灰赤 10R6/2	
1427	土師器	鉢	オサエのちナデ。	オサエのちナデ。	灰白 10YR7/1	
1428	土師器	鉢	ヨコナデナデ。	ヨコナデナデ。	灰黄 2.5Y6/2	
1429	土師器	鉢	オサエのちナデ。体部上半タタキ。	上半オサエのちナデ、下半工具ナデ?	赤橙 10R6/6	製塩土器。
1430	須恵器	壺?	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰 N6/	傾き不詳。
1431	須恵器	甕	同心凹文タタキ。	平行タタキ。	灰 N6/	傾き不詳。
1432	須恵器	杯蓋	口縁部ヨコナデ。天井部ケズリ。	ヨコナデ。	灰白 N7/	
1433	須恵器	杯身	口縁部ヨコナデ。底部ケズリ。	ヨコナデ。	灰 N5/	
1434	土師器	甕	口縁部襷描き沈線。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白 10YR8/2	
1435	土師器	甕	口縁部襷描き沈線。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙10YR7/2	
1436	土師器	甕	口縁部襷描き沈線。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	褐灰 10YR5/1	煤付着。
1437	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	淡赤褐 2.5YR7/3	煤付着。
1438	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部~頸部ヨコナデ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
1439	須恵器	蓋	天井部は時計まわりのヘラケズリ。口縁部ヨ コナデ。	ヨコナデ。	灰 N6/	
1440	須恵器	杯身	底部ヘラケズリ。立ちあがりはヨコナデ。	ヨコナデ。	灰 N6/	
1441	須恵器	蓋	ツマミ部分ヨコナデ。天井部はヘラケズリ。	ヨコナデ。	灰白 N7/	有蓋高杯の蓋。
1442	須恵器	杯身	底部はヘラケズリ。体部から立ちあがりはヨ コナデ。	ヨコナデ。	灰白 N7/	
1443	須恵器	壺	頸部に鋭い2段の凸帯をはさんで襷描き波状文。	ナデ。	暗青灰 5PB3/1	焼成良好。
1444	土師器	壺	体部上半ナデ?下半タテハケメ。	体部ハケメのちナデ。	浅黄橙 7.5YR8/3	外面煤付着。
1445	土師器	壺	ヨコミガキ。	口縁部ヨコミガキ。体部ヨコケズリ。	灰黄 2.5Y6/2	
1446	土師器	壺	ナナメハケメのちヨコミガキ。	体部ヨコケズリ。底部ナデ。	灰白 2.5Y7/1	外面煤付着。
1447	土師器	壺	口縁~体部上半タテハケメ。体部下半ナデ。	口縁部ヨコハケメ。体部ヨコケズリ。	灰黄 2.5Y7/2	外面煤付着。
1448	土師器	甕	ナデ、オサエ。		灰白 2.5Y8/2	
1449	土師器	甕	口縁部襷描き沈線5条。体部タテハケメのち 下半タテミガキ。	体部ヨコケズリ。	浅黄 2.5Y7/3	外面煤付着。
1450	土師器	甕	体部タテミガキ。底部ミガキ。	体部タテケズリ。底部ナデ。	にぶい黄橙 10YR7/4	外面煤付着。内面粒状炭 化物付着。
1451	土師器	甕	口縁部襷描き沈線7条。	体部ヨコケズリ。	にぶい黄橙 10YR7/3	
1452	土師器	甕	口縁部襷描き沈線8条。	体部ヨコケズリ。	浅黄 2.5Y7/3	
1453	土師器	甕	口縁部襷描き沈線9条。体部タテミガキ。	体部ヨコケズリ。	にぶい褐 7.5YR5/3	外面煤付着。
1454	土師器	甕	体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	灰黄 2.5Y6/2	
1455	土師器	甕	口縁部襷描き沈線7条。肩部タテハケメのち 暗文風ナナメミガキ。	体部ヨコケズリ。	浅黄橙 10YR8/3	
1456	須恵器	杯蓋	口縁部ヨコナデ。天井部ケズリ右。	ヨコナデ。	灰 5Y6/1	
1457	須恵器	杯蓋	口縁部ヨコナデ。天井部ケズリ右。	ヨコナデ。	灰 N5/	
1458	須恵器	杯身	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰 N4/	
1459	須恵器	杯身	口縁部ヨコナデ。底部ケズリ左。	ヨコナデ。	青灰 5B5/1	
1460	土師器	壺	体部タテハケメのち下半タテミガキ。	体部オサエ。	にぶい黄橙 10YR7/2	

押図 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
1461	土 師 器	壺	ヨコミガキ。	口縁部ヨコミガキ。体部ヨコケズリ。	灰白 2.5Y 8/2	
1462	土 師 器	壺	体部タテハケメ。	体部ヨコケズリ。	灰白 2.5Y 7/1	
1463	土 師 器	甕	体部ナデ?	体部ヨコケズリ。	浅黄橙 10Y R 8/3	
1464	土 師 器	鉢	体部ハケメ。底部ナデ。	ナデ。	浅黄橙 10Y R 8/4	
1465	土 師 器	高杯	脚柱部ヨコミガキ。脚裾部内形透し孔3孔・ヨコミガキ?	ナデ。	橙 7.5Y R 7/6	
1466	土 師 器	高杯	タテハケメ。円形透し孔3孔。	ナデ?脚柱部穿孔1孔。	橙 5Y R 7/6	
1467	須 恵 器	杯蓋	口縁部ヨコナデ。天井部ケズリ。	ヨコナデ。	灰白 N 7/	
1468	須 恵 器	杯蓋	口縁部ヨコナデ。天井部ケズリ。	ヨコナデ。	灰 N 6/	
1469	須 恵 器	杯蓋	口縁部ヨコナデ。天井部ケズリ。	ヨコナデ。	オリーフ灰 2.5GY 6/1	
1470	須 恵 器	杯身	口縁部ヨコナデ。底部ケズリ。	ヨコナデ。	灰白 N 7/	
1471	須 恵 器	杯身	口縁部ヨコナデ。底部ケズリ。	ヨコナデ。	灰白 N 6/	
1472	須 恵 器	杯身	口縁部ヨコナデ。底部ケズリ左。	ヨコナデ。	青灰 5 PB 6/1	
1473	須 恵 器	高杯	ヨコナデ。	ヨコナデ。	青灰 5 PB 6/1	
1474	須 恵 器	高杯	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰 N 8/	
1475	須 恵 器	甕?	ヨコナデ。	ヨコナデ。	暗青灰 10BG 4/1	傾き不詳。
1476	須 恵 器	横瓶	体部平行タタキ。	体部同心円文タタキ。	灰白 N 7/	
1477	須 恵 器	甕	格子目タタキ。	同心円文タタキ。	青灰 5 PB 6/1	傾き・天地不詳。
1478	須 恵 器	甕	体部平行タタキ。	体部同心円文タタキ。	青灰 5 PB 5/1	
1479	須 恵 器	甕	体部平行タタキ。	体部同心円文タタキ。	灰 N 8/	傾き不詳。
1480	須 恵 器	甕	格子目タタキ。	ヨコハケメ。	灰白 2.5Y 7/1	傾き不詳。
1481	土 師 器	碗	ナデ。	ナデ。	灰白 2.5Y 8/2	
1482	土 師 器	高台付碗	口縁部工具ナデ。体部・底部オサエ。	ナデ。	灰白 10Y R 8/1	
1483	土 師 器	小皿	ヨコナデ。	ヨコナデ。	浅黄橙 10Y R 8/3	
1484	土 師 器	甌	体部タテハケメ。把手オサエ、ナデ。	頸部ヨコケズリ。体部オサエ。	灰黄 2.5Y 7/2	
1485	土 師 器	高台付碗	口縁部工具ナデ。体部・底部オサエ。	ナデ。	灰白 7.5Y R 8/1	
1486	白 磁	碗		沈線1条。	灰 N 8/	内面放れ砂付着。
1487	瓦	平	布目。		灰 7.5Y 5/1	
1488	瓦	平	布目。		灰 10Y 5/1	
1489	瓦	平	布目。		黄灰 2.5Y 6/1	
1490	土 師 器	高台付碗	ヨコナデ。		浅黄 2.5Y 8/3	
1491	土 師 器	杯			灰黄 2.5Y 7/2	
1492	土 師 器	高台付碗	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	ナデ。	浅黄2.5Y 8/3	
1493	土 師 器	高台付碗	ナデ。		にぶい黄橙 10Y R 6/3	底部に穿孔。
1494	土 師 器	高台付碗		ナデのちヨコミガキ?	にぶい黄褐 10Y R 5/3	
1495	土 師 器	高台付碗		ヨコナデ。	にぶい黄褐 10Y R 5/3	
1496	土 師 器	碗		ナデ。	灰白 2.5Y 8/2	
1497	備 前 焼	播鉢	ヨコナデ。片口。	ヨコナデ。卸し目7条。	紫灰 5 PB 5/1	
1498	瓦	丸		布目。	灰 N 6/	
1499	瓦	丸		布目。	褐灰 10Y R 6/1	
1500	白 磁	碗			灰白 N 8/	傾き不詳。
1501	土 師 器	高台付碗	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。底部板目。	ナデ、オサエ。	灰白 2.5Y 8/2	
1502	土 師 器	高台付碗	口縁部ヨコナデ。体部・底部オサエのちナデ。	ナデ。	灰白 2.5Y 8/2	
1503	土 師 器	高台付碗	口縁部ヨコナデ。体部・底部オサエのちナデ。	ナデ。	灰白 7.5Y 8/1	
1504	瓦	軒丸			灰 10Y 6/1	
1505	瓦	丸		布目。	灰白 7.5Y R 7/2	須恵質。
1506	瓦	丸		布目。	灰白 5Y 7/1	須恵質。
1507	瓦	丸		布目。	灰白 5Y 8/1	須恵質。
1508	瓦	丸			灰黄 2.5Y 7/2	磨滅。土師質。
1509	瓦	丸		布目。	灰白 7.5Y R 7/1	
1510	瓦	平			灰白 7.5Y R 8/1	磨滅。
1511	瓦	平			明黄褐 2.5Y 7/6	外面剥落。
1512	黒色土器	碗	ヨコナデ。	ヘラミガキ。	褐灰 10Y R 4/1	内面黒色。
1513	土 師 器	皿	ナデ。		灰白 10Y R 8/2	
1514	須 恵 器	高台付杯	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白 N 7/	
1515	須 恵 器	高台付杯	ヨコナデ。	ヨコナデ。	明黄褐 2.5Y 7/6	
1516	須 恵 器	高台付杯	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白 N 7/	
1517	須 恵 器	高台付杯	ヨコナデ。	ヨコナデ。	暗灰 N 3/	傾き不詳。
1518	須 恵 器	高台付杯	ヨコナデ。	ヨコナデ。	明黄褐 2.5Y 7/6	
1519	須 恵 器	高台付壺	ヨコナデ。	ヨコナデ。	青灰 5 PB 5/1	
1520	須 恵 器	蓋	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰 N 6/	
1521	須 恵 器	高台付壺	肩部ヨコナデ。刺突文2段。体部下半ケズリ。	ヨコナデ。	灰 N 7/	
1522	須 恵 器	高台付壺	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰 N 6/	自然粘。
1523	須 恵 器	甕	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白 N 7/	
1524	須 恵 器	壺			橙 5Y R 6/6	磨滅。
1525	土 師 器	高台付杯			灰黄褐 10Y R 4/2	剥落顕著。
1526	土 師 器	高台付碗	無調整。	ナデ。	にぶい橙 7.5Y R 6/4	
1527	土 師 器	高台付碗	体部・底部ナデ?	ナデ。	灰白 5Y 8/1	
1528	土 師 器	高台付碗	体部・底部ナデ。	ナデ。	灰白 2.5Y 8/2	
1529	土 師 器	高台付碗	体部・底部ナデ。	ナデ。	明黄褐 10Y R 7/2	
1530	土 師 器	高台付碗	体部・底部ナデ。	ナデ。	明褐灰 7.5Y R 7/2	
1531	土 師 器	高台付碗	体部・底部ナデ。	ナデ。	淡黄 2.5Y 8/4	
1532	土 師 器	高台付碗	体部・底部ナデ。	ナデ?	浅黄 2.5Y 7/3	
1533	須 恵 器	高台付碗	体部・底部ナデ。	ナデ。	灰オリーフ 7.5Y 6/2	
1534	土 師 器	高台付碗	体部・底部ナデ。	ナデ。	淡黄 2.5Y 8/3	
1535	土 師 器	高台付碗	体部・底部ナデ。	ナデのちミガキ?	にぶい黄 2.5Y 6/3	
1536	土 師 器	高台付碗	体部・底部ナデ?	ナデ。	橙 5Y R 6/8	剥落顕著。内黒?
1537	土 師 器	高台付碗	体部・底部ナデ。	ナデ。	浅黄 5Y 7/4	内黒。
1538	土 師 器	高台付碗	体部・底部ナデ。	ナデ。	にぶい褐 7.5Y R 5/4	

挿図 番号	種 別	器 種	特 徴		色 調	備 考
			外 面	内 面		
1539	土 師 器	高台付碗	体部・底部ナデ。	ナデ。	にぶい橙 5 Y R 6 / 4	外面煤付着。
1540	土 師 器	高台付碗	体部・底部ナデ。	ナデ。	にぶい赤褐 5 Y R 5 / 4	
1541	土 師 器	高台付皿	体部・底部ナデ。	ナデ。	灰白 7.5 Y 8 / 1	
1542	土 師 器	高台付碗	体部・底部ナデ。	ナデ。	灰白 5 Y 8 / 2	
1543	土 師 器	高台付碗	体部・底部ナデ?	ナデ?	灰白 7.5 Y 8 / 2	
1544	土 師 器	高台付碗	体部・底部ナデ。	ナデ。	橙 5 Y R 6 / 6	
1545	土 師 器	高台付碗	体部・底部ナデ?	ナデ?	にぶい黄橙 10 Y R 6 / 4	
1546	土 師 器	皿	ナデ。	ナデ。	橙 7.5 Y R 6 / 6	
1547	土 師 器	皿	ナデ。焼成前穿孔。	ナデ。	灰白 10 Y R 8 / 1	
1548	土 師 器	皿	ヨコナデ。	ナデ。	灰白 2.5 Y 8 / 2	
1549	土 師 器	脚台	ヨコナデ。	ナデ。	灰白 10 Y R 8 / 2	
1550	土 師 器	碗?	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰 5 Y 6 / 1	
1551	備前焼	播鉢		ヨコナデ。	灰褐 7.5 Y R 4 / 2	
1552	龜山焼	播鉢		ヨコナデ。	灰白 N 8 /	傾き不詳。
1553	須恵器	皿	底部糸切り。	ナデ?	明青灰 5 P B 7 / 1	
1554	青 磁	碗			オリブ黄 5 Y 6 / 4	
1555	青 磁	碗			灰オリブ 7.5 Y 5 / 2	
1556	白 磁	碗			灰白 N 8 /	
1557	陶磁器	皿			にぶい橙 7.5 Y R 6 / 4	内面放れ砂付着。
1558	青 磁	碗			灰白 10 Y 7 / 1	
1559	青 磁	碗			灰白 N 8 /	

第19表 新旧遺構名称対照表

新遺構名	調 査 区	旧 遺 構 名	時 期	新遺構名	調 査 区	旧 遺 構 名	時 期
竪穴住居 1	K O 2	# 35	弥生時代前期前葉～中葉	建物16	T A	No51	弥生時代後期
竪穴住居 2	H O	S H 1	弥生時代前期前半	建物17	H18	S B 1	弥生時代後期?
竪穴住居 3	H O	S H 2	弥生時代前期前半	建物18	B U	S B03	弥生時代後期前葉?
竪穴住居 4	K10	前期住居	弥生時代前期前葉～中葉	建物19	B U	S B02	弥生時代後期前葉
竪穴住居 5	T A	Na31	弥生時代後期前葉	建物20	C H 1	S B03	弥生時代後期
竪穴住居 6	T A	Na32	弥生時代後期前葉	建物21	C H 1	S B05	弥生時代後期
竪穴住居 7	T A	Na44	弥生時代後期前葉	建物22	C H 1	S B04	弥生時代後期前葉?
竪穴住居 8	T A	Na34	弥生時代後期前葉	建物23	K O 1	# 37	弥生時代中期後半～後期前半
竪穴住居 9	T A	Na 1	弥生時代後期前葉	建物24	H O	S B 1	弥生時代後期
竪穴住居10	T A	Na28	弥生時代後期前葉	建物25	H O	S B 2	弥生時代中期中葉～後期
竪穴住居11	T A	Na14	弥生時代後期前葉	建物26	H O	S B 3	弥生時代後期
竪穴住居12	T A	Na13	弥生時代後期前葉	建物27	H O	S B 4	弥生時代後期
竪穴住居13	T A	Na19	弥生時代後期前葉	建物28	H O	S B 5	弥生時代中期中葉～後期
竪穴住居14	T A	Na27	弥生時代後期前葉	建物29	H O	S B 6	弥生時代中期中葉～後期
竪穴住居15	B U	S H01	弥生時代後期前葉	建物30	H O	S B 8	弥生時代後期
竪穴住居16	B U	S H04	弥生時代後期前葉	建物31	H20	Na41	弥生時代中～後期
竪穴住居17	B U	S H02	弥生時代後期前葉	建物32	C H 2	# 22	弥生時代中期中葉～後期
竪穴住居18	B U	S H03	弥生時代後期前葉	建物33	C H 2	# 11	弥生時代中期中葉～後期
竪穴住居19	C H 1	S H01	弥生時代後期?	建物34	C H 2	# 19	弥生時代中期中葉～後期
竪穴住居20	K O 1	# 30	弥生時代中期後半～後期前半	建物35	C H 2	# 24	弥生時代
竪穴住居21	C H 2	# 7	弥生時代中期後半～後期前半	建物36	C H 3	S B 2	弥生時代中期後葉
竪穴住居22	C H 2	# 13	弥生時代後期前葉	建物37	C H 3	S B 3	弥生時代中期後葉
竪穴住居23	C H 3	S H 3	弥生時代後期前葉	建物38	C H 4	# 27	弥生時代中期中葉～後期
竪穴住居24	C H 3	S H 2	弥生時代後期前葉	建物39	C H 4	# 14	弥生時代後期中葉
竪穴住居25	C H 3	S H 1	弥生時代中期後葉	建物40	C H 5	# 15	弥生時代中期中葉～後期
竪穴住居26	H W 1	Na 4	弥生時代中期後葉	建物41	H W 1	Na 8	弥生時代中～後期
竪穴住居27	H W 3	Na 7	弥生時代後期前葉	建物42	H W 1	Na12	弥生時代中～後期
建物 1	T A	Na56	弥生時代後期	建物43	C H 4	# 17	古墳時代後期
建物 2	T A	Na58	弥生時代後期	建物44	C H 4	# 16	古墳時代後期
建物 3	T A	Na38	弥生時代後期	建物45	C H 4	# 7	古墳時代後半以降
建物 4	T A	Na39	弥生時代後期	建物46	C H 4・5	# 6	古墳時代後半以降
建物 5	T A	Na54	弥生時代後期	建物47	C H 5	# 5	古墳時代後半以降
建物 6	T A	Na35	弥生時代後期中葉	建物48	C H 1 A	S B01	鎌倉時代
建物 7	T A	Na55	弥生時代後期	建物49	C H 1 A	S B02	鎌倉時代
建物 8	T A	Na53	弥生時代後期	建物50	K O 1	# 27	鎌倉時代
建物 9	T A	Na65	弥生時代後期	建物51	H O	S B 7	中世
建物10	T A	Na66	弥生時代後期	建物52	K	建物 1	中世
建物11	T A	Na 6	弥生時代後期	建物53	H20	Na42	古代～
建物12	T A	Na48	弥生時代後期中葉?	建物54	C H 3	S B 1	鎌倉時代
建物13	T A	Na50	弥生時代後期	建物55	H W 1	Na 6	中世
建物14	T A	Na10	弥生時代後期前葉	建物56	H W 1	Na 5	中世
建物15	T A	Na52	弥生時代後期前葉	建物57	H W 1	Na 7	中世

新遺構名	調査区	旧遺構名	時期	新遺構名	調査区	旧遺構名	時期
柱穴列1	K10	Na24	古代~	土壇22	HO	SK7	弥生時代前期
柱穴列2	H20	Na46	古代	土壇23	HO	SK4	弥生時代前期
井戸1	PU	SE01	弥生時代後期?	土壇24	K10	Na19	弥生時代前期中葉
井戸2	TA	Na9	弥生時代後期前葉	土壇25	K10	Na18	弥生時代前期中葉
井戸3	TA	Na7	弥生時代後期前葉	土壇26	K10	Na16	弥生時代前期
井戸4	TA	Na33	弥生時代後期前葉	土壇27	K10	Na17	弥生時代前期
井戸5	TA	Na64	弥生時代後期前葉	土壇28	K10	Na23	弥生時代前期中葉
井戸6	TA	Na61	弥生時代後期前葉	土壇29	K10	Na14	弥生時代前期中葉
井戸7	TA	Na59	弥生時代後期前葉	土壇30	K10	Na13	弥生時代前期中葉
井戸8	H20	Na43	古墳時代前期前葉	土壇31	K10	Na12	弥生時代前期中葉
井戸9	H20	Na45	古代	土壇32	K10	Na11	弥生時代前期中葉
土壇墓1	H20	Na40	弥生時代	土壇33	K10	Na21	弥生時代前期中葉
土壇墓2	HW3	Na9	弥生時代後期前葉	土壇34	K10	Na22	弥生時代前期中葉
土壇墓3	HW3	Na8	弥生時代後期前葉	土壇35	CH4	#25	弥生時代前期
土壇墓4	CH1		鎌倉時代	土壇36	CH4	#21	弥生時代前期
袋状土壇1	CH1	SK06	弥生時代後期前葉?	土壇37	CH4	#22	弥生時代前期
袋状土壇2	CH1	SK11	弥生時代後期前葉?	土壇38	CH4	#15	弥生時代前期
袋状土壇3	CH1	SK09	弥生時代後期前葉?	土壇39	CH4	#24	弥生時代前期
袋状土壇4	CH1	SK10	弥生時代後期前葉?	土壇40	CH4	#23	弥生時代前期
袋状土壇5	CH1	SK08	弥生時代後期前葉	土壇41	PU	Na4	弥生時代後期?
袋状土壇6	CH1	SK12	弥生時代後期前葉?	土壇42	PU	Na5	弥生時代後期?
袋状土壇7	KO1	#55	弥生時代中期中葉~後期	土壇43	PU	Na6	弥生時代後期?
袋状土壇8	K10	Na20	弥生時代中期中葉~後期	土壇44	TA	Na62	弥生時代後期前葉
袋状土壇9	CH2	#8	弥生時代中期後半~後期前半	土壇45	TA	Na40	弥生時代後期前葉
袋状土壇10	CH2	#9	弥生時代中期後半~後期前半	土壇46	TA	Na41	弥生時代後期前葉
袋状土壇11	CH2	#10	弥生時代中期後半~後期前半	土壇47	TA	Na4	弥生時代後期前葉
袋状土壇12	CH3	SK6	弥生時代中期後葉	土壇48	TA	Na2	弥生時代後期前葉
袋状土壇13	HW1	Na11	弥生時代後期前葉	土壇49	TA	Na17	弥生時代後期前葉
袋状土壇14	HW1	Na10	弥生時代中期後葉	土壇50	TA	Na21	弥生時代後期前葉
袋状土壇15	HW1	Na13	弥生時代後期前葉	土壇51	TA	Na16	弥生時代後期前葉
袋状土壇16	HW2	Na6	弥生時代後期前葉	土壇52	TA	Na60	弥生時代後期前葉
袋状土壇17	HW2	Na5	弥生時代後期前葉	土壇53	TA	Na30	弥生時代後期前葉
袋状土壇18	HW2	Na4	弥生時代後期前葉	土壇54	H19	SK1	弥生時代後期?
袋状土壇19	HW2	Na3	弥生時代後期前葉	土壇55	BU	SK06	弥生時代後期前葉
袋状土壇20	HW2	Na1	弥生時代後期前葉	土壇56	BU	SK03	弥生時代後期前葉
袋状土壇21	HW2	Na10	弥生時代後期前葉	土壇57	BU	SK01	弥生時代後期前葉
袋状土壇22	HW2	Na14	弥生時代後期前葉	土壇58	BU	SK02	弥生時代後期前葉
袋状土壇23	HW2	Na7	弥生時代後期前葉	土壇59	BU	SK04	弥生時代後期前葉
袋状土壇24	HW2	Na16	弥生時代後期前葉	土壇60	BU	SK05	弥生時代後期前葉
袋状土壇25	HW2	Na11	弥生時代後期前葉	土壇61	H18	SK1	弥生時代後期
袋状土壇26	HW3	Na12	弥生時代後期前葉	土壇62	CH1	SK07	弥生時代後期
袋状土壇27	HW3	Na13	弥生時代後期前葉	土壇63	KO1	#48	弥生時代中期後半~後期前半
袋状土壇28	HW3	Na10	弥生時代後期前葉	土壇64	KO1	#49	弥生時代中期後半~後期前葉
土壇1	PU3		縄文時代晚期	土壇65	KO1	#42	弥生時代中期後半~後期前葉
土壇2	PU3		縄文時代晚期	土壇66	KO1	#51	弥生時代中期後半~後期前葉
土壇3	PU3		縄文時代晚期中葉	土壇67	KO1	#40	弥生時代中期後半~後期前葉
土壇4	KO1	#41	縄文時代晚期	土壇68	KO1	#43	弥生時代中期後半~後期前葉
土壇5	KO1	#39	縄文時代晚期	土壇69	KO1	#36	弥生時代中期中葉~後期
土壇6	KO1	#45	縄文時代晚期	土壇70	KO1	#35	弥生時代中期中葉~後期
土壇7	KO1	#54	縄文時代晚期	土壇71	KO1	#32・33	弥生時代中期後半~後期前半
土壇8	KO1	#62	縄文時代晚期	土壇72	KO2	#39	弥生時代中期後半~後期前半
土壇9	KO1	#50	弥生時代前期	土壇73	KO2	#36	弥生時代中期後半~後期前半
土壇10	KO1	#53	弥生時代前期	土壇74	KO2	#53	弥生時代中期後半~後期前半
土壇11	KO1	#66	弥生時代前期	土壇75	KO2	#49	弥生時代中期後半~後期前半
土壇12	KO1	#64	弥生時代前期	土壇76	KO2	#57	弥生時代中期後半~後期前半
土壇13	KO1	#61	弥生時代前期	土壇77	KO2	#48	弥生時代中期中葉~後期
土壇14	KO1	#62	弥生時代前期	土壇78	KO2	#50	弥生時代中期中葉~後期
土壇15	KO1	#63	弥生時代前期	土壇79	KO2	#47	弥生時代中期中葉~後期
土壇16	KO2	#44	弥生時代前期	土壇80	KO2	#52	弥生時代中期中葉~後期
土壇17	KO2	#38	弥生時代前期	土壇81	KO2	#52	弥生時代中期中葉~後期
土壇18	KO2	#58	弥生時代前期	土壇82	KO2	#37	弥生時代中期中葉~後期
土壇19	KO2	#54	弥生時代前期	土壇83	KO2	#40	弥生時代中期中葉~後期
土壇20	KO2	#55	弥生時代前期	土壇84	HO	SK2	弥生時代後期前葉
土壇21	HO	SK3	弥生時代前期	土壇85	HO	SK1	弥生時代後期

新遺構名	調査区	旧遺構名	時期	新遺構名	調査区	旧遺構名	時期
土壌86	K	土壌1	弥生時代中期中葉～後期	溝3	PU1	Na3	不明
土壌87	CH2	#21	弥生時代中～後期	溝4	PU2・3	SD08	弥生時代中期中葉
土壌88	CH2	#17	弥生時代中～後期	溝5	PU2・3	SD07	弥生時代後期前葉?
土壌89	CH3	SK10	弥生時代	溝6	PU2・3, TA	SD09, Na68	弥生時代後期
土壌90	CH3	SK11	弥生時代	溝7	TA	Na37	弥生時代後期
土壌91	CH3	SK12	弥生時代中期中葉～後期	溝8	TA	Na47	弥生時代後期
土壌92	CH3	SK7	弥生時代	溝9	H19, TA	SD9, Na36	弥生時代後期前葉
土壌93	CH3	SK9	弥生時代	溝10	TA, H19	Na8, SD5・6	弥生時代後期前葉
土壌94	CH3	SK8	弥生時代	溝11	TA	Na25	弥生時代後期前葉
土壌95	CH4	#29	弥生時代中～後期	溝12	TA, H19	Na46・SD8	弥生時代後期
土壌96	CH4	#19	弥生時代中～後期	溝13	TA	Na24	弥生時代後期
土壌97	CH5	#14	弥生時代中期後半～後期前半	溝14	TA	Na22	弥生時代後期後葉
土壌98	CH5	#10-1	弥生時代中～後期	溝15	TA	Na23	弥生時代後期前葉
土壌99	HW1	Na9	弥生時代中期後葉	溝16	TA, H19	Na29, SD4・SD7?	弥生時代後期前葉
土壌100	HW2	Na12	弥生時代後期前葉	溝17	H19	SD2	弥生時代後期後葉
土壌101	KO1	#31	古墳時代前期前葉	溝18	H19	SD6	弥生時代後期前葉?
土壌102	PU		中世以降	溝19	H19	SD5	弥生時代後期前葉?
土壌103	PU	Na6	中世以降	溝20	BU, H18・19	SD04・SD12	弥生時代後期後葉
土壌104	PU		中世以降	溝21	H18	SD05	弥生時代後期
土壌105	PU		中世	溝22	H18	SD04	弥生時代後期
土壌106	PU		中世	溝23	CH1	SD08	弥生時代後期
土壌107	PU		中世	溝24	CH1	SD10	弥生時代後期
土壌108	PU2	SK4	中世	溝25	CH1	SD06	弥生時代後期
土壌109	PU2	SK5	中世	溝26	CH1	SD9	弥生時代後期
土壌110	CH1		中世	溝27	CH1	SD05	弥生時代後期前葉
土壌111	CH1	SK02	鎌倉時代	溝28	CH1	SD18	弥生時代後期
土壌112		SK04	鎌倉時代	溝29	CH1	SD17	弥生時代後期
土壌113	CH1	SK05	中世	溝30	CH1	SD19	弥生時代後期
土壌114	KO1	#52	中世	溝31	CH1	SD26	弥生時代後期
土壌115	KO2	#19	中世	溝32	CH1	SD21	弥生時代後期前葉?
土壌116	HO	SK5	中世	溝33	CH1	SD23	弥生時代後期?
土壌117	HO	SK6	中世	溝34	CH1	SD24	弥生時代後期?
土壌118	CH2	#1	中世?	溝35	KO1・2	#59・46	弥生時代後期前葉
土壌119	CH2	#2	中世?	溝36	KO1	#44	弥生時代中期～後期
土壌120	CH2	#3	中世?	溝37	KO1	#34	弥生時代中期～後期
土壌121	CH3	SK3	中世	溝38	KO1・2	#23	弥生時代中期～後期
土壌122	CH3	SK4	鎌倉時代	溝39	KO1・2	#24	弥生時代中期～後期
土壌123	HW2	Na9	中世	溝40	CH3, HO, H20, K	SD8・3, Na44, D3	弥生時代後期前葉
火処1	CH4	#30	縄文時代後期?	溝41	HO	SD4	弥生時代後期前葉
火処2	KO1	#38	縄文時代晩期	溝42	HO	SD2	弥生時代後期前葉
火処3	KO1	#46	縄文時代晩期	溝43	K10	Na10	弥生時代後期前葉
火処4	CH4	#28	縄文時代晩期	溝44	HO	SD1	弥生時代後期前葉
土器溜り1	CH1	Na27・28	弥生時代後期前葉	溝45	H20	Na39	弥生時代中期～後期
土器溜り2	CH5	土器溜りA～C	弥生時代後期前葉	溝46	K	D8	弥生時代後期前葉
貝塚1	HW3	Na26	弥生時代後期前葉	溝47	K	D10・15	弥生時代後期前葉
杭列1	HW3	Na25	弥生時代後期前葉	溝48	K	D13	弥生時代後期前葉
櫛列状遺構1	KO1・2	#15・33	古墳時代後半～古代	溝49	CH2	#18	弥生時代中期～後期
櫛列状遺構2	KO1・2	#14・29・32	古墳時代後半～古代	溝50	CH2	#14	弥生時代中期～後期
櫛列状遺構3	KO2	#34	古墳時代後半～古代	溝51	CH2	#15	弥生時代中期～後期
櫛列状遺構4	KO2	#29	古墳時代後半～古代	溝52	CH2	#12	弥生時代中期～後期
櫛列状遺構5	KO2	#30	古墳時代後半～古代	溝53	CH2・3	#16, SD9	弥生時代後期前葉
櫛列状遺構6	KO1・2	#28	古墳時代後半～古代	溝54	CH3	SD12	弥生時代後期
櫛列状遺構7	CH3・4	SA2・3, #12	古墳時代後半～古代	溝55	CH3	SD10	弥生時代後期前葉
櫛列状遺構8	CH4	#4	古墳時代後半～古代	溝56	CH3	SD11	弥生時代後期
櫛列状遺構9	CH5	#3	古墳時代後半～古代	溝57	CH4	#18	弥生時代中期～後期
櫛列状遺構10	CH5	#12・18・19	古墳時代後半～古代	溝58	CH4	#5	弥生時代中期～後期
櫛列状遺構11	HW3	Na13	古墳時代後期～古代	溝59	CH5	#13	弥生時代中期後半～後期
櫛列状遺構12	HW3	Na1	古墳時代後期～古代	溝60	HW2	Na2	弥生時代後期前葉
櫛列状遺構13	HW3	Na2	古墳時代後期～古代	溝61	HW3	Na3	弥生時代後期前葉
櫛列状遺構14	HW3	Na14	古墳時代後期～古代	溝62	HW3	Na21	弥生時代後期前葉
櫛列状遺構15	H18	SA1～3	～中世	溝63	HW3	Na22	弥生時代後期前葉
櫛列状遺構16	KO2	#27	古代?	溝64	HW3	Na23	弥生時代後期前葉
溝1	KO1・2	#60・56	弥生時代前期前葉～中葉	溝65	HW3	Na20	弥生時代後期(前葉?)
溝2	CH4	#20	弥生時代前期	溝66	H20, K	Na47, D6	古墳時代前期前葉

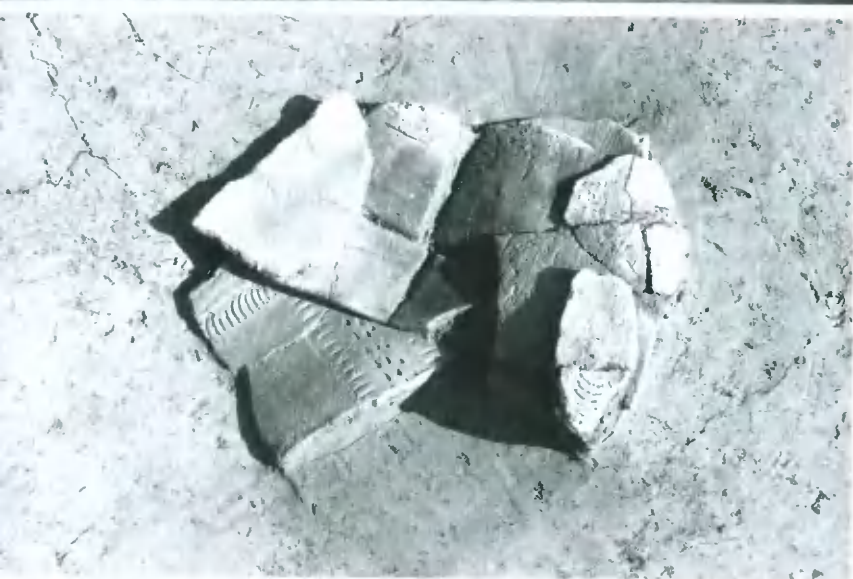
新遺構名	調査区	旧遺構名	時期	新遺構名	調査区	旧遺構名	時期
溝67	K	D14	古墳時代前期前葉以前	溝113	H20	Na32	平安時代
溝68	CH 5	# 4	古墳時代後半	溝114	H20	Na35	平安時代
溝69	CH 5	# 7	古墳時代後半以降	溝115	H20	Na36	平安時代
溝70	CH 5	# 11	古墳時代	溝116	H20	Na38	平安時代
溝71	CH 5	# 2	古墳時代	溝117	KO 1・2	# 3・11	中世?
溝72	HW 3	Na 6	~古墳時代前期前葉	溝118	KO 1	# 22	中世
溝73	HW 3	Na19	~古墳時代前期前葉	溝119	KO 1・2	# 5・14	中世
溝74	HW 3	Na 4	古墳時代後期	溝120	KO 1	# 6	鎌倉時代
溝75	HW 3	Na 5	古墳時代後期	溝121	KO 1	# 10	鎌倉時代
溝76	HW 3	Na15	古墳時代後期(6 c末)	溝122	KO 1	# 9	鎌倉時代
溝77	PU 2・3	SD01B, 04	中世	溝123	KO 1	# 7	鎌倉時代以前
溝78	PU 2・3	SD02	中世	溝124	KO 1	# 8	鎌倉時代以前
溝79	PU 2・3	SD04	中世	溝125	KO 2	# 15・26・27	鎌倉時代以前
溝80	PU 2・3	SD05	中世	溝126	KO 1	# 12	鎌倉時代以前
溝81	TA	SD06		溝127	KO 2	# 21	中世(鎌倉時代以前)
溝82	H19	SD 1	中世	溝128	KO 1	# 17	中世?
溝83	H19	SD 2	中世	溝129	KO 1	# 11	中世?
溝84	H18	SD 2	中世	溝130	KO 1	# 24	中世?
溝85	H18	SD 1	中世	溝131	KO 1	# 25	中世?
溝86	BU		中世	溝132	KO 1	# 26	中世?
溝87	CH 1	SD10	中世	溝133	KO 1	# 12	鎌倉時代以前
溝88	CH 1		中世	溝134	KO 1	# 13	鎌倉時代以前
溝89	CH 1	SD01	中世	溝135	KO 1	# 18	鎌倉時代以前
溝90	CH 1	SD02	中世	溝136	KO 2	# 22	鎌倉時代以前
溝91	CH 1	SD03	中世	溝137	KO 2	# 13	鎌倉時代以前
溝92	CH 1	SD12	中世	溝138	KO 2	# 18	中世
溝93	CH 1	SD13	中世	溝139	KO 2	# 25	中世?
溝94	CH 1	SD15	中世	溝140	KO 2	# 31	中世?
溝95	CH 1	SD14	中世	溝141	CH 2	# 4	中世?
溝96	CH 1	SD25	中世	溝142	CH 2	# 5	中世?
溝97	CH 1		中世	溝143	CH 2	# 6	近世
溝98	H20		平安時代	溝144	CH 3	SD 3	鎌倉時代
溝99	H20		平安時代	溝145	CH 3	SD 4	中世
溝100	H20	Na33	平安時代	溝146	CH 3	SD 5	中世
溝101	H20	Na33	平安時代	溝147	CH 3	SD 6	中世
溝102	H20	Na34	平安時代	溝148	CH 3	SD07	中世
溝103	H20	Na34	平安時代	溝149	CH 4	# 13	中世
溝104	H20	Na37	平安時代	溝150	HW 1	Na 3	中世
溝105	H20	Na29	平安時代	溝151	HW 2	Na 8	中世
溝106	H20		平安時代	河道 1	HW 3	Na27・28	縄文時代晚期
溝107	H20	Na31	平安時代	河道 2	CH 5	# 15	縄文時代晚期
溝108	H20	Na50	平安時代	河道 3	TA, BU	Na57	
溝109	H20	Na49	平安時代	河道 4	CH 4	# 8	弥生時代後期前葉~古墳時代
溝110	H20	Na 9	平安時代	河道 5	CH 5	# 2	弥生時代後期前葉~古墳時代
溝111	H20		平安時代	河道 6	HW 3	Na17・18・24	~弥生時代後期前葉
溝112	H20	Na 8	平安時代				



遺跡周辺の地形（航空写真：1985年）



1. 小ピット群と土層断面
(PU区; 北西から)



2. 縄文土器出土状態
(PU区; 西から)



3. 土壌 3
(PU区; 南から)



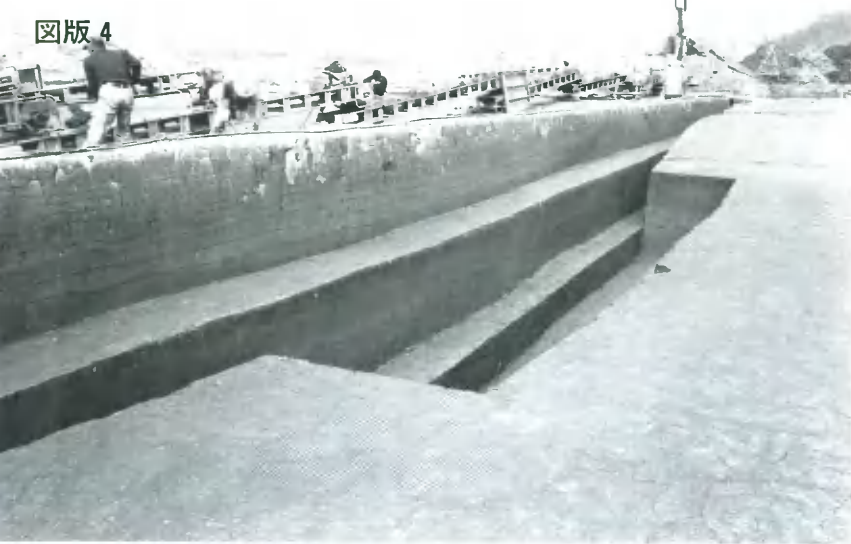
1. 土器溜り1
(CH1区;北から)



2. 火処1
(CH4区;南西から)



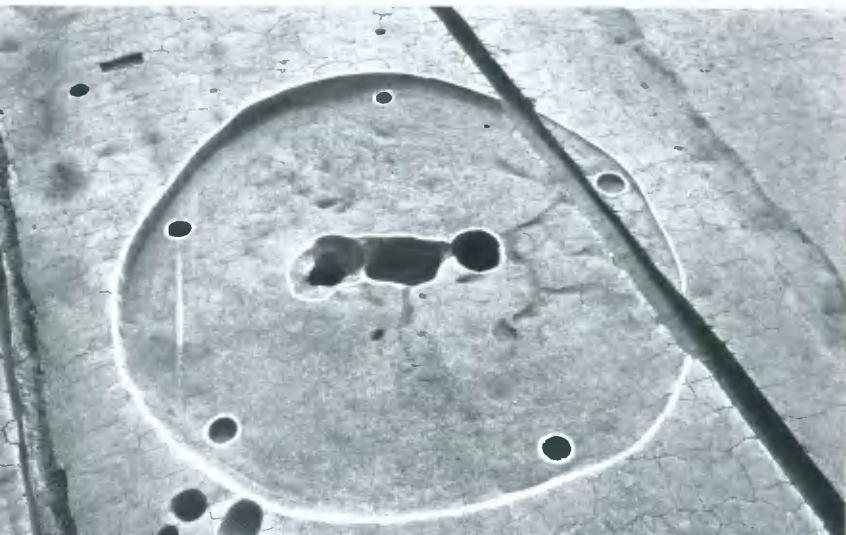
3. 河道1
(HW3区;東から)



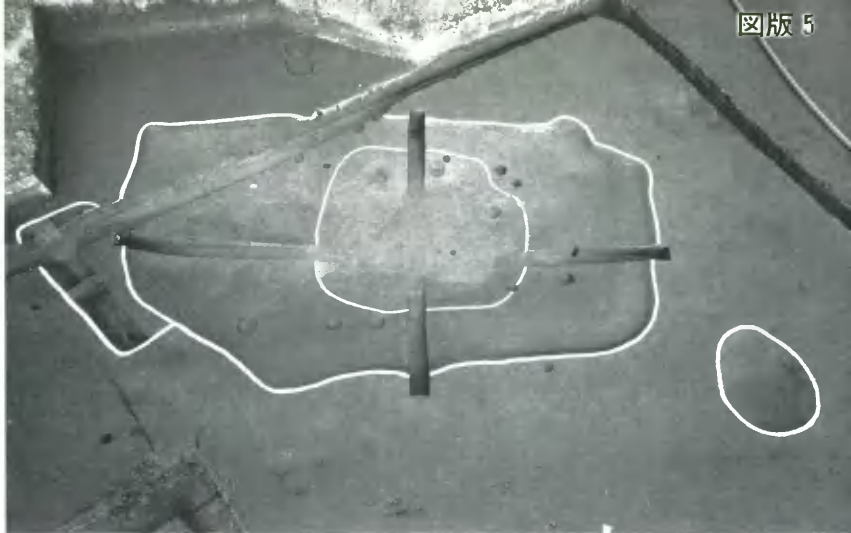
1. 低位部土層断面
(KO2区; 南から)



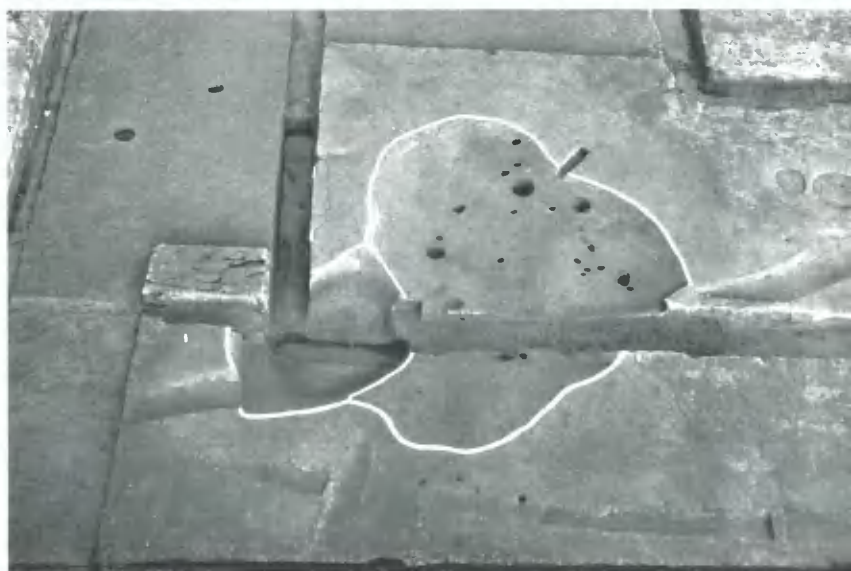
2. 低位部土層断面
(CH5区; 北から)



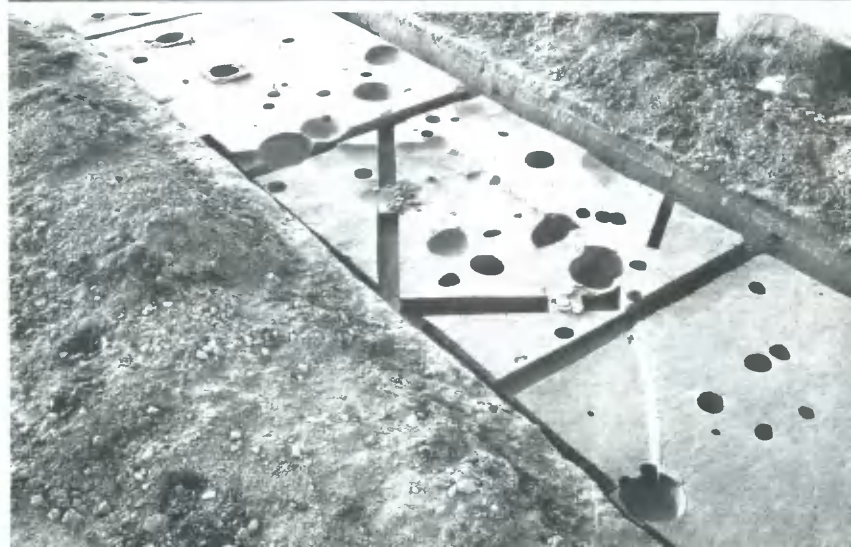
3. 竪穴住居1
(KO2区; 北西から)



1. 竪穴住居 2
(H0区; 南から)



2. 竪穴住居 3
(H0区; 南西から)



3. 竪穴住居 4
(K10区; 東から)



1. 土壌21
(H0区; 南西から)



2. 土壌25
(K10区; 東から)



3. 土壌29
(K10区; 南西から)



1. 土城30
(K10区; 南から)



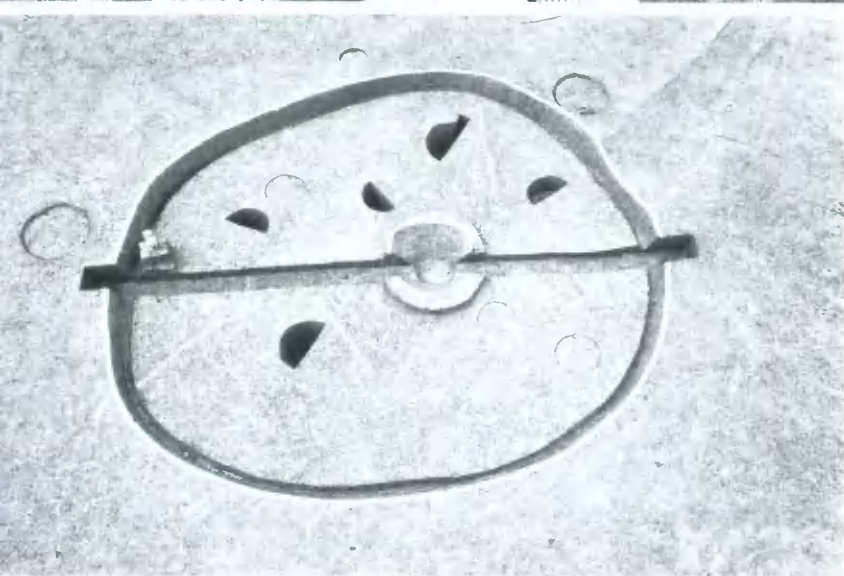
2. 溝1
(KO2区; 南東から)



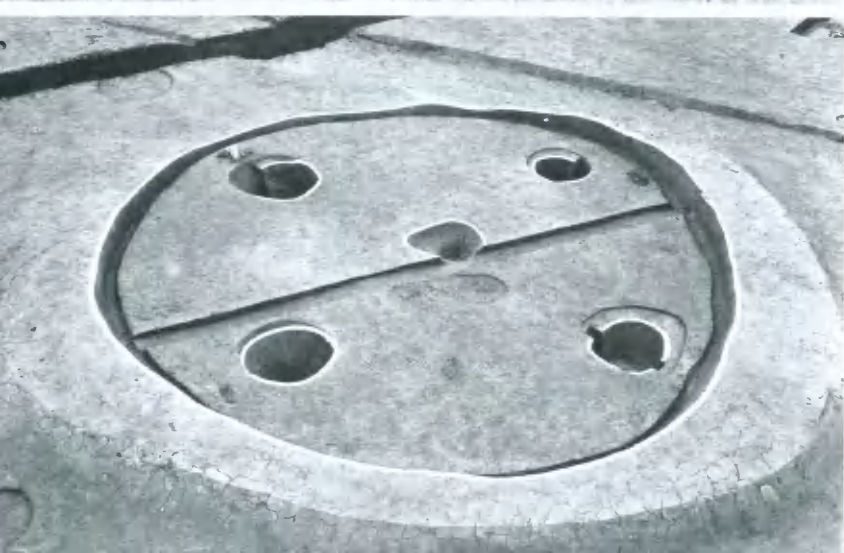
3. 溝2
(CH4区; 西から)



1. 河道 2
(CH5区;北西から)



2. 竪穴住居 5
(TA区;東から)

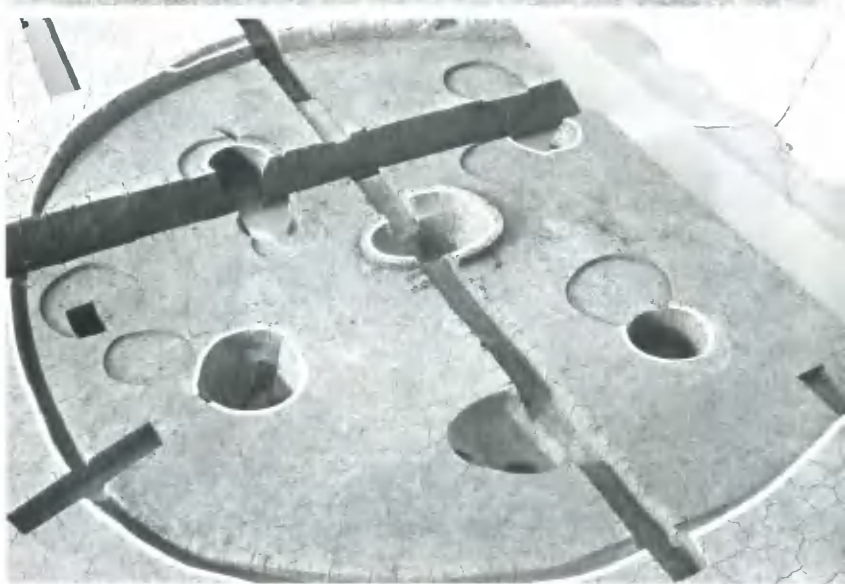


3. 竪穴住居 6
(TA区;南から)

1. 竪穴住居 7
(T A区; 西から)



2. 竪穴住居 8
(T A区; 南から)



3. 竪穴住居 9
(T A区; 西から)

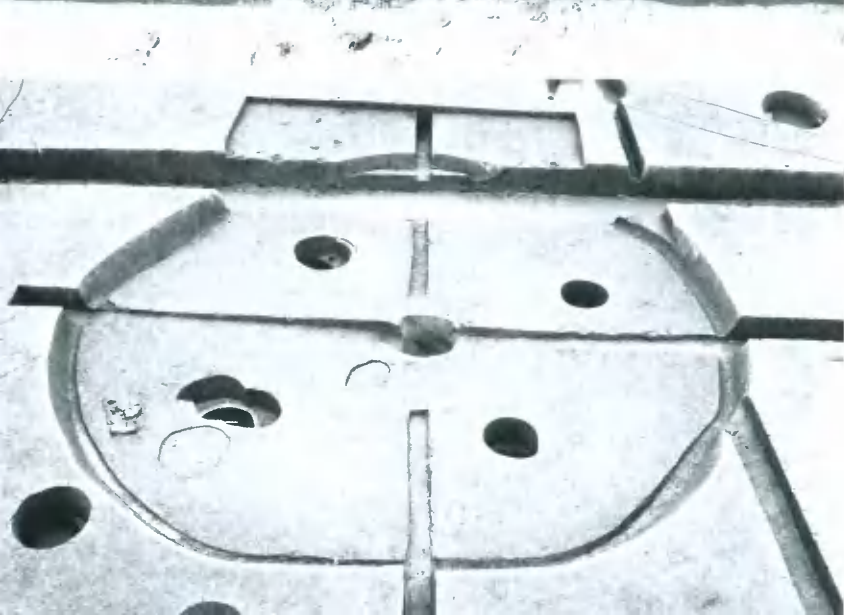




1. 竪穴住居9 中央ビット
(T A区；北から)



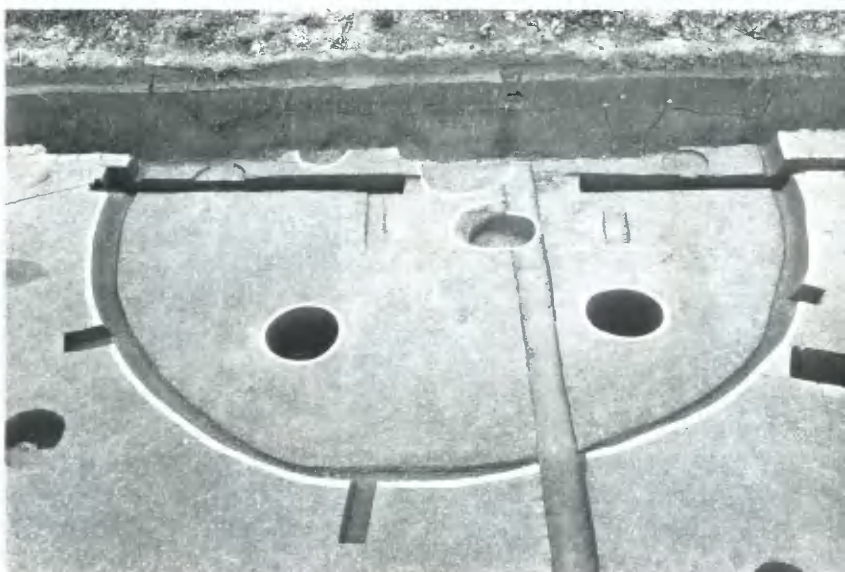
2. 竪穴住居10
(T A区；東から)



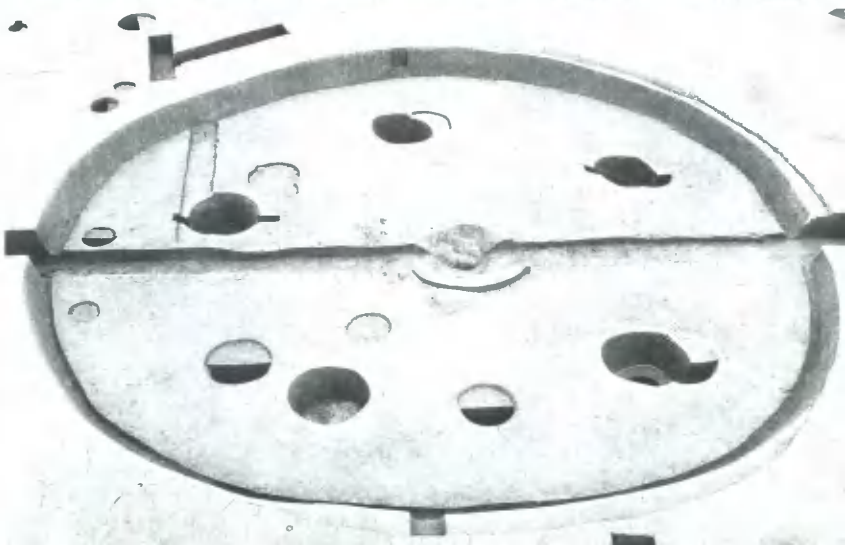
3. 竪穴住居11
(T A区；南から)



1. 竪穴住居9・11付近
(T A区中央部；南から)



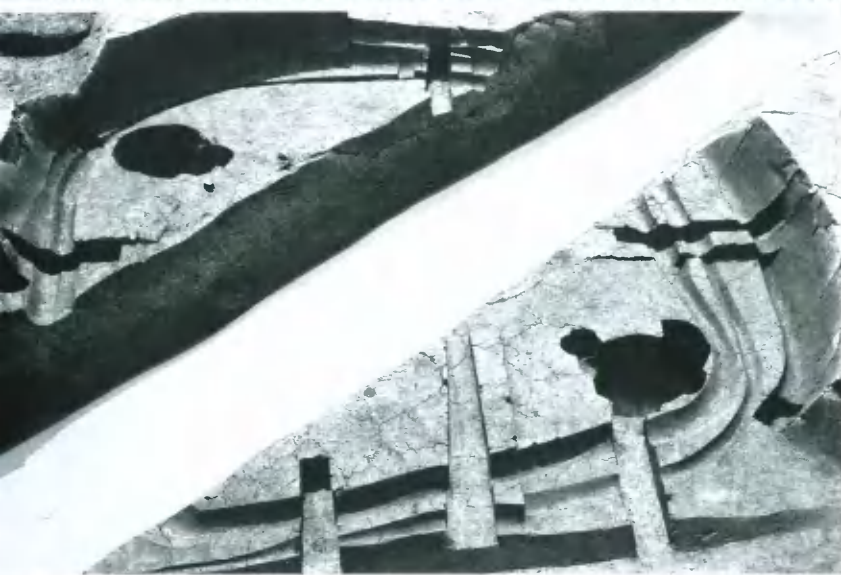
2. 竪穴住居13
(T A区；北から)



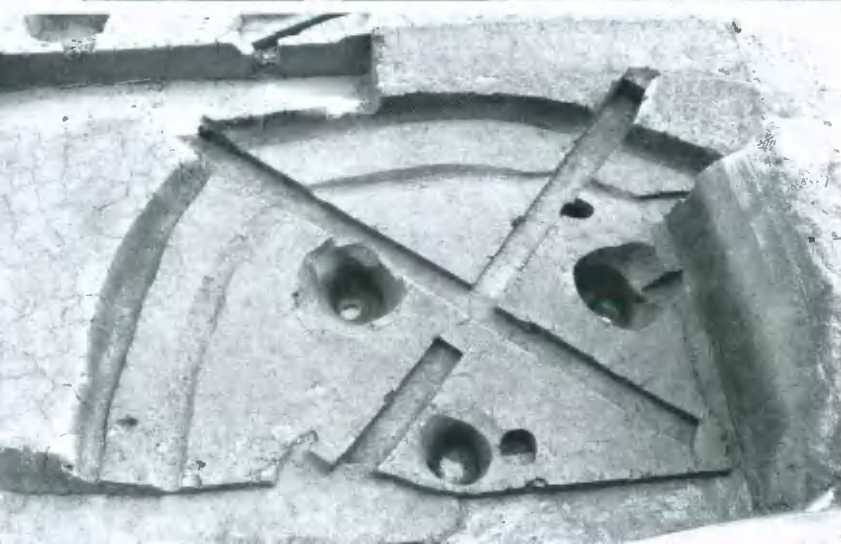
3. 竪穴住居14
(T A区；西から)



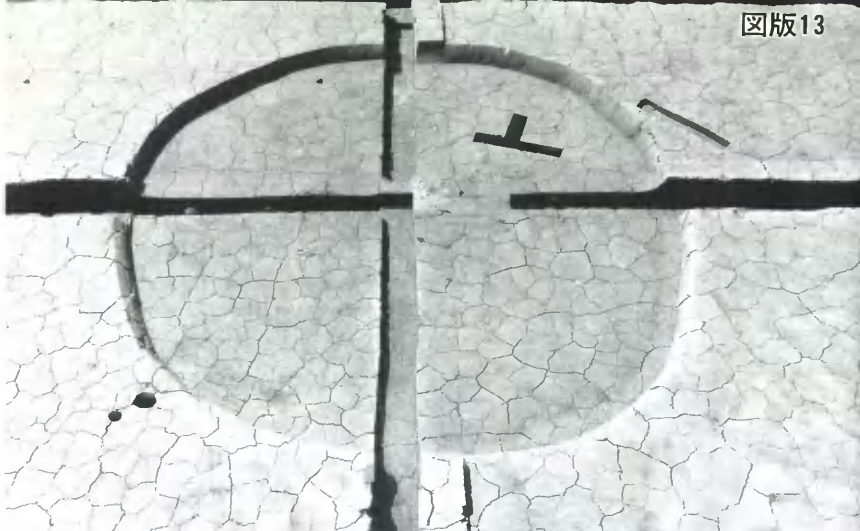
1. 竪穴住居15炭化材検出状態
(BU区; 南から)



2. 竪穴住居15
(BU区; 南から)



3. 竪穴住居16
(BU区; 北から)



1. 竪穴住居17
(BU区; 北から)



2. 竪穴住居10貼床状態
(BU区; 南東から)



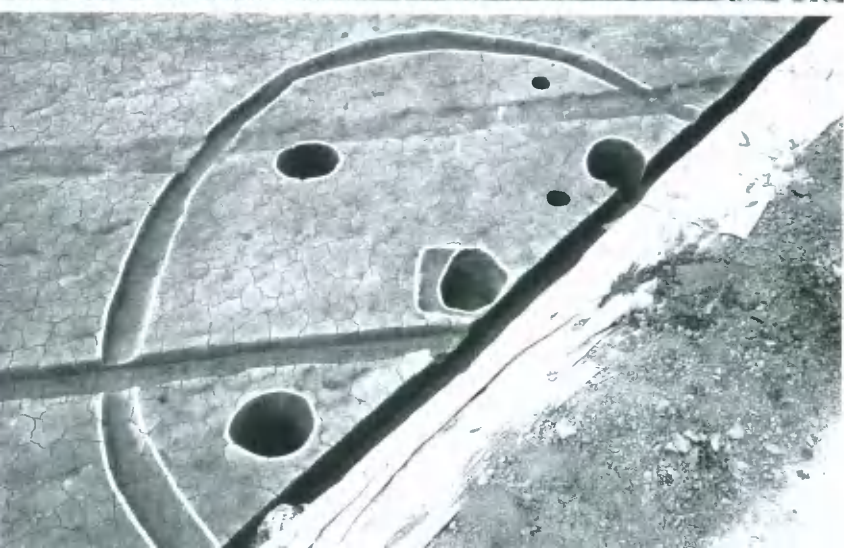
3. 竪穴住居18
(BU区; 北から)



1. 竪穴住居19
(CH1区; 東から)



2. 竪穴住居20
(KO1区; 北西から)



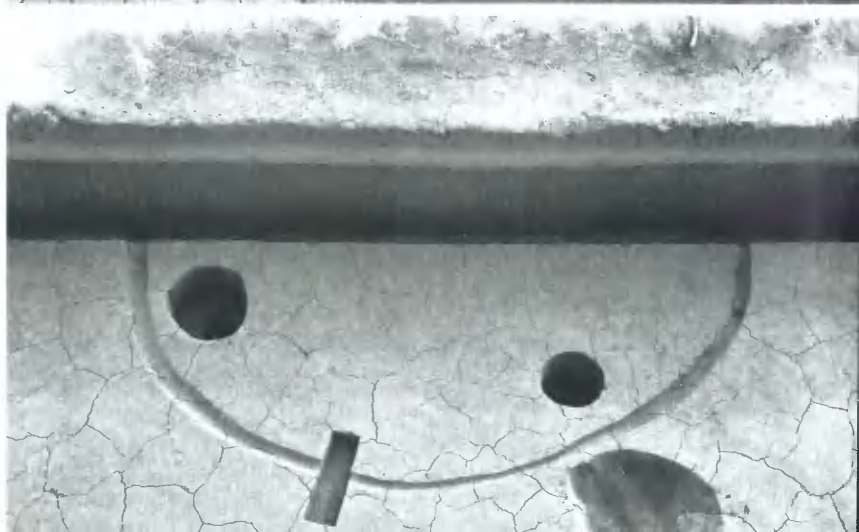
3. 竪穴住居21
(CH2区; 東から)



1. 竪穴住居22
(CH2区;北西から)



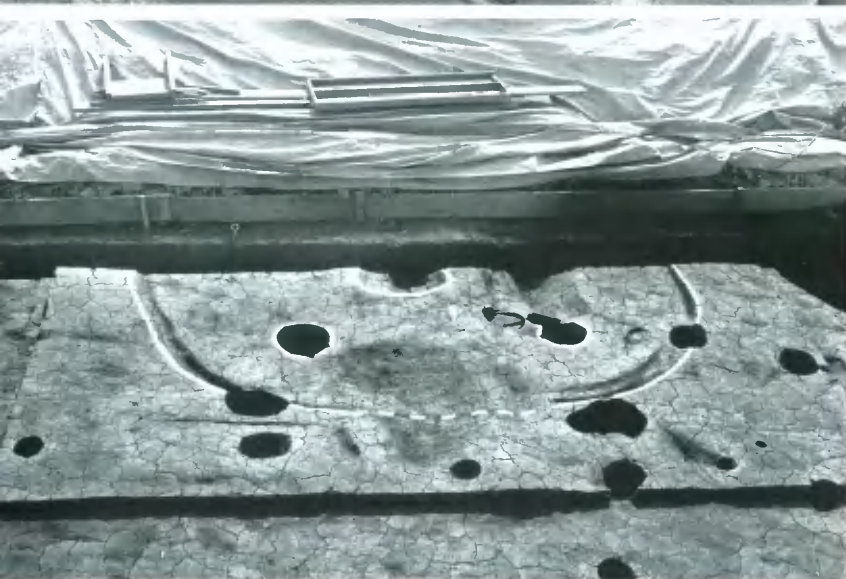
2. 竪穴住居23
(CH3区;西から)



3. 竪穴住居24
(CH3区;北東から)



1. 竪穴住居25
(CH3区;南から)



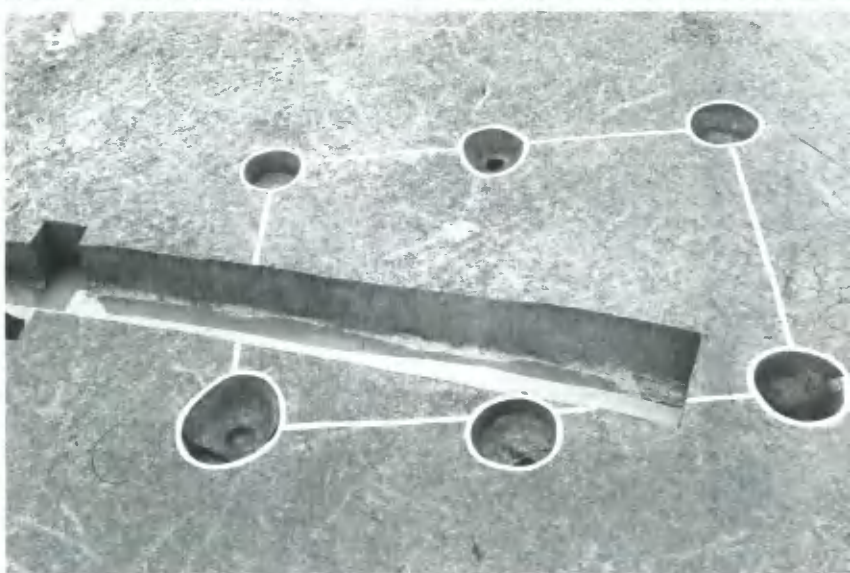
2. 竪穴住居26
(CH3区;東から)



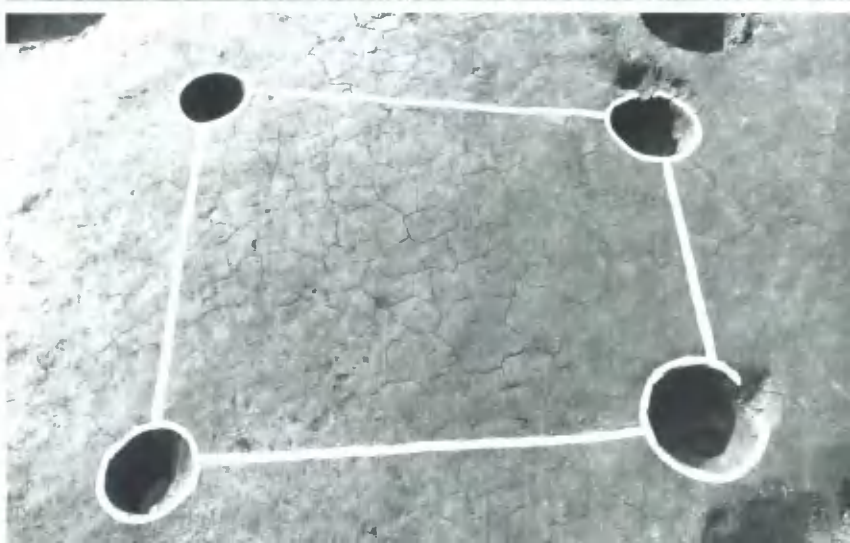
3. 竪穴住居27
(HW3区;南から)



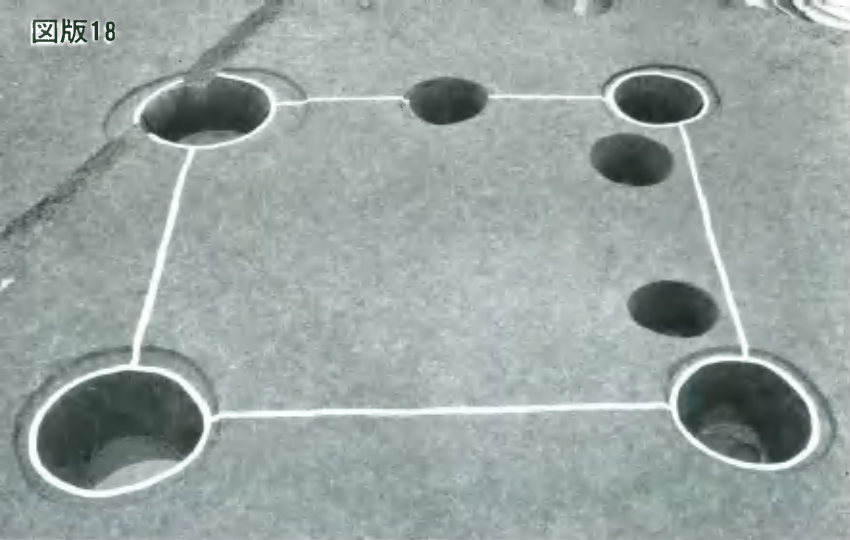
1. 建物1
(TA区; 東から)



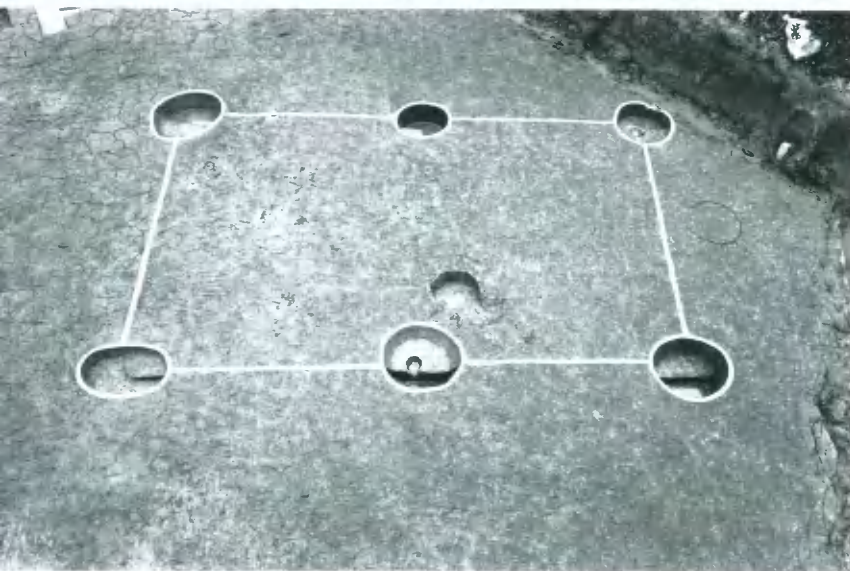
2. 建物2
(TA区; 南東から)



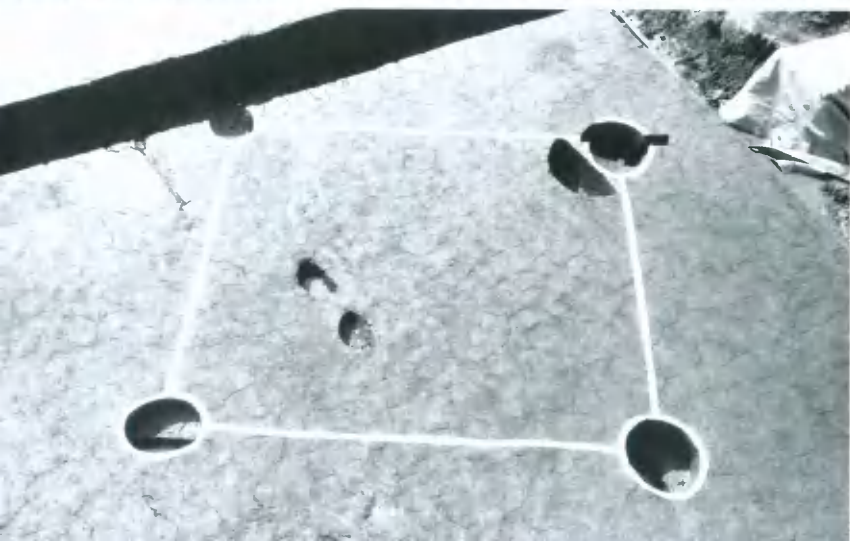
3. 建物5
(TA区; 南東から)



1. 建物6
(T A区; 東から)



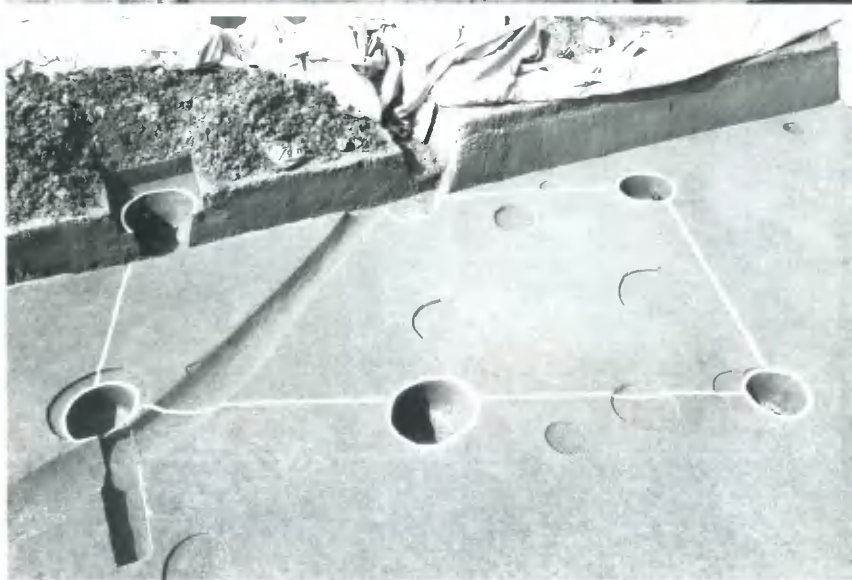
2. 建物7
(T A区; 西から)



3. 建物8
(T A区; 南東から)



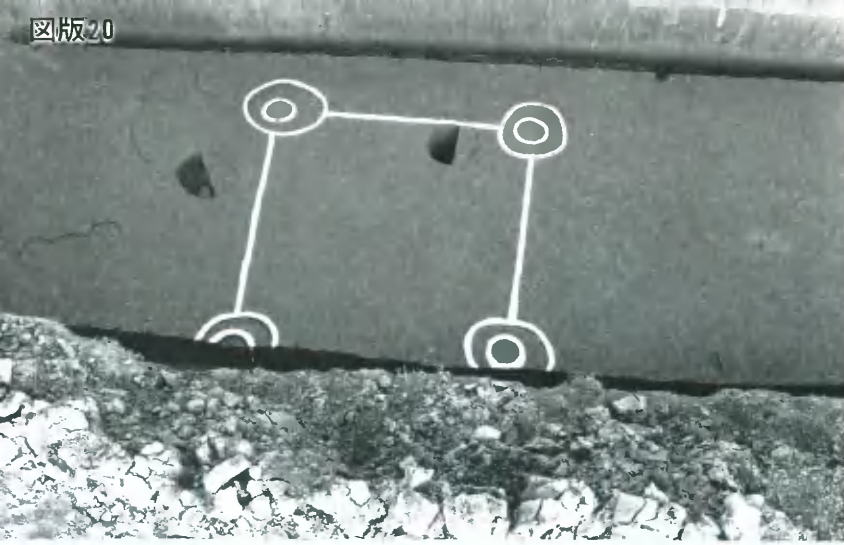
1. 建物11
(TA区;北から)



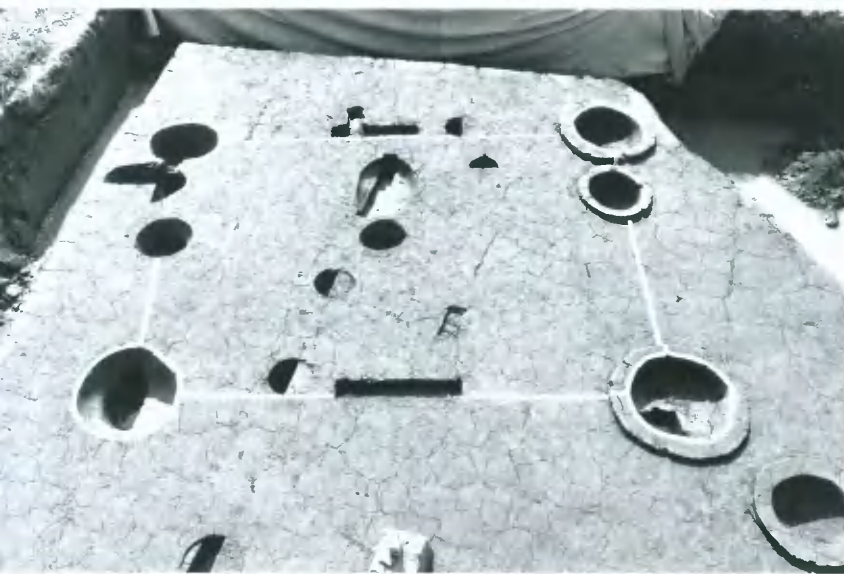
2. 建物12
(TA区;東から)



3. 建物14・15
(TA区;北東から)



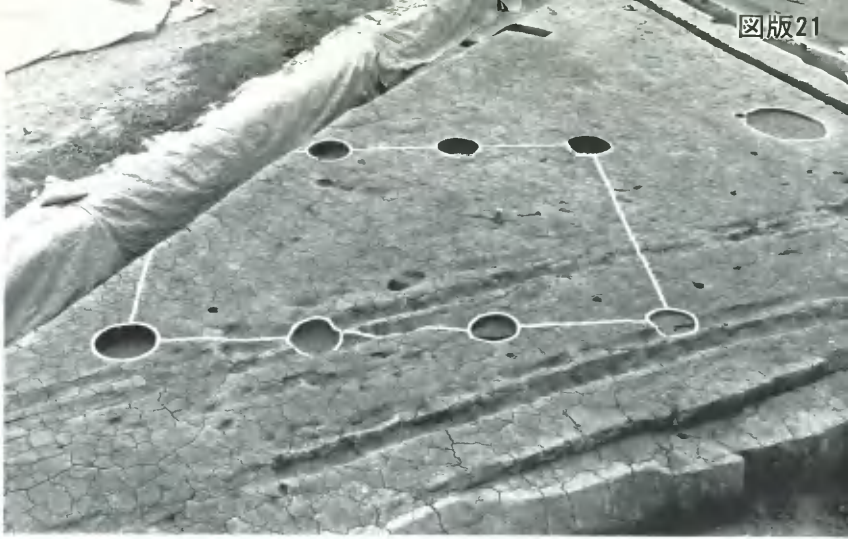
1. 建物17
(H18区;南から)



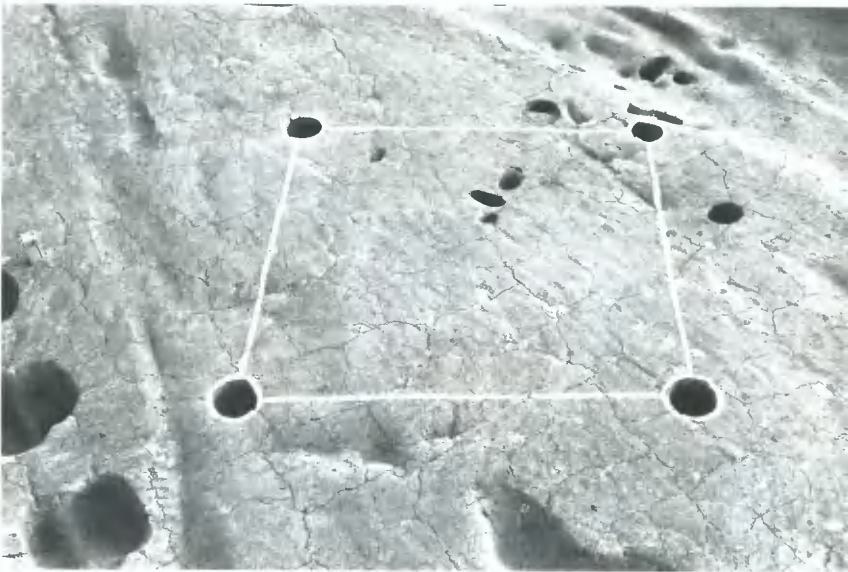
2. 建物18
(BU区;東から)



3. 建物20付近
(CH1区;北から)



1. 建物22
(CH1区：東から)



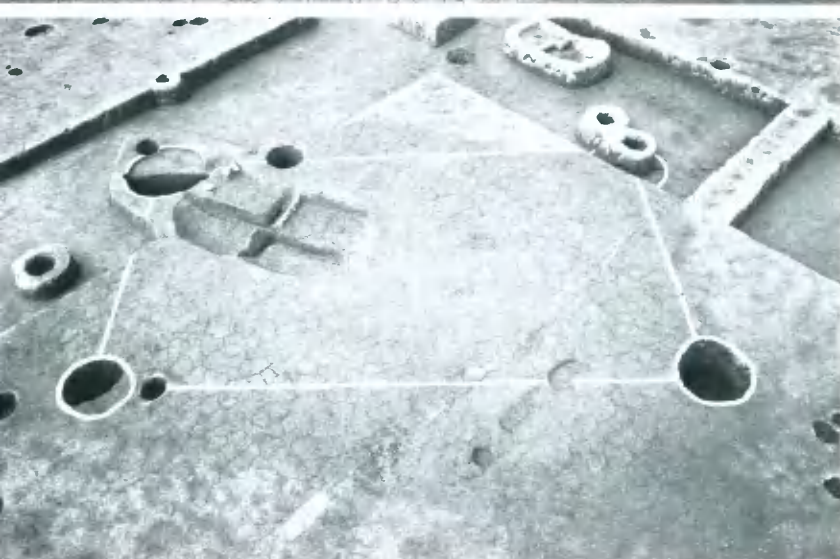
2. 建物23
(KO1区：北から)



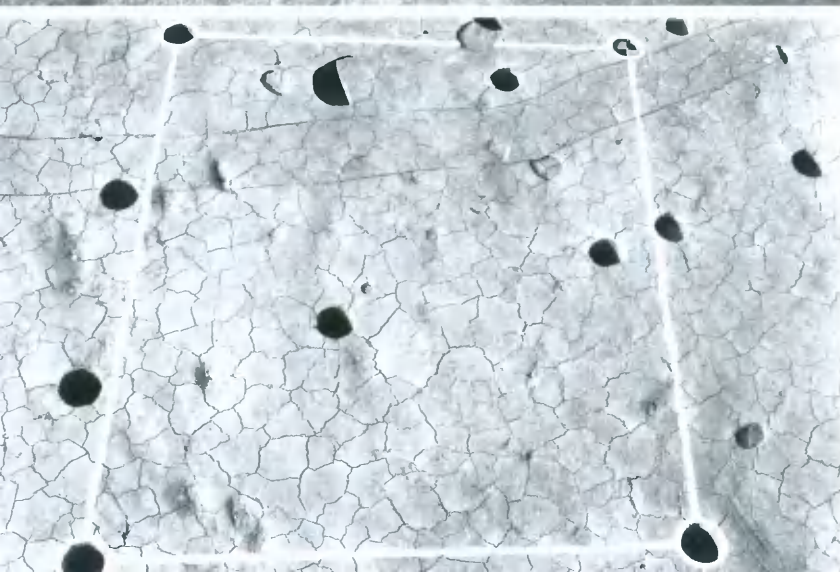
3. 建物24
(HO区：南から)



1. 建物25
(HO区; 東から)

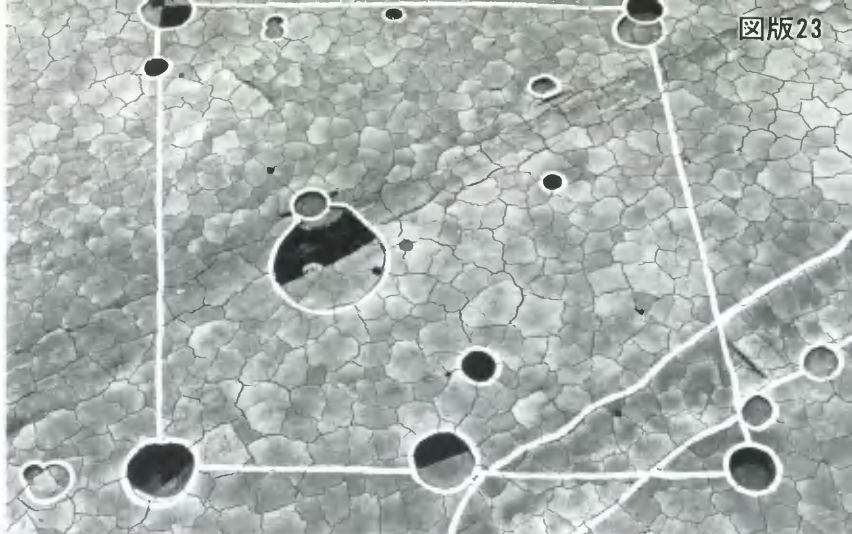


2. 建物26
(HO区; 北西から)

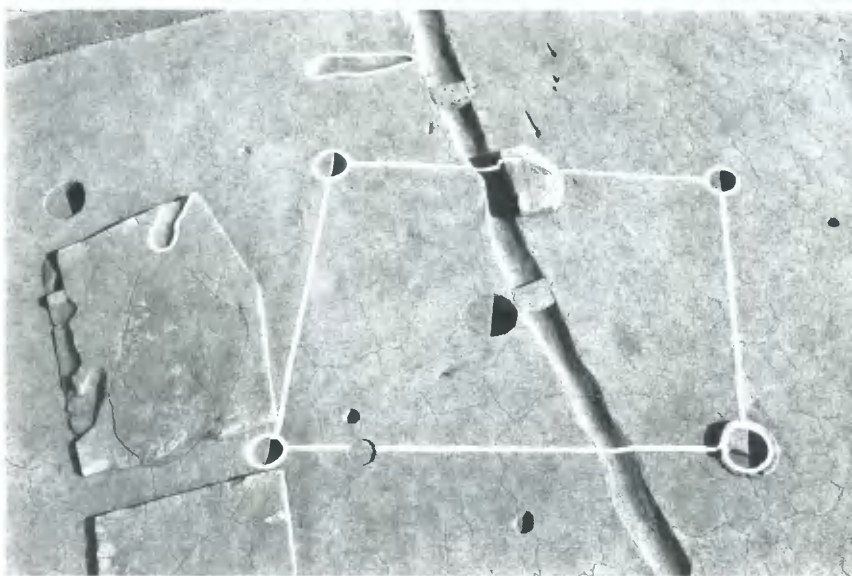


3. 建物28
(HO区; 南から)

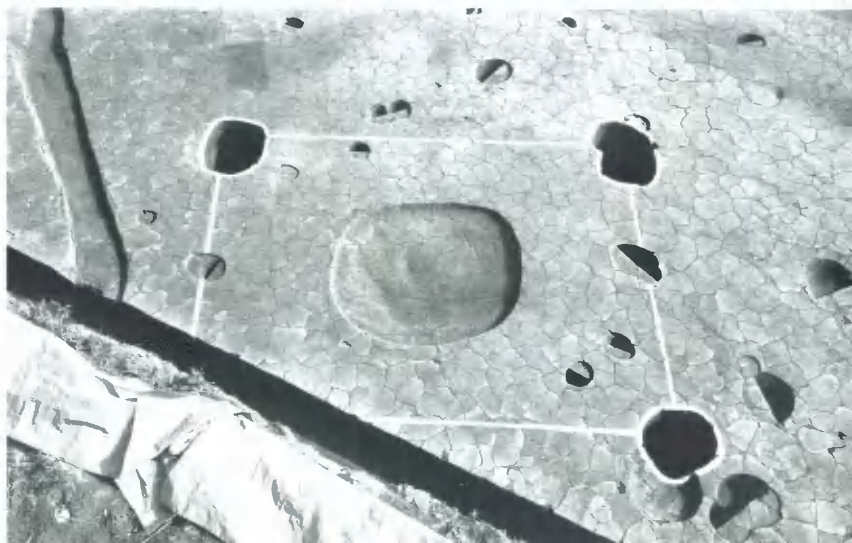
1. 建物29
(HO区; 西から)

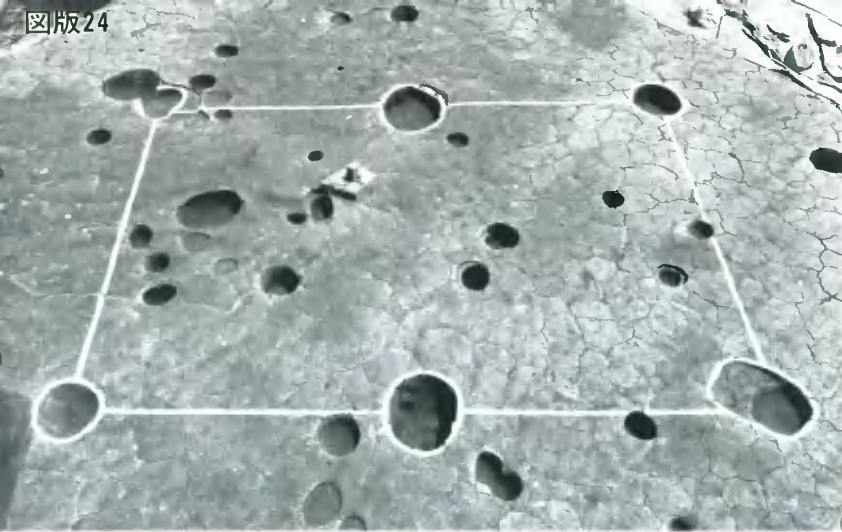


2. 建物30
(HO区; 北から)

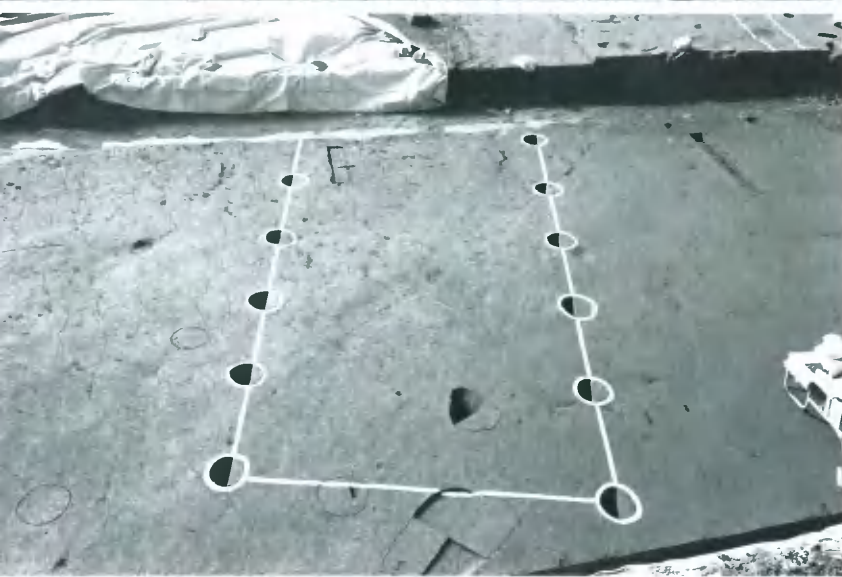


3. 建物33
(CH2区; 北から)





1. 建物34
(CH2区：南西から)



2. 建物37
(CH3区：北東から)



3. 建物38
(CH4区：北から)

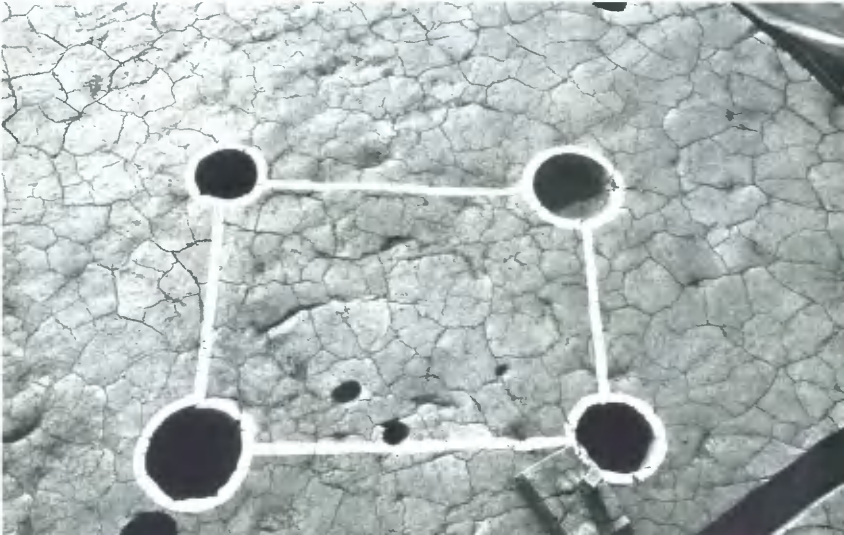
1. 建物39
(CH4区;北から)

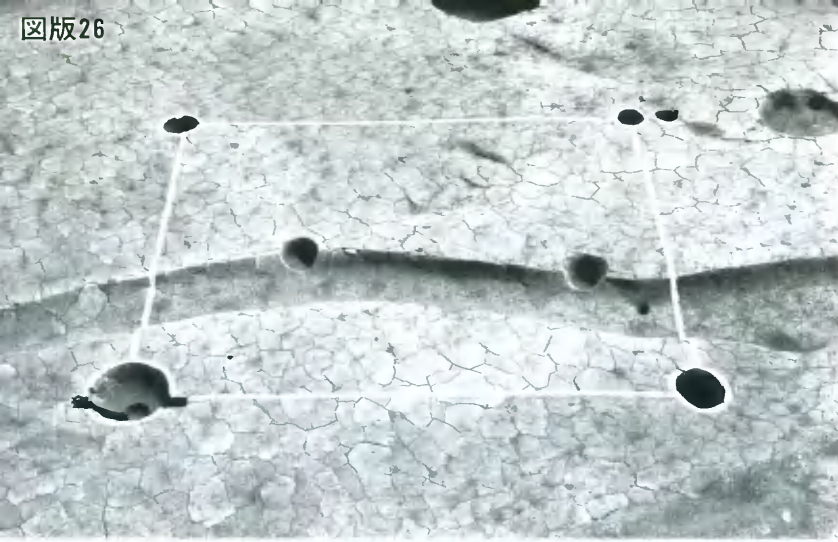


2. 建物40
(CH5区;南東から)



3. 建物41
(HW1区;東から)





1. 建物42
(HW1区：西から)



2. 井戸1
(PU2区：西から)



3. 井戸7
(TA区：北から)



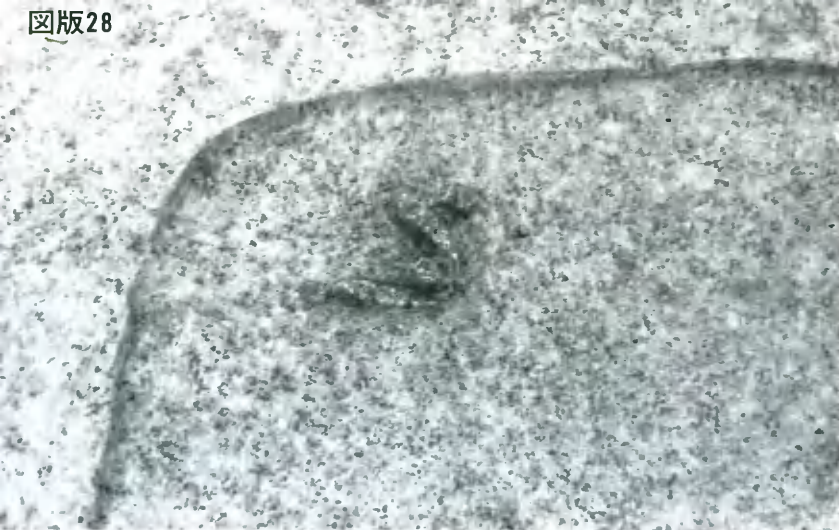
1. 土墳基 1
(H20区; 南から)



2. 土墳基 2
(HW3区; 北から)



3. 土墳基 3
(HW3区; 東から)



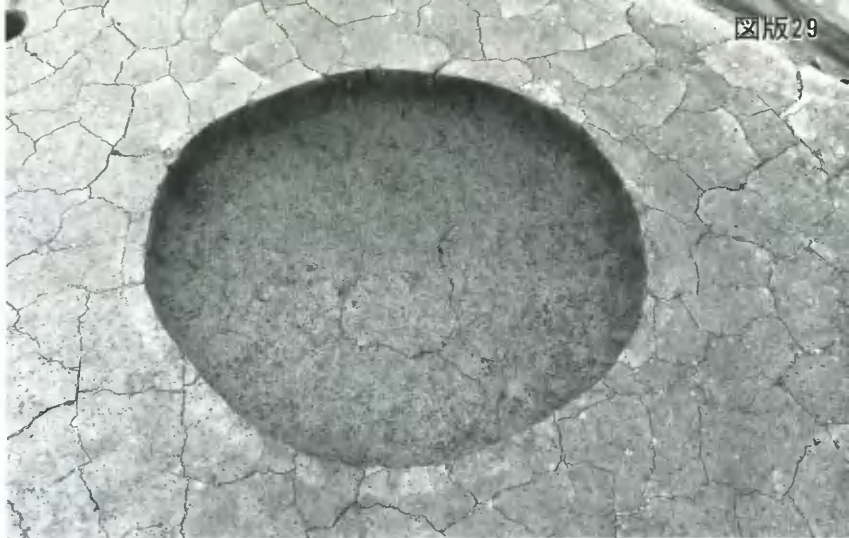
1. 土壙墓3 菌出土状態
(HW3区; 東から)



2. 袋状土壙1
(CH1区; 西から)



3. 袋状土壙2~5
(CH1区; 北西から)



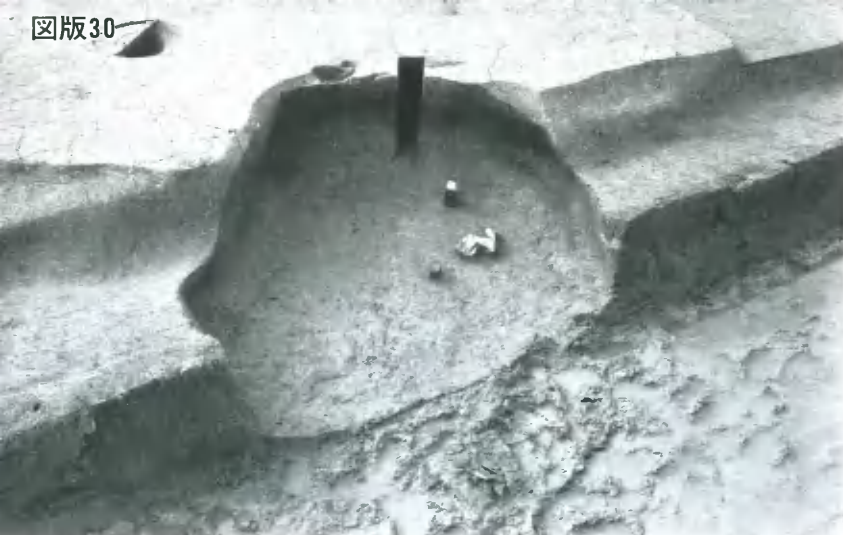
1. 袋状土壙 3
(CH1区; 南から)



2. 袋状土壙 4
(CH1区; 南から)



3. 袋状土壙 5
(CH1区; 南から)



1. 袋状土壙12
(CH3区;北西から)



2. 袋状土壙13
(HW1区;東から)



3. 袋状土壙14
(HW1区;北西から)



1. 袋状土坑17
(HW 2区;北から)



2. 袋状土坑18
(HW 2区;北西から)



3. 袋状土坑19
(HW 2区;南から)



1. 袋状土壺20
(HW2区;南から)



2. 袋状土壺24
(HW2区;北から)



3. 袋状土壺25
(HW2区;西から)



1. 袋状土塊26
(HW3区; 南西から)



2. 土塊41
(PU1区; 南西から)



3. 土塊44
(TA区; 西から)



1. 土壙56
(BU区; 西から)

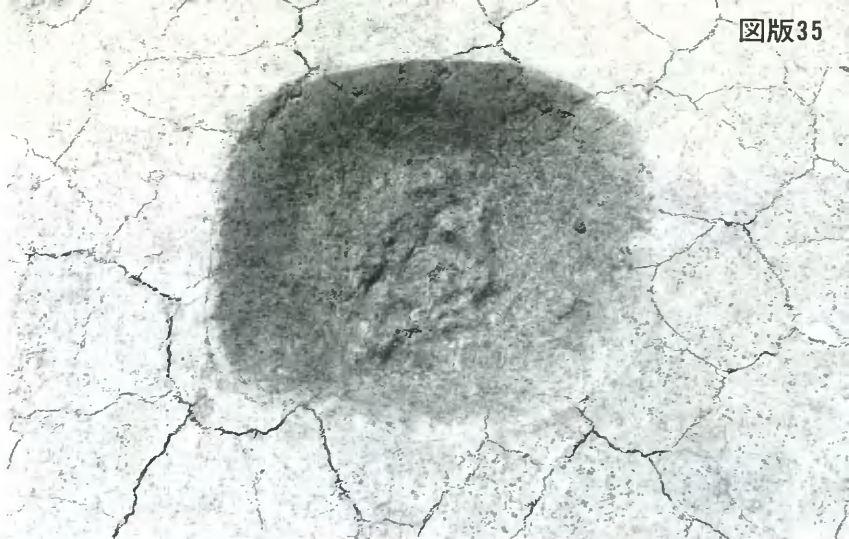


2. 土壙59
(BU区; 西から)



3. 土壙60
(BU区; 南から)

1. 土壌62
(CH1区; 東から)



2. 溝4・5周辺
(PU2区; 北西から)



3. 溝4土層断面
(PU2区; 東から)

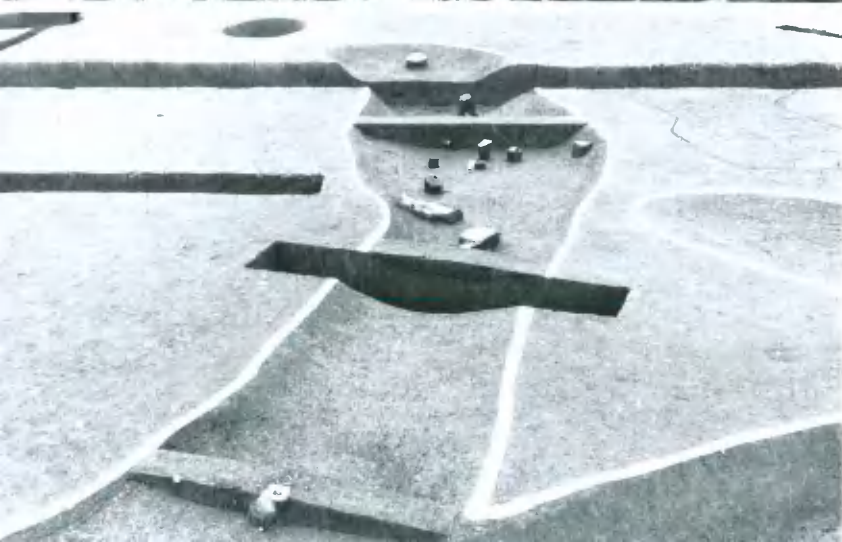




1. 溝4上層弥生土器出土状態
(PU2区;北から)



2. 溝5
(PU2区;北西から)



3. 溝11
(TA区;南から)



1. 溝11・14付近
(TA区; 東から)



2. 溝16
(TA区; 南西から)



3. 溝16・17
(H19区; 北東から)



1. 溝16弥生土器出土状態
(H19区; 東から)



2. 溝20
(BU区; 南西から)



3. 溝20土層断面
(BU区; 西から)



1. 溝20土層断面
(H18区; 東から)



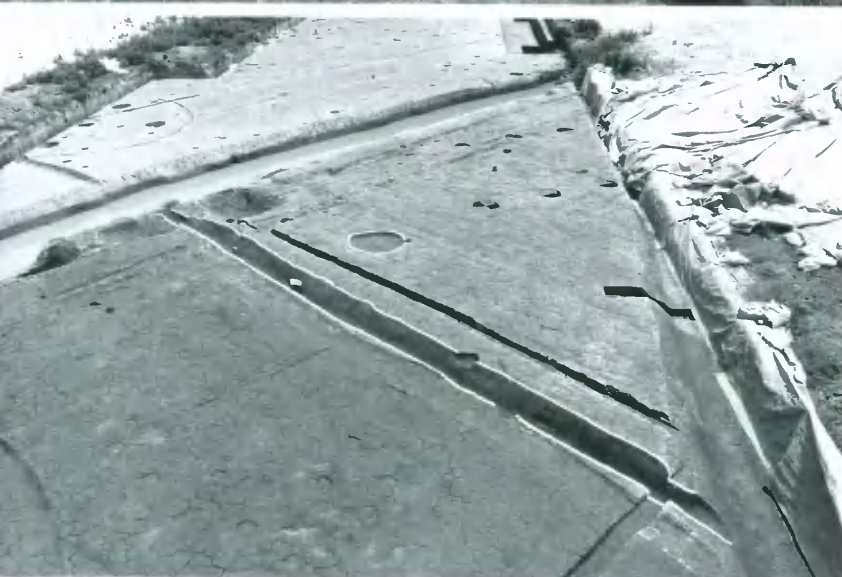
2. 溝25土層断面
(CH1区; 北西から)



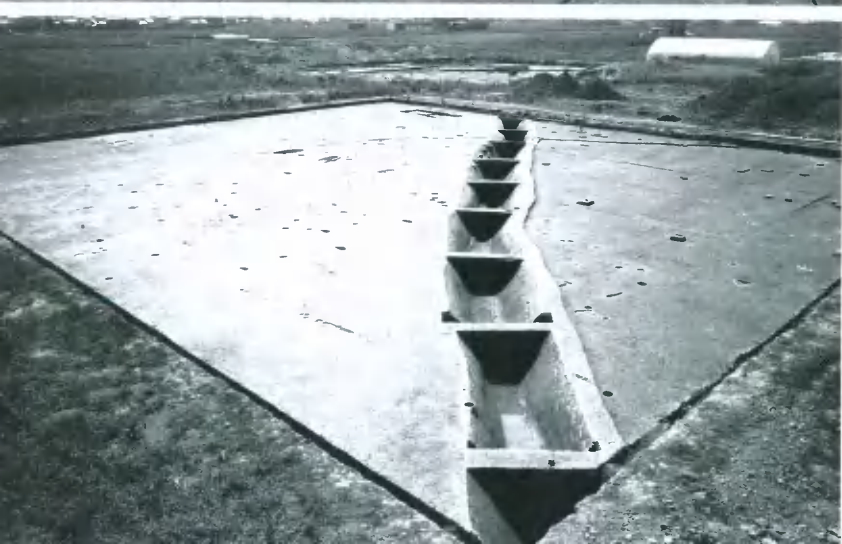
3. 溝30
(CH1区; 南東から)



1. 溝32
(CH1区;北から)



2. 溝34
(CH1区;北から)



3. 溝40
(HO区;北東から)



1. 溝40
(CH3区; 東から)



2. 溝40土層断面
(CH3区; 北東から)



3. 溝50~53
(CH2区; 南から)



1. 溝53土層断面
(CH3区;南から)



2. 溝55
(CH3区;南東から)



3. 溝62~64
(HW3区;北から)



1. 溝65
(HW 3区; 南西から)



2. 貝塚1
(HW 3区; 南東から)



3. 河道3
(TA区; 東から)



1. 河道3
(H18区；西から)



2. 河道3土層断面
(BU区；南から)



3. 河道3
(BU区；南から)

1. 河道4
(CH4区;北から)



2. 河道4土層断面
(CH4区;北から)



3. 河道5土層断面
(CH5区;北東から)





1. 河道 6
(HW 3 区; 東から)



2. 杭列 1
(HW 3 区; 東から)

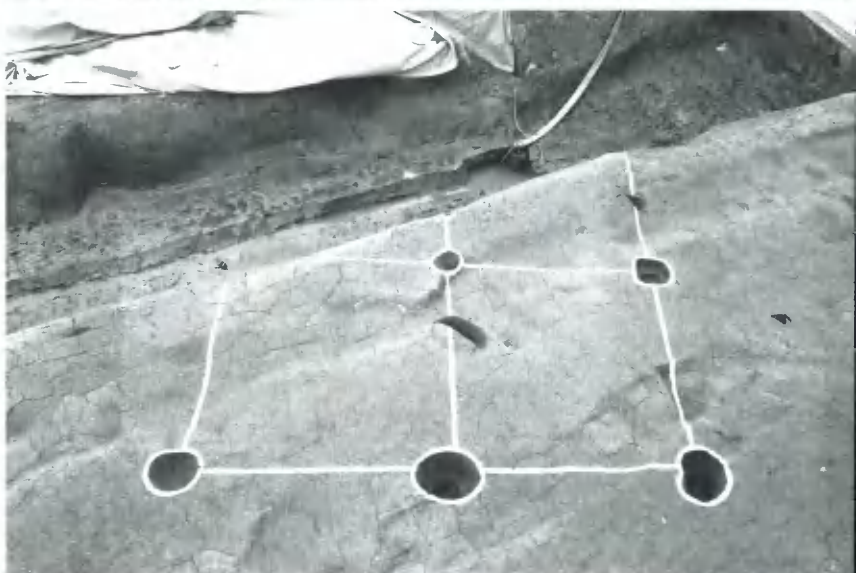


3. 建物 45・46
(CH 4 区; 南から)

1. 建物45
(CH4区; 西から)



2. 建物46
(CH4区; 北から)

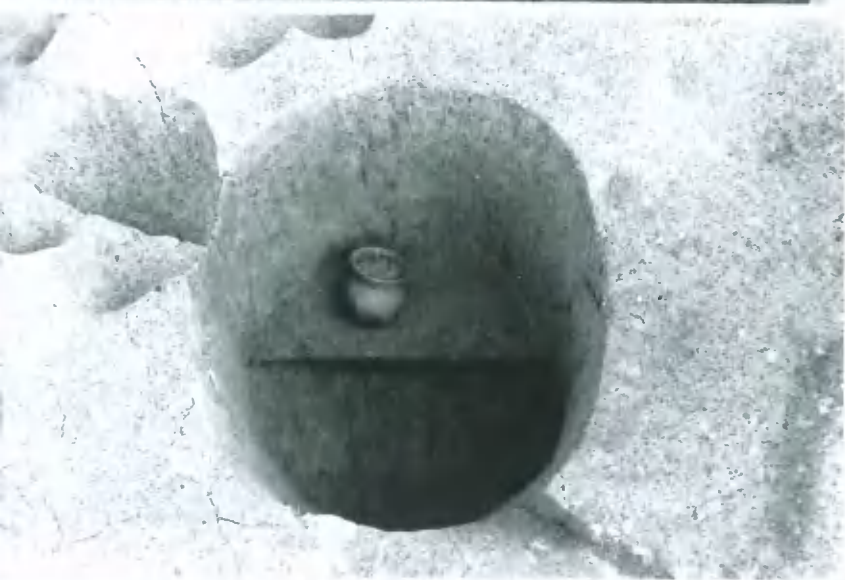


3. 建物47
(CH4区; 南東から)





1. 井戸 8
(H20区; 南から)



2. 土壇101
(K01区; 東から)



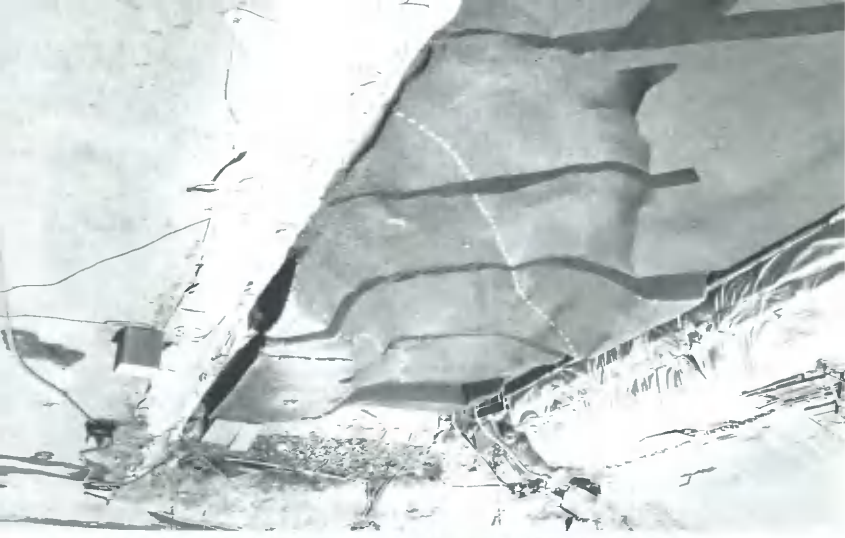
3. 溝66
(K区; 東から)



1. 溝1
(CH5区:北東から)



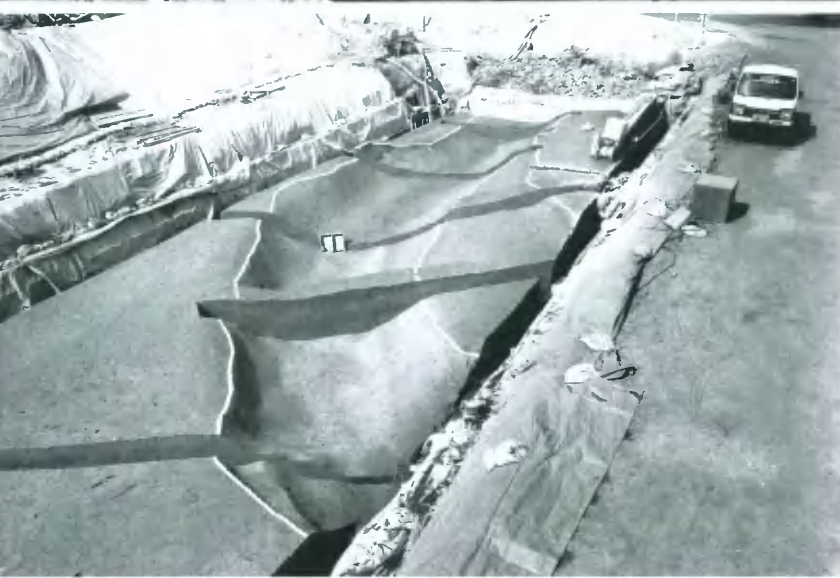
2. 溝12
(HW3区:東から)



3. 溝73
(HW3区:南西から)



1. 溝74・75
(HW3区; 東から)



2. 溝76
(HW3区; 南西から)



3. 柵列状遺構1~6
(KO1区; 北西から)



1. 柵列状遺構 1～6
(KO1・2区；南東から)



2. 柵列状遺構 7
(CH3区；南東から)



3. 柵列状遺構 7
(CH4区；東から)



1. 柵列遺構10
(CH 5区;北東から)



2. 柵列状遺構10
(CH 5区;北東から)



3. 柵列状遺構11・12
(HW 3区;南から)

1. 柵列状遺構13
(HW 3区; 東から)



2. 水田
(PU1区; 西から)



3. 水田
(BU区; 南から)

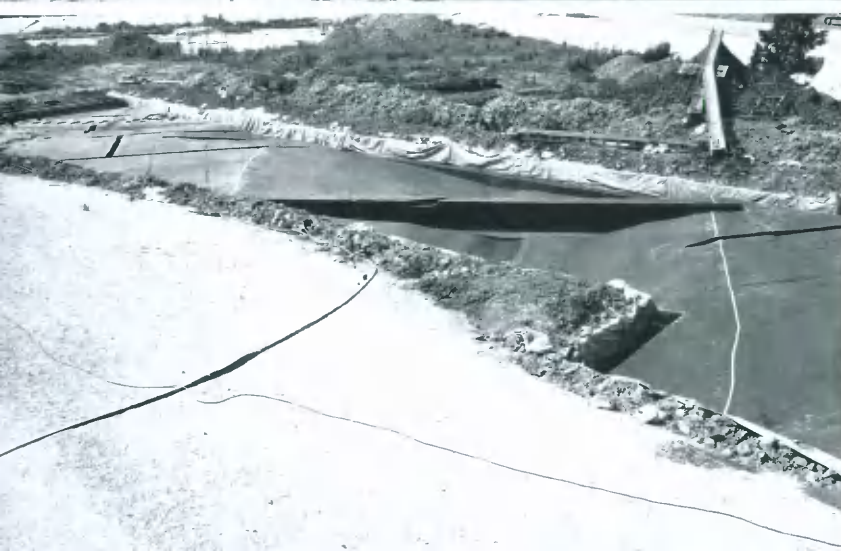




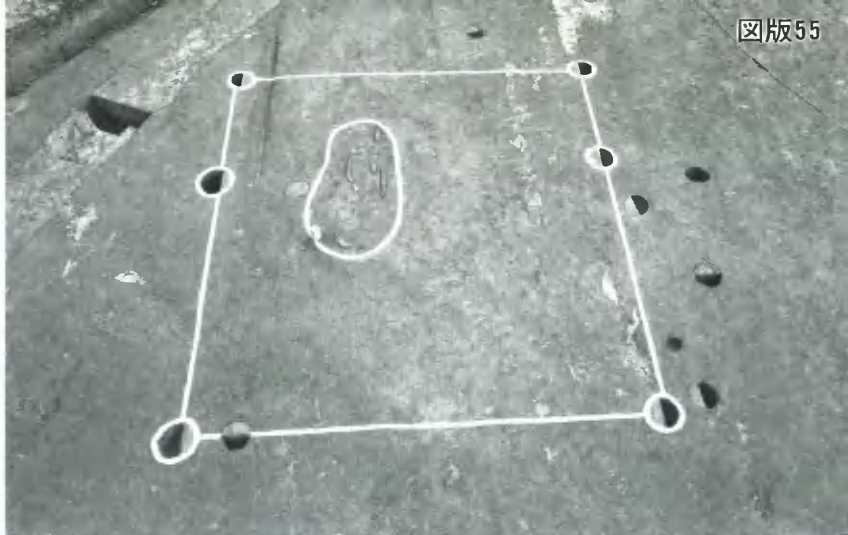
1. 水田
(H18区：南西から)



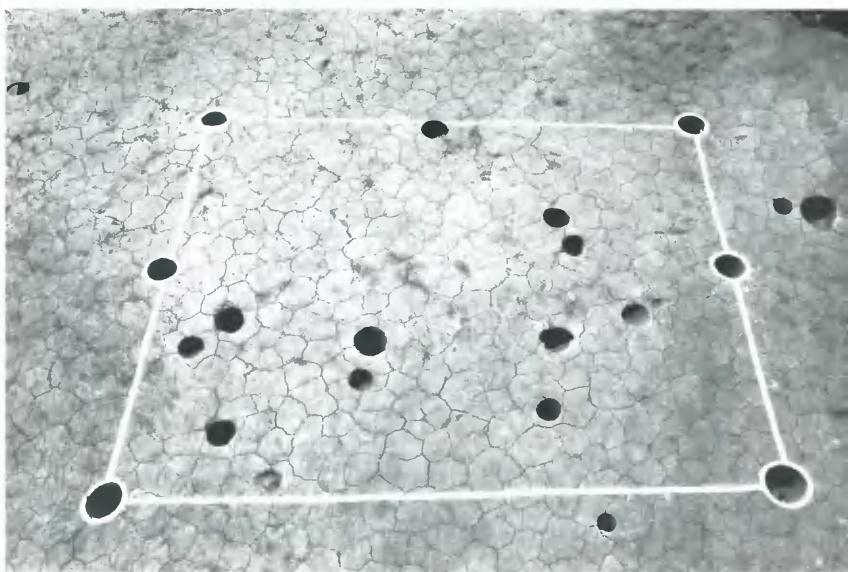
2. 水田
(K01・2区：南東から)



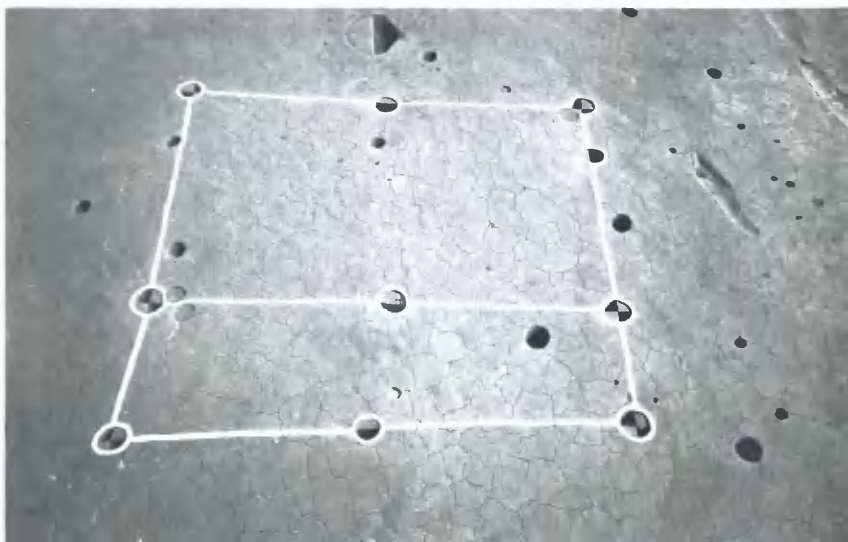
3. 河道4上層
(CH4区：北から)



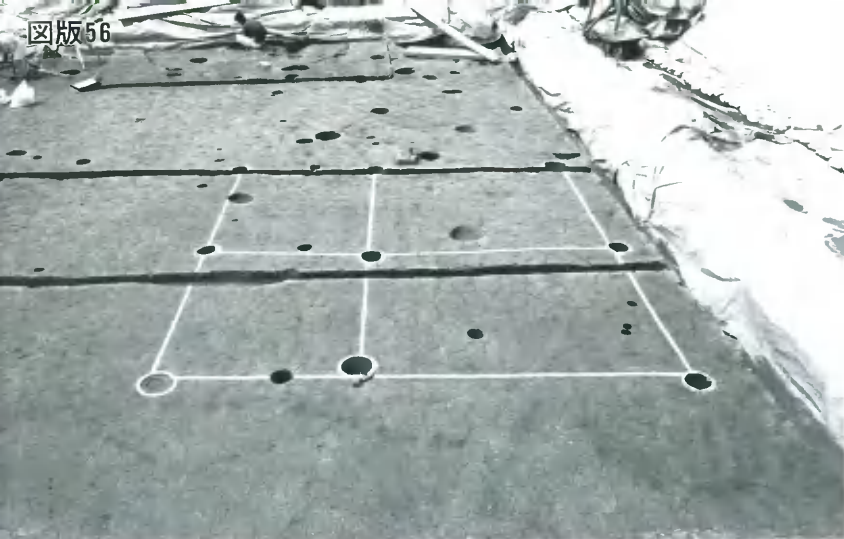
1. 建物48・土壌墓4
(CH1区;西から)



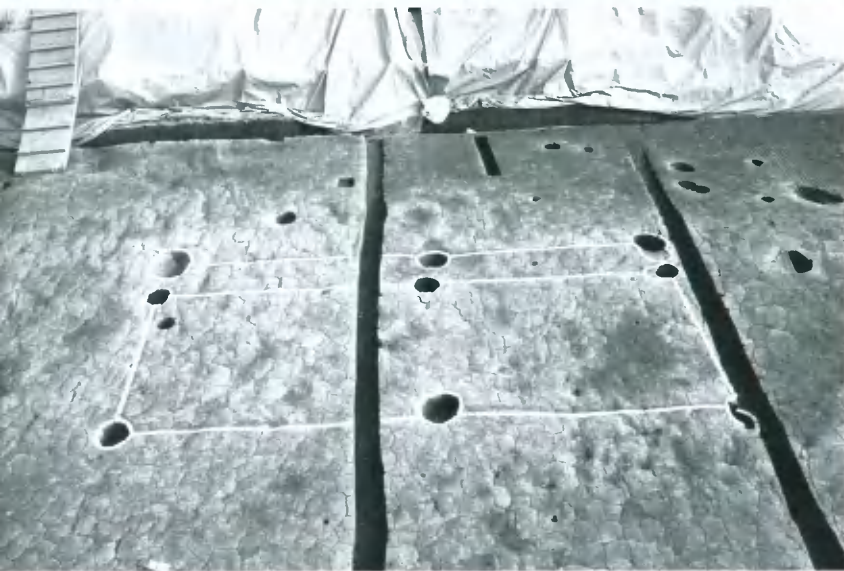
2. 建物49
(CH1区;北から)



3. 建物51
(HO区;北から)



1. 建物55
(HW1区;北東から)



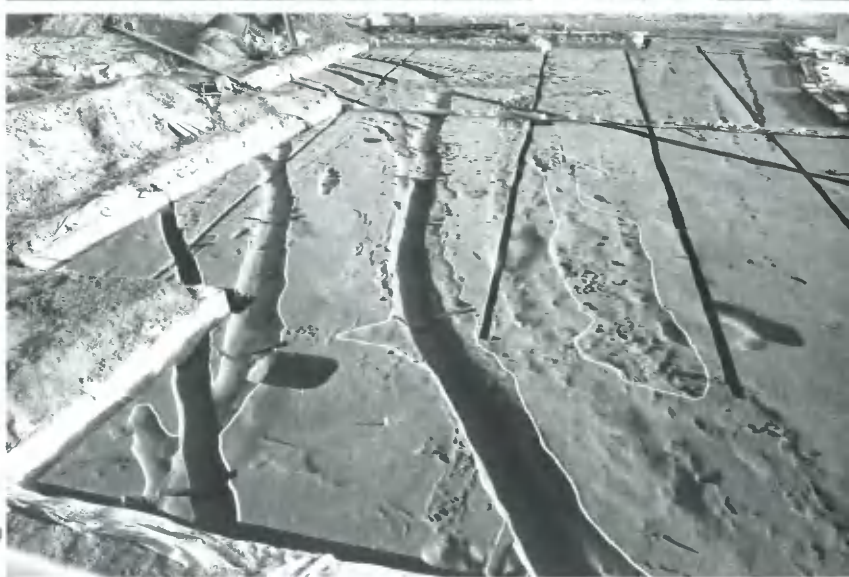
2. 建物56
(HW1区;北西から)



3. 土墳墓4
(CH1区;北東から)



1 溝91～95付近
(CH1区；北西から)



2 溝110～135
(KO1・2区；北西から)



3 溝110～135
(KO2区；北から)



1 柵列状遺構15
(H18区：北東から)



2 柵列状遺構15
(H18区：北から)



3 粘土採掘跡
(KO2区：東から)



6



8



12



15



16



17



18



19



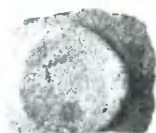
20



21



22



23



24



25



30



31



35



36



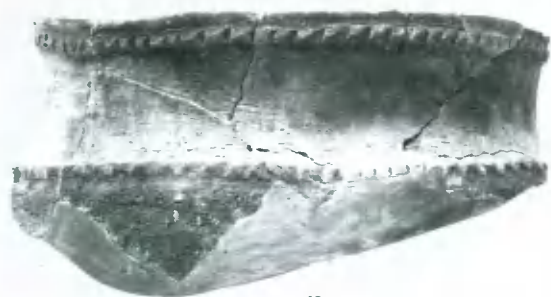
40



39



41



42



46



47



49



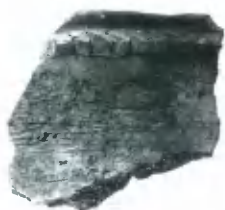
48



51



54



55



56



58



60



61



62



64



65



66



67



68



77



81



98



100



105



106



110



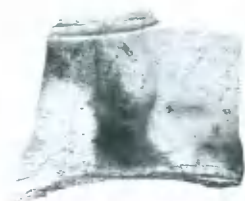
113



128



132



135



138



147



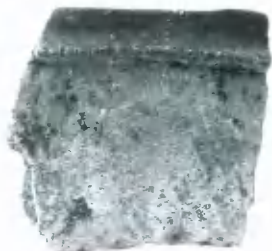
151



166



161



163



168



170



172



174



175



176



180



182



190



190放大



191



212



222



225



240



241



242



243



244



245



246



248



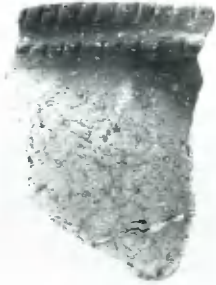
249



250



306



264



285



331



334



345



384



385



386



388



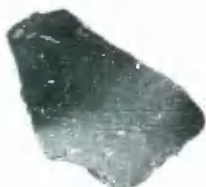
393



427



453



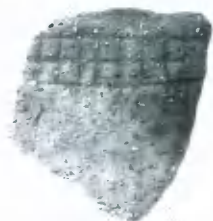
456



427 扩大(毅痕)



477



478



484



485



486



582



567



518



579



616



617



648



618



642



645



650



638



657



644



656



655



649



669



695



668



739



689



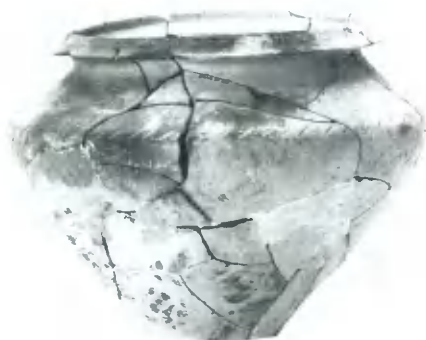
835



922



836



936



969



921



928



923



970



978



973



1010



1013



1036



1035



1156



1073



1171



1158



1172



1159



1175



1183



1213



1226



1232



1271



1234



1295



1279



1299



1300



1302



1330



1333



1324



1348



1350



1358



1381



1384



1392



1389



1429



1421



1432



1433



1444



1464



1468



1485



1499



1500



1503



1501



1504



C 1



C 2



C 3



C 5



C 7



C 6 (表)



C 6 (裏)



S1



S2



S3



S4



S6



S7



S8



S10



S11



S17



S18



S19



S45



S46



S20



S48



S49



S50



S51



S52



S53



S54



S55



S56



S60



S61



S57



S58



S71



S62



S67



S70



S84



S76



S82



S85



S83



S 89



S 91



S 92



S 93



S 94



S 95



S 97



S 98



S 104



S 105



S 107



S 108



S 109



S 110



S 112



S 113



S 114



S 116



S 119



S 120



S 122



S 124



S 126



S 128



S 131



S 127



S 137



S 138



S 140



S 141



S 142



S 143



S 145



S 146



S 147



S 149



S 150



S 151



S 152



S 153



S 154



S 155



S 156



S 157



S 158



S 159



S 161



S 162



S 163



S 164



S 166



S 167



S 168



S 171



S 174



W2



W3



W6



W12



W13



W4



W17



W19



W24



W27



W20



W32



W31



W51

報告書抄録

ふりがな	くぼき いせき							
書名	窪木遺跡1							
副書名	岡山県立大学建設に伴う発掘調査							
巻次	III							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	120							
編著者名	岡田 博・光永真一・柳瀬昭彦・松本和男・岡本寛久・平井泰男・柴田英樹・久保恵里子							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-01 岡山県岡山市西花尻1325-3 Tel (086)293-3211							
発行年月日	1997年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査要因
		市町村	遺跡番号					
くぼき いせき 窪木遺跡	おかやまけん 岡山県 そうじやし 総社市 くぼき 窪木	33208	—	34度 41分 15秒	133度 47分 5秒	1990416) 19921211	19,881	岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部建設に伴う事前調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
窪手遺跡	集落跡	縄文	土壇 8 土器溜り 1 火処 4 河道 1	51 27 42 7 28 63 3 1	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦・石器・石製品・ガラス小玉・木器・土製品・銅鏃。	・縄文時代後期の丹塗り磨研土器（壺・鉢） ・弥生時代後期の総刻絵画（家）土器 ・弥生時代後期の住居からの多数のガラス小玉		
		弥生	土壇 1 建物 5 井戸 1 河道 1 杭列 14 溝 11					
		古墳	土壇 22 建物 9 井戸 1 土壇墓 1 溝 70 杭列 1 柱穴列 2					
		古代・中世・近世						

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告120

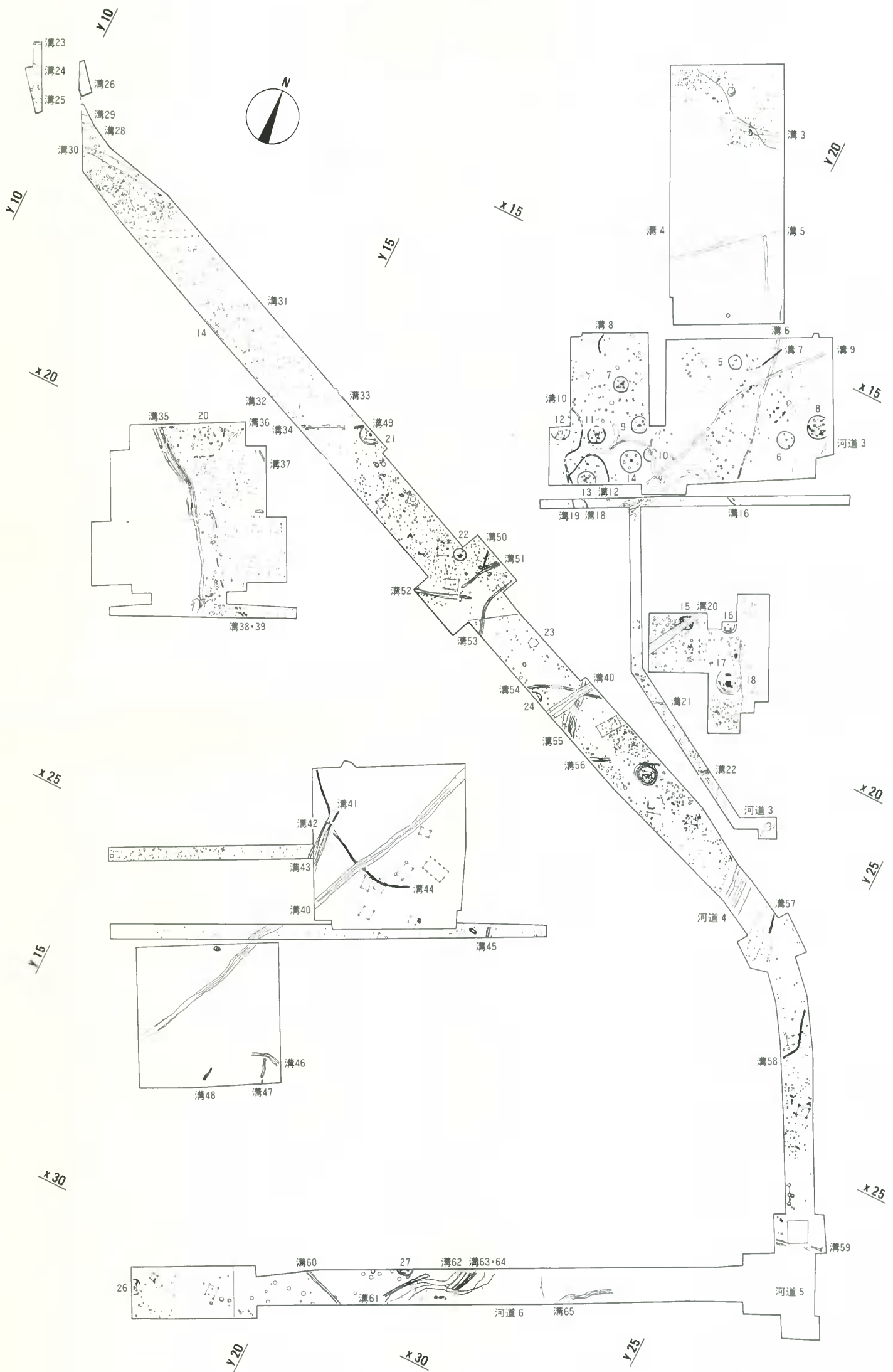
窪木遺跡 1

岡山県立大学建設に伴う発掘調査Ⅲ

1997年3月14日 印刷

1997年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3
発行 岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6
印刷 山陽印刷株式会社



番号のみ：竪穴住居



付図 弥生時代 中期中葉～後期遺構全体図(1/1,000)